THE CENTRAL REVIEW

中央公論

一年一回定期増刊

『知識の常識化』と『常識の知識化』號

第四十年　第七號　第四百四十九號

THE CENTRAL REVIEW

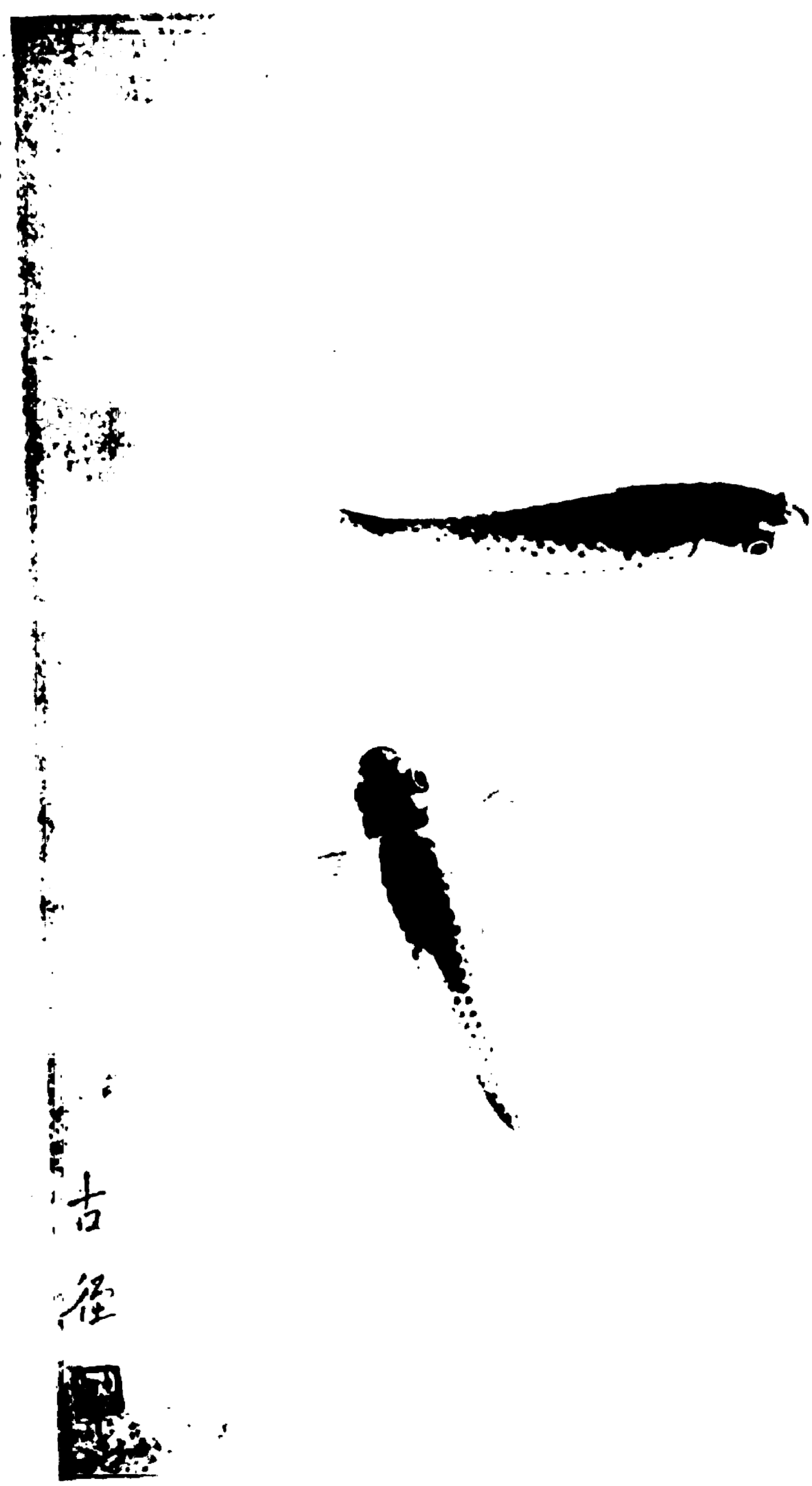
中央公論

一秊一回定期增刊

『知識の常識化』と『常識の知識化』號

第四十年　第七號　第四百四十九號


クラブ煉歯磨
優良な技師に依て
作られた舶來品に
優るクラブ煉歯磨
一日の能率
を増す朝の
クラブ歯磨
含嗽用 クラブ水歯磨



小林古徑筆　　　　對

大正十四年

中央公論

六月十五日發行

第四十年　第七號

一年一回定期增刊

「常識の知識化」と「知識の常識化」號

第四百四十九號

「地の鹽」たれ「世の光」たれ、知識階級の人々！

――凡そ今日ほど知識階級の人々が、他から馬鹿にせられ、又自ら輕んずることの甚しき時代は珍らしい。――今より五十餘年前即ち明治五年教育令が發布せられてから、世界大戰勃發の大正三年頃まで、凡そ四十年間位は、我國に於て最も教育の重んぜられ、學問の尊ばれた時代であつて、百姓は稗飯を食つても、お役人は晝飯をヌキにしても、其子弟に成るべく高級の學校教育を受けさせることに腐心したものである。子弟の中には、其父兄の辛苦を無にして、放蕩や遊樂に學業を抛擲し、田畑を喰ひ、家倉を喰ひ、父兄の骨まで舐ぶつて了つたやうな悲劇も數多くあつたけれど、子弟それ自身も、概して學校の卒業や學問の成就に重きを置くの風だつた。勿論其爲めに「試驗勉强」や「點取り蟲」などの弊害があり、「卒業證書」や「卒業順番」等を偏重するの非難はあつたけれど、學業に重きを置くの氣風は、一世を支配して居つたといへる。然るに、世界大戰の實績は、「量」と「數」との重大意義を教へ、「力」と「勞働」との絕對必要を示したので、無學者も、無産者も、一個の「人間」として、學者や富者と異る所なきを痛感せしめた。デモクラシーの高調、無産階級の擡頭は、實に此事實を根柢として居るものと見るのが至當と考へる。

世界大戰の終りを告ぐるや、米のウイルソンは起つて、「聯合軍側の勝利はデモクラシーの勝利なり」と說き、露のレーニンは「今后の世界は無産階級の支配の下にあるべし」と叫ぶや、世界は恰かも、長き暗の夜の行程を終へて、光眩ゆき朝の空を仰いだかの感があつた。併し理想は理想であつた。現實は現實であつた。因襲、

[illegible]資、收[illegible]、技[illegible]、[illegible]「[illegible]人」の生命は、家[illegible]、國[illegible]、[illegible]

の人間の生命と共に價として存在した。生活あれば責任あり、進步あれば改善あり、貢獻あれば反動があつた。英、獨を動はれば佛動き、露世界を我物顔に振舞へば米怒つた。行き詰み解けんとする所に、新らしき疑問と、新らしき親みの生ぜんとする時、惡き因縁が邪魔をした。都かんとした空に黑き雲が湧き、落ちた日はまた隱け初めた。世界は復た大戰、戰前の世界。人間は復た大戰戰前の人間に歸つたかの觀がある。

けれども、デモクラシーの主潮と、無產階級擡頭の事實とは、固よりウイルソンや、レーニンの强調した程には行かぬけれど、又一時人目を衝動した程には際立つて見えぬけれど、今后の世界を支配する一定の底流となつて動かざるものであることは確信し得ると思ふ。たゞ之に對抗する舊勢力の代表として、權力階級と資本家階級の存在することは、是れ亦何人も之を拒むこと能はざる儼然たる事實である。

そこで今日、階級鬪爭を論じ、社會問題を議するものは、誰もが皆、勞資と支配被支配の兩階級の問題に着目し、「人」を評價するの標準は「金力」「權力」と「勞力」「腕力」にあつて、「知識」や「學問」は全く閑却せられんとするの傾向を馴致しつゝある。嘗て「學問」と「知識」がなければ人間にあらざるやうに思はれたものが、今は「金」があるか「力」があるかすれば、立派な一人前として通る代りに「學問」や「知識」の存在は極めて輕視さるゝに到つた。所謂知識階級なるものは、上からは資本家階級に抑へられ、下からは勞働者階級に押され、兩階級の板挾みの間にぺたんこになつてゐる形である。四十年間有史前の爬蟲類の如く跋扈し隱花植物の如く彌蔓した「知識」と「學問」は、今や前者は化石となつて中世紀層の間に發掘せられ、後者は菌苔類となつて山間幽谷の間に其遺類を殘留すると同じく、幽微隱約の間にしか其存在を認められぬやうにな

つた。
いや、其存在を認められぬ許りではない。勞働階級からはブルジョアの手先きとなつて我々を虐げるに役立て卑しむべき奴と蔑視せられ、資本家階級からはプロレタリアの煽動者となつて我々を脅かす怪しからぬ奴と敵視せられ、どつちに向いても最も割りのわるい役目を勤めつゝあるのである。

知識階級とは何を指して云ふか。其範圍の廣狹如何は、人によつて多少其見解を異にするを免れぬ。僕もこゝに別に其定義らしきものを掲げて、嚴密に其範圍を定むるの必要を認めない。「知識階級」なる言葉によつて以心傳心的に何人もの頭腦に描かるゝ所のものを以て「知識階級」とするに滿足する。地方でいへば中學卒業生以上、小學校教員、官吏等、中央でいへば專門教育を受けたもの以上等を大體の輪廓として差支あるまい。只「金力」や「權力」や「勞力」を以て其生存の主動力とせずして、「學問」や「知識」を以て其生活の手段とするものを指すのであることを諒解すればよいのである。

知識とは何であるか。學問とは何であるかの科學的哲學的解釋は、之れ亦こゝに之を避けたい。之も此等の言葉によつて各人の頭腦に描かるゝ所のものを以て滿足することにしたい。

人間らしい生物が地球上に姿をあらはしてから略ぼ五十萬年になるといはれる。人類の歴史は僅かに五千年、即ち人類らしい生物史の中、最近の百分の一しか分つてゐない。百分の九十九は全く有史以前の暗の中に沒入して、最後の百分の一丈け僅かに不確かな文字で記録せられてゐるに過ぎない。併し記録せられぬ有史以前にも勿論人類らしき生存も生活もあつたことは疑ひない。其れ等の生存生活の事實が本能となり、常識となり、新たなる經驗と、新たなる推理と、新たなる研究とによつて、本能に變化を與へ、常識に向上を加へ、今日の衝動

となり、今日の人々は明日の祖先となり、更らに明後日の祖先ともなつて、[illegible]と、新たなる疑問とによつて、更に新たなる未知の目標と前人の夢とを目指し、日に日に、又月に月に、又年に年に新たなる行程を踏み、十年、百年、千年、萬年、斯くして新らしきもの、人類を漸次に進歩して来たのであると大観すべきである。

人類の歴史に比して各個人の生命は短かい。世界の文化に對して各個人の貢獻は小さい。併し各個人の限りある命數と限りある貢獻を、集成合一する外に、人類の歴史も、世界の文化もあり得ないことを思へば、各個人の自ら卑しみ蔑づべき理由は毫しもない。又知識は進歩し學問は發達する。今日我々が極限になつて主張する眞理正道は、明日になつて迷妄不正にあらざることを誰が保證し得よう。併し山嶽を貫通する汽車の隧道を通過する外道なきが如く、迷妄や不正は眞理と正義に達する途に幾度か遭遇するトンネルである。今日の眞理や正義が若し迷妄であり不正であると分ることがあらば、其れこそ喜ぶべき眞理の發見であり、正義の顯揚である。之れ亦毫しも自ら卑しみ蔑づべき理由がない。

過去の回顧研究は之を歴史家に任せよ。未來の渇仰憧憬は之を理想家に任せよ。我等は我等に與へられたる現在の生存生活を最も有意義に使用することに專念しようぢやないか。即ち出來る丈けの幸福を享樂すると共に、出來る丈けの向上を企圖するに努めようぢやないか。學んで樂み、樂んで學び、前代から受け繼いだ遺産を少しでも善良豐富なものにして、之を後代に殘して行かうぢやないか。

今日の「知識階級」はブルジョアからもプロレタリアからも蔑視され敵視され、又彼等自身も極度に卑下し、屈從して居る如く見える。固より今日の彼等には、今日の世の中に幅を利かして居る「金力」がない「權力」

がない。「勞力」がない。「腕力」がない。「學問」や「知識」は表面旗を捲き、尻尾を捲き、薄暗き隅つこの方に小さくなつてゐる形に見ゆる。されば「學問」を本職とし、「知識」の獲得を目的とすべき學生までが、自分の現在及び將來に自信を失ひ、カッフェー入りや活動見物に日夜を送るものが增加しつゝある現狀だ。併しそれが果して正しい現代觀察であり、人生批判であらうか。

近眼者流は近い所しか見えぬ。淺薄者流は淺い所しか分らぬ。併し遠見ある人、深慮ある者は遠い所をも見、深い所をも察する。表面に立つ小波と塵埃とを搔き分けて見ざれば、山中に湛ふる湖水の本態は分らぬ。現代は實に勞資兩階級の鎬を削つて居る戰場の如き外觀を呈する。併し此活劇の作者であり、舞臺監督であり、マネージャーであるものは矢張り知識階級でないだらうか。知識は靜かだ。學問は孤獨だ。併しすべての活劇も、大立廻りも、すべて靜かな孤獨な裏より生れ出づるぢやないだらうか。知識階級の人はブルジョアから給料を貰つて其頤使に甘んじて居るやうに見ゆる。けれども「知識」や「學問」のある人間が果して無學なる成金の頤使に甘んじて居るであらうか。腹の中では、自己の計畫に向つて、成金に金を出させて居るのではなからうか。又知識階級の人はプロレタリアに媚びて彼等の機嫌を取つて居るかに見える。けれども眞に「知識」や「學問」のある人間が果して無識なる勞働者の御機嫌を取つて居るであらうか。腹の中では、自己の理想を實現すべく、勞働者を指導して居るのではなからうか。人間を動かし世界を動かして居る力の最も大いなるものは、矢張り「知識」であり、「學問」であると僕は深く信ずるものである。

「知識」を嘆美し、「學問」を禮讃するの辭句を集めたら殆んど一冊子を成すであらう。併し今は其代表的の二三を錄するだけの餘白さへもない。只其偉大なる潜勢力と、其驚異すべき大魔力とは、少しく思考力ある何人

に於いて[illegible]に[illegible]ふうことを[illegible]現代の[illegible]其の中に[illegible]し、動もすれば「知識」と「學問」との[illegible]力と[illegible]力とを[illegible]んとする[illegible]に[illegible]、[illegible]從人類の日常生活より[illegible]せしめんとし、實生活に重きを置く人は、常識一點張りを以て、知識を排斥し、「知識」に重きを置く學徒は、常識者流を輕蔑して、共に人生の事を[illegible]ずるに足らずとし、「常識」と「知識」とを乖離せしめて全く別物たらしめんとして居る。我等は一方に於て「非常の世に於ける常識」を獲得するを勤むと共に、一方[illegible]の知識」を吸收して「常識」を「知識」にまで高め、「知識の普遍化、民衆化」を計畫して「知識」の「常識化」に努め、短かしと雖も又微なりと雖も我等が一生の涯分を盡くして、人類の進化向上、安寧幸福の大海に向つて一粟の寄與をなしたいと思ふ。

之を單なる普通選擧の一事件について見るも「知識階級」の任務は重大である。新たに選擧權を獲得したる國民は八百萬の多きに居る。而して此中の知識階級に屬するもの略ぼ八十萬とすれば、知識階級一人について然らざるもの十人の割合である。一人の知識階級の人若し此十人を指導して、國民參政の重大意義を納得せしめずんば折角得たる普選權もデマゴーグの喰ひ物になるばかりである。

昔者基督、シナイ山上に於て、求道者に向つて訓を垂れて曰く、汝等「地の鹽」たれ「世の光」たれと。我等は「知識」を求め「學問」に親しめる「知識階級」に向つて叫ばん。卿等宜しく「地の鹽」たれ「世の光」たれと。（T・T生）

中央公論



第四十年第七號
「常識の知識化」
と
「知識の常識化」號
第四百四十九號

窮極文明の行程の中に知識の民衆化の志向と様式とを考察す

田中王堂

一　Sub Specie Aeternitatis

知識の民衆化は刻下に於ける最著なる要求の一つであり、最要なる傾向の一つである。わたくし共は精當に其れの志

存在し、何時に其れの変化を経験し、一切に[illegible]

與へられた道に、或は sub specie aeternitatis 即ち、永遠の見地の下に其れを考察することの一つに與へられて居る。sub specie aeternitatis は元とスピノザの遺語である。事物の真相は獨り其れを永遠の見地の下に考察することに依つて把握されると彼れは考へたのであつた。そして、彼れに特有の解釋に随へば、永遠の見地の下に或る事實を考察するとは、其れの時間的發動の一切を超越して、永遠に亘つて不變不動なる其れの超時間的本質を諦視することであつたのである。わたくしも、スピノザの遺語を藉りて、事物の真相は、獨り其れを永遠の見地の下に考察することに依つてのみ把握されるのであるとする。然し、わたくしの理會に随へば、正しき意味に於て、永遠の見地の下に考察するとは其れの瞬間的發動の孰づれの一つも無視し、輕視することなく、其等の一々の暗示する意義を醇化し、綜合することに依つて其れの恒久的本質を組織することであるのである。スピノザに在つては、變化と動揺とを除去して、始めて事物の真相は見出だされるのであるが、わたくしに在つては、變化と動揺との中に於てのみ事物の真相は見出だされるのである。

若しも永遠の見地の下に考察するといふことが、果して事物の真相を把握する方法として最も優秀なるものであるならば、其れはどうしてもわたくしがこゝで理會して居るやうに理會しなければならぬとわたくしは信ずる者であるが、さうすると、其れは發展的にと同時に、作用的に、言ひ換へれば、最も合理ある意味に於て、文明史的に其等を考察するといふことに合致する。わたくしはさういふ風に理會した上で、知識の民衆化に關し正當に其れの志向を解釋し、的確に其れの様式を批判し、そして、親切に其れの發達の方角を誘導するには、是非とも永遠の見地の下に其れを考察することを俟たねばならぬとわたくしは謂ふのである。

一時に强烈な色彩を放つたものが必らずしも永遠に亘つて重大な意義を有つたものではなく、眼前の苦樂の體驗が必らずしも大局に於ける幸福の指標とはならない。斯くして、全然色彩を離れて意義は存在し得ず、全然苦樂を外にして幸福の材料は求め得べからざるに拘らず、色彩と意義との間に、若しくは、苦樂と幸福との間に、事實上の距離が生じ、其れがあらゆる形に於て著想される現象と實在との差別の根柢を成すのである。

日常生活の特色は其れが卓越して實行的たるにある、言ひ換へれば、絕えず必要に迫はれて、始めて生活の事件を處理し、其れも、纔かに其の必要に間に合はせるだけに限られることである。この結果として、日常生活は一時の色彩と眼前の苦樂とに依つて、其れの措置の決定されることが多く、其れは、一層の濶地と高地とより其等一時の色彩と眼前の苦樂とを批判し、綜合して、其等を永遠の意義と、大局の幸福とにまで醇化する餘裕を有たぬのである。日常生活の機關たる常識の缺陷はこゝに伏在する。常識があらゆる知識と智慧との淵源であることは極めて明白である。然し、其れが生活の完全なる持續と發展とが要求するあらゆる知識と智慧とでないことは更らに極めて明白である。されば、わたくし共は如何なる事件に關してもどこまでも常識の見地を尊重すると同時に、そこに止まらず、其れの本來の志向に隨つて其れを擢醒し輔翼し助成して自づから其れを超越するまでに、一層博く、一層深き或るものとせねばならぬ。さうされたものにして、(其れが科學と呼ばれるにしても、文明史と呼ばれるにしても、哲學と呼ばれるにしても、其の他、何んと呼ばれるにしても、)始めて永遠の見地の下に其れを考察することが出來るのである。

今日、知識の民衆化はわたくし共の生活に取つて一つの必須なる條件となつて居る。わたくし共の生活の多くの部分のはたらき振りは、知識の民衆化を其れの要因の一つと認めない限り、到底滿足に理會出來ないものとなつた。この博厚なる事實よりして、わたくしは知識の民衆化が現代文明の要求に根ざすことの極めて深く、そして、極めて悶きを

旬るのである。然し、[illegible]指摘するに至らない。数多くの、そして、[illegible]され、[illegible]と、[illegible]と、[illegible]に含まれるのは、たゞ自然と言はなければならない。わたくし共にして更にこの傾向に[illegible]ならば、わたくし共は別に其れの志向を保障し、達成するの方法を案ずるところがなければならない。これは、混沌の状態より救ひ出して、其れに整斉を與へるために、常識の見地に代へるに永遠の見地を以てすることであらねばならぬ。

わたくしは、この文章に於て、知識の民衆化を其れのいろいろの側面と、其れのいろいろの關係と、其れのいろいろの方位とに關して、考察して見たいと欲ふ。然し、其等が（さきに一應説明した意味で）永遠の見地の下に爲されることは勿論である。さうして、獨り其等がさうされることは直ちにこの論文の存在の理由を構成するのである。

二　人間性情の必至發動としてのデモクラシイ

知識の民衆化は主としてデモクラシイの所産であつて、其れと終始せねばならぬものである。知識の民衆化が是認され、奬勵されるのはデモクラシイの實行され、信仰されるところに限られねばならぬ。今日に於ては、知識の民衆化を圖るといふことは、たゞ、當然の政策として、そこには其れの可否を問題とするやうな何等の餘地も存じ得ぬものと世人一般に依つて受け取られて居るが、其れはわたくし共が、實際に於ては兎に角として、理論とし、情操としては既にデモクラシイの中に生活して居るからのことである。過去に於ける文化の或る段階に在つては、知識の民衆化が非難され、其れが啻に武斷の爲政家に依つて抑壓されたのみならず、賢明なる思想家に依つても反對されたのである。されば、わたくし共は『聖人之治虚其心、實其腹、弱其志、強其骨。常使民無知無欲。使夫知者不敢爲也』とした老子の意

見を以て、當時に於てはたゞく安穩極まる僞政の方針を說いたものとするべきである。

確かに知識の民衆化は主としてデモクラシイの所產であつて、其れと終始せねばならぬ。隨つて、わたくし共が知識の民衆化の樣式を如何に決定すべきかは、わたくし共がデモクラシイの本質を如何に理解するかに係つて居るのである。この單純なる理由よりして、永遠の見地の下に知識の民衆化を考察することは、必然に、永遠の見地の下にデモクラシイを考察することに依つて先行されねばならぬ。

『太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り、萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。之に生命あり、この生命は人の光りなりき。光は暗黑に照る、而して暗黑は之を悟らざりき。』

此れはヨハネ傳の著者があの傳記の劈頭に掲げた有名な文句である。汎く知られて居る通り、こゝに言と譯されて居るものは、又道理を意味する語である。さうすると、簡單に言へば、道理は永い永い宇宙の進化のプロセスの後、獨り人間の生活の内に現はれた經驗、若しくは、形造られた理想であるから、其れが太初に在り、そして、はたらいて居たとするのは、事の順序を顛倒することの甚だしきもののやうに思はれないでもない。然し、これは目的原因の思想の宇宙論化より成り立つ神學の常套手段であつて、大して不思議とするに足らないことである。そして、この手段の合理性は或る興味を中心とする時に、俄に排斥され得るものであり、辯護される價値のあるものである。何故ならば、如何に、其れの前身が合理的でなかつたならば、どんな種類の知識が重ねて來り、どんな種の經驗が積んで來ても、判然道理なるものの出現する筈はないし、其の前身にして他日おのれの完成を目的として居らないならば、其れの存在は何等の意義をも有たないからである。かういふ理屈からして、或る場合に於て、特に過去にあつては、自分の高調しようとする思想

に[illegible]、[illegible]に依つて、[illegible]採用されたのであつた。

わたくし共はこの表現の方法に倣つて、デモクラシイの意義と價値とを明瞭にするために、共に人間の協同生活の源始よりはたらいて居たのである、否、彼れの根本性情の本質の一部を成して居つたのであるといふのである。何故ならば、成るほど事實としてはデモクラシイが相應の力と自覺とを以てはたらき出したのは比較的に最近のことであつて、其れに先立つて何千年間といふもの、いろいろの形に於て反デモクラシイの情操と、思想と、制度とが其れの權威を逞うして來たのは明白である。然し、今日わたくし共が志向として鋭敏なる歴史感を以て其等の事跡の關係を組織し、聰明なる哲學見を以て其等の關係の志向を解釋する時に、わたくし共は其等が悉とく恰も百川東に向つて海に朝するが如く、デモクラシイの實現の一點に向つて趍せて居るのを知るのである、さうとしないならば、其等は何等の意味をもなさぬことを覺るからである。

斯くして、デモクラシイを其れの蘊意と併せて其れの振動とに據り、細心に檢討し、大膽に反省して、わたくしは其れが人間の根本性情の最も自由なる表現であり、隨つて、人間の協同生活の最も完全なる計畫であり、樣式であると斷言するに躊躇せぬ者である。

たゞ遺憾とすべきは、人間の窮極文明に照してこのやうに重大なる意義を有するデモクラシイの眞の性質が、今日に至るまで其れの敵に依つてと等しく、其れの味方に依つても常に誤解されて來て、其れの眞の志向が未だ一度も何人に依つても明確に理會されたことなく、そして、其の驚くべき誤解の上に、デモクラシイの名に依つていろいろの流行が生じ、計畫が企てられるのに、其等が、又、同じ種の誤解の上に批評され、反對されて居ることである。彼等に依つて

犯される過失は無數であるが、共等の由つて來たる根元は唯一つである。共れはデモクラシイの主張者が、共れの眞諦にして氣品高き發達のために、彼等は智慧と經驗とより共れの主として平等觀念を高唱した時に、デモクラシイの眞諦にして氣品高き發達のために、彼等は智慧と經驗とより共れの主義を解釋しやうとせずして、當時の行き掛りに支配されて感情と空想とよりさうしやうとしたことである。一層事實に即してこの間の消息を語るならば、彼等は當時生活に於て見出された總べての弊資は悉とく專制々度の依つて立つ差別觀念の所産であると想像し、隨つて、共等を一掃して新天地を開拓するには、只、平等觀念を共れの骨子とするデモクラシイをして共れに取つて代はらしめるだけで十分であると臆側したのであつた。この淺薄なる理會に導かれて、彼等が社會病疾の萬能藥とした平等を精神的、若しくは、作用的に解釋しないで、誤つて形式的若しくは、算數的に解釋したところにあるのである。更らに、こゝでわたくしが語つて居ることの意味を敷衍するならば、平等は一つの協同團體を營む總べての個人をして彼等の各の幸福と發展とのために出來るだけ均等の機會を得せしめやうとする政治上の、經濟上の、乃至、教育上の理想として、始めて一つの道理を有つて來るのに、彼等は輕率にも、無分別にも、共れは端的に彼等が現に賦與された、若しくは、所持する知力上の、道德上の、乃至、教養上の事實を指すものと誤解したところにあるのである。この悲むべき誤解が、一度平等觀念の上に下されて以來、デモクラシイの健全にして忠正なる發達は、これがために、どれだけの障碍と妨害とに出會つて居るか知れないくらゐである。

今日に於ては、デモクラシイは不完全ながら多くの國民の間に實行されて居る。共れに對しては、彼等の間に牢として抜くべからざる信仰と審美感とが植え付けられた。然し、共れの精神として一般に取られる平等は、精神的、作用的に解釋すべきであつて、決して、形式的、算數的に解釋さるべきでないといふことは、共れの實際のはたらき振りが、(例へば一つの團體がデモクラテイックになればなるほど、言ひ換へれば、共れが外的の力に依つて支配されず、内的の道

理に依つて要求されることにたゞになるほど、成員達の指導とこれへの服從とに於ける平等にはたらかなければならない通り、一段に日本に流行して居ることであるが、將た個人に於ての利害關係より、或は、其の生の安全の爲め、公的に、正大に、デモクラシイの眞正なる運用と發達とのためにこの眞理を宣言することを惧るのである。現に最も多くデモクラテイックの基礎の上に成り立ち、最も多くデモクラテイックの精神に依つて運用されて居る勞働團體に在つて、最も痛切に有力なる組織の必要は感じられ、有力なる組織は獨り衆に優れた才幹の順序に隨つて、それぞれ其等指導者を適當なる地位に据えるのを見ても、自然にそこに行はれて居るのは、形式的、算數的の平等であるか、或は、精神的、作用的の平等であるかは、わたくし共の容易に認取し得るところではないか。知識の民衆化の思想はデモクラシイの思想と終始する。孰づれの一方の成功と失敗とも常に他の一方の成功と失敗とに懸つて居る。されば、わたし共はまづ窮極文明の行程に照らして、デモクラシイの志向を闡明することに依つて知識の民衆化の方法と樣式とを限劃せねばならぬ。

それでは、わたくしはデモクラシイの志向を如何なるものと理會するか。

一、一つの協同團體に入り來たり、其れを營むメンバアは彼れの力の許す限り、出來るだけ多く其れの發展に貢獻する義務を有すると同時に、其の團體のエコノミイが許す限り、出來るだけ多くおのれの幸福のために其れより利益を受ける權利を有する。

一、そこたる總べてのメンバアは悉とく彼れの社會上の地位と彼れの職業とに限られた範圍に於て、私的にも、公的にも考へながらはたらく一つの階級を形造らねばならぬ。そこに一人でも考へずにはたらいたり、若しくは、はたらかずに只考へるだけの者はあつてはならない。

一、然し、事實として、そこに賢愚の相違と才能の適應性の相違とがあり、そして、有力なる要因としてはたらいて居る以上は、彼等は出來るだけ素直に其のはたらき振りを認識し、出來るだけ賢明に協同團體の文化の進捗と各メンバアの品性の完成とのために其れを役立たさねばならぬ。どんな境遇の下にも永久に存續すべしと安全に推測され得る賢愚の相違は、其れを利用すると同時に、だんだんに其の懸隔を狹めようとすることは賞讃すべき行爲であるが、才能の適應性の相違に至つては、其れをますます豐富に分化して行くことが正しき努力である。以上は、デモクラシイの志向が正當に理會された時に、ぜひとも其れの志向の中に包含されなければならぬとわたくしの信ずる側面を箇條書きにして擧げて見たのである。

デモクラシイが人類の幸福と發展とに取つて如何に大切なものであり、結構なものであつても、其れは畢竟するに、人間の根本性情を材料として、其れの特徴と能力とに依憑して其れの完成を期する方便に過ぎない。隨つて、其れの理想とするところのものは、これまで自然に彼れの生活の中にはたらいて來た、そして、これから先きも當然はたらいて行かねばならぬと思はれる事實から制限され、指揮されなければならない。デモクラシイがこの反省に依つて啓蒙された時に其れは必然に Timocracy 即ち、卓越主義にまで進まねばならぬとわたくしは信ずる。然り、デモクラシイの極致は卓越主義であらねばならぬ。其れは社會に於ける總べての個人の自由と發展との平等相を實現する方便として、其れに於ける賢愚の相違と、才能の適應性の相違との差別相を利用することである。卓越主義に依つて卑下されるものは一人も無く、其れに依つて自重の念と向上の精神とを喚起されるのは總べての人々である。

わたくしはデモクラシイに關するこの一般考察を準備とし、基本として、知識の民衆化の意義と、方法と、樣式と、制限との考慮に入らねばならぬ。

三　知識の民衆化は果して可能なりや

知識の民衆化は可能であるか、どうであるか。若し可能であるとしたならば、其れは如何なる意味に於て。

英國に於て、始めて鑑賞に、創作に、判技、熱烈なる努力を以て、八方に俗人の俗見と戰ひながら、印象主義を鼓吹した環境の風雲兒ホイッスラアに『十時』と題する論文がある。此れはもと或る招待席上に於ける彼れの演説の原稿で、專門家の見地より藝術の本質を論じたものである。其れは極めて短かいものであるが、今日、其の道の多くの人々からは一つのクラシックとまで激賞されて居るものである。便宜のために其れの要旨をスケッチすると、次のやうなものになると思ふ。

太古に方つて、人間に取つて戰爭や狩獵が主なる仕事であつた時代に於て、身體の強壯な人々の多數は戰爭に赴いたり、狩獵に出たりした。此等の人々のやうに強壯な身體を有たないために家に取り殘された人々の中に、何人にも優れて不思議に彼等の周圍より美を發見することの出來る更らに極めて少數の人々があつた。其等は彼等にだけ特有の感覺に依つて、全然他人の知覺から遺棄された夕陽の雲に、水邊の楊柳に美を發見し、そして、其れを享樂して居た。其れが往々其の高調に達し、自發の活動と化した時に、彼等は其の體驗の永遠に滅び去ることを惜んで、其れを木片や布片に留めることになつた。此れが抑も藝術の濫觴である。されば、藝術はどこどこまでもたゞ選ばれたる少數者だけが創造し、享樂し得るものである、多數者は其の創造にも、享樂にも與ることが出來ぬ人々である。この理由からして、藝術の社會化とか、趣味の民衆化とかいふことは不合理の甚だしいものである。藝術の社會化された時、其れは最早や嚴密なる意味に於ける藝術ではなく、趣味の民衆化された時、其れは最早や嚴密なる意味に於ける趣味ではない。」

此れが大體あの論文に於て表現された彼れの意見である。そして、其れは可なり忠實に藝術家一般の藝術の性質に關する理會を代表して居るといふことが出來る。然し、わたくしからすれば、このやうな意見は極めて非哲學的のものであると言はねばならぬ。何故ならば、其れは藝術家の心の中にはたらく美を體現する能力と世人一般の心の中にはたらく美を鑒榮する能力とを作用的に程度の相違として識別する代りに、本質的に種類の相違として分離して了ふからである。そして、淺慮にも其れがさうするのは、(彼等の想像に於て)藝術の特殊性と莊嚴性とを高調しようとするためであらうが、さうすることは、前者の由來を沒却し、後者の支持力を閑却するのであるから、さうすることは反つて藝術の特殊性と莊嚴性との成立を破壞することになるからである。

世の中には、知識の性質に關しても、ホイッスラアが藝術の性質に關して懷抱して居たと同じ間違つた見解を懷抱して居る者が決して尠なくはない。知識とさへ言へば、此等の人々の念頭に浮ぶところのものは、それぞれ、これまで專門家に依つて完成され來り、そして、現に彼等の間にさうとして通用されて居る知識であり、其等に限られるのである。斯くして、彼等の理會に隨へば、物理學の知識は必然に數學の法式に依つて表現されたものでなければならず、哲學の知識は必然に認識論の證明を經たものでなければならないのである。又、進化論の知識は必然にダアウヰンの『種の起原』は勿論のこと、其れより以下この問題に關する主なる著書を涉獵した上の知識でなければならず、經濟學の知識は必然にアダム・スミスと、リカアドオと、カアル・マアクスとの三大家の學說の周匝なる了解と精當なる評價との上に築かれたものでなければならぬのであつて、此等の標準に達せざるものは、其の實、嚴密なる意味での知識ではないのである。若し知識の性質に關して、此等の見解が其の當を得たものであり、此等の見解のみが其の當を得たものであるならば、知識の民衆化の如きは始めより問題とするだけの價値もなく、純乎として不合理の企とせねばならぬ。

[illegible]

[illegible]に過ぎずも、[illegible]

のとされ、このやうなものに限るとされるのに、[illegible]共れの[illegible]に依つて[illegible]ることこの

ないためである、一層詳しく言へば、共れが共れの範囲と作用とより共れを[illegible]しようとしないで、[illegible]

した形態とコンヴエンショナルな概念とより共れを解釈して了ふからのことである。

一體、知識を民衆化に適せさるものと考へるのは、強いて共れを民衆化しようとすれば、共れは知識以下のものに堕落して了ふ外はないと考へるのは、知識に對する知識的職業家の固陋にして、融通の利かない偏見の致すところである。

人間の生活を持續するために、知的道具の材料として彼に賦與されたものは（同じ目的で知的道具の材料として他の動物に賦與されたものが本能であるに反し、）衝動である。衝動の特徴は、本能の共れが生れ享けたまゝで生活に役立つが、又、經驗や教育は共れの性質を變更するに與つて殆ど何等の効力もないのに反して、衝動の特徴は生れ享けたまゝでは生活に役立たず、經驗や教育の刺激に依つて共れの内面より喚び起されてはたらき出した反省の作用で欲望に迄變じ、絶えず共れのはたらき振りが改整されて行つて、始めて生活に役立つところにあるのである。

知覺が衝動の發起に隨つて出現するやうに、知識は反省のはたらきを含んだ欲望の發動するに隨つて、作用するのである。つまり知識は反省のはたらきに依つて組織された、そして組織されて行く知覺である。知覺と知識との差別は一にそこに反省の要素がはたらいて居るか、どうかといふことに懸かるのである。そこに最少限度でも反省の要素がはたらいて居れば、共れは、既に知覺ではなくして、知識である。

かういふ風に、知識といふものを其れの最廣義に、若しくは、最深義に解釋すると、知識は人間の生活に取つて一日も缺くべからざる知的道具であるといふことになる。其れは、或る時代に於ける或る階級に屬する人々の專有物ではなく、總べての時代を通じて總べての階級に屬する人々の共有物でなければならぬといふことになる。人間の生活がだんだんに複雜になり、精密になり、氣難かしくなり、そして、其れの異なる部分の間に一層完全なる協同と統一との成立が必要とされて來るに隨つて、其れの必要に應ずるために、知識は其れの內具性より次第におのれを廣化し、深化し、普遍化することになる。斯くして、一旦素朴な常識の形を取つた知識は其れの自己產出のプロセスに依つて益々正確なる科學ともなり、更らに進んで最も深遠なる哲學ともなるのである。其れの關係から言つても、嘗てトオマス。ハツクスレエが、常識と科學との間には劃然たる區別は付かない。常識が少しづつ其れの精確の度を增して行けば、いつかそれは科學になると語つたやうに科學と哲學とにしたところで、其等の間に劃然たる區別が付かないならば、まして、其れの志向から言ふ時、わたくし共は常識と、科學と、哲學との間に、何等の相違をも識別出來ず、其等は總べて徹上徹下渾然たる一體を形造るのを發見するのは極めて當然である。そして、直接、間接の相違こそあれ、生活に役立たぬ常識の存在が一つの矛盾であるやうに、生活に役立たぬ科學の存在、若しくは哲學の存在といふことも一つの矛盾であらねばならない。成る程、廣汎となり、複雜となつた知識を、手際よく、出來るだけ節約の方法で、出來るだけ正確に取り扱ふためには、いろいろと抽象概念の工夫され、使用されるのは止むを得ない。然し、其等は明瞭なる筋道を通して實際生活と關聯されて居るべきである。この意味に於て、或る學者が言つたやうに、總べての抽象概念は——例へば、神とか、絕對とか、原子とか、法則とかいふやうなものと雖も——通用貨幣に於ける大札に過ぎない。其の場合、その場合の必要に應じて、どんなに小さい小錢にでも兩替出來ないものは贋札であらねばならぬ。さうすると、哲學や科學に

[illegible]にしても、[illegible]

しては、或る手と或る方法とを通して民衆化され得るものでなければならない。

精確と不精確とが知識の價値を形成することは無論のこと、場合に依つては知識としての成立をも左右するほど、其れは知識に取つての一大要件である。然し、俗人が皮相に想像するやうに、何が精確の知識であるか、何が不精確な知識であるかは、如何なる場合にも通用されるやうに、前以て定まつて居るのではない。一つの目的が立てられる時に、其れを達する方便として、始めて知識の精確と不精確とが論ぜられるべく、論ぜられて、始めて一つの意味を有ち得るのである。場合に依つては、簡單なる知識が最も能く適當することがある。この場合に於て、其の知識は精確なものである。又、或る場合に方つては、煩瑣な知識が最も都合惡しくはたらくことがある。この場合に於ては、其の知識は確かに不精確のものであると言はねばならぬ。誠にも『過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし』と言ふではないか。特定の目的を立せず、其れに對照せずして、固定的に煩瑣な形式を有つた知識に多くの價値を與へ、簡單な形式を有つた知識に尠なき價値を與へようとするのは、人生と、知識と、學問とに關して、全然理會と知見とを缺くペダントリイであり、ディレタンティズムである。

人間である限り、民衆は如何なる時代に棲息し、如何なる社會生活を營なにしても、知識に依つて生活して居たのであつた。知識に依らざれば一日と雖も生活することは出來なかつたのである。されば、通俗に略して、知識の民衆化と言つても、知識一般の民衆化を指すのではない。これまで彼等が有たなかつた或る種の知識の民衆化を指すのである。そして、若しわたくし共にして協同生活のエコノミイといふものを信じ得るならば、新たに或る種の知識の民衆化の必要が感じられ、呼ばれる時には、何時でもそこには儼として二重の要求がはたらいて居ることを知らねばならぬ。其れ

の一半は其の知識を普及させようと企てて居る人々の側に於て、他の一半は其の知識を受納しようと望んで居る人々の側に於て。たゞ兩方の側に於ける欲求は大體に於て呼應しては居るが、必らずしもライブニッツの『先定調和』の說くやうな完全なる一致があるのではない。そして、其れを普及させようと企てる側の人々も彼等の限られたる光を通して其れを企てるより他に仕方がないし、其れを受納しようと望んで居る人々も、彼等の限られたる光を通して、其れを望むより仕方がないのであるから、おのづから期待と結果との間に過不及の生ずるのを免かれない。されば、理論として、知識の民衆化の可能性には一つの疑問も挾まれる餘地はないが、實際事業として、出來るだけ良好の成績を擧げようとすると、多くの、そして、極めて困難な問題が生じて來る。

わたくし共は窮極文化の行程に照らして、デモクラシイの發達を欣求し、知識の民衆化の進捗を歡迎する。然し、眞に知識の民衆化の進捗を歡迎するが故に、わたくし共は如何なる種類の知識が、如何なる目的に向つて、如何なる方便に依つて普及されるのが、刻下に於けるわが國に取つて知識の民衆化の意義に最も適するかを細心に考慮せねばならぬ。何故ならば、長き期間に亙つては兎に角、短かき期間に限りては、外形を知識の民衆化に借りて、實質に於てはデモクラシイの發達に沒交渉なる、若しくは、更らに進んで、其れを阻害するやうな知識を民衆の間に鼓吹することも出來るからである。

わたくし共が知識の民衆化を語る時、其れに依つて、如何なる種類の知識が、如何なる目的に向つて、如何なる方便に依つて普及さるべきかを決定するのは、わたくし共に取つて最も重要なる條件であらねばならぬ。

四　知識の民衆化の概念と目標

[illegible]にして、デモクラシイ[illegible]できるやうに、[illegible]シイア[illegible]である。デモクラシイ[illegible]にはたらいて、いろいろ[illegible]したのである。となり、おのれの志向と組織とに就いて反省して來た時に、共れはおのづから知識の民衆化にまで分化したのである。されば、嚴密なる意味に於ける知識の民衆化は、單に、漫然平易なる知識を民衆の間に普及させることも、又は、知識を民衆の間に普及させるために共れを平易にすることをも意味さない。外形上、たゞさうするだけではまだ知識の民衆化を構成するに至らない。一つの特定の目的を有し、この特定の目的を達する方便として、一つの特定した精神でさうすることを制限し、指揮して、始めて嚴密なる意味に於ける知識の民衆化は成立するのである。この特定の目的とは他でもない、共れは、デモクラシイを支持する最後の條件として、協同生活を組織する總べてのメンバアをして共の協同生活の繁榮と發展とに對して自發的に、そして自主的に、出來るだけ多くの貢献を爲さしめるために、社會人として等しく、個人として知力的に、そして、道德的に彼等を聰明にすることとである。嚴密なる意味に於ける知識の民衆化とはこの特定の目的を達するに必要なる精神を以て制限され、指揮されたる民衆の間に於ける知識の普及化を指すのであつて、其の他のあらゆる目的を達するに必要なる精神を以て制限され、指揮されたる民衆の間に於ける知識の普及化を指すのでは斷じて無い。

汎く世の中を見渡すと、知識の名を以て行はれて居るものにも澤山の種類があり、共等を包容するにしても、傳習の名の下に澤山の方法が採られて居る。そして、共等の或るものに至つては質に氷炭相容れざるものがあるのである。然し、嚴密なる意味に於ける知識の民衆化の唯一の目的がデモクラシイの協同生活の中に在る總べての個人を感化して、彼等の各の能力と機會との許す限り、出來るだけ聰明なる協同者たらしむるにあるならば、共れは直ちに之れが標階と

して知識の種類と其れを修習する方法とを選擇する。斯くして、選擇されたる知識の種類は實驗的（experimental）のものであり、修習する方法は作用的（functional）のもので、あらねばならぬ。

五　現に行はれる知識の民衆化に含まれた一般缺陷

今日知識の民衆化を唱道し、そして、或程度にまで其れを實行し、若しくは、實行しやうと志して居る人々の殆ど總べては、知識の根原、及び作用と、民衆の性質、及び要求と、そして、兩方の交渉の眞相とを理會することのないために、わたくしから見れば、彼等は大いなる誤謬に陥つて居るのである。民衆といふ概念からしても、其の名稱に依つて呼ばれる人々は、彼等の少年期、青年期に方つて、主として二つの事情から、即ち、或る者は機會の缺乏から、他の或る者は嗜好の缺乏から、更らに或る者は此等二つの結合から、中等教育は無論のこと、初等教育の全部さへも習得しなかつた人々であるが、彼等は現に其れの數に於て國民の大部分を占めて居るのである。然し、わたくし共の協同生活の社交的、及び、政治的事情は、其れの重大なる要素として彼等を含めて、ますますわたくし共全體の一致の努力と貢獻とを必要として來たのである。協同生活の支持と發展とに拘はる總べてのメンバアは、それぞれ天分や教養の相違のあるに拘はらず、誰れ彼れの別なく知力的に、道徳的に、今日在るよりも聰明にならねばならぬ。わたくし共の或る一人が然うすることを一日早めれば其れだけ利益を受けるのは協同生活そのものである。之れに反して、わたくし共の或る一人が然うすることを一日遅らせれば、其れの損害を蒙るのは協同生活そのものである。こゝに於て、知識の民衆化の叫ばれつゝあるのも當然の事である。

民衆を知力的に、道徳的に聰明にするには、何物にも先だつて彼等に知識を與へることが肝要である。そして、其の

知識に於て彼等の平常の生活に[illegible]

し、如何なる種の知識を如何なる方法に依つて彼等の間に普及することが彼等の[illegible]、

彼等の理會に適合したものであるかと云ふことになると、唯、極めて少數者の會得して居るところのものであつて、今日の知識の民衆化の唱道者と實行者との最大多數の誰しも會得するに至らないところのものである。

彼等民衆は性來より、慣習より、乃至、職業より、永年思索を避けて實業を選んで來た者である。彼等はだんだんに實行的の事柄に興味を増すに隨つて、ますます理論的の事柄に其れを失つて來た者である。然し、今、協同生活の共營者として彼等の一層聰明ならんことが必要とされるがために、彼等の間に知識を普及することが必要とされるのである。さうすると、彼等の間に知識を普及するといふことは必然に、一、彼等の心の中に知識に對する欲求を起さしめること、二、彼等の生活を中心として知識の性質にまで内觀を有たしめること、三、この自然の結果として、さうする必要の起る場合には、適宜に在來の知識を應用し、變更するの實力を養成せしむること等に成就することを意味せねばならぬ。ちよつと考へると、今日のところ、此等のことは、組織的に高等教育を受けた、謂ふところの教養ある人士にしてからに體得して居るとは容易に期待出來ないのであるから、況して彼等民衆に對つて其等を體得することを希望するのは確かに突飛な注文であるやうに見えるであらう。然し、わたくしは決してさうは思はぬ。世の教養ある人士の中でも其等を體得して居る者は極めて稀有であることは不幸にして事實である。然し、其れは現時に於けるわが國の教育が其れのあらゆる階段を通じて實にお話にならぬほど馬鹿らしきものになつて居るからのことである。民衆の間に知識の普及を計畫する以上は、始めからこれだけの條件は當然のこととして含ませて、計畫されて居るべきであつて、若しこれだけの條件が含まれないのならば、そんなものは實現されても彼等に取つて大した役に立つものではないから、そん

して知識の種類と其れを傳習する方法とを選擇する。斯くして、選擇されたる知識の種類は實驗的（experimental）ものであり、傳習する方法は作用的（functional）のもので、あらねばならぬ。

五　現に行はれる知識の民衆化に含まれた一般缺陷

今日知識の民衆化を唱道し、そして、或程度にまで其れを實行し、若しくは、實行しやうと志して居る人々の殆ど總べては、知識の起原、及び作用と、民衆の素質、及び要求と、そして、兩方の交渉の眞相とを理會することのないために、わたくしから見れば、彼等は大いなる誤謬に陷つて居るのである。民衆といふ概念からしても、其の名稱に依つて呼ばれる人々は、彼等の少年期、青年期に方つて、主として二つの事情から、即ち、或る者は機會の缺乏から、他の或る者は嗜好の缺乏から、更らに或る者は此等二つの結合から、中等教育は無論のこと、初等教育の全部さへも習得しなかつた人々であるが、彼等は現に其れの數に於て國民の大部分を占めて居るのである。然し、わたくし共の協同生活の社交的、及び、政治的事情は、其れの重大なる要素として彼等を含めて、ますますわたくし共全體の一致の努力と貢獻とを必要として來たのである。協同生活の支持と發展とに携はる總べてのメンバアは、それぞれ天分や教養の相違のあるに拘はらず、誰れ彼れの別なく知力的に、道德的に、今日在るよりも聰明にならねばならぬ。わたくし共の或る一人がさうすることを一日早めればそれだけ利益を受けるのは協同生活そのものである。之れに反して、わたくし共の或る一人がさうすることを一日遲らせれば、其れの損害を蒙るのは協同生活そのものである。こゝに於て、知識の民衆化の絶叫されつゝあるのも當然の事である。

民衆を知力的に、道德的に聰明にするには、何物にも先立つて彼等に知識を與へることが肝要である。そして、其の

知識は彼等の生命の尊重に[illegible]
し、如何なる種の知識を如何なる方法に依つて彼等の間に普及することが彼等の[illegible]の要求を[illegible]たこと、[illegible]
彼等の理會に適合したものであるかと云ふことになると、唯、極めて少數者の會得して居るところのものであつて、今日の知識の民衆化の唱道者と實行者との最大多數の殆んど會得するに至らないところのものである。

彼等民衆は性來より、慣習より、乃至、職業より、永年思索を遠ざけて實業を選んで來た者である。彼等はだんだんに實行的の事柄に興味を増すに隨つて、ますます理論的の事柄に其れを失つて來た者である。然し、今、協同生活の共營者として彼等の一層聰明ならんことが必要とされるがために、彼等の間に知識を普及することが必要とされるのである。さうすると、彼等の間に知識を普及するといふことは必然に、一、彼等の心の中に知識に對する欲求を起さしめること、二、彼等の生活を中心として知識の性質にまで內觀を有たしめること、三、この自然の結果として、さうする必要の起る場合には、適宜に在來の知識を應用し、變更するの實力を養成せしむること等に成就することを意味せねばならぬ。ちよつと考へると、今日のところ、此等のことは、組織的に高等教育を受けた、謂ふところの教養ある人士にしてからに體得して居るとは容易に期待出來ないのであるから、況して彼等民衆に對つて其等を體得することを希望するのは確かに突飛な注文であるやうに見えるであらう。然し、わたくしは決してさうは思はぬ。世の教養ある人士の中でも其等を體得して居る者は極めて稀有であることは不幸にして事實である。然し、其れは現時に於けるわが國の教育が其れのあらゆる階段を通じて實にお話にならぬほど馬鹿らしきものになつて居るからのことである。民衆の間に知識の普及を計畫する以上は、始めからこれだけの條件は當然のこととして含ませて、計畫されて居るべきであつて、若しこれだけの條件が含まれないのならば、そんなものは實現されても彼等に取つて大した役に立つものではないから、そん

なものは寧ろ全然計畫しないのを優れりとわたくしはする者である。

然し、知識を民衆の間に普及して、わたくしがこゝで語つて居るやうな効果を收めやうとするには、否、一層適切に事實を言つて、こゝにわたくしが語つて居るやうな効果を收めることを其れの骨子として民衆の間に知識を普及するには、根本よりさうする態度と精神とを更新しなければならぬことは勿論である。其れは彼等を啓發することを目的とすべきであつて、これまでのやうに、只彼等の見聞を增すことを目的とすべきではない。

それでは、啓發するといふことと見聞を增すといふこととの間にはどれだけの相違があるか。見聞を增すことを目的とすると言へば、既に一つの體系にまで完成された知識をそのまゝ千切つて民衆に與へることとである。生活から獨立して、一つの體系を形造つた知識には、（勿論、其れにはこゝで十分に說明して居られないエコノミイも合理性も含まれて居るので）人をして其れに對して縁遠い感じを抱かしめるいろいろの技巧が含まれて居る。それであるから、如何に其れを平易化し、單純化しても、初學の者に取つては一つの神秘たるを免かれない。啓發することを目的とすると言へば、既に一つの體系を形造つた知識を再び其れが欲望のはたらきの延長として、漸く生活より分化する岐點にまで還元して、其れの志向と組織とを了解せしめやうと務めるがために、民衆をして難なく知識に共通してはたらく機能を窺はしめる。知識を纔かに見聞として受け取つた人々は、其れを規則として受け取るから、時としては、其れに依つておのれの行動の束縛されることを保し難い。之れに反して、知識を啓發の道具として受け取つた人々は、其れを原理として受け取るから、何時でも其れをおのれの情意の解放に役立たせることは確かである。

こゝに、わたくしが更めて言ふまでもなく、今日、わが國に於て民衆化さられることとの必要ある知識は、其れが自然に關するものにしても、若しくは、社會生活に關するものにしても、悉とく長い間西洋の文化の中に發生し、變遷し、

[illegible]

たゞし其が巧みに、有効に、其れをわたくし共の生活の中に[illegible]するには、[illegible]一段もの工夫と苦心とが必要とされる。この理由からして、其等が民衆の間に普及されるに就いては、どうしても、見聞としてではなくして、啓發の道具としてでなければならぬことは多言を用ゐるまでもない。然し、不幸にも、この見易き道理が卒先して知識の民衆化を唱道し、實行しようと志して居るわが國の識者の大數に依つて理解されないのである。多分朝野の名士と自任し、他稱されて居る人々の大數は、未だ眞に知識の性質を理解して居ないのであらう。隨つて、如何に其れの眞面目を發揮するやうに其れを民衆に傳へるかの道を知らぬのであらう。知識の民衆化の機關も他のあらゆる機關と等しく、其れの外形だけの設備に就いて言ふならば、可なりの簡拔にまで整つて居る。然し、其等の内容と成績とに就いて、わたくしをしてわたしの所信を忌憚なく語らしむるならば、知識の民衆化の目的からすれば、其等の多くは大した効果を收めて居らないと斷言するに躊躇せぬ者である。そして、其れの根本理由は單純である。其等の當事者は知識を見聞として民衆に說くだけのことをして、其れを啓發の道具として說くことをしないからである。說くことが出來ないからである。

六　實驗的の種の知識を作用的の方法で傳播するといふことの意義を解說す

黃金の卵を集めて歩くより、其等を産む黃金の牝鷄を捕へる方がどれだけ勝しだか解らない。さうであるに拘はらず、わが同胞は今日になつても近世文明に關して黃金の卵を集めることだけに屈託して、彼等の見識は其等を産み出す黃金の牝鷄を捕へることにまで暢びない。彼等は近世文明の精神、若しくは、志向を體得しないで置いて、縦かに、其

れの發現たり、所産たる諸々の機關や、設備や、運動や、主張だけを採用しようとする。これでは幾年走馬燈のやうな忙がしい月日を送つても、到底眞物の近世文明の作り出される筈はない。わたくしのこの觀察は知識の事柄に關して特に其れの眞實性が感銘される。こゝに知識が眞物であるか、假物であるかを鑑別する一つの試驗石がある。それは、其れが自己生産的のものとなつて居るか、自己整齊的のものとなつて居るか、どうかといふことである。さうなつて居れば、其れは眞物の知識である。さうなつて居らなければ、其れは假物の知識に過ぎない。然るに、わが國に於て知識と呼ばれて居るものは如何なる題目に屬するものにしても、一つとして自己生産的のものとなり、自己整齊的のものとなつて居るものは一つもない。

わが國に行はれる知識の一般特徴をこのやうなものにして置いて、其の特徴を分受する知識を民衆の間に鼓吹しても、民衆は其れに依つて近世文明の意義に眼覺め、其れの精神を生活することに於て大した利益を受け得ないことは知れ切つたことである。苟も彼等の間に知識を鼓吹することの第一義が、彼等をして近世文明の意義に眼覺め、其れの精神を生活せしむることにあるならば、彼等に傳播される知識は全然異なつた基礎の上に建て直されねばならぬ。其れは、近世文明そのものの活動の延長として、作用的の方法で傳播される實驗的の種の知識であらねばならぬ。さうすると、わたくし共はまづ實驗的の種の知識と、作用的の方法との意義を篤と會得せねばならぬ。

實驗的の種の知識とは何んであるか。作用的の方法とは何んであるか。

大觀して、これまで世の中に發生し、そして、行はれて來た知識の種類を二つとし、其れを傳播するに用ゐられた方法を二つとすることが出來る。そして、此等は、それぞれ發生し、そして、用ゐられた社會の組織と理想との發動する樣式であつたのである。一種の知識とは教權的の其れと、實驗的の其れとを指し、二つの方法とは分離的の其れと、作用

[illegible]驗的の種の知識と作用的の方法とに依つて進步的社會は其れを要求する知的道具である。[illegible]とに依らなければ專制國家の權威は保たれず、實驗的の種の知識と作用的の方法とに依らなければ自由制度の充實に期せられない。保守的社會や專制國家も、進步的社會や自由制度も、人間文化の永久の過程に於ては、夫れ夫れ、適當な時期に於て、同等の役目を演じ、同等の價値を有つたものである。保守的社會や專制國家は文化の早い階段に於て來たり、進步的社會はそれの遲い階段に於て來たるが、前者が其れの準備となつてはたらかなければ、後者の開展されることは、到底難かしい。されば、其れの出現の時期に先後の相違はあつても、わたくし共に一方を尊重するために、他の一方を卑下する理由は毛頭ない。隨つて、わたくし共に前者の知的道具たる實驗的の種の知識と作用的の方法とに對して好意を抱くがために、後者の知的道具たる教權的の種の知識と分離的の方法とに對して惡聲を放つ理由も毛頭無い。

　わたくし共が文明史家として此等の二つの社會と、其等に附隨する二つの知的道具を考察する時には、是非ともこのやうな態度を取らなければならない。然し、現に進步的の社會に棲息し、自由制度の充實と發展を圖つて居る市民としての立場より、實際問題として此等の二つの知的道具を評價しようとするならば、わたくし共は其等の間に儼然たる差別を立てて、其等をして決して互に混同せしめてはならない。わたくし共が無上の價値を置くわたくし共の生活を中心として語れば、實驗的の種の知識と作用的の方法とを知的道具とすることは絕對に善である、何故ならば、わたくし共の生活は獨り其れに依つて支持されるから。之れに反して、教權的の種の知識と分離的方法とを知的道具とすることは絕對に惡である。何故ならば、わたくし共の生活は其れに依つて復び收拾すべからざるやうに破壞されるから。

實驗的の種の知識と作用的の方法との間には極めて密接なる關係がある。實驗的の種の知識は作用的の方法に依つて

傳播された時に、最も顯著に其れの志向が發動し、作用的の方法は其れの積容として實驗的の種の知識を有つた時に、最も適切に其れの効果が發揮されるのである。極言すれば、一つ物であつて、實驗的の種の知識は其れの體であり、作用的の方法は其れの用である。

如何なる種の知識と雖も、其れの最初に於ては、經驗に基づき、其れを支配するやうに形造られないものは一つも無い。トオマス・ハックスレエは或る論文に於て、教權と實驗とを對立させ、教權的の中は何等の經驗の要素も含まれて居らないと說いて居るが、此れは確かに彼れの誤謬である。どんなものにしても、生活の方針となつて居り、又、さう爲され得るものならば、其の限りに於て、其れは一種の知識でなければならないし、既に、一種の知識であれば、其れは經驗の上に築かれて居らなければならない。たゞ事實として、人間は嚴密なる意味に於て近世的と呼ばれる時代に入る前に、彼れが生活に於て或る程度の安定と、滿足と、粉飾とを得るだけの文化に達するに及んで、どういふわけか、あらゆる生活の機關を改造する努力を中止し、長い歲月に亘つて、固定の狀態に棲息して居た時代が續いたのである。其等が普通に上古及び中世と呼ばれて居るものである。其等の時代に於て、生活の機關の原型たり、動力たる知識の組織も、理想も、全然、固定の狀態に墮するのは極めて自然である。然し、如何に生活が固定の狀態に傾いたと言つても、其れが人間の生活である限りは、（こゝでは十分に說明する遑を有たぬが）、仔細に諦察すれば、そこには多少の變化が起り、多少の變動が行はれて居らねばならぬ筈である。然し、大體は固定であつても、其等が起り、或は、行はれて居る生活を支配するに全然固定の知識を以てしようとすれば、そこには尠なからざる無理が生ずるわけであるから、其れに關する意識は、自づからいろいろの技巧を用ゐて其の知識を擁護する情操とならざるを得ない。この情操が知識そのものに附著し、其の知識の屬性の一つとなつたものが、即ち、教權である。教權的の種の知識とはこのやうな特徵

[illegible]つた已に[illegible]てゐる。

さうすると、教権的の賢い説の話語と雖も、最初は非常に苦心して経験に基づいて得られたものであるが、それが又遠き過去に於て中止して了つたために、今日よりすれば、いろいろの弊害を伴ふことになつたのである。其れがおのれを傳播するベヒクルとして分離的の方法を選んで居るのも、其の方法に依れば、直接に生活に對して大した感化を及ぼすことが出來ない代りに、又、其れから嚴密に、明白に、おのれの缺陷と不妥當とを看破されまいとする工夫から來たつて居るのである。

然し、人間が近世生活に入るに及んで、それまでは保守が生活の常態と考へられたものが、急に進歩が其れの常態とされるに至つた。靜止は運動の一樣式である、と定義されることになつたこと、實在は普遍でなくして、特殊であることになつたこと、代表的の數學として、代數が幾何學に取つて代つたこと、生物の種の説明として、種創説が倒れて進化論が起つたこと等の事實は、人間の生活理想に來たつたこの一般變化の斷片的の象徴であつて、其れの根柢が如何に深く、其れの感化が如何に遠大であるかを物語るものである。

人間の生活は擾亂の連續である。其等の平衡は時々、刻々に回復されて行かねばならぬ。然し、保守的の社會は其れを靜的にしようとし、進歩的の社會はそれを動的にしようとする。靜的に其れをしようとするに用ゐられる知的道具は、教權的の種の知識と分離的の方法とであり、動的に其れをしようとするに用ひられる知的道具は、實驗的の種の知識と作用的の方法とである。前者の組織されたものは辯證學及び、專制々度となり、後者の組織されたものは科學及び、デモクラシイとなつたのである。

進歩的なる近世生活が作用的の方法によりて傳播される實驗的の知識を其れの知的道具とする最後の目的は總べての

個人をして、隨つて彼等の性情に依つて決定さる總べての個體をして、一切外的の力の命令、若しくは、壓制を離れて彼等の內的の要求と理性とより完全に互に協同せしめ、協同するの關係を發見せしむることである。教權的の種の知識が宇宙の構造を既定のものとするに反して、實驗的の種の知識が其れを未定のものとし、教權的の種の知識が類、若しくは、階級を實在と考へるに反して、實驗的の種の知識が個體、若しくは、個人の他に實在はないと考へ、教權的の知識が生活の方針を類、若しくは、階級の存續のために、演繹的に工夫された知識と道德觀とに求めるに反して、實驗的の種の知識が其れを個人の幸福と開發とのために歸納的に創造される知識と道德觀とに求めるのも、畢竟するに、其れが近世生活の知的道具として、この最後の目的に役立つためである。

わたくし共日本人は今より六十年前に於て四圍の事情に迫られ、當時に於ては生死を賭するやうな一大決心を以て近世生活を採用したのであつた。それから以後、尠なくも外形に於ては近世生活を生活して來たに相違ない。そして、諸强國の刺戟があり、壓迫があつたと同時に、大抵の事柄に就いて其れの模範が其等の强國に見出された事柄に限つては、どうか、かうか近世生活的に一時の急場を彌縫して來て居る。然し、わたくし共日本人は、其等の中で最高有識者、最大指導者として目されて居るものにしても、政治に於て、產業に於て、教育に於て、學問研究に於て、彼等の示す爲體が彼等の近世文明の志向を理會せず、近世文明の眞髓の那邊にあるかを捕捉して居らないことを優に證據立てて居るではないか。言葉を變へて、裏面よりこの事實を表現して見れば、わたくし共日本人はまだ全く久しき因習より脫することが出來ないで、上古生活、及び中世生活の知的道具であつた教權的の種の知識と、分離的の方法とに養成された理會と情操とを以て、實驗的の種の知識と、作用的の方法とに依つて作り出された結果だけを、纔かに其等の中に見出される相互の聯絡に隨つて、半分以上は其等に引摺られながら、其等を使用してゐるに過ぎないではないか。今日、わが國に於

[illegible]彼等を種々の人として彼等に對つてメンタルテストを行ふ時、彼等が[illegible]は知るのである。彼等は宿命的だとか、工業の獨立だとか、人格教育だとか考へて居るが、わたくしの見た所では、彼等の考へて居ることは、其等の問題の第二義にも第三義にも當らないことである。而も、彼等は其等の第一義の何たるであるかは未だ嘗て一度も考へたことはないのであらう。彼等少數の最高識者、最大指導者にして既にこの通りである、一般民衆に至つてはこの點に關して、彼等よりも更らに、更らに甚だしきもののあるべきは多言を費すまでもなく、何人にも容易に想像出來ることである。これと言ふのも、前に言つた通りわが同胞は一に近世生活を生活して居ると言ひながら、その實、教權的の種の知識と分離的の方法とに依つて養成された理會と情操とを以て纔かに實驗的の種の知識と作用的の方法とに依つて作り出された結果だけを危なかし氣に使用して居るからのことである。

現に、わが同胞はこのやうな悲しむべく、怖れなべき文化的雰圍氣の中に生活して居るのであるとすると、彼等に對して知識を民衆化するの根本觀念は先づ彼等をして彼等の天分と職分とに應じて各自其に近世文明を生活せしむることであらねばならぬ。それには、近世生活が依つて起り、そして、科學とデモクラシイとにまで結晶した實驗的の種の知識と、其れのヴェヒクルたる作用的方法との志向を體認せしめ、其の志向の體認に依つて上古生活、若しくは、中世生活の遺物たる教權的の種の知識と其れのヴェヒクルであつた分離的の方法とに依つて涵養された情操を彼等の生活より掃却し、拭却することであらねばならぬ。彼等は自然に關して處世するにしても、社會生活に關して處世するにしても、自づから其の理由を實驗的に判斷し、その判斷に随つてさうするならば、彼等は近世文明の意義に眼覺めたのである。さうしない間は、さうすることの出來ない間は、彼等は正しく生活する上に於てさうすることが如何に重大なる意義を

爲すかを覺らない間は、彼等はどんなことをしようと、どんなことを言はうと、まだ近世文明の意義に眼覺めて居らないのである。

自然に對し、社會生活に對して、或る民衆が果して近世生活の意義に眼覺めて居るか、隨つて、おのれの理會に隨つて判斷し、其の判斷に從つて處世して居るか、どうかを鑑定するに屈强なる標準が三つある。其れは彼等の言動が迷信の支配より解放されて居るか、どうか、彼等の言動が官權の單なる服從に依つて左右されることはないか、どうか、彼等の言動は彼等の生活の要求を中心として、物事の眞擬性を鑑識し得るか、どうかといふことが、其等である。然し、わたくしは遺憾ながら、此等の問に對しては悉とく否定的に答へざるを得ない者である。この事實は、彼等はまだ近世生活の意義に眼覺めず、隨つて、實驗的の種の知識に依つて判斷して居らないといふことを暴露するものである。

この狀態は彼等の間に實驗的の種の知識を作用的の方法とに依つて普及することに依つて改められねばならない。そして、さうすることは確かに、能く其れを改めるとわたくしは信ずる者である。

七　吾人は知識の民衆化の大業を何人の手に托すべきか

昔、英國の物理學の大家ファラデイは通俗講演にも非常な成功を博した人であつた。或る人が彼れに對つて其の成功の秘訣を尋ねた時に、「別に秘訣とてありません。自分はたゞ彼等が物理學のＡＢＣさへも心得て居らぬといふことを假定して、自分の講演を始めるだけです」と答へたさうである。わたくしは、今日、わが國に於て眞に知識の民衆化の急務なることを感得して其れを唱道し、之れが實行にさへ携つて居る者の決して尠なくないことを知つて居る。然し、わたくしからすれば、彼等は知識の民衆化に於て最も重大なる要件を忘れて居るやうである。其れは他でもない、彼等民

実三千年[illegible]して居たが、従つて、[illegible]如何にしても[illegible]ことこそに[illegible]これへるにあるといふことを忘れて居ることである。近世文明のABCとは、近世文明の骨子であり、根幹である。わたくし共日本人の努力と要求を標準として改移されたる　若しくは改移さるべき其れの成立であり、意義である。然し、如何にしてこの近世文明のABCが教へられるであらうか。誰れが其れを教へ得るであらうか。

佛教の語にも『縁なき衆生は度し難し』とあり　ソクラテイスも『自分は一個の知識の助産婦である。人を助けて彼れをして安らかに知識を産み落させるに過ぎない』と述懐したのであつた。如何に偉大なる指導者と雖も、畢竟するに、先づ（たとひ其れがどんなに隠微の形を取つて居るにしても、）民衆の心の中に兆し、彼れの思を支配して居るものを啓蒙し、指揮するだけのことである。たゞ、彼等には天津橋上杜鵑の聲を聞いて、正に来らんとする天下の變を知るの感があるがために往々にして彼等は世人より風雲なき處に雷霆を捲き起すものと解せられるのである。然し、此の世の中に於て、無より有を造り出すことの出来るのは獨り神だけである。そして、この事實を誰れよりもよく知り、誰れよりも機敏に利用するのは彼等指導者である。英雄英雄を知る　されば、（外観上事業の性質に相違こそあれ、）彼れは水蒸氣を民衆より集め、其れを雨と化して復び彼等に返した』といふ一句を以て、詩人ホオマアの事業を批評した政治家グラツトストオンは、此の警句を下し得た時、破顔一笑其れを以て、又、彼れ自づからの事業の註脚としたことをわたくし共は容易に想見し得るのである。

如何に遠大なる事業と雖も衝動を以て始まらないものは一つも無い。其れと同時に、如何に微細な事業と雖も、衝動を以て終るものは、又、一つもない。わたくし共は之れが好適例を現時流行しつゝある自由畫の志向に見るのである。わたくし共は自由畫を尊重する意義を正しく理會しなければならない。兒童に自由畫を畫かしめるのは、彼等をし

て勝手に、不統制に、彼等の機形的衝動を發散せしむるためではない。其等を特定の目的に對して最も純に、最も素直に、啓發し、利導するためである。この意味よりすれば、或る時、ゲエテが或る貴婦人より、其の頃一人の神童現はれ、十二三歳にして少しも學ぶところなきに拘はらず、非常に立派な畫をかいて滿堂の人々を驚かしつゝあるといふ話を聞いて、『若し彼れにして凡物ならば其のまゝで放棄して置いてもよい、然し、あなたの言はれる通り、果して神童ならば何故速かに卓越した師匠を撰んで彼れを其れに就けないのであるか』と言つたのは、自由畫を排撃する最後の精神を最も明瞭に發揮したものである。

衝動を取り扱ふに三つの方法がある。一つは、其れを放任して置くことである、他の一つは其れを抑壓して了はうとすることである、更に他の一つは、其れを放任しもせず、其れを抑壓しようともせず、其れの本質を尊重しながら、其れを利導して行くことである。前の二つの方法は、前代人が彼等の氣まぐれより採用したものであるが、最後の一つに至つては、現代人に依つて始めて發見されたものである。そして、其れは、此等の三つの方法の中で、獨り正純なものであることは言ふまでもない。近世に生れ、そして、多大の成功を收めた偉大なる民衆の指導者は、皆この第三の方法に依つて終始したものである。

わが國に在つては、福澤諭吉は確かに卓越した、斯かる一人であつた。實に、彼れは民衆の衝動の趨向を的確に捕捉し、其れを精當に啓蒙し、指導することに於て古今獨歩の天才であつた。今日より彼れの述作の機會と、彼れの著書の内容とを考察する時、わたくし共は彼れが何時でも、如何に努めて民衆の興奮と覺悟とに僅かに一歩を先んじて、彼等の衝動を捕捉し、啓蒙し、指導して行つたかを見出だすのである。世人が彼れの著書の悉とくが如何に簡易にして、而かも、そこに如何に熾烈なる改革の精神が藏せられ、如何に遠大なる結果が期せられてあるかを見るがよい。嘗て、尾

[illegible]に依つて、[illegible]
両人の間の話題に上ぼり、氏は彼れに依りて、彼れを相手にしてゆくつもりであ[illegible]学者を相手に書くつもりである旨を答へた。さうすると、彼れは直下に語を励まして、『馬鹿！何故無学者を相手に[illegible]ないか、』と言つて、大いに氏を叱つたといふのが其れである。之れを以て見ても、学者の如くならず、[illegible]く語らうとしたのが彼れの畢生の覚悟であつたことが知られる。彼れがわが国における知識の民衆化の最大指導者となつたのは、随つて、新文明の最深建設者となつたのは決して偶然ではない。

普通の意味に於ては、彼れの見解に独創的のものの無かつたのは勿論のこと、彼れの解説の方法も必らずしも深遠であり、透徹であつたとは言へない。然し、其れに拘はらず、当時の事情に照らすと、確かに彼れは最も優れた風に、民衆の欲求に随つて彼等の衝動を啓発し、指揮して居たものと言はねばならぬ。彼れの学問や見識にどれだけの缺陥があるにしても、わが同胞を旧き制度の暗黒より救つて、彼等を新らしき制度の希望と光りとの中に置いた絶世の偉業に関して、どうしても彼れは殊勲者の最大なるものであらねばならぬ。一度彼れが新著を公にするや、其れは文字通りに洛陽の紙価をして高からしめたのであつた。実際、其等の発行部数は二十万、三十万の高に上ぼつたのであるから、彼れがどれまでの程度に当時の人気を一身に集めて居たかが想像出来るではないか。『文明論之概略』といふ（理論的には彼れの著書として最も善く纏まつて居る）一書を除いては、『学問のすゝめ』でも、『西洋事情』でも、『窮理問答』でも、『世界国尽し』でも、その他の数々のものにしても、悉とく、当時の民衆の理会を基本として、最も賢き、そして、最も有効なる風に、彼等をして従来の陋習を去つて、智識を広く世界に求めしめやうとしなかつたものは一つも無い。わたくしは嘗て『世界国尽し』も『窮理問答』も見たことがあるが、『世界国尽し』は其れの書名までも当時世間に行はれて居た

『日本國盡し』に倣つて七五調にしてあることや、『窮理問答』に至つては極めて簡單なる物理の說明の材料に、吾々の日常生活の事件を取り、其れの挿話までが、悉とく日本化されて、丸髷のお內儀さんが竈で火を焚き付けて居るところや、法被を着た職人が仕事をして居るやうなものばかりになつて居ることは、當時の民衆の生活狀態に隨つて、彼れが如何に親切に、如何に克明に智識の民衆化を圖らうとして居たかが推測出來る。彼れの苦心は空しからず、忽ちに報ゐられた。わが同胞は彼れの手一つに由つて粗略ながら近世文明の玄關にまで導びかれたのであつた。然し、彼れが歿して以來、滌洒肅々、彼れの衣鉢の光榮ある後繼者として、わが同胞を近世文明の堂奧にまで案內する者の絕無でないまでも、稀有であるのはどうしたわけであるか。こゝ五十年間に亙つて、わたくし共日本人が近世文明に就いていろいろと雜多な見聞を廣めたことにに實に驚くべきものがあらう。然し、眞實に其れを生活する智慧に至つては、彼等はどれだけ體得するところがあつたであらうか。其れは頗る疑はしい。明治の初年に比すれば、わたくし共は比較にならないほど、近世文明を生活するに好都合な環境に置かれ、便宜を有つて居ることは言ふまでもない。それであるに拘はらず、わたくし共がこの不滿足な狀態にあるのには、何か原因がなければならない。確かに其れはある。的確に民衆の衝動を把持し、社會の要求に照らして精當に其れを啓發し、指導し得る人物を缺いて居ることが、即ち、其れである。一言にして盡せば、其れは今日に於て丁度明治の初年に於て福澤諭吉が擧げたやうな成績を擧げ得る人物、即ち、當時の文化狀態と今日の文化狀態との相違を篤と計算した上、其れが相違するだけ其れの學殖に於ても、理想に於ても、彼れとは異なり、何故さう異ならなければならぬかの理由を理會する人物を缺くためである。わたくしはこゝにわたくしの語つて居る事柄の意味を明らかにするために、一つの實例を引かねばならぬ。

時は明治を去つて正に大正に入つた時に　社會の各方面に於ける謂ふところの先覺者たちは　明治文化の失敗に鑑

みて、こゝに[illegible]たとして、それに[illegible]といふことを[illegible]へたうてあつたら[illegible]に、[illegible]革新を[illegible]するとして、第二維新[illegible]なるものが計[illegible]された[illegible]なるものとなつて[illegible]の一人[illegible]する。然し、其れは如何なる[illegible]を[illegible]けたであらうか。其れは其れの[illegible]の人[illegible]に[illegible]はず、[illegible]に終つたのであつた。其れは當然さう終らなければならなかつたのである。そこには實際上のいろいろの障礙もあつたであらうが、わたくしがこゝで其れの最も根本的なものとして指摘したいのは、彼等が第二維新の意義を全然理會しなかつたことである。彼等のしたことは、たゞ月並に政治界の腐敗と無自覺とを慨歎して、選出議員の品性を、併せて選擧民の資格を非難する以上に出でなかつた。こんなことでは、其れが何時呼ばれるにしても第二維新といふやうなものは決して來らう筈はないとわたくしは考へる、斷言する。苟くも第二維新といふほどの名を打つからには、尠なくも、其れの規模と意氣とに於ては第一維新に等しく、其れの深慮と遠謀とに於ては、遙かに第一維新に越えるものでなければならない筈である。現在に見出だされる政治界の缺陷と明治維新より延いてこゝ五十年間に亙つて計畫され、沈澱して來た文化の特徵との間の關係を篤と吟味し、前者の症狀に對應する方法として後者の病疾を根治することを圖るべきであつたのである。然し、わたくしは彼等が一度でも民衆の前に明治文化の特徵は如何なるものであつたか、その特徵は如何なる行き掛りと、其等に對する如何なる謬見と、淺慮と、誤算とより作り出されたかを精當に說明し、其れに關して例へば、さきに福澤が努めたやうに、彼等の心の中におのづから或る種の理會と態度とを發生せしめようと努めたのを聞かない。さう努めることが第二維新の精神である、この一事を外にして、如何なる意味に於ても第二維新なるものは存在し得ないといふことに氣付いたことを聞かない。一事は萬事である。世の民衆の指導者を以て任じて居る人々は其等の最も優れたものに至つても、名だけは知識の民衆化に從事しながら、其の實は其れが如何なることを意味するか、

其れには如何なる知識と見識とが必要とされるか知らないのである。

斯くして、刻下に於ては、知識の民衆化は他のいろいろの事業と等しく、其れを言ふことは極めて容易であるが、其れを實行するこは極めて困難なものとなつて居る。つまり、其れの概念がまだ全然不明確であるのである。其れを明確にし、そして、其れを體現するだけの見識と手腕とを具へた人物が朝野を擧つて拂底なのである。

八　最後に知識の民衆化の精神の改善に關して反省の資料を呈す

西洋に於て見出だされる、若しくは、新たに起る設備や運動とさへ言へば、其れの精神を吟味し、其れの組織を改造することとなく、其れの外形を移植するだけで、既に、其等のものが立派にわが國に於て國民的に建立されたと妄信されるところから、其れの標榜と名稱とだけからすれば、現にわが國に於ても、知識の民衆化の機關は十分にある、或は、十分以上にあるかも知れない。新聞と雜誌との二大機關に就いては言ふまでもなく、夏期學校、夏期講習、或る大學にて經營する大學擴張運動、其の他、いろいろの團體の企てにかゝり、隨時に催ほされるいろいろの通俗講演等を數へ擧げれば、其の種に於ても、其の數に於ても、決して不足だとは言はれない。そして、此等のものがわが文化に何物をも寄與して居らないなどと、わたくしは決して考へては居らない。否、わたくしは確かに其等が或る程度にまでは、或る意味に於て、知識を民衆化することを通して、わが文化に寄與しつゝあることを信ずる者である。然し、わたくしが其等の素性やメリツトに就いて、こゝにわたくしが平生懐抱して居る意見を率直に披瀝することを許されるならば、其等のために費やされる時間や、勞力や、費用に比例して、其等は甚だ不滿足なものであると言ふことである。

今日、わが國に於て發行される新聞と雜誌とが、知識の民衆化の機關として、當然其れに期待さるべき役目のどれだ

けて、[illegible]
き出して居るか、其等は如何にして匡正さるべきであるかといふやうなことは[illegible]そして、[illegible]あるに相違ないか、わが文化とわが國のジョオナリズムとの關係は、其れの重大さからしても其れ自身に一つの獨立した Essay を要求するのであつて、又、其れの中にはさういふ一つの獨立した Essay に依つて、始めて、之れが委曲の盡さるべき性質を有つた事柄が含まれて居るから、其等に關する考察は一切こゝより割愛せねばならぬ。

こゝには、わたくしの考察を他の種の機關にまで限らねばならぬ。

さきにわたくしが列擧した夏期學校以下の設備に幹事とし、講師として携はる者の中には、今日社會の指導者の位置にあるあらゆる人々が網羅されて居る。學者、藝術家、教育家、技師、政治家等はこれぞれ彼等の專門や職業に隨つて、民衆の間に知識を普及させることを努めたのである。然し、彼等の果して幾人が眞に知識の意義を體得し、そして、其れを實現して居るであらうか。わたくしは皆無でないまでも、其等の數の極めて尠なかるべきを危ぶむ者である。それでは、この不成績は何處から來たるのであるか、其れの根本原因は何んであらうか。其れは、勿論、技巧の末より來たるのではない。其れよりもつともつと根本的のものより來たるのである。其れは學問の性質に關する彼等の理會より來たるのである、彼等の專門と實際生活との交渉に關する彼等の理會より來たるのである。

實を言ふと、彼等の言動が後に證明するやうに、(彼等はどんな肩書を有ち、どんな地位にある人々であつても、)總じて彼等は學問の眞の志向を十分に理會するに至らずして、いつの間にか自分の專門學を修了し、大學を卒業した人々である。それから後、一層親しく彼等の專門を通して、若しくは、いろいろな社交關係を通して、實際生活に接觸して居るのであるから、尋常ならば、彼等にしたところでだんだんに自分の專門に一層の現實性を發揮して來なければならぬ

わけであるが、不幸にして、彼等は夙に研究の第一歩に於て誤られ、素直に、明治に、自分の専門と實際生活との關係を意識する目を失なつたために、今に到つても容易に其れを回復することが出來ないのである。既に彼等は彼等の専門をさへ、そんな曲りくねつたメヂウムを通して受け取つて了つた。どうして今更ら正しきパアスペクテイヴを通して其れを他人に與ふることが出來ようか。

知識の民衆化を標榜しながら、民衆に對して其間を隔する彼等の態度の一大缺陷は、彼等は其れを僅かに完結したものだけ説くが、若くは、説くことは出來るが、其れを三つ固まつた形より溶解して、其れが生活の自然の要求から生活より分化する岐點にまで溯りて説かないところにあるのである。若しくは説けないところにあるのである。勿論、わたくしとこうするだけで知識の民衆化の目的は遺憾なく達せられるものと考へるのではない。又、學問の性質に依つてと等しく、讀者の種類に依つて、實際にさうすることの程度の差別はあるべきである。然し、知識の民衆化の根本精神が彼等に對つて眞に彼等の目間を啓すのではなくして、彼等を啓發するにあるならば、若しくは、彼等を啓發するために彼等の目間を啓すのにあるならば、少なくとも、論議たる者は、如何なる題目を選ぶにしても、學問を一つの完結した形態として置かないで、一つの生長する活動として其れを考へ得るだけの用意は必要である。さうしないならば進化の効果の大部分は無に歸して了ふと、わたくしは思ふ。

民衆に與へられる知識は、彼等の生活の延長、若しくは、擴張として與へらるべきであつて、彼等の生活に對立する或るものとして與へらるべきではない。物識りになるといふことと良くなるといふこととは必らずしも同一ではない。無論、良くなるには或る程度には物識りになることも必要であるが、場合に依つては、物識りになればなる程、ますます正しき意味に於ては愚かになるといふことも可能であり、現に、或る國に於ても其の實例にはとぼしくない。今日行はれ

[illegible]
とわたくしは大いに[illegible]つ念には[illegible]させる者である。

英語に cram といふ言葉がある。其れは一度詰め込んだことをすつかり忘れて了ふことである。例へばこれまで詰め込んだ物が素性の悪いものならば、新たに正しい氣品の高い物に進むためには悪い屑を一切棄てゝ了はねばならぬ。然し、これはなかなか困難な仕事である。今日知識の民衆化の機關を通して與へられる知識の大部分は眞の知識や學問の獲得のために、一旦 cram さるべきものではあるまいか。

社會の人に對つて彼等が納得出來るやうに、直ちに彼等の生活の一部となるやうに、平易に新知識を與へるといふことは決して容易な事でない。此れは一代の碩學鴻儒にして、始めて、能くすることである。さきに、この文章に於て、わたくしはファラデイが通俗講演に於て非常に成功したことを語つたが、其れはファラデイが物理學に於ては一世の泰斗であつたから出來たことである。わたくしは決して、知識の民衆化に携はる人々は悉く碩學、鴻儒でなければならないとは言はない。たゞ、それは俗人が無雜作に考へてゐるやうな安價にして輕薄なものではない、又、さうして了つてはならないと言ふだけである。例へば、わが國に於ても一般に民衆に對つて知識の普及を目的とする通俗文庫といふやうなものが出版されないではない。然し、其等の殆ど總べては、通俗文庫の性質も價値も全然辨へない人々の手に依つて、何等の卓越した見識も、精到なる知識もない上に、纔かに一二ケ月で書き上げられるのであるから、到底其れの標榜する使命に副ふやうなものの出來よう筈はない。わたくしの考へるところでは、通俗文庫の一部分を形造る如何なる題目を取扱ふかにしても、其れの著に對しては、

一、最近五十年間に於けるわが國の文化に關する一般理

二、おのれの專門に關する堅實なる知識

三、學問と實際生活との關係に關する自由にして、透徹したる見識、

の三つのものは彼れに必須の資格として期待せねばならぬ。此れは決して無理な注文ではない。此れだけはさういふ事業を採り上げる人々の最小限度の資格であるとわたくしはして居るのである。何故ならば、それだけのものを準備して所有して居らなければ、其れが標榜する目的は到底達せられないからである。

わたくしは知識の民衆化の急務なることを感ずると同時に、知識の民衆化の意義を體得し、其の意義に隨つて、知識の民衆化の實績を舉げ得る實力を有つた者が多數に出現することの更らに急務なることを感ずる者である。

眞智と人間生活

金子筑水

第一

課題である知識の常識化といふ言葉は、ちよつと考へても色々な意味に取られる。複雑な難解な科學的知識を常識の程度に平易化し單純化することゝも取れゝば、また專門的な知識を常識の範圍まで普及し擴張するといふ意味にも取れる。いづれにしても專門的知識の普及を意味する一點に於ては同一である。けれども一概に知識の普及と言つても、其の中にはまた多少複雑な——解釋の仕方によつては極めて重大な問題や意味やが籠つてゐるやうに思ふ。例へば同じ知識と言つても、其の中には自然科學的知識も有れば、また藝術的知識とか宗教的知識といふ樣なものも有る。知識の種類によつて適用の範圍がおのづから違つてゐる。所謂有用な知識とか無用な知識とかいふたぐひの區別も考へられる。更にまた一概に知識の普及と言つても、人間生活に於ける知識の位置又は價値の考へやうによつて、其の意味がさまざまに違つてくる。例へば古代ギリシヤのソクラテスのやうに、又は陽明學派の主張のやうに、知行合一といふやうなことが考へられないものでもない。或はまた知識を全く實用的に解釋する者も有れば、また別にこれを非實用的に考へる

人も有る。斯やうな考へかた如何によつて、知識の普及といふ意味もおのづからさまぐ\に變つてくる。

私はこゝで此等すべての問題を取扱はうとは思はない。殊に知識の種類とか、其の適用とかいふたぐひの問題は、すべてこゝで省略したい。そして私がこゝで主として扱ひたいと思ふ問題は知識又は認識の本質——知識又は認識は本來人間生活と如何なる關係をもつてゐるか、そして其の普及といふことは、廣く人間生活の上に如何なる意味を與へるものであらうか——即ち嚴密な意味に於て人間生活と眞知識との關係は如何、これがこゝで簡單に取扱つて見たいと思ふ問題である。而して此の問題の考察は、今日のやうな時勢に於ては、決して無意味な事でなく、寧ろ反對に色々な方面から見て頗る深甚な意味が有ると思ふ。吾々は平生多くを考へたり思惟したりしてゐながらも、嚴密な意味に於ける認識の本質——認識論上の本質ではなく、主として人生觀上の本質——に就いては、これを徹底的に考へてゐる人が甚だ少ない。即ちこゝで私は簡單に智性と人間生活との關係を特殊の方面から考察せんとする所以である。

第二

智性即ち知識の本質に關して、今日の人の思想は確實に時代精神の束縛を受けてゐる。吾々は此の時代精神から離れて、單獨に知識の本質を考へることが出來ない。現代のやうな極度に實際的な又は實行的な而して功利的な時代に於ては、實行が本位であつて、實行的ならざる知識の如きは、單に實行のための手段にしか過ぎない。價値的に批判して、知識はどこまでも實行に從屬すべきものと考へられる。ポジチギスチツクに實行的に教育された今日の人間に取つては、智性がすべて實行の手段にしか過ぎないことは、一點疑ふべからざる實際的常識であつて、智性を斯く考へないことは、寧ろ甚だしい非常識な事と考へられる。自然科學的知識は、其の中の最も顯著な適例である。科學的知識は單に

[illegible]

實際的利用といふことなしに、[illegible]。自然科學に[illegible]

か。眞理のために眞理を探るといふことも、自然科學者の研究の際に[illegible]ない。從つて明確な自然科學者の態度や動機は、結局自然の利用でなければならぬ。實際的利用の意義を外にしては、自然科學の本質は考へられない。單に狹義に於ける自然科學のみではない。廣義に所謂自然科學——廣く精神現象に關する科學乃至科學的知識とても、今日の人の考へによれば、結局は實際的な利用厚生のための手段であつて、此の實際的意味を外にしては、一般の精神科學も無意味であると考へられる。蓋し精神現象に關するすべての知識は、結局實際生活を確實にすべき手段方法に外ならない。否今人の考によれば、實生活には最も縁遠いと思はれる哲學的知識さへも、窮極するところ實行のための手段であつて、決して目的そのものではない。實生活の指南車としては哲學的知識も高い價値を備へてゐるが、自己目的としては何等の價値も備へてゐない。哲學が無益な空想となるは、實行目的を離れて、知識のための知識に陷るからで、實行目的に即するかぎり、哲學にも高い價値が備はるのであると。

智性が實行のための手段であるといふ思想は、最近一種の認識哲學の形を取つて立派に發達してゐる。プラグマチズムに固有なアクション・セオリーこれである。これは單に英米のプラグマチズムのみならず、ベルグソン其の他著名な學者間にも廣く一貫してゐる思想である。アクションを離れて思惟は無い。思惟はアクションの基礎の上に成立し、アクションの範圍内に於てアクションのために發生し且、發達するものであつて、アクションを引離しては思惟を考へることが出來ない。ベルグソンやパウルゼンや其の說明によれば、一般知識——科學的知識は、人間其の他の生物が周圍の環境に反應した經驗の蓄積から發生したもので、發生そのものが悉皆にアクションに基いてゐる。知識は即ちアクションとそ

のものから、發生したもので、アクションが無ければ一般知識も、發生する根據が無いのである。故に認識の範圍は嚴密にアクション又はリアクションの範圍に限られる譯で、一歩でも其の範圍外に出れば、そは忽ち空想と成るのである。知識は即ちリアクションの結果に外ならないと。これがプラグマチズムの主張である。こゝでくだ〳〵しく解説するまでもない。實用が知識又は眞理の標準であり目的であつて、實用と離れてはすべて空想であるといふがプラグマチズムの主張である。プラグマチズムは純粹功利主義の認識論である。否それは現代實用主義を代表してゐる最も現代式な認識論である。

第三

然しながら現代實用主義を代表してゐる認識論が果たして決定的な動かすべからざる知性觀であらうか。知識はすべて實行のための手段に過ぎないといふ今人の常識が果たして動かすべからざる不易の眞理であらうか。勿論知識の中にも實行を目的とするものが有り、又其の中に實用的な意味が有ることも疑はれないが、知識そのもの丶本質――乃ち根本的な知識そのものは果たして全然實行的な意味しか備へてゐないものであらうか。認識の本質が果たして實行に從屬する第二義的價値しか備へないものであらうか。

今日の人間が如何にポジチギスチックであつても、平生懐いてゐる常識が果たして窮極的なものであるかどうか、嚴密に公平に之れを吟味することは、極めて重要な事柄である。多少哲學的に此の問題を吟味するに先だつて、先づ一般文化發達の歴史の上から此の問題の變遷に注意することが必要である。廣く文化發達の歴史に徵して、智性一般が人間生活と如何なる關係を保持したかを吟味するが必要である。斯くて廣く古來の人生歴史に注意するとき、吾々は今日の

[illegible]

人間生活に必要な[illegible]てゐたのであつた。[illegible]必要であるか、簡單を要するため、主としてヨーロッパ歴史に就いて言へば、先づ古代ギリシャ生活が、或る點に於て、甚しく今日の實行生活と異なるものであつたことを注意せざるを得ない。古代ギリシャ生活が簡單にインテレクチュアリズムと言はれることは、今日の人間に取つては、何となく無意味に偏頗に然かも極めて幼稚な生活のやうに感ぜられる。インテレクチュアリズムの生活といふやうなものは、今日はもはや永久に消滅して永久に復活しない幼稚な生活のやうに感ぜられる。けれども斯やうな觀察が果たして誤りない正しい批判であらうか。古代ギリシャ人は、知慧のための知慧、智識のための智識、ヰズダムのためのヰズダム——即ち實用から離れた知識や眞理やを、それみづからに於て價値を備へたものとして尊重したと言はれる。彼等は言葉どほり眞理のための眞理を尊重したのであつた。知識とか思惟とか思索とかゞ、彼等に取つては、それみづからアクションであり實行であり生活であつて、それみづからに無上の價値を備へたものと考へられた。知慧の神アポロやアテナは、決して無下に他の神々に從屬する者ではなく、寧ろ神々の中の最も高い位置を占める者であつた。古代ギリシャの此の精神は、特に説明するまでもなく、プラトーンによつて、最も明確に最も深遠に又最も純粹に發揮され主張された。最高爲政者であるべき哲人は、國家社會を眞善に導くべき職務をもつてゐるのみならず、みづからイデアの神秘界を思索し瞑想することを最高の任務とすべき者であつた。最高最深の智的コンテムプレーションは、プラトーンに取つては、直に最高最深の生活であつた、智的瞑想そのものに最高無限の價値が與へられたのである。されば他の點に於てはプラトーンよりも遙に實際的なアリストテレースさへも、知慧のために知慧を尊重するといふギリシャ精神に至つては、全くプラトーンと同一意見であつた。然り彼れは明らかに實

行よりも知識に――エトスよりもディアノィアに優越性を與へたではないか。

宗教生活も一種の生活である。古代インドの宗教生活や、ヨーロッパ中世紀の宗教生活は、其の半面を觀れば一種神秘的な智的瞑想の生活であつた。宗教は一面に於ては實行であるが、他面に於ては明らかに一種の智的瞑想である。而して斯くの如き智的瞑想は、決して單に實行のための手段ではなくして、それみづからに最高絶對の價値を備へた生活である。宗教は實行のための手段ではなくして、それみづから最高絶對の生活である。現代のやうに宗教に荒んだ見地から、一概に宗教を人間生活でないやうに考へることは、決して公平な觀察とは言はれない。事實歴史的には永い間宗教は唯一絶對の人間生活とさへも考へられたのであつた。今日の吾々は此等の事實を深く考へなければならぬと思ふ。

廣い意味の智識や智的瞑想やを最高の生活そのものと觀る思想は、單に古代や中代やの幼稚な傾向のみではなくして、近代に於ても最も顯著な又最も重要な思想であつた。デカルト、スピノーザ、ライプニッツ等の中心傾向を見るがよい。いづれも高い知識生活を最高の生活と觀ない者はない。ライプニッツの眞智の開發、スピノーザの神の愛――いづれも智的生活を絶對のものと觀る思想ではないか。彼等の目から觀れば、實行といふが如きは、寧ろ人間生活中の一小部分ではなかつたか。眞智の開發そのものが、ひとり眞の人間生活とさへも考へられたではないか。カントは道德的實行に對して智的及び美的瞑想生活を立て、智的生活は實行生活と對立の位置を占め、決して一方が他方に從屬するものとは考へなかつた。すなはち彼れに取つては、智識生活は實行生活と共に人生の最高生活であつて、それみづからに唯一無二の價値を備へたものと考へられたのである。こゝで私は一々斯やうな思想の跡を追ふ必要は無い。現に今日思想界に於て最も顯著な地位を占めてゐるヘーゲル及び新カント學派等に共通な思想だけを瞥見すれば十分である。而して此等の思想家は、最も顯著な意味に於て、實行に對して知識生活の優越又は對當を主張する者で智識生活そのものに

最高のものと見ることに於ては、殆どヘーゲルと同じである。今日の人も[illegible]
け、道徳生活と政治生活との實行生活より、藝術生活及び哲學の生活を大に高い生活[illegible]
のものと區別したのである。彼れに取つては、プラトーンと同じく、最深の哲學的瞑想が最も高い人間生活と考へられたのである。それは恰もシエリングに取つて、高い意味の藝術生活が、最高の人間生活であつたと同じである。若しそれ新カント學派や最近の現象學派等に於て最も顯著な思想は、道徳並びに藝術の絕對世界と並んで、眞理自體の世界――論理的妥當性の世界――普遍眞理の世界が發見され樹立され考察されつゝあることとである。眞理自體の世界を基礎として、そこから一切の世界觀や人生觀やが引出されようとしてゐる。眞理自體の世界を直觀し考察し瞑想することは、プラトーンがイデア界を瞑想したと同じく、それみづから最高最深の生活であつて、決して他の生活のための手段たるべきものでない。人間も此の世界の瞑想まで進まなければ、まだ至高至深の生活にまで進んだとは言はれない。眞理は直に至高生活そのものと考へられると。これが最近に於ける最も著しい傾向である。

第四

事實上人間生活の歴史に徴して、知識生活が單に實行生活の手段のみではなくして、それみづからに價値を備へた最高生活と考へられたことは、深く現代人の反省を促すべき事實である。知識に關する現代人の考へかたが必しも必然的又決定的であるとは言はれない。知識一般――少なくとも根本的な知識を實行の手段と觀ることゝ、それを自己目的を備へた生活そのものと觀ることとは、皮相的には僅かの相違に過ぎないやうに考へられるが、正當には全然相異なる人生觀乃至人生觀的態度を誘導しなければ已まない。私はこゝに現代人が深く反省しなければならない重大問題が有ると思ふ。

歴史に徴して知識生活が自己目的を備へたものであるのみならず、道理上それが單に實行の手段であるべき理由が極めて乏しい。知識生活が單に實行の手段のみでない理由は、こゝでは精細に論及することが出來ず、又其の必要もないやうであるが、せめて其の要旨だけは總ての人によつて理解されなければならぬ。何故實行のみが目的であつて、知識はその手段に過ぎないか、私はどうしても理解することが出來ない。假にアクションとかアクチヸガーとかを最も廣い意味に解して、人生はすなはちアクションであり、アクチヸチーであるとしても、知識生活そのものは當然一種のアクションでありアクチヸチーであつて、智的アクションはやがて一種の生活そのものではないか。智的瞑想も當然一種のアクチヸチー又はアクチヸチーの實現であり實行であつて、決して單純な無活動だとは言はれない。吾人間性の活動中智的活動は其の中心活動の隨一であり、人間性の神隨的活動の隨一である。單純な衝動的アクチヸチーはすべての動物に共通な作用でもあらうが、複雑な理智的活動はひとり人間のみに本具な最も人間らしいアクションではないか。古い言ひあらはし方であるが、理智的活動を除いて、いづこに獨得無二の人間性が求めらるべきであらうか。理智的活動を卑下することは、直に人間及び人間生活を卑下することではないか。理智的活動を卑下することは、直に人間性そのものを卑下することではないか。

けれども論者は言ふであらう。智的活動が一種のアクチヸチーであり、隨つて一種の意志活動であるは言ふまでもないが、嚴密な意味に於て實行に就いて語る場合は、單純な内的アクションのみではなくして、外的に現はれた手足の運動でなければならぬ。外的結果を實現するやうなアクションのみが、嚴密な意味に於て實行又は行爲と言はれるのである。瞑想的な知識作用に對しては、此の意味の實行のみが一定の特徴を備へたもので、人間生活の眼目は、ひとへに此の意味の實行のみに存するのであると。然しながら、此の意味の實行だけが何故人生の唯一目的であつて、智見や識見

中に於て[illegible]
見る如き行為に引入れて、又は行為と結合して、[illegible]にそれ〳〵の深い意味を見出すのであるが、すべて理智的要素を抽象し去つたゞの行為——ミアー・アクションそのものに果たして何の意味があらうか。全く理智的要素を引去した唯の行為は單純な反射的機械的運動であつて、かくの如き運動が人間生活の目的となるべき道理がない。單純な動物的運動が人生の目的であるなどとは、人生そのものに對して餘りに盲目的な推論ではないか。故に實行や行為に必然的に理智や識見やを結びつけて考へる以上——斯く考へなければ行為といふことは無意味であるから——何故其の必然的理智や識見やは、たゞ手段であり方法であつて、結果的な行為のみが目的であり眼目であると觀らるべきであらうか。知識や理智をたゞの手段と見る理由はいづこにも全く見出されないではないか。反對に行為や實行を意味あらしめるものは、ひとり理智あるのみであつて、理智のために知識のために、行為や實行に始めて意味が發生し來たるのである。合理的行為又は理智的實行のみが——勿論人間生活の大部分は不合理的、盲目的衝動的行為であるが——眞に人間にふさはしい、人間らしい、人間性に合した行為であると言はれやう。理智的要素を抽象し去つては、行為や實行は到底何等の意味をも有たないではないか。

斯やうに論じてくると、一派哲學的な論者は、次のやうな最後の論題にまで論及するかも知れない。廣い意味に於ける、而して哲學的な意味に於ける意志と知識との對立——そこに吾々は實行と認識との關係を見得るではないか。嚴密な意味に於けるタート又はアクションが生活の主眼であり目的であつて、智見や認識は到底此のタートやアクションを成就せしめんがための手段に過ぎないではないか。意志と認識とを對照し比較して、所謂プリマート、デス、ホレンス（意志の優越性）が主張される所以は、意志のタートが人生の眼目であつて、認識は此のタートを成就せんがため

の手段に過ぎないからではないか。いづれにしても、此の最後の立脚地から見て、理性が意志に從屬すべきものであることは爭はれないと。これが哲學上の一種の見解である。

私はこゝで「意志の優越性問題」にまで論及することを避ける。此の哲學說にまで進入せずとも、吾々は十分確實に當面の問題だけは考察することが出來る。何となれば、假に意志の優越性を認めたからと言つて、吾々は必しも理智や認識はすでに其の手段に過ぎないと結論する必要を見ないのである。意志と理性と比較して、意志の方面に重きを置くといふことは、必しも一方を目的と立てゝ他方を其の手段とすることではない。嚴格に言へば、此の場合に於ても、意志は理性や認識を聯結させての意志であつて、ショペンハワーが主張したやうな純粹盲目的な意志ではない。純粹盲目的な意志は、これを理性と對立して、人生の目的であり主眼であるとは解釋されない。盲目的意志を盲目的意志としては人生觀上全く無意義である。故に意志と理性とは本來不可分の一全體であつて、之れを別々に引離して對立させることが元來間違つてある。理性から言つても、意志から離れてはそれが無活動に終ると同じく、意志から見ても、それが全く理性から離れては無意味である。故に假令優越性論や主情意論やによつて、意志に重きが置かれても、一全體中の一方を目的と立てゝ他方をたゞの手段であると貶する理由は少しもない。意志と理性とは全く本領を異にする別々の要素であるから、其の中の一方が他方に從屬すべき道理は少しも無いのである。本領の上から言へば兩者はどこまでも對等であるべきであらう。隨つてまた例へば理性を全く意志に從屬させて、理性は意志から發生し來たるものゝやうに說明することも甚しい誤解である。意志と理性とは、其の本質が全然異なるものであるから、意志から理性の發現すべき道理は少しも無いのである。アクションによつて認識の範圍や種類は決定されるが、認識そのものはアクションからは發生しないのである。

第五

何故私が理智又は知識は實行のたゞの手段でない所以を斯やうに力説し主張するか。私はたゞ學究として當さうした事を主張してゐる譯でない。實はもつと／＼深い動機が此の主張の根抵に存するのである。

先づ讀者の誤解を避けたいことは、斯やうな主張を爲せばとて、私は決して實行や行爲を無視し輕視して、之れを理性に從屬せしめやうとする者ではない。私はどこまでも理性と意志とを不可分の一體として考へてゐる。理性といひ意志といつて別々に之れを引離すことは、單に學問上の便宜の爲めであつて、兩者のいづれの一方もが他方から離れては成立し得ないのである。故に理性は直に意志であり、又意志は直に理性であるとも言へる。理智二のものは意志によつて活動すると同時に、理智作用は意志的實行に結末すべき第一步である。意志的實行に結末して、理智作用は始めて完成的狀態を取るのである。故に理性は意志のたゞの手段でないと主張したからとて、それは意志の實行を輕視したり否定したりする所以でなく、寧ろ十分確實に意志の實行を認めた上の主張である。理智作用が意志的實行に進むべき根柢であることは、前者が必しも後者の手段であることを意味せないと主張するまでゝある。

然しながら私が斯やうな主張を爲す所以は、其の根柢に一層深い動機又は理由が有るからである。即ち此の問題の解決如何は、單に學理上の主張のみではなくして、一層深く實際的な人生觀的態度に根本的影響を與へるものと考へられるからである。知識を全く實用視すると否とによつて、そこに實際的人生觀上の根本的に異なる二の態度が現はれると考へられるからである。そして此の問題の考察は、私の見るところによれば、今日の時勢に最も深い關係を有つてゐる。故に此の問題は直に當面の重大な實際問題なのである。

ポジチギスチツクに又は功利的に敎育された今人が、何故知識の開發を自己目的と見ずして單に實行の手段に過ぎないと見るかといふと、彼等は實行といふ事に一定の意味を與へて考へるからである。たゞ無意味な實行とか、盲目的行爲とかでは、之れを生活目的としての實行と見做すことが出來ない。生活目的としての實行は、飽まで生活そのものでなければならぬ。即ち論者は實行と生活とを同一視して、廣く知識の開發はことごとく生活のための方便たるべきであると主張する。生活が目的で、知識の開發は其の手段に過ぎないと主張する。然かも此の場合の生活は、知識の開發又は理性の發達を除外したものであるから、當然理智以外の生活でなければならぬ。理智以外の生活とは何ぞといへば、功利的な今人に取つては、又は功利主義者に取つては、所謂幸福とか快樂とか享樂とかいふたぐひのものであつて決して其の他の何ものでもない。實行とか行爲とかは、すなはち幸福を目的とするものであるから、其の意味に於て一般知識の開發は實行生活のための手段であると考へられる。一般知識の開發は即ち幸福や快樂の實現のための手段であると考へられる。

然るにこれに反して、知識の開發そのものに絶對的價値を與へ、理性の開發そのものを最高の生活目的と觀ることは、功利的實際主義の見解とは全く違つてゐる。理性の開發そのものに價値を與へることは、理性の開發その事に無上の尊敬を拂ふ所以で、人間性の開發そのものを眞の人類生活と考へるのである。斯やうな態度に取つてのみ理性の開發は、それみづからに於て尊嚴であり價値であり目的であると考へられる。單に論理的理性のみならず、宗教的理性の開發も、乃至藝術的理性の開發も、すべて理性の開發として、それみづからに絶對價値を備へたものと考へられる。即ち一般理性の開發は、他の生活のための手段ではなくして、直に最も精神的な人間生活――人間生活の中樞――最高最深の生活そのものであると考へられる。斯くの如きは、今人の功利主義的態度とは全然異なる人生觀的態度ではないか。

而して斯くの如き態度は、現代[illegible]べからざる點について深く反省すべき人生觀的態度ではないか。所謂[illegible]の文化的態度と[illegible]にはないか。

たゞ從來此の種の文化的態度は、動もすれば實行生活を輕視し否定するやうな傾向を備へてゐた。文化的態度を取ることは、決して實行生活を輕視する理由とはならない。理性と意志とは、前段に述べたとほり、一全體を構成する二つの要素であるから、一方のために他方が決して犠牲に供せられてはならない。

斯やうに一般知識の開發は、それみづから絕對價値を備へてゐる最高の人間生活と考へられるが、然かも尙ポジチギスチツクに教育された現代人は、必ず次のやうに反論するであらう。科學的知識就中自然科學的知識は、其の發生及び發達の歷史に徵して、本來實用的又は功利的な本質を備へたものである。自然の利用と活用——それが自然科學の目的であつて、眞理のための眞理といふやうなことは、自然科學に於ては考へられない。故に知識の開發を非實用的に考へることは、科學的知識の本質を否定する所以でないか。のみならず、一層深く知識發生の由來を研めれば、そはすべて生物乃至動物が周圍の環境に對してのリアクションに基づいたもので、知識發生の由來は明瞭に其の實用性を語つてゐる。實用又は實行を離れた認識の如きは、要するに人生とは沒交涉な空想に過ぎないではないか。實用性はすなはち飽まで知識一般の本質と考へらるべきではないかと。

自然科學的知識が實用性を備へてゐることは、何人もこれを拒むことが出來ない。けれども科學的知識の根柢に、乃至科學的知識の外に、それとは全然異なる別種の知識が有ることは、自然科學者と雖も到底否定することは出來ない。カント式な言葉を借りて言へば、先づ個々の科學的知識を可能ならしめる普遍的乃至哲學的認識が、個々の科學的知識

の外に厳然として存在してゐる。知識の開發が、此の種の普遍的認識まで進まなければ、それはまだ中途半端なものであつて、決して完成したものと言はれない。個々の科學的知識が、個々の事實又は經驗的事實に關する知識であるとすれば、普遍的な哲學的知識は、當然事物の本性又は本質――エーゼンに關する知識である。而して斯くの如き知識も、其の利用の方法によつては、勿論實用的とか功利的とかいへないこともないが、本質的には到底非功利的なもの非實用的なものといはなければならぬ。然も哲學的認識は、一切認識中の認識、知識中の知識――人間理性の窮極的知識たることは明白である。人間性の開發を期するためには、人間はすべて當然此の窮極的知識の領域まで進まなければならぬ。こゝにこそ眞に人間性の本領――人間らしい人間性の本領が存すると觀られるであらう。それは決して單に哲學專門家に取つてのみの領域ではなくして、すべての人に共通普遍な眞理の領域であると言はなければならぬ。而して斯くの如き領域に於ては、單に目前の利用のみではなく、根本的な本質的な眞智の開發そのものが無上に貴く美しく神々しく感ぜられるのである。

若しそれ一般知識の發生が實用に基づくと言ふ主張に對しては、吾々は簡單に次のやうに答辯をすることが出來る。同じ知識の發生といふことにも、心理的發生の意味と論理的發生の意味とが有る。心理的發生の解釋は、其のまゝ論理的發生の解釋とはならない。知識の發生が實用的であるといふ主張は大體心理學的說明であつて、決して論理的な哲學的說明でない。認識のエーゼンは決して心理的に歷史的に發生するものではなくして、到底アプリオリーな本質を備へたものであることは、遂に否定すべからざる事實である。故に認識の本質又は本性は到底純實用的に若くは功利的に解釋することは出來ないのである。眞智は飽まで眞智としての本領を保持するのである。

第六

こゝまで論及してくれば、一般知識の普及又は常識化に關して、結局私が如何なる考を抱いてゐるかは、最早讀者諸君には明白であると思ふ。實用的知識の普及といふやうなことは今日の吾々に取つては最早問題でない。今日のやうな實用的な功利的な時代に於て、吾々は尚此の時代精神を超越して、又は此の時代精神と合せて、知識のために知識を、眞理のために眞理を尊重する人間性開發の新生活に向かつて進まなければならぬ。ポジチヸズムの極端な束縛のために、現代に於ては、人間性開發の眞生活は殆ど全く消滅し去られたかの觀さへ有る。然かも吾々は今日もはや深く反省して、何等かの手段によつて此の眞生活に活きなければならない時代に到着してゐる。此の眞生活に活きる者は復活し、然からざる者は遂にデカダンのどん底に沈み行く者と考へられる。明らかに今日は世界歴史に於ける大危機であると信ぜられる。

私は特に今日の時代に於て、我國に於ける哲學的知識の發達及び普及が我文化の將來のため我國運の將來のため、世間で普通に考へられるよりも案外重大な或は決定的な意味を備へてゐると信じて疑はない。哲學的知識の發達及び普及をば、私は嚴密に人間性開發の意味に於て考へる。勿論人間性は哲學的知識だけに限られてはゐない。けれども今日の時代精神の進步に關して言へば、哲學的知識の開發は、他の文化の發達と比較して、特に重要且決定的な意味を有つてゐる。

今日は如何なる意味に於てか、又如何なる方法によつてか、功利主義一邊の時代精神から、一層高い文化價値の標準に向かつて進まなければならない時代である。此の轉廻は恐らく極めて至難な事であり、又其の方法は極めて複雜である

に用途ない、然かも現代は、寧ろ、一面から見れば、明らかに知識的であり理性的である。宗教の方便としての宗教が最も峻に否定されてゐるのであるから、其の意味に於て、今日は知識――主として實用的知識の盛に發達した時代であらう。其の意味に於て今日が知識の時代であることを疑はれない。斯やうな理知的時代に於ては、一方から視れば、却つて宗教とか藝術とかが實生活の目標となるべきであつて、然かも實際は現代人が容易に宗教や藝術によつて實生活に進まうとは力めない。現代人は寧ろ宗教に對しては冷淡であり、又彼等に指嗜される藝術は主として時代に順應した享樂的なものに過ぎない。故に現代人が最も深い興味を感じ、若くは最も容易に近づくことの出來るものは、或は哲學であるかも知れない。インテルクチュアリスチックな時代で、哲學に向かつて最も手近な立脚地を有つてゐる。嘗て獨逸詩人ヘルダーは、現代に於て往時に榮えたやうな詩歌の隆盛は到底望むべからずと觀じ、今日のやうな散文時代に於ては、新らしい哲學が人生を指導するより外に途が無いと考へたといふ。私も哲學に向ふと云ふ現代の最も手近な方法ではないかと思ふ。

哲學は專門哲學者の專門學ではなくして、未來の社會に於ては、すべての人が修養の基礎として、必ず學習しなければならない學である。何となれば、元來哲學は人間學であつて、人間としては必ず一とより通じなければならない人間學である。ヨーロッパの教育歴史を見ると、中世以降近時迄リベラル・エデュケーションの中心を爲して居る者は哲學であつた。リベラル・エデュケーションは時代に依て變遷を見ても依然として授けらるることは變らず、哲學と宗教とを基礎として、人間としての修養を問題とせられることを云ふのであつた。故に西洋の教育の基礎は常に哲學であり哲學的修養であつた。外國の例を擧げるまでもない、我國の徳川時代の教育は、其の根柢に儒教といふ哲學が存したことは、明らかにヨーロッパのリベラル・エデュケーションと云ふことを同じくしてゐた。人間としての理性を根本的に徹底的に問題とせらることが一切の修養の基礎と考へら

た[illegible]

現代のポジチギズム乃至ユチリタリアニズムの教育に於ては[illegible]たい「實用的な無數の學習科目の開目だけに驚くべき程多い代りに、價値的な深味の在る事柄に對する考察は殆ど全く缺けてゐる。哲學は事物のエーゼンの學である。人間生活の最も高い立場から、全體的に事物を省察する學である。中途半端を嫌つて、本質の精髓に徹底しなければ止まない氣風を涵養する學である。人間性の最も中心的な最も精髓的な部分の開發を目的とする學である。人間性そのもの、問題に無上の價値を置いて、すべてを此の見地から批判することを教へる學である。故に種々な意味に於て現代の缺陷――ポジチギズムに固有な缺陷を補つて、これに新らしい生命を吹き込むものは、先づさしあたり哲學――哲學的修養であると思ふ。時代の物質化も、思想感情の惡化も、淺薄な思想感情の瀰漫も、根本的に言へば、眞の教育の中心ともなるべき哲學的修養を缺いて、たゞ開目ばかり多い實用的な知識を開發させた自然の結果であると言はなければならぬ。如何に聲を大にして時代の淺薄化を責め、如何に苦心して學校に於ける教科目を整頓し、如何に憤慨して時代の物質化を戒めたとて、先づ根本的に思想興味の向ふべき一層高い價値生活を哲學的に學習させないかぎり、すべての努力は到底無益に終りはしないかと思ふ。

哲學は理論的に高い眞善美の文化的價値を教へ若くは考へさせる學である。吾々はこれによつて如何なる意味に於てかポジチギズムを超越しなければならぬ。

斯くして哲學的識見の普及こそは、最も根本的な意味に於ての知識の普及である。哲學的識見の普及は、何等か他の實利のための手段ではなくして、直に人間生活の向上である。哲學的識見――即ち價値の問題は、それみづから最も高い意味に於ける人間生活の發達なのである。斯くの如き哲學の普及といふことと、若しくは常識化といふことが、果たして

實現さるべき可能性を備へたものであらうか。專門の哲學者さへ尙難しとする哲學をば、吾々は如何にして廣く民衆の間に普及することが出來るであらうか。此の疑問に對しても、私はむしろ一種の希望をもつてゐる。德川時代に於てさへ、儒教の哲學的精神は、決して單に專門學者の間に發達したばかりでなく、廣く當時の民衆の上にまで普及した。故に努力の如何によつて、哲學的知識の開發を廣く全般の上に普及することは、決して絕望的な難事ではないと思ふ。否現に今日の靑年は最早此の方面に向かつて漸く目醒めつゝあるではないか。眞智の要求は今や靑年の深い々々傾向ではないか。哲學なしに文化は決して產まれない。哲學なしに眞の人間生活は無いのである。

知識學としての認識論

（それの現代に於ける革命的再生及び發達の可能）

杉森孝次郎

一 最初の考察

どの時代の文化でも、一具體全としてのそれを分析すれば、そこにかならず多少の知識が見つかる。それは、ちやうど、任意にいかなる一人を採んで分析しても、そこにかならず多少の知識が見つかると同樣にだ。

勿論、知識は文化の全部ではない。ほかに藝術があり、經濟があり、政治があり、教育がある、またその他にも確實に意識されるあれがある、これがある、そして、それらは、おの〱、一文化または文化的一事實であることだけを考へて見ても、これは明白だ。

任意にいかなる一人を採んで分析してみても、そこにかならず多少の知識が見つかるといふ一事實と、どの時代の文化でも、一具體全としてのそれを分析すれば、そこにかならず多少の知識が見つかるといふ他の一事實との間には、單なる形式的類似があるだけではない。その形式的類似の奥に、實質的共通がある。どうしてかといふに、そも〱、文化は、最も直接に人の内なる現象であつて、いかなる意味に於ても人から離れた、また離れて成り立ちうる事柄ではない。人を抽象的に考察する有意義な一方法、及びそれの結果として、人的自然即ち人性と、文化とか、發見され、及び確

認されるといふ關係がそこにはあるのだ。自體的には單一なる過程、變化、成長にほかならないものが、それの比較的早期態が人性として識別され、それの比較的後期態が文化として識別されるのだ。因果といふ意識的に機會を與へるならば、人性は因であり、文化は果だ。知的本能または好奇心が先づ動き、研究が續いて動き、學說または理論が發生する場合は、その一例だ。この場合に、われらは、その知的本能または好奇心を人性と呼び、研究殊にその次期の成長である學說、理論を文化と呼ぶ。更にまた、その學理の實際的應用としての技術、その技術の次期的變化としての工作物、これらをも、われらは、同樣の法則にしたがつて文化と呼ぶ。そして、その實際的應用に直接に先き立つ變化としての利殖欲、消費欲等をば、人性と呼ぶ。勿論、この關係は、知識が代表する文化の場合に限らない。

二　近代文化に於ける知識の特異的性質及び關係

知識は、最も制限して考へても、人と共に始まつたといふことが出來る。いまから七千年前に文化の花を咲かせた埃及の場合を考へることは、知識の歴史がいかに古いかを知る方法としては、餘りに科學的でないことが明白であるほど、これは古い。

しかしながら、近代文化に於ける知識は、それに先きだつた、そして、現代が知る便宜を持つ限りに於ての、すべての時代に於ける知識との比較に於て、極めて鮮明な、確實な特徴を示す。

この特徴は、最も簡單には、科學的といふことばで呼ぶことの出來る性質のものだ。實驗學的、或ひは、創造的綜合または新綜合學的といへば、それは、一層完全に表現されたことになる。

經驗は、これの出發期に於ては自體的だ。それの到達期に於ても、それは、また、ただ發達したかたちに於てといふ

[illegible]、さうある必然がある。

知性が、明確に一とつの分業化して、即ち人性に於ける他の非[illegible]的狀態、したがつて代表的には情意的なもの[illegible]に獨立し、または職業別され、機能別されて、經驗を、實質に於て保存しまたは出來るだけ豐富化すると同時に、形式に於て削除しまたは出來るだけ單純化する努力と訓練を重ねるにしたがつて、ここに科學が發生した。

科學の方法は、したがつて、必然的に、分類であつた。また、分類の成績として作りいだされた多くの概念の統一化、體系化、組織化であつた。この最終の過程は、經驗の綜合を意味する。それは、したがつてまた、經驗の再具體化を意味する。

經驗の再具體化は、それがもしもそのことばの或意義にしたがつて行はれるならば、學の理想を完全に意味する資格を持つ。しかしながら、學的努力は、それが科學時代に入つてからでさへも、經驗の再具體化を、そのことばの他の或意義、字面通りの意義にしたがつて行ふもので、要するに、もしくはすくなくとも多少、あつた。

經驗の再具體化を字面通りの意義にしたがつて行ふとはなにか。それは、經驗の過去を知ることによつてそれの現在を再認することをいふ。これが私の意味であつた。因果といふことばを便宜的に使ふならば、また現象といふことばを同樣にさうするならば、眼前の現象を、それの原因を見究めた眼をもつて再現することを、それは意味するといふてもいい。現象の內に、存在、事件、出來事等をすべて入れて理解することは自由だ。

字面通りの意義に於ける經驗の再具體化の場合にあつては、かくして、一とつの經驗を理解するために、しかも完全に理解するために、必要にして且つ充分たる方法は、それの過去を知るにあり、且つその一とつの經驗なるものが、そ

の場合にあつては、事實上、主として過去及び現在の經驗に限られてゐた。それは、かくして、要するに、すでに及び現に與へられたる經驗を、それだけを、その範圍内の或ものだけを、單に寫眞的に、或ひはまた複製寫眞的に認識する、もしくは理解するだけの仕事だ。

歐洲近代の、しかも十七世紀に生きた新思想家であつたスピノーザにさへも、いまいうた意味に於ての經[illegible]なる再具體化に、かれの要求、したがつて滿足が制限されてゐたことは、いはゆる科學的精神が、それ自身、いかにまた時代の進歩と共に、經驗の增加と共に、聰明の發達と共に、たとひ成長的にであることはたしかだとしても、變化してやまない一過程であるかを想起させる一事實として見ても意義深い。それは、しかしながら、經驗に對する創造的綜合即ち新綜合を主として意味するかたちの科學的精神及びしたがつて方法は、たとひフランシス・ベーコンの如き比較的先覺者はあつたとしても、近代初期からの顯著なる發達ではなく、産業革命以來の現象であり、いな實に、一とつの時代的特徴と見るべきほどの現象としては、現代に於てさへ極めて不完全な、一部分的な發生及び發達を始めてゐるにすぎないといふ事實を、思想發達の徑路及び速度の見地から理解させる一材料として見て殊に意義深い。

同じ社會に於ける傳統的宗教の哲學的部分即ち神學が　それのいはゆる創世主觀念に於ていかに過去崇拜的であつたか、また、プレトーほどの聰明者でさへもが、恐らくは時代と社會の制限を自然に受けた結果として、かれの形而上學殊に追憶説に於て、いかに過去崇拜的であつたか、更にまた、十八世紀のカントでさへもが、たとひかれが屬した特殊の民族的、社會的習性、環境、素質の作用としての部分はどんなに大きくそこにあつたとしても、かれのいはゆる先驗的觀念に於て、いかに同じく過去崇拜的であつたかを想起すれば、スピノーザの場合は、史的通則の長い、廣い世界に於ける一特殊例にほかならなかつたといふ性質がいよ〳〵明確に認識される。

[illegible]見されるすきな要素だけを保存するまたに發生させる方法、たゞ、それと一緒にして、ここに見出されないもの[illegible]排除するまたは減退させる方法を採用することによつて、可能として生きてゐる要素を作り出すことをこの比較に於て[illegible]は、知性だけの目的からいうても、また全人性の目的からいへばなほさら、不完全な價値だ。知性だけの目的からいうてすら、それが比較的に不完全な價値であるわけは、その方法に依つては、與へられたる環境、事情、關係下に於ける當面の認識對象の性質が知られるだけだ。與へられうる環境、事情、關係下に於けるそれの性質は、その方法に依つては、全然知られない。かくして、その方法に依つては知的好奇心だけすらもが比較的に不充分に滿足させられるほかない。もしそれ、全人性の目的からいふて、それがいかに不完全な方法であるかは、それに依つては、知識慾が滿足させられないだけでなく 充分なる知識を利用することによつて、或ひは、充分なる知識を先づ持つことによつて、始めて可能にされる廣義生活改善が、それの最初の機會をすら與へられないことにある。

その方法に依つては、それが最も徹底させられた場合を想像して見ても、スピノーザに於けるやうに、徹底的宿命觀、及びそれの享樂が結果するだけだ。しかしながら、徹底的宿命觀、及びそれの享樂は、すくなくとも人性の組織及び本質から考へて、實は、徹底的には成り立ちえない必然がある。情意自身の最も直接の經驗を、それは忘れ去つた。もしくは、算外に置いた考へにほかならないからだ。それは、たかだか、傍觀者的認識の完成にすぎない。それは、決して、當事者的認識の中核はおろか、外殼にすら觸れない有限物だ。けれども、傍觀者的認識と當事者的認識との對比に於て、前者は一派生であり、後者が根本であることは、なに人も即ち一人の例外もなしに、かれ自身の生活の最も實在的な、最も代表的な部分に於て、最も明確にこれを證明する。最も眞劍な現實生活の當瞬間に於ける自己の人生觀、

世界觀がなにであるかを省察して見るならば、或ひは、それがなにであつたかを廻想して見るならば、これは、なに人によつても、すぐに發見され、確認されるほかない事實だ。

プレトーの追憶説にしても、もしもかれに、ニーチエにあつたやうな「永久再來」的假定でもあつたとするならば、過去崇拜が、意味に於て理想主義たる資格を持ちうるわけだが、かれに於ては事實なかつたらしいそんな假定がかりにあつたとしたところで、そんな假定にもとづいて、もつとたしかな現實の經驗を解釋しやうとするそのことが、實はすでに、現實の經驗から學んだ知識を、ひまにまかせて、單なる知的遊戯本能の道具に使ふことを意味する。その假定そのものが、現實の經驗を假定してゐる。

プレトーの社會は、物的生産者の生活、したがつてまた職工生活を、階級的に微賤視した社會であつた。それゆゑに、その社會の代表的聰明は、それに含まれてゐる意味を充分に發見するためには使用されなかつた。その社會に於ける比較的聰明者は、工作品に關して、それの生産者ではなく、專ら消費者であつた。新たなる變化を自然に與へることによつて、望ましい新たなる次期の變化に機會を與へる經驗は、かれらには缺けてゐた。かれらは、造られた家屋に住み、造られた殿宇を嘆賞し、造られた舟に安坐し、造られた橋を悠歩し、造られた什器を使用し、造られた衣服を着用するだけの經驗を、それらのものが關する限りに於ては、持つにすぎなかつた。かれらには、現在を理解するために過去を知る興味を觸發される機會は充分にあつたが、現在に具體的變化を與へることによつて將來を望み通りに形成する興味を刺戟される機會は甚だ不充分であつた。觀照がかれらのいのちであつた。創造はかれらにとつては既成の事實であつた。原因は、かれらにとつては、さかのぼつて探求すべきものであつて、われが、いま及び將來へかけて造りいだすべきものではなかつた。原因を造りいだすための勞を拂ふことによつて、さもなければ生じないにきまつてゐる結果を生じ、

てゐた。

けれども、既成の結果は、可能としての未成の結果に對する足場であり、すでに與へられ終つた原因は、いまから與へられ始める原因の選擇に對する動機力及び抑止力であることだ。全人性に於ける、そして終局に全體化された、知性から見られたそれらのものゝ統一的性質だ。

同じ物的生産の世界に於ても、農業的生産には、殊に近代的科學、技術、機械發達以前の近い及び遠い時代のそれには、無生物的生産との比較に於て、人爲力は常にすくなくそれの原因をなし、自然力が常に多くそれの原因をなした。農作的經驗は、工作的經驗に比して、創造的經驗として、遙かに不完全であつた。それは、實に、それの成功の原因をも、またそれの失敗の原因をも、人力以外の自然力に持つ部分が多かつた。その部分に於てそれは獸的であつた。工作的經驗は、反對に、それに於ける人爲力に於て顯著であつた。

その如き工作的經驗が、社會組織的に、卑屈した位置に階級づけられ、したがつてそれ自身のいはば包まれたる光りを、自由に周圍の聰明にむかつて供給することが出來なかつたことは、創造的學術の發生を、現にそれがなされたよりも早く可能にすることをさまたげた、すくなくとも最大事情力の一であつた。

歐洲の近代が始まると共に、その社會に於ては、工作的經驗に對する評價も比較的に一新され始めた。けれども、工作的經驗が、社會的聰明の、すくなくとも最大集中點の一とされ始めたのは、十八世紀末に於ける、いはゆる産業革命と共にであつた。またそれ以來の産業及び産業的文化の發達と共にであつた。

いはゆる勞働者の身分こそ、階級的に微賤なものとして位置づけられたが、工業と工作物とは、いはゆる支配階級い

興味と習性をほとんど完全に支配する歷史が始まつた。この歷史は、それの開始以來、ひとへに增勢しつゝ今日にだ。工業としての產業は、實に、現代を最も代表的に特徵づけるものとさへなつた。またその勞働者即ち工業勞働者の階級的微賤も、かれらの階級的勢力の增大と共に次第に漸滅して來た。工業勞働者は、現代に於て、すでに昨おつてか現實に支配階級である程度にさへ增勢した。したがつて、工業勞働者の生活經驗は、閒閑の、或ひは殘餘の社會からの認識的及び評價的注意をも、非常の勢ひに於て增して來た。そして、その工業勞働者自身の習性は、最も鮮明に機械力的、實驗科學的、實感的なものとすでになつてゐる。農業時代に發生し、工業時代の消費階級によつて保存された傳統的宗教が、現代の工業勞働者の間に、最も鮮明にそれの勢力と信用を失墜してゐることは、またなほ失墜しつつあることは、これを證據立てる一現象だ。

工業勞働者自身の知識生活、思索生活を決定するかれら自身の習性力が實驗科學的なものとしてすでに發達してゐ、かれらの社會的勢力が社會の殘部からの無視と蔑視とを許さなくなり、かれらの生活經驗の精神と方法が殘部社會の精神と方法との上に陰に陽に不斷增進的に醱酵力、傳染力、感化力として作用し、別にまた、技術家、科學者、工場吏、企業家、それから單なる消費者に至るまでもが、直接に、間接に、工業を利用しつつ、それの結果を享樂しつゝ、不知不識の間に工業的生產の方法に同化され、いはば風土化される過程が發達した。かくの如くにして、物質學の世界にだけは、本能的及び意識的に、單なる觀察に一步を進めた實驗的、創造的方法が、ほとんど代表的に確設された。

近代に及んで、そして殊に現代に及ぶにしたがつて始めて顯著な現象となり、その以前のすべての時代を通じてほとんど皆無に等しかつたものが、一とつでもあるとするならば、また、さうしたものは算へ切れぬほどの多種に於てあるが、そのなかに、これこそはと、最も代表的に選擇される資格のあるものが一とつでもあるとするならば、それは科學

[illegible]

も、政治でも、經濟でも、法律でも、それから日常の何きはいふまでもなく、すべて近代に[illegible]しかも[illegible]けは前代を通じて未發達であつた。單純にかういひかへつたならば、近代の新發達と見るべきものに、民主主義、資本主義、それからデモクラシイとしての政治もあるではないか。工業、資本主義、社會主義としての[illegible]もあるではないか。また例へば、神話的形而上學としての哲學や、奇蹟、天啓、陰謀、教團完全人格、經典完全[illegible]等を[illegible]した宗教が衰滅に赴いたといふ、消極的ながら、近代的新現象と見られるものがあるではないか、映畫が劇の領分を侵して來たではないか、いはくなに、いはくなにといふ反證が注意されるかも知れん。しかしながら、國民主義及び國際主義に、交通機關の發達に最も多く負ふ現象ではないか。デモクラシは、工業勞働階級が知識づけられない限り、啓蒙され、自覺しない限り、決して發達を可能にされなかつたにきまつてゐる現象だ。即ちそれは工業勞働階級を條件とした、また、する現象だ。工業、資本主義、社會主義は、その内の第二、第三は、要するに第一の工業によつて代表されうるものにほかならないから、自明的に科學の產物だ。舊式哲學と既成宗教との衰滅は、明白に科學の作用にほかならない。そして映畫劇は機械生產の一種にほかならない。

科學は、實に、近代文化の根本生命だとさへも無理なしにいひえられる。この科學的新文化の發生及び發達が、民族的、種族的、人類生活的再變化を最も有意義に機會づけた歐洲の近代初期、及びその直前期に於ける史的新變化に最も深く負ふ一側面を持つ事實であつたことはいふまでもない。科學は近代と共に始まつたといふことが出來る。或ひは、近代は科學と共に始まつたといふことさへ出來る。しかしながら、科學と近代生活との關係は、渾沌に始まり、開明に漸次移り、產業革命を一轉期として、科學が文化の全野を浸潤するに至つた。そして、それがさうなる迄の徑路に、近

代が最初から胚胎した創造力が、時々に較著なる科學的成績を産み、それが反動的に時代のなほ鬱結してゐる想像力に解放的刺戟を與へ、かくして、因が果となり、果が緣となつたかたちの繰り返へしであつた。けれども、廣義工作的經驗及び生活は、勿論手工的形式に限られたものではあつたが、近代の初期からして、社會的、文化的に改釋される傾向を示した。その傾向が熟して産業革命となり、これが、科學的精神及び方法の發達が關する限り、史上最大の緣となつて、自然科學だけは、現にわれらが目撃するやうな確實な歩武を示すに至つた。

農作的經驗は、人力をもつてしてはどうすることも出來なかつた順風順雨や、暴風暴雨のために成功と不成功を餘りに著大に決定される關係があつたことに制限されて、人及び社會が、因果關係を、純粹に將來の世界、意志の世界、可能の世界に認識するための材料としての資格には、本質的に缺けてゐたことは、前に簡單ながら考察を試みた通りだと假定する。

しからば人間關係の經驗、即ち廣義に於ての社會的經驗は、どうして、因果關係もしくは變化または過程の將來的可能を、早く確認させる材料及び機會として、古代に於てさへも、人類にむかつて役立たせられなかつたか、といふ一問が、なほ殘る一問として注意されるかも知れん。しかしながら、人間自然は、殘餘の自然即ちいはゆる單なる自然に比して、それの性質が限りもなく複雜だ。因果關係の必然的側面と可能的側面とが、人性を對象とする觀察、考究の場合に於ては、全く明確であると同時に全く不明確だ。その經驗には、全く明確な部分があると同時に、その部分の直接關係範圍内に於てさへ、全く不明確な部分がある。戀愛はそれの極めて單純なる一例だ。なに人も、一特殊の戀愛を、したがつていかなる戀愛をも、即ちすべての戀愛を充分に一般妥當性ある概念のかたちに於て、それのすでに働き終つた原因にしたがつてさへ理解することは出來なかつた。ましてなに人も、將來的變化即ち可能としての戀愛を精確に豫測

す[illegible]

現はれる。といふやうな經驗は、日常の場合に限らず。人間的[illegible]

ない。因果關係の全態を。即ち變化の過去的過程と將來的可能性とを[illegible]

に、いま注意したやうな一事情だけによつてさへも、社會的經驗を[illegible]ことはない。

勿論、人的自然を對象とする經驗、即ち社會的經驗の場合に於ては、經驗の自由な[illegible]的、慣習的、人間關係的に制限されてゐる。そこには言論的、文章的發表を機械及び直接の目的として研究し、思索する自由さへも制限されてゐる。またそこでは、制度、慣習、人間的關係が、研究、思索の自由を、その意志をさまたげるかたちに於て制限するだけでなく、研究、思索の自由が與へられてゐる範圍內に於てさへも、人々は、習慣的に、ほとんど無意識的に、かれらの考へかたを、かれらの社會的環境としての制度、慣習、人間的關係によつて最も底深く決定される。かれらが意識的に自由研究、自由思索として營む經驗が、實は、かれらの社會的環境が、かれらを道具としてのかたちに於て、自己保存を營むことを意味する現象にほかならない。かれらは、かれらの研究、思索の不自由を強制されるだけでなく、もつと根本的に、したがつて無意識的に、かれらの研究、思索の自由を強制される。プレトーやアリストートルが、奴隸制度に對するかなりに「良心的」な辯護者であつたこと、ヘーゲルが、すくなくとも或程度までは同樣に良心的にかれが屬した國家の論理化的辯護者であつたことは、これを例證する無數に多くの現象中の或ものにほかならない。

十九世紀以來の制度、慣習、人間的關係に最も深い、強い、廣い變化を與へたものは工業だ。その工業が科學を原因的變化とするそれの結果的變化以外のものではないが、その工業は、さらにまた、科學的精神及び方法に一層深い、強い、廣い新變化を與へる過程を始めた。そして、その過程が、それの將來的可能のかたちに於て、そして、それに對す

る選擇の自由が現代に屬する限りに於て、現代の聰明に對する最大問題の一を構成する。

勿論、工業の發達が聰明にすでに及ぼした、及び現に及ぼしつゝある變化が、すべて、そのまゝの將來的保存をあたひするものではない。例へば從來の因果觀に代ふるに變化または過程の概念をもつてする、像徴的にいうてダーヰンの進化說發現以後の、また最近代に於て殊に顯著な、傾向の如きでさへもが、全然批判の餘地なきものではない。

因果關係を將來的變化の可能に對する選擇のかたちに於て理解する習性が、歐洲に於ける近代初期からの手工業的經驗の發達によつてすくなからず助成されたことは、過去の事實であると同時に、なほ將來に發達させる意義及び價値を包藏する事實だと考へる。產業革命以來の生產方法は、それが機械的、集團的、分業的、組織的である關係上、生產に從事する各一人からいふならば、かれは生產過程に於ける一小部分に參與するものにほかならない。また機械そのものにしても、多くの場合に、例へば鐵道の如きに於ては、全線路に於ける任意に注意された一短間斷部分の如きは、實に悠久なる一過程內の小部分にほかならない。各職の從業者の經驗も、同樣にさうだ。結果に於て簡單なる製品も、それの生產過程に於ては、甚だしば〳〵甚だ複雜だ。普通の衣類の如きにしても、それの原料狀態から、それの店頭に陳列される完成狀態に至るまでには、恐らくは十指をいくたびも折り算へねばすまない分業的過程を經過する。工業は、この見地から考察すれば、流るゝ水のいづこからともなく來り、いづこへともなく往く光景を聯想させるに充分なほどにも流動的、變化的、不斷移行的だ。

しかしながら、それがさうあるからというて、ヘラクライトスの哲學を、そのまゝ全部の眞理として復活さそうとするかの如き企てには反省が缺けてゐる。實に、現代が示す最大不聰明的特徵の一は、機械のための機械、生產のための生產、組織のための組織といふ習性的思索方法にあるではないか。機械は、それがどんなに長く延び、廣く擴がつてゐ

[illegible]ない。それ以上の位置は、充分なる理由によつては、既にして構成に與へらるべきでない。同様に、全體は、[illegible]なに複雑な過程に分かれ、どんなに廣汎なる組織を條件としやうとも、消費を明確に目的とする場合に於てのみ可能だ。組織にしても、勿論、それ自身に結論的存在理由は決してない。現代に於て、ヘラクライトスの變化哲學が支持される餘地がある程度に於ては、その反對のパルメニデスの不變哲學もさうされる餘地があると考へる。ひとへに變化を信ずる立ち場からしては、變化といふ概念的判斷が構成され、持續的に信用される可能もないではないか。

現代に於ける變化哲學的、過程哲學的傾向内の或ものは、組織的機械の運轉に於ける一小部分に注意を集中する分業的從業者が、全運轉の意義を明確に意識する機會を持たず、機械的にその分業に自己の全聰明を習性づけられ、吸ひつけられ、捲き込まれてしまふ想像圖を現實にしたかたちだ。假りに或勞働者がその如き場合を現實に自證したと想定しても、それは同情すべき、理解しえられる事柄だが、思索を專門とする分業的哲學者が、そのやうな場合をかれの事業に於て自證したとすれば、現代の工業が現代の聰明即ち知性に及ぼした影響がいかにも深徹し、いかにも遠達したことに注意せざるをえないと同時に、その如き學者、思想家が代表しうる限りの現代の聰明が、またいかに薄弱なものであるかに注意せざるをえない。

工業全盛の社會と時代とに、プラグマティズムが發生することは極めて可解だが、工業者自身が、工業を目的として工業に熱中する變態的習性を成長させるにしたがつて、哲學としてのプラマティズムが、現實を充分に味はひ盡くさずに、個性沒却のかたちに於て、抽象的に想念された結果の鎖を、さきからさきへと無限に追ひ進む、無目的の結果主義に破滅し終はる不健全徴候を形成し始める。かうなつては、折角の新哲學も、先驗主義や、義務至上説と、錯覺と無意

味と生活破壊とに於て相競ふものとなる。實驗派はどんなに愚であつても、それに含まれた根本意志としての統一的自我は、改變を要件として保存されるほかない。實驗派はどんなに賢であつても、その實驗に目的がなくては、そして、その目的は、單なる結果でもなく、單なる實驗自身でもなく、もつと綜合的に、そして充分に明確に現實の自我にないならば、その實驗は、あらゆる意味に於て存在理由なきもの、したがつて不可能事とさへ、なる。

世界をひとへに變化と見、過程と見去ることは、知性の或限られたる興味點から世界を考察する限りに於てはいかにも可能だが、全知性が、それの全人性に於ける分業的位置がなにであるかを、自覺した立ち場からしては、それは成り立たない。それはあだかも、運轉最中の狀態にある組織的機械の一小部分に分業的に注意を集中する一人が、その分業を自覺すれば、かれは、その全運轉に一定の目的があることをも知り、その全運轉に新動機を與へる必要と可能をも或事情下には知ることが出來、それに中止を與へる必要と可能をも、相當の事情下には、知ることが出來る如くにだ。

手工業時代の創造的因果觀が、機械工業時代の過程觀に、發展的に復活させられる努力が、現代によつて拂はれてよい理由が考へられる。個性沒却、自我忘失の習性が、現代の思索生活に於て支配的勢威を揮つて來た背景があるからだ。現代の思索的產物が、いかにも機械生產品的であり、工場製作品的であることも顯著だが、現代人の知る興味、考へる方法そのものが、機械の如くに單純に感覺的、知覺的、ひとへに常關係的なものであることは、それほどに顯著ではないかも知れんが、一層根本的な現象だ。藝術としての劇が、映畫によつて社會的、文化的、時代的に壓縮されつゝあるが如くに、哲學としての思索が、それの老朽形式が機械文化的習性によつて忘れ去られ、廢殘物扱ひされつゝあることは感謝されるが、それの人生的必要形式に於て、またそれによつて發生と發達を甚だ艱難にひされつゝあることは、すくなくともこれを多少とも意識しうる人々にむかつて、極度の反省と決意を催起せずにはすまぬ現象だ。

[illegible]

へた。しかし、これはいつまでも若く殘つて[illegible]

またに評價する效用價値を發達させた。機械製品と手工品とを、全く同じ目的から評價する[illegible]人々は、もう少しも

析され、もつと綜合された目的から評價する段階へ移つた。同樣の變移は、思惟方法に關して[illegible]ほと

んど必然的に期待される。

科學的知識の明確さ、機械的働力の確實さは、いかにもたつとぶべき性質だが、その科學的知識を產み、その機械的働力に機會を與へる根本作用そのものは、もつと純粹に人性的なものであつて、すべての明確と、すべての確實の根源としての、したがつて必然的に或かたちの溌溂性と、或意味に於ての神秘性とを多少帶んで見える、或ひは、見らいうる、ものであるほかない。實に、或かたちの溌溂性は、本質現の創造力の一特徵であり、或意味に於ての神秘性は、現在が所有する知識以上の知識の一特徵だ。

個性を同化する社會の力と、社會を同化する個性の力との比較に於て、自由を保護された後者が、自然に放任された前者の範圍内であることが、結論としては、かれらが文化と人性に必須であることを目的とする限り、常にその個性及び社會にとつて必要だが、現代の個性が代表する限りの現代の個性は、工業及びこれの直接の原因としての既成科學が代表する社會によつて同化されつゝある變化及び過程に於て、その反對の變化及び過程に於てよりも遙かに餘計に、特徵的に、顯著だ。

科學は近代知識の特徵であり、さらにまた、近代文化全體の最も代表的な特徵でさへあるが、これは、精確に云へば、物質科學が關する限りに於ての事だ。新綜合學即ち創造的綜合學としての科學は、或ひは、知識は、社會的、人性的、即

ちいはば精神的經驗の世界には、比較的に極めて幼稚な發達を、いまのところ、示してゐるにすぎない。

三　新綜合學の方法

人の場合にあつては殊に、かれが存在することはかれが生活することだ。そして、かれが生活することにかれが經驗することだ。

人は、なかんづく最もかれの知性に於て、成長を特徴とする生物だ。文化史がこれを證明する。すくなくとも知性に於て、不定限的成長力を内具する人の場合にあつても、經驗は或綜合性を具へて始まるほかないが、その綜合性は、かれの知性の發達にしたがつて、そのままのかたちに於ては保存されなくなる。最初の綜合が變化を受ける一形式は、それが分析されることだ。その分析は、勿論、その綜合に於ける特徴別に對する注意に始まる。

存在學と價値學とは、すでになされた、算へ切れない種々の分析の或もの、及びそれの結果として發達した。そして、存在學は存在學に、價値學は價値學に、それぞれ、特有の興味範圍に於て、或綜合としての經驗に出發して、分析の途にのぼつた。いはゆる記述學としての各種と、いはゆる規範學としての各種は、かくして機會をえた。

經驗は、しかしながら、それが人を主能體とするものであるかぎり、或綜合に始まらないことは出來ないが、そして、それが或分析に移らないことは出來ないが、なんらかのかたちに於て再び綜合に到達する傾向を、それが分析に移る時期に於てすでに充分に所有してゐる。

人が、かれの或單一なる經驗を、實體としての水と、狀態もしくは作用としての流れるとに先づ分析して、水が流れ

[illegible]

[illegible]なは、それの[illegible]性格に於ては、未だそれ自身に[illegible]ていなかつた[illegible]は、存在意識的經驗と價値意識的經驗とにわかれてはゐない。この[illegible]には、すでに[illegible]たいからだ。しかしながら、終局に、この分析に[illegible]範圍内に、[illegible]され、そして[illegible]屬的に、所有してゐる。

近代の特徴は知識の新發達によつて代表され、その新發達は科學によつて代表されるが、その科學は、本質上、範圍たる綜合全的經驗から、存在意識的經驗が明確に分析しいだされ、そして、その存在意識的經驗が、それ自身だけの範圍内に於て、分析と綜合との兩事業を、たしかに近代の最も代表的な特徴といひ得られるほどの空前的程度に發達されたことを内容とするものにほかならない。そしてこれに關して最も注意すべき一事は、その存在意識的經驗が、本質上、物質的存在を意味する經驗の範圍内に限られてゐた、及びいまもなほさうである、ことだ。

近代に及んで、及び近代が現代にまで進歩するにしたがつて、存在意識的經驗に對する知的完成の努力は空前の發達と成績を示したが、その存在意識的經驗が、人性的、したがつてまた社會的存在以外の存在だけを意味する性質のものであつたがゆゑに、近代及び現代に於ては、物質的存在を意味する經驗に對する知的完成の努力と成績と、精神的存在を意味する經驗に對する知的完成の努力と成績との間に甚だしい不權衡が成り立つてゐると同時に、時代全的、社會全的、個人全的知識生活の各の世界に、甚だしい不統一が現はれてゐる。かくして、例へば、最近代の、そしてすくなくとも一九一八年十一月までの、ドイツが一例である如くに、君主神權說的政治組織、道德組織、教育組織の目的的、意志的、良心的所有者である人々が、同時に、物質科學と、それの直接の一延長及び一適用と見られる工藝及び技術に同

する知識とに關しては、發達した觀察的、實驗的方法及びそれの結果の同樣に自發的、意志的、良心的所有者である、といふやうな現象もあり、また、現代のイギリスが一例である如くに、教祖完全人格說、經典完全眞理說を中心知識とする宗教的制度及び慣習の所有者である人々が、同時に、發達した自然科學及び機械文化の所有者である、といふやうな現象もある。あらためて特に再び注意するが、これらは、實に、現代の到るところに、算へ切れないほどの多種多樣の形式に於て、ただ多少の進化的程度別と具體的特徵別とだけを保つて、存在する一般的事實の二たつの例にすぎない。

政治、道德、宗教、教育、經濟、結婚等に關する現代の知識、即ち學說及び常識と、物質に關するそれの間には、なんらの人格的統一がない、したがつてなんらの社會的、時代的統一もないと概叙される。これが或不完全を意味する狀態であることはいふまでもないが、その不完全を完全化する責任は、第一に、その精神的存在に直接に關する知識の比較的未發達を救ふ努力を分業的に期待されべき位置にある人々にある。

そも〳〵、起點的經驗としての具體的經驗が、存在意識的經驗と價値意識的經驗とに分析されたことが、それ自身に完成的目的を有する事柄では決してなく、價値意識的經驗を立ち場として、その兩種經驗に新綜合を與へることを、それの完全なる理由とする事柄であつた。存在意識的經驗の世界が、それの特徵別にしたがつて分類され、それの內的一致關係即ち普通にいはゆる因果關係にしたがつて統一されるとは、價値意識的經驗の世界の自己保存的必要にそれの原因を持つ。價値意識的經驗の世界が、聰明に自己を主張するための條件、準備、方法として、存在意識的經驗の世界に、それ自身の手による分析と綜合を先づ完成させるのだ。けれども、存在意識的經驗の世界が、それ自身の手によつて、分析され、そして綜合されることは、それがどんなに充分に、完全になされても、それだけの資格に於ては、價値

意識的經驗の世界にとつては、[illegible]
て、しかもその世界の範圍内に於てさへ、存在に對する技術的努力が[illegible]
範圍が與ふる認識的滿足を除外した、その意味に於て或限られたる、滿足以上のものではない。

存在意識的經驗の世界が、これに對する知的意識の努力によつて、價値意識的經驗の世界にとつて、充分に有效な、しかし出來るだけ輕便なかたちに改作されて再現する。けれども、その努力が單なる知的完成を意味するものである限り、それがさう改作されて再現することは、價値意識的經驗の世界から見て、自己の全體を滿足させる變化ではない。これの最も實質的な部分は、その變化を、それ自身が必要とする更に新たなる變化に對する單なる出發點として採用する。それは、その變化をば、新綜合を先づ構想し、續いて行動的、現象的に作成する必要及び可能を、加工者に對する原料のかたちに於て、意味するものとして受け取る。

石油燈が電燈にまで變化した過程は、それに含まれた具體的意義を抽象して考察すれば、右の關係を再認させる資格に於て充分な一經驗だ。石油燈時代に、人はそれの石油燈の存在、またはそれの使用といふ一の具體的經驗を多少分析した。その結果、その經驗は、いくつもの性質に、觀念的に、區別された。その性質の或ものは石油燈の存在理由であつた。即ちそれの目的または機能であつた。石油燈は明白に一とつの人爲物だから、その目的または機能は、それを使用する人の立ち場からしてのものであることはいふまでもない。さうすると、石油燈の價値は、即ち目的または機能は、日沒後の人間の世界を出來るだけ太陽に代はつて照らすことだと知られる。石油燈には、しかるに、その機能に結合した性質として、人にとつて多少望ましくないものもある。例へば、光力が弱いこと、風力に堪へないこと、芯を淨めに手數がかゝること、といつたやうにだ。そこで人は、與へられた、或ひは、すでに成り立つてゐる、一とつの經驗として

の石油燈及びそれの使用を分析して、その結果として見つかつた諸要素または諸特徴を、もとのかたちに再び綜合するだけでは滿足しない。機能としての光力をば出來るだけ充分化してまで保存し、望ましくない結合的性質をば極小限化する欲想をかれは先づ內に形成する。これに、かれの他の經驗の分析からえられた性質が、かれの觀念の世界だけに於て先づ結び付けられて、石油燈以上にも照らす、そして石油燈よりも無害な人工燈といふ一とつの觀念的新綜合が形成される。それに實驗が續き、その實驗が成功した限りに於て新人工燈が物質の世界に機會をえる。

すなはち、最初の具體的經驗に對する分析は、或る新らしい具體的經驗を成り立たせる材料として使はれたことによつて一とたび最後的に安定する。その時期に達するまでは、それが異なる知識態に安定を與ふる可能を別にして考へる限り、それはひとへに過程狀態にある。ただ、その過程狀態には、或安定狀態が、すくなくともそれが或過程狀態として無限になほさきへ續く過程內の一部にすぎないといふ意識がありうるよりは、確實に有力に目的意識としてありうる。

もしも人工燈の場合に示されただけの、それに相當する程度の、分析、原形的再綜合、新綜合の過程的三特徵を識別させる創造學的方法が、人性的、社會的經驗にむかつて使用されるならば、そこに、生活の物質關係的側面に於ける改善、進步と權衡の取れた改善、進步が、生活の精神關係的側面に出現しないことは出來ない。

しからば、經驗の新綜合を目的とする知的努力としての學は、人性的、社會的經驗の世界に於て、いかなる例證または例想を與へうるか。

その一例證または例想を、われらは、いはゆる資本主義の場合にも容易に發見することが出來る。

近代の產業は、資本主義のかたちを取つて出發した。それは、即ち產業は、また多くの場合に、資本主義のかたちを取つて現存する。具體的經驗としての資本主義は、具體的經驗としての產業と、近代及び現代の多くの場合に於て同一

だけだ。[illegible]としていはれるに、すでに[illegible]しての近代の資本主義は、それに於ける所有權、したがつてまた[illegible]權、更にしたがつてまた[illegible]要素と、それに於ける生産方法的要素とに分析される。そして、その所有權または所有方法はいはゞ私有主義的であり、その生産方法は組織的集團力的であることが、同時に或ひは續いて認識される。こゝまでは一とつの存在判斷が、存在意識的經驗の世界に於て、それ自身の手によつて容易に導かれる過程だ。しかるにこの過程の終點に對して、價値判斷及びそれの理由意識としての價値論理が容易に發動する可能性がある。その存在意識的經驗は、その主能[illegible]である、そして同時に價値意識的經驗の世界の所有者である個人、社會、時代にむかつて或不安定狀態を機會づける可能性がある。前者は後者に或變化を與へる。すでに現はれたその變化の一形式は、組織的生産方法は保存をあたひするが、私有的所有方法は改廢をあたひするといふ意味を帶んだものだ。そこで現存の資本主義としての産業から、生産能率だけを選擇し、現に所有權ある人々からはその所有權だけを選擇し、現に所有權なき人々へはその選擇した所有權を分配するかたちの觀念的新綜合が先づ機會をえる。産業の公營乃至自治の理想が、かくして、先づそれの觀念的機會をえる。續いて、もしもその觀念的新綜合に對する、言論、文章のかたちに於ての、主張、批判、研究の社會組織的自由が充分に準備されてあるならば、その觀念的新綜合は、功果に於て、物質科學の場合に於ける實驗に比される新過程に移り進むことが出來る。

資本主義としての産業の場合はただの一例にすぎない。なに々々主義としての政治組織、教育組織、家庭組織、宗教組織等のすべての場合に、同樣の關係がある。

私はいま、ついでながらのかたちに於て、—人性的、社會的存在を直接に對象とする研究が、物質的存在をそれとする

の石油燈及びそれの使用を分析して、その結果として見つかつた諸要素または諸特徴を、もとのかたちに再び綜合するだけでは滿足しない。機能としての光力をば出來るだけ充分化してまで保存し、望ましくない結合的性質をば極小限化する欲想をかれは先づ内に形成する。これに、かれの他の經驗の分析からえられた性質が、かれの觀念の世界だけに於て先づ結び付けられて、石油燈以上にも照らす、そして石油燈よりも無害な人工燈といふ一とつの觀念的新綜合が形成される。それに實驗が續き、その實驗が成功した限りに於て新人工燈が物質の世界に機會をえる。

すなはち、最初の具體的經驗に對する分析は、或る新らしい具體的經驗を成り立たせる材料として使はれたことによつて一とたび最後的に安定する。その時期に達するまでは、それが單なる知識慾に安定を與ふる可能を別にして考へる限り、それはひとへに過程狀態にある。ただ、その過程狀態には、或安定狀態が、すくなくともそれが或過程狀態として無限になほさきへ續く過程内の一部にすぎないといふ意識がありうるよりは、確實に有力に目的意識としてありうる。

もしも人工燈の場合に示されただけの、それに相當する程度の、分析、原形的再綜合、新綜合の過程的三特徴を識別させる創造學的方法が、人性的、社會的經驗にむかつて使用されるならば、そこに、生活の物質關係的側面に於ける改善、進歩と權衡の取れた改善、進歩が、生活の精神關係的側面に出現しないことは出來ない。

しからば、經驗の新綜合を目的とする知的努力としての學は、人性的、社會的經驗の世界に於て、いかなる例證または例想を與へうるか。

その一例證または例想を、われらは、いはゆる資本主義の場合にも容易に發見することが出來る。

近代の產業は、資本主義のかたちを取つて出發した。それは、即ち產業は、また多くの場合に、資本主義のかたちを取つて現存する。具體的經驗としての資本主義は、具體的經驗としての產業と、近代及び現代の多くの場合に於て同一

なるけれども、生產方法としての資本主義は、すでに[illegible]、[illegible]

しての經濟の資本主義は、それに於ける所有權、したがつてまた所有權、更にしたがつてまた[illegible]的要素と、それに於ける生產方法的要素とに分析される。そして、その所有權または所有方法はいはば[illegible]的であり、その生產方法は組織的協力的であることが、同時に或ひは續いて認識される。こゝでは一とつの存在意識が、存在意識的經驗の世界に於て、それ自身の手によつて容易に導かれる過程だ。しかるにこの過程の終點に對して、價値判斷及びそれの理由意識としての價値論理が容易に變動する可能性がある。その存在意識的經驗は、その主[illegible]である、そして同時に價値意識的經驗の世界の所有者である個人、社會、時代にむかつて或不安定狀態を機會づける可能性がある。前者は後者に或變化を與へる。すでに現はれたその變化の一形式は、組織的生產方法は保存をあたひするが、私有的所有方法は改廢をあたひするといふ意味を帶んだものだ。そこで現存の資本主義としての產業から、生產能率だけを選擇し、現に所有權ある人々からはその所有權だけを選擇し、現に所有權なき人々へはその選擇した所有權を分配するかたちの觀念的新綜合が先づ機會をえる。產業の公營乃至自治の理想が、かくして、先づそれの觀念的機會をえる。續いて、もしもその觀念的新綜合に對する、言論、文章のかたちに於ての、主張、批判、研究の社會組織的自由が充分に準備されてあるならば、その觀念的新綜合は、功果に於て、物質科學の場合に於ける實驗に比される新過程に移り進むことが出來る。

資本主義としての產業の場合はただの一例にすぎない。たに々々主義としての政治組織、教育組織、家庭組織、宗教組織等のすべての場合に、同樣の關係がある。

私はいま、ついでながらのかたちに於て、――人性的、社會的存在を直接に對象とする研究が、物質的存在をそれとする

研究同樣に、實驗的方法を使用しうるための條件に論じ觸れた。この點は、しかしたがら、人性科學、社會科學、即ち廣くいはゆる精神科學にとつて、それの成立または不成立、發達または不發達を最も根本的に決定する一生命點だ。

人を實驗室に入れて、かれを怒らせたり、恥ぢさせたりすることが、いかに人性を研究するための一方法として有價だとしても、出來ない話であることはいふまでもない。產業公營論者があると同時に、同じ社會に、產業自治論者がある場合に、籤引きに依つてなり、じやんけんに依つてなり、その內の一方に實驗を與へる可能も同樣に空談だ。いはゆる合法的公議即ち衆議と、相當に有力な直接行動とが、及び合法的强制とが、現代に於て、人性及び社會に關する觀念的新綜合が實驗されうるすべての可能だと概叙することが出來る。けれども、その內の第二方法は、通則として採用される資格はない。さうすれば、合法的公議と合法的强制とが、その可能の代表的全體だといふことになる。けれども、事實上、いはゆる合法的公議と合法的强制とが、人性、社會に關する觀念的新綜合に實驗を與へる機會または設備として、いかに制限された、不完全なものであるかは、多く考へて見るまでもなく明白だ。任意に現代の議會と政府とを選んでそれに一瞥を向けて見れば、それはすぐにわかる。議會と政府とが、現代に於て、すくなくとも社會經營が關する限り、人性的、社會的存在に對する觀念的新綜合に實驗の機會を與へる、または、與へない責任及び自由の最前線に立ち働らく社會組織的機能であることは無論だが、そしてその機能が、適當にそれを與へるしかたに於て實現される場合があることも無論だが、それは、適當には、また充分には、それを與へなかつたり、すこしもそれを與へなかつたりするしかたに於て實現される場合があることも、眼前の事實だ。そして、それがさうある多くの場合、或ひは、たしかにすべてのといひえられるほど多くの場合に於ては、その議會制度、政府組織と共に、言論の自由に於ける未發達が制度及び慣習として存在してゐる。

議會及び政府に、[illegible]。[illegible]、社會的、人性的實驗に[illegible]へあたへ[illegible]實驗に對する[illegible]に於て新たに[illegible]度及び諸種の努力だけによつては、或ひは、單なる[illegible]代表制の[illegible]によつては、[illegible]が實驗される機會は與へられないと、必然的には、結論される。

言論の自由は、それ自身、一とつの自治領をたは獨立組織として、內包的及び外延的に、出來るだけ保護される必要が、社會進步を目的とする見地からして絕對的だ。社會進步が少數者もしくは一人に始まるといふことは、今日では、もはや陳腐し切つた注意だが、それの意義は、また甚だ不完全に理解されてゐる。言論の自由に於ける制度的、慣習的未發達は最も有力にこれを證明する。

言論の自由さへ保護されてあるならば、いかなる少數者の、したがつて單一なる個人もの、社會、人性に關するすべての研究は、實驗される擬似的可能を享樂することが出來る。それが自由に發表され、自由に研究され、批判される過程がそこには機會をえるからだ。その過程の進行を待つて、最初に發表された意見は、それがほとんど現實に實驗されたに等しい功果を持つことが出來る。

物質科學にとつて實驗室が代表する位置を、社會科學、人性科學にとつては、言論の自由が保護されてゐる社會組織及び社會が代表する。言論の自由が、精神科學にとつての實驗だ。言論の自由が議會內にのみ限られ、しかもその議會內に於ける言論の自由も甚だ限られたものであり、實驗は、兩院を通過した案件だけに代表される現狀は、精神科學一般が、それの實驗室、即ち實驗の機會を持つてゐないといふ一層深い、廣い社會的現狀の一突起點にほかならない。

新綜合案の發表、その發表過程中に發見される自案の不完全、再認される自案の完全、發見され及び發明される指針

値、その發表に對する批判によつて機會づけられる反省、再主張としての再發表、これらまたはかうした過程が進行するあひだに、その案に對するその社會の聰明と注意が充分に使用される。そして、その案は、それが眞になにであるか、なにを意味するか、いかなる待遇をあたひするか、したがつていかに現實的形式に於ての實驗、即ちいはゞ執行または行政をあたひするか、或ひはあたひしないかが、社會的、人性的存在を研究對象とする場合に於て、物質的存在をそれとする場合に人間として出來る限りの近い、實驗的方法をその社會は使用したといふ實績がそこに現はれる。言論の自由は、それゆゑに、現代に於て、新綜合學としての社會學、政治學、經濟學、法律學、教育學、性關係學、倫理學等が可能にされるための一要件だ。それは、實に、單なる環境的一要件をもつて目し去ることの出來ない、それにとつての、むしろそれに於ける、本質的一要件だ。人性的、社會的綜合學の方法論は、それを意識的に充分に自認しない、即ち自身の組織内に確認しないことは出來ない。

言論の自由は、目的を、それの直接の目的を、研究に有するがゆゑに、即ち征伐または喧嘩に存せずして競技に存するがゆゑに、これを保護する方法は、意識的、努力的、強制的制度によつて代表されるよりも慣習によつて代表されるほかない。單なる制度力は、單なる司法力の如く、それをくゞる可能を豫想しないわけにゆかん。かくして、言論の自由は、それが確設される前に、社會の習性に對する愛知的、愛眞的方向への助成の努力を充分に必要とする。短氣な民族を、急に寛悠な民族に、氣質變化的に變化させる方法は比較的に絶望だが、恥と誇りの目的物と條件とを置きかへることは比較的に容易だ。わが封建時代の武士階級に於ける廉恥、體面の習性は、これを例證する一材料だ。

生産の方法は、經濟的生産が關する限り、そしてそれに於ける立法的、行政的、即ち要するに經營的部分でなく、單なる技術的部分が關する限り、すでに實驗的、創造的、即ち積極的形式に於て自由的になつてゐる。これに加へて、制

從つて若し[illegible]ならば、こゝに[illegible]

的とする、そしてこの目的を達成するために必要な方法をもつて[illegible]

實に、人がなにを、いかに考へるかを決定する勢力内に、その[illegible]の、その時代の、社會の性[illegible]、制度の

それとは、或深い注意をあたひする一件として存在する。制度のそれだけについてこの[illegible]にまた一瞥するならば、例へばカントの義務哲學に、破格なる專制的政治組織といふ環境因はなかつたか。その反對に、ベンタムの批評及び社會利福說に、放任主義的及び平和主義的社會組織といふ環境因はなかつたか。

實驗は、物質科學の場合に於ては、感覺及び知覺の世界へ、觀念、概念、學說、理論を投じて、それがいかなる感覺的、知覺的變化を、その世界に逃るかを見ることだ。感覺が、最初の、そして無意識的に、綜合されたかたちが知覺だ。知覺は一個の具體全としての物といふ經驗だ。その知覺がその物といふ直接經驗から離れて再現されたかたちが觀念だ。抽象の幕がこゝに始めて開く。觀念が類化されたかたちが概念だ。それは抽象の過程が更に進一步したかたちだ。實驗は、物質科學の場合に於ては、抽象の結果としての概念を、具象に還元する意味を、すくなくともそれの部分的關係として持つ。抽象が新綜合にまで進められた場合に於てさへ、それは、それの發生過程をいはゞ全然忘れてしまふことをば許されない。途中から脫線して、單なる空想に移ることをば、學の方法としては、許されない。

精神科學の場合に於ては、單なる五官的經驗としての感覺及び知覺は、條件的位置を與へられるにすぎない。精神科學の場合に於ける出發點は、存在經驗でなく價値經驗だ。それは、いはば内的感覺及び知覺だ。これを、そのことばの或適用にしたがうて、實感と呼ぶことが出來る。それは、同じくそのことばの或適用にしたがうて、理智的經驗と呼ばれることも出來る。或ひは、體驗といふことばを、それの或適用にしたがうてそれに與へることも出來る。

精神科學または價値學の場合にあつては、それの方法は、こゝで意味したかたちの實感に出發する必要がある。そして、その方法が、どんなに分析、選擇もしくは抽象、綜合の過程を進みのぼつて、一とつの理想の構成に到達しても、その理想は出發點としての實感を、及びその後の過程を常に明確に再認しうる、その意味に於て、自己の發生過程に對して責任を具足したものである必要がある。

感覺または知覺から實驗へ、そして再び感覺または知覺への物質科學的方法過程が、精神科學的方法過程の場合にあつては、實感から實驗へ、そして再び實感へといふ相應形式を取る。

實感に始まらず、また、及びしたがつて、實感に終はらない、或ひは歸らない精神學または價値學は、學としての資格を持たない。

神話、或種類のいはゆる形而上學、また或種類のいはゆる哲學から、充分に獨立しないすべてのいはゆる學は、その限りに於て、學としての資格に缺けたものだ。

學が實感に出發せず、したがつてまた實感に歸らない、或ひは實感に對する改認または改善に到達しない病態または變態は、社會に於ける學及び專門學の分業的發達に附隨する一可能でもある。學が分業化するにしたがつて、學者と素人、專門學者と門外者との間に交通の不充分が發達しうる。そして、專門學者に、かれら自身の社會を、單なる人日關係に於ても大きく發達させられて持つやうになりうる。いはゆる樂屋落ちの可能もこゝに發達する。そして、かれらは、かならずしも實感に對する發生的及び目途的責任を持たず、單純に、手數入らずに、既成の觀念、概念、理論から出發して、それらのものゝ範圍内に於て、單なる再認、及び多少の改認をなすだけの事業に滿足的、良心的に終りすることがある。現代に於ては、すくなくともいはゆる哲學、道德學、及び諸般の社會科學に於て、この不健全が顯著だ。

局はこも／＼、現實經驗の必要に關係して、それを[illegible]
ひは責任を取るだけの知的勇氣及び良心に不足してゐるために、たゞ[illegible]
ひとして、愚にもつかぬ作品を生産して、なほかつ、結構これの價値を見いだし[illegible]
て、かれらの或ものまたは多くは、愛好、愛賞の美名にみづから欺むき、世間をもいつはる。かれらは、實感に出發せず、實驗過程を履んで再實感に到達することを、かへつて低學視し、學界の不良分子視する。そして、みづから、多くの同類者と共に、高く俗界を超越したプレートニズム氣取りのやうな、カントの物それみづから氣取りのやうな言動及びセンチメントに耽る。繰り返へして注意するが、改作と創造を抜きにして知られうる限りの性質と關係は、たかの知れたものだ。さうして滿足させられうる限りの知識慾も、したがつて、たかの知れたものだ。

理論または純理と實際との間に、世間が沒批判的に用語したがつて意味の使ひわけをなす一般的習慣の如きも、これに關聯した現象だ。純理論としては賛成だが、實際論としては賛成出來ないといふやうなことばが、權威を自明的、當然的、また不可抗的に帶んで通用することは、そも／＼、學と實際との間なる關係を誤解してゐることを證據立てる。理論殊に純理ともあるものは、實際の意味としてこそ成り立て、實際のそとに成り立つことの出來るものでは決してない。事實が即ち實在だ。實感が即ち價値だ。街頭は書齋から眺望されたり、批判されたりすることの出來るものではなく、街頭に内在してゐる最も實在的な、最も結論的な性質が即ち書齋であるのだ。理想は、どんなに高遠なそれでも、いな、それが高遠といふ名を適當にあたひするものであればあるほど、現實的經驗の眞劍な自己認識、自己主張にほかならないものであるほかない。眞劍なといふ代はりに正直なといへば一層適當だ。

現代のいはゆる哲學者及び哲學研究者の或ものが、それの餘りにも多くの或ものが、例へば實在といふことばを口に

し筆にする場合を見るに、そのいはゆる實在は、それよりも非實在的なものはないほどにも非實在的なものだ。したがつて、それを實在と呼びあがめることは、それよりも不聰明な、反哲學的な行動はないほどにも不聰明な、反哲學的な行動だ。そして、これなども、精神學及び價値學が、いかに現代に於て、まだほとんど古代そのまゝの未發達状態にあるかを明示する一材料だ。非實在を實在視し、無價値を價値視する人々には、すくなくともその瞬間が關する限り、人格的統一が失はれてゐるのだ。かれらの生活と實行的知識とに對して、かれらの自認する哲學は全然無責任であることを、それは意味する現象だからだ。一人の眞の哲學は、實に、かれの行動及びそれに使用されてゐるかれの知識によつて代表されるほかない性質のものだといふことに、かれらは氣づかない。知識は、實に、行動の反省として始まり、行動の完成として終はるほかない。孟子が、道はちかくに在る、しかるにこれを遠くに求めるといひ、淮南子に、驗は近くに在る、しかるにこれを遠くに求めるとあることは、現代學者に對する一批判語たりうる。そして、荀子が、道はちかしといへども、行かざれば至らずといふたに至つては、いよ〱親切にそれだ。

純理と實際とを隔離させて保存することは、僞實際家の口實として重寶であると同じ程度に於て、僞純理家のそれとして重寶だ。する、ごまかし、にげの途が、兩者にとつてそこに見つかる。僞純理家についていうならば、怠慢と無能に對する、體のいゝ痩せ我慢、負け惜しみ、自慰もそこには隱れてゐる。天國を地上に打ち建てえない悔やしまぎれを、天國超在論に結果させるかたちがそこにはある。ちやうど、それは、研究的目標の名に、或ひは意識にさへも、隱れて、無能と怠慢を愛護する場合がある如くにだ。

分業は協力を目的とする場合に於て、その限りに於て、意味がある。知性が、一人の範圍内に於て、殘餘の性能から孤立し、學問が一科目の範圍内に於て、殘餘の分業から孤立するならば、また一專門學が殘餘の專門學から孤立するな

らば、それは、全人生から、また全世界から、分化し深化されたべきであつた。けれども、これは出來なくなつた。だは、一人における全人性的反省または精感と、一とつの社會における全社會的自覺が是非必要だ。人生と社會とに對する綜合的の認識の發達をそれは一とつの先決條件とする。教育の内容に、教育者の頭腦に、教育者その人に、殊に、出版業者に、雜誌及び新聞の編輯者及び經營者に、或るかなりに根本的な變化、革新を與へる必要もしたがつてそこにある。

先づ實感を、内包的にも、外延的にも、充分に持たないならば、有力な學的過程は始まりやうがない。しかるに、現代に於ては、社會したがつて文化は、それの内包關係に於て恐ろしく分化し、それの外延關係に於て恐ろしく擴大してゐる。そして、それは、いよ〳〵ます〳〵さうなりつゝある。學的分業者が、充分にその分業的機能に忠實であるためには、社會及び文化の各部の實感に出來るだけ直接に近よる必要がある。交通したがつて接觸の機會が、對人的、對物的、對書物的各樣式に於て、私的、制度的、慣習的に發達させられる必要がしたがつて考へられる。實行とまで行きえなくも、行きえない場合にも、實見、實聞とまでは行けるやう、行くやうにありたい。實行、實見、實聞とまで行きえない場合にも、それに比較的に充分な關係を持つてゐる書き物を讀むだけの勞をばつとめて取るやうにしたい。實感、實知、實識、これは、學の方法にとつて生命の泉とも彈叙される位置にあるものだ。價値學の場合にあつて、殊にさうだ。聽講と讀書との比較に於て、勿論その各を充分の廣義に解した場合に、讀書の方が、一層抽象的ではあるが、これだけにまた一層聰明な、進んだ方法であることは、現代に於て、なほ新たに注意され、理解され、實現されべきほとんど無限の餘地を示す。實に、目的に於て具體的であり、方法に於て抽象的であることが、聰明または生活に於ける進化の一要件だ。現代人はまだ、研究、學問の場合にこれを發示しない狀態にある。

社會は、多少組織された一般だ。宇宙自身も、各專門學に對當する、即ち各專門學の對象としての、かたちに、客觀的に分割されてはゐない。分業と專門とは、すべて、限りある能力の持ちぬしである人間が、限りなき必要と目的とを經營するための經濟的、節約的方法にほかならない。それは、制限、不滿足の意識を常に伴なはずにはすまぬ性質及び關係のものだ。分業と專門が、それの從事者に、それの組織的環境を無視し、蔑視するかたちに於て、得意と驕泰をすこしでも與へるならば、それは分業と專門の軌道からそれだけそれたものと見られる。

古昔に於けるいはゆる賢人と鄕先生との或ものは、時代的未發達の形式に於て、その事情下に、專門知と分業知との正しき位置を有力に暗示する。そして、現代に於ては、普通教育を目的とする學校、即ち小、中學校の學課目編成が、不完全ながら、分業的知識及び專門的知識の正しき位置を、一時代に於ける、分業別以前、專門別以前の早期的、準備的過程のかたちに於て、また有力に暗示する。人が、もしも、小學生、中學生の負擔科目を、そのまゝ、全部的に、大學生またはその程度の時期、就職後の時期にまで負擔し續けることが有益的に出來るならば、その方が、現制よりも完全なものであることはいふまでもない。しかるに、われらは、小、中學時代の知的生活を、餘りに單純に基礎的、豫備的、過程的に見去る。常識的知識と專門學的知識との間なる關係の哲學が、またこゝにそれの暗示されうる一材料を持つ。

四　抽象の價値と具象の價値

人類が、現代が知る限りの地球の進化過程內に於て、最高位置を占めてゐるといふ判斷に多少の知識が含まれてゐるとするならば、それは、人類が示し來たつた、また現に示す抽象力に對する認識を意味するものであるほかない。

人類は、發達したことばの唯一の所有者だといはれてゐる。しかし、[illegible]にしても、[illegible]る普通具體名詞は、すでに或る程度に發達した抽象力を前提とするものにほかならない。文字にしても、言語にしても、これが單獨の存在をえた瞬間は、抽象力が或程度に發達した瞬間だ。人類は道具及び機械の唯一の發明者だといふ。しかし、これも抽象力の結果にほかならない。牙と比較された斧、爪と比較された鋤鍬の類、足と比較された車、翼と比較された飛行機、これはいづれも抽象力の無に比較された多少の有にほかならない。藝術は人類の特能だといはれる。しかし、山水をゑがくことは、具象の山水に抽象力が作用した結果にほかならない。人間は理想の唯一の所有者だといはれる。しかし、理想は、現實の經驗に或抽象力が加はつたかたちにほかならない。人間は、環境の變化に適應しうる能力に於て無比だといはれる。しかしこれも、人間は、かれの過去の經驗に抽象を與へる力を持つてゐることを意味する事柄にほかならない。人間には、類を絶した程度に於て、深慮あり、遠謀あり、また博愛もあるといはれる。しかしこれらも、みな、抽象力の作用にほかならない。人間は想像力、意志力、計畫力の唯一の持ちぬしだといはれる。しかしこれらが抽象力を特質とするものであることはいふまでもない。そして、學が抽象力を意味するものであることは自明的だ。身體固有の武器に抽象力を加へて獨立の新武器を發明した過程は、それの根柢傾向に於て、人類進化の全過程を物語る。一とつの記錄としての人類の歴史殊に文化史は抽象力の發達の記錄にほかならない。

しかるに、抽象力は、最も制限して見ても、知力の一機能にほかならない。それは、實に、制限を極小限化して見れば、知力の別名にほかならない。知力に於ける一機能は對象意識だ。他の一機能は目的意識に於ける或部分だ。對象意識は觀念的寫實力または寫實力にほかならない。鏡が物をうつす如くに、知力は實物を觀念的に再現する。これがそもそも實物に對する或抽象を意味する。目的意識の部分としての知力は、それが目的意識たる資格を完全に備へたもの

であればあるほど、一層發達した抽象力を意味するだけのものだ。智力の一機能が抽象力だといふよりも、實は抽象力にほかならないものを、われらは、普通に、知力と呼ぶといふた方が、一層思索的だ。もしも衝動といふことばを本能から識別して、後者は固定的だが前者は變化的だと定義するならば、その衝動は、また、自己保存本能に或抽象力としての知力がいはば結合し、附加されたものにほかならないと考察される。抽象力としての知力を人的自然から除き去れば、人的自然が非人的自然から特に優越だとして識別される證據現象は、それの原因と共に、無しになる。

人類が唯一の進歩的生物であるといふ事實は、人類が唯一の抽象力ある生物であるといふ、一層局限された事實によつて支持されるものにほかならない。

常識的知識と科學的知識とを比較するに、兩者間の特徴別は、抽象に於ける程度別にほかならないと概斷される。その常識的知識を實經驗的知識、熟練に負ふ知識、また或る意味に於ての實際的知識に限つて理解するならば、この判斷は殊に妥當に成り立つ。この意味の常識的知識は、知識であるよりも一層藝術だ。それの非常的、稀有的發達の場合に於てその關係は顯著だ。いはゆるこつ、呼吸、體得知がこれを例證する。これらのものは、藝術としては無論だが、知識としても、結果から判斷する限り、しばしば驚くべき精確を示す。しかし、なほかつ、それらのものは、極めて具體的だ。その證據は、その當人がそれらのものを默解することは出來るが、他人にむかつて、實は自分にむかつても、說明することは出來ないといふ事實によつても供給されてゐる。

實經驗的知識が具體的であることは、即ち抽象的でないことは、その知識は、その當人と共にのみ存することが出來、廣く他人によつても持たれることが出來ないところに、それの一制限を持つ。それは、かくして、社會進步に貢獻する能率に於て、相當に制限されたものだ。

いはゆる[illegible]に[illegible]、或は[illegible]したかたちの[illegible]
をそれの部門内に入つて見ることすらも、多少のかたちを假定したうへに於て妥當だ。
しからば、普通にいはゆる常識的知識と科學的または專門學的知識との特徴別はどこにあるか。それに答へることはたしかだが、それは、前にのべた通り、やはり抽象に於ける程度別にある。

それは、專門學的知識は、常識的知識に於ける或限られたる部分を、その常識的知識の全體から抽象して、それに對する知的完成の努力を、それの原形に於てこれが受けたかつた程度に、充分にする關係に於ても抽象的程的一發達だが、專門學的知識は、常識的知識よりも、同一の判斷に對する理由の意識を充分に持つてゐる關係に於て最も特徴的に抽象的だ。

一とつの判斷に對して、理由の意識を充分に持つてゐることは、その判斷を結論とするかたちに於て、推論過程を充分に意識してゐることだ。しかるに、推論は、それの最も特徴的な要素を抽象の或作用として持つ。いはゆる歸納も、一般を豫想したり、確認したりすることは、例へば知覺的經驗が、それ自身としては、單なる一とつの、或ひは個々の現象意識であるのに、それを機會として、われらが或原則意識を構成することにほかならないから、明白に抽象力の營爲だ。そもそも二たつまたは多くの現象を比較して、そこに或共通質を發見することが、すでに、その共通質と見られたものが、その個々の具體的現象から識別されたことを意味する。しかるにその識別は、或具體全に對する、それに對してなされた、或抽象にほかならない。いはゆる演繹も、特殊を特殊として經驗し終らず、その特殊の内に一般を再認するところに、それは、われらが或抽象を行なふことだといふ、それに於ける最も特徴的な關係を明示する。一般[illegible]が、一般として、觀念界に固定的に保存されず、それが特殊へ、それの觀念界に於ける自己保存を全うされながら、共

ち運ばれることが、またすでに或抽象だ。それは、觀念的一具體全からの或抽象を意味する。歸納の場合にあつては、特殊が一般を先づ暗示するが、この暗示は、一層發達した抽象への過程の初期にほかならない。演繹の場合にあつては、特殊が一般を想起させるが、想起はすくなくとも比較を意味する。しかるに、比較される一方が、この場合に於ては、現實的經驗ではない、それゆゑに、それは相當に發達した抽象力の作用として説明される。

常識的生活も、常識的生活としての、勿論精確には範圍づけられない、範圍内に於て、演繹をも、歸納をも行なふ。常識的或ひは廣く實經驗的判斷、思索の世界内から、科學的、專門學的新價値ある新歸納が、それの最初の過程を形成することさへある。しかしながら、常識は、大體に於て、專門學が發達した時代、したがつて現代の如きに於ては、出來るだけ抽象の過程を省いて、それの結論を採用する。專門學に對する常識の態度は、理解ではなく信用だ。それだけに、常識は、單なる一專門學よりも、知識の單なる外延關係に於ては遙かに完全だ。

哲學は、常識に於て餘りに信用主義的に維持され、經營される生活を、出來るだけ懐疑主義的、批判主義的、構想主義的に維持し、經營することを機能または目的とする一專門學にほかならない。諸專門學の統一または綜合をば、常識がすでに、實際的生活の必要の範圍内に於て自然に營む。哲學は、それを一層意識的に、集中的に、即ちそれを抽象的に一個獨立の問題として、それの解決、主として知的な解決に從事する一專業だといふことが出來る。ここで主としてと制限したわけは次ぎのやうに述べることも出來る。即ち、哲學は常識の反省、純化、完成を目的とするものにほかならないゆゑに、それは、いふところの實際的生活の必要をも、ただそれを一層反省され、純化され、完成されたかたちに於て持つことを目的とするだけの條件を加へて、保存する。しかるに、出來るだけ反省され、純化され、完成されたかたちの實際的生活の必要は、第一原因的或ひは究極目的としてのすくなくとも經驗的、主觀的資格ある判斷を除外し

[illegible]性として發達すべき自然の行程に現存してゐる。常識が、決して[illegible]てる。また常識が、科學の結論に對して信用を義的であるといふ事實も、[illegible]以下の[illegible]なく、科學以上の目的の自信をも充分に、これがあるといふことが知られるだけには充分に、示す。

目的に於て科學以上だといふ自信を自然に持つてゐる、また持つほかない、常識は、實力に於て科學以下だといふ反省を、眞にそれがあたひするだけの程度に於て持つことに利益がある。現代に於て、常識は、所謂精神科學に對しては、その反省を、眞にそれがあたひする程度以上に持つてゐる傾向がある。所謂精神科學は、現代に於て、或ひは結果のみに於て、或ひは動機及び結果に於て、醫學未發達當時の山師醫者に類する部分を、物質科學との比較に於て著大に示す。

常識に於ける、目的に於て科學以上だといふ自信からうぬ惚れと臆病を去り、實力に於て科學以下だといふ反省に再反省を與へる責任は、哲學にとつて殊に直接的だが、現代のいはゆる哲學は、甚だしばしば、そして數量的にはたしかに代表的に、山師醫者ほどの積極的害惡をなすだけの實力をも、實際的信用をも持つてゐない。哲學者自身の行動が、代表的行動が、かれらの哲學の證據としての意味を除りにはげしく缺いてゐる場合について、いふ限り、かれらの哲學は、かれら自身からの實際的信用をすら持つてゐないと確認される。

なに人も實行力に於ては殊にいちじるしく有限的だ。一人の哲學に於ける理想的部分に對して、かれ自身が完全な一とつの證據であることなどは、望んだとて得られることでは勿論ない。しかし、物は程度で、せめて反省と煩悶と内心

の傾向的要求ぐらゐは、一人の哲學說と實生活または社會的、個人的行動との兩者をつらぬいて流れてゐないならば、それは、かれの哲學觀に或根本的不完全があることを意味する。かれの哲學說は、かれにとつて、かれ自身の生活の浪費であることを、それは、大體に於て意味する。一人が、かれの行動に於て必要的に肯定する判斷を、かれの哲學に於て、無感覺的に無視したり、意識的に輕蔑したり、或ひは反對したりするかたちの、餘りにも甚だしい人格的不統一、いな餘りも甚だしい學說的無權威をば、かれ自身、すくなくとも意識して、かれの學說に不安を生ずることが、かれの行動のためにはならないとしても、かれの學說のためにはたしかになる。

その行動の内には、制度人としてのかれもあれば、慣習人としてのかれもある。そこに、もつと局限された私行人としてのかれもあることはいふまでもない。現代の事實として、ここにいふ私行人としての自己が、そこにこそ最も有力な材料と條件を見いだすべき種類の學に從事する人によつて、最も閑却されてゐるといふ判斷も成り立つが、制度人、慣習人としての自己が、さらされてゐるといふ判斷は、一層注意されるかたちに於て成り立つ。制度及び慣習が、いまなほ餘りに人爲即ち行動として見られなさすぎる。けれども、人の生活は、具體的には、自然から離れて成り立つことも出來ないが、社會から離れて成り立つことも出來ない。それが自然から離れて成り立つことが出來ないといふ知識は、自然科學の發達によつて、漸く習性化され、常識化されるに至つた。それが社會から離れて成り立つことが出來ないといふ知識は、廣義社會科學未發達のゆゑに、まだ習性的、常識的知識とまではなつてゐない。生活は行動によつて代表される。行動が、人の世界にあつては、最も具體的だ。常識は、どんなに不完全であつても、行動の意識的統一の任務を現實に擔當する代表的位置にある。もしも哲學が、その任務を、出來るだけ理想的に擔當する代表的位置にないならば、そして、さうすることによつて、常識の具體的に、[illegible]

くべき機會だ。

生活は常識に於て最も具體的だ。そして、これは、科學に於て最も抽象的だ。しかしながら、最も抽象的なものは、最も具體的な常識から、それの反省及び再認から、即ち批判から派生的に發達するものにほかならない。それ故に、科學は、いかに常識としての中心から遠心したつても、遊離することは出來ない。科學の發達は、かくして、必然的に、常識に、これが必要とする最低限度の自己保存力即ち凝集力を犧牲としない範圍内に於て、その發達に相當する抽象化的變化を與へる。これが社會全に於ける知識の時代的進歩の過程だ。そして、この過程を經濟する見地からして最も要件視されることは、常に現存の常識が、反省される、再認される、即ち批判される内的及び外的自由を充分に持つことだ。内的自由は批判力だ。外的自由はそれを保護する環境的設備だ。私は、さきに、常識は信用主義的であり、哲學は懷疑主義的、批判主義的、構想主義的だと注意する機會を持つた。哲學のこれらの特徴にしたつて哲學心といふ資質の可能をわれらは肯定することが出來る。さうするならば、知識が時代的に進歩するために最も必要な條件は、出來るだけすべての人々に於ける哲學心の壯健と、それを保障する環境的設備の完全とにあると確認される。懷疑主義、批判主義、構想主義としての哲學心こそは、いかなる形成された哲學說またはそれとしての體系よりも、知識の進歩を目的とする立ち場から考へても、無限にたつとい。

科學そのものが、實に、哲學心の或發動にほかならない。科學が發達した現代に於て、科學を哲學から獨立させることの困難と、哲學を科學から獨立させることの困難とは、ここにそれの一理由を持つ。科學は、實に、それだけの哲學だといへるのだ。科學がいかなる特殊的一科學たりともが、それの原因的、環境的、及び目途的關係を充分に意識する努

力を擁ふならば、それはその努力の完成に正比例して、その努力の完成と共に、いよ〳〵完全に哲學化するほかない。科學にも假定があるといはれる。その假定を假定とせずに、問題として研究するものが哲學だといはれる。しかし、科學自身が、その假定に對する充分なる意識を持つことは、それが出來る限り、極めて自然であると同時に、當然だ。科學には、科學としての學的環境があると見られる。普通にいはゆる關係諸科學が、いかなる特殊の一科學にもあると見られる。しかし、それらが關係諸科學である以上、その關係に充分に意識することが、それが出來る限り、いかなる特殊の一科學にとつても、極めて自然な、且つ當然な要求及び努力であらねばならぬことはまたいふまでもない。理由または原因としての假定をば哲學に依賴し、關係または環境としての知識をば他の科學に委任することは、いかなる一特殊學にとつても、目的としての必要ではなく、方法としての消極的必要にほかならない。たゞ、哲學が學の世界に於て、行の世界に於ける政治が社會經營を意味するが如くに、意味すべきであるが如くに、生活を知の側面からして綜合的に認識することを意味すべきものだといふ關係に於ては、それは他の諸科學から識別される。けれども、この事實は哲學が、さうした特殊の目的または機能を自認する、また他から期待される、一科學だと見られることをさまたげる性質のものではすこしもない。哲學自身が要するにまた一科學にほかならない。それは、それに特有のかたちに於て、一科別學にほかならない。哲學は決して學の世界に於ける王ではない。それは、ちやうど、政治家が、現代に於ては、もはや決して、社會に於ける絶對君主ではない如くにだ。科學と哲學との間なる差別または區別は、眞に、協力た意義とする或分業にほかならない。兩者ともに、完全に哲學心の世界內の現象だ。

すでに注意した通り、人類は知力によつて代表され、進步は知力を、最も制限して考へてもほとんど、唯一の原因及び條件とする現象にほかならない。もし知力に於て壯健でないならば、その社會は、體力や、豐なる氣力や、感情

り[illegible]自然界の[illegible]として[illegible]のやうなものだ。偏りなき或りは偏らないやうなものだ。偏りなき[illegible]において自他被敎のほかのなにものをも意味しえないかたちの單なる[illegible]者のやうなものだ。偏りは指導者の目的には[illegible]かならない。一とつの社會が、指導者の本能的見地から、これに對して[illegible]ならば、その社會の存在理由及び存在價値は無に歸する。

しかるに、例へば日本の現在を見るに、指導者の本能的自己保護は、どれほどのものとして確認されるか。またそれに對する制度的及び習慣的保護は、どれほど不安なものとして確認されるか。第一に、比較的に人格的自由の範圍に屬するその制度的及び習慣的保護の部分を見るに、例へば小學校の制度からして、決して生徒及び敎師をして、すくなくとも人性及び社會に關しては、自由に懷疑し、批判し、構想することを單に許すやうにすら、まして積極的に促進するやう、助成するやうにはなほさら、出來てゐない。これは、一とつの社會が、自己の存在力及び存在價値に對して、それを經營する目的及び方法に對して、最も無自覺であり、不用意であることの一例だ。個を發達させないならば、生活經營の根本力と見られる道德そのものさへもが、常にそれの觀念に於て、したがつてまたそれの情操及び意志に於て、狹い、近い具體的範圍を經營しうるだけにとどまるほかない。もつと大きな社會なりかなりの具體的範圍の組織的環境として常に作用しつつある場合に於ては、その如き道德は、その限られた具體的範圍だけの經營をすら、常に困難及び不可能にされるほかない。

具體と抽象とは、常に、いづれも、多少未完了だ。兩者は、いつでも、或るプログラムを遂行する過程内の或時期にあ

る。一人と一社會とについていふならば、或時期に於ては抽象であつたものが、他の或時期に於ては具體として經驗され、所有され、存在する可能がある。この一人と一社會とが時と共に進歩した場合を假定するならば、或期間に於て抽象であつたものが、次ぎの期間に於ては具體となる。感覺、知覺の特徴に於て顯著な經驗に於てさへ、例へば繪畫、音樂、建築を視覺したり、聽覺したりする場合に於てさへ、素人にとつては極めて抽象的な性質、存在、關係であるものが、玄人にとつては極めて具體的なそれらでありうる。すべての進歩は、知に於ける進歩を代表的要件、基礎的要件とするものであるから、知が進歩して、したがつてそれから、その特殊の知から、多少識別される位置にある他の人性要素がその進歩した知を條件とする狀態に移れば、感覺も、知覺も、本能も、衝動も、そして欲望、意志、想像等はいふまでもなく、この知が意味するだけの抽象を、自身の組織内に具體化して持つやうになる。感情そのものが、知の進歩からして、抽象化的感化を受ける。しかも、これは、感情が感情でなくなることを意味する過程または變化ではなく、感情がこれの本來の傾向にしたがつてこれだけ成長することを意味する。知の發達が情愛、同情の範圍を擴大する場合はそれの一例だ。

常識、行動、生活は最も具體性に富んだもので、いつでも、あるほかないが、これらのものの組織に直接的及び間接的に關係した位置にある知の發達は、それらのものの具體性をば保存しながら、その知が意味するだけの抽象を、早晩、それらのもの丶所有内容へ移す。それらのものの具體性が、かくして成長する。以前の具體性を、現在の具體性は、部分として所有するだけの大成したものとなる。かくして、例へば、現代の教育された人々にとつては、大地は地球として、即ち或球體として、ほとんど本能的、直覺的、初發想像的に意識される。現に知覺しうる大地は、むかし通り、平盤であるにかゝはらず、現代人は、これは地球の一部にほかならないといふ、抽象化された知覺を、充分の具體

たに於て持つてゐたかは、これを、[illegible]、[illegible]
的現實を變化させるかたちに於て、[illegible]
演技過程と見られる複雜な現象ではあつたが、アメリカ發見が、いかに十六世紀の西歐人の常識、行動、生活の世界に大化的成長を與へたかも、科學としての抽象が、常識としての世間に、いかなる關係を持つかの一例證たりうる。

技術は、科學との比較に於て、世間的だ。しかし、これは、科學以前のより發達的形式に於て世間的であるのではなく、科學以後の發達した形式に於てこれだ。技術は、しかるに、すくなくともそれの結果を享樂するかたちに於て、專門家に特有されず、社會に共有される。科學は、技術を通ほして、常識の所有に移る關係があるのだ。常識は、即ち、普通に、そして多少不完全に、應用科學と呼ばれるものの作用及び結果の消費者たる位置からして、功利的及び享樂的に、確設された科學を學び知る機會を持つ。常識を發達させる一要件は、それゆゑに、技術の發達、技術的製品及び廣く技術的文化の普及であるほかない。そして、他面に於て、現存の技術的製品及び廣く技術的文化が、これの消費者によつて、常に多少批判される必然がある。これが、科學の再發達に最も有力な最初の一過程だ。

科學は自然法よりも結論的過程であり、技術は科學よりも、技術が環境に與へる變化としての成績及び作品は技術よりも。そしてその成績及び作品の使用または消費はその成績及び作品よりも、一層發展的に結論的過程だ。結論的過程は、その以前の過程よりも、形式に於ては單純だ。しかし、それは、これよりも、實踐に於ては豐富だ。かくして例へば、病に關する研究が、どんなに滿架の著述をなしてゐやうとも、一般消費者は、それが難治でなくなるまでは、有意義にほとんどそれを無視する。また例へば、地震に關する研究と裝置が、專門家にとつて、どんなに複雜な意義を持つ

る。一人と一社會とについていふならば、或時期に於ては抽象であつたものが、他の或時期に於ては具體として經驗され、所有され、存在する可能がある。この一人と一社會とが時と共に進步した場合を假定するならば、或期間に於て抽象であつたものが、次ぎの期間に於ては具體となる。感覺、知覺の特徵に於て顯著な經驗に於てさへ、例へば繪畫、音樂、建築を視覺したり、聽覺したりする場合に於てさへ、素人にとつては極めて抽象的な性質、存在、關係であるものが、玄人にとつては極めて具體的なそれらでありうる。すべての進步は、知に於ける進步を代表的要件、基礎的要件とするものであるから、知が進步して、したがつてそれから、その特殊の知から、多少識別される位置にある他の人性要素がその進步した知を條件とする狀態に移れば、感覺も、知覺も、本能も、衝動も、そして欲望、意志、想像等はいふまでもなく、この知が意味するだけの抽象を、自身の組織內に具體化して持つやうになる。感情そのものが、知の進步からして、抽象化的感化を受ける。しかも、これは、感情が感情でなくなることを意味する過程または變化ではなく、感情がそれの本來の傾向にしたがつてそれだけ成長することを意味する。知の發達が情愛、同情の範圍を擴大する場合はそれの一例だ。

意識、行動、生活は最も具體性に富んだもので、いつでも、あるほかないが、これらのものの組織に直接的及び間接的に關係した位置にある知の發達は、それらのものの具體性をば保存しながら、その知が意味するだけの抽象を、早晩、それらのもの〻所有內容へ移す。それらのものの具體性が、かくして成長する。以前の具體性を、現在の具體性は、部分として所有するだけの大成したものとなる。かくして、例へば、現代の教育された人々にとつては、大地は地球として、即ち或球體として、ほとんど本能的、直覺的、初發想像的に意識される。現に知覺しうる大地は、むかし通り、平盤であるにかゝはらず、現代人は、これは地球の一部にほかならないといふ、抽象化された知覺と、だからして意

さらにそれを持つてゐたのは、これで、それ[illegible]

的我等を變化させるかたちに於て、然しそれにして[illegible]演技過程と見られる複雜な現象ではあつたが、アメリカ發見が、いかに十六世紀の西歐人の常識、行動、ひいては學[illegible]界に大化的成長を與へたかも、科學としての抽象が、常識としての具體に、いかなる關係を持つかの一例證たりうる。

技術は、科學との比較に於て、具體的だ。しかし、これとて、科學以前の未發達的形式に於て具體的であるのではなく、科學以後の發達した形式に於てこれだ。技術は、しかるに、すくなくともこれの結果を享樂するかたちに於て、專門家に特有されず、社會に共有される。科學は、技術を通ほして、常識の所有に移る關係があるのだ。常識は、即ち、普通に、そして多少不完全に、應用科學と呼ばれるものの作用及び結果の消費者たる位置からして、功利的及び好奇的に、確設された科學を學び知る機會を持つ。常識を發達させる一要件は、それゆゑに、技術の發達、技術的製品及び廣く技術的文化の普及であるほかない。そして、他面に於て、現存の技術的製品及び廣く技術的文化が、これの消費者によつて、常に多少批判される必然がある。これが、科學の新發達に最も有力な最初の一過程だ。

科學は自然法よりも結論的過程であり、技術は科學よりも、技術が環境に與へる變化としての成績及び作品は技術よりも、そしてその成績及び作品の使用または消費はその成績及び作品よりも、一層發展的に結論的過程だ。結論的過程は、その以前の過程よりも、形式に於ては單純だ。しかし、それは、これよりも、意義に於ては豐富だ。かくして例へば、癌に關する研究が、どんなに滿架の著述をなしてゐやうとも、一般消費者は、それが難治でなくなるまでは、有意義にほとんどそれを無視する。また例へば、地震に關する研究と豫防が、專門家にとつて、どんなに複雜な意義を持つ

てゐやうとも、一般社會は、まちがつた豫測を、それの結果にしたがつて經驗したり、精確なる豫測を、それの結果にしたがつて、經驗することが出來なかつたりするあひだは、また有意義に、ほとんどこれを無視するのみならず、單純にそれを評價し去る。場合によつては、隨分、專門家に不安を與へるかたちに於ても、その評價がなされる。

すべての生產はそれが消費されることを目的とする。それが享樂されるかたちに於て消費されることをそれは目的とする。生產過程と、消費過程とが、時期に於て先後別を不可避にされてゐる場合に、功利的、技術的、經濟的生產が成り立ち、その兩者が、時期に於て一致する限りに於て、遊戲的或ひは藝術的生產が成り立つ。消費が結論であるといふ特徵だけに於ては、經濟的生產と藝術的生產との間に差別はない。常識は、しかるに、それの一特徵に於て、消費生活だ。常識は、すべての人々に共通に持たれべきものだといふ判斷の背景は、こゝにそれの一大部分を形成されてゐる。常識が科學を敎育する可能、特權、責任、必要及び必然は、科學は常識よりも生產過程であり、常識は科學よりも消費過程だといふ關係に屬する現象だ。それは、實に、目的が方法を敎育する關係にほかならない。

五　精神科學に於ける革命的二兆候

學の發達は、經驗を、それの内包的及び外延的兩面關係にしたがつて、出來るだけ充分に組織された、即ち出來るだけ完全な、具體全に成長させることを目的として、事實の暗示に、關係と可能の新世界を先づ抽象的に構想する機會を取ることなしには成り立たない。

この努力は、現代に於ては、環境に對する具的探險と、無意識に對するそれとに於て最も顯著だ。それは、同時に、疑ひもなく最も有望だ。

に[illegible]した多くの[illegible]の[illegible]に於て、[illegible]
に發達されたか、また、それから、一、二世紀を經て行はれた。[illegible]
れたかは、いまはすでに、それの精細なる研究だけが問題として殘されてゐる[illegible]となつた。
もしそれ、産業革命が、いかにその後の科學的發達にあづかつて不可測大のりであつたかは、いまは、知られたる部
分に於てよりも信ぜられる部分に於て顯著な事實及び問題だ。資本經濟的社會事情が科學そのものに直接及び間接に[illegible]
する關係は、その關係に對する認識及び構想は、精神科學の全野に曠古の革命をすでに示しはじめた。現代に於ける精
神科學上の進歩と見るべきものは、ほとんどことごとく、環境に對する注意の進歩を條件としてゐる。精神の環境とし
ての身體、思想生活の環境としての社會組織、それから、比較的にすでに進んだ研究としては、人間界の環境としての
自然界、これらに對する多少探險的な、しばしばまた餘りに適徑的な、個的企圖をほかにしては、現時代に於ける精神
學の世界に於ける進歩は無に近い。具體的環境に對する抽象的認識は、現代の社會科學、經濟學、哲學に於ける最低限
必要的一方法たる位置をいよいよ確實にしつゝある。

精神科學は、すべて、心理學を基礎的一要件とするほかない。環境に對する新注意は、例へば制度及び習慣の最も直接的な環境、即ち最も直接的に原因的位置にある環境として、人性に對する新注意としても發展して來たが、心理學そのものの範圍内に於ても、比較的に容易に意識される心理現象の、比較的に容易に意識されない心理的環境に對する新注意としても發展して來た。注意に對する研究が、本能及び習性に對する研究に取つて代はられる傾向が顯著になつて來た。そして現存の本能及び習性の環境を、空間的に横及びそとに求めるだけでなしに、時間的に無限の過去にまで求

め究めやうとする。この傾向は、必然的に、それの發達につれて、人性及び社會を進歩的に改作することを直接の目的とする各種價値學に影響して、新環境を將來的に構想する新努力としても發達し、本能と習性を、理想化的及び新作的に、構想する努力としても發達しはじめた。或ひは、觀察的研究がまだ幼弱なために、それの發達を待つて、その努力は發達するばかりの狀態に、いまは達してゐる。

例へば心理學だけについて考へて見ても、容易に意識される範圍内だけの心理現象の研究が、いかに不充分な研究に終はるほかないかは、社會及び自己に對するいはば虛榮心だけですらもが、また直接利害關係だけですらもが、その研究をして、極めて表面的な、部分的な認識に終はらしめるほかないといふ一事によつても、かなりに有力にうなづかれる。

從來の精神學は、學としての獨立を持たず、要するに御用學または辯護學の範圍内のものであつたと概認される。それは、また、同時に、及びしたがつて、獨斷であつたと概認される。一とつの精神的事實を、殊にも價値意識的事實を、廣くそれの環境を見ずに、その事實自身の範圍内に於て說明し、解釋しやうとすれば、その努力は、結局、循環論法式に發展するほかない。そして、その弱點を意識しないため、表明しないためには、自認しないため、公認させないためには、不可抗力ある感情的、利害的理由を、その態度及び方法としては、使用するほかない。かくして、從來の精神學が、上述のやうに概認されるほかない性質のものであることは、完全に再認される。

しかし、環境及び關係に對する認識は、どんなに發達しても、それが眞に發達である限り、環境及び關係に對する認識の完成以上のものではありえない。例へば、技術及び制度がどんなに思想生活を決定する力に於て大きいとはいつても、その力には限度がある。かくして例へば、古代アゼンスにも數學は發達し[illegible]

する一因である限り、支配する[illegible]と、支配され[illegible]と、[illegible]や何等か階級間に何等差別または區別を持たないこともいふまでもない。[illegible]も、階級間に無差別な純粹領域がある。科學または學としての知識は、それの[illegible]、この純粹領域の保護に待つものであるほかない。この關係に於て、また、知識は、常に、充分に[illegible]であることと、充分に綜合的であるために充分に抽象的であることをそれ自身の本質及び機能とする。

人性及び社會の進歩は、改善、成長、完成的過程としてのそれは、知にそれの全鍵を持たれてあるといふ判斷は、かくして、いく多の意味に於て再認される。もしも人性に、發達力を常に有する知がないたらば、社會は、人間の社會は、進歩、したがつて存在を犠牲とする協力を續けらる限り續けるか、進歩、したがつて存在を犠牲とする闘爭を續けらる限り續けるかするほかない。人性に、抽象を特徴とする知性あるがゆゑに、人類は、進歩的意義あるしかたに於て協力し、また進歩的意義あるしかたに於て闘爭することが出來る。知の發達に不忠實な協力及び闘爭は、固有とともに、變化的過程の世界に於ては、それに忠實なそれらに比して、自己否定的意義に於て最も顯著だ。

人間即ち人類を特徴づける方法としては、社會性によるよりも、闘爭性によるよりも、したがつて愛、同情、想像、利己主義、個性主義、人格主義、創造、發明、進化等のいづれによるよりも、一言にして知によることが最も完全だ。藝術も、道徳も、戀愛も、政治も、經濟も、教育も、宗教も、いはば單なる動物性に、人性組織内の知といふ一要素だけが加はれば即ち成り立つと、すくなくとも象徴的にであるよりも餘計に科學的にいふことが出來るといふことが、それ自身、現代に於ては、すでに一とつの公認された知識となつてゐる。現代は、第一に制度的及び慣習的に、この知識に新たなる注意を拂ふ餘地を、しかしながら、餘りにも依然として保存しつゝある關係に於て最も未發達だ。

虚弱者を強健化す

ブルトーゼ

ブルトーゼは八大醫學博士の御推奬と且帝國大學病院、赤十字社病院其他各府縣立病院等に於て盛んに御採用を蒙りつゝある最も理想的補血強壯增進劑にして人體肝臟中に含まるゝ鐵白蛋酸と同性同態の人工集成したる液狀製劑なり併して左記特長を有す。

一、芳香美味にして我國民固有の嗜好に適し口に快く婦人子供も好愛す。

二、絶對に副作用なく能く造血機能を亢進し新陳代謝を旺盛ならしめ食慾を增進す。

三、速かに同化吸收され赤血球を增加し精力を旺盛ならしめ身體榮養上強力なる作用を呈す

故に急性慢性貧血病、萎黄病、腺病及肺結核其他諸疾患より來る榮養不良並に衰弱、神經衰弱、病後恢復期姙婦、授乳婦、産後、虚弱羸痩者等に顯著なる効を奏す。

種類及賣價

効能	品名	小瓶 半月分	大瓶 一月分
補血強壯 榮養增進劑	單味 ブルトーゼ	金二圓	金三圓
神經性 疾患特効劑	アルゼンブルトーゼ	金二圓三十錢	金三圓五十錢
腺病質特効 補血強壯劑	ヨードブルトーゼ	金二圓三十錢	金三圓五十錢
健胃補血 強壯劑	キナブルトーゼ	金二圓五十錢	金三圓五十錢
呼吸器系 疾患特効劑	グアヤコールブルトーゼ	金三圓五十錢	金五圓五十錢

法律的智識に於ける合理性と常識

法學博士　牧野英一

法律上の智識を一部の特殊の人の獨占にしないで、之をひろく常識化せねばならぬとの主張が行はれてゐる。――法律の社會化といふ理念の適用の一つとして、其の常識化といふことの意義を考へて見たいとおもふ。

［一］

わたくしの考へるところでは、所詮、法律上の智識は專門的なものである。病氣になつたときは、專門家たる醫師の助言を聞きその手當を受けねばなるまい。おなじやうに、法律上の問題が起つたときには、專門家たる適當な法律家の意見に從つて行動せねばならぬ、とわたくしは考へる。

病氣に對して素人治療をすることが往々にして回復すべからざる損害を引きおこすとおなじやうに、法律上の問題に對して、單純な常識的判斷を以て事に當るのは甚しく危險なことであると謂はねばならぬ。鳥渡した頭痛や腹痛でも之を輕視してはならないことがあるやうに、簡單な賃借や取引にでも、意外に複雜な法律關係がつききとふのである。

わたくしの見るところが誤つて居らぬならば、世の人人に、其の病氣を不當に輕視することの少くない以上に、其の關係する法律問題を甚しく馬鹿にして居ることがありはしないかっ？さうして、其の結果、法律問題が以外に發展して、自己の正しいとするところに案外にも權利がないものとされ、當然に不當と信ぜられる主張が意外に出て裁判上承認されるといふが如きことがある場合に、自分の考への足りなかつたことをかへりみることなく、却つて、法律を呪ひ、國家をうらむといふことがあるのである。

わたくしは、法律學的智識の常識化乃至普化といふやうなことを考へるに方つて、先づ何よりも、法律學的智識にやはり專門的なものであるといふことを明かにしておかねばならぬ。――換言すれば、法律學的智識が專門的なものであるといふこと

を明かにすることが、法律學的智識を常識化し社會化するの第一歩である。とわたくしは考へるのである。

〔二〕

何故に、法律學的智識はしかく專門的なものであらうか。わたくしは、それに答へて謂はうとおもふ。それは、法律學的智識は、要するに、事物の法律的合理性を明かにするものであらねばならぬからである。――合理性といふものは、法律に限らず、如何なる方面から之をながめ之を論ずるにしても、必ずや專門的な研究を要するものである。

自然科學的に事物をながめる場合に於ては、自然現象は、常に事物の合理性に從つて發生し發展するものである。人はエネルギーの如何なる分量をも創造することができないと謂はれて居るが、それは、即ち、人は自然界の合理性に對して何等の力をも及ぼし得ないといふことを意味するものである。極めて巧みに自然界の現象を左右するやうに見える人の行動は、實は自然界の法則を自己の意のままに變更して行くのではないので、却つて、自己の行動を自然界の法則に應化させて行くのである。自己の行動を自然界の法則にうまく應化させるの程度を增すに從つて、自然界は、さも其の人の意の如く變化して行くやうに見えるのである。換言すれば、自然を制御するの途は自然に從ふことにあるのである。

おなじやうに文化科學的に事物を論ずる場合に於ても、文化現象は、常に事物の合理性に從つて創造され、經營されねばならぬのである。文化的合理性も亦、人の手に依つて左右されるものではないのである。グローチウスは、其の平戰條規のなかに、二に二をかけて四となることは神といへども如何ともしがたいことであるやうに、本質上惡いことは神とても之を善とすることはできない。と謂つた。換言すれば、グローチウスは、文化的合理性を、神を超越して成立するものであると謂つたのであるが、それほどに、われわれの考へて居る法律的合理性――文化的合理性の一たる法律的合理性――も亦絶對なものであるのである。この意味に於て、われわれが若しわれわれの生活を文化的に完成しようと欲するならば、われわれは、文化的合理性そのものを理解し、文化的合理性そのものに應化して行かねばならぬのである。

自然的合理性を明かにすることは、全く、專門的な仕事である。自然は何ものをもわれわれに對して隱しては居ないのであるが、われわれは、そのあからさまな自然を如實に理解するのに專門的な努力を要するのである。それとおなじやうに、法律

[illegible]

簡單な自然現象でも、われわれには、常識ではいふまでもなく、專門的にも容易に理解のできないものが少くない。例へば、われわれが毎日經驗して居る現象といふやうなものを例に引くことができよう。——さきに、病氣のことを言つたが、病氣でもさうである。

それで天氣や病氣やは、之を合理的に理解することが出來ないことからして、神秘視するといふやうなことが、文化の發展上おのづからな順序であつた。雨の神、風の神、疱瘡の神、傷寒の神といふやうなものが、幾多の人に依つて昔は信じられた。さうして、今日もなほ幾多の人に依つて信じられて居る。

われわれは、雨の神、風の神、疱瘡の神、傷寒の神を信ずる人々を、滑稽とわらひ、無智とあはれんで居るのである。しかし、われわれは、其の人々を、わらつたり、あはれんで居るほどに、雨や風や疱瘡や傷寒を理解して居るのでない。それを理解して居らぬ證據には、その雨や風を喜ばないのである。その

[illegible]

當に規矩を捨てゝこれに依つて居るときには——その異常の現象をむしろ風がなものと考へることができよう。またわれわれの學問が而も何も其の病氣を理解し得た程度に於ては——例へば、傷寒を適當なフイヨンで培養するといふやうな場合には——その病菌を少しもおそれる理由はないのである。

法律もかくの如し。法律の本體には容易に理解し得ないものがある。風雨がおもふやうにならないとおなじやうに法律は決しておもふやうになるものではない。病氣がおそるべきものであるとおなじやうに、法律は時として甚しく厭ふべきものになるのである。しかし、風雨や病氣が現にこの世に存するものであるやうに、法律といふものも、儼としてこの世に存して居るのである。

それで、そのおもふやうにならない法律、時として甚しく厭はしいものになる法律を、世の人は時として神秘視させるを得ないことになるのである。昔の法律を考へると、法律はすべて神から授けられたものとされた。これは、法律の起源として

は、すべての民族に共通な現象だと謂つてもいい。今日では、法律を神から直接に授けられたものとは考へないことになつた。しかし、法律は主權者の命令だと考へることになつて居る。主權者が何故に其の主權を持つて居るかの基礎は、やはり、之を神に歸して考へるか、乃至は國民の總意といふが如き一種の神秘的な或ものから引き出すことになつて居るので、この點から考へると、法律の神秘觀は、今もなほ持續されて居るところであると謂はねばならぬ。

固より、われわれは、ハムムラビ王が日の神から其の法典を受けたと謂はれるやうに、またモーゼがエホバから其の十誡を授けられたと傳へられるやうに、われわれの法律をわれわれの國家が或る神からもらつて來たものだとは考へない。否、むしろ、或程度に於て、その法律は、われわれ自身こしらへたものであるといふやうにも考へる。この意味に於て、われわれは、法律に對して或る進步した理解を持つことになつて居るので、さうして、しかく適當に法律の本質を理解し得た範圍に於ては、われわれは、相當に法律的生活をエンヂョイして居るのである。法治國の制度であるとか、立憲政體であるとかいふことが結構なことだとされて居るのはそれである。

□

法律の本質は、永い間わからなかつた。中世のことを回想して見ると、其の當時の人人は、かの教權と主權とから甚しく、壓制的な暴虐な政治を行はれ、それの下に服從するの外なかつた。その人人は、一方に於ては神をありがたいものとして居た。しかし、其の神から授けられた法律は甚しく呪はしいものであつた。――法王の法律は神の直接の法律と謂ひ得よう。之に對して國王の法律は神の間接の法律と謂ひ得よう。何となれば、國王の權力は神から授けられたものとされたのであるから。――さて、神はしかくありがたいものでありながら、神の法律がしかく呪はしいものであるといふことは、論理上到底理解し得ないところであると謂はねばならぬ。しかし、論理上しかく理解し得ないところに、神乃至その神の授けた法律の神秘性が存在して居たとでも謂ふべきであらうか。神秘を神秘として、其の神秘の壓抑の下に、人人は、蟲けらの如くはかなく生き、蟲けらの如くあはれむべく死んだのであつた。法律の本質がわからない以上は、法律を如何ともすることができないわけである。當時の人人の生活は、今日の眼から見れば、法律なきにひとしいものであつた。

[illegible]
[illegible]ことができよう。さうして、その立場に於て、わたくしは、ただただ、ここに、グローチウスの名を想起せねばならぬのである。

　グローチウスの有名な語、二に二をかけて四となることを神は如何ともしがたきと同じく、神は本質的に悪なるものを善と爲すことはできない」といふのは、上に掲げたところである。これは其の著「平戰條規」―― De jure belli ac pacis の古い譯語であるが適譯でないとして、今はすたりかけたやうであるが兎も角、わたくしは學生時代に教はつて、口くせになつて居るこの譯語に從はう――の第一編の第一章の第十節の第五項に見えて居るところである。この書は一六二五年に公にされたので、今年は、まさに其の三百年に該當するのである。この書は、一方に於て、近世の國際法の基礎を樹立したものであるといふことになつて居るが、同時に、他方に於て、自然法の理論を大成して、近世の法律思想の淵源を爲して居るものである。わが學界も、この三百年を記念することにして居る。グローチウスの其の著述に依つて、法律の本質は、近世に至り、啓蒙思想以後、ややわかることになつたのである。

　グローチウス乃至近世の法律思想といふのは、どんなもので[illegible]

二

　グローチウスは、右に掲げた語に於いて、自然法といふ思想を展開したのであつた。自然法といふ思想には兩つの見方がある。それは、また、兩つの要素とも謂ふことができよう。即ち、第一には、法律は人間の本性を基礎にして成立するものであるといふことである。第二には、法律はこの世界に人爲を離れて自然に存在して居るものであるといふことである。グローチウスの考では、この兩つの要件乃至見方が、常に融合して居る。さうして、一方に於ては、人間の社交性といふことを高調して、その社交性から法律の原理たる契約乃至所有權といふやうな事理が當然に理解されねばならぬとして居るのであるし、同時に、他方に於ては、その「自然法は恒久不變にして神と雖も之を變更することができない」として居るのである。

　グローチウスの右の語を、其の表面だけに就いて見ると、グローチウスは甚だしく神を輕視した人であるやうに見える。しかし、グローチウスも亦神に對して信心深い人であつた事は疑ないので、其の著書の他の場所に於ては、或は自然法は[illegible]この世にないとしても[illegible]に大きな[illegible]たく

しては謂ひ得ないことであるが――しかあるべきことである』として居るのであるし、又、他の場所では『斯く論じ來つた自然法は、神から出たものと考へることが道理上しかるべきことである。斯くの如き原理がわれわれの本性に内在して居ることは神の心に依るものであるからである』として居るのである。

　グローチウスが排斥せんとしたのは、當時の謂ゆる神であつたのである。ローマ法王は神の名に於て行動した。諸國の國王は神から授けられたものとしてその主權を主張した。しかし、其の教權と王權とは、當時の人人にとつては忍ぶべからざる政治の淵源であつたのである。それで、グローチウスは、擅斷、變ること猫の眼の如き當時の教權と王權とに對して其の『恒久不變なる自然法』を樹立し、教權と王權との口實となり背景となつた謂ゆる神から獨立して、人間の理性の上に法律の體系を組織立てることにしたのである。

　グローチウスが其の著を公にしたのは、一六二五年であつた。これは、すでに上に述べた。さて、その一六二五年といふのは、まさしく、三十年戰爭のたけなはであつたときである。三十年戰爭は、王權と教權との紛爭の最もいまはしい芝居であつたのである。王權と教權との守護神たる謂ゆる神の暴虐性と馬鹿らしさとを遺憾なく暴露したものであつたのである。其の暴虐性と馬鹿らしさとの暴露の間に於て、グローチウスは其の著を公にしたのであつた。

□

　グローチウスの仕事の功績として、學者の普ねく認めるのは、グローチウスが、法律を神のものからして人間のものたらしめたといふ點である。

　人文の發達を見ると、人間が認識した第一の事物は神であつたとも謂ひ得ようか。――原始人には神乃至宗教といふ觀念のないものがあるといふやうな厳密な論議のことは、暫く別に考へるとして。――先づ神を知つて、すべてを神に歸し、萬有現象を神の喜びと怒とに因つて理解することは、その原始社會の人人が、實は、人間たる自己に付いて何等の理解なきことを意味するものである。自己自身を理解せよと教へたのは、古いギリシヤの聖人の語であつた。漸くにして自己自身を理解しはじめたのは、啓蒙時代以來の近世の事實である。

　グローチウスは、法律の範圍内に於て、自己自身を知ることを、われわれに教へたのであつた。法律の權威を自己自身の理性に求めることに因つて、われわれの生活――其の重要な一面として、法律生活――の本質が王權と教權とから解放されるこ

ところたへたる法の無さに因つて、法外に増さるべきわれわれに適合するといふやうな純粹な意義ではなくして、理性的段階にわれわれに示すところの契約の妥當性である、といふことになつた。

しかし、グロチウスのやうな自然法を考へて見ると、それは、ただ、一つの理想的なものたるに過ぎないことになる。理想的なものとしてのその自然法は如何に結構であつても、それから離れて、別に主權乃至政權がわれわれに其の力を以て命ずる法律がある以上、現行の實際の法律とその理想法とは風馬牛も相及ばざるものであることになろう。されば、自然法と現實法との關係といふことが、そこに、おのづから問題とならねばならぬことになるのである。

グロチウスは、この關係を說くのに契約といふことを以てした。人間界の極めて普通の事例たる契約といふこと、俗事として最も平凡なる契約といふ理論を基礎として、微妙に理想と現實とを調和することにしたのである。

□

グロチウスは、要するに社會契約論者である。社會契約論はグロチウス前にすでに發達して居たのであつた。しかし、社會契約論はグロチウスに於て大成したと謂ひ得よう。また、いはゆる自然法はグロチウス後に發展したといつてよいのに對し、社會契約論はグロチウスを中心として考へられるべきものであらう。

グロチウス以前の社會契約論は、學說として十分の體系を全うするまでに至つて居なかつた。グロチウスは、兎も角も、社會契約論をとりまとめたことになつて居るのである。要するに、グロチウスは、人間の自由なる意思の表示たる契約が當事者間に守られざるべからざるは、二に二をかけることが四となるとおなじく先驗的な論理的なものであるとし、所有權が尊重されねばならぬのは、それが明示又は默示の契約に依るものであるとした。原始的な本來の社會に於ては、何人が如何なる物を所有せねばならぬかに付き、論理上の必然性はないはずである。しかし各自がそれぞれに自由な行動を爲し、其の生活を營むために、互の間に約束を交換して、それぞれ所有物を取りきめた。又、かやうな明示的な約束がなくとも、或る人が或る物を所有物として現に持つて居るのは、すべて他の人がそれを承認することを契約したものと考へねばならぬといふのである。國王の權力も亦、おなじく、かくの如き契約に基因して成立して居るものと理解することにした。斯くして、現行の實際の法律は、契約に由來して居るものであるとしたのである。

社會契約論に共通な現象として、グローチウスの議論にも、社會契約といふのは、歴史的事實なのか、論理的な必然性を意味して居るのか、甚だ混淆して居るものがある。この混淆の爲めに社會契約論は常に多大の批難を受けて居る。しかし、社會契約論の價値はまた、むしろ、この混淆に存するのである。

社會契約論は、一方に於て、當時の人人に、事實としての社會契約といふことを考へしめた。大は王權といふやうな事實から、小はまた所有權といふやうな日常生活の現象でも、それは國王なり所有者なりが、それ自身に於て持つて居るものではなくして、世の人人が國王なり所有者なりに持たせて居るものなることを知らしめたのであつた。自然法論に依つて神といふ支持者を失つて見ると、國王も、所有者も、世の人人が契約に因つてそれを支持してくれる外には、其の權利を保持して行く方法がないことになつたのである。

しかのみならず、國王の權力も所有者の權利も、世の人人の支持を得ることに依つて、ますます堅固なものになるのである。啓蒙時代は、一方に於ては封建制度の崩壞後、國家的統一の發達せんとする時代であつたが、また、他方に於ては、商業の發展につれて、個人の所有權の觀念が進捗する時代であつた。近世文化のこの二大事實は、國家も、個人的所有權も、共に、民衆がそれを理解し、それを支持し、それを尊重するところに成立したものであつたので、この意味に於て、それは、社會契約の思想を反影して居るものであるのである。

更に、語を換へて見ると、王權も所有權も、其の基礎たり淵源たる社會契約の趣旨に違反する以上は、契約の當事者の一方は、違反者たる他方に對して、その違反を責めることができるわけである。社會契約を論理的必然性のものと解し、之に由つてのみ王權と所有權とがジャスチファイし得られるものであるとするならば、そのジアスチファイされる範圍を越えては、王權と所有權とは、其の權威を主張し得られないことになるはずである。――斯くして、謂ゆる暴君放伐論乃至反逆權なる思想が主張されることになる。暴君放伐論乃至反逆權の主張は、グローチウス以前に於てすでに或程度まで發達して居たのであつたが、グローチウスは、如何なる戰爭は正當視さるべきであるかの問題の下に、之を理論的に組立てたわけになるのである。

グローチウス以後、社會契約論は二つの方向にわかれて流れることになつた。一方に於ては、主權の觀念を基礎とする國家統一の思想であり、他方に於ては暴君放伐論の結果としての革命運動である。近世の國家とフランス革命とが、斯くしてできたことであつた。この二つの流れは結局に於て、國民主權とい

[illegible]
[illegible]するに至つた分岐點を[illegible]、ナポレオン[illegible]
論は法律[illegible]其點を[illegible]

（二）

一七八九年にフランス大革命がおこつた。さうして人權宣言が制定された。その第一條には、人は其の出生及び生存に於て自由且平等のものだと規定されたし、その第十七條には、所有權は不可侵にして且神聖な權利であると規定された。——國家乃至法律は、神のものでもなく、法王のものでもなく、國王のものでもなく、ただ、人それみづからのものであるとされたのであつた。

人權宣言をうけて、一八〇四年にフランス民法が制定された。フランス民法は所有權及び契約の自由の原理の上に構成されたものであるとされることになつて居る。其の所有權は個人的にして且絶對的なものになつて居る。所有者は所有物の上に他人を排斥して任意な處分を爲し得ることになつて居るのである。所有權は所有者が社會の人々と共に物からの利益を享受する力法だといふ考へは殆ど見えて居ない。所有權が他人と交渉を持つのは所有者が所有物に關して他人と契約をしたときに限る。

[illegible]
法律[illegible]
[illegible]
生存競爭であることに[illegible]へられた。

人間本位といふ點から考へて見ると、人權宣言乃至フランス民法の基本となつた思想は、人間を國家の中心とし、社會の中心とするの原理を徹底したものと稱することが出來る。さうして、斯くして、法律は極めて簡明なものとなり、論理的なものとなり、組織的なものとなり、何人にも便利で且理解し易いものになつた。フランス民法の制定されたとき、世の人は、其の用語に於て何人も之を取扱ひ得るが如くできたのに驚き、其の内容に於て何人も之を首肯し得るが如くできたのを喜んだわけである。ナポレオンは、之を制定しつゝ、この法典に付いては註釋といふやうなものが世にでき得ないものと、深い自信を持つて居たのであつた。

フランス民法の制定といふことは重要な社會的事實であり、フランス民法は偉大な歴史的モニユーメントである。しかし、フランス民法が公布されてのち、間もなくフランス民法の註釋が世に出た。ナポレオンは、わが法典は失はれた、と叫んだと傳へられて居る。

社會契約論に共通な現象として、グローチウスの議論にも、社會契約といふのは、歴史的事實なのか、論理的な必然性を意味して居るのか、甚だ混淆して居るものがある。この混淆の爲めに社會契約論は常に多大の批難を受けて居る。しかし、社會契約論の價値はまた、むしろ、この混淆に存するのである。

社會契約論は、一方に於て、當時の人人に、事實としての社會契約といふことを考へしめた。大は王權といふやうな事實から、小はまた所有權といふやうな日常生活の現象でも、それは國王なり所有者なりが、それ自身に於て持つて居るものではなくして、世の人人が國王なり所有者なりに持たせて居るものなることを知らしめたのであつた。自然法論に依つて神といふ支持者を失つて見ると、國王も、所有者も、世の人人が契約に因つてそれを支持してくれる外には、其の權利を保持して行く方法がないことになつたのである。

しかのみならず、國王の權力も所有者の權利も、世の人人の支持を得ることに依つて、ますます堅固なものになるのである。啓蒙時代は、一方に於ては封建制度の崩壞後、國家的統一の發達せんとする時代であつた。また、他方に於ては、商業の發展につれて、個人の所有權の觀念が進捗する時代であつた。近世文化のこの二大事實は、國家も、個人的所有權も、共に、民衆がそれを理解し、それを支持し、それを尊重するところ成立したものであつたので、この意味に於て、それは、社會契約の思想を反影して居るものであるのである。

更に、語を換へて見ると、王權も所有權も、其の基礎たり淵源たる社會契約の趣旨に違反する以上は、契約の當事者の一方は、違反者たる他方に對して、その違反を責めることができるわけである。社會契約を論理的必然性のものと解し、之に由つてのみ王權と所有權とがジヤスチフアイし得られるものであるとするならば、そのジアスチフアイされる範圍を越えては、王權と所有權とは、其の權威を主張し得られないことになるはずである。――斯くして、謂ゆる暴君放伐論乃至反逆權なる思想が主張されることになる。暴君放伐論乃至反逆權の主張は、グローチウス以前に於てすでに或程度まで發達して居たのであつたが、グローチウスは、如何なる戰爭は正當視さるべきであるかの問題の下に、之を理論的に組立てたわけになるのである。

グローチウス以後、社會契約論は二つの方向にわかれて流れることになつた。一方に於ては、主權の觀念を基礎とする國家統一の思想であり、他方に於ては暴君放伐論の結果としての革命運動である。近世の國家とフランス革命とが、斯くしてできたことであつた。この二つの流れは結局に於て、國民主權とい

[illegible]

二

一七八九年にフランス大革命があつた。さうして人権宣言十七箇条が制定された。その第一条には、人は其の出生及び生存に於て自由且平等のものだと規定されたし、その第十七条には、所有権は不可侵にして且神聖な権利であると規定された。——国家乃至法律は、神のものでもなく、法王のものでもなく、国王のものでもなく、ただ、人それみづからのものであるとされたのであつた。

人権宣言をうけて、一八〇四年にフランス民法が制定された。フランス民法は所有権及び契約の自由の原理の上に構成されたものであるとされることになつて居る。其の所有権は個人的にして且絶対的なものになつて居る。所有者は所有物の上に他人を排斥して任意な処分を為し得ることになつて居るのである。所有権は所有者が社会の人々と共に物からの利益を享受する方法だといふ考へは殆ど見えて居ない。所有権が他人と交渉を持つのは所有者が所有物に関して他人と契約をしたときに限る。

[illegible] 生存競争であることになつ[illegible]れた。

人間本位といふ所からさうなると、人権宣言乃至フランス民法の共に立つた思想は、人間が国家の中心とし、中心の[illegible]とするの原則を徹底したものと称することができよう。さうして、斯くして、法律は極めて簡明なものとなり、論理的なものとなり、組織的なものとなり、何人にも便利で且理解し易いものになつた。フランス民法の制定されたとき、世の人は、其の用語に於て何人もこれを取扱ひ得るが如くできたのに驚き、其の内容に於て何人もこれを首肯し得るが如くできたのを喜んだわけである。ナポレオンは、之を制定しつつ、この法典に付いては註釈といふやうなものが世にでき得ないものと、深い自信を持つて居たのであつた。

フランス民法の制定といふことは重要な社会的事実であり、フランス民法は偉大な歴史的モニユーメントである。しかし、フランス民法が公布されてのち、間もなくフランス民法の注釈が世に出た。ナポレオンは「わが法典は失はれた」と叫んだと伝へられて居る。

□

フランス民法は、やはり、其の註釋を要するやうになつた。斯くまで論理的な內容と通俗な用語とでできて居ても、やはり、法律はわからないものであることになつたのである。

それと同時に、法律をして更にわからないものであるとするところの學說が世に出ることになつた。法律の歷史派といふものがそれである。

ナポレオンがフランス民法を制定したことは、ひとりフランス人を驚かしたのみならずまた實に他の諸國の人々を羨やましめたものであつた。其の結果として、十九世紀に於て、諸國がフランス民法を手本としてその民法を制定した事實は暫く之を措く。ドイツに於ては、ナポレオンの軍隊の撤退後、ドイツ國民統一の運動がおこり、おなじくナポレオン法典の例にならつて、ドイツ國民に共通な法典を編纂すべしとの議論が唱道せられることになつた。

その時、ドイツには歷史派の學說が起つた。その學說に依ると、法律は人間が任意に自由につくり得るといふものではないので、全く、歷史的產物としておのづから發生し、おのづから發展するものである。從つて、法律の本質を理解せんとには、法律の歷史を研究せねばならぬといふことになつた。

歷史派は、一方に於て、法律を發達物であるとしたのである。自然法論者が主張するやうに恒久不變なものではないとした。又、他方に於て、法律を以つて國民的精神の發現であるとしたのである。平等にして自由な個人が考へるやうな單純なものではないとした。

事物の發達といふ事を考へ、その多樣なる變化の間に於て學問的な或ものを把持しようといふことになると、事は相當に面倒なものになるのである。さうして、國民的精神といふやうなことを考へて見ると、それは少くとも或る意味に於ては甚だ神秘的なものであつて、容易に理解し得られないものになるのである。

しかし、兎に角に、歷史派がわれわれに證明したやうに、法律は發達物であり、從つて甚だしく多樣性なものであるのである。また、法律は國民的精神──之をフランス人に謂はせると社會意識──の發現であつて、一個一個の人が、しかく信じ、しかく欲する、といふやうな事實を基礎としては論ずることのできないものであるのである。

ドイツの人は、斯くして、法典編纂論をしりぞけることにした。

フランスの人は、固より其の民法法典を尊重したのであつた。ドイツの歴史派が何と言はうとも、フランス民法は自己の誇であり、中外に誇り得べきものであるとしたのであつた。

しかし、フランス人は、一八三〇年以後、その民法に歴史的方法を應用することになつた。その歴史的方法は、一八四八年頃から更に一生面を開くことになつた。ドイツの歴史派の學說は斯くしてフランスに其影響を及ぼすことになつたのである。

そは、フランスに於ける判例研究に於て之を見るのである。フランスの實際家、殊に辯護士の一部の人は、判例が社會の變動から一種の影響を受けることに注目し、判例の推移と社會のそれとの間に存する一種の必然的にして且合理的な關係を明かにしようとしたのであつた。それは一八三〇年頃からのことであるといふことである。さうして、其の後、其の研究に大學の教授が參加することになつた。元來、大學では大學固有の哲學的論理的な學說を持つて居たので、裁判所を沒論理的御都合的と罵り、之に對して、裁判所は、大學を、常に理論にのみ走る世の中知らずであると嘲つて居たのであつたが、一八四八年頃から、この兩者が互に近接することになつたのである。大學は、[illegible]ることを尊重したのであつた。それと[illegible]判例を[illegible]し、[illegible]し、二つの方面に[illegible]從ふことになつたのである。斯くして、十九世紀の[illegible]には、フランス民法が、すでに百年の古きを数したにも拘はらず、其の古きながらに、社會の新らしい推移によく順化し、社會の新らしい需要をよく統制することになつたのである。

わたくしは、右に掲げた一八三〇年と一八四八年とが、十九世紀に於けるフランスの革命の日附になつて居ることを、ここに特に明かにする必要はないであらうとおもふ。七月革命に因つて、フランスでは本當に反動政治がこの世からなくなることになつたのである。二月革命に因つてフランスでは本當にデモクラシーを實現することにしたのである。さうして政治上の斯くの如き變動につれて、法律生活が、歷史的方法に依つて批判されることになつた。即ち、第一に、法律は時勢と共に發達すべきものとされることになつた。成文そのものはたとひ恆久不變でも、其の運用はおのづから發達せねばならぬものとされることになつたのである。第二に、法律は社會の全體の意識と共に相順化し相調和して行かねばならぬものとされることになつた。社會意識の認めざるところには、成文は畢竟空文に終はる

のであるし、社會意識の求めるところはおのづから成文の運用にあらはれて來ればならぬものと理解されることになつたのである。

□

社會意識が法律を如何に動かしたかは、之をドイツの事例に徴することができる。

ドイツは、十九世紀のはじめに法典編纂論をしりぞけたのであつたが、十九世紀の末尾には、むしろ極端な成文法國になつたのである。さうして、其の各種の成文法中、最もおくれて成立し、しかも最も多く完美を誇ることになつたのは、一八九六年のドイツ民法であつたのである。

ドイツ民法がフランス民法に對して具有する特色は、契約の自由を第一義におかないで、その上に正義があるといふことを明かにしたといふことである。さうして、そのあらはれとして、われわれが特に注意すべきは、ドイツ民法が、到るところに、善良の風俗といふことを高調し、信義誠實の原則といふことを主張して居ることである。換言すれば、フランス民法の基本原則たる所有權及び契約の自由が、ドイツ民法では、常に善良の風俗に依つて調節を受け、信義誠實の原則に從つてコントロールされればならぬとされることになつたことである。

さて、善良の風俗――フランス民法やわが民法では、『公の秩序、善良の風俗』と唱へることになつて居る――とか、信義誠實の原則とかいふことは、決してドイツ民法に特有な事柄ではない。實は、フランス民法の運用上、フランスの判例が十九世紀の經過に於て屢示したところであるし、又、わが國に於ても、最近十數年來、判例に於て特に發達しつつあるところである。ドイツ民法は、成文法を以て、少くとも相當に高い程度まで、それを明かにしたことであつた。さうして、その故を以て、二十世紀初頭の法律文化を指導することになつたのである。

□

善良の風俗とか、信義誠實の原則とかいふことが、どういふ意味のものであるかを、簡單にわが國の判例で説いて見よう。

或る乞食やうの病者が、無斷で或るお寺の御堂に夜を明かさうとしたところ、住職がそれを追ひ出したといふ事件があつた。住職のつもりでは、其の乞食やうの病者を以て自己の所有權を侵害する者なりとし、その侵害に對して防衛を爲すために追ひ出したといふのであつた。しかし、わが大審院は、其の住

ば[illegible]あり[illegible]し、[illegible]する者[illegible]、使者等の代理[illegible]不[illegible]き、もしや使者等に法令若くは契約に基く扶助の義務なしとするも、之を扶助せずして遺棄するが如きは、善良の風俗を害することの甚しきものにして云々」と。斯くして刑法第二百十七條「老幼、不具又は疾病の爲め扶助を要す可き者を遺棄したる者は一年以下の懲役に處す」の規定を之に適用したのであつた（明治四十五年七月十六日判決）。

買戻約款付で賣買をした者があつた。契約の期日に買戻を爲す爲め相手方の宅に赴き、精算をしたところ、金五百二十九圓八錢を支拂ふべきことになつたに拘はらず、生憎、用意したのが金二百二十七圓に過ぎなかつた。そこで、事件が大審院に繋屬することになつた。判決に曰く、「賣方が其の有する買戻權を行使せんとするには、買戻の期間内に代金及び契約の費用を提供することを要すること民法第五百八十三條の明示するところなりと雖も、賣主の現に提供したる代金及び契約の費用の合額が極めて些少の不足あるに過ぎざるときは、買主に於て之に藉口し、代金及び契約の費用の提供なきを以て買戻の效力を生ぜずと主張することを得ざるものとす。蓋し、斯かる不足額は買戻を爲したる賣主に對し辨濟を請求するを得べきこと勿論なりとも、[illegible]きは、[illegible]て、斯る不足あるに過ぎざるときは、[illegible]るを相當とすればなり」と（大正九年十二月十八日判決）。

賣買に關する判例では、所有權は、常に善良の風俗に從つて行使されねばならぬといふことが明かにされたのであつた。買戻に關する判例では、債權關係は、常に信義誠實の原則に從つて調節されねばならぬといふことが示されたわけである。

善良の風俗乃至信義誠實の原則といふことは、法律上の用語であり、從つて法律的な觀念ではあるが、其の實質は常に社會意識に從つて定まるのであるし、從つて、社會意識と共に流動し、發達するものである。

わが大審院は、また、屢、「社會の通念」なる語を用ゐて居る。法律の解釋乃至運用は、社會の通念に從つて爲されねばならぬといふのである。さうして、社會の通念がしかく要求するところを指摘して、また、屢、「條理」と謂つて居る。條理とはしかあらざるべからざるの理といふことを意味するのである。

□

しかく社會意識と共に流動し發達すべき原則を、フランスの

法とても、實は、その十九世紀の當初に於て知らないではなかつたのである。現にフランス民法の正文中に其の用語を發見することができる。さうして、それからして、フランスの判例が、解釋として其の思想を發展せしめたのであつた。わが民法のなかにも、固よりこの用語乃至觀念が認められて居らぬのではない。されば、われわれとても、大審院が解釋として斯く主張することを以て、正文を越え、論理を無視したものであるとは考ふべきでないのである。

しかし、ドイツ民法を通覽するときは、善良の風俗乃至信義誠實の語が特にわれわれの眼につくのである。さうして、其の趣旨を更に徹底したところに一九一九年のドイツ新憲法ができ上つたのである。

ドイツ新憲法第一五一條第一項に曰く『經濟生活の秩序は』――從つて經濟生活を秩序立てる法令は――『各人をして人間たるに價する生活を得しむることを目的とし、正義の原則に適合することを要す。各人の經濟上の自由は此の限界内に於て保障せらる』と。之はフランスの人權宣言第一條に對應するものである。人權宣言では、各人の自由平等といふことが高調された。しかし、ここでは、各自の人間らしき生活といふことが明かにされることになつたのである。そこに、微妙ではあるが、同時に大きな差異が認められねばならぬ。

ドイツ新憲法第一五三條第三項に曰く『所有權は義務を伴ふ。所有權の行使は同時に公共の福利の爲めに爲さるることを要す』と。之はフランスの人權宣言第十七條に對應する。人權宣言では、所有權の不可侵にして神聖なることが示されたのであつたが、ここでは、所有權が其の片面に於て常に義務を伴い、其の權利と義務とが、相抑制し、相調和して、公共の福利の爲めに運用されねばならぬことがうたはれて居るのである。差異は、ここにも亦微妙であり、同時にまた、重大であると謂はねばならぬ。

□

今一度、グローチウスを想起することを許されたい。グローチウスは、法律を教權と王權とから解放して、人間たるわれわれのものとした。その人間は、グローチウスに從へば、社交性を本體とするものであつたのであるが、グローチウスを受けて十九世紀に發達した法律思想は、自利心を本體とする人間を中心とし、社會を解するに生存競爭を以て始終するものなりとしたのであつた。

自利心を本體とする人間が歴史派の謂はゆる國民的精神乃至

[illegible]に立つて[illegible]されねばならなかつたところに、そこに風俗と信義誠實とが強調せられ、其のむしろ神秘的な因果的結動乃至やや漠然たる社會意識を更に現實化——謂はば常識化——して見たところに、人間たるに値する生活を營み、人間たるに値する理性を具有する人間と云ふことが考へられることになつた。社會の生存競爭が生存協働と考へなほされることになつた。グローチウスの謂つたやうな人間の社交性が漸くにして理解されることになつたのである。——グローチウスの著述三百年を紀念する意味は、まさしくここに認められねばならぬのである。

□

グローチウスの提言とわれわれの、今、持つてゐる法律思想との間には差異がある。それは、グローチウスは、契約を以て、法律上或る意味に於て最高のものなりとし、之に依つて、制定法と自然法との調和を保たうとしたに對し、われわれは、契約を統制する更に高き原理に依つて兩者を融合して見ようとして居る點である。

グローチウスの見解に於ては、人はすべて理性を有するものであるとされ、その故に、其の契約も亦當然に合理的なるべきもの[illegible]考へられた[illegible]人間といふものを個別的に考へて見ると、それは必ずしも常に合理的に活動するものではないのである。ここに於て法律の社會的作用が營まれるわけである。法律は、その必ずしも合理的ならざる個人に對し、其の契約を善良の風俗に依つて調節し、其の行動を信義誠實の原則に從つてコントロールして、其の法律生活を合理的たらしめるものなのである。しかも、法律の其の統制力は、人間を超越した神乃至理想體といふやうなものに由來するのではなくして、人間の集合たる社會の意識に基づくのである。法律の規範は社會意識が之を創造するのである。其の強制力は社會意識が之を支持するに因つて成立するのである。故に、各個人の契約を超越した社會意識の欲するところが、法律の基本と解せられて行かねばならぬであらう。　若しグローチウスの考へを論理的に展開するならば、グローチウスの考へたやうな人間は、畢竟、社會意識の擬化たる斯くの如き人間——社會人とでも名付けやうか　であるべきであり、從つて、われわれの今日の考へは、グローチウスのそれと趣を異にすと謂ふべきではないのであらう。しかし、兎に角、われわれは、個人を超越した或る人間を基本として考へて居るのであるし、契約を超越した或る意思を求めつつあるのである。

この一種の人間の一種の意思に依つて法律を處置することに因り、制定法と自然法とは最早二元的なものではなくなるのである。この意思が兩者の間に介在して兩者を調和するのでなく、兩者を融合して、之を唯一體たらしめるのである。社會的事實として存立する現行法が、一度これを社會的規範たる法律として理解されるときに、そこに合理的な或るものが看取されることになるのである。

□

今日の法律は、この超越的な人間の超越した意思を求めるのに三個の方法を用ゐて居ると謂ひ得よう。

第一は、立憲政體に於ける民選議院の制度である。第二は、其の民選議院の制定する法律の運用に方つて、善良の風俗乃至義信誠實の戒律を獨立なる裁判官に一任して居ることである。さうして、第三には、裁判官が其運用を爲すに付いて調停制度の補助協力に重きをおくことにして居ることである。

わたくしは、最近の法律現象に於て、民事刑事にわたり、如何に裁判官の權限が擴大されて居るかの詳細を他の機會に讓らねばならぬ。しかし、兎に角、上に擧げた三つの判例だけからでも其の一端がうかがはれることと信ずる。

わたくしは、各國が、最近に、如何に調停主義に重きを置いて居るかの實況を、他の論述に任せねばならぬ。兎に角、調停は、今や社會問題を解決するに最も重要なものとされて居る。それは權力を以て當事者に臨むものでないのみならず、傳統的な法律を離れ、調停委員たる素人が、其の訓練された常識に依つて事態の解決を見出すものであるのである。

民選議院の見るところと、裁判官の裁量するところと、さうして調停委員の解決するところとに因つて、社會の通念が法律生活の間に行きわたらうとして居るのである。これが、今、法律家として、わたくしどもの持つて居る法律思想である。

大審院は、曾て、謂ゆる婚姻豫約に關する判例に於て、「其の違約者たる一方は被害者たる相手方に對し、其の有形無形の損害を賠償する責任あることは、正義公平を旨とする社會觀念に於て當然とするところにして、法律の精神亦之に外ならずと解すべし」として居る（大正四年一月二十六日判決）。この判例に從ふときは、法律は、最早上から命ぜられるものでなく、下、「正義公平を旨とする社會觀念」から湧き出るもので、法律は、その謂ゆる社會觀念を採つて自己の『精神』とするに外ならないものである。

斯やうに考へて來ると、法律は、どこまでも人間の爲めに人間がこしらへるものにほかならないのである。しかし、この、人間は個人的な人間でなくして社會的な人間である。

されば、法律は、畢竟、常識の結晶に過ぎないものとなつて來るのである。しかし、その常識は訓練された常識でなければならぬ。健全な常識でなければならぬ。自利心を以て終始する人間の常識ではなくして、正義公平を旨とする社會觀念上の常識でなければならぬ。

□

歴史派の人人は、われわれに教へて、成文上どんな法律ができても、それが國民的精神と一致しない限り、それは空文に終るであらうと謂つて居る。空文は、其の實質に於て法律たるものではない。

法律の成立に關する國民的精神乃至社會意識の力は、これに止まらない。社會の欲求し希望するところは、議會を通じて法律となり、裁判官を通じて判決となり、調停委員を通じて調停となるのである。

[illegible]

□

しかるにも拘はらず、わたくしは嘗て法律知識を専門のものであると謂ふのであるが、それに、上來論じ來つたやうな良の風俗とか、信義誠實の原則とかいふことを、一般の人人は、法律上の原理としては案外にも承認して居ないからである。

否、法律家と稱する人人のうちにでも、斯やうな原理を承認することを拒んで居る者がある。それ等の法律家が實際問題に關して法律論をするときには、常に、個人主義的な所有權及び契約の自由をふりまはすのである。わたくしに謂はしむれば、かやうな人人は、法律の進歩を阻害しつゝあるので、實に法律家と稱すべきものではないのである。

さうして、ひとりかくの如き似而非法律家はかりでない。世の多くの人人が自己の利害に付いて法律上の問題を引き起したときには、必ずや、常識論と稱して、やはり、個人主義的な所有權及び契約の自由を高調するのである。かやうな常識論の爲めに、本來常識に外ならざる善良の風俗乃至信義誠實の原則が

意外にも其の當然な承認を得ず、其の適當な發展を全うし得ないことになるのである。

されば、之からの裁判官は、眞に善良の風俗乃至信義誠實の原則を理解して居る法律家から選任されねばならぬのである。調停委員も亦、例へば借地借家調停法の規定して居るが如く『特別の智識經驗ある人』に就いて選任されねばならぬのである。帝國議會の議員も、亦選良として眞に法律らしい法律を制定するに堪ふべき人を選擧することにせねばならぬ。

□

法律の常識化乃至社會化と云ふことは、單に或る程度の法律的智識を一般に普及せしめ、之を社會一般の常識の内容とするといふが如き單純な問題ではない。少くとも、わたくしは、それ以上の意味を持たねばならぬものであると考へる。

われわれの生活といふ事實は、現に經驗するところの最も明白なるものである。しかし、之を生物學に見るとき、醫師は、生活を最も複雑にして且困難なものとせざるを得ないのである。之をしかく複雑にして且困難なものと理解することが社會の一般に行きわたつたとき、衞生と治療とが合理的なることを得るであらう。法律生活も亦生活の一面である。之も亦、われわれが常に經驗する明白な事實である。しかし、其の明白な外形の裡に、善良の風俗乃至信義誠實の原則といふ複雑にして且困難な機構が存立するのである。その斯くの如き機構が法律に内在することを、世の人人が適當に理解したときに、われわれの法律生活は合理的なることを得るであらう。

法律が教權と王權との手に存した間は、法律の理解は必しも困難でないのである。何となれば、法律は法王乃至國王の命令に過ぎないからである。しかし、斯やうな法律は、人間たるわれわれが眞にわれわれのものとして持つて居る法律ではなかつたのである。法律が、教權と王權との手から解放され、眞にわれわれが制定しわれわれが維持するわれわれのものとなつたとき、法律の本體たる善良の風俗乃至信義誠實の原則は、常識から出ながら常識を超越する或るものになつたのである。しかし、そこに貴い或るものがあり、親しみのある或るものがあると考へねばなるまい。――それは實に合理性そのものであるからである。人間の本性そのものであるからである。

經濟學に於ける或る問題の解說

法學博士　堀江歸一

一

經濟學の解說として、執筆する當初の豫定であつたが、愈々と爲つて考へて見ると、限りある紙數内に於て、斯學の全班に亘る解說の行はれ得る道理はないし、强いて之を爲したならば、極めて簡單なる記述を以つて、事を了するの外はない。故に私は此題下に於て經濟學の學說並に其應用に關して、或る問題を提へ來り、解說を試みることゝした。而して問題は國民經濟に關するものから始まつて、結局國際經濟に關するものに移ることゝしたのであるが、固より事の一部分であつて、其全般に及ばさることとは、讀者の諒恕を請はさる可からさる所である。

昨年物故した英吉利の經濟學者アルフレツド・マーシヤル氏が種々の意義に於て、後代に其名を遺す可き偉大なる人物であつたことは、何人も首肯する所であるが、氏は經濟學を以つて、人生に於て、有形的必要物を獲得し、又之を使用することに、最も密接の關係を有する個人的並に社會的行動を研究する學問であると云ふ解釋を下し、此見解に基いて、斯學を大成することに、畢生の努力を試みたし、又ケムブリツヂ大學に於けるマ氏の後繼者であるエー・シー・ピグー氏は明に「福祉の經濟學」とか「富と福祉」とか云ふが如き表題を付した著書を公にし、專ら國民所得の增殖、分配、利用等に就て、綿密なる研究を企てたのである。要するに經濟學が有形的方面から、如何にして人生を幸福ならしめるか、又如何にして之を繁榮せしめるかを研究するものであることは、私の認める所であつて、一方に富其ものゝ研究の重大であると共に、富と人生との交渉の閑却す可からさることも、亦論を俟たさる次第である。

經濟學の一部門として、富の生産と云ふことが說明される。有形的方面に於て、人生を幸福ならしめんとするには、先づ富の生産を盛にして、富を增殖するの道を講ずることの必要である

ことは、何人も認めざるを得ざる所であらう。往時に於ては、富の性質に關する人の見解の混沌たることを免かれざる時代もあつたが、近代に於ては、何を以つて富とす可きやに就て、世人の意見は定まる可き所に定まつた。而して經濟生活の依つて存在する所以として、將た又經濟學研究の根本的觀念として、一般研究者に認められる所は效用、價値、物の稀少性、欲望並に欲望の滿足等である。若しも人に何等の欲望なるものが存在せず、何事をも何ものをも欲しない、世の中を悟り澄した仙人の如き性格を持つて居つたり、又相當の欲望は持つて居つても、效用ある物資の供給頗る豐富であつて、求めて得られざることとなく、空氣や水の供給に苦しまざるが如く、米や、衣服や、其他の物資に於ても亦同樣であること、恰も人の蓬萊島に遊んだ狀態であつたならば、物に稀少性なく、物に價値を生ぜず、從來世人の考へて居るが如き經濟と云ふことの存在しないと共に、經濟學も亦說明の根據を失ふに至るのである。然るに今日吾人の生活を營んで居る現世の狀態は如何であるか。總ての物に必ず稀少性と云ふものがある。以前經濟學者が效用あつて、價値なき物の例として、空氣や、水を擧げたことがあるが、其水にしても、今日大都會に於ては、人工的設備を通して、限られた分量の供給を受けなければならず、空氣にしても、新鮮なるものを呼吸するには、或る費用を投じて、都會の中心地を距る場所に居を置かなければならないことゝ爲り、效用のある物、必ず稀少性と云ふ特色を持ち、此點から價値を生じ、價値ある物を得るに就ては、同じく價値ある物を以つてしなければならないこととの關係から、又他の一方には社會的環境に依つて、欲望の增進することとの關係から、益々多くの價値ある物を得ようとし、斯る目的の安易なる狀態の下に達せられた場合に、人の生活は繁榮を告げるが、其達せられない場合や、達せられるにしても、困難なる條件を忍ばざる可からざる場合には、勢國民生活の窮迫を招かざれば已まざるに至るのである。

二

斯くて經濟學に於ては、富の生產と云ふことが重要視された。生產の要件が天然力、勞働並に資本の三者であることは、以前から認められて居り、隨つて富の生產を盛ならしめるに就ては、如何に天然力を開發し、其利用を旺盛ならした可きものであるか、勞力に就ては、其勞働效程を大ならしめるには、分業の法則を適用することが必要であるが、如何なる狀態の下に、此法則を働かしめ可きものであるか、抑も亦資本の供給を增加する道として、如何にして國民に貯蓄を行はしめ可きもの

[illegible]るが、工業を始めとして、多くの產業に於て、[illegible]の法則の或る時代に働き出すことは、勢ひ免かれ難き[illegible]あるが、此法則の働きを回避し、又之を制限するには、如何なる方法を以つてす可きものであるか、一方に工業に於て收穫遞增の法則の働くのは、當然であるか、尚ほ充分に此法則を働かせて、低廉なる生產費の下に、工藝製造品を社會に供給するには、如何なる方法を以つてす可きものであるか。是等は何れも富の生產に關して、起る問題であつて、其解決の如何に依つて、國民生活の有形的方面に於ける優劣の差を生ずるのである。

之を大體の狀勢から云へば、富の生產される高が年と共に增加するのは、爭ふ可からざる事實であつて、殊に此事實は工業の方面に於て、著しきを見る。唯、一國が國を立てゝ以來、久しきに及ぶ時には、農業其他の原始的產業に衰微を來すことは、勢の免れ難き所であるが、一方に右の如く工藝製造品の產出、饒多となれば、之を外國に輸出して、以つて農產物を新開國から輸入し、以つて、國民の生活を繁榮ならしめる道を講ずるに難しとしないであらう。現に之を我國の實際に徵して考へると、古來瑞穗國と稱されて、國內に多額の米穀を產出し、其[illegible]內に於て[illegible]が國內に工業の發達を促す點に於て、[illegible]つたかは、吾人の認めざる可からざる所である。然しながら石炭の供給に就ては、長年月に亘つて、之を考へると自ら或る制限の存することが想像される。百年の後に採掘の限度が到來するか、百數十年の後に到來するか、地質學者の研究に仰がなければならない所であるが、更に斯る時期に近づきつゝあるものとすれば、一方に外國から低廉なる石炭の供給を受けるなり、他の一方に水力を利用するなり、何れかの方法に依賴して工業の生產力を維持することが我國當面の問題と爲るのである。

農業や工業は直接に物貨を產出する事業であるが、是等の外に、商業の如き、運輸業の如き、直接に物貨其ものは產出しないとしても、尚ほ物貨の運搬交換の行はれる方便を供へて、物貨の效用を增進し、此關係から生產業の一種として、社會に貢獻することの大なるは論を俟たない。商業の內の外國貿易業、運輸業の內の遠洋航海業の如きは特に國際經濟上の關係に於て、一國の地位を維持し、發展せしめるの故を以つて、特に大なる效

果を發揮するを得るのである。

何れの道を以つてするを問はず、富の生産が増加したならば、此一事を以つてして、一國の經濟的繁榮は必ず維持され、國民をして總て其利益に浴せしめるを得る道理であるのに、實際は之に反し、一方に富の生産の増加し、經濟的繁榮の旺盛なる事實を眼前に眺めながら、他の一方には、貧困窮乏と云ふが如き、忍ぶ可からざる幾多の事實の經濟生活を襲ひつゝあるは、何故であるか。文明國の大都會には、文明の智識の供へる一切の設備は廣く國民に依つて、利用せられ、生活の華美、人目を惹くに足るものゝある一方に必ず暗黒面があつて、此方面に住居する者の生活は所得の不足、不規律に依つて、衛生、教育、修養等生活の向上を期する總ての要件に缺け、文明社會の備へる總ての機會から、疎外されるの觀を免れない。斯くて一度び有産者階級に生を享けた者は有産者としての地位を世襲的に保持するを得るが、無産者階級に生れた者は子々孫々の末に至るまで、到底此地位を脱するを得ざることゝ爲るのである。然らば一國における經濟的繁榮と云ふことも、社會の一部分に及ぶに止まり、全體を光被するを得ず斯くて其價値に就て、大なる疑問を生ずるのである。

三

右の問題は經濟學に於ける富の分配に關係する。富が生産された曉に、地代、利潤、賃銀等の形態を以つて、地主、企業家、勞働者の如き、總て富の生産に干與し、貢獻した人々の間に分配されることは、一般に承認される所であるが、富の分配されることゝ、其分配の公正を保つことゝは全然別種の問題に屬し、兩者の併せ擧げられるが如きは、實際に於て、容易に望み得ざる所である。

從來の經濟學は富の生産と云ふことに重きを置き、生産を盛ならしめる方便として、私有財産制度と云ふものを尊重し、又此制度の下に、人々の間に、自由競爭の行はれることを肯定した。一方に十九世紀を通じて、個人主義を基礎とする立法が歐洲文明國に行はれ、他の一方に富の集積に依る資本的生産制度の勃興したことは、右の趣意に出發する經濟學に確乎たる根據を有するに至らしめた。一部人士の資本主義經濟學と稱するもの即ち是れである。然らば經濟學研究の基礎に立てられた私有財産制度と自由競爭とは、如何なる效果を有するものであるかと云へば、是等兩者の或は存立し、或は働くことに依つて、一國に於て如何に増加した富の生産高があつても、其生産に干與

[illegible]するに在らしめる如何なる組織の下に、國民をして經濟を營ましめたならば、以つて富の生産を盛ならしめると共に、其分配を公正にし、富と人生との關係をして、人々に取つて幸福のものたらしめるを得るかと云ふことは、多くの機會に於て、經濟學者の研究に上つた所であつて、此見地から、從來の如く自由競爭を經とし、私有財産制度を緯として、織り出された經濟組織が果して正しきものであるかどうかに就て、疑惑を惹起さゞるを得ざるに至つた。蓋し富の生産と其分配との間に於て、如上の背馳を生ずるに至つたのは、畢竟自由競爭の餘弊であり、又私有財産制度の不公平たる存在の爲めに　其威力の大なるに過ぐる結果ではなからうかと云ふ疑問を生じたからである。

自由競爭若しくは競爭の自由と云ふことが競爭に當面する人々の間に於て、才能知識を練磨して、其上進に資するを得る道理は競爭其ものを肯定する論者の說く所であつて、斯くて彼等は適者生存、優勝劣敗、自然淘汰等の諸法則の經濟上に働く利益を承認しようとするのである。然しながら人は生れながらにして、其天賦の能力に若干の差違があり、此差違は後天的に增大することを免かれざる其上に、或る人は自己の能力を事物に應

[illegible]

關係に置いて、互に自由の競爭に從はしめた[illegible]に何の利益があるであらうか、而も亦競爭の自由なるもの、決して、競爭の公正を意味するものではないのである。從來[illegible]て發達した[illegible]派の經濟學に於ては、自由競爭が人々の間に於ける經濟的關係を律する金科玉條の如くに考へられ、賃銀も、利子も、地代も總て之に關係する當事者間の競爭に依つて、決定されて、始めて其公正を得、其正常に就くものゝ如くに信ぜられ、此信念から出發して、自由放任主義なるものが永く經濟政策を律する根本觀念に充てられたのであるが、自由競爭に從ふ當事者の地步や、實力の對等ならざる爲めに、却つて不公正なる結果の生ずる事實が實際に暴露されるに至り、自由競爭の働きを多くの點に於て制限する必要が認められ、自由放任主義の根國を以て稱せられる英國に於てすら、今や賃銀の決定に對して、公權の干渉の加へられるに至つたのは、最も[illegible]るとしなければならない。

四

自由競爭は經濟上の關係に於て、人の行動に對して、加へられる束縛を除却することを必要とするのであつて、廣く見れば、經濟的自由の發現した一の形態である。經濟的自由と自由競爭とは、斯の一面の如きものに外ならない。經濟的自由の發揚された結果として、人が職業の種類たり、之を行ふ場所なり、將た又之に從ふ時期なりを選擇するに當り、自己の意思以外の何ものにも掣肘されざるに至つたのは、明白の事實であつて、斯くて適材を適處に居らしめるの結果を齎したが、同時に個人間の競爭を劇烈なるものたらしめたことは、論を俟たない。一方に經濟的自由の一方面として、國際交通の自由が擴張され、外國貿易の自由は人をして價格の最も低廉なる市場に於て、物資を購入せしめると共に、其最も高價なる市場に於て、之を賣却せしめるし、資金融通の自由亦人を驅つて、資金を增殖し、最高の利子を獲得するに、好都合の機會を捉へしめるのである。

斯の如く經濟的行動の自由なるに至つた結果として、人は其富を資本として運用するに、絶大の機會を供へられた次第であつて、運用する資本から收益を生み出し、其一部を貯蓄することに依つて、財産を作る。而して今日の法制に於ては、財産に關する權利は必ず尊重され、其保護の厚きを致すことの結果、人をして自ら經濟的行動に從ふの刺戟を得せしめ、益々財産の獲得、其增殖に力を盡さしめるに至るのである。然らば財産權とは何ものであるか。是れは要するに或る物を方便として、所有者自身の欲望を充す權利であつて、所有者が此權利を有する以上は、同一物の使用に就て、他人を排斥するに至ることが當然の結果と爲る。斯くて或る人の財産權を有することゝ、相對して、他人は其財産の使用を侵害せざる義務に服從しなければならない。斯く或る人の財産に對して、他人を排除し、他人をして之を侵害せざる義務に服從せしめる點に於て、私有財産制度の意義が發揮されるのであるが、同時に此事に關聯して、私有財産制度に對する社會上の問題の發生することを免かれないのである。

有の問題に對する議論は姑く之を措き、一國が上述した權利義務の關係を法定し、一方に權利を保護すると共に、他の一方に義務を強要したものが即ち財産制度であつて、人の勤勞を刺戟し、又資本運用の效果を全からしめるものは、一に財産制度の完全なる働きに依るものと稱されるのである。然らば人は如何にして財産制度を運用して、其效果を擧げるであらうか。財産制度を運用するに當つて、重大なる方便と爲るものは、契約の自由であつて、此自由の下に、賣買、交換、貸借を行ひ、以

[illegible]

しあるものは、財産結合の權利と[illegible]

る。財産結合の權利として、特に著しきものは會社組織であつて、會社殊に株式會社は財産の勢力を大ならしめること、少たしとしない。株式會社に於て、株主の責任の有限である一方に、株式の賣買の自由であることは、相連なつて多數の人から、資本を醵集して、大規模の會社を組織するに至らしめると共に、株主中から選擧された重役に資本の運用を託し、自由の手腕を揮はしめる。會社殊に株式會社の組織あるが故に、財産を所有しながら、財産を運用する能力を有せざる者が會社の株式を所有し、會社に財産の運用を託することに依つて、財産を保全し、又其效果を大ならしめるを得る事實は吾人の認めざる可からざる所である。

財産結合の權利と相俟つて、財産運用の效果を全からしめるものは、財産讓與の權利であつて、一國の相續法は財産相續の依つて行はれる方法を明にし、社會秩序の維持に資すると共に、財産の保全せられる道を講し、一團と爲つた財産を何時までも其儘に大ならしめんことを期する。我國に於て法定家督相續人の制を定めたり、華族社會に世襲財産の制度を置いたり、一般社會に於て、家憲を制定し、家長一個の裁斷に依つて行う

[illegible]すことは、[illegible]へられる。

五

斯の如く財産制度が成立し、財産の大を致すに於ける結合の自由がされると共に、經濟界に於ては、大規模生産の組織を可なりとする者が幾多の方面から主張される。即ち大規模經營の事業に於ては、

第一、從業員や、勞働者の能力を標準として、彼等をして各自其適した方面の仕事に就かしめるを得る、

第二、工場に於て、機械殊に高價なる機械の運轉に力を盡さしめる、

第三、迅速に諸種の改良を應用する資本と資力とが[illegible]へられた、

第四、小なる發明改良に工場内に於て、實驗的に試驗される、

第五、原料品や、生産技術の選擇を巧妙にし、思想をして其正しきに就かしめる、

第六、各方面に於ける擔當者、宜しきを得て、物價に對する

監督、訓練並び行はれる、と云ふが如き諸點が擧げられるし、單に斯る技術的經營の方面のみに止まらず、金融上の關係に就て云へば、大規模事業に於ては、其信用程度の高きことに依つて、低利の資本を利用し、斯くて生産費の縮小される利益が擧げられるのである。唯大規模に事業の經營される場合には、當業者の數は次第に減少し、小事業家の對立から、大事業家の聯合と云ふ狀態に進み、其進むに隨つて、自由競爭の作用の制限されるのは、必然の事實である。然らば其結果として、右に述べた生産費減縮の利益が物價低落と云ふ形に於て、廣く消費者に頒たれるに至るか、其れとも利潤增加の形に於て、資本家の獨占する所と爲るか、測り知るを得ざるに至る。斯くて企業の聯合に對しては、國家に於て嚴重なる監督を加へ、消費者の利益を尊重しなければならないと云ふ議論を生ずると共に、更に一歩を進めて、消費者の團體をして直接に生産に參加せしめ、又は生産を掌らしめることを必要とする議論に接するのである。

右に述べろが如き次第であつて、財産權なるものは、今日の經濟組織に於て、重要なる地位を占め、資本主義の根柢と爲ると云へる。而して資本主義の見地から、其社會的に承認される所以は第一、物は一個人に獨占的に使用せしめて、始めて其效用**を增進するを得ること、**第二、物の生産は人の勤勞に基くのであつて、隨つて勤勞を致した者に其結果を與へなければ、何人も勤勞を致さゞることの二點に歸着するのである。然しながら以上の見解の如き、要するに人を個人的に、又利己的に見て立論したものであつて、財産權を斯く個人的に、又利己的に運用して、憚らざる結果は今日の經濟組織に現實に暴露し、社會に於ける比較的少數者が天然物件は勿論、生産交換の機關を所有し、又は之を支配する一方に、其他自己の勞働を供與して、生産の衝に當る者は此少數の支配階級に隸屬し、生産の方法、程度、生産業の經營等を擧げて、其定める所に一任し、啻に競爭に依つて、定まれる賃銀を領收するに甘んじ、然も其賃銀たる生活の最低限を維持するに止まる。財産其ものは社會全體の發達と共に、增價を生じ、所有者をして所謂不勞利得の獲得を樂ましめ、利潤の內の企業利得亦其獨占的性質に乘じて、增進する間に立つて、賃銀は動もすれば勞働者の間に於ける競爭に依つて、低落する傾きを持ち、斯る競爭の存在は更に資本家の乘ずる所と爲つて、低落の勢を甚だしからしめるに於ては、社會に於ける富の分配に大なる不公正を生ずるや、論を俟たざる所である。殊に今日の財産制度に於て、其效果を發揮せしめることの大なるものは、財産相續の制度であつて、現に我國の如き

[illegible]得せしめ、以つて一日[illegible]しむる
ことを防ぐ。斯の如く然れば、財産家を親とした者に偶然的に有産者階級に属するを得るに反し、社會の秩序の確立した今日に於ては、無産者の列から出でゝ、有産者の班に入ることは、甚だ困難であつて、兩種階級の間に、差別の生ずるは勿論、各階級の間に、教養、趣味、娯樂等の異なる結果として、益々其溝渠の深きを致さざるを得ないのである。

六

右に述べた私有財産制度を緯とし、自由競爭を經とする現行の經濟組織を可なりとする信念は如何なる邊に在るかと云へば、第一個人は自己の利益を最も善く知ること、第二國家に於て、制限を加へざる限り、個人は常に自己の利益を逐うて、行動する者であつて、斯くて其利益は完全に遂げられること、第三斯る個人の利益は相合して、社會全體の利益と爲り、兩者の間に何等の矛盾杆格を生ぜざることの三點であつて、アダム・スミス、リカードー、ミルの如き英國正統派經濟學説の成立並に發展に貢獻した諸學者は何れも殆ど無條件とも云ふ可き程度に於て、是等の説を承認し、賛揚し、時の政治家亦立法上に其

[illegible]
せしめようとする考へに、工場法に關する立法に於て[illegible]除外例を以つて、目す可きものなしとしたのみ[illegible]に於て自由放任主義が經濟政策の基調と爲り、内に於ては、經濟上の行動に對する國家の干渉を出來得る限り排除して、自由競爭の働く領域を廣くすると共に、外に向つては、貿易通商の關係を自由にし、國民をして價格の最も低廉なる市場に於て、物資を購ひ、其最も高價なる市場に於て、之を賣却するに至らしめたのである。而して英國に於て、一方に自由貿易の行はれると共に、他の一方には産業革命の効果の現はれることに依つて、經濟社會の振興を來し、國民生活の繁榮を致すや、此事は自ら自由放任主義の勝利を語るものゝ如くに考へられ、斯くて英國に於ける資本主義は牢乎たる根柢を築くに至つたのである。ウヰリアム・カンニンガム氏は此般の關係に就き、其小著「英國資本主義の進歩」に於て、

私人の資本家に依賴する斯原則は國の繁榮に深き關係を有するものとして、多くの人々に採用された。彼等は自由放任主義を以つて、英國の有形的進步に資する最善の政策であることを主張したのみならず、他の諸國に依つて、其有形的繁

榮を進める最良の方便として、早晩採用されるに至るものとした。斯くて資本の自由なる活動は國内に於ける總ての經濟的制度の必要を無用のものたらしめるに止まらず、世界全體に最善の状況を供へる方便と爲り、一國と他國との間に於ける經濟的關係を律する計畫を排除するものであると解するに至つた。是れがコブデンに依つて、民衆化された教訓であつて、英國の關する所に就て云へば、穀物條例の廢止に依つて、捷利を告げたと云へるし、又續いて行はれた通商條約の制度は世界を通じて、一般の承認を經る一階段であると認められた。

と說明した。

然らば右の如き經濟組織に對しては、何等指摘す可き缺陷を生ぜず、圓滑に其進行を見るを得たかと云へば、決して其然るを得なかつた。英國の如き自由貿易を基礎として、對外經濟上の關係を律する一方に、内國の立法亦自由主義に據り、斯くて國の繁榮、國民の滿足を收め得たのは、暫時の間であつて、自由貿易政策だけは、其後永く繼續し、今日尚ほ其著しく潤色された跡を認めないのであるが、國内立法上の問題に至つては、從來の個人主義から、現代の集産主義に至るまで、著しき變革の行はれるを見た。斯る變革を生ずるに至つたのは、要するに自由放任主義の健全なる立法の原則であることを否定すると共に、國家の指導又は干渉は假令ひ個人の選擇又は自由の行はれる範圍を局限するとしても、或る利益を生ずると云ふ信念を持つことゝ爲つた結果である。而して自由放任主義の否定は結局從來の經濟組織の下に生ずる經濟的不公正の著しきに基くものであつて、何を以つて其種の不公正とするかと云へば、左の如き數點に分たれる。

第一、物質的文明の發達に依つて、富の産出高は増加したとしても、此富は廣く國民に分配されず、一部の有産者階級の土地や資本を所有することの關係から、其階級に依つて、専私される。

第二、勞働者は勞働の意思を持ち、又此意思を充すだけの能力を備へて居つても、之に適する職業に就くを得ず、經濟社會に變動の起るや、之に支配されて、失業の難に罹る場合の極めて多いこと、

第三、或る者は間斷なく職業に就くを得るとしても、之に對して拂はれる賃銀は決して豐富なるものでなく、現在の生活を優良なる狀態の下に、支へるの困難であるは勿論、自己の老後に於ける生活なり、子女の教養なりを保障するに足らないこと、

[illegible]
[illegible]顧みざる程度の勞働に[illegible]せしめたり。又た[illegible]の其に、不完全なる子女をして早く職業上の苦痛を嘗めしめ、將來に禍を醸すに至ること。

第五、經濟社會の變動から生ずる損失は減給、失職等の形態に於て、事業の衰微に何等の責任なき勞働者、俸給衣食者の負擔する所と爲り、資本家は多く之を回避すること。

七

茲に於てか從來の經濟學に於ては、富の生産に關する法則は多く之を自然の働きに任せた如く、分配に關する法則に就ても、亦自然の作用を認め、地代はリカードー一派の主張した通り、耕作境界點の上下に依つて、定まるものとし、随つて時勢の進歩と共に、一國の人口増加し、食料品に對する需要の大を致せば、致すだけ、新開國から價格の低廉なる農産物の國内に輸入されるに至らざる限り、地代の増進は極まる所を知らざるが如くに説明され、金利に就ては、資本の蓄積高が増加し、一方に資本に對する法制上の保護が厚く、其放下運用の安全を加へると共に、低下するものと考へられるが、金利と相並んで、利潤の一部分を爲す企業者利得に就ては、其獨占的性質を有す[illegible]

[illegible]に依つて、[illegible]こと、[illegible]の大なる團體的勢力に依つて、其道の[illegible]へられたることは、[illegible]なつて賃金をして勞働者の生活を維持する最低限度に陥らしめるものとしたのである。斯の如き分配制度の下に於ては、其富に産出された富の大部分が地代、企業者利得等の形態に於て、專ら有産者階級の占める所と爲り、無産者階級に屬するも數の勞働者は競爭に依つて、定まる低廉なる賃金の下に、不斷の困窮に苦しめられざるを得ない。斯の如く説明されて、無産者が在來の經濟組織に對するに怨嗟の聲を放ち、之を呪咀するもの亦偶然とするを得ない。然も經濟學の説明する所は甚だ冷酷であつて、單に賃銀決定の自然的法則を主張するに止まつたのである。

斯くて勞働者階級の知識の向上するや、彼等の間に於ては勿論、勞働者の社會的境遇に同情を表する者の間に於て、從來の經濟組織に反抗する信念を生じ、經濟學説の上から、其信念を堅固ならしめんとした。彼の勞働價値學説として、總て價値の依つて生ずる根源を人の勞働に在ることを唱へるが如き其一例であつて、實際の政策としては、固より衣服、家具、器物[illegible]

榮を進める最良の方便として、早晩採用されるに至るものとした。斯くて資本の自由なる活動は國內に於ける總ての經濟的制度の必要を無用のものたらしめるに止まらず、世界全體に最善の狀況を供へる方便と爲り、一國と他國との間に於ける經濟的關係を律する計畫を排除するものであると解するに至つた。是れがコブデンに依つて、民衆化された教訓であつて、英國の關する所に就て云へば、穀物條例の廢止に依つて、捷利を告げたと云へるし、又續いて行はれた通商條約の制度は世界を通じて、一般の承認を經る一階段であると認められた。

と說明した。

然らば右の如き經濟組織に對しては、何等指摘す可き缺陷を生ぜず、圓滑に其進行を見るを得たかと云へば、決して其然るを得なかつた。英國の如き自由貿易を基礎として、對外經濟上の關係を律する一方に、內國の立法亦自由主義に據り、斯くて國の繁榮、國民の滿足を收め得たのは、暫時の間であつて、自由貿易政策だけは、其後永く繼續し、今日尙ほ其著しく潤色された跡を認めないのであるが、國內立法上の問題に至つては、從來の個人主義から、現代の集產主義に至るまで、著しき變革の行はれるを見た。斯る變革を生ずるに至つたのは、要するに自由放任主義の健全なる立法の原則であることを否定すると共に、國家の指導又は干涉は假令ひ個人の選擇又は自由の行はれる範圍を局限するとしても、或る利益を生ずると云ふ信念を持つことゝ爲つた結果である。而して自由放任主義の否定は結局從來の經濟組織の下に生ずる經濟的不公正の著しきに基くものであつて、何を以つて其種の不公正とするかと云へば、左の如き數點に分たれる。

第一、物質的文明の發達に依つて、富の產出高は增加したとしても、此富は廣く國民に分配されず、一部の有產者階級の土地や資本を所有することの關係から、其階級に依つて、專私される。

第二、勞働者は勞働の意思を持ち、又此意思を充すだけの能力を備へて居つても、之に適する職業に就くを得ず、經濟社會に變動の起るや、之に支配されて、失業の難に罹る場合の極めて多いこと、

第三、或る者は間斷なく職業に就くを得るとしても、之に對して拂はれる賃銀は決して豐富なるものでなく、現在の生活を優良なる狀態の下に、支へるの困難であるは勿論、自己の老後に於ける生活なり、子女の教養なりを保障するに足らないこと、

[illegible]

[illegible]して[illegible]富みざる程度の勞働に就かしめたり。更に其子女をして[illegible]の共に、不完全なる子女をして早く職業上の[illegible]を[illegible]しめ、將來に發達を礙すに至ること。

第五、經濟社會の變動から生ずる損失は減給、失職等の形態に於て、事業の盛衰に何等の責任なき勞働者、俸給生活者の負擔する所と爲り、資本家は多く之を回避すること。

七

茲に於てか從來の經濟學に於ては、富の生産に關する法則は多く之を自然の働きに任せた如く、分配に關する法則に就ても、亦自然の作用を認め、地代はリカードー一派の主張した通り、耕作境界點の上下に依つて、定まるものとし、隨つて時勢の進歩と共に、一國の人口増加し、食料品に對する需要の大を致せば、致すだけ、新開國から價格の低廉なる農産物の國内に輸入されるに至らざる限り、地代の増進は極まる所を知らざるが如くに說明され、金利に就ては、資本の蓄積高が増加し、一方に資本に對する法制上の保護が厚く、其放下運用の安全を加へると共に、低下するものと考へられるが、金利と相並んで、利潤の一部分を爲す企業者利得に就ては、其獨占的性質を有す[illegible]に[illegible]等に依つて[illegible]ことと[illegible]の大なる[illegible]に依つて[illegible]へられることは、明かなつて賃金をして勞働者の生活を維持する[illegible]に[illegible]しめるものとしたのである。斯の如き分配制度の下に於ては、社會に産出された富の大部分が地代、企業者利得等の形態に於て、專ら有産者階級の占める所と爲り、無産者階級に屬する多數の勞働者は競爭に依つて、定まる低廉なる賃金の下に、不斷の困窮に苦しめられざるを得ない。斯の如く說明されて、無産者が在來の經濟組織に對するに怨嗟の聲を放ち、之を呪詛するもの亦偶然とするを得ない。然も經濟學の說明する所は甚だ冷酷であつて、單に賃銀決定の自然的法則を主張するに止まつたのである。

斯くて勞働者階級の知識の向上するや、彼等の間に於ては勿論、勞働者の社會的境遇に同情を表する者の間に於て、從來の經濟組織に反抗する信念を生じ、經濟學說の上から、其信念を鞏固ならしめんとした。彼の勞働價値學說として、總て價値の依つて生ずる根源を人の勞働に在ることを唱へるが如き其一例であつて、實際の政策としては、固より衣服、家具、書物[illegible]

時には家屋の如きものまで、私人の所有に屬せしめることはあるとしても、尚ほ土地資本殊に獨占的利得を所有者に與へる者は之を私人の手から回收し、是等生産の方便は之を國家の所有に移し、其支配を國家に託し、土地の利用、企業の經營、物資の配給等から生ずる利益は總て擧げて、社會全體に歸せしめることが主張されるのである。

然しながら今日の經濟組織たる、由來する所、一朝一夕ではない、私有財産制度が人に勤勞の動機を與へ、又自由競爭が人の能力を練磨することに、大なるものゝあるは、爭う可からざる所であつて、随つて私有財産制度や、自由競爭を制限した場合に、多年其れ等に支配されて居つた國民をして以前と同一の能率を生産上に發揮せしめて、些の遺漏なきを得るや否やは、一個の疑問に屬するのである。

茲に於てか現行經濟組織の弊害に對抗する爲め、一方に國家並に公共團體をして廣く社會政策を實行せしめ、他の一方に勞働者の如き、一般消費者の如き、資本家の壓迫に苦しむ階級をして其れ〴〵團結せしめ、團結の力に依つて、經濟的公正の原則に適した社會の出現を期することが計畫されるのである。社會政策なるものは現在の自由競爭や、私有財産制に於ける機會並に幸福の不平等を或る程度に於て、緩和することを得るだけの話であつて、其以上には、何事をも爲すを得ない。唯實際に[illegible]として行はれる勞働者保護の諸制度や、救貧防貧の諸施設が私有財産制の下に於て、有産者の無産者に加へる壓迫を緩和したり、自由競爭に依つて、弱者の地位に居る者が殆ど無限に社會的境遇の低下するに至る弊を或る點に遮斷するに止まるのである。斯くて社會政策の効果を補足する方便として、此政策の對象たる國民の間に團結を設け、其力を利用して、以つて地位の向上改善を企劃することが必要と考へられるのであつて、團結の標本的として目されるのは、勞働者の側に於ては、勞働組合であり、消費者の側に於ては、消費組合であるとされる。

勞働組合が標準賃銀の制を定め、團體の勢力に依頼して、資本家に對抗し、資本家の專斷に依つて決定しようと欲する賃銀率以上に、標準賃銀を置かうとすることは、明に賃銀基金説や賃銀自然率説に對する一個の反逆である。然も此所謂反逆に勞働者の成効しつゝあることが勞働者の自尊心を高くし、又物質的に彼等を惠んだものゝ少なからざるや、論を俟たざる次第である。勞働の一個の商品に非ざるや、明白の事實であるとすれば、其價格の決定を單純なる需要供給の法則の働く儘に任せることは、不合理であり、更に資本家の統一した勢力を以つて、此法則の働きを自家に取つて有利であり、勞働者に取つて不利

[illegible]ことに、[illegible]の不公平なることは、[illegible]可からざる所であつて、此不合理と不公正とを除くことが勞働組合の組織された當初から、今日に至るまで、最も重要とする職務に充てられた。以前は單に勞働條件改善の形で現はれ、近時に於ては、生産參加の形で現はれるに至つた相違つあることは、見逃す可からざる所であるが、勞働者が團體の力に依つて、社會的境遇の上進に致した力の大なるは、明瞭の事實である。

消費者なる者は社會到る所に散在する漠たる階級であつて、見方に依つては、何人も消費者であると云へるが、殊に純然たる消費者の多きは都會である。蓋し農村なり、地方の工業都市なりに居住する人は自己の生産した物資を以つて、自己の消費に充てることがあり、斯くて一身に生産者たり、消費者たる資格を兼ね備へるのであるが、大都會の住民に至つては、何等の有形的物資を生産せず、生産に對して直接間接の關係を有する勤勞に從つたり、時に生産に關係なき勤勞に從つたりすることを常とし、又時に有形物の生産に當つても、自己消費の用に之を充てることは絶對になく、之を賣却して得た利益金なり、其生産に對して支拂はれた貨銀なりを以つて、他の物資を購入しようとする。即ち大都會には純然たる消費者の群を成すに至る所[illegible]な[illegible]中心[illegible]の全體に[illegible]然るに多くの場合に於て、[illegible]の事情に依つて、[illegible]其結果の一として、小賣商人が同業組合の[illegible]に[illegible]し、[illegible]の力に依つて、小賣商品の價格を高價ならしめることが擧げられる。一の商品に於て、卸賣價格と小賣價格との間に、若干の差額の存するのは、當然の道理であると共に、兩種の價格の高低共に同一の方向に居らざる可からざることも、普通の道理に照して、明瞭なる事實に屬するのであるが、之を實際に徴して考へると、卸賣價格の騰貴した場合に、小賣價格の騰貴するのは勿論であつて、然も其騰貴の程度は後者に於て、甚だしきを見る一方に、卸賣價格の下落した場合に、小賣價格は毫も下落せず、徒に小賣業者をして卸賣業者と消費者との中間に居つて、暴利を獲得するに至らしめるのである。斯の如きは小賣業者が同一營業地域内の同業者間に於て、其れ〲團結を設け、新に同一地域内に於て營業を開始して、競爭を試みようとする者の出現することを防ぐと共に、團結の勢力を以つて、消費者に臨み小賣價格の決定に就て、横暴を逞うしようとするに至るのである。

斯くて一般消費者をして小賣業者の團結の力に依る横暴や、

弊道を免れしめるには、消費者自身の團結を組織することが急務とされるのであつて、其團結の具體化したものが實に消費組合である。消費組合が單に物資配給の職務に從ひ、原産地に就て購入し來つた物資を組合員に分配するに止まつたとしても、尙ほ能く問屋と小賣業者との間に介在する手數や、失費を省約するを得るし、更に物資生産の職務に從つたならば、原産者と問屋との間に存する手數失費を除却し、且つ物資の品質の純良なることに絕對の保障を爲すを得るし、更に一步を進めて、組合が組合員の爲めに、金融の業務に當つたならば、小額の資金を組合員に供給し、彼等をして高利の負擔に苦しめられる境遇から、脫せしめることを難しとしない。一般消費者に力を與へるもの、消費組合を外にして、之を求めるを得ないのである。

八

國民經濟は、國を單位とし、又其行はれる場所を一國の領土內に限つた所で、尙ほ之を營むに難しとしないのであるが、斯くては、國は鎖國經濟を營むことゝ爲るのである。鎖國の下に於ても、國民經濟の存立することは、疑を容れさる事實であるが、經濟の存立することゝ、其優良なる狀態に於て行はれることゝは、全然別樣の問題であつて、鎖國經濟であつては、到底優良なる狀態の出現することを望まれないのである。蓋し國民經濟を完成し、又之を發達せしめるには、種々の物資が必要となるのであつて、是等の物資を産出する産業の存在することを必要とする。國民經濟の幼稚なる時代の産業は、所謂原始的産業であつて、農業、漁業、森林業、牧畜業、鑛山業等を以つて、其重なる形態とする。是等の産業は以つて食物、被服、道具、副食物、木材等を國民に供給するを得るであらうし、農家の子弟中、技工に長ずる者があれば、彼等の力に依つて、簡單なる製造業も亦工風される道理であるから、是等の原始的産業のみに依賴して、鎖國の狀態の下に、經濟を營むのは、固より可能事と考へられるのであるが、其結果の不良であるのは、已むを得ざる所であつて、而して其不良である理由としては、

第一、農業に於ては、餘程早き時期に於て、收穫遞減の法則の働き出す爲め、其規模を擴張し、又産物を增收するには、生産費の增加を以つて、其要件としなければならないこと、

第二、原始的産業に於ては、之を經營するに廣大なる土地を必要とし、土地の割合に、多數の人口を給養するを得ず、强いて給養しやうとすれば、生活程度の劣等となる勢を免がれざること、

す[illegible]ことに[illegible]て、[illegible]ること、[illegible]て、採算心なく、前者の大きな個人々に因つて、其の合に[illegible]せず、貯蓄に依つて資本の増加を求め、斯くて巨額の資本の固定と運用とを必要とする工業を起す見込なく、商業亦限られた範圍に於て、行はれるに止まること、

第四、鎖國經濟においては、外國から何等の刺戟を受ける望みなく、外國の長を採つて、自國の短を補う見込みなきこと、

の諸點が擧げられる。

右の如き狀況に支配されて居れば、必ず鎖國經濟を打破する勢が一國の内部から生ぜざるを得ない。即ち國民の生活に於ける不滿や、彼等の生來持つ冒險心から、未見の世界に對する憧憬は相重つて、鎖國の狀況を打破しようとするに至る一方に、諸外國が過剩産物を國外に開かれる販路に向つて、處分しようとするの必要は一國をして如何に鎖國の狀態に安んじようとする念があつても、之を保守する能はざらしめるのである。

鎖國經濟に代つて、行はれる經濟生活の一形式は國際共通經濟であつて、今日富の交換の行はれるや、必ず一國の狹き所に跼蹐するものでなく、進んで國際間の廣きに渡つて、行はれるを常とし、經濟學に於ても亦此事を一つの條件として、富の交換に關する諸種の法則が說明されるのである。國際共通經濟の行はれることがなくては、[illegible]に行はれても、[illegible]て、因つて國民に富裕なる一部[illegible]を満足せしめ[illegible]に止まつたのであるが、現代の貿易たる、決して珍奇なる物品の交換を主眼とするものではなく、自他の國に於て、生産諸種の優秀なる物資を互に生産して、之を交換の目的とする。[illegible]に貿易は國際間に分業を擴張する生産力の手段と爲るのであつて、其利益も亦此の點に胚胎する。即ち輸入貿易に於ては、自國の産出する能はざる物資の供給を外國から受けるが如き、費用の低廉なる物資を外國から輸入するが如き、事變に臨んで、偶々缺乏した物資の補給を外國から受けるが如き、其利益の重なるものであり、輸出貿易に於ては、自國の物資に對して、外國に販路の開かれる爲めに、國内の富源は開發され、生産力の活動を來すが如き、内外に市場を有する結果、事業の規模は自ら廣大と爲り、大規模事業の常として[illegible]と爲るが如き、内外市價を通じて物資に對する[illegible]、其の生産費とを[illegible]るを得る爲め、自ら生産過剩を防ぎ、經濟的[illegible]勢の[illegible]を[illegible]るが如き、其利益の著しきものである。

國際金融は二國間に於ける信用の發達と共に[illegible]可きものである。蓋し國際間に於ける資本の分布は決して[illegible]

なるものではなく、常に若干の差違の存することを免かれざる其上に、資本を需要する事業其もの丶規模と比較したならば、更に分布の不平等なることを免かれない。若しも一國の金利歩合にして、資本の運用に對する法制的保護の不充分であるとか、貨幣制度の不備である爲めに、資本の放下に危險が伴ふとか云ふ事情の爲めに、高歩であるとすれば、根本の原因の除却されざる限り、之を如何ともするを得ないが、國際間に於ける資本の供給に異同あつて、金利歩合に高低の差を生ずるに於ては、宜しく資本の疏通を謀つて、以つて國際金融の關係を圓滑ならしめることを期しなければならない。蓋し金利歩合の高きことは企業に對する大なる障害であつて、一國の經濟を疲弊せしめる所以であると共に、金利歩合の低きときには、投機熱を刺戟し、事業に對して、過度の資本を注入固定せしめる恐れの大なるものがあるからである。即ち國際金融の目的とする所は金利歩合の國際間に於ける差違を減縮し、上記金利の高きと、若しくは其低きことから生ずる弊害を除却するの一事に存する。唯今日に於ても、昔アダム・スミスが云つた如く、資本を所有する者は概して臆病であつて、資本を自己の視野の達せざる遠隔なる外國に放置することを好まず、更に必要の際に、回收するの困難である事情を顧念し、加ふるに爲替相場の變動に伴ふ危險を實感する爲め、是等の恐怖、躊躇、危險に當るだけ、一國の金利歩合が外國の金利よりも高きに居る場合の外、後者の資本は容易に前者に流入し來らず、國際間に金利歩合の差違の存することの依然たるもの丶あるを遺憾とする次第である。

海運業は海上貿易と離る可からざる關係を持つものである。一國が外國に向つて、物資を輸出し、又外國から物資を輸入するに當り、外國の船舶に依賴した所で、固より輸送の目的を達するを得るとは、論を俟たないとしても、尚ほ自國の船舶を以つて、輸送の任に當らしめたならば、自國經濟上の必要に應じて、最も適切に出發、歸還の日時、碇繋、寄航の場所等を決定するを得るのみならず、海洋の廣き所に國民の職業を擴張して運賃收入を回收し、造船、倉庫、運送、海上保險の如き海運業に附屬する諸種の事業を盛ならしめ、國の繁榮に資するもの大なりと認められる。貿易は國旗に伴ふと云ひ、又國旗は貿易を導くとも云ふもの、誠に海運業と貿易との關係を說明した言であるとす可きである。若し其れ移住民の如き、一般的に之を見れば、生活程度の劣等なる國から、其優等なる國に向つて、送られるのであつて、之を送つた國は移住民の内地送還金を回收することに依つて、國際經濟上に或る地步を占めるに至るのであ

國內の生產に[illegible]、[illegible]にする[illegible]貸借關係は貿易を主なるものとするとしても 貸借貿易外に 金[illegible]投資、移住民等[illegible]あり [illegible]して、外國から收入を收めることもあれば 支拂を爲すこともあり、前者の場合には、其國は輸入超過國と爲るが、後者の場合には、輸出超過國と爲ることを常とする。斯くて貿易上の關係に於て、一國の輸出入が金額に[illegible]して、均衡を保つことは、殆ど絕無であり、稀にあるとしても 偶然の出來事に止まるが、輸出入貿易、利子收益の收支、海運業保險業に於ける收支、移住民送還金の授受を始め國際貸借に於ける諸項目を對照した金額は略ぼ均衡を保ち、其間合はざる部分が正貨地金の形態に於て、決濟され、斯くて國際間に正貨の移動を生ずるに至るのである。

近代に於ては 國民の經濟思想の進步した結果として、右に掲げた正貨の國際間に於ける移動をして自國に有利たらしめん、更に適切に云へば自國に於ける正貨の受入高を大ならしめる如き目的を以つて、國家が貿易の趨勢に或る干渉を試みることは 殆ど其例を見ない 輸出超過を以つて有利であるとする一方に 輸入超過を以つて、不利なりとするが如き謬見も略ぼ排斥されるに至つたと思はれるが 併し國際貸借全體の關係[illegible]金の移動に依て之を取るのではなく [illegible]額に充て、多くは之を取消又は增加して、輸入品に對する[illegible]を容易ならしめることを必要とする[illegible]へは 多數の人々の[illegible]する所である。經濟上に於ける自然の狀態に任せて、此目的を達しようとする場合には、深く爲す可きものはないが、經濟上の關係に政治上の權勢を施して、以つて急速に目的を果さうとする所から、所謂經濟的[illegible]に發するものゝ發現を見るのである。即ち自國の對外企業を保護するに政事上の實力を以つてする、更に其保護を完全にする爲めに、自國の事業の經營され、資本の運用される場所を自國の領土に移すか、少なくとも保護の下に置くが如きは、歐洲戰爭前世界に於て、稍や政事上に經濟上に優勢であると思はれる國が 支那に對し、[illegible]に對し、將た又南米に對して、試みた對外經濟政策の要領であつて、或は國際經濟の發展に寄與する所あるを得たとしても、他の一面に於て、國際間の反感を甚だしくするは何人[illegible]を以つて、弱國に壓迫を加へ、前者をして後者に對して、[illegible]を[illegible]さしめた事實の争う可からざるものがある。然も[illegible]が國民の福祉を眼目とする以上は、國際經濟は既に國際間の福

祉を目標とす可きであつて、之と反對の結果を齎すが如き思想や、政策は總て排斥しなければならないのである。

石油ある者は帝國あり

櫻井彦一郎（鷗村）

予は大正五年露國に赴きて北樺太油田企業の端緒を得た時から、筆を投じて石油國策の研究に沒頭しつゝ今日に至つた。然るに日露交渉の焦點が北樺太油田の利權獲得であつたことから、我社會は漸く石油國策に目覺め、所謂石油時代に處することを悟り始めた。石油時代の概觀——此時に於て列國が如何に石油の爲に奮戰苦鬪を爲ねたか、また重ねつゝあるかを知るは甚た興味あり、また我帝國興隆の爲に大いに省みる處あらしむるものである。而して予の茲に記するものは、唯だの概觀である。若し詳ならんとせば、即ち大戰前後の列國外交史の全班を書かねばならぬやうになつて、到底盡すことは出來ぬ。

鐵時代、石炭時代の太陽は闇中に沒し、石油時代の太陽は紫の曙色に、地球上に光を放ちつゝある。『石油ある者は帝國あり』とは佛國の石油論者ベレンゼルが一九一九年十二月クレマンソーに對つた書中に喝破した名言で、現今時代の眞相を得てゐる。彼は尙重ねて『重油に賴る制海權、高度の精油（揮發油）に賴る制空權、揮發油及燈油に賴る制陸權。世界に於て黃金よりも一層貴く、一層鈍く、一層力ある物質（石油）の有する財力より與る世界上の帝國』と曰つた。この黃金よりも貴き石油、クレマンソーが石油の一滴は血の一滴に値するといへる其石油とは何か、夫が威力は如何に現はれつゝある乎。

一　石油用途の進歩

石油は第三紀層に包藏せらるゝ可燃性液體であり、又頁岩中に含有せられてゐる。原人の世既に其自然の滲出を汲みて、或は藥劑とし、或は燃料としたものもあり、創世記中にも見え、拜火敎徒の神火も石油の火であつた。十九世紀の半に及び、暖

[illegible]習は、自然の露出を尋ねて、石油の採取に向ひ、佛國人に早くも頁岩油の蒸溜をなし、蘇格蘭人も之に傚つた。一八五〇年頃迄[illegible]人の發明せるランプは燈火界に革命を與へ、石油を求むること愈々切で、新興氣鋭の米國人は大胆にも其國土を漁る中、偶然にも一八五八年ペンシルバニア州で大佐ドレークたる者が鑿井を掌たんとして誤つて石油を得た。これが近世石油史の發端で、ドレークは怪俄の功名から最初の石油技師となつた。取つた原油を少し精製すれば澄み、之に火を點ずれば、世界が忽ち明るくなる。左様に明るい夜は人類あつて以來始めての事なので、人々は大きに喜び、大きに騷ぎ、一八四八年の加州の砂金熱の如く、米國中に石油熱が流行し、探檢家が群を成して、ペンシルバニアの山谷に蝟せた。

米國に流行し始めた石油熱は、忽ち世界に傳染し、露國バクーからも一時米國を凌駕するの勢で産出し、米油露油は相競爭して日本へも輸入せらるることゝなつた。國內でも越後の燃ゆる水の不思議を尋ねて、明治四年既に石油業を起すものがあつた。かくて明治十四五年頃――モツト後までも、一般が唯一の光明と頼んだ種油の行燈は石油ランプの爲に驅逐せられ、一時は米國スタンダード石油會社の燈油だけでも　年額千二百萬函

[illegible]

初め石油は[illegible]を分溜し一つの油を取り、[illegible]て、其他は不用となり、用ゐる術がなかつた。[illegible]げ込まれるくらゐなものであつた。また原油中最も[illegible]も用途の無きため、幼稚なる製油法により燈油中に混じた爲其の燈油は往々爆發の虞があり、爲に安全燈油なるものが、一時賣れ行いた。重き部分の燃滓と、輕い部分の揮發危險物と、この二つが即ち重油(燃料油)と揮發油となつて、其用途があるに至つて、石油は其名を輝せらるゝ現時代に最大の勢力を發揮するを得るのである。重油分から、また種々の機械油を取り、油滓によりてパラフインを取る、之は蠟燭となり、藥品、化粧品、工業用ともなる。電燈の普及に伴つて蠟燭の需要が增すのは奇妙な現象だ。扨て原油を精製して最後に殘るものが土木、建築上、殊に鋪道に缺くべからざるアスファルトである。斯く文化に伴ひて石油類の用途は廣く且つ多く、原油の一滴も無用に棄てらるゝものは無くなつた。

燈用の石油はやがて瓦斯の爲に妨げられ、續いで電燈の爲に驅逐せられることとなり、石油は勢ひ他の用途を求むべき事となつた時、即ち二十世紀の初に於て內燃機關の發明があり、操

發油・燈油また其以下の輕油を爆發せしめて動力を起す。又獨乙人ディゼルが重油を爆發せしめ得る機關を發明してから、石油は燈火用から一變して動力用となり、而も原油中の殆ど凡ての部分は之が爲に其效力を舉ぐるに至つた。ディゼルが直ちに艦舶に利用せられる一方には、從來の外燃蒸汽機關の釜の下で、石炭の代りに重油を焚く時は火力、搭載力、速力を得る點に於て遙かに石炭に優越することが認められて、米國は忽ち一九〇七年より石油專燒の驅逐艦數十隻から大戰艦をも續々建造し始め、英國も亦之を競ひ、大商船も亦比々として之に倣ふに至つて、重油の用途は增加する、自動車、飛行機の發明によりて揮發油は貴重となり、是に於て石油は列國の競爭場裡に絕大の威力を發揚するに至つた。それが大戰の實驗によりて其威價十倍になり、世界を舉げて石油時代の渦卷に捲込むことになつた。

二　歐洲大戰と石油（一）

歐洲の大戰で初めて戰場に現はれて威力を示した新武器即ち飛行機、自動車、タンク、潛航艇の如きは皆動力を石油の爆發から得るのである。戰鬪艦以下の軍艦も石油燃料によつて輕快迅速の行動を執つた。即ち海陸共に石油を賴んで戰鬪したのである。故に自國に石油を有せざる英國は戰前から夙に始めた石油國策の力で、屬領地、保護國及勢力範圍内の石油地から、其國の支配下にあるローヤル・ダッチ・シェル石油ツラスト及英國政府の英國波斯石油會社を通じて石油を取り、之を統轄する爲に石油大臣を置いた。佛國も自國に石油を持たないから、英米よりの供給を受けた。獨逸も石油輸入國であつたのに、開戰と同時に輸入が杜絕したから、ガリシア、ルーマニア及びコーカサスを侵略して其油田を占領し、其の怖るべき潛航艇は石油によりて航行し、太西太平兩洋に於て、英米の石油輸送船を擊沈するに力めた。

一九一六年獨軍が佛國に侵入してヴェルダンの要塞を圍むや、佛軍は米國スタンード石油會社の揮發油を以て無數の自動貨車を動かし、兵員、大砲、彈藥、糧食を後送して、遂に克く要塞の危きを救ふた。石油はヴェルダンの圍みを解いた。此の際若し佛軍に石油が無かつたなら、ヴェルダンはおろか、巴里もやがて陷落したであらう。當時佛國鐵道は多く破壞せられ、また敵軍に占領せられて、軍事上の行動に缺けてゐたのである。

一九一七年の末に至り、佛國の石油專賣業者たる十人組合は、政府に對し、最早佛軍需要の石油を供給するの力が盡きた、明年三月には貯油が枯渇するとの悲痛なる報告をした。こ

の驚くべき[illegible]を警告するものであつた。大統領は

クレマンソーは之に公遞し、直ちに米國大統領ウイルソンに打電して、石油の供給を請ふより外に執るべき道が無かつた。其電報は能く當時の事情を盡してゐる。

『一九一八年に入らば佛國々境に於て最大必要なる軍隊行動を起し、今回の大戰を決すべき場合に、佛軍は忽ち自動貨車、飛行機及砲車の輸送に要する揮發油の缺乏を告げねばならぬ。

揮發油の缺乏は直ちに我軍隊を麻痺せしめて、已むなく聯合國に不利なる講和をなさしめる事にならう。佛軍司令長官の計算では、軍隊に要する揮發油の最少貯藏量を四萬四千噸とし、一個月間の消費量は三萬噸である。この必需の貯油量が、今日では一萬八千噸に減じた。若し米國が此際直ちに非常手段を執り且つ行ふのでなくば、枯渇してしまふ虞れがある。

其非常手段は聯合國の共同安全の爲に一日も猶豫すること無く實行せらるべきで、大統領ウイルソンは米國石油會社から石油輸送船を永續的に徴發し、十萬噸の噸數を補足することを必要條件とする。之は佛軍及佛國民に必要であり、其の石油輸送船は有る、現在太西洋の代りに太平洋が浮んでゐる[illegible][illegible]なる。

大統領クレマンソーは個人的に大統領ウイルソンに[illegible]かに此等石油輸送船隊を佛國港に送るべく、必要な[illegible]の命令を與へられん事を要求する。

聯合國の安全は秤に懸けられてゐる。聯合國若し大戰の敗北を欲しないなら、獨軍大攻擊の場合に、佛軍をして揮發油に缺乏せしむるなかれ。揮發油は明日の戰爭に於て血と等しく必要なり。』(一九一七年十二月十五日附)

大統領ウイルソンは此歴史的電報を受取るや、直ちに戰時石油局を働かせて、クレマンソーの要求を容れしめ、石油輸送船隊は艦艇相挾んで、スタンダードの揮發油を佛國に送つた。其船の中には獨逸のU潜航艇の爲めに擊沈されたのもあるが、一九一八年三月ピカルチー方面に於ける佛軍決死の大攻擊に就し、フオツシュ將軍は一ケ月百萬噸の揮發油と九萬二千臺の自動貨車とを以て、防禦軍を續々派發し、英軍の擊破せられた方面陣地の空隙をも補充し、遂いに大いに獨軍を擊破して、殆ど大戰の勝敗を決するを得た。此時また聯合國に聯合國石油會議を起して、英國の著名なる石油政治家サー・ジョン・カッドマンを議長とした。其の機構不斷の活動で　伊太利までが[illegible]でも

揮發油に潤澤となつた。

三　歐洲大戰と石油(二)

遂に聯合軍司令長官フォッシュ將軍が、獨軍から石油國ルーマニアを奪還したので獨軍は忽ち資源を失ひ、石油に缺乏することゝなつた。爲に獨逸は揮發油の代用品として石炭の乾溜より得るベンゾールを使用したが、素より揮發油ほどの効力が無い。ルーデンドルフ將軍は豫てから石油節約を勵行し、農夫の如きは嚴冬長夜に燈火無きの窮狀にあつた。斯くて獨逸は先きにはガリシア、後にはルーマニアを失つて石油を失つた。長らく洋上の脅威であつた獨逸潛航艇は動かなくなつた。飛行機も、自動車も、はた軍艦も無用の長物となつた。遂に海陸共に力盡き、敵前に屈して城下の盟をなさねばならなくなつた。流石のカイゼルも軍隊猶ほ存す、されど石油無しと聞いては、傲慢の角も折れて、和蘭に蒙塵したとのことである。一九一八年十一月十一日休戰條約が調印せられ、其二十一日英國政府は祝捷のため聯合國石油會議々員を招宴した。其席上で外相カーゾン卿は石油史上特筆大書せらるべき名演説をなし、

『聯合國は石油の波に浮びて勝ちたり』

との警句を吐いた。此名言を傳へ聞いた米國人は、愈よ以て石油熱に浮かされたが、たゞカーゾン卿が『石油の波』に冠すき『米國の』といふ形容詞を忘れた事を誹り且つ遺憾としたであらう。獨逸が若しガリシヤ、ルーマニアの等を失はず、更に長驅して露國に於けるウラル及コーカサス地方を占有して、豐富なる石油源泉を得てゐたならば、歐洲の舞臺は今日のやうには收まらなかつたであらう。世界は石油國たる米國と石油國たり得べかつた獨逸との間に等分せられたであらう。東印度の蘭領油田も、同種民たる關係から、獨逸勢力のものとなつたかも知れぬ。戰爭の初、和蘭は獨逸に同情し、秘かに蘭領の石油を彼に供給したともいはれてゐる。しかし想像は止めやう。獨逸皇帝及び其政治家も戰前に石油準備を閑却した譯では無い。墺太利、ルーマニア、高加索、ガリシア等に手を延ばして二三の石油會社を起し、獨逸銀行は露國バクー油田に投資し、また英國資本家と合同して、土耳其石油會社を起してメソポタミアに企業してゐたのである。併し敗軍によりて其石油國策は全く覆され、また海上權は沒收せられた。これでは獨逸の帝國主義は根柢から滅びざるを得ない。英國が獨逸に味方せる土耳其を撃ちて、メソポタミア、波斯、パレスタイン等を占領したのは、素より其等の油田が大目的であつた。以上種々の方面から觀て、歐洲の大戰は石油の戰爭であつたと稱せらるゝも過當ではない。

[illegible]
尽力した日本海軍の[illegible]
油行よか　から重油二三十萬噸の供給を受けたに由つて、是く[illegible]活躍をなし行動をなし得たことである。此は某司令將校の一人が親睦の席次、記者に傲語して、我等は英國の石油で戰つたア、石油なき軍艦は、[illegible]式の他に其用を爲さずと言つたことは、石油の威力を能く言現はしてゐる。列國は之が爲に大戰後いよ／＼鎬を削つて相争ひ、其争や年と共に辛辣悪辣の度を加ふるも必至の勢である。石油なくんば帝國主義なし、石油を有する者は帝國を有す。

四　英國の石油帝國主義

石油外燃機關と石炭外燃機關との威力の差は、大約七對四であり、而も石炭は大船舶を要して、長途の航行中、屢ば補給積込をなさねばならぬに反し、石油は船艙の二重底の間隙にも容るべく、其容量は長き航海に耐へる。また石炭を積込むのと、石油がポンプに由りて自動的に注入せらるゝとの難易は沖も比較にならぬ。また石炭では二百五十人の火夫を要する大艦も、石油ならば六十人にて足り、コックから通風裝置で、容易に吹いて火となるから、石炭機關室の酷熱に比し、石油機關の火夫は

[illegible]ら、最[illegible]に出[illegible]る。又大艦が二十五ノット以上の速力を得ることは、[illegible]油機關に頼らねばならず、而も石炭の[illegible]は[illegible]に利用せられ、軍艦ならば、所要石炭の重量だけ[illegible]長くことも出來る。石油外燃機關で然り、ディーゼル内燃機關ならば其効力率は更に數割の増大を來たすのであるが、[illegible]國はまだ廣く大艦艇に使用せらるゝに至らない。戰前既に重油専焼の大船は三百七十隻であつたが、最近ロイドの報告では二千五百隻となつてゐる。

英國は石炭帝國であつた。ウェールスの優良なる石炭は十八世紀に於てアムステルダムの海上權を奪つた。其石炭は世界の船の航行を支配した。然るに石油時代が來た。一個の發明した火藥が近世史の頁を開いた如く、揮發油と重油とは最近世史を始めつゝある。英國は即ち一變して石油帝國となり、石炭の代りに石油を以て大英帝國の根柢たる海上覇權を維持せんとせねばならなかつた。而して他國に先んじて此形勢を觀取し、石油國策樹立の必要を唱へたは海軍大臣フイツシヤー卿である。彼は石油狂と嘲られたが、彼の狂熱は能く其國を救うた。また英國の商人マーカス・サムエルの石油業に於ける致富術は、政治的

にも英國の政策を助けた。サムエルは元、東洋に於て眞珠母貝の商人であり、店の名をもシエル（貝）と稱してゐたが、時運に乘じて東印度の油業に從事し、一九〇二年、彼地に於ける蘭人石油業者と提携したのが起りで、遂にローヤル・ダッチ及シエル合同の一大石油ツラストを成し、其實力は世界の各地に石油網を張り、諸國に油田を獲て、新參ながら故參の米國スタンダードと角逐するに至つた。此ツラストの組織は英四對蘭六の權利なれど、英國は其實權を掌握し、背後には大サムエル家及ロスチヤイルド財閥が儼然と控へ、其の總資本は二億五千萬磅を超えて、英國政府歲計豫算の三分の一に等しきものがある。之を統轄する者は偉大なるデタヂングで、彼は元和蘭人で、和蘭側權利の代表者であるが、今では英の國籍に入り、其貴族に列してゐる。彼は石油界のナポレオンと呼ばるゝだけに、其智力精力を以て世界石油界の覇王となり、さうして今や英國の石油帝國主義を支持するの一大柱梁となつてをる。

一九一四年以來英國政府は、英國波斯石油會社によりて石油業者となつた。一九〇一年の頃英國のダルシーは波斯南部にて廣大なる油田を獲得し、ビルマ石油會社（英人會社）が、其採掘を始め、後一九〇九年に英國波斯石油會社が創立せられたが、資力の欠乏を訴へてゐたのである。政府は之に乘じ、海軍大臣チヤーチルは一九一四年、戰雲既に歐洲の天に漲つた時、會社の半權利を買收して、主權を海軍省に收めた。此の官營會社に就いては、買收當時から今日に至るも、非難の聲があり、勞働黨內閣の時には、ローヤル・ダッチ及シエル合同に賣渡さうと企てたこともある。されど此會社が戰時に於て大いに英國の力となつたことは云ふ迄もない。而して英波石油會社はまた英國に取りて、石油帝國主義の一大實行機關であり、波斯以外の諸國油田にも手を擴げてゐる。

英國は既に海上覇權の强敵たりし獨逸を斃したけれど、前門に虎を拒いで、後門から狼が迫つて來た。即ち米國が覇權を爭はんとして起つて來た。米國は石油に於て世界産額の七割を占め、造船能力に於ても驚くべきものがある、英國は之と爭はねばならなくなつた。而して其强大なる機關と巧妙なる外交とによりて、米國が自國産油の大なるに安んじて、立遲れをして居る間に、地球上に石油帝國を建設した。即ち其版圖は、東はルーマニア、ガリシア、露國を始めとして、埃及、波斯、メソポタミヤ、印度、緬甸、暹羅より東印度諸島、濠洲、新西蘭に擴がり、西は加奈太よりヴエヅラ及ツリニダト、バルバドス、其他の南米諸洲に亘つて居る。英國領土に日輪の沒することと無きが如く、其石油版圖にも太陽の沒することが無い。全世界の石

[illegible]
のだが、[illegible]し、[illegible]にしむ[illegible]。すゝ[illegible]ドせられる。またロイヤル・ダッチ及シエルの勢力は根柢深く米國油田に喰込み、[illegible]ドレー[illegible]は[illegible]西哥に於て、[illegible]イーグル石油會社を以つて[illegible]。またコントロールドといへる一大會社は、主として南米利權に意を注ぎて、米國のモンロー主義を利しつゝある。

五　サン・レモ條約

如斯くして米國が切に英國の脅威を感じつゝありし時に、突如として英佛の間に排斷的であり門戸閉鎖主義である著名のサン・レモ石油條約が締結せられ、米國は為に愕然として色を變へ、大いに怕つたのである。

サン・レモ條約の骨子はメソポタミアの油田である。メソポタミアは英國が大戰中土耳其を擊つて之を占領し、アラブ人を助けて、イラク王國を建設せしめ、之を委任統治の下に置いた所で、其のモズール及バグダットの二大油田は傳說の時代から既に世に知れ渡つたものであり、資源の豊富なるを以つて稱せられてゐる。

一八九六年土耳其がアルメニヤ人を虐殺した時、メソポタ[illegible]

[illegible]たゞ[illegible]合を以て[illegible]に入り、[illegible]つて所有する[illegible]に[illegible]に[illegible]の[illegible]にハグダッド鐵道を計畫し、鑛山に付ても[illegible]となつた。一九〇八年には例のダルシー採掘會社が英國波斯石油會社の為にメソポタミアに侵入するや、續いてチエスター將軍の要求が出現する。其中一九一二年になつて、獨逸が愈々土耳其皇帝から採掘利權を獲た所で、斡旋する者あつて、英獨間の調停が成り、一九一四年の初め、英國波斯石油五割ロイヤル・ダッチ及シエル合同二割五分、獨逸銀行二割五分で土耳其石油會社が設立せられた。而して戰後には戰利品の處分として、英國は獨逸の二割五分を奪つて佛國に與へ、其代り佛國からは委任統治國たるシリアに鐵管を通じて、油田から石油を地中海岸に輸出するの便宜と、製油所油に要する土地の讓與と、關稅免除との特典を受けた。

佛國は元々十八組合をして石油專賣をなさしめたが、戰後には英米の石油會社が競爭的に之に販賣會社を起した。また銀行の多くが露國革命の亡命者から露國石油會社の株券を莫大に取つた數も少くない。またロイヤル・ダッチ合同の株式に多[illegible]

にも英國の政策を助けた。サムエルは元、東洋に於て眞珠母貝の商人であり、店の名をもシエル（貝）と稱してゐたが、時運に乘じて東印度の油業に從事し、一九〇二年、彼地に於ける蘭人石油業者と提携したのが起りで、遂にローヤル・ダッチ及シエル合同の一大石油ツラストを成し、其實力は世界の各地に石油網を張り、諸國に油田を獲て、新參ながら故參の米國スタンダードと角逐するに至つた。此ツラストの組織は英四對蘭六の權利なれど、英國は其實權を掌握し、背後には大サムエル家及ロスチヤイルド財閥が嚴然と控へ、其の總資本は二億五千萬磅を超えて、英國政府歳計豫算の三分の一に等しきものがある。之を統轄する者は偉大なるデタヂングで、彼は元和蘭人で、和蘭側權利の代表者であるが、今では英の國籍に入り、其貴族に列してゐる。彼は石油界のナポレオンと呼ばるゝだけに、其智力精力を以て世界石油界の覇王となり、さうして今や英國の石油帝國主義を支持するの一大柱梁となつてをる。

一九一四年以來英國政府は、英國波斯石油會社によりて石油業者となつた。一九〇一年の頃英國のダルシーは波斯南部にて廣大なる油田を獲得し、ビルマ石油會社（英人會社）が、其採掘を始め、後一九〇九年に英國波斯石油會社が創立せられたが、資力の欠乏を訴へてゐたのである。政府は之に乘じ、海軍大臣チヤーチルは一九一四年、戰雲既に歐洲の天に漲つた時、會社の半權利を買收して、主權を海軍省に收めた。此の官營會社に就いては、買收當時から今日に至るも、非難の聲があり、勞働黨内閣の時には、ローヤル・ダッチ及シエル合同に賣渡さうと企てたこともある。されど此會社が戰時に於て大いに英國の力となつたことは云ふ迄もない。而して英波石油會社はまた英國に取りて、石油帝國主義の一大實行機關であり、波斯以外の諸國油田にも手を擴げてゐる。

英國は既に海上覇權の强敵たりし獨逸を斃したけれど、前門に虎を拒いで、後門から狼が迫つて來た。即ち米國が覇權を爭はんとして起つて來た。米國は石油に於て世界産額の七割を占め、造船能力に於ても驚くべきものがある、英國は之と爭はねばならなくなつた。而して其强大なる機關と巧妙なる外交とによりて、米國が自國産油の大なるに安んじて、立遲れをして居る間に、地球上に石油帝國を建設した。即ち其版圖は、東はルーマニア、ガリシア、露國を始めとして、埃及、波斯、メソポタニヤ、印度、緬甸、暹羅より東印度諸島、濠洲、新西蘭に擴がり、西は加奈太よりヴエヅラ及ツリニダト、バルバドス、其他の南米諸洲に亘つて居る。英國領土に日輪の沒すること無きが如く、其石油版圖にも太陽の沒することが無い。全世界の石

[illegible]
のガ[illegible]し、[illegible]せられる。またローヤル・ダッチ及シエルの勢力は根強く米國油田に喰込み、[illegible]に於て、[illegible]イーグル石油會社に於て[illegible]、またコントロールドといへる一大會社は、主として南米利權に[illegible]を注ぎて、米國のモンロー主義を称しつゝある。

五　サン・レモ條約

如斯くして米國が切に英國の脅威を感じつゝありし時に、突如として英佛の間に刷断的であり門戸閉鎖主義である著名のサン・レモ石油條約が訂結せられ、米國は爲に愕然として色を變へ、大いに怒つたのである。

サン・レモ條約の骨子はメソポタミアの油田である。メソポタミアは英國が大戦中土耳其を撃つて之を占領し、アラブ人を助けて、イラク王國を建設せしめ、之を委任統治の下に置いた所で、其のモスール及バグダットの二大油田は傳説の時代から既に世に知れ渡つたものであり、資源の豐富なるを以つて稱せられてゐる。

一八九六年土耳其がアルメニヤ人を虐殺をした時、メソポタミア[illegible]
[illegible]ニスム[illegible]
合を以て[illegible]に入り、[illegible]
つて[illegible]に[illegible]
に[illegible]に[illegible]國にバクダッド鐵道を計畫し、鑛山に自から[illegible]物となつた。[illegible]一九〇六年には例のダルシー採掘會社が英國波斯石油會社の爲にメソポタミアに侵入するや、尋いでチエスター將軍の要求が再燃する。其中、一九一二年になつて、獨逸が愈々土耳其皇帝から採掘利權を獲た所で、斡旋する者あつて、英獨間の調停が成り、一九一四年の初め、英國波斯石油五割、ローヤル・ダッチ及シエル合同二割五分、獨逸銀行二割五分で土耳其石油會社が設立せられた。而して戰後には戰利品の處分として、英國は獨逸の二割五分を奪つて佛國に與へ、其代り佛國からは委任統治國たるシリアに鐵管を通じて、油田から石油を地中海岸に輸出するの便宜と、製油所油に要する土地の譲與と、關税免除との特典を受けた。

佛國は元々十人組合をして石油專賣をなさしめたが、戰後には英米の石油會社が競爭的に之に販賣會社を起した。また銀行の多くが露國革命の亡命者から露國石油會社の株券を無償に取つた者も少くない。またローヤル・ダッチ合同の株式には多數佛

國人の手に渡つてゐたものだが、一九二〇年フランの暴落に連れ、佛人は爭うて此株を買込み、之を買はぬは阿呆だと、カフエーでも舞踏場でも、ローヤル合同株で、話が持切り、女郎も女優も此株相場で夢中になつた。それでフランの價は愈よ下落る、政府はローヤル合同株の輸入を禁止したが、それでも飛行機や外國大公使館の郵便袋の中で、國禁を犯して持込まれ、遂に該株式の半數は一時佛人の手に落ちた。いくら左樣でも、支配權は動かないから英國では敢て驚かない、却つて危險を他に負はせ、利益を己れが取るを得策としたであらう。更に佛國は石油熱が昂騰した際であるから、英國に對し、メソポタミア利權の分前を要求したのは尤もな次第である。

サン・レモ條約は以上のメソポタミアを中心點として、他に舊露西亞帝國の領土、ルーマニア、ガリシア、高加索、佛領植民地等の油田に於て、英佛共同の行動を爲すことを約し、又英王冠領植民地にては、現行法規の許す範圍内に於て佛國との共營を許すに定め、一九二〇年四月二十四日佛國サン・レモ市に於て英國代表カッドマン及び佛國代表ベルセローの間に締結調印せられ、英首相ロイド・ジョージ及佛大統領ミルランが之に與印した。

此條約に憤つた米國では、駐英米國大使及國務卿コルビーから、英外相カーゾンに抗議したが、外相は、メソポタミア油は戰前から、英國人の獲た利權である、米國は世界の石油の七割以上を産出してゐるではないかなどと、不得要領なる返事をする、米國増々不滿で、爰に兩國間に外交上の一大紛議が結ばれて容易に解けず、兩國の世論もまた囂々とし、新聞の諷刺畫家は双方から毒々しく罵り合つた。

六　米國は石油の國

今の米國は石油で生きてゐる。産額の多きに連れ輸出量も多く、また國内消費の盛んなることも世界一である。一九二〇年米國地質調査局の勘定では、國内消費量が一個年四億バレル（約五千七百萬噸）で諸外國の總消費の二倍であると云つてゐる。英國人の消費高一人當り一ガロンに對し、米國人のは二〇ガロンであるとも稱せられ、自動車の數でも、十人に附き一台とは數年前の統計で、フォードの製造工場からは年々驚くべき台數を國内に供給してゐる。加州の女は洗濯に水より揮發油を買ふとさへ云ふ。汽車、汽船は勿論の事、耕作にも石油、漁獵にも石油、彼等には小麥の次ぎに石油が生活の要素で、其産額と價格とは忽ち一人々々に少からず影響する。そこでスタンダードは莫大なる財閥となり、之を踏まへたロックフエローは世界

[illegible]ヘイオ州クリーヴランドに精油所を有したるが、石油の將來なるに鑑み、安定販賣の途なく、利益の大なるに着眼して、[illegible]營を拓き、販路を廣げて、他の同業者をして之に屈服せしめ、辛辣手段を辭せず、利益獨占主義を以て、迅速にスタンダード石油ツラストの擴大を致した。スタンダードといへば惡辣の名に世人から指彈されたが、何人も其金權に抵抗することは出來ず、宗教家、教育家もロックフェラーに媚びて、教會堂や學校に寄附を仰ぎ、彼を以て慈善家、公德家の典型と崇めてゐる。

スタンダード石油は三十三の油業及び之に關係ある事業會社を綜合して一大ツラストを成したが、一九一一年非ツラスト法により、高等法院の判決を以て、ツラストは解散せられたけれど、倘二十九の子會社を有し、州名を冠する數多のスタンダード會社と聯絡して、事實上のツラストたることに變りは無い。單にスタンダード石油といへば、このツラストの總稱であり、米國石油の代名詞とも聞取られる。其資本は總計二十億弗に達し、實に財界の王者である。此者以外にシンクレア綜合會社を始め、大小幾多の石油會社があるも、スタンダードに對し「社外」と呼ばれてゐる。米國の石油國策とは即ちスタンダードの商策で、英國に對する華盛頓政府の石油抗議も、實はスタンダ[illegible]ンダは大戰の[illegible]中に於て、[illegible]でも石油利權を獲得する事に狂奔すべしと宣言し、また[illegible]戰後、石油業の中心地たるオクロハマで、將來の戰は石油の戰爭の世界である、即ち燃料油を有する者の世界なりと演說したのも、蓋しスタンダードの爲にしたものとも受取れる。

スタンダードの巧妙なる商策は着々成功して年々巨額の利益を占め、一九二二年には、紐育スタンダード石油が四十割、加州スタンダード石油が十割の配當をなし、インヂアナ州スタンダード石油は一九一二年に二百九十割の配當をした。スタンダード石油ツラストは勿論世界中に販路を有し、また油田の獲得開發に躊躇しないものであるが、此の後者に於ては、前に述べた如くに、英國に拒まれてゐる。彼は前年越後北海道の油田に於て、インターナショナル石油會社を起したが、利あらずして會社を日本石油會社に讓渡した。また支那四川省の石油に着したが、之れも思はしく無くて放棄した。

米國民は自國石油が、歐洲戰爭に勝つたとの自負心を起した。大戰に消費した石油の八割迄は米國のであつた。茲にスタンダードの罪跡を非難した者までも、自ら彼れ贔負となり、

其力と政府の力と相待つて英國をして此上ない世界一の石油權力たらしめんことを期待した。自國に石油を持たぬ英國などが、何をか爲し得んや、石油帝國とは我米國の事であると思つてゐた。然るに此期待は看々英國の活動によりて裏切られ、米國は世界の未開油田地全面積の八分の一だけを支配するに過ぎず、何處を見ても英國のスタンプが押されてゐることが分つた。外國油田の門戸開放は政府の責任であるとの說が輿論になつた。戰時米國は吝む所なく、聯合國に石油を供給したでは無いか、其報酬としても英佛は自ら得たる油田を開放して、米國を迎ふべきである。夫れを拒むなら報復手段を辭さない、我に背き者は、我も亦彼に辛かるべしと叫ぶものもあつた。然るに英國は能く當つた。戰前に米國が獲たハレスタインの油田に就いても、其地の委任統治者たる英國は之を承認せず、スタンダードの派遣した技師は、英國軍隊の爲に抑留せられた。

米國はモンロー主義の頭であるのに、而も墨西哥は屬國同樣と認めてゐるのに、其處には英國のイーグル會社が跋扈して、スタンダード及びドヘニーの米墨石油會社に拮抗してゐる。元々墨西哥の石油市場はスタンダードの獨占であつたが、油田の發見によりて、時の大統領デイアズは、スタンダードの專賣を惡み、廣大なる油田の利權を英國のピアソン（コードドレー卿）に與へた。米國の輿論は沸騰して、マデロの叛亂が起つた。英國はデイアズを援ける、米國即ちスタンダードはマデロに味方する、マデロが大統領になつたら、凡ての石油利權をスタンダードに與へ、ピアソンの利權は取消すべしとの密約もあつた。遂にマデロが大統領になると、忽ちスタンダード株の値がウオール街で五割方暴騰した。マデロが長續きせず、密約がドウもならぬ中に、ウエルタ將軍が代る。スタンダードは一億弗の外債を貸す條件で、油田の獨占を企てたが、ウエルタは應じなかつた。彼に繼いだカランザもオブレンコも絕えず英米の石油紛爭で苦しめられた。ウエルタが叛亂を起すや、英國石油は、彼を助け、米國石油はオブレンコを助ける、實に絕間無き墨西哥の內亂は、裏面に於て常に英か米かの石油ツラストの爲に操られてゐるのであり、爲に國民は塗炭に苦しんでゐる。墨西哥に石油が無かつたなら國民はドンナにか幸福だつたらう。

米國が力瘤を入れて排斥に勉めたイーグル會社は一九一九年ロイヤル・ダッチ合同に合併せられて、一層の强敵となつた。之より先きコードドレー卿は南米コロンビアで大なる利權を獲たが之も當然ロイヤル・ダッチの有であらう。更に英國には英國油田コントロールド會社が專ら南米の油田を目がけて進み入

れ。[illegible]せたほこできな[illegible]モンロー[illegible]く、米國や南米に於ては、たとひ採掘權を支配し得らるゝのみで、其餘は殆ど悉く英國權力の下にある。其の上、從來世界中に大手を振げて横行濶歩してゐたスタンダードは、新參のロイヤル・ダッチ及シエル合同の爲に、到る處で販路を蠶食せられる。佛國にてシエルが石油一般組合を起せば、スタンダードは米佛石油會社を立てゝ販賣競爭者となつたが、米國はこゝでも聊か立遅れた。佛國の態度を見るに付けても、先年のクレマンソー電報が肝癪の種であつたらう。

七　サン・レモ條約と米國

此時に方りてサン・レモ條約が成立した、國務卿の抗議も無效で、米國は怒るまいものか、其の立腹最中に一九二一年スマトラ島シャンビ油田の問題が起つた。英國側は和蘭を使つて、之が獨占を企てる、米國は參同を欲する、海牙駐在米國公使は、此油田に英國だけの外國資本を容れるのは不都合だと異議を唱へたかなれど、遂に和蘭下院は、ロイヤル・ダッチ合同系の子會社であるバタピア石油會社へ、獨占的の利權を與へた。即ち英國は和蘭を使つて首尾能くシャンビ大油田を獨占したの

で[illegible]商もサン・レモ條約できる、メソポタミヤ[illegible]前に[illegible]たのである、[illegible]の二割五分權利を佛國ばかりに與へる法は無い、米國にも[illegible]て好ささうなものであるのに、佛國に入れなかつた。

殆ど時を同じくして、波斯政府は北部油田の利權をスタンダードに許與せんとした。之は英國波斯石油が自分の利權なりとしてゐたのだから、英米の石油會社間に當然問題が起り、兩國政府は互の尻押しばかりか、表に立つて爭議した。此の事件でも英米は正面から衝突したのである。

米國は英國に對抗する策略から、盛んに國內石油の缺乏を宣傳し、一九二一年に、專門家の說として米國石油の地下埋藏量は現在の消費率で、今後十八年しか持續しない、英國は之に反し二百五十年間の消費を支へ得るだけの埋藏量を有してゐると唱へて、國民の生活を脅かした。これ指俘にする所あつての臆說で、其宣傳の陰にはスタンダードが居たことは推測される。この缺乏の威嚇は、事實が反證して、國內産油は增加し、一九二二年の加州の如きは生産過剩で價格は暴落した。尤も其前から墨西哥油田では、鹽水の爲に生産減を來たしかなれど、加州の大産油は之を補足して尙餘りあり、シグナル・ヒルには一時

三千五百萬バレル許の貯油があつたとのことである。米國には、假りに地中の液體石油が枯れても、まだダコタ、ユタ、ネヴアダの諸州に莫大なる頁岩層があり、之を絞れば、四五十年は不だし、優に百年以上もの消費を支へ得べき石油が取れる勘定であつて、米國海軍省は後日の爲、去年收賄事件の暴露したチーポツト・ドーム其他の海軍豫備油田と同じやうに、これを占有保存してゐる。

石油缺乏の宣傳は細工過ぎてゐたが、國民の反英感を煽り、彼の門戸開放を强ふるには力があつた。英國も遂に米國を顧慮せねばならなくなつたのは、外交上から、石油國策上から、米國の一大成功であつた。

八　英米の石油休戰

英米の正面衝突を和ぐるため、英國の前石油局長官で當時英國波斯石油會社の技術顧問であつた石油外交家カツドマンが一九二一年十二月米國に赴いた。激し切つた米國新聞記者等はカツドマン來らば目に物見せんと息卷いてゐるが、來て見ると、彼の老練なる外交辭令に丸められた。シカゴの石油協會年會に於ける彼の演説は、英國の門戸開放主義で、米國人はカツドマン亦米國の門戸開放宗の信者となつたと喜び、彼を讃美した。

彼は渡米の土産に、會議中の北部波斯の油田コスタリア利權でスタンダードと英波斯石油とが五〇對五〇の企業をすることを約した。また米國を怒らせたメソポタミアでは、スタンダードにも土耳其石油會社の權利を相當分配すべきことを提案した。併し此件は翌年のローザンヌ會議の時までに、初めて解決したが、兎に角カツドマン渡米の使命は立派に成功した。彼の胸裡にはメソポタミアや北波斯に米國の巨資を入れさせて之が開發を速かにし、英國は其利に浴せんとするの祕策が往來してゐたに違ひないが、しかし成功であり、英米間に所謂石油休戰の時が來た。更に又一九二二年英國下院は米國のパレスタイン利權を承認した。唯だ北波斯ではスタンダードとカツドマンの約束が裏切られた。

南波斯の油田は全然英國のもので、之を爭ふことは出來ぬが、北波斯の油田は、前後十年に亘り、英國波斯石油とスタンダードとの間に劇しい爭奪があつた。波斯の時の首相リザーカンは暗愚のアーメッド帝を巴里に追放して政治を專らにし、國を共和に革めんとして、米國は之に誠意を寄せたが、英國は帝政運動を背後から操縦するので、首相は快くなかつた。これに南北全部の油田が英國の有となれば、國は遂に英國の腕の下に屈伏すべき爲、米國又は佛國の資本を入れて、英國のと對抗せし

[illegible]したがここにカッドマンの率ゐるスタンダード代表[illegible]團が[illegible]英國[illegible]は[illegible]い[illegible]英國[illegible]に[illegible]石[illegible]して。[illegible]にべき[illegible]がここで米國資本家に採掘利權を與ふることに定めて、シンクレア石油會社が之に應じた。シンクレアは[illegible]兩國[illegible]油地に入込んで、利權運動をやつてゐたが、入組んだ利權の間に米國領事インブリーが殺された。領事はテヘランの聖地を土足で汚し寫眞を取つたので、狂信徒の怒を買ふのだと傳へらるるも、其實、何者（多分英人）かが土人を買收して、相手の米國の石油家を殺さしめやうとしたのが、誤つて領事の身の上となつたのだ。

九　列國會議と石油問題

一九二二年四月歐洲改造を目的としてゼノアに開かれた列國會議は、露國の油田問題が主たる論爭點となり、ローヤル・ダッチ合同對スタンダード石油、佛國、白耳義、勞農政府の間の錯綜した紛議の爲に、何等得る所無くして解散した。戰爭前にローヤル・ダッチは露國のバクーグロスニー及エンバの油田に於けるロスチャイルド財閥の石油會社を買收し、戰後には更に其權利を擴張するに力めてゐた。スタンダード石油は一九二〇年バクーに於けるノーベル會社の支配權を買收し、其買収除した[illegible]油田の[illegible]採掘權[illegible]それを利いて來た。白耳義は、[illegible]を買收したことがある[illegible]

ローヤル・ダッチ合同は[illegible]勞農政府と、石油採掘[illegible]に關し、またバクー油田の委任經營について協議してゐたが、[illegible]らなかつた。勞農政府は全露油田を統一して、政府に[illegible]割九分、持主に一割五分の權利を取り、餘つた權利は、[illegible]から合同出資させて稼行せしむることを計畫したが、モスコーの全露石油會議が、この統一案に反對した爲と、スタンダードが勞農政府の望むやうにローヤル・ダッチと共同することを拒んだ爲とで、計畫は破れた。勞農は油田を餌として外國から金を取らうとしたのである。

斯る狀態の下にゼノア會議は開かれたが、スタンダード社長ベッドフォルドは先きのカッドマンに出る作戰の後とて、此際格別な石油問題も起るまじと豫想して、開會の前夜巴里から紐育への歸途に就いた後で、ローヤル・ダッチ合同が勞農政府と全露油田開發の契約を結んだとの新聞が出た。米國は驚き、スタンダードは佛國及白耳義側を煽て合同組織を作らせて英國側

の背後を衝かせる傍ら、例の通り門戸開放を叫んだ。後に新聞は誤報だと分つたが、勞農政府は、石油輸出會社を起し、シエル（即ちローヤル・ダッチ合同）が其代理權を獨占せん事を協議してゐたのは事實であつた。若し斯うなると、スタンダーがバクー油田の利權を回復し得て、稼行するとしても、其の産油輸出は一にシエルの手に賴らねばならぬから、極力之を防害した。こんな事でゼノア會議は不成功であつた。尋いで此會議の引續きがヘーグで開かれたが、露國油田問題が相變らず紛糾して、何等歸着する所なく、此會議も亦スタンダードが野心の爲に不結果に了つた。

かゝる爭議の如何に係らず、大戰直後から、英米佛は素より伊太利も劣らずに、露國油田の利權を得べく務めた。或年の如きは、英國から三十人、佛國から二十六人の石油代表者が、モスコー入りをして利權運動をしてゐるさうである。しかし露國相手の事とて何等得たものはなかつたやうだ。最近に至り勞農政府は直營の石油シンヂケートを起し、油田事業を回復し、また産油の販路を四方に求めてゐる。

一〇　ローザンヌ列國會議

第一次のローザンヌ會議は一九二二年十一月から翌年二月に互つて開かれた。之に先だちカッドマンは去年渡米の折の約束を守りて、メソポタミヤの油田利權即ち土耳其石油會社の權利をスタンダード石油に分割することを斡旋したが、ローヤル・ダッチ合同と佛國側とが分割を承知しないので、遂に英國波斯石油のみが五割の權利の半ばをスタンダードに讓渡することで問題は落着した。それでローヤル・ダッチ合同、スタンダード石油、英波石油及佛國側が平等に二割五分宛を分有することとなつたが、英國は尙ほローヤル・ダッチ及英波の二會社で五割の權利を持つた優越者である。しかしスタンダードは之に滿足し、彼れの滿足で米國民も悅んだ。而して此妥協が成立した上で、英米は手を連ねてローザンヌに赴いた。

會議の主題は土耳其の歐洲側國境問題、海峽問題及び土耳其の亞細亞側國境問題等であつた。土耳其問題が主であつたので、自然延いてメソポタミア油田に及び、これが闘爭の種となつた。土耳其代表者は、其國にも石油が必要であるとて、イラク王國からモズール外二個所の油田地を返還せんことを要求した。前土帝の皇子皇女二十二人は、米國人アンターメアに賴んで、メソポタミア油田の所有者たることを申出でた。チエスター將軍も現はれて權利を主張した。此の混亂の結末が附かずに會議は終つて、第二次が一九二三年四月から七月まで開かれ

この[illegible]アンゴラ[illegible]ニスタ[illegible]系及したのが大騒ぎで、土耳其石油會社に火が附きかけた。會に會議に於て、協約に由って、土耳其石油會社の獨占的利權を認せんことを提議した。之に對し米國も猛烈にヒユーズは抗議的から之に異議を唱へたので、其の結果協約は不成立となつた。されど之に拘らず、スタンダード石油の獲た土耳其石油會社の分前には何の障りも無く、メソポタミア油田は多年の紛議から脱し、安全に英佛米の合同支配に委せられた。

此の安全は果して何時まで續くものであらうか。土耳其其他の權利主張者が之で永遠に默つてゐやうか。獨逸が回復したら、第一にメソポタミアに向つて來るのではなからうか。石油問題は帝國主義の爭で、刻々に變化し、今日を以て明日を計られぬ。又た商業と政策との組合つた外交であるから、秘密裡に行はれることが多いので、現在ドンナ問題が醸成せられつゝあるかも知れない。米國は例外とし、油田國は概ね小國であつて、多くは石油地を國有してゐるが、之が強國の餌になり易い。強國の介在で小國相爭ふこともあり易く、また一國が獨占せば、他國が爭ふのは、權力平衡の常である。油田爭奪は必ず永遠に續くべく、何時かは之が爲に干戈の動くこともあらう。來

いさへある。

二　日本に石油國策ありや

此の質問に答ふるには「無し」の一言で足りる。日本本土及び殖民地にはし得べき源泉がなく、目下開發の北樺太の油田も他國にいへば僅た勿數で、甚だ少なから必需者を之に繋いでゐるのである。日本海軍にはフイシャー卿の如き石油狂がゐない、政治界にはア・ヘンリー・デタディンの如き石油ナポレオンがをらぬ。これで以て石油國策の確立は餘程六ケしい。

內地產油の狀態からいへば、唯だ悲觀である。秋田縣黑川に大噴油のあつた大正三年から六年までは、一ヶ年約四十萬噸の產額があつたけれど、四年が絕頂で連年減少し、現在は一年に十二三萬噸に下り、絕頂時に比して、十七八萬噸の差があり、信頼すべき地質學者は既に內地油田の枯渇を唱へてゐる。これは米國のやうな爲にする所あつての宣傳で無い事は、更に[illegible]が衆つて來ない。大正四五年には石油會社が原油の販路に窮しんで、海軍省に依賴し數萬噸を買上げて貰ふ約束をしたが、其中大戰の影響から油價が騰貴したので、會社は此約束を履行せず、而して其不履行に由り、多大の利益を擧げた。

海軍は徐々燃料油の必要に迫られても、內地會社が供給せず、又供給不可能なる爲に、大正六年頃からローヤル・ダッチ及シエル合同の日本販賣會社なるライジングサン石油會社の手から——實は倫敦の亞細亞石油會社（ローヤルの附屬會社）から、ボルネオ油の購入をなした。他方に臺灣苗栗の海軍豫備油田を、民間會社の手で試掘せしめたが不成功であつた。

日本海軍は平時三十萬噸乃至五十萬噸の重油を要するが、平時は喰ひ延べも出來るが、一旦有事の日にはさうは參らず、一年の需要量が二百萬噸を超すことになる。そこで內地で石油を得ることの出來ぬ海軍は外國油の買溜主義を執り、其事は海軍大臣が議會でも聲明し、先づ容れ物からといふので、德山に宏大なる製油設備と貯藏タンクとを設け、年々ライジングサンから買ひ、また淺野を通じて加州ユニオン石油會社から、鈴木を通じて英國波斯石油から、三井を通じて加州ゼネラル石油會社から、スタンダート石油からは直接に購入したこともある。買溜主義と聞いて、海軍省の門前には、當てになる事か、ならぬ事か分らぬ外國油賣込の周旋屋が續々と押かけたものだ。よしんば當になる話でも、海軍には一々好しと買入るだけの豫算が無い。買溜主義——何百何萬噸まで買溜めるのか知れぬが、これは石油國策としては薄弱な次第である。石油が無くては軍艦は動かぬ、戰は出來ぬ。陸軍でも高度の揮發油が十分に容易く得られる途が無くば飛行機は飛ばず、自動車は動かず、これで戰が出來やうか。日本人には先祖傳來の大和魂があるけれど、今後は大和魂を戰場に送り出すに石油が入る。所謂石油國策の立つて其のをらぬ今日、日米戰爭を說くが如きは痴人の夢であり、其夢たる事は日本の陸海軍が先刻御承知である。

海外油田には日本の足を踏み入るべき餘地が無い。而も民間會社は久しく內地の產油量と之より生ずる利益とに甘んじ、內地なほ多量の埋藏油ありと、過去を夢みつゝ、海外油田にシツカリ飛込む意氣もなく、たま／＼スタンダート石油に刺戟せられて、支那四川省陝西省の油田を調査した位のことであつた。之が大正六七年頃までの狀況で、此際久原鑛業會社が英領ボルネオに於て油田を得たのは恰も晴天の霹靂であり、政府當局も之を諒承した。後ち久原は之を試掘したが、不幸にして出油せず、遂に其利權を放棄した。

現在では從來內地油主義であつた民間會社も、生產の減少に餘儀なくせられて、米國又はボルネオから原油を入れて足すやうになつた。また海外油田の獲得を試み、緬甸石油も一二方面で一時問題とはなつたが、或は其油田が貧弱であつたり、またはローヤル・ダッチの間接防害があつたりして、どれも流產し

[illegible]
年々増加し、北樺太は内地生産額を凌駕してゐる。言ふまでも無く年々の消費は増加する。油田開發問題だけでも、この數年間に驚くべき發達で、七八千隻にも及び、これに要する重油は一年十萬噸以上である。我々の食膳に上る魚は、殆ど凡て石油で捕つたといへる。

こゝで現下の大問題たる北樺太油田の事に觸れるべき順序である。海外油田が殆ど何處も日本人の面前に門戸を閉じてゐる時に、北樺太が一つ開いてゐたのは、天が我國の爲に貯へ置いたものか。露國革命の内亂も亦我に幸ひしたのである。

三　北樺太油田問題

大正五年、歐洲の戰亂既に酣なるの時、海軍省は北樺太油田の調査を必要とし、之を民間會社に委囑せんとしたが、其の拒絶に逢うて諦めてゐた。其時に於て記者の予は全くの素人で、偶然の機會から、海軍省とは別途に、北樺太油田開發の我國家に重大なる意義あることを思ひ、二三先輩と相提げて朝野の間に遊說したが、容れられず、石油の黒人筋は内地尚富めり、何を苦しんで極北に入るの要があるかと予の說を一蹴の下に排斥し、甚だしきは黄粱の夢なりと予を嘲つた者もある。海軍省だ[illegible]

[illegible]した。[illegible]を以て現場に赴き、[illegible]協定する所ありて、日露共同開發の特許を得た。予は現場に在る間に久原が予等を援助すべき事を聞いた。

歸朝後久原鑛業會社の協力を得て、大正六年春予は技師と共に油田に往き、北樺太より歸國の途中にあつた政府技師ボレヴオイと會商した。この會合は去年予が豫め地質調査所長と協議して置いた事であつた。七年久原が初めて地質調査隊を北樺太に派遣すると時を同じくして、ボレヴオイ技師は去年の予との約束を履み、露國の巨商スタヘーエフ商會よりの委任状を帶びて來朝し、同商會主パトリン亦次いで來たり、大阪に於て久原スタヘーエフの北樺太油田調査の合辦契約が締結せられた。其契約によりスタヘーエフは鑛區獲得の責任を帶び、久原は專ら調査試鑿に任ずるものであつた。スタヘーエフは此年直ちに現地に就き露國法に準じて、五百余鑛區を選定し出願したが、此等の試掘權は、大正九年我軍の占領に先だつ日附で、當時現在せし露國官憲から正規の手續で許可せられたのである。

八年五月久原鑛業會社は海軍省の勸告を容れ、其のスタヘー

エフとの契約權を三菱合資會社（四分の一）日本石油會社（六分の一）寶田石油會社（六分の一）大倉鑛業（六分の一）の四社に分ち、自ら殘餘の四分の一を取つて北辰會と稱する一組合を組織した。而して北辰會はスタヘーエフ商會の諒解を得て、直ちに現地の調査に着手し、同時に海軍省は囑托地質技師五名を送り、水路部はまた沿岸水路を測量した。

然るに不幸にも、北辰會が該地に二油井の試鑿を始めた時、北樺太は赤化し、尼港の邦人は危殆に陷つたとの情報が現業地に設備せる無線電信に響いたので、從業員約二百名は生死を賭し、雪中三十日の退却をなして歸來した。其時は中々の騷ぎで、南樺太の官憲有志は大擧して救護の爲めに國境に向つた。軍艦も派遣せられた。これが帝國軍艦として、氷海を突き碎いて前進した初ての奇き經驗であつたやうだ。

やがて尼港邦人の虐殺あり、帝國は軍を尼港に進むるの機會に、油田差押を主なる目標として、北樺太を占領し、兵を亜港に駐めて油業地を恢復し、之にも守備隊を置くこと、日露條約實施の時に至るまで五年の久しきに及んだ。

占領以前の北辰會事業は、組合員の出資に賴つたのであるが、占領後のは、海軍省から北辰會スタヘーエフの合同體に調査試掘を依托する方針で、人夫賃金給與の名目で、年々補助金を下附して作業せしめ、海軍省は之を監督したのである。而して事業方法は北辰會及スタヘーエフの双方より選んだ委員によりて計畫せられ、北辰會は之を實行した。北辰會は事業復舊の後組織を改めて株式會社となり、發起者たる予等及三井鑛山會社、鈴木商店は前後して之に加入した。

北辰會、スタヘーエフ及海軍省の北樺太油田に費したる金額は累計優に七百萬圓を超え、其の成績は北部オハで五井より日産二百五十石乃至三百石の出油を見るに至つた事であり、其他の地區でも試鑿したが、未だ成功しない。併し其の事業によりて北樺太油田の一般に有望なることが認められた。北樺太油田が斯くなり、政府も之に力を入れるやうになつたに就いては、機關大佐宮本雄助君の職責以上の努力を記憶せねばならぬのだが、今となつて其功績は却つて忘却せられてゐる。

政府は北樺太からは撤兵したい、油田は取らねばならぬとして、屢ば日露交渉を開いたけれど、大連會議の頃までは、日本側から油田問題を持出さなかつた。それが北京會議となると、第一石油利權（石炭は附たり）第二勞農政府承認の觀があつた。結局得る所の油田は現業地八ケ所に於て、五割の地區即ち合計六百五十エーカー（約八百萬坪、内地の八鑛區）、未開油田中一千平方露里の五割で、餘りに大利權とは云へぬが、取れた丈が

ては、日本帝國の[illegible]せられることになる。

政府は其の體制により、利権を與へらるべき日本人企業家を指名せんとし、北辰會を解散して、之を中心とする新會社を組織せしむる方針で、これが爲に法律も出た、勅令もやがて出るであらう。新會社は政府の國防方針と民間の經濟施設とが旨く調和されなければならぬ。それは賢明な人達が當事者になつてゐるから、都合よく組織するだらう。所で新會社を組織する爲には、北辰會がスタヘーエフ商會との創業以來の關係を斷つて來ることが條件である。この新會社には外人を容れぬのが政府方[illegible]

[illegible]むり出たのであり、政府としても[illegible]ら、道徳上の責任もある。今日[illegible]として、これが[illegible]に出來ぬと、これこそ國際間に日本帝國の信義を疑はれはせぬか。或は日本帝國の國旗を押付けたり、或は三百代言的口吻を以て應退したら、分離問題は容易に片付くまい。予は此事業の發頭人であり、又スタヘーエフの創作者である責任上、此の解決如何を頗る憂慮してゐるけれど、今は當事者で無いから手の附けやうがない。（大正十四年五月二十一日稿）

迷信の種々相を痛罵してその絶滅を呼ぶ

高島米峰

一　學問、道徳、藝術に生命づける信仰

從來の心理學は、主知的の傾向が强くて、信仰などといふことを、一向に、問題として居ないやうであるが、しかし、吾等の實際生活としての心的現象は、信仰の作用であることが多く、否、もつと徹底的に言へば、信仰が、吾等の生活の、指導原理となつて居る場合が、多いのである。從つて、信仰は、心理學が研究すべき、可なり重要な對象であるべきだと信ずる。

知識と信仰、科學と宗教を對立せしめて、その關係を論議せるもの、古來、その學者に乏しくない。しかし、僕は、今こゝで、そうした事柄を、取扱はうといふのではない。たゞ、信仰は、直觀的知識を中心として成立し、知識は、客觀的事實に對する、科學的論理的歸結であるといふことだけを、明にして置けばよいのである。但、この二つのものは、全然、相背反して獨存するものではなく、科學的論理的知識に依りて、信仰は完成せられ、これと矛盾し撞着するやうな信仰は、次第に、信仰としての生命を失ひ、科學的論理的知識も、亦、直觀的知識たる信仰を、その根柢とすることに依つて、確實性を豐にすることが出來るのである。

人生の理想は、眞善美の完成に在りとする。而して、その眞は學問に依つて探究せられ、善は道德に依つて實踐せられ、美は藝術に依つて表現せられるのである。しかし、この三つのもの、各々孤立獨存して居たのでは、甚だ意義の乏しいものである。現に、單なる學者として、最高學府の教授たるに足る程のものも、その德性に於て、甚しく缺くるところがあるといふやうなものもあり、又、德者としては、以て他の範と爲すに足る程のものも、學的教養が缺けて居るために、その德光が、甚しく[illegible]名家だといふ標榜を有するものも、素行が修まらないために、識者に指彈せられるといふものもないではない。かくて、その生活は、全く、支離滅裂であつて、各自に有する唯一の天分さへ、遂には、思ふやうに發揮することが出來なくなる。即ち、この三つのものは、大にせよ小にせよ、兎も角も、各々有機的の關係に於て、統一せられなければならないし、又、そうなつてこそ、始めて、意義もあり、功果も生ずるのである。然るに、この三者の統一は、三者それ自體に、統一力があるのではないのであるから、どうしても、他の偉大なる力を、借らなければならないのである。謂はゆる他の偉大なる力とは、何であるか、それは、即ち宗教であり、信仰である。信仰は、學問(眞)道德(善)藝術(美)に生命づけるものであつて、この力の加被するところ、眞は則ちいよ〳〵眞に、善は則ちいよいよ善に、美は則ちいよ〳〵美たることを得るのみならず、この三つのものを、渾然融和せしめて、そこに、統一せられたる、新しい生活力を發生せしめなければ、やまないのである。乃ち、吾等は、この信仰を根柢として、その上に、學問道德藝術を建設しなければならない。これ實に、人生の理想であり、人間の目的である。

二　正しい信仰と迷信とは如何に區別するか

信仰によつて與へらるゝに、迷信といふものがある。否、迷信も亦、一種の信仰だと言へないことはない。即ち、信仰を分ちて、正信と迷信との二つにするといふことが、最も合理的であるかも知れない。而して、その所謂ゆる正信と迷信とは、どうして區別するかといふに、これは、決して容易なことではない。假りに、こゝに、信仰の定義を下して、『信仰とは、超人者に對する歸依の情に出發し、超人者の威神力に依憑することに依つて、自己の全生活に、無限の歡喜と、不斷の向上と、永遠の安定とを、持ち來す力である。』とする。然るに、この定義は、そのまゝこれを、迷信にも當て嵌めることが出來るのである。『鰯の頭も信心から』といふやうに、どんな低級卑俗な信仰でも、それを信じて居るものゝ立場に在りては、それに依つて『自己の全生活に、無限の歡喜と、不斷の向上と、永遠の安定とを持ち來す力』になつて居るのであつて、その心理は、他の、高等な宗教の信仰に生きて居るものゝ心理と、毫も、異るところはないのである。たゞ、その信仰の對象が、正しいか正しくないかが、問題なのである。そこで、正信と迷信とを區別

[illegible]
言ふまでもなく、専門の知識は、日に日に進み日に新たに、その進歩と、殆ど同じ速力を以て、常識も進歩するのであつて、昨日の専門知識は、今日の常識となり、今日の専門知識は、明日の常識とならぬと言へない。しかし、或時代には、自ら、その時代の常識といふものがあり、或る社會には、自ら、その社會の常識といふものがある。そこで、その時代の常識、その社會の常識の、認容しないやうな信仰は、これを迷信と呼んで差支ないのである。滿夜、天を仰いで、星辰の輝くを望み、これを、『雨の降る穴』であると信じて疑はないものがあるならば、縱令、星學などといふ、専門的知識はなくとも、時代の常識は、斷じてこれを許さないのである。昔の人は、雷鳴電光を以て、神の威力の發現だと信じて居たのであるが、今日の如く、電信電話電燈から、ラヂオまでが、常識となつて仕舞つた時、尚、昔の人の信仰を、そのまゝ信仰して居るものがあるならば、明にこれ、迷信であると、斷じなければならないではないか。

信仰は、その正しきも、迷へるも、共に、自己の知り得ざる境地に對して、依憑する感情を基礎として、成立するものであ

知識と信仰、科學と宗教を對立せしめて、その關係を論議せるもの、古來、その學者に乏しくない。しかし、僕は、今こゝで、さうした事柄を、取扱はうといふのではない。たゞ、信仰は、直觀的知識を中心として成立し、知識は、客觀的事實に對する、科學的論理的歸結であるといふことだけを、明にして置けばよいのである。但、この二つのものは、全然、相背反して獨存するものではなく、科學的論理的知識に依りて、信仰は完成せられ、これと矛盾し撞着するやうな信仰は、次第に、信仰としての生命を失ひ、科學的論理的知識も、亦、直觀的知識たる信仰を、その根柢とすることに依つて、確實性を堅にすることが出來るのである。

人生の理想は、眞善美の完成に在りとする。而して、その眞は學問に依つて探究せられ、善は道德に依つて實踐せられ、美は藝術に依つて表現せられるのである。しかし、この三つのもの、各々孤立獨存して居たのでは、甚だ意義の乏しいものである。現に、單なる學者として、最高學府の教授たるに足る程のものも、その德性に於て、甚しく缺くるところがあるといふやうなものもあり、又、德者としては、以て他の範と爲すに足る程のものも、學的教養が缺けて居るために、その德光が、甚しく

名家だといふ聲譽を有するものも、素行が修まらないために、識者に指弾せられるといふものもないではない。かくて、その生活は、全く、支離滅裂であつて、各目に有する唯一の天分さへ、遂には、思ふやうに發揮することが出來なくなる。即ち、この三つのものは、大にせよ小にせよ、兎も角も、各々有機的の關係に於て、統一せられなければならないし、又、さうなつてこそ、始めて、意義もあり、功果も生ずるのである。然るに、この三者の統一は、三者それ自體に、統一力があるのではないのであるから、どうしても、他の偉大なる力を、借らなければならないのである。謂はゆる他の偉大なる力とは、何であるか、それは、即ち宗教であり、信仰である。信仰は、學問（眞）道德（善）藝術（美）に生命づけるものであつて、この力の加被するところ、眞は則ちいよ〳〵眞に、善は則ちいよいよ善に、美は則ちいよ〳〵美たることを得るのみならず、この三つのものを、渾然融和せしめて、そこに、統一せられたる、新しい生活力を發生せしめなければ、やまないのである。乃ち、吾等は、この信仰を根柢として、その上に、學問道德藝術を建設しなければならない。これ實に、人生の理想であり、人間の目的である。

二　正しい信仰と迷信とは如何にして區別するか

信仰によく似たものに、迷信といふものがある。否、迷信も亦、一種の信仰だと言へないことはない。即ち、信仰を分ちて、正信と迷信との二つにするといふことが、最も合理的であるかも知れない。而して、その謂ゆる正信と迷信とは、どうして區別するかといふに、これは、決して容易なことではない。假りに、こゝに、信仰の定義を下して、「信仰とは、超人者に對する歸依の情に出發し、超人者の威神力に依憑することに依つて、自己の全生活に、無限の歡喜と、不斷の向上と、永遠の安定とを、持ち來す力である。」とする。然るに、この定義は、そのまゝこれを、迷信にも當て篏めることが出來るのである。「鰯の頭も信心から」といふやうに、どんな低級卑俗な信仰でも、それを信じて居るものゝ立場に在りては、それに依つて「自己の全生活に、無限の歡喜と、不斷の向上と、永遠の安定とを持ち來す力」になつて居るのであつて、その心理は、他の、高等な宗教の信仰に生きて居るものゝ心理と、毫も、異るところはないのである。たゞ、その信仰の對象が、正しいか正しくないかが、問題なのである。そこで、正信と迷信とを區別

[illegible]

言ふまでもなく、昔日の常識は、日に進み行くこの進歩と、殆ど同じ歩調を以て、常識ではなくなつて、昔日の專門知識は、今日の常識となり、今日の專門知識は、明日の常識とならぬと言へない。しかし、或時代には、自ら、その時代の常識といふものがあり、或る社會には、自ら、その社會の常識といふものがある。そこで、その時代の常識、その社會の常識の、認容しないやうな信仰は、これを迷信と呼んで差支ないのである。雨夜、天を仰いで、星辰の輝くを望み、これを、「雨の降る穴」であると信じて疑はないものがあるならば、縦令、星學などといふ、專門的知識はなくとも、時代の常識は、斷じてこれを許さないのである。昔の人は、雷鳴雷光を以て、神の威力の發現だと信じて居たのであるが、今日の如く、電信電話電燈から、ラヂオまでが、常識となつて仕舞つた時、尚、昔の人の信仰を、そのまゝ信仰して居るものがあるならば、明にこれ、迷信であると、斷じなければならないではないか。

信仰は、その正しきも、迷へるも、共に、自己の知り得ざる境地に對して、依憑する感情を基礎として、成立するものであ

る以上、當然、科學の論究する範圍を、超越するものである。既に、科學の論究する範圍を超越するものである以上、それが、科學的で有ると無いとに依つて、正信と迷信とを區別することは、不可能である。しかし、正信は、科學の研究の結果を承認するに反し、迷信は、科學の研究の結果を、受け入れるだけの力さへない。即ち、科學の研究の結果を承認はするが、しかも、科學以上の立場に立つて、科學の研究範圍を超越するものを正信と言ひ、科學の研究の結果を受け入れ得ざるのみならず、科學以下に降りて、科學の論究範圍から、逃避するものを、迷信といふことが出來る。

更に、哲學的に、正信と迷信との異同を考察して見るに、假りに、この世界を、現象界と實在界との二つに別け、現象即實在の哲理に、徹底するとせぬとは別問題とするも、兎も角、現象界は、知識の境界であり、實在界は、超知識の境界であるといふことは、何人も、異存はあるまい。今、謂はゆる正信は、この超知識的境界である實在界に對して、超知識的の依憑を爲すものであるが、これに反して、迷信は、知識的境界である現象界内に在りながら、それに對して、超知識的の依憑を感するのであつて、徒に、感情の変動に任せて、毫も、理智の光明を放たしめやうとしないのである。

三　過去の眞理が現在では迷信となつて居るものもある

正信と迷信との區別は、大略、以上の三標準に依つて、之を判別することが出來る。しかし、專門の知識が進歩し、從つて、常識も進歩すると同じやうに、信仰も亦、進歩しないでは居ない。即ち、昨日まで、正しい信仰だと思つて居たことが、今日は、迷信として捨てなければならないやうに、なり得るといふことを、豫想し得られるのである。夫の、地球を以て、宇宙の中心であるとなし、一切の諸星は、皆その周圍を廻轉するものであると主張して居た、謂はゆる地球中心説は、遠く希臘の昔から、文藝復興時代までは、正しき知識であり、同時に、正しき信仰であつたのである。然るに、コペルニクス一たび出でて、地球は、自轉しつゝ、他の諸遊星と共に、太陽の周圍を廻轉するものであるといふ、謂はゆる太陽中心説を唱道して、その可能が立證せられるやうになつては、最早、地球中心説は、知識でもなく、常識でもなく、正信でもなく、確に、一種の迷信であつたといふことに、なつて仕舞つたのである。又、夫の、宇宙の諸現象、世界の萬物、悉くこれ、人間を以て目的とし、人間のために存在するものであると說く人間中心說も、

十[illegible]に[illegible]つた[illegible]
[illegible]回つてゐるに過ぎないで、[illegible]の一物であつて、決して、人間だけが、特權を有するものでないといふ主張が、[illegible]を得たゝめに、さしもの人間中心說も、遂に、迷信の中へ追込まれて仕舞つた。

此の如く、地球中心說や、人間中心說を、今日も尚、信じて居るものがあるならば、それは、明に迷信であることは、もとより言ふまでもないが、しかし、その發生の當時に於ては、それは、確に、知識であり、正信であつたなのである。即ち、他面からこれを觀察すると、超知識的境界とされて居る、不可解の世界、神秘の境地も、人智の進むに從つて、開拓せられ、耕耘せられて、次第に、その領域が狹められるのである。不可解の世界、神秘の境地が、狹くなればなる程、知識の世界が廣くなり、信仰の境地が明くなるのである。知識の世界が廣くなり、信仰の境地が明くなれば、それに伴うて迷信は衰へてゆかなければならない。

四　なぜ知識階級に迷信が無くならないのか、附　友引に葬式を營むことの可否

然るに、教育普及し、人智進步して、當然、迷信の亡びたけ[illegible]
[illegible]
く、却つて、新しい[illegible]を、[illegible]の理由に基くものであるかを、疑ふ人もあらう。成程、一應は道理至極の事であるか。しかし、これは、特別な理由がある譯ではない。たゞ、いつの世にも、子供の絕えないやうに、いつの世にも、無知な迷信家が絕えないといふだけのことである。

この無知の迷信家は、女性の中に、殊に多いのであるが、例へば、葬式を行ふ日が、友引であるといふことを、非常に忌むことになつて居て、その理由は、友引といふのであるから、その日に葬式を行へば、近くに、必ず、再び葬式を出さねばならないやうなことに、なるといふだけのことである。友引といふのは、孔明の六曜星と名づくるものゝ一つで、謂はゆる六曜とは、先勝、友引、先負、佛滅、大安、赤口であつて、正月ならば、元日を先勝として、友引が二日、先負が三日といふ順序で、吉凶を判斷するのであつて、これまた、人間が、自分の都合上、さういふ風に、定めたといふこと以外に、何等、原理的根據を持つて居るのではないのみならず、友引に葬式を行つたものが、誰も彼も、悉く、引き續いて、葬式を出したといふ、實質上の材料もないのである。然るに、さうした場合、流行に、

新しい教養ある男子は、そんなことに頓着せず、友引でも先負でも、日取の都合さへよければ、どし〳〵實行しやうとするのに對して、女性は、必ず反對して、因襲の支配を受けやうと努力するのである。道理はさうでもありましやうが、昔から、世間で言ひ傳へて居ることに、强ひて反對して、萬一、引き續いて、不吉なことが生じた場合、世間から、それ見たことかと言はれるのもつらいし、又、さうした不吉なことが、實際出來たら、それこそ實に大變である、まア〳〵、かういふことは、世間に從つて置く方が安全です。といふやうな、女性一流の感情論のために、遂に、馬鹿々々しいとは思ひながら、喧嘩してまで、我を通すでもあるまいと、遂に、その愚論に從ふことになる。これが知識階級に、迷信の亡びない、一つの理由とでも、言へば言へないことはない。

五　狐狸、天狗、幽靈、死靈、生靈

かういふやうなことから、狐狸が人を誑したとか、天狗が出て人をさらつて往つたとか、死靈に祟られて居るのだとか、加持祈禱で、災難を祓ひよけて貰つたとか、御神水やマヂナイで、病氣を癒したとか、さては、卜筮、御鬮、人相、家相、鬼門、方位、九星、墨色から日柄、緣起の類に至るまで、迷ひ、惑つて、その底止するところを知らないといふ狀態、それは、堂々たる天下の大新聞さへ、尙、毎日、九星を掲載し、又可なり立派な雜誌が月々の運勢なんどを、呼物の一つにして居るのでも、謂はゆる民衆の迷信の程度を、略々測定することが出來るではないか。今これ等の迷信の一々について、解說し批判することの、餘りに馬鹿々々しさを感じないでもないが、つまらないことから、心を傷つけ、命を失ふもの丶甚だ少くない現狀を見ては、また、默止するにも忍びないのである。

狐や狸に、人を誑す力がありやなどと、眞顏になつて、考へたり書いたりするさへ、氣恥しい。吾等は人間である、狐や狸を誑す力こそあれ、彼等に誑されなどして、たまる譯のものではない。若し、不幸にして、狐や狸に、誑された人があるとするならば、その人は、實に狐や狸にも劣つた、出來損ひであり、萬物の靈長たる人間のつらよごしである。又、天狗の怪談は、源義經の武名と共に、鞍馬の山よりも高く鳴響いて居るが、それは、爲にするところある策士輩の、故造になるもので、客觀的存在でないことは、故井上圓了先生著『天狗論』がこれを說き得て盡して居る。

靈魂の滅不滅は、可なり重大なる問題であるが、縱令、それが、滅するにせよ、滅しないにせよ、魂魄此の土にとゞまり

て、[illegible]
[illegible]
も、[illegible]はもとより色もなく形もなく、従つて見ることも出來なければ、觸れることも出來ないのである。即ち、幽靈とは文字通りに、目に見ることの出來ない靈魂といふことであつて、これが若し、人目に觸れるやうなところへ、現はれ出づるならば、正にこれ幽靈にあらずして、幽靈と言はなければならない。幽靈の正體見たり枯尾花、一句能く、この間の消息を道破し盡して居る。或人曰く『人が、已に遺恨ありとて、生きては憑き、死しては憑き、其の怨を、自由に報い得るものならば、源義經、武藏坊辨慶など、早速、幽靈となつて、梶原を取り殺し、大義の本意を遂すべきに、左様のことなきは、甚だ怪むべし。又、太平記に、楠正成の亡靈が、一條の戻り橋にて、女に化けて、大森彦七をおどしたりと見ゆ、正成も、存命の時と違ひ、死ぬれば、左程までに鈍くなるものか、正成が恨むべきは、北朝方の大將より始めて、幾人もあるべし、然るに、そのかはさし置きて、彦七一人をおどかけしは、奇怪千萬なり。』と。痛烈肯を刺すの言、これでは、流石の正成も、氣耻くて、七度生れ變つて來る程の勇氣も出なからう。

六　加持祈禱は病氣や災難を除くに足るのか

世間では、加持祈禱と云つて、一つの形式のやうになつて居るこへ、笑ふべきであるのに、これを以て、單に、病氣災難を除いて見れる、不思議な力のあるものだと思つて居るものが多いのは、その迷信の度、寧ろ憐むべきである。加持とは、眞言宗の宗意安心に當る。重要な事柄であつて、加は加被、持は任持で、即ち、如來の大悲と、衆生の信心とを表し、佛日の影、衆生の心水に現ずるを加と言ひ、行者の心水、能く佛日を感ずるを持といふのであつて、佛の大悲力が、衆生に加被し、衆生信心の力が、佛の大定を動かし、佛能くこれを念持するといふやうに、佛の三密と、衆生の三密とが、互に相加はり、相應するといふことである。三密とは、身密、口密、意密であつて、手に印契を結び、口に眞言を誦し、心本尊の三摩地に住することであつて、かやうに、三密相應すれば、即身成佛することが出來るといふのである。又、祈禱は、人間向上の方便であつて、從つて、佛と我と、入我我入の觀に住して、祈るを本意とする。此くの如く、加持も祈禱も、深い意義のあるものであつて、病氣や災難を、消除するといふやうな、道具に使ふべきものでは

なくて、佛にならむがための、修業の一つだと考へて、差支ないものなのである。それを、澆季末法の悪僧共が、末代劣機の愚民共の意を迎へ、若しくは、これを誘惑して、加持祈禱を濫用することに依つて、私腹を肥さうとするのであつて、その弊、頗る甚しいものがある。

井上圓了先生の『おばけの正體』に、怪談辨妄錄の一篇を引いて、曰はく『昔、京都の里村某なるものゝ家にて、器物を失ひたることあり、色々手を盡して、捜索すれども見當らず。然るに、隣家に神巫ありて、占をよくし、又禱り祭りをなして、病氣その外、諸事に効驗あり。殊に、紛失物などは、妙に其所在を知るとの評判高く。且つ、人の勸めもあれば、其巫を、已の家に招きて、禱らしめたり。時に、巫は、壇に神酒を供へ、紙の幣束を立てゝ、主人に言へらく、一家のものをして、悉く壇の前を過ぎ行かしめよ、若し、その中に、盜みしものあらば、幣束おのづから動かんと言ひつゝ、呪文を唱へて禱をなせり。主人その言葉に從ひ、家内のもの殘らず、其の前を通らしめしに、一小僕の過ぐるに及んで、幣束忽ちにふるひ動けり。衆人、大に驚き恐れて、神妙なりといへり。小僕、大に怒り、直に腕をまくり、大喝一聲して、巫の胸をついてこれを仆せしに、巫の足の大拇と、幣束の柄とが、長き糸にて、結びつけられ居たるを見出し、家人立どころに大に罵りて、これを逐ひ出せり。』と。この種の祈禱者、今も甚だ多く、これに惑はされて、家を傾け、産を失ひ、遂には、自殺せしものさへ、少くはないのである。惑はすものゝ不埒は、もとより言ふまでもないのであるが、迷はされるものも、亦、その責の一半を、分たなければならない。諺に曰はく『正直の頭に神宿る』と。又曰はく『さはらぬ神に祟りなし』と。而して古歌に曰はく『心だに誠の道にかなひなば禱らずとても神や守らむ』と。愚にもつかない、邪曲な加持祈禱などに、心の動かうとする時、靜に、自己の三密を相應せしめるやうに努力すべきである。

七　柿本人丸が消防や安産の神樣となる

未開の時代ならばいざ知らず、開明の今日、醫術の進歩、驚くべきものあるにも拘らず、尚、マジナヒや、神水の如きものに依つて、疾病を癒さむとし、科學的知識の發達著しき現代、尚、お札の如きものに依つて、火難盜難を避けむとし、姙娠出産を求めむとするものゝあるのは、實に抱腹の至りである。子供の頭に腫物の出來た時、その上に、蟲といふ字を書けば、直に癒ゆといふが如き、即ち、子供の頭の腫物は、世俗これをクサと呼ぶところから、クサを草にこぢつけて、草ならば、馬が食つ

た[illegible]といふ[illegible]インフルエンザ[illegible]時、流行性感冒[illegible]に、[illegible]といふ[illegible]のである。これは、インフルエンザを、俗に「お染風」と言つて居たところからの、[illegible]洒落である。最も、滑稽なのは、或人が、犬が己に向つて吠えて來る時、手に虎といふ字を書いて示せば、忽ち恐れて逃げて仕舞ふと聞き、これを試みたところ、何の功もなくし、したゝか噛みつかれたといふ。誠に、噴飯の料である。

神水が疾病に功ありといふのも大抵、この類の程度のものである。如何に神前に供へた水だとは言へ時たてば腐りもするし、埃もたまる。腐水汚水は、人體に害こそあれ、益のない位のことは、説明をするだけ野暮である。又、お札の如きも、これに信頼して居れば、却つて、意外な災難に、出遭はないと限らない。播州明石に、人丸神社といふがあつて、火除と安産との守札を出すといふことであるが、人丸は、消防の大家でもなく産科の醫者でもなかつたのに、どういふ譯でそうしたお札が出るのかといふに、人丸の音「火止まる」に通じ、又「人うまる」にも通ずるといふところから、火除と安産とのお札が出るのだといふのである。近く、一昨年の大震火災の際、淺草の觀音が燒失を免れたといふので、俄に火除の佛様だといふことに

[illegible]ないのである。

八　中るも八卦中らぬも八卦

易の原理はかなり高尚なものである。しかし、これに依つて、人間の運命を豫言して、百發百中するといふやうなことは、あり得べからざることである。當るも八卦當らぬも八卦、たまたま當つたものは、盛にこれを吹聴し、當らぬものは、馬鹿馬鹿しさを恥ぢて、これを默殺するために、當つたものばかりのやうにもなつて仕舞ふのである。相場師相手の賣卜者が、甲には賣れと敎へ乙には買へと敎へるを定法として、どちらか當つた方からは、相當の謝禮が來るし、當らない方でも見料だけは前金だから、樂に營業が出來るのだといふことである。殊に、八卦に依つて、吉凶禍福が、確實に豫知し得られるものならば、何故に、易者自身が從容に、大道に立つて、水ッ鼻をすゝつてゐなければならないのか。甚だ怪むべき事柄ではないか。大の、お鬮に依つて吉凶を判じ、自己の行動の、為すべきか為すべきかを決定しやうとするが如きは、餘りに、低級單純であつて、福引の一等を當てたといふところから、役にも立たない品

物を、無闇に買ひ込むの愚よりも、更に一層愚なことである。

迷信家あり、賣卜者に就いて、自己の生命を、豫言して欲しいと頼んだところ、賣卜者は判斷して今より幾年の後、某月某日、必ず死すべしと宣告した。迷信家は、固くこれを信じて、某年某月某日までに、全財産を消費し盡して、一錢の餘財なく、その身自ら棺に入りて、命の終るのを待つて居た。然るに、その日の夜になつても死なず、翌日になつても死なず、たゞ刻々に空腹を感ずるけれども、何等の蓄がないので、どうすることも出來ない。こゝに於て、始めて、永い間の迷夢から驚覺して、賣卜者を訪ね、何故に、吾を欺いて、この悲境に陷れたかを難詰した。然るに、賣卜者、平然として、吾決して、足下を欺いたのではない、足下は、某月某日に必ず死なねばならぬやうに、天運が定まつて居つたのである。しかも、今日に至るも、尚死せざるは、他に、新にその原因が發生したのであらう。足下、人を救助したといふやうなことはないかと反問した。これに對して迷信家は、已に死期が定まつたと聞いた以上、財産など殘して置く必要もないから、悉くこれを貧民に施して、專ら、救恤の事に消費してしまつたと答へた。すると、賣卜者は、したり顏して、そのことである、足下、人を救助したといふ積善の餘慶に依りて、天は、特に、一度定まつた足下の壽命を、更に延長せしめたのである。と言つたといふ話を、聽いたことがある。如何にも能く、賣卜者の權智手段と、迷信家の愚さ加減とを、活躍せしめて居るではないか。

九『本來東西なし、何れのところにか南北あらむ』

建築の時、鬼門を犯し、移轉の時方位に逆ふ時は、天災疾病等を免ること能はずといふ。この種の迷信もなか〳〵大きな力を持つて居る。鬼門は、支那の古書に出て居る俗說で、『東海に山あり、山上に桃樹あり、其の枝横にはびこり、三千里の間に亙るといふ。其の東北に門ありこれを鬼門と名づく。萬鬼の聚るところなり。』とあるのが起源らしい。それに、陰陽家が妄書して、此の方角は、陰惡の氣の集まるところなれば、極めて凶方なりと言ひ、或は、萬物極りて又生ずる方にして、天地の苦しむ所なれば、これを避くるのであるといふ。かうした無根據の妄說が、最初、衆愚の思想を支配して居たのが、次第に、上下一般にこれを迷信するやうになつて、建築や移轉ばかりでなく、その方位に向けて、便所を設けたり、坎溜を作ることまで、これを禁ずるといふやうに、なつて仕舞つたのである。

元來、東西南北の四方は、人間の便宜上の假定であつて、一

なく、地球を基[illegible]所であり、東と名づけ西と[illegible]であるか。否、地球の上だけで考へても、西へ西へと赴いた時、何時の日か東に到着するところは、即ち曾て、東と呼んだところではないか。北へ北へと進めば、遂に南と呼んで居たところへ、来て仕舞ふのである。甲の以て鬼門とする東北隅も、乙はこれを以て西南隅とするのであり、殊に、地球は、自轉しつゝ公轉するのであつて、假定の方位の如き、地球自體から言へば、時々刻々に變つて居る譯なのである。古賢曰はく、『迷ふが故に三界常あり、悟るが故に十方空なり、本来東西なし、何れの處にか南北あらん』と。世の迷信家達、迷の生ずる時、ふたゝびこの偈を唱へよ、それこそ、加持や祈禱や、お神水やお札などより、遙に、顯著な功果があらう。

一〇　正月元日は吉日か凶日か

御幣を擔ぐ連中に出逢つては、とてもお相手が致しかねる。善いにつけ、惡いにつけ、小さな屁理窟をつけて、現在、事態を容易ならざるものにして仕舞ふ。厄年厄日の如き、その一つである。

男子に在りては、二十五歳、四十二歳、六十一歳を厄年とし、女子に在りては、十九歳、三十三歳、三十七歳を厄年と[illegible]て居る。[illegible]過する為故だといふので[illegible]たいもので、上に挙げた年齢に、比較的、大吉者や死亡者が多いといふ、統[illegible]を基礎としての結論だといふならば、その統計が、決して不確實であるにせよ、多少の理由を認めてやつてもよいのであるが、それにしても、誰も彼も、その年齢に達すれば必ず、災厄に出逢ふといふ譯ではないのであるから、特別に、厄除け厄拂ひなどをする必要のないこと、言ふまでもない。

正月元日に生れる人もあれば、死ぬ人もある。生れた方から言へば、正月元日は吉日だが、死んだ方から言へば、正月元日は凶日である。船に帆を揚げて、東に航するものは、西風を順風と言ひ、西に航するものは、東風を順風とする。風に順逆がある譯ではなくて、航海するものに順逆があるのであると同じやうに、日に吉凶があるのではなくて、人の主觀に吉凶が存するのである。徳川家康が、關ヶ原の一戰は、實に、天下分け目の大勝負である、いざ出陣といふ時に、方角が惡いからといふので、これを阻止したものがあつたが、家康は、斷乎としてこれを却け、遂に、徳川三百年、平和の基礎を築くべき、大捷を博したのである。又、唐の太宗、出陣に當つて、今日は、往亡日

と言つて、往くもの丶亡ぶる日であるといふことを理由として、その出陣を見合せられたいと、諫めた臣もあつたが、その時、太宗は、否、然らず、往亡日とは、我往きて敵の亡ぶる日である、毫も憂ふるに足らないと言つて、兵を進めて、遂に、勝利を得たのである。

一一　周の武王の吉は殷の紂王の凶である

去年は、干支が甲子であつたので、それを更始ともぢつて、更始一新の年だなどと、洒落だか本氣だか、譯のわからないことを言つたものである。今年は、乙丑で、丑を牛と解して、新聞でも雜誌でも、牛に關する、各種の説話を集めたのである。元來、辛酉の年は凶年だとか、丙午の年に生れた女は、火の性質が烈し過ぎるから、これと結婚するのは危險だとかいふやうなことが、どれだけ、一般人の生活を、禍して居るであらうか。殊に、丙午生れの女性は、本年二十歳になつたので、結婚年齢として、最も適當の時期に達して居るのであるが、例の迷信からして、縁遠く、容易に結婚することが出來ないのを悲觀して、自殺したものが、昨年以來少くない。迷信も個人々々が、一種の道樂として、他に害を及ぼさない程度に在る間は、その人間の愚さを、憫殺するにとゞめて置いてもよいのであるが、かやうに、人命に關するやうになつては、到底これを、放つて置く譯にはゆかないのである。

辛酉の年を、凶年だといふ陰陽家の根據は、十干を五行に當て嵌めると、庚辛は金性であるし、辛酉は九星の上では金星であるから、金性と金星と、即ち金と金と相生相尅の理で、凶年だといふのである。これを歴史に探るに、後一條天皇の治安元年は、辛酉年であつて、この年、天災が甚だ多かつたゝめ、勅命に依つて、曼荼羅寺の仁海僧正が、五月四日から、百ケ日間、金門鳥敏法を修し、これが先例となつて、爾後、辛酉の年には、此の法を修して、國家安穩、萬民豐樂を祈つたのである。その時の綸旨に、

『近來、天變頻りに示し、怪異例に背く、加之、今年辛酉、歳竟日の災に相當る、仍つて、今日より七月中旬まで、八口の伴侶を引きて、百ケ日間、殊に、精誠を致し、五大虚空藏の秘法を勤修せらるべし。』

とある。これたまく、辛酉の年が、凶年であつたゝめに起つた事柄であつて、いつの辛酉の年も、悉く、治安元年のやうであるといふ、必然的約束はないのである。若し、辛酉の年が、必ず凶年惡年ならば、日本は、二千五百餘年前に、起り得なかつたかも知れない。なぜならば、神武天皇紀元元年は、實に辛

[illegible]であつたならばともかく、その武王の一代について[illegible]も、丙午ばかりが悪い[illegible]だとはいへない。

周の武王が、甲子の年に興つたので、武王の立場から言へば、甲子の年は、非常に積極的意義を持つのであるが、これに反し、殷の紂王は、甲子の年に亡びたのである。事實は、武王が紂王を亡ぼしたのであるから、紂王から見れば、甲子は怖しから凶年になる。甲子に、善悪なく吉凶なく、たゞ興りしものには吉となり、亡びしものには凶となるのである。これ等の事實を綜合して考へると、丙午の年に生れた女が、一生を犧牲としなければならぬといふやうな、馬鹿らしいことは、あり得ない。午の年に生れたものが、おきやんであるといふことが、動かすべからざる先天の制約であるならば、子の年に生れたものは、こそ/\泥棒になつてしまつたかも知れないし、巳の年に生れたものは、一生、のらりくらりと暮してしまつたかも知れない。一時の便宜上、假りに當て嵌めた十二通りの動物の名稱が、人間の本質にまで、影響するといふやうなことは、眞面目になつて考へるさへ、自己侮辱を感ずるのである。

一二　丙午生れの女はなぜ結婚が出來ないか

[illegible]ことを[illegible]に、[illegible]、更にもつかないことに、[illegible]の種技や、迷信や、[illegible]や、[illegible]しいが正しくないが、といふやうな、根本的條件に、適性いないだけの、調和をなすべきである。夫の、丙午生れの女は、男を殺すといふ迷信から、丙午生れの女と結婚するを嫌ふが如き、もとより共に談ずるに足らない。何故に、丙午生れの女は、男を殺すといふのであるかと言ふに、丙は陽火で、午は南方の火に當る、火に火を加へたもので、その力、正に男を殺すに足るといふのである。果して然るか。

十干は、もと、太陽暦の一ケ月を、上中下の三旬にわけて、その一旬の日を、かぞへるために用ゐた番號であり、十二支は、一年を十二ケ月にわけて、その一月づつに附けた、便宜上の番號である。この二つのものを組合せて、こゝに辛酉だの丙午だのといふやうに、紀年法ともなり、また、十二支を、獸類に當てはめて、意味ありげなものにしたり、五行等に配當して、深遠さを装うたり、更に、九星等がとなへ出されるやうになつて、いよ/\ます/\、迷信的なものになつて仕舞つたものである。畢竟、辛酉でも丙午でも、番號と番號との、便宜上

と言つて、往くもの、亡ぶる日であるといふことを理由として、その出陣を見合せられたいと、諫めた臣もあつたが、その時、太宗は、否、然らず、往亡日とは、我往きて敵の亡ぶる日である、毫も憂ふるに足らないと言つて、兵を進めて、遂に、勝利を得たのである。

二　周の武王の吉は殷の紂王の凶である

去年は、干支が甲子であつたので、それを更始ともぢつて、更始一新の年だなどと、洒落だか本氣だか、譯のわからないことを言つたものである。今年は、乙丑で、丑を牛と解して、新聞でも雜誌でも、牛に關する、各種の説話を集めたのである。元來、辛酉の年は凶年だとか、丙午の年に生れた女は、火の性質が烈し過ぎるから、これと結婚するのは危險だとかいふやうなことが、どれだけ、一般人の生活を、毒して居るであらうか。殊に、丙午生れの女性は、本年二十歳になつたので、結婚年齢として、最も適當の時期に達して居るのであるが、例の迷信からして、縁遠く、容易に結婚することが出來ないのを悲觀して、自殺したものが、昨年以來少くない。迷信も個人々々が、一種の道樂として、他に害を及ぼさない程度に在る間は、その人間の愚さを、黙殺するにとゞめて置いてもよいのであるが、かやうに、人命に關するやうになつては、到底これを、捨て置く譯にはゆかないのである。

辛酉の年を、凶年だといふ陰陽家の根據は、十干を五行に當て嵌めると、庚辛は金性であるし、辛酉は九星の上では金星であるから、金性と金星と、即ち金と金と相生相尅の理で、凶年だといふのである。これを歴史に探るに、後一條天皇の治安元年は、辛酉年であつて、この年、天災が甚だ多かつたゝめ、勅命に依つて、曼荼羅寺の仁海僧正が、五月四日から、百ケ日間、金門鳥敏法を修し、これが先例となつて、爾後、辛酉の年には、此の法を修して、國家安穩、萬民豐樂を祈つたのである。その時の綸旨に、

『近來、天變頻りに示し、怪異例に背く、加之、今年辛酉、歳堯日の災に相當る、仍つて、今日より七月中旬まで、八口の伴侶を引きて、百ケ日間、殊に、精誠を致し、五大虚空藏の秘法を勤修せらるべし。』

とある。これたまたま、辛酉の年が、凶年であつたゝめに起つた事柄であつて、いつの辛酉の年も、悉く、治安元年のやうであるといふ、必然的約束はないのである。若し、辛酉の年が、必ず凶年惡年ならば、日本は、二千五百餘年前に、起り得なかつたかも知れない。なぜならば、神武天皇紀元元年は、實に辛

[illegible]であつたのであらうが、その次[illegible]も、[illegible]ばかりが続いて居たのではない。

周の武王が、甲子の年に興つたので、武王の立場から言へば、甲子の年は、非常に積極的意義を持つのであるが、これに反し、殷の紂王は、甲子の年に亡びたのである。事實は、武王が紂王を亡ぼしたのであるから、紂王から見れば、甲子は怖しから凶年になる。甲子に、善悪なく吉凶なく、たゞ興りしものに吉となり、亡びしものに凶となるのである。これ等の事實を綜合して考へると、丙午の年に生れた女が、一生を犠牲としなければならぬといふやうな、馬鹿らしいことは、あり得ない。午の年に生れたものが、おきやんであるといふことが、動かすべからざる先天の制約であるならば、子の年に生れたものは、こそ／＼泥棒になつてしまつたかも知れないし、巳の年に生れたものは、一生、のらりくらりと暮してしまつたかも知れない。一時の便宜上、假りに當て嵌めた十二通りの動物の名稱が、人間の本質にまで、影響するといふやうなことは、眞面目になつて考へるさへ、自己侮辱を感ずるのである。

一二　丙午生れの女はなぜ結婚が出來ないか

[illegible]

ことを[illegible]へるいに、[illegible]よいことまで、そこな、世にもつかないことに、時と金とを費すことの、[illegible]や、[illegible]の程度や、趣味や、財産や、[illegible]ないか、素行が正しいか正しくないか、といふやうな、根本的條件に、遠慮のないだけの、調査をなすべきであるのに、丙午生れの女は、男を殺すといふ迷信から、丙午生れの女と結婚するを嫌ふが如き、もとより共に論ずるに足らない。何故に、丙午生れの女は、男を殺すといふのであるかと言ふに、丙は陽火で、午は南方の火に當る、火に火を加へたもので、その力、正に男を殺すに足るといふのである。果して然るか。

十干は、もと、太陽暦の一ケ月を、上中下の三旬にわけて、その一旬の日を、かぞへるために用ゐた番號であり、十二支は、一年を十二ケ月にわけて、その一月づつに附けた、便宜上の番號である。この二つのものを組合せて、こゝに辛酉だの丙午だのといふやうに、紀年法ともなり、また、十二支を、獣類に當てはめて、意味ありげなものにしたり、五行説に配當して、深遠さを装うたり、更に、九星説がとなへ出されるやうになつて、いよ／＼ます／＼、迷信的なものになつて仕舞つたものである。畢竟、甲午でも丙午でも、番號と番號との、便宜上

の組合せといふより外に、何の意味もないのであつて、恰も、下足札の『いの一』とか『はの三』とかいふものと同じく、偶然の結合で、何等の意味もないのである『いの一』が凶で『はの三』が吉だといふ理由のないやうに、辛酉が凶年で、丙午生れが危險だといふ理屈は、斷じて有り得ない。假りに、數千百歩を讓つて、丙午生れの女は、火の性質が强くて、危險だといふならば、丙午生れの男は、更により以上、危險でなければならないのに、丙午生れの男の方は、平氣で結婚して、誰もこれを怪しまないのに、獨り、丙午生れの女だけが、自殺しなければばならない程に、虐げられるといふのは、甚だ以て不公平千萬ではないか。

一三　同年同月同日生れは皆同じ人間であり得るか

生れた年に依つてその人に吉凶の別があるものならば、同年に生れたものは、皆同じ運命に、支配さるべきであらうのに、事實は、明にこれを裏切つて居る。言ふまでもなく、同じ年同じ月同じ日同じ時に生れた人間は、決して少くないのであるが、若し、日に吉凶があるならば、吉日に生れたものは、悉く好運でなければならないし、凶日に生れたものは、悉く不運でなければならない。世界の人間の生れるのを、時間的に統計して見ると、一秒時間に、七八十人づゝ、生れて居る割合であるから、同じ日に生れ合せた人間の數は、非常に多い譯である。それ等の人々が、皆悉く、同じ生活をして、同じ境遇に於て、同じ感情と、理性とを持ち、同じ方面に活動して居るかといふに、決してさうではなく、その性格も、その生活狀態も、實に千種萬樣である。明の大祖が天下を統一した時、自分と同じ年月日に生れたものが、どんな生活をして居るかといふことを、知りたいといふ考から、全國にこれを求めて、僅に一人を得た。然るにその者は、極めて貧困な生活をなし、蜜蜂十三箱を飼養して、生活して居たといふことである。同じ年月日に生れても、その運命に、天壤の差があり、從つて、日や月に吉凶の別があるのではないといふことが、これに依つても、判明するのである。

僕は、明治八年生れであるので『明八會』といふを組織し、八人の會員を得て、大正八年八月八日、午後八時から、向島の八百松に於て、會費金八圓で、その第一回を開催し、今も、時時會合し、會員の數も、次第に增加して居るが、柳田國男（東京朝日顧問）、松田源治（政友本黨總務）、高橋偵造（農科大學教授、農博）、結城素明（美術學校教授）、長谷川基（醫博）、關屋貞

[illegible]
川[illegible]、[illegible]八十六[illegible]、[illegible]
家)、川口抱汀(…家で[illegible])二の他、尚多
数であるが、同年に生れ合せたといふだけの事であつて、同年
生れなるが故に、これ〱の共通點があるといふやうな譯のも
のではなく、從つて、何の年の生れだから何々であるとか、同
年月に生れたから何々であるとかいふことは、何等、論理的歸
結を得られないこと、言ふ迄でもない。

一四　女性は男性に比して遙に迷信的だ

男性に在りては、さ程でもないことを女性に在りては、命まで投げ出さうとする。そこに、女性の特長が存するのである。『女性は男性に比して、遙に迷信的だ』といふものがある。それは、お百度を踏んで居るものも、大抵女性であり、大道易者の前に立つものも、大抵女性であり、おみくじを引くものも、大抵女性が多く、マヂナヒの功果を信ずるものも、女性が多いといふやうな、外的事實より歸納しての結論であつて、本質的の研究の結果ではない。若し、そうした議論が、成立の可能性を持つて居るならば、同じ論理から、女性は、男性に比して、遙に信仰的だといふ斷案をも、與へ得るかも知れない。

[illegible]
[illegible]
[illegible]なるに反し、[illegible]
とは、何人もこれを否む[illegible]ない。[illegible]
とも、過去及び現在に於ては、確に、さうであり、また[illegible]
つた。この女性が男性に比して、遙に感情的であるといふこと
から、女性は、男性に比して、遙に迷信的でもあり、信仰的でもあると、言ひ得ないこともない。この場合、科學と宗教とを對立させ、知識と信仰とを對立させて、各々その境界と範圍とを、異にして居るものと、假定して置くのである。

宗教、これは、單に感情的のものではない。知識を無視し、意志を無視しては、眞の宗教は成立たないのであるが、しかし、知識よりも、意志よりも、最も多く、感情を要するところに、宗教が、科學や哲學に擇ばれる、特色が存するのである。この特色は、屢々、信仰の情念といふ言葉で、表現されるのであるが、この信仰の情念が、女性に強くして、男性に弱いといひ得るかどうかといふことは、必ずしも、斷定し易い問題ではない。古來、東西兩洋に亘りて、宗教的偉人、若くは、開祖といふものに、幾人の女性を數へることが出來るか。日本に於て、天理教のおみき婆さん、大本教のお直婆さんを擧げ得るこ

とは、誠に、末法の汚辱である。これ等を外にして、謂はゆる淫祠邪教の迷信を宣傳するものに、女性多く、眞正なる宗教の信仰の宣傳者に、男性が多いといふことになると、女性は、男性に比して、遙に、迷信的だといふ斷定を覆へすことが困難になる。かやうに、女性が迷信的であるところに、その生命の危機が、伏在して居るのではあるまいか。

一五　正しき宗教健かなる信仰によりて迷信を亡ぼせ

知識は人の迷信を滅殺する。しかし、知識は、人に宗教的信仰を與へるものではない。宗教的信仰は、人が人以上の實在に對する、依憑の上に咲き出づる感情の花である。感情の花ではあるが、それは、科學を無視し、知識を拒絶するものでないのみならず、寧ろ、知識は、その根柢に、信仰を有することに依つて、確實と完全とを増すのである。これを以て、吾等が、生活は、それが政治であらうと、道德であらうと、産業であらうと、藝術であらうと、皆悉く、健全なる宗教的信仰の確立に依つて、安全地帶に立たしめられるのである。從つて、健全なる宗教的信仰の、普及徹底して居る地方には、迷信が少ない。迷信は少いが、知識的に勝れて居るといふ譯ではない。知識的に勝れて居なくとも、人生の諸問題について、何等の煩悶がない、死生一如の觀に透徹して、毫末の不安を感じない。無煩悶、常懸安の境地、それは、科學のみに依つて、到ることが出來ず、知識のみに依つても、達せられない。たゞ、科學を無視せざる宗教、知識を拒絶せざる信仰によつてのみ、始めて、到達し得られる樂地である。

強いやうでも、弱いのは人間である。「せつない時の神頼み。」病氣も少し長く引くと、醫師を疑ひ、藥を疑ひ、そこに心の動搖が起ると、その虚に乘じて、大道易者が飛び込む、お鬮が飛び込む、お神水が飛び込む、お札が飛び込む、かくて淫祠邪教の魔の手は、思ふ存分伸びて來るのである。即ち、迷信は、人心の不安につけ込む、一種の胡麻の蠅やうなもので、これを拔くのは、時代の常識もあり、科學的知識もあり、哲學上の定木もあるが、これを防ぎ止める力は、たゞ正しき宗教、健かなる信仰の外にはない。兎もすれば、妄動したがる感情の火の手に、理性の水を注ぎ、然る後、強大なる意志の力を揮つて、大斧鉞を加へよ。吾に毫末の弱點さへ無くば、狐狸天狗、何事をか爲し、死靈生靈、何の術をか施し得やう。人相、家相、方位、墨色、さては、マジナヒ、守札、日柄、縁起、何ものゝ力か、能く吾等を誘惑し得やうぞ。（大正一四・五・一二）

附言。親鸞上人は[illegible]した

今日は、淨土眞宗の祖師、親鸞上人の誕生日である。これで思ひ起すことは、親鸞上人の、極力、迷信を排斥せられたる態度である。佛教各宗を通じて、全然、迷信的氣分の伴つて居ないのは、恐らく、この眞宗だけだと言つて差支はあるまい。眞言でも、天台でも、日蓮でも、禪でも、隨分、淫祠邪教とも言ふべきものと、手を携へて居るものも少くない。そして、御圖を投げたり、お札を出したりして、可なり、劣等低級な迷信を、平氣で賣りつけて居るものもある。それには、またそうした、歴史上の問題も伴ふであらうが、それは兎も角として、淨土眞宗は、親鸞上人の努力の結果、今日に至るまで、絶對に、迷信を斥けて居ることを、誇りとして居る。それは、親鸞上人の心血を注いで作られた『教行信證』（即ち淨土眞宗の根本聖典である）の化土卷に於て、一切の迷信を根絶すべき主旨を、最も廣く深く、經說を引いて、力說されて居るのである。眞宗の立脚地からは、阿彌陀如來一佛を信ずるのであつて、他の神や佛に仕へる必要はないといふ所から、一切の餘神餘菩薩を、禮拜しないといふことになつて居て、それが即ち、多神教的迷信に陷らない、根本理由の一つである。さうした、極めて單純な、徹底した信仰から、日柄緣起といふやうなことに屈托するな[illegible]に、眞宗に於ては、[illegible]佐、鬼門、異方、暦數、吉凶、お札お守りといふ[illegible]にも着しなければ、緣起の日柄にも拘泥しない。もとより、生れた年月日の吉凶を、問題とするでもなく、全然、迷信から超越して、日日これ好日と言つたやうに考へ、たゞ、彌陀の救ひに信賴して、日常の行ひは、すべて是れ、佛恩報謝の生活だとするのであつて、他の宗派の人々に比べて、最も合理的な、そして、人間味の豐な生活を、續けて居るのである。現に、眞宗の繁昌して居る土地には、獰猛性の殺人罪は絶無と言つてよく、又、墮胎などするものも、全く無いのである。

苟も、迷信の事について考へる時、どうしても、親鸞上人を、讃仰せずには居れないのである。（米峰追記）

新思潮とは何ぞや

——一般民衆に取つての新しさと少數識者に取つての新しさと——

生田長江

新しい物を知ることの必要

改めて云ふまでもなく、今日では殆んど總ての場合、殆んど總ての事物に關して、『新しい』『より新しい』と云へば、價値のあること、優つてゐることを意味し、『舊い』『より舊い』と云へば、價値のないこと、劣つてゐることを意味してゐる。即ち、前者は直に賞讃の言葉であり、後者は直に非難の言葉である。

そして此の如き事態を道理あるものとして是認してゐるにもせよ、もしくは不都合なるものとして非認してゐるにもせよ、兎もあれ大抵の人々は、彼等自身また此の如き風潮の横行し氾濫してゐる社會の内に生きてゐるところから、それを實際以上に根ざしの深い、力强い物と思ひなし、人間本來の性情から到底切りはなし難い物ででもあるかのやうに見てゐるらしい。

しかし乍ら、單に新しい故に價値があり、單に舊い故に價値がないと云ふやうな奇怪なる物の考へ方感じ方は、決して人類の歷史と共に古いものではない。日本に於ては僅かに半世紀ばかりを、歐羅巴に於ても高々二三世紀を過去へ引き返せば、それまでの人類は寧ろ先づ、慣習や、因襲や、傳統を尊重してゐたのである。しかも、それが慣習や因襲や傳統であることの故に、新しい物であるよりも寧ろ舊い物である故に、單にそれだけの理由からしても、その前に跪いてゐたのである。乃ち風習や慣例が道義や律法の源泉であつたのは、古聖の敎と云ひ、先王の道と云ひ、祖先の遺風と云ふやうなものが、權威の上の權威であつたのは、今の時代の新事物憧憬に對する過去の時代の舊事物崇拜を意味するものでなくして何であらう。

過去の人類が舊事物を單に舊事物なるが故に尊重しなければならぬと考へ、感じてゐた間は隨分長い。それにもかかはらす、さうした考へ方感じ方は、跡方もなく何處かへ消え失せて

しまつたら二[illegible]何[illegible]にて[illegible]に[illegible]したけれ[illegible]と考へ、[illegible]出して[illegible]にまだまだ日本[illegible]い。かうした[illegible]へ方は[illegible]いつまで持続され得るものであらうか。

ともあれ、人類は先入見の前に先入見を有つてゐた如く、迷信の後に迷信を拵へ上げて来た。そして過去の時代に於ける單なる舊事物の崇拜が、憫むべき舊時代的先入見の一にほかならなかつたとすれば、今日の時代に於ける單なる新事物の憧憬も、また、笑ふべき近代的迷信の一にすぎないであらう。

舊事物崇拜については暫く措き、新事物憧憬といふ、笑ふべき近代的迷信は如何にして生じたか。これを明らかにする爲めには、私達は先づ、近代に至つて自然科學が俄かに長足の進歩をし出したといふ事實に注意を拂はなければならぬ。

科學上の種々なる大發見や、科學に基礎を置いた種々なる大發明は、必ずしも非凡なる人物の非凡なる努力の結果ではない。よし、多くの場合さうした人物のさうした努力の結果であるとしても、その努力にこそ彼等の非凡なる個性が發揮されてゐやうけれど、さうした努力の結果である所の發見發明の内容その物には、必ずしもそれぞれの個性が、十分鮮かに刻みつけられてゐるとは云へない。寧ろ殆んど非個性的であると云つてよい。

[illegible]テやミケランゼロや[illegible]の場合などにあつては、[illegible]それらの仕事をした人々の比類なき天才的個性が[illegible]、個[illegible]の人々がそれらの仕事を見ならひ、聞きならつて、所謂[illegible]製をやつて見たところで、實質的に同一價値を有するものを生み出すといふことは容易に出來るものではない。然るに、自然科學上の發見や、自然科學に土台を置いた發明などをした人々の場合にあつては、その發見や發明の内容その物に彼等の天才的個性が殆んど印刻されてゐないからして、一たび其學説を學び知り、その方法を習ひ覺えたや否や、それほど非凡の天才的人物でなく、むしろ尋常一樣の學者技術家といへども、たやすく其發見者發明家と同じレヱルに立つて其學説を祖述したり、其方法を運用したりすることが出來るのである。のみならず、時としては其先驅者等の發見發明を踏台にして、更に新しき發見發明をなし加へ、結局に於て先驅者等より一段高い科學的見地に立ち、一層廣い利用の世界を支配することさへも出來るのである。

かくして一の發見のあとに、今一のより合理的な發見が現れ、一の發明の次ぎに今一のより有用な發明が出で、殆んど停止するところなく相繼いで行くのを見た時、近代の人々にやお

新思潮とは何ぞや

——一般民衆に取つての新しさと少數識者に取つての新しさと——

生田長江

新しい物を知ることの必要

改めて云ふまでもなく、今日では殆んど總ての場合、殆んど總ての事物に關して、『新しい』より新しい』と云へば、價値のあること、優つてゐることを意味し、『舊い』より舊い』と云へば、價値のないこと、劣つてゐることを意味してゐる。即ち、前者は直に賞讃の言葉であり、後者は直に非難の言葉である。

そして此の如き事態を道理あるものとして是認してゐるにもせよ、もしくは不都合なるものとして非認してゐるにもせよ、兎もあれ大抵の人々は、彼等自身また此の如き風潮の横行し氾濫してゐる社會の内に生きてゐるところから、それを實際以上に根ざしの深い、力強い物と思ひなし、人間本來の性情から到底切りはなし難い物ででもあるかのやうに見てゐるらしい。

しかし乍ら、單に新しい故に價値があり、單に舊い故に價値がないと云ふやうな奇怪なる物の考へ方感じ方は、決して人類の歴史と共に古いものではない。日本に於ては僅かに半世紀ばかりを、歐羅巴に於ても高々一二世紀を過去へ引き返せば、それまでの人類は寧ろ先づ、慣習や、因襲や、傳統を尊重してゐたのである。しかも、それが慣習や因襲や傳統であることの故に、新しい物であるよりも寧ろ舊い物である故に、單にそれだけの理由からしても、その前に跪いてゐたのである。乃ち風習や慣例が道義や律法の源泉であつたのは、古聖の教と云ひ、先王の道と云ひ、祖先の遺風と云ふやうなものが、權威の上の權威であつたのは、今の時代の新事物憧憬に對する過去の時代の舊事物崇拜を意味するものでなくして何であらう。

過去の人類が舊事物を單に舊事物なるが故に尊重しなければならぬと考へ、感じてゐた間は隨分長い。それにもかかはらず、さうした考へ方感じ方は、跡方もなく何處かへ消え失せて

しまつたら、これ等の人[illegible]物を[illegible]如何なる大道に[illegible]したければならぬところへ、踏み出し一たからにはまだまだ[illegible]い。かうした行方ない方式がいつまで持續され得るものであらうか。

ともあれ、人類は先入見の前に先入見を行つてゐた如く、迷信の後に迷信を持へ上げて來た。そして過去の時代に於ける單なる舊事物の崇拜が、憫むべき舊時代的先入見の一にほかならなかつたとすれば、今日の時代に於ける單なる新事物の憧憬もまた、笑ふべき近代的迷信の一にすぎないであらう。

舊事物崇拜については暫く措き、新事物憧憬といふ、笑ふべき近代的迷信は如何にして生じたか。これを明らかにする爲めには、私達は先づ、近代に至つて自然科學が俄かに長足の進歩をし出したといふ事實に注意を拂はなければならぬ。

科學上の種々なる大發見や、科學に基礎を置いた種々なる大發明は、必ずしも非凡なる人物の非凡なる努力の結果ではない。よし、多くの場合さうした人物のさうした努力の結果であるとしても、その努力にこそ彼等の非凡なる個性が發揮されてゐやうけれど、さうした努力の結果である所の發見發明の內容その物には、必ずしもそれぞれの個性が、十分鮮かに刻みつけられてゐるとは云へない。寧ろ殆んど非個性的であると云つてよい。[illegible]テやミケランゼロや[illegible]ベエトオヴエンの[illegible]の場合などにあつては、これらのすばらしい仕事が、これらの仕事をした人々の比類なき天才的個性を印せられてゐる故、他の人々がこれらの仕事を見ならひ、習ひならつて、所謂摸倣製をやつて見たところで、實質的に同一價値を有するものを作み出すといふことは容易に出來るものではない。然るに、自然科學上の發見や、自然科學に土台を置いた發明などをした人々の場合にあつては、その發見や發明の內容その物に彼等の天才的個性が殆んど印刻されてゐないからして、一たび其學說を學び知り、その方法を習ひ覺えたや否や、それほど非凡の天才的人物でなく、むしろ尋常一様の學者技術家といへども、たやすく其發見者發明家と同じレヱルに立つて其學說を傳達したり、其方法を運用したりすることが出來るのである。のみならず、時としては其先驅者等の發見發明を踏台にして、更に新しき發見發明をなし加へ、結局に於て先驅者等より一段高い科學的見地に立ち、一層廣い利用の世界を支配することさへも出來るのである。

かくして一の發見のあとに、今一のより合理的な發見が現れ、一の發明の次ぎに今一のより有用な發明が出で、殆んど停止するところなく相繼いで行くのを見た時、近代の人々はやお

て感じはじめざるを得なかつた――時代の進行につれて、人類は愈々より合理的な、より有用な仕事をするやうになるといふこと、そしてそれ故に、前に生れた者よりも、後に生れた者ほど、一層氣の利いた、一層賢い、一層すぐれたものであるといふこと、換言すれば一般に舊い物ほど劣つて居り、新しい物ほど優つて居るといふことを

　ところで近代の人々は、科學の威力に眩惑され、科學の思想に籠絡されて、つひには神を禮拜する以上に、或は神を禮拜する代りに科學を禮拜するやうになつて來たと共に、科學及び科學的發明の世界に於て經驗したところの物を、やがて他の世界に於ける一切の事物にまで推し及ぼさないで置かなかつた。即ち彼等は、世上萬般の事物に於て、舊い物よりも新しい物の方が、つねに必ずより大なる價値を有つてゐるかのやうに考へるところの、牢として拔き難き一の先入見を、近代的迷信を造り上げてしまつたのである。

　單なる新事物を憧憬するといふ近代的迷信は、十九世紀中葉以後に勃興したところの生物進化論、及び其應用であるところの社會進化論を、淺薄なる俗衆が穿き違えたことに依つて、一層強められて來てゐるやうにも見える。

　そもそも生物進化論は、所謂高等生物が下等生物から漸次進化して來たものであると、さう說明するに止まつてゐる限りに於て、一應うなづける。總ての生物が種屬としても個體としても、常に下等な物から高等な物へと進化しつゝあるもののやうに言つたり、生物の或る物が屢々進化するよりも寧ろ退化してゐたことの、退化しつゝあることの事實を無視したりするならば、それは生物進化論に似て非なるものであり、科學としての生物進化論をねぢ曲げたところの俗論である。

　生物進化論の應用であるところの社會進化論も、所謂文化の社會が野蠻の社會から漸次進化して來たものであると、さう說明するに止まつてゐる限りに於て、一應うなづける。總ての社會が、全體としても各部分としても、常に文化の低度なものから文化の高度なものへと進化しつつあるもののやうに言つたり、或る社會が屢々進化するよりも寧ろ退化してゐたこと、退化しつつあることの事實を無視したりするならば、それは餘程の念入りに間違つた似而非社會進化論であると云はなければならぬ。

　ところで、世間の淺薄なる俗衆は、生物進化といふことをも社會進化といふことをも、さうした念入りに間違つた、ねぢ曲げられた意味に於て受取つたのである。そして凡そ事物の變遷推移は、つねに低級なものから高級なものへの發達進歩であると考へ、あとから出る物は、つねに前に出た物よりも優秀であ

[illegible]

[illegible]やうになつて来たのである。

今日に於ても、極めて心弱い人々は、新しい[illegible]、新ての舊い物より優つてゐるとも思つてゐないであらう。しかし乍ら、時代の先入見は彼等自身が意識してゐるより以上にさへ彼等を囚へて居り、謂はれなき新事物価値を馬鹿らしく思ふ心持を、殆んどあるかなきかにしてしまつて居る。そして彼等も又往々、原則としては、大抵の場合に於ては新しい物が舊い物よりも優つてゐるかも知れないといふやうな、まことに心細い事を考へるのである。

勿論、特に悲観主義的な世界観を抱いてゐる者でない限り、大抵の人々は此世界が、この宇宙に遍満するところの一大生命が、つねに未完成から完成への途上にあるといふ風に考へ且つ感ずることを、強ち拒否しようとはしないであらう。私達もさうした生成を、より完全に近いものへの絶えまなき進行を、決して疑つてゐるものではない。

しかし乍ら、より完全な物への絶えまなき進行は、専ら一全體としての世界、一全體としての宇宙、一全體としての大生命に關してのみ言はるべきであつて、その世界に、宇宙に、大生命にそれぞれの部分をなしてゐる個々の事物に關して言はるべ

[illegible]

る。けれども、それ[illegible]

完全なる[illegible]について云へば、それ[illegible]

り、甚だしきは[illegible]へ[illegible]してさへゐるのである。部分と全體とを混同して考察したい限り、如何に[illegible]的な世界觀に立つて見やうとも、尚ほ且つ個々の事物は常に完成への道程にあるものではない。總ての新しい物が、總ての舊い物に對して進化を意味することは有り得ない。舊い物から新しい物への推移は、時に十分に退化への、衰亡絶滅への道程であり得るのである。

かくの如く、後に現れた物が前に出た物に比し、つねに必ずしも優つたものであり得ないとしたならば、單に新しく出現したといふだけであつて、まだどれだけ價値があるかも決定されてゐないやうな思想界各方面の新現象及び新事物に對しては、そもそも全く無關心であることが出來るものであらうか。少くとも、既に立派な價値あることを證據立てられたる過去の[illegible]及び事物に對する關心と共に、比較にもならないほどの熱烈な關心をのみ有つてゐることが出來るであらうか。

ある人々には、たしかにそれが出來るもののやうであるけれども私達にはそれが出來さうにもない。それは何故であるか。

私達は、言葉の正しい用ひ方に於て、現實に、本當に『生きて』行く爲めには―醉生夢死する爲めにでなく、存在する間を單に存在する爲めにでなく―何よりも先づ私達の時代の人間として、私達の時代に生きなければならぬ。又、私達の時代に生きる爲めには、何よりも先づ私達の時代の趨勢に對して無關心でゐることは出來ない。それが如何にあるかを感得し、且つそれに對して私達自身が如何にあるべきかを決定しなければならないからである。

そして私達の時代の趨勢に對して、無關心でゐられないとしたならば、その日その日の新聞に現れる一般社會記事ほどの物をすら、私達は決して輕視し去るべきではない。ましてや、私達の時代の趨勢が最も精髓的に、最も濃厚に要約されてゐるところの、思想界各方面の新事象及び新事物を、どうして私達がいい加減に看過し去ることを、碌々考察も研究もしないで、その儘にして置くことを許されやうぞ。

かくの如く、時代の趨勢が思想界各方面の新事象及び新事物に於て、最も精髓的に、最も濃厚に要約されてゐるにもかかはらず、特にさうした新事象及び新事物に對して無頓着でゐられるのは、所謂時代の趨勢に對して、時代その物に對して、それだけ無頓着でゐられるからである。しかも、自己の屬してゐる時代その物に對してそれだけ無頓着でゐられるやうな人々が―悲しいかな、それらの人々が餘りにも多數を占めてゐる！――結局本當に生きてゐないといふこと、從つて彼等の仕事（所謂思想家的な仕事の外見をもつてゐる場合にすらも）がまた本當の生命を有つてゐないといふことなぞは、改めて說くを須ひないであらう。

私達は單なる新事物を憧憬するといふ、笑ふべき近代的迷信からして、『新思潮とは何ぞや』を知らうとするのでは決してない。だが此問題を一個の閑問題として片附けて置くことが出來ない位に、この私達の時代の人間として、この私達の時代に生き、現實に生き、本當に生きたいとねがつてゐるだけなのである。

一般民衆にとつての新思潮

歐羅巴及び亞米利加に於ける『新思潮』と、我が日本に於ける『新思潮』とは、嚴密に同一の物を意味してゐない。そして私達は便宜上先づ、歐羅巴及び亞米利加に於ける『新思潮』が凡そ如何なるものであるかの考察說明からしてはじめることにしよう。

偖て、歐米に於ける新思潮とは何ぞやであるが、それも又一般民衆にとつての新思潮と、少數識者にとつての新思潮との二に差別されなければならない。

一所に、上述りに、空間的に新しきを追ふ點に於ては、一般民衆の足は徐々にして少數識者の足よりも遅かであり得る。けれども多少なり實質的な、内面的な事物の推移について見れば、少數の識者はつねに一般民衆より一歩を先んじて居り、つねに何等かの程度により新しい物を有つて居る。否、むしろそれ故にこそ彼等は識者と云はれるのである。

乃ち、一般民衆にとつての新思潮は近代的思潮の謂ひであり、少數識者にとつての新思潮は、多少なり實質的内面的な意義に於ける、何等かの程度により新しき物としての、超近代的思潮とでも云はるべきものである。

さらばその、一般民衆にとつての新思潮としての、所謂近代的思潮とはそもそも如何なるものか。

それは勿論、所謂近代的な、種々雜多な思想から成立して居り、それらの思想相互の間にも、また個體としても、十分なる調和と統一とを有つてゐるとは言はれない。

そしてそれらの所謂近代思想は、單に近代世界に存在してゐると云ふだけの、あらゆる種類の思想を意味するものではない。

それらのものが所謂近代思想であり得る爲には、少くとも、近代世界に於てはじめて發生したものでなければならぬ。或は近代世界に於てはじめて大に發展したものでなければならぬ。或は近代世界に於て初めて具體化されたものでなければならぬ。

所謂近代思想の或るものが、多くの場合、他の何等かの近代思想からの甚だ趣きを異にせる派生物であり得るのみならず、往々にして明白なる反對的產物でもあり得ることは改めて言ふまでもなからう。

偖てそれらの種々雜多なる近代思想を包容するものとしての近代思潮に於て、少くとも最も根源的な、もしくは最も中軸的な一の精神を擧げることは必ずしも不可能ではない。そしてそれは人間主義、或は人性主義とでも云はるべきものである。

人性主義(Humanismus)はもと近代の初め、伊太利の文藝復興期に於て、希伯來的、基督教的、神性的文化に對する希臘的、異教的、人性的文化の研究及び復興に努力したる學界思想界の傾向に名づけたところのものであるが、私はこの言葉の用ひ方を少しばかり新しくし、少しばかり擴大するならば、それが近代思潮の根源、もしくは中軸を表白するものとして、甚だしく不似合でないものに十分なり得べきことを思ふのである。少くとも中世的といふ言葉が何程か神性的を意味してゐる限りに於て、近代的といふ言葉はかなりの程度に人性的を意味し、又從つて人性主義といふ言葉は、近代思潮の根源的中軸的精神にあてはめて見て、さしたる不都合をも感ぜしめないもの

のやうに思ふのである。

ところで人性主義もしくは人間主義の精神は、神を、神性を、神的な一切の物を否定する。それらの物の存在を否定し、もしくはそれらの物の價値を否定する。

そして神的な一切の物の否定は　第一に、あらゆる神的な世界の存在もしくは價値を否定するものであり　第二に、あらゆる神的な人間の存在もしくは價値を否定するものである。

あらゆる神的な世界の存在を否定するものは　專ら合理的なもの、實驗的なもの、科學的なものの可能をのみ承認する。あらゆる神的な世界の價値を否定するものは、單に理想に對する現實をのみ、單に內部に對する外面をのみ、單に所謂精神に對する所謂物質をのみ摑んで滿足する。乃ち、實證主義的傾向である。

あらゆる神的な人間の存在もしくは價値を否定するものは、專らただ天才者に對する凡庸者の、個性ある人間に對する個性なき人間の、貴族に對する賤民の、存在もしくは價値をのみ認容する。乃ち、平等主義的民主主義的傾向である。

近代思潮に於ける根源もしくは中軸としての人性主義は、人間主義は、かくの如く、實證主義的傾向を一面に有つて居り、平等主義的傾向を他の一面に有つて居る。そして種々雜多なる所謂近代思想の中、第一のものは主として實證主義的方面から流れ出て居り、第二のものは主として平等主義的方面から流れ出て居り、第三のものは實證主義的方面から來たものと、平等主義的方面から來たものと、どちらによく多くを負ふてゐるかを知らないのである。

第一に、主として實證主義的方面から流れ出たところの近代思想の最も代表的なるものは器械崇拜、科學萬能、資本主義、拜金主義等である。

人間主義精神に於ける實證主義的傾向は、前述の如く、專ら合理的なもの、實驗的なもの、科學的なものゝ可能をのみ承認し、又單に現實をのみ、外面をのみ、所謂物質をのみ摑んで滿足する故に、先づ科學の發達と器械の發明とを、可能なるものにし、且つ必要なるものにした。そして科學は俄かに長足の進步をしはじめ、器械は便利なるものから、より便利なる物へと、續々と發明され出した。それにつれて、愈々科學と器械との、威力に驚嘆し、恩寵を悅樂して行つた近代人が、漸く神の全能を信ずる代りに科學の全能を信じはじめ、神の前に跪づく如くして器械の前に跪きはじめたといふのは、想見するに難くないところの事柄であらう。

更に、科學の發達と器械の發明とは、大工業組織を、多量生產を、產業革命を、及び交通機關の一變を、新しき武力を、植

民政治を、世界市場の門扉を打毀した。そしてその結果が商業主義の成立であると見るのを、穏當たり方でないとするならば、商業主義を極度にまで發達せしめ、爛熟せしめたと云つてもよい。この場合、爛熟したる商業主義に名づけて資本主義と云ふ。

げに、資本主義はかくして人類の歴史の上にその怪物的な姿を現はしたのである――嗚呼かの、人間を器械の一部分となし、器械の奴隷となし 總ての生産的勞働を不快にして有害なるものになしてしまつたところの、勞働し過ぎることによつて一方の人々を頽敗せしめ、勞働し足りないことによつて他方の人人を頽敗せしめるところの資本主義は！嗚呼かの、單に貨幣的價値を有するに過ぎない、實際には人類を幸福にするよりも寧ろ不幸にするやうな生活資料ばかりを生産するところの、さうした不健全なる生活資料をすら僅々與へられない位に、一體に貧しすぎることによつて一方の人々を殺し、さうした不健全なる生活資料をのみ、餘りにも多く與へられすぎることによつて、他方の人々を殺しつつあるところの資本主義は！

資本主義社會にあつては、所謂生産生活の上にも、所謂消費生活の上にも、總ての人々が悉く皆、資本主義といふ有毒瓦斯の爲めに窒息しかかつてゐるにもかかはらず、愚かなる一般民衆は、單に貧しすぎる人々の災禍をのみ考へて、富みすぎる人人も亦同様に不幸であるといふことを思はない。なぜならば、專ら合理的なもの、實際的なもの、科學的なものの價値をのみ承認し、單に知識をのみ、外面をのみ、眼前の利益をのみ喜んで滿足するところの實際主義精神は、唯物論及び拜金主義となつて徹底し、一般民衆の骨髄にまでしみ込んでしまつてゐるからである。

第二に、主として平等主義的民主主義的傾向（近代思潮の根源中軸たる人間主義の一面としての）から流れ出てゐるところの近代思想二三について述べたいと思ふのであるが、それに先きだつてかの、平等主義的民主主義的傾向の一般的性質に對する少々ばかりの註釋を加へて置くことが必要であるかも知れない。

人間主義の一面としての平等主義的民主主義的傾向は、神及び一切の神的な事物を否定する中に、神的な人間、即ち天才者の存在をも否定したり、そして所謂非凡の仕事をなし得る者は、所謂凡庸者と同様の諸能力を、ただ非凡に集中し、もしくはそれらの諸能力を働かせる上に、ただ非凡の努力をなすにすぎないといふ風に解釋する。

しかし乍ら、かうした解釋がかりに正しく間違つてゐないとした場合にも、右の如く諸能力を非凡に集中し、もしくは

能力を働かせる上に非凡の努力をなし得るといふことが、主として先天的に決定されてゐるものである以上、結局凡庸者ならざる一切の人間の存在を否定し去らうとしたところで無駄な話ではないか。

又、近代の平等主義的民主主義的傾向が、總ての凡庸者等の、のみならず凡庸以下の者等の存在理由を認めようとするのは固より正しい。だが、それらの者の存在理由を認めると共に、動もすれば、天才者等の存在を人類社會にとつて何等か迷惑な事ででもあるかの如く考へようとするのは理不盡である。それでなくとも、一般凡庸者に割りあてるより以上の如何なる義務をも權利をも（ある程度の義務は丁度その程度の權利と相伴ふべきであることは、改めて説くまでもなからう）天才者等に割り當てようとしないのは、決して當を得たものと云はれない。

總ての人間を天才者のごとくならしめようとするのも一の平等主義民主主義であり、總ての人間を凡庸者のごとくならしめようとするのも一の平等主義民主主義である。ところで近代の平等主義民主主義は、大抵の場合に於て、如何なる凡庸者をも天才者にまで引き上げようとするのでなく、寧ろ如何なる天才者をも凡庸者にまで引きずり下ろさうとするものではなかつたか。

或る意味に於て愈々差別的になるのが、他の意味に於て益々平等的になるのであることゝあるべき平等が丁度それだけ差別でもあるといふこと、この叡智の上に立つところの平等主義民主主義ならば、單なる量的分配の公平を強制して、總ての個性及び個性あるものを滅ぼしてしまふやうな愚な事はやらない。けれども近代の平等主義的民主主義的傾向は、殆んど原則としてこのやうな愚な事をやりながら、さうした殘酷な無差別化が束縛から解放してやることであり、自由にしてやることであるといふ風に考へてゐる。

貴族主義にどんなに立派なものでもがあり得る如く、平民主義にもどんなに立派なものでもがあり得る。加之、非常に立派な貴族主義と非常に立派な平民主義とは、互に非常に相似てゐる。けれども近代の平等主義的民主主義的傾向は、最惡の貴族主義を破壊し切らない内に、はやくもより善き貴族主義を汚毒し去り、やがて最惡の貴族主義に換へるに最惡の平民主義を以てした。此場合私は、現代人の殆んど總てが道義的自尊心といふものを、廉恥心といふやうな古風なものを、奇麗に忘れてしまつてゐることの事實を謂ふのである。

近代思潮の根源であり中軸である人間主義、それの一面とし

二つの[illegible]民主主義的自由主義の如きについて、殊に民主主義に[illegible]は道草を喰つた傾がある。

偖て此の如き平等主義的民主主義的傾向から、主として此の如き傾向から流れ出た近代思想の中、特に顯著にして重要なるものは所謂社會主義と婦人解放論とである。

一般に社會主義者等は、社會主義者ならざる總ての人間を、直に資本主義社會の謳歌者であると考へ、或は少くとも資本主義社會の肯定者であると考へてゐる故、社會主義者等にとつては資本主義に反對なる總ての思想は社會主義であり、社會主義はその儘資本主義否定の完全なる同義異語である。しかし乍ら實際に於ては、社會主義者ならずして資本主義を否定し、憎惡し、呪咀してゐる者は非常に多い。そして益々多くなりつつあるのだ。加之、彼等は資本主義と共に社會主義をも向ふに廻はして戰はうとしてゐるのだ。即ち資本主義の反對者を悉く皆社會主義者と見なすのは、餘りにも實際の事實を無視した話である。

且つ又、所謂藝術社會主義や基督教社會主義などの如く、社會主義の名を以て呼ばれてゐるにもかかはらず、近代思潮の根源もしくは中軸から甚だ縁遠いものであつたり、諸の近代思想に對して單に反動的關係を有するだけであつたりするやうな思想は、近代[illegible]はれなければならぬ。即ち、最も[illegible]に[illegible]主義を説いたマルクス[illegible]等主義[illegible]、特に工場勞働者（とくにふたりも呼ぶ[illegible]）の[illegible]に[illegible]してゐるボリシエヰキなどが、此時代の唯一の[illegible]主[illegible]なのである。

偖て、嚴密に近代思想としての社會主義は、固より主として、人間主義の一面なる平等主義的民主主義的傾向から流れ出てゐるのであるが、しかし人間主義の他の一面なる貴族主義的傾向に對してもかなり近親的な關係を有つてゐる。

社會主義は、近代の資本主義制度が人間の勞働を、非常に不愉快な物にしてゐるといふ事の[illegible]に餘り重きを置かない。社會主義からすれば、勞働は本來かなりに不愉快な物なのである。從つて總ての人間が同じ程度に勞働しないのは、總ての人間が同樣に不愉快にならないことであり、且つ其不平等が不正義なのである。

次ぎに社會主義は、近代の資本主義制度が單に量的に多くを生産するのみで、質的には實にひどい物ばかりを生産してゐるといふことの事實を、殆んど問題にしてゐない。社會主義からすれば、問題は何が生産されてゐるかにあるのでなく、むしろた

だ、如何に分配されてゐるかにあるのである。そして資本主義の出發點であるところの實證主義から、唯物論や拜金主義から見て、單に結構な物であるところの資本主義的生産物が、總ての人間に平等に分配されないのは、總ての人間が平等に幸福にならないことであり、さうした不平等がまた不正義なのである。

社會主義は、有益であつて、しかも愉快であるところの勞働といふやうな物を考へない。さうした勞働は單に藝術的勞働と呼ばれてゐる。そして藝術的な一切の物が社會主義から輕視され、無視されてゐる。資本主義から輕視され、無視されてゐると同樣に。

極めて外部的な意味に、藝術家といふもの〻存在してゐることは、社會主義も資本主義と同じやうに認めてゐる。だが、藝術家等の勞働をのみならず、一般に所謂腦力勞働者の勞働をすら、や〻もすれば不生産的と見る點に於ては、社會主義は資本主義と同樣以上にすら亂暴である。社會主義の斯樣なる亂暴さは、一面下級勞働者等に媚びる爲めでもあるが、他面また、本來の淺薄なる唯物論的見地からも來てゐるのである。

更に、社會主義は總ての人間を資本家と勞働者との二階級に分類し、その何れかに屬しないものはないと見てゐる。かうした分類は、工場勞働者とその資本家との間にのみ可能であつて、一たび他の社會へ出て行つて見れば、特に人類の大多數をしめてゐる農村住民の間へ行つて見れば、全然意味をなさないものである。なぜと云つて、小作農はとにかく、自作農及び小地主等は、少くとも資本家と對立した意味での勞働者ではない。彼等は資本家から搾取されてはゐない。と同時に、彼等は勞働者と對立した意味での資本家でもない。彼等は勞働者から搾取してゐない。

しかし、私は此場合、社會主義が農村問題の解決なぞに對して如何に間に合はぬものであるかを力說することに深入りしたくない。むしろただ、社會主義が大都市に於ける工場生産といふ、特に近代的な生活範圍から生れたものであり、又その範圍を外に出ては、全然無意味なものであるといふこと、從つてそれほどまでに近代的なものであるといふことに、讀者諸君の甚深なる御注意を喚起して置けばよいのである。

げに社會主義は、餘りにも近代的である。その所謂プロレタリアが不幸であるだけ、丁度それだけ、ブルジョアが幸福であるといふやうな考方は、單なる唯物論的、黃金萬能的な思想でなくして何であらう。（拙稿『ブルジョアは幸福であるか』參照）

加之、マルクス派の社會主義者は常にして言つてゐる――彼

[illegible]プロレタリアにとし
てゐて、資本主義[illegible]から許されてゐることは[illegible]てあり、彼等自身の如く資本主義經濟組織から許されてゐないで、むしろ惡まれてゐるところのブルジョア達が、資本主義を否定しないのは當然の事であると。更に社會主義者等のある者は往々にして言ふ——資本主義は自分達プロレタリアに取つてのみ不正義であり、ブルヂョア等にとつてはむしろ正義なのである。それ〴〵の階級から超越して、普遍的見地から見ての正義不正義といふやうなものはあり得ないと。

右の如き社會主義者のプレロタリアが、どうかした運命のいたづらから、一夜の內に大變なお金持になり、從つて所謂ブルジョア階級にはいつたとする。彼は翌日からもう社會主義をすてて、資本主義謳歌をしなければならないだらう。ここに『していい』と言はないで、『しなければならない』と言ふのは、資本主義謳歌をすることが正義であつて、それをしないことが不正義であるからである。そして右の如き社會主義者は斯うした假定と推論とを認容してゐながら、單に彼等自身にとつてのみさし當り都合惡しきこととの故に、資本主義制度を彈劾してゐるわけなのである。

かくの如き社會主義者（大抵の所謂社會主義が幾分かこれな

いて[illegible]
つてなく、[illegible]
無情なる[illegible]、もしくは[illegible]を否定してゐないには[illegible]ないではないか。

要するに社會主義と資本主義とは、同じ兩親から生れたでないまでも、少くとも片親を同じうするところの兄弟であり、結局この兄弟の喧嘩と言つてもよい所謂階級闘爭は、財産分配に關しての爭ひである。

嗚呼社會主義と資本主義と——何故に世間多數の人々は、この二の物を對立さしてのみ考へたがるのであるか。この二の物が、共にかの科學と器械との崇拜から、最も粗惡な唯物論から、貨幣的價値のほかなる一切の價値を認めない拜金宗から出て來てゐることを、世間多數の人々は何故に注意しないのか。

主として平等主義的民主主義的傾向から流れ出たものとして、社會主義と共に擧ぐべきは所謂婦人解放の思想である。

婦人解放といふ言葉にもさまざまな意義がふくまれてゐるのではあるが、少くとも近代思想としての婦人解放は專ら、男子の有つてゐるほどの一切の權利を、婦人にも與へねばならぬといふこと、あらゆる點に於て男子と全然同樣の生活を婦人にも許さればならぬといふことの主張である。

此の如き主張の發生を大に助けたもの、少くとも成長を可能にしたものは勿論、産業革命による家庭的社會的事情の變移である。なぜと云つて、産業革命は各家庭に於ける自給自足的經濟を廢止させたので、その爲め財力に不足なき家庭の婦人等は所謂家庭内の仕事から大に解放され、家庭の外に出て男子等と同樣のさまざまな活動をして見ることの餘裕を許された。と同時に、他方では財力の乏しい家庭の婦人等は、貨幣的收入の不足を補ふ爲めに、家庭の外に出て、男子と同樣なるさまざまな、苦しい勞働に從事することを餘儀なくされた。そして許されたのであるにもせよ、または餘儀なくされたのであるにもせよ、兎に角かくの如く婦人が次第に男子と同樣の生活を營みはじめたといふ社會的事情の推移によつて、婦人解放思想が、その發生を助けられ、もしくはその成長を可能にされてゐたことは事實である。

しかし乍ら、婦人解放思想の理論的並びに感情的根據その物は、主として近代の平等主義的民主主義的傾向にあるのである。そしてこの、差別と兩立するところの平等だけが、本當の立派な平等であることを知らない平等主義的傾向は、各個人の個性的差別を滅却してしまふのが、彼等を自由にするよりも寧ろ不自由にするものであることを思はない如く、この場合、男女の性的差別を無視して、婦人に男子と全然同樣なる權利を與へ(勿論、同樣なる權利には、同樣なる義務もまた伴ふのだ)男子と全然同樣なる生活を營ましめるのが、彼女等を自由にするよりも、寧ろ不自由にするものであることを思はないのである。

さまざまな近代思想の中には、實證主義的傾向の一面からと、平等主義的民主主義的傾向の一面からと、どちらからより多くの脈を引いてゐるかを知らないやうなものも少くない。そしてさうした種類の思想の好適例は所謂專門家氣質であり、專門家偏重の風潮である。

けだし、實證主義的傾向は量的能率觀を産み、分業的になればなるほど、愈々器械的生産に便利であることを考へさせた。他方では又、平等主義的傾向は、人間の能力が結局同一分量の物であり、從つて間口が狹いだけ丁度それだけ奥行が深いものであるかのやうに考へさせた。そして斯うした二通りの考へ方から、質的に見てちつとも能率のあがらない、最も分業的な器械的生産者――もはや一個の人間ではない、單なる人間の斷片たるに過ぎないところの、それでゐて狹いけれども深い、否、狹い故に深い人間として尊重されるところの后天的畸形兒――即ち所謂專門家と、專門家崇拜とは近代的特産物として、近代の世界を風靡し去つたのである。

少數識者に取つての新思潮

私は、近代思潮に根源となり中軸となつてゐるものが人作主義的人間主義的精神、精しく云へば資本主義的傾向と平等主義的民主主義的傾向との二つであるといふことを述べた。そしてこの二つの傾向から流れ出たところの種々雜多なる近代思想は、必ずしも調和し合つて行くものでなく、寧ろ甚だ多くの場合に於て、不倶戴天の敵意をさへ持ち合つてゐるのである。されば近代思想の中の少くともある物が、滅亡するであらうこと、もしくは滅亡しなければならないことは、今日の大抵の人々からも考へられてゐる。

しかし乍ら、各の近代思想が、また總ての近代思想を一括しての近代思潮が、結局否定されねばならなくなつてゐるといふこと、それらの物の一切と全體とを敵にして戰ふものが現れはじめてゐるといふことは、一般民衆の殆んど全く心附かないでゐるところの事柄である。

一般民衆は、羅馬の衰亡が眼前にせまつて來ても、その事を心附く羅馬人の極めて少かつた如く、一般民衆の生活から支持されて來たところの、又一般民衆の生活を支持して來たところの近代思潮が、今や全體として立派に行きつまり、實際滅亡に瀕してゐるといふことさへ、否滅亡するかも知れないといふことをすら、考へても見ないでゐる。

歐羅巴や亞米利加の一般民衆がまだ久しく萬々歳を唱へてゐるところの近代思想の、近代思潮の滅亡するであらうこと、又滅亡させねばならないことを考へてゐる今日少數の識者等にとつては、新思潮とは近代的思潮の謂ひではなくして、寧ろ一種の超近代的思潮の謂ひである。

新思潮としての超近代的思潮もまた、種々さまざまなる超近代的思想から成立する。そして其各の超近代的思想は、云ふまでもなく一たび近代思潮の中を通りぬけて來たところのものでなければならぬ。また出現年代の上にそれほど新しいものばかりではない。所謂近代思想の或るものよりもずつと早く一部の少數者の間には、既に有名になつてゐたやうなものすらあるのである。

今までの處、私の所謂超近代的思潮は、主として近代的なもの、特に近代思潮に對する否定の形を取つてゐる。少くとも外觀上そのやうに見える場合が多い。さうした思潮の代表者が、これを表白する場合、その表白の皮相に拘泥して見れば別してそのやうに見えることを免れない。

だが、現在に於ても實際は、少數識者にとつての新思潮なる

超近代思潮は、決して單なる否定的傾向ではない。のみならず、今后それの成長進轉につれて、愈々肯定の形をとつた物になつて行くことであらう。

兎もあれ今日に於て、私の所謂超近代的思潮が、行く行くどれだけの事を積極的に肯定するであらうかを推測するのは、あまり容易な事ではない。と同時に全然不可能のことゝも思はれない。

超近代的思潮の否定的反動的な方面からのみ見れば、それの根源ともなり中軸ともなりしてゐるところの精神は、人間主義、人性主義に對する神性主義とでもいふやうなものになるかも知れない。けれどもより正しい觀察からすれば、それは單なる、人性主義に對する反對物としての神性主義といふやうなものではない。それでは近代の人性主義を一たび通りぬけたところの精神と云はれない。それでは、人性主義の超克ではなくして、人性主義より前の時代への引き返したるに過ぎない。

乃ち、超近代的思潮の根源ともなり、中軸ともなるところの精神は、人性主義を單に抹殺しただけの物でなく、寧ろ人性主義の上に何物かを補ひ加へた物、人性主義をより完全にした物でなければならぬ。謂はゞ、人性主義と神性主義との調和から生れた第三の物であるかも知れない。

精しく云へば、超近時代的思潮の根源もしくは中軸は、單なる實證主義的傾向の正反對物、及び單なる平等主義的民主主義的傾向の正反對物にあるのでなく、寧ろ實證主義と其正反對物との調和された第三の物、及び平等主義民主主義と其正反對物との調和された第三の物にあるかも知れないのである。

それらの『第三の物』に對してはまだ名前がつけられてゐない。少くとも一定した稱呼がない。けれども、それらの物の實質は、少くとも少數識者等によつて、とり分け豫言者的な偉大さをもつた一流の思想家藝術家等によつて、確實に捕捉されてゐるのである。

超近代的思潮を構成するところの超近代的思想の最も顯著なるものとして先づ舉ぐべきは、科學萬能を否定するところの思想である。この思想が往々にして、科學その物の排斥と聞ゆるまで、甚だ誇張して表白されてゐることは、明白なる事實であるけれども、しかも尚ほ思想の心髓その物は單に、科學が全能者として禮拜されることの愚劣さを非難し、また科學自體もその分を守るべきことを希望してゐるにすぎないのである。

器械の禮拜を斥けるところのものも、その根本の精神は器械そのものを斥けてゐるものではない。少くも一切の器械を悉く皆斥けようとしてゐるのではない。超近代的思想家の器械に對

するなへに。もて[illegible]、近代的な[illegible]つた技術を[illegible]ことも
のでなければならぬ。換言すれば、機械を人間の手足の延長として用ひるのでなく、人間そのものを機械の一部として用ひてゐるやうな、もしくは機械をして有益であるよりも寧ろ有害であるところの生産資料を生産せしめてゐるやうな、現在の生産組織に對する非難でなければならぬ。次ぎには、結局人類を幸福にするよりも寧ろ不幸にするやうな、今日の大多數の生産器械に對する彈劾咒咀でなければならぬ。と同時に、一切の器械その物を排斥するといふやうな、單なる反動的な、單なる反近代的なものであつてはならないのである。

超近代的思想としての商業主義（資本主義をも包括して）否定は、多くの場合一種の重農主義農本主義として表白されてゐる。しかしながら、これが單に近代からあとへ引き返したのではなくして、近代を通りぬけ、近代を超克したところの思想である限り、その本質はもとより在來の重農主義的農本主義的概念で以て全部を表白され得べくもないのである。

超近代的思想家等も勿論、資本主義經濟組織の否定者ではない。加之（しかのみならず）、彼等は所謂社會主義者といふ近代思想家等よりも、ずつと深く、ずつと根本的に資本主義を憎惡してゐる。またそれ故にこそ彼等は、彼等ほど衷心からの資本主義ぎらひになり[illegible]してゐる[illegible]に向はず[illegible]向ふに向はして行はうとするのである。

復興期以後の近代藝術に對して、特にゴシックの藝術を愛したところの、折々藝術社會主義者の名を以て呼ばれてゐるところのヰリアム・モリスなぞは、資本主義その物にゆづらない位資本主義精神の産物であるところのマルクス派社會主義なぞを、敵とすることは出來ても味方とすることは出來ないわけである。

實證主義的精神に對する否定からよりも、寧ろ平等主義的民主主義的精神に對する否定から、最も猛烈に凡俗主義的、群衆獨裁的社會主義を、しかも正面（まかう）から攻撃したフリイドリッヒ・ニイチェが、單にその點から見ただけでも、非常に代表的な超近代的思想家の一人であることは、多言を要しないであらう。

同じく平等主義的民主主義的淺薄さに對する否定から、男女の絶對的同權及び同生活を主張するものとしての婦人解放思想に、熱罵と冷嘲とをあびせかけたニイチェの態度もまた、決して近代まで來ないでゐるもの、若しくは近代から引き返したものでなくして、寧ろ十分に近代精神を超克したものであり、超近代的な思想態度であり、私の所謂少數者にとつての新思潮に屬するところのものに外ならないのである。

超近代的思想としての「婦人解放」からの解放は、男女の社會的地位を、在來通りのものであつてよいと云ふのではない。ただ本來の（歴史的、社會的のではない）性的差別を無視して、全然男子と同樣の生活を營ましめるのが、決して婦人を自由にするものでなく、決して婦人を幸福にするものでなく、結局外形的平等を與へると共に、實質的不平等を強いるものにすぎないといふことを洞察してゐるのである。

尚ほ近代思想としての唯物論に對する超近代的思想が、一見唯心論の如き外形を取り乍ら、實際に於ては唯物論を超克してその上に新しい第三の物を築き上げてゐるのだといふこと、近代思想としての文明、とくに大都市文明の謳歌に對し、超近代的思想が一應單なる野蠻主義とも見えるところのものであるといふこと、同じく近代思想としての複雜性崇拜に對し、超近代的思想が一應單なる單純主義とも見えるところのものであるといふこと、これらの事についての細說を、他日の機會に讓らざるを得ないのは、私の此上もなく遺憾に思ふところである。

最後にただ一つ附言しないで置けないのは、さまざまなる超近代的思想が、畢竟近代の歐羅巴及び亞米利加に對しての超克である處から一體に超近代的思想家等が歐米に對する亞細亞を、西洋に對する東洋を、いちじるしく好意的に、尊敬的に、乃至憧憬的に見てゐるといふこと、從つて一種の東洋文化主義がまた超近代的思潮のかなり重要なる一特徵であるといふことである。

日本に於ける新思潮の意義

日本に於ては、この最近半世紀ばかりに亘つて、日本人自身の產み出した思想といふやうなものは極めて乏しい。よし少しばかりのものがあつたとしても、それは多くの場合、西洋から輸入されて來た思想より餘り異つたものでない。そして日本に於ける新しい思想といふのは殆んど皆外來思想であり、外來思想の殆んど總てが日本に於ける新しい思想なのである。

しかも西洋にあつては、一般民衆にとつての新思潮に比し、少數識者にとつての新思潮の方が、大體年代的にも新しいのであるけれど、それらの二つの新思潮が日本に輸入される場合には、ただにその順序に於て輸入されたかつたのみならず、一般民衆にとつての新思潮のあるものが、屢々少數識者にとつての新思潮のあるものにおくれて輸入されてゐた。

そこで外來思想を悉く新らしいと思ふ現代日本人の殆んど總ては、近代思想よりも超近代思想が更に一層新しいものであることを思はないのみならず、先入のある近代思想と一應正反對

にも[illegible]、その新らしい超近代的思想をより古い物のやうに思つたり、甚だしきに至つては、これが外来思想であることをさへ信じないで、既に日本在来のチョン髷思想にすぎないやうに思つたりするのである。

即ち、現代の日本では唯物史観のマルクス派社会主義や、所謂婦人解放思想などの如き近代思想が最も新しい思想のやうに考へられ、それらの物を通りぬけたそれぞれの超近代的思想が、より古いもののやうに屡々誤解されてゐる。更に、超近代的思潮の一側面として輸入されつつあるところの東洋主義が、日本に於ける所謂西洋崇拝よりもずつと古い思想ででもあるかの如く、多数の民衆からはき違へられてゐるのは、此上もなき滑稽事である。

一般民衆にとつての新思潮と、少数識者にとつての新思潮と、――西洋に於ては可なりはつきりしてゐる此二の物の対立が、我が日本に於てはまだ〳〵殆んど注意されてゐない。換言すれば、日本の現代に於てはまだ、ただ一般民衆があるだけで、所謂少数識者といふやうなものは殆んどまだ存在してゐないのである。

私は勿論、日本人も近代思潮を超克すべきであつて、近代思[illegible]でも通過しないやうなことでは困る。然し[illegible]、[illegible]古い新思潮を引き返したりすべきでないこと[illegible]、日本の一般民衆が、まだまだ近代的になるべき余地を有してゐることを思はないではない。ただ一面に於て、少くとも最高智識階級が、近代思潮を卒業して、西洋に於ける少数識者にとつての新しさを、ぼつぼつ有ち得るやうにならねばなるまいと、さう思ふことを禁じ得ないのである。

云ふまでもなく、単に新しいから善いのではない。しかし乍ら、今日日本の一般社会主義者婦人解放論者等の如く、これらの近代思想が合理的であることを言ふ前に、先づ非常に新しい思想ででもあるかの如く言ひ、単にそれだけの理由からでも私達を説得し得られるかの如く考へてゐることのオメデタサは、余りに滑稽千万ではないか。

最後に今ひとたび反復することを許していただきたい。――西洋に於ける一般民衆にとつての新思潮も新しいが、西洋に於ける少数識者にとつての新思潮は、更に一層新しいものであると。

――一九二五年五月――

婦人參政權問題・貞操問題其の他

千葉龜雄

まへがき

前代において言はれ、考へられたもの丶一切、それが書直さるべき時代が今や我等の面前に立つ、或ひは、その或るものの全部は、書き直されるのを待たずに、放棄され、燒滅されるべきもの、或は燒滅されてよいものかも知れない。たとへば奴隷制度である。過去に奴隷制度があつたからと云ふて、現代以下に、奴隷制度が存在し得る根據がどこにもない。また、その奴隷制度に服從した一時の人間心理が、社會風習が、たとへその時代に存在したとしても、その心理機構や、社會風習を決定的なものとし、それを當來の人類に强制し得る根據はどこにも無い。一切の生物は自由に憧かれる。一切の生物の全的完成は、自由解放によつて始めて望み得られる。故に、奴隷制度は、いかなる意味からでも、人類共存の反逆である。が、奴隷がまだ自己の奴隷であることに、大した煩悶を感じない時代は、まだその奴隷制度の指標が、大した反抗を感ぜられずに、護られ得たであらう。が、一たび、その奴隷制度が、それを制度される者にとつて、自己完成に對する反逆だと氣付かれた刹那には、もうそれは、彼等を束縛する不可抗の安全辯では無かつた。むしろ、それは却つて、彼等の限り無い復讐心を煽動するところの、爆彈の口火の役目をつとめるものであつた。

たとへば、現代に存在する婦人論は無數である。けれども、極めて少數を除いた大多數が、その奴隷制度を肯定しての、もしくは、精々で、奴隷制度を沿線としての婦人論であるとすればどうか。それはたとへば學的討檢がいかに精密であつたにせよ、また、說述の論據が、いかに微妙であつたにせよ、それは現代以後には紙屑にだも値しないものでなければならぬ。いな或は、我等には、それ以上に、かへつて以下の公憤さへも感ずるであらう。それが、なまじひに、學的討檢において精密であり、說述敷衍において、なまじひに、微妙であつたばかりに、

む[illegible]された[illegible]の[illegible]心を、發達させて、あまりに[illegible]し、甘やかさして置いた。そして、奴隷の[illegible]の爲に、尨大な御用を勤めて居た。………と。一般、知識階級と云ふものは、純眞な學理の討究の名において、有意識に、無意識に、何ものかの、手段として生存した場合が多い。いな、知識階級の歴史は、特權階級の存在を成り立たしめる爲めの、尤もらしい根據を作り、妥當化し、裝飾する爲めにのみ生きた事例があまりに多い。故にいかに卓拔な知識も、それが正義の意識までに反省され、正義の意識までに統一されない限りは、その知識は、いつまで立つても、永劫の、何物かの利用手段として繼續する外は無いのである。

三つの奴隷制肯定

で、現代までの婦人觀を見る。それは第一に、男性を家長とする家族觀を肯定するために、第二に、男性の性慾專制を肯定するために、第三に、男性專制を永遠にする社會組織を肯定するために。大體、そうした狀態を構成するために、無數の知識が利用されて居たかのように思へる。そうして、それ等の知識者が、みな男性であつた事を注意するがよい。だから、男性專制が永續する限りにおいては、そうした知識もまた、まさに萬世

[illegible]男[illegible]も、まづ片つ端から[illegible]出した。ここで[illegible]出した。そこで、男性專制時代の[illegible]であつたところの、奴隷學を頻りに持ち出して來た。それを振りかざして、改革せる女性問題を片つ端から[illegible]さうとして居る。が、それが果して首尾能く行つたか。

たとへば彼等が、いかにその戰鬪術において[illegible]して居るかは、どこの戰線にでも直ぐ看取されるのである。それは、これほどの常識さへも解らぬかと思はれる程である。一例として、彼等が女性の劣等である事を指摘する論據は、いつも一つである。それは女性が男性の持つものを持ち得ぬと云ふ事である。然るに、云ふまでも無く、人間の體的、もしくは心的機能は、それを使役され得る地位に置かれて、始めて生長して行くのである。然るに男性は、いつも自由にそれを使用し、そして發達し得る機會に置かれた。女性はいつもその反對の環境にあつた。そうした地位に置かれたら、女性のそれが男性的に生長しないのはむしろ當り前である。從つて、それを以て女性の劣等を責めるのは無理である。と云つても、自分は、だから女性を無限に生長さしたら、全然男性的なものにまで成りきると云ふ結論について云ふものでは無い。たゞ、第二次的なものですら

も、第一次、決定的に見てかゝろうとする錯覺について云うのである。

だから、もし條件的な事實に眼を閉じたならば、ジイナ・ロンブロゾ夫人のように、以下の觀察も許され得る。「即ち自分は、長い間、男性の大學を視察した。そして哲學、數學、經濟の如き抽象的な科學が、男性の叡知を明澄にすると同時に、それが不思議にも、女性の心性を鈍麻する事を發見した。で、それ等の科學を學ぶ女性の頭腦は、それ等を學ばない女性よりも、より混濁し、迷亂して居る、この理由が何であるかとなれば、女性のこれ等の研究は、彼女等から、最も尊ぶべき觀察の力を奪つて了うからだ。で、女性が演繹力や、科學に依賴して來ると、心力が非常に弱くなる。それから女性の抽象した科學の研究は、彼女の內具する實際的、直覺的傾向を失はせる。所詮、彼女等は、本性として、批判的判斷力を缺いて了うために、單に感覺から享け入れるだけのものを信じ、自分の斷定すべき機能を失つて了う」というのだ。が、かうした結論も、つまりは、決して決定的な女性の缺點ではあり得ない。なぜなら人類の直覺が、內容的に生長するには、科學その他が培養するところの、豐富な、正確な知識の土台に立たぬ限り、それが望めないからだ。然るに多くの女性論者は、女性が抽象的な思索に缺けて居る事を、誰もが一つの立て前とするのであるが、その癖、彼等は、女性が本具的にそうであるものか否かを、一度も實驗さして見たことは無いのである。或はそうした有利な機會をさへも與へたかどうかは疑問なのである。しかも、女性がそのかすかに與へられた機會において、どんな機能を女性に生長さしたかは反證として、十九世紀の露國に瞥見するがよい。これは西歐にあつてさへも、最も無學者の多い露國の「六十年代」であるに係わらず、そしてそれがみな無知である筈の女性であつたにかゝわらず、ヴオルコワとレルモントヴが化學に卓出し、後者がゲッチンゲン大學の化學博士になつた如き、アレキサンドラ・エフォメンコオが、人種學における、ソフォヤ・ペレイスラヴェヴが動物學における、ソフォヤ・ブルロヴの歷史における、コズミナが法律における、そしてリトヴォノヴが、數學の博士に、エヴレイノヴと、カウフマンが、外國から法律學博士の學位を獲た。その外、ソフォヤ・コヴレヴスカヤの數學における天才は、全たく世界的なものとして驚嘆されて居る。もとより、舊くから、大學に入學する女性の多い歐米でも、そうした抽象科學の天才女性が、男性に比べて極少比例だとは云へるであろう。けれどもそれは、女性が束縛の環境に閉ぢ込められたところの、凡んと二千年以上に亘つての歷史である。その歷史環境で叩き

ろまた、退歩して行つたとしても、また、一旦低下したとしてもよると云うたらば、これはどこまでも人間の自然を侮蔑した謬論たるでなければならぬ。反對に以上に擧げた實例こそ、女性がどんな習慣の下に置かれてさへも、なほそれほどに生長する芽が、女性に潜在する例證として有力であるべきだらう。

また、たとへば、東京市における、最近の職業婦人知能調査の結果においても、同様な觀察が下せる。これは最近の調査結果によれば、若い女性の知能中樞の活動力が、學校に居る中が一番成績がよい。そして學校を出て高等の婦人大學に進むもの、もしくは職業に從事して居る女性の思考能力その他が、年を追うて次第に低化する、と云う實例に照して、職業婦人の可能性を疑つて居るのであるが、これもまた、我國婦人の社會的歷史と職業婦人が置かれる地位を勘定に置かない結果である。學校に居る間は、また學課だけに專念される。が社會に出てからの氣苦勞は、日本のやうな國柄において、恐らく女性のいらいらしい心境の、恐らく半分以上をも占めねばならぬであらう。で、そうした執意の分散が、どうしたつて、思考力その他の能率を低下させずには止まないであらう。だから、これをもつて、直ちに婦人本質の劣等を證明しようとするのは、淺薄でなければ無知である。

女性の體力

次に女性の體力についても一つ茲に云へるであらう。女性が男性の從屬者となり終つた重な一つの條件は、女性の體力が弱いために、戰爭に堪へ得ないことにあつた。そして力が生存條件の一つであつた現代までは、強い體力を持つ男性が、兩性の生存權を決定する王者であつたことに何の不思議が無い。けれども、その戰爭であつてさへも、かつては女性が、最も猛烈な軍隊であつた、過去の歷史があることを忘れてはいけない。たとへば、古代のイチオピヤや、ガゼルや、スパルタや、その他は、みな歷史上の好戰國民であつたのみならず、男性をして戰はしめ、或は男性と相並んで戰うものが、いつも女性であつた。また古代チュウトンの好戰者が女性であり、女性が結婚する祝物として、いつも武器と鏡を贈られたことを史家タシタスが擧げて居る。またリビヤやアマゾンでは、兵士が悉く女性であつたし、古代ドイツにおいても、夫が妻に贈る結納が、家畜と、馬具をつけた馬と、鋭利な鎗と、劍一振と、楯一張であつた。中でも武器が、婦人における相續遺産たるべきものであつた事をタシタスが記錄し、これによつて想うに、女性が戰鬪術を練習した證據だと云うのである。これはまたロオマ時代にお

いて、ドイツの女性が、男性兵士と同伴つて戦ひ、女軍の屍體が、戦場に遺棄されて居た事の多かつた事でもわかる。この時代にあつては、王妃が軍隊を指揮し、または引率した、其外ミニコルレルの記録によれば、サチュナの包圍においては、シリヤの婦人達が、城壁によつて防禦したと云ふし、ペルシヤ軍がアゼンスを攻撃した時には、防禦軍の將軍の一人が、女性であつたとも書かれて居る。もつと古いのになると、ガジアの王妃トミリスは戦場でシラスを殺し、男女混合の軍隊を率ゐて居たと云はれる。次に東洋では、インド宮廷の女性が、やはり戦術を練習して居て、男性と一緒に戦線に出たと云ふし、メキシコでは、将官級の一婦人が、全軍の總指揮で、男軍を指揮し、ボンペイ地方の一王妃は、自己に屬する一軍を率ゐ、敵王に、決闘を挑戦した事を史家が記録して居る。次にラシアの古代史を讀む場合にも、傳説の中に、驚くべき慓悍な女性を發見するのである。たとへば、ビリナとスヴヤトゴルの物語などもその一つである。そこでは處女戦士であるビリナが、若い戦騎士スヴヤトゴルの黄髪を掴んで、悍馬から引き下し、彼を大きな革嚢の中に叩き込んで、悠々たる高原を家路に還る。もしこの男が年寄りだつたら首を斬つて了うし、若くて、好男子なら、友人とし、戀人とするだらう。もし彼が自分の氣に入らなかつたなら、片方の手の平へ乘せて、片方の手で彼れを壓しつぶして、揚前讚として了はう」との英雄處女が鼻唄を歌ふのである。それはキエフの弓軍である娘が、彼よりもすぐれた射手を見付けて、それと結婚しようと荒野を探し廻つた古記録とも對照される。要するに、そこにあつては、男性と體力が、遙に男性を凌ぐ無數の女性が居たことがわかる。殊に注意すべきは、それが前に擧げた諸國の女性と同様に、社會的に、家庭的に、男性と平等な權利を持つて居たことである。その一例としては、ウクライナにあつては、男性が妻を擇ぶ權利が無くて、却つて、女性が男性を擇ぶ風習になつて居たる もちろん、女性が好戦的であると云つて、直ちに、體力骨格の強健のみを結論するのは早計であるかも知れない。強烈な感情が、その好戦癖と憎悪心を煽る場合が無いとも限らぬし、また男性に負けない所有慾と征服慾がそれを刺戟し、その好戦癖が、副作用として現出したものだとも云へるからである。けれども、たとへそうした女性達が寄生生活に浸り切つた後代の女性とは、體力精力において、概して段違ひであつたことは毫も疑がはれない。然るに近代科學者の男女兩性の體格比率によれば大體以下のように計算される。女性は、男性よりも、身長において十六對十七の比率で低く、身重は、十分の一だけ輕い。筋肉はより薄く華奢で、檢力的

腕力に、男性の三分の二を出でない。筋肉は男性よりも弱く、比重も少ない。骨骼はより弱いから、同じ時間、同じ重量を容る場合には、男性よりも容易に不具になりやすい。腸は男性よりも長いが、彎曲した骨盤の爲に、男性ほどに直立の姿勢が保たれない。コルセットを着ける必要がそこにある。手の肉はより薄く、指がより長い。それだけ男性ほどの力を待たぬ代り、觸感がより敏捷で、より微妙で、細かい器用な働らきをする。彼女の血液は血球が男性よりも少くて、脈搏が男性よりも早い。男性よりも、肥大し易く、病氣し易いが、病氣に對する抵抗力が男性よりも強い。一寸した反應が、男性よりもより鋭敏な効果を持ち來すからだ。で、或る定まつた年期にあつては、女性の死亡率は、男性よりもずつと少ない。等、等、等、

現代醫學の評價は、われ等に以上の報告を與へる。けれども、その幾部分までが第一次決定的なもので、幾部分が、環境的なものであるかは容易に判斷されない。

そこで、エドワアド・カアペンタアが、「現代女性は、こう云ふ事を明らかに見る。彼等女性の適應な進歩は、問題が公正に取扱はれる時代が來ない限りは望めない」と。――もちろんそこでは、現代までと全たく違つた生活を含むものである。たとへば、もつと郊外に出て、本當の體育的訓練と展開をするとか、規則に立つた仕事を與へられることや、或は[illegible]滿足を得るとか、そして、もつと廣い人間的な[illegible]と、より大きな目標と、自然的興味を得られるとしたら。もし、これ等のものが許されたなら、彼女等は明らかに、彼等がもう以前でなく、却つて、男性と平等であり、男性の相手であり、男性の親友であることを發見するだらう」と云う抗議も、また多分の眞實を含むものとして享受されざるを得ないのである。

女性問題の意義

要するに、現代の女性なるものが、在るべき筈の女性が、在るべきまゝに展開されたのであるかとならば、我等はそれに對して、いやそうでは無かつたと斷言するのである。その斷言は或は大膽過ぎるかも知れぬ。が我等はその大膽過ぎることを少しでも悔いないのである。然り、現代までの女性の發達は、確かに或る功利的な有用の沿線を沿うて、稍々でそれに適應するようにのみ生長させられて來た。しかも女性本有の個性は、よくそうした我儘な非道の重みに堪へ、その自我・方の技師の職の指すまゝにだけ、その特性を生かし切つて居た。で、いくら最終目に見ても現代までの女性の特性として見られるものは、有りよう、その環境が生んだ生活のみが多分である。そこで一·

つの結論に到着したことを我等に感ずる。即ち、もし女性の敏捷な適應性が、Aの環境によつてAの擬態を作り得るものとすれば、それをBの環境に移殖する場合において、今度は、Bの擬態に變遷し得ることは當然な理路であらうと。で、現代以後の當來の社會が、全く前期のそれと脈搏と形態とを異にするとすれば、前期に假定された理法をもつて、現在以後に當て嵌められ得ぬ根據もまた、そこで明らかに證明され得るであらう。ことに、喜ぶべきことは、前期の女性の存在が、單に環境に矯められた保護色として延びて來た自然なものであつたのに、現代以後のものは、その生命を自由に解放し、自由な展開を許すところの眞實への歸還である。今さうした世界に放たれた女性の生命機能が、この末どこまで展開すべき可能性を持つものか。そして、女性とは結局何であるか。どんなものになるのであるか。それの豫測に、今日にあつて恐らく何人にも爲し得ないほど、それほど約束に滿ち、またそれほど危惧にも滿つる謎である。しかも、之れを律すべき一切の過去の法則が、悉く廢棄さるべき運命にある現在においては、それを測定すべき何等の標識も無い。すべては白紙である。いな、既成社會意識と偏見から逃れ得た、極めて小數の、婦人論者の觀測を除いては、その多くは白紙である。また白紙でなければならない。然るに現代婦人論の物騒がしい内因は、それが、新女性はいかにして、將に進展すべきかの新構圖を考察するものの多いためではない。却つて、時効にかゝつた古證文を持出して、無効な價値の拂ひもどしを性急に要求するところにある。

なをまた斯る人々の見解の或る部分は、女性解放の運動をもつて、單に、女性の生存權取もどしの反抗だと解釋する。そして、それが男性に對する、唯一無二な男性既得權取もどしの反抗のみにあるものだと解釋する。それだけをもつて反感を持つか、或ひは、その點だけで、女性の運動を助けるのであるか、それは、その何れもが、女性運動の眞髓に徹せぬものと云わればならぬ。そして、この女權解放の目的が、彼等の見るところ以上にもつと大きく、それは結局において、世界男性の福利を、一倍するものである事の、明らかな理論にさへも到着せぬのは殘念である。なぜなら、今までの、男性專制の世界は、單に男性の統治によつて、その一半しきやの利福しきや獲られなかつた。それが人類の半數を今まで更に解放することによつて、更に半數を加へ得た。そして始めて全部となつた。然るに、男性世界の利福が、完全な半數の數量に達したのさへ、やはり男性人類の全部が、完全に自由に解放された後でなければならなかつた。然らば、その男性の他の半數の利福を更に完全にする

にし、また人類の半數たる女性を、完全に解放する途に導くことはばならぬではないか。そして何人も、どんなものでも、到底之を與へられることを、彼はなほ人類がある以上に無い。然るにも拘らず人々が、女性の解放に出來るだけ目を閉し、その目前にあらゆるいて居る偉大な利益を、獲まいとして強いて努力して居る。それは確かに不思議な現象でなければならぬ。無知か、然らずんば、自我の慾望が、まだまだ男性の心象を脱却しないためで無ければならぬ。

で、解決の必要が無いところに問題は起らぬ。現代の婦人問題とは、即ち解決すべきものが無數に存在するから起る。その解決すべき問題は多岐である。むしろ無際限である。けれどもその方向は、大體二つの面に要約されるであらう。過去に向ふ面は、いかに過去に規局された觀念を破壞し、是正する事によつて、來るべき妥當の法則を明にするかである。將來に向ふ面は、その進むべき道途をいかに圓滑にし、かつ、いかに無用な努力なしに、正しい標識に到着すべきかの作戰圖の作製である。そして來るべき創造の女性文化をして、いかに來るべき男性文化と、完全に映發せしむべきかになければならぬ。

然り、女性文化である。われ等はそこで、女性文化の名において、同じ男性文化を、もう一つ加へることを意味しはしないか。女性が獲らんとするところのものは、あくまでもそれ自らでなくてはならぬ。また異つた存在であるべきだからである。故にわれ等は、女性完成の運動の目標が、男性の向うそれと同じものであつて良いとは考へない。また從つて、女性完成の運動は、いかにして男性に追付き、男性と同一標識の下に立つべきかでも有り得ないとなする。もし女性文化の標榜が、單に男性文化の二重映しであるならば、それが達成したところ、精々の模倣であつて、創造では有り得ない。そこに女性自己の抹殺がある。然るに多くの婦人論者には、こゝにも多くの錯誤が殘されて居る。彼等は近代の女性完成運動をもつて、女性が男性までに達する奮鬪であると見る。そして、肉體その他の性的差別を振りかざして、無味な努力であるかのように減殺するのであるが、それは心配に及ばぬのである。女性はたゞ、生活權を完全に獲ようとする希望で、男性と同じ執意を持つだけである。その生活權をいかに按排するかについては、決して女性的な、特異性を發揮することを忘れるものでは無いからである。

經濟組織と婦人問題

で、自分のこゝに與へられた題目に還る。それは、女權運動、母性運動、もしくは産業革命における婦人的運動等、

等、等の史的意義を闡明し、もしくは批判すると云ふやうな、深遠な學徒の仕事ではなかつた。たゞ參政運動その他を中心とするところの、當面の婦人問題諸相を、說述することにあつた。が、これが中々容易な仕事では無い。

一體婦人問題が、現代以後を中心として、かくも騷擾をきわめて來たのは何故であるかとならば、つまるところ、經濟問題に還るのである。女性が男性の從屬者となつた抑もがすでに經濟的なものに起つて居る。女性が今ま男性から引離されようとする場合に、またその根元が經濟組織からひき起されざるを得ないのは當然であらう。かくして近代の婦人問題は、勞働問題と共に、故に明らかに、近代の產業革命から出發したものと見るべきである。だから或は、諸種の婦人問題は、產業革命を中心として、始めて解釋され、理解され得るものと云ふべきである。そこでわれ等は、わが國に於ける婦人問題の、重なる最近現象を經濟組織その他に注意することによつて多少の觀測を試みようと思ふ。

家族崩潰の傾向

婦人問題を觀測するにあたり、單にわが國のみならず、世界の大勢として最も注意さるべきものは、家族の崩壞その事でなければならない。われ等は原始時代からの婦人が、置かれた社會的地位を考ふる時に、彼女が單に、男性の所有する、財產として取扱はれた事實を認める。メヌの法典は婦人について云ふ「婦人は、子供の間は父に寄り、若い時は夫に寄り、夫が死んだ場合には子供に寄り、彼女がもし子供を持たぬならば、夫の親戚の世話になるべきである。なぜなら、婦人と云ふものは、決して、自分の意志によつて、自分を統治してはならぬものだから」と。これは儒教の三從の教へを、もつと經濟意識から解釋したものとも云へる。ロオマ、インド、グリイスの法律は、みなこゝから起原するもので、要するに女性は、經濟權を絕對に男性に仰ぐ故に、その服從の絕對義務を、また男性に負はねばならぬ。かくの如きものは、單に、ロオマやグリイスの古代ばかりではない。その結果は、女性を劣等とする觀方が生れた。古代ヂュデヤでは、女性が、凡ての墮落と、人間罪惡の根原であると信じられ、もし女の兒が生れれば、潔めの式の日數は、男の兒が生れた時の二倍であつた。中世以後に至つても、女性は依然として男性の劣等化したものだと見られた。「そして單に男性性慾の奴隸である。彼の歡樂の機械だと認られた。」公共機關は、彼女等に對して種々な權利を與へることを拒み、また男性と共に、公けの集會に參加することを禁じた。ま

た。[illegible]

と云ふ理想にさへも結びつけられたのであるが、かくの如く、女性が[illegible]に於ける思想に於いて、漸くその人格を認めて來たのは、僅かに十九世紀中頃からである。それは先づ民法改正の上に現はれたものであつて、近代における兩人性の理解によることが多い。尤も、女性が男性よりも少ない爲に、より多く自由を與へて居ると云われるアメリカでさへも、社會における女性權利の自由は、家内にある婦人壓迫の不自由に比べれば、差引き大した利益にもならぬと或る社會學者が說く、要するに男性專制と男性偏見は、アメリカにすらも大げさに行はれて居ると云うのである。そして婦人個人性の覺醒は、何よりも先づ、男性經濟權の束縛から、自己を、解放せねばならぬことを感ぜしめるに至つた。その結果は、第一に離婚が夥たゞしい數をもつて增加する一方、他方に、結婚して家族を作るものの年齢の人々をして、容易に家族を作らしめない。更に結婚した夫婦をして、生んだ子供をいつまでも手許で養育する事を許さない。それが無教育な、若くは兩親の慈愛を持たない子供の數を多くする。家族主義はかくして次第に消滅する。すべては經濟組織に依頼されるのである。

この傾向について以下の觀察を與へたものは、犯罪學者アド[illegible]

が、すべて[illegible]

多く、現代の[illegible]

たする[illegible]の變化を意味する。第一に[illegible]、[illegible]々とその兩

く、より獨立した性的地位を占めつゝある。次に、經濟的生活における、家庭管理の重要さが減殺されつゝある。次に、結婚の道德的唯一共調が、だんだんと、相互の愛によるものと置きかへられつゝある。眞の戀愛は、自由で、平等な人間の間にのみ始めて存在し得るものだからだ。またそこには、たとへ法律に據らなくとも、相互の愛と同情による結婚が、寄生[illegible]から結ばれた準法的婚姻よりも、ずつと好もしいものだと考へる人々が多くなつて來た。要するに現代の經濟生活と社會生活は、性的生活を、經濟的生活と結び付けつゝある事が注目される。そこで、また結婚する費用を持つもののみが結婚し、經濟と生活とに乏しい教育ある兩性が、獨身を強制される結果を見つゝある。」云々

然り、同じく經濟的なものに依存する結婚である。現代以前にあつても、現代にあつてもこれには變りがない、たゞ現代以前にあつては、女性が、男性の經濟權圍に寄生し、自己を男性享樂の相手としてのみ甘んじたものが、現代では、自己が經[illegible]

權を保有することによつて、不平等な性的交渉と、社會的生活を營まうとするのである。前のは奴隷としてであり、現代のは全人としての對立である。

離婚の增加因

現代の世界において、離婚が夥しい數で增加しつゝあるのは、明らかにその趨勢の一片を示すものでなければならない。かつて離婚率が世界の第一位であつたのは日本であり、次がアメリカであつたが、現代ではその位置を變更した。けれども、最近卅年間の文明諸國の離婚率を平均に眺めて來れば、增加率は實に驚ろくべきものがある。それについて、ホワアド教授は語る。「社會化による個人性の急激な突撃のために、家長的家族の團結性が、破壞され、もしくは完全に破滅された。妻と子供が、家長たる父親の權力から解放されればされるほど、直接に、なを大きな社會的統治の下に置かれる。かくして國家の新連帶組織は、家族の舊連帶組織の廢墟の下に開かれた。家族の結合は、もはや強制ではなくて説得から生れる。家族成員を結び付ける紐帶は、靈的なものになつた。法律的なものでは無い。家族が、社會性と教養的な力によつて統率されればされるほど、自然もしくは家系的業望の加はることが少なくなる。かくして家族社會は、適確に精神的事實となつた。そして個人化は、これが社會化を加味することによつて、結婚生活のより高い理想を生み、世界的事業における、兩性の交渉的機能に關して、より正しい見界を認め得るようになつた。かゝる進化の性質から、女性が直接に克ち得る利益は極めて大きいのである。家族においては、男性の專制から彼女を解放して、單なる結婚生活の相手方とし、もつと大きな社會では、彼女の政治的、經濟的、知的獨立を完成せしめつゝある。一言すれば、それは人類半數の社會化に外ならぬところの、一大革命と云ふべきものであらう。」

が、この個人化と解放の過程は、まだ充分に完成しては居らぬ。そうである。この恐ろしい急激な進化と、最も目につく効果も、要するにまだ五十年内外のものである。云はゞ、現時の我々は、舊時代から新時代の過渡期にあるのだから、その間、新社會組織の制定について、時に見込ちがひをしたり、見當違ひをすることはまだ止み得まい。そこに一再ならず、理想の幻滅と破壞がある。で、教授は結論する、「權利義務の平等化は、兩性をして、その貪食に對して互に神經質ならしめた。ことにそれは女性の方に多いのであるが、その爲に、その反動から來る爭闘が絕えず鬪はれ、ことにそれが時に、強烈な姿で來るのは、時代

[illegible]た一と
[illegible]に見えて、中でも著しい最高率を占めるものはアメリカ合衆國であつて、今やかつての最高率であつた日本を追ひ越した。即ち日本の離婚率は、千九百十九年度において八件につき一件だと云はれるのが、アメリカでは、千九百廿三年度に十六萬五千件の離婚で、結婚七件半に對して、一件の離婚率を示す。しかもアメリカの離婚率の飛躍は驚ろくべきもので、一八六七年から一八七一年間に、五萬三千五百七十四件であつたものが、一九〇二年から一九〇六年の五年間には三十二萬二千六百四十二件に上つて居る。日本でそれに近接した年期を統計に求めると、明治三十七年から同じく四十一年に亘る五箇年間の離婚總數が、四十萬六百五十五件でさすがに世界離婚率の最高率を占めたのではあつたが、明治三十七八年から次第に漸低して大正十年一年の離婚數が五萬三千四百、十一年が五萬三千と云ふ風にいくらか好もしい傾向を採つて居る。然るにアメリカでは一八七一年から一八八〇年の十年間の離婚率は、人口增加率の二倍或ひは二倍半であつたものが、一八九一年から一九〇〇年において三倍に進み、更に最近において五六倍の速度で增加した。その他は、スヰス、フランス、デンマルク、ドイツ、セル

[illegible]
[illegible]ならない。そして[illegible]には[illegible]
るが、ドイツ、オランダ、アメリカ、ノルウエイ、ブリテス等のそれ等を統計して見ても、姦通もしくは不貞行爲の第一位を占めることは、最も注意すべき事柄で無ければならぬ。第二位以下は、重婚、虐待、約婚後の破操其他、國状によつて順を別にする。またアメリカにおいて、どんな階級が、一番多く流行の離婚運動に感化されるかとなれば最高位を占めるものが俳優、見世物師である。次いでは、音樂家、音樂教師が第二位にある。第三が旅商人であり、第四、第五は、醫師、軍醫であり、最後に僧侶や農夫がある。フランクリン・スヰングはこの離婚の多くなつた理由を、「個人性の成長」に歸し、その革命中心意義は、人類自由と、人類義務の進長にあり、彼等は結婚をもつて、たゞ相互のみで責任を負ふべき自由契約だと見るようになつた。たゞ個人契約である。快樂と便利が繼續する間のみ結合し、それが存在しない場合にあつては、いつでも絶縁することになるのだと云ふ。そして、女性が經濟的自由を握つて居る限り、それは自由に實行され得る。アメリカに於いて、離婚が最高位を占める理由の一部はこゝにあると云ふのである。しかし

日本に於ける女性經濟權の獨立は、まだまだ幼稚であると云ふ外は無い。そうした所から來る破綻はまだ少いであらう。しかし日本の離婚率が近年の統計面において、次第に減少しつゝあるにかゝはらず、離婚の裏にひそむ爭闘が、思想的に深刻なものを加へつゝあることは、先づこの個人性の自覺が先驅をなしつゝあるものと見るべきであり、從つて經濟權の獨立が、次第にその強固さを加へるようになるならば、兩性の結婚狀態と思想の變遷は、必らずや大なるものがあるに相違ないと思はれるのである。

有閑階級婦人の頽廢

自分は先きに離婚の理由の最高位として、夫婦間の不貞と破戒がある事を説いた。それは恐らく産業革命時代が當然にもたらす所の、兩性道德の頽廢に瀕して居ることを語るものでは無からうか。果然、わが國においても、そうした變型的な戀愛事件が、斷々として新聞紙上に傳へられる。殊に有閑階級の頽廢した戀愛が、最も強く好奇心を捉へる題材として視聽を聳ばたてつゝある。

女性の無節操を、その無知に歸する多數の論者がある。たとへば、バツタグリアのように、女性をして種々な罪悪を犯さしめる原因の多くは、一般に、その置かれた地位の低卑な事による。第一、女性は、公的生活に活動の分け前を見出さぬために、知識において制限される。それが結果として、虚榮で、自我的で、無知である。そこで彼女等は、容易に無考へな男性の犠牲となり、彼れに誘惑されて、遂には賣笑婦にまで落ち込んで了う。或はまた、何等かの目的の爲にする男性のわなに易々と陥ゐつて結婚する。また女性が何等健全な勞働をしない生活狀態は、子女の上に神經質疾患を遺傳することが珍らしくないと云うやうな觀察も、或る部分まで眞理であることは欺かれない。

けれども女性貞操の破壊が、社會制度の原因から來るよりも、より多く經濟的原因から來ることを發見した點において、我等はむしろ、ボンゲルの説くところに、より多く興味を見出すのである。

然り、頽廢期におけるロオマでの、貴族階級の性的生活が墮爛した根源を説明するには、どうしたつて、論據を、貴族階級の怠惰な生活と、女性の側の寄生狀態と、兩者の馬鹿馬鹿しい贅澤に立ち還らしめる外はないであらう。或はその間エンゲルスが「英國勞働者の生活」で擧げたような、無産者の無知な生活が、性的頽廢を來すことが無いとも云へない。即ちその頃の

[illegible]に於いて、[illegible]ブルジョアジイは、[illegible]に、[illegible]追を探す近代のに、たゞ以上の二つの享樂のみを彼等に[illegible]した。そこで彼等婦人は少しの節制もなく、その二つの享樂に向つて、全くの精力を集中するのであるといふのだが、ボンゲルは、それに對して批評するのである。現代において、そんなもの以上に、強烈な性的生活の興味を示唆するものは、實に婦人の寄生的經濟狀態でなければならぬ。言を換へれば、それはブルジョアジイの生活の狀態から來るのである。即ち彼等は、怠惰と浪費にその日を暮し、性慾の興味に生活の大半を提供する。そしてブルジョアジイ、或ひは有閑階級においては、婦人は何等の勞働者では無い。たゞ滿艦飾の裝飾に日も足らぬ有樣で。それは一に、男性の享樂の目的たらうとするにある。そして、その空虛な寂寥を滿たすために、性的空想と性的遊戯に心を占有される。

そこでボンゲルの觀察の大要は以下の如くである。たとへ統計で調べ上げる事が出來ぬにせよ、近代の婦人に貞操破棄の事件の多いのは、やはり怠惰な生活をする有閑階級が第一である。次には無產階級であつて、最も稀な階級は、知識階級と、ペチイ・ブルジョアジイである。

て、[illegible]

[illegible]

第一に、ここでの結婚は、[illegible]る。なぜならば、その結婚が、[illegible]たものが多いからである。然るに、その生活は[illegible]階級に對[illegible]に少ない。なぜならば、そこでの結婚は、多く、相互の傾向や好みによつて結合されるものだから。

第二に、不眞面目で浪費的な或る階級生活が、最も多く不貞に陷らせる機會を持つからだ。怠惰な富者階級に不貞沙汰が多くて、知識階級や、小ブルジョアジイに、それが稀れな原因の一部はそれで說明される。

第三は、結婚の社會的意義が、明確に認められる階級ほど、不貞に對する憎惡の觀念がより强烈になるものである。で、こうした不道德が、勞働階級よりも、小ブルジョアジイの方に、より少ない理由がそこにある

第四、單に肉的慾望だけが基調であり、心靈的なものゝ殆んど含まれて無いような、そうした結婚が殖えれば殖えるほど、不貞の事件はなほど多數になる。これは殊に無產階級に當てはめられるものである。しかし無產階級の結婚は、ブルジョアジイと違つて、愛情から出來上ることが多いけれども、たゞ敎養

の缺乏が、靈的な抱擁を可能にすることが出來ない。この調和が缺乏する刹那に、面倒な兩性生活がそこに出來上り、遂には不貞が生む葛藤を見るやうな始末ともなる。

犯罪學者であるボンゲルは、かくして私通、淫蕩、不貞のやうな罪惡が、より多くいかに有閑階級の婦人の生産であつたかを見た。主婦が手を下して糸車をまわし、その日が同時に、鍋を見守る時に、吸物の焦げつく事は決して無かつた。が、妻が、寶石で飾られて、何もせずに長々と寢て居たり、或は浴場、劇場への放散を求める時代が來て、あらゆるものが墮落し、國家は腐敗した。けれどもかうした婦人の狀態は、單にロオマにのみあつたのでは無い。現代世界の有閑階級においてまた看取されるのである。

かつてアメリカの一富豪が、娘を連れた一寡婦に訪問された。食う物も、着物もないと云ふのだ。富豪は直ぐと高價な着物と、羊肉の股を與れたところが、いかにも丈夫相に見えるその寡婦の言ひ草がよい。折角の附物も、家まで持つて行つて與れる人が無い。彼女自身が持つて行くなどは、持つての外だとわめくのである。するとアメリカ富豪は、片手に羊肉を抱へ、片手に着衣の包を下げて、平氣で往來を濶歩しながら、寡婦の家へそれを送り屆けた。そして二人の惰け女は、驚ろいた眼を睜つて後から續いた。富豪は、活動性に富んだ清敎徒の子孫であつた。現代までの女性の寄生的生活が、いかに女性を惰け者にしたかは思想の外にある。またそこには或る貧乏な英國官吏の娘がある。一年僅か二三百磅の收入しきやないのに、娘は、料理も、裁縫も、何も知らぬし、また何等かの政治、社會、知識、藝術的勞働に從事する譯でもない。その癖、午後はテニスもする、夜はダンスにも行く、それで自分で髮を結うことも、着物を碌に着ることも出來ない。廿八歲になつた彼女は、一時間と力の入つた勞働をしないのだ。家の周圍に畑がある。けれども彼女は、一アアクルを耕やして食物を穫るよりも、寧ろ寢て居り、飢えて死ぬ方が增しだと云う。たとへその例は極端にしても、女性の寄生生活の最後の收穫は、彼女等の意志の麻痺であり、勞れ、或は氣に向かないならば、どんな仕事に着手することも出來ないと云ふ傾向であつた。

こうした現代婦人の墮つて行く先きは、言はずとも大抵解る。たゞ金を持つて居る男に結婚しその性的享樂の提供によつて、怠惰なその日を暮せばそれでよいのである。すでに單に性の對象としてのみの存在である。性に關する過度な敏感が、そしてまた衝動が、機會さへあれば、それを放縱に濫用しようとする示唆を與へられる事は、そこで何の不思議もない。有閑階

家において、女性が[illegible]時代に、かへつて、女性の自由が盛んになるのはこの為めである。たとへば、ロオマの家庭と、ロオマの都会が、最も多く然うした傾向に傾いた如きは、正しくその一例でなければならぬ。何等生産の手段を持たない。たゞ消費につぐに消費を持つてする。ギルマン夫人が指した階級とは、即ちかくの如き階級である。かつ、現代文明の特徴は、その生命内容に、感覚的な刺激を含むことが極めて多分である。何一つ、働らくべき必要を持たない有休階級の女性は、その財物の消費を、感覚的な、技術、装飾、流行の中に浸しさるに飽たらず、更に進んで、肉体と感情の一切を、感覚の中に耽溺させねば満足しないとする。資本主義社会の爛熟は、また同時に、そうした寄生的女性の生活をも爛熟せしめ、また糜爛せしめつゝある。性の頽廃が現代世界の一部を浸潤しつゝあることは、故に避け得ることの出来ない過渡期の一事相である。

婦人と参政権

イタリイの首相ムッソリニは、婦人が自己等の政治を支持する為に、有爲な味方であることを悟つた。そして、地方自治政における、婦人の選挙権を與へることに決定した。またドイツのヒンデンブルグは、人民の意志において、[illegible]、その意志を得るに努力しつゝあつたことを認めた。いはゆる反動思想の主潮たるこれ等の政治家にあつてすら、また政治における婦人の勢力の、看過し得ない重大な意義を認めたのである。

日本では、加藤首相が、婦人に選挙権を與へることは、夫婦喧嘩を増すことだなどと、、つまらぬ心配をやつて居る中に、最も保守的な政友本党が、政略かどうか知らぬが、地方自治権を、婦人に許すことを党議として可決した。青年土川氏もまた、婦人に参政権を與へることを可決した。今にして婦人参政の可否を議論するのは、日本等にして、却つて既錆をつくと云つたほどの迂濶でなければならぬ。たとへば、一九一〇年においての、オオスタリヤの両院で、満場一致で決議された婦人参政の効績に、そうした参政権を否認する人々の迷夢を十分に醒すに足るものがある。それによれば、オオスタリヤで、婦人参政権を拡張した以来、選挙はこれまでよりも秩序が正しくなり、女性や子供に対する立法が、男性専制の時代よりも、よりまさつたものになつた。国防や国務に関した事でも、女性は、男性と同様に、卓見と判断力を具へて居ることが證明された。だから、それに対する、攻撃と非難は不當にして適中しない。従つて自分等は、婦人に参政権を認める事を、他の国民に向つて助

言するものだと云ふのである。また、勞働黨がイギリスの内閣を乘取り、女性の代議士が八名までも現はれた。その時、イギリスでさへも、兩性心意の優劣が、盛んな社會の興味ある懸案となつた。しかし、落付いた一般の輿論は、大體以下のようなものであつた。一體女性とか男性とかの性の差別が、人格や才能を決定する大きな力であることは爭そへない。が、幾世紀もの長い間、女性はたゞ、男性に寄生すべきもの、迫害さるべきものときめてかゝられた教育と傳統が、女性の自然の傾向をおそろしく歪めて置き、それを生長させずに居たことは爭そへない。で、女性がもし、普通の男性と同じ知識を授られるような立場を與へられるならば、彼等が異常な能力を現はして來るのは、もう議論の餘地が無いのであると云ふのだ。

その議員の一人であるアスタア子爵夫人は、女性が議會に議席を有することの必要と現實を最近かう說明する。女性が公的事業に携はることを、一つの疑問とする社會の風習がある。日く、婦人における選擧權の必要が何であるかと、自分は、むしろ、かく疑ふ者の頭腦を疑ふものである。たとへば、いくら淺薄な、偏見な人間であつても、先づ最も見易い以下の二つの効果だけでも見逃すことが出來ぬであらう。男性議員は宣言する。我等は婦人團體が、どんな要求をするとも、それによつて、我等は我等の確信を變更するものでは無いと。けれども、彼等は以下の事を知り、また學ぶであらう。女性といへども、男性被選擧者が代表するであらうそれの如く、女性もまた、女性としての意見を代表し得るものであり。男性は、正しく、公平に、それを無視し得ないものであると。しかもそれは單なる女性の利益を代表するものでは無い。それはむしろ、全體としての、國民の利益たるべきものである。なぜなら、それは、かくしてこそ、完全した、正義のデモクラシイの本體を利福するものだから。

次に女性が、議會政治に在る他の利益は、女性が、黨派的利害に動かされ、興味を感ずることが、男性よりも薄い事である。だから女性は選擧の曉に、候補者の人格及び一般的性格を、一層細密に調べた上にするのである。自分はこの傾向をもつて、政治における、極めて健全であり、有効な感化を與へるものだと考へる。これが、どれほど、もぐり投票集めや、旅政治家を排除する手助けになるか知れたものでは無い、自分が經驗した中で、婦人選擧權がいかに有力に働らいたかを見た一つの例は、十八歲以下の少年に、酒精販賣を禁ずる自分の議案通過の場合であつた。當時婦人團體の大多數がその案を支持したが、それは政治に關係する婦人達が、個人として助けて呉れた

…者が婦人で門外であつたので、自分はこの點を見ますが、單にと云ふ好もしいものでもあるのではない。英國における、婦人選舉權の力によることが多い事を否認する事が出來ない。で、われ等はこの經緯によつて、この婦人參政權獲得を、一層努力せねばならぬ。それはまだ充分に獲得されたとは云へない。たゞ僅かに始まつた許りである。が、これは單に女性の問題たるべきでは無い。もつと深重な意味において國民の問題である。われ等は我等の面前に機會を有する。もういかなる强敵でも恐れるな。恐るべきは、たゞわれ等の怠惰であり、冷淡であると。

彼女は、ロンドン交際社會に偉大な勢力を有し、かつては、自邸に兩陛下と各政黨首領を招待して、皇帝と勞働黨首領を接觸させたような離れ業をもつて、政界の隱然たる女王となつて居る。その外、同時に選擧されたウヰントンガム夫人が、農民問題や、婚風問題の外に、小學から大學を通ずる國民の經濟を强調した如きも、女性の政見たる特質が見える。また現代イギリス内閣大臣の夫人達を見て來ると、參政論者であるものと、無いものと入りまちつて居るが、政治に對して興味と知識を有し、その政治的理解が、夫の活動を有力にして居る事實は著るしいものがある。

參政權の是非

かくしてイギリスにおける婦人參政權の確立は、昨年の議會に提案され、今年の如きは、男女平等選擧權の平衡を成る理由から、多少年齢の制限を加へた如き許制もあつたが、これまでが女性議員によつて通過された諸議案を見れば、我等は直ちに、こう云ふ事を直覺する。これはやはり、女性の政治的權力なしには、またその緻密な注意力無しには、全體としての國民の利福は獲られぬものだと云ふ事を。なぜなら、そうした議案の着目は、男性が長い議會歷史と、社會生活の間にあつて、全く永久に注目されず、従つて、永遠に閑却されてあるべき缺點であつたから。即ち一九一八年から、一九二二年に亘る、女性議員の提出によつて通過した重なる議案は、議員としての婦人選出案が、殆んど反對なくて通過、賣淫登錄、有夫婦登錄に對する法律の修正、婦人公民權制度に對する法令修正、國際聯盟、扶助料、結婚婦人の諸權利、次に離婚と扶助料に關する法令改正、また殺兒罪の改正では、婦人が幼兒を殺しても、彼女が分娩の結果から苦んで居る事が證明されたならば、殺人罪として起訴され得ない云々と云ふ如き、次に刑法の修正案で、それが重に未定年の、少年少女の犯罪及び浮浪罪に關したもので、

る。次には養子緣組の家族法、次は生子認定法によつて、結婚した夫婦が、結婚前の生子を認定する事、次に、婦人の分限に關し、公職に就き得る權限の擴張を提議したものであるが、これは事實において、極めて不完全だと云はれる。

が、要するにこれ等の立法が、直接に女性と家族の生活に影響をするものである事から見て、いかにも女性らしい思ひ付きだと思はれる。即ち彼等は、男性が討議しつゝあるような、一般的な。兩性共通の政治事實に頭からとつかゝらず、單に女性の身近かに即した問題から着手して居る。と、云つて、それが彼等が男性と同じような、政治問題、社會問題、經濟問題を討議する知識が無い爲だとは云へない。だから、女性の議員は、遂に、大局の政治に參加する能力を缺くと云ふ批難は採るに足り無い。たゞ、始めて女性生活の原始に目覺めた婦人は、單なる治政立法の分野においても、先づ何よりもこれまで爲さるべくして爲されなかつた部面、着目さるべくして、女性の生活に即するものなるが故に打棄てられて居た問題の、あまりに多かつた事を發見したのである。そこで彼等は先づ、微細に自己の生活周圍を檢定し、その修正から着手されねばならないのであつた。

そこの事情が闡明されない。そこで、多數の女權參政反對者は、得たり、賢しと、女子參政の無効を力調する。曰く、見よ、現代世界の參政婦人は、議員たり得る數が少數であり、かつ實力の微弱なところから見ても、またその擧げ得た成績に徵しても、殆んど採り上げて云ふべきものが無いぢや無いかと。かくして、婦人の故鄕は、やはり家庭である。社會にはない、政治境上には無いのだと結論するのであるが、これもまた、女性黎明の曉が、まだ何十年とならぬ歷史を忘れて居る。そして何千年の專制權を專有し來たところの、男性と、それを比較する事の非論理である事を忘れて居るものである。吾人の記憶する所によれば、婦人參政權が始めて各國に認められた年期は、歐洲大戰終結後であるものが最も多い。即ちニユウジランドの一八九三年と、濠洲の一九〇二年と、フヰンランドの一九〇六年とノオルウエイの一九〇七年其他とは、それのずつと早い時期に屬するものであるが、デンマルクの一九一五年を始めとして、歐洲諸國に女子參政權の許されたのは、大體一九一七年、一九一八年から一九二〇年に及ぶものである。たとへばドイツも、イギリスも、一九一八年に參政權が始めて承認された。そして一九二三年において、歐洲における婦人議員は、ドイツ卅六名チエク・スロバキヤが十六名、イギリスが八名、オランダが七名、その外勞農政府にも多數の婦人議員があり、アメリカには

[illegible]に、すでに納税する婦人に、市町村の選擧權と云ふ事を[illegible]へてをり、デンマークもまたそれに次いだ。また米國合衆國には一八六九年に、ワイオミング州で、一番始めに、女性に男性と同樣な選擧權を許したが、その他の諸州これに相次ぎ、一九一七年には、ニユウヨオク州でも愈よ女子選擧權が認められた。そして一九一九年までには、三十州の婦人が已に完備選擧權を占め得た。その當然の大勢として、この各州の婦選權利を、中央政府が果して認めるか否かの疑問が議會に提出され、一九二〇年六月には、それが上下兩院によつて立派に可決され通過した。即ち一九二〇年において、米國憲法第十九條修正の結果は、婦人が、中央議會及び州議會の議員たる資格及び、その議員の選擧において、全く男子と同等な權利を獲得することとなつた。そこで現時にあつては世界文明國の中で、女子參政權を認めて居ない國が、たゞ一つのフランスを除すのみとなつた。そこでは、一九一九年に下院を通過しただけでその儘になつて居る。それがかつて、コンドルセイとルツソオと、オリンプ・ド・グウジユを出したフランスであるから、いかにも皮肉である。かつて一七九〇年の早い時代に、性の差別によつて、人類を差別するのいはれの無い事を力說し、人類の權利とは、常識があ[illegible]に過ぎない。[illegible]同樣、この[illegible]へて居る、然らば[illegible]に對して、[illegible]の權利を與ふる事も、少しも不思議で無いではないかと[illegible]したのは、實に彼れコンドルセイではなかつたか。また婦人の權利と云ふだけでは慊らない。それは男性と女性とを合一したところの、國民の主權と人權を認めることで無ければならない。然るにこれまで人權と言ふ言葉は、單に男子の權利を宣言したものに過ぎない、それでは可かぬ。婦人はどこまでも社會的にも、政治的にも、同等であることを要求すると云ひ、法律は、あらゆる人類に對して平等であらねばならない。女性もまた絞首臺に上るべき權利を有する以上、彼女はまた、同時に、執政官たるの權利を有するものだと揚言したのは、實にオリンプ・ド・グウジユでなければならぬ、そして彼女自身は、一七九三年に、ギロチン臺上の露と消えて了つた。

女子參政權の價値

そこで、婦人が政治に參加するの使命は何であるか。その意義がどこにあるか。それは第一に、女性自身の福利である。第二に、男性の爲の福利である。第三に、家族の爲の福利であ

る。第四に、國家の爲めの福利である。この四箇條言は、婦人參政の原理として、最も重要な約束を持つものでなければならぬ。

先づ婦人自身の福利とは何であるか。女性は選擧權を護ることによつて、その心的、乃至道德的限界を擴大し、それによつて、社會人としての、また家庭人としての、公的義務の全面を知ることが出來るであらう。義務の自覺は責任を賦へる。女性の社會人としての生長は、社會と家族に負ふこの責任を知るよりも、より重大な知識が他にないのである。

次に婦人參政權は、何故に男性の福利であるか。男性の政治知識はいかに廣汎であるにせよ。黨利に囚はれ、または私利に囚はれる事を時に免れ得ない。男性の政治家が、多く政治を職業とし、その職業に衣食する結果は、彼等をして、政治を立身出世の手段視せしめる。こゝに不正な權力の占奪欲が起る。然るに女性にあつては、生活の手段として、政治界に入ろうとする者が無い。故に、女性が、男性ほどに理性的で有り得ない缺點はあつても、同時に、男性の如き、道德的腐敗を、政治に浸潤する如きことは萬有り得ない、かへつて女性の直覺力は、それに知識の修煉を加へることによつて、現象の眞實を、端的に把握する機能が、男性よりも發達するであらう。そして、少なくとも、女性が男性の道德義務に對して、絕えざる監視を加うる事によつて、男性統治の政治的腐敗を一掃する事がまた何ほどかでも望み得られるであらう。

何故に婦人の選擧權獲得が、家庭の福利となり得るか。婦人は家庭の君主である。然るにかゝはらず、現代までの家庭は、男性が專制の君主であつた。現代の民衆政治は、デモクラシイを要求する。家庭にあつてひとりデモクラシイが閉された。が、社會は大きな家庭である。家庭は小さな社會である。そして民衆は社會に屬し、また同時に家庭に屬する。然るに、社會にあつてデモクラシイであるものが、家庭にあつて非デモクラシイである事は有り得ない。かくして家族にあつても、その成員のすべてが、平等な人權の下に、平等な生活を許され得る世界であつて、始めて社會の民衆化は望まれる。かくて婦人は、家族の社會化の修煉のためにも、また參政が望まれねばならぬ。も一つは、子女の感化である。その子女の第二次の世界をして、正義の社會と政治を作らしめる爲めには、單に父親が社會政治の卓見を有するに止まらず、母親もまた同樣の正義と見識を持たねばならぬ。最も多くの時間を子女に接觸するものは、現代においては、父親よりも母親であるからである。

第四に、國家と社會は、婦人の參政を要求する。國家はその妥當な存在と、活力に滿ちた飛躍を欲する故に、男性の努力

への[illegible]没入したい世界で、女性の健全な發達と、[illegible]特に有用とする部分がある。教育である、[illegible]人の[illegible]及び健康狀態である。食物の調理法である。兒童勞働者である。酒精販賣である。社會的罪惡である。戰爭である。その他の等、等、等は、特に婦人の政治社會への浸潤によつて、その改良と、害毒の除去を期待し得る種類のものでなければならぬ。

斯くの如く見て來る時、女性の參政權は、單に女性自身における。公民權と人權平等の滿足のみで與へられるものでない事が明白になる。それは、どこまでも、さうした消極的なものでは無くて、もつと積極的な、人類全體の利福の爲に與へらるべきものでなければならぬ。思ふに、この女性參政の公理に對しては、もはや何人も異論を挿み得ないのであり、また挿む事を許さないものであらう。

然るに關らず、多くの異論が挿まれる。たとへば、グウジュと同時代人であつたミラボオは云ふ。「男性と女性とは、全く先天的に特殊な役目を勤めるべく生れて來たものである。從つて社會の狀態に對して、同一の働らきをする事が出來ない。斯くして永久の自然理法は、彼等女性に向つて、彼等がお互に、自分の違つた機能に自覺し、共同の目的に協力して行くことを命[illegible]

ドイツの[illegible]たその社會[illegible]の中に、こゝに出現して[illegible]ば、政治の第一職分は、[illegible]に内外の敵を防ぐにある。[illegible]くて數千年來、軍隊と裁判所とに統治權が存在する、然るに女性は本質として兵士と政治家にはなり得ない。さらばまた、裁判官たり、議員たり、大臣たり、長官たる事もまた不可能である。女性の自然の職能は、たゞ家政と育兒にあり、この二つの職能は、個人及び公衆の安寧幸福を增進するにおいて、極めて重要であり、同時に極めて困難なことで、それが大いなる使命を要することは、決して男性の職能に劣らぬものである。然るに女性にして、その重要な職能を棄て、政治家たることも、軍人たることも出來ない女性にして、政治界に侵入しようとするは、全く女性の天稟を傷なひ、かつそれに反逆せしめるものでなければならぬ云々

思ふに多くの女性參政批難は、現代においても、この點に論點が最も多く集められて居るらしい。しかし、そこには重大な二つの見逃がしがある。第一は政治思想に對する既成觀念の錯誤である。第二は、現代家庭組織と、過去——家庭組織の變動の見逃がしである。その故いかん。凡そ世界國家の成立には、も

ともと掠奪國家が最も多い。かの政略に富んだ掠奪者等は、自己の掠奪した權力を、容易に他の掠奪者の爲に奪はれまいために、政治機關そのものを、非常な特異なものとし、神權的なものとし、、またその機構を非常に超越した高尚なもののやうに裝飾した。そしてその機構に參加するものは、何か特殊な伎倆と能力を具へたものかのやうに錯感せしめた。それによつて、被支配者の接觸を防ぎ、被支配者を、永久の從屬者たらしめることにやゝ成功した。が、それは一つのからくりに過ぎない。政治は要するに、全人類の生活法の處務に過ぎない。決してそんな超越的なものでも、また超民衆的なものでも有り得ない。それが全人類の生活様式の處務である限り、全人類の自由參加によつて、始めて全人類の生活が、ますます良き途に進むのである。從つて全人類は、それに對して全責任を持つと共に、全義務を有する。故に參政權を、與へるか、否かの撰擇をゆるすものでは無い。ただ誰でもが參加し、義務として參加せねばならぬものである。そしてそれはまた、何か超人的な才能を要するやうな、神秘な機關でも何でも有り得ない。たゞ適當に教養された民衆が、相互の知識、教養の程度に順應して、それぞれ管掌すべき職務を分有すべきであり、また分有し得るのである。石工は石工の經驗について述べ、大工は大工の生活について說く、ギリシヤの民主政治こそは、直ちに政治そのものの生態なのである。不幸にして現代までの政治機關は、既成の狀態をその儘に蹈襲して居る。そこで議員たり、政治參加の仕事が非常に煩らわしい職能であり、また、非常に特殊なものに思惟されるのである。かつこの儼然たる、支配被支配に分類された既成意識が、まだ彼等の頭腦に偶像として殘つて居る結果である。もしさうでは無く、政治を極めて平易な日常生活様式だと思ひ直す時には、違つた狀態が直ぐ網膜の中に浮び出でねばならぬ。即ち誰でもが政治に參加して、政治權力が少數特殊政治家の手から奪はれた曉には、それが改めて全人類の有の上に殘らず振り分けられる。かくしてその曉の政治は、もう日常の平凡な一事務であると同時に、一人當りがそれに負ふ責任額は、全人類の全額と比率する故に極めて少なくなる。それぐらゐの少額な責任と義務とは、何人も厭はずに服務する事が出來るであらう。その曉の政治は、もう今日考へられるやうな、臆劫な、もしくは物々しいものでは斷じて有り得ない。また何人がそれに參加しても、それによつてその人々の利福を多大にする約束はあれ、それ等の天賦と生活を、犠牲にせしめるやうな危險は少しでもあり得ぬのである。故に婦人參政は、極めて當然な義務であると共に、女性の本質を沒却するものだとして、

る。

次に、女性に家庭と育兒に還れと云ふ。けれども現代の家庭と育兒は、政治及び社會を度外視しては、何一つの結果をもたらし得ないのである。なぜなら現代では、子供を教育する教育機關も、家庭を統治する家事組織も、みな過去の自足自給の時代を去つて、より大きな公共機關、社會機關の手に移されつゝ行くからだ。かくて女性が、家庭に眼を深く向けようとすればするほど、なほ強く社會と公共に眼を向けねばならない。たとへば一つの家庭にいかなる缺陷があつても、それは一つの家庭の手のみでは、どう處分もし得ない世界なのである。消費機構、生產機構が、みなさうした仕向けに向つて居る。さて、そのすべての機構を組織するものは何か。政治である。それでも猶ほ政治に眼を閉ぢよと云ふのは、家庭と育兒の生活を女性に中止せよと命令すると同じ意義になる。かくてもなほ、女性の參政は不合理であると斷案されるであらうか。

もしそれ日本の既成政治家のように、自分の手で女子教養の一切の機關を閉いで居ながら、女性教養の薄弱であることを言ひ譯として、女子の參政を拒むに至つては、殆んど健全な頭腦の所有者であるか、いなかを疑ひたくなる。

のである。女性は政治的な何ものをも要求してはゐない。

として、政治に關して、女性を煩はす必要はない。彼等がたとへ選擧權を與へたにしても、それを行使する方法を知らないであらう……とは、よく言はれる言葉であるが、それは眞實でない。また、未だ尚早だとは定められないのである。それはまた女性がこれまで、政治に何等の興味をも感じなかつたと云ふ事を決定する何等の根據にもなり得無い。また女性がこれまで、公共的事件の道程に飛び込み、それについて苦勞しなかつた事實が、彼等が、それをしてはならぬと云ふ何等の證據にはならないのである。この同一の事情は、かつての男性にすらも適用され得るでは無いか。即ちこの女子參政に對する反對論は、ドイツにおいて、かつては男性普選の擴張に對しても行はれた。けれども、一八六七年の普選承認が、一般の下に凡ての反對を絶滅せしめた。自分も一八六三年には、確かに普選反對の高調者の一人であつた。が、四年後に自分が帝國議會に選擧されたのは、實にこの普選に負うことが多大だつたのである。同一の事例が無數に起る。で、政治教育は、大衆を、公的事件から追ひ出すことによつて成り立たずに、却つて、彼等をして、政治的利權を行使せしめ、それを承認することによつて完成する。實際のみが

完全に到着する途だ。無産階級と婦人のみが、なぜそれから取り除けにならぬかの理由がどこにあるか。女性をして、政治的權利を獲得せしめよ、彼等は直ちに、政治的義務の自覺に目さめるであらう。そしてそれは、女性の生活に、全たく新らしい刺戟を與へるであらう。かくして、個人の利福と、最も密接に交渉する公共の利福に關し、男女兩性が協調して働らいた効果はいかん。最高の道徳的感化がそこに生れる。それは、あらゆるものの平等に反對する一輩、もしくは近視者流が豫想したものとは、全たく反對の結果を見ることになるであらうと。

女子の職業問題

女性の參政運動が、廣い意味の文化運動と呼ばれるのに對して、勞働婦人運動は、經濟組織の上から、社會構成の革新を目さすものである。が、それ等の最終の目的がたとへ何であるにせよ、資本主義經濟の行き詰りと爛熟とは、貧民の數を刻々に多くして、婦人を、家庭から工場へ追ひ込む趨勢を激烈に刺戟しつゝある。即ちわが大正十二年末社會局の統計によればわが國女性勞働者の總計は百二十五萬九千五百三人であり、中、工場勞働者が八十五萬六千百八十一人、鑛山勞働者が、七萬一千三百四十九人、其他の勞働者が、三十三萬一千九百七十二人と云う內譯になつて居る。但し「その他の勞働者」の內譯を調査すべき、細密な統計表が座右に無いので何とも云へないが、それはいわゆる機械勞働者を除外したところの、頭腦勞働者をも含むのであろうか。それにすれば、これを英國米國のそれに比較する時には、殆んど比率にならないのである。尤とも、職業婦人が社會の注目を呼んだのは、わが國では近年のことである。機械勞働者の女性侵入は、それに比べれば極めて早期な歷史を持つものであるが、それも頭腦勞働の婦人が盛んに出て來て、職業問題が多少とも筆で、舌で叫ばれるに至つて、始めて最多數を占める機械勞働者の生活も、ようやくいくらか社會の注意を集めて來たと云う譯である。何にしても、わが國の婦人職業問題は、英米その他の諸國に比べてまだ黎明である。だからその社會に及ぼす效果及び、女性全體の生活と、家族生活が拵うべき變化狀態などについても、それを決定すべき材料は、まだ容易に知ることが出來ないのである。これが即ちわが國において、女子職業問題の混沌たる所以であるし、またその歸趨が容易に判斷されない理由でもある。たゞ決定され得るのは、女性もまた室外を出でて、職業に從事すべき必要を、現代經濟組織が要求しつゝある一の鐵案だけである。だから、この經濟組織の變遷に目を向けずに、單に婦人家庭論

[illegible]い。もし、各國それぞれに違つた事情があり、殊に[illegible]も、一概に律することが出來ない。たとへば、アメリカでは、職業があまり豐富過ぎて、女性さへも出て働らかねば、男性だけでは始末しきれないのに反し、日本とドイツとは、女性の仕事が、それほど豐富だといへないのに係はらず、家庭經濟の壓迫が女性をさへすらも、工場や、教室で勞働せねばならぬと云ふ如き事情もある。また、アメリカでは、男性に比して女性の數が少ない故に、女性を充分に家庭に收容し得る餘裕があるのに反して、イギリスでは、女性が男性に比べて、約二百萬人の過剩があり、若い女性の妻たり得る可能性が投機である故に、止むを得ず、戸外に出て勞働に投ずると云うごときそれである。が、それは何であれ、歐米の女性職業問題は、已に長い間の經驗を經て居る故に、その必然性をも、また缺陷をも或る點まで體驗して居る。故に日本の女性職業を考察する場合には、どうしてもそれらの經驗先進國に顧みて、彼等が、女性の職業機構について、何を云いつゝあるかを知ることが一つの必要である。

先づイギリスの側から云へば、一九二一年において、イングランドとウエイルスの總人口三千七百八十八萬五千二百四十二[illegible]中、四百廿萬二千五百六十八人が、十二歳以上の[illegible]に、殘余の一千五百五十萬一千九百十四人が、十二歳以上の女性の總數である。更にこれを細別すれば、結婚者、寡婦及び離婚者が九百七萬五千三十八人、獨身者が、六百四十萬三千九百十六人である。その中で、百十萬六千四百三十三人の既婚者と、三百九十一萬四千百二十七人の獨身婦人が、何等かの勞働に從事して居る。即ち合計五百二萬五百六十人の女性が、勞働婦人であるわけなので、中三百萬人は、專ら産業組織の方面に從事したものであつた。そしてこの勞働婦人の數量は、毎年增すとも、決して減少する見込みが無いと云はれる。

次にアメリカでは、一九一〇年のアメリカ政府の統計が、そこに八百七萬五千七百七十二人の女性勞働者があると云はれたものが、一九二〇年の統計では、一千二百萬人と云ふ驚ろくべき增額を示して居る。しかも、それが、いくらか内輪に見積つたものだと云ふのだからなを驚ろく、即ち一九二〇年の統計によれば、國民の三分の一が、何等かの、職業に從事して居る女性である事を示して居るのである。そこでファナアド・メルツクスは結論する。普通の狀態において、アメリカの男性が家族を養うだけの、充分な賃銀を獲て居るのだとすると、今まで更に

女性の賃銀獲得によつて、一般的の生活標準が、三分の一だけ更に高價になつて行くわけであると。

けれども、その理由が、家庭經濟の壓迫であると、男性の專制から逃れる爲の獨立の手段であると、もしくは萬一の家族の災禍を救ふべき豫備行動たるとのいかんを問はず、自分は、女性職業の必然性は、まことに止み得ない趨勢だとして置く。たゞその經路から起る缺陷について批難を敢てするものが、他方において、相應に多數であることは注意すべきものである。それは多少試驗濟みの形になつて居るところの英米の實驗に徴することによつて、女性職業の後進國たる日本の進路を、いくらかでも幸福にして行く手だすけになるかも知れない。そしてそれは、少しでも、女性職業の妥當性を否定することでなくして、却つてその妥當性を完全圓滿にする爲の上からである。尤とも、こんな事は一つの姑息な膏藥張りに過ぎない。勞働女性組織の新生命は、こうした漸進改良主義の中から決して生れない。即ち勞働組織から來る勞働女性の缺陷が、現在においてたとへ何であるにせよ。それは勞働女性が現在に置かれて居る、その環境の全的改造においてのみ、始めて醇化と生命化が望まれるのであると云はゞ、それはもう議論の無い話である。そうして現代の勞働婦人は、みなその一點を目さして努力して居るのだと云うならば、それはたゞ別問題である。われ等はこゝでたゞ女性勞働先進國が經過しつゝある勞働女性の歷史及生活に對して、どうした評價を與へつゝあるかの一面を眺めようとするに止まるのである。

その批難の或るものは、女性勞働者のなだれ込みによるところの、性の壞亂と結婚離婚の頻出である。たとへばイギリスやドイツにおいて、女性が男性に對する數の超過によつて、職業界に溢れ出すとする。一方において、男女兩性の僅かな收入は、容易に家族を作る婚資を得ることが出來ない。そこで晩婚になる。その間において、本能的な性の刺激を、兩性が如何に調攝するであらうか。即ち男性にあつては、賣笑婦が止み得さる排泄機關であり。また未婚者たる兩性の間においては、諸種の亂倫と不貞が行はれさるを得ないことになる。次に、女性が男性よりも超過して、家庭に入り得る機會が少ないか、もしくは、年齡が段々と老けて來るについて、女性は、どうしても結婚を急がねばならなくなる。そこで行き當りばつたりに、どんな機會をでも取り外すまいとする。それが自分の運命に、どんな不幸を持來すものであるか、それとも幸福なものであるか、そんな事を考へて居る餘地がないのである。たゞ慌てゝ摑まうとする。從つてそんな手段の家庭が、どうしたつて幸福に、

[illegible]

患をいだく。その不滿を、或ひは他の方法によりよらうとする自然の要求が、勢ひ、多くの性的問題を、談話及び法律の上に現はして來るのである。殊にイギリスにおける女性人口の超過が、一生を老嬢に終らする無數の女性達に對して、心的に、體的に、性的にどんな病的な傾向を壓迫しつゝあるかは、アンソニー・ルドヴヰシが、縷説して止まざるものである。

次に、アメリカにおける女性職業者の増加は、勢ひ、無理に多量の生産を強要する。つまり必らずしも、民衆の必要でないものをも、供給と引合はせに生産する結果になると云ふ意見も、また一考すべきものである。それは供給と需要の均衡を破壞するばかりでなく、奢侈品の生産を多額にするために、國民の浪費を極端にする。

また女性職業に對する最も多くの非難は、家庭の破壞と云ふ事が可なり有力である。夫婦が戸外に出て勞働する故に、兒童が充分な教養と慈愛を求めることが出來ない。さうした家庭から送り出されるものが、現代社會の一現象たる不良少年少女であると云ふこと。また、もつと細かい家庭事務においては、ロンドンの中流もしくは下層家庭では、もう昔のやうに、貧しい材料を巧みに工夫した旨い料理、もしくは、質素な材料を、美

[illegible]

[illegible]にならするやうになつて、日々、[illegible]や、其他[illegible]に對する[illegible]がいちじるしく[illegible]したからである。で、口に入りさへすれば何でも食べる。然くさへ無ければ何でも着る。かくて女性に趣味が忘れられた世界ほど索漠たるものがなく、兩親に、子供の慈愛が取拂はれた家庭ほど、荒涼たるものがないと云ふのだ。殊にルドヴヰッシは、イギリスの勞動女性が、子供に母乳を與へずに、牛乳羊乳を與へ、また嬰兒委託所で、自分の乳でない他人の母乳もしくは牛乳を與へる一般の風習を攻撃して、まことの母性の肉體から生む人乳こそは、その母と子を繋ぐ自然の最も微妙な創造だ。人類に、この哺乳の美風が失はれた世紀は、即ち人類の天才と叡智が失はれた時代であることを悟らねばならぬとまでいきまく。

その他、勞働の痛苦と、事務の單調が、女性の心理や肉體に及ぼす傷ましい影響について、または、女性の男性化、女性の極端女性化から來る娼婦性、職業婦人の母性保護等、等、論ぜられ議せられて居るものは無數であるが、もう相當長くなつたこの慌たゞしい小論文は、この上細説することを許さない。それは現代から將來に亘りつゝある、無産階級婦人の社會運動状態と共に、こゝにはすべて省略することとする。（完）

日本勞働運動史

澤田　謙

一　勞働運動と勞働組合　日本の勞働運動を動かすものは、五百の勞働組合、二十萬の組織勞働者である。これを勞働者の總數、四百十六萬餘に比すれば、百分の五にも過ぎぬ。『勞働組合法』すらない日本の現狀としては、やむをえぬことかも知れぬが、歐米諸國の現勢に對比して、まことに心細いほどの少數である。

しかしながら、この數字の比は、かならずしも、勢力の比ではない。日本の勞働運動は、まだ『先覺者運動』の域を脱してゐない。勞働問題について、中心となつて動くのは、いつでもこの少數の組合勞働者で、非組織勞働者の運動は陰に陽に、勞働組合の指導と援助をうけて動いてゐることは、たび〳〵の勞働爭議に明らかな事實である。他の諸國にみるやうな、組織勞働者と非組織勞働者との鬪爭などは、その例が甚だすくない。

だから、日本の勞働運動の趨勢を識る鍵は、勞働組合の歴史と現勢とにあるのである。

二　日本勞働組合の三大系統　日本の勞働組合には、普通、三つの系統があるといはれてゐる。總同盟系、反總同盟系、中立系。これである。

最も組合員數の多いのは、中立系の組合である。なかにも、『海軍勞働組合聯合』のごときは、大正十三年の國際勞働代表を選出するについて、遽てゝ組織したものであるが、組合員は四萬を越え、數においては日本一の勞働組合である。それから、『日本海員組合』（約二萬三千）その他の海上勞働團體が、やはり約四萬の組合員を擁し、おほくは中立系に屬してゐる。そのほか『官業勞働總同盟』『陸軍工廠勞働組合同盟會』『中部勞働聯合組合會』などが、中立系の主なものである。

これに比べると『日本勞働總同盟』は、その數において、到底及ばない。關東勞働同盟會、關西勞働同盟會、全日本鑛夫總聯合會、その全部をあはせて、組合員數は三萬五千にすぎない。しかしながら、日本の勞働運動の主流は、依然として總同

第一に、現に中立系と目するものの大部分が、總同盟の支流的位置であることだ。ことに日本海員組合や日本農民組合などは、その成立の沿革上、總同盟の出店であるくらゐの親密にあり、官業勞働團體も、最近いちじるしく親交を増した。だから、中立系とはいふものの、勞働運動の傾向は、總同盟の主流に投合するものである。

第二に、基礎が堅固で、活動力の旺盛なことだ。たとへば、大正十二年、勞働團體の干與した罷業（一〇一件）のうち、六割以上（六二件）は、總同盟の干與したものであり、罷業にいたらずして解決したものを加へて、總同盟の爭議干與件數は百三十三件に達し、他のすべての團體の干與件數の二倍以上にのぼつてゐる。ことに、總同盟が、その成立以來、直接間接に敎育した勞働者は、その數約二十萬と稱せられ、それが日本の勞働運動を動かす力は、偉大なものである。

第三に、その背景と連絡との大きいことだ。いはゆる思想家やその團體の支持は、總同盟の威容を盛にするもので、その無形の力が、やがて『輿論』の形式をとるとき、總同盟を、勞働運動の本流的地位におくものである。

最後に反總同盟系の主なものは、『機械勞働組合聯合會』、『印[illegible]

[illegible]合は、[illegible]

總同盟系は、組合員數こそ最少で、したがつて[illegible]をなすことはできないが、その[illegible]と[illegible]作用とに、日本の勞働運動に、相當の勢力を扶つてゐる。ことに左翼派の闘將『信友會』が、サンディカリズムを掲げて、總同盟に肉迫し、一時日本の勞働運動を指導してゐたことは、勞働運動史上の偉觀であつた。この信友會の系ゆる組合が、反總同盟系中の左翼運動である。それから、右翼運動としては、いまだ勞資協調主義から離れえない『大阪鐵工組合』が中心となつて、日本勞働組合聯合をつくつてゐる。

すなはち、大體について觀察するならば、日本の勞働運動は、總同盟とその友誼團體が、本流をなすもので、それに信友會系の小數左翼派と、大阪鐵工組合系の小數右翼派とが、兩側から宗制しながら、除々に進行しつゝあるものといへる。兩極が、反總同盟系として結びついてゐるのは、從來の行き懸りや感情問題が、主なるものである。

三 日本勞働運動史上の六時期 日本の勞働運動は、今日までに、約四十年の歴史を經過したのであるが、この短い過程も、一氣に進行したのではなく、繼續的な、跳躍的な、そして

性急な足取りで進んできたものである。その社會思想に波瀾が多かつたごとく、勞働運動も、いろ〳〵の曲折を經てきた。大體において、社會思想を中心とすれば、日本の勞働運動は、六時期にわかつことができる。

第一期は、明治十六年から明治二十七年にいたる十二年間で、主として『自由黨』の活躍した時代である。これを『自由民權論時代』となづける。第二期は、明治二十七年から三十三年にいたる七年間で、『職工義友會』の指導せる時代である。これを『啓蒙主義時代』といふ。明治三十三年、治安警察法の發布から、明治の末年にいたる十二年間は、勞働運動の暗黒時代で、官憲の壓迫のため、勞働組合はまつたく屏息し、勞働者の社會不滿は、勞働暴動の頻發となつてあらはれた。これを第三期『勞働暴動時代』といふ。

大正元年から七年にかけて、勞働運動は、復活の兆を示した。そして時代思想たる民本主義に應じて、勞働運動は、おほく社會改良主義に左袒した。これを第四期『民本主義時代』といふ。大正八年にいたつて、勞働運動は、異常な跳躍を示した。そして社會主義思想が、勞働組合内部に染透し、勞働運動は、理想に馳せきた左傾した。この大正十年にいたる三年間を、第五期『社會主義時代』といふ。最後に、大正十一年にいたつて、勞働運動の方向轉換が叫ばれ、しだいに、社會主義の理論的拘束から離れ、勞働組合の本分を自覺するやうになつた。したがつて、勞働運動も、いちじるしく現實化してきた。これを第六期『勞働組合主義の時代』といふ。

以下、この六時期について、簡短に解説する。

第一期　自由民權論時代

——明治十六年車界黨の成立より明治二十七年
日清戰爭に至る十二年間——

四『車界黨』明治十六年に、『車界黨』といふものができた。これが、日本で最初の勞働運動といふことになつてゐる。尤も、『車界黨』といふと大きいが、自由黨の領袖、大井憲太郎の抱車夫、三浦亀吉の肝煎でできた、失業車夫の馬車鐵道反對同盟會の流れで、自由黨の奥宮健之や、伊藤仁太郎が、神田明神山に、失業車夫三百名を糾合して、馬車鐵道廢止の演説會をやつたぐらゐのところが落であつた。ほんとの勞働運動といふのではない。それに、やつと實際運動になりかけたときには、政府の壓迫の手がのびて、車界黨の主動者であつた奥宮健之が、名古屋事件に連座して投獄さるゝとともに、この運動は自然たち消えになつてしまつた。

たこ[illegible]

く『[illegible]』に[illegible]間でも何でもない。明治十六年といへば、西暦の一八八三年で、倫敦に「國際労働者協會」の大會が開かれて、カール・マルクスが、有名な『宣言』を朗讀したときから、丁度二十年目にあたるから、當時舶來品全盛の日本に、まぎれこんだ名前を、一寸拝借したものと思はれる。いまから考へると、自由黨の壮士が、『車界黨』などといつて、労働運動の首動者になつたなどは、いささか滑稽じみてゐるが、それが滑稽でもなんでもなかつたところに、明治十年代の日本の時勢があるのである。

五　東洋自由黨　當時は板垣退助などが、ルソー直譯の『自由民權論』で、全國を遊説してまはり、自由黨といへば、青年客氣の渇仰の的となつてゐたところで、自由黨もまた、貧民弱者の味方をもつて任じてゐた。だから、當時の労働運動といへば、かならずその背後に、自由黨員の影が動いてゐたものである。つまり、労働運動といつても、資本階級に對する労働階級の經濟運動ではなくて、一種の急進的政治運動の延長にすぎない。

　ところが、明治二十二年になると、徳富蘇峰の『國民の友』が創刊される。これが新思想の急先鋒で、創刊號から、ヘン[illegible]治二十三年の七月には、[illegible]所は、[illegible]なし、……一日事ある時に於ては、[illegible]作すの用意を爲すべし」と説いて、日本の思想界にも、労働運動といふものが、やゝ解つて來た。加ふるに、明治二十一年には、九州高島炭坑に、坑夫虐待事件があり、翌二十二年には、横濱外人製茶工場の紛擾があり、労働問題は、やうやく世の注目を惹くやうになつた。

　當時『あづま新聞』や『新東洋』に據つて、無産階級のために氣を吐きつゝあつた、自由黨左党の大井憲太郎一派が、『東洋自由黨』をたてたのは、この機を捉へたものであつた。東洋自由黨は、「特に貧民労働者の保護をなす事」といふのを綱領とするだけあつて、結黨すると同時に、すぐ黨の事務所に「日本労働協會」といふ看板をあげた。しかし結局、東京鍛工協會を動かして、明治二十五年の議會に、蓆旗を押し立てゝ請願させたり、洲崎にでかけて車夫の團結を計つたりしたくらゐで、ほんとの労働運動にはなれなかつた。

六　印刷工と鐵工　かくの如く、當時の労働運動といへば、たいてい政治運動の反映にすぎなかつたが、その間にも、

勞働者の勞働組合がなかつたわけではない。先驅者は印刷工と鐵工とであつた。しかしいづれも、成長するまもなく消滅してしまつた。

印刷工の組合計劃は、明治十七年からはじまつてゐる。しかし、印刷工内部の無理解な反對で、ものにならずにしまつた。明治二十二年に復活しかけたが、再び失敗し、明治二十三年には、活版印刷工同志會の第一回總會を、京橋の厚生館で開き、千五百の會衆を集めるところまで漕ぎつけたが、會費の使途について內訌を生じ、空しく解散してしまつた。

鐵工の方は、明治二十年から組合運動が起つて、二月二十四日には、兩國の井生村樓で、組合組織の相談會を開いた。ところが相談會の中頃から賭博がはじまつて、相談もなにもかもお流れとなつたのはよいが、散會後連れ立つて遊廓に繰りこみ、三日も四日も流連したといふやうな始末で、以來相談會があるといへば女房連の大反對をうけるし、やうやく明治二十二年に『同盟進工組』ができたと思つたら、積立金問題で、まもなく解散してしまつた。

第二期　啓蒙主義時代

——日清戰爭より明治三十三年治安警察法發布に至る七年間——

七　日清戰爭と勞働運動　およそ勞働運動は、資本主義と運命をともにする。第一期の勞働運動が、變態的で未熟に終つたのは、當時の資本主義が、未熟であつた結果である。ところがその日本の資本主義に、飛躍的な發達を見せる時機がきた。日清戰爭がそれである。

日清戰爭の前まで、支那の西大后は、英國のエリザベス女皇とならべて、世界の二大女王といはれたものだ。その支那に勝つた。臺灣は取るし朝鮮は勢力範圍になる。二億兩の償金は入る。非常な景氣だ。企業熱は極度まで煽られ、會社や工場が族生する。産業は振興する。それに伴つて、賃銀勞働者は激增する。どうしたつて、勞働問題が起らざるをえない。戰前一億にすぎなかつた株式會社資本が二億近くなり、六千三百萬圓の銀行資本が一躍して二億一千萬圓になつた。日本の勞働運動は、これによつて勃興の基礎をえたのである。

八　勞働組合期成會　勃興の基礎はえても、勞働者の自覺がなくては、勞働運動は起らない。そこに啓蒙運動が必要である。この啓蒙運動を起したのが、明治二十九年の末に、米國桑港から歸朝した、城常太郎、高野房太郎、澤田半之助など、十名ばかりの勞働者であつた。かれらは、歐米の勞働運動を直接に見聞して、日本にも、勞働組合を起さなくてはならぬといふ

[illegible]

に寄す」といふ長文の宣言書を、[illegible]各工場に配布したが

六月二十五日の夜、神田の靑年會館で、日本最初の勞働問題演說會が開かれた。これは職工義友會の主催である。聽衆は千二百餘名に達し、すこぶる盛會であつた。その結果組織されたのが、「勞働組合期成會」である。第一期の勞働運動は、直接間接に、期成會に指導されて、發達したものである。

期成會には、片山潛、鈴木純一郞、佐久間貞一、島田三郞、松村介石などといふ、知識階級の人々も、最初から關係してゐた。

期成會が、日本の勞働運動に貢獻した使命は、宣傳によつて勞働者を啓蒙することであつた。だから、七月下旬、日本「池の尾」で發起人會を開くや、ただちに第二回の公開演說會を靑年會館に催し、以來勢に乘じて、月二回以上、東京橫濱の各所に演說を開くことになつた。

十二月一日には、片山潛が編輯部長となつて、日本最初の勞働雜誌『勞働世界』が發刊された。

翌三十一年の夏、期成會は、この宣傳運動を全國的にするために、宣傳隊を組織して、第一回は關東、東北地方を巡遊し、第二回は長野北海道を廻つた。これらの宣傳が、日本勞働運動に[illegible]

九　鐵工・活版工・機關手

[illegible]

に盡力をつくすとともに、[illegible]組合の援助と[illegible]の關係せざりし組合はすくなくない。

期成會の運動に應じて、直ちに立つたのは鐵工組合であつた。明治三十年十二月一日、砲兵工廠の職工を中心として、靑年會館に發會式を擧げた。以來急速な發達をとげ、翌三十一年には、遠く支部を、橫須賀・[illegible]・靑森・北海道の各地に設け、三十二年には、組合員五千四百名を算へた。その幹部が、主として期成會の人々であつたことは、いふまでもない。

次は活版工である。期成會が、明治三十年七月、靑年會館で大演說會を開いたとき、來會者に活版工が多かつたので、期成會は、以來活版工に着目し、絕えず宣傳敎育を怠らなかつた。その結果、三十一年三月二十二日は、兩國[illegible]川の活版工百餘名によつて、「活版工同志懇話會」が成立することとなつた。この懇話會は、成立早々資本家に睨まれて、幹部が解雇となり、一時衰微を來したが、以來活版工と期成會は、密接な關係を持續した。尤も、懇話會が解散して、「活版工組合」となり、金井延、桑田熊藏などの勞資協調主義に走つたとき、一時期成會との關係

は疏遠となつたが、まもなく活版工組合が衰へて、三十二年五月、その殘黨が『誠友會』を組織するや、期成會との關係も復活した。誠友會は、明治三十七年ごろまで、健實な發達をつゞけた。

　期成會と密接な關係をもつ組合に、『矯正會』がある。これは、明治三十一年二月の日本鐵道機關手の大同盟罷工の結果生れたもので、機關手のやうな、各地各驛に散在する、したがつて集會の便なき勞働者が、會社の壓迫の下にありながら、秘密運動によつて連絡し、よく罷業に勝利を得、かつ有力な勞働組合をつくつたことは、當時としては奇蹟的である。期成會は、二回に亙る東北地方の遊說によつて、この矯正會との友誼を厚ふし、一方その發達に力を注いだので、明治三十二年には、矯正會は、一千名の會員と、一萬圓の積立金とをもつて、堂々たる勞働組合となつた。

第三期　勞働暴動時代

—明治三十三年治安警察法の發布より明治末年にいたる十二年間—

一〇　治安警察法の發布　かくのごとく、日清戰爭以來、わが國資本主義の發達と、勞働組合期成會の努力とによつて、わが國の勞働運動は、やゝ順調に發達したのであるが、これも明治三十三年の三月に發布された『治安警察法』を轉機として、中絕するにいたつた。

　治安警察法は、現在でも問題になつてゐるが、當初から勞働運動を抑壓する目的ではなく、政治運動取締のために、發布されたものである。しかるに、當時無識な官僚心理では、勞働運動も一種の政治運動くらゐに思つたのであらう。そのなかに、勞働運動を壓迫するやうな一項が挿入された。そこで、當時勞働運動の將帥たりし期成會は、たゞちにこれが反對運動をおこし、『勞働世界』のごときは、堂々反對の論陣を張つたのであるが、『國威の發揚』を金科玉條とせる當時の社會においては、もとより力の及ぶわけがない。もとより問題は治安警察法ではなく、結局、新興の資本主義の勢力に、勞働運動は敗けたのであるが、以來日本の勞働運動は、凋落の一路を辿るのみとなつた。勞働組合期成會は、明治三十年末に千二百名、三十一年末に三千名、三十二年は激增して、會員數五千七百名を算し、前途ます〳〵有望をとなへられてゐたが、三十三年にいたつて、稍勢如何ともするあたはず、いつのまにか、自然に消滅してしまつた。鐵工組合も誠友會も、同じ運命を辿つた。

一一　勞働暴動の頻發　こういふ不自然な抑壓手段は、日

本の政府に、一つの[illegible]をきたす[illegible]となつたにすぎなかつた。日
思想を危險化し、然かも運動を尖銳化せることである。

政府は、このころから、社會思想に峻烈な迫害を加へて、つひに明治三十四年『社會民主黨』の解散となつた。以來、日本の社會思想は、官僚的軍閥主義で表面を抑壓し、見苦しい停頓狀態をきたしたのであるが、地下線を這ひつゝあつた新思想が、つひに明治四十三年の『大逆事件』となつたことは、人の知るところである。

一方勞働運動も、組織的な合法的手段をとざされてしまつたので、表面上こそ、勞働爭議を減小したけれども、運動そのものはますます惡化し、その間々の情は、各地に突發する勞働騒動となつてあらはれた。

なかにも、明治四十年二月、足尾銅山に起つた騒動のごとき、心膽を寒からしむるものがある。すなはち、賃銀値上、待遇改善の要求拒絶に、怒りに狂ふ一千二百餘名の鑛夫は、手に手に凶器を提げて、電線を切斷し、電燈を滅し、爆彈を投じて、工場や事務所や住宅を襲撃してこれを燒き拂ひ、つひに倉庫を占領した。警官隊も手の出づるところを知らず、騒動はますます惡化したので、つひに高崎十五聯隊の出兵を乞ひ、やつと鎭壓することができた。

[illegible]
騒あり、[illegible]によつて、[illegible]

四月二十八日、北海道幌內炭山の坑夫一千二百名は、賃銀値上を要求して立ち、坑夫破坑の暴行を企てた。

六月四日、四國の別子銅山に騒動あり。全鑛夫は、各々部署を定めて、鑛山の設備を破壞し、火を放ち、鎭撫の警官を殺傷した。丸龜第十一師團の出兵によつて鎭定した。

まことに、第三期は、勞働騒動の時代であつた。そして同時に、社會不安の時代であつた。日本の社會は行詰つた。

第四期　民本主義時代

——大正元年より大正七年にいたる七年間——

一二　友愛會生る

そのうち、御代はかはつて、大正となつた。それとともに、誰の口からともなく、『大正維新』といふ聲が、聞こえるやうになつた。なんとなく『行詰り』を感じてゐた日本社會の、局面打開の聲である。友愛會は、この聲に應じて、時も大正元年の第二日、八月一日に、芝惟一館の図書室で、呱々の聲をあげた。最初の同志は、十五名であつた。これが、現在日本勞働運動の本流をなせる『日本勞働總同盟』の前身である。

友愛會は、最初から、ごく穩健着實な方針で進んだ。その綱領に、「我等は共同の力に依り着實なる方法を以て我等の地位の改善を圖らんことを期す」とあるごとく、どちらかといへば、勞資協調的な態度である。ために官憲や資本家の壓迫もすくなく、會は順調な發達をとげた。そして、創立第一週年には、會員數一千三百二十六名を算する盛況を見たのである。

當時の社會思想も、一般に、この穩健なる勞働運動を、鞭撻するやうな傾向にあつた。ことに、歐洲の大戰は、日本の思想界に波瀾して、民本主義（デモクラシー）といふ聲が、すばらしい勢で起つて來た。吉野作造、大山郁夫などいふ人達が、評論壇を占領したのも、このころである。友愛會は、この社會的雰圍氣につゝまれつゝ、健實に發育して行つたのである。

しかし、大戰の影響は、經濟的により大であつた。すなはち、最初の不景氣は、事業の縮小となり、勞働者の突然解雇となつたが、組合を有せざる勞働者は、ほとんど手も足もでなかつた。ことに、東京モスリン會社が男女一千名の職工を、突然に解雇したとき、職工達は、あはてゝ『工友會』を組織し、つひに同盟罷業に訴へたが、一たまりもなく敗戰したので、友愛會に泣きつき、やつと有利に解決するを得たのである。この事件は日本の勞働者に、勞働組合の必要を痛感せしむるとともに、友愛會の聲價を高からしめた。大正四年末には、友愛會は、會員一萬を算ふるにいたつた。

一三　友愛會の發達

尤も、不景氣は、友愛會にとつても非常な痛手で、大正三年末には、本部財政その窮乏の極に達し、會長鈴木文治は、所持品を質に入れて、やつと遣りくりしたくらゐであつたが、幸にして難局を切りぬけたときには、日本の經濟界もやうやく好況に一轉し、勞働者もまた多少の餘裕を見るに至つた。そして、不況時代に勞働組合の必要を痛感してゐた勞働者は、好況とともに、その實現に努力することとなり、こゝに日本の勞働運動も、しだいに活況を呈してきた。

大正五年から七年までは、日本經濟界の成金時代である。なにしろ歐洲諸國は戰爭に熱中してゐるので、聯合國からの注文は殺倒するし、海外各地に新販路は開かれるし、外國貿易は未曾有の發展をとげて、その結果、會社工場の新設は、夜に日を繼いで行はれるといふ有樣で、產業界の盛運とともに、勞働界も殷賑する。勞働者數は激增する。それとともに物價は暴騰する。そこで賃銀問題が起る。勞働組合が簇生するといふ有樣であつた。日本の勞働運動は、この機に乘じて、その基礎をかためた。指導者はいふまでもなく『友愛會』である。友愛會は、年毎に會員を增加して、大正五年末には、すでに三萬を突破し

[illegible]……を殘した。大正八年二月には[illegible]。[illegible]月には[illegible]阪朝日新聞[illegible]組織され。七年一月には、大阪に友愛會本部の關西出張所が設けられ、關西及び九州方面の運動を統轄することとなつた。これが關東關西對立の素因をつくつたもので、從來東京の指導下にあつた關西の勞働運動も、賀川豐彦、久留弘三などの出現により、やうやく獨立の運動となるに至つたのである。尤も、當時はまだ、關東關西の勞働運動思想の分化は、さほど顯るしくはなく、ともに時代思想たる民本主義に則り、おほく勞資協調主義から脱することは出來なかつた。

一四　信友會と大阪鐵工組合　こゝに注意すべきは大正五年十月三十一日に、歐友會の復活たる『歐文工組合信友會』が生れたことである。はじめ、歐文工のみの組合であつたが、六年二月、檄を印刷從業員全部に飛ばして、門戸解放を斷行するや、急激な發達を示し、七年一月、神田の南明倶樂部に大會を開いたときは、すでに隆々たる勢力を示してゐた。これが、現在において、左翼運動の驍將たる『信友會』の發芽である。

他方大阪においては、大正五年五月、『職工組合期成同志會』が生れた。これは西尾末廣、堂前孫三郎、阪本孝三郎などの盡力になり、機械工、電工などを中心として、はじめから友愛會[illegible]運動によれ、[illegible]內部の[illegible]大正八年にいたつて[illegible]として復活し、現在右翼運動の中心をなせるものに、この同志會の發展たる、堂前阪本一味の運動である。

かくして日本勞働運動の主流たる『友愛會』これを牽制する左翼右翼の運動も、やうやく基礎をかためて來た。次の時代は、その巴狀的進行である。

第五期　社會主義時代

——大正八年より大正十年にいたる三年間——

一五　勞働運動の飛躍的進行　第四期において、發達の基礎をおいたる日本の勞働運動は、大正八年とともに、爆發的に躍進した。

第一は同盟罷業數の增加である。戰前（大正三年）において、五十件にすぎなかつた同盟罷業は、大正八年には、四百九十七件といふ未曾有の記錄をつくつた。なかにも、神戶の川崎造船所に起つた大怠業は、新らしい勞働戰術として世の注目を惹き、歳末に起つた足尾銅山、釜石鑛山、日立鑛山の大罷業は、ついに軍隊の派出を見るほどの、凄慘なる對峙戰に入り、深刻

なる印象をのこした。

しかしながら、日本の勞働運動をして、ますます深刻化したものは、大正九年三月の『恐慌來』であつた。尤も同盟罷業の件數は、激減して二百八十二件となつた。しかし、事業の縮小と休止とは、勞働階級に一種の社會的不安を投じ、ために勞働運動をますます左傾せしめたのである。二月、八幡製鐵所の同盟罷業は、三萬の罷業團と官憲及び國粹會との衝突となり、月末勞働騷動は敗れて、凄慘な幕をとぢた。これと相前後して起つた東京市電從業員の全線罷業は、官憲の高壓手段により、拘引・檢束・馘首相つぎ交通勞働組合は、ほとんどその幹部を失つて、罷業團は慘敗宣言を發するの止むをえざるに至つた。九月、正進會と東京日刊新聞との間に起つた爭議は、五名の收監者、四十三名の馘首者、十九の檢束者をいたし、この都下各新聞に蔓延したる大罷業も、ついに條件を貫徹しえずして終つた。そのほか三月芝浦製作所の罷業、七月富士瓦斯紡績押上工場の罷業、ともに失敗に終つた。

かくのごとく、大正九年の同盟罷業は、主として東京を中心として起り、しかも多く失敗に歸したりしに反し、大正十年の勞働爭議は、關西を中心とするもので、しかも總同盟大阪聯合會の努力により、おほく有利なる解決を見たので、その聲望と、その間にえたる戰鬪的訓練とにより、他日大阪聯合會が、總同盟内に覇を稱すべき基礎をつくつたことは、注目に價する。ことに、三月尼ヶ崎セメント、四月下旬大阪電燈に起つた罷業の勝利以來、大阪聯合會は急激なる膨脹を示した。その飽くまで現實に立脚した態度は、大阪における勞働運動の贊同をうるに適當であつたのである。

しかも、最も世を震駭せしめたのは、神戸の三菱川崎兩造船所の大罷業であつた。參加人員三萬五千、罷業日數四十五日、わが國空前の大勞資戰である。ことに、これらの勞働者が、賀川豐彦の指揮によつて、一糸亂れず、組織的な爭議を行つたことは、日本勞働運動史上、特筆すべき事實である。たゞこの最も組織あり統制ある罷業すら、姫路師團から軍用列車で送られた軍隊の威嚇と、警官隊の爭議團本部占領と、二百二十名の幹部の檢擧とのため、持久戰においてついに敗れ、八月十一日の慘敗宣言となつたことは、神戸の勞働運動を、失意ならしむるに充分であつた。以來、神戸の勞働組合は困憊して再び立つあたはず、關西勞働運動の覇權は、確實に大阪の手に握らるゝにいたつた。

一六　社會主義思想の浸透　第五期は、要するに、『勞働不安』の時代であつた。勞働爭議は、上に述ぶるごとく、量的に

[illegible]ばかりでなく、同時に[illegible]したこと[illegible]は、社會主義ことにサンディカリズムの思想が、労働運動の部に浸透したためである。

明治四十三年の大逆事件以來、ほとんど休息してゐた社會主義思想が、やうやく復活の兆を示し、堺利彦、山川均、大杉榮などの社會主義者や無政府主義者が、再び歡呼をもつて、言論界に迎へらるゝにいたつたについては、大正六年十一月のロシア革命と、七年八月の米騒動とが、社會の人心に強い刺戟を與へたことが、だいぶ大きな原因をなしてゐる。露國をはじめとして、獨墺國に擴がりつゝありし氣運は、やがて全世界を蔽ふのではないかとの、疑惑を日本の人心に與へた。加ふるに七年八月、富山縣の一角で、女房連の起した米騒動が、全國的な經濟騒動となるに及んで、社會は異常な緊張をおび『革命』といふ語が、不安と恐怖で迎へらるゝにいたつた。社會主義思想は、こゝに勃興した。

この社會主義の隆興は、労働運動に反映せずにはゐられない。階級闘争といつても、その顕なところは労働運動である。そこで社會主義が、やうやく勃興するにいたつたとき、労働運動との提携、その誘導を企するのは、當然のことである。それが、具體的な形をとつたのは、大正九年十二月十日の『社會主[illegible]受け、[illegible]、各種の労働[illegible]れてゐた。この事實が、やがて[illegible]労働組合[illegible]ものである。社會主義同盟は、政府の迫害はなはだしくして、顕著な發達をとげえなかつたけれども、その結果は、労働運動のうちに、社會主義思想を植えつけることになつた。

労働運動の民本主義時代は去つた。その指導概念は、社會主義、ことにサンディカリズムに移つた。

一七　労働運動の社會主義化

社會主義思想の浸透とともに、労働争議が續發し、これが左傾したる第五期は、同時に、労働組合が簇生し、これが社會主義化したる時代であつた。

大正元年以來、新設組合の數は、毎年四乃至十四にすぎなかつた。ところが大正八年には、七十一、九年には六十六、十年には七十一の労働組合の設立を見せてゐる。現在有力なる労働組合は、ほとんど全部、この時代に設立されたものである。

これよりも著るしいのは、労働組合そのものが、思想的にも實行的にも、だんだん社會主義化したことである。これまで、労資協調主義、社會改良主義であると信じられてゐた友愛會さへ、明らかに、社會主義に則る闘争團體であるといふことを、その『宣言』によつて明らかにしたのは、大正八年の夏の大會

であつた。この大會は、會名を『大日本勞働總同盟友愛會』とあらため、會長獨裁制を理事合議制に、地方支部制を職業別組合制になほして、組織を改訂するとともに、その大會宣言において、賃銀奴隷解放の戰鬪團體なることを、絶叫したものである。

この思想的變化は、鈴木會長の協調會入り拒絶にもあらはれた。かれが澁澤子爵に對する年來の恩縁を絶つて、協調會理事たるべしとの勸誘を拒んだのは、總同盟自體の方向轉換を物語るもので、總同盟の態度は、その機關紙の冒頭に發表された『勞資協調會を評す』といふ一文に明らかである。

これと同時に、友愛會内部にわだかまつてゐた、麻生、棚橋などいふ、小壯智識階級の改革派の勝利は、決定的となつた。これらの改革派の意見は、思想的にも現實的にも、會内に重きをなすに至つたのである。そして、このことは、總同盟の勞働運動が、サンディカリズムを奉ずる信友會などと、漸次に接近する傾向となつてあらはれた。そして、ついには、九年十月の總同盟大會において、普選派の首領賀川豐彦と、反普選派の驍將麻生久、棚橋小虎との激烈な論戰となり、大正十年一月の中央委員會では、『議會主義か直接行動か』の問題が、ほとんど論議なくして、議會主義否定の決定を見、從來普選運動の中心たりし友愛會關西同盟會すら、多數をもつて、「普選運動を行はず」と議定するに至つたのである。もとより、普選運動を行はずとは、單に戰略上のことにすぎないが、その背後に、サンディカリズム的色彩の強い直接行動論がひそんでゐたことは、疑ふ能はざる事實である。

第六期　組合主義時代

——大正十一年より現在にいたる三年間半——

一八　勞働運動の方向轉換

第五期において、さしも全盛を極めたるサンディカリズムも、大正十一年ごろから、そろそろ衰退して來た。そして空漠なる革命理論や、性急なる直接行動を捨てゝ、着實に勞働組合自體を發達させ、漸次に勞働階級の地位を向上させやうとする態度が、勞働運動の内部に盛んになつた。これを日本勞働運動の『方向轉換』といふ。

方向轉換論を、はじめて理論上提唱したものは、大正十一年八月の『前衛』に掲げられた、山川均の論文である。しかし實際運動としては、その前から、すでにその兆が見えてゐた。具體的にいへば、ギルド社會主義的な産業民主主義を目標として、勞働組合運動を指導してゐた、總同盟關西支部が、勞働運動の牛耳を握るにいたつたことである。

罷工となり、[illegible]八、[illegible]によるものである[illegible]ことは、大正十年のメーデーを起點として、約一ケ月にわたり、阪神地方を席捲した同盟罷業[illegible]十件の中、[illegible]件までが、『團體交渉權確認』『横斷組合加入の自由』『工場委員制度』を、主たる要求として掲げたことによつても明らかである。關西同盟が、その着實なる運動と争議により、漸次に地歩を築くしたことは、すでに述べた、それが覇權を握るに及んで、社會主義時代は去り、労働組合主義時代は來つた。

労働組合主義は、労働組合の有勢化、すなはち労働組合の統一化によつて徹底される。劃時代的事件たる『労働組合總聯合』の問題も、關西同盟の提議にかゝるものである。

一九 労働組合總聯合

労働組合總聯合の計劃は、最初大正九年、日本最初のメーデーを機縁として生れたところの『労働組合同盟』にあらはれたのであるが、總同盟側の現實論と、信友會側の理想論との暗闘となり、總同盟の棚橋小虎が『労働』の十年一月號に『労働組合に歸れ』なる文章を發表して、性急なる直接行動論を攻撃したことが、信友會系の憤激をかひ、さらに四月『足尾争議』の解決方法について、急進派の幹部攻撃となり、兩者の溝渠はしだいに深まつた。『労働運動の闘志を鎖磨せしむる指導者』を放逐すべしといふ、いはゆる『指導者排斥論』は、[illegible]する反感のあらはれである。かくして[illegible]は、[illegible]聯合會を率ゐて、労働組合大會から脱退するにいたり、第一回の總聯合計劃は一旦挫折したのである。

しかしながら、財界の不況に直面せる労働運動は、共同戰線の必要を痛感する。そこで、労働組合同盟の機能せる旗を拾ひ上げて、再び旗竿高く掲げたのが、總同盟關西同盟で、十一年四月の大會は、『名實相伴ふ全國的總同盟を組織するに努力』すべきことを決議したのである。すでに關東の[illegible]時代をすぎて、關西の西尾時代に入れる總同盟は、その中央委員會において、一も二もなくこの議を可決し、早速總聯合運動に着手した。

この總聯合運動は、サンディカリスト的色彩の強い關東労働組合同盟や機械労働組合聯合、ならびに労資協調主義の關西労働組合同盟。一口にいへば反總同盟系の各團體とともに、旗幟の下に共同戰線をはらうといふもので、最初から[illegible]を孕んでゐたのである。しかしこの四聯合の交渉打合に、案外順潮に進行し、十一年九月十日、神田の松本亭で、とにかく全國五十八團體の代表者よりなる準備委員會が開かれるところまで運んだ。

であつた。この大會は、會名を『大日本勞働總同盟友愛會』とあらため、會長獨裁制を理事合議制に、地方支部制を職業別組合制になほして、組織を改訂するとともに、その大會宣言において、賃銀奴隷解放の戰鬪團體なることを、絶叫したものである。

この思想的變化は、鈴木會長の協調會入り拒絶にもあらはれた。かれが澁澤子爵に對する年來の恩縁を絶つて、協調會理事たるべしとの勸誘を拒んだのは、總同盟自體の方向轉換を物語るもので、總同盟の態度は、その機關紙の冒頭に發表された『勞資協調會を評す』といふ一文に明らかである。

これと同時に、友愛會内部にわだかまつてゐた、麻生、棚橋などいふ、小壯智識階級の改革派の勝利は、決定的となつた。これらの改革派の意見は、思想的にも現實的にも、會内に重きをなすに至つたのである。そして、このことは、總同盟の勞働運動が、サンディカリズムを奉ずる信友會などと、漸次に接近する傾向となつてあらはれた。そして、ついには、九年十月の總同盟大會において、普選派の首領賀川豊彦と、反普選派の驍將麻生久、棚橋小虎との激烈な論戰となり、大正十年一月の中央委員會では、『議會主義か直接行動か』の問題が、ほとんど論議なくして、議會主義否定の決定を見、從來普選運動の中心たりし友愛會關西同盟會すら、多數をもつて、「普選運動を行はず」と議定するに至つたのである。もとより、普選運動を行はずとは、單に戰略上のことにすぎないが、その背後に、サンディカリズム的色彩の強い直接行動論がひそんでゐたことは、疑ふ能はざる事實である。

第六期　組合主義時代

——大正十一年より現在にいたる三年間半——

一八　勞働運動の方向轉換　第五期において、さしも全盛を極めたるサンディカリズムも、大正十一年ごろから、そろそろ衰退して來た。そして空漠なる革命理論や、性急なる直接行動を捨てゝ、着實に勞働組合自體を發達させ、漸次に勞働階級の地位を向上させやうとする態度が、勞働運動の内部に盛んになつた。これを日本勞働運動の『方向轉換』といふ。

方向轉換論を、はじめて理論上提唱したものは、大正十一年八月の『前衞』に掲げられた、山川均の論文である。しかし實際運動としては、その前から、すでにその兆が見えてゐた。具體的にいへば、ギルド社會主義的な産業民主主義を目標として、勞働組合運動を指導してゐた、總同盟關西支部が、勞働運動の牛耳を操るにいたつたことである。

[illegible]ことは、大正十年のメーデーを契機として、約二ヶ月にわたり、阪神地方を席捲した同盟罷業約四十件中、二十九件までが、『団体交渉権確認』『横断組合加入の自由』『工場委員制度確立』を、主たる要求として掲げたことによつても明らかである。関西同盟が、その華々しなる運動と争議により、漸次に地歩を堅くしたことは、すでに述べた。それが覇権を握るに及んで、社会主義時代は去り、労働組合主義時代は来つた。

労働組合主義は、労働組合の有勢化、すなはち労働組合の統一化によつて徹底される。劃時代的事件たる『労働組合総聯合』の問題も、関西同盟の提議にかゝるものである。

一九　労働組合総聯合

労働組合総聯合の計劃は、最初大正九年、日本最初のメーデーを機縁として生れたところの『労働組合同盟』にあらはれたのであるが、総同盟側の現實論と、信友会側の理想論との闘となり、総同盟の棚橋小虎が、『労働』の十年一月號に、『労働組合に帰れ』なる文章を發表して、性急なる直接行動論を攻撃したことが、信友会系の憤激をかひ、さらに四月『足尾争議』の解決方法について、急進派の幹部攻撃となり、両者の溝渠はしだいに深まつた。『労働運動』の闘志を鎖縮せしむる指導者』を放逐すべしといふ、いはゆる『指導者排斥[illegible]は、[illegible]する反感があらはれてきた。かくして[illegible]には、[illegible]聯合会を率ゐて、労働組合大会から脱退するにいたり、第一回の総聯合計劃は、一旦挫折したのである。

しかしながら、財界の不況に直面せる労働運動は、共同戦線の必要を痛感する。そこで、労働組合同盟の機関誌たる旗を拾ひ上げて、再び旗幟高く掲げたのが、総同盟関西同盟で、十一年四月の大会は、『名實相伴ふ全国的総同盟を組織するに努力す』べきことを決議したのである。すでに関東の棚橋麻生時代をすぎて、関西の西尾時代に入れる総同盟は、その中央委員会において、一も二もなくこの議を可決し、早速総聯合運動に着手した。

この総聯合運動は、サンディカリスト的色彩の強い関東労働組合同盟や機械労働組合聯合、ならびに労働組合主義の関西労働組合同盟。一口にいへば反総同盟系の各団体とともに、旗幟の下に共同戦線をはらうといふもので、最初から無理を孕んでゐたのである。しかしこの四聯合の交渉打合は、案外順潮に進行し、十一年九月十日、神田の松本亭で、とにかく全国五十八団体の代表者よりなる準備委員会が開かれるところまで運んだ。

準備委員會は、總聯合創立大會に提出すべき規約草案につき審議し、このとき早くも理事選出問題について論爭があつたが、とにかく大會までこれを持ち越すこととして結末した。かくして、わが勞働運動史に一新紀元を劃すべき使命をもつて、日本勞働組合聯合創立大會は、九月三十日、大阪の天王寺公會堂に開かれたのである。參列團體五十九、代議員百六名、これに社會思想家の傍聽を加へて、あたかもわが國無產階級運動の總動員の觀あり。空前の盛事であつた。

しかし大會は不幸にして、開會前から決裂を運命づけられてゐた。總同盟系と反總同盟系の殺氣立つた對峙は、第二條の但書『合同か聯合』かの問題にいたるや突然爆發し、會議は急湍のごとく破局へ導かれ、會場はすでに建設の希望に背いてゐた。論戰數刻に亘り、傍聽席も熱狂し、場內の空氣が異常の緊張を示したとき臨監の警官に解散を命ぜられ、かくて半歳の進行は水泡に歸した。

兩派は交々、對者に對する憤りに燃えて會場を出た。堺利彥、山川均、荒畑寒村らは、總同盟の、大杉榮は反總同盟の、渦のなかにあつた。

大會決裂後の、合同主義と自由聯合主義との論爭は、こゝに省略する。たゞ、かくして總聯合計畫は、第一着手において決裂したが、それは日本の勞働運動に、偉大なる影響を與へた。第一に、總聯合計畫が、總同盟內部の陣容をとゝのへたことで、內部に伏在せしサンディカリズムの勢力は、決裂事件を轉機として、次第に排除されたことである。かくして、思想的浸透に根據をおく左傾思想は、もはや昔日の俤をとゞめえず、組合主義の勢力は、これに反して隆々とのぼつたのである。

二〇　勞働總同盟の現實化

こゝにおいて、勞働總同盟は、最初の改良主義からの進化と、サンディカリズムとの絕緣を瞭らかにするため、綱領をつぎのごとく改定した。

「一、我等は團結の威力と相互扶助の組織とを以て經濟的福利の增進並に智識の啓發を期す。

「二、我等は斷乎たる勇氣と有効なる戰術とを以て資本家階級の抑壓迫害に對し徹底的に鬪爭せんことを期す。

「四、我等は勞働者階級と資本家階級とが兩立すべからざることを確信す。我等は勞働組合の實力を以て勞働者階級の完全なる解放と自由平等の新社會の建設を期す。」

日本勞働運動の現實化的傾向を助長したものは、大正十二年九月一日の大震災であつた。大震災は社會心理上、保守主義者に社會事業、社會政策、社會運動の必要を認めしめたとともに、勞働運動に對しては、破壞的空論の無益と建設的努力の必

要と受入れた。[illegible]

は、こゝに一轉した。

加ふるに、從來の保守主義者が、しだいに進步主義への轉向を示したことは、勞働運動の積極化によい刺戟を與へた。普選とともに成立した山本後藤内閣が、普選の實施を約束したとき、すでに現實化せるわが勞働運動は、もはや理論的反駁を加ふることなく、總同盟のごときは、十月十二日の中央委員會において、「普選實施後においては、總同盟は投票權を行使すべし」と決議し、議會對策委員會を設けて、具體的方法を研究することになつた。

大正十三年の初頭、英國に勞働黨内閣が成立したことも、また日本の勞働運動に、一つの希望を與へたものであつた。英國の勞働組合が、健實なる組合主義の下に、勞働黨によつて、つひに大英帝國の覇を握つたことは、勞働組合主義にとつては、一つの福音であらねばならぬ。

十三年二月における、勞働總同盟の劃時代的宣言は、實にかくのごとき事情の下に發表されたものである。「今や我國勞働運動は最も重要なる轉換期に立つて居る。………(從來の社會的氣運は)勞働組合の無産階級解放運動に於ける使命と職分とを充分に認識することを得しめなかつた。………今や吾等は過去に於ける[illegible]必要に迫られてゐる。………今や我國の[illegible]の[illegible]から轉じて大衆的運動に向ふべき[illegible]階段に到達したのである。改良要求に對する從來の消極的態度は積極的にこれを利用することに改められなければならぬ。」

この宣言は、日本勞働總同盟の主流を、最も堅實に物語るものである。同時に、日本勞働運動全體に、重大な影響を與へた。信友會や正進會とともに、サンディカリズムの忠實なる使徒であり、自由聯合主義の信奉者であつた機械勞働組合聯合會さへ、三月の大會において、方向轉換を宣言した。かくして、勞働總同盟の支持する勞働組合主義は、しだいに日本勞働運動の上に、不拔なる地位を築き上げたのである。

尤も、冒頭にも述べた通り、この總同盟の代表する主流に對しては、左翼と右翼の牽制運動があることは、否定できない事實である。また總同盟内部にも、その影響はある。勞働組合中心主義を奉ずる多數派に對しては、少數派の共産主義者が、たへず反抗してゐる。本年三月中央委員會において、共産派六名の除名案(否決)と、關東地方評議會の解散案(可決)とが上程されたごとき、その内情を暴露したものであり、ついで總同盟の分裂さへ暗示された。しかし總同盟が、共産黨分子を排除せ

んとする努力は、かへつてその結束を堅むる所以で、少くとも、現在において、日本勞働總同盟の勞働組合主義が、いはゆる中立系と非組織勞働者を率ゐ、滔々たる勞働運動の本流をなせることは、疑ふの餘地はない。またその健實なる步調が、將來大成の基礎たるべきことは、希望しうべきことであらう。（完）

（斷り。——氏名に敬稱を用ゐざりしは、運動史を客觀せるため、他意あるにあらず。赤松克麿君の『日本勞働運動發達史』、古賀進君の『最近日本の勞働運動』を、多大の參考に供した。兩君に謝するとともに、兩著を併讀されんことを、讀者にすゝめる。）



世界列國の現狀を大觀して

法學博士　米田實

一　序言

予は玆に書き出んとする論文において、ヨーロッパの國勢とその外交關係を概括的に叙述せんとするものである。即ちそれが如何なる狀態にあるか、又右の如き狀勢にあるは如何なる理由に基けるかを、制限ある紙面の範圍において明かにしたいと思ふのである。

すべて大局を概論する時は、動もすれば粗漏淺膚のものとなる、さればとて筆を細目に走らせ委曲を盡さんとすれば、所謂樹を數へて林を忘るゝが如き弊に陷り易い。故に本文の如きもその間に處して中庸を得、粗ならず密ならず論旨を進め得るか否かは疑問と云はざるを得ない。併し何れにしても之が江湖諸賢に對して、幾分かの參考資料ともなり得るならば、筆者の幸甚しと云はねばならぬ。

二　紛爭のバルカン半島

吾人は先づ順序としてヨーロッパ東南端のバルカン半島方面より筆を進めて見たいと思ふ。バルカン半島は誰も知る如く、今日人口一千四百萬（その大部分は對岸のアジアトルコに居るのであるが）を支配するトルコ、四百九十萬を支配するブルガリア、人口五百四十萬を支配するギリシヤ、並に今回大戰の結果その領土舊オーストリー、ハンガリー國内に延長し、半ばバルカンに屬し半ば中央ヨーロッパに屬するが如き關係にあるセルヴオ・クロソート・スロヴエーヌ國（ユーゴスラウイア）などによつて形成せらるゝのである。尤もこの外に自からバルカンにあらずとし、東ヨーロッパに屬すると自任せる人口一千七百萬のルーマニア國がある。之がバルカンに屬するや否やは無論一問題たらざるを得ないが、しかし吾々が政治的にこれを見ると、ルーマニア又バルカンに屬すと云ふも敢て差支ない。云ふまで

もなくこの地帶は過去においてもヨーロッパの禍源であり、歷小地域、小國間或は小民族間の戰爭起り、延いて大國間の戰爭をも挑發せしめたものであつた。十九世紀において有名なる一八五六年のパリー公會と云ひ、一八七八年のベルリン公會と云ひ、その列國の大會議は多くバルカンに原因して起つた事件解決のためであつたと云つても宜い。而して今回の世界大戰又同じくバルカン方面にその種子を作り、これが動因となり爆發せるものなることを考ふる時、誰かバルカンの世界紛亂の禍根たるを否認するものぞ。しかも世界の禍根たる狀態――常に政治的に火災を起し地震を激發せんとする狀態が、歐洲大戰後の今日において依然たるを否認し得ざるは、世界人類の幸福に取り何と云ふ悲むべき事情であらう乎。

何が故に斯の如くバルカンが不安であり爭亂相踵ぎ、人心定まり難きかと云ふに、それには幾多の原因が存すること固よりである。即ち小國分立し相接觸し居ること及び幾多の異れる民族集合し、それ等間の關係過去三四百年に亘り常に爭鬪を繼續し紛紜を醸成しつゝありし傳統的歷史を有し、今日においてもその終熄を見ざること等が根本的原因には相違ない。併しながら這は大體から述べた論で、唯斯る遠因のみを以て今日のバルカン尙不安なる狀態を說明することは不親切である、更にその近因を明かにし今少しく具體的現象を數へ擧げねばならぬことを感ずる。無論それには前述の所謂過去の歷史的原因が新しき姿を以て現はれたるもあれば、又新しき事情のために新たに發生せるものもあらう。試みにその少しを指摘せんか、第一に擧ぐべきものは最近ギリシヤ、トルコ間における人口交換問題に關する紛議である。第二は一方に於てロシア側の宣傳がバルカン赤化運動として現はれて居るが、他方においては近來世界の各部分に擡頭せる所謂反動的(リアクショナリ)傾向なるものが、バルカンの政治機關にも現はれ、この二者の相爭へるのが紛亂の一重大原因と見るべきであらう。第三には從來存在せることではあるが、バルカン諸國々境が所謂民族的國境と合致せざるため、これに對する不平分子の活動が爭鬪の一因を爲せることも疑ひない。更に忘れてならぬことは斯の如き三近因が常にバルカンの紛爭を導きつゝあるに加へ、バルカン諸國政治家が世界大戰後において も、狹きバルカンにおいて全部を包擁する平和聯盟の如きものを作らんとはせずして、一の團結を作り他の團結に對抗せんとするが如き風を示せることなども、やはりバルカン紛爭の原因を爲すものであらう。

トルコ、ギリシヤ間の人口交換問題は何處より發せるか、もとより人口交換問題そのものは決して平和攪亂の目的より出で

たるにあらず、必ずしも[illegible]ならなかつたるものに外ならぬ。蓋しトルコ人とギリシャ人とは久しきに亘りて相爭ひ、問題絶えざる狀態であつたが、その原因の少からざる部分は兩國各々自領內において團結して居る多くの他方の國民がある結果であつた。茲において國際聯盟に關係せるノールエー國のナンセン博士の如きは、兩國間に人口交換を行ひ、兩民族を隔離することが即ち兩民族間における政治的軋轢の幾分なからしむる唯一の便法なりと信じた。恰かも善し、大正十一年(一九二二年)ギリシャがアジア、トルコにおいて敗北し、軍隊の撤退を見るや在アジアトルコのギリシャ人は爭ふて本國に避難したのであつた。斯の如きは全く戰爭の結果ではあるが、他方の國に在住せる双方民族が互に戰爭のため一時本國に避難せる狀態を見、この機會において双方人口の交換を行ふ時は、さしたる困難を感ぜず成功し易しと考へられた。依つてナンセン博士は、先づトルコ政府に對しこの意味の提議を爲し、次でギリシャ側にも同じ交渉が行はれた。この案はトルコ側によつて非常に歡迎され、ギリシャにおいてもさしたる異論を見なかつた。而して愈これを實行するに決定したのが大正十二年一月におけるトルコ、ギリシャ人口交換條約であつた。殊にトルコは本條約を大いに歡迎したものであつた、その重なる理由は、トルコ人の[illegible]せる小アジア一帶には、現[illegible]ギリシャ人居住し、これが爲めギリシアの[illegible]を[illegible]して、大ギリシャ出現の[illegible]を起さしめ、[illegible]小アジア一帶に野心を懐かしむるに至つた。この場合若しその人口をギリシャ本國に移すとせんか、アジアトルコにおける將來問題の大部は自から消滅し得る利益あるからである。此小アジア在住百萬のギリシャ人をその本國に移すと共に、ギリシャ領マセドニヤ在住の約三四十萬を數ふるトルコ人(回教徒)をその本國に移さんとする協定はその後着々實現の緒に就き、ギリシャ政府はアジアトルコより歸來する避難民を續々自領マセドニヤに移すの策を採り、これが經費として最初英國英蘭銀行及びギリシャ國立銀行より三千七百萬圓を支出せしめ、大いにその移住に努力せる結果一九二四年中において、マセドニヤに移されたる舊トルコ在住ギリシャ人家族は、實に十一萬八百六十四家族を數へ、この外同國東南部に移されし家族を併せて算すると十三萬五千百六十四を算するに至つた。今一家族を五人と假定して計算する時は、かれこれ七十萬人は自國に歸還した勘定となる。尚ギリシャ政府はこれが經費として一億圓借款を國際聯盟の援助を得、天下に募集するの策を採り、斯くして人口の移植は着々實行された。この策こそはたしかにバルカン並にその對岸アジア

トルコ方面の人口狀態によりて生ずる人種的軋轢の機會を減小する點に、大なる貢獻をもたらするものたるは言を待たざる所である、然るにも拘らず事豫期に反し今や此人口交換問題は却つてトルコ、ギリシヤ間の惡感を激成せしむるに至れるは、抑も何事であるかと言ふと、トルコ側においてはこの人口交換問題を以てアジアトルコ及びマセドニヤ在住希土兩國民間の交換に止めず、出來得べくんばトルコ首府コンスタンチノープル方面に在るギリシヤ人をも、國外に放逐するを以て自國政治上に極めて便利なりと考ふるに至つた爲めである、今大正十二年一月三十日ローザンヌにおいて協定されしギリシヤ、トルコ人口交換條約第一條及び第二條に就て見ると、トルコ首府在住のギリシヤ人だけは明かにこの交換條約より除外されて居る、然るにトルコが橫車を押し出した理由は何處にあるかと言ふと、コンスタンチノープル在留ギリシヤ人と雖も大正七年十月三十日即ちトルコ對聯合國の休戰成立後においてコンスタンチノープルに入れるものは右條約による交換より除外せられぬこととなつて居た、即ち戰爭以前若くはその最中、別言すれば從來よりコンスタンチノープルに住居してゐたギリシヤ人は、交換條約に編るゝことなく、ギリシヤに歸還するを要しなかつたが、戰後の移住者はギリシヤに移さるゝこととなつて居たのである、然るにその條約運用に當りトルコ側にては成るべく多くコンスタンチノープル在留ギリシヤ人を本國に歸らしめんとし、之に反しギリシヤ側では成る可く歸らさらしめんと欲したのであつた。そは何故であるかと言ふと、コンスタンチノープルには昔より恰も我日本のニコライ會堂と同じい流れのグリーキ教會、正教會大本山の存在する所であつて、此處にはグリーキ大主教が住居し近東一帶に本山として大なる崇敬を受けて居る。トルコよりこれを見ればギリシヤの一大勢力が、歷史的權利により自己の首府に陣取れる有樣に見ゆるのである、然もそれがトルコ國內における幾多の耶蘇教徒に對して拔くべからざる權力を所有する現狀に鑑み、同國爲政家の間に何とかしてこれを排除し、その實權を根本的に打破することを得ば自國統治上多大の利益ありとの感を懷かしめた。恰もよし玆に問題が起つた、それは昨年コンスタンチノープルにおいて行はれた大主教選擧において、コンスタンチノス六世として大主教の地位に上れる人が、大正七年（一九一八年）以後コンスタンチノープル本山に移り來れるものであつたからである、ギリシア側にては成程彼は一九一八年以後においてコンスタンチノープルの本山に來れるものなるも、本來彼はコンスタンチノープルのファナール（總本山所在地）を自己の根據地と爲せるもので、唯一時他

方に住めるまで[illegible]し、故に大正十二年人口交換條約の一九一八年十月三十日以前からコン府に本籍を有して居たもの、即ち交換除外の分の内に入る可きものゝ中にありと主張し、それが依然コ府居住の權あることを説いて止まぬがトルコは頭として此解釋に同意せず、「新しく一九一八年十月以後コンスタンチノープルに來れるものなり」との解釋を與へ、交換せらる可き人口中に在りとしてこれが退去を命じ本年一月三十日大主教は遂にトルコ警察に捕へられ、無理やりに放逐されたのであつた。獨りこれのみならずトルコは他のギリシャ人に對しても同樣の理由を楯に取り、用捨なくコ府ギリシャ人放逐を敢て爲しつゝあるのである。一度この問題起るやギリシャ議會は勿論政府の激怒を買ひ、殊にグリーキ教大本山として人民尊崇の標化たる大主教が放逐されし一事は、宗教心淺からざる一般ギリシャ國民の激憤を高めたるに何の不思議があらう。本問題は遂に國際聯盟に持出されこれが解決を迫つて居るが、トルコ側におけるコンスタンチノープル在住ギリシャ人の放逐政策は、今後尚相當進展を見るものと想像し得られる。何となれば現トルコ政府の中心人物ムスタツハ・ケマルパシャは戰爭により大正十一年秋遂にギリシャを征服し、以て大ギリシャを作らんとせるギリシャ側の野望を一旦打破したものゝ、ギリシャが[illegible]ヨーロッパ[illegible]にのみ、又何時[illegible]今日その勢盤を絶滅することは、少くともトルコ内におけるギリシャ人を皆無ならしめないまでも、無力ならしむる程度に減少するにありと、考ふる立場にあるは推するに難くないからである。此點から見ると、人口交換計畫が完全に成功せる曉若くはその後相當年限を經過せる後ならばいざ知らず、該計畫の遂行中若くは該計畫にして巧みに行はれざる場合においては、紛爭は依然として繼續するものと見なければならぬ。殊に吾人の慮る所は斯の如きトルコの政策が一方において、その國の安全策なるかの如く見ゆるけれど、他方においてギリシャをしてトルコの行動に對する反感から、之に對抗する一種の同盟的團體を作らんとする運動に努力せしむる傾向を生ずるのではあるまい乎と言ふことである。否な現に此傾向が生じつゝあることを見てこの點に深き悲みを有たざるを得ない。

三　赤化運動と反動政治

次にバルカンの紛議を醸しつゝあるものは、所謂ロシヤ勞農政府の宣傳を中心とせるバルカン赤化運動の進行そのものであらう。ロシアの赤化運動が比較的に成功し易き可能性を有する

トルコ方面の人口狀態によりて生ずる人種的軋轢の機會を減小する點に、大なる貢獻をもたらするものたるは言を待たざる所である、然るにも拘らず事豫期に反し今や此人口交換問題は却つてトルコ、ギリシヤ間の惡感を激成せしむるに至れるは、抑も何事であるかと言ふと、トルコ側においてはこの人口交換問題を以てアジアトルコ及びマセドニヤ在住希土兩國民間の交換に止めず、出來得べくんばトルコ首府コンスタンチノープル方面に在るギリシヤ人をも、國外に放逐するを以て自國政治上に極めて便利なりと考ふるに至つた爲めである、今大正十二年一月三十日ローザンヌにおいて協定されしギリシヤ、トルコ人口交換條約第一條及び第二條に就て見ると、トルコ首府在住のギリシヤ人だけは明かにこの交換條約より除外されて居る、然るにトルコが橫車を押し出した理由は何處にあるかと言ふと、コンスタンチノープル在留ギリシヤ人と雖も大正七年十月三十日即ちトルコ對聯合國の休戰成立後においてコンスタンチノープルに入れるものは右條約による交換より除外せられぬこととなつて居た、即ち戰爭以前若くはその最中、別言すれば從來よりコンスタンチノープルに住居してゐたギリシヤ人は、交換條約に觸るゝことなく、ギリシヤに歸還するを要しなかつたが、戰後の移住者はギリシヤに移さるゝこととなつて居たのである、然るにその條約運用に當りトルコ側にては成るべく多くコンスタンチノープル在留ギリシヤ人を本國に歸らしめんとし、之に反しギリシヤ側では成る可く歸らざらしめんと欲したのであつた。そは何故であるかと言ふと、コンスタンチノープルには昔より恰も我日本のニコライ會堂と同じい流れのグリーキ教會、正教會大本山の存在する所であつて、此處にはグリーキ大主教が住居し近東一帶に本山として大なる崇敬を受けて居る。トルコよりこれを見ればギリシヤの一大勢力が、歷史的權利により自己の首府に陣取れる有樣に見ゆるのである、然もそれがトルコ國內における幾多の耶蘇教徒に對して拔くべからざる權力を所有する現狀に鑑み、同國爲政家の間に何とかしてこれを排除し、その實權を根本的に打破することを得ば自國統治上多大の利益ありとの感を懷かしめた。恰もよし玆に問題が起つた、それは昨年コンスタンチノープルにおいて行はれた大主教選擧において、コンスタンチノス六世として大主教の地位に上れる人が、大正七年（一九一八年）以後コンスタンチノープル本山に移り來れるものであつたからである、ギリシア側にては成程彼は一九一八年以後においてコンスタンチノープルの本山に來れるものなるも、本來彼はコンスタンチノープルのファナール（總本山所在地）を自己の根據地と爲せるもので、唯一時他

方に於けるまでなりとの解釋を下し、故に大正十二年人口交換條約の一九一八年十月三十日以前からコン府に本籍を有して居たもの、即ち交換除外の分の内に入る可きものゝ中にありと主張し、それが依然コ府居住の權あることを説いて止まぬがトルコは頑として此解釋に同意せず、「新しく一九一八年十月以後コンスタンチノープルに來れるものなり」との解釋を與へ、交換せらる可き人口中に在りとしてこれが退去を命じ本年一月三十日大主教は遂にトルコ警察に捕へられ、無理やりに放逐されたのであつた。獨りこれのみならずトルコは他のギリシャ人に對しても同様の理由を楯に取り、用捨なくコ府ギリシャ人放逐を敢て爲しつゝあるのである。一度この問題起るやギリシャ議會は勿論政府の激怒を買ひ、殊にグリーキ教大本山として人民尊崇の權化たる大主教が放逐されし一事は、宗教心淺からざる一般ギリシャ國民の激憤を高めたるに何の不思議があらう。本問題は遂に國際聯盟に持出されこれが解決を迫つて居るが、トルコ側におけるコンスタンチノープル在住ギリシャ人の放逐政策は、今後尚相當進展を見るものと想像し得られる。何となれば現トルコ政府の中心人物ムスタツハ・ケマルパシャは戰爭により大正十一年秋遂にギリシャを壓服し、以て大ギリシャを作らんとするギリシャ側の野望を一旦打破したるもの、[illegible]ギリシャがクリスト教徒としてヨーロッパ[illegible]にあるに[illegible]、又何等[illegible]今日その勢力を絶滅することは、少くともトルコ内におけるギリシャ人を皆無ならしめないまでも、無力ならしむる程度に減少するにありと、考ふる立場にあるは推するに難くないからである。此點から見ると、人口交換計畫が完全に成功せる曉若くはその後相當年限を經過せる後ならばいさ知らず、該計畫の進行中若くは該計畫にして巧みに行はれざる場合においては、紛爭は依然として繼續するものと見なければならぬ。殊に吾人の慮るゝ所は斯の如きトルコの政策が一方において、その國の安全策なるかの如く見ゆるけれど、他方においてギリシャをしてトルコの行動に對する反感から、之に對抗する一種の同盟的團體を作らんとする運動に努力せしむる傾向を生ずるのではあるまい乎と言ふことである。否な現に此傾向が生じつゝあることを見てこの點に深き悲みを有たざるを得ない。

三　赤化運動と反動政治

次にバルカンの紛議を醸しつゝあるものは、所謂ロシヤ勞農政府の宣傳を中心とせるバルカン赤化運動の進行そのものであらう。ロシアの赤化運動が比較的に成功し易き可能性を有する

ものは、恐らくバルカンでなくてはならぬ。何となれば過去におけるバルカン諸國とロシヤとの關係が、此地域に於ける諸國の勢力を鞏固にして居るからである。今日セルビアが獨立國として立ちつゝある所以は一にロシアの後援に外ならない。セルビアが一八五六年その自治を完成し、漸く獨立に近き、次で一八七八年ベルリン公會に際し愈々獨立狀態となり得たるものは、背後にロシアの努力を有せるが爲めであつた。又ブルガリヤ國が一八七八年實際上トルコの支配下を脫し分立の姿となれるは誰のお蔭であつたか、云ふまでもなくロシアの助力に俟つ所多大であつた。何故ロシアが斯の如くバルカン小諸國に後援を爲し、以てトルコと相爭ひたるかと云ふに、一はセルビヤ人がロシヤ人同樣スラブ民族であり、ブルガリヤ人も本來東洋系とは云へ、文化的關係よりせばスラブ系と見らるべき狀態にあるのと、他の一は宗教關係において大體相近きものあるが爲めであつた。トルコに對してバルカン諸國の保護者なりと云はるゝロシアが、バルカン諸國民に深く印象せられ、相當尊敬を拂はれ居るは寧ろ當然にして、今やロシアを元とする過激派宣傳のバルカンに入り易きは毫も不思議とするに足らない。而してロシア革命後その宣傳運動の手は先づ容易に入り易きバルカンに伸ばされて居り、就中彼のウランゲル將軍等の反過激派運動失敗と共に、沒落せる面々は地理的關係より距離最も近きバルカンに逃竄するや、赤化運動者亦その間に乘じ、盛んにバルカンに現はれた。而して今日赤化運動が如何なる姿を取りつゝあるかと見るに、ブルガリヤにおいて少からざる共產主義系議員を選出せる事例に徵しても明かで、近來はそれ程議會において力を發揮し居らないが、然も本年三四月におけるブルガリヤ暗殺事件の續出、就中四月中旬ボリス國王が共產系の襲擊に會せられ、辛うじて免れられたると、及び一昨年スタンブリスキーの農民黨政府を沒落せしめたる所謂軍人系ブルジョア系として政治圈の中心人物の一人たりしゲオルギエフ將軍が、遂に暗殺を免れざりしこと。並にブルガリヤの愛國者として知られ彼のマセドニヤ運動の中心人物たりしトドル・アレキサンドロフが、共產黨主義者の爲めに殺害せられしこと、或は諸大臣の暗殺事件續出せる事實等に徵しても自ら首肯し得らるゝ所である。而して此共產黨系の活動振の重大なることは、今春において特に一般世人の注目を惹いたけれども、同國政治家中においては昨年頃より之を豫想し畫策を企てつゝありし問題であつた。是れ昨年十二月ブルガリヤ總理大臣たるツアンコフ氏がユーゴースラヴィア即ちセルボ・クロアート・スロブエーヌ國を訪問し、その首相パシッチ氏と會見し、更に一轉ルーマニア國に至

りそつ[illegible]チアノ[illegible]ジユーゴー[illegible]
赤化問題に對する[illegible]につき種々[illegible]を遂げたるにして[illegible]る、所である。即ち彼の活動の目的はブルガリヤが今や講和條約の結果軍隊僅かに二萬に減少され、この僅少なる武力を元としては國内における赤化運動を防止する能はずとし、この點において諸隣國の考慮を求めたものに外ならなかつたが、但し此軍隊増加案は不幸にして周圍諸國の同意を見るに至らなかつたのである。ところが之獨りブルガリヤのみでは無く、隣國セルボ・クロアート・スロヴェーヌ國即ちユーゴースラヴィア亦齊しく赤化運動に禍せられて居ることを知らねばならぬ。本來ユーゴースラヴィアにては共産主義者が議會の内外に地歩を有して居たが、殊に最近赤化運動を醸成し來れるものは、同國に第二位の政黨として知られて居る彼のクロアチヤ黨の首領ラジッチ氏が、昨年五月ロシヤに赴き勞農政府と提携の約を結びし以來のことである。彼は提携の約を結びて後本國に歸り、一度捕へられて獄に投ぜられたが、彼自身は必ずしも本來の共産主義者ではない、彼は從來のセルビヤ國に舊オーストリー、ハンガリー領たりしクロアチア、スロヴェーヌ兩民族居住地帶を合併して、新しく樹立したる新セルボ・クロアート・スロヴェーヌ國の組織については、現首相パシッチ氏の中央集權論に反對し、地

[illegible]
ヴィヤ[illegible]人クロアート人スロヴェーヌ人中セルビヤ人獨り今回の戰爭において、南スラヴの[illegible]して[illegible]九萬方マイル人口一千一百萬の國家を作り得たのは從來[illegible]たるセルビアの力であると信じて居る、そこでセルビア中心の國家を作るのが當然と考へてゐるが、之に對し、舊オーストリー、ハンガリー領なるクロアチア人スロヴェーヌ人は如何に考ふるかといふに、バルカンにおける舊セルビア國民は農民にして文化極めて低きに反し、吾々は文明國たるオーストリー、ハンガリーから來り文化遙かに彼等を拔んで居れりとの自負心を有し、同時に政治の如き地方分權即ち一種の聯邦組織たるべきものなりと信じてゐる。斯の如くにしてクロアチア派と舊セルビア諸政黨とは一致せず、而して現在の一九二一年六月制定憲法はセルビア側が共意を行つたものであるので、クロアチア黨は極端に不平を持して居るのに乘じ、ロシアの策戰は見事成功し、遂に共産主義者とクロアチア派首領株との提携を見るに至つたのである、併し本年二月に行はれた總選擧の結果においては、三百十五名の議員中現首相パシッチ氏を支持する急進黨系は百六十二名を數ふるに過ぎないが、ラジッチ派即ちクロアチア派は各種の迫害ありしに拘らず六十九の議席を占め、議會に

ものは、恐らくバルカンでなくてはならぬ。何となれば過去におけるバルカン諸國とロシヤとの關係が、此地域に於ける諸國の勢力を鞏固にして居るからである。今日セルビアが獨立國として立ちつゝある所以は一にロシアの後援に外ならない、セルビアが一八五六年その自治を完成し、漸く獨立に近き、次で一八七八年ベルリン公會に際し愈々獨立狀態となり得たるものは、背後にロシアの努力を有せるが爲めであつた。又ブルガリヤ國が一八七八年實際上トルコの支配下を脫し分立の姿となれるは誰のお蔭であつたか、云ふまでもなくロシアの助力に俟つ所多大であつた、何故ロシアが斯の如くバルカン小諸國に後援を爲し、以てトルコと相爭ひたるかと云ふに、一はセルビヤ人がロシヤ人同樣スラブ民族であり、ブルガリヤ人も本來東洋系とは云へ、文化的關係よりせばスラブ系と見らるべき狀態にあるのと、他の一は宗教關係において大體相近きものあるが爲めであつた。トルコに對してバルカン諸國の保護者なりと云はるゝロシアが、バルカン諸國民に深く印象せられ、相當尊敬を拂はれ居るは寧ろ當然にして、今やロシアを元とする過激派宣傳のバルカンに入り易きは毫も不思議とするに足らない。而してロシア革命後その宣傳運動の手は先づ容易に入り易きバルカンに伸ばされて居り、就中彼のウランゲル將軍等の反過激派運動失敗と共に、沒落せる面々は地理的關係より距離最も近きバルカンに逃竄するや、赤化運動者亦その間に乘じ、盛んにバルカンに現はれた。而して今日赤化運動が如何なる姿を取りつゝあるかと見るに、ブルガリヤにおいて少からざる共產主義系議員を選出せる事例に徵しても明かで、近來はそれ程議會において力を發揮し居らないが、然も本年三四月におけるブルガリヤ暗殺事件の續出、就中四月中旬ボリス國王が共產系の襲擊に會せられ、辛うじて免れられたると、及び一昨年スタンブリスキーの農民黨政府を沒落せしめたる所謂軍人系ブルジョア系として政治團の中心人物の一人たりしゲオルギエフ將軍が、遂に暗殺を免れざりしこと。並にブルガリヤの愛國者として知られ彼のマセドニヤ運動の中心人物たりしトドル・アレキサンドロフが、共產黨主義者の爲めに殺害せられしこと、或は諸大臣の暗殺事件續出せる事實等に徵しても自ら首肯し得らるゝ所である。而して此共產黨系の活動振の重大なることは、今春において特に一般世人の注目を惹いたけれども、同國政治家中においては昨年頃より之を豫想し諸策を企てつゝありし問題であつた、是れ昨年十二月ブルガリヤ總理大臣たるツアンコフ氏がユーゴースラヴィア即ちセルボ・クロアート・スロブ エーヌ國を訪問し、その首相パシッチ氏と會見し、更に一轉ルーマニア國に至

りその首[illegible]チアノに代つて新政府はユーゴー[illegible]し、赤化問題に對する方針につき種々協議を遂げた[illegible]るゝ所である、即ち彼の活動の目的はブルガリヤが今や講和條約の結果軍隊僅かに二萬に減少され、この僅少なる武力を元としては國内における赤化運動を防止する能はずとし、この點において諸隣國の考慮を求めたものに外ならなかつたが、但し此軍隊増加案は不幸にして周圍諸國の同意を見るに至らなかつたのである。ところが之獨りブルガリヤのみでは無く、隣國セルボ・クロアート・スロヴエーヌ國即ちユーゴースラヴイア亦齊しく赤化運動に禍せられて居ることを知らねばならぬ。本來ユーゴースラヴイアにては共産主義者が議會の内外に地歩を有して居たが、殊に最近赤化運動を醸成し來れるものは、同國に第二位の政黨として知られて居る彼のクロアチヤ黨の首領ラジツチ氏が、昨年五月ロシヤに赴き勞農政府と提携の約を結びし以來のことである。彼は提携の約を結びて後本國に歸り、一度捕へられて獄に投ぜられたが、彼自身は必ずしも本來の共産主義者ではない、彼は從來のセルビヤ國に舊オーストリー、ハンガリー領たりしクロアチア、スロヴエーヌ兩民族居住地帶を合併して、新しく樹立したる新セルボ・クロアート・スロヴエーヌ國の組織については、現首相パシツチ氏の中央集權論に反對し、地方[illegible]ヴイヤの三民族セルブ人クロアート人スロヴエーヌ人[illegible]ヤ人側で今回の戰爭において、南スラヴの[illegible]九萬方マイル人口一千一百萬の國家を作り得たのは從來の獨立國たるセルビアの力であると信じて居る、そこでセルビア中心の國家を作るのが當然と考へてゐるが、之に對し、舊オーストリー、ハンガリー領なるクロアチア人スロヴエーヌ人は如何に考ふるかといふに、バルカンにおける舊セルビア國民は農民にして文化極めて低きに反し、吾々は文明國たるオーストリー、ハンガリーから來り文化遙かに彼等を拔んで居れりとの自負心を有し、同時に政治の如き地方分權即ち一種の聯邦組織たるべきものなりと信じてゐる。斯の如くにしてクロアチア派と舊セルビア諸政黨とは一致せず、而して現在の一九二一年六月制定憲法はセルビア側が共黨を行つたものであるので、クロアチア黨は極端に不平を持して居るのに乘じ、ロシアの策戰は見事成功し、遂に共産主義者とクロアチア派首領株との提携を見るに至つたのである。併し本年二月に行はれた總選擧の結果においては、三百十五名の議員中現首相パシツチ氏を支持する急進黨系は百六十二名を數ふるに過ぎないが、ラジツチ派即ちクロアチア派は各種の迫害ありしに拘らず六十九の議席を占め、議會に

第二位政黨として立つことが出來た。尤もラジツチ派卽ちクロアチア派は共產主義そのものを主とするものにあらず。唯自國內政上において活躍するの便宜よりロシアと提携せるに過ぎないが、共產系と連絡せるだけそれだけ同系統の勢力が相當國內に存在するは否み難き事實である。この外クロアチア系統に屬せざる眞の共產主義者が嘗てセルビア國內に決して少からざることは、從前の議會において共產黨を名乘れる議員五十八議席を占め得たる實例に照しても明かである。併しこの黨派は今回の選擧に當り全滅した。如何なる理由かと云へば、白髯の老政治家パシツチ氏を首相とする政府は鐵腕を以て極端なる壓迫政策を取り、所謂共產黨撲滅を圖り同系統の捕縛を敢行して、政界に立つを得ざらしめたる結果である、決して民間思想の狀態を公平に反映せる選擧とは云へなかつたのである。

赤化運動の成功顯著なるは上記セルビヤ、ブリガリヤ二方面である、その隣國たるルーマニヤ並にトルコ等になると、二國の如く猛烈でなかつた。併しながらトルコは相當勞農政府に諒解を有し、主義上に於てこそ未だ一致を見ないが、比較的親善狀態を持せりと信ずべき理由がある。唯今日ムスタツハ・ケマル・パシヤの愛國的努力により復活しつゝある場合とて、共產系の活躍はさして表面に現はるゝ機會を得ざるものと見て宜い。然らばブリガリヤ、セルビヤにおいて共產派の活動の意外に盛なるは如何なる理由に基くであらうか、これは兩國の執政者その人が、目下極端な反動系にして、その政治が頗る威壓的に流るる反映であることも拒み能はざる點である、蓋し先づブルガリヤにおいては現首相ツアンコフ氏等の軍人系ブルジョア階級が、一昨年從來の農民黨內閣スタンブリスキー氏を倒し、今日まで政權を占有してゐるが、この系統は決して政界において農民派によつて支持せられず、社會黨系によつても支持せられざる少數派政府たるは疑ひを容れぬ所である。從つて彼等は止むを得ず極端なる壓迫的政治を行ひ以て漸くその政權を維持し居れる有樣だが、同時にこの壓迫的政治振は相當に力強く共產系を刺戟し、それが爲めに極端なる反抗運動さへ激成せしめ屢々血を流す程となつたのである。この點においてはセルビヤも同樣で現首相パシツチ氏系は民主黨首領ダヴイツドウイツチ（屢總理大臣となれる人）氏等を壓服し、往々民主政治立憲政治の趣意を奉ぜざるが如き姿あるに對し、自然一部の血若き青年を刺戟し、或は必ずしも共產主義でない所謂自由主義者をも刺戟し、それが原因となつて同國における共產黨擡頭の結果を招來せんとする傾向あることも否認し能はざる所である。

以上は近東方面の紛紜の二大要因であるが、之について第

三つの民族として數へらるべきものは、既に昔よりの[illegible]らざる同方面諸國の民族性とその政治的地位と[illegible]一致せざる點であらう。即ち大正二年（一九一三年）第二バルカン戰爭においてブルガリヤ敗北し、セルビヤ及びギリシヤが勝利の榮冠を贏ち得たる結果、所謂マセドニヤ地帶（これはギリシヤ人ブルガリヤ人セルビヤ人等相混合せる地帶）を處分するに當り、ブルガリヤ人多き部分をもセルビヤに編入したのであつた、ところが今回の世界大戰に際してもブルガリヤはトルコと共に同じく戰敗國となり、セルビヤは戰勝國の榮冠を擔へる結果マセドニヤにおける不當な領土分配狀態は遂に矯正さるゝに至らなかつた。それを元として躍動しつゝあるのが所謂「マセドニヤ運動」者即ちマセドニヤ在住ブルガリヤ人系統によつて起さるゝ運動である。之は從來アレキサンドロフ氏これが中心であつたが、最近同氏死去後プロトゲロフ氏今やその中心となり大いに畫策に力めてゐる、この派の希望はでき得べくんば彼等の根據とする地帶が同一民族たるブルガリヤ國に合併せられんとを欲し、若し合併にして望み難くば、せめてマセドニヤにおける彼等居留地帶に對し、自治權を許與されんことをセルビヤに希望してゐる。セルビヤ側にてはこれを以てブルガリヤに合併せんとする活動なりと看取し、高壓、假借し無いのである、從つて[illegible]としてバルカンの[illegible]も、[illegible]

以上を以て吾人はバルカンにおける將來の主たるもの[illegible]し得たと考へる、併し一言附記すべき要ありと思ふものは、斯の如き形勢の存在せる結果とは云へ、バルカンの國際關係組織が一層紛爭を挑發するが如き傾向を作りつゝあることこれである、それは何か、本年春に入つて步を進められつゝあるギリシヤ、セルビア、ルーマニア三國同盟協約案がそれである。前にも述べた如く人口交換問題、在トルコ、ギリシア人迫害についてトルコに惡感を高めつゝあるギリシアは自國内における少からざるブルガリヤ人に對して、保護を與ふることを欲せざるの態度を取つた。これは頗る皮肉の言ではあるが、トルコ内に住むギリシヤ國系少數民族の保護を熱望するギリシヤとしては、自家矛盾の甚しきものと言はねばならぬ。國際聯盟側主張の少數民族保護條約はギリシヤが今以て同意を表せざるのみならず、本年二月三日ギリシヤ議會は右少數民族保護協約を滿場一致を以て否決し去つた。斯の如くしてトルコと不和となりブルガリヤとの關係亦面白からざるギリシヤは、自己の地步を高めこれを安全に保さんとする意味において、セルビア國並にルーマニア國を誘ひ三國同盟を企て、ブルガリヤよりする侵略的行

動に對しては、これ等三國は互に援助を約束し、又トルコよりする侵略についても、ユーゴースラヴィアよりギリシヤに援助する協定が計畫されつゝある。吾々はひそかにこの傾向を見、その推移を考ふる時、現に不安なるバルカンが更に一層不安を加ふるなきやを思はざるを得無い。何故ならばあの小國間において總てを含む平和的聯盟を作らずして、小なる聯盟を作り他の一二國を敵とする以上、國際間感情を悪化し相互の關係面白からざる結果となるは疑ひなき所だからである。斯く考へつゝ本年若くは明年に亘りその今後におけるバルカンの形勢に想ひ到れば、暗雲随所に低迷し到底安意の域に達し難きを思はねばならぬのである。

四　疑懼の佛蘭西と獨英兩邦

バルカンを離れて西に向へば吾々は茲にフランス、ドイツ、兩大國の對峙を見るのである。思ふに本年四月はドイツにおいてもフランスにおいても一變革の時期を劃くした。それは何かと云へば四月二十六日ドイツ帝政派の大立物ヒンデンブルグ元帥が大統領に當選したことがその一つである。これに先ち四月十日フランスにおいてエリオ内閣が僅か十ケ月の短命を以て瓦解の運に會せることも亦重要なる事實の一でなければならぬ。而して是等の問題は皆フランス、ドイツの關係に根抵を有することを思へば、吾々はこれについて一考せざらんと欲するも得ないのである。然らばエリオ内閣の辭職は如何と見るに、その主なる原因は財政策の蹉跌から來たもので、同内閣は財政困難の結果フランス銀行をして、長く行はれざりし制限外紙幣發行を敢てせしめ、國家の信用を失墜して國債の價格を下落せしめたること及び國民の有する資金は重税負擔の可能性を憂ひ、又はフラン價下落そのものを憂ひて、自然速かに海外に流出せんとする傾向を生ぜしことなど、エリオ内閣財政策の失敗として世間に批評されたものである。是等は本年四月九日下院において問題となり、十日には上院においても同様論議の中心となつて、同内閣は遂に上院の議事に際し賛成百三十二反對百五十六即ち二十四票の差を以て信任案に破れた。全閣員は辭職しこれに代つてパンルヴェ内閣の出現を見ることになつた。今日フランスの難局を發生せるものは云ふまでもなく財政問題である。併し乍ら更にこれを探究する時はフランスの安全保障問題がその中心を爲せることを知らねばならぬのである。本年二月二日大統領ツーメルグ氏が述べた如くフランスにして戰爭中英米兩國より借りた債務を正當に解決するにあらざれば、フランスは屢財政上の難關に遭遇するのみならず、延いてフラン貨幣の爲

に關する[illegible]保守の協が、フランスは列國の[illegible]定めず、これに向つて活動せんとするにしても、先づフランス自身の安全保障問題が明確に定まらざる以上、この方面に思ひ切つた活動を試むる餘力を有しないのである。蓋しフランスはドイツその他に對して大なる要慎を有し、現に出兵を行ひ軍備充實の如き事柄もこれを中止することを能はざる狀態にある。從つて內閣が財政策により經濟變動を見たのも、見方によつてはフランスの安全保障問題解決せざる結果であると云ひ得る。之は[illegible]の議論の如くであるが、明かにその眞理を物語るものと云つて敢て過言ではなからう。最近アメリカ大統領クーリツヂ氏が軍備縮少會議を唱導せるに對しても、フランスは急に賛成の態度を採らんとはしない。これ安全保障問題確定せざるが爲めで、列國と共に軍備制限を斷行することができないのみならず、動もすればフランスの聯合國及びドイツその他に對する政策が、一部より保守的、反動的なりと批評せらるゝのも亦、同樣原因に胚發せりと見て宜からう。然らばフランスの憂慮せる安全保障問題とは何か、その一面は過去四百年間に亘りフランスとドイツは彼のアルサス・ローレン地帶において、或はライン方面において、相爭へる歷史を有し、相信ぜられざるが如き傳統的原[illegible]千八[illegible]ナポレン戰爭及び一八七[illegible]に於ける普佛戰爭、更に今日の世界大戰爭を經來れる歷史に鑑みてフランスの當時の要求に對する歷史的背景を[illegible]なるに[illegible]くないのである。

第二にフランスをして安心せしめ得ないものは同國の人口問題である。ドイツは現に世界大戰のために多くの領土を失つたと雖も尚本國人口六千萬を有し然も年々五十萬餘の增加を見つゝあるに反し、フランスは現在總人口三千九百萬にして然も兩三年前の研究によれば、一年間二十萬宛の減少を示しつゝある。この勢を以つて進まんか、今後五十年を經過せばフランスは遂に人口二千五百萬に減退し、隣國ドイツに對して悔ゆべき弱小國たらざるを得ない。この一事はフランス上下に一大刺戟を與へずには措かなかつた。尤も人口減少の形勢はその後の統計において幾分改善を見たかとも見られる。それは少しも減少せざる年が出て來たとであるが、併し大勢上不可なることは論を俟たない。斯の如き現狀に在るフランスは今回大戰に敗北し、賦訟賠償の地位に在るドイツが如何なる機會において復讐戰を企つるやも知れざるため、自己擁護上「安全保障策」を講ぜねばならぬ運命に會して居る。世界大戰終了の一九一八年一九一九年當時

においてはフォッシュ元帥の所謂『ドイツ國境はライン河を以て終らしむべし』とする主張となつて現はれ、時の大統領ポアンカレー氏の賛成を得たが、愈講和會議に提議せらるゝや、米國の大統領ウイルソン、イギリス首相ロイド・ジョーヂ兩氏は、この案に同意せず斯の如きは約七百萬を數ふるライン地帶のドイツ人をその國外に移すものにして、第二のアルサスローレンを作り將來戰爭の禍根を發生する虞れありとの見地より、反對を表して下らなかつた、その結果妥協案として作られたものは即ち

第一、向ふ十五年間聯合國においてライン河左岸を占領すること

第二、ライン河橋頭及びライン右岸一帶約五十キロメートルの地帶にドイツ側において砲壘を作らざること

第三、向ふ十二年間ドイツの兵數を十萬人に減少すること

第四、英佛米間に同盟條約を作りライン方面に對して英米兩國においてフランスの安全を保障すること

等の策が採られた。而して第四の英米對佛安全保障は大正八年六月二十八日ヴエルサイユ講和條約と同時に調印せられたる彼の英米佛三國同盟條約に現はれたのである。かくてフランスは不充分ながら一旦安心すべき地位に立つたが、その後米國はヴエルサイユ講和條約批准を拒絶すると共に、三國同盟條約の批准をも拒絶したのでフランスのドイツに對する態度は又復增加せねばならぬこととなつた。この際ドイツを壓迫しその資力能力を最大限に破碎し以て、再び起ち得る時期を遠き將來に遲らしめんとする策を案ずるものも出で、或はライン地帶における住民を煽動しこれをドイツより分立せしめ、斯くして物資豐富なるドイツ富源地帶をフランスの經濟的勢力範圍にもたらさんとするが如き計畫を立つるものも生じ、是等が種々なる運動となつてフランスの上下に現はれたのは無理もなき次第である。

聰明なるイギリス首相ロイド・ヂョーヂ氏はこの大勢を看取した。而してこの際イギリスとして何等かフランスに對し保障を與ふるにあらざれば、對獨問題解決容易ならざるのみならず、ヨーロッパ大陸の恢復問題又困難であり、ヨーロッパ恢復せざればイギリスの商業的活動又至難となり、延いて自國民生活の安意期待し難きを考へた、その結果として具體化されたるものは即ち一九二二年一月有名なカンヌ會議における英佛同盟條約案であつた、その內容は『若しドイツにしてフランス領土に對して何等挑發を受けざるに侵略的活動を始むる場合にはイギリスはその海陸軍空軍の總てを以てフランスを援助すべし』と云ふのであつて、その外斯る場合に對し相互間海陸軍に關す

る當事者たすことと爲つて、其條約は向ふ十ヶ年間有效とするもので つた事情が含まれてゐた。これに對して當時のフランス首相ブリアン氏は賛成して居り、成立を見るべき形勢であつた、ところが同國議會におけるポアンカレーその他一派はこれに滿足せず一月中旬猛烈なる攻撃を首相ブリアン氏に加へ、遂に同内閣を破壞せるため、右同盟條約も成立を見ずして終つたのである。ポアンカレー氏等の反對論は何處にあつたかと云ふに、右英佛同盟條約案が有効期限十ヶ年とあるが、今ドイツの形勢に鑑るときは、ドイツが若しフランスに對して不當なる活動を開始し得る時期ありとせば、十年以内でなく十年の以後なることは想像に難くない、從つて該同盟條約は大したる効果なしと云ふのがその非難の一であつた。次にフランスとして望む所は、唯佛獨國境なるライン地帶におけるドイツの侵略に對する保障のみにあらず、從て自己の安全策として作つたもの即ち、ドイツ東方國境において背後よりドイツを牽制すべき所の小國の聯合に對する、或る程度の後援若くは保障の約を得んとするにあつた。蓋しドイツ背後のポーランド國については、一は民族主義にも出でたが、一はフランスが對獨牽制政策の立場からドイツの背後に新たに護り立てた國家であつた。故にイギリスにてもドイツ東方國境國家に對し、何等かの保障を與へしめんとはフランスの望んだ所であつた。而してポアンカレーが内閣を組織するに至つて首相となるや、イギリスに對してこの意味における同盟條約協議を試みんとしたが、遂に成功を見なかつた。

かくてフランスは自己の安全保障策失敗の爲め、頭が上に神經を尖らせ、ドイツの實力を破碎することによつて、彼の復興とその復讐戰の機會を成るべく遼遠ならしめんと考へたのが、即ちドイツの賠償金支拂不能となれる時期を利用し彼のルール占領を斷行するに至つた動機の一であつたことは、當時の事情を知る人の尚記憶に新たなる所であらう。要するに今日フランスに對し列強側においてその安全を保障する協定を與ふるにあらざれば、フランスの對獨政策は決して緩和を見難く、フランスの對獨政策緩和を見ざる以上、獨佛衝突の形勢は常に存在し、西ヨーロッパが和氣藹々たる空氣中に睦ることは到底望み得ない所である。

五　困難なる安全保障協約問題

然らば實際問題として此フランス安全保障問題は如何に進みつゝあるかと言ふと、之につきて企てられたものゝ一は昨年九月より十月に亘れる第五國際聯盟總會において作られた平和議

定書であつた、這は獨り佛獨間の安全保障問題のみでなく、一切の紛議問題を仲裁に附すると共に、國際聯盟の規約に違反し恣に侵略的活動を爲す國家に對し、締約國は軍事的制裁を加ふるの義務を課するものであつた。若しこの平和議定書にして成立せんか海軍力を有する英國は、その海軍力を使用せねばならず、陸軍力あればその力を提供せざるを得ないのであつて、同議定書が頗る徹底的のものなりしだけそれだけ世界平和のため根柢的貢獻をもたらす性質であると共に、フランスも最も之が恩惠を感ず可きであつた。ところが同議定書は不幸にして失敗に歸したのである。即ちイギリスにおいては昨年十一月マクドナルド勞働內閣倒れ、統一內閣成立するや同內閣は直に平和議定書に對し支持を拒むの態度を取り、遂に本年三月ジユネーヴにおいてイギリス外務卿オースチン・チエンバーレン氏は該平和議定書を放棄するの態度を聲明するに至つた。平和議定書の成立にはヨーロツパ諸小國は勿論フランスも熱心賛成を表したが、イギリスの態度豹變に會し最早問題とならなくなつた。然らばこれに代つて起れるフランスの安全保障策は如何と云ふに、イギリス外務大臣チエンバーレン氏の英佛保障條約案である。チエンバーレン氏は在野時代からフランスに對しイギリスの保障を附與し、以て英佛關係を良好にし、戰爭中の提携狀態を繼續するを可とする論者であり、在朝の今日においても同樣である。同氏の意見に曰く、イギリスは一九一九年既にアメリカと手を携へ對佛援助を約した、然るに該條約はアメリカの不自然なる態度によりて成立を見なかつたけれども、イギリスとしてはともかく一旦フランスに對して保障を與ふる義務を負へる責任上、今日においてフランスは勿論隣國ベルギーに對して、保障を與ふるのが正當である。同時に斯くの如くフランス、ベルギーに對し安全保障を約することはイギリス自身に取りても決して不利でない、何故ならば將來ドイツが復讐戰を爲すと假定せよ、ドイツは必ずイギリス海峽においてアントワープ或はオランダ諸港を占領せんとするに相違なく、若し然る時は彼は世界戰爭中或程度の威力を示せし例の空軍力を今後一層使ふ可きは火を睹るよりも明かである。ソウなるとドイツ空軍力と我イギリス國との間を隔つるものは、唯狹き水の一線たるイギリス海峽あるに過ぎない。遠き以前においてはイギリスは狹き海峽あるがために島國として極めて有利なる地位を占め得たるも、近事の如く空軍の活動容易且つ大規模に行はるゝ時期にありては、イギリスの島嶼たる地位による安全は既に消滅せるものと云はざるを得ぬ。從つて將來佛獨開戰の如き場合イギリスはこれを對岸の火災視せんとするも最早許されざる狀態にある

つた。[illegible]は、[illegible]ち希望する所である。併しながらチエンバーレン氏の意見果して實現し得るや否やは甚だ疑問にて、ここに多少の疑問あることを知られねばならぬ。所謂とは何か、此點に於けるイギリス内閣の意見は三箇に分れて居る、第一はチエンバーレン氏の保障贊成論だが第二は二三大臣によりて主張さるゝ孤立主義是れである。此派は今日イギリスが他國に保障を與へヨーロッパ大陸の紛糾に身を投ずるが如きは頗る不利にして寧ろその紛糾中より脱却するを賢明と説いて居り、又た重要な保障をフランスに與へんとする義務が、一九一九年英米佛條約不成立の行懸りとして現にイギリスの肩に負はされて居ることをも否認しつゝあるのである。第三は現閣員中の少からざる部分即ちバルフォール伯を始め有力なる分子を含める一團の意見である、之は所謂國際平和聯盟が國際聯盟によつて作られたる今日において、地方々々の局部的同盟を作るが如きは不利であつて、寧ろ平和主義發展の道程における退化的現象を示すものなりと云ふにある、換言すれば英佛同盟條約を作り以てドイツの進擊に對する保障を新たに設くることゝならば、一の團體を作り以て他の團體に對し軋轢せんとする傾向を示すに外ならぬ、それより寧ろドイツは勿論總てのものを含む平和的聯盟を作るが正當であり、現に[illegible]あること[illegible]つゝある、去ればとて、[illegible]は一九二四年平和議定書[illegible]とする譯でも無く、一種異様の地位に立つて居る。之は[illegible]斯くの如き意見不一致の結果で外務チエンバーレン氏の意見は今以てイギリス内閣の容るゝ所とならぬのである、斯くの如くにして今や英佛保障問題は再び蹉跌の狀態にあることを忘れてはならない。同時にフランスは之が爲めその軍備案を緩和する能はず、軍備制限案にも贊成し得ざる境遇にあり、從つて國費は減ぜず、多大の犧牲を拂ひながらも獨佛國境方面における各種活動をも停止し得ず、今後依然として財政的經濟的に艱難の境涯を脱却する能はざる可き難局に在ることを忘れてはならない。

以上は目下におけるフランスの地位を説明し併せて其の對獨關係及び對英關係を概言したものであるが、是等の點から見て吾々は西ヨーロッパ安定的傾向にありとは容易に斷言し難いことを覺ゆる。併し事實は總て事實なるを如何ともすることが出來ぬ、唯この間において多少別種の方面より獨佛の調和を圖り得、西ヨーロッパの空氣を平和的に改善し得べき眼光が、少しも發見されない譯ではない、それは何かと云ふと、ドイツ側より出せる別種の安全保障條約案是れである。本年一月下旬ロン

ドン駐剳ドイツ大使はイギリス外務卿チエンバーレン氏を訪問し、ドイツの相互安全保障條約案なるものを提議したのであつた、その内容は從來英佛白三國間の安全保障條約案に更にドイツを加へ、その條約の實質を一變せんとするものであり、即ち從前ドイツを敵としその侵略的行動を豫想し、之に當る目的で英佛白間に結ばんとせる相互保障條約と異り、ドイツ自からこれに參加し以て相互間に各自の現在領土を保障し、侵略的行動を取らず安全を維持せんとするものであつた。而してドイツの案によればこれを獨りイギリス、フランス、ベルギー、ドイツ四國のみに止めず、更にイタリーをもそれ自身希望するにおいては、これに參加せしめんとするのであつた。今その條約案の要點を擧ぐれば先づ

第一、フランスと平和的協定を作るため特別條約を定むる意思を有すること。

第二、ラインに關係を有する諸國間に相互的保障條約を作り同時に萬々一相互間紛議を生じたる場合においては、これを仲裁々判に附する規定を設くること。

第三、ドイツは獨り是等ライン地帶における諸國間のみならず、その他總てドイツと國境相接せる諸國との間における。國際紛議を仲裁々判に附するの條件を作らんとすること、具體的に言へばポーランドその他東國境問題をも含む仲裁條約を作らんするの意思を有すること。

などを示したものである。イギリス外務卿チエンバーレン氏はこの提案に對し、イギリス自からこれをフランスその他諸國に交付することを拒み、ドイツ自身各國に提出せんことを勸告した。その結果翌二月上旬駐佛ドイツ大使はフランス首相エリオ氏と會見し、右について協議を試み、二週間後にはドイツをも加へたる相互安全保障條約の委曲を盡せるものがイギリス、フランス、ベルギー、イタリー諸政府に同時に提出せられた。この案によると、英内閣におけるバルフオール伯その他の英佛保障條約反對論は之には適用せられ得ざる譯となるのである、何となれば一部對敵を假定して同盟する協定にあらずして、一種の完全なる平和聯盟の姿となるからである。而してチエンバーレン氏も若しフランスにして之に同意するにおいては、右ドイツ提案の成立を希望する地位にあるは云ふまでもない、何故ならばドイツを假想敵とする一點を除けば、その他においては確かに英佛安全保障協定と同樣の效果あるのみならず、ドイツの提案そのものに對しても英佛共に修正提議を爲し得るが故に、同提案を基礎として協議を進むる點において、イギリス側に何等異議ある可くも無いからである。

は今や二大勢力の間に分割さるゝことを否認する。その一はドイツ提案の内容に關するものであり、他は提案以外における政治的事情である。先づその一とは何かと言ふと右の保障條約においてドイツが認めんとする所は、即ち現在の佛獨及び獨白國境の現狀である。換言すればライン地帶のドイツ西方國境に關するものにつきては、同國は大正八年六月二十八日ヴェルサイユ講和條約が定めたる境界をその儘承認せんとするのである、顧みて講和會議當時ドイツが決して西國境における領土の分配擴張に對し滿足を表せざりしことに鑑る時は、その後における同國態度の變化こそは、當さに平和的曙光に一歩を進めた證據でなくて何であらう。この一點についてドイツの安全保障條約案は歡迎を價するに相違なく、フランスに取つても亦同感なるを疑は無い。併し茲に問題を生ぜねばならぬのは、ドイツ案が同じ意味の保障をその東部國境に關して與へざること是れである。蓋しヴェルサイユ講和條約はポーランドに對して舊ドイツ領上シレシヤの重要部を與へた。勿論條約そのものは、その所決を、人民投票に問ひ以て同地帶の分配を行ふこととしたのであつたが、然も人民投票後、之を本とした國際聯盟委員の領土分配方法は、上シレシヤにおいて多く石炭を産する地帶を成るべ

[illegible]ト側に讓し得意せしめたるのみならず、之と共に[illegible]なるべくポーランドに附したる結果、ポーランドの獨りは夫にダンチッヒに入ることとなつた。これは勿論聯合國において新しく成立せるポーランド國の經濟的生命を維持する上に、極めて必要なる事柄と考へられた爲めに相違ない、之れ亦た石炭豐富なる上シレシヤを成るべくポーランドに得せしめたる一心事と同じきものがあらう、蓋しポーランドを縱横に流れバルチック海に注ぐヴイスチユラ河は、實にポーランドの經濟上交通上重大使命を有するもの、而してその河口の支配者こそダンチッヒ港であるからである。左れば此ダンチッヒ港を競爭相手たるドイツに支配せしたることがポーランドに執りて許し難き立場に在るは言を須ひざる所である。而して此ポーランドに對してフランスは之を支持せねばならぬ立場に在るのである。否なポーランドこそはフランスがドイツを背後より牽制する目的を以て打立てたる國家であるから、之が國境を支持することは、フランスの國策の一である。然るにこの點においてドイツは西部國境に對するが如く、同一保障を與ふることを肯せざるのみか、同方面國境の改正を希望して止まぬ、唯だ此改正を武力に愬へず成るべく平

ドン駐剳ドイツ大使はイギリス外務卿チエンバーレン氏を訪問し、ドイツの相互安全保障條約案なるものを提議したのであつた、その內容は從來英佛白三國間の安全保障條約案に更にドイツを加へ、その條約の實質を一變せんとするものであり、卽ち從前ドイツを敵としその侵略的行動を豫想し、之に當る目的で英佛白間に結ばんとせる相互保障條約と異り、ドイツ自からこれに參加し以て相互間に各自の現在領土を保障し、侵略的行動を取らず安全を維持せんとするものであつた。而してドイツの考によればこれを獨りイギリス、フランス、ベルギー、ドイツ四國のみに止めず、更にイタリーをもそれ自身希望するにおいては、これに參加せしめんとするのであつた。今その條約案の要點を擧ぐれば先づ

第一、フランスと平和的協定を作るため特別條約を定むる意思を有すること。

第二、ラインに關係を有する諸國間に相互的保障條約を作り同時に萬々一相互間紛議を生じたる場合においては、これを仲裁々判に附する規定を設くること。

第三、ドイツは獨り是等ライン地帶における諸國間のみならず、その他總てドイツと國境相接せる諸國との間における。國際紛議を仲裁々判に附するの條件を作らんとすること、具體的に言へばポーランドその他東國境問題をも含む仲裁條約を作らんとするの意思を有すること。

などを示したものである。イギリス外務卿チエンバーレン氏はこの提案に對し、イギリス自からこれをフランスその他諸國に交付することを拒み、ドイツ自身各國に提出せんことを勸告した。その結果翌二月上旬駐佛ドイツ大使はフランス首相エリオ氏と會見し、右について協議を試み、二週間後にはドイツをも加へたる相互安全保障條約の委曲を盡せるものがイギリス、フランス、ベルギー、イタリー諸政府に同時に提出せられた。この案によると、英內閣におけるバルフオール伯その他の英佛保障條約反對論は之には適用せられ得ざる譯となるのである、何となれば一部對敵を假定して同盟する協定にあらずして、一種の完全なる平和聯盟の姿となるからである。而してチエンバーレン氏も若しフランスにして之に同意するにおいては、右ドイツ提案の成立を希望する地位にあるは云ふまでもない、何故ならばドイツを假想敵とする一點を除けば、その他においては確かに英佛安全保障協定と同樣の效果あるのみならず、ドイツの提案そのものに對しても英佛共に修正提議を爲し得るが故に、同提案を基礎として協議を進むる點において、イギリス側に何等異議ある可くも無いからである。

[illegible]
[illegible]ることを[illegible]する。二つの一はドイツ[illegible]提案の内容に關するものであり、他は提案以外における[illegible]事情である。先づその一とは何かと言ふと右の保障條約においてドイツが認めんとする所は、即ち現在の佛獨及び獨白國境の現狀である。換言すればライン地帶のドイツ西方國境に關するものにつきては、同國は大正八年六月二十八日ヴェルサイユ講和條約が定めたる境界をそのまゝ承認せんとするのである、顧みて講和會議當時ドイツが決して西國境における領土の分配規張に對し滿足を表せざりしことに鑑る時は、その後における同國態度の變化こそは、眞さに平和的曙光に一步を進めた證據でなくて何であらう。この一點についてドイツの安全保障條約案は歡迎を價するに相違なく、フランスに取つても亦同感なるを疑は無い。併し茲に問題を生ぜねばならぬのは、ドイツ案が同じ意味の保障をその東部國境に關して與へざることと是れである。蓋しヴェルサイユ講和條約はポーランドに對して舊ドイツ領土シレシヤの重要部を與へた。勿論條約そのものは、その所決を、人民投票に問ひ以て同地帶の分配を行ふこととしたのであつたが、然も人民投票後、之を本とした國際聯盟委員の領土分配方法は、上シレシヤにおいて多く石炭を産する地帶を成るべ

[illegible]せしめたるのみならず、[illegible]ンドに附したる結果、ポーランドの殘りは正にダンチッヒに入ることとなつた。これは勿論聯合國において適しく成立せるポーランド國の經濟的生命を維持する上に、極めて必要たる部分と考へられた爲めに相違ない、之れ亦た石炭豐富なる上シレシヤを成るべくポーランドに得せしめたる一心事と同じきものがあらう、蓋しポーランドを縱横に流れバルチック海に注ぐヴイスチユラ河は、實にポーランドの經濟上交通上重大使命を有するもの、而してその河口の支配者こそダンチッヒ港であるからである。左れば此ダンチッヒ港を競爭相手たるドイツに支配せしむることがポーランドに執りて許し難き立場に在るは言を須ひざる所である。而して此ポーランドに對してフランスは之を支持せねばならぬ立場に在るのである。否なポーランドこそはフランスがドイツを背後より牽制する目的を以て打立てたる國家であるから、之が國境を支持することとは、フランスの國策の一である。然るにこの點においてドイツは西部國境に對するが如く、同一保障を與ふることを背ぜざるのみか、同方面國境の改正を希望して止まぬ、唯だ此改正を武力に訴へずに成るべく平

和手段によつて解決せんとして居ると言ふ丈けである。之は現國際聯盟規約第十九條が、條約改正の可能を認め、最早不適當となれる條約は修正せらるべきものなりとの同規約の精神に基くものであり、ドイツ側は此見地に依り、ヴェルサイユ講和條約と雖も、既に事情に不適當なるものは當然修正し得べきものなりとし、具體的に言ふと、ポーランドとの國境及びダンチッヒの如き、ドイツに取りて不正當不滿足な處分であつたから、今後宜しく平和的手段に愬へこれが修正を爲すべきものなりと主張しつゝあるのである。即ち西部國境については現狀そのまきを認め相互の保障と爲さんと考ふるドイツは、東部國境になると態度一變、同一保障を與へず、將來これを修正するが如き機會あらば寧ろ仲裁々判に附し或は國際聯盟の如き機關に愬へ、平和的にその變動を期せんと聲言して居るのである、是れ豈本問題につき一大難關を造るものでは無からう乎、フランス自身の安全策として打ち立てたポーランドを保護しその領土を安全ならしむることが、フランスの根本策なるを思ふと、ドイツ側が西部國境に對する講和條約規定を承認せるが如く、東部國境についても之を承認し完全にその變更を求めざるの保障を與へざる以上、フランスとしてはドイツ提案に應じ得ぬではあるまい乎。即ちカンヌ會議の場合イギリス首相ロイド・ヂョーヂ氏がフランスに對して英佛條約案を提議したる時、ポアンカレーその他がブリアン内閣を倒壞せしてまで不滿足を表示せる所以のものは、當然東部國境に關しても保障なからざるべからずとの主張に出でたものであつた。然るにドイツ提案の四國安全相互保障條約若くは場合によりては五國となり得る安全條約中にはそれが示されてない、吾人はこれに對してフランスが滿足するや否やは多く問ふを要せぬやうに思ふものである。

第二の難關は本年四月二十六日ドイツ總選擧において帝政派の巨頭ヒンデンブルグ元帥が大統領に當選せると是れである、何となればドイツ側主唱たる安全保障條約には、從來共和派系の贊成多かつたに反し、帝政派は少からず異論を唱へ居たのである、尤も該案提議を爲せるは帝政派に近きルーター内閣であつたけれども、今後ヒンデンブルグ執政がこの案に贊意を表する否やや一の疑問である。之に加ふるにヒンデンブルグの如き帝政派がドイツ政局の表面に立てることは、さなきだにフランス側の對獨嫌視を増加し、その執政に對する疑惧の念を加ふるものであり、此點からもドイツ提議の保障條約案の前途、困難を極むることを思はねばならぬ。而して若しもドイツの安全保障提議失敗する場合、英内閣にしてチエンバーレン氏の所謂英佛新保障條約案に贊成することゝもならば、形勢は多少靜化

ならして。民族上の主張を言はねばならぬ。かくの如くにして南歐天地の空に於ける暗影は、容易に拂ひ除かれざるを思はねばならぬのである。

六　伊太利の內治外交

然らば予は之より步を移して地中海の半島イタリーを見やう。目下イタリーについて如何なる疑問が吾々の面前に現はれるかと云ふに、その第一はベニトー・ムソリニ氏の極端に壓迫的獨裁的な政治が、現下如何なる事情にあるか、如何なればこそ沒落もせず繼續され居るかである。第二は同國外交政策が現在如何に動きつゝあるか、而して將來における成否如何等の問題である。

顧ればベニトー・ムソリニが約五十萬の所謂國粹黨員を提げてローマに前進し、政府占領を企て遂に內閣を乘取つて以來、正に滿二ケ年半を經過したのである。而してその最初の一ケ年餘は實質上イタリー憲法の運用は中止せられ、彼は勝手にその內政外交を左右した、彼はその後議會の活動を恢復したけれども、彼一流の所謂全國を一大選擧區とし、多數投票數を得たる黨派に議會の三分ノ二の議席を占めしむる如き、前例なき新[illegible]の[illegible]、從來の政府に見られなかつた[illegible]たことなどは、一般社會の政治と政黨の[illegible]な政治ぶりに飽き、ムソリニ派の勇氣ある出現振りに好奇心を起した人民をして、漸次反感を發生せしめて來た。この結果はやがて議會に反映し、サランドラ、チヨリチー等の諸政治家によつて公然反對の聲を放たるるに至つた、最初國粹黨が政權を掌握せる當時においては、前首相サランドラ氏の如き最も熱心なる支持者の一人であり、チヨリチー氏亦ムソリニとの關係不良ではなかつた、即國粹黨以外從來の自由派の若干部分も謂ば彼の別働隊の如き姿を以て、彼を支持し今日に及べる有樣である、この外前首相オルランド氏等の如きムソリニ氏と良好關係にあつた、ところが此等政治家は今や反對態度を取り始めた。現に昨年秋以來イタリー議會開かるゝや、ムソリニ反抗の意味において國粹黨以外諸黨派は出席を拒絕し、本年一月十二日議會再開さるるも議員の少からざる部分は、その意見書を發表し以て議會欠席を繼續した。そこで二月十三日ムソリニは議會において演說を試み、彼は國粹黨の完全なる孤立を承認したのである。之は政治家ばかりでは無い、實業家側の態度如何と云ふに、昨年一九二〇年社會黨がイタリーにおいて甚しき亂暴なる行動を繼續し、

同盟罷業に次ぐに同盟罷業を以てせる時代にあつては、資本家實業家は國内の秩序維持安定を希望せる結果、これを支持し、之に依つて社會黨を壓服せんとし、爲めに喜んで國粹黨の運動資金募集などにも、援助を與へた、これが國粹派の成効を期せしむるに與つて力あつたことは言ふ迄も無い、ところが今日にありては各地方とも年若き無智識なる同黨青少年が、該地方國粹派の中心機關を占め、不當極まる資金の強制募集がつゞくので漸く嫌厭の念を増して來た。又地方官吏は如何と云ふに所謂知事と云ひ市長と云ひ市參事會員の如きものも、其地方において殆ど王者の如き威力を揮ふ國粹黨支部員、(それ等の多くは二十歳前後の年少者にして日本で云へば壯士輩の如きものだが)に壓迫され、これが言に服從せざれば或は毆打され、甚しきは殺傷の目的物とされるので、眞にその信念と知識とを發揮して地方政治の進歩を圖ることが出來ぬ、爲めに漸次ムソリニ派と精神的に離隔しつゝある有樣である、然らば此間ムソリニ氏がその勢力を維持しつゝあるは何故かと言ふと、一はイタリーにおける國粹黨が今やその組織堅固にして、暴力團として有効なる活動を爲し得る地位にあるを利用し、而して自ら政權把持の優位を恃み、先づ極端なる壓迫政策によつて一時的に反對派を沈靜して居ること、第二には日新しき計畫を世上に發表し、之によつて一時的に人心の轉換を圖り彼等に一路の希望を與へ、局面の新發展を待たしめつゝあること是れである。第一の壓迫策は如何と言ふと、從前も行つた所であるが、先づ自己の味方をして反對派の新聞社を襲撃し其工場を燒かしめたり、猛烈に活動せんとする反對政治家を暗殺し誘拐し若くは毆打せしめ、或は反對團體の集會と宣傳を禁止して憚らないのである。而して此種の迫害策は今春に入つて一層露骨さと猛烈さとを加へて又新らしい姿のものも現はれて來た、それは本年一月十二日の秘密團體管理法案提出、一月八日所謂「四十八時間以内反對派鎭撫策」の實行、並びに一月以後の在郷軍人團壓服方法採用に最も善く反映した所である。第一の秘密團體管理法案は、各種團體、倶樂部をして倶樂部員姓名、設立目的、其他委曲の屆出を求むるを主要の意味として居り、形式上辯護の餘地があるけれども、之が運用はフリーメーソン以下國粹派反對團體の壓迫策なるは言ふ迄も無い、第二の四十八時間以内反對派鎭撫策とは外でも無い、ムソリニ氏は昨年十二月から本年一月にかけ自由派新聞コリエル、デラ、シエラ(伊國最大の新聞)、スタンパ(ジヨリテー氏の機關)社會黨新聞アヴンチを始め諸新聞に一齊的押收、發行停止を行ひ、言論壓迫を行つて來たが、一月彼は四十八時間に反對派を鎭壓し終る可しと公言し、一月八

日事實上の[illegible]ムツソリニへ[illegible]とも
に對し國家の安全平和に必要なりと認めらるゝ[illegible]手段を試る
權限を附與するに決定したが、之は一現在の法規が許せるもの
と否とに拘らず、如何なる手段をも執り得ること—との意義の
ものであり、反對諸派[illegible]の目的たるは言ふ迄も無かつた、ソ
コデ反對諸派は、悉く沈默し、言論の關する限り、國内平靜と
なつたのであつた、第三の在鄕軍人團領袖とは外でも無い、同
團は始め國粹黨政府を支持して居たが、昨年頃から漸く其壓迫
振りに反感を生じ、昨年十一月休戰紀念日に國粹派と在鄕軍人
團の衝突事件續發し、又た軍人團中心人物ガリバルチー將軍の
激烈な反抗派動開始となつた、ところがムツソリニ政府が在鄕軍
人團が廢兵其他に支給せらるゝ國費分配に當るの故を以て、本
年三月二日その幹部の免職を斷行し以て一時的に同團の不平を
彈壓し去つたのである、此等の例は彼の強壓振りの一端を示し
たものだが、然かも玆に忘れてならないのは、彼は決して好ん
で此種壓迫政策を執るのでは無いことである。現に彼や昨年
夏、從來の國粹派本位策を離れ、之より一層廣き地盤の上に自
己の根據を置かんと肝膽を砕いたのであつた。然かも之は成功
を見るを得なかつたのである。それは國粹黨内の極端派が彼の
此企劃に對し不滿を唱へ黨内の分裂の危險をさへ發生せんとす

[illegible]
[illegible]法において[illegible]一に[illegible]せず、黨の
[illegible]つたのも實は
[illegible]の失敗の原因であつたのである。二には[illegible]の目下に於
ける極端なる壓政策が、當局の國内の反對者を[illegible]せしめ以て
一時的に彼の勢力維持に貢獻して居ることは、疑ひも無き所と
言はねばならぬ、斯く言ふと、人或は問はう「これにしても在野
自由諸黨は意氣地無いのでは無いか」と、然り目下在野自由諸
黨の缺陷がその活動不十分の一因たるは勿論である、本年一月
六日自由諸派から國粹黨内閣に參加して居た司法卿オヴィリ
オ、文部卿カサチ、工務卿サロシの三名が辭職し、同時に從來
協力困難であつた自由諸派が老政治家ジョリテー氏を假りに押
し立てゝ居るのは、諸派の連合好都合になつた徴候のやうだけ
れども、實際ソウでは無く、諸派內補ひに嫉視する結果、色
節、活動の力なき老人物ジョリテー氏を妥協的にその中心人物
たらしめて居ることを拒む譯には行かぬ、此諸派間の[illegible]こそ
反對諸派聯合が組織(オルガニゼーション)を完成する上に一大阻害となつて居るのは
疑ひが無い、然かも之を以て見ると、ムツソリニ氏が恃む所は矢
張り兎も角も國粹黨の支持を唯一の使命とする約十萬の訓練
整つたファシモ隊の強き「力」があり、水火の間に彼を助けん

同盟罷業に次ぐに同盟罷業を以てせる時代にあつては、資本家實業家は國内の秩序維持安定を希望せる結果、それを支持し、之に依つて社會黨を懾服せんとし、爲めに喜んで國粹黨の運動資金募集などにも、援助を與へた、これが國粹派の成効を期せしむるに與つて力あつたことは言ふ迄も無い、ところが今日にありては各地方とも年若き無智識なる同黨青少年が、該地方國粹派の中心機關を占め、不當極まる資金の强制募集がつゞくので漸く嫌厭の念を増して來た。又地方官吏は如何と云ふに所謂知事と云ひ市長と云ひ市參事會員の如きものも、其地方において殆ど王者の如き威力を揮ふ國粹黨支部員（それ等の多くは二十歳前後の年少者にして日本で云へば壯士輩の如きものだが）に壓迫され、これが言に服從せざれば或は毆打され、甚しきは殺傷の目的物とされるので、眞にその信念と知識とを發揮して地方政治の進歩を圖ることが出來ず、爲めに漸次ムソリニ派と精神的に離隔しつゝある有樣である、然らば此間ムソリニ氏がその勢力を維持しつゝあるは何故かと言ふと、一はイタリーにおける國粹黨が今やその組織堅固にして、暴力團として有効なる活動を爲し得る地位にあるを利用し、而して自ら政權把持の優位を恃み、先づ極端なる壓迫政策によつて一時的に反對派を沈靜して居ること、第二には目新しき計畫を世上に發表し、之によつて一時的に人心の轉換を圖り彼等に一路の希望を與へ、局面の新發展を待たしめつゝあること是れである、第一の壓迫策は如何と言ふと、從前も行つた所であるが、先づ自己の味方をして反對派の新聞社を襲撃し其工場を燒かしめたり、猛烈に活動せんとする反對政治家を暗殺し誘拐し若くは毆打せしめ、或は反對團體の集會と宣傳を禁止して憚らないのである。而して此種の迫害策は今春に入つて一層露骨さと猛烈さとを加へて又新らしい姿のものも現はれて來た。それは本年一月十二日の秘密團體管理法案提出、一月八日所謂「四十八時間以内反對派鎭撫策」の實行、並びに一月以後の在郷軍人團壓服方法採用に最も善く反映した所である。第一の秘密團體管理法案は、各種團體、倶樂部をして倶樂部員姓名、設立目的、其他委曲の屆出を求むるを主要の意味として居り、形式上辯護の餘地があるけれども、之が運用はフリーメーソン以下國粹派反對團體の壓迫策なるは言ふ迄も無い、第二の四十八時間以内反對派鎭撫策とは外でも無い、ムソリニ氏は昨年十二月から本年一月にかけ自由派新聞コリエル、デラ、シエラ（伊國最大の新聞）、スタンパ（ジョリテー氏の機關）社會黨新聞アヴンチを始め諸新聞に一齊的押收、發行停止を行ひ、言論壓迫を行つて來たが、一月彼は四十八時間に反對派を鎭壓し終る可しと公言し、一月八

日本[illegible]いた、[illegible]ムッソリーニは[illegible]に對し民衆の安全平和に必要たりと認めらるゝ總ての手段を執る權限を附與するに決定したが、之は「現在の法規が許せるものと否とに拘らず、如何なる手段をも執り得ること」との意在のものであり、反對諸派代表の目的たるは言ふ迄も無かつた、ソコデ反對諸派は、悉く沈默し、言論の關する限り、國内不靜となつたのであつた、第三の在郷軍人團領袖とは外でも無い、同團は始め國粹黨政府を支持して居たが、昨年頃から漸く其壓迫振りに反感を生じ、昨年十一月休戰紀念日に國粹派と在郷軍人團の衝突事件續發し、又た軍人團中心人物ガリバルヂー將軍の激烈な反抗運動開始となつた、ところがムッソリーニ政府が在郷軍人團が廢兵其他に支給せらるゝ國費分配に當るの故を以て、本年三月二日その幹部の免職を斷行し以て一時的に同團の不平を強壓し去つたのである、此等の例は彼の強壓振りの一端を示したものだが、然かも茲に忘れてならないのは、彼は決して好んで此種壓迫政策を執るのでは無いことである。現に彼や昨年夏、從來の國粹派本位策を離れ、之より一層廣き地盤の上に自己の根據を置かんと肝膽を碎いたのであつた。然かも之は成功を見るを得なかつたのである。それは國粹黨内の極端派が彼の此企劃に對し不滿を唱へ黨内の分裂の危險をさへ發生せんとす

る[illegible]一に[illegible]せず、彼の[illegible]來の失敗の原因であつたのである。これは何も彼の目下に於ける絶對なる勢威迄が、當黨の國内の反對派を沈靜せしめ以て一時的に彼の勢力維持に貢獻して居ることは、少しも無き所と言はねばならぬ、斯く言ふと、人或は問はう「それにしても在野自由諸黨は意氣地無いのでは無いか」と、然り目下在野自由諸黨の缺陷がその活動不十分の一因たるは勿論である、本年一月六日自由諸派から國粹黨内閣に參加して居た司法卿オヴィリオ、文部卿カサチ、工務卿サロシの三名が辭職し、同時に從來協力困難であつた自由諸派が老政治家ジョリテー氏を假りに押し立てゝ居るのは、諸派の結合好都合になつた徵候のやうだけれども、實際ソウでは無く、諸派[illegible]互ひに嫉視する結果、老齢、活動の力なき舊人物ジョリテー氏を妥協的にその中心人物たらしめて居ることを拒む譯には行かぬ、此諸派間の嫉視こそ反對諸派聯合が組織(オルガニゼーション)を完成する上に一大阻害となつて居るのは疑ひが無い、然かも之を以て見ると、ムッソリーニ氏が恃む所は矢張り[illegible]國粹黨の支持を唯一の使命とする約十萬の訓練整つたファシモ隊の如き「力」があり、水火の間に彼を助けん

としつゝあること、之はイタリーの陸軍が全然政治に關係無く專ら政府の命に動くものたる點と相俟つて、事實上ファシモ隊をして、黨爭に於ける唯一の武器たらしめて居ることにあり、此點に依賴して彼はその高壓政策を、忌憚無く行ひつゝあるのである、併し賢明なるムソリニ氏は又た他方に於て新材料を以て人心を刺戟し、一種の希望を繫がしむるの策戰にも力めて居る、その一端は彼が昨年十二月提議し以て人心を驚動した新選擧法に現はれて居る。蓋し昨年の彼れは殆どイタリー全國を以て十五箇の選擧區とし、全體における投票數多き第一黨に三分二の議員數を得せしむる國粹黨に有利な選擧法を制定し、之に依つて選擧を行ひ、以て同黨の議會支配を確保したのであつたが、今回のは更に極端より極端に走り再び從前の小選擧區制に復歸することゝしたものであつた、即ちイタリー全國を五百六十の選擧區に分ち、有權者一萬人につき一人の議員を選出することとしたものであつた、之は今年一月下院を通過し、上院においては多少修正論を見たが遂に是認せられ、愈實行を見る機運とはなつた、本案が議會に提出さるゝやイタリー政治家は勿論一般人民は昨年の選擧法制定後未だ十二ケ月に達せざるに、突如選擧法改正の聲明に接し殆ど驚駭措く所を知らず、人心歸するに迷ふの狀を呈した。併しこの變革聲明に對してはイタリー一般人心に新しき刺戟を與へ、小選擧區贊成の反對派に一種の期待を有たしめたのは疑ひなき所であつて、此等の遣り口も亦た彼の勢力繼續の一時的原因の一たることは、推想するに難からざる所である。

斯くの如くにしてムソリニの政治は維持されて居るが、吾人は更らに彼が勢力存續の原因の一を他の方面にも發見するものである。

そは何か、之は伊太利刻下の外交が相當なる成功を收めた點に外ならない、依つて予は少しく此方面に言及して見度いと思ふ。

然らば外交的成功とは何を指すか、その一はアドリアチツク海方面における事績であらう。蓋しムソリニ氏は昨年一月フユーメ問題についてセルボ、クロアート、スロヴエーヌ國と條約を作り、以て首尾能くフユーメ港を我手に收めたのである、同問題は一九一九年パリー講和會議にて難關となり、一度イタリー代表オルランド氏のパリー退去をさへ見たものであつた、その後一九二〇年末ラパロ協約の締結を見たが、之もユーゴースラヴイアは勿論イタリー膨脹派に取り最も不滿不快に感ぜられたものであつた。尤も昨年一月の條約に於てもイタリーは何等犧牲を拂はぬ譯ではなかつた、即ちバロス港をセルボ、クロアー

ト、スロヴェーヌ（ユーゴースラヴィア國の[illegible]でフユーメ港內の重要なる一地點を[illegible]ユーゴースラヴィアに讓與し以てその商業に便せしめたることも、讓歩せる證據と見るべきである。併し大體から言ふと是によつてイタリー多年の主張たりしフユーメ領有に成功せることは、彼の名譽を國民の前に高からしめたる好材料であつたこと、誰か否認するものがあらう、又イタリーはフユーメ協定においてセルボ、クロアート、スロヴェーヌ國との多年に亙る紛爭狀態を一掃したのみか、更に一の同盟的關係をも作り、兩國は相互に（對オーストリー講和條約、對ハンガリー講和條約、對ブルガリヤ講和條約）において定められた狀態を維持するため互に協力すること、若し兩國の一方にして自から挑發せざるに他國によつて攻撃せらるゝ時は、一方は少くとも中立を守るの規定を設け、一の結盟狀態を現出したのである。而してこれが基本となり從來往々衝突すべく見られたイタリー對中央ヨーロッパ小協商國（即ちチエックスロヴアキア、ユーゴースラヴイア（セルビヤ）及びルーマニア）關係は玆に緩和され、約半歲以後チエックスロヴアキアとイタリーとの協商をも成立せしめ、これによつて戰後外交上にイタリーの競爭國とも見らるべきフランスの中央ヨーロッパに於ける勢力伸張、即ち小協商國をもその勢力下にもたらす[illegible]する[illegible]一[illegible]紛だと[illegible]せねばならぬ。こればかりではない彼は一昨年八九月の交アルバニアに於てギリシヤ人の手で行はれたイタリー國陸軍のテリニー將軍（國境協定のため派遣せられたるもの）暗殺事件起るや、軍艦をギリシヤ領コルフ島に急派し之を占領したる行動の如き、一方において世界諸國より侵略的行動なりとの非難は受けたが、他方においては是によりアドリアチック海におけるイタリーの權威を示してギリシヤを威嚇せるのみならず、伊太利に執りて大切なるアルバニアの住民にイタリー勢力の重きを悟らしめたのであつた。云ふまでもなくアルバニアはイタリーの對岸地であり、そこに他國の勢力を入るゝこととならばイタリーは直ちに脅威を感じなければならない、名義はともかく實質上において自己の保護的地域たらしむるは、歴代イタリー內閣の根柢政策であつた。アルバニアは現に獨立國として立てるも、國內には南部にギリシヤ系の勢力あり北部にはセルビア系の勢力扶植されてゐる、イタリーとしてはギリシヤ、セルビア兩國の勢力が浸潤して居るアルバニアに關聯して、自國將軍の暗殺事件を機會に、その競爭國の一たるギリシヤに思ひ切つたる威嚇を加へ、これを屈服せしめたことは事大

主義のアルバニア人に一敎訓を與へ、ここにイタリーの地歩を强めしことは容易に看取し得らるゝ所である、この事件を轉機として昨年一月フユーメに關聯し、イタリー對ユーゴースラヴイア（セルボ、クロアート、スロヴエーヌ國）との條約において、アドリアチツク北端の難問題を解決すると共に、中央におけるイタリーの對フランス競爭において一歩有利なる地位を占め得たるかの如き、又バルカンにおいてイタリーの地歩を堅固にし形勢を甚好に轉ぜしめたる等、イタリー國民の前には一の成功と映ぜしことは云ふまでもない。此以外に於ても彼の外交は今や人口問題に惱み物資問題に困じつゝあるイタリーに取り、一種の希望を與ふるの感を懷かしめたのである、元來イタリーは現在人口約四千萬を算し、年々五十萬の増加を示し、今日において旣に何處にかその出口を求めねばならぬ狀態にあるが、この出口は寧ろ閉鎖の傾向がある、例へば北米合衆國の如き一九二一年において二十二三萬のイタリー人を迎へたものが、その後所謂在米人口率を元とする制限策により、漸次その數を制限せられ、現在は僅か三千八百四十五人の入國を許さるるに過ぎない、さりながら年々増加する人口は何處にか始末しなければならぬ。同時に又たこれを移民策のみによつて解決し得可きでは無く、少くとも國內の工業を盛にし以て多數人口を養ふの策を講じなくてはならぬ、而して此工業を盛にする點において彼は恰も我日本におけるが如く、物資甚だ乏しく、國內には石炭なく石油ない、食糧品さへ又不足を告げ海外よりの輸入に仰ぐ有樣である、森林も少なければ漁業も發達しない、恰も「地中海は魚なき海なり」と詩人ダンテの云へるが如くである、要するにイタリーは物資問題を解決するにあらざれば、自から大國としての地歩を占め且維持することが困難である。然も人口問題及び物資問題緩和の爲めには海外に植民地を有する必要がある。ところがイタリーの有する植民地は極めて少なく、イギリスが三億四五千の人口を含む植民地を有し、フランス又五千萬人口を有する植民地を有するに對し、イタリーは僅か百五十萬を數ふる植民地しか有して居ない、これが爲めイタリーは現に支配しつゝあるアフリカのトリポリ、シレナイカを含むリビア地方を基礎とする發展策を講ずるか、又はエリトリア、ソマリーランド等を基礎とし紅海及び印度洋方面にも着々發展するの策を講じなければならない。領土を擴張し得る所あらば擴張するも可なれど、擴張困難なる所にては少くとも經濟的發展策を講ずるとが極めて喫緊事である、而して此活動策のためには第一に地中海におけるイタリーの勢力を强大ならしめて置かねばならぬ。地中海におけるイタリーの勢力强からざ

「ここにこそ[illegible]
リー首相はフランスがワシントン會議において[illegible]を加へられ、今や自國の力のみを以ては地中海にその霸を唱へ難き現勢となつた、ムソリーニはこの形勢に鑑み局面打破の一策として一昨年より昨年一月に亘り、スペインとの接近を企てたのである。先づ一昨年十一月スペイン皇帝のイタリー訪問を機とし兩國の接近は極めて密となり、間もなくスペイン軍艦九隻はイタリーに注文建造さるゝこととなり同時にイタリー、スペイン間にアンタン、コーヂアル（眞の協商）成立し兩國は地中海において相提携する形勢を作つたのである、而してこの提携が地中海及びアフリカ海岸におけるイタリーの勢力と威力とをフランス以上に强からしむる傾向を生ずることは何人も否認し能はざる所である。斯くイタリーの勢力が增加して來ると、之を巧みに利用すればアフリカ並に紅海方面における同國の人口膨脹策は勿論、物資開拓策の行はれ易きは論ずるまでもない所である。

次に數ふべきは昨年二月イタリーが他に先じてロシアを承認せることであつた、右承認は一昨年末既に伊露間に協定略成立せる關係に照し、實質的にイギリスに先つものであつて、それだけイタリーはロシアにおける利權獲得に對し、頗る有利なる地位を占め自國物資の供給問題に貢獻する所多かつたのである。[illegible]
[illegible]
なつたことは疑ふべからざる[illegible]、他の[illegible]きムソリーニの外交が今後果してその成功を持續すべきやは大なる疑問たらざるを得無い、何となれば彼が地中海においてスペインを拉し來り、自己の勢力を强め大に雄飛せんとする[illegible]に對しては、英佛の反對あるを知らなければならぬ。フランスが地中海における競爭者たるは現にアルゼリア、チュニス、モロッコを有せる立場より見ても、直ちに知らるゝ所、又イギリスにおいては實に東洋との關係上印度オーストラリアその他地中海との交通を重要視して居る、而して大戰の結果ドイツ沒落して北方の海上の危險が無くなつた結果、イギリスは從來常に北海方面において行つて居た海軍大演習を最近特に地中海に移し、ここに大規模なる演習を行つたのであつた、之れイタリーに取り一の教訓と云ふべきである。本來ムソリーニがその首相就任前における聲明及び國粹團の常に抱く考へによれば、現在フランス領土たるコルシカの如き或は英領モルタ島の如き、本來イタリー系に屬し當然イタリーに恢復すべきものなりとの思想[illegible]を支配して居る、今は唯時機熟せざるため斯の如き帝國主義的主張を實行上に現さないに過ぎぬ。併しかゝる遠き目標を以て進

まんとする傾向あるムソリーニの外交に對して、英佛兩國が何れの日にか猛撃を加ふることとなきであらうか、かく考ふると彼の外交的成功が今後永續すべきや否やは遽かに斷言し難いと思ふ。以上述ぶる所を以てイタリーの内治外交の大勢を明かにしたと思ふが、それが今後如何なる動きを取るかは、蓋しムソリニー政府の存續問題と相俟つて頗る興味ある懸案ではあるまい乎。

七　赤露の對外態度

予はバルカンより佛獨伊方面に言議を馳せ來り、既に相當頁を重ねたる如く思ふ、然らば今ヨーロッパ問題において殘れるものは何か、云ふまでもなく英露方面でなければならぬ、これに言及せずして本論を總るならば、不當の議を受けねばならぬ。よつて予は今簡單に露英方面の現狀に言及し度いと思ふ。

然らば先づロシアにおける現下の問題は何か、予はその新經濟政策の採用並に宣傳禁止を約したる諸條約に現はれし同國の所謂後退政策が、どこまで續くであらうか亦如何に發展するかの點でなければならぬ。何をか後退政策と云ふか、云ふまでもなくロシア共產主義が打開の必要なる事情に迫られ、差當りて不徹底と化し去り又現に化し去りつゝあることである。蓋し一九一七年十一月レーニンがメンセヴィキ派を一掃し政權を掌握した後、試みたるものは徹底的なる共產主義の實行で、すべての生產事業を國營とするの方針に立てたものであつた。ところが愈實行となると、何分にも道德心の進步未だ足らざる人類間においては、働くも働かざるも努むるも怠るも得る所同一なるの故を以て、自然懈け競爭の現はれたのも已むを得ざる所である。況んや露國民は人口の八割は讀書力なく、共產主義の理想の如き彼等の大多數にとつては全く風馬牛の姿であつた。かくて新制度の實行は全ロシア内における生產物を減少し、之が爲めに步一步人民をして飢餓に瀕せしめねばならなかつた。人民を飢えしめて而して政府安きものは無いので、流石のレーニンも必要の前に叩頭し一九二一年三月誰も知る新經濟政策なるものを發表することゝし、最初の突進振りから後退したのであつた。その結果農民が自家の作物につき自家必要の分以外を悉く國家に納めつゝあつたものが、今やその一部を租稅として納め殘餘は自家に有利に處分し得るの狀態に變化し、工業においても大工業こそ依然國營ではあるが、小工業は私營となり、小商業も亦盛に私營となつて來たこと、今更ら予等の繰言を待ぬ所であらう、ところが此後退策は内政上にのみ限られ無かつた、翻つてロシアと外國との關係においても後退政策の半面が現はれ

[illegible]しレーニン一派は共產主義の實現には世界革命を必要とした。即ち資本主義を打破し、その主義の遂行を期するには唯ロシア一國の制度の變化を以て終るべきでなく、世界全體における資本主義の破碎を見るにあらざれば、成功し難しとの見地より、彼等は世界革命を唱導し、世界宣傳の必要を力說し來つたものである。この意味は彼が一九一八年十月二十四日行へる演說にも現はれ、一九二二年七月二十一日共產主義者第二次大會における發言にも現はれた所であつた。又ブハリンが共產黨政綱（一九一八年モスカウ出版）において所謂共產黨の主張が、獨り一國の無產主義者の自由解放に止めず、各國無產階級の自由解放でなくてはならぬと發言せるに徵しても明かな所であつたが、斯る見地から彼等が最も必要とせるものは所謂宣傳であつたのである。玆に於て乎一九一八年ドイツとの講和成るや、新派遣の使命ヨツフエ氏が一九一八年ベルリン、ロシア大使館を根據とし、極端なる宣傳を行ひ甚しきはドイツ司法省內のコーンなる人に多大の金員を供給し、活動度を過ぎて遂にドイツ政府により國外退去を求めらるゝ迄に至つたのである、その他においてもロシアはドイツ國バイエルンにおいて共產主義的革命を企てしめ、ハンガリー國においてはベラ、クーン等に多大の資

[illegible]の國際的共產主義、[illegible]政府に[illegible]一致和せられ[illegible]く今や有力なる諸國と締結せる通商宣傳禁止の約束を含める條約によつて既に跡を見るに至つたのである。即ち一九二一年三月の英露通商協約同年十二月の伊露通商協定は勿論、昨年二月成立せる伊露條約若くは英露條約には、悉く宣傳禁止の約束がある。又本年一月日露間に成立せる日露基本條約にも同樣の約束が含まれて居る、而してこの宣傳禁止約定の履行はロシア外務省も今やこれを嚴守に力め、外務長官チチエリンは之が爲め第三インターナショナルのジノヴヰエフトと爭つたこと幾度なるかを知らぬ程である。

然らば則ちロシアがこの內因的共產主義實現の遲延と宣傳禁止策とを餘儀なく採用せざるを得なくなつたのは何故であるか、斯の如くするにあらざれば、對外關係の方面に在つては、外人の投資も將たその起業をも招き來り難き爲めであつた。外人の投資と起業がなければ、ロシア國民の經濟的難境を脫却する道が無く、やがては國民の政府に對する怨嗟を導くことゝもなれば、現政府存立上にも影響あるべきことを考へたからであつた。思ふにロシアは世界陸地の六分の一を占め人口一億三千

萬を數へ、國内物資遍く一見自給自足の力あるやうだが、何分にも、五ケ年に亘れる世界大戰中國力消費を戰爭に集中せる結果、各種生產機關の缺陷を補充するの餘裕が無かつた、例へば農業においては農具の如き非常に不足を告げ、工業においても各種機械足らず、事業を運轉する資金においては尙極端なる缺乏を感じて居た、ところが之に加へて革命並に共產主義の實行が人類活動の誘因たる私慾滿足の機會を少うして、益々生產界の頽廢を見せしめたのであつた、此ロシアの狀態の下に在つては、何れ海外諸國民の援助に俟ち、即ち外國との事業關係を恢復すると同時に外國資金をロシアに招來することが最も緊切の事條でなければならぬ、この點が理解せらるゝ時、世人は始めてロシアの最近内治外交の動き方を察知し得るであらうと思ふ。

以上は過去の話しであるが、然らば現下の問題はと言ふと、ロシアの此後退的政策が、今後如何に進むかと言ふことである、此點につきてロシア内には二派がある、その一派は今日の後退策を以て十分とし或は寧ろ過ぎたるものと說くのであり、他方においては未だ不十分なりと說くのであり、此兩論は目下共產政府部内の上下に亘り繼續的に重要な爭ひを構成して居ることは、消息通の否認し得ぬ所である、併し吾人の所見に依ると、ロシアは最近において一層後退策に向へる現象あるを認めればならぬ。而してその第一證と見る可はロシアが從來の强硬態度を一變し、過去における對外債務を承認せんとする傾向を强め來れることである。蓋しロシア、ソヴイエト政府は從來の條約否認主義を取ると共に、舊來の債務無效を宣言せるものであつた。これは戰爭中約六十億圓を貸付けたるイギリス、戰前四十餘億圓を貸付け戰爭中のそれを合して六十億圓以上の債權を有するフランス、四億圓餘を貸付けたるアメリカ、三億圓近くを貸付けたる日本等との間に、外交的紛議の問題となり、一九二二年春ゼノア會議においても一大議題となつたが、ロシアは容易にこれが承認を肯じなかつた。然るに最近本年二月十八日ロシア大藏長官ソコルニコフ氏はソヴイエト政府の最高委員會において陳述して、英佛その他各國がロシア側における舊來債務の承認を以て、今後資金供給の先決條件なりと主張し居るに鑑み、ロシアはこの場合經濟及び國土發展上より債務承認の已むべからざる所以を主張したと傳へられて居る。次で本年四月ロシアの勞働及び防備會議において、假首相レオカメネフ氏議長となり種々討議の末、今後私人的資本家連を盛に歡迎するにあらざれば、ロシア商業の發達を見るべからざることを認め、これが歡迎策を講ずることに決定したと傳へられる。以上

の二報道にロシアが更に後退政策に進めんとする一證據で無くて何であらう。云ふまでもなく斯くするにあらざれば、これまでロシアが諸國と締結したる條約によつて期待しつゝある外資の流入は、實現を見ると難きが故である。而して外資の流入が無くば、目下戰前の三割三分に減退して居る同國の工業を回復することも農業設備を充實することも、不安定な財界を救ふことも出來得無いからである。此傾向は吾人が今日輕視す可からざる所だと言はねばならぬ。

次にロシアが今後の緩和策の他の一證と思はるゝものは、トロツキーの復活是れである。トロツキーは昨年末スターリン、ヂノヴイエッフその他と意見合致せず、本年一月遂に追はれてカウカサスに赴き、其味方たりし諸將校又免職せらるゝが如き運命に接したのであるが、最近の外國よりの報道は共再び中央政治機關に携はることゝなつた旨を傳へて居る。トロツキー自身は妥協派にして理想としてはともかく、實行において所謂後退派たるに照し、斯る有意義の現象と言はねばならぬ。殊に最初ジノウヰエフ等と共にス氏排斥に加つて居たロシアの三頭中のスタリンが三、四月頃ジノウヰエフの所見に反對し、ツロスキーに對する過酷態度採用の非を説くと共に、又た外國に對する宣傳中止の約束の忠實なる實行を主張したのは大切なる參考資料と言はねばならない。

而して吾人の所見に依ると、この政策の下に吾國はロシアに事を成さんとする外國資本家に就りて、如何なる有利なる狀なるや云ふまでもない。何となればロシヤでは從來一方においては外人の國内企業を許すも他方においてこれを阻害すべき法令存在し、種々なるハンデキヤツプを作つて居たが、是等も漸次一步一步破棄せらるべき可能性を示すからである。吾々はこの形勢が本年一月成立せる日露協約の適用問題に關聯して、良結果をもたらさんことを望んで止まない。

予はこれを以てロシア目下の大勢を紹介したと思ふが、然も尚一の條件附的事情を附言せねばならぬ。それはロシアの現政策が一の便宜主義より出でつゝある點である、國民の生活も政府の存立も今や外資の流入を最も便とし必要とする條件の下に資金供給の能力ある事業經營の能力ある世界諸國に對して、一時的讓步を示すに過ぎないことである。從つて斯の如き能力なき國家に對しては彼が全然正反對の態度を取れることを忘れてはならない。即ち共産主義宣傳、世界革命宣傳の如きも英米日佛の如き大國に對する場合においては、著しく制限策を取れるに反し、ロシアに資本的援助若くは企業能力なき弱小國即ちバルカン諸邦、中央アジア方面その他に對しては、依然積極的なる共

産主義宣傳を敢てして居る。故に吾々は便宜主義の上に立てるロシアの後退的政策が、局面の變化如何に從ひては、如何なる變化をも生ず可き可能性あることだけは、記憶し置かねばならぬと思ふ。

八　英國の新外交と將來の難關

ロシアを去つてイギリスに入れば如何。差當りこの國の外交策につきて吾人の注目を惹くものは、昨年十一月上旬勞働黨内閣に代りて、ボールドウイン氏を首相としチエンバーレン氏を外務卿とする純一黨内閣成立した以來、前マクドナルド勞働黨内閣時代とも或程度においてはアスキス自由黨内閣時代とも異る態度を示しつゝあることと是れである。先づ第一にはそれが軍備擴張に出でつゝあることであり第二には植民地との接近策に熱心せることであり、第三にはその對外活動は自由、勞働兩黨に比し一層顯著であり、殊に大陸對外硬的態度の發路を見つゝあること是れである。

斯く云へばとて、誤解してはならない、イギリスの外交は内閣更迭によつて急激なる變化を見るものでは無い、否な、イギリスの外交程、根本的繼續性を持するものは少ないのである。蓋し本來イギリスの外交はフランス其の他に比して理想によるものでもなければ、又遠き約束に向つて一の目標を作り、これを基準として遠大なる計畫を立てると云ふが如き性質のものでもない、何れかと云へば寧ろ今日主義が多く、理想よりも現實に捉はれた側のものである。唯だ世上の諸國と異るところは今日主義により刻下の問題を處するに當りても、多年の習慣と傳統と及びその本來周到なる研究と用意との下において各方面に遺漏なき注意を拂ひ、最も賢明に且周密に眼前の問題に處して行くことを特長として居る點である、この特長を有するイギリス人は、當面の問題に對し拔目なき用意と處置とを取り行く結果、將來局面の變化に對しても、遺漏が少く、幾多年月經過後より見ると、恐しく卓拔なる先見を以て事件に處せるが如く考へらるゝ場合も少くないのである、要するにイギリス人の外交は現實主義で、とかく理想を缺くの感あるが、それだけ又たその政策が政治家の頭腦によつて變化すること少なく、外交の繼續性を持することが多い。この繼續性は對岸ベルギー方面における堺障政策にも現はれ、又歐洲大陸諸問題に對しては平素餘りに深入りせず、時に徹底的態度を執るが如く見ゆるも、大體において進退自由の餘地を存せる遣口にも現はれ、或は又近東中東極東における自己の通商後援において、往々他より嗤笑を買ふが如き利益本位の外交に汲々たる有樣などにも現はれて居る。

一[illegible]ではない[illegible]人は上記の三點を統一黨内閣の特色として[illegible]する必要にも、之だけ條件附として江湖の批評を乞はねばならない。

然らば現統一黨内閣外交策中上記三傾向の現れと見るべきものは何處に在るかと言ふと、その一は我國においても問題となれるシンガポール大海軍根據地建設問題であらう。本問題は統一黨内閣の三傾向を悉く指示した感がある。即ちそれが第一に同黨が他黨に比し軍備を重んずる傾向を示して居るのは言ふ迄も無からう。即ち自由黨勞働黨などにおいては、その心を用ふる所寧ろ社會改良及び國民の生活改善と云ふが如き積極的施設であつて、軍事、秩序維持等の消極的施設方面には多大の國費を費すことを欲しない、この點は實に一九〇七年以後約六七年間に亘れるイギリスの對ドイツ海軍備競争問題に於て、成るべく擴張競争を肯ぜざらんと欲し、苦心交渉を重ねた歷史に現はれて居る。ところが統一黨は之に反し世界の他の保守統系が然るが如く、所謂秩序維持機關に最も重きを置き、同時に新しき施設に屬すべき現制度變化の諸改良策等に對しては、周圍に餘儀なくせられこれを取ることありとするも、自由黨勞働黨などに比すれば熱心の程度極めて輕きものである。思ふに成るべく現狀を維持し變更せざらんとする保守黨系が、現狀維持機關たるため[illegible]法を[illegible]する熱[illegible]に費さんと考へ、自然秩序制度の維持者たる軍備に[illegible]たるは已むを得ざる所であらう。第二に此シンガポール防備擴張案は統一黨が、英本國と濠州、ニユージランド、印度等植民地との關係上、同港の軍備がその交信線を保護するに極めて有効なるを信ずる結果、母國植民地間の接近を最も重視する同黨として最も緊要なるを感じたるものなるを忘れてはならない。第三に之は統一黨の對外硬策に出發して居るのである。何故ならば東洋シンガポールにおいて大海軍根據地を作ることは、東洋に對するイギリスの威力を增加し、支那その他において活躍せんとする政府の計畫に對し大いに之を助成することゝもなるからに外ならないのである。次ぎに統一黨政府が昨年十一月以後エジプトに對し極端なる壓迫政策を執りつゝあることも、亦た上述の同内閣の外交策、植民策の現はれであらう、即ち一は統一黨の植民地母國間の關係を密接せらしめんとする政策の現れで無くてはならぬ。何ぞやエジプトは濠州印度ニユージランドと英本國とを聯絡せしむる要衝スエズ運河の所在地である、この要衝たるスエズ運河に關聯しエジプトにイギリスの力を確立す

產主義實價を敢てして居る。故に吾々は便宜主義の上に立てるロシアの後退的政策が、局面の變化如何に從ひては、如何なる變化をも生ず可き可能性あることだけは、記憶し置かねばならぬと思ふ。

八　英國の新外交と將來の難關

ロシアを去つてイギリスに入れば如何、差當りこの國の外交策につきて吾人の注目を惹くものは、昨年十一月上旬勞働黨内閣に代りて、ボールドウイン氏を首相としチエンバーレン氏を外務卿とする統一黨内閣成立した以來、前マクドナルド勞働黨内閣時代とも或程度においてはアスキス自由黨内閣時代とも異る態度を示しつゝあることは是れである。先づ第一にはそれが軍備擴張策に出でつゝあることであり第二には植民地との接近策に熱心せることであり、第三にはその對外活動は自由、勞働兩黨に比し一層顯著であり、殊に大體對外硬的態度の發路を見つゝあることと是れである。

斯く云へばとて、誤解してはならない、イギリスの外交は内閣更迭によつて急激なる變化を見るものでは無い、否な、イギリスの外交程、根本的繼續性を持するものは少ないのである。蓋し本來イギリスの外交はフランス其の他に比して理想によるものでもなければ、又遠き約束に向つて一の目標を作り、これを基準として遠大なる計畫を立てると云ふが如き性質のものでもない、何れかと云へば寧ろ今日主義が多く、理想よりも現實に捉はれた側のものである。唯た世上の諸國と異るところは今日主義により刻下の問題を處するに當りても、多年の習慣と傳統と及びその本來周到なる研究と用意との下において各方面に遺漏なき注意を拂ひ、最も賢明に且周密に眼前の問題に處して行くことを特長として居る點である、この特長を有するイギリス人は、當面の問題に對し拔目なき用意と處置とを取り行く結果、將來局面の變化に對しても、遺漏が少く、幾多年月經過後より見ると、恐しく卓拔なる先見を以て事件に處せるが如く考へらるゝ場合も少くないのである、要するにイギリス人の外交は現實主義で、とかく理想を缺くの感あるが、それだけ又たその政策が政治家の頭腦によつて變化すること少なく、外交の繼續性を持することが多い。この繼續性は對岸ベルギー方面における堺障政策にも現はれ、又歐洲大陸諸問題に對しては平素餘りに深入りせず、時に徹底的態度を執るが如く見ゆるも、大體において進退自由の餘地を存せる遣口にも現はれ、或は又近東中東極東における自己の通商後援において、往々他より嗤笑を買ふが如き利益本位の外交に汲々たる有樣などにも現はれて居る。

一[illegible]

人は上記の三點を統一黨內閣の特色として[illegible]する場合にも、之に附け條件附として江湖の記憶を乞はねばならない。

然らば現統一黨內閣外交策中上記三傾向の現れと見るべきものは何處に在るかと言ふと、その一は我國においても問題となれるシンガポール大海軍根據地建設問題であらう。本問題は統一黨內閣の三傾向を悉く指示した感がある。即ちそれが第一に同黨が他黨に比し軍備を重んずる傾向を示して居るのは言ふ迄も無からう。即ち自由黨勞働黨などにおいては、その心を用ふる所寧ろ社會改良及び國民の生活改善と云ふが如き積極的施設であつて、軍事、秩序維持等の消極的施設方面には多大の國費を費すことを欲しない、この點は實に一九〇七年以後約六七年間に亘れるイギリスの對ドイツ海軍備競爭問題に於て、成るべく擴張競爭を避けさらんと欲し、苦心交涉を重ねた歷史に現はれて居る。ところが統一黨は之に反し世界の他の保守系統が然るが如く、所謂秩序維持機關に最も重きを置き、同時に新しき施設に屬すべき現制度變化の諸改良策等に對しては、自由に餘儀なくせられこれを取ることありとするも、自由黨勞働黨などに比すれば熱心の程度極めて輕きものである。思ふに成るべく現狀を維持し變更せざらんとする保守黨系が、現狀維持機關た

[illegible]

法を主張する熱度高きだけそれだけ[illegible]べくその方面に費さんと考へ、自然秩序制度の維持者たる軍備に熱心となるは已むを得ざる所であらう。第二に此シンガポール防備擴張案は統一黨が、英本國と濠洲、ニュージランド、印度等植民地との關係上、同港の軍備がその交通線を保護するに極めて有効なるを信ずる結果、母國植民地間の接近を最も重視する同黨として最も緊要なるを感じたるものなるを忘れてはならない。第三に之は統一黨の對外硬策に出發して居るのである。何故ならば東洋シンガポールにおいて大海軍根據地を作ることは、東洋に對するイギリスの威力を增加し、支那その他において活躍せんとする政府の計畫に對し大いに之を助成することゝもなるからに外ならないのである。次ぎに統一黨政府が昨年十一月以後エジプトに對し極端なる壓迫政策を執りつゝあることも、亦た上述の同內閣の外交策、植民策の現はれであらう、即ち一は統一黨の植民地母國間の關係を密接ならしめんとする政策の現れで無くてはならぬ。何ぞやエジプトは濠洲印度ニュージランドと英本國とを聯絡せしむる要衝スエズ運河の所在地である、この要衝たるスエズ運河に關聯しエジプトにイギリスの力を確立す

ることは母國と植民地間の聯絡を安全ならしむる重大策として保守派の眼に映じたのである。これこそ一昨年四月エヂプトの獨立憲法發布をイギリス自から承認したるに拘らず、昨秋殆ど獨立國に對する態度とは見えざる壓迫策を之に加へ、遂にエジプト首相ザグルールパシヤをして辭職せしめて以て總選擧を行ひ、更らに今春總選擧の結果ザグルールパシヤ勝利を得、彼がエジプト代議院議長に選擧せらるゝや、生命僅かに十分間の後又もや議會解散の餘儀なきに陥らしむるなど、極端的行動に出でたる所以である、併しながらイギリスの對エヂプト政策は獨りこれのみにあらず、上に述べた統一黨の『對外硬的傳統』がこれに關係深きことを忘れてはならぬ。顧つて十九世紀の歴史を見るも、自由黨内閣時代においてはイギリス外交はさまで强硬でなかつたが統一黨内閣になると保守分子の常として對外硬を標榜し、所謂國威を天下に輝かすことを以て主眼とした跡がある、即ち自由黨系なるラツセル卿及びグラツドストーン氏等の執政に於いてはイギリス外交は外見上不振の姿ありしに反し、ベーコンスフヰルド、ソリスベリー卿等の保守黨執政において、外交大いに振ふの觀があつたことは、世人の熟知せる所である。而して、今回の對エジプト壓迫政策においても此點が一層明かに立證されたと云ふも、誰か亦た過言と云ふものがあらう。更らに他の現はれとす可きは首相ボールドウイン氏が昨年十二月十七日植民地よりの物資輸入を奬勵するため、約一千萬圓の補助金支出案を提議したことである。今該案につき委曲を盡す餘裕を有せぬが、これが所謂統一黨政府の三策たる植民地との接近策なることは、誰人も了解するに苦まざる所である。今引ける三例は簡單を期することとて不十分であるがボールドウイン内閣が取り若くは取らんと企てつゝある政策若しくは對外策の大體を擧げたものと言へると思ふ、要するに現内閣の存續する限りイギリスの對外策が從前の他政黨執政に比し、寧ろ軍備擴張策に歩を進むると共に、植民地と接近連絡を圖り若くは特惠關税を設定するに力め同時に外國よりする對英輸入品の利益を阻害すること、東洋又たその他に對して從來よりも强硬政策を取り、外交的活躍を期せんとすること丈けは、最も注意しなければならぬ點であらう。右はイギリスの對外策につき短く處見を述べたものである。併し此際一言を附し置かねばならぬことは、イギリス外交における對植民地の地位の問題が漸くイギリスに執り難問を發生せんとしつゝあることと是れである、之は吾々の見る所を以てせば獨り統一黨執政時代と云はず、今後のイギリスに取りて頗る重大問題たるを思ふものである。蓋し從前濠洲、カナダ、ニユージランド等自治殖民地はさ

してイギリス外交について發言權を有せず、叉英本國が他國と締結する通商條約等に對し容喙すると云ふの自由を有する程度に止まつて居た。イギリスが帝國會議なるものを起し、外交軍備その他につき協議せる場合においても、自治植民地は單に一の諮問機關たるに止まり、久しく權力を有しなかつた、從つてその會議の如き植民大臣議長となり代表者を會合協議せるに過ぎなかつた。斯る狀態は久しく繼續し植民地の發言權は一九一一年の英帝國會議頃までは、本國外交を左右するには除りに無力であつた、然るにその後世界大戰勃發と共に、英本國は各植民地の努力を要求し、植民地よりは相當なる努力を以てこれに應へたる結果、彼等の地位は一變し、今や本國と「均等なる姉妹國」たるかの如き狀態に變化し、すべて本國と對等なる地位に起ち外交を決するの權利ありと云ふが如き思想は、漸次各植民地に滿ちて來た。斯の如き希望と精神とが今後實際化し、然も緊急を要する外交運用上に如何なる形を以て現はるゝかは實にイギリス帝國の前途における一大難關たらざるを得ないのである。現に昨年一月イギリス政府は、ロシア承認に當りてこれを殖民地に諮問しなかつた。ソコデ植民地側ではこれに對し種々の議論を發生したのである。次で昨年末エヂプトに對して統一黨内閣が強硬なる政策を執れる場合にも、植民地には何等する所なかつたので、植民地側では[illegible]ところへ、であるが、若し植民地側に[illegible]すると、若し英本國のエヂプト[illegible]は場合に依りて植民地のエヂプト出兵を餘儀なくすべき事情さへあり得るのに、英本國が植民地の意見を聞かずに突如進出を取るが如きは正當なる行動にあらずと云ふのである、然も本問題は一度にロシア承認不諮問の事實に次で起れるため、一層英帝國外交組織につき植民地側與論者及び政治家間に議論激發を見るに至つたのである。吾々はこれが如何に解決さるゝかを豫言する要はないが、若し今後英本國が屈服讓歩しその外交問題につき一々植民地と協議することゝならば、敏速を要する外交的活動を阻害するのみならず、往々にして植民地並に本國の幾多政治機關において意見不一致を見る場合、又た多數決を以て決定し難き實情に照らし、必ずやイギリス帝國の將來にとり難關を發生すべきものではあるまい乎。

要するに予はイギリス刻下の外交を概するに當り、江湖讀者が昨年十一月以來成立せる保守系の統一黨執政の結果より生ずる軍備並植民地接近並に對外硬の方針を重視せねばならぬことを思ふと共に、又た他方に起りつゝある母國植民地間の外交政策協同決定問題の前途が、深甚なる注目に値ひすることを指摘せねばならぬことを覺ゆるものである。

ることは母國と植民地間の聯絡を安全ならしむる重大策として保守派の眼に映じたのである。これこそ一昨年四月エヂプトの獨立憲法發布をイギリス自から承認したるに拘らず、昨秋殆ど獨立國に對する態度とは見えざる壓迫策を之に加へ、遂にエジプト首相ザグルールパシヤをして辭職せしめて以て總選擧を行ひ、更らに今春總選擧の結果ザグルールパシヤ勝利を得、彼がエジプト代議院議長に選擧せらるゝや、生命僅かに十分間の後又もや議會解散の餘儀なきに陷らしむるなど、極端的行動に出でたる所以である、併しながらイギリスの對エヂプト政策は獨りこれのみにあらず、上に述べた統一黨の『對外硬的傳統』がこれに關係深きことを忘れてはならぬ。顧つて十九世紀の歷史を見るも、自由黨内閣時代においてはイギリス外交はさまで强硬でなかつたが統一黨内閣になると保守分子の常として對外硬を標榜し、所謂國威を天下に輝かすことを以て主眼とした跡がある、即ち自由黨系なるラツセル卿及びグラツドストーン氏等の執政に於いてはイギリス外交は外見上不振の姿ありしに反し、ベーコンスフヰルド、ソリスベリー卿等の保守黨執政において、外交大いに振ふの觀があつたことは、世人の熟知せる所である。而して、今回の對エジプト壓迫政策においても此點が一層明かに立證されたと云ふも、誰か亦た過言と云ふものがあらう。更らに他の現はれとす可きは首相ボールドウイン氏が昨年十二月十七日植民地よりの物資輸入を奬勵するため、約一千萬圓の補助金支出案を提議したことである。今該案につき委曲を盡す餘裕を有せぬが、これが所謂統一黨政府の三策たる植民地との接近策なることは、誰人も了解するに苦まざる所である。今引ける三例は簡單を期することとて不十分であるがボールドウイン内閣が取り若くは取らんと企てつゝある政策若しくは對外策の大體を擧げたものと言へると思ふ、要するに現内閣の存續する限りイギリスの對外策が從前の他政黨執政に比し、寧ろ軍備擴張策に步を進むると共に、植民地と接近連絡を圖り若くは特惠關稅を設定するに力め同時に外國よりする對英輸入品の利益を阻害すること、東洋又たその他に對して從來よりも强硬政策を取り、外交的活躍を期せんとすること丈けは、最も注意しなければならぬ點であらう。右はイギリスの對外策につき短く處見を述べたものである。併し此際一言を附し置かねばならぬことは、イギリス外交における對植民地の地位の問題が漸くイギリスに執り難問を發生せんとしつゝあること是れである、之は吾々の見る所を以てせば獨り統一黨執政時代と云はず、今後のイギリスに取りて頗る重大問題たるを思ふものである。蓋し從前濠洲、カナダ、ニユージランド等自治殖民地はさ

してイギリス外交について發言權を有せず、唯英本國が他國と締結する通商條約等に對し參加するとせざるとの自由を有する程度に止まつて居た。イギリスが帝國會議なるものを起し、外交軍備その他につき協議せる場合においても、自治植民地は單に一の諮問機關たるに止まり、久しく權力を有しなかつた、從つてその會議の如き植民大臣議長となり代表者を會合協議せるに過ぎなかつた。斯る狀態は久しく繼續し植民地の發言權は一九一一年の英帝國會議頃までは、本國外交を左右するには餘りに無力であつた、然るにその後世界大戰勃發と共に、英本國は各植民地の努力を要求し、植民地よりは相當なる努力を以てこれに應へたる結果、彼等の地位は一變し、今や本國と「均等なる姉妹國」たるかの如き狀態に變化し、すべて本國と對等なる地位に起ち外交を決するの權利ありと云ふが如き思想は、漸次各植民地に滿ちて來た。斯の如き希望と精神とが今後實際化し、然も緊急を要する外交運用上に如何なる形を以て現はるゝかは實にイギリス帝國の前途における一大難關たらざるを得ないのである。現に昨年一月イギリス政府は、ロシア承認に當りてこれを殖民地に諮問しなかつた。ソコデ植民地側ではこれに對し種々の議論を發生したのである。次で昨年末エヂプトに對して統一黨內閣が强硬なる政策を執れる場合にも、植民地には何等諮られなかつたので、[illegible]できる、若し植民地側に[illegible]すると、若英本國のエヂプト[illegible]は場合に依りて植民地のエヂプト出兵を拒否なくすべき事情さへあり得るのに、英本國が植民地の意見を問はず斷然强硬態度を取るが如きは正當なる行動にあらずと言ふのである。然も本問題は一度にロシア承認不諮問の事實に次で起れるため、一層英帝國外交組織につき植民地側學者及び政治家間に議論激發を見るに至つたのである。吾々はこれが如何に解決さるゝかを豫言する要はないが、若し今後英本國が屈服讓步しその外交問題につき一種植民地と協議することゝならば、敏速を要する外交的活動を阻害するのみならず、往々にして植民地並に本國の幾多政治機關において意見不一致を見る場合、又た多數決を以て決定し難き實情に照らし、必ずやイギリス帝國の將來にとり難關を發生すべきものではあるまい乎。

要するに予はイギリス刻下の外交を檢するに當り、江湖讀者が昨年十一月以來成立せる保守系の統一黨執政の結果より生ずる軍備策植民地接近策並に對外硬の方針を重視せねばならぬことを思ふと共に、又た他方に起りつゝある本國植民地間の外交政策協同決定問題の前途が、深甚なる注目に値ひすることを指摘せねばならぬことを覺ゆるものである。

ることは母國と植民地間の聯絡を安全ならしむる重大要素として保守派の眼に映じたのである。これこそ一昨年四月エヂプトの獨立憲法發布をイギリス自から承認したるに拘らず、昨秋殆ど獨立國に對する態度とは見えざる壓迫策を之に加へ、遂にエジプト首相ザグルールパシヤをして辭職せしめて以て總選擧を行ひ、更らに今春總選擧の結果ザグルールパシヤ勝利を得、彼がエジプト代議院議長に選擧せらるゝや、生命僅かに十分間の後又もや議會解散の餘儀なきに陷らしむるなど、極端的行動に出でたる所以である、併しながらイギリスの對エヂプト政策は獨りこれのみにあらず、上に述べた統一黨の『對外硬的傳統』がこれに關係深きことを忘れてはならぬ。顧つて十九世紀の歷史を見るも、自由黨内閣時代においてはイギリス外交はさまで强硬でなかつたが統一黨内閣になると保守分子の常として對外硬を標榜し、所謂國威を天下に輝かすことを以て主眼とした跡がある、即ち自由黨系なるラッセル卿及びグラッドストーン氏等の執政に於いてはイギリス外交は外見上不振の姿ありしに反し、ベーコンスフヰルド、ソリスベリー卿等の保守黨執政において、外交大いに振ふの觀があつたことは、世人の熟知せる所である。而して、今回の對エジプト壓迫政策においても此點が一層明かに立證されたと云ふも、誰か亦た過言と云ふものがあらう。更らに他の現はれとす可きは首相ボールドウイン氏が昨年十二月十七日植民地よりの物資輸入を奬勵するため、約一千萬圓の補助金支出案を提議したことである。今該案につき委曲を盡す餘裕を有せぬが、これが所謂統一黨政府の三策たる植民地との接近策なることは、誰人も了解するに苦まざる所である。今引ける三例は簡單を期することとて不十分であるがボールドウイン内閣が取り若くは取らんと企てつゝある政策若しくは對外策の大體を擧げたものと言へると思ふ、要するに現内閣の存續する限りイギリスの對外策が從前の他政黨執政に比し、寧ろ軍備擴張策に歩を進むると共に、植民地と接近連絡を圖り若くは特惠關稅を設定するに力め同時に外國よりする對英輸入品の利益を阻害すること、東洋又たその他に對して從來よりも强硬政策を取り、外交的活躍を期せんとすること丈けは、最も注意しなければならぬ點であらう。右はイギリスの對外策につき短く處見を述べたものである。併し此際一言を附し置かねばならぬことは、イギリス外交における對植民地の地位の問題が漸くイギリスに執り離間を發生せんとしつゝあること是れである、之は吾々の見る所を以てせば獨り統一黨執政時代と云はず、今後のイギリスに取りて頗る重大問題たるを思ふものである。蓋し從前濠洲、カナダ、ニュージランド等自治殖民地はさ

してイギリス外交について發言權を有せず、而も本國の國民と締結する通商條約等に對し加入するとせざるとの自由を有する程度に止まつて居た。イギリスが帝國會議なるものを起し、外交軍備その他につき協議せる場合においても、自治植民地は單に一の諮問機關たるに止まり、久しく權力を有しなかつた、從つてその會議の如き植民大臣議長となり代表者を會合協議せるに過ぎなかつた。斯る状態は久しく繼續し植民地の發言權は一九一一年の英帝國會議頃までは、本國外交を左右するには餘りに無力であつた、然るにその後世界大戰勃發と共に、英本國は各植民地の努力を要求し、植民地よりは相當なる努力を以てこれに應へたる結果、彼等の地位は一變し、今や本國と「均等なる姉妹國」たるかの如き状態に變化し、すべて本國と對等なる地位に起ち外交を決するの權利ありと云ふが如き思想は、漸次各植民地に滿ちて來た。斯の如き希望と精神とが今後實際化し、然も緊急を要する外交運用上に如何なる形を以て現はるゝかは實にイギリス帝國の前途における一大難關たらざるを得ないのである。現に昨年一月イギリス政府は、ロシア承認に當りてこれを殖民地に諮問しなかつた。ソコデ植民地側ではこれに對し種々の議論を發生したのである。次で昨年末エヂプトに對して統一黨内閣が强硬なる政策を執れる場合にも、植民地には何等諮る所がなかつたので、植民地では[illegible]。[illegible]である。[illegible]植民地に[illegible]すると、有事本國のエヂプト[illegible]は場合に依りて植民地のエヂプト出兵を餘儀なくすべき事情さへあり得るのに、英本國が植民地の意見を問はず突如斷乎措置を取るが如きは正當なる行動にあらずと言ふのである、然も本問題は一度にロシア承認不諮問の事實に次で起れるため、一層英帝國外交組織につき植民地側學者及び政治家間に議論激發を見るに至つたのである。吾々はこれが如何に解決さるゝかを豫言する要はないが、若し今後英本國が屈服讓歩しその外交問題につき一々植民地と協議することゝならば、敏速を要する外交的活動を阻害するのみならず、往々にして植民地並に本國の幾多政治機關において意見不一致を見る場合、又た多數決を以て決定し難き實情に照らし、必ずやイギリス帝國の將來にとり難關を發生すべきものではあるまい乎。

要するに予はイギリス刻下の外交を檢するに當り、江湖讀者が昨年十一月以來成立せる保守系の統一黨執政の結果より生ずる軍備兼植民地接近並に對外硬の方針を重視せねばならぬことを思ふと共に、又た他方に起りつゝある母國植民地間の外交政策協同決定問題の前途が、深甚なる注目に値ひすることを指摘せねばならぬことを覺ゆるものである。

生命の科學と其の批判

醫學博士　永井潜

一

『生理學は生命に關する自然科學である。』Physiology is the Science of Life 是れが生理學に加へられたる定義である。Science of Life 如何に夫の聲が、多くの考深き人達の頭に、奇異なる響を傳へるであらうか。少なくとも、終始形而上の學問に沒頭しつゝある賢しき人々に取つては、『生命の自然科學』と云ふことは、非常に大なる矛盾でなければならない。何んとなれば、其の人々に取つては、生命は超自然的であり、絶對でなければならない。隨つて自然の法則であり、相對の理論である科學によつては、到底之を説明することが出來ないからである。さうして、玆に、生命に關する科學的機械的説明を肯定する機械的と、之れを否定せんとする生氣説との論爭が胚胎する

二

生氣説・對・機械説の論爭。是れは實に人類の有てる、最も舊くして最も新しき問題であり、此の論爭の頁は、即ち人間思想の展開の記錄であらねばならない。而して、振子の如く動いて止まない人間の思想は、生氣説より機械説に、機械説より生氣説に、絶えず一振一轉して、以て今日に及んだのである。之れを太古の人間に或は現時の未開人に就いて攷ふるに、唯々感ずるを得て、而してまた考ふるを知らなかつた彼れ等、眼の人であり、耳の人であつて、而かもまた頭の人でなかつた彼等が、生命に對して取つた態度は、純然二元的のものであつた。即ち身體に對して、別に之れに宿り、之れを活かすべき或る物があると云ふ信念が夫れであつたのである。想ふに、單なる感覺人 Sinnesmenschen である「彼等が活き物」に就いて感知し得る最も特殊の性質は、何であるかと云ふと體溫であり、呼

そなであの心臓の鼓動であらねばならない。吾等人一度び死すれば即ち如何。其の脳、其の手、其の脚、依然として此所に横はつて居るが、併し今や脳は氷の如く冷やかに、何處に觸るも温がない。今迄盛んに出入して居た呼吸の氣は、何處に行いたか、影を收めて仕舞つた。二六時中絶えず活潑に動いて居た胸の鼓動は、闃として永しへに停止した。斯る光景に對して彼等の思ひ浮べたことは何であつたであらうか。温・呼吸・搏動、之れある時、身體は活き、之れ去る時、身體は死ぬのである、としたならば、身體に對して、之れを活かす働をなす或るもの、即ち精神がなければならないと斷ずるのは、固より自然の勢である。斯くて心身二元の考は、「死」の手によつて、太古以來既に人間の心の奧底に植ゑ附けられたのである。而かも斯の幼稚なる二元論に於て身體に對峙せる、所謂精神なるものも、猶く物質的色彩を帶びて居たのは勿論のことである。

三

太古に於ける斯の心身二元論は、人間思想の第一の階梯であつた希臘自然哲學者の手によつて、一轉化を與へられ、終に物質的、一元論の究極に移り行いた。思ふに、人間の智識生活の光が、模糊たる暗の雲を破つて始めて輝き初めた時、大自然は迷に詩しくも甚はしく[illegible]に書き附けたものは、この大自然であつたであらう。大自然は[illegible]如何にして生成したか。如何に轉化しつゝあるか。如何にして消滅すべきか。即ち所謂大宇宙學（コスモロジー）なるものが、希臘自然哲學者の研究の對象であつた。彼等は、大宇宙の生成轉化の根源を捉へんとして、原素（エレメント）なる考に到着した。原素とは、即ち萬物生成の本源たるべきものであつて、隨つて夫れ自身は、無始無終、不生不滅、不等不變のものでなければならない。斯くて其の原素たるべきものを、或は水（ターレス）に求め、或は「アパイロン」（茫莫として萬相を包藏する者）（アナキシマンドロス）に求め、或は空氣（アナキシメネース）を以て原素となし、其れ自身のものの變化によつて萬物化生すと見きたる「ミレートス」學派を出し、更に進みては、抽象的に雜多なる萬物に通有普汎なる概念たる「有」なるものを抽き出し、之を以て萬物の本體と見做した所の「エレア學派」を起したのであるが、この一元なる原素より、如何にして萬象に於ける生滅轉化を起すかに關しては、説明する所極めて少なかつたのである。例へば、「エレア」學派の如きは、「有」なる本體は、無始、無終、不生滅、不變化のものであるから、日常體驗しつゝある生滅轉化の世相は、悉く吾人の感覺の誤謬に基づくものとなして、辛ふじて、變化

すべからざる原素から如何にして生滅、轉化の事象を起すかを說明せんとしたのである。

而かも、斯く、日常吾等の確實に體驗しつゝある變化の出來事を、悉く皆感覺の誤謬に基づくものとなすは、餘りに極端であるから、そこでヘーラクライトスなる學者は、「パンタライ」(萬物流轉す）と云ふことを以て、物の眞相となし、若し一見變化せざる如き場合あらば、夫れこそ吾人の誤謬に基いて爾が見ゆるのみで、實は變化しつゝあるのである。然らば此の變化の相を現すべき本源物は何であるかと云ふに、彼は之を火に求めた。夫の焰を見よ、絕えず變化して須臾も止む時がない。物來れば皆變じて火となり、煙となつて去るのである。火が熱を失へば水となり、水さらに熱を失へば地を造るのであると云つてエレア學派と正反對の說を唱へ出した。

斯く萬物生成の本源として、等しく一元說を採用しつゝも、「エレア」學派と、ヘーラクライトスとは全く反對せる意見を表はしたのであるが、斯の相容れざる二說を巧みに調和して、一方には不變不滅なる原素の本性を承認しつゝ、他方には又、變遷流轉の現象を、誤謬にあらずして事實と認め、斯の行き詰つた「ヂイレンマ」の中に、一新生面を開拓したのが、即ちエムペドクレースであつた。彼れ以爲らく、苟くも萬物生成の本源物たる以上、原素なるものは、必ずや無始、無終、不變化、不生滅たらざるべからざるは、「ミレートス學派、エレア學派の說く所の如くでなければならない。而かもあらゆる變轉生滅の現象を、悉く誤謬と見做すに至つては、餘りに牽强附會であると言はねばならない。然らば原物質の不變不滅を承認しつつも、猶ほ宇宙に於ける變化の現象を事實として說明する道なきかと云ふに、有るのである。即ち本原物質を一種と見ずして、多種と見て、斯の多種の不變不滅の原物質が、離合集散して、萬物を生成すと考ふればよいのである。斯くて彼れは、地水火風なる四種の原物質を認め、之れが愛憎の二力によつて、或は牽引し、或は反撥して、あらゆる生滅變化の現象を惹き起すのであるとした。例せば、地水火風の四元素は顏料であり、愛憎の二力は畫工であり、而して此の兩者を須ちて描き出されたる多種多樣なる繪畫こそ、宇宙の現象であるのである。

斯くてエムペトクレースによつて剏められたる多元說によつて、現代自然科學の基礎をなせる元子說は、其の第一聲を揚げたのである。次でアナクサゴーラスを經て、ロイキツポス、デーモクリトスに至つて、「アトム」論は夙に其の骨子を完成したのであつたが、約二千三百年の後、ダルトン（一八〇八年）を待つて、始めて大成されたのである。

デーモクリトスのアトム說に至つて、宇宙間に於ける[illegible]あらゆる現象は、皆「アトム」の運動によりて機械的に說明せらるゝ様になり、獨り生命なき世界の現象のみならず、生命ある世界に見らるゝ生活現象、進みては精神の作用迄も、悉く同一の理法によつて解釋せらるゝものと信ずるに至つた。斯くて振子は一振して、太古の二元論より、極端なる物質的機械的の一元論に飛んだのである。而して原始人類が、自己を推し擴げて外界に及ぼし、生命なき物にも生命を認めんとするに反して、自然哲學者は、自然に於ける現象を捉らへ來りて、之を內に及ぼし、一般自然の理法に從つて生命を說かんとしたのは、面白い對峙と言はなければならない。

四

斯る間に、希臘の文運は愈々進みて、其の精華を開き、今や學理の攻究によつて得たる所を、實生活に應用せんとする傾向を來たしたのであつて、哲學の如きも、其の眼孔を一轉して、自然界を去つて人事の上に注ぐ様になり、時恰も、希臘は波斯と戰ひ勝つて一躍して世界權力の中心となり、政治・法律・文藝・美術は、隆昌の頂に達したのであるから、愈々以て、興味の中心は人間社會の上に移つて來た。即ち自然哲學諸時代を以て、自然哲學時代と[illegible]に、[illegible]時代と稱する[illegible]。斯くて人間[illegible]智識に[illegible]して、り、この進步せる思索を授ける人間が、其の眼を、自然より轉じて自己に振り向けた時、主觀に重きを置くに至るのは當然のことであつて、玆にプラトーンの「イデア」說、アリストテレースの形相說の如き、主心主義・理想主義の哲學が起つて、「物」と「心」との對峙が明瞭となり、精神を以て主となし、物體を以て從となすに至つた。斯くして振子は再轉した。自然哲學者によつて建設せられたる機械的一元論は、今や退いて、超自然的二元論に其の位置を讓らなければならなくなつたのである。

五

希臘の勢力凋落し去つて、新興の地アレキサンドリアに於て、文運新たに勃興するや、自然科學は頓に大なる進步を示し、生命に關する解釋も、再び機械的自然科學的に立ち返らんとしたのであつたが、羅馬時代に入るに至つて、諸說の長を取り、短を補ひ、以て一新機軸を出ださんとするの風潮を起し、玆に折衷學派を産んだのである。而して千古の英才ガレーンが出でて、此の風潮に乘じ、時代の要求は一に學理と實際との調和にあることを觀破して、驚くべく巧妙に、プラトーン、アリ

ストテレースの理想主義の哲學と、醫學とを結び附け、打つて一丸となし、あらゆる生命問題は、刃を迎へて解けるの慨があつたのである。而かも彼れによつて打建てられたる獨斷的の理想主義・目的論は、中世紀の舞臺に於ける主働者たる「アラビヤ」人の敎義や、新に勃興せし耶蘇敎の宗敎志想と結托し、相呼應し、相扶助して、其の眞髓を沒却し了つて、玆に極端なる生氣說を現出し、一千年の久しき暗黑時代を通じて、魔術、占星術、鍊金術の如き非科學的の怪物のみが、志想界の暗夜に跳躍するに至つたのである。

六

長い、暗い、重い、中世紀の幕が切つて落されると、人間の舞臺には、あらゆるものに力と命とを與ふべき「ルネイサンス」の春風が吹き初めた。長夜の夢を貪りつゝ、奴隸的拘束に甘んじて居た人の心は、玆に始めて其の目を醒まして、人間が覺的に再生すべき時期が遂に來たのである。十六世紀には、古代文藝の復活「フマニスト」の勃興、宗敎の改革が先づ行はれ、十七世紀に入りて、唯理學派と經驗學派なる、近代哲學の二大潮流が湧き出で、十八世紀に及んでは、進步せる哲學と科學との握手によつて、理智に覺醒せる人心は、玆に政事革命と云ふ一大烽火を揚げ、佛蘭西を中心として全世界を焦がした。而して十九世紀に於て終に科學萬能の時代を現出したのである。

斯くて、科學の進步に伴つて、生命に關する志想の大勢は、漸を追ふて機械說に傾くに至つたのは、固より當然のことであるが、而かも其の間、自から迂餘曲折がないでもなかつた。十六世紀に入るに及びて、稍廢せるガレーンの學說は、先づ解剖學の領域に於て其の權威を失墜し初めた。是れ蓋し、一面に於ては、古代藝術の復活が、人體に關する正確なる知識を要求した結果に外ならない。即ち科學の神と藝術の神とが、玆にゆくりなくも堅き握手を交したのである。

十七世紀に入りて、ハーピーによつて、血液循環の大發見がなされし以來、生命に關する機械的解決は一大飛躍をなし、其の極、終に「イヤトルフイヂカー」及び「イヤトロヘミカー」と云ふが如き、極端なる唯物論者を出した。振子は玆に機械說の極頂に達したのである。

而かも、比較的幼稚なる其の當時の物理・化學を以てして餘り大膽に、凡ての生活現象を說明せんとせる結果、往々牽强附會に過ぎ、爲に心ある人々をして、之れに對する反動を挑發せしめ、一面に於ては、ハルラーの如き明敏の士が出て、生活現

象を考察することを全く否定して、生物と無生物との對峙が、明確に指摘せられた結果として、振子は再轉して、生氣論に向つて逆轉し、十八世紀の後半から、十九世紀の初頭に至る迄、大に生氣説が跋扈した。而かも十九世紀後半に於ける自然科學の目醒ましき進歩につれて、振子は更に一轉して、機械説に復し、以て生命の自然科學たる輓近生理學の建設を見るに至つたのである。然らば即ち、輓近生理は、如何なる根據に立ちて、生命を科學的に説明せんとするのであるか。暫らく之れに關して考察を下して見たい。

七

抑々生活體の現はす生活現象は、千差萬別であるが、併し之れを三つの方面に總括することが出來るものである。其の一は、物質代謝の現象であり、其の二は、勢力轉換の現象であり、其の三は、形態變更の現象である。『物質代謝』とは、生活體が活きて居る以上、其の體成分が、絶えず消耗せられつゝあるもので、隨つて食物として、外から一定の物質を取つて、之を補給する必要が起つて來る。斯くて其の體成分は、立ち換はり入り代はりして、暫くも止む時がないことを云ふのである。之れは化學の立場から生活現象を觀察する時、何れの生活體にも通有なる事實である。

次に又生活せる體からは、熱とか、運動とか、或は「エネルギー」を送つて、絶えず之を外に向つて發現しつゝあるものである。而して無から有は出來ないのであるから、已にエネルギーを外に向つて發現する以上、其の根源たるべきものが、外界から體内に輸び入れられなければならない。斯くて生活體に在つては、「エネルギー」が、一定の形を取つて、外界から入り込んで、夫れが體内で他の形の「エネルギー」に變へられて、再び外に出さるゝのである。此の生活體に通有なる現象が、『エネルギー轉換』である。而して、斯れは理學の立場から生活現象を觀察する時、見らるゝ現象である。而して物質が絶えず新陳代謝し、「エネルギー」も轉換する以上、生物の形態も、古く頑たる一片の石の如く、何時迄も依然として變化なきことは不可能であつて、必ず時に隨つて變化するものである。この事を、『形態の變更』と云ふのである。

この三つの現象は、苟も生活體たる以上、如何なるものにも必ず見らるゝものである。否なこの三つの現象夫れ自身が、即ち生活現象に外ならぬのである。而かも此三者は、個々獨立分離せるものではなくして、唯一實在せる生命を、化學、理學、形態學なる三つの異なれる立場から考察した結果に外ならぬの

である。所謂三位一體と云ふべきものである。そこで今、此の三大方面に就いて、果して、自然科學の理法を適用すべき十分なる根據があるか否かを檢らべて見る。

八

先づ、物質代謝の方面に就いて考ふるに、生活體を取り、元素分析によつて、之れを構成せる元素に分析して見ると 炭素（C）水素（H）、酸素（O）、窒素（N）、燐（P）鐵（Fe）、硫黄（S）鹽素（Cl）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）、石灰（Ca）、沃度（J）、マグネシウム（Mg）等十二、三種の元素を分ち出す物である、而して此等の元素は、獨り生活體のみならず、生命なき世界にも存在して、其の組成に關與して居るのである。即ち生命ある有機界も、生命なき無機界も、其の構成の原基たる元素は、互に通有である。

斯く元素が互に共通である上に、更に進んで此等元素の離合集散によつて惹き起さるゝ化學反應を調らべて見ると、是れ亦た、通有なる理法に從ふものである。之れに關して最も大切なる最初の實驗的證明を與へたのは、獨逸の有名なる化學者ヴエーラーであつた。由來生活體内に於ける組成分、並びに其の新陳代謝の結果として出來た物質を取つて見ると、其の多くは、無機界に於ける物とは別種のものであり、之を變じて彼となすことは不可能であるのであるから、有機界に於ける化學反應と、無機界に於ける化學反應とは、全然別種の理法によつて支配せらるゝものとなし隨つて生活體に於ては、無生體に於て見るべからざる一種不可思議なる力、即ち生氣なるものゝ存在せることを信じて居たのである。然るに一八二八年、ヴエーラーは、青酸「アンモニヤ」なる單純なる無機物を、試驗管内に於て、一般化學の法則に則とつて、高等生物の體内に於ける新陳代謝の結果として生成せらるゝ尿素に迄で變化せしむることに成功したのである。玆に於てか、生體に於ては、一般化學の理法以外に立てる神祕なる力が働きつゝありとの考は、大なる動搖を來たし、少なくとも、尿素の生成に際しては、同一の理法に從ふことが明かとなつた。是れ實に物質代謝の方面に於て、生氣説を打破すべき第一の鐵槌であつたのである。

ヴエラーの此の尿素集成の實驗が成功せし以來、獨り有機界にのみ獨特なりと信ぜられつゝあつた化合物が、續々無機化合物より集成せらるゝに至つた。知名の化學者ベルトローは、ヴエラーに次で、間もなく「アルコール」蟻酸等を人工的に集成し、引き續いて、多くの學者によつて、脂肪、「ロイチン」、尿酸、「クレアチン」等が集成されたが、終にエミールフイシヤによつて、含水炭素の集成が成就せられ、更に生活體の最も重要

たる細胞分子たる蛋白質の構成も、大なる光榮を以て、我に理解達の成功を見るに至つたのである。

斯く構成原基たる元素が、有機無機の兩界を通じて共通であり、而して其れ等元素の離合集散するに當つても、同一の化學的理法に從ふものであることが明かであつて、物質代謝の方面に於ては、全然生氣を驅逐して、機械說が凱歌を奏したのである。

九

次に「エネルギー」轉換の現象に見るに、マイヤー、ジャウル及びヘルムホルツの諸氏によつて、デカルドが、夙に哲學的思索の結果として唱へ出したエネルギー不滅の法則が、物理學的に實證せられし以來、此の定則は、實に輓近理學の根本をなすに至つたのであるが、此の法則が、若し果して生活體に於ても、無機界に於けると同樣に眞理であることが證明さるゝなれば、生活現象の說明に當つて、一般物理の法則を適用することに關して、十分なる確信を得る譯である。而かも偉材ラボアシエーの研究によつて、此の確信が與へらるゝに至つたのである。

大膽なるプロメトイスが、天上から火を盜み來つた以來、火は實に人間生活に缺くべからざる大切なるものとなつたのである。而かも、何故に物が燃えて熱を起すかの眞相に至つては、長く不明の事に附されて居たのであつて、唯、十八世紀の末に至り、ラボアシエーを待つて始めてこれが解明をなすことが出來たのである。ラボアシエーの研究が行はれる以前に於て、燃燒に關する最も合理的の說明とせられて居たのは、「フロギストン」說であつた。此の說によると、物が燃えるのは、其の中にある或る假定的の可燃性成分、即ち「フロギストン」と稱せらるゝものが、外に出て行くことである。そこで斯の「フロギストン」を餘計に有つて居るものは、よく燃えるが、之を失へば燃えなくなる。例へば金屬の如きも、燃えて「フロギストン」を悉く外に出し盡くすと、最早燃えなくなる。併しこの燃えなくなつたものを、「フロギストン」に富める炭と一緒にすると、炭から新たに「フロギストン」を賦與せられて、再び可燃性を恢復するのであると云つて居たのである。今日から考へると、斯る說明は、恰度事實に正反對せるものであつたのであるが、而かも當時の學者は、誰一人として此の臆說の圈外に超越する者はなかつたのである。已に一七七四年に、シエーレーにより、次でプリーストレーによつて、酸素が發見せられ、間もなく又カベンヂッユによつて、水の分析が行はれたのであつたが、而かも斯等の人達さへも、矢張「フロギストン」說を守つて居たのである。然るにラボアシエーは、先人未知の新研究法を化學に

應用して、「フロギストン」說の誤を指摘し、燃燒の眞相を明かにし得たのである。

十

ラボアシエーは「秤」と云ふ新らしき武器を、化學研究者の手に導き入れたのである。之れによつて、唯々定性的のものであつた從來の化學研究に、一大飛躍を起さしめ、定量的のものたらしめたのである。ラボアシエー以爲らく、若し燃燒と云ふことが、「フロギストン」說の云ふ如く、「フロギストン」なる可燃成分を外に放出するのであるならば、燃燒の後、物體は重量を減すべきである。然るに事實は之れに反して、燃燒せる金屬灰分は、却つて重量を增加するのである。而して其增加せる重量と同一量の、酸素の減少が見られるのである。して見ると、酸素が結合すること、即ち酸化と云ふことが、燃燒の本質を爲すものでなければならない。

ラボアシエーは、斯くて燃燒の眞相を摑み得た後、更に進んで、生活體に於ける體溫發生の原理を明かにせんと努力した。氏は、其の目的に向つて、單簡なる氷の熱量計を造つた。其の熱量計の中に、一度は動物（鼠）を入れ、次回には火を燃して、此の兩度の試驗に於て、同一量の氷が溶融する（隨つて同一量の熱が發生する）際に生ずる炭酸瓦斯の量を夫々測定して見たのである。其結果として、動物の場合でも、火が燃えた場合でも、同一量の熱が發生するに當つては、常に同一量の炭酸瓦斯が造らるゝことを確めた。是れに由つて觀ると、動物に於て熱が發生するのも、物體が燃えて熱が發生するのも、全く同一の原理に基づくものと言はなければならなくなつて來た。

ラボアシエーの此の發見は實に、學術の進步に一新紀元を劃せる破天荒の業績と嘆賞せざるを得ないのである。蓋し之れによつて、燃燒の眞義を知り、生命の顯現として、太古以來、最も重要視せられつゝありし、體溫竝びに呼吸の眞相に徹底し得たるのみならず、進んでは、生命に關する自然科學に堅實なる基礎を與へ、之をして完全なる發達を遂げしめた功績は、實に偉大なるものと言はざるを得ない。

ラボアシエーの研究は、生活體に出入すべき「エネルギー」の量を正確に測定し、「エネルギー」不滅則が、無機界に於けると等しく、有機界に於ても亦眞理であることの實驗的研究に向つて、最初の路を開いた。それ以來、デュロン、デプレー、殊にルブネル、テイゲルステツト、アトワーター等の諸氏によつて生體に於ける熱量計が完成せられ、生活體が、一定時間内に、外に向つて現はす各種の現的「エネルギー」を、何れも熱として

精密に測定することが出來る樣になつた。而して又、一方に於ては、食物の中に含まるゝ潜的「エネルギー」を、熱量計によつて、熱として測定することによつて、一定の食物を攝取する場合、幾何の「エネルギー」が體内に入り來つたかを測定することとが出來る樣になり、斯くて、一定時間内に、體内に入り來れる「エネルギー」の總量（食物中の潜的エネルギー）と、同一時間内に體外に向つて出現せられたる「エネルギー」の總量（運動熱等）とを比較して見ると、其の量は相等しいもので、其關係を例ふると、恰も蒸汽機關に於て、一定量の石炭を入ることによつて、一定量の潜的「エネルギー」が供給せられ、石炭を燃燒すると、其の潜的「エネルギー」が、熱なる現的「エネルギー」となり、更に蒸汽の張力に變じ蒸汽機關を動かして、運動及び摩擦熱等の現的「エネルギー」となつて、外に向つて發現するに當り、石炭によつて供給せられたる潜的「エネルギー」の量と、外に向つて發現せらるゝ現的「エネルギー」の量とは、互に相等しく、即ち「エネルギー」は、たとひ型式を變へ（潜的が現的となり、或は現的が潜的となるが如く）、或は種類を變へ（化學的「エネルギー」が熱となり、熱が運動となり、或は電氣となるが如く）ても、其の量に於ては、寸毫も損缺することとなく、斯くて「エネルギー」不滅則が、無機界に於て確實に適用せらるゝと同樣であることが證明せらるゝに至つた。

斯く生活體に於ける「エネルギー」の轉換も亦、「エネルギー」不滅則に從ふものたる以上、生氣と云ふが如き、一種不可思議なる超自然的「エネルギー」の助を藉り來りて、生活現象を說明せんとすることは、全く不必要となり、加之、斯る學說は、「エネルギー」不滅則と全然相許容せざることゝなつたのである。

十一

而かも亦、「エネルギー」轉換の方面に於て、生活體に見らるゝ特異の現象は、刺戟性と云ふことであつて、例へば、今僅かの「エネルギー」を加へて、筋肉や神經を刺戟すると（解發作用）、其の際、加へられたる「エネルギー」とは全く比例せざる、大なる「エネルギー」が發現するものである。是のことは、一見すれば、「エネルギー」不滅則と矛盾して居る樣に見へ、從つて、生氣と云ふが如き神祕の力が之れに働いて居るのではないかと考へらるゝのであるが、併し仔細に考察を下して見ると、是れとても、決して「エネルギー」不滅則に矛盾しないのみならず、實は又このことを證明して居るものである。夫の彈藥等が、僅少なる「エネルギー」によつて、解發作用を受けると、

非常に大なる「エネルギー」を發現するのは、是れ全く、彈藥の中に、豫め大なる量の潜的「エネルギー」が貯へられて居る爲であつて、矢張「エネルギー」不滅則に隨つて、「エネルギー」の發現が行はれて居るのである。生活體に於ける刺戟性も亦、全く夫れと同樣で、今日に於ては熱化學の定則から、明瞭に說明が與へらるゝことになつたのである。

十二

更に又、一七八六年ガルバニによつて、生物電氣の發見があつた以來、生活體に於ける運動・感覺等の敏活なる機能を、斯の電氣の作用に歸し、而かもこの電氣發生は、生氣の如き特殊の力を假り來るにあらざれば、說明出來ないものと信じて居たのであるが、デュボア、レーモン、ヘルマン等の諸氏を始として、殊に晩近に至りて、「イオン」學說の勃興を見るに至り、オストワルド、ネルンスト等の研究によつて、無機界に於て電流の發生すると、全然同一の理法によつて、生活體に於ける電流も亦發生するものであることが明かとなり、今日に於ては、此の生體に於ける電流の發生を手懸りとして、生活現象の過程を、最も精細・確實に檢索することが出來る樣になつたのである。例へば神經に於ける興奮作用の研究の如きは、電氣の發生を手懸りとする爲に、何等の方法もないのである。神經は、筋肉等と異つて、興奮したからと云つて、少しも萎縮するでなし、別に是れと云ふ見らるべき變化は起らないのであるが、唯獨り、電氣の現象が起つて、現に興奮して居る場所は、然らざる場所に比べて、（－）になる。而かも其の（－）になる程度は、興奮の程度が强ければ强いだけ著しいものである。そこで興奮して居る場所と、否らざる場所とを針金の如き導體で結び附けると、其の輪道には電流が見られる。之れを働作電流と云ふのである。而して又、興奮が一ヶ所より他の箇所に進むにつれて電位の（－）であることも、次から次へと移り行くものである。そこで今此等の關係を、精密なる測定裝置で測ることによつて、或る刺戟の下に起る神經の興奮が大なるか小なるか、又た刺戟の强さと興奮の大小との間には、如何なる關係があるか、果た又如何なる速度を以て神經の中を興奮が傳播して行くものであるか。又た其の傳播に際して、空氣や水の中を行く彈丸が、摩擦の爲に漸次に其の力を弱め、速度が鈍ぶるやうに、漸次に、力に於ても、速度に於ても、減衰を示すものであるか否か。或は又、一ヶ所に於て興奮が始まつてから、終はる迄、即ち其の經過にどれ丈けの時間を要するものであるか。と云ふが如き、研究上非常に困難なる、而かも非常に興味ある各種の問題を、詳細に解決すること

[illegible]
では、一時間に約二八米であるが、人間の運動神經に於ると、一二〇米にも達する。而して生理的狀態の下には、興奮の力も速度も、少しも減衰せぬものである。又た、一ケ所を興奮が經過するに要する時間は、蛙の神經では、〇・〇〇七秒であることが分かつた。

斯樣にして、生活體に於ける「エネルギー」轉換の現象は、一般理學の法則に從つて說明するものなることは、今や何等疑を挾む餘地がなくなつた。

十三

更に轉じて形態變更の方面に就きて考ふるに、之れに二つの方面を區別することが出來るのである。其の一は、一個の卵より、一匹の鷄が出來る樣に、一個體に於て見らる、變化であつて、之れを『個體發生』と云ふのである。之れに反して、他の一は、各種族が、今日見らるゝが如き狀態に出來上る迄に、如何なる變遷を示したのであるかと云ふ問題で、即ち所謂『系統發生』の問題である。

先づ個體發生の問題に就きて見るに、生活現象の中でも、生殖作用位、不可思議なものはないのである。如何にして形なき[illegible]にし、[illegible]
[illegible]ない點迄、子孫に再現するのに、如何にして斯くはなるのであらうか。實に奇々妙々と驚かさるを得ないのである。斯の如妙なる例は、全く超自然的神秘的の力を待つに非されば、到底說明は出來ないものであると考ふるのは、誠に無理からぬことで、生氣說は、茲に最も深い根ざしを固めて居たものである。而して其の當の、最も普通的の代表者たるべきものは、「自然發生說」であつた。是の考によると、天地間に特殊の氣があつて、之の働によつて、生命なき物の間に自づと生命あるものがわき出ると云ふのである。例へばナイル河の泥土から鼠が生じ、露から蟲が出來ると云ふが如きものである。斯る考は、太古の人類は勿論のこと、アリストテレース如きも亦、盛んに之を唱導し、爾來殆んど二千年間の久しき、牢乎として拔くべからざる力を有つて居たのである。然るに、一六六八年に至つて、斯る考の誤を正すべき最初の實驗的研究が、レーヂイによつて爲されたのである。何人も知る如く、肉が腐敗すると、何時の間にか、澤山の蛆が夫れに出來る。生命なき腐つた肉に、如何にして生命ある多數の蛆が出來るのであらうか。是れは如何にも不思議である どうしても神秘の力を喚び來るに非されば、

證明は出來ないと思つて居たのである。然るにレーヂーは、次の簡單なる實驗によつて、其の誤謬を指摘し、之れに純然たる論理的の證明を與へたのである。氏は三個の壺を取り、各其の中に肉片を入れ、第一の壺は、口を其の儘にし、第二の壺は、口を羊皮紙で閉ざし、第三の壺は口を金網で覆ふて置いた所が、第一の壺の肉には、許多の蛆が發生したが、第二、第三の壺の肉には、蛆は出來なかつたのである。レーヂイ之を說明して曰く、蛆の出來るのは、蠅が卵を產み附ける爲である。だから何等かの方法で、夫れを防げば、蛆は出來ないのである。即ち新らしき生命が產れる爲には、生命を宿せる種子がある。其處に何等の不思議なく、神秘の力を認める必要もない。レーヂイの此の實驗は、コロンブスの卵であつて、今日から見れば、何んでもない樣であるが、併し其の卓拔なる識見によつて、二千年間の迷路より脫卻し得た功績は、實に偉大なりと言はなければならない。次でスワンメルダムも、レーヂイの實驗を追試し、其の正しきことを立證した以來、流石牢乎として拔くべからざりし自然發生說も、玆に甚しく動搖を來たするに至つたのである。

十四

然るに、偶々新らしき出來事があつて、自然發生說は、再び新たなる根據を得、勢力を盛り返へしたのである。一六〇八年に、ヤンセン兄弟によつて顯微鏡なるものが發明せられ、レウエンホエークは、自から之を改良して、夙に生物學の研究に應用し、驚くべき精密なる觀察をなして居たのであるが、一六八七年に至つて、偶々唾液を檢索しつゝある際、其の中に運動せる微生物を認めたのである。是れ即ち最初の「バクテリア」發見であつたのである。爾來、微生物と云ふ曾つて見られなかつた新らしい世界が、吾人の眼前に展開さるゝに至りて、少なくとも、この微生物の世界に在つては、自然發生を承認しなければならない樣な實驗が、先づネーダムなる舊教の僧侶によつて成されたのである。氏は、細口の壜に肉汁を入れ、之れを沸騰せしめて、其の中にあるべき生物を殺した後、嚴重に「コルク」で栓をして、更に其の上を封蠟で封じて置いたが、夫れでも、一定時日の後に、其の中に微生物が發生することを、一七四八年に實驗報告した。越へて七年、一七七五年に、スパランツアーニは、ネーダムの試驗を、更に一層嚴重なる方法で追試した。即ち細長い頸を有する壜を取り、肉汁を入れて、煮沸した後、直ちに其の頸部の硝子を溶かして、密閉を行つた所が、微生物は決して發生しなかつたのである。是れに由つて、

[illegible]

[illegible]（[illegible]）が入り來つた[illegible]

を行つた。

十五

然るに、更に又、自然發生說に有利なる一實驗が公にせらるゝに至つた。已に述べた樣に、一七七四年に酸素が發見せられ、軈て此の瓦斯なしには、生命の維持は不可能であつて、古來より言ひ傳へられたる「プノイマ」なる生氣の氣は、即ち斯の酸素瓦斯に外ならなかつたとが明かにせられて以來、之れに「生活瓦斯」と云ふ名稱さへ與へられる樣になつたのである。然るにスパランツアーニの實驗の如く、壜の頸部の硝子を溶かして、之を密閉したのでは、斯の大切な酸素瓦斯が缺乏するから、生命が成り立たないのであつて、隨つて此の實驗の成績を以て、直ちに自然發生說を否定することは出來なくなつて來た。そこでシュルツエや、シュワン等は、熱せる鐵管を通ずることによつて、芽胞を殺した所の空氣を、壜の中に通じつゝ、其の中に入れた肉汁を熱して、夫れが冷めた後、果して微生物が生ずるか否かを見て、自然發生說に正當の批判を下さんとしたのであつたが、佛のプーセーは、一八五九年に、次の實驗に

よつて、[illegible]

[illegible]を通り、其の中に、熱によつて[illegible]後、更に枯草のお汁を入れ込んで置いた所が、一定時日の後、其のお汁の中に、無數の微生物が發生することを見たのである。

併しプーセーの此の實驗は、五年の後、最近科學の建設者たるパステーヤによつて、完膚なき迄に其の誤謬を指摘され、自然發生てふことは、微生物の世界に於ても、斷然不可能であることが、徹底的に立證された。パステーヤは、プーセーの實驗を考察して、プーセーが水を清淨にすることを閑却して居つた故に、芽胞を附着せる無數の塵埃が入り込み、微生物が發育することを認め、更に進んで、煮沸せる肉汁を入れた試驗管の口に、綿の栓を施すことによつて、空氣の流通に依つて酸素の供給を杜絶することなく、而かも空氣中の微生物が綿の纖維によつて濾されて、其纖維間に滯留するから、何時迄經つても微生物が發生せぬことを實驗し、以て自然發生說に最後の一擊を加へたのである。

十六

斯くて自然發生說が顚覆せらるゝと共に、一面に於ては、生

殖細胞の研究が、堅實なる道程に進み、卵と精子とが合一せるものより、常に新らしき生物が發生することが明かとなつて、『各の生物は卵から』Omne Vivum exo Ovo なる學說は、何人も疑ふの餘地なきに至つたのみならず、更にファブリッチョ、ハーベー及びヴオルフ等によつて認められた發生學の進步によつて、受精せる單一なる卵から如何なる順序を經て、複雜なる構造を有せる一個體が出來上るかを知ることも出來る樣になつた。

更に又た、遺傳に關する研究の最近の進步は、實に目醒ましいものがあるのであつて、一八六五年に、メンデルによつて遺傳に關する三の大法則が、實驗的事實から歸納せられた以來、年を閱すること漸く五十年であるが、而かも少なくとも動植物に於ける遺傳の現象に至つては、殆んど數學的の精密さを以て、其の成果を豫言し得る程度迄著しい進步を遂け、人間の遺傳に關しても、幾多の正しい事實と說明とが得らるゝに至つた。

斯くて個體發生の何れの方面に於ても、最早神秘なる力を假り來る必要はなくなつたのである。

十七

轉じて系統發生に關して考察を廻らすと、如何にして種々なる種屬の生物が地球上に出來て、而かも、各適切なる構造と機能とを具へて、よく生存を享有して居るか、實に不思議の至である。此の大なる秘密の戶を開くべく、近代に至る迄、人々は唯々『創造(クリエーション)』と云ふ鍵より外に、何物をも知らなかつたのである。即ち造物主とか、神とか云ふ、全智全能の力によつて、有るが儘に生物が造られたのであると云ふ說明を以て、滿足する外なかつたのである。斯る神秘的說明の立場から云へば、生物は、神の意志によつて、最もよく生存に適する如く、有るが儘に造られたのであるから、生物は、太古より今日に至る迄、其の性狀を變化しないものであると言はなければならなかつたので、大博物學者リンネの言へる如く、『神は太初以來現存の如き種々なる動物を造り給へり』と云ふことは、近世に至る迄、何れの學者も皆之を信じて居たのである。然るに又た一面に於ては、進化哲學の見地から、夙に生物の變化し進化し行くことを唱へ出した學者も遠くはエムペドクレースを始めとして、アリストテレースの如き人が居つて、近くはヘーゲルの如きも同樣の意見を持して居たのであるが、此の哲學上の考察に、幾多生物學上の事實を提供して、動かすべからざる堅實なる基礎の上に、進化論が樹立されたのは、近代のことに屬する。而して其の創刱者は、佛のラマークであり、之れを大成したのは

[illegible]

ラマークは、化石の研究によつて、古生物と、現代の生物とは、大に形態を異にし、而かも舊き地層より出づる者程、其の差違益々著しく、新らしき地層になるにつれて、現世代のものに近似することの事實を確め、生物變遷說を唱へ出したのである。而し變化が、進化の基礎をなすのであつて、想ふに、外界の變化に順應し、生物の器官中、よく用ゐらるゝものと、用ゐられないものとを生じ、屢々用ゐらるゝものは良く發達し、之れに反して、用ゐられないものは漸次に退化して、其の傾向は、遺傳によつて順次に子孫に遺傳せられるから、代を重ぬる間に、益々其の傾向が助長せられ、生存に適應せる進化せる生物が出來ると說いたのである。是れ即ち彼れの直接順應說である。斯の意見を纏めて一九〇五年公にしたのが、『動物哲學』Philosophie zoologiqueなる有名な書物であつたのである。

十八

ダーヰンは、更に廣く、更に大なる生物學上の事實に立脚して、生物進化の確實なる議論に到達し、ラマークに後ること恰度五十年、即ち一八五九年に、不朽の著たる『種源論』Origin of species に於て、其の意見を公にし、次で『人類の血統』

[illegible]

ラマークは、[illegible]

活物の變化には、多く生存に都合よき[illegible]つてなければならぬと唱へ、其の點に於て目的論を主張したに反して、ダーヰンは、より自由なる、より自然なる、より科學的なる立場を取つて、進化の事實を說明せんとして、『淘汰說』を掲げ出したのである。即ち外界の變化に伴ふて起る身體の變化は、因果の關係から定まるもので、必然的、偶然的、盲目的のもので、必ずしも合目的性のものではない。然らば、此の盲目的、偶然的の變化からして、如何にして進化が起るかと云ふと、夫れは全く淘汰の働によるのである。即ち幾多の偶然的變化を起したものゝ中で、生存に適當なるものゝみが、優者となつて保存せられ、不適當なるものは、劣者として勢力減せられ、其の結果、優者が其の生存に大切な優れた形質を、遺傳によつて子孫に傳へ、幾代も之を繰り返すことによつて、愈々益々其の優秀なる形質を發揮し、時と共に進化を起すのである。ダーヰンは、淘汰作用に自然淘汰、自然即ち外界から起るゝ、生殖に關する雌雄淘汰と、人間によつて行はる、人爲淘汰なる三様を區別した。要するに此の淘汰の働が、絶えず生物界に働いて、盲目的、偶然的に變化せる者の中から、良きものと、悪しきものとを撰擇して

良き者のみを生存せしめるから、茲に始めて進化なる出來事が起るのである。

十九

ダーヰンと時を同じうして、英國にウオレスあり、南洋諸島に旅行して、廣く材料を集め、ダーヰンと同樣の結論に到達したのであるが、而かも其の功をダーヰンに讓り、『ダーヰニズム』と題して、其の著書を公にしたのは、實に學界の美事と言はなければならない。次でハツクスレー出でゝ、進化論を提げて『自然界に於ける人間の位置』に言及し、又た獨逸にはヘツケル、ワイズマン等の大家出でて、進化論の爲に氣を吐き、斯くて進化論は、啻に生學物上のみならず、倫理・道德・宗教・哲學等、あらゆる人間の思想界に、一大革新を喚び起したのであ。更に又、ミユルラー、ヘツケルによつて、系統發生上、初步の階級に立てるものの形態と、個體發生の際、初期に現れる形態とを比較すると、其の間に明瞭なる並行關係を認むることが出來ることを確めて、『個體發生は系統發生の簡單なる繰返である』と云ふ、所謂生體生成の原則なるものが、樹立せらるゝに至つたのである。

斯くて形態變更の方面に於ても神秘なる力に托して之れを說明せんとする生氣說を排斥して、純論理的、科學的に、之れを解釋すべき十分なる確信が與へられたと同時に、大哲カントをして、生活體を讚美し『現象界に於ける奇蹟なり』と呼ばしめ、生氣說學徒の據つて以て鐵壁と頼める合目的性 Zweckmässigkeit の問題をも機械的に說明すべき道が開かれたのである。

斯く考察し來る時、生活現象の何れの方面に於ても、之れを、自然科學の理法に從ひて解釋すべき十分なる理由を見出すのであつて、即ち生命に關する自然科學は、茲に動すべからざる存立の基礎を築くことが出來るのである。

二十

さりながら、茲に、翻つて大に考慮を要する根本問題が橫はつて居ることを忘れてはならない。由來、自然科學の目的は、自然界に於けるあらゆる現象を、物質を構成せる微小體の牽引と反撥とによつて起さるゝ、時間及び空間に於ける運動に還元し、數學的に之れを解析し、因果の關係を瞭然たらしむることにある。而かも其の際『物質』及び『力』なるものゝ本性は如何。又た如何にして是等のものが吾人の意識に作用するか。抑々意識とは何であるかの根本問題は、未解決の儘に殘されて居る。

這般の關係を、最も明瞭に敘述して、吾人に敎ふるに、自然

[illegible]に
デュボア、レーモンによつて提唱された、「自然認識の限界」Die Grenze des Natur Kennens と言はるる有名なる講演である。デュボア曰く、抑々物體は、之を細分する時、最早之れを分つことを能はざる限界に到達するものであるか。若し一定の限界があれば、夫れは原子であらうか。夫れともまた、物體は限りなく細分せらるゝものであるか。若し無限に細分せらるゝとせば、其の極終に實質なきものとなり、此の實質なきものが集まつて、如何にして實質あるものを生ずるや。何れにせよ、今日原子と云ひ電子と云ふ所謂微小體なるものは、畢竟一の概念に過ぎないもので、其の本性に關しては、全く不明である。隨て又、力と云ひ、「エネルギー」と云ふものも亦、一の概念に外ならないものである。

自然科學が、現象界を說明せんとする基礎をなせる原子乃至電子の如き者も、物體の分割し得らるべき究極の單位であるとすれば、此の原子も亦、一の物質で、一般物質と同じく、廣袤と、凝性と、力とを具へて居るものである。して見ると、縱令、物質界に於けるあらゆる現象を、單一なる原子の運動に歸き得たとするも、畢竟、其れは、複雜なる現象を、簡單なるものに分析し得たに過ぎないのであつて、之によつて、「物質」なる「力」なるものゝ本性に[illegible]ても、[illegible]達することが出來ない。是れ自然認識の第一の關門である。

更に轉じて、吾人が天體に於ける日月星辰の運行を、天文學的に測定し得た如く、各瞬時に於ける腦の原子の位置及び運動の數を、測り知ることが出來、此の觀念には、此の原子群が、斯の如き變動を起し、彼の表象には、彼の原子群が、彼の如き配列をなすことを見得るとするも、而かも吾人は、之れによつて、最も簡單なる心的作用の起る所以をも、理解することは出來ない。其の際、吾人の知り得る所は、單に、斯の如き心的作用には、斯の如き腦微小體の運動を伴ふと云ふに過ぎない。是れ即ち自然科學的認識の第二の難關である。

約言すれば、(一)物質及び力の本性、(二)意識作用の本性。是れ即ち自然界認識の二大關門であつて、自然科學の領域は、之れによつて限ぎられ、此の關門以外に、一歩も踏み出すことは出來ないのである。デュボア、レーモンは、此の領域以外を呼んで、『永遠に測り知る能はざる領域』Ignoramus Ignorabimus と呼んで居る。而かも此の二大關門は、要するに、「物」とは何ぞ、「心」とは何ぞと云ふ、人間の有てる最も古くして最も新らしき問題に歸着する。何となれば、[illegible]は、物

であり『精神』は『力』であるからである。

二十一

斯くてカントが、曩きに『純粹理性批判』に於て、哲學的思辨より喝破し所のものを、デユボア、レーモンは、科學的見地から細說して、自然科學的認識には、一定の限界あることを否むことは出來ないことを明らかにした。此の打ち越すべからざる限界によりて『物』と『心』との領域が、截然として分かたれて居る。實在せる唯一物を、外的・客觀的・空間的に『物』として觀察する時、夫れは卽ち自然科學の領土であり、之れに反して、內的・主觀的・非空間的に『心』として考察する時、夫れは哲學・宗敎の封域である。形而下の學者も、形而上の學者も、宜しく日夕之を銘記し、常に其の守るべき分を守り、力むべき道を力め、決して他の領土を侵してはならない。而かも又、自己に隷屬せる領土內にありては、行くとして無礙自由であらねばならぬことを牢記せねばならぬ。其の意味に於て、自然科學は、物質界征服の女王として、其權威を主張すべく、一の躊躇も、一の狐疑も有つべきでない。たとひ夫れが、無機界に於て起るものであらうとも、生物界で起るものであらうとも、等しく是れ物質界に於ける現象たる以上、悉く皆、自然科學の支配すべき領土である。斯の女王の手によつて布告されたる同一の理法、同一の原則は、無機界にまれ、有機界にまれ、往くとして行はれざるべき道理はないのである。吾等は、斷乎として『夫れ無生氣說』を叫ぶべきである。

さりながら、自然科學者が、若し輓近自然科學の勝利に心醉し、其の守るべき本分を忘れ、止るべき範圍を越えんか、其の結果は、忽ち破滅である。精神を以て、腦の分泌物なりとするが如き、夫の淺薄なる唯物論者の敗北は、其の適例である。

夫れと同時に、若し哲學者及び宗敎家にして、『物』と『心』との對峙を明かにせず、完結せる因果律を破り、『エネルギー』不滅則を無視し、超自然的・神秘なる力を假り來るに非ざれば、到底生活現象を解釋すること能はずとなし、生命の科學たる生理學を嘲り、以て學術の進步を阻害し、迷想の種子を培はんとする者あれば、鼓を鳴らして其の非を責めなければならない。

久しかりしかな、科學と哲學宗敎との爭よ。さりながら、自然科學と哲學とが、各々其の本分を自覺し、其の守るべき領域を守らんか、啻に相爭ふべきものでないのみならず、互に相待ち相扶けなければならない。woher? を說明すべき自然科學も、warum? を解釋せんとする哲學も、畢竟、宇宙の半面を語るものに過ぎない。此の兩者の堅き握手によりてのみ、圓滿なる世界觀と健全なる世界とが生れ出づるのである。凡そ偉大なる哲學思想なくして、決して偉大なる科學は現はれない。將た又、堅實なる科學の知識なくして、決して堅實なる哲學は起らない。其の意味に於て、ヘッケルの言へる如く、『あらゆる眞正の哲學は、自然科學であり、あらゆる眞正の科學は、又た自然哲學でなければならない。』（完）

無産階級の教養問題

無産階級教養の四目標

安部磯雄

無産政黨が當然興るべきものであることは今日に於ては最早何人も疑はない處であるが、問題は第一回の總選擧に於て無産政黨が幾何の代表者を議會に送ることが出來るかといふことであつて、此點に關しては人に依つて意見を異にし、要するに見込みが立つて居ない。第一に私共の考へる處では、有權者中多數を占める無産者が無産政黨を了解してゐないことであつて、よしんば了解してゐるとしても、其結果如何なる態度を彼等が無産政黨に對してとるかといふことは大なる疑問である。矢張下らない代表者が出て來て議會で騒ぐ位が落ちではないかといふ風に無産政黨に對して考へて居る者もあらうから、斯くの如き人々の中には、第一期の選擧に際しては誰れに投票していゝか迷ふ者もあらうが、大多數はたぶん既成政黨の候補者に投票することになるであらう。そこで大切な問題は無産政黨が何ういふ風に訓練されるか、又將來如何なる態度を以て進むかといふことであつて、其如何に依つて無産政黨の運命は定ると云ひ得る。永い將來に於ては結局無産政黨は大勢力となることに疑はないが、三四回の總選擧を經た位では、若し無産政黨の態度が良くない場合には勢力を得ることは難かしい。斯くて問題は懸かつて無産政黨が立派な政黨であり得るか否かに在る。これに關して種々の方法に依つて無産階級を政治的に訓練する必要が生ずるのである。或は書籍、小冊子、雜誌、講演等の手段に依つて一頻り無産者の訓練が盛に行はれねばならぬ。私は次の

四點から此問題に就いて考へやうとするのであるが、此四つの點に於て無産政黨が成功し得るならば、將來三四回の總選擧に依つて無産政黨は大政黨たり得る可能性があると信ずるのである。

第一の點は思想問題に關するものであつて、何故に最初に此問題を考へるかといふに、元來思想と行動とは區別して觀るべき性質のものであるにも拘はらず、我國に於ては思想と行動の關係は餘りに接近して居て、思想は思想、行動は行動といふ風に單純な觀方を持つことが出來ないことが無産政黨の發達に對して重大なる障害となつて居るからである。最近勞働團體の間に起つた事件として、日本勞働總同盟から分離した團體が出た。又其以前にも總同盟に對立して居た團體があつて反總同盟を形作つて居たが、斯くの如き形勢は勞働團體自ら不利益を招くものであると云はなければならない。勞働團體の間に於ける斯くの如き分裂の傾向は其原因が勞働團體の間に於ける思想上の問題に發してゐる樣に思はれる。而も此場合に、若し思想が勞働者全部に行亙つてゐて、其處から思想上の問題が勞働團體の分裂を生じたのなら未だしもであるが、それの原因が主として勞働團體の首領株の間に於ける思想的立場の相違に歸せられるのであつて、此場合首領側に於ては明かな思想の區別の上に立つての態度であるが、多數の勞働者は其分裂の趣意さへ十分に呑み込めて居ない狀態に在るのである。勞働團體の分裂が果して斯くの如き事情の下に於て行はれるならば、勞働團體のためには益々大なる損失であつて、若し首領株がも少し寛大な態度をとることが出來たならば分裂の結果を見ないでも濟むのである。

日本の勞働團體の間には三つの思想が分れて居ると云はれて居る。社會主義、無政府主義、共産主義の思想が即ちそれである。勞働團體の間に斯くの如き思想の分野が明瞭であるかどうかは疑問であるが、少くとも此三つの思想の傾向が認められるのである。之等の思想の相違は、大體に於て、社會主義の傾向をとる勞働團體（實は其首領株）は出來る丈け革命手段に依らない議會政策で行かうとするものであり、之れに對して無政府主義或は共産主義の傾向をとる者は、從來などの事情に照らして議會政策を有効ならずとして排斥し、時到れば直接行動に出でやうとする相異のある點に於て見出されるのである。乍併勞働團體に於ける無政府主義者、共産主義者が此直接行動といふ一點に於て一致提携して居るかといふにさうではなく、今日の共産主義者は、具體的に云へば露西亞のボリシエヴヰキに同情を有し、無政府主義者は反對に露西亞に於ける少數者の獨裁政治を否定する立場に在る者である。併し前に云つた如く勞働組

今まで現はれた二つの問題に[illegible]か、三つの思想の[illegible]ない。若し今仲間が斯かる思想上の問題に拘泥して行事を續けて行く時には、之れが首領株の間に限られて居る場合には無産階級の運動に大した影響を及ぼさない。乍併斯かる思想の所有者達は、それに關する宣傳の慾望を持つのであつて、常に自己の思想に他を捲き込みたい衝動を感じてゐるのであるが、又此事が實際に於て好もしくない傾向なのである。思想は飽く迄も思想としての自由を尊重することが必要であつて、互に思想征伐を事とするやうな態度は思想上の問題に對しては特に避けなければならないのである。その爲めに眼の當り行動に對して種々の障害を來すことがあれば、無産階級の運動のために實に大なる損失といふべきであつて、餘りに思想に拘泥する態度は、俗に云ふ取らぬ先の皮算用で、それに囚はれ過ぎて先の事ばかりを考へ過ぎるといふものである。今は無産階級が一團となつて解放運動に全力を注ぐべき時である。然るに内に斯くの如き思想上の問題があつて、之れが盛に新有權者の間に宣傳される結果、思想に興味を持たぬ人々をして選擧の目標に迷はしめ、其何人に投票すべきかを知らないために、同一選擧區から前の思想上の三種の候補者が現はれても結局共倒れの現象を呈するに至ることになる。[illegible][illegible]事だに、無産政黨の結束は出來ないものである。私[illegible]らば、例へば議會政策を否認する人々に今次選擧[illegible]ならば、暫く傍觀者の立場に立つて居る方が好いと考へるのである。議會政策も滿更棄てたものではない。現に現在の日本に於ては議會政策も必要なのである。何んと云つても無産者の結合が出來なければ如何なる場合に於ても無産政黨の目的を達することは出來ぬ。或意味に於て議會政策が無産階級を訓練する手段となるのであるから、議會政策を否認する人々と雖も、無産階級の訓練といふことを主として考へるならば、之れに應援せぬまでも議會政策運動に對して邪魔をする譯はない。何故ならばそれが無産者の合同のために、又訓練のために利益があると信ぜられるからである。

第二の點は選擧に對する無産階級の態度に關する問題である。私は新有權者に對して是非考へて貰ひ度いことがある。それは現在の政治の腐敗の原因が何に基くかを見窮めることである。其原因は極めて明瞭であつて、代議士や大臣に其責任があるのではなく、それは結局は有權者が悪いことに歸するのである。今迄の有權者位危介な手數のかゝる者はなかつた。其意味

は彼等は自由意志に依つて投票を爲さず、他人の依頼を受けてから初めて投票をする決心が着くのであるから、換言すれば彼等は心に定むる處がないために其處に勸誘の必要が生じ、運動の必要が起つて來るのである。從つて運動費が重要なものとなり、代議士は其埋合せに金を儲けるといふことになるのである。代議士の肩書を利用して利權を漁ることも有り得ることになるのである。之れは明かに政治腐敗の原因である。故に有權者が全然從來の態度を改めて、選擧は他人の依頼を受けてするものではなく、自由意志に依つて自己の選んだ候補者に必ず投票するといふことになれば、選擧に運動を要しない時代が來り、總ての有權者の態度がさうなつて來れば、候補者となるに金を要しなくなるから好い人物が候補者として現れるやうになり、斯くして政治腐敗は跡を絶つに至る。即ち有權者が選擧に於て運動の餘地なからしむるやうに仕向けることが政界改善の第一歩となるのである。要するに純理から云つて候補者が有權者に對して頭を下げるべきではなく、反對に有權者から候補者に依頼をするのが本當であつて、其場合に選擧の費用を負擔するは勿論、時間と勞力までも捧げるのが當然なのである。候補者が投票貰ひをするのは有權者の責任であつて、頭を下げて來る者には斷然投票をしないといふことに有權者の決心が着きさへすれば、投票の依頼は自然になくなるに相違ない。私は常に此態度を實行して居る爲めに、總選擧の時には投票の依頼人はやつて來ない。然るに近頃では町會議員などの選擧も競爭が惡化して來たゝめに、私の住んで居る高田町などに於ても毎日何人も町會議員の候補者が訪問して來るやうになつた。私は平常自分の意志を明かに發表して居るに拘はらず、此種の訪問者がやつて來ると寧ろ侮辱を感じる。だから私は棄權して誰れにも投票しないことにした。私は新有權者に對しては孰れかの政黨に入る樣になることを望む。それは既成政黨であると、無産政黨であるとを問はない。有權者が孰れの政黨にも屬せずどつちつかずで居る爲に、其事が或意味で現在の政治腐敗の間接の原因となつて居るとも云へるのである。日本人は徳川時代から何等かの宗旨に入つて居り、眞宗とか眞言宗とかの宗徒であつた。眞言宗の者は眞宗の人に對して、宗旨の相違上或事柄に關して依頼を受けても相手を拒絶し得る立場に在るのであるが、私は有權者が政黨に加入して居る理由に依つて、自黨以外の候補者を拒絶し得ること前者の場合の如くになるやうになることを望むのである。無宗教や無籍者であることは決して名譽でも誇りでもない。總ての有權者が孰れかの政黨に屬することになれば、投票の賣買も行はれなくなり、候補者の運動も無益となる。政治の

第三は　無産政黨は金力に依頼しないといふことであつて、之れは無産政黨の特徵を爲すものである。無産政黨は幸に金力がないから之れに頼ることが出來ない。又假令んばそれがあるとしても、其事が從來とても政治腐敗の原因を爲して居たのであるから、無産政黨の今後の努力は政治から金力を驅逐することに在らねばならぬ。現在に於ける政治上の金力の位置は、それを差引けば後には何物も殘らない程政治的に重要さを持つて居るのである。第一に代議士の候補者は金力なしに立候補することが出來ない。總選擧の際世間を景氣よく東奔西走して居る者は皆金力に依つて動いて居る運動員や事務員であつて、中には全然金を目あてにして働く政治ブローカーと稱する人種も存在して居る。勿論政黨は金力なくして存在し得ないのである。然らば政黨の金の出處は何處であるかといふに皆富豪の手から出て居る。富豪が政黨に金を出したのは昔は道樂からであつたが、今日ではさうではなく、出資をして置けば、政黨が內閣を組織した時に返禮として種々便宜が得られるために、それは富豪が株を買ふ代りにする政黨に對する一種の投資に外ならない。若し好い株であつたら買手もあるが、ぼろ株なら投棄する

[illegible]
の解散をなすに至つたことは[illegible]であつて[illegible]なた、ため
に[illegible]せざるを得ない[illegible]運命にある[illegible]である。斯く
の如く金力は政治に缺くべからざる者であるが　[illegible]金力なくしては政治が出來ないといふのは大なる迷信である。從來政治に金力が伴はねばならなかつたのは、其第一の點に於ては有權者の責任であつた。金力の背景を持たぬ無産政黨は、選擧に際しては金なき選擧をやらねばならぬ。それが出來れば政治界のレコードであるが、無産政黨は其れを作るために努力しなければならぬのである。然らば果して金なき選擧をやるには何うするかといふに、それは必しも困難なことではない。從來は候補者が總選擧に臨んで慌てゝ運動をしたから金が要つたので、無産政黨は　將來は平常から用意して黨員の募集に金力を注ぎ、二三萬位を黨員に引込むことが出來たら選擧は樂に出來るに相違なく、固より金力がないのであるから、有權者が時間と勞力を寄附する者があれば總選擧の中はビラをはる費用位いで濟むし、政見なども初めから定まつて居ることであるからわざとらしい政見發表の演說會を開く必要もないのである。又無産政黨はそれ自身金力に頼らぬばかりでなく、同時に候補者に對しても選擧に際して金を費消させぬ方針をとらねばならぬ理由

は彼等は自由意志に依つて投票を爲さず、他人の依頼を受けてから初めて投票をする決心が着くのであるから、換言すれば彼等は心に定むる處がないために其處に勸誘の必要が生じ、運動の必要が起つて來るのである。從つて運動費が重要なものとなり、代議士は其埋合せに金を儲けるといふことになるのである。代議士の肩書を利用して利權を漁ることも有り得ることになるのである。之れは明かに政治腐敗の原因である。故に有權者が全然從來の態度を改めて、選擧は他人の依頼を受けてするものではなく、自由意志に依つて自己の選んだ候補者に必ず投票するといふことになれば、選擧に運動を要しない時代が來り、總ての有權者の態度がさうなつて來れば、候補者となるに金を要しなくなるから好い人物が候補者として現れるやうになり、斯くして政治腐敗は跡を絶つに至る。即ち有權者が選擧に於て運動の餘地なからしむるやうに仕向けることが政界改善の第一歩となるのである。要するに純理から云つて候補者が有權者に對して頭を下げるべきではなく、反對に有權者から候補者に依頼をするのが本當であつて、其場合に選擧の費用を負擔するは勿論、時間と勞力までも捧げるのが當然なのである。候補者が投票貰ひをするのは有權者の責任であつて、頭を下げて來る者には斷然投票をしないといふことに有權者の決心が着きさへすれば、投票の依頼は自然になくなるに相違ない。私は常に此態度を實行して居る爲めに、總選擧の時には投票の依頼人はやつて來ない。然るに近頃では町會議員などの選擧も競爭が惡化して來たゝめに、私の住んで居る高田町などに於ても毎日何人も町會議員の候補者が訪問して來るやうになつた。私は平常自分の意志を明かに發表して居るに拘はらず、此種の訪問者がやつて來ると寧ろ侮辱を感じる。だから私は棄權して誰れにも投票しないことにした。私は新有權者に對しては孰れかの政黨に入る様になることを望む。それは既成政黨であると、無産政黨であるとを問はない。有權者が孰れの政黨にも屬せずどつちつかずで居る爲に、其事が或意味で現在の政治腐敗の間接の原因となつて居るとも云へるのである。日本人は徳川時代から何等かの宗旨に入つて居り、眞宗とか眞言宗とかの宗徒であつた。眞言宗の者は眞宗の人に對して、宗旨の相違上或事柄に關して依頼を受けても相手を拒絶し得る立場に在るのであるが、私は有權者が政黨に加入して居る理由に依つて、自黨以外の候補者を拒絶し得ること前者の場合の如くになるやうになることを望むのである。無宗教や無籍者であることは決して名譽でも誇りでもない。總ての有權者が孰れかの政黨に屬することになれば、投票の賣買も行はれなくなり、候補者の運動も無益となる。政治の

第三に 無產政黨は金力に依頼しないといふことであつて、之れは無產政黨の特徵を爲すものである。無產政黨は幸に金力がないから之れに頼ることが出來ない。又假令んばそれがあるとしても、其事が從來とても政治腐敗の原因を爲して居たのであるから、無產政黨の今後の努力は政治から金力を驅逐することに在らねばならぬ。現在に於ける政治上の金力の位置は、それを差引けば後には何物も殘らない程政治的に重要さを待つて居るのである。第一に代議士の候補者は金力なしに立候補することが出來ない。總選舉の際世間を景氣よく東奔西走して居る者は皆金力に依つて動いて居る運動員や事務員であつて、中には全然金を目あてにして働く政治ブローカーと稱する人種も存在して居る。勿論政黨は金力なくして存在し得ないのである。然らば政黨の金の出處は何處であるかといふに皆富豪の手から出て居る。富豪が政黨に金を出したのは昔は道樂からであつたが、今日ではさうではなく、出資をして置けば、政黨が內閣を組織した時に返禮として種々便宜が得られるために、それは富豪が株を買ふ代りにする政黨に對する一種の投資に外ならない。若し好い株であつたら買手もあるが、ぼろ株なら投資する

……に閉ぢせざるを得ない悲慘な運命に在……の如く金力は政治に缺くべからざる者であるが、乍併金力なくしては政治が出來ないといふのは大なる迷信である。從來政治に金力が作はねばならなかつたのは、其第一の點に於ては有權者の責任であつた。金力の背景を待たぬ無產政黨は、選舉に際しては金なき選舉をやらねばならぬ。それが出來れば政治界のレコードであるが、無產政黨は其れを作るために努力しなければならぬのである。然らば果して金なき選舉をやるには何うするかといふに、それは必しも困難なことではない。從來は候補者が總選舉に臨んで慌てゝ運動をしたから金が要つたので、無產政黨は、將來は平常から用意して黨員の募集に全力を注ぎ、二三萬位を黨員に引込むことが出來たら選舉は樂に出來るに相違なく、固より金力がないのであるから、有權者が時間と勞力を寄附する者があれば總選舉の中はビラをはる費用位いで濟むし、政見なども初めから定まつて居ることであるからわざとらしい政見發表の演說會を開く必要もないのである。又無產政黨はそれ自身金力に頼らぬばかりでなく、同時に候補者に對しても選舉に際して金を費消させぬ方針をとらねばならぬ理由

は、さうすることが後に代議士になつた時にそれを取返さなければならぬ必要を感ぜしめるからである。固より無產政黨の代表者は有產者ではないが、選擧に金さへ費はなければ、代議士となつた後も歳費三千圓位で生活を保障されることが出來る。而も政治上の事で歳費に手を着けさせぬやうにし、此を得ずんば有志が金を集めて其費用に當てる樣にしなければならぬ。又一旦代議士となつた以上は、其生活狀態は從來の代議士のそれとは自ら異るものがあるべきである。代議士會をやるのに三緣亭へ行つたり、待合で相談會を開いたりしては、代議士の歳費は恐らくは小使にも足らないであらう。斯くの如き狀態は將來の無產政黨の代議士の生活にはあり得べからざる事でなければならない。金力に依存しない無產政黨の態度は當然其總ての點に於て出來得る限り質素でなければならないのである。

第四の點は、簡單に云へば暴力に反對することである。今日我々の周圍には暴力が勢力を占めて居て人々は不愉快なる狀態の中に在る。暴力とは必ずしも腕力に限られることではなく、議會の言論を妨害する野次も其一種であり、議會か公然と之れを許して置いて取締らないのは議會の無力を證明するものである。若し無產政黨が次の總選擧に於て十人若しくは二十人の代表者を議會に送ることが出來たならば、有權者の彼等に囑ふ處は、決して今の代議士の眞似をすることではなく、其態度は必ず上品であることである。議會に於ける野次などは勿論嚴禁しなければならないものであつて、相手が野次つたからとて一々それに應酬する必要はない。野次は一々應酬するから益々馬鹿らしくなるのである。無產議員は演說の速記錄が天下に廣く讀まれゝば其目的は達せられるのであつて、野次議員共に演說を聞かせる必要はちつともないのである。之れは暴力に門まされるのではなく、勿論暴力を恐るゝのでもない。無產政黨は暴力でも對抗出來るのであるが、それは無產政黨自ら其起つて來た理由を無視するものであると云はなければならぬ。要するに無產政黨は現在では未だ十分に多くの人々の信用を得ることは困難であり、其將來に對しても懸念を持つ者も少くはない。社會の中には小ブルジョアの階級が存在して居て、それは勿論有產者でなく、今日の生活には困つては居ないが。必しも生活の安定を保障されて居るのでもない、筋肉或は頭腦勞働者であるが、彼等は無產政黨が生れてもすぐそれに飛び込んで來るかどうか曖昧なる日和見黨である。從つて第一期に無產政黨の代表者が議會に送られた時に、中立の人間か無產議員の態度を注現して居るものと思はなければならぬ。無產議員は之れに對して議會に於いて上品に、而も堂々と振舞つて其態度を天下に示さなけ

されるに到れば、第一期には四五人、十人の代表者を議會に送り得るに過ぎないにしても、將來第二期・第三期の議會には無產政黨が次第に勢力を增加して、終局の勝利を得るに至るこ

以上の諸點に關して、我々は……めに、其孰れにも特に其中の首領株の人々が注意し……ればならない緊切なる點があると信ずるのである。

無產階級今昔觀

文學博士　三宅雪嶺

歷史上の變動の著しいのは、無力者と見られた者が有力者となるにあつて、無產階級が力を得るのも其の一つに居る。無產階級は時と處とで事情を異にし、日本の歷史でも幾變遷して居る。王朝時代の階級は武門の力で壞れ、新に階級が成立し、南北朝を經て漸く混亂し、遂に最下級より最上級に昇る豐臣秀吉の如きが出で、町人百姓から大名に取立てられたのが幾人もある。德川氏が新なる情勢に處し、安寧秩序を保持しようとし、成るべく階級の區別を嚴にし、下が上を冒し得ないやうにした。武士が上下の順序を正し、町人百姓は武士の前に頭の上がらぬ者とした。當時國民を分ち、有祿者と無祿者とし、有祿者は生活を保障され、無祿者は稼いで命を繼がねばならぬとせられた。所有權が明白を缺き、領主が領土を所有し、領內の民は領主の慈悲で生存するかに思はれる。職務から言へば今の知事と大差なくて、管內の者は何でも領主の勝手になりさうである。勝手にすべきでないと心得て居るのもあれど、多くはさうでなく、領主は領內で何でも出來るとて、祿を頂いて居る者は町人百姓を叱り飛ばし、無禮の一言で首を斬つたりした。謂はば戰勝者の威を振ふのであつて、戰敗者は從順を裝ひ、諂諛を免かれれば幸とした。武士は祿高に應じて、邸宅を壯大にし、庭造りに數寄を凝らし、町人で富むのも其の眞似する事が出來

ず、眞似すれば、町人の分際で不屆千萬として罰せられ、動もすれば全部を沒收された。武士との關係を除いて、商業の規模小さく、概ね小商人たるを免かれない。商人は武士よりも金があると思はれぬ。貧乏侍より金があり、中に大金持と言はれるのがあつても、一旦事があれば軍用に獻ぜねばならぬとせられる。百姓に至つては、生活程度を低くするのが當然、米を作つて米を食はず、米をお上に納め、自ら其の餘りを食ひ、餘りがなければ麥、麥がなければ稗を食ふべき者となつて居た。

武士は金を念とすべき者でなく、金を手にするだに卑しいとなつて居つて、金を念としなくても、生活を保障され、有産階級の位置に居つた。町人百姓は金があつても何時取り上げられるか知れず、況して其の日暮しが多く、無産階級と看做さるべき形がある。太平の續くに伴ひ、槍先きで治めた權威が減じ、叱り付けても前ほど恐がらない。前に直ぐ樣斬つて捨てたのも、後さうは行かず、太平の御代で亂暴が仕難い。町人百姓で金の出來たのがあり、武士で借用をするのが珍しくなく、藩主で財政困難の爲めに借用するのもある。領土は藩主の勝手になると云ふわけにゆかず、御用人が頭を下げて借用書を書く。酒田で、「本間樣には及びもつかぬがせめてなりたや殿樣に」と言ふは、一地方に限つた事でも、廣く世間に知れ渡つたのは、町人百姓で殿樣以上になり得ると認められたのを示す。何藩にも町人百姓で有祿者より金があると見られるのがある。强ひて罪に落し、全財産を沒收する事もあるが、太平なだけ騷ぎになり、度々する事ができず、面倒が興つては幕府で譴責し、或ひは改易を命じたりする。其の幕府が財政困難で商人に依賴し、何としても制し難くなつた。それでも長い習慣で町人百姓は武士に頭が上らぬとなつて居つたが、幾代も武士が祿を相續し、高祿な者は飾り物となつて、無知無識、多少の能力あるは概ね小祿の徒で百石以下足輕と言ふ所である。次男三男で居候が浪人になり、何がな面白い事もがなと、徘徊するのがある。米國から軍艦が來たり、從來の鎖國政策を一變せねばならぬとなつて、高祿の徒は例外の外爲すべき途を知らず、小祿の徒又は浪人連の言ふ事を聞かねばならぬ。小祿の徒が朝廷を奉じ幕府を仆し、新政府を建て、誓詔に廣く會議を起し萬機公論に決すべしとあるに至つたのは、前の有産階級が力を失ひ、無産階級が力を得、少くとも、力を得べき途を拓いたのである。一應貧乏士族が勢力を得た事になる。

德川氏の初めに無産階級と看られた町人百姓も、次第に財産を增し、武士と匹敵し、往々之を凌駕するに堪へても、武士に頭が上らぬとし、武士より無産階級同樣に待遇せられるを甘ん

にした。藩政上に甚の權勢を持つても、貧乏士族の前には[illegible]はならず、心からして藩祿に平身低頭した。貧乏士族が新政府で勢力を得た時、大名始め高祿の徒を處分するに至であつて、町人百姓が將來何の位置を占むるかを考へず、考へても四民平等で大丈夫とした。高祿の徒に對して自ら無產階級に屬し、祿の無い者に同情を拂つた所がある。明治維新は高祿に對し小祿又は無祿が新たに力を得た者と言へる。副島蒼海が語つた事がある、明治四五年まで廟堂に居る者は金を持たうと考へなかつたが、外國人と交際し、金も無くてならぬと言ひ、俄かに金儲けに取懸るやうになつたと。貧乏士族が勢を得た時、町人百姓に同情し、四民平等を唱へたが、町人百姓より資本家なる者が出で、權力の代りに金力を振ふに至るべきを察せず、之れを察した時は、有產階級と無產階級との對立を當然とし、又は餘儀ないとする時であつた。前に多數の貧乏武士が少數の高祿武士に對し、後に多數の無產階級が少數の有產階級に對する次第となり、形が變つて勢が變らぬ。高祿武士は小祿武士の上に立つても、其の上に立つて居るので勢力を張り、單獨に何の力が無い。資本家は勞働者の上に立ち、勢力を振ふけれども、勞働者を離れて何の力あるか。前に資本家對勞働者といふ關係が認められず、それほどまでに商工業が發達せず、後に商工業が發達し[illegible]らず、[illegible]を振ふは高祿武士が勢力を振つたに依て同つて、[illegible]が力を揮すべきである。

何故に早く職工と農夫とが力を伸さず、穢多非人が凡ゆる侮蔑を被るまゝにしたか。社會の組織の然らしむる所であつても、自身の位置を意識すべき教養を缺いたのに基く所が多い。前には町人百姓が武士と同樣の教育を受ける必要なく、之れを受けるを以て分限を越たるとし、眼に一丁字無いと云ふのが普通であつた。穢多非人等は普通に言葉を交はす事が出來なかつた。貧乏武士が政府の要地に立ち、何心なく四民平等を強調し、義務教育を强制したのが、廣く民衆の自覺を促すに與つた。初めに何の影響あるか分らず、文明國の眞似する位であつたのに、年數を經るに從ひ、種々の方面に影響し、二大戰役に町人百姓が武士と同樣の働きしたと同時に、各自何の地位に立ちつゝあるかを意識始じめ穢多と呼ばれた者が大いに怒り、十六代將軍たるべき者に迫り、謝罪を勸告するに及んだ。考へて見れば尤もである。何の罪ないのに極度まで侮蔑された。侮蔑されて自覺しなかつたが、自覺したのは知識を增したのに由る。知識は力といふ語が疑はれつゝ、時として實證する。

民は由らしむべく知らしむべからずとは、由らしむるを得、知らしむるを得ずとの意であつても、一般に由らしめよ、知らしむる勿れと解釋し來つたのも偶然でない事を知る。知識を得たが爲めに種々の問題を惹き起し、尚ほいよいよ惹き起さうとする。現状で安んずる者は無産階級の知識を増すを望まないが、其の望まないほど、知識を増すの影響が著るしい。知識を増しては、各自の位置を意識し、善いにつけ悪いにつけ、力を伸ばさう。全く學校の教育を受けなくても、見たり聞いたりするだけで、徳川時代の町人百姓より知識を得る所がある。電車とかラヂオとか、徳川時代に夢見るだにしなかつた。それでも浪花節で謡ふ如く、いろいろ壓迫に抵抗した。雲助がお侍と爭つたりした。適當の教養を受けたならば、妄りに喧嘩せぬ代り、道理と信ずる所に勇進するやうにならう。

普選實施後、新に九百萬人が選擧權を得、その教養次第で政治に善い影響をも及ぼし、悪い影響をも及ぼす。政府でも考へる所あるが、施設の宜しきを得るか何うか。政府では成るべく階級闘爭に興味を覺えないやうにするを欲しよう。角を矯めて牛を殺すやうになつては、意外の動搖の起らぬとせぬ。帝大出身者で勞働者と共にするのが既に數十名に上る。勸めても出來ぬ話であり、餘計な事など言ふべきでない。最高教育を受けた者が一層多く飛び込んだならば、政府で考へるよりも適當な施設に着手するに至らう。二階より目藥といふ調子では效能がない。御用向きの學校は益が無く、當人自らの天分を開發するを主眼にせねばならぬ。今の所、政府で心配しつつ、何の方法を以てすべきかに惑つて居る。犬養氏が普選實施について青年を指導しようと稱する。氏が若かつたならば何程かの希望を囑すべきも、今は覺束ない。官私立大學若しくは其の他から身を挺して勞働者の群に投じ、其の教養に盡力する者が出よう。紳士としての勞働者、勞働者としての紳士が、多くなつて時代は、小祿無祿の武士が高祿武士に代つたのに次ぎ、歴史上の顯著なる時代とする。比較的の事ながら、少しでも其の方へ向へば好い。算盤を手にしながら、外國の紳士と自由に談話するのが出來れば、床しく思ふべきでないか。

無産階級教化問題の根柢

本間久雄

「民衆藝術は、民衆によつて、民衆のために造られ、それを造つたものにも、それを求めるものにも、共に幸福を與へる藝術でなければならぬ。」

これは、私の常に欽崇して措かない近英の偉大なる思想家ウイリアム・モリスの言葉であるが、無産階級の教化問題を考へる場合にも、私は、その根柢を、このモリスの言葉に置きたい。

無産階級の教化は、無産階級のために、無産階級自身によつて考案され、實施されたものでなければならない。この「ために」と「よつて」が重大事である。同じく「ために」でも、有産階級が無産階級のために考察し出した教化案では何の意味をもなさない。それは丁度富める資本家が貧しい勞働者のために、恩惠的に計畫した慈善事業と同じやうなものである。有産階級のさういふ教化案を、甘んじて受ける無産階級者はそれによつて、自分自身を辱かしめる以外、何物をも得ないこと、丁度、富者の慈善事業を喜んで受けることによつて、自分を乞食にしてゐる貧者のやうなものである。

無産階級の教化といふことをいふ以上、一切の力點を、私がモリスの言葉の意味に置かうとするのはこのためである。

○

無産階級は擡頭した。しかし彼等が階級的團體として教養を積むとか、個人として教化を享樂するといふやうなことには、まだ〳〵である。尤も、だからこそ教化問題も起るのではあるが。

現在のところでは、何と云つても有産階級的教化が瀰漫してゐる。早い話が、國民教育といふ一般教育について觀察して見ても、そこにはたゞ有産階級的教化があるばかりである。試みに小學兒童の教科書を繙いて見るがよい。そこには一汁一菜の勸儉主義を實行して賢君の名を馳せた大名があつた。教科書の編者は、この大名の勸儉主義を讃美して、大名でさへかやうに儉約をするのに、況して大名でない普通人は、一層儉約をしな

ければたらないと附け加へた。これはほんの一例である。が、以て萬事を推すことが出來るであらう。大名でさへ儉約をすると云つて賞めるのは、大名が贅澤をするのは當然だと云ふのと同じことでもあり、大名と民衆とで、夫々倫理上の標準を異にしたことにもなる。而も今日の兒童は、有産無産の區別を問はず、一様に、かういふ不合理な二重標準——有産階級に篤く、無産階級に薄い二重標準の下に教育されつゝある。

單に學校教育ばかりではない。芝居にゆけば、そこで見せられるものは、有産階級の淫蕩やら有産階級の愛欲の世界やらが大部分を占めてゐる。活動寫眞にゆけば、無産者が一躍して巨萬の富を得て有産階級になるといふ投機心鼓吹の冒險映畫を見せられる。修養談を讀めば、これも有産的成功談であり、小説を讀めば、今のブルジョアジーを多分に裏づけた生活俗惡の氣分である。何處を向いても無産階級に力と勇氣とを賦すことによつて、彼等の生活意志を向上させるものはない。そしてかういふ現狀が無産階級の教化に取つて幸しないものであることは改めて云ふまでもない

○

教化の要具にはさま〴〵ある。學校教育は云ふまでもなく演劇も文學も、活動寫眞も皆夫々の役目を演ずる。しかし、これらは上にも述べた通り或ひは有産階級の或ひは資本家階級のために役立つてゐるのみで無産階級には、寧ろ弊害をこそ與へれ、何等役に立つてはゐない。だから、心ある思想家や、社會改造家たちは、これに反抗した新しく無産階級教化運動を最近代において、ぞく〳〵おこしたのも所以あることである。ロマン、ロオランの例の『民衆劇場』の運動なども無論その一つである。その中で、ロマン、ロオランは民衆劇場の精神を次のやうに説いてゐる。

「民衆劇場は、現代の頽廢しつゝある社會を防ぐ一個の武器でなければならぬ。否、歩をすゝめて云へば、來るべき時代の叫び聲でなければならぬ。新しい時代は新しい藝術を要求する。たゞ〳〵時代と共にそれ自らを新しくするやうな藝術のみが、民衆に取つて價値ある藝術である。過去における傑作のあるもの、普遍的な人間的興味を持つてゐる過去の傑作のあるものかさうでなければ、吾々の複雜な、混亂したこの時代の解釋者たる作物のみが、民衆劇場で上演さるべき藝術でなければならぬ。要するに民衆的戲曲は、民衆の心に更新的な力を與へるものでなければならぬ。否、一歩をすゝめて云へば、人々は更により高き目的を狙つてゐるやうな偉大なる精神の溌剌たる不可抗的なさま〴〵の例證や、かゞやかしい獻身的精神や不屈不撓

の意志の力たることを担任する階段を有たなければならない。

ロマン・ロオランは、更につゞけていふ「藝術をして、一切の専制、一切の卑俗、一切の悪意を憎悪する一念を民衆に喚起せしめよ。そしてこれと同時に、各個人をして、更によりよき理解に於て融和せしめ、各個人お互をして、更により深厚な同胞感を抱かしめるものたらしめよ」と。

無産階級教化の要具としては、實にかういふ藝術が必要である。それの劇であると詩歌小説であるとを問はず、少くもそれはロマン・ロオランの如上の藝術的要求から生れたものでなければならない。

私はこのことを特に今日の活動寫眞に要求したい。活動寫眞は、その性質上、演劇よりは、一層影響あるところが深く且つ廣いから、その經營者もその監督者も、この點に留意して貰ひたい。徒らに血なまぐさい殘忍なシーンや、徒らに上流階級中流階級の悪徳と亂倫の赤裸々なすがたを見せるやうなものは、民衆教化の立場から、却つて有害であることを自覺して貰ひたい。尤もそのためには、その經營者もその監督者も、彼等自身が民衆の一人であるといふ自覺の下にあるのでなければならないことは云ふまでもない。

無産階級の教化といふことゝ關聯して、往々にしてこゝろみられるのは、藝術文化に對する破壊運動の傾向である。藝術文化は、いふまでもなく過去の階級制度の生んだ文化である。そこには、批難に値するものゝ多々あることはいふまでもない。しかし、坊主を憎むの餘り袈裟までを憎むやうな態度で過去の文化のすべてを破壊し去らうとするのは明かに誤りである。このことは、例へば、往々行はれる過去の建造物の破壊といふことなどにも當てはまる。

かりに徳川政府の採つた政策は、無産階級の勃興に取つて非常に有害であつたと假定する。(事實それは非常に有害であつた。新しい民衆的精神から云へば、徳川三百年は、民衆抑壓の罪悪史である。)しかし徳川期文化の結晶としては、吾々は、自ら誇るに足る多くの工藝美術品や多くの建造物を持つてゐる。いかに徳川の階級政策を憎んでもこれら文化の結晶品は憎むべきではない。それらは、どういふ目的で造られたとしても、そこにはその時代の民衆の貴い努力が裏づけられてゐるからである。

否、それどころか、一般的に云つて、吾らは過去の文化を、ある意味で尊敬しなければならない。將來文化の建設に資するものには、出來るだけ多くのものを、吾々は過去の文化の中から

探り出さなければならないからである。一歩を讓つては、それほどの意味でなくともよい。少くも現在を知るためには、吾々はまづ、一度、冷靜に過去の文化を顧ることが必要である。といふのは、敢て、ル・ボン博士の口吻を眞似るまでもなく、現在は過去の集積であり、從つて過去を知らずして現在を知ることが出來ないからである。この點で、私は、ルナチャルスキーが、無産階級の文化も、過去の文化の上に築かなければならないこと、完全に新しいものの築かれるためには古い殿堂の破壊さるべからざることを論じて、無産階級運動が、やゝもすると陷る「すべてのブルジョア文化を滅亡せよ」といふ輕擧暴動を戒めたのに、贊成する。

新文化酵母の無産階級

小川未明

生物學の研究によつて、人類社會とそれを比較し多くの疑問を感じた。私達は、さらにその時代、時代の國家制度を研究し、また、いかにして、支配階級と被支配階級が生じたかといふ、即ち政治組織を唯物史觀的に研究することによつて、大體今日までの社會發達の跡を知り、そして、合理的の社會が、未來に於て建設されなければならぬといふことを知つたのであります。

學問の發達は、未開狀態より、文明へと進歩を促がしたけれど、人類は、それがために、必ずしも幸福をもたらされたのでない。なぜなら眞理は、常に、公平で、且つ平等であるけれど、その智識をすら、特權階級が私有せんとすることによつて、そして、自分達だけの幸福と利益のために專らにしようとすることによつて、却つて、人類に不平等を來たした反對の結果を生ずるに至つたのであります。そればかりでなく、支配階級に、專屬するやうな、智識階級といふものを生じ、彼等は學問を研究して、これによつて、この時代の制度をますます堅

目とし、これを誇り、一層、その發達に努めつゝあつたといつているのであります。

原始時代の生活にはなほ羨むべきものがあつたけれど、私有財産制度が發達して、階級別を生ずるに至つてからは、常に、少數の有力階級のために、多數の民衆は、使役されて來たのであります。そして、民衆は、無智なるがために、無力なるがために、長い間、自覺することから防げられて、彼等は、自分等の生活の状態を宿命と思ひ、苦痛に堪えざる時には、或は天を怨み、或はあきらめ、或は絶望のあまり自からを亡して、墓に行つたのでした。斯の如く、民衆が、長い間、自分達を支配した政治の組織について、また國家の制度について、また自身の生活についてすら、反省がなく、無智であつたことは、支配階級にとつては、都合のいゝ好ましいことであつたにちがひありません。

しかし、知識階級に屬する者が、みんな良心を有せずして、支配階級からの保護を受けつゝあるがために、いつまでも眞理を枉りて、人類社會の不正と不平等とを默視してゐるものばかりではなかつたのです。

彼等の中の賢明にして、正直であり、また誠實であつて、正義に眼醒めつゝあつたものは、迫害を恐れずに、民衆の中へと、行きました。そして、無智なるがために、[illegible]す、苦しみつゝあつた彼等に、彼等の知らなかつた、[illegible]、政治に關する智識等を與へ、眠れる眼を開き、そして、自覺を促したのでありました。

既成宗教や、道徳は、この間にも、忍從とあきらめと自足を強いてはゐたけれど、新しい道徳は、生存の權利を主張し、そして、その權利の平等と、正しいことのために戰はなくてはならぬことを、力強く彼等に教へたのでした。

けれど、またある間は、資本主義によつて、却つて、文明が促進され、資源が開發され、そして、みんなが利益を得られたのであつて、たとへそこに搾取と被搾取とが行はれてゐたにせよ、無産階級の自覺は、はかぐしからぬものがあつたのであつたが、資本主義がいよく爛熟して來ると、矛盾が次第に多くなり、著るしくなつて行つた。そして、無産階級が、やうやく特權階級に對して明かに、その立場の全然異なることを自覺して、反抗の態度を示すに至つたのでした。

『無産者よ團結せよ』といふことは、實に生活意識と戰術を一つにする者が、彼等の搾取者に對する唯一の戰術であることとも、また、組合が、それがために必要であることも、彼等は學び、且つ悟つた譯でありました。

こゝにも、眞理を愛し、率先して、民衆のために盡した智識階級のあつたことを記憶しなければならない。

ブルジョアは、斯の如き思想家等を、たゞいたずらに煽動をして愚民を迷はしむるもの〻如く言つてゐる。これは、大なる誤りからであるか、もしくは、故意に貶せんとするがために放たれたる言葉です。

なぜなら、いつまでも民衆を愚にして置くことは、彼等のためには都合がよからうが、畢竟不可能であるばかりでなく、眞理の前に倘虚僞たれといふことを智識階級に向つて強いると等しいからでした。

また、極めて最近に至つては、不景氣の原因をすら、責を勞働運動に嫁し、勞働者が氣強くなつて、賃金値上をしたからだと揚言する程、反動的にもなつてゐる。或は、そのことも一つの原因たり得るかも知れないが、ブルジョアが幸福であるために、勞働階級が正當を主張せずに、忍從しなければならぬといふ理はない筈であります。

しかるに、いまや、無産階級は、あまり遠からざる將來に於て、支配者に換いんとする形勢にまで立ち至つた。このことは、いま〻でも、資本主義發達の最後に於て、豫期されざる現象ではなかつたが、歐洲戰爭は、その期間を著るしく早からしめたことに原因してゐます。そして、資本主義そのものが、却つて犧牲を多からしむるがために、人類の幸福をより以上にもたらすよりは、却つて犧牲を多からしむるがために、また、資源を見出す能はざるがために、轉換期に際會しつ〻あることは世界の經濟學者等によりて說かれてゐる。そして、日本の如きも、また、資本主義が行詰つてゐるがために、今日の不況時代を來たしてゐるのであつて、この不景氣は、新經濟政策の出現されざるかぎりは、根本的には、救はるべき性質のものでないことも、日本の眞摯なる經濟學者によつて、言はれてゐます。

もしこのことにして、確實なる曉は、獨り無產階級の力によつてゞなければ、この行き詰りを打開して、二たび產業の發達をはかり、民衆の生活を保證することはできないでありませう。故に、いまは、いたづらに、口に階級鬪爭を叫び、感傷的ではかりゐられる時代ではないやうな氣がされる。

資本家等は、たとへ今日の資本主義の命脈を知るとしても、彼等は、社會の利福や、民衆の幸福を思ふよりは、最後の刹那までも自身の利益のために心がけ努力するであらうから、彼等に、眞の民衆のための政治も、對策も、これを望むことはできません。必然的に、民衆それ自からの力に待つより仕方がない。

おう考へる時は、無産階級に、政府、官吏、工業、そして、一こつきゝつこに、共産も、また[illegible]一つにはならない。すべても具合
特種的なる技術者について、修得せしめなければならぬ。今日、おきまつて、[illegible]に、今日、特に
のやうな有様では、一知半解の徒多く、また、技術者は、[illegible]教の教化について、最も重要に、考へないものにはならぬと思
練者多く、政治にも、工業にも、經濟にも、知識が缺けてゐる。
はれます。——九月十九日——

無産階級の知識的向上

高島米峰

有産階級にも、有識なものと無識なものとがあるやうに、無産階級にも、亦、有識なものと無識なものとがある。共産思想は別とし、現在の社會組織を肯定して、これを考へる時、有産有識を理想とすべきこと、もとより言ふまでもないが、有産にして無識なると、無産にして有識なると、その孰れを取るべきかと言へば、現代人は有識にして無産たらむよりは、無識にてもあれ、有産たらむと念願するもの、或は多きに居るのではあるまいか。從つて、夫の無識にして無産なるものゝ如きは、氣の毒ながら、到底、劣敗者として、落伍するより外に、仕方のないものと、見なければなるまい。果して然るか。

無産なるが故に、教育を受くること能はずといふも、事實であるし、又、無産なるが故に、せめて、知識にだけでも、富まざるべからずとして、勤勉力行するものゝあるのも、亦、事實である。恰も、有産者が、有産なるがために、教育を受くるの利便多きに任せ、いよいよますます、心的向上を期するものあるに反し、有産なるがために、物欲の飽滿をこれ事として、[illegible]も、精神生活の尊貴なる所以を顧みず、淫蕩腐敗、あたら一生を、醉生夢死するものが、少くないのと同じ歸結である。

かう考へて來ると、有産無産の別は、或は、經濟組織の、根本的改革を試みるにあらずんば、到底、如何ともすることが出來[illegible]

出來ないかも知れないが、有識無識の限界は、個人々々の向上心に依つて、これを撤することが、出來ない筈はないといふことになる。夫の、砂に字を書いたり、螢を集めて本を讀んだりしたといふ昔語りは、今から考へると、誠に、馬鹿々々しい程の迂遠さではあるが、その向上心の強烈なのには、たゞ〳〵驚歎の外はない。現代人に、若し、これ程の熾盛なる向上心があつたら、字を習ふ紙や筆に、事缺くことはあるまい、本を讀む燈火に、不自由するやうなこともあるまい。月並な言ひ分だが、叩けよ、然らば開かれむ、求めよ、然らば與へられむ。知識的方面の欲求は、比較的容易に充たされやう。

輓近自我の自覺に伴ふ自由平等の要求は、大に、無産階級の立場を、力强いものに導いて現れた。殊に、有識無産階級に屬する人々の威力は、確に、無識有産階級の如きは、もとより言ふまでもなく、有識有産階級の人々をも、壓倒し去らむとする氣勢を示して居る。たゞ、是等有識無産階級の人々は、これまで、その無産なるがための故に、直接に、國家の政治に參與することが、許されなかつたので、幾多の不便と不滿とを、如何ともすること能はず、遂に、或は、無政府主義の主張となり、直接行動の實現となるといふやうに、無産階級の客氣は、次第に、險惡となつて來た。

然るに、こゝに、不完全ながらも、普通選擧といふ名稱の下に、やゝ擴張せられた改正選擧法の、發布を見ることゝなつたために、無産階級の人々も、その有識なると無識なるとを問はず、兎も角も、國政に參與し得ることゝなつたのである。この政治上の一轉機は、從來の如く、有産と無産とに依つて、國民を、差別的に取扱ふといふやうなことが、無くなつたのであつて、苟も、議會政治を非認するものでない限り、無産者の政治的領域は、非常に、擴大せられたものと見なければならない。たゞ、有産者と對抗して、いよ〳〵、ます〳〵、無産者の實力を發揮しやうといふには、無識無産者から、有識無産者にまで、進展するものゝ多からむことを、先決の問題とする。

政治は力なりといふ。その謂はゆる力を以て、金力なりと解するにも、勿論、十分の理由はある。苦節三十年の犬養木堂氏が、その輝かしい歴史を、投げ棄てて仕舞つたのも、畢竟、金の蔓が切れたからだといふに歸着する。今、憲政會が、天下を取つて居るのは、加藤高明氏に、有力な財閥の後援があるからで、政友本黨の床次竹次郎氏が、天下を取り損つたのは、主義や主張が如何はしいなどゝいふのではなくて、全く、軍資金が不足であつたからである。そう考へて來ると、謂はゆる無産者階級が、假令、知識的に向上したとしても、金力缺乏のために、

こういふことを述べることを不問にしない、といふことに依つてでなければならない。

政治は力なりといふ。その謂はゆる力を以て、暴力なりと解して居るもの〻あるのも、亦事實である。言論を以て可否を決すべき最高の立法府たる、帝國議會でさへ、動もすると、言論ヌキの暴行で、事を處理して仕舞はうとすることがあるし、又、暴力團と稱するものが、跋扈跳梁して、屢々、政治を危地に導かうとすることもある。此くの如きは、或は、無産階級の人々の、共鳴を買ふことが出來るかも知れないが、暴力これ正義なりといふ結論の、甚だしき謬妄であることは、今更辯ずるまでもあるまい。

政治は力なりといふ。その謂はゆる力を以て、知力なりと解するもの、亦、甚だ多いやうである。政治が、全く、因習や情實から解脱して、純理一點張りで運用せられるならば、政黨の汚濁に涜されず、黨人の毒牙に傷つけられず、如何にも、清淨無垢にして、且つ、如何にも、強健無病なものとして、萬人に信頼せられるであらう。もとより、人間の叡智と雖も、屢々誘惑の妖雲に蔽はれて、本然の光輝を放つことが出來なくなることもあるから、それさへ頼みにならぬといふのでは、一體、吾々は、何を張り合ひに、生きて居るのかと言ひたくなる。

政治は力なりといふ[illegible]と稱する[illegible]られたのに、由[illegible]し、[illegible]政治は、多數政治であり、民衆政治であつて、多數の力に依つて、初めて、その効果を收むべきもの、然るに、現在の議會が、果して眞に、國民多數の意志を、代表して居るかどうかといへば、それは、全く以て、問題にならない。過去は言ふまでもなく、將來と雖も、帝國議會が、國民多數の意志を、代表し得るものだと信ずることは、頗る危險である。それでも、僕の常に唱道して居る徹底普選論、……男女共に、丁年に達したものは、選擧權も被選擧權も、共にこれを有するといふ時代にでもなつたら、その時こそ、帝國議會も、國民多數の意志を代表するものだと、言へるやうになるかも知れないし、かくてこそ、始めて、政治は多數の力なりといふことが、實現するのである。

その時の『多數』は、即ち無産者に依つて築き上げられた多數であつて、かうなつて、始めて、無産者が、その實力を示すことが出來るのである。たゞ、そうなつても、無産者が、依然として、今日の如く、無識狀態を持續して居るのでは、心細いこと夥しい。衆寡敵せずといふこともあるが、又、萬卒は得易し、一將は得難しといふこともある。質か量かを言へば、暴力

を揮ふこと以外、大抵の場合、實に勝目の多いことは、言ふまでもない。そこで問題は、無産者の教養といふところに、到達しなければならない。然らば、如何にして、一般無産者の質を、向上せしめることが出來るか。勞働者の如きは、勞働時間を短縮して、その上に、賃金を増加したならばと、一應は考へられないでもないのであるが、これで果して、彼等の質が向上するか否やは、歐洲大戰中の、變態景氣の時代を、回顧して見ればすぐわかる。當時、彼等の賃金は、法外に高く、彼等の勞働時間は、極度に短かゝつたけれど、たゞ徒に、酒氣に荒んだといふ以外、何等見るべきものを示さなかつたではないか。

無産者は、悉く、無識者だといふのでないことも勿論であるし、又、無産者は、悉く、勞働者でないといふことも、亦、言ふまでもない。若し、有識無産者が、先頭に立つて、無識無産者を指導し、これを、知識的にも政治的にも、一人歩きの出來るやうにまで、訓練してゆくことが出來るならば、これももとより一法である。しかし、根本要義は、無識無産階級の、知識的自覺、若くは、政治的自覺に伴ふ、向上の欲求である。この欲求が無ければ、如何に、外部から刺戟を與へても、何等の反應も起るまい。さうして、無識無産階級は、永久に、社會の下積みとなつて、日の目も拜めないやうな生活を、續けるより外、仕方があるまい。

さういふことは、見て居るさへ、堪へ難い苦痛である。冀くば、少くとも、與へられたる權利を、有意義に運用し得る程度にまで、向上して欲い。（大正十四、五、十三）

無産階級の擡頭とその教養

澤田謙

一

『無産階級の擡頭』といふことは、一面實相的であつて他面想定的である。

無產階級が擡頭したといふのは、無產階級が社會的勢力を得たといふ意味であるが、この社會的勢力が、どの程度まで進んでゐるかは、問題である。階級の勢力は、もとより、階級を構成する人員の數ではない。數においては、むろん無產階級は絕對多數だ。しかしその勢力は、決して絕對的ではないばかりでなく、相對的にも、さう大したものではない。

露國は無產階級獨裁の國であると稱するが、その勢力の中心は、六十萬の共產主義者の手にある。この少數の自覺せる無產者が、全部の無產階級を代表して（或は代表したりと稱して）社會的勢力を占めてゐるのだ。日本の自覺無產者といへば、まづ二十萬の勞働組合員であらう。これは全產業勞働者に對して、百分の五にも足らぬ少數である。しかし、無產階級の社會的勢力といへば、この少數の勞働組合員を恃むよりほかない。

たとへ少數でも、勞働組合が組織され、團體的な運動を起すことになると、それは一つの社會的勢力になる。その背後には、新時代の社會思想がある。無產階級を『理解』し、また『同情』すると稱する智識階級の一部が、直接間接に援助を與へる。この智識階級の援助が いはゆる『輿論』の一部を形成するのだ。今日の社會において『輿論』とは、人民全體の聲ではない。それは、正體のない無形の聲だ。大部分は、いはゆる『智識階級』がこれをつくる。そこで、智識階級の一部が、無產階級運動に味方するといふことは、無產階級の社會的勢力の上において、侮るべからざる要素である。一時、日本の勞働運動が、サンディカリストに占領されてゐたころ、『智識階級の指導者を排斥すべし』といふやうな聲が高かつたが、この援助と同情なくしては、無產階級は社會的勢力となることができない。『擡頭』することはできない。

そこで、現時日本の無產階級の社會的勢力は、勞働組合の運動を中心として、これを繞る進步的智識階級の輿論的援助が、これをつくつてゐると言つてよい。それが無產階級擡頭の實相である。

二

普通選擧法がいよ〳〵公布された。無產階級に選擧權が與へられた。そこで、直ちに、無產階級が政治的に擡頭すると、想像するものがある。直接國稅三圓納稅資格の制限が徹廢された。三百三十萬の有權者が、一躍に一千三百萬、約四倍になつた。この激增した一千萬の有權者は、殆んど全部無產階級である。だから無產政黨が出來て、無產階級がその代表者を議會に送るやうになれば、無產政黨は議會に約四百五十名の代議士を擁し、

四分の三の勢力を得ることが出來る。少くとも、絶對多數の政治的勢力となり得る。――とまづこのやうに説くものがある。

これは無産階級の社會的勢力をば、數的勢力と誤解した樂觀論である。もしさうした數學的公式が可能ならば、無産階級は現在まで、かうした社會的劣勢に沈淪してはゐなかつた筈である。普通選擧が實施されたからといつて、すぐに無産階級が政治的に解放されるわけのものではない。これは外國の例を見ても明らかだ。すでに五十年も六十年も前から、普通選擧の布かれてゐる歐米諸國の無産階級がいまだに資本主義的勢力の下に、悶々としてゐるのが何よりの證據である。最も無産階級の自覺が普及し、したがつて最も無産階級の勢力ある英國ですら、一昨年漸く第二黨となり、昨年はじめて試驗的な勞働内閣をつくつたくらゐだ。日本の無産階級が、政治的勢力となる――政治的に『擡頭』する――までには、相當の永い持續的努力が必要である。

無産階級の政治的勢力は、その自覺分子の團結的活動に基礎をおく。すなはち、『無産政黨』がつくられねばならぬ。無産政黨が、無産階級のために、政治的活動をなして はじめて無産階級は政治的に擡頭するのだ。もとより、無産政黨の構成員は必らずしも無産階級全部であるとはいはぬ。また必らずしも數的に大なるを望まぬ。たゞ團結力と活動力が大でさへあれば、そしていはゆる『輿論』の支持さへ得れば、その政治的勢力は、相當に發揮することができる。

普通選擧法の實施は、たゞちに無産階級の政治的擡頭を物語るものではない。それはたゞ、努力によつてのみ贏ひうる希望である。

三

無産階級が、社會的勢力をうることは、社會公正の原則の上で、希望すべきことである。しかし、教養のない無産者たちが擡頭して、社會的勢力をもつにいたるといふことは、たまらないことだといふ説がある。これは一應尤もな考へ方である。しかし、そういふ事態はありえない。なぜなら、無産者が無教養であるといふことと、無産者が社會的勢力をもつといふことは兩立しえない命題であるからである。であるから、無教養な無産階級が擡頭するといふことは、一つの杞憂にすぎない。

まへにも述べたごとく、無産階級の社會的勢力は、自覺無産者の團結的活動に基礎をおくものである。しかるに、『自覺』とか『團結』とかは、一定の教養がなくては、ありえないことである。すくなくとも、社會現象や社會科學について、相當の理

[illegible]ふたくては、無産者は、その[illegible]「團結」することはできない。また、「團結」といふことは、一つの思想（政治的でも精神的でも）によつて結合されることで、それは教養あるものにおいて、はじめて可能なのである。況んやその「團結」が、團體的活動に轉ずる場合には、團結の下にある成員の間に、一定の節度と理解と訓練とがなくては、その「活動」は効果を擧げることはできない。これは古今東西の勞働運動史が、いづれも瞭らかにしてゐる事實である。

かくのごとく、無産階級擡頭の基礎は、無産階級の教養にある。無産階級の間に教養が普及すれば、それだけ無産階級活動の範圍は擴がる。無産階級の教養の度が深くなれば、それだけ無産階級の社會的活動は、効果をあげることになる。いづれにしても、無産階級の△頭とその教養とは、きつてもきれぬ緊密な結合をなしてゐるのである。だから、無教養な無産階級に社會的勢力を占めらるるといふ心配は、どうしても一つの杞憂にすぎぬと言はねばならぬ。

その「心配」はない。たゞ一つの心配は、無産階級が△頭しないといふことである。なぜなら、それは直ちに、無産階級の間に教養が普及してゐないといふことを、意味するからだ。そしてそれはまた直ちに、社會の大部分に、教養が普及してゐないといふことで、[illegible]することになるのだ。[illegible]になればすでに、[illegible]わけである。

四

社會ははたして、無産階級に教養を普及するの責任を果したか？普通教育といふのがある。これは初等教育を普及せんとするもので、國によつて差等はあるが、現在の文明國にして、この制度を採用せざるものはない。「普通教育」は同時に「強制教育」だ。かくして無産階級もまた、「教育」の普及をえた。

しかしながら、「教育」はたゞちに「教養」ではない。いや、元來「教育」の目的は「教養」にあるのであるが、「學校教育」即ち「教養」ではないのだ。十八世紀から十九世紀へかけてこの學校制度の發達は、「教育」と「學校」とを同義語にしてしまつた。教育といへば、すぐに學校を聯想するやうになり、そのために、教育と教養とは、しだいに懸隔するやうになつた。だから、無産階級に普通教育が普及しても、無産階級に教養が普及したことにはならぬ。

そのほかに、中等教育、高等教育、最高教育と、三段の學校制度がある。これは初等教育と併合して、一つの國家組織の要

四分の三の勢力を得ることが出來る。少くとも、絶對多數の政治的勢力となり得る。——とまづこのやうに說くものがある。

これは無產階級の社會的勢力をば、數的勢力と誤解した樂觀論である。もしさうした數學的公式が可能ならば、無產階級は現在まで、かうした社會的劣勢に沈淪してはゐなかつた筈である。普通選擧が實施されたからといつて、すぐに無產階級が政治的に解放されるわけのものではない。これは外國の例を見ても明らかだ。すでに五十年も六十年も前から、普通選擧の布かれてゐる歐米諸國の無產階級がいまだに資本主義的勢力の下に、悶々としてゐるのが何よりの證據である。最も無產階級の自覺が普及し、したがつて最も無產階級の勢力ある英國ですら、一昨年漸く第二黨となり、昨年はじめて試驗的な勞働內閣をつくつたくらゐだ。日本の無產階級が、政治的勢力となる——政治的に『擡頭』する——までには、相當の永い持續的努力が必要である。

無產階級の政治的勢力は、その自覺分子の團結的活動に基礎をおく。すなはち、『無產政黨』がつくられねばならぬ。無產政黨が、無產階級のために、政治的活動をなして　はじめて無產階級は政治的に擡頭するのだ。もとより、無產政黨の構成員は必らずしも無產階級全部であるとはいはぬ。また必らずしも數的に大なるを望まぬ。たゞ團結力と活動力が大でさへあれば、そしていはゆる『輿論』の支持さへ得れば、その政治的勢力は、相當に發揮することができる。

普通選擧法の實施は、たゞちに無產階級の政治的擡頭を物語るものではない。それはたゞ、努力によつてのみ購ひうる希望である。

三

無產階級が、社會的勢力をうることは、社會公正の原則の上で、希望すべきことである。しかし、教養のない無產者たちが擡頭して、社會的勢力をもつにいたるといふことは、たまらないことだといふ說がある。これは一應尤もな考へ方である。しかし、そういふ事態はありえない。なぜなら、無產者が無教養であるといふことと、無產者が社會的勢力をもつといふことは兩立しえない命題であるからである。であるから、無教養な無產階級が擡頭するといふことは、一つの杞憂にすぎない。

まへにも述べたごとく、無產階級の社會的勢力は、自覺無產者の團結的活動に基礎をおくものである。しかるに、『自覺』とか『團結』とかは、一定の教養がなくては、ありえないことである。すくなくとも、社會現象や社會科學について、相當の理

［illegible］たくては、經營者は、その「事業上の事件を一目瞭然」することはできない。また、「團結」といふことは、一つの理想（物質的でも精神的でも）によつて結合されることで、それは教養あるものにおいて、はじめて可能なのである。況んやその「團結」が、團體的活動に轉ずる場合には、團結の下にある成員の間に、一定の節度と理解と訓練とがなくては、その『活動』は効果を擧げることはできない。これは古今東西の勞働運動史が、いづれも瞭らかにしてゐる事實である。

かくのごとく、無産階級擡頭の基礎は、無産階級の教養にある。無産階級の間に教養が普及すれば、それだけ無産階級活動の範圍は擴がる。無産階級の教養の度が深くなれば、それだけ無産階級の社會的活動は、効果をあげることになる。いづれにしても、無産階級の△頭とその教養とは、きつてもきれぬ緊密な結合をなしてゐるのである。だから、無教養な無産階級に社會的勢力を占めらるるといふ心配は、どうしても一つの杞憂にすぎぬと言はねばならぬ。

その「心配」はない。たゞ一つの心配は、無産階級が△頭しないといふことである。なぜなら、それは直ちに、無産階級の間に教養が普及してゐないといふことを、意味するからだ。そしてそれはまた直ちに、社會の大部分に、教養が普及してゐないといふことを、理解することになつて［illegible］化の程度には、［illegible］わけである。

四

社會ははたして、無産階級に教養を普及するの責任を果したか？普通教育といふのがある。これは初等教育を普及せんとするもので、國によつて差等はあるが、現在の文明國にして、この制度を採用せざるものはない。『普通教育』は同時に「強制教育」だ。かくして無産階級もまた、「教育」の普及をえた。

しかしながら、「教育」はたゞちに「教養」ではない。いや、元來『教育』の目的は「教養」にあるのであるが、「學校教育」即ち『教養』ではないのだ。十八世紀から十九世紀へかけてこの學校制度の發達は、「教育」と「學校」とを同義語にしてしまつた。教育といへば、すぐに學校を聯想するやうになり、そのために、教育と教養とは、しだいに離隔するやうになつた。だから、無産階級に普通教育が普及しても、無産階級に教養が普及したことにはならぬ。

そのほかに、中等教育、高等教育、最高教育と、三段の學校制度がある。これは初等教育と併合して、一つの國家組織の要

素をなしてゐる。形式から見れば立派だ。しかし、それが無産階級にとつて何であらう？　それは、『紳士』としての教養を與へるとしても、『勞働者』としての教養は與へてくれない。また、たとへ與へて吳れるとしても、生存に忙しい無産階級は、これを利用することはできぬ。利用できぬものは、無いに等しい。そこで、無産階級は、二重の意味で、『教育』に叛逆する。第一は、『教育』が、かれらの必要とする『教養』を與へてくれない點で。第二は、『教育』に對する機會が與へられざる點で。

この『教育』に對する二重の叛逆が、『成人教育』の運動となつて現はれる。そしてこの成人教育によつて、無産階級は、眞の教養をえやうと努力するのである。また事實、得つゝある。この意味で、『成人教育』の運動こそ、無産階級に『教養』を普及して無産階級擡頭の重大なる基礎をなすものと、いはねばならぬ。

五

『成人教育』の祖國は、そしてその最も發達せる國は、英國である。そして、世界で最も『教養』が普及し、したがつて無産階級が最も社會的勢力を得てゐる國も、英國であらう。

英國の成人教育運動が、無産階級解放運動としてのチャーティスト運動によつて、直接間接に起されたといふことは、意味深きことである。成人教育の嚆矢は、シェフイールドの『人民學校』であるといはれてゐる。これは、チャティスト運動の過激分子たるオーコンネル一派に對抗して、ラヴェット一派の穩和派が、教育によつて、無産階級の內面的自覺を起し、以つてその政治權擴張に備へやうとしたものである。これに倣つて、一八五四年には、『倫敦勞働者大學』が、基教的社會主義者モウリスにより起された。一八九九年には、オクスフォード大學內に、『ラスキン大學』が産れた。一九〇九年、ラスキン大學內の急進派が、『勞働大學』を建てた。『大學擴張』（ユニヴァシティ・エクステンション）運動が、盛んになつた。フエービアン協會の『夏期學校』。その他、勞働組合や、消費者協營組合や、勞働黨や、これらの無産階級運動は、ことごとく、成人教育に努力してゐる。なかにも、一九〇三年、勞働組合と消費者協營組合と、大學と、この三者聯立委員會において、『勞働者教育協會』が成立したことは、英國の成人教育運動を統一する上において、重大なる貢獻をなした。一九二〇年、二百七十七の支部と、二千七百六十の加盟團體と、二萬七百三十人の個人會員とを包擁してゐた。

英國の無産階級が、大體において教養に富み、したがつてその社會的勢力が大きいのは、成人教育隆盛の效果が、與つて力

ある[illegible]。成人教育には、[illegible]に於大することとではない。これに、[illegible]階級に必要なる[illegible]を、かれらに普及することだ。これが、文部當局の手によらずして、多く、勞働組合とか、消費者協同組合とか、自發無產階級の團體によつて、或は、無產階級に同情ある智識階級によつて、經營されてゐるといふことは、特に注意すべきことであると思ふ。

日本でも、近時、成人教育の聲が高くなつた。政府でも、近いうちに、成人教育の運動を起こすとかいふことである。成人教育の經營者が、かならずしも、無產團體でなくてはならぬといふ道理はない。社會の代表者たるべき政府が、直接に手を下して、成人教育を經營するのは、甚だ結構なことである。しかし、その教育方針が、依然として、學校教育の延長そのものであるならば、ほとんど用をなさぬことは、いふまでもない。成人教育は、學校教育の補習ではない。學校教育の與へえざる『教養』を與へんとするものである。若し政府の經營する成人教育が、中學校教師の古手をして、或はその內職として、いはゆる『教育』をやらうといふならば、その效果や知るべきであらう。米國がそれを試みた。そして失敗した。米國は成人教育について、現在轉換期に立つてゐる。わたくしは、米國を見ようと

[illegible]れたい。

六

最後に、無產階級に『教養』を與ふる要件として、その『團體的行動訓練』を忘れてはならぬ。無產者の團結は、その團體的行動によつて訓練され、その訓練によつて、生きた『教養』を得てゆくことは、勞働組合發達の歷史がこれを證明する。『教養』は、教育とちがつて文字や講義のみでは授けられない。それには『生活』が[illegible]しなければ『教養』は完全ではない。博士がかならずしも教養が高いとはいへぬ。教養とは產物である。そしてその活きた教養は、おほく團體的訓練で養はれるのである。

明治三十三年、政府が治安警察法を發布したり、いろいろな方法で、勞働組合を迫害したため、日本の勞働運動は『勞働暴動時代』に入り、勞働組合による團體的訓練がなく、したがつて『無教養』に陷つた無產階級が、放火、殺人、工場破壞などの暴動によつて、僅かにその無智なる鬱憤を晴らしてゐたことは、われらの忘るべからざる教訓である。

現在においては、かゝる無暴な迫害は行はれてゐない。勞働組合も相當に基礎を堅くした。しかし、無產階級に教養を普及する方法として、勞働組合の團體的訓練を助長しやうなどと

素をなしてゐる。形式から見れば立派だ。しかし、それが無産階級にとつて何であらう？　それは、『紳士』としての教養を與へるとしても、『勞働者』としての教養は與へてくれない。また、たとへ與へて呉れるとしても、生存に忙しい無産階級は、これを利用することはできぬ。利用できぬものは、無いに等しい。そこで、無産階級は、二重の意味で、『教育』に叛逆する。第一は、『教育』が、かれらの必要とする『教養』を與へてくれない點で。第二は、『教育』に對する機會が與へられざる點で。

　この『教育』に對する二重の叛逆が、『成人教育』の運動となつて現はれる。そしてこの成人教育によつて、無産階級は、眞の教養をえやうと努力するのである。また事實、得つゝある。この意味で、『成人教育』の運動こそ、無産階級に『教養』を普及して無産階級擡頭の重大なる基礎をなすものと、いはねばならぬ。

五

『成人教育』の祖國は、そしてその最も發達せる國は、英國である。そして、世界で最も『教養』が普及し、したがつて無産階級が最も社會的勢力を得てゐる國も、英國であらう。

　英國の成人教育運動が、無産階級解放運動としてのチャーティスト運動によつて、直接間接に起されたといふことは、意味深きことである。成人教育の嚆矢は、シェフイールドの『人民學校』であるといはれてゐる。これは、チャティスト運動の過激分子たるオーコンネル一派に對抗して、ラヴエツト一派の穩和派が、教育によつて、無産階級の內面的自覺を起し、以つてその政治權擴張に備へやうとしたものである。これに倣つて、一八五四年には、『倫敦勞働者大學』が、基教的社會主義者モウリスにより起された。一八九九年には、オクスフオード大學內に、『ラスキン大學』が産れた。一九〇九年、ラスキン大學內の急進派が、『勞働大學』を建てた。『大學擴張（ユニヴアシテイ・エクステンション）』運動が、盛んになつた。フエービアン協會の『夏期學校』。その他、勞働組合や、消費者協營組合や、勞働黨や、これらの無産階級運動は、ことごとく、成人教育に努力してゐる。なかにも、一九〇三年、勞働組合と消費者協營組合と、大學と、この三者聯立委員會において、『勞働者教育協會』が成立したことは、英國の成人教育運動を統一する上において、重大なる貢獻をなした。一九二〇年、二百七十七の支部と、二千七百六十の加盟團體と、二萬七百三人の個人會員とを包擁してゐた。

　英國の無産階級が、大體において教養に富み、したがつてその社會的勢力が大きいのは、成人教育隆盛の效果が、與つて力

あると思ふ。成人教育とは、[illegible]學校教育も、[illegible]に[illegible]大することではない。これは、[illegible]階級に[illegible]を、かれらに普及することだ。これが、文部當局の手によらずして、多く、勞働組合とか、消費者協同組合とか、自覺[illegible]階級の團體によつて、或は、無產階級に同情ある智識階級によつて、經營されてゐるといふことは、特に注意すべきことであると思ふ。

日本でも、近時、成人教育の聲が高くなつた。政府でも、近いうちに、成人教育の運動を起こすとかいふことである。成人教育の經營者が、かならずしも、無產團體でなくてはならぬといふ道理はない。社會の代表者たるべき政府が、直接に手を下して、成人教育を經營するのは、甚だ結構なことである。しかし、その教育方針が、依然として、學校教育の延長そのものであるならば、ほとんど用をなさぬことは、いふまでもない。成人教育は、學校教育の補習ではない。學校教育の與へえざる「教養」を與へんとするものである。若し政府の經營する成人教育が、中學校教師の古手をして、或はその內職として、いはゆる「教育」をやらうといふならば、その效果や知るべきであらう。米國がそれを試みた。そして失敗した。米國は成人教育について、現在轉換期に立つてゐる。わたくしは、米國を見よと

[illegible]みたい。

六

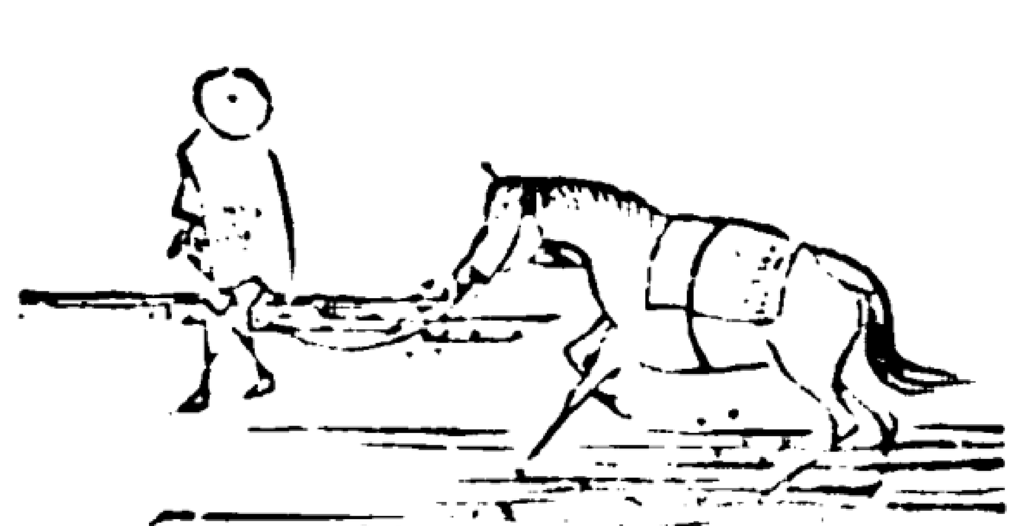
最後に、無產階級に「教養」を與ふる要件として、その「團體的訓練」を忘れてはならぬ。無產者の團結が、その團體的行動によつて訓練され、その訓練によつて、生きた「教養」を得てゆくことは、勞働組合發達の歷史がこれを證明する。「教養」は、教育とちがつて文字や講義のみでは授けられない。それに「生活」が隨伴しなければ「教養」は完全ではない。博士がかならずしも教養が高いとはいへぬ。教養とは活物である。そしてその活きた教養は、おほく團體的訓練で養はれるのである。

明治三十三年、政府が治安警察法を發布したり、いろ〳〵な方法で、勞働組合を迫害したため、日本の勞働運動は「勞働暴動時代」に入り、勞働組合による團體的訓練がなく、したがつて「無教養」に陷つた無產階級が、放火、殺人、工場破壞などの暴動によつて、僅かにその無智なる鬱憤を洩らしてゐたことは、われらの忘るべからざる教訓である。

現在においては、かゝる無謀な迫害は行はれてゐない。勞働組合も相當に基礎を堅くした。しかし、無產階級に教養を普及する方法として、勞働組合の團體的訓練を助長しやうなどと

いふ政策は、一つもとられておらぬ。成人教育などと、やかましく言つてる一方で、却つて勞働組合の發達を妨げるやうな政策をとつてゐることは、甚だ矛盾したやり方である。『勞働組合法』すら、なんとかかとか言つては、なるだけ勞働組合の活動力が小さくなるやうに心掛けるのみならず、いまだに發布しないなどは、その甚しきものである。治安警察法もそのまゝである。勞働組合が發達することは、勞働運動を穩健にし、勞働爭議を合理的にし、勞働不安を減少する所以である。なぜなら、勞働組合の團體的訓練は、無產階級の『教養』を具體化するからである。それは同時に、無產階級の『擡頭』の原因となる。しかし、『教養』ある無產階級が『擡頭』するのが、何故いけないのだらう？それは一つの社會的進化ではあるまいか？

わたくしは、勞働組合が發達するまでは、無產階級の『教養』も、したがつてその『擡頭』も、ありえないと信ずるものである。



短歌道一家言

齋藤茂吉



第一　短歌の實例

○

木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ

岡のうへに黒きひと立ち天のがは敵の陣屋にかたむくところ

これらの歌は二つとも、竹の里人（正岡子規）の歌であつて、明治三十二年の制作に係つてゐる。『繪をひろげ見て』といふ詞書があつて、十首作つてゐる。僕は今その二つを此處に抽出したのである。

第一の歌は、釋迦涅槃の繪を見て作つたものである。涅槃會の雜者がいろいろゐるが、作者は、『象蛇ども』と云つてゐる。そして十大弟子のことなどはちつとも云つてゐない。作者は、『象蛇どもの』と云つて、さうして、『泣き居るところ』といふ句で結んでゐる。一見極めて無雜作な歌であり、さうして一見客觀的過ぎるほど客觀的な歌であるけれども、僕はこの歌を實に好い歌だとおもふ。はじめて此の歌を讀んだとき僕は驚嘆したものであつた。今でもその感じは毫も變らない。釋迦涅槃のことを脚本にでも作るとしたら、今の有名な創作家ならば、隨分長いものを書き得るであらう。けれども、短歌は三十一文字の詩であるから、さう長くては駄目である。又くどくどと細

かい描寫などは出來ない。それでゐて、此の一首の歌は獨立した藝術として存在し得るとおもふものは、現世には單に僕ばかりでなくその人に乏しくはない。そして、此の一首の存在し得る妙味が、『衆蛇どもの泣き居るところ』にあると信じてゐる人も僕のほかに幾たりか居る。實際、短歌の妙味はこのへんに存在するのであつて、それゆゑ、主觀的とか客觀的とかいふことを頭に持たずに、氣を落付けて此の歌を讀み味ふといゝ。

第二の歌は、戰爭の繪か何かで、こちらには岡のうへに武者が幾たりか立つてゐるところであらう。それが夜だから甲胄が黑く見える。それから、向うには敵の陣營がかいてあつて、空には星が耀いてゐる。それを『天の川敵の陣屋に傾くところ』と歌つてゐる。この歌も全體が客觀的であるが、この歌の下句などは實に旨い。つまり短歌の妙味はこのへんに存するのである。

僕は短歌の妙味のことを一寸云つたが、この妙味は何處から來るかと謂ふに、これは、實地を歌ふところから來る。いい加減に頭のなかで捏ね上げずに、實際を歌ふところから來る。この原本の原理は、短歌の道の根柢をなしてゐる。それゆゑ、因緣あつて短歌を味ふもの、短歌を拵へるものは、假象、假感、實相本來の由緣などいふことを念頭におかずに、直ちに此の根本の原理に參ずるといゝ。僕が短歌に就いて一家言を云はんと欲するに當つて、こゝに竹の里人の二首を持つて來たのはそれがためである。

(二)

道の後こはだ娘子を雷のごときこえしかども相まくらまく

この歌は、應神天皇が、日向の國、諸縣君の女である髪長比賣を召し給うて、後これを太子の大鷦鷯命に給うた。それは、太子が媛の顏容が玉の如くに美しかつたので、常に戀情あるのをしろしめした爲である。歌は、古事記にも、日本書紀にも載つてゐる。その時太子は非常に喜んで詠ぜられた歌である。『道の後』は、こゝでは邊土の意で、日向の國をいふのである。『こはだ』は細肌などの意かも知れない。或は日向の地名かも知れない。まだよく分からない。さう本居宣長が云つてゐる。『雷のごと』は、萬葉集卷六の『鳴神の音のみ聞きし吉野』などの『かみ』に近ふものであらうが、どうも實によい句だとおもふ。雷神のごとくに近よることも難いと思つてゐたのにといふ意味もあるに相違ない。そこで結句の『あひ枕纒く』が働いてくるのである。この歌は、前の竹の里人の歌に較べれば、平俗の

「[illegible]」
結局おなじである。そのいふ意味は、實地を歌つてゐるといふところに歸着するのであつて、この歌の中の『雷のごと』といふ句が、實地ではないと云つて僕に異論を唱へるやうになると、僕の說が理會しにくくなつて來るのである。僕の說によると、『雷のごと』の句は自然流露の句で、實地から來て居つて、感情に最も直截な句と、かうなるのである。もう一度いへば、實地を歌つた太子であるから、『雷のごと』のごとき生きた句を出し給うたのであると、かういふ結論になるのである。

短歌の大道はここにあると云ふのであるから、新古今集に載つてゐる藤原定家の戀歌、『須磨の蜑の袖に吹き越す鹽かぜのなるとはすれど手には溜らず』といふごとき歌は、いろいろ骨折つて細工してゐるから、一寸上品ですさまじくないやうに思ふし、朦朧としてゐるから、人前に出してもいいぐらゐに思ふかも知れぬが、所詮は駄目だ。なぜ駄目かといふに、これは實地を直截に歌つてゐないからである。つまり短歌の大道を外れてゐるからである。この定家の歌を、象徴的だ、幽玄だなどと云つてゐるうちは、いまだ僕の說は分りにくいといふことになるのである。

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落葉ふかく

鷄頭の紅ふりて來し秋の末や我れ四十九の年行かんとす

この二つは僕の先師伊藤左千夫の晩年の作で、五首の連作のうちから二つだけを抄いた。二つとも、晩秋の自然に觀入して出來たものである。それゆゑ自然が單純に力づよく出てゐるほかに、一首を通じての哀韻がある。この哀韻は首の連續から來るので、これは作者銘々の個人性によつても違ふ。又時と場合によつても違ふ。これは、おのづからなる律として現はれるので、先師は『聲調のひびき』などと云つて論じたこともある。

このおのづからなる調べは究極に行くと、個人性に歸してしまふのであつて、先師の場合は、その歌調は一般に、單純で太く、直線的でほがらかである。そのなかに云ふに云はれぬ哀れの旋律を流らせてゐることもあるのであつて、この二首の如きは先師が歌の調べの特徴を最も具體的にあらはしてゐるものだと思ふ。

是等の歌は、實際から來てゐるが、天然も作者みづからも一體となつて、一首の調べのなかに溶け合つてゐるのである。作歌

の道をば、實際實際と突き詰めて行くと、おのづから此の境に達するのである。さういふ具合に僕は考へてゐる。

○

わが庵の垣根にうゑし八千くさの花もこのごろ咲きそめにけり

わが園に咲きみだれたる秋のはな朝なゆふなに散りそめにけり

試みに良寛和尙の歌二つを此處に書いてみた。きはめて無雑作に作つた、淡々として水のごとき歌であるが、讀味へれば味ふほど、無量の氣持が湧きいでて來る。是等の歌も極めてあからさまに實際から來てゐる。良寛は可なり長い間作歌に勉強したのであつて、歌道に就いては動かすべからざる信念を持つてゐたのであつた。それゆゑ、一つの動詞、一つの助辭のすゑに至るまで忽にはしない。そして歌の大道をば極めて悠々と歩いてゐて、その晩年の如きは、らくらくと自在の境に到達してゐる。歌調は、萬葉調から良寛の歌調になりきつてしまつてゐる。これらの歌なども、實際實際と突き詰めて行つて、行き著いた境地であると僕はおもふ。

○

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり

これは、長塚節が秋海棠の畫に賛した歌である。長塚節は飽くまで自然に同化した人であつたから、かういふ歌になると實に旨い。

畫の賛などいふものは、畫に餘り即き過ぎるとおもしろくない。不即不離のところに面白味がある。これは節の師である竹の里人の言葉から悟入したものである。竹の里人は『雪の繪』に賛して『あかつきの長縁し居ればよべの間に雪つもりぬと妻來て告げぬ』といふ歌を作つてゐる。

併し、僕は長塚節のこの歌に就いて、技巧を主にして云はうと思つたのではない。この歌は實地に天然に觀入して、それを究詰めて行つておのづから此處まで至つたといふことを云はうと欲したのであつた。この作者の歌の調べは左千夫のに較べて、清純で稍細い。そこから一種いふべからざる氣持が出て來てゐる。實地を追うて、寫生に徹するとおのづからこの域に到達するのである。それゆゑこの歌は極めて象徴的である。こゝで象徴的といふのは、芭蕉の『この秋は何で年よる雲に鳥』の象徴的だと云ふやうな意味で、それから去來の『手の上に悲

しく評にあるさ[illegible]たはつ[illegible]といふ[illegible]て、[illegible]徴的だといふのである。天然に觀入すれば、そこには[illegible]の自己の象徴たるものがある。そこを僕は云はうとしたのである。なほこの事に就ては後段に云はう。

○

たゞ此處で忘れぬうち一首記しておかう。新勅撰集に、在原元方の歌に『わびことや神無月にはなりにけりなみだのごとくふる時雨かな』といふのがある。『ごとく』から直ぐ『ふる時雨かな』に續けたところに新味もあるやうであるが、これなどは幾分ヴエルレーンヌあたりのものを念を有つて居るせゐもあらうか。或は逆に、日本の短歌といふものは長い間の發達史を持つてゐるから、象徴はマラルメ、ヴエルファアレン、ヴエルレーンヌ、マアテルリンタに限るぐらゐのつもりだと一寸意外におもふやうな句に逢著することがある。これは新古今集時代の幽玄體、有心體のものに發見することが出來る。

西洋のものでも、日本のものでもそれが自然にさうなのは矢張りよい。象徴、象徴と狙つたのはどうも僕にはおもしろくない。新勅撰の元方の歌も僕はちつとも賛成してゐないのであるが、言がたまたま象徴に觸れたから、こゝに書いたに過ぎな

[illegible]いふと、[illegible]一たん[illegible]いところにまで[illegible]い形式の詩にあつて、言葉を運ぶことの如何に[illegible]してあるか、如何にむづかしいかがこのへんでも分る。

○

眼閉づれど心にうかぶ何もなしさびしくもまた眼をあけるかな

痛む胸をおさへつゝ日が赤赤と冬の霧の中にのぼるを見たり

これは石川啄木の「悲しき玩具」の中の二首である。啄木は歌を大凡三行に書き、！？、。などの標點を附けてゐる。これは土岐哀果氏あたりの影響であつたのであらう。僕は今一行に書いたのは作者に濟まぬとも思ふが、ほかの歌と形式を同じにするためにさうした。一行に書いても歌の價値は別に變らない。啄木は晩年には詩的、象徴的を離れようと努めて、實地實地と行つた。それから感傷からも離れようとしてゐたが、その感傷は別な形式となつて一生啄木の歌に纏つてゐた。そして青年の心をそそるのは矢張りその別な形からの感傷性に基づいてゐる。

こゝに抜いた二つの歌はほかの歌に較べて稍詩的、感傷的であるが、それは好い意味で謂ふのであつて、實地實地と行つてゐても、それが抒情詩本來の面目だからである『眼をあきにけり』『眼をあくるかな』と云はないで『眼をあけるかな』といつてゐるところに感傷性がある。この細かいところが啄木の發明であつたのであるが、この發明は竹の里人ならば初期中期のものに相通ふ。竹の里人の晩年のものに通ふやうな歌は啄木にはなかつた。

○

われはもや安見子得たりみな人の得がてにすとふ安見子得たり

萬葉集卷二にある、藤原鎌足が釆女安見子を得たとき嬉しがつて詠んだ歌である。この歌も實地から來てゐるが、率直に單純に一氣呵成に歌つてゐる。この歌は實に秀でた歌であつて、力強く讀者に働き掛けるのであるから、短歌は極めて單純に言ひ表はしてもいいといふことになる。また、短歌には『單純化』といふことが大切であると論ぜねばならぬこともある。『單純化』のことはなほ後段で論じよう。

この歌は、普通いふ意味で、客觀的ではなく主觀的である。主觀的でも、いろいろ煩はしい事を云はずに端的に言ひ表はしてゐる。實際實際と行けば、おのづから此の境にも到達するのである。啄木の歌にも一見平凡で佳い歌があるやうに、鎌足の歌も一見平凡でゐて極めて優れた歌である。

○

あしびきの山河の瀬の鳴るなべに弓槻が嶽に雲たちわたる

痛足がは河浪たちぬ卷向の弓槻がたけに雲ゐたつらし

萬葉集卷七にある。柿本朝臣人麿歌集に出づ、とあつて、作者が未だ明快には分からぬと謂つてよいが、僕は矢張り人麿の作として考へてゐる。あなし河、卷向、弓槻が嶽などは皆大和國にある。この二つの歌は天然を咏じた歌であるが、實際に執したがために、實に力強い遒勁流轉の歌調を成就したのである。人麿のごとき魄力のさかんな作家でも、單に頭のなかで捏ね上げようとせば、やはり斯ういふ力づよい歌は出來にくい。然るに人麿ははたして天然に觀入して歌ひあげて居る。即ち人麿は短歌の大道を歩いて居るがために、おもう存分その魄力を歌のうへに表はし得たのである。魄力は歌の調べとなつて表はれて居り、實に驚くべき恐るべき歌であつて、僕は是等の歌を誦する

僕は上に、種々の歌を抜いて、少しく僕の考へを述べた。これを二たびこゝに約めて云へば次の如くである。短歌は、ほかの藝術の間に介在して獨立した價值を保つことが出來る。やはり短歌の妙味は、短歌でなければならぬところがある。短歌の大道は、實際を咏ずるにある。詞をかへて云へば、實相に觀入して成るものである。此の道理は、古くは古事記・萬葉集の時代より、近くは明治・大正の時代に亘つて毫末もかはることがない。この道理の上に立つて、一見客觀的に見えるものでも、一見主觀的に見えるものでも、これを「實相觀入」の語に打つて一丸となすことが出來る。縁あつて僕の果敢なき此の一家言を讀まるる君子は、先づこの道理に眼をつけてもらひたい。云々である。

僕は如上の言中に於て、短歌の實例を示した。それは盡く故人の作例である。現世は短歌の隆盛時代であつて、優れた作家が實に多い。それゆゑ、一家の作例を引かば他の一家の作例をも顧ねばならぬ。その作例は、僕のこの小文章には多きの嫌しきに堪へぬであらう。僕は如上の文に於て、また以下の文中に

第二　歌を作る覺悟

（一）

作歌の道は所詮は一家一流であるけれども、現世には僕の親しい、尊敬すべき先輩・友人が多いのであるから、さういふ先輩・友人は鑑賞のうへからでなく、歌を作る上から、やはり僕とは極めて似寄つた覺悟をもつてゐるのである。特に同じ師の門から出た幾たりかの僕の友は、僕と殆ど同じ覺悟を以て短歌を作つて居る。

短歌鑑賞の道は時あつて廣大でなければならぬ。特に短歌の發育・變遷の史蹟を論ずるものは、時あつて強ひてこの博大の見を持せなければならぬ。恰も本草家あつて伽羅木をも白頭翁をも之を平等に取扱ふがごときである。

しかるに短歌制作の覺悟はこれとは違ふ。その覺悟は細く玄で自己の覺悟に執せねばならぬ。茲に於てその道は極く極く狭いところに突き詰めて行つてしまふのである。眞の作家は常にこの狭き道を步兵のごとくに步む。そこで、はるかに自作圃の大道を有つて、目前にこの苦艱の道を步むことを悔いないので

ある。僕もねがはくは安易懈怠の念を捨て、徒歩兵の如くにこの狹き道を歩まんことをちかふ。僕の道づれになつて額の汗を拭ふものはすでに現世に幾たりかゐる。

○

作歌の覺悟は極く短くて濟む。實相に觀入しておのづから歌ひあぐるのが即ち歌である。これを『寫生』と謂ふ。『寫生』とは、實相・實相と行くことである。そして其の生を寫すことである。生はイノチの義である。

○

實相に觀入することは作歌の正道である。そしてこれは時に作歌の易行道である。それゆゑ少年の徒一たびこのことに學び到れば樂々と數百種の名歌を作り得るであらう。時あつてこれは作歌の難行道である。少年の徒一たび言葉を驅使するに巧者になるとき、實相に觀入することを懶しとて、易々として手の先の歌を作つてしまふ。その時、彼等にとつて實相の觀入は極めて難行道である。さうしてこの時に當つて救はるべき唯一の道は、たゞ『寫生』を念ずることである。

○

念々焚燒して實相に觀入すれば、おのづからにして歌ひあげんとする衝迫を感ずる。その衝迫を古への先達は『うたごころ』と稱へた。『うたごころ』を具象化するには、まだまだ觀入を續けなければならぬ。具象化の過程がここで始まつて、つひに一首の短歌が出來る。西洋人の謂ふ『誕生』である。具象化の過程を、先師は『かもす』といふ語で表はしてゐた。醞釀を意味してゐるのであらう。

具象化の過程に於て、觀入をゆるめまいと努めることが緊要である。この事は容易なるが如くであつて實にむづかしい。

○

人は作歌に際して『感動』の尊ぶべきことをいふ。僕もそれには異を樹てない。たゞ、僕は觀入を念とするから、『感動』をばおのづからなるあらはれと看做してしまふ。そこで『感動』をば強調して意識にのぼすことをしないのである。すなはち『感動』を分析吟味することなどはせずに、『感動』を自然の出づるがまゝに流露せしめたいと、かういふのである。僕は觀入の實行を突き詰めて行けば、おのづから『感動』は一首の短歌

中に[illegible]

[illegible]。心の[illegible]世の人々と[illegible]でゐる。

○

それから、象徵といふことも、深秘といふことも、世の人々と違ふ。僕の說では、歌つくりとしての態度は、たゞ念々『寫生』を忘れなければいゝとかう云ふのである。寫生した一首が象徵的になつてゐるか、深秘の境に到達してゐるか、これは『寫生』を實行した一首の歌について吟味すべきであつて、歌つくりの覺悟として、はじめより、象徵、深秘を狙ふのはあぶないと思ふのである。あぶないといふよりも不謹愼だといふのである。歌つくりとしての僕の覺悟は、一念十念乃至百念、つねに『寫生』を念ずればいゝ。寫生を念じ、寫生を實行して、出來あがつたものゝ奈何はこれを神明に任せるより途はない。この點に於て作歌は交合とひとしい。

世のある人々は、はじめより摩訶不思議の深秘道を說き、深秘を狙つてゐる。かくの如き作歌態度には僕は組しない。

○

世の人は或は『寫生』の語義をば極めて淺く取つて、繪畫で

[illegible]

[illegible]

らば、世の人々は[illegible]

に從ふがよい。

世のある人々は、寫生をば一つの手段に過ぎないやうに解してゐる場合もあるが、これも間違つてゐる。短歌制作の全活動をば寫生と看做して考察すればいゝ。

支那の畫論に溯つてしらべると、寫生の語義は決して現今の畫學生が使つてゐるやうなものではなかつた。はじめは淡彩を施した花鳥畫などを指してゐたのであるが、その語義がだんだん變遷して來てゐる。竹田の文章などを讀むとその變化の有樣は實におもしろく僕には感ぜられる。

『寫生』をば文學の上に移して力說したのは正岡子規であつた。子規は歌論のうへにも寫生といふことを云つたが、未だ僕ぐらゐには徹底してゐなかつた。僕が短歌を論ずるに當つて『寫生』の語義を改良したのは、まさに然るべくして然なつたのである。世の人々はゆめ僕を疑ふことなかれ。

○

僕は作歌の道に摩訶不思議の法力は說かぬ。人あつてさうい

ふことを説くのが好きならば説いたところでかまはない。たゞ作歌の道はさういふ法りによつて悟入するのではない。歩兵のごとくに執拗に歩くことによつておのづと悟入するものである。それから作歌の道には武士道も要らぬ。たゞ日本の武士道は歩兵操典となつて歩くことを教へるからその點はよい。それから作歌の道には天才なども要らぬ。天才を當にしてゐては一首の碌な歌も出來ないものである。天才は童子の放屁のやうなものであるから、ちよつと香に立つて忽ち虚空に消えてしまふ。僕は嘗て『性命具足』といふことを説いた。性命の具足不具足はちつとも天才などによつては左右されない。鈍根僕のごときは、念々此のことわりを忘れてはならぬ。これは諦めて安心してゐるのではないぞ、さう僕は自らおもふ。

作歌の道に就いて、歌つくりの覺悟について僕のいふべきことは以上に盡きた。おもふに、『あが佛(ほとけ)たふとし』の説である。僕のはそれをも超えて、『あれ尊し』になつてゐる。歌つくりの覺悟はそれでいゝ。

現世には、僕のほかに、『あれ尊し』の説を唱ふる歌人は幾たりも幾たりゐるだらう。日本語に『をとこひでり』『をみなひでり』の語がある、『をとこひでり』の時には女人どもは困るであらう。然るに、現世の歌人中、『あれ尊し』とおもふものに、『ひでり』の語を豫想せねばならぬ恐はちつともない。

嘗て新體詩人が上野公園で一夜の會合を催したことがある。その時、坂井久良伎宗匠が一句を作つて傍にゐた正岡子規に示した。當時子規もやはり新體詩人のつもりで居た。子規は忽ち筆をとつて其の句を直して、これならば幾らか句になるだらうと、かう云つた。句は、木の下に新體天狗つどひけり　といふのである。現世の歌壇にはこの『新體天狗』に乏しくはない。僕もその一人である。

僕は新體天狗を以て任じ、努めてかくあらうと思ふけれども、萬葉集の歌人を思ひ、實朝・眞淵・良寛・宗武・元義・曙覽の徒をおもふ毎に、いつも頭(かうべ)は下がつてしまつて、駄目だとおもふことが多い。身を挺して古今東西の大藝術家の前に立つとき、新體天狗の僕は恰も微塵のごとくに見える。その時僕は悲觀してしまふ。

正岡子規は嘗てこんなことを云つた。『歌よみの如く馬鹿な、のんきなものは、またと無之候。歌よみのいふ事を聞き候へば和歌程善き者は他に無き由いつでも誇り申候へども、歌よみは歌より外の者は何も知らぬ故に、歌が一番善きやうに自惚

[illegible]にあり。然るに歌に於ても定型を保存する必しも無せず、十七字でさへあれば川柳も俳句も同じと思ふ程ののんきさ加減なたば、況して支那の詩を研究するでも無く西洋には詩といふものが有るやら無いやらそれも分らぬ文盲淺學、況して小說や院本も和歌と同じく文學といふ者に屬すと聞かば定めて目を剝いて驚き可申候。』などと云つたことがある。けれどもこの文章は、古今東西の大藝術家のまへに微塵のごとくに見えてゐる僕にとつては、藥にはならずに毒になるだらう。さなきだに悲觀してゐる僕は、歌を廢めてしまふであらう。『おれ尊し』の自我狂がここに於ていちじるしく權威を有つに至るのである。

第三　作歌の種々相

○

短歌のことを論じようとせば、必ず言葉の議論が出て來る。特に從來、短歌の言葉は、『やまと言葉』になつてゐたから、新らしい運動を與さうとした人は先づ其の『やまと言葉』に氣がついて、そしてそれを改良しようとした。そして、現代人は現代語で歌を作れ。新しき酒は新しき甕に盛れ。何を苦しんで死語の羅列をするか。擬古は醜い。衣冠束帶で銀座通を行くやうなことはやめろ。などと云つたものである。現代語を突き詰め

[illegible]

正岡子規もかう云つた。『[illegible]一國語には古人のいひ古したる通りに言はんとするにても無く、しきたりに倣はんとするにても無く、只々自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本來の主意に御座候。故に俗語を用ゐたる方其の美感を現すに適せりと思はば雅語を捨てて俗語を用ゐる可申、又古來のしきたりの通りに詠むことも有之候へども、それはしきたりなるが故に、其を守りたるにては無之、其の方が美を現すに適せるがため之を用ゐたる迄に候。古人のしきたりなど申せども、其の古人は自分が新たに用ゐたるぞ多く候べき』（明治三十一年三月。歌よみに與ふる書）と云つてゐる。歌の言葉の概論としては、僕の考もまた正岡子規の言以外には出でない。僕は作者としても、それから鑑賞家としても、極めてひろい考を持つてゐる。

○

正岡子規は歌言葉に就いては上の如く廣汎な考を有つてゐたが、晩年になるに從つて、ますます萬葉調になつて行つた。古語もどんどん用ゐた。僕もさうである。僕はこれまでも現在も萬葉調といふことを明らさまに云つて居る。そして古語も隨分使つてゐる。

僕は歌言葉については廣汎な務を行つてゐるが、いよいよ自分の歌を作るとなると、口語脈に行かずに、雅語脈になつてしまふ。今後或は口語脈になるかも知れないが、それは僕の短い一生のうちには先づ先づ無いであらうとおもふ。

實相に觀入して、歌ひ上げむとする衝迫のおこるときは、それは、賀茂眞淵も云つた、『天地のまゝなる心のそこひをいひ出づる』のである。詠歎のこゑなのである。いのり、祈願、禮讃のこゑに通ふのである。この切實な、急迫した心の調子は、『であつた』よりも、『けるかも』として眞實にあらはれる。かういふことを僕は今までも論じた時、それは僕の『言葉に對する迷』であると云はれた。迷であつてもどうも爲方がない。

いはばしる垂水のうへのさ蕨のもえいづる春になりにけるかも　萬葉卷八

大病院の深夜は變に淫蕩な、空氣がチーンと漲つてゐます　中澤新次

僕が偶々この文章を書かうと思つてゐたところへ、青山霞村氏から雜誌『からすき』を送つて貰つたので、とりあへず中澤氏の歌を引用したのである。けれどもこの二つを較べてみて、現今の口語歌といふものは未だ未だ駄目だと思つたのであつた。

『春になりにけるかも』の方がどれだけ、『漲つてゐます』よりも切實に響くか分からない。それが分からずに、『漲つてゐます』が切實だなどといふなら、それは鈍くて、言葉の論、歌ことばの論をする資格のないものだ。

○

僕はもとから口語歌論者には同情を有つてゐるが、作物が不甲斐ないので、到底のぞみがないと云つてゐた。僕がしばらく歌壇に遠ざかつてゐるうち、その口語歌も大に進歩したかも知れない。口語歌の實行家としては、前田の青山霞村氏がゐる。西出朝風氏がゐる。西村陽吉氏がゐる。矢代東村氏がゐる。石原純氏がゐる。そのうち、西村・矢代二氏のものが一番よいであらう。青山氏のは議論に威勢があつて面白いが作物はどうも古くて駄目だ。口語歌は一種の革命であるから、もつともつと新鮮でなければ駄目だ。

例へば、青山氏の歌に、『厚鎌で鉛筆削る煙草店田刈してゐる女寫そと』といふのがある。これは煙草店にゐて、向ふの田で稲を刈つてゐる女を寫生しようとして厚鎌で鉛筆を削つてゐるところであるが、一首の中に餘りいろいろの事をつめ込んだから窮屈になつてしまつて駄目になつた。特に、結句の『寫そ

ことはいまだ云ふことのできないものなのである。これが口語の缺點となるのであるから、高山氏にはもつと苦しまねば駄目だと僕にはおもふ。これは僕がひとりで思ひ上がつて信じてゐると思ふと間違ふ。今は單に結論だけを云つたが、いづれ論戰をしてもいゝ。

○

口語歌のことをいふと、いつも僕は正岡子規の口語歌のことを聯想する。子規の歌は初期に屬してゐるものであつて、主に『消息の歌』に是等の體(たい)を用ひたやうである。

十四日お晝すぎより歌をよみに上根岸までおいでくだされ

土がたを入れたる鉢を携へて秀眞(ほつま)がり行く途中氣をつけよ

きのふわが造りしものを何んと思ふ觀音にあらず大佛にあらず

いかにして石膏に取るか殊の外に手數かゝらば取らずともよし

正ちやんを誰やらに似ると思ひしはラファエルがかきしマドンナの耶蘇

鳴雪と鼠骨と虚子と伴と我と鍋(なべ)くはむ十四日の夕

十日は幾何の金なり九日の朝から來ませ茶は買ひてあり

[illegible]

や

風呂敷の包を解けば驚くまいか[illegible]の人に出た出た

原千代子さんの來たりてくさぐさの[illegible]

ひつつ

かういふ歌が幾つかある。子規のは是非とも口語に非ればならぬといふやうな野心が無いから、自由自在である。そこが所謂口語家論者のものよりも好いとおもふ。併し全體から見て、決して子規のほかの萬葉調の優れた歌に較べて一足元にも寄れないほどの輕いものである。石川啄木も口語的發想の歌を作つたが、これも口語といふことに囚はれずにしまつた。おもふに口語歌の問題は、優れた歌人を得て、實行のうへではじめて解決せらるべきものであらう。議論だけでは解決のつきにくいといふのは、それは議論は縦れ概論だけをいふのであるから、いよいよの解決は矢張り實物を見たうへでないと分からないのである。

○

萬葉集の歌ことばは盡く當時の口語であるやうに考へて、ただ漫々と口を突いて出た歌のやうに思ふ人もある。さういふ人は、その事を唯一の理由にして、僕等が歌に「けるかも」を使

つたりするのを非難しようとしてゐる。しかし其は極めて淺見なのであつて、萬葉集の歌はどうして非常に骨を折つて作つてゐるのである。その證據には卷一の歌は實に精選してあつて、何々盡くたいしたものである。實に恐るべく、驚くべきものである。易々として卅一文字にした口語ではないのである。

○

三輪山をしかも隱すか雲だにも心あらなむ隱さふべしや

萬葉卷一額田王

短歌は三十一音の詩であるから、そのなかに色々の事柄を詰めると、餘裕が取れずに抒情詩本來の面目が無くなつてしまふ。情が切實であればあるほど、盛る意味合が單純になるのが自然の行方である。つまり短歌では『單純化』Vereinfachungが自然に行はれねばならぬといふことになる。

この額田王の歌でもその『單純化』が如何にも自然に實行されてゐる。そこで意味合が比較的單純で、そのかはりに、第二句で『隱すか』と云つて、結句でまた『隱さふべしや』と云つてゐる。中味を單純にしてあるから、切實な情をこれだけ力づよく表はすことが出來るのである。この單純化は、寫生力によつて、切實の情によつて、意力によつて成就することが出來るので、たゞ種々と細工するの謂ではない。賀茂眞淵が、その心さはなりとも、なほくひたぶるなるものは、ことば多からずと云つたのは、單純化の根柢を道破した言であつて、偉い偉い言葉である。

みづくきの古りにし筆の跡みればいにしへ人は善く書きにけり

竹の里人

むらぎものこころ樂しき春の日に鳥の群がり遊ぶを見れば

僧良寬

是等の二つの歌なども、捉へるところは免さず捉へてゐて、然かも一首の意味合は極めて單純に出來てゐる。この單純化の實行は、理論上容易なるが如くであるが、實はなかなかむづかしい。制作のときに、精神を引緊るやうにするとこの單純化が割合によく出來ることがある。これが、切實の情、意力を弛緩せしめない方法なのであらう。生理的に云ふと、頭部に力を入れて緊張すると、この精神を引緊るやうになつて來る。

新派和歌の初期あたりでは、一首を複雜にすることが手柄のやうに思つた頃もある。竹の里人あたりでもさういふ頃があつた。併し僕が今、易々として『單純化』のことに言ひ及び得るのは、長く先進が苦しんで悟入したその賜物なのである。明治三十年、三十一年頃からの和歌革新の爲事は、いろいろな變化

を詠みた時代でもあつたので、當時の素朴な[illegible]に對して、それ[illegible]化」を企てたのはただ[illegible]の自然の行き方であつたので、これ[illegible]は一つの方便に過ぎないのであろ。

短歌の歌格の研究も面白く有益な為事の一つである。橘守部の「短歌撰格」あたりから出發して、もつと細かく分類研究するといゝとおもふ。前に出した額田王の歌の如きは、五七、五七と行つて七で結んだものである。その結句はそれゆゑ力づよく且つ繰返しの調子を有つてゐる。そして結句で大きく切れてゐるが、「しかも隠すか」で一寸切れ、「心あらなむ」で一寸切れてゐる。

「家にあれば笥に盛る飯を草まくら旅にしあれば椎の葉に盛る」は第一句から第五句（結句）まで連續の句法であるが、結句でやはり繰りかへしてゐる。併しこの歌などは上の句、下の句といつても好いぐらゐに出來て居る。

「巨勢の山つらつら椿つらつらに見つゝ偲ばな巨勢の春野を」これなどは第三句で切らずに一氣に讀くだし、結句の前で一寸休止するぐらゐのところである。一氣に讀みくだすからやはり繰返してゐる。

[illegible]これは第五七五で一寸切れてゐるが[illegible]つまり二句切の形式であるが、後者の[illegible]なおりけらの[illegible]の秋のゆふぐれ」といふ[illegible]句切れとは幾分ちがふのである。ここで『大和の見え[illegible]國上[illegible]みかも』と繰返してゐる。このへんの關係がなかなか面白い。

以上は歌格分類の一端を示したに過ぎぬ。紙數に制限があるから以下を省く。それならば、作者の態度はどうかといふに、僕の考は極めて自由であつて我儘である。

僕は、五七、五七、七といふ五七調でもよく、五、七五、七の七五調でもよく、第三句切の歌も作り、句割れの歌も作つてゐる。ことに近頃はしばらく作歌に遠かつてゐたので、破調に五七五七の調に行かぬことがある。つまり破調の歌を作つてゐるのである。けれども僕は故意に意識してさうしてゐるのではない。僕はやはり五七五七の正しい調べを目がけてゐるのである。

短歌の形式は、五七、五七と行き、輕から始まつて重に終つてゐる。即ち一首の形態は三角錐體のごときもので、安定の姿をなしてゐる。この事は結句が好く据わつてゐなければならぬといふことに關聯して居る。ここで正岡子規なども、人丸の[illegible]

ちの歌よみは誰かあらむ征夷大將軍みなもとの實朝』と詠んだり、『鎌倉の松葉が谷の道のべに法を說きたる日蓮大菩薩』と云つたり、『路の花植ゑし小鉢のかたはらに取り亂したる俳書歌書字書』などといふ歌を作つてゐる。結句を重くするために、漢語を用ひたり、字餘りにしたりしてゐる。この考は俳句の方から來た悟入であらうが、實にすぐれて居る。

○

短歌にはなほ『連作』がある。これは先師伊藤左千夫が明治三十五年一月、『連作趣味論』を公にしたのに始つてゐる。それに先つて、明治三十三年七月一日、正岡子規(竹の里人)が『一題にて數首聯作を爲すに利あるべし』と云つてゐる(萬集歌「讀下家物語」に就きて)が、これは『連作』を唱道せんがために云つたのではなく、子規はそれ以前から、『連作』の實行をして居つたので、おのづから此の語句が出たのであると看做すべきである。

左千夫が『連作』を論ずるのを聽けば、從來橘曙覽等が作つた、一題數首といふやうな作は、あれは眞の意味の『連作』ではない。眞の意味の『連作』は正岡子規の創始したものである。その『連作』の特質は次の如くである。

(一)連作には必ず二個以上の材料(主觀或は客觀)を配合せる連關を有すること。

(二)連作は必ず位置と共にまとまつてゐて、餘り散漫ならざること。

(三)純客觀の連作はあるとも、純主觀の連作は成立しがたきこと。

(四)連作は必ず數首を連關すべき趣向あること。

(五)連作は現在的なること。往事を追懷し後事を想像するとも、必ず現在的の事實に基づける感想ならざるべからざること。

(六)陳列的ならずして必ず組織的なること。

大凡、連作の特質は斯くの如きものであるが、盛に連作の歌を作つて行けば、種々の弊が出來るであらうといふのである。當時この論は處々に反響を起し、『あが佛たふとし』の說とせられた。その後「アララギ」の歌風が天下にひろまるに從つて、『連作』の義も通俗的にひろまつて行つた。『連作論』を少しづつ改良した論者も出でて『連作論』の頂上を示した。そこで飽き易い群衆は、却つて『非連作論』を迎ふるが如き形狀を示したこともある。併し短歌に『連作』のおこるのは自然の勢であつて、短歌の大道であることを儼然として置かねばならぬ。左千夫が『連作』の實例として揭げた子規の作の一つは次のごと

くてある。

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はむわれならなくに

いちはつの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春ゆかむとす

病む我をなぐさめがちに開きたる牡丹の花を見ればかなしも

世の中は常なきものと我が愛づる山吹の花ちりにけるかも

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪に畫けるかも

夕顔の棚つくらんとおもへども秋まちがてぬ我がいのちかも

くれなゐの薔薇ふゝみぬ我が病いやまさるべき時のしるしに

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽つみし昔おもほゆ

若松の芽だちのみどり長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

○

歌言葉は、自から出て來るのであるが、後で吟味すると、古歌から學んだり周圍の歌から模倣したりいろいろである。餘りひとへに盗むのは最も下手である。又さうして古歌にのみ倣して居ても其れは駄目だ。これは如何といへば、心も、魂なき贋ものの歌になつてしまふのである。こゝに於て、西洋人が謂つた『紅血流通の言葉』といふことが大切な意味を有つて來る。縦しんば言葉を古歌に學ぶとも、自らの血を通はせよといふことが大切だといふ意味である。僕は以下に於て、古歌から影響を受けた言葉の例を少しく拾つて見ようとおもふ。

家のうちに風は吹かねどことわりに争ひかねて梅の散るかも　竹の里人

忍ぶべきならひと思ふことわりに過ぎて戀しき昔なりけり　新後撰集

しぐれの雨間なくし降れば槇の葉も争ひかねていろづきにけり　萬葉集

白露にあらそひかねて咲ける萩ちらば惜しけむ雨な降りそね　萬葉集

斯う竝べて來ると、竹の里人の作は如何にも萬葉集と新後撰集から來てゐるやうであるが、その實は萬葉集の『爭ひかねて』に作者自身の『ことわりに』を附けたのである。そして作者の新しい句法で、萬葉より脱出でたと思つたのであらう。

秋の夜のほがらほがらと天のはら照る月かげに雁なき渡る
賀茂眞淵

東雲のほがらほがらと明けゆけば己がきぬぎぬなるぞ悲しき
古今集

これなどは眞淵は矢張り古今集の歌から取つたのであるが、その言葉はすつかり眞淵のものになつて居る。眞淵の歌はたゞ調高くと狙つて稍滑かになつてしまつたが、やはり眞淵流のところがある。自力でこれまでの萬葉調になるにはなかなかである。

川上の根白高萱あやにあやにさ寢さ寢てこそことに出にしか
萬葉集

河づらの螢のかげにあらはれて木葉もしろし根白たかかや
香川景樹

みづゆけば根白高萱かやむらは濡れつつ螢を縦しむるところ
齋藤茂吉

僕のは萬葉集の言葉から來てゐる。そして景樹の作は知らずにゐたが、このごろ偶然景樹の作に此の語のあるのを見つけた。

序にいふが、景樹は『と思ひけるかな』といふやうな結句を使ひそれが餘程好きであつたと見えて幾つも幾つも使つてゐる。『心ありとも思ひけるかな』『かへるかへると思ひけるかな』『なかぬ年かと思ひけるかな』『年のくれとも思ひけるかな』『根のみ長しと思ひけるかな』『星のうつると思ひけるかな』『山に住めばと思ひけるかな』などなかなか多い。僕ははじめ此句は景樹が創めたやうに思ひ、景樹の爲めの『主ある句』と思つてゐたが、

神山は松のふた葉もひくものを松のみともおもひけるかな
景樹

日のいるは紅にこそ似たりけれあかねさすとも思ひけるかな
金葉集

駒にこそ任せたりけれ綾なくも心のくるとおもひけるかな
後撰集

斯くのごとくになつてゐる。然し此の句は景樹に適してゐたと見えて餘程自由に使つてゐる。即ち、景樹のものになつてゐるのである。こゝで思ひ出したが、景樹は前出の新後撰集の歌の影響を受けて『ことわりに過ぎても寒し長月の有明の月に霜やおくらむ』といふ歌をも作つてゐる。

○

第四　歌の變遷。流派其他

長い年月のうちに短歌も幾たびか變遷した。その變遷の跡を

[illegible]べこいた一[illegible]足」[illegible]に云はねばならぬ。萬葉集から古今集までの歌の變遷の跡を見るに、だんだん生氣が薄くなつて行つてゐる。これは漸々が實相に觀入することなしに、古歌に賴り粉本に賴つた爲めである。自然流露の根本を疎かにして、技巧末に執してその細部のところで競争をしてゐたがためである。作者も可なり居り、作歌を奬勵し、上手になれば共に酬ゆる名譽をも得て居つて、斯くの如く衰へて行つたのは、先づ先づ氣運と云ふべきであらうか。萬葉時代は實に不思議な程さかんな氣運を有してゐたのであるが、多くの場合には、萬人盡く優秀な藝術が分かるといふのではない。萬人の大部分はいゝ加減のところを歡迎してゐるのである。和歌の變遷の跡を見れば此の關係が實に能く分かる。このやうな場合に偉大な天の邪鬼の出ないかぎり依然として低いところに安住してしまふのである。これは實に明快な道理だ。

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春たつらしも　萬葉集

袖ひぢて結びし水の氷れるを春たつけふの風やとくらむ　古今集

春立つと聞きつるからに春日山消えあへぬ雪の花と見ゆらむ　後撰集

春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみて今朝は見ゆらむ　拾遺集

いかに寝て起くる朝にいふことぞ昨日を去年と今日を今年と　後拾遺集

春立ちて梢に消えぬ白雪はまだきに咲ける花かとぞ見る　金葉集

氷りゐし志賀の唐崎打とけて小波よする春かぜぞ吹く　詞花集

春のくるあしたの原を見わたせば霞も今日ぞ立はじめける　千載集

ほのぼのと春こそ空に來にけらし天の香具山かすみ棚びく　新古今集

新古今集時代には又別種の特色が發達したが、これがやはり衰運に向ふ序幕であつたのである。けれども萬葉・古今・新古今は日本の三つの大切な歌集で、革新の何のと云つても、いざとなれば此の三つの歌集を目當としたのである。

○

徳川に入つて眞淵が萬葉調の歌をうたひあげたのは、實に大河の相を以て謂ふべきである。けれどもその源流には[illegible]たりか

の先進が居たことを忘却せぬがよい。和歌史家は是等の關係を調べて吳れてゐるから就いて見むことを望む。眞淵は多くの門人を得て其處に一つの大きな流を形づくつた。その流に對して稍おくれて小澤芦庵、香川景樹がゐる。桂園の筋はまた一つの流をなして明治に及んでゐる。このへんの事も和歌史に書いてある。

明治三十年明治三十一年の交、國力緊張の時期を境として和歌革新の烽火があがつた。新派和歌と唱ふるものが即ちそれである。その運動が繼續して現今の歌壇に及んでゐる。その前にぽつりぽつりと優れた歌人がゐるが、革新の運動に參加したものは、落合直文の淺香社、與謝野鐵幹の新詩社、佐佐木信綱の竹柏會、正岡子規(竹の里人)の根岸短歌會、久保猪之吉・服部躬治・尾上柴舟等の雷會、八杉貞利等の若菜會であつた。それらの團體を中心として優れた作家が輩出した。そして現在の大正歌壇に及んでゐる。

初期の雜誌「明星」に一條成美の畫いた、『新派歌人の花見』といふ漫畫があつた。頭に奈良朝あたりの冠をかむり袴を着、西洋服のづぼんを穿き、裸足で手に寫眞機を持つてゐるのは根岸短歌會をあらはしてゐた。朝鮮の笠をかぶり眼鏡をかけ酒樽を持つて虎に乘つてゐるのは新詩社をあらはしてゐる。絹帽をかぶり黑の紋付の羽織を着、着ながしで駒下駄を穿いてゐるのは竹柏會である。角帽かぶり洋服着た大學生が雷神の太鼓をかついでゐるのは雷會である。擊劍の仕度をして竹刀をかついでゐるのは若菜會である。かういふ漫畫も今にして想起すれば興味が湧いて來て盡くることを知らない。

○

藝術に流派といふものはあるか無いか。そんなものは無いといふ人もある。それからいろいろ分類して流派を記述してゐる人もある。これは立場が違ふためで、作者の立場から看れば一家一流に歸してしまふ。けれども氣の合つた友が集り、同じやうな考を持つた人々が同じ師匠に就いて爲事をしてゐると、おのづからそこに流派が出來る。また之を流派と謂つても毫も不見識ではない。

僕おもふに、さういふ流派は旗幟の鮮明なほどおもしろい。さも無くんば流派の存在が極めて薄くなつて來るので、例へば、甲の師匠に入門し、其處に席をおいて、平然として乙の師匠の眞似をしてゐるごときは、旗幟が鮮明だとは謂へぬ。流派の前に斯くの如く朦朧たる行爲をするものは、多くは獨創家ではなくて模倣家である。强者ではなくて弱者である。

流派を何にとつて、[illegible]は或る者たちにとつては好いに相違ない。けれども何も自ら作するところなにする心理にはないから、云ひたければぐんぐん云ふが好い。それがやがて作家としての行くべき道でもあるのである。たゞ無意味に流派を笠に着るのは下等であるが、さういふ講者は勘定に入れずともいいであらう。

後世から見て江戸派と桂園派との論戰のごときも矢張り興味がある。また、明治になつてから、海上胤平が居つて、當時の主潮流をなしてゐた作家の歌を評して、「東京大家十四家集評論」いふ書物を出したことがある。そのなかに、「大家とあるは大きなる家に住人をいへるにや。歌をたくみによめる人をさしていへるにや。歌集にかゝる名つけたる例きかねば心得がたし」などといふ文章がある。つまり冷笑したのである。これなども聖人が見れば、以つて醜いとするだらうが、僕なんかが見れば中々面白いと感ずる。程經て鈴木弘恭が、「東京大家十四家集評論辯」といふ書物を書いて、胤平の此文章に對つて、「こは此集の作者たちを嘲りいへる戯れ言なることとしるければ、まめだちて辯を費やすまでもあらず。此大家とあるを大きなる家にすむ人をいへるにやなど云はんは、評論のすり卷に海上胤平大人編輯とあるを見て、胤平といふ人はいかばかり大きなる人にかといふことになつて[illegible]ここにが[illegible]などにはなかなか面白い。

猶存山吹。隔るとて垣ねを[illegible]こえつらむ[illegible]みだれたり

山吹のはな。

此歌を胤平が評して、「歌のさま拙みやびにいふべきふしもやありなむ。垣ねのね文字あまれり。犬か盗人のこえたらんにはさこそあらめ」と云つてゐる。弘恭これを辯じて、「垣ねのね文字あまれり。犬か盗人のこえたらんにはさこそあらめといへる、論者はおしはかるに、此論者は垣根といふことを文字になづみて垣の根とや心得たるらん。垣ねのねは添へていふ詞にて、屋根の根におなじ。岩ね・岸ね・島ね・羽ねなどの類みなしかり。古へは物の名にねてふ言をそへて云へる例多し。物知らぬにも程こそあれ。かばかりの事だに知らで人の讀める歌に口入るゝはかへすがへすも疑はしきたる論者なりかし」

これなども僕にはなかなか面白い。互に論じ合つて双方に好い點があるが、後世の僕らから看れば、この歌のごとき墮落した歌には、やはり、「犬か盗人のこえたらむにはさこそあらめ」が利いてゐるのである。論戰のおもしろみは其處にある。

第五　短歌の將來其の他

○

今の歌壇には、先輩にも友人にも優秀な作家がなかなか多いから、今の歌壇は歴史的に觀て實に盛んな時代と謂はなければならぬ。そして一見すれば今の歌壇は何だか一色にぼかされた樣であるが、底には何かが既に動いてゐる樣な氣がしてならない。けれども動いてゐるものは常に『心はなほき一つごころ』の純粹境でなければならぬ。短歌の姿はカメレオンのやうに常に變色するものではない。變色しても根本が下等では駄目で、それは飽き易い躁的凡俗に迎合されるに過ぎないものである。短歌の究竟地は步兵の如くに、步むもののみの到達し得べき境地である。そして將來の短歌は、かかる步行人が實物を以て證據だてて與れるべき筈のものであるから、その實物がどんな歌となつて現はれるかが、豫想することが出來ない。要するに偉い作者が出現すればいゝといふことになる。

○

歌つくりに主義が要るか。それは主義を唱道したつてかまはない。時には心の据ゑ方として、心の覺悟として主義の必要なことが幾らもある。鴎外先生などは、『藝術に主義といふものは本來無いと思ふ。藝術その物が一の大なる主義である。それを傍から見て、個々別々の主義があるやうに思ふに過ぎない。』と云つて居られるが、もともと作者は作の爲めに勢力を使つてしまつて論を立てることが得手でない。そこでこれまでも主義の名付親は多くは學者批評家の徒であつた。併し作者自身がどしどしさういふ主義を立てられゝば立ててもいゝと思ふ。立體派であらうが、表現派であらうが、乃至ダダイズムス、意志派、さういふ主義が歌壇にあつてもかまはない。たゞ短歌は短い形式のものであるからさういふ主義が旨く表れないといふ不便がある。それを承知の上に種々やつてみるのも面白いであらう。併し主義は何であつても偉い作者が出なければ駄目だ。

○

誰でも新しい短歌、將來の短歌といふことを思ふが、さて其の新しい短歌は、古の歌に比して立優つてゐるか否か、それを時に念つて見なければならぬではないか。

池のべの松の末葉に降る雪は五百重ふりしけ明日さへも見む　萬葉卷九

庭なかの松の葉におく白露の今か落ちんと見れども落ちず　竹の里人

萬葉集の歌もなかなか佳作であるが、竹の里人の作にもつと細かいところが観てゐて、然かも気品がちつとも下つてゐない。特に竹の里人の作は近代人の鋭い感覚を経来つたもので、かういふ方面では萬葉集より一歩を出たと謂つてよいとおもふ。この方面は俳句で著しい発達を遂げたから、それからの悟入によつて、萬葉集以上に出たのである。

ゆふされば野べの秋萩うらわかみ露に枯れつゝ秋まちがたし　萬葉巻十

秋立つと未だいはなくに我宿の合歓木はしどろに老いにけるかも　伊藤左千夫

庭の木のさびれ合歓木の葉しひたぐる風ものものし荒れ来るらむか　同人

このゆふべ合歓木のされ葉に蜘蛛の子の巣がくもあわれ秋さびにけり　同人

この伊藤左千夫の作三首は竹の里人の傳統を經て細かに確かに捉へることを成就したほかに、左千夫・流の抒情味を漲らせてゐる。ここまで行くと同じ萬葉調でも、もう左千夫調になつてしまつて居る。良寛の歌の調べは矢張り既にさうである。問題にいふ。萬葉の此の歌の調方は、「露にしをれて秋待ちがてぬ」にもなつてゐる。本居宣長は枯字が沽字の誤寫であつて、『露にぬれつゝ』なるむと云つたと感慨に[illegible]新しく純化した試が、古い歌に依つて[illegible]。[illegible]て堕落して行つた歴史はすでに上に述ぶるところがあつた。新しい歌に就いて論ずるものは常にこの理法を知らなければならぬ。けれども作者としては飽くまで『自己』に執するより途はないのである。かくしてなほ古人に劣らば、かうべを俯して慚愧すべきである。それのみである。

○

短歌は三十一音の詩で、その形態がいかにも小さい。けれどもさういふ小さいものをも悧んぜずに、渾身の力を打込んでゐるところに、歌つくりの野呂間さと而して取柄がある。これは俳人でも同じである。

行春を近江の人と惜みける　芭蕉

あたりでも能く能く味へると、よい短篇小説を読んだ時と同じやうな気持を起させる。また作者にとつては、かういふ小さい形態の詩を作つても、時には如何にも満足して、旨さうに飯を食ふこともあるのである。

何だ三十一文字かと云ふかも知れんが、さういふ人が加へれば、肉がおのづから殖ふるのである。肉が殖へてつひに無くな

つてしまふのである。

高光る日のかがやきの豐榮にわが大王の御世は興れり

伊藤左千夫

この心の緊張あつて、國は興るのである。三十一文字の如きものをいぢつてゐることを不名譽の如くに思ひ、强ひて全力を濺がないやうにいふ者もゐる。石川啄木なども、歌は悲しき玩具に過ぎない。全力を濺ぐなどの愚はせないといふやうなことを云つてゐた。然るに僕はいつぞや土岐哀果君のところで、啄木の歌稿を見せて貰つたことがある。その一つ一つの文字は丁寧を極めて、いかに啄木は作歌に骨折つてゐるかを思はしめた。作家としてさもあるべきことだ。歌は悲しき玩具に過ぎないなど云つたのは、書生かぶれしたに過ぎないのである。

米の泉なほ足らずけり歌をよみ文をつくりて賣り步りけども

橘曙覽

『米』は或はコメと讀むのであらうか。曙覽の此の歌はなかなか好い。この歌の方が、何だ三十一文字かと云つて、天の一方をにらんでゐるものよりも强い。さかんなる國は何ごとをも輕んぜないものと知れ。

僕は現代の作家の作物を對象として、縱橫に現代歌壇を論じようと欲したのであつたが、書物を燒いたので文獻を確かにすることが出來ない。そこで方向を替へて、辛うじて上の如き一文を草した。（大正十四年五月十七日夜半）

日本輓近詩潮の鳥瞰景

——日本近代新詩史の結語——

日夏耿之介

小引。大正十一年末、「日本近代詩の成立」、「日本近代詩の浪曼運動」、「日本近代詩の象徴思潮」と三回にわたつて連載した小研究の最終結論として大正改元以降凡そ六七年間の新詩壇主潮の起伏並びにその背景を素描して見ようと思ふ。最近の歴史に屬するが故、現今詩壇の作家評家と稱せられる者の中には種種な原因で殆ど齒ひするに足らぬ劣材迄大家中家の名を恣まにしてゐるやうな事實が存するため、明治詩史で試みた如き細部の詳叙、個人々々の評隲は之れを避け、日本輓近詩の主潮を形す諸傾向の概觀と批判とを試みるにとどめる。かの愚論劣作批評の限りなき細川を一一史家の忠實を以て報告し記述し批評せんことは、到底その迂愚に耐へないところであるから今までの叙述とは自ら其精神方法を異にしてゐること云ふまでもない。

現代文學の研究は、多くの世人その新と近とにより、容易に迂拙の作論の目につき易いところから、又、傭以下の鈍才が俗悪な批才を應用して不思議にも必要以上の位置を占めて恥ぢないやうなところから、しば〳〵その研究批判を愚か也として來て、顧ぬことをかへつて誇とするが如き慣習があるが、現在の文學は、すなはちやがて、當來の古典である。過去の作品とても、かつては所謂當流文學の一席を占めてゐたものである。同時代文學の批判は、畢竟、激しき流砂の間にわづかなる砂金を漁るやうな努力に等しいが、心をひるがへして考へると、古昔を培ふ今日の詩想に正當な批判を試みるとには、かの上代史乘を攻索取捨するに劣らぬ意義と價値とがある。古文献の埋きに隠れて先人の所見を祖述する事は、しば〳〵思ふに勝つて易いが血あり肉ある生物としての當代藝術を正視する事は思ふに勝つて難かしいものだ。早晩、我邦の大學に於ても、往年の如く現代國文學の講座が開かれて然かるべきであると思ふ。この拙文が斯る任に果して耐へるや否やは自ら危ぶむところである。

一　近代詩の第二誕生

こゝに日本晩近詩と假稱したのは何か。明治十五年「新體詩抄」發兌せられて以來、明治四十年代まで「新體詩」の名で呼ばれてゐたものが、漢詩の一般的沒落と七五、五七調等正格詩形の衰微と、而して、口語詩、自由詩形の發達とに伴れて、新體詩は新詩となり、更に單に詩とのみ稱せられるに到つたのであるが、大正改元この方六七年間の新詩壇に行はれた詩は悉く口語詩、自由詩形のみではない。七五、五七の正格詩形もあつた。しかも、昔の新體詩時代に較べて、その正格詩形を採るものも著しくその詩情表現の內容に於て異つた性向に變化して來て居る。因て、しばらく晩近詩と稱するものの中に一切の共等近代新詩形の作品を網羅しようと考へるのである。

その所謂晩近詩は、云ふまでもなく明治末期からの連續で、單なる改元のことだけで、別に內容上の截然たる區別が生じたのではない事勿論であるが、便宜上さきに、明治末期にて一段落を告げた關係から、更に便宜上、その後の一時期を一まとめにして論じ去らうと思ふのである。

新體詩側つてこの方、押しなべて今なほ草創時代に屬するものと見て差支へはないのであるが、一度起つた新詩形は明治末期までに發達しつくせるだけの進步をしてしまつた。その業績は蒲原有明の「有明集」(四十一年一月)薄田泣菫の「白羊宮」(三十九年五月)上田敏の「海潮音」(三十八年十月)を見て判明する。又、その餘響は北原白秋、三木露風その外の舊作を見て判明する。

晩近詩はこれを二方面から分類することが能きる。第一、詩形の方面から見れば、(一)文語自由詩形に則るもの。(二)文語正格詩形に則るもの。(三)口語自由詩形に則るもの。第二、詩想の方面から見れば、(一)所謂民主思想を謳はんと欲するもの。(二)超然高踏たるもの。而して第一類の(一)及び(二)に則るものは、多く第二類の(二)と同體であり、第一類(三)に則るものは、多く第二類(一)と同體である。本邦新詩史、口語詩の發生は遠く美妙等の昔にあらはれ、孤村、天弦の譯詩、柳虹、露風の習作、嘉香、御風らの試論にはじまることは先きに述べた。(「日本近代詩の象徵思潮」參照)現代文章としての言文一致體が同じく美妙らの提唱を機として二葉亭が「あひびき」の作品を生んだ明治二十年代初期の頃から次第に洗練を經て四十年代に及んでは小說は勿論日常文までも在來の雅文體を捨てゝ悉く皆この新文體に拠り、?!……——などの小道具を用ゐて妙な個所に新らしく、しかも、曲りくどい表現

[illegible]「[illegible]」や「[illegible]」の[illegible]て、風景、自然、青果らのとにかく自由な韻文體に到達するまでには、種々の問題や疑惑や困難や不自由やを經驗したのであるが、こゝに到れば同時代の文章は先づ凡そこの言語體と確定してしまつた。その確立にいたるまでに美妙ら先驅の呼號や新教育家の共鳴的普及や、遅蒔き乍ら明治時代の恒に一番低級な保守家であつた政治家政論家並の讃意も、一臂の力となつたことは云ふまでもないが、一代の文章に光と熱とを與へ、表現の自由性を明らかにした第一の卓効は、文學藝術にたづさはる文學者、特に小説家の上に歸さなければならない。たとへば、二葉亭が「あひびき」と「片ごひ」と「浮雲」とを讀んだものは、かれの凝り性な精神が、よく當代何人も表はし得ぬ言語體による優雅と典麗と纎美とフレクシビリティーとを立派に樹立しえた事の史價と本質價とに驚かずには居られないばかりか、今日の時代文章に比べても幾分の文語派の殘照は尚認められても、しかし乍ら、現代散文藝術家の到底あらはしえぬ微妙な表現法の美性を夙くも完成してゐた超時代的逸才に再度その驚嘆を繰返すことであらう。明治文章の發達は、二葉亭により劃期的進歩をとげたと斷じて不可ではない。散文に於けるこの成功を見て、詩人も亦その擔[illegible]も一段とまた幼稚であろ[illegible]。即ち、歐風の試作を、散文に於ける美妙文の効果時代とすれば、今日の口語詩は漸く紅葉時代の不熱を出ない。しかもまた詩林に一人の二葉亭は出てゐないのである。これは何故であるか。口語詩に音律的効果の尠いことはその一である。詩壇に人のないことはその二である。人の尠いのは多少の時期を待てば補はれることであるが、音律上の問題は根本の問題である。今その仔細にわたつて詳論する餘裕はないが、來るべき口語詩は必ずこの方面にいとせめて最小の缺陷を殘しつゝ、最大の効蹟をあげ得たものによつて一段の進歩をとげ得るであらう。

晩近詩は、かくの如く、再び草創時代に入つてゐるのであるが、かつて「新體詩抄」が心の老人に斥けられつゝ、青年の歡呼を受けたごとく、今日の詩も、心の老人に排せられつゝ、青年の欲求を受けてゐる。小説、戯曲、和歌、俳句、漢詩、新體詩等によつても如何にしても滿たされないあるものを晩近詩によつて滿たしたいと本能的に焦慮する青年少人が如何に夥しくあるか判らない。その青少らは、晩近詩が、遺憾なくその欲求をみたしてゐると思つてゐないばかりか、その自らの欲求が純

眞で熱烈であればあるだけ、晩近詩の低級と不純と拙劣とかた言過ぎることとに不滿不足を感じてゐる度合が强いのであるが、他の如何なる型式の文藝も到底滿たす能はざるものを、未來の晩近詩が滿たして與れるだらうといふことだけは一縷の懸念を抱き乍らも尙信じ、又は、信じようとしてゐるに相違ない。少くとも、その同胞たる短歌と俳句とが表はしえぬ何者かを、よくこの新詩が表はすであらうといふことは確信してゐるに相違ない。同じ韻文の埒内にあつて、散文と對立して獨自の特性を更に藝術的に發揮することのあるべき日を信じることは、凡そ些かにてもこの一類の藝術に眞摯な關心を置きえた人すべてが持つところのものである。晩近詩の價値が指す己が使命への一路は正しくこゝに横はつてゐる。

二　晩近詩推移の概觀

個々に就て見ればことごとく之れ所器の行列に過ぎないにしても、衆團的傾向として窺へば、其處に些か注目するに足る特性がないわけではない。さきに述べた如く近代象徵詩が幼稚ながら變則ながら移入せられて、紀季思潮の詩的開花が、頽廢詩體となり、享樂主義となつてそれが明治末期から大正初期まで引きつがれて來たのであるが、この時新らしく生じた所謂民衆派は、表面から見れば時勢の先驅であり、形式から考へれば偶像破壞者であり、新代の創造者であり、未來の一統者であらねばならぬし、又、在來の七五、五七等正格調の嚴正な支持者は、表面から見れば、時代の落伍者であり、形式から考へれば偶像盲拜者であり、舊時代の守持家であり、過去の遺物であらねばならぬし、更に又、超然派はその間に介在する漸進主義者であるやうに思はれ、輕率な讀者や、日和見黨の批評家などは氣早やにも早計にもそんな風に考へ、そんな風に書き記して些かも悔いないやうな態度を示した者が既に業にあらはれ出たのであつたが、若し文字を知り、日本語を讀み、文學を漁り藝術に心をいさゝかにても寄せる者が、事實上の實際作品の三四を親しく手にとつて公平な立場から虛心坦懷にその批評を試みたならば、右のごとき考へ方が實は非常な間違ひであつたことに必ず氣が附かずにはゐなかつたであらう。

然らば實際價に於ては如何の甲乙があつたのであるか。又如何の新舊があつたのであるか。論は自づとこの方面に入らねばならぬが、しばらく在るがまゝの大勢の分類法によつて一般改元以降六七年間の詩壇の分野を見ると、前さきに述べた如き第一類三種、第二類二種の種別を大體民衆派と超然派とに二大別しうる。この分野觀につき予はかつて次のごとく考へたこと

[illegible]つた。

詩史を見るとどうだ。明治四十三四年頃一時ぞくぞくと雨後の竹の子の様に詩集が出た事がある。いゝものは割合に少かつた。その頃の詩壇は有明泣菫對立の時代の末期であつたから當然此二人のエピゴーネンの詩集が多かつたのであるが、既に創作力を失つた此二詩人の影響を受けてそとから新しい力を掴んで起き上る詩人は極めて少かつた。その中で先づ優秀の成績を擧げたのが北原白秋であつた。つゞいて三木露風があつた。特にその當時の白秋の詩的天禀の卓抜は争はれなかつた。此二人が（他には餘りに詩人らしい詩人が少なかつたせいもあるが）それから後しばらく可なりよいものを出しつゞけて來た。その内に此二人にも亦頽廢期が來た。かういふ場合あせつても惰力のついた剩勢には到底勝たれない。比較的よいものを出して來た此二詩人が既に力盡きんとしたから一般詩壇は尚更寂しくなつた。詩集もぱつたり出なくなつた、詩の興味は青年社會から段々離れていつた。青年の激情のはけ口は、僅かに散文詩といふものにより、和歌、俳句により、又は、詩的な小說により辛じて滿たされてゐた。

が、それらのものがいつ迄も抒情詩そのものの使命を完全に代表することは出來ない。[illegible]抒情詩が欲しいのである。青年から云へば[illegible]表して唄つて呉れる詩人が欲しいのである。青年ならざる詩人から云へば、今迄の惰力でばかり動いてゐる、形式ばかり整つた、無氣力の詩に心の底からの感動がどうしても柒々と起らない、昔の有明、泣菫でもない、藤村、晩翠では尚更ない。眞に、あたらしい力と美とをあたらしいかたちに盛つた新詩が欲しいのである。

讀者の側でこんな要求が繰返されてゐる間に、詩人の側では、更に新らしい問題に接觸しなければならなかつた。

いつたい、當時迄の新詩壇といふものは、實側この方一種のロマンティシズムの生長史を續けたのに外ならぬ。グレイやテニスンが淵然譯された「新體詩抄」時代、外國のものなら何でもよいといふ「英米名家詩集」の頃、透谷や樗牛がバイロン（詩にマンフレッド風の詩劇）に感化を得た時代、泣菫がキーツに、有明がロゼテイに當來の性命を發見しようと努めたとき、上田敏の佛蘭西象徴主義並にパルナシャンの詩の移植が成功して著しく詩壇を風靡した時期、片山孤村、[illegible]の紹介が盛んに行はれた時分、それから文壇本部に於ける自然派文學にかはる享樂主義的傾向の影響を受けて都會情調と呼ば

感能派と云はれる詩風が時花つた時代と斯う次第〳〵に見渡して來ると、その間を一貫して流れる主潮は極廣義の意味のロマンティシズムの精神である。集團生活（社會國家生活）を殆ど無視して個人內心の觀想生活にのみ强く、花やかに空想的に生きようとする意志に出立して、それから樣々の傾向に感化された單純なる複雜性のある詩が世に送り出された。日常道德をことさらに蔑視する。日常生活の諸條件を顧慮しない。現實の諸相に重大な普遍的意義を認めない。更に何よりの關心事は、月夜のもとに夢見る薔薇の花の世界に入つて往つてわが個人的情緖生活を飽く迄も豐かに美しく擴充させようとのみ專念するにある多情多恨である。勿論人によつて、個性感情の歷史が違ふから對照とする世界にも差異はあるのだが、右の樣な精神が誰れでも、個性の何處かに根强くわだかまつてゐて、それからさまざまの異花を咲かせたまでである。西洋の一時期一運動の樣な步調を揃へ兜の星飾りを一にして劃一的のムーヴメントは我邦には殆どなかつたから、ある者はわが空想の對象を西洋のルネイサンスに求め、ある者は日本王朝に求め、ある者は唐山淸談者流の老莊思想に求め、ある者は大乘敎義の寂閑氣にも求めたのであるから、各據る處も異れば、志す方も差ひ、從つて獲る作品も誠に千種萬樣であつたが、大體に西洋の文學史的ロマンティシズムの諸運動の根本精神の特徵に類似する處のあつた事は爭はれない。それで、パルナシヤンの感化を受けて不感無覺の大乘的寂靜と自然派的感照を尊ぶ者も時としてはその心臟の片隅に古風な情緖主義の小曲を秘めたり、あるひは、象徵派の頹唐的情趣に走つたりする矛盾を平氣でやつてゐた者が多いので、自覺した鮮明な旗幟の個性あるプリンシプルに生きて一個のドグマを支持し且つ主張したやうな詩人は極めて少ない。それだけ、獨斷敎義の毒氣にはかからなかつたが、個性のかげの薄い詩人が前後三十年の日本詩壇に一弛一張をくり返し生息しつづけたわけである。

このやうな傳說のある詩壇が、さきに述べたやうな白秋露風の固定化を機として全く頹れかゝつて來たのである。この頹勢を如何に挽回したらよいか。いつ如何なる時代にも必ず澤山存在する甘つたるい通俗詩を書いて、蟻のやうに集つて來る靑年士女を喜ばせれば上つ調子の名聲は得られやうが、そんな事では眞に內心の滿足は出來ない。處で一方の廣い思想界はどんな模樣に展開してゐたか。明治の「開化」が、「高等」の方に進んでから佛蘭西の開化が渡り、英國の文明が押しよせ、獨逸の科學が輸入されたが、十九世紀的科學精神が日本民族の新らしく目ざめた心に植ゑつけられるには明治時代を一杯に使つても何足ら

なかつた。それでも哲學の方に著しく進步をし、文學の方に於いて發展したのは日本人の科學化が著しく、普遍化されて來た證據にはあつたけれど、傳來の空想的[illegible]主義思想が頑固にまだ殘つてゐるし、反科學的妄想も行はれてゐて、明治も末期にたつて漸く日本人は十九世紀人に進步した。即ち前世紀半ばから世紀末を經て今世紀におよぶ六十年間の西洋思想が完全に輸入され、あつかはれるやうになつたのも漸つとそのころである。

詩壇が死市のやうに行きつまつてゐた時、社會の方面には早くも活潑な偶像破壞の聲がひゞき初めた。階級意識の吟味に初まり全權法權の再否を經て、遠くユートピヤに接續する新社會運動がそれだ。文壇の方面では其昔の德川戯作家の夢を醒めた硯友社の沒落から、宗教的自覺現象を經驗して自然派の活動となり享樂的頽廢文學の流行となり轉じてヒューマニタリアニズムの提唱が社會的にデモクラットの運動と相伍して今日に至つたのであるが、今の詩壇も自然派文學の影響にこそ餘り性質上見られなかつたが、その後は文壇と步調を略一つにして來てその行きつきつてゐたのは丁度享樂文學からヒューマニタリヤン文學に推移する過渡期にあつた。

その時分は、白秋も露風も詩人として思想的破産者となつて只狼狽周章してゐたにすぎぬのでその外の者も勿論同じである。詩壇はこの行きつまりから[illegible]に始めねばならぬし、詩人には[illegible]なければならぬ。以前にも顧みなかつた集團的社會生活といふものが個人生活の背景をなし、個人の幸福と運命とを左右するものである以上、社會との「個人」に自覺したい意向に達したものは、社會對個人關係の檢討から個人の更改と同時に社會の改造を必至とせずにゐられぬ。專制政治が民本政治となり、人間性の普遍化が呼ばれ、人類愛の高調に及ぶ順序の當然はいふ迄もない。

自我覺醒の曙光は既に明治二十六七年の文學界運動特に其首道詩人北村透谷の思想藝術に看取せられるが、今は次節に、變化して社會の覺醒から改造に移り心の内外の再築が初まらねばならぬ。常識の情緒よりは「獨知しうる」官能に對照を求め、而も同時に耽美の無道德世界が、道義的鑑調と變つて既成宗教にたよらざる新宗教精神が勃興する萌芽があつた。[illegible]古いロマンティックの自我觀社會觀世界觀がくづれてあたらしい何ものかにはしらうとする。それが新らしいリヤリズム精神であるか、あたらしいロマンティシズム精神であるかはしばらく措き、一般社會の推移につれて詩壇も面目を一新する必要にせまられてゐたことは事實である。

當時は詩を作る者實に稀少であつて、たとへば、西條八十は

牙籌に隱れ、堀口大學は異邦に情痴を漁り、生田春月歌はず、竹友藻風書堆裡に埃となり、出野青煙師を病み、今井白楊三富朽葉變に水死し佐藤春夫は散文に奔り富田碎花風の如くに去來するのみ、木下杢太郎考古に耽り茅野蕭々育英に韜晦し服部嘉香壇を退き加藤介春西捶に下り、高村光太郎彫塑に轉り、福田夕咲飛州に去り、人見東明水野葉舟亦詩林を遁れ、詩人のかげ寥々枯燥して秋の葉の如くであつた。尤も右の內でも、光太郎・介春、碎花は時に精進の果を發表する事をたえて忘れなかつたものである。室生犀星は大正四年十月一日發行雜誌「感情」に現代詩人號を出し、其卷尾に、『北原、三木、高村、日夏、山村、加藤、川路、福士、白鳥、水野の十氏から詩を願つて現代詩人號として、これだけの顏揃ひになつたことは恐らく今度が始めてである』と書いてゐる。同年十一月の『文章世界』、詩壇九人集には三木、白鳥、日夏、富田、兒玉花外、加藤、室生、山村、福士の九人を收めてある。六年十一月柳虹の「伴奏」增刊日本現代詩選には以上二雜誌の顏ぶれを收めその中に新らしく茅野蕭々と堀口大學と西條八十と福田正夫とを加へてある。當時專ら重に詩を書いてゐたものは右の內の福士幸次郎、山村暮鳥、川路柳虹、室生犀星、日夏耿之介、白鳥省吾等の外に早くから書いてゐたが後れて活動を開始した西條、堀口、それからさきに書いた通り量は少なかつたが勞作を忘れなかつた碎花、介春、光太郎に別に柳澤健、萩原朔太郎があり、評家としては福士、柳澤、柳虹、萩原、山宮允が活動し特に萩原の「露風埋葬論」、柳澤の「白秋埋沒說」はある意味で雙絕の評があつた。百田宗治、佐藤惣之助、千家元麿、福田正夫、鱸瀨春彥、矢野峰人その他の活動はその後の事である。

白秋露風二人の和勢はさきに說いたが、右の新進と比較して出來榮えに於ては當時餘り大差がなかつた。只一方は下り坂に在り一方はこれから育つ者であるから意氣の差には甚しいものがあつた。今にして顧ると先進の二人といひ後進の諸詩人といひ、これらは等しなみに大きな完成道程の途上に在るもので、既に自ら大家に任じて驕慢人に遜らなかつたならば前途は忽ち蹉躓の闇であり、又、新進の客氣に驅られて反省思念を忘れたならば前車の轍を直前に踏まねばならぬ。こゝに於て、以上の詩人輩悉く一括してこれを皆な未成品の類と見なし、彼等の今迄の業績とても各の歷史のほんの小さい一時期を劃するものではあるが、文學史上の劃期作品ではないと見るのが正しい文學史家の立場からの觀察だ。

更に轉じて用語の問題を顧る。

詩境に口語體の創成は俗謠や正格調に則つた窮屈なもので

[illegible]八[illegible]した中にアルノー・ホルツの口語詩を發表し、更に明治四十年及び四十一年初めて川路柳虹の試作あり、其後四十二年五月相馬御風、三木露風の習作があり、此頃より早文、帝文誌上口語詩に就ての是非の批評が現れて、やがて次第に創作、批評ともに盛んになつたが、ホルツの詩が先きに見本となつて附き纏ふてゐるのか、その種の詩の類似作のみが出て、而もそれが一向にうまくないものが多かつたのは草創時代とて止むを得ぬ仕儀ではあるが、作家の天禀が乏しく、かてて加へてその努力が足らなかつたと云はれても仕方がない。白秋の小曲には口語をとつたものもあり、在來の型に則つて作つたものであるから純な自由詩ではなかつたが技巧の冴えは十分にあつた。露風は口語詩では餘りよい業績をあげてゐない。岩野泡鳴の口語的諸作は頭の中で概念的に詩想をこねまはしておいてそれを無雜作に表白するので概して拙い作が多かつた。只この人の詩壇展開上の諸努力は決して忘るまじき偉功である。要するに、初期の口語詩は、迚も文語詩を全廢してこれに取つて替る程の詩的本質價はなかつた。が、われらの日常生活に接近する口語詩が他日國民詩謠となるべく進歩の道を忙いだ事には云ふ迄もなく當然の理由が

[illegible]向ふ氣に、只、面白くないから自分の好尚を極めのみ[illegible]は中中許さなかつた。「藤村詩集」が依然として一般に讀まれ、「有明集」「白羊宮」「海潮音」が中年の文學者並に讀者階級に依然として當時尚讀まれ、現今尚讀まれるのもわけのないことではない。これらの古い詩集は、形は古くともその內容には永遠にわれらを動かす眞實性があつたから、詩にくらうとな、感情的にはやゝもすれば不正直な、評家詩人等は既に動かすに足りなくとも、幼稚乍ら感情に正直な一般讀者のある階級を依然としてその當時は勿論今も尚動かしてゐるのは當然の事だ。この現象は白秋露風の初期の詩集にもあてはまる事である。

さて、時代の推移と共に、文壇の變轉と共に勃興したデモクラテイックな詩はその後非常な勢力で傳播した。この派に屬する批評家は、この類の詩でなければ詩でないと公言した。文語詩は絶對存在の價なしとも宣言した。民衆愛と階級鬪爭と勞働者觀と人道派的傷感とが少しでも歌ひ込まれてゐないと詩でないとさへ揚言した。この當時この派の評家、詩人の無知無反省幼稚輕卒の論議は只思慮ある識者の嘲笑と反感とを買つたにとどまるのであるが、かれらは右の要素が假令ば拙くとも、用語日で

も、いゝかげんにでも、詩になつてゐなくとも、只歌ひ込まれてありさへすれば、「それでよし」と唱和した。自分に問題のない人間、個性のない青年、氣弱な若者、雷動的な浮薄な人々は時代の流行に我おくれじとわつと云つて眞黒になつて走つていつた。それらの民衆派の詩に幾何の末世に殘る佳作があつたかと云ふと極めて少かつた。大部分惡詩であり拙詩であり非詩であつた。わつと云つて集つた人々も、扨冷靜に返つて考へて見ると餘りに面白くない拙詩の夥しいのに不滿を感じた。何故に佳作が生れなかつたか。主張する處は西洋の同じ傾向を眞似てはあつたが作家によい人が殆どゐなかつたからである。殆どない拙作の中で僅かに燦然と光つてゐた佳作は直接この派の作者の高調する社會思想を露骨に歌ふ流儀の作中にはなくして、極めて廣い意味の人類愛に卽した詩感を歌ふものであつた。(こゝに一例をとれば高村光太郎の詩の中の少數のものの如きがそれだ、大部分は前に云ふ惡詩拙詩に非ずんば非詩であつた。散文を出鱈目に切り離つて敢てこれを詩と稱したまやかしもののストツク・ポエトリであつた。)それならば此傾向以外の諸傾向の人々の詩はどうであつたか、こゝにも澤山惡詩と非詩とがあつた。傳統に殺された言葉の殘骸があり、云ひ外らしがあり、何んでもない事を神秘めかして飾つて云つた言葉の虚僞があつた。ここに一例をとれば、三木露風の後期の作の中のあるものの如がそれだ。客氣に任せて出鱈目を云つた人々にもやがて年齡が來た。思慮も來た。非詩を作る者惡詩に止まり拙詩に耐へ稍佳なるものをもたまには作りうる樣になつた。それが現狀だ。凡ての詩人が完成の道途にある。精進努力の最中にある。心から謙虚な心持と燃ゆる樣な熱衷とを抱く人々のみが次第に進步する。雜誌記者が出鱈目に命じてくれた「大家先生」の名稱に安んじる輩は段々衰へてやがて詩壇から滅びてゆく。そして又厄介な客氣と衒氣と茶氣とにみちた青年詩人がその名と作と良心とを賣るに忙しく入り亂れ入り亂れてパルナツスの大廣場で自己廣告の最中だ。鼻持ちのならぬ臭さだ。かれらに若輩の故知を小賢かしく學んでゐるのだ。同じい先輩讀者の故知を學んで幼稚な讀者がこれに釣られて走つてゆく。慘らしい滑稽だ。これら現代の詩人及び讀者を引つくるめて、譬へば玩具箱を引つくり返したセルロイド人形の百鬼夜行だ。(拙著『詩壇の散步』五一頁―六三頁「最近詩壇をどう觀るか」大正十一年三月「新潮」所載文參照。)

この一文は、主として筆者が作家としての立場から、實際作品の是非感に直面して露骨に大正初期詩壇の趨勢を直抒したものであるから、筆者と在來の關係上異種派に屬するもの、味

せらる[illegible]であつて、[illegible]の立場を[illegible]に守らんとする文[illegible]などの上から文藝として之れを見る時は、如何にも文情に屈せた結果のごとくにも感ぜられる場合があるかも知れないが、これを更に詳細に觀察して、世間流行の分類法のみに穴勝ち從はず、本質の詩情の傾向に依つて絕對的分類法の類を行ふことが出來たとして、純不純の別を明らかにし例證を援引して公正の立場から抱月諸子の差異を瞭確にして見たとしても、畢竟するに、この結論を外れるわけにはゆくまいと考へる。

由來、本邦近代文學に於ける評家の位置は、高いが如くにしてかへつて低かつたのは、借物の思想を土台にして西洋文學史上の現代の事實に當てはめた漠然たる（外相だけは學匠ぶみた、その實内容は極めて空疎な）分類を行ふて、粗雜極まる概觀を恣まにしたり、たま／＼個々の作を評しても創作者の缺點を鋭くゑぐり出すやうな、コツをつかんだ批判が少くて、在つても無くても文壇の大勢にも個人作者の運命にも一向關係のないやうな生ぬるい論議を試るにすぎなかつた故、作家側からは冷笑をもて迎へられ、讀者には何らの感興をも與へなかつたので、時代の新聲として先驅したり、紛糾をきはめてゐた過去の文業を整理して、まがひ物とまさ物とを判別し、正しい文學史的結[illegible]くに、時い文壇の[illegible]になることを許さなかつたのであつた。

高山樗牛は三十年代の青年の血を湧かした評家の随一であつた。推理の力と熱情の炎とを兼ね備へ、文學の一念さへ強かつたから、日本主義、ニイチエ主義、日蓮主義とその抱く思想は年齢とともに變化したが、その一々が眞心から發し熱情を注いでゐたから夥しい渇仰者を獲た事實は當然であらう。が、彼が實際の作品、詩歌や小說や戯曲や繪畫やに就て批評をなしたあとを調べて見るとその點に冷く粗雜な鑑賞と概念的にして誇大的たる見方とに終始して彼の評價を作以上にも下げなければならぬ種の氣の毒な缺陷を暴露してゐる。一例を上げたならば、彼が藤村の詩を「[illegible]派」としてさげすんだ鑑賞の粗笨と、思想的、哲學的として推賞した晩翠の作を曲解した感受性の鈍麻とがそれである。評家として比較的高い値に在つた彼でもこんな程度である。島村抱月は推理かね備へた名評家として、實際作品の詳密な批判に於ては樗牛よりもむしろ卓れてゐたが、それでも彼が自然派の主張に熱なるあまりに當代詩に就て發表した感想など唯一の意見には一の卓見とともに又救ひがたき謬見もあつた（後章參照。）綱島梁川も前記二人と鼎足の形にゐる思索力と之れに加ふるに詩人的の一味の溫情を有したけれど（病氣が貶つ

てからは又特別な性情に變化してゐるが）泣菫や有明やに補へた同情的評言を見れば大體の傾向に就てこれを味解し、これに同感するの餘裕だけはあつたけれど、更に進んで詩作の纎細な部分に鋭い眼光を向けてその詩情の實體を檢し、更にその行くべき路を指示す程の見識はなかつた。

評家の多くは優秀な處で右の點に止まつたのである。今後、われらの冀ふ評家は必ず彼等以上の素質の所有者たるを要する。今後、吾等の冀ふ批評も必ず斯の條件の具備を基本としたい。

三　詩歌の現實主義

日露戰爭前後自然主義の文學を迎へて、時あつて、評家をして日本は露西亞に戰爭で勝つて文學で敗けたとさへ云はしめたが、その自然派藝術も人生觀照の態度に於て、ある一部の者だけは、兎に角眞摯であり、藝術創造の心度に於て、兎に角、篤實ではあつたが、他の文化施設とひとしく何等劃期的の大作逸品を生むに及ばなかつたのは、一に時の問題であつて、同時に又人の問題であつた。逸材の卵は富川町の陋巷にも産れ出てゐた事であらうし、天才の萌芽は北海の磽确地にも芽生へてゐたではあらうが、時代はこれを母胎のごとく喫め、保姆のごとく育む準備を欠いてゐた。寧にして頑迷な保守の空氣に倣ひ侍り、無理解な衆愚の腕によつて捥ぎとられ、過度文明のバラック建ての空地の片かげ深く亡びてしまつたに相違ない。これは何處にもある現象である。

自然派が現實觀に徹底しようとした機構は、前代の硯友社文學が、只細部の機械的詳叙に堕つて寫實の本義に盲目であり、趣味に遊ぶの惰勢的形式を事として、技藝の精神に味到する底力がなかつた状態にあき足らない青年の反抗運動の氣運の勃發に因つて與へられたのであるが、その背景には、戰後國力の膨脹に伴ふ活潑な政治的自覺、經濟的擴張、教育の普遍などに基く新文化形成の必至の氣勢に動かされた創造生活、肯定思想への若き憧憬が蟠つてをり、因襲への反抗と、習慣への反感と、古き家庭道德への新批判と、又、既成社會よりの壓迫に因る憤激と哀泣と狂氣と棄て鉢と忍從とが入り交り入り交り、その交錯の間から現實を凝視するものゝ哀感、現實を暴露するものゝ悲哀、而して、現實を過重せんと焦心するものの無解決觀が誕生した。かつて一度文學史家の立場から自然主義の文學的釋義を試みた島村抱月は人生觀上の自然主義を論じるに及んでは、

「されば現下の私は一定の人生觀を立てるに堪へない。今はむしろ疑惑不定の有りのまゝを懺悔するに適してゐる。そこまでが眞實であつて其の先は造り物になる恐がある。而して此の私

を松ずにして[illegible]見出すと、其の人生[illegible]る人々も、昔私と似た生であつたりの道に居るのではないかと思せられたる。若しさうなら、貴を擧げて懺悔の時代なのかも知れぬ。虚飾を去り矯飾を忘れて、痛切に自家の現狀を見よ、見て而して之れを眞摯に告白せよ。此の以上適當な題言は今の貴に無いのではないか。」(「近代文藝の研究」序十一頁參照)とまで切言してゐる。

明晰な頭腦と冷靜な智慮と深厚な學識との所有者抱月は理に銳くして一面情に厚い賦性であつたが、この悲痛な叫びを擧げるまでに、彼の內部外部生活に如何に深刻な苦悶があつたかは十五年以上の歲月を經て當年の事情を單なる歷史事實として受取つてゐる現代の青少年とても穴勝ち想像するに難くはあるまい。その後、かれが學界と文壇と又家庭と恩師の許とを去つて情人と相携へて新劇壇に奔り旅興行者の苦惱と悲哀とをつぶさになめて卒然として寂しく死んでしまつた半生の起伏激しい經程を思ふと、當時ともに新興自然派の論客として二の同人たる抱月の古風と書臭と不徹底とを罵倒して止まなかつた岩野泡鳴が、家庭上の紛糾を自ら夙く受けて自ら早く解決し、事業の失敗や貧困やに苦しみ乍らも藝術的には桀大的な半生を通して晩年は其の新自然主義一元描寫小說で作者としては物質的に負された[illegible]しないで死んで了つたのと比較して、[illegible]眞か、無自覺か、不徹底かを問ふまでもなく簡明な性向、簡銳な精神の人間が、一旦旗幟たことを肯定的なことを斷言するに易くして、しかもその借り來つた(或ひは一旦にして感得した)思想(或ひは思想らしきもの)に一致することを却つて難く、脈絡もなく連關も少い彼方此方に轉々と飛び移るを恒とするに反して、容易に去就を決せさる一見性情曖昧な、複雜な性格、込み入つた精神の人間が、一たび機會を得ると猛烈として人の意表に出るやうな悲痛な行動にたぶ事實を識り得るであらう。泡鳴の生涯は穴勝ち脈絡なき斷片思想の飛躍のみによつて纏められてはゐなかつた。かれには又かれらしい生き方があつた。が、泡鳴は畢竟「悲痛の哲理」の論說者であつたが、抱月は自らとても明せずして悲痛の哲理の無言の體得者であつた。

當時、この自然主義に反對し、若くは不滿の意を含む批評を公けにした者の中には、相當思索の可能と感性の豐かさとを持つたものが多かつたに係はらず、有り勝ちのことではあるが、前後のゆきがゝりや、小感情の衝突原因やから必要以上の惡罵を恣まにしたものが夥しく、はたから見て苦笑に堪へない論爭が絶えなかつたが、その中で比較的に公正な批評を比較的に最

實な態度で公けにした一人は安倍能成であつた。かれは儕輩の時評家らが徒らに善罵惡罵を事とし、果ては當時の衆愚の言語に對する冒瀆性を遺憾なく代表してゐた新聞記者の「自然主義」感のごとき低級俗惡な態度をあらはに示したに反し、安倍能成は、その試論に於て、「この三四年來の自分の思想感情は、やつぱり自然主義的であつた。自然主義の小説の中には、兎も角も自分の姿を見るといふ心持があつた。」（『思想と文化』一頁。「近代文藝の研究を讀む」明治四十二年七月十九日稿。）と云ひ、「自然主義の小説のあるものは、自分の思想や感情に近いものを表現して居た點に於て、たしかに自分達を引きつけた。自分は固よりロマンチシズムの渴仰者であつた如き意味に於て、自然主義の渴仰者ではなかつた。又固より鼓吹者でも何でもない。唯いや／＼ながらも自然主義的なる思想感情を經驗したといふ意味に於て、自然主義の實行者とはいへる。」（同上。第四十四頁。「自己の問題として見たる自然主義的思想」明治四十二年十二月。）と曰つて努めて公平な立場から自然派の「輕易なる懺悔」や「空疎なる主觀」や「不徹底なる徹底」を攻擊して、亞流自然主義者の無知と輕卒と粗笨とを批難してゐるが、さきに援引した抱月の「痛切に自己の現狀を見よ。見て而して之を眞摯に告白せよ。」云々の語を「自分には強く響かない」と評し去り、「寧ろ一言を出すことも一語を洩らすことも出來ぬといふのが、實際の心持ではあるまいか。」といひ、「今の人間は懺悔をすら爲し得ぬ狀態に居るであらうと思ふ。」といひ、「眞摯に懺悔せよといふ言葉は、恐らく著者の理想であつて現在ではあるまい。」と云つてゐるのは實に至當な評言で、只、懺悔せよと云つた言葉がゝりに執して考へてゐるのは物足りないが、自然派が懺悔の問題を重視した關係上、抱月も之れに執し、能成も亦之れに執したのであらう。懺悔せんと欲する心持は、少くともその前代にはかつてない文學上の新らしい境致であつた。

さて、この自然主義文學勃興には、後期に殘した二つの重要な遺産がある。社會心の特質はその一で、道義的關心はその二である。すなはち、抱月の自然主義の標準論によると、それを（一）描寫の方法態度と、（二）描寫の目的題材とに分ち、後者を、（一）社會問題―個人解放―根本道德問題等。（二）科學（心理學。生理學。進化論。）（三）現實（赤裸々―獸性―醜。肉感的。卑近的。平凡的。自然物的。）等に分つて論じてゐる。（「近代文藝之研究」第六十六頁。）これにやゝ晚れて明治四十三年の秋に中澤臨川が「自然主義汎論」を公けにした頃は、文壇の傾向は、片上天弦のいはゆる「快樂主義の文學」になつてゐた

ぶ。その[illegible]

「今日の思想界を動かしてゐる現實的傾向―文藝界では自然主義―の起つた原因が二つある。それは社會的には民主々義の勃興で、個人的には我等の感覺の進化である。」といひ、自然主義は、富豪の經濟學が人民の經濟學になつたと共に民主的傾向から受けた感化で、その特徴は「民主的傾向」にある。藝術の平民化にあると論じてゐる。

その民主的傾向と人類共在感と、即ちやや、廣義に云ひかへれば前きに述べた社會心と道義的關心とは此時急に勃發したな事では固よりない。三十年代中期に初まる文學上の浪曼運動は個性の自覺の立證であり、サン・シモンやフーリエーやマルクスの原始的研究、矢野龍溪の「新社會」の發見、幸徳秋水の「社會主義神髓」の普遍等の事實から日露役に際して、社會主義者が非戰論をとつた事實は、たま〳〵社會主義對帝國主義、資本主義の分野を明確ならしめ社會心の釀成の契機と見るべきものである。

それらの史的反映はいかに現れてゐるかと云ふに、例へば「社會主義詩集」著者に兒玉花外があり（三十六年八月發行禁止、）ウォールト・フイットマン紹介に夏目漱石の「文壇に於ける平等主義の代表者ウオルト・ホイットマンの詩について」（二十五年十月「哲學雜誌」）[illegible]十一年五月「時代思潮」[illegible]（同上）と内村鑑三の「ワルト・ホイットマン」（「興林集」（四十一年）とがあり、勞働の詩的吟味に島崎藤村の「一勞働者吟味」（三十二年「新小說」があり、民族的憤激に木本白尾の「亞細亞の歌」（三十三年「明星」）土井晩翠の「黑龍江上の悲劇」（三十三年「帝國文學」）があり、與謝野鐵幹の「東西南北」（二十九年十月）があり、人道的悲憤に薄田泣菫の「識憤」（三十三年「天地人」及び「あゝ杜國」（同上）があるけれども、創見ある批評と獨創ある創作とは一つも出なかつた。外に、その當時の詩風にすらも遲れた形式な表白で空疎な人道感を抒べた小詩が雜誌に散見した事もないではないが、悉く惡詩又は非詩の類であつた。

批評、創作の内容にオリヂナリティーこそ少なかつたけれど、これらの先驅が後期の何ものかに或る示唆を與へたことは爭はれない。ある階段を置いたことは爭はれない。その示唆、階段は非力で低級であり、その示唆、階段を基とした後期の所産も風情なき荒んだ花びらに過ぎずして、個々の事例を一、一例證するの煩にしさに堪へられないけれども、[illegible]として見る時は、及び、尚今後の未來詩にある何らかの新相[illegible]を說く諸々たる小基石としては其處に一つの價値が生じ來る事は認めなけ

實な態度で公けにした一人は安倍能成であつた。かれは簡單の時評家らが徒らに善罵惡罵を事とし、果ては當時の衆愚の言語に對する冒瀆性を遺憾なく代表してゐた新聞記者の「自然主義」感のごとき低級俗惡な態度をあらはに示したに反し、安倍能成は、その試論に於て、「この三四年來の自分の思想感情は、やつぱり自然主義的であつた。自然主義の小說の中には、兎も角も自分の姿を見るといふ心持があつた。」（『思想と文化』一頁、「近代文藝の研究を讀む」明治四十二年七月十九日稿。）と云ひ、「自然主義の小說のあるものは、自分の思想や感情に近いものを表現して居た點に於て、たしかに自分達を引きつけた。自分は固よりロマンチシズムの渴仰者であつた如き意味に於て、自然主義の渴仰者ではなかつた。又固より鼓吹者でも何でもない。唯いや／＼ながらも自然主義的なる思想感情を經驗したといふ意味に於て、自然主義の實行者とはいへる。」（同上。第四十四頁。「自己の問題として見たる自然主義的思想」明治四十二年十二月。）と曰つて努めて公平な立場から自然派の「輕易なる懺悔」や「空疎なる主觀」や「不徹底なる徹底」を攻擊して、亞流自然主義者の無知と輕卒と粗笨とを批難してゐるが、さきに援引した抱月の「痛切に自己の現狀を見よ。見て而して之を眞摯に告白せよ。」云々の語を「自分には强く響かない」と評し去り、「疑惑不定の狀態には、寧ろ一言を出すことも一語を洩らすことも出來ぬといふのが、實際の心持ではあるまいか。」といひ、「今の人間は懺悔をすら僞し得ぬ狀態に居るであらうと思ふ。」といひ、「眞摯に懺悔せよといふ言葉は、恐らく著者の理想であつて現在ではあるまい。」と云つてゐるのは寔に至當な評言で、只、懺悔せよと云つた言葉がゝりに執して考へてゐるのは物足りないが、自然派が懺悔の問題を重視した關係上、抱月も之れに執し、能成も亦之れに執したのであらう。懺悔せんと欲する心持は、少くともその前代にはかつてない文學上の新らしい境致であつた。

さて、この自然主義文學勃興には、後期に殘した二つの重要な遺產がある。社會心の特質はその一で、道義的關心はその二である。すなはち、抱月の自然主義の構成論によると、それを（一）描寫の方法態度と、（二）描寫の目的題材とに分ち、後者を、（一）社會問題—個人解放—根本道德問題等。（二）科學（心理學。生理學。進化論。）（三）現實（赤裸々—獸性—醜。肉感的。卑近的。平凡的。自然物的。）等に分つて論じてゐる。（「近代文藝之研究」第六十六頁。）これにやゝ晩れて明治四十三年の秋に中澤臨川が「自然主義汎論」を公けにした頃は、文壇の傾向は、片上天弦のいはゆる「快樂主義の文學」になつてゐた

於、その一文に就て窺ふに、

「今日の思想界を動かしてゐる現實的傾向―文藝界では自然主義―の起つた原因が二つある。それは社會的には民主々義の勃興で、個人的には我等の感覺の進化である。」

といひ、自然主義は、富豪の經濟學が人民の經濟學になつたと共に民主的傾向から受けた感化で、その特徴は「民主的傾向」にある。藝術の平民化にあると論じてゐる。

その民主的傾向と人類共存感と、即ちやや、廣義に云ひかへれば前きに述べた社會心と道義的關心とは此時急に勃發したる事では固よりない。三十年代中期に初まる文學上の浪漫運動は個性の自覺の立證であり、サン・シモンやフーリエーやマルクスの原始的研究、矢野龍溪の「新社會」の發兌、幸德秋水の「社會主義神髓」の普遍等の事實から日露役に際して、社會主義者が非戰論をとつた事實は、たまたま社會主義對帝國主義、資本主義の分野を明確ならしめ社會心の醸成の機會と見るべきものである。

それらの史的反映はいかに現れてゐるかと云ふに、例へば「社會主義詩集」著者に兒玉花外があり(三十六年八月發賣禁止、)ウォールト・フイットマン紹介に夏目漱石の「文壇に於ける平等主義の代表者ウォルト・ホイットマンの詩について」(二十五年十月「哲學雜誌」)といふのに「ワォルト・ホイットマン」十一年五月「時代思潮」に「ホイットマンに就て」(同上)と内村鑑三の「ワルト・ホイットマン」「[illegible]」(四十一年)とがあり、勞働の詩的味映に島崎藤村の「勞働雜咏」(三十二年「新小說」があり、民族的憤激に本木白星の「孤劍団の歌」(三十三年「明星」、)土井晩翠の「黑龍江上の悲劇」(三十三年「帝國文學」があり、與謝野鐵幹の「東西南北」(二十九年十月)があり、人道的悲憤に薄田泣菫の「讀憤」(三十三年「天地人」)及び「あゝ杜國」(同上)があるけれども、個性ある批評と獨創ある創作とは一つも出なかつた。外に、その當時の詩風にすら遅れた形式な表白で空虚な人道感を抒べた小詩が雜誌に散見した事もないではないが、悉く惡詩又は非詩の類であつた。

批評、創作の内容にオリヂナリティーに乏しかつたけれど、これらの先驅が後期の何ものかに或る示唆を與へたことは爭はれない。ある階段を置いたことは爭はれない。この示唆、階段は非力で低級であり、その示唆、階段を基とした後期の所産も風情なき病んだ花びらに過ぎずして、個々の事例を一々例證するの煩はしさに堪へられないけれども、概して見る時は、及び、尚今後の未來詩にある何らかの新規範を説く諸々たる小基石としては其處に一つの價値が生じ來る事は認めた

れぱならない。その階段に踏んだ第一歩の人々の足跡は、いはゆる、民主詩人といひ、民衆派と稱し、人道派と唱へる一派の詩集によつて知ることが出來るが、これらは押しなべて、詩歌の上の現實主義といふ名目の中に要約されることが出來よう。この現實主義は、四十五年から大正初期までを頂點にして衰微した詩歌の上の浪曼主義といふ名目の中に要約されて差支へない「傾向」派と對立する本質にあるものである。しかも、こゝに注目しなければならぬことは、詩的現實觀を强調した前記の人々が、一面に於ては、詩的浪曼主義の作家であつたことで、特に島崎藤村の詩集全卷は、要するに明治浪曼運動の早咲きの美花であり、薄田泣菫の佳集「白羊宮」は明治浪曼運動の古典趣味が凝集した象牙彫りの名作であり、若き樗牛は「美的生活論」を唱へて浪曼的發聲の幼稚なれど眞純な第一語を殘したものであり、夏目漱石全集は、明治的浪曼趣味が異邦的教養の空氣に暖められて、晩近派の自覺に到達する精到な記錄であるが、その中期を代表する「漾虛集」の浪曼主義、又は、低徊趣味は彼の一代に附き纏ふ生活苦の安全瓣であり、新廻轉への緩衝地帶であり、その全藝術を一貫する香氣でもあつた。すなはち、明治を通じて横流する浪曼趣味といふほどの意味に於ける凡ての藝術の製作者が、又、同時に右のごとき詩歌の上の現實主義の紹介者であり習作者であつた。

斯く見て來れば、凡そ大正初期までの詩壇に於ける現實主義が如何に無自覺的に非力に徐々として動いてゐたかゞ判明する。この現實主義の詩歌の傾向に一大飛躍を與へたものは自然主義の文學運動であつた。在來浪曼的な、又は古典的な作品の紹介や祖述や創作やを事とした森鷗外が、腰辨當の名を以て市井些事の寫生詩を雜誌「趣味」や「藝苑」に掲げはじめたのは三十九年の事であつたが、その頃より早くも詩歌の現實主義は、その前代のあまりに「空靈的」な浪曼傾向に反抗して芽出したのである。それが自然主義の提示に裏附けられて口語詩の萌芽となり自由詩の成形となつた。しかも、その時期は、象徴詩が漸く勢力を得て來た時である。この時代の象徴詩は主として浪曼的な感激を基調とした新手法への試作の程度にしか過ぎなかつたが(日本に生れた象徴詩が悉くこの範圍を畢竟するに出ないのだが、)その作者である象徴詩人すらも漸くその立場の不安を感じたのか、寫生詩に流眄を與へたり、口語詩の習作を試みるものすらも生じ、泣菫如きの同顧孤住の詩人すら、その象牙の塔を出んとして、「汽鑵車の歌」を歌つたこともあるけれど、固よりすべて成功する道理はない。新詩酒は之れを古い革袋に盛ることは允されないからである。しかも、その古き革

[illegible]

に詩壇永久の[illegible]さざるを得なかつたのは誤りであ[illegible]

[illegible]近詩の實際主義を最初に提唱したものは、詩壇に自然主義を説いた島村抱月であつた事は當然である。抱月は當時の新體詩を讀んで先づ感じることは、「ディレクトネス、スレイトネス」に缺けてゐる點で、之れは「眞直に實際生活に接してゐない證據であると云つて、「シエリ、キーツ、テニスン、スヰンバーンがその當年「ライフにストレートであるが、時勢の移つた今日となつては稍々現生活を直接してゐない感じがする。」と評し、「シムボリズムでも、ナチユラリズムでもいゝから」、「ディレクトにストレートになつて欲しいと望み、「思想の事は到底他から注文して左右さるゝ事でないから姑く措く」が、「言葉と語法のクラシシズムを破ることが根本の問題である、」といひ、その手段としては「民謡に歸る事」が漠然たる希望であると論じ、今の詩は「たゞ言葉の遊戯、思想の遊戯」であると斥け、その形式上のクラシシズムを破る一法は、「いかなる形に於てか言文一致となる」事であると斷じ、である、ありますを、なりとするのは、「感想の自然の要求でなくして中間に挟まれた習慣(コンヴェンション)である」と論じ、終りに、「内容に於ても形式に於ても活きたる現代の生活に、能ふ限り密接ならしめんとするのが、「自分の詩に對する要求であ

[illegible]

これは[illegible]でもあり、[illegible]十二年出[illegible]

[illegible]」にも收録せられなかつた所を見ると抱月の[illegible]に必へてはゐないかも知れないが、とにかく當年の自然主義者の新詩觀を代表した意見と見做すことが出來る。

この文章には一の卓見と一の謬見とが存してゐる。(簡單にさきの「日本近代詩の象徴思潮」にも述べたが、)口語詩を以て[illegible]轉の一法とした事は前者であつて、當年の主潮詩を皆言葉の遊戯、思想の遊戯と斥け去つて顧みなかつたことは後者である。思ふに自然主義文學の提唱宣傳を旨として静かに鑑賞味解するの時を持たなかつたので、つひに他の美點をも見のがしてしまつたのであらうが、抱月自身本來は斯く事理に暗い評家でなく、むしろ情緒ある批評をなしうる點で當代隨一の名があつたのだが、持つて生れた親分肌が災して、しばしば正鵠を失した論議をも時として發表したのである。(泣菫、有明の完成期の作品が今日に於ても立派な作品と稱せられてゐることは、その史價、本質價の確實な事の例證で合せて抱月の論議の粗雑に陥つてゐた證據である。)

さて、斯る事情の下に誕生した口語詩、自由詩が詩歌の上の自然主義に立つて表現の自由と直截とを志し、詩感の實際生活

的基礎を念としてはゐたが、階級に對する反抗や、民衆藝術の提唱や社會感の横溢や人類共在感の强調やはまだ現れなかつた。これは初期口語詩運動の作品の二三を見れば判明する。在るものは、口語での自由な表白の念願であつた。實際生活の實景の寫生であつた、實際概念の描出であつた。

詩歌に於ける現實主義のこの試作が、この低級に低迷してゐる間に、在來の詩壇本部は、明治四十一年十一月その大歌舞伎であつた「明星」が廢刊して、翌四十二年一月その生れ變りである新鮮な「スバル」が創刊せられ、爾來、大正初期かけて、雜誌「屋上庭園」などと共に新詩感の母胎となつた。實際の作品の價値に於て、スバルの作品は遙かに自由詩、口語詩の一派に卓れてゐた。そのスバル派は明治最終期の詩壇を代表するに到り、白秋、杢太郎、光太郎、秀雄、茂(栗山)、青煙、薄風、春夫、大學等とゝに育つた。ひとしく過渡期の作品には過ぎないが、口語詩の試作が今日殆ど之れを讀んで鑑賞するに耐へない劣作が夥しいに反し、スバル一派がとにかく誦するに足るものを出したのは、一には提唱期の自由詩口語詩と傳統的な文語詩文語內自由詩との比較に於て前者に幾分の負擔があつたからに基くのであるが、最終の問題は畢竟するに人の問題であつた。スバル派は後口語をも盛んに使用して、いはゆる口語詩、自由詩一派の歌はざる方面の詩感を扱ふて相當成効の域に達してゐるが、これ正しくその證の一である。光太郎ごときは、漸次スバル的特色から離脫して白樺風のいはゆる「人道派」なるものの詩情に立ち、又は、ホイツトマンの譯者となりその傾向に於ては所謂民衆詩人の企て及ばぬ佳作をも時として作つたが、元來、この都會に生れた眞摯な彫刻家には、生來のディレッタンチイズムが着きまとふてゐた。「泥七寶」にもつきまとふたごとく、詩集「道程」の長篇類にもつきまとひ、その後今日に到る作品、いふ所の人道派的詩感にも尙つききとふてゐる。光太郎は、感情に於て淸教徒であり、趣味に於て異敎徒であり、思想に於て雜馬本山的であつた。これをかの證の二とするのである。

四　既成詩壇の衰頽

自然派の文學は四十二三年早くも衰退期に入り、永井荷風の歸朝とスバル派の活躍と谷崎潤一郎らの新出に伴つて、田園的なる忍從又は棄て鉢の男性的消極文學から都會的なる享樂又は高踏の女性的積極文學に移つたが、今まで口では因習打破と稱しつゝその習慣に蹴押されて現實の拘束に萎縮して暗い苦澁の低迷期に在つたものが、急に一躍して利口に習慣的現實の波をくゞり乍ら明るい快活の靑春期に入つたので文壇すべてが忽ち

[illegible]して、自然派から享樂の一面が作家より一き[illegible]積極的に濃く出てゐるものもあれば、口語詩に享樂主義の非想鮮かな試作もあり、すべてが過渡時代である詩人も小說作者も在來のやうには簡略に分類することが出來なくなつたが、その享樂主義文學の小說方面の代表は積極的な上田敏の「渦卷」と消極的な永井荷風の「冷笑」で　谷崎の「刺青」は荷風の享樂の半面が積極的に出たものであり、鷗外の「青年」は敏の享樂の半面が消極的に現はれたものである。詩では、白秋、杢太郎、露風、光太郎すべて享樂の一面に執してゐたが、敏はその享樂教から發してヹルハーレンの「新聲」に飛躍したけれど、敏とヹルハーレンとに永久に溝があつたのは、敏の享樂教が全的に生命化さなくて爲つたからで、この點、敏は求むべくもあらぬものを强いてヹルハーレンに因て覓めようとしたけはひがあるけれど、荷風がサマンやレニエの譯詩に從つたのは、之れに比べると遙かに自然で、やがてそれが美しき「珊瑚集」一卷となつて殘つた。

大正初期の詩壇は、以上のさま〲な感化影響の間に、古きものが木枯れ、新らしきものが芽を萠し、その間、良き古風なるもの心弱くも腰挫けて詩林をのがれ、拙き新流風が町顏にもその名を悲にひさぐやうな狀態を示したが、さきに述べた如く、[illegible]

蒲原有明は、さきに「有明集」四十一年に於てその象徵[illegible]體の形式及び內容に於ける[illegible]點に到達し、更に來るべき新[illegible]を準備すべく運命づけられてあつたところへ、口語詩、自由詩の新提示が、形式から先づその心緒を脅かし　同時に、思想上の苦惱に陷つて、自然主義的人生觀と浪曼思想の岐路に迷ひ、ラファエル前派の風雅を棄てゝ、現實に直面するの新起程から、ロゼティ的感化をのがれて自然主義的なる藝術に狎らうとした。これは、時代の傾向に動かされた事實もあり、その同遊の友人知己らが多く同派の文士詩人であつたからでもあつたらう。が、如何に悶いても有明に所謂「自然派風」な詩は作れない。作らうとすることはわが本質を顧みぬ過誤である。彼は恒產があつたから物質上の困憊は少かつたが、生來病身であつたから、肉體上の苦痛がかれの精神に及ぼした影響は、思想上の感化にも劣らないものがあつた。これは、病身の人間のみが能く悟ることで、健康の輩はかゝる悟をしば〲病氣から來るセンテイメンタリズムと大ざつばに斥け去るが、人間が精神と肉體とから成るものである以上、況して、その肉體の强弱が近代生活に於ては時あつて精神に明暗のかげを投じるものである以上、更に況して神經質にして感性鋭い詩人肌のものであればあ

るだけ肉體的暗影のその精神に及ぼす影響は深刻にして强大である。有明も亦この種の苦悶を迎へねばならなかつた。外には新詩風を提唱する評家相馬御風が「有明集」の完全を告げて新詩の勃興とともに有明の退墟すべきを暗示する。內には新詩に對する同感と反感とが交錯して、わが新起程の方策を混亂せしめる。かれは、

「その當時わたくしは生死の大患に罹り、その後五六年に亘つて、肉體の衰弱と共に精神上には自發自棄的の苦惱を經驗したのである。」(「有明詩集自註第四頁」といひ、

「八年間の所作はわたくしの肉體の衰弱と心の動搖と懊惱とを示すもののみである。」(同上)

といひ、また「精神的孤獨」に苦しんだ自註としての「光明洞川」諸篇を最近の作としてその詩作を廢するに至つたその前にも、四十一二年から四十四年、大正一、二年に亘つて「感覺の愁調」篇にあらはれた複雜な經驗を談つてはゐるが、悉く皆かれの肉體兩面の披瀝を表白してゐるもので、實際生活に於ても彼は、四十年の秋扁桃腺炎にかゝり、十二月中旬「有明集」校正半にして急性腎臟炎に犯され、翌四十一年三月下旬床上げをして四月の末に九州の旅に赴き歸つて、又頑固な神經衰弱症に冒され、翌る年かけてその交友、(藤村、花袋、孤雁、無想庵、蒼梧、木城と或ひは奧伊豆に遊び、或ひは京都、奈良に旅したが、その肉身の病は癒えても、かれの精神は詩的にますます石胎となつて行つた。

破滅—衰頽的夜景

壞れた月がぼんやりと空を眼めく、
赤みさした黄ろい月影が夜なかすぎの
さびしい街の並木の枝にもつれかかる。
なまぬるい風が、今、そつと通つてゆく、
それはものを言はずに、よしもない淫樂の
夢に戯つて、悶え苦しむ吐息のやうに。
物かげからは蒼白い紙の屑が——おびえた
小鳥が——濕つぽい敷石の上をひそやかに、
倦れものの衰へた聲で唸き轉ぶ。
埃がたつ——夜なかすぎの貧血の街なかを、
腥い埃の幻が月の光に黄ばんでは滅える、
人通りは絕えたが肉の香の饐えた街なかを。

[illegible]
[illegible]い地に於て[illegible]つてなんやらに[illegible]へて、
無茶であるからに何とはなく夜しく。

然うだ、不測の災厄が、破滅が、何時？　今？
寂靜まつたのではなくて呼息を殺した
夜の街を襲はうとしてためらつてゐる。

ぼんやりした空に溶ける黒い家の棟、
おお夜の音——賴りない神經が、この時、
奏でたのは濃い血をすすり盡した接吻の響。

破滅の酒に醉つて赤みさした月が空に跟めく、
疲れた空に、——人間の街は寢おびれる、——
壁にもたれた淫れ女の薄青い笑聲、……

いつ月が眩めき倒れて、
いつ夜が明けるやら？

この詩は四十一、二年の交の作であるが「有明集」以後坂削

[illegible]
たものにはあるが、[illegible]
た」(自序第八頁)作であると説明してゐるが、[illegible]
作なだけで、各の素材が有機的な生命を持して生きてゐない。

泡鳴が正當に攻略した如く、觀念化されてアレゴリカルとなつた瑳瑳情調の強いられたる表白で、作家の詩的破滅の第一歩であり、このやがて來る病的夜景の前兆でもあつた。越えて四十四年の頃の作に

よもぎのにほひ

君が眼の利心さ、
この眼のなかに
よもぎのにほひを
われはきく。

の類の小唄の試みをなしたが固より彼の柄にはつかぬ感情である。以上の失敗期を經て大正に入り三、四年間に「わが眼、」「恐ろしいちから、」「われは信ず、」「光明を經れ」の類約十二篇を作り、アンソロヂー「マンダラ」(大正四年三月)にその内の七篇を採錄してゐる。

此等に於て有明は新らしい(恐らくは最後の)[illegible]

るだけ肉體的暗影のその精神に及ぼす影響は深刻にして强大である。有明も亦この種の苦悶を迎へねばならなかつた。外には新詩風を提唱する評家相馬御風が「有明集」の完全を告げて新詩の勃興とともに有明の退墳すべきを暗示する。內には新詩に對する同感と反感とが交錯して、わが新起程の方策を混亂せしめる。かれは、

「その當時わたくしは生死の大患に罹り、その後五六年に亘つて、肉體の衰弱と共に精神上には自暴自棄的の苦惱を經驗したのである。」(「有明詩集自註第四頁」といひ、

「八年間の所作はわたくしの肉體の衰弱と心の動搖と懊惱とを示すもののみである。」(同上)

といひ、また「精神的孤獨」に苦しんだ自註としての「光明渴仰」諸篇を最近の作としてその詩作を廢するに至つたその前にも、四十一二年から四十四年、大正一、二年に亘つて「感覺の整調」篇にあらはれた複雜な經驗を談つてはゐるが、悉く皆かれの肉靈兩面の苦惱を表白してゐるもので、實際生活に於ても彼は、四十年の秋扁桃腺炎にかゝり、十二月中旬「有明集」校正半にして急性腎臟炎に犯され、翌四十一年三月下旬床上げをして四月の末に九州の旅に赴き歸つて、又頑固な神經衰弱症に冒され、翌る年かけてその交友、「藤村、花袋、孤雁、無想庵、容穗、木城と或ひは奧伊豆に遊び、或ひは京都、奈良に旅したが、その肉身の病は癒えても、かれの精神は詩的にます〳〵石胎となつて行つた。

破滅—衰頽的夜景

壞れた月がぼんやりと空を跟めく、
赤みさした黃ろい月影が夜なかすぎの
さびしい街の並木の枝にもつれかかる。

なまぬるい風が、今、そつと通つてゆく、
それはものを言はずに、よしもない淫樂の
夢に耽つて、悶え苦しむ吐息のやうに。

物かげからは蒼白い紙の屑が——おびえた
小鳥が——濕つぽい敷石の上をひそやかに、
廢れものの衰へた聲で喚き轉ぶ。

埃がたつ——夜なかすぎの貧血の街なかを、
腥い埃の幻が月の光に黃ばんでは滅える、
人通りは絕えたが肉の香の饐えた街なかを。

[illegible]
[illegible]暗い地獄に落ちてゐるやうに思へて、
無益であるからに何とはなく寂しく。

然うだ、不測の災厄が、破滅が、何時？ 今？
妖婦まつたのではなくて呼息を殺した
夜の街を襲はうとしてためらつてゐる。

ぼんやりした空に溶ける黒い家の棟、
おお夜の音——頼りない神經が、この時、
奏でたのは濃い血をすすり盡した接吻の響。

破滅の酒に醉つて赤みさした月が空に跟めく、
破れた空に、——人間の街は狼おびれる、——
壁にもたれた淫れ女の蒼青い笑聲、……

いつ月が眩めき倒れて、
いつ夜が明けるやら？

この詩は四十一、二年の交の作であるが「有明集」以後最初[illegible]た」（自序第八頁）作ておると說明してゐるが、文藝の[illegible]在るだけで、各の素材が有機的な生命を持して生きてゐたい。泡鳴が正當に攻擊した如く、觀念化されてアレゴリカルとなつた詩態詩調の强いられたる表白で、作家の詩的破滅の第一步であり、このやがて來る幻想的夜景の前兆でもあつた。超えて四十四年の頃の作に

よもぎのにほひ

君が眼の初心さ、
その眼のなかに
よもぎのにほひを
われはきく。

の類の小唄の試みをなしたが固より彼の枝にはつかぬ感情である。以上の失敗期を經て大正に入り三、四年間に「わが眼」「恐ろしいちから」「われは信ず」「光明を希れ」の類約十二篇を作り、アンソロヂー「マンダラ」（大正四年三月）にその内の七篇を採錄してゐる。

此等に於て有明は新らしい（恐らくは最後の）詩境を營まう

としたけれども、その叫びは空に響き、その聲は次なる律動を波動せしめずして止んだのは寔に慘ましい敗衄であつた。が、表面から見ればその思想は光明に輝き自信に燃えてゐる。雜誌「アルス」創刊號（大正四年四月）に掲げた「光明汎用觀」は「マンダラ」の序であるが、「無礙自在な光明が、我身を照し出すといふことを信じうるやうになつたと云ひ、その光明は說くべからず、「信ぜよ」と云ふばかりである。「我等には既に光明意志がある。」「人間の努力は決して無目的ではない、また決して目的があるのでもない。私は人間の努力を擧げて報謝であると信ずるがまゝにこゝで供養といふ言葉を使つたのである。表現の生活が人生の曼陀羅を現證の法界に織り出すのである。それが最大の供養報謝でなくて何であらう。光明を信ぜよ。――一切が藝術であり、同時に宗教である眞實義が光明の大海に發揚する。」と結んでゐる。この心緒が、彼の作に於ては遙かに力強く現はれてゐる。

わが眼

わが眼――自信の綠の齊は瞬を供養す、
こはこれ發相にしてまた直に印現、
謙安と調紋と兩つを兼ねた宇宙の體得者、
狂氣の如き反映にからむ無礙の帝王。

わが眼――碧色の血の凝りは瞬を燃す、
雪と焰の大沼に自ら溺れ且つ照らす青蓮華、
わが耳は沙漠の海に宿る車渠の滿開、
星の渦、硫黃の谿にかくれた酒の泉。

わが皮膚は苦行の道場、閨房の絨氈、
冷やかな石に地熱を吸ふ獅子の恍惚、
われはわが頭に本より生れぬ言語を育み、
われはまたわが心に本より死なぬ赤子を悲み咲く。

われはこれ栴檀の林、虛空の鏇の大浪、
高山の車輪の一列、一切の變裝者、
隙もなく魂を貪み盡すが故に無上の法樂、――
わが密嚴詩、そこに同時を貪る刹那を聽く。

これは信仰の作でない。信念あらんと焦心するものの「密嚴詩」である。これを讀んで作者が僞信を假裝して讀者に臨むさかしらであるとなしたならば、（實際に於てその種の評が多かつたが）作者の眞諦を誤るものである。嚴しきこの調和と力能と

[illegible]とのみおもひたげに、さびしく忘れる[illegible]深いこころが彼を住せることを知るものは、妄りに外面の法悦によつて内心の信念を粉飾するの僻行をなさぬ。有明はもとより宗門外の人であつた。後には看経の朝、誦経の夕をも持つことはあつたにしても、彼の一生は宗教への憧れに初まつて憧れに終るのである。三十八年十一月、かれは老父を失ふて「信楽」の一篇を書いた時、一青年僧がわざ／＼訪ねて来て梵網菩薩戒経を贈つた事があるが、その作は

宵に静まれる日の傾け、何て覚えぬ悦に
竦み冷えしわが胸は、聖酒に浴り冬過ぎて、
地の照斑と蒲公英の花、芽ぐむ外の面のつゝましさ
春さながらの若萌にさゝす祈禱ぞほのかなる

と歌ひ、

悲願の修者、諸菩薩よ、ただ三界に流浪する
魂を憐み御心にかけさせたまへ、ゆくりなく
煩悩盡きし僕に遇ひて、今日を捨身の首途や
遍路の旅に覚王の利生をわれに垂れたまへ

と称ふる祈禱（今日まで云々の[illegible]から[illegible]にたつこしさうたが）であつて、宗門の外まで来て覗ふことも得せずして立ち去る類の型の人間の間にのみ初めてうかゞはれる強い信仰へのあくがれの最初の現れで、有明は自らも少年時代にたつた一度宗教に強い熱意をおぼえ、人に見られるのを厭つて、懐の中で合掌しながら道を歩いた事もあると告白してゐる。かれの詩的精進はこゝに点つた。その佛経に対する熱意はその後は詩に於て現れずに研究として進んだ。古代言語研究の途上にあらはれた。有明の詩は、さきに云つた通り「有明集」に於て頂點に達した。その後何らの寄與をも詩壇にはしなかつたが、かれの詩は明治に出た最初の近代人のそれであつた。

薄田泣菫は「明星」終刊に「死の勝利」を載せ、早稲田文學に花鎌車を詠つた後、大正詩壇にはつひにその詩相を示さなかつた。かれの詩的高潮は「白羊宮」一巻にきはまる。この集は有明のそれと共に日本近代詩の明治期最後の察を飾る雙璧として古典文學の名を冠されるものであるが、かれは一度行き詰まつた道を再三打開せんと企てゝつひに成らず、こゝに永久の沈默に入つてしまつたのはこの詩人としてきはめて自然である。

泣菫は、前車なく後路なく眞に奇異なる獨步の道を步いた。その詩は形式に於て彫琢の限度に達してゐる。その詩感は古風なる靜謐を裝ふてゐるが、遠きもの、美しきものとしての古王朝へのあくがれ、その廢殘の古跡の漫步に限りなき思慕の熱情を濺いだところ、又、戀愛の小曲に於ける纏々たる哀切の情の表現など正しく十九世紀初頭の英國浪曼詩人を假りに東方の國に移してその寧樂山城の古文化に窮りなき感慨を寄せしめた趣がある。

與謝野寛は、「靨之葉」(四十三年)以後「鴉と雨」(大正四年)の詩歌集に詩十六種三十餘篇を收めてゐ、外に譯集「リラの花」(大正三年)一卷がある。「鴉と雨」中の作は作者渡歐前の作(一九一一年迄)で、大體、前著とその作風を等しうしてゐるもので、かれは、「巴里に行つて自分は新生の喜びを知つた。自分は次いで巴里雜詠一卷を出すであらう。」といひ、右二卷の作風を自ら、「幻滅と、苦笑と、倦怠と、および焦躁との中に醜く懊惱してゐた。」頃のものであるとし、「唯だ自分の悔恨がある。毫末の自負もない。」(「鴉と雨」跋)と述つてゐるが、幻滅のかげに憧憬あり、苦笑の間に誇らいあり、倦怠と焦燥の裡にも快活と強ひられたる落付きとを有するのが彼の詩前で、その讚辭のうちにも、われらは明らかに彼の拔きがたき昔年のその驕慢を見る。泣、有二家が各その與へられたる天分に從つて勞作をなし終へて沈默に入つたに反し、かれは二家ほどの卓れた業績を殘さなかつたかはりには、永遠に青年のごとき憧憬と懊惱と稚夢との中に於いて、與謝野鐵幹を與謝野寛と改めた後、更にその譯詩によさの・ひろしと署名するが如くに、その詩も時代の變遷に伴ふて幾度か改造せられ、幾度か詩作せられてゐる。「靨の葉」に

虛空

かの虛空は大いなるかな。
われらを生み、物言はしめ、
婚媾せしめ、戰はしめ、
泣かしめ、疑はしめ、
その擧句、見殺しにする。

と稚き自棄をもらし、

ひと夜

帶を解く時君云ひぬ、
「この細れるを見たまへ」と。
朝の別れに君云ひぬ、

「忘れたまふな、去としに
　二十日の月の責ばめるを。」

と幼き感傷を吐ける彼は、「雞と雨」中でも矢はり同じ苦笑や自嘲の連發をつゞけて、

　誠之助の死

大石誠之助は死にました、
いゝ氣味な、
機械に挾まれて死にました。
人の名前に誠之助は澤山ある、
然し、然し、
わたしの友達の誠之助は唯一人。

わたしはもうその誠之助に逢はれない、
なんの、構ふもんか、
機械に挾まれて死ぬやうな、
馬鹿な、大馬鹿な、わたしの一人の友達の誠之助。
それでも誠之助は死にました、
おお、死にました。

日本人で無かつた誠之助、
立派な氣ちがひの誠之助、
有ることか、無いことか、
神樣を最初に無視した誠之助、
大逆無道の誠之助。

ほんにまあ、皆さん、いい氣味な、
その誠之助は死にました。
誠之助と誠之助の一味が死んだので、
忠良な日本人は之から氣樂に寢られます。おめでたう。

と嘲ひ、

若い友よ。
新らしいその脊廣が、
如何にも氣が利いて才子らしくよく似合ふ。
……………
妻よ、さう火を吹くな、朝から、
悪い枝炭のいぶること。

ああすべて頽癈の氣もち……
をかしくも哀しくも無い、
ただ灰色の正月二日の朝。
――「正月」

と嘆じる感情は、泣、有二者と比較にならぬほど若々しい。いつまでも若々しい。一生を通じて恐らくは彼はこの若々しさを失はぬであらう。

が、少くとも「明星」運動後のかれは、時代に追隨するのフレクシビリティーはあるが、先頭に立つのプシビリティーはない。渡歐して更に一段と若がへつた彼は、その新らしい知識と詩情とをかたむけて、「毒草」や「うもれ木」の美を狂咲きさせるかと思ふたら、わづかに一卷の「リラの花」を公けにしたにとどまり彼は逡巡するが如くにくすぶつてしまつた。「リラの花」は原詩について云ふたならば、かつてある評家も述べた通り申分のある書物であるが、彼の新らしい感情を譯詩を通じて見るとしたならば、又別に新たな興趣が生じて來る。しかも譯詩集として見ても、これは新らしい多くのものを新詩壇に賦與した佳著の一である。在來の日本文章に對する多くの知識と技巧とに新鮮に對する彼獨特の快感を以て迎へたる喜びとからこの著は全く別種の香氣をもて讀者を迎へた。若しこの譯業にそがれただけの詩的情熱が、その創作詩に向つてそゝがれたならば、彼は全然更生したる新生命の中年の新詩人として確たる足どりをもて歸朝したであらうけれど、その待つてゐた「巴里雜詠」はついに出なかつた。「リラの花」が詩壇に與へた感化は何であるか。「海潮音」の如き創作美は甚しく少ない、「珊瑚集」のごとき己が趣味三昧に入つた撰擇法もしてゐないが、あらゆる種類の詩人、あらゆる流派の詩人を悉く收めて、例へばダヌンチョに十二篇レニエに二十二篇、ヹルアーランに十八篇、マエテルリンクに五篇、ノアイユ女に六篇を費し、マリネッティはミュゼリと交り、サンボワンはジュル・ロマンと和してゐる中に、それらを相當な出來榮えで紹介し得た點にあるので、「倦怠の輪舞歌」の古風な格律譯

失はれたるくちづけの
歸る期なきをわれ歌ひ、
枯れし草生に病むどちの
婚ふ祝を目にぞ見る。
おぼつかなくも薄暗き
夢のなかにて聲きこゆ、

月かげも星も無き夜に
かなしく咲きぬ、百合の花。

猶ためらへる氣力(いきほひ)と
ねがひを斷たぬ情とは、
宵に貧しく住む人か、
あかつきがたの蝋の燭(ひ)か。

つゞく長夜をまもる眼に
月の昇るをわれは待つ。
靜かに青き光もて
わがこの夢を醒ませよと。

のごとき、又、エミール・ベルジュラアの「十億法を四十倍」の新調、

十億法(フラン)を四十倍、——
獨逸は其れに肝を潰した。
佛蘭西よ、それはお前の毛織の襪(くつした)が
一厘一厘と貯めたものだ。

その[illegible]をLOIREに[illegible]したら、
ILLE-ET-VILAINE州を賣うて仕舞ふ。
十億法(フラン)を四十倍、——
獨逸はそれに肝を潰した。
ああ、勤儉な國民よ、
Verlaine(ヹルレエヌ)の連中にも其れを考へさせたい。
わたしが、わたしはMONTBÉLIARD(モンベリアル)へ取り上げた
巨きな額を想ひ出す。
十億法(フラン)を四十倍。

譯者註す。一八七一年の普佛戰爭の後、佛蘭西人は獨逸の課した五十億フラン（二十億圓）の償金を十億フランづゝ、五度に支拂つたが、その十億フランの公債を募集する度に、佛蘭西國民は一心不亂に勤儉して得た財力から四十倍（百六十億圓）の應募をすることが出來た。五十億フランの償金が永久に佛蘭西國を疲弊せしめるであらうと思つて居た獨逸人は之に驚いて償金額の少かつたのを悔いた、歐洲人は一般に襪を貯金の巾着に用ひるのである。

のごとき、マルセル・ゼエが「卷煙草」の如き作品がある。

ダヌンチヨ譯は失敗であつた。要之、よさの・ひろしの佛詩を

學んで佛國に赴き、行き詰まつた詩境を一轉せんとした企ては、詩的收穫としては何ら得る處がなかつたが、この一卷と諸種の見聞とをもたらし歸り、更に新道程に起たんと計つた。昔からのかれのさま〴〵の性僻やその歌口や事業のあとや、今この新起程にイ立するその姿を一瞥する時、われらは、永久に若さと驚きと術氣とを失はぬ彼が、死ぬるまでその試作をつづけてゆくであらうことを、又、死ぬるまで完成の域には到達しなからうことを感じる。われらの與謝野寛といふ人間、詩人に對する同情的興味は一にこゝに在る。

岩野泡鳴は「詩界に別れる辭」まで書いて詩より散文に移つて、その方面で極めて卓れてはゐないが彼らしい特色を發揮しえた小説を殘して死んだが、詩集としては大正四年三月に公けにした、「戀のしやりかうべ」は、彼の言葉を借りていへば、「この明治四十一、二、三年頃の作を集めた第五詩集は詩と戀とのしやりかうべである。」と云ふ通り、明治末期の作であり、その後はほとんど詩作に從はずして終つたが、「戀のしやりかうべ」に於ける彼は、自ら「その當時僕がおのづからに活躍させた日本語の無形の音律に添ひてこれを讀んで呉れる」ことをその序に於て要求はしてゐるが、

時計の　ちくたくが　自分の　動悸と　[illegible]
た。
すると、今まで　どこだか　知れない
暗い　海の　眞ん中で、大きな　輪がたに　漕ぎまはされ
て　ゐた　身が、
　　　　——「胸のきしめき」

の類の進行で、獨特と自稱した一字間置く法もかうやゝこしく使用されては効果が全くないし、

畜生！
わが身の　ことを　云つて　ゐたのか、
今　聽えた　葬式準備　の話？

のごとき拙劣極まる作例に依つて知られる通り、彼の詩的破綻が愈よ激しくなり、「僕その物」ごときに到ると、反省も選擇もない（殆どこの頃の若い駄詩人の反古のやうな）詩感の虐待と言葉の虐殺を行つて自分では立派な詩だと思ひ（あるひは强いて思ふてゐるらしく見せかけ）てゐたが、大正八年發行大正七年後「日本詩集」に揭げた「森ケ崎の朝」は恐らくその頃の

……と思はれるが、

しツとり 降る こさめ に きんぺん に ない。
然し、その 地を うるほす 結果 には
豫想 通り のも ある し、 また 豫の 意外な
のも。

——「植ゑ忘れた百合の赤芽」

と云つた風の駄作であり、

敷き石 の うへに きりぎりす、
つめたい 石 の うへに、
もう 飛ぶ ちから も 失せて、 ただ 獨り、
この 秋 の 日 を
消え行く 生 に 對して、
その かすれた 聲 は 然し 最後 の 雄たけび！

のやうにしばしば試る名詞止めが、散文的な本文とそぐはないでちぐはぐな感じを與へる。同じ集の大正八年度にも四篇を出して、ますます非道くなつた。

ありがたや この おかみおや 御心は
日本的 政道 人道 の 顯示 を、 さうだ 世界 に
宣揚する！

——「日光」

「胸の海」では、森ケ崎の海を眺めてゐると三枚帆の舟がよこ帆で現れ出た。それを見て「あッと、もツと自分に近い或物を待ちつゝ」いつしか自分の胸を浪うたせていたといふ譬へ物の小兒だましの非詩である。かつては「闇の樹木」程度まで推進したかれの詩境もなぐり書きの小說散文で（彼の小說としてはそれでもよかつたが）言葉の放蕩浪費をやる間にこんな程度に下つて彼はそのまゝ詩人の名を自ら詩壇から拭ひ消して、大正九年五月九日死んでしまつた。

河井醉茗は、大正期に入つて「女子文壇」を退いて「婦人之友」に入り、大正四年「マンダラ」に「丁子」外四篇を掲げ

火の穂先、うなだれて
夜はしめやかに

學んで佛國に赴き、行き詰まつた詩境を一轉せんとした企ては、詩的收穫としては何ら得る處がなかつたが、この一卷と諸種の見聞とをもたらし歸り、更に新道程に起たんと計つた。昔からのかれのさま〳〵の性僻やその歌口や事業のあとや、今この新起程にイ立するその姿を一瞥する時、われらは、永久に若さと驚きと衒氣とを失はぬ彼が、死ぬるまでその試作をつづけてゆくであらうことを、又、死ぬるまで完成の域には到達しなからうことを感じる。われらの與謝野寛といふ人間、詩人に對する同情的興味は一にこゝに在る。

岩野泡鳴は「詩界に別れる辭」まで書いて詩より散文に移つて、その方面で極めて卓れてはゐないが彼らしい特色を發揮しえた小說を殘して死んだが、詩集としては大正四年三月に公けにした、「戀のしやりかうべ」は、彼の言葉を借りていへば、「この明治四十一、二、三年頃の作を集めた第五詩集は詩と戀とのしやりかうべである。」と云ふ通り、明治末期の作であり、その後はほとんど詩作に從はずして終つたが、「戀のしやりかうべ」に於ける彼は、自ら「その當時僕がおのづからに活躍させた日本語の無形の音律に添ひてこれを讀んで貰れる」ことをその序に於て要求はしてゐるが、

時計の　ちくたくが　自分の　動悸と　なつて　響いてゐた。
すると、今まで　どこだか　知れない
暗い　海の　眞ん中で、大きな　輪がたに　漕ぎまはされて　ゐた　身が、
――「胸のきしめき」

の類の進行で、獨特と自稱した一字間置く法もかうやゝこしく使用されては効果が全くないし、

畜生！
わが身の　ことを　云つて　ゐたのか、
今　聽えた　葬式準備　の話？

のごとき拙劣極まる作例に依つて知られる通り、彼の詩的破綻が愈よ激しくなり、「僕その物」ごときに到ると、反省も選擇もない（殆どこの頃の若い駄詩人の反古のやうな）詩感の虐待と言葉の虐殺を行つて自分では立派な詩だと思ひ（あるひは強いて思ふてゐるらしく見せかけ）てゐたが、大正八年發行大正七年度「日本詩集」に掲げた「森ケ崎の朝」は恐らくその頃の

「小唄と思はれるが、

しツとり 降る 花さめ に まんべん に ない。
然し、 その 地を うるほす 結果 には
豫想 通り の も ある し、 また 俠の 意外な
のも。

——「植ゑ忘れた百合の赤芽」

と云つた頃の駄作であり、

敷き石 の うへに きりぎりす、
つめたい 石 の うへに、
もう 飛ぶ ちから も 失せて、 ただ 獨り、
この 秋 の 日 を
消え行く 生 に 對して、
その かすれた 聲 は 然し 最後 の 雄たけび！

のやうにしば／＼試る名詞止めが、散文的な本文とそぐはないでちぐはぐな感じを與へる。同じ集の大正八年度にも門儀を出して、ます／＼非道くなつた。

ありがたや この わかこが 馴・体
日本的 政道 人道 の 顯所 を、 さうだ 地味 に
宣揚する！

——「日光」

「胸の海」では、森ケ崎の海を眺めてゐると三枚帆の舟が大きく帆で現れ出た。それを見て「あツと、もツと自分に近い或物を待ちつゝ」いつしか自分の胸を浪うたせていたといふ拵へ物の小兒だましの非詩である。かつては「闇の樹木」程度まで到達したかれの詩境もなぐり書きの小說散文で（彼の小說としてはそれでもよかつたが）言葉の放蕩浪費をやる間にこんな程度に下つて彼はそのまゝ詩人の名を自ら詩壇から拭へ消して、大正九年五月九日死んでしまつた。

河井醉茗は、大正期に入つて「女子文壇」を退いて「婦人之友」に入り、大正四年「マンダラ」に「丁子」外四篇を掲げ

火の穗先、うなだれて
夜はしめやかに

ためらふ。

の調子でおだやかなその昔日の詩調の連續をくり返すのみ、大正七年に編んだ「彌生集」を十年に出版したが詩壇にとつても、かれ自らにとつても何ら新意義はなかつた。若しかれが、手なれぬ口語で新開拓を希はんより、寧ろ昔ながらのしめやかな七五の溫雅な歌口を今日まで頑としてつづけたなら、かへつてそこに幾何かの深さと美しさとを增しえたかも知れない。

五　新詩感の培養

譯業「リラの花」が空前の分量と、最新の詩人、及び名もなきマガジン・ポエトリの類まであまさず翻譯收錄したのは、本質價に對する無理解といふ批難もあつて、趣味に忠實なるべき詩人の創作的譯業として見る時はその撰擇の標準に就て多くの瑕瑾は免れなかつたが　詩壇全體の上から見ると、この放膽な、若くは投げやり極まる譯業が、かへつて興味ある結果をあらはしたのは面白い現象であつた。

すなはち、この集の二百六十篇は、譯者も書いてゐるが、多く當時の新聞雜誌に散見したものを片端から紹介したもので、「語學に資することを主とした」から逐語譯の體をとつたと斷はつてはゐるが、決して逐語譯ばかりではない。豐富な國語の知識が活用せられて創作にひとしき、若しくはそれに近い程度の効果をさへ舉げてゐる。しかもその種類は「批評家をして便宜上詩派の項目を分たしめるならば、矢張、耽美派、感傷派、優婉派、頹唐派、享樂派、諷諧派、人生派、未來派、等に概括することが出來る。未來派及び其傍系と見るべき立體派、綜合派、並存派等は他の視聽を惹いて勢力を張らんがために、姑く詩人自ら派を稱して居るが、其他は批評家が外より加へた名に過ぎない。」といひ、「現代の佛蘭西に勃興した新精神」は「ロダンに匹敵する巨人ヱルアアラン氏を初め、謂ゆる人生派の衆星」で、かの未來派、立體派、並存派は人生派の誇張にすぎずとなし、色とりどりのけじめはあれど畢竟、レニエの謂ゆる、「自己の生より根ざした眞實の詩」が各派となつて並存するのだとし、早晩この詩派の別はフランス詩壇から消失するであらうといふレニエの豫言に同意を表してゐるし、も一つ注目してをくべきことは、自由詩の作者がその數を著しく減じたことを報じ、大正三年四月號LA TERRE LA TINE(ラ テエル ラ テイヌ)誌上で知名詩家が自由詩に就て答へた言葉を援引し、JOURNAL(ジユルナアル)新聞でGustave Teryが「今や正しき詩を賦する詩人等の激增することよ」と驚嘆したと云ひ、詩壇の多數派たる人生派が自由詩か自由詩の精神と技

行と合致してゐる事實を見ても今なほ自由詩が勢力著しいには事實だが、自由詩は存外の詩壇を征服はしなかつた。從來の詩壇は、嚴として光榮の地歩を占めてゐる。」となし、自由詩の首唱者中の氣の弱い大多數が自由詩を見棄てたのは、自由詩に適しないと悟つて己が行くべき路に去つたのだとなし、自由詩體そのものの確立はヹルアアランの詩を見ても判明すると云ひ、さて譯者の心境は如何にと云ふに、フランスにデカダンの詩は永く絶えない。人生派や未來派が「時代おくれよ」、「弱者よ死せる者よ」と罵つても正直に眞實の自己を歌ふ外は道がない。ヹルアアランの大もマリネツティの强もレニエの高雅もノアイユの熱烈もジャムの素朴も「遠い世界の消息」だ。自分には「時代遅れの頽唐派（デカダン）の詩が一ばん僕に共鳴するやうである。」と云つてゐるのは、皮肉でも何でもない、彼の眞正直な告白である。與謝野寛は、詩集「槲の葉」の嘲笑調を歌ひ棄てゝ苦悶してフランスにゆき、語學の勉强のための譯詩集「リラの花」一卷を携えて、初めて自分がデカダン派であることを悟つて歸つたのである。クロズリイ・デ・リラの一隅で讀んだこの詩集には、然しながら、デカダン派への共鳴は固よりあらゆる詩派への關心が置かれてある。幾分の同感と幾分の共鳴とがある。それは彼が新詩社の殘黨を集めてなほも舊明星時代の夢を見んとすることを[illegible]めて、若い[illegible]この意味においきを[illegible]選したかの[illegible]つた[illegible]て、この若い[illegible]といふ[illegible]まで[illegible]せらるべく、むしろ、この[illegible]にも、ものそのものからも認むべきである。

この集と前後して永井荷風の「珊瑚集」（大正二年）が出た。かつて「三田文學」に、「スバル」等に掲げた愛誦詩の翻譯で、ボドレエル、ランボオ、ヴェルレエン、ゴオチエ、ピカール、ヴォオケール、レニエ、ヱロオル、グラン、カアン、ノワイユ、メリル、サマン等を收めてゐる。

荷風が小説壇に投じた新刺戟は、謂ゆる享樂文學の一體となつて、自然派以後の數年間を支配したが、彼のありあまる詩情は散文にのみ滿足せずして之等のありのすさびの譯詩となり、嵩じては浮世繪考證ともなり、散文詩ともなつたが、創作だけは試みなかつたのは、凝り性で完成の極致にあくがれるかれの好みが、草創期の新詩の處女林に植民的の第一斧を入れるがごときことを避けしめ、嫌はしめたので、その感情を彼の獨特の皮肉な表現で、

海月の歌

歌はんと欲すれども、生れながらに惱えたるわが[illegible]には固

もなし、Rime(リイム)もなし。韻もなくRime(リイム)もなき言葉を以て、詩を作らんとする果敢なさは、骨もなく鰭もなき海月の嘆きか。いづこと知らず心の波の動くにつれて唯だ浮び行くのみ。
浮び行くのみ。

と歌つてゐるが、その散文「紅燈集」や「浮世繪の夢」や「日本の庭」やその外の彫鏤をきはめた小品を見るものは、詩人と自ら號して散文詩、自由詩、口語詩と稱する品をひさぐ無知蒙昧な、元氣のよい、詩人にするには惜い程の精力みちた青少年輩よりも、遙かに此散文家の方が豐かな感情、卓れた技巧、秀でたる想像力の所有者であることを一見して悟るであらう。「珊瑚集」は譯業にかりてその詩的表現の欲望を滿足せんとしたものである。

奢侈(おごり)は生命(いのち)の樹になる死の果實。
羨望(せんばう)の齒の根を動す禁制の果實
倦怠の沙漠に坐せる黄金の怪獸(シメール)
老いにし「欲情」と「夜」より生るる汚れし女。
七重なる綾羅(うすもの)の上にはめ込みし「惡徳」の金剛石。
火の火。血の血。骨の中なる髓の髓。
地の底の靈藥を持てる浮浪の魔女。
腦漿を吸ひ取り精氣を挽(ひ)ぐ魔女。
斯くぞ贊へん。幽遠神秘の「奢侈(おごり)」
あゝ偉なる哉、暗黑(やみ)の宮殿(みや)のこの「奢侈(おごり)」

にはじまり、

現世(うつしよ)の不朽不死なる妃(きさき)にも例ふべき此の「奢侈(おごり)」

に終るサマンが詩の聯想連聲の壯麗體。

沈默の碑、美の墳墓よ。
「悲しみ」は其の瓶に灰となりにし。

にはじまるレニエが「空」

空は屋根のかなたに
かくも靜に、かくも青し

といひ、又、

ああ神よ。質朴なる人生は
　かしこなりけり。

のしんみりしたヴェルレエン、

「月」今宵、いよよ懶く夢みたり。
おびたゞしき小蒲團に亂れて輕き片手して、
まどろむ前にそが胸の
ふくらみ撫づる美女の如
　　　　　　　　――「月の悲しみ」

とうたひ、

ああ君が膝にわが額を押當てゝ
暑くして白き夏の昔を嘆き、
軟かくして黃き晩秋の光を味はしめよ。
　　　　　　　　――「秋の歌」

と嘆じ、

わが青春は唯だ其處此處に照日の光洩れ落し
暴風雨の闇に過ぎざりき。
　　　　　　　　――「仇敵」

とかなしみ、

森よ、汝、古寺の如くに吾を恐れしむ。
　　　　　　　　――「暗黑」

と叫び、

われ遺書を厭み、墳墓をにくむ。
死して徒に人の涙を請はんより、
生きながらにして吾寧ろ鴉をまねぎ、
汚れたる脊髓の端々をついばましめん。

おお蛆蟲よ。眼なく耳なき暗黑の友、

君が爲めに腐敗の子、
放蕩の折學者、
よろこべる無賴の死人は來る。

——「死のよろこび」

と切言したボオドレエルなどにより、詩壇は正しく「海潮音」にも「有明集」の譯詩にも「リラの花」にもない新調、新聲を聽いた。これはボオドレエルと荷風との合作詩であつた。ヹルレエンと荷風との合著であつた。小說といへば事件の推移の興味によつてのみ讀者を牽引し、譯詩といへば、原詩の布置結構やテンスなどに拘泥して蠟を喰むやうな言葉の黑ずんだ殘骸にしかすぎないものを原作者の名の偉大によつて人目を集注せしめるにすぎないのに、荷風の小說は一句一言に想像力が詩の如くあふれ、聯想豐かに香り、句々之を味解玩味するに足る名文章であつた。この點は、泉鏡花も同じである。荷風の譯詩は荷風の詩作であつた。この集の他の効果の一は、口語詩が時花り、自由詩形が詩壇を壟斷し、人生派が市に榮えるの時、言葉に對する愛賞の念、美感の尊さ、眞技巧の價値を、新らしく出でたる詩の初心者即ち詩壇のいはゆる「新進作家」に教へ込むだことである。若くは、その輕浮にして頑迷な、わが眞性の裏附けなき徒らなる「新しがり」に幾分の危惧心を與へたことである。

に他の効蹟は、「海潮音」に次ぎ、「リラの花」に先んじてフランス近代詩を創作の形と心とに於て紹介し得た點である。これらフランス詩の移殖は、今まで變則なる語學屋的英詩祖述のみを異邦詩の研究と心得てゐた詩壇並びに一般讀詩界に新らしい轉回を與へた。大正四年一月に早稻田文學社文學講話叢書の第九篇として出た吉江孤雁の「近代詩講話」中にも、ボオドレエル及びヴェルレエヌの小傳と批評と短詩の引譯とがあり、同年九月に公けにされた川路柳虹の「ヴェルレーヌ詩抄」は、選集 CHOIX DE POESIES の拔粹譯として、約九十篇を收め、その外、岩野泡鳴「悪魔主義の思想と文藝」（大正四年）にギロン、ゴオティエ、リール、フロオベール、ボオドレエル、ヒュイスマンズ等を論じ、後藤末雄の「近代佛蘭西文學」（大正三年）に斷片的紹介を收錄し、久保正夫の「佛蘭西文學史」（大正五年）出てダウデンが著を拙い乍ら飜譯紹介したが、さきに出た折竹蓼峰、内藤水濯らの譯業と紹介とに引きつゞき右の諸著は玉石同架ながら、ひとしく新らしい異邦趣味の對象としてのフランス文學の興味を惹起するべく最初にあらはれた文獻で、大正五年七月京都で客死した上田敏が四十三年秋から翌春かけて京都大學に試みた特殊講演の筆記集「現代の藝術」（大正六

年）にもフランス最近の詩、特にヴェルレエヌを述いてあり、かれの最後の著作として殘されたエツセイ集「獨語と對話（大正四年）にも詩と律と近代の精神及形式を簡易に論じてあるが、上田敏は日本近代に於ける外國文學の正しき輸入者としての第一人であり、その「海潮音」のひびきは三十八九年後四十年代より大正現代までも廣く強く大いなる感化を詩界全體にわたつて與へた。「海潮音」後のかれの譯業は「牧羊神」（大正九年）に收められ、後更に「上田敏詩集」（大正十二年）に一切の作詩と譯詩とを總收せられたが、「海潮音」後の譯詩の傾向は明るい晩近派の諸流風にはしり、ヱルハアレンが「世界」LE MONDE「都會」LA VILLE「思想」LA PANSÉE「俊傑」LES ELITES の强勁壯大な思想の境致にあくがれてそれらの譯とそれらに就ての講究があつたが、前述の通り、もとより之は本來のかれの感情趣味に一致する本質のものではないから、只語勢の上の强み計りで浮いて出て內心の底力が感ぜられなかつたのは當然の仕儀であるが、大正四年發行のアンソロヂー「踏金草」に載せられたポオル・フォオルの「兩替橋（ポントオシアンジュ）」のしなやかな德川ぶりの小曲情調をとり入れた旋律、

ポントオ・シァンジュ花市の晩。風のまにまに、ふはふはと、又六月の宵、七つにほひ、あすはマリヤのお祭の宵宮にあたる賑やかさ。西の雲間に河岸並に金の入日が、ぱつとして、群集の上に淡紅の光の波のてりかへし。シアトレエの廣場には人の出さかり、馬車が跳れば電車が滑る。辻の庭から打水の繁吹の霧がたちのぼり、風情くははるサン・ジャック、塔の姿が見榮する……」

にはじまる輕快な散文律の面白さは、七五格律を口語詩に試みてそれを散文風にあつさりと書き下したところに於て一きはその妙が加はる。これは譯者自らも好んでゐたのか「マンダラ」にも劈頭に採錄してゐる。同じ人の「別離」に、

——せめて、なごりのくちずけを窓へ出てみて投げませう

——いやいや濱風、むかひ風、くちづけなんぞは吹いてしまふ。

の民謠風なくだけ方も彼なればこそと肯かれる錐の冴えが見えるし、グルモンが「薔薇連禱」LITANIES DES ROSES、「むかしの花」FLEURS DE JADIS 等の聯想の連吟に於ける言葉づかひの注意ぶかさは

新らしき美をわれは求める。
墓の上に遠慮なく舞踏するわれらだ。

といひ、

古書に傍註して之を汚す者よ、
額づき拜せ、われは神だ。

といふギイ・シャアル・クロが「譫語」DÉLIRE にも、

大洪水に洗はれて、さつぱりとしたお月さま、
解熱の效あるその光、今夜こゝへもさして來て、
寢台に一杯漲れよ、さるほどに小生
この浮世から手を洗ふべく候。

と結ぶ「月光」CLAIR DE LUNEにも、「冬が來る」L'HIVER QUI VIENT の破題、

感情の封鎖。遠東行の郵船……
ああ雨が降る、日が暮れる、
ああ木枯の聲…………
萬聖節、降誕祭、やがて新年、
ああ霧雨の中に、煙突の林………
しかも工場の………

の中にも「日曜」DIMANCHES (LE CIEL PLEUT………)の功妙をきはめた譯しぶり、

日　曜

ハムレット――そちに娘があるか。
ポロウニヤス――はい、御座ります。
ハムレット――あまり外へ出すなよ。腹のあるのは
結構だが、そちの娘の腹に何か出來ると
大變だからな。

しとしとと、無意味に雨が降る、雨が降る。
雨が降るぞや、川面に、羊の群の小娘よ……
どんたくの休日のけしき川に浮び、
上にも下にも、どこみても艀も小船も出て居ない。

うかたのつとめの鐘が市で鳴る。
人氣の絶えたかしつぷち、薄ら寂しい河岸つぷち。」

いづこの塾の女生徒か(おお、いたはしや)
大抵はもう、冬支度、マフを抱へて有つてゐに、」

唯ひとり、毛の襟卷もマフも無く
鼠の服でしよんぼりと、足を引摺るいぢらしさ。」

おやおや列を離れたぞ、變だな。
それ駈け出した、これ、これ、ど、ど、どうしたんだ。

身を投げた、身を投げた。大變。大變、
ああ船が無い、しまつた救助犬も居ないのか。

日が暮れる向の揚場に火がついた。
悲しい悲しい火がついた。(尤もよくある背割さ)

とめじめと川もひつしより濡れるほど

しとしとと降るともなく、世の煩ひの雨が降る、さらさらさら。

の作者ジ・カル・ラッ・セルクが新興の詩壇に生じた出来た若き世代ひの中にも十分窺はれる。この特色ある詩境を好む者は更にベルトランやシ・オブが散文詩に一段卓れた腕前を見せた。即ち、「夜のガスパル」の諸篇、「小兒十字軍」中の二篇がそれである。「淋羅曼迷風を約めて一幅淡彩にしたやうな」と評いた「ハルレム」の「戀に身の細る花賣むすめ。」「石工」の「鼠色の一點と見えるのは、飛げた僧のぎざぎざした兄弟の腕の羽。」と言いた有鬼の樋嘴、「鍊金堂寶」の博士ホイルテンのまなざし「五本の指」の色珍らしいにほひ阿羅世伊兆、「湖夕」の俗話「鍊金道士」の呪文聲。「サバトの門立」の破牛オロン。「浮浪學生」のことば、「癩病やみの話」の對話。「法王の祈禱」の身振ひ。此等はかれ獨得の譜代の言葉、その學殖と洗練された趣味とから獲得した譜代の感情によつて裏附けられ、恐らく本邦に文學作つてこの方最初の畸異なる一流風を創始してゐる。こゝよりして東邦の古島にも一人のシュオブ、三五人のベルトランが生れ出る未來あるべきは易く想像するに難くない。假令んば、その文體になほ若干の批點を加へる餘地はあるにしても、この詩情との詩の一端を移した效果は亡しがたい。「海潮音」後のこれら

の諸篇はなほ今後の詩壇に夥しい感化を與へてゆく美と力とを持つてゐる。「海潮音」の「重厚沈鬱」を與謝野寛は以て病としたが、かの沈鬱あればこそ、この幽愁が生れたのである。しかも「海潮音」の沈鬱は病でない。かの著からかの沈鬱をのぞけばその價値の三分の二は減ぜられてしまふ。上田敏は十分にその學殖を發揮せずして死んだ。大學に於けるその講義は、理解なく教養なく趣味なき學生を對象とするに厭氣ざして彼に似合はぬ疎淡なもので終始したと聞くが、「現代の藝術」にしても「獨語と對話」にしても眞骨頭をあらはさずして一般聽衆に腰を一段と下して講じ、あるひは書いたものである。否、かれは假令んば如何なる好機會を與へられても、多く讀みかつ味はひたるものを悉皆わが血肉として打ち出す準備を自身に於ても缺いてゐたやうである。かりに三四十年の歳月を天が貸し與へたとしたならば或ひはかれらしくまとまつた境致に入つて獨得の創見を思想の方面にも發揮しえたかも知れないが、かの晩年の頃にはまだその圓熟は與へられてゐなかつた。晩年の興味である民俗學の研究にしても「伊曾保物語考」といひ、「民俗傳説」にしても「菩薩物語由來」にしてもその方面への第一歩を踏み出した許りであつた。かれの語學力と鋭敏と趣味性とを以てこの方面に精緻な考證を試みたならば、斯學の進歩の上にも計るべからざる貢獻があつたらう。これは森林太郎が晩年の考者研究の中道にして挫折したに似てわれらの返す〲も惜んであまりある點である。が、たとへば、エソプ寓話の源流考のごとき、固より參照の文獻はあつた事であるが、今までにかつて見られず整然と類話の流動降下した道程を簡明な講話の中に述了したことは彼ならでは出來ない業であつた。專門とする英詩英文學の研究に到つては片鱗すらも示さず、「思想問題」（大正二年）や「文藝講話」（四十年）中に概觀の概觀をなしたのみに終つた事も遺憾であつた。遺註「小唄」（大正四年）は明和八年板「山家鳥蟲歌」と、文政本琢玉齋板「小歌惣まくり」とを飜刻註疏したものであるが、かれの徳川趣味、民謠好きの餘からなつた「消夏の一葉」であつたが、外の板本にも勝る本文批評の上の新境致を拓いたものであつた。なほ外に「聖教日課」（大正六年）を再刻し「文祿慶長と連絡ある國文學上の價値ある一文獻」の俤をつたへて「十六世紀から語り傳へた國語祈禱文の姿を示」（「聖教日課」飜刻本小引）さうとしたのは有意義な企であつた。

上田敏の歩いた道、踏まんと志した路は、枯淡嚴粛な學匠の生活でもなく、さりとて放逸自恣な詩人の生涯でもない。この小説「渦卷」の主人公が念じて居る通り、又かつてその友深田

[illegible]おさした[illegible]り、[illegible]味ふて示せす恬然と人生の哀歡に高踏せんとしたのであるが、これまでの高所に徹底はしなかつたけれど、或る心境にあくがれ乍ら靜穩なその一生を終へた。

『寫生を樂しまう。生活を豐富にしよう』と絶叫する春雄は、終りまで、其傍觀的觀照主義、藝術的享樂主義を守つて滿足し得るであらうか。『此明とした珠のやうな焰に燃えて、いつも／＼此大喜悦を維持する』力は抑何所から湧き出て來るのであらう。『高踏派の詩人が憤慨した如く、群衆に向つて自分の醉狂や苦悶を賣るのは厭だ、嘲罵喝采の裡に、自分の心を投じるのは厭だ、俳優藝笑の徒と並んで、あの平凡な舞臺の上に跳るのは眞平御免だ』と思ひ、『眞に藝術の愛がある少數の人と共に美の宗教の崇拜を行ひたい』と心掛ける享樂主義は、其發足點に自ら背いて、生活と絶縁孤立することに依つて、遂に其感激の源泉を涸渇せしむるに終るであらう。此に至つて享樂家の有する一種の用心深さは恰も roué の甞めるニル・アドミラーリに異なるものではなくなる。而して其抱く所の一種の哲學は、セント・ベーヴが自白してゐる樣に、後朝の物憂さの鈍い安逸の中に醸される汎相對主義若くは懷疑主義に墮せざるを得ない。かうして實行上に於ては「倒錯者」を茶にして外らし、弱い

[illegible]は[illegible]してゐる[illegible]果に於るであらう。私は[illegible]たいわけには行かぬ。而して此[illegible]探つてゐた博士は今已に許々の中から去られてしまつたのである。」（大正五年九月「藝文」「うづまき」深田博士）

この同情ある批判をした人は、恐らく上田敏の予所をも見拔いてゐたに相違ない。彼は尙踏つて日く、「斷る迄もなく、春雄は上田博士ではない。少くとも其全體ではあり得なかつた。正人は作物よりも大きくなければならぬと云ふ理由に依つて丈けでも。」（同上）。

しかし晩年の上田敏が人生派を說きバレス後半期の作品に同感してゐる事を知る者は、彼の享樂教にも晩年の人生派に[illegible]も、兩者の關係にも、悉く無理が横はつてゐた事を知る。この非理を抱いて彼は學匠的寂しき花やかさの中に死んでしまつた。

「リラの花」「珊瑚集」に次いで出た譯集は堀口大學の「昨日の花」（大正七年）で、ヴエルレエン、サマン、グウルモン、ラフオルグ、フオール、ジヤム、クロオデル、チユアメル、モレアス等十八詩人六十餘篇の佛詩を收め、譯詩の獨創性と豐富

と、鑑賞の鋭敏と正しく新詞人が譯業中の唯一の白眉であつた。

過ぎし日のバビロンの最後の安息を眠るかな。
　　——「死市」

と靜かな歌口を示すサマン。グウルモンが「邪禱」の聯想美。

微笑は模糊として捕へ難き神なり、命短かき光なり、
碧潭風無く波靜けき所、矢の如走る蜻蛉が
水面を輕々掠め去るその瞬時にも似たるかな。
　　——「微笑」

といふ重厚な詞姿は、

シモオン、川は質朴な唄を歌つてゐる、
さあ、二人で燈心草と河骨の中へ行かう。
　　——「川」

といふ輕快な感情ととなりし

哀みに心うち鎖る
尼の如くに青ざめて、
月はそがさびしさの

おお！樂の響に聞入れよ、
遠き狭霧のうちより起る、
有耶無耶の樂の音の消えも入りなん氣合ほど
やさしきものの世にありや。
　　——「水上奏樂」

といひ、

空は今青ざめし黄金色の湖に似て絶え入らんとし
遠く望めば人なき廣野ももの思ふ風情なり、
　　——「夕暮」その三

と描き、

果しなき砂原の奥にかくれて荒漠と
塔も砦もあらぬそのかみの市は
散らばれる大理石の白き經帷巾の陰に

[illegible]

——「尼の如くに青ざめて」

の幽愁に、「港の朝」の

見よ、大理石の門と大なる建物の
遠き光に照されて聳ゆるを、
匂はしき風は朝の爽快（さはやか）さに
異域萬里の冒險を思はしむ。

の明澄な叙景と交らつて、凡そ當時の譯詩に行はれた蠟を喰むやうな死語の行列から完全に脱出してゐる。大學の譯業はこの一卷にはじまつて打ちつゞく數卷に文語、口語を交へてあらゆる詩傾向を巧みに移殖したが、彼の貢獻の反響は漸く今日の青年詩人に見え初め、未來の詩林になほ長い感化の綫（いと）をつゞけてゐる。

扨、かく佛詩佛文學の輸入せられると同時に、獨逸文學も學匠森鷗外の手によつて夥しく移殖せられた。かれの「一幕物」（四十二年）、「續一幕物」（四十三年）、「黄金杯」（四十三年）「諸國物語」（大正四年）、現代小品」（四十三年）、新一幕物」

[illegible]

のかを逸へてたるな。その點かたのほしけには、さしもに一哉に薬ばけばれた小説家夏目漱石も足下にだも及ばず、鏡花秋聲あるとして人格の迫力深かつた坪内逍遙もはるかに遠しがたいものである。かつて私はかれを評して、「紅葉は小説好きに好かれ、獨歩は素人に好かれ、漱石は雙方にまたがつてゐたが、氏のみは、文士のための文士であつた。」（「詩壇の散歩」百六十三頁「新詩史上森林太郎氏の立場。」）といつたが、かれの影響は、一旦文士らに及ぼし、その文士を通して、一般小説讀者文學好きらに浸潤して行つた所が多い。

大正四年發行の「沙羅の樹」には譯詩デーメル八篇、モルゲンステルン一篇、クラブント十篇、ビヨルンソン、グルック、ショッテリウス各一篇と外に作詩沙羅の木初め十五篇が入つてゐるがそれらの内特に作詩は多く「明星」後期に試みられたので、「そこに培はれた芽ばえである。それが風俗雨虐の中に萌して秀でずこゝに哀な記念を留めてゐる。」と自記してゐるが、實際は、それらの譯詩作詩の中に試みた最初の開拓は、新劇に於ける先驅者としての效蹟、小説界に與へられた新感化とひとしく、かれの鋭感と先見と進んで實行する信念の價値とを實々するもので、

神のへど

どの神やらがへどをついた。
其へどの己は、其場にへたばつてゐて、
どこへも、どこへも往くことが出來ない。

でも其神は己のためを思つて、
いろいろの花の咲いてゐる
野原に己を吐いたのだ。

己は世に出てまだうぶだ。
おい、花共、己を可哀く思つてくれるのか。
お前達は己のお蔭で育つぢやないか。
己は肥料だよ。己は肥料だよ。

——クラブント

のごとき、その翻譯の年月は今定かでないけれども、大正四年に出た詩集である以上、晩くても二三年中の業とおぼしいが、その頃これだけに口語の詩を安々とこなしたのである。かつてその人は「即興詩人」の幽雅體、「水沫集」の婉麗體を事とした人である。これを考へて見てもかれが如何に言語を使驅する自在であるかを、特に感情と言葉との因襲と惰勢とにとらはれず、詩情の赴くがまゝに易々と新文體に入りうる自由と柔軟と聰明とを持つてゐたかを悟ることが能きよう。

靜物

春になる。霞み初める
村の沼で
或る晩、ころ。
初蛙。
ころころ、和する蛙。
さて追追と數が殖え、
ころころころころころころと鳴く。
上には
日がけぶる。
ゆらめく青い蝶一つ。
めでたや。

——デエメル

これは文語の自由詩形にぞくする。作詩は三十八九年の交の作でいはゆる朦朧當時代の寫生詩として當時新詩境を拓いたも

[illegible]

本質價は更に價ほどでない。その

沙羅の木

褐色の根府川石に
白き花はたと落ちたり
ありとしも靑葉がくれに
見えざりしさらの木の花。

のごとき小景小情の淡彩畫は無雜であるばかりか、かすかなる殘香のごとき美もあるが、「三枚一錢」「旗ふり」「火事」等の當時いはゆる「自然主義的」なる詩は、市井雜事を卒直にとり入れた處で當時目新らしく感ぜられたといふだけで、今より見れば別に不思議がる美も力もあるものではない。作者としても非道く腰を下して樂に作りすぎたほどの樂な作であるが、只象徵派といひ浪曼派と稱して古代と異邦と幻境と夢魘とを好んで歌ふ一代の詩風のなほ盛んな間にこの新風趣を入れた處にかれの開拓力が認められるといふ丈けである。「沙羅の木」一卷の價は勿論譯詩にある。さきに引證した外になほ次の如きは異種の特美であつた。

[illegible]

イギリスの尼さん達が長い行列をして町を通る。
二人づつ並んで、引つこ拔いた[illegible]のやうに、
黒い外套を着て通る。夏になると。
其上に紫の帶を締めてゐる。
夜は一人づつ床に寢るのだ。
中には一度一しよに寢度いやうな、
美しいのが交つてゐる。だが皆ひどく小さい。
黒い頭巾を被つた姿がひどく小さい。
一ダアス位一しよに可哀がらなくては駄目らしい。

本來詩人であること以上に文人であり、學者であつた鷗外は、その後自然の侄路たる考證學風に轉じ詩作を全く廢してしまつた。かれの詩情、詩美は文章の間、叙景の中、トガキの裡に光つてゐる。しかも創作詩の逸品を今更期待することもない。因て、敢てその作詩のないことを惜むには及ばなかつたのであるが、若しかれの注意が詩壇により強く光つてゐたならば、あるひは更に第三、第四の新らしい移入、詩作によつて詩壇を啓蒙したかも知れない。さういふ欲望があまりに無さすぎる詩壇であつたのであるから。

鷗外の文業はその外偶然の機會で年來の蓄積を披瀝する事が多かつた。その「ギョーテ傳」(大正二年)はや丶遡つて西園寺公望の雨聲會に胚胎する文部省の文藝委員會の事業としてかれの手により譯出せられた「フアウスト」(大正二年)の從屬事業として、「フアウスト考」(大正二年)とともに生れたものであるが、嚴正に個人の部分的批評及び概括的批判を交へずにゲーテが行實を精細に報告して、一にその事實の過誤なきを期したものであるが、たとへば、三十二章哲學の項などに於ては、能くこの汎神論者詩人の思想の核心をつかんで同時代哲學及哲學者との關係交渉を簡勁な描寫の間に鏤刻してゐる。

譯本「フアウスト」に、かつて出た高橋五郎の重譯本及びこれと前後し出てた町井本「フアウスト」又は新渡戶稻造「フアウスト物語」等により斷片的に、あるひは誤つて紹介せられたこの大人生書を最初に夥しい效果をもて完譯した善本で普通の白は、

　　フアウスト(鏡に向ひて)
あ丶、どうしやう。已にどうやら氣が狂ひさうだ。
　　メフイストフェレス(獸等を指さす。)
もうこうなると己でさへ頭がぐら〳〵して來る。
　　獸　等
こつちとらに出來るなら、
こつちとらがして好いなら、
そんな　それが考だ。
　　フアウスト(前の如き態度にて。)
あ丶。己の胸は燃えて來た。
どうだ一しよに早く逃げてくれ。
　　メフイストフェレス(前の如き態度にて。)
兎に角正直に告白する。
詩人だとは認めて遣らなくてはなるまい。
　　　　――第一部。魔女の厨」。

のごとき極くだけた口語で、劇詩の間に挿入される歌のみが七五その他の文語によつて譯されてゐるが、口語の方はきはめて蕪雜な詞相であるに反し、不思議にもたとへば、魔女の誦等に文語詩の形骸的格式にはまつたのみにとどまる平凡無味な個所があるのは一には此飜譯を忙いで雅文格律詩の心ゆく迄の推敲を惜んだためであらう。尤も、マルガレテの

　昔ツウレに王ありき
盟渝(かへ)せぬ君にとて:

の歌などは單純な言語の布置であるだけに難がない。「フアウ

[illegible]き、[illegible]な詩境に僅かな感化を與へなかつたが、その時より數へて今日及び未來に渉る長時日の間に廣く強い影響を詩壇の卓拔な個人々々にのみ加へるであらう。

鷗外は幾多の獨逸文學研究者を生んだが、大正期に入つてからは、昔から評釋類を多く公けにした秋元蘆風が「獨逸詩歌講話」(大正三年)をいだし、「獨逸名詩評釋」(大正二年)をいだし、「現代獨逸詩人」(大正四年)をいだしてゐるが鑑賞のセンスの不足と言語に對する鈍感とのためその努力に何ものをも酬ひられなかつた。靑木昌吉の「十九世紀の獨逸文學に現はれたる其國民思想」(大正八年二月「帝國文學」)の類の概觀や片山孤村の「トーマス・マンの詩人觀」(大正七年九月「帝國文學」)、藤浪由之の「ハイネ傳」(大正五年)、茅野蕭々の「ギルヘルム・フォン・ショルツの詩」(大正七年九月「帝國文學」)等の如き個人研究が次第に輩出したが、中にて蕭々は「ライネル・マリヤ・リルケの藝術」(大正六年七月「思潮」)及び、「リンケの見たる神、自然その他」(大正六年十月同誌)等に於て、また獨逸、墺太利の晩近派諸詩人の研究及評詩に於て、他の人々に遙かにぬきん出た鑑賞の確實をあらはしてゐる。恐らく三十年代末期から四十年代初期に於ける櫻井天壇の文業と對立するべく、そして時代[illegible]

[illegible]

閑却せらるべき[illegible]人であらう。

英文學の輸入はかつても述べた通り出發點から誤つてゐて、その後不相變學者の翻譯と「[illegible]」學者の紹介とによつて無斷せられて來たが、大正初期に入つて漸く鑑賞ある紹介批判の續出を見、「イノック・アーデン」(長谷川勝譯四十四年)や「牧笛の魅」(牧田勝譯。同年)の如き所謂譯註者の群の後を受けた改元以降は、片上伸がイエーツ、シモンズを論じた「生の要求と文學」(大正二年)出で、泡鳴がシモンズの「表象派の文學運動」(大正二年)出で(この譯本は杜撰であつた。)、又、內村鑑三の「平民詩人」(大正三年)は大まかに思想をつかまうとしたに過ぎぬものであり、櫻井鷗村「英詩評釋」(大正三年)は評釋書にすぎなかつたが、柳宗悅の「ヰリアム・ブレーク」大正三年)は當年までの文獻を殆ど全部涉獵しつくし厖然八百餘頁の浩瀚書で、その鑑賞、特に微細な感情の表白の箇所の批評に概念的な見方こそ尠からずあつたけれど、年少紅顏の學徒が日本に最初にさゝげたブレーク文學として、及び、ブレーク宗徒としての青年の情熱を灑いだ感懷が在來のそれとは異つて飽迄も冷

公正とを失はぬ新しき文學研究の一の型を示したものとして劃期的の意義があつた。イエエツの「善惡の觀念」(山宮允大正四年)。つゞいて邦譯せられたが、その外、タゴールの紹介譯書は、荻野庄平が譯詩(大正三年「未來」)增野三良の「ギタンジヤリ」(大正四年)、「新月」、(同年)、「園丁」(同年)、「佛陀の捧物」(三浦關造、大正四年)、花園綠人の譯註「タゴールの詩と文」(大正四年)、齋木仙醉の「カビールとタゴール」(同年)城南社編「名士のタゴール觀」(同年)、敎育學術研究會編「眞タゴール(大正五年)等出たが、多くは雜駁不用意な斷片で、只增野譯本が著しく用語上偏失に傾いてはゐたが、タゴールに對する熱情が溢れてゐた。大正五年に公刊した平田禿木の「近代英詩選」は譯といひ、註釋といひ細かい鑑賞の餘に成つた詩心ある第一書で、輓近この人に雁行する英詩文の鑑賞紹介者はない。ミルトンが「コーマス」(菱沼平治。大正五年)、鹽谷榮が「英詩文の鑑賞そゞろあるき(同年)、小林愛雄「近代詩歌集」(大正七年、「現代萬葉集」大正四年、帆足理一郎「人生詩人ブラウニング」(大正七年)、南日恆太郎「英詩藻鹽草」(大正五年)、「テニスンの詩」(入江花錦。大正四年)、「ウオーヅウオース詩集」(畔上賢造。大正四年)、「湖上の美人」(馬場睦夫。大正四年)等出で、特殊の研究としては、イマジズムの最初の單行本紹介に山宮允の「詩文研究」(大正七年)があり、大正二年雜誌「聖杯」(「假面」の前身)はイエエツ號を出し松田良四郎、西條八十、日夏耿之介の飜譯紹介を掲げ、チヨーサが「カンタベリ物語」(金子健二。大正六年)口語體として出板せられ、マイヤズが譯詩「聖ホーロ」(齋藤勇。大正四年)初めて現はれ、現代英詩の紹介と印象とに「現代英詩抄」(山宮允。大正六年)と、「歐洲文壇印象記」(野口米次郎。大正五年)とがあつた。カーペンタアの譯本は「民主主義の方へ」(富田碎花。大正五年)が單行としての第一聲で、フイツトマンの研究紹介飜譯は雜誌に大正六年以降夥しく出た、「早稻田文學」(大正八年)、「白樺」(同年)、「現代詩歌」(同年)等の誕生百年記念號がそれであり、「現代詩歌」は別に大正六年の交に研究號を出し、トラウベル研究は、同じく大正六年の頃より隆盛となり、雜誌「民衆」は大正七年十二月その研究號を發兌した。フイツトマン研究の單行本は大正八年後に到つて續々と出現した。即ち、碎花本「草の葉」(大正八年)と白鳥省吾の選集「ホイツトマン詩集」(同年)等である。有島武郎の「草の葉」譯詩は「叛逆者」(大正七年)に收められてある。

かく獨佛英米詩の旺盛に赴くと共に、他の國文學も亦次第に輸入せられた。片野脫牛「ルバイヤツト」(大正三年)は英譯文

[illegible]べく、ツルゲーネフが「散文詩」も英獨からの重譯で屢二三公刊せられた、「散文詩」（三浦白水。大正二年）、「散文詩」（生田春月。大正六年）、「新譯散文詩」（藤浪由之。大正八年）等がそれである。

ダンテ學文献は上田敏の第一著後、大正六年に到つて、「神曲淨火篇」（山川丙三郎。）「新生」（中山昌樹）出で、翌年、上田敏の未定稿「神曲」が遺稿として出刊せられた。露西亞文學も昇曙夢の「露國現代の思想及文學」（大正四年）中に斷片的に紹介せられ、その後次第にその數を增したが詩の鑑賞力なき語學者、小說好きの片手間仕事であるから見るべきもの他國文學に比べて少く、只、松永信成の「ソログーブ論」（大正七年十一月「思潮」）は行論何幼稚乍らとにかくアップリシエイションのある紹介であつた。かれは尚、雜誌「假面」にメレジコーフスキーをも譯してゐる。（大正三年五月「假面」）

われ　世の人には何の關係もなく、
また　世の善行なるものを信ぜず。
生をはかるに　異なれる度量、
異なれる　目的もなき美をもつてす。

われは　睡らず、　大いなる
青き大空を、
常に　單一にして純なる
しかも　不可解なること死の如き大空を。

あゝ　大空よ、われをして美しからしめよ、
高きより地上に降れるものの如く、
光り　輝き　冷やかにして、
遍ねきこと　神のごとくあらしめよ。

——「青き空」

この頃は、露西亞文學も英獨佛語を通じて味はれ、本國語に直接する者は外、八杉外二三者以外には松永、米川ら外國語學校出身の青年露西亞文學研究者のみであつたが、その先驅たる曙夢さきに「ゴーゴリ」を傳し、八杉「プーシュキン」を傳した外、「露西亞現今詩壇を評す」（曙夢。四十四年「早稻田文學」）なども出たが紹介的頭腦以上に出なかつたから、露詩研究の創見ある批評とては一も出なかつた。（アレクサンダー　ブロークを傳へたのは米川正夫が初めて大正元年十月「劇と詩」に揭げてある。）

一番手近な英獨佛語で異邦文學を漁ることは、啻に露文學のみでない。たとへば、鷗外がビ・ルソンを譯し、上田敏がアダ・ネグリ（彼は伊語をもたしなんだ。）を飜し、ダンテ小曲を傚へアラルコンを譯したとひとしく、山岸光宣は西班牙のエスプロンセーダを、埼野三良はリグ・ヴーダやタゴールやナイツを、松田良四郎はフロオリツキーを、大住嘯風はルバイヤットを、（「自然より人生へ」。大正二年）、生田春月及び鹿又某はペーテヒを、西條八十はボヘミア詩人の群れを、有明はオマア・カイヤムを、上田敏や日夏耿之介はサッフォーを、或は譯し或は傚した。巾幗文學の一團「青鞜」が阿部次郎や生田長江を招いてダンテやモウパスサンを聽いたのも此頃である。

これら文學興味の上の世界主義は、詩壇に何ら特別の波動を與へなかつたが、狹小で無知な趣味性の世界に强いて安住したがためにその詩境の新轉回を實行することの出來ない明治詩家に比して、大正初期以後は、寧ろ目まぐるしい程新古東西とり交へて珍奇な文學が紹介されて、徒らに新奇にはしるの趣味の上の獨立性なき輕薄な文學興味の上の遊蕩主義をあほつたと同時に又、遠き異邦文學や遥かなる古代文學の言語學的硏究の風をうながした事の果は、輓近漸くその兆が見えはじめた。その收穫は今後に待つべきである。

英獨佛の文學は、かくして詩壇の内部に、その他の國の文學以上の底力を以て浸潤した。英に作ふ米國と印度、波斯、獨に作ふ墺太利匈牙利と丁、諾、瑞諸國、佛に作ふ白、伊、西諸國の文學わづかながら之に準した。が、恒に隨ふ瑕瑾は、語學に堪能の學究は鑑賞に迂愚であり、味解に鋭敏な作家は語學に拙であつて眞に美しき効果を見せた譯詩文が尠かつたとで、今も昔も西も東もおしなべて變らざる咨嗟である。この島邦の離れたる低き文學の水準を高めるには、百の小腕の利く小才子作家を今の社會が精神的に物質的に優遇してやるよりも、一人の森鷗外や上田敏を生むべく心をつかふとの方が遥かに肝腎の仕事であらう。

最後に、在來、上田敏、片山孤村、角田浩々歌客、長谷川天溪、生田長江その他に解說釋義せられて、尙しば〳〵原始的幼稚なる象徵と譬喩との混同をなし、無益な論議が時あつて絕えなかつたが、大正七年三月の雜誌『思潮』に西田幾多郎は『象徵の眞意義』を說いて、ボドルエル詩を引證し、廣義に於ける一般象徵主義藝術の透徹な哲學的證明を試みたことは識者のみの注目を引いた。一般詩壇は殆んどその事實を知らなかつたが。由來、詩文壇に於ける論爭の過半は文藝知識の不確實なため、術語、用語の概念を誤り、そのため背後を向きあつて左に論議するの類の滑稽が多かつたが、判り易いがやゝ舊式な「ヰ

[illegible]

とめてある「近代文學十講」（厨川白村。四十五年）などから始まつて文學概論、詩歌入門等の書、「生命の文學」（松浦一。大正七年）、「新らしき詩の作り方」（生田春月。大正七年）、「新詩歌講話」（西宮藤朝。大正七年）、「文藝思潮論」（厨川白村。大正元年）「日本詩歌論」（野口米次郎。大正四年）、「新らしい詩とその作り方」（室生犀星。大正七年）、「英語便覽」（長井氏晸。大正三年）、「文學の本質」（松浦一。大正四年）、「詩歌講義錄」（曙光詩社。大正六年）等の一般向きの本が出て、（それらの書は玉石混淆であつたが、）この傾向はやや改つて來た。

なほ、アンソロヂーとしては「明治詩歌選」（新潮社。大正四年）が藤村、晩翠、晶子、泣菫、有明鐵幹を收め、「心の響」（水野葉舟編。大正五年）が詩家三十五人と新聲社（S、S、S）の一集團を網羅してゐた。また歷史としては「日本文學新史」（尾上八郎。大正三年）が新體詩初期に言及してゐる。

六　當流詩家の類廳

享樂文學の傾向は、詩文壇兩面に鮮かな象（かたち）をあらはし、「スバル」（及びその後身「われら」大正三年刊。）、「三田文學」、「屋上庭園」、「朱欒」等が中心であり、その中心活動の人々

[illegible]

[illegible]お、大きな[illegible]に從へば、[illegible]

果、栗山茂、上田敏、高村光太郎、木下杢太郎、平野萬里、永井荷風、長田秀雄、與謝野寛、晶子、森鷗外これに和し、大學、漾風、春夫、吉井、好枝、黒田等の少年もこゝに集つた。

享樂文學と一口に云つても、固より個々の性別により各異種の特兆があつた。苦惱から逃避して享樂の外態を装つてゐるものもあれば、悠々たる蒼古の心境に逍遙して、時あつてつつましき享樂のけはひを示すものもある。傍觀者の享樂あれば學究の享樂があり、うら若き心情が本能的ににおり寄つた享樂もある。幻滅前の享樂あれば、幻滅後の享樂もある。遊蕩家の享樂あらば、モラリストの享樂がある。それからの大體の詩境については既に述べた。（「日本近代詩の象徴思潮」參照）

さて、この傾向に一番最初に赴いて一番夥しい効果を與げたのは北原白秋であつた。かれは木太郎、長田秀雄らと「屋上庭園」を創めた頃から、官能描寫に専心して、その第一號はかれの詩「おかる勘平」

……………………

おかるはうらわかい男のにほひを忍んで泣く、

鼻腔に玉葱の咽せるやうな強い刺戟だつたと思ふ。
やはらかな肌さわりがな月ごろの外光のやうだつた。
…………………、
おかるは泣いてゐる。
美しい身振の、身も世もないといふやうな、迫つた三味に
連れられて、
チョボの作和利に乘つて、
泣いて泣いて溺れ死にでもするやうに、
おかるは泣いてゐる。

(色と母と音樂と。
斷平なんかどうでもいい。)

を書いてゐるが、これを長田の

苦痛のやうに暗い夜
私はその唇の冷たさを
初めて知つた、涙がほろほろ流れてきた。

——「頽光」

の類の平面的描寫にくらべ、

朝だ。鶯鶯。起きろ。もう朝だ。
また今日も一日月琴を彈いて
汝に初めて會つた華舫の上の
長夜宴の歌でもうたはう。
朝だ。鶯鶯。起きろ。もう朝だ。

——「鶯鶯」

のやうなエキゾティシズムに比べると遙かにその官能は南國人の強烈を露してゐる。

若し大北狂太郎の「異國情調」

性慾の如くまつ靑な太陽が金色の髮を散らして、
異教の寺の晩鐘の呻吟のやうに高らかに、然しさびしく、
河の底へ……底へ……底へ……と沈む時に、
幻想の黑い帆前は
滑つて行……音もなく……
明るい灰色の硝子の外で、

［illegible］
されば其光の［illegible］は悲しく、
氏の銅色の額に反射した。——恰(さな)ら
青の鷺が落日(いりひ)の榕の森で鳴くやうに……
雲の彼方の鷹脊花咲く故郷へ、故郷へ、ねえ、故郷へ……。
——「北原白秋氏の肖像」

や「日本在留の欧羅巴人」の

東京に於ける年若き欧羅巴人(ヨオロッパじん)
日本 Musme(ムスメ). Geisha-girl. 夜の三味線
Japanese(ジャパニイス) Sake(サケ) 提燈、喜多川歌麿、
日光、鳥居、Samurai, Yoshiwara-Oiran.

濃き——灰色に濡れる日本の薄暮の空氣、
いと甘し、十月の Hotel の窓に倚る心、
——輕らかに口笛を吹き、
落日を眺めるやうな眼付して——、且歩む、年若き欧羅人。

云々にあらはれる

愛は［illegible］……［illegible］して、

重いシエリ酒の盃を皆にあてるヨーロッパ人、たとへばフリッツ・ルンプのやうな男の心持ちを歌つた作品にしても、白秋のそれとは非常に異つて、杢太郎詩には知識の重みがどつしりと、流れ出ようとする官能の力の上にかさにかゝつてゐるし、受用する官能感も白秋ほど原始的な底力がなく、教養でうすめられ、調節せられてゐる。長田のは正しくその中間を行つてゐる。

白秋は「東京景物詩」（大正二年）に四十二年より四十五年間の、いはゆる享樂詩體時代の代表作を収め、同じ詩心をば歌集「桐の花」に於て國歌的表現となしたが、その歌

ふくよなるボアの匂をなつかしむ十一月の朝のあひびき

とか、街上の漫歩に「雪よ林檎の香のごとく降れ」などと放吟して、當時にして實に新鮮な感覺的表白を續出して成功の域に迫つたが、越えて大正三年に「印度更紗第一輯眞珠抄」を刊行して短曲六十八篇を収め、同じ年に「白金の獨樂」を、大正四年に「わすれなぐさ」を大正五年に「東京景物詩」の増補改

題「雪と花火」を出してその後は小唄、童謠、の類の詩作に轉じてしまつた。これ彼の詩情の根本の動搖と頽廢と、同時にわが稟性のよく一致する小藝品としての民謠童唄の世界に逍遙したる事實とを示すものである。

白秋の辿つた道を見ると、「全都覺醒賦」の昔から、かれの受感性と表現性の著しく他に卓れてゐることは判明してゐたが、漸くにして「邪宗門」と「おもひで」で詩人的天分の青春期に達し、一代の音樂詩體は、かれの「おもひで」の感覺美から「東京景物詩」の「雜草園」、「片戀」、「物理學校裏」、「青い髮」、「銀座花壇」、「夜の官能」、「公園の薄暮」、「柳の左和利」、「雪」、「キヤベツ畑の雨」、以下の秀詞に代表せられ、其處には、そのいはゆる

いろんな官能の記憶にそそのかされて、
樂しい自身の愉快に耽つてゐる。
——「おかる勘平」——

といふ心持ちが、小唄情調をもてハツキリと浮出てゐる。

雪はちらちらふりしきる。
城の御濠の深みどり、
雪を吸ひ込む古うちの
しんしんと沁むたそがれに
鴨の氣弱がかきみだす
水の表面（おもて）のささにごり、
知るや知らずや、それとなく
小石投げつけ、——
ひつそりと底のふかさをきゝすます
わかき忠彌か、わがおもひ。

君の秘密の目くれどき、
ひとり心につきつめて
そつとさぐりを投げつくる
深き恐怖（おそれ）か、わが涙——
千萬無量の瞬間（たまゆら）に
雪はちらちらふりしきる。
——「忠彌」——

の如く歌舞伎劇に事よせて己が戀情を唄ふたのは、當時、ディレツタンテイズムの新見地から歌舞伎劇の價値が今更あはただしくもてはやされ、歌澤や左和利や肩衣や歌舞伎劇の花やかな情趣などが、新らしく取材とせられたからで、

鳴きそな鳴きそ春の鳥

[illegible]にきいに[illegible]

鳴きそな鳴きそ春の鳥
歌澤の夏のあはれとなりぬべき
大川の金と青とのたそがれに。
鳴きそな鳴きそ春の鳥。

の小曲や、永井荷風が激賞した

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
かはたれの秋の光にちるぞえな
片戀の薄着のねるのわがうれひ
「曳舟」の水のほとりをゆくころを。
やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

のごとき鮮醇な感覺、又「S組合の白痴」の狂笑等を見れば、かれの感覺が如何に南國人の原生的强壯と青春期の本能解放の耽湎とを時代の享樂的傾向に棹さしてゐるといふ自意識の上に立つて快適に躍動させて居るかゞ判る。

が、ここ[illegible]

に既存せる[illegible]つたが、同じ事の再説に厭きな詩人たちはこれをいたく嫌ふし、また、鋭感の讀者なら一讀にして之れを看破してしまふこと[illegible]。彼は、層々せるこの詩感の推積に自らも倦み、この感情に屹立して最早やその青春のリリカル・クライを吹げることが不可能に近くなつて來た。三日二晩にして即興的に成就したと自ら云ふ詩集「白金の獨樂」は早くもこの傾向を示したが、この詩集の本質美は皆無であつた。その得意の表現法を使用して、

感涙ながれ、身は佛、
獨樂(こま)は廻れり、指尖に。

かがやく指は天を指し、
極まる獨樂(こま)は目に見えず。

廻轉、無念無想界、
白金の獨樂(こま)音も澄みわたる。

——「白金の獨樂」

とその言葉づかひは依稀として巧緻ではあるが、言葉かれに

浮動して、内面の氣弱い、腰のくだけた詩感の赤裸體とちぐはぐになつてゐる。言葉は言葉として浮び、詩心は詩心となつてそのかげに重く詩的表現以前のかたちで沈んでゐて兩者は爭ひがたき乖離を示してしまつてゐる。

「白金交感」の不確かな詩感を突きとめると、「婬樂」、「佛足」等の外そごとにそらして澄み切らぬ二つのもの——胸中の相戰へるアンチノミーを、狡猾とは決して云へぬが、寧ろ氣弱に歌ひ棄てた態度のその裏の本性が判る。この詩集はかれの一番駄作であるが、それは前代と後期とをつなぐ過渡期に在るからで、この集以後、白秋に對する詩的愛好は急に江湖から減却してしまつた。この頽廢的の駄詩に就ては當時柳澤健が言葉烈しく辛辣に嚴評したのは無理もない。(「輓近の詩壇を論ず」(大正四年「文章世界」)

白秋の詩品が衰へた時、享樂派はいつかその赤道直下を航下してしまつてゐた。杢太郎は、白秋ほど通俗でなく、多作でなく、詩集も漸く大正八年に到つてその作の第二種ともいふべき種類のみ網羅した「食後」の唄が公刊せられたが、その時は既に詩壇の風潮も變化してゐたし、彼自らも著しく轉化してしまつてゐた、いはば時期を彩しく逸した上梓であつたから、一般はいふまでもなく、詩壇にも感化を與へずにしまつたけれど、もと〳〵、彼の詩的材能は鋭く强く廣いものがあつたので、只趣味の多い、文學の範圍のひろい彼が、詩作の一事に專心しなかつたため、その獨得の詩情も、「スバル」、「屋上庭園」以上に發達する機會を永久に失してしまつたのは是非がない仕儀である。

杢太郎の詩は、「屋上庭園」詩派の代表的なるものである。その異邦情趣は南蠻趣味から支那興味、考古諸學、美術批評、一般文學と翼をひろげて、それらの青年らしい學問的熱情が、やがて多くの美術評論や考古學術研究や支那傳說の興味や南蠻文學研究等の一端を披瀝せしめる基礎となつたが、かれのこの時代の詩情が咲かした詩歌の花はその數さへ少く、その發展さへ定まらずにそのまゝ生育を中止してしまつた。「食後の唄」に收められた詩は多く小唄竹枝の類である。この外にかれは尙規模の廣大な、重厚な、知識的な、複雜な、いはゆる「杢太郎情調」の詩をかいてゐる。これは彼の詩の第一種で、これこそは彼の「本領」である。これは白秋も云つてゐる。

その「本領」の詩を集めて公刊すべく準備せられ、つひに出る時がなかつた未刊詩集「綠金暮春調」には、素晴らしいかれの詩的放蕩がいと口重にあらはれてゐる。(「食後の唄」ではいと口輕にあらはれてゐるが)かれの詩情の複雜性がきはめて端的にあらはれてゐる。(「食後の唄」ではその詩情が極端に單純

[illegible]

この新らしい科學者にして詩人、[illegible]にして非凡なる一個の江流は、昔珊瑚紅玉の寶石を迎へた少年青年」（白秋「序」）がした如きときめきを明治中期の青年として感じてゐた。かれは古き清規を發見した。新らしき小土佐を玩味した。若き卉菊を發明した。その清規にはギヤマンの庖をとらせ、その小土佐にはラベイカを彈かせ、その卉菊には桅古聿（ショコラ）を呑ませて、ロチの如く嬉んで、ヘルンの如く悲しみ、やがてダウテンデイの如く默してしまつた。白秋は「食後の唄」に序して正當に云つてゐる。曰く、

「彼は比類稀な詩境の發見者であつた。だが惜しい事にはあまりにその効果を整理爲さうとしなかつた。彼の逐次の新發見は殆ど目まぐるしいばかりであつた。だが、彼はたゞ前へ前へと前進するばかりであつた。だから彼の背後には、常に勿體ない程複雜は複雜の儘に美は美の儘にたゞ燦々爛々と取り散らされてあつた。

たとへて云へば、彼は驕奢と眩耀とに燃え狂つた珍草奇木の間を、金弧を描く一羽の斑猫光の如く、それからそれへと花粉にまみれてまた未見の新世界へと飛び去つて了ふのであつた。

その杢太郎は、趣味に對する熱情とともに、究學に於ける理智

[illegible]

そのまた新らしい[illegible]に云ふにあらずして、「[illegible]たなら、[illegible]にも[illegible]、[illegible]ある[illegible]さくな」[illegible]の主人から、「小さい[illegible]つて、[illegible]、白新桃杯、無足杯、鞋尾杯、瑠璃杯の數々を示した（白序）されて飲み驗す類の、「[illegible]の[illegible]發見者ではあつたが、彼自らを決してその鴆毒の爲めに殺す癡愚と溺沒とを敢てし」（白秋「序」）しない聰明と理義との保持者であつて、彼自らは、その時分のあたまは萬華鏡のやうにごたごたしてゐて、又、「午后の雑草園の如く、醉客と錯雜してゐて、あはれ、「道」に觀ます、「深[illegible]」に離れ、全く精神上の浪費者」（杢太郎「自序」）であつたと嘆じてゐるが、事實は、「最も進んだ美の探検者」であつたかれは、「邪宗の法學に六年の長日月を奉仕して遂に一個清淨な帝貞として老いて了つた、支倉六右衛門の如く、結局謹嚴な淨身の帝貞として、彼は彼自らの青春の初期を空にして了つた。」（白秋「序」）のである。

この好學の青年學匠は、「朝の煙草」をうれしんで、「桜の花のしつこいかほり」の頃

かゝる、庭を歩み

草上に坐して新茶を啜れば、
五月の朝のはれやかな心の庭に、
世界のいづく、草の葉の一つにだに缺けさるかの一味の悲
哀の湧くをこそ覺ゆれ。

と告白し、

Eau-de-vie de Dantzick
黄金浮く酒
おお、五月、小酒盞

と嬉び

埋れし春　畫序

或る家の、曾てわが友の住ひける小房には、その土地のまだ島原と呼びなされけるころ、良からぬなりはひせし形見に、日の光朧ろかなる砂丘を背景とせる春宮秘戯を畫きたる壁のありけるを、近きころ塗りこめたりとぞ云ふ。

春の夜の燈を消して
轉ろにも壁に耳あつ。

しんしんと夜はふけて
窓の外、ほのぼのと月明り、
淡路島、遠き辻占
過ぎゆけれど事もなし。
靜かなる夜の物の音。(T. 1911.)

と嗟嘆し、

街頭初夏

紺の背廣の初燕
地をするやうに飛びゆけり、
まづはいよいよ夏の曲、
西――東西と簾卷けは
濃いお納戶の肩衣の
花の「昇菊昇之助」*
義太夫節のびら札の
藍の匹田もすゞしげに
街は五月に入りにけり。
赤の襟巾、初燕

むもゆく舞ひゆけり。

●琴の中にウヰスキイの注入るるを好みたまふほどの
人は、この行の次に
「いよゝ御兩人待てました」
の一行を入れ試み給へ。（1910.）

と稚き興を事とし、

夜よるはねむしり惜し、腹立し、誰も知ることとなれど、時と
してはまた悲し。

などその哀思を古調に寄せてゐる。

が、これらは彼のいはゆる「怠惰の生活の心に投げた悲哀」のかげで、又、歇斯的里亞の素質をもつて、鬱陶しい青年期を送つた經驗のある人でなければ世の中にこんな亞爾可兒劑の眞味を解すること」は出來ないと云つてゐる。麻睡藥の類であるが、必ずしも中年すぎた年老いし彼の反省して悔悟のこゝろもて云ふたやうな「やゝ、有毒な、然しさしたる毒もない」と云ふ程度でなく、寧ろ、勉學好きの、訥朴な服裝をした、「潔癖にして謹直、また倏ちに顏を赤める處女の恥羞をさへ感ぜしめた。」（白秋「序」）青年學匠の性の悩みが率直に詩感のはけ口からけぶり出た青春の香である。

此等の小曲は彼の新たなるスタイルではない。寧ろ彼の本領をを更にあらはしたのは「緑金暮春調」の一群にこめらるべき長抒詩篇で、その詩風は、更に緊苦しく、理窟めいて、その懊悩がもつと明瞭に直截に且直叙的に散文律めいた節であらはれてゐる。

「沖の帆かげ」に、

陸軍大臣は辭職せり。内閣は遂に
瓦解すべきか。幌を被へる車
ひそかに或る門を今通過しつゝあり……

とうたつて、半ばにして

老いたる母は慵げに端唄を口ずさみつゝ
まばゆげに越しかたを見かへり給ひぬ。

と賦し、おはりに、

されど、されど、短き線よ。

瞬間よ……沖のはたてに
黄いろの帆うつらつらつら……」

と結べる作など作品ではないがその中間をゆくもので、Elegia di Un filosofo giovine と題する一詩

「主観」と「客観」との範圍に關する考察のうちでまだ十分に解明の出來なかつた節々をともすれば湧き立つ感情の波を鎮めていつまでも、事象の永久の相を観ると云ふ態度に歸らうと思つて——考へ續けたのだ。

とか、

曲調は次第に下り、一種固有なる悲哀を傳へ
わたくしをも日本徳川時代の
卑しき感情生活の雰圍氣の中に引き入れ、
ともすれば嫉妬の情に傳統の文を織らせる。」

とか、

ぞと立ち上る。悲哀の音調——
單純にしてゆるやかなる女等の肉聲は、
なほわが耳にあり。透し見すれば
戸の外は冬の月朧ろかに霽ならし。靜ろわたくしは
靜かに長き細道を歩みつゝ、ゆるく悲しく
内心の醱酵するを聽き樂します。さらば卑しき
わが Orientale Primavera よ。(25.IXI 1913)

の如き詩風、ことさらに格調を蹂躙してかへつてそこに散文律ならざる、格律詩ならざる新調(西洋長音律のごとき)を覚め、カイネティックな用語をも事更に平氣で使用し、危く理説に泥金んとして僅かに一縷の詩調を殘した如き詩風に、かれの重厚な心緒のより赤ほなる姿を見る。杢太郎は、外に小說、戲曲をも作り、各獨自のスタイルを見せたが、一般世間からは何の反響をも受けなかつた。その詩とともに、その小說もその戲曲も、ディレツタントの遊戲のごとく單純に解せられてゐた。それらの無理解に就ては追がにかれも詩集の序に「牛込邊の文士聯盟」への憤懣をかすかに漏らしてゐるが、この文體はかれには譜代のもので、若しかれが外の文學、醫學や考古學や美術やに專心する事なくして一圖に詩の道を追ふたとしたなら

ば、そのまゝにして[illegible]自由の詩境に存立して主觀的な一[illegible]特の詩風の新領に到達したかも知れない

長田秀雄も早く詩に專念した一人で、杢太郎は若き頃、長田の詩の「肉體の海底に沈むを叙せるもの」から多大の刺戟を受けたと云つてゐるが、長田の作はつひ一卷をなさずして終つたから概觀するに出ないが、さきに引いた「陰々(インイン)」の如きは彼の作中好篇の一であつた。「屋上庭園」創刊號の「未だ生れざる帝國劇場」及び、オスカア・ワイルドが「Thamesの朝」の譯詩のごときはその後の詩風を必ずしも絶望に東道くものではなかつたが(詩的熱情と想像力とに於てかれは杢太郎、白秋の兩人に劣つてゐたが)その興味は專ら劇曲に向いてしまつて一家の詩風を創建するに及ばなかつた。

雜誌「屋上庭園」はわづか二號にして廢つたが、寔によく享樂的詩體の流風を代表せるもので、人若し、四十年代明治末期のこの一派を論じんとするならば、雜誌「スバル」によらねばならず、更にその特徵を壓縮視せんとするならば、雜誌「屋上庭園」をもつて唯一の資本とすべく、この派の特色を人をして代表せしめんとならば、北原白秋、木下杢太郎の兩者を必ず並存せしめて論じなければ、その偏失のそしりは免れ得ないであらう。

當時自然派[illegible]に[illegible]人[illegible]点を失はず[illegible]進に進み、そしてなほ[illegible]に傾向したのは自然派藝術の現實主義に自ら反撥したもので、人見東明、福田夕咲らがゆき詰まつてしまつたのは、この間の矛盾扞格を解決して新天地を開拓するの詩的敏感と研究と聰明とに缺くところがあつたからである。

白秋は感覺の理想主義に醉つて享樂教の斷末魔に際會し、詩家としても人間としても漸く歸趨を失して、危く事に座して下獄したが出獄するや、三崎、小笠原に放浪し、その性來の重苦しき官能の枷を狂信的な唱名禮讚によつて強ひても落付かしめんとして、その間の距離感の脅迫に自らを苦しめ、自らを偽らんともしたが、(「白金の獨樂」)やがて、

あゝ、秋だ、
何處やらで日本の笛の音がする。

——「小景」

葛飾に動坂にこの南國生れの童顔のたくましい酒好きな肥つた柳川人にも、肉體の秋、心の秋が來て、さきの[illegible]衒氣にみちた白金讚歎は秋の哀唄と寂れ、曠野の姫とうすれて、田園の間

になずれゆく產生の際への咏美となり、又は、澄みかへる童心へのあくがれとなり、民謠や童謠への試作にはしつて、一時本當の詩作がはたと途絕えたが、やがて又もや繰り返して文人畫風な「佗」を思慕する幽趣微韻の生活に詩も心も次第に落ち付いて行つたが、その詩作は凡て皆個性の光りが薄くして悉く獨創の姿致に乏しい古調の再說の埒を出ないものである。才思の生來豐かな、敏感の受用性あるかれが、この幽居を完善にわがものとなしうるや、再びあらぬかげにおびかれて去るやは今日とてもなほ未知の問題である。現今のかれは、やゝ長き過渡期の末に在るものと見てよからう。

享樂詩の華美婉麗な詩體が一代を風靡した頃、しばしば世人に白秋と並稱せられた三木露風は如何に在つたかといふと、かれは大正初期に於て、「露風集」(大正二年)を出して三十九年から四十三年に及ぶ詩作の選集となし、同じ年「白き手の獵人」を、出して「寂しき曙」の新作を網羅し、越えて大正四年「幻の田園」を公けにして大正二年から四年に到る作篇を收錄し、同じ年四ケ月後に「良心」を出して北海道トラピスト修道院に於ける新作を收め、同年、別に「露風詩話」を公けにし、その間、大正三年かれは柳澤健、山宮允、服部嘉香、川路柳虹、増野三良、西條八十等とともに季刊誌「未來」を發刊したが、二輯にして頓挫してしまつた。又、白秋が創刊した雜誌「朱欒」の四十五年六月號に白、露兩者の新詩を共集して「勿忘草」の特刊を出したこともあつたし、未來社を結んで「未來」を發刊し、間もなくこれを廢して更に「リズム」を發刊した。

さて、露風がその後の詩の徑路は如何にといふに、かれがそのいはゆる象徵詩風は大正二年の交から漸く明かになつて來たが、さきにも述べた通り、(「日本近代詩の象徵思潮」參照)かれの詩技に於ける救ひがたき病僻は半生のかれの作詩すべてに形影相伴ふがごとくつき纏ふて居た。しかし、享樂詩體全盛時代にあたり、而して、口語自由詩の萌芽期にあたり、かれ獨自の詩風を支持して、蔽ひがたき瑕瑾はあつても、他の何人も趁かざる變つた道をひとり歩いて來た事實は注目しなければならぬ。その獨自の徑路とは何であるか、かれの稱ふる象徵詩が、御村、有明等の提示に著しく感化せられて生れたことは事實であるが、當時、二三の批評家がフォルケルトの分類を引きシモンズの解說を並べて一通りは解釋したにかゝはらず、かれはその象徵詩觀を、昔の角田浩々歌客程度の文藝常識範圍にしか解することが能きなかつた。すなはち、「幻の田園」初版の序に、

「象徵は佛蘭西から移入されたといふ說は一應私も肯定する。

しかし其精神に於て、必ずしも然うではない。エルレエヌ、マラルメの徒のみならず古き日本の藝術は此精神に胚胎して生れてゐる。加之、詩の道を行ふといふ點では更に一步を進めてゐるさへある。私はこの日本の傳統の精神に居ることを喜ぶ。」とあるけれども、かれの云ふ象徴精神に出發する象徴藝術の究極の所產は、結局、ゲーテのファウストの類で、抱月が遙か以前にフォルケルトの「美學系統」の全化的標象（フェヤアルゲマイネルンデ、ジムボリーク）を紹介し、孤村が同じ說を「神經質の文學」に紹介してゐるが、露風の赴かんとし說かんとする象徴說の一路はこゝに落付くもので、大正元年の交ひろく讀まれた厨川白村の「近代文學十講」にもフィッシャアの「高級象徴」Das Hoch Symbolische を紹介して、カアライルの「衣裳哲學」中のよく引かれる言葉まで援引して說明しエルレエヌの「詩法」やマラルメ、デエメルまで引例してあるのに、「日本にあつたと云つても、象徴は山岳と共に古しなぞと云ふ大ざつぱなことでなく、其文學精神は、立派な象徴文學として存在して來たのである。名こそ異なれ、芭蕉が新しい俳風を開いて、正風と名づけた其の正風といふ體を考へて見ると、當時、芭蕉の胸に往來したのは此精神だつたのである。この詩の幽玄體は即ち今日でいふ象徴體である。この詩の特徴は、說明を避けて暗示を重んじるに在る。事象を選別して見せ、其・各合して見る、單純化する、なるべく事實を單純化したものにしやうとする。」（「露風詩話」一一四頁「詩論」）

云々と厳めしく然し曖昧と說いてはゐるが、暗示は象徴派の生命であるけれども、固よりそれのみが晩近詩派の特色の全豹を掩ふものではない。官能の錯交の事實をあげなければ近代情調象徴の暗示的詩法の存在意識がなくなる。しかも「神經質の文學」であるからには、その病的近代受感性と、佗に淨まる古俳聖の静心とを判然と區別も立てずに頭から一緒にしてしまふのは亂暴きはまる。露風はその標榜をば、

「佛蘭西の象徴法は、ボドレール、マラルメ、ヴェルレーヌによつて盛んになつた。今の詩人では、レニエ、メーテルリンク、ヴェルハアレンなどが此派から出た。又別に英國ではイェーツが夢幻的象徴を唱へてゐる。もとより同じ象徴と云つても、其の國々に於て、其の氣候風土によつて、其色を異にするのが當然である。さうであつて見れば、日本に於ける象徴の精神が芭蕉や蕪村や光琳になつてゐることは毫しも怪むに足りないのである。」（「露風詩話」一一六頁）

と說いてフィッシャアの所謂象徴の第一種第二種第三種をも國土の差異に歸し、晩近象徴詩の特色を少しも說かない。（若し

くは說き得ない。）である處を見れば、かれが抱いてゐた當時の象徵觀が如何の程度の粗雜なものであつたかは想像するにかたくない。

かれは大正十一年、既記三詩集を集めて象徵詩的なるものを網羅し「象徵詩集」と題して公刊してゐるし、大正八年自分の主宰する未來社同人の作品に、知友先輩の自ら以て象徵的と思考するところの作品を加へ、之れを「日本象徵詩集」と名附けて上梓せしめ、その序に

「觀念を表はす一般表示としての象徵は、斯樣に後に熱情者を見出して、その熱情の魂を借りて初めて一個の眞となる。點睛を施す者がなければ永久に生きる道はないのである。斯樣な一事は何を語るか。完全な象徵は靈感をみなぎらせた表示であるといふことである。寓意は、もう一度心の轆轤にかけて創り直さなければならぬ材料同然である。」

と宣告して、「詩人が言葉や形式に對する信頼は、かの僧侶たちが偶像・儀禮なぞに於けると同じく超越した力を以てする。」と說き、

辛崎の松は花より朧にて

の翁が句に於ける「幽婉な詩情と十七字との關係、」また、それを其角が、切字止字の約束がないと難じたその關係、そこには「完全な信頼」——超越した力で以て初めて爲し得る形式の作である。十七字といふ小さな儀禮に過ぎぬやうなものが此樣にして初めて心の饗宴にあづかるのである。」と云ひ、形式詩人の優者は、右の如く、降神的に形式を憑取つてしまふが、最初から「形式を其力の所産として創めたならば、其表示は一層完全な目的に適ふだらう。さうして其言葉や威容・規律は全然實現的な性質を帶びるだらう。私はその力がわれ〳〵に賦與されてゐると信ずるのである。」と確信もて談つてゐる。

これを見れば、かれが形式に就て當時靑蠅のごとくわき出た所謂新詩人、特に「民衆詩人」並びにその亞流少年の徒の全然詩的に無知無反省なりしに對し、遙かに卓れて、形式に於ける靈感の和光同塵三昧を理解してゐたことが能く判明するけれども、合せてまた、かれの唱へる象徵詩が、しば〳〵ヹルレエヌやランボーを引合ひに出しながらも晩近派の情調象徵の官能的特色等に無理解な（若くは、わざとそれを斥けたる）態度をとりつゝも、尙しば〳〵ボドレエル、デーメル等について大ざつぱに引例せんと欲するの風あるを見れば、果して如何な詩境を中心に於て熱求してゐたものであるかがわかつて來る。

さて、更に進んでその作例に就て査べて見ると、かつても述べた如く、露風が詩技の秀拔は群小詩人の間に嶄然と聳立して

ゐるが、同時に相伴ふ缺陷も宿命的に早くも「寂しき曙」の昔にあらはれ、(少年期の感傷時代にはこの缺點はほとんどなかつた。)「白き手の獵人」、「幻の田園」、「良心」と進めば進むほどそれが明らかになり勝つて來てゐる。

たとへば「良心」の「我臆のところに」の如きは、感激溢れたるが如くにして而も極めて稀少であり、その僅かなる感激を、例のおちよぼ口で言葉少なに云はうとするため、一見何ものかひそんで居るけはひがするけれど、能く精讀して見ると實は期待した程の大詩情はない。在るのは、僅かなる詩心が婉曲に、途切れ〳〵に、言葉少なに現れてゐるだけ故、詩に素人な學究風の人などには時あつて、神秘的幽深所に到達してゐるのかなど考へ誤まられるのである。「良心」の卷頭篇「修道士逆に」のごときは比較的この苦澁の技巧が少い好篇であるが、それは、他の諸篇と少し趣を異にして説教風に散文的に樂々と感情を抒べようとする心持が基礎になつて作られたからである。從つて、敢て露風の作とのみ云はず、凡そこの種の作品は、非常に高く値せられたり、全く低くさげすめられたりする場合が多いけれど、實際は、作家の經驗から云へば割合ひに作り易い作で、しかも、素人威かしが出來易い作である「良心」一卷に於ては、まづこの詩が一番の作品であらう。

我れは現世の人にして
この有限の生にあり
身は浮漚に似たれども
今日、この自然の中に
混沌、慈愛、忍辱の
其の形相を賭すれば
心は頓にやはらぎて
愁は風に吹き拂はれ
覺えず涙の下るを覺ゆなる。

右の一聯に於て、

身は浮漚に似たれども、

までは連續する感情に無理がないけれど

今日、この自然の中に

は、調子がゆるいばかりではなくて、一向少しも生き生きなる感興を呼び起すほどの威力を備へてゐない。

心は頓にやはらぎて

はまだよしとしても、

愁は風に吹き拂はれ

が重なると、もう惰勢で動いてゐる駄句の連續であり、その次の

　覺えず涙の下るを覺ゆなる。

の一句が、實に、これ亦、調子がよくないと云ふばかりでなくして、作者の命じる感情が少しも生きて讀者の胸にぴつたり來ないのみか、かへつてやゝ滑稽に近い感じさへ催して來る。この例は露風の詩にしば／＼見られる。「秋の日の日照」をとつて見ても、

秋の日の日照の中に
溫かき無言は我れを滿たす
我心は其所にありて
獨りつぶやくなり。

の起句に於て、

溫かき無言は我れを滿たす

といふ只一句をのみとつて見れば悪い句ではない。却つて使ひ場所によれば複雜簡勁なエフェクティブな一句となるのであるが、この詩に於ては、その命が全く死んでゐて、かへつてやゝ氣障な、餘計な技巧だと思はせるのは、前後の句との折合からこの句が血肉を卒然に失ふてしまつたからで、斯るデリケイトな關心は詩人にのみ賦課せらるる細心の注意であるが、露風は文章の法術に稚きより長けてゐた少年であつた割合に、かういふ個所の藝術家的神經質の注意にしば／＼鈍感であり、投げ遣りであつて、

夏の烈しき情熱の名殘をもて
何我れはかんがふ
草叢には其時
焔のふらつくを見る

の如き、初めの二句と後の二句が顯然と分れて、それらが對照の妙味を傳へるのでもなければさりとて又漸層的の効果を追ふのでもない。これも彼の詩的細心の不足な一證である。

その次の章

樹の小枝の影は
無心にわが下に落つ
今その搖らぎの中に
萬物はあり

はもグノ[illegible]な表現であるが、最後の、

　我れは匂はしき大氣に
　神をうち瞻む
　谷よりすべる風は
　曠野に滿てり。

のごときに到つては、第二句の

　神をうち瞻む

が唐突にしてやゝ鬼面人を嚇すの感を抱かせる嫌ひがあるばかりか、その後の二句がまた今まで層々相重つて來た感情を効果的にとどめる役目を演じないで、勝手に遠くへ外れてゐる。放心の作といふべきである「築土」の破題

　池の上にさはぐ波のごと
　夕暮の芦の間の風のごと
　我心絶えず猥なり。
　垣はすばこゝの閑も荒れゆかん
　築土も雨に破れはてて。

のごときは[illegible]を第二節に繰返して、第三節に

　敬神の念ふかき人は

云々と古詩風の說教臭に墮つてしまつてゐるのは詩體としてはよいが、この場合一篇の効果から見ては失敗である。すなはち、最初の節から第二節と進んで、說話風の詩ならばそれなりの心の準備が詩の上に今少しはつきり現れて居ないと讀者は忽然として狼狽に及んでしまふからである。

この「良心」から昔に飛んで「門き手の獵人」にかへると、「雪の上の鐘」にしても、「雪の上の鄉愁」にしても、「寂しき曙」の「沼ほとり」、「暗き地平」のごとくに感情が尙未組の光と艶とを帶びてゐるが、「幻の田園」中の「乞食と小兒」、「歸」等に到るとやゝ曇りと乾燥とを加へて來て、かの「良心」に於ては夥しく感情の乾固と言葉の凍化とが目につくのである。「良心」を出版した時、作者はなほ二十六歲の若者である。如何に早熟の才思があつたとはいへ、人の世のみち半ばにしてこの乾固と凍化とは常道でない。精神上の變化か、生理的關係か、何ものかそこに詩情の發達のさまたげとなる障碍物が作つたに相違ない。

露風その後の詩作は、「芦間と幻影」（大正九年）と「信仰の

曙」大正十一年）に收められてゐるが、その詩の傾向は「信仰の曙」に到つて確實に赴かねばならぬ處であつた一つの頂點に遂に達したの觀があるけれど、かれのなほ富める春秋と、上來述べ來つたごとき痼疾ある事實とを考へると、白秋とひとしく彼も尙昨今長き過渡期の中に在ると思考される。

かつて若くして

沼のほとり

蒼さめたる光、音もなく
あけぼのは雪の上にきたる。
風は幽かに枝をふるはし
木は屍の如く、空しき腕を交す。

そのとき君は沼のほとりにあり。
沼の水凍りて、
煙のごとく「夜」醒けり。
いかなれば君のこゝにありしか、
あゝ。いかなれば わが眼に、君の視ゆる。
その面は憂愁のスフインクス、
「過去」よりきたる悲しみの烙印あり。
靈は、雪に埋れて燃え、
荒きすゝり泣きの聲、そこよりきこゆ。

木は屍の如くに充つ。
蒼白きあけぼのは今、來らんとす。
語れよ。無言の君、寂び果てし沼のほとりに。

――「寂しき曙」――

の佳調をなした彼、

雪の上の鐘

心の上に暮れ方の
雪はしづかにふりつもる
灰色にしてあぢきなく
やはらかにふるへつゝ

埋もるる愁は土に眠りたり
わが聲はとぢ、覆はれて
しろき墓標に胸をおく。

されどさびしき[illegible]のほのかさ
揺ぐるものすゞやかさ
靜に、靜に、うちゆらぐ。

わが心はうち步む、
はてなくあゆみ行かんとぞ。
あゝかなたなる谷間の風
ゆるく幽に我が胸をよびさます。

かゞやく銀の日沒は
わが身に深くほゝゑめり
雪にも生ふる靑草よ
われ道ゆかば、汝を見て
嶺の高きを攀づるとき

——「白き手の獵人」

の好篇をなした彼は、次なる期に於てわずかに、

村　村

日の落つるところに
村村は森の[illegible]こたゝ
空に　音なく　鐘を吐きつゝとむ[illegible]。

されど燒けのこりの村村は
なほおかるき黃金の緣をもち
極めゆける血潮の霧を含む。

さて何者の老いたる手か
そのとき熱灰の中を搔き探す
不斷にはたらきつゝいそがしく。

の詩的靑春技巧の殘照を映じた良詩をものしたか、既に詩想の凝縮、詩語の乾固きはまる所、大部分が、言葉の殘骸の無慘なる行列であつたのは由もない。

たゞ「日本象徵詩集」の卷頭に自ら安置した諸篇に於て詩風は若き詩の精進と懊惱とが全然徒爾ならざりし立證を、たとへば次の如き作品に於て示してゐる。これは、最近期の詩風が作風、彩しきその油の拔けた感情と艶を失した言葉との傾向中に於て、山端の秋日のごとくにかゞやく、力と信と感情とにみちた、美しき感情の上に建てられたる堅固な詩の伽藍である

曙」（大正十一年）に收められてゐるが、その詩の傾向は「信仰の曙」に到つて確實に赴かねばならぬ處であつた一つの頂點に遂に達したの觀があるけれど、かれのなほ富める春秋と、上來述べ來つたごとき痼疾ある事實とを考へると、白秋とひとしく彼も尙昨今長き過渡期の中に在ると思考される。

かつて若くして

沼のほとり

蒼ざめたる光、音もなく
あけぼのは雪の上にきたる。
風は幽かに枝をふるはし
木は屍の如く、空しき腕を交す。

そのとき君は沼のほとりにあり。
沼の水凍りて、
煙のごとく「夜」朧けり。
いかなれば君のこゝにありしか、
あゝ。いかなれば わが眼に、君の視ゆる。
その面は憂愁のスフインクス、
「過去」よりきたる悲しみの烙印あり。
靈は、雪に埋れて燃え、
荒きすゝり泣きの聲、そこよりきこゆ。
木は屍の如くに充つ。
蒼白きあけぼのは今、來らんとす。
語れよ。無言の君、寂び果てし沼のほとりに。

——「寂しき曙」——

の佳調をなした彼、

雪の上の鐘

心の上に暮れ方の
雪はしづかにふりつもる
灰色にしてあぢきなく
やはらかにふるへつゝ
埋もるる愁は土に眠りたり
わが聲はとぢ、覆はれて
しろき墓標に胸をおく。

されどさかんな[illegible]の[illegible]のほこらかさ
青ぐろ[illegible]のすこやかさ
静に、静に、うちゆらぐ。

わが心はうち歩む、
はてなくあゆみ行かんとぞ。
あゝかなたなる谷間の風
ゆるく幽に我が胸をよびさます。

かゞやく銀の日没は
わが身に深くほゝゑめり
雪にも生ふる青草よ
われ道ゆかば、汝を見て
嶺の高きを攀づるとき

——「白き手の獵人」

の好篇をなした彼は、次なる期に於てわずかに、

村 村

日の落つるところに
[illegible]銀の[illegible]
空に[illegible]なく、[illegible]きつゝたち[illegible]る。

されど焼けのこりの村村は
なほあかるき黄金の縁をもち
極めゆける血潮の澱を湛む。

さて何者の老いたる手か
そのとき熱灰の中を掻き探す
不断にはたらきつゝいそがしく。

の詩的青春技巧の残照を映じた良詩をものしたが、既に詩想の凝縮、詩語の乾固きはまる所、大部分が、言葉の残骸の無慘なる行列であつたのは由もない。

たゞ「日本象徴詩集」の卷頭に自ら安置した諸篇に於て露風は若き詩の精進と懊悩とが全然徒爾ならざりし所證を、たとへば次の如き作品に於て示してゐる。これは、静近期の露風が作風、彩しきその油の抜けた感情と艶を失した言葉との傾向中に於て、山端の秋日のごとくにかゝやく、力と信と感情とにみちた、美しき感情の上に建てられたる堅固な詩の伽藍であ

れの半生の絃音調である。

美　神

光を磨く大空は
神前の甍の燈のごとくなり
ああ、美にして厳く
大いなる面輪
のこる隈なくかがやけり。

我まなこよ、打瞻れ
眩燿の母なる國
焰の淨くならがりし
たけく、大いなる美の母
彌増に光澤を増す、國の面さしを

はなかなるきはみ
一つの山は煙をはく
物もしづかにかの嶽は
聖なる神壇を築かんと。

かの、胸傾け、そそり立ち

火を噴く山は何山ぞ、
直なる時は、澄みて輕く
伏して違へる時は、重く長く
絶えていこひもなきけぶり

ああ、光をみがく大空は
神前の甍の燈の如くなり
供御にささぐる何何ぞ
美にして且つ威き
我等が母なる國
淨き焰を以て灼かれたる
瓣痕の、大なる美神

この集には一般にかれの力作が網羅されておつたのは、當時勃頭して來た民衆諸詩人の空虛な蟬噪蛙鳴に對して、詩的憤激を感じて、詩的同行と信じるものを自ら卒先して集合してこの一冊子をなした際故、生平の洩れる言葉は熱情にとろけ、乾ける感情も烈しさを一入添へてゐたに相違なかるべく、

今しも天は滿ち滿ちて

峰高き岩角と、岩角との間よ●
弧形なす、こが胸を横たへぬ。
いとも、厳しく重く、ふくらかに。

にはじまる「生ける宮」には

峰に黒める岩角を
天は優しく眺めけり

の作句あり

かくて見よ山山は
生ける殿堂と響くなり
善き、大いなる谿隈は
野術の唸きを以て
聖き眞洞を造るなり。

の強き一節あり、

(あゝ怠げ、倒れ、プロメシユース

黒き森は選らん
夕日の光、早も今
鋼なす天の翼に流れたり、
風は峰をば吹き行けり。

の如き室に巧みなる結語で終つてゐる。露風の思想傾向が漸く日本的なるもののの表現に傾いたのは、・にはかれの賦性が自然に覚めたる結果であり、・には四十年代より盛んになり益す行はるる異邦文學の移植と祖述と宣傳とに對する自己發達の外國的要素稀少である處から來る反抗の結果であるが、「われは岳なり」に於て、

古き代の酒は我にあたらし、

とうたひ、

ああ、大和の詩人たち
神隨の山をうたひし
常滑の川をうたひし
君がため、大和の詩人たち

われはのむ。

と唱し、

勇武と忍苦との
いと高き諸德をもつて
躬からを助けし現人神
神柄のそのきもをのむ

と賦し、更に「自畫像」の一篇に自己を諷ひ自信と自嘲との交響樂をやや傳說的であるが確實な詩感で表白し、その調は作品であり群を拔いて居たが、かれの日本的自覺の延長は、その後何の特色ある姿相をも示さず、かへつて、身心の懊惱と非力の自覺とからつひにかれはトラピストへ遁入してしまつた。その公教信仰が如何にかれを救ひ、或ひは傷くるかは未來の問題であるが、恐らくは、その境致に到つても彼の性格の痼疾、彼の詩品の痼僻は宿命のごとに尙つききとはるに相違ない。

北原白秋と三木露風との對立は大正期六七星霜を經る頃までつづいたが、兩者はひとしく思想の更年期に入り、白秋は小唄、民謠、童謠に奔つて同時に日本的簡素と侘と氣韻との世界にくがれる新流風にむかひ、露風は宗門にいくたびか近づかんとして躊躇し、その間白秋とひとしく小唄、童謠の類に筆を染め、また日本古代精神に就かんとしてつひにトラピストに入つた。兩者ともに早熟の才思あり、象徴詩に先づ奔つて、兩者ともに詩技の一路にのみ就いて他の詩人のごとくに科學、藝文、語學、姉妹藝等の專門、あるいは準專門の立場に在らず、兩者ともに異邦語に迂く、兩者ともに詩想の枯渴を感じて、兩者ともに日本的なるものの憧憬に赴き、一は文人畫めける風雅の裡に藝術と生命とを覓め、他は公教信仰の中心に闖入して安心を獲ようとはかつた。

白秋の小唄は

利休ねづみの雨がふる

の城ケ島の雨にあらはれ、その童謠は

小蟹ぶつぶつ石鹼を溶かし、

の「あわて床屋」等にあらはれたけれども、露風のその種の作

集、たとへば「眞珠抄」(大正十年)は價あるものでなかつた。

さきに述べた通り、白秋は、稟才の赴くまゝに自由に詩歩を延して幾變遷をかしたが、その踏んだ道は彼としても、他人としてもすぐれて險阻の山徑ではなかつた。露風は、苦澁の間にやはり幾變轉をかしたが、その步いた路は、彼としても、他人としてもかなり嵯峨たる九折であつた。白のこの容易は才能と徑路が一致したからで、露の苦澁は才能が力以上及び以外の個所までねらつたからであつた。白秋の華飾は露風になく、三木の痼僻は北原にない。露風の追隨者は少く、白秋の亞流は多かつた。しかうして、兩者ともに象徴詩を試みて、白は早く稚きに享樂直叙體に外れ、露は晩く觀念詩の神秘的傾向に沈滯した。白秋の感覺詩は再説するの要がないが、露風の神秘體は再三再四刻苦の求道者こゝに玄義を覓めるに非ずんば、一代を動かす、劃期的底力ある眞品は得がたい。兩者の業績は、かくの如くにして他の詩人に卓れて秀拔な獨創性があつたけれど、その詩的發聲のやゝに衰へはじめた頃、長く殆どこの兩者とその直門の亞流とに專斷せられた詩壇は、漸く新らしい氣運が動いてその古く澱んだ惰勢的勢力が一新せられんとするけはひを示して來た。

その當代詩家の經驗を早くも熟知せしめたものに、マンダラ詩社第一詩集「マンダラ」(大正四年)で、蒲原有明、三木露風、北原白秋、野口米次郎、澤村胡夷、河井醉茗、上田敏の七同人の詩を收錄したアンソロヂーであるが、ヨネ・ノグチは歸朝以來幾年かたつてはゐたが尙日本語詩を能くせず、その英詩の傾向も日本近代詩の主潮と密接の關係を持たないものであり、かへつて英語詩壇に於けるオリエンタル・ライターズ中の一人として扱ふが適當であり、且こゝに收められた To Hiroshige.及び On Hiroshige's Fireworks at Ryogoku. の二篇は全くの散文詩であるし、上田敏のはポオル・フオール以下の譯詩のみであり、蒲原有明はさきに述べ、河井醉茗も上述したし、北原、三木兩人の作はともに惰勢期の最劣作の集合で些かも齢ひにする足ず、只殘る一人の澤村胡夷のみは、さきに「湖畔の悲歌」に於て、

白雲は動きて、
冷やかに鞍馬の
頂に懸れり。
階上に倦じて
白[illegible]を撫しつゝ

陰陽の博士は
ものに、今驚きぬ

――「壇の浦」

の如き古流な詩風の間にその詩語の確實と巧妙と人に卓れて

空より降りし火の如く
小鳥は落ちて死にけり

の佳句や

夕月白く照らす頃
蛇籠に睡る石伏の
夢より淡き茶の花に

の巧詩が踵を接ぎ、「萬兩草の歌」、「鬼菱の夢」「夏草」、「野にて」、「楓戸」等の作品夥しく、又、「夕ぐれ」に脚韻の新効果をはかるなど、未來詩壇に最も好望の一人なるべく一部から待望せられてゐたけれど、その古風な趣致と超然たる態度と、及び時機を逸らして此詩集の出た大正七年は既に人生派の擡頭につれて亂暴な古語破壞や格律蔑視が時を得顏に跳梁してゐたためと等が退壇の機縁をなし、この詩人は詩林を去つて美術批評に潜心するに到つた。「マンダラ」中の詩篇も、「坦路」、「船室」に口語體を試みてはゐるが、その言葉がまだ板に着いて居ない。たゞ「薄暮」「霜」等に本來の確實な詩巧技をあらはし、

見よ、月は乾ける土に、痛みもつ
光をなげて、

とか又は、

見よ、月は屍のごとく、中空に
凍てて震へり。

等の句が「霜登る大地の床に」はた、

くもりゆく大地のうへに、ものの芽は
靜かに萠きぬ。

と終る「霜」の一篇中に於て異常な効果を與へてゐる。特別の

樹想にあつて、その家は一生をあとに詩くも國外に去つた時で、かの忘れたる「孔雀船」の詩人伊良子清白と雁行をなすものは澤村胡夷である。

わづかに胡夷の秀詞をとどめ、上田敏が譯詩の後期に於けるその代表的佳品「兩替橋」等を加へたのみで詞華集「マンダラ」は石胎にして去つてしまつた。

なほ一つ京都の上田敏を中心として、茅野蕭々、雅子、竹友藻風等の集合から、季刊詞華集「鬱金草」(大正四年)が上梓されたが、初號のみで終つてしまつた。藻風は、「吾々は正雅の路を踏みたいと考へる。シチリヤの原、トスカナの丘の邊より Dolce Stil Nuovo の聲の起るのは何時であらうか。」と書いてゐる。リルケ、レニエ、フォオル等の譯詩も優秀な作が多かつたがこれ亦、「マンダラ」とともに逝つた。これら末枯れた昨日の花の惜しくも泥土に委する頃、詩林は新らしき喧噪の響に、靜謐なりしその雰圍氣をかき亂されるに到つた。

七　新興詩壇の成立

I　詩壇の轉機

大正五年十月一日發行詩雜誌「感情」は、「現代詩人號」を發刊して左の人々と作品とを收録してゐる。

野	北原白秋
夕の合奏	三木露風
我家	高村光太郎
獵師	福士幸次郎
盗む勿れ。祈り。	水野盈太郎
海を戀して	白鳥省吾
少人に與ふるうた	日夏耿之介
にがき盃	川路柳虹
ぬかるみ	加藤介春
蚤	山村暮鳥
孤獨	萩原朔太郎
永遠にやつてこない女性	室生犀星

編輯者室生犀星は卷末消息に「殆んど日本の詩壇でこれだけの美しい團欒をしたことが始めてである。」といひ、「原稿がうまく集ればいゝがと夫れが心配になつた。」と云つてゐる。これ、異派各分立し、互ひに排擠して一堂に相會しがたき事實が在つたことを談るものである。なほ彼は、尾瀬哀歌と佐々木好母の兩者の作篇が印刷の間にあはなかつたことを斷はつてゐるから右の十名以外にこの二人をも加へる所存であつたらしい。

越えて、同年十一月一日、雜誌「文章世界」は左の九人の詩作を集めて「詩壇九人集」を掲げてゐる。

生ける宮　三木露風
月夜の病人　白鳥省吾
秘法林　日夏耿之介
トラピスト修院詩集　富田碎花
太陽と皮膚　兒玉花外
夜の歌三章　加藤介春
草のはつぱは僕の詩だ　室生犀星
肉體の反射　山村暮鳥
この殘酷はどこから來る　福士幸次郎

この雜誌の卷末文界消息で川路柳虹の曙光詩社創設の事が傳へられてゐるが、その翌年の十一月十五日發行曙光詩社詩集「作奏」第五輯「日本現代詩選」が出た

寂寥を求む　萩原朔太郎
秋の暮。夕ぐれ　堀口大學
朝の歌　富田碎花
秋立つ朝。前注　茅野蕭々
林の中にて　加藤介春
忍從　川路柳虹
海はきろく。晴れゆく空　高村光太郎
女性に送る　室生犀星
唄　柳澤健
汽車。自分はさみしく考へてゐる　山村暮鳥
地をうつ鐘の音　福田正夫
正午　西條八十
雀の生活　北原白秋
惱みある夜　白鳥省吾
屍解　日夏耿之介

前の二誌が極最近作を網羅したに反し、この集は「最近一二年の間に常に詩壇に作物を寄與して居る」ものを選んで、約一年間位の舊作の間から編輯者が選んだものもあれば、作者が選んだものもあり、又新作もあつた。

さて、偶然にも二年間に約一年の間隔を置いて出たこれから三冊の小アンソロヂーズを見ると、當年の詩壇が略如何の人々によつて支持せられてゐたかが判明する

當時の分野はどうであつたかといふと、加藤朝鳥が「明治詩

歌壇運動の起伏」（大正五年十月「新潮」）に詩壇の衰退を稱した通り、四十年代前期の壯觀はなかつたが、四十五年六月即ち明治の終焉前一ケ月に北原白秋の雜誌「朱欒」が白秋、露風兩者の新作で全誌を埋めた時を以て白露對立時代の峠がすぎた頃と見なすと、その後、改元以降五年間ほどの間に著しく文運が變轉して、大正二年には「朱欒」も廢刊してしまひ、かはつて「創作」が復活されて詩歌兩道の雜誌となり、又、「劇と詩」は「創造」と改題せられたが長つゞきはしなかつた。その翌年には前述の露風一派が「未來」第一輯を出し、大正四年には柳澤健が「輓近の詩壇を論ず」を「文章世界」に二ケ月にわたつて發表して、いはゆる白秋派と露風派との對立の事實が露骨になり、又、「マンダラ」が公刊され京都の「鬱金草」が生れたが、その翌五年の夏には「感情」が萩原、室生兩人によつて發刊せられ、秋には「伴奏」が出、十二月に入つて柳澤健、富田碎花、日夏耿之介、西條八十、山宮允、白鳥省吾の五人によつて雜誌「詩人」が生れ、越えて六年、萩原朔太郎は「三木露風一派の詩を追放せよ」（「文章世界」）を掲げ、北原白秋は巡禮詩社を復興し、矢部季らの「詩篇」誌を發刊監修した。七年に入つては、柳虹の「伴奏」は「現代詩歌」となり、露風門下の「リズム」が生れ、福田正夫の「民衆」が生れた。

これらの事實の裏に存する詩的所產は如何であつたかといへば、さきの三小アンソロヂーズ中で、在來詩壇に於て相當に古く作篇を公けにしてをり、今日に到るまでその創作を絕やさぬながら、詩壇の本流からはやゝ離れて高踏又は隱退してゐる人は、白秋、露風以外に於て高村、水野、加藤、兒玉、茅野の五人で、山村暮鳥は昨冬病死に及んだ。その五人の內、高村光太郎はさきの詩集「道程」以後試作少く「道程」で發揮せらた詩的光輝の持續も增大もないけれどその感情は相變ず自由でその言葉は豐かであつた。

海はまろく、たいらかに
あをく、とほく
湯はからだを抱いて
あふれ、湧き、流れ、こぼれる

海の上に空あり
空一めんのまつ蒼
湯氣はほのぼのとあかるく
地熱かすかにとゞろく

天然の
ふかい呼吸に
こゝろは
沈み、又をどる

人の世は戰ひだ
底知れぬ誘惑こそ
莫大な天然のおくりもの
あゝ途方もないこの平安

——「海はまろく」

高村の言葉は、よく言葉の本質を知り、語彙も多く持つてゐたから、それらの知識をことさらに棄てゝ野蠻な赤裸々の心持ちになつて、わがまゝ自由に胸一杯歌つて見たいといふ欲望に出立して、わざと亂暴に、粗野に言葉を投げつけるやうに心掛けてゐるけれども、これを當年の民衆詩人が、語彙が貧弱で思想が幼稚で、あまつさへ表現の天巧が尠くて、さればこそ、無暗矢鱈に、弓につがへて射た矢の行衛を見ず、考へずに言葉を汚し、言葉を虐げてその貧しい思想を表面的な空元氣で誤魔化してゐたのに較べて、はるかにその表現に於て異差があり、言葉は多く效果的な壺にはまり、散文で説明能きない自由詩律獨自の奔放自由自在無碍な韻音を發し高音をもとどろかした。

が、高村の精進は、詩に於ては、その專門の美術に於けるが如き熱中を伴はなかつたから、表現の天禀と想像力の豐潤とを持合せながら、その後期待するほどの進程に入らない。今以て入らない。みなに待望せられて、みなに失望させてゐたのは必である。

空はしとしとと青みかかつて
あかるさ譬へやうもなく
夏の朝のひかりは
音も無く
ひそやかに道をてらしてゐる
土をふんで
道に立てば
道は霧にまぎれて
曲つてゆく

——「我家」

といふ一節でも知らるゝが、かういふ詩情に散文と一髪の際を隔てた處に沿ふて進んでゆく故、一寸でも蹴つまづくと忽ち非詩になり、散文になり、散文にしても拙劣きはまる散文になつてしまふ恐れがある。多くの自由詩人の誤るところはこゝである。

ああ、いつでも探してゐた魂の故郷

といふ最後の二つめの一句は最終詩節に於ける無くもがなの説明で、これあるがために、この詩は畫龍點睛を失してしまつたが、「晴れゆく空」の一詩にはその欠陥は免れてゐる。そのかはり、ところどころの一句二句がだらけて感情の漸層的効果がしばしば弱められてゐる。この一番の缺點は「序曲の前詞」(一九一九年作)に一番多く現はれてゐる。

あさみどりの光り
曉曉とさす
寒風の梢よろこび
野に走り出づれば
路のぬかるみ悉くかゞやき
水たまり靜かに天上の雲をうつす
烈風はなほも吹きつのり
吹きつのり
世界は今やおごそかに淨められやうとする

——「晴れゆく空」

といふ詩節は單純な叙景だが、こんな短かい句の中にも外の人生派詩人の冗語とは異つた命がある。高村光太郎の詩は、長い目で見て、なほ遠く未來にその全豹があらはれるのかも知れない。

高村砕雨と同じ明星派の詩人である茅野蕭々に、長い詩作の歳月を持つてゐて、ついに今日まで一冊の詩集を持たぬが、これは恐らくかれの用心深い持前から他日の完成を期して滿を持してはなさぬものであらうが、彼の本領は、純詩人といはんよりも、作詩の經驗を眞正に所有してゐて、細かい鑑賞力に富み、その味解の過程を論理化するの術に長けてゐるところから、寧ろ一番好適なる詩の鑑賞者、詩學教授の立場にあるが、その押へられてゐる情緒ばかり强く、その想像力もひかへ目乍ら豐かで、[illegible]な信州生れの地方高原人の性情が、しば

〈沈潜の姿相を備へた短詩を成就させる。が、その感情はあまりに押へられやうとしてゐるから、極めてじみで輕薄な行きずりの旅の者の眼をひかぬ路傍の野の花の風情である。

ああ、そは我のみかは。
落葉せる木立の樹樹も、
あらしに覺めぬ眼に入り。
さざめける池も、いま、靜まりて、
疲勞は横はる少女に似たり、

にはじまる「心の冬」は、三節の平凡なれど一種の哀情ある詩節を經て次のごとく終る。

冬、沈默と、眼と、安息との冬、
來む春の前のひと時。
ああ、我のみかは、
天地にもかかる季節はあり。
やすめ、こころよ。

また、

かくてまた君に向へば、
あはれ、こは誰ならむ、

にはじまる「夕ぐれ」にしても、

何ゆゑ鳥はうたひけむ、
そはかの鳥も知らざらむ。

にはじまる「機緣」にしても、

知らなかつた。知らなかつた。
何にも知らなかつた。
鏡のやうに靜かな心には
ただ日の光がさしてゐた。

にはじまる「少年の日」にしても、良き一句二句が寶石のやうに光つてゐるわり合に、他の詩句は調が全く整はなくて鉛の

やうに光を失つてゐる場合がしば／＼ある。これが彼をして秀詞の大才たらしめない病癖である。

秋が來た、秋が白く。
來て、ご覽。
あの遠い山脈の
線の細さ、うつくしさ。

燃ゆる火のやうだつた森さへ、
今朝は靜かに祈るやうに見える。
露に似る小さい草花に
吹く風の脚の白さ。

秋が來た、秋が來た。
澄みきつたあの高い空。
そこからも涼しい匂が降りて來る。
野にも、水にも、樹にも、土にも。
お前は未だ泣いてゐるのか。
さあ、暗い部屋から出て、
しらじらと明けてゆく
野をご覽。

ゆうべは何故二人であんなに泣いたらう。
熱情の夏は過ぎ去つて、
恍惚の界から、今、
心地よく行爲に覺めてゆく
初秋の朝のすずしさ。

出てご覽。
この白い秋の朝が、
泣きはれたお前の美しい瞳を
やさしく接吻するだらう。

——「秋立つ朝」

茅野蕭々の詩はいまだ遠く長い未來を持つてゐる。その過去が華美でなかつた如く、未來も妖艶の姿致はなからうけれど、その詩が年齢とともに深まりゆく時、かれは自らいつしか獨自のスタイルに到達してゐるであらう。

蕭々、碎雨の二人はスバル派に在つたが、前者は初めから、

の享樂詩風とは縁が遠く、後者は一時烈しくその風に化せられたが次第に去つて人生派風の詩に赴いた。

水野盈太郎（葉舟）も時あつて「スバル」に詩を掲げてゐたが、彼はもと小説家として見參し、やがて自然派の末期頃から小説を棄てゝ詩に奔り「凝視」（大正四年）を出し、アンソロヂー「心の響」（大正五年）を編したが、その作は調子がひくゝ感情が生ぬるい。その散文も冗長な叙述が多かつたが、その詩は更にはげしい。「凝視」は悲境に際した即興が多く收められてあるが、その(2)の詩如きは散文に危く墮してゐる。(15)の如きは無雜の作で、(2)の

碑銘

その生きて居た日には
からだ全體が人を愛し
靜かで、默つて見衛つて居た。
今
この人の一生は口をつぐんだ。

の如きが短かい丈、同樣に難は尠い。「感情」誌上の二篇は皆拙詩であつた。葉舟は又散文詩を書いた。調子は高くないがこの方がかれのより良き本舞台であるべかりしを感ぜし其後その創作がはたと途絶えてしまつた。

兒玉花外は十年一日の如き詩風で

ニーチエ强者哲學の流を酌み
トライチケの英雄崇拜を描き
帝國、軍國主義の理想を實行すべく
カイゼルは血眼にて世界に叱咤す。
——「太陽と皮膚」

の如き所謂花外調ソングであつた。が、當時の民衆詩人の作風も口語體であるとのみで、その簡單な感情と粗笨な號命とは花外詩を新らしく書き改めたにすぎない、すなはち

マルクス唯物史觀の流を酌み
ワルト・ホヰツトマンの軍鼓をたたいて
民主・集產・改造・新案インダストリアル・ユニオニズムをふつたてろと
おれ・民衆屋は金壺眼で社會に咆哮するんだ。

の亞流である。この派に就ては後面に還る。

加藤介春は、さきに三木露風、人見東明、野口雨情らと稻田詩社を結んだが何ら著しき團體的意義ある貢獻なくして散じ、その後、人見を中心として、介春、夕咲、三富朽葉、今井白楊、福士幸次郎、山村暮鳥らと自由詩社を結び、（四十二年）月刊詩誌「自然と印象」（同年五月）を發刊したが、翌春、東明が作「酒場」を風俗壞亂に問はれ程なく解散したが、自由詩の集合的運動の唯一最初のものとして記錄すべく、個々の作者に於ては、朽葉、介春が卒れたのみで、夕咲は故山にかへり、福士、山村は混沌として歸趨を知らず、東明は「戀ごゝろ」（大正三年）の新著があつたが、自然主義的の藝術觀に準據しながら享樂的感傷のきはめて幼稚な程度に弃つてその詩情の確實性がない上に、思想を解せず表現も拙劣であつたから、愈々本來の立場を失して、いつしか詩壇を去つてしまつた。

然るに介春のみは、終始一貫して個性ある詩路を歩いたから、詩的光輝に貧しく表現の天資にも乏しかつたにかゝはらず、「獄中哀歌」（大正三年）、「梢を仰ぎて」（大正四年）の二詩集によつて四十年代前半の勞作を網羅し、その後は「日本詩集」に[illegible]した外、[illegible]たないけれども、[illegible]遠を怠らないでゐる。

介春詩は、頽廢詩體のいはゆるデカダン的傾向が、白秋に於て空想的でありしに比し、かれは飽くまでも現實に即し、事に坐して下獄してより處女詩集を生み、爾來その詩の經路は期待に反して遲々として進まず、一張一弛を反復して晩近に到つたが、「作奏」の「林の中にて」を見ても、「九人集」中の「集」を見ても、口語自由詩の純な性質で少しも文語の殘映などはなく、しかも、他の自由詩人の如き非詩に奔らず、よく獨自の詩型を形造つてゐるし、又、「たましひの集り」を見ても文語に近い口語を使つてかへつて介春らしい持味に成効してゐる。その特性は感情の自然にある。眞實な素朴にある。

夜となれば
たましひは暗き屋外に拔け出して
海へ野へ林へ急ぎゆく、
その時人はふかき眠りに入りて
死せるが如し
眼に見えぬたましひは

眼に見えぬ道を辿る、
夜はくらき底より
「たましひよ疾く來れ
大いなる自然の意思に從つて」と呼ぶ。

人間のたましひが來れば
魚や蟲はつたへ聞いて集り
木の葉は互ひにそよぎて知らせ合ふ。
大いなる自然の意思の下に
夜の集會は初まる。」

人間の知らざる集會あり
人間の知らざる言葉あり、
そうして彼等は盛んに語る、
たましひは野に山に林に海に
人間の秘密を語る。

人間の秘密は海が知り魚が知り鳥が知る、
人間の陰謀は野が知り星が知り獸が知る、
けれどもくらい夜があくれば

たましひは又人間へ
そ知らぬげに歸へり來る。

――「たましひの集り」

この誤字の多い、たどたどしい文語脈の勝つた自由詩に彼の純一な感情がよく出てゐる。彼の頽廢は「ぬかるみ」の

莫迦莫迦しけれど矢張り歩む、
食はざるべからず、

に出で、

ぶつ倒るれば足蹴にさるべし。
石くれの如く踏まれるべし。

に出て、現實に生れ現實に生き現實に苦しむで現實感の頽廢情緒をせめてもの慰安の如くに打ち出してゐるのだが、やがて又それは、この小さな素朴な人間を林中に驅つて

木は木の世界をつくつて

　木は木の言葉で饒舌つてゐる。

といはしめ、悲喜哀歓さまぐ〳〵の感傷を得せしめ、「たゞ一枚のおち葉ですら、それを卑しむ心になれず、今日もかなしき山に上」つて、

　人間がおち葉になるのは
　かういふ日だと思はれる。

と感じ、

　晩秋のくらい世界に
　世界の到る所に、
　キリストのかなしい顔があらはれる。

と空想する。

　介春は、平凡に生れて平凡に生き、華美の虚名をよそにして、ひとりぽつつり〳〵と詩作をして來た類の詩人であらう。かれのこの生き方が、なほこの儘に十年、二十年つゞくならば、儕輩詩人、評家の知らぬ間に素晴らしく立派なスタイルにあるひは到るやも計りがたい。又、若しこの生き方に一たび致命的な瞬が這入ると、見在の平凡な詩境が更に一きは平凡になり、つひに口を永久に緘んでしまふかも知れない。碌時、諸々とともに中年ながら今後に注意を置くべきは介春である。

　大正六年の夏、犬吠崎で溺死した三富朽葉と今井白楊とは「自由詩社」の同人で、なほ青年にして逝つてしまつた故ともに一冊の家集もない。

　白楊は若い感激を

　　新鮮な日光が晴れやかに降る。
　　洪水のやうに。
　　野に、山々に、山の谷々に。——

のごとく快適に素直に自由詩形に托した、まだ修養時代の青年であつたから

　　青い、しづかな水底に、
　　神秘な夜の白雲と
　　星の影とが漂ふてゐる。」

の如き無駄な平凡な文學青年好みの思想なき駄句も多かつたが、柳澤は、自揚よりも詩想に卓れて、且つ詩の本質にも相當に理解を有し、佛文學を專攻して「フランス文壇の現在」（大正二年「早稻田文學」）の小研究もあつた。その詩は主として青春の情緒の悲しく甘き詠嘆の類であつたが、未だその抒情の形は獨特のスタイルを創成するに及ばずして逝つた。

なほ、森川葵村、服部嘉香等もあつたが、前者は「夜の葉」後習作なく、後者は主として詩評家として四十年代前期に自由詩運動のために宣傳と主張と辯駁とを試みた。その詩作は雜誌「詩人」（舊）に前者及び川路柳虹らと發表したが、後、三木らの「未來」に參加し、文語體詩を書いた。

長き髮となりしかな、秋に來て、
遲き光にたたずみ、
手もて拂へば、はらはらと
髮のごとく落葉は散る。

——「落葉」

の頃の感傷と、柳澤健が推賞した「衝動」のごとき内心直叙體とであつたが、その後の精進も習作もなしに止んでしまつた。

これらの詩人は多く四十年代初期からの人々であるが、別に大正五六七年期に急に詩林に入つた一群の人々がある。それらが對立していはゆる現實派、人生派、民主詩人と、いはゆる象徴派、藝術派、新浪漫派、正統派となる。今日の詩壇を作つてゐる主なる要素である。

II　現實派と新浪漫派との對立

大正六七年代にあたつて漸く對立の傾向が確かになつて來た二つの詩の傾向を考察するには、先づ當時事實として現存した詩壇に於ける三個の對立を舉げなければならぬ。

第一は集團の對立である。第二に用語に於ける對立がある。第三には詩想に於ける對立がある。十年足らず、八九年前の事實にして、その當時對立の渦中に在つた者も悉くなほ壯年として現存するのみか、中には今日に到るまで長い詩の習作を試みて、なほ且つ詩の何たるを解せず、詩作の拙劣きはまる者さへ多いから、獨立するスタイルを有する個人作家としてよりは傾向、集團の大體、若しくはその一分子としての少數の個人作家に就て述べるにとどめる。

第一の集團の對立とは北原白秋の傘下と三木露風一派との抗拮の事實である。露風に友としよかつた柳澤が白秋[illegible]「黑猫」に於て主張し、白秋門から出た萩原朔太郎が雜誌「文章世界」に於て「三木露風一派の詩を放逐せよ」と呼號した事は既に一寸述べたが、これは別に正當な主張と主張との爭鬪から生じた爭鬪ではなくて、いはゞ白秋といふ個人、露風といふ個人の私情の斷斷から生じた抗爭に基くもので、萩原の説はそれから發して自らにして別の抗論に入つたのである。室生犀星が露風を攻擊すれば、西條八十は、即ち萩原の「月に吠へる」を冷笑した。

第二の用語の對立とは、口語自由詩を主張する者と文語を固守する者との對抗である。今後の詩語は絶對に文語を斥く、斷じて口語に依るを要すといふは前者の所見で、詩語は口語を頭から斥けるとまでは云はざるも文語詩の存在理由をより明らかに高調したのは後者の態度であつた。福士幸次郎が「詩歌」誌上で嚴に文語詩を排するの一文を書き乍ら同じ誌上で文語派の詩を平氣で出して恬として狼狽しなかつた事實の如きは、福士の常とする非論理性とその好人物との證明であつたが、合せて當時の詩論の如何にその時その場の出鱈目な好いかげんなものが多かつたかの擧證にもなる。萩原が「讀賣」に「叙事詩傾向の[illegible]詩を排す」を掲げ。川路柳虹が雜誌に一寸[illegible]に、それ、たのは、[illegible]へ[illegible]文壇的に[illegible]に依してゐたと記憶するが、兎に角詩形詩語の問題は當時何れの人人の間にもその重要な關心事となつてゐたのである。

第三の詩想の對立は民衆的なる民本的なる詩派を主張する者と、それから超然高踏の詩想を尊び、藝術を主とするものとの對抗であるが、民衆詩、民衆藝術を呼ぶ者が、ホイットマン、エドカーペンタ、トラウベル等の祖述、翻譯を試み、在來の詩の超然たる、社會的無關心を攻擊して民主々義思想の露骨なる詩的表白のみを現代詩の全生命なりと主張したに對し、藝術派、超然派の立場にある者は、傾向詩、目的詩の藝術的な價値缺陷を說いて、詩の本來の意義が、かゝる一點にのみ固執して存在する事の不可能を論じた。この對立は民衆との交渉の一面から自然に用語形式の方面にまで波及し、前者が平易なる用語を主とする事の必要を説いたに對し、後者は詩は内心の必至の消息である以上表現に際して事更に意を細し腕を下して容易なれ、判り易かれと心掛けるごときは、抑も詩の生命への冒瀆であり、純眞藝術の重大なる墮落であると論じた。

これを當時の局外的中立の者に聽くと、「現詩壇の缺陥」（大正七年）に於て「帝國文學」の同人[illegible]に白秋の周圍に集

「詩篇」同人も、露風門の北村初雄も露風周圍の柳澤健、西條八十も、柳虹の「現代詩歌」の一派も「象徵詩の流を汲んで夫々若干の特異性を有する」ものとなし、又、彼の所謂「象徵詩第三期の代表詩人として特に擧げたいのは日夏耿之介、萩原朔太郎の二氏である。」と稱し、暮鳥と省吾とは「詩風が變化したやうであるから取立てて云はない。」と云ひ又、「この象徵詩の流に對抗するものとして人道派、民衆派と呼ばれてよい詩人達が居る。」と論じ、人道主義の一群、室生、千家元麿、近藤榮一、佐藤惣之助の內、千家、室生の兩者を代表的人道主義詩人となし、「次に最も華々しい一團に民衆派がある」とて加藤一夫、福田正夫、百田宗治、富田碎花を擧げ、福士、加藤、高村等は「或る範疇の下に片づけてしまへない」ものであると分類した。

この一文は、詩壇局外の文學研究者が、內部事情に暗いためと、詩歌鑑賞のセンスの根本があやふやであるためとに因り、表面にあらはれた「大勢」を大さつぱに概觀して、よいかげんに人物と名辭とを結びつけて文學史風な外面的布置を試みることの如何に誤謬の甚しいものであるかを明らかにするものであり、啻に岡崎とのみ云はず、いはゆる文壇の批評家、大學の文學教授、その他の文學研究家の類の所謂「研究」の鑑賞的基礎の詳部に到ると妙なからぬ說明化されと組寒と出時中と」立してゐる事實が多いことをまざ〳〵しく物語つてゐる。で、岡崎の批評も、全然的を外れた觀察では勿論ないけれども、一句一章一篇の稀質にして纖細なアップリシエイションに極めて不準備であつたそしりは到底免れなかつた。

一例をもつてそれを擧證するならば、彼が華々しい一團の民衆派として筆頭にあげた加藤一夫の詩と稱せられるものは、その殆ど全部が當時にあつては詩になつてゐない散文の短句の出鱈目な行列にすぎず、福田及び百田も、加藤にやや增して制作經驗が有るといふにとどまり、幾多の非詩と大部分の拙詩との所有者であつた。（尤も二人を一緒にはしても、百田の方は福田よりもやゝ詩作の經驗が深いだけその程度は少いのであるが、）彼のあげた「民衆詩人」の中で眞詩を作つてゐる分量の多いものは實に碎花一人にすぎなかつた。（細かい作例の擧證はこゝに頁と時間とのない故をもつて乍殘念割愛する。他日の機會に詳論して言責を更に明確にする所存である。）

さて、以上の如き分派が存し、分類が觀察せられたが、個々の作家に就て詳かにその詩感の本體を解剖して見ると、その多くは未だ獨自のスタイルに到達せず、あるひは、特色著しい一家の詩風をも有せず、甚しきは詩の何たるやをも、他人の詩の

見たるや劣れたるをも、進んで自分の作の如く誇示するをも能く判別し得ない青少年の徒らなる喧諾と自己吹張と贋作の濫發とにすぎなかつたから、かれらが集合して團結を試みても文壇一般にさしたる反響がなく社會全般は殆ど馬鹿息子の世迷語ほど以上にも感じてはゐなかつたのは寧ろ當然である。が、この青衿等の喧爭の中にも當來詩壇に力と光とを與ふべき何ものかは確實に潜んでゐた。その潜勢力が、やがて九年十年の後の詩史中に數頁を飾る收穫を結んだのである。その力は主として、その個々の詩家の眞摯な精進とたゆまざる反省とに因て稟賦の詩才に磨きをかけ加へられたのであるが、團體として初めて意義を生じ來る諸努力が善惡兩面に作用しつゝこの時期よりして急に勃興して來た事實は見免すことが能きない。

大正六年十一月詩話會が生れて、最初の會合に茅野蕭々、灰野庄平、山宮允、川路柳虹、福士幸次郎、多田不二、日夏耿之介等集つて、大正八年に第一輯「日本詩集」を公刊し、大正十年、島崎藤村誕生五十年祝賀會を詩話會の手によつて催し、記念詞華集「現代詩人選集」を上梓したが、これを最後に北原白秋、三木露風、茅野蕭々、竹友藻風、山宮允、西條八十、柳澤健、日夏耿之介は詩話會を退いて新詩會を設立して、その詞華集「現代詩集」第一輯を公刊し、舊詩話會は別に又「日本詩

人」を刊し、川路柳虹は、福田正夫、白鳥省吾、富田砕花、佐藤惣之助、福士幸次郎らとこれによつた。

すなはち、最初の目的は、詩壇が衰へて、他の藝壇、殊にも小說界劇界にも著しく劣つた傾向に在つたので、共同目的の下に詩壇の意義を闡明し、詩を普遍せしめようとて、共に互ひに同舟して復興をはかつたのである。即ち同人が定めて一年刊詩集を發刊し、各同人の責任に於て優秀なる新作家を推薦しようと申し合せてその實行に着手した。この詩話會の事業としてはひろく詩の文藝上本質價値を叫び、アンソロヂーを發売し、露西亞の未來派青年詩人ベネディクト・マルトを集會に招いて松永信成及び金田常三郎の通譯で詩見を交換し、特に青少年への詩の普遍をはかつたことなので、その提議者と努力者は多く川路柳虹であつた。

けれども、斯くのごとく各異派作家の大同團結をはかり我詩壇をはかることが、他面に於ては著しい弊害をもたらした事は當然である。すなはち、詩話會同人が推薦する新進作家なるものは、年を加ふるにつれて漸く、詩歌の良否をわきまへず、黑白をも辨じ得ない全くの盲目の追從で、そのやうな年少未熟の徒をも自ら責任を負ふと稱して各同人が次第にきそつて集會にも出席せしめ、年刊詩華集にも投詩せしめたのは、一に之れ

の生活に親近である私的感情が殉情的に公的嚴正を蔽ふてしまつたのではあるが、尙その外に、已が詩壇の各派に於ける一種の勢力を擴張せんがための俗陋唾棄すべき世間慾に基いてゐる事は、當時、月を追ふて增す出席者が愈よその人の幼稚を加へ、年を加へて投寄する年刊集中の作品がます〳〵その詩の稚拙を增し、且少なからず詩風が一方に偏向しすぎた事實によつて確實に明瞭である。大正十年三月茅野蕭々、北原白秋、三木露風、山宮允、竹友藻風、西條八十、日夏耿之介、やゝ遲れて堀口大學、柳澤健らが詩話會を退いたのはこの所因に基いた。かれらは別に新詩會を起し、アンソロヂー「現代詩集」をも出したけれど、各それ〳〵異れる趣味に生き思想を守つて、集合的運動に特別の興味をもさして痛感せぬ性向のものの集合であつたため、その會はその後何らの活動をも試みず、各個人々々に或ひは單獨の詩作に甘んじ、或ひは自己を中心とする青少の集合を事とするに及んだ。これは、一面、民衆派に反してかれらが個性に執する性僻に强いためで、集團の詩林に於ける意義を考へると、これら傾向の是非は、兩派の價値判斷に於て輕々には判斷を下しがたい。

さて、先の分派分類は固より各各詩家思想の本質的異差による差別ではないので、白秋の一類にある者の中で、犀星が人道派と稱され、萩原が象徴派と稱されるかと思へば、露一派も象徴派と稱され、福士が自らは人生派、民衆派、人を以て任じても評家は之れを特別の部屬に收め、白鳥省吾が自ら擬して民主詩人と唱へても評家はかまはずにこれを「取り立てゝ云はない」過渡詩人の類だと見なすなど、自撰と他稱とは自らにして異つてゐるが、用語の點に於ても民衆派が多く口語を使ひ、他派が主として文語によると大別して見ても、福士が文語脈を使ふ例あれば、萩原が口語を喜んで、口語の使用に於ては福田白鳥等脚下にも及ばぬ成効を後に於て收めえた例などがある。すなはち、民主的思想に立脚する「民衆詩人」、「人道詩人」等を一括として一類と見なし、然らざるもの、詩感の自由性と普遍性と絕對性とを信じる超然的傾向、耽美的、主情的、頽廢的、新浪曼的、象徴的、神秘的、藝術至上的等あらゆる他の特質傾向に在るものを一類となし、此二大別に依て詩壇の大勢を一瞥することは大體に於て非理ではない。即ち一は新しき傾向にして、他は在來の稚き詩感の更に眞純透徹を期する正統派である。

民主派が攻擊する處は藝術派の特殊の用語、詩感に對する蔑視又は反感に出立する。その「內容を伴はない技巧」(白鳥の語)であり、「古い律格の過重」(碎花の語)であり、「言葉の玩弄」(百

[illegible]の詩で[illegible]の、『見せかけ』[illegible]の陰士[illegible]てきまるが、固より事新らしく云ふまでもなく、假りにも感[illegible]の自由性の上に詩感の全體を躍游させようとする者が、自ら進んで詩藝を汚し、見せかけの程度に終らしめて悅ぶものは詩人である以上一人としてありやうはない。假りに右の人々が感動がない、空技巧であるとしたものも、他の一派又は局外者が見たなら、其處に夥しい眞技巧と感動との表現を看取したかも知れない。實際に於て此の事實は澤山に存在したのである。又、眞實に言語の彫琢の末節に奔つてゐるものなら、啻に民主一派が見て然りといふ計りでなく、公正の立場を守る反對派の者が見ても亦然りと云はなければならぬ。ものそのものとして好篇佳作でない時、派と傾向と時と所と特別の場合とを問はず、凡て之れを少くとも絶對によろしとするが如き事は許されない。若し此事をしも敢てするものがあるならば、傾向の如何を問はず、それは小感情のため、同黨伐異のために事實をことと更に曲げて誣言妄言を吐くの小人である。

畢竟、當年の詩壇が私情と公正と友好と嚴評との渦中に卷かれて甲が乙を亡せば、乙が丙を推賞し、その丙が又甲を宜しとするなどの紛々雜然たる混迷と雜糅との間に惑亂してゐたのは、一に新らしく出た民衆派の呼號が必要以上の無思慮な偏見

[illegible]とに[illegible]つたことと、更に又、[illegible]へて、[illegible]くるものの舒展の青々たるをあらはさず、あらゆる[illegible]すべての作家が苦しいスタイルの創成に迴りつき得なかつたためとに外ならぬ。個性があまりに著しく發輝せられたならば、この混亂の外に超然たる事が能きたであらう。民衆一派が自己の立場と本分とに甘んじて應分の努力を勵んだならば、その業績は今日に於て史的觀察を施して更に一段とすぐれた高所に到達してゐないとは必ずしも云へない。

古きものと新らしきものとに直ちに價値の絶對性を傾けるが如き輕薄な事をなした評家があるならば、その當時の詩壇を顧みて直ちに藝術派、新浪曼派を陳套にして救ふべからざる窮境に陷沒したものと見做し、民衆一派を嶄新にして活達、寔に想望するに足るべき未來を所有してゐると斷言するが如き結論に達するであらう。この種の末筆は新派を以て任ずる詩人にして評家たるの徒に多かつたのみではない、當時の一般批評家にも尠くなかつた。そのわけは、自然派廢り、享樂派衰へて白樺一派の世間所謂人道派といひ躍進派といふ、文學傾向の一翼を固守する小說家が俄然として擡頭し、政治、經濟上のデモクラシー、思想文學上の淸教主義の大勢に乘じヒューマニタリアニズムの文學の可能と必要とを熱狂を以て主張し、その傾向の

文士に材能比較的すぐれたものが多かつたので、その後の文檀を掌握するに及んで、トルストヰ、ドストエーフスキー、ミケルアンジエロ、ミレー等の藝術の玩味讃歎の風潮を來たし、かゝる一味の傾向と對蹠の位相に在る天才の作、傾向、流派等に就ては心要以上の蔑視や不用意なる偏見を輕々しくも吐き散らして恥ないやうな風潮をさへ生んだので、徒らに肯定的主張を人生觀の上に置き、藝術觀の内部に機械的に挿んで、新興文學の先驅と自稱して得々たるやうな滑稽さへも文壇に於て公然と行はれるに到つた。たとへば、畫家岸田劉生、木村莊八等が少年の客氣に乘じて古典藝術に對する極端な無知なる漫罵を事とし、文學上の常識すらもなきに文學上各傾向の作品に對してすら淺薄嗤ふべき言議を弄して自己及自己の友人の作品をやゝ妄想的に持上げたのは、今日に及んで考へるとその單純な性僻が生んだ一時の狂態とのみ見做すとは能きない、その心理には意識無識に不快なる自己廣告のあるものも交つてゐたと考へられる。その後彼等は年齢を加へ、反省を重ねて、木村の技術はあまり進歩は見ないが、岸田は著しく本質的個性價を増して昔の嫉詬狂態を全く去るに到り、事更に寄せた眉毛の八の字は消え、蓬面亂髮の紺飛白は清洒たる絹衣に化し、岸田が浮世畫の悠々たる鑑賞に耽り、デユーラー張りの古風に親しむに到れば、木村もこれに追隨して明治初期頃の芝居畫風をことさら油繪の上に試みて當年口汚なく罵つた享樂派の異邦趣味に今さら傾到するが如き、衣食足つて禮節を知るの觀こそあるが、木村はとにかく岸田に於て良き進程であることは疑ひもない。また、長與善郎が當年の白樺誌上に肩を怒らして、自分でもイプセンやレンブラントや云々の常習崇拜者にこそ及ばんと感じるが、イエエツやシユニツツレルや云々の徒にはいつでもなれると高言を吐いた如き、皆これ當時人道派的なる六號活字的の英雄感の吐露で噴飯すべき憫笑すべき稚態にすぎなかつたが、これらの大勢と傾向とが思想の獨立性なく趣味の個性なき族々たる評家、雜文家の徒を動かし、いち早く時代のこの新勢力に迎合追隨せんものと、周章狼狽して昨日まで戲作に親しんでゐた顏を拭つてトルストヰを擔ぎ出し人道派の旗持ちをつとめて喜ぶがごとき悲慘なる滑稽が行はれた。一例をあげて以て詩壇に於ける證とするならば、一切白粉と斜街と蜜豆と雛妓とを謳つてやまなかつた人見東明(後の清浦明人)が卒然として肯定と躍進と粗奔と苦悶とを看板とする人道派に移民してその種の詩作を濫發し、つひにかへつて詩林から遁逃してしまはねばならなかつた詩感の混迷に陷つたごとき、又は評家加藤朝鳥が、自働車を咏じ勞働者を賦するを以て新代の詩歌の趣味となすと「讃賞」

[illegible]き、その他この種の事例は乏しかつた。この渦中に在つて人道派、民主派、民衆詩人らはこの稚き眼を見ひらいたのである。多くの人が一先づそれに牽引せられるごとく、時代の大勢に於ける惡趣味、惡傾向は、その善き傾向、良趣味と同時に時代の少年の小胸を襲ふ。日本現代の思潮傾向とアメリカニズムとバラック藝術とを見るものは、現代の少年が、これらの凡ての善惡兩方面の感化を受けてゐる事實を見のがさないであらう。時代の風潮の只中に若く漂泊して力強く個性に立脚せんとするほどの者は、たゆまざる精進に伴ふに必ず、自己の禀賦の反省と撫育とを怠つてはならない。この思慮と丹錬とを缺く時、その少年はその時代の先頭に佇立するが如き妄想に耽つてゐるその瞬間、はやくも時代の惡趣味、惡傾向の方面のみの荼毒を身に受けて、いつか身は時代の犧牲者として取り殘されてゐるを恒とする。この小さき無自覺の上にこの小さき悲劇が横はる。すべての時代は、これら千萬の悲劇を後にしつゝ絶えず絶えず、彗星のごとく時空の太虚の只中をまつしぐらに走つてゐる。かゝる現象の一として民衆詩人の業績を一瞥して見る要がある。

四　民衆詩人の業績

「これを民衆詩人の長所から然くと云ふ文藝に民主的要素を表現した先蹤は、文藝の各部門の小說、戲曲、詩歌等に於て詩壇が遙かにその第一歩を勤めたものであつた。文藝と限らず一般の評論が社會問題を討議するよりも以前に於て爲されたのである。もとより嚴密に言へば、斷片的には、小說、戲曲、詩歌、評論方面にそれらしい傾向のものはあつたが、全般的になる根柢と力とを有しなかつたものである。即ち時代を劃するといふ風にはゆかなかつたのである。」(白鳥省吾「現代詩の研究」一二三—一二四頁)

かれは、而して、かゝる榮譽を有する詩壇の民主運動はホイットマン、カアペンタ、トラウベルの紹介が與つて力があると云ひ、漱石、樗牛、內村、有島に次ぐに白鳥自身の飜譯文を以てし、碎花以下、大正十年に到る文獻を列擧してゐる。

この主張は眞實であるか。さきに述べた如く、漱石はかの北米詩人の死去を機として一文を草し、樗牛は多分漱石文の知識を基として提唱を試みたのであるが、漱石の思想の徑路は複雜にして到底之れを民衆詩人一聯の詩的徑路と同一軌に置く事は允されないばかりか、彼の「草枕」時代反自然主義的低徊趣味

の鼓吹のあまりに歴然たる事實を知るものは、かれら民衆詩人と漱石とを一たび對暗せしめる時は論なくして兩者の斷然たる天地の如き差別に想到して微笑を禁じ得ないであらう。又、樗牛の如きも、一たび「僕はエゴイストだ」の告白を試み、病苦の間に日蓮の信仰に生きてその多き理智と苦しき感傷との最終の場面を閉ぢたる事實を知るものは、詩歌の個人主義を斥くと抗言する民衆論者の感動なき妄言と無駄なる作例とを見て、餘りに甚しきその乖離に失笑を再び繰返さないではゐられまい。所詮、彼等は自己の貧しき頭上を蔽ふ裝飾として漱石、樗牛等を持出して垢面に金冠？を飾らんとしたにすぎず、詩壇の民主運動は社會文壇一般の大雰圍氣の中から生れたる小さき波動にすぎない。自ら僣して先進者と號し厚顏無恥にも大正三年早くもモリス・クレール譯文ありと麗々しく書き立つるも、これ彼の詩作を見れば、評家岡崎をしてどつちつかずの詩風だと片付けさせる迄もなく、かれの「世界の一人」（大正三年）「大地の愛」（大正八年）に漫然漠然茫然たる現實感をうたひ、その明らかな旗幟の闡明は、饒舌と濫作との連發により無知なる東西なき文學書生の雷動を買ひ、漸く内容は貧弱乍ら外態は鳴物入りの賑かさで、民主派を樹立するに到つた大正九年十年の後に屬する事を見ても、大正六七八年の交に於ては些々たる斷片の紹介、翻譯の稀れなる發表にしかすぎなかつたを見ても知である。そのホイツトマン論とても、その精密は有島に遠く及ばず、その燃焼は碎花の背後に落ち、早稻田大學に於けるホイツトマン記念講演會講演の如き、内容の貧弱と推理の不徹底と加ふるに同じ材料を前講者吉田絃二郎により巧みにより明らかに釋義せられし處より全くその立場を失なひ、聽衆の嘲笑を買つて退壇をうながすの拍手を浴びせられた事實は、如何に厚顏のかれとても心胸に徹して今なほ忘られまい。この波及びその一派が文壇に於ける民主傾向の先驅也と說くにいたつては、史家の立場に在つても尙且その圖々しさに寧ろ公憤に耐へないものがある。

民主主義は、世界戰に於て破綻を示した在來の國家、經濟組織に對する疑惑や階級觀念に對する新見解、帝國主義、資本主義に對する抗爭とともに、大戰前後より以後に於てその以前よりも一層明らかに社會主義各派のより強く、より明かな先驅を以て勃興した。日本に於ける波動も亦これにやや晩れて明らかに政治、經濟、文學、思想各方面に認めらるゝに到つた。詩人のごとく、特に團結して民主詩といひ、民衆藝術といふことの提唱を試みなくとも、かゝる集合的存在のなかつた文壇にこの思想とこの傾向とがその作例の中に明らかに認められた事は

[illegible]だ[illegible]この民衆[illegible]
價値はどうであつたか。又、かれらの研究と詩作の實際に於て[illegible]あつたか。民主詩を稱へたかれらに只一冊の正しき理解と熱き信仰と確かなる知識とを備へた論究の書が出なかつた。多くは片々たるハンドブックのその一部分の杜撰極まる翻譯でなければ、外國雜誌の切拔きの類にすぎず、裕吾と正夫の翻譯は有島と柳宗悅とに遙かに及ばず、同じくかれらの論議は（大正六年「文章世界」「民本主義思想の研究」）は、長谷川天溪、三井甲之、田中王堂にも遠く及ばなかつた（。同誌。）

その同衆同行の一人加藤一夫の「昨年の一月頃から民衆藝術といふことがちよいく（と論議された。しかしその多くは民衆藝術を熱心に主張するでもなく、素より具體的に民衆藝術を提示したのでもない。」（大正七年「科學と文藝」）と云つてゐる事實に徴しても、民衆藝術としての民衆詩がその後に到つて漸く盛んになつた事が判るが、評家としての川路柳虹は同年の「文章世界」誌上「民衆藝術の創作的努力の方面は目下のところ、詩壇だけがその實を擧げてゐるのではないかと思はれる位である。」と云つてゐるから、先づ此頃漸つとその習作が出て、而もそれが立派なものとは同衆も同情的立場の評家も考へてゐなか

[illegible]
い一要素たる[illegible]
なロマンチシズムと[illegible]皮相な見方[illegible]
說[illegible]といひ、[illegible]とす

し、「これらの人の多くは一言で足ることをすら時に冗漫に叙してゐると感じ、一見劇的内容においても寂しく平調であり現實に對する價値的方面の考察に於からず足りない感がある」と批判してゐる。當時の柳虹の[illegible]なり位置を考へても、この批判が、彼として眞剣にされず、私情に拘はることが尠くして禁まれた事は容易に判るが、ひとり裕吾のみは見解を異にし民衆詩の「底力ある開花期」は大正七、八年だとし、「作品もまた充實に向つた」と評してゐるが、これは最近の彼の論述故、當時旣く考へてゐた證據ではないが、凡そ漸く回來れば、當年の民衆詩がどんなものかは想像がつかう。

尙、當年以後數年間かれら詩人の間に論ぜられた民主主義、民本主義、又は民衆詩、民衆藝術に關する論議は夥しい數に昇るが、大部分、殆ど全部が[illegible]な史的知識と透徹した理解との上に建てられた主張若くは研究でなく、たとへば政黨の陣外圍の演舌をきくやうな徒らなる元氣と無智と矛盾との混交にすぎない故、初めの間こそ、新らしい叫びかと感じ、多少の期待を

準備した評家も文壇も世間も、そのあまりなる無識と放言とに惘き、嘲笑し、まぜつかへし、果ては對手にしなくなり、延いては詩壇全體がかゝる非藝術と無知無識との空氣に充ち滿ちてるものと速斷するにいたつたのは是非もない。詩壇の新人を以て自任し舊人と陳套とを征服すると豪語してはゞからなかつた民衆詩人に半言隻句の民主々義的正解の論述がなかつたに係はらず、一般文壇に於て詩文壇の重要な一傾向と見て正面から論評を試みた評家が少くなかつた。それら評家の多くは精密にして纖細なる實際作品の鑑賞を行ふのセンスが稀薄である故に、爲にする者の兩三者の議論、作者側の宣傳的定論及び末輩の附和雷動的俗論の続出を見ると、直ちにそれが一代の大勢にして同時に實際作品の秀拔なる続出と解して、その假想の現狀の上に立論して所見を陳じた。文壇一時の流行や傾向やの中にはこの種の「西部地方のいたづらつ兒」の冗談が誠となつたものもあるのである。民主主義が、固よりかゝる架空の流行でない事は論じるまでもないが、民主精神の詩壇に於ける横溢をもつて、直ちにその優秀作品の湧發と解した輕卒な評家も數少くなかつた。これは評家の論理仆れと、實際作品判別の能力皆無の證である。

かく、民衆詩人と評家との中に表面的の論究の殷賑があつて内部の寂寞が蔽はれぬ事實であつた中に二三の公正な批評研究がないわけではなかつた。一例をあげるならば、大西貞「文藝上の民本主義」（大正七年。「帝國文學」）はその一である。當時の民衆詩家はこの如き論文の存在すらをも認めず、寧ろ知らなかつた

この論文の主旨は、要之るに、文藝上民本主義とは、政治上民本主義思想が文藝の埒内に入つて何等かの形態を取つた場合の命辭で、その關係は、（一）政治上の意味で交渉し來る時と、（二）政治上の形式丈けを殘して交渉し來る時とあり、前者は實質關係で、後者は形式關係であり、此文藝上民本主義を四つに分類し、（一）文藝上豫備條件に關する方面。（二）藝術的創作の契機に關する方面。（三）玩賞過程に主として關する方面。（四）藝術の效果の方面として共間、ヘルデルと、テイヌとその"Poésie Populaire"の本義とロマン・ローランの「民衆演劇論」"Le Théâtre du Peuple"を引いてローランの「吾々は人間精神の光榮（即ち藝術）を民衆に奉仕せしめんとするに非ずして、寧ろ民衆をば吾々と共に此の光榮に奉仕せしめんが爲に働くのである」の意義を解釋して同書一二七頁の長脚註を部分的に譯出し、更に社會主義者マルテルベルヒが說の要旨を說き、エミール・ライヒの見地を紹介し、最後に「藝術の爲の藝術」と「人生の爲の藝術」の爭論に就て、實際上の結論が兩者の對角線的

評價を試るけれど、藝術の社會學的見地からすれば必ずしも不調和のものではない。何者ば、藝術は人類の美的文化の爲の藝術であり、詮ずるに問題は文藝上民本主義又は民本主義の藝術が「果して眞に美的價値の高い作物を（現代の如き全ての事情の下に）提供することが出來るか否か」に存する。換言すれば、「現代の社會狀態に於て、文藝上の民本主義なる立脚地が、眞に價値高き藝術の生産の爲に、果して如何の程度に於て必要條件なるか」といふに存する。又、一方から云へば、此兩者の關係を抽象して論じると、結局「美」と「人生」との關係、或は人生に於ける「美」の位置を論じる事となり、當然各人の人生、世界觀乃至哲學で規定され主觀的となるが、社會學的見地に移して、社會に於ける藝術の位置を論じると、過去の歴史や社會的諸科學の比較的確實な研究を土台として美的文化の原則事實を捕まへ、そこから立論するから比較的に客觀的となるから、文藝と政治の交渉關係密なる民本藝術問題に批判を加へるのに特に必要な方法であると結んでゐる。即ち方法の究明で解決の闡明ではないが、徐々たる小詩人の不道理な、寧ろ無道理な宣傳よりも遙かに詩壇のため、詩人のため、特に民衆詩人のために啓蒙的暗示ある所見であつた。

かゝる論究が詩壇に直接の緣もない美學者の方面から提示されてゐるにも係はらず、詩壇の内部に於ける知識は依然として素朴期の域を出なかつた。當時の情況を指して筆者は嘗て、「美の概念を叙べて愛心それ自らを唄ふことが能きなかつた。力の抽象觀念に憧れて事實は力に充ち滿ちた外形しか表はしえなかつた。同時に、徒らに傾向的一般の特色を出さうとあせつて反つて千篇一律となつて署名をとれば誰の作でもよいやうな詩が夥しく多くなつた。政論雑誌の小論文を韻文のやうに切れ〳〵に並べ替へた、詩の形をした非詩であつた。」（拙著「詩壇の散步」三四頁。大正十年「大阪朝日」）と回顧したことがあつた。

右、大西文章のごとき存在がありしに係はらず、詩壇は今日と雖尙迷蒙無識を悟らないのである。即ち、當年の詩を評し、白鳥省吾は「その現代詩の研究」で、民衆詩人共通の特色は

「一、現代に對する情熱を持ち同時に未來へ飛躍する肯定的な精神

二、着實なる現實味、ひいてはこれまでの詩人が氣づかなかつたあらゆる人間、あらゆる人物に詩を見出す取材の廣汎

三、言葉の自由で平明であること

等である、その他、いろ〳〵の要素もあるが主なるものは以上である。」（同書。一九七頁）

と云ひ、「結局民衆詩派と象徴詩派とはその根柢に於て表現に

於て、到底、相容れざる溝渠が感ぜられる。」(同書。二二四頁)と斷じ又に、象徴の説明を上田敏の「海潮音」序と「文藝論集」の一文との二つによつて紹介し、「象徴」(Symbol)は原始民族にもあつて、北米土人が種族に縁ありとして動物を禮拜の對象したのや埃及の形象文學(文字の誤か?日夏)の如きがそれで、さて、「近代の象徴詩はこれらとはよほど味ひを異にしたものであるが、ともかくこの象徴の原理を暗示を得て展開したものと見るべきものであらう。」(三〇八頁)と講説し、日本の象徴詩を一わたり批評してから、「能辯饒舌の甚しきは白秋であつた。感動が稀薄にして「首締めてあれ」を奉じたのは露風であつた。八十の詩は象徴の美しい形骸のもの多く、耿之介の詩に何の音樂があらう。」(三六七頁)と評し去り、將來は、「象徴詩は益々孤寂な夢に耽り、自由詩は大衆の中にその根を下ろすであらう。」(三六九頁)と云つて民衆派大勝利を以て首尾よく結んである。

省吾の右の解説は文學史的皆無智と公私混同感情の偏見を露骨にあらはした文章である。今一、一之れを正誤するの要はないが、たとへば原始民の崇物の民俗に於ける象徴主義(シンボリズム)と輓近派の象徴主義(シンボリズム)とを同一だといふ借物知識以上、兩者の關係を說く準備がない故を以て、特に勿體らしく、「よほど味ひを異にしたものであるが、」と朧ろげに云ひ外らし、それから「此の(原の)象徴の原理を(の?)暗示を得て展開したものと見るべきものであらう。」などと冗長な文句で誤間化してはゐるが、「味ひを異にした」のではない、象徴の種類が全く違ふのだ。さきに露風の場合にも說き及んだが、こんな知識は、長江、天溪、孤村、抱月らが十五年以前にはやく說明してゐることで、又、「此の象徴の原理の暗示を得て」ではない、象徴一般の原理が古代民に於ては天、地、族靈の類を崇拜神化し、中世近代に於ては藝術上の觀念象徴情調象徴となつたので、符號は象徴の原始的な稚きものである。更に西田幾多郎の簡明周到な釋義を借りると、外面的、偶然的なもので、ひとしく意味と存在との結合ではあるが、象徴の意義が深ければ、その關係が內面的、必然的となる。この意味と存在を結合する「一種の感情」は、「知識以上の客觀的意味がある」、何となれば、我々は多くの概念なき理解を持つ。而して知的理解の根抵にも一種の感情移入があると考へることができるのである。藝術家は此立場から物を見るのである。斯く「ダンテの Vision に於て見るニコラス三世のそれの如く泣く足がある。ロダンが藝術の素材として平面を見出したと云ふのも此の如き立場から物を見たのでなければならぬ。所謂藝術美の先驗性は此處にあるのである。藝術美が知的

得るのは、之に依るのである。之に反し少しでも認識界に暁して因果干係に支配せらるればそれだけ不純になる。美感は変じて快感となる。」(「象徴の眞意義」)ところが、浅薄なる民衆詩人の當年に於ける饒舌は悉く、「感情は非實在的である、幻影である」(同上) といふ妄想に立脚し、「智識が唯一の一般的客觀性を有するもので、感情は單に個人的、主觀的と考へ」(同上、依つて以てたとへば省吾の如く西條を斥けては心の幻像を示さうとした詩で、第三者に一種の詩技としてつまり遊戯として映り切實さを欠く(「現代詩の研究」三五七頁)と評してゐるが、その第三者とは民衆詩人若くは省吾一人の事で民衆詩人の詩以上省吾詩以上に天下に西條の詩の眞價を認めるものは事實に徴しても遙かに多く、これこそ大衆に根ざしてゐる程度が強いのである。北原、西條の詩が普遍である事が唯一の價の證左ではなく、眞價として大衆をも索引したのであるが、三木の好詩とて眞價があつても大衆一般に普遍でなかつたのはかの眞價のためでなく、その詩の性質が然らしめたので、そんな例は東西古今に澤山あるが、此大衆云々を唯一の根據にして民衆家は謂れなき濫評を事としたので、固より北原三木西條ともに駄作も多ければ濫作もしたが、その作品の價は爭はれない。然るに當

評を最も多く事とし今日尚依然として[illegible]一人は省吾あるのみで、當時の寄生、百田、佐藤惣之助等のその後の自覺は今や省吾の如き不反省の言評を發するの愚を再び繰返さないに徴しても、當時如何の無知評が横行し、而して十年一日の如く今なほ妄昧と愚鈍とを覺悟らぬ一人省吾の言議の、齊に詭辯を弄して田舎の文學青年を感心せしめる以上何ものの價も持無である事が判明する。當時民衆派に同情的立場をとり自ら「本然主義者といふ」(福士幸次郎、「詩壇に於ける私の辯明と主張」。大正七年四月「文章世界」)て居た川路柳虹も、その批評(同年同月同誌「詩壇に於ける民主派人道派」)に於て、「卒直に言へばこれらの詩を讀んで其の中から眞の民衆意識を感動さすべくその把握力が薄弱である。寧ろ第一に受ける印象は單に詩の卑俗化(ヴルガリチー)の一面である。」と明言してゐる。この卑俗化は反民衆派、反人道派の評家の衆口一致して之れを斷言した批判語である。

卑俗化は普遍化でない。粗荒は平明とはちがふ。人各その稟性によつて、「象徴の眞意義」の論者の高調した「論理的範疇を超越した我等の深い人格の中には純なる藝術に依つて表はさるる如き無限に豐富なる先驗的感情の世界がある。」といふその世

界よりの消息を一般性あり客觀性ある感情のはけ口から詩情と化して表現の道をとるのである。一見、非實在的、幻影と稱される感情にもこの普遍妥當性ある以上、どの感情が果して幻像の非實在か、どの感情が「着實なる現實味」があり、どの感情が「不着實なる非現實味」があるかは人各その見を異にし、假令んば省吾がかりに代表した民衆家が詩集「砂金」を「感動の必然性に乏しく、稀薄さを感ぜさせる」と考へ、「尼港の虐殺」を省吾らへの轉向だと思つて「自由な表現と廣い世界への歩み」だと推賞しても、當人は別に省吾への歩みよりなどを些かも喜ばず、衆識者も「尼港の虐殺」を西條的ならざる詩感の表現として第二義、第三義價値の作と見做すのである。省吾一輩が、齒牙にも掛けず、ろく／＼論評も加へない詩人（その中には堀口大學、柳澤健、竹友藻風、茅野蕭々その外が居る）の中には光彩ある詩感の所有者が夥しくゐる。一例をあげて斷言を下して見るならば、省吾が今日迄の作品と堀口のそれを比較するなら、その「着實なる現實味」に於て、省吾が不熟不徹底な民主思想の說明をくり返してゐるに對し、大學がその戀愛を大膽に赤裸に痛切に直截に歌ふて憚からない（かれの詩は「詩篇」第二號（大正七年一月）の「頌歌」が發賣禁止になつてゐる。この禁止は名譽でも不名譽でもないが、かれの現實[illegible]り赤裸々と眞實との學證になるものである。）點で遙かに卓れてゐる。省吾作るところの

　おゝこの臨月の女抗夫は
　今まで抗内で働いてゐたのだ
　出產の豫知が微妙な肉體に來た
　彼女は周章てた
　　　――「二重の分娩」

の如きギグザグ（省吾の用語によると）なゴチ／＼した表現よりも、大學の「新らしき小徑」の輓近體の方がはるかに平明である。プティ・ブルジョワの似而非民衆詩人だと云ふ烈しい攻擊を、その後、大正十年以後に及んで今まで同輩同衆と私かに信じたよつた所謂勞働文學者側からすらも加へられるに到つて、腹背指彈者を受けて殆どしどろもどろの理路を失した論鋒を弄して只管、民衆への流眄を行ふて倦まない事實は、輓近漸く識者の廣く悟るところとなり一般の嚬笑を招くに到つたことは大勢とはいへ致方がない。而も所謂勞働文學者方面からの激しい罵倒を氣にして勞働文學者と雖「筋肉勞働者でない事は」（二二一頁[illegible]

あるが、固より彼等が今のまゝの状態を續ける限り眞詩を生み得ず、況して民衆の詩たり得ない事は勿論で、直截に評するならば、民衆を借りの喰物にしてゐる處のデマゴーグの最劣等なるものにすぎず、故大杉榮が似而非社會詩人を罵つた用語「小紳士的快樂」を豫想して民主家の假面を飾るの徒であるが故、斯る輩が詩人たり論客たる以上、大正七年以後今日に及ぶ民衆一派の詩が些かも進歩の跡が見えなかつた事は怪むに足りない。寧ろかゝる存在が允された事は、本邦詩文壇とその背景たる國家社會全般の批評精神、文化意識の低級を裏書するもので、かの政治屋、かの官僚、かの社會運動家、かの市會議員、かの教育家らの有識と先達と覺醒とを標榜し乍ら自ら法網と道義感とをくゞつて飽くなき食慾と私慾とを恣まゝにするが如き存在のある事實とともに、現代暗黒面を後世に向つて説明する資料である。非詩をも詩と僞はり、拙詩をも巧詩とたばかつて饒舌と詭辯とを柄に、内部事情に暗き一般社會に向ふて宣傳と自己廣告とを事とし民主詩人の作品の擬佳作的存在をいつの間にか無理強ひにして、詩の鑑賞に暗い教育家や教科書編纂家が、當代藝術家の雄也と無雜作に無思慮に考へて、招請して講演朗讀の類を聽き、甚しきは教科書中に拙詩の著しき類をも加

かも政時得々として講演と朗讀とを文壇の[illegible]に殆ど唯一の業務と心得て詭辯と自己吹聴とを片時も忘れぬ民主末輩の詩人と與して邪論を押し通るに到つては正しく全詩壇への侮辱である。

勞働文學者が民衆詩人を指して非難する要點は、省吾の數へた所に依ると、民衆詩人が先づ勞働者自身でない事、傍觀的ブルジョワ意識が多い事の二者であるといふ。他の主要點が逸してゐるかも計り難いが此二點に就て批判を試みても、所謂民衆詩人が勞働者出身でなく、所謂プロレタリヤ詩人が勞働者出身で後者がその故を以て前者の傍觀ブルジョワ的臭味に反感を抱くといふならば一應詮議すべき道理を持ちうる。何者ば、斯る對立に到つてこそ、たとへば省吾の如きは今更らしく見當違ひのボドレエルの反抗意識まで味方に引き入れ「いかなる大詩人も當初から詩が民衆を教化するものとも階級鬪爭を宣傳するものとも認めて詩作はしなからう。また時代の先驅者とも自稱したことはなからう。」など辯護したが、民衆詩が生れた當初の史實を知る者は、省吾の言が公衆面前で盜みをはたらいて、五分間後口を拭ふて事實を否定するやうな事に類似すると痛感するであらう。大正六七八年頃の彼等民衆詩の思想的低級と前後を

わきまへぬ無識とは、今日民衆詩人がプロレタリヤ詩人を斥ける遥かに以上の顰蹙を識者から買つたもので、百田宗治が夕日を浴びて勞働者が通るうしろ姿の勇敢を詠じた作を出して、百田自身の小ブルジョワ的生活を悉知する者が抱腹絶倒した事實もあれば、省吾が三木、北原等を悪罵する時のみ民衆と實生活と階級感とを引張り出して、詩作の場合には獄舎の壁の外から散歩の歸りに一寸覗いて見た「鎖を鳴らして」や、電車の窓からすき見をした大飛場を詠じた「脈うつ生死」の類の突然たる感慨を、大部分は詠嘆出來ずして說明した事例があつたこと等は大正七八年頃の彼等の詩作を査べて見れば明らかである。斯る彼等が今更らしくプロレタリヤ詩人に「體驗の平板な羅列」を說法するのは慘ましき矛盾である。傍觀的プテイ・ブルジョワ民衆詩人の傍觀的感懷の平板な散文的羅列こそは、正しくかれらが大正七八年以降今日に到るまで悉ゆる正しき詩の鑑賞者側から恰も黒人のその黒色を指摘せらるる如く、殺人者がその手の血汐を指示せらるる如く批判し是正せられて來た事である。況んや、民衆派一聯は勞働文士の現在勞働してをらぬ事を强請するが、勞働の經驗ある者の執筆を開始すれば自ら肉體勞働より文筆勞働に移るは當然である。かつてのゴーリキーもた勞働文士の能事は足りるではないか。地方小農の小作に生れて官私の大學を出て民衆詩を作つて暮してゐる者の農民的讚歌と似而非義憤とを「水呑百姓」の家に生れて小作に從事しランプの暗い影で講義録をひろい讀みして文學を知り辛くもその經驗を詩にする者の立場から見れば蔽ひがたき實質の反感がかの小紳士的民衆家の上に加へらるべきは當然で、その反感の內部には農事に對する大學出の無知も自ら鍬とらずして農村をかつぐ事の不徹底も地方生活の微妙な內情への無識も蟠居してゐる。更に況んや、プロレタリヤ詩人を掩ふてゐる驕慢氣分を罵つて快とするに至つては、昨日まで自ら擁護してゐるが如き口吻を漏らしたプロレタリヤその者の救ふに難き自棄自嘲をば、傲然と貴族の如く官僚の如く資本家の如く見下してゐる內心を計らずも暴露したもので、凡そプロレタリヤの俗民たると詩人たるを問はず、プロレタリヤは、すなはち現實のプロレタリヤではないか、人を異にして說を變じるは即ちその態度心緒の不純虛僞の確證でなくて何であるか。

最後に、かれらが象徴的なる詩歌の個人主義を攻擊すると云ひ乍ら、個人主義倫理の內容に何ら哲學的根據ある批判を加へ得なかつたのは個人主義に就て一切無知なるのみでなく、社會

て、個人主義といへばただ個人的主義に立脚するを事とし、一種の享樂のみと解し、民主々義といへばひたすら貴族主義に對立するものとのみ解し、相對的價値をのみ顧みてその普遍的必然性を否認するがため、流俗いふところの「貴族的な詩」だとか「個人主義的すぎる」とかいふ無擇採な語の概念に不明な、不徹底な感情論に勢ひ立脚して說をなすにいたるのである。當時左右田喜一郎は民本主義をもつて「一切の人格が文化價値なる規範の實現過程に於て、其の表面の上に各々其の固有の位置を占め得べきもの」（「文化主義を提唱す。並にデモクラシーに對する徹底的批評」—大正八年「文化運動」）とした其の定義に民本主義の對他的一面を強調すべき準備を、些か缺いてはゐるにせよその內面性を闡明した所見であつたが、所謂民本說は人格價値實現の合理的主張に於て人格主義であり、文化價値の創造の普遍的立場を主張するに於て文化主義であり、一切の人格が其の固有の位置を占めるに文化價値なる規範の實現の過程に於てする點に於て個人主義であつて、積極的一面を個人的に社會的に要求する一切の主義主張がある契機に於て必然結合せらるべきことの當然であるを考へ、各の作作が、特別の意義に於て別個の方面に對峙の努力をしてゐる事實を思へば、則ち其の個人主義は

て、なく、却つて人格主義に立脚した一文化主義一を唱ふ（大正八年）として居る點に於て、民主主義者が眞に貴族的思想に對蹠する以上の論理的創造的根據を有するが如く、個人主義も文化史的創造的意義價値の一面が嚴として實在する事實が首肯せられねばならぬ。しからば則ち、個人主義に對する淺薄な批判は、對他的半面の無理解より生じた愚痴奇論にすぎず、凡そ、現代生活に於て各人の主義思想は、表面の名辭の何たるとを問はず、よしんば、自己の思想的窮境に必至に懸念して、厭人的孤獨的半面粉しかるとも、他の半面に於ては個性の尊重に基く個人主義の倫理觀が活潑に躍動して、絶えず團體生活的關心を持續することは、馬鹿か狂人かよくよくの非常識者に非ざる限り共通する通有性であり、各個人の主義思想を尊重するデモクラシーの思想的立場から見ても認められてゐることである。この常識ある者なら說明せずとも、知悉してゐる道理をなほ得悟らずして貴族主義の反社會的、個人主義の非集團性、かれらのいはゆる「古い詩」の文化史的創造性を認め得ぬのは、かれら自らその主張の觀念的內面性を認めぬことと以上の樣な甚しき誤謬である。

さて更に進んで民衆詩派初期の作品を檢討して見よう。お

て筆者は廣い意味の人生派の詩を評して非詩、拙詩の類夥しき中に唯一の詩は「かれらの親ふ政論詩のなかには一つも非ずして極感傷的ではあるが清純な宗教的を」（拙著「詩壇の散歩」三五頁）歌つた富田砕花の「地の子」中の少數の作、又は、「極めて廣い意味の人類愛に即した詩感を歌ふ（同六二頁）高村光太郎の作の少數のものであると論じた。

砕花のそれらは「風の日の聖餅」、「夕雲の歌」「秋」等である。目的な詩感の純一を汚す傾向詩でなくて、正義に對する情熱と同胞共在感の横溢が純粋の姿相を整へてゐる間のみ良詩の生産者たり得るが、理說に泥み、散文に蹂躙せられては非詩となる。砕雨、砕花らは民衆詩人たるべく餘りに浪曼的であり、人道詩人と呼ぶべく餘りに飄逸である。

概念的に說明して素人威かしをする事――即ち此派の悪僻を最大量に持合せるは白鳥省吾である。これは眞正の詩感を生むの純情に乏しくして割合に熱も情もない冷淡な性向に一味のセンティメンタリズムが含まれてゐて、そのために學者評家たるべく餘りに推理の力を欠き、史家たるべく考證の根氣を欠き、純詩人たるべく餘りに純情を欠くので、常識を用ゐて說明を事とし詩に幼く迂い初心者に、判り易いを目途にしてやむなく市

上かれの詩は一生進歩の光明はない。その病僻の一番に現はれたは長篇「明治神宮參拜」で、これは同趣味の者をも苦笑せしめた。

福田正夫、百田宗治は前述の如く簡單な思想感情を簡單に表現するにとどまり省吾よりも低く鑑賞せられてゐるが、大正七八年より現在に及んで詩に進歩の跡が見えないけれど純情は省吾よりもより多く持つてゐる。努めて初心者の謙虚を失はずんばまだ青年の事故眞詩家たり得ない事はない。

いつもこの岸から
希望のかの岸を望んで、
　　福田――「光れる岸」

の如き無反省な語句

おお、近代人の悲哀よ、
　　福田――「綠の潮」

の如き花外調が簡單な思想を示し、

の如き言葉の無自覺な使用は夥しいか。

福士幸次郎は古く「自由詩社」の同人で長い詩作の經歷を持つてゐるが、持說の內容が常に變つて其上に精神努力に中心點がないので詩技の確實性がいつまでも來ない。「この殘酷はどこから來る」、「獵師」等には福田、百田、白鳥以上の純情の純一な表現があり乍ら

見る目も寒い朝景色、
暗い下界の地に添乳して
氷の胸をはだけた天
冬はおどろに荒れ狂ふ
ああこの殘酷はどこから來る
　　――「この殘酷はどこから來る」

いつも釘が一本足らぬ憾みがあるのは彼の痼僻である。平凡人

[illegible]點で、福士は千家元麿に酷似してゐる。元麿の詩は武者小路實篤が賞美してユーモアな作だと云つてゐるが、實篤は細かい鑑賞は全く出來ず大まかに考へて極粗淡にものを云ふのでその評は當つてをらぬ。「懐かしい夜」の如き散文律は詩の域を越えてゐる。此類のが多いのは單純で多感で無反省で不注意に濫作をするからである。すなはち「荒川で」の如き冗漫と非力とが生ずるのである。「冬が來る」の類のただ事詩が一番佳いのは思想と感情と形式とが平凡な個所で一致してゐるからで、嚴めしく人類愛の詩人だなどと、稱揚されると有頂天になつて醜い破綻を示してしまふのである。

尙外に山村暮鳥と室生犀星とが此時分人間愛の詩感を歌はふと試みたが、前者は努力に中心がなく詩念に焦點がないとりとめのない性格であつたから「聖三稜玻璃」の類の

まるめろコップたえがたく

だとか

卓上なぎさ
なみひるがへれ

だとか官能の交感の新味をねらつて而かも本然性に缺けて只人の好奇心を挑撥するにすぎず、又、「星」の如き叙事體を試みて失敗し、わづかに「單純な朝餐」の凡境でやゝ佳い芽生を示したが其處にも感情の不自然な表現の僻を脱し切らなかつたのは、一に彼の輕卒な性格がものことごとくに失敗させたに外ならぬ。之れに比し犀星は無學で單純でそのくせ世渡り上手の生來に加ふるにその感情も時として眞純の光を放つので、初期の頃は、「愛の詩集」「第二愛の詩集」等に「草のはつぱは僕等の詩だ」式の

ポール・ウエルレーヌに涙をながし
僕等の歩いて歩いて歩きつたこと！

如き花外を口語に改めてバイロンをヱルレーヌに更へた程度の冗長な幼稚でなければ、「ドストエフスキーの肖像」の稚拙な感慨が多かつたが、「櫻さくところ」の

はるあさい山山に
まだたくさんに雪が殘いてゐる

類の感覺美は、處女詩を收めた「抒情小曲集」に於ける特色であり、輓近のかれの小説に於ける特徴でもあつて、この感覺とこの感情とが特異な詩風を保つて、いつしか彼の人間愛の強がり振が柔かに落付いて、しつとりした

人の世の佗しさおのれ父たることの
その眞實を信じる寂しさ。

——「ふいるむ」

の淸韻に入つたのは、當年無鐵砲な無論理の議論をふりかざした人道派、民衆派中、殆ど唯一人の成功者である。かれの詩風は舌足らずの美で蔽はれ、感覺を使役する詩感の單純な流動に些の凝滞がないところに特色がある。かつて筆者は彼を萬人に愛を光被せしむる愛の詩集の著者でなくて能く萬人に愛寵せられる底の詩集の作者であると評した。室生犀星のこの節面白くゆかしい詩風の樹立は、その作中に宣傳吹張の誇理ある中は容

[illegible]

詩に[illegible]

機會を捉えうる事實を示す。ひとしく人道派的幼き果核に出立して一は頽詩の領域に辿りつき一は今尚迷蒙の道德地獄に苦しめる點で、又、一は學問なく一は教養あつて而も一は僅かなる學問を活用し、一は些かなる知識に累毒せられてゐる等の點で、犀星と省吾とは善惡良否のよき好對照として當世出世鑑の好引例となるものである。

佐藤惣之助も千家と類似する所謂人道派的感慨「正義の兜」から出發して、「熱したる夜の歌」の終句

　そして夜の黑みを、清き森嚴なる存在を。倫理を、鐵を感じる。

風の堅甲な氣息の長い一句の連續で、右の如き一句は佳句の方で、多くはその言葉の爲めに詩感が敗けて、詩律美が崩れて言葉の本來の意味だけ白つぽく殘る。「潮のみちくる川邊にて」の如きは長氣息のために詩を失つて散文となつたもので、この種の失敗が連續され、結局、「高きによぢのぼつての交響樂」の散文詩に陷つてしまふた。「季節の馬車」中の短章も概ねこの詩弊を免れない。詩想も沈滯風の簡單た繰返しで進歩の跡が些かも

たなつたが、[illegible]の心[illegible]の果が、この[illegible]に新境地を打開した。今後の[illegible]如何によりかれの本道な[illegible]は現在の未成品時代を突破して行く、福田らの遠く及ばぬ點までに辿りつかないとは云へぬ。

人道派といひ民衆派といふ現實傾向にあるものの業績は、以上の如く初期の開拓期で未成品の濫出にすぎなかつたが、今にして想へば、その主張の一理由あるに應じて實際作品の鑑賞を忘れた（寧ろ出來なかつた）當年の評家といひ學者といひ思想家といふ輩が、論理的遊戯にすぎない駄論を詩林に向けてゐた事實がこゝに於て愈よ明らかとなる。

さて民衆詩の眞價に、彼等作家の咆哮して以て當來詩壇を席卷すべしといひ壟斷すべしと云つた如き本質力と美との無かつたことは、その後今日に及ぶこの派の實績に徵して一層明白であるが、一種類の詩歌として、現實感を重んじ、平明語を尊び、樂生觀に終始する輕快な詩風が樹立され、その集團的運動が世間の一部に詩的興味を喚起したことは認むべきであつて、只その詩はただ草創期を一歩も出でず、未來の天才者の出現にまたねばならぬが、現在の如き主導者、宣傳者が頑迷と無識とを自ら悟らず、只管、頭數を揃へてお祭さわぎに耽り、年少未熟の青

衿を無暗に推薦して詩情熟せざるにはやくも自足驕慢の心緒を惹起せしめ、輕薄詩を濫りに市に賣らんとし、名を片鄙に廣目んとする如き俗陋見るに忍びざる惡習を著しく傳播せしめたことはその後のかれら即ち詩話會一派の允すべからざる詩罪である。如何にかれらが抗議しても、天下具眼の人はこの明白なる事實を看過してはゐない。又、合せてかれらがこの詩風を樹立しながら集團的興行に耽つて個々の教養を怠り先達として何ら著しき精進を試みなかつた事實をも附加して以てその怠慢と輕薄とを攻めなければならぬ。わづかに少數者が、同輩の踈懶を見限つて或ひは犀星のごとく、或ひは惣之助の如く、碎花の如く、新境地をひらき、若くはひらかんとしてゐるのは注目すべきである。天分には限りがある、年齡亦明日をも計りがたい人生に、餘りに長き怠惰は如何に自ら天才を任じ天才を信じて、幾分の材能あつても夏半ばにして枯燥した例はその數が夥しいのである。

終りに川路柳虹に就いて一言する。かれは白秋、露風と同時に年少にして詩林にあらはれ、夙く醉茗門に入つて口語自由詩の試作第一斧を入れたが、後、象徴主義の一團、露風が「未來」に參加し、次いで「伴奏」と「現代詩歌」を續刊し、舊詩話會が分裂してよりかれは福田、福士らと詩話會に殘つて今日に到つたが、「勝利」(大正七年)に於ける詩感は民主詩人でなく、秘詩人でなく、象徴詩人でなく自らは本然主義者と號した事もあり、「勝利」は「自分の內生活の勝利」(「曙の聲」序)であるとも云つてゐるが、「地上頌歌」を詠じ、「生活」を賦し、「良き夜」を歌つてゐるが、かれの情緒は激しくなく、かれの感覺は鋭くなく、かれの表現は奇麗勝ちで底力がなく、かれの感動は一般に強さに缺けてゐるため、年來の詩技が、颱風をうたつても空ツ風の非力となり、愛をうたつても「大地の愛を吸ひてその脈管を太らする」その根その葉の光も艶も出て來ない。「日本の畫廊」で若沖や山樂や光琳をうたつたのが、

金泥の土に豐かな春を思はす
紅梅の大輪、枝は一つの拍子の如く、

と「限りない色彩の放蕩に寒い心を窒息さ」せる「生のよろこびの歌ひ手」を表はして、その後の詩にもない佳品であつた。恐らく柳虹唯一の良詩がこの畫人詩であらう、何故にこれに成功し、かの勇ましい勝利の歌、曙の聲に失敗したか。彼は本來、享樂家で寧ろ廢頽を解する肌の生れである。享樂者の程度にとどまつてをればその受用の歌に成功するが、より積極的な

勝利や力やの讃美にその術にない。同時に時代が背負ふべきものを要求するかとてわが本然の賦質を棄てて、似合はしからぬ威調子に走るのは輕卒も甚しい。かれが省吾君以上の詩巧を有しつゝ今や空しく泥株の間に老いんとするのは中途にその立場と態度とを誤つたからである。

Ⅳ 新浪曼派の孫生

民衆派、人道派の詩が生れてその集團的騷擾が個人の努力以上に大聲叱呼された時、然らざる派のものは悉く屏息し冬蟄してゐるかのごとくに觀ぜられた。「その文章（スタイル）の端麗のうちに優雅と見る。」（百田宗治「昨日の詩と今日の詩」大正六年）と評したは、拙ない表現で分らないが、表面的に奇麗であるに止まるといふたものであらう「一見韻律の整つた口あたりのいゝ古い詩は少女や低級なる讀者の一部に口すさまれる」（白鳥省吾「現代詩の研究」一九八頁）といふは卑屈にも暗に西條八十生田春月の詩を嘲つたものであり、

小賢しい唯美主義者
時代おくれの貴族主義者を笑殺しつゝ
——詩集「樂園の途上」

とは同じく省吾がこの派を見て嗤つた際であり「平俗なる趣味」といひ「厭人的な傲慢」（同三六四頁）と評したは日夏耿之介の詩とその態度を口汚なく六頁にわたつて罵つた一節である。

又、一方「俗衆を眼中に置かないで、高踏的な態度で精神上の孤獨の中に尊嚴なジエスチユアを愛し、象牙の塔の冷嚴を愛する例へば日夏耿之介氏の如き詩人は私の尊敬するところです。然し、それは氏の如き高い魂を以てして始めて可能なのです。」（生田春月「抒情文學」大正八年）と評した詩人があり、「西條八十氏は最近童謡の作者として知られてきたが、それらの詩の或るものには單に童謡の形をとつた立派な象徴詩がある」と論じ、「氏にはどこかケルト民族がもつてゐるやうな想像性があつて自己の情調を象徴化してゐる」（川路柳虹「文章世界」大正九年）と評した評家があつた。研究者は此等雙端に位する批判を同時に見て所見の基礎とするを要する。此處でいま假りに新浪曼派と稱し藝術派と稱する一派の特徴は、民衆人道一派の如く徒黨を組んで集合的運動を試みず、自己一人若くは自己と同趣のもの丶小さき集合に別れてゐることはそであ一であり、特と肯定的言辭を飾つて征服や力鬪やの想念を表面にしないことはその二であり、社會思想の感懷を直叙するごとき詩風

に奔らざることはその三であり、概ね孤獨と憂愁とを愛し、美と夢とを喜び、苦惱も怡悅も悲喜哀歡悉く胸に感銘した心象を恒に遠き世界、遥かなる世を展望しつゝその憧れの心度の上で靜かにうたひ出るのはその四であり、詩語を吟味し詩感を詮義して表現の一字一句をもおろそかにしまいと努力する風あるはその五である。

が、勿論、個々に就けば皆その獨自の特色があるが、大雅を志す（藻風）もの、快活明朗をしたふ（西條）もの、秋と落葉と痴戀とを歌ふ（堀口）もの、悲哀にうるほふ（日夏）もの、片隅の幸を嘆く（生田）もの、樂生受用にかがやく（柳澤）もの、病感に耽湎する（萩原）もの、外に遲れて情痴と哀愁とをうたひ出た佐藤春夫と晩年に臨んで初めて一家の風をなした若き希臘主義の詩人北村初雄とその外今なほ詩壇にひろく知られざるもその詩技に詩情に優に一家をなす少數の少年詩人があつたが、それらは、この當時重なる位地に居なかつたから、あるひは殆ど詩作を試みなかつたから、他の機會にゆづつて、こゝには上記數人についてのみ誌す。

これらの詩人は、ある者は露風と友としよく、ある者は白秋門を出で、ある者は單獨に起り、ある者は新詩社より生れた如く、前記の略共通する特徵以外には全く相異れる魂の別々の存在で、假名をより多く喜ぶものあれば漢字の姿致を酷愛するものあり、これを悉く象徵派に收めるの不可なるは堀口あつて「象徵の附鼻を落せ」とうたうてゐるので知らるゝが如く、これを藝術派と稱するは又、語の意味に於て漠たるにすぎるきらひがあり、强ひて云はゞ自然派文學の洗禮を經たる一種の新浪曼派であつたが、これとても今日に於てはその內早くも古典主義の婉雅と統制と秩序とを喜ぶものがある故、長い期間の名稱として此數人を網羅するに足る名辭はない。が、何れにしても之れを一括して人道派、民衆派　現實派と對立せしめることは決して不可能でない。生田、萩原の二人ごときは依然として詩話會に在るが故、詩話會が民衆派の團結ではないと共に、かれらは決して民衆派詩人ではない。

たとへば、萩原は初期に於てその同胞詩人犀星と共にあつた關係もあり時代の感化もあつて、しば〳〵、人道的感慨を旨とせんとし、僞に時あつて失敗した例は、「寢臺を求む」の末節に「とつて付たやうなヒユーマニズムの臭味」（西條八十。「文章世界」大正七年）を殘した如きがそれである。かれの口語はよくこなれて、又、實によくかれの思想の一致してゐる。この點かれは早くして一家の詩風を創成した詩家で、「

まつくろけの猫が二疋、
なやましいよるの屋根のうへで、
ぴんとたてた尻尾のさきから、
糸のやうなみかづきがかすんでゐる。
「おわあ、こんばんは」
「おわあ、こんばんは」
「おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ」
「おわああ、ここの家の主人は病氣です」
——「猫」

その神經質なる感傷は生理的に精神的にかれを陰鬱な病感の苦惱と怡悅との交錯せる詩想の新創造に赴かしめた。かれは「月に吠へる」以後また新らしく軌道を更へ晩近はそのあだかも過渡期に在る。

この暗鬱から「祈禱」（大正二年）の詩人に移ると、「地面に直角に立つ一本の竹」（白秋序）の林から、「しをらしい淸教徒の少女を憶起させるニウ・イングランドの後園」（上田敏序）に赴いたやうだ。この詩人竹友藻風は、若き感傷的祈念を「祈禱」一集中にうたひつくし、

[illegible]
すべてかの窓にあつまるなり、
貧しき部屋の窓なれど、
主さへいま行きすぎたまふ。

とよろこび、

いかなれば外はしづかに晴れ渡り、
いかなればわが部屋にのみ雨は降るらむ。
——「窓」

と悲しんで、若き魂には稀に見る正しい姿を見せてゐるが、「浮彫」（大正四年）ではやゝ言葉が凍化し、「時の流れに」では更にはげしくなつてゐる。この凍化から脱出する時が來れば再び新たな歌口を示すであらう。

生田春月も、藻風の如く、昔から今へと詩心の衰へを示した一人である。藻風が永く沈默してゐて一時に又うたひ出した故に、詩調の中心を失してやゝもすれば形式に泥まんとしたに對し、春月は餘りに多くを口少かるべき咽喉からうたつたがために、特に小曲、少女詩の類に在つて詩感の處女性を失ふたが故に、その詩は感激の少い冗長な

に奔らざることはその三であり、概ね孤獨と憂愁とを愛し、美と夢とを喜び、苦惱も怡悅も悲喜哀歎悉く胸に感銘した心象を恒に遠き世界、遙かなる世を展望しつゝその憧れの心度の上で靜かにうたひ出るのはその四であり、詩語を吟味し詩感を詮義して表現の一字一句をもおろそかにしまいと努力する風あるはその五である。

が、勿論、個々に就けば皆その獨自の特色があるが、大雅を志す（藻風）もの、快活明朗をしたふ（西條）もの、秋と落葉と痴戀とを歌ふ（堀口）もの、悲哀にうるほふ（日夏）もの、片隅の幸を嘆く（生田）もの、樂生受用にかがやく（柳澤）もの、病感に耽溺する（萩原）もの、外に遅れて情痴と哀愁とをうたひ出た佐藤春夫と晩年に臨んで初めて一家の風をなした若き希臘主義の詩人北村初雄とその外今なほ詩壇にひろく知られざるもその詩技に詩情に優に一家をなす少數の少年詩人があつたが、それらは、この當時重なる位地に居なかつたから、あるひは殆ど詩作を試みなかつたから、他の機會にゆづつて、こゝには上記數人についてのみ誌す。

これらの詩人は、ある者は露風と友としよく、ある者は白秋門を出で、ある者は單獨に起り、ある者は新詩社より生れた如く、前記の略共通する特徴以外には全く相異れる魂の別々の存在で、假名をより多く喜ぶものあれば漢字の姿致を酷愛する、のあり、これを悉く象徴派に收めるの不可なるは堀口あつて「象徴の附帶を落せ」とうたうてゐるので知らるゝが如く、これを藝術派と稱するは又、語の意味に於て漠たるにすぎるきらひがあり、强ひて云はゞ自然派文學の洗禮を經たる一種の新浪曼派であつたが、これとても今日に於てはその内早くも古典主義の婉雅と統制と秩序とを喜ぶものがある故、長い期間の名稱として此數人を網羅するに足る名辭はない。が、何れにしても之れを一括して人道派、民衆派　現實派と對立せしめることは決して不可能でない。生田、萩原の二人ごときは依然として詩話會に在るが故、詩話會が民衆派の團結ではないと共に、かれらは決して民衆派詩人ではない。

たとへば、萩原は初期に於てその同胞詩人犀星と共にあつた關係もあり時代の感化もあつて、しば〳〵、人道的感慨を旨とせんとし、爲に時あつて失敗した例は「寢臺を求む」の末節に「とつて付たやうなヒューマニズムの臭味」（西條八十。「文章世界」大正七年）を殘した如きがそれである。かれの口語はよくこなれて、又、寔によくかれの思想の一致してゐる。この點かれは早くして一家の詩風を創成した詩家で、」

まつくろけの猫が二疋、
なやましいよるの屋根のうへで、
ぴんとたてた尻尾のさきから、
糸のやうなみかづきがかすんでゐる、」
「おわあ、こんばんは」
「おわあ、こんばんは」
「おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ」
「おわああ、ここの家の主人は病氣です」

――「猫」

その神經質なる感傷は生理的に精神的にかれを陰鬱な病感の苦惱と怡悅との交錯せる詩想の新創造に赴かしめた。かれは「月に吠へる」以後また新らしく軌道を更へ晩近はそのあだかも過渡期に在る。

この暗鬱から「新禱」（大正二年）の詩人に移ると、「地面に直角に立つ一本の竹」（白秋序）の林から、「しをらしい淸教徒の少女を憶起させるニウ・イングランドの後園」（上田敏序）に赴いたやうだ。この詩人竹友藻風は、若き感傷的祈念を「新禱」集中でうたひつくし、

わが部屋のなやみも、なげきも、
すべてかの窓にあつまるなり、
貧しき部屋の窓なれど、
主さへいま行きすぎたまふ。

――「窓」

とよろこび、

いかなれば外はしづかに晴れ渡り、
いかなればわが部屋にのみ雨は降るらむ。

と悲しんで、若き魂には稀に見る正しい姿を見せてゐるが、「浮彫」（大正四年）ではやゝ言葉が凍化し、「時の流れに」では更にはげしくなつてゐる。この凍化から脱出する時が來れば再び新たな歌口を示すであらう。

生田春月も、藻風の如く、昔から今へと詩心の衰へを示した一人である。藻風が永く沈默してゐて一時に又うたひ出した故に、詩調の中心を失してやゝもすれば形式に泥まんとしたに對し、春月は餘りに多くを口少かるべき咽喉からうたつたがために、特に小曲、少女詩の類に於て詩感の處女性を失ふたが、その詩は感激の少い冗長な

この人の世の無情をおもひ
百年の後には
ここに見られる人のすべてが
みんな此の世にもうゐなくて
　　　　——「寂しい私」

の如き乾燥な詩句の行列になつて、かつての春に示した、殉情一路の寂しく、かすかな、野の花の風情ある春月の俤は消えてしまつた。この種の詩人に多辯が一番禁物であるのに。

が、さりとて春月がこのまゝに山の端にしぼんでしまふに限つたので必ずしもない事は柳澤健の例でも判明する。柳澤は一張、一弛、高低が急で、ある時は卒然と佳品を連出し、ある時は劣作を續出する。その劣作がつゞけられる時にかれの詩泉は枯れ果てたのかとも考へられるが、やがて又岩間をつんざいて發剌たる新泉のほとばしりを見せるを常とする。あるひは全くその出口をとどめてしまふ時すらある。かつて「雪景」の聲をきき、忽ち

降雪のなかの柔かき日沒
優しき尼等雪の上にあつまり
掌を合せ、しめやかに香を焚く。
香爐のけむりはたゆるなく尼の指にまつはる
尼等心さみしく空をながめて溜息す。
薄紫の空にほそぼそと描く黄金の線條
もつれては褪め浮びては消ゆる靜かなる色合
あゝ、しづかにも聖マリアの雪をふみてゆく音……
　　　　——「尼」

のしとやかな調をとゝのへ、又、

われら影の二人戀のなきがら、
夜のなかにいつまでもあひ寄りて
うねりゆく雪ふる月の韻律を、
足おとつゝましくふみてゆくなり。

の閑寂な姿相をよろこぶ。「果樹園」(大正三年)の昔から、「海港」(大正七年)の賑かさを經て、「柳澤健詩集」に全收せられるまで、この涙もろい音樂家、勤勉な評論家、外交官もするなる詩人にはその人にあらはれない一面のみがはつきと浮び出てゐる。「常に何よりも生くることを望む」(「詩集」序)といふ彼は生の悦びの資材として藝術を樂しんでゐる。この美しき生を生きるとの悦びを恒に怡ぶ詩人柳澤健は恒に一生かゝつて完成しなければならぬ大きな詩の精進の急坂路の半ばに佇んでゐる。

その雜誌「假面」にともに生立つた同胞詩人日夏耿之介が「轉身の頌」(大正六年)にはじまつて「黑衣聖母」(大正十年)に轉化したに係はらず、西條八十は「石級の下」の昔から晩近まで引つゞいて、つねに一つの同じ歌口を示してゐる。又、日夏が堅甲沈鬱なるに反し、かれは柔軟快活であり、前者が病軀であるに、後者は健全であり、一が行に長く句に長い漢語の多いゴシツク、ローマン詩體をとるに反し、他は行に短かく句に短かい和語の多い殉情詩風による。

西條の「砂金」(大正八年)についてはかつて次の如く書いた。「西條君の詩には愛好者が多いといふ。しかも、西條君の詩を教ふる人が多いと同じく、批評する者も亦かなりその点に熟した天凛の技巧を愛好するのみで、作者のつられた心をよく味得してその出來榮その高下を判斷する事の出來ない人々が大部分なのではあるまいか。作者が一度花をつければ、尋常詩人が持て餘すやうな語句も月光の美しさ、生絹のやうなかゝやきを添へる。眞に天賦でなければならぬ。

蜜蜂小屋の前に
七人男が眠つてゐた
月が細く

之れは、「七人」の破題である。

月光の
盈れる丘に
眞紅の躑躅を焚く

之れは「躑躅」の破題である。

人も花も

色のみぞ、海のごとき

之れは「何處」の結句である。此詩集にはないが最近の作「氷のうへの藤椅子」の結句

おうい――寂しさに
呼びかへす妻と子のかげは
月の上の蝶のやうに

此等一見して何の奇もない常套の詩句も全篇を見てその効果のはじめて驚くべくブリリヤントなものであるを知る……」又曰く、「初期の作はやゝもすると想像の過剩のために、道具立ての單なるきらびやかさ、單なるうつくしさに眩目されて全的統感をさまたげられる感があるが（「悲しき唄」の如き）その弊は後期に至る程自然に落付き薄らいで來てゐる。」（「詩壇の散歩」一四七――一四九頁）

かれは形而上學的內觀に出立する思想抒情詩を作りうる詩人ではない。それを求めるのは寔に木によつて魚の類である。かれの童謠は恐らく現今第一人と稱すべく、白秋の民謠と對立して眞價に富むが、かれら二人の模倣をした露風、省吾以下多くの詩人は慘らしい失敗に陷つたのは當然である。が、西條〇が年齡の加はるとともにその本然の稟賦を保つて順調に變化する上に於て彼の童謠はかれにとつて邪道である。速かに中止するに非ずんば恐らくはその詩情の衰退を救いがたい。

堀口大學は譯詩「昨日の花」の後に「月光とピエロ」（大正八年）第一作集を出し、つゞいて「失はれた寶玉」（大正九年）の譯詩と「水面に書きて」（大正十年）を上梓した。

「この詩人の將來を決定する人生に對する陶醉があつた。悲哀の速吟があつた。感情の氾濫があつた。詩念の自由があつた。特に「雪」の

雪はふる！サ雪はふる！
見よかし、天の祭なり！

云々の格調の正しい一篇にあらはれた表現の自由は、「秋」の破題

今宵蕭々と風吹きて
秋に痛める草の葉は
悲しきさまにゆらぐかな

などに見られる七五正調の中にあつて、尚且つ彼が詩趣を自在に盛つて、昔の新體詩の陳套に陷つてゐないと同一の例證であり、「月光とピエロとピエレットの唐草模樣」には次の集にあらはれる動的な快活な晩近體の新傾向をはるかに暗示してゐる。」(「詩壇の散歩」二〇頁)かつて斯く評した筆者は更に次集について左のごとく論じた。「これには流俗の淫靡を辱ふするサッカリンのやうなセンチメンタリズムはない。これには、「民衆」に媚を呈してしがない身實の昨日今日の如何にもなさけなさすぎる救世軍の太鼓のやうな勇敢はない。しかし、こゝにも流俗はその時代の標語として擔ぐ人間味を夥しく受ける事は自由である。また、「民衆」の不斷に愛好する新鮮を嗅ぐことも自由である。それ計りではない、こゝには、昔乍らの遊戯の假面を被つた「まごころ」を發見する餘地さへもある。きびしい刺笑が反語的に人生を脅かす。こゝは新樂の製造所だ。甘たるい小學生のセンチメンタリズムもある、こゝは世界的歌舞の巷だ、卷頭「椰子の木」はかれの一面の代表的の詩である。

なほ高く
なほ大地より遠く
天の方へとさへへだたる
天はそこでもさらで
天は理想のやうに
いよいよ遠ざかり
ふるる術もなきに
架の夕ぐれとなる」(同上二三 ― 二四頁)

晩近の「新らしき小徑」は一切の古きものから去つて全く新らしい九折の山徑にそんでゐる。かれを筆者は「六號活字で書くべきものを二號活字で書く事を否まない」男と評したが、作品も多ければ拙作も多く、一集毎に、殉情曲から象徴派から未來派、未來派から等、等、等と無限に變化してゆくのがかれの詩である。すなはち堀口は未來多き未成品である。

八 結論

明治、大正かけて六十年間の起伏に於いて、われらの國民性が産出した藝術は、これを德川時代のある六十年間に比べて、必ずしも優れたものでなかつた。文學、美術、工藝等に於ける所産の特質は、新氣運の母胎となつた點、新傾向の試作であつた點等に存し、一派一傾向、一流風の完成した姿致を示したで

とき佳作は著しく尠かつた。邦畫に於ける玉邦は前代趣味の完成を明治の時代にかりたものに過ぎず、洋畫に於ける所謂「大家」は、大學の名譽教授と名實ともに等しく、流派の勃興に對する功勞の表示であり、藝術の絶對價に對する讃美の名辭ではない。小說に於ける紅露逍鷗、漱石獨歩の遺品としても、かの洋畫大家の內容にまさる點はあつても世界比較文學の領域に於て時代のハンデイカツプをとりのぞいて尙且つ本質價をぬきんでてゐるものはない。子規は傾向の背後にイ立せしめて初めて意義が生じ、晶子は蚤く逝かなかつただけ天才のなしくづしをなした觀がある。然し乍ら、とにかくに、これら諸家が明治文運の一期一派を飾つて文釆瑰琦なるものがあり、當代文化の藝術的表現を完うした功績と價値とは十分に後代に殘るべきものであるが、ひとり新體詩と稱し、後單に詩と稱するに到つた一棄の藝術のみ、かゝる卓拔の工人とその作品とがつひに無かつたのはなぜであらう。年を經る四歲、章を改めること四回、筆をおさめるに當り、拙技によつて斯界の一隅に喩咽する身であるがゆゑに今更ながら衷心何とも形容の能きない寂寞を感じる。かつて「新體詩」は、藝術の情志うすき靑少のための「軍歌」にひとしき玩具と稱せられた。一たび詩林に不朽の業をとどめたものも、あるひは小說隨筆に奔り、あるひは田園の間に逝れ去つた。新詩運の輸入にさきがけしたものも、その晩年は高臥して考證の業にふけり、あるひは民俗の學に赴いてしまつた。時勢を感じて庶民の聲を表はし正さんとするものも、多くは表面の空騷ぎを事とし、內心よりの己が聲に眞に眞摯な人性の衷情を發揮するほどのものは一人とてない。一身にしても才思の鈍きと宿命の浮沈にからまる賤人孤弱の心に堪えかねて、自ら退き、極度に煩累を避けて、詩に純ならんとし生に淨からんとしても、俗世の斑斕と凡庸の輕忽とは易く詩生の一路たるをゆるさない。況してかの甲論乙駁の喧騷と卑陋とは自他ともに筆を擱かんとして幾度かその無意義を喚じたことであつた。

詩の一種屬としての本然的不備か、志して群り集るものの鈍劣か。思ふに、創成期の藝術のつねとして、恐らくその兩面ともに眞實なのであらうが、散文になく、短歌になく俳句にない新領域をこゝに覓めて西詞の形式の自由に範り、詩情の特異をとらんとする試みが、今後十年五十年一百年の後世に如何の美しき花を開き果を結ぶであらうか。そもそも又永久に不胎の嘆を發さなければならないであらうか。明治一代そのものがバラツク藝術の母胎であり、過渡期詩潮の主流であつたのであるから、傳統の藝文、國歌俳句に意義ある運動はあつても目を辞た

しむべき傑作が生れなかつたことは、時代と天才と、天才と時代との相に存する必須關係を想へば必ずやよき詞華の一つの種のなほ若葉にして過渡期の荒き風に亡びてしまつたに相違ないに徴しても當然であり、ましてや、土を運び礎を置く丹堊のみ徒らに高くして、工人の正しき美しく力ある馨の香の、容易に傍人は愚か、業をともにするものの間にすらも味解されるを允されぬこの新詩壇に在つて一人の眞に卓れた天才だに生れなかつたのは寔に止むをえぬ仕儀であると考へねばならぬ。

が、由來、異邦藝文の反芻的咀嚼に巧みなる國民性が、文華漸くととのひ施設ますます加はるに伴れて、五風十雨、蘗の稚く尊きを育てゝ、やがて甲斐ある花を咲かせんことはわれらの民族的希望であり確信である。かつて一たび萬葉古今を生み、芭蕉蕪村を生んだ時代は又われらの近き目前に在るに違ひない。奈良藤原の藝術、巣林子西鶴の文學を生んだ異邦興藝の影響は、今やわれらの血に肉に骨に與へられてをるに違ひない。これを思へば、明治を通じて貫流した稚き理想主義と幼き現實主義とのうちあふ波間に白く顯れた水沫である五十年間の詩文の幾變轉のその跡をかへりみて、特にも稚く特にも繼子扱ひにせられがちであつた新詩が、偉大なる理想主義と宏壯なる現實主義とのより多くの實現を見るには、まだ要するもの、たゆみなき努進と誠實なる態度と、同時代の聰明なる批評と公正なる指導と、特に學匠、教授、批評家をもつて自ら任じ、これに因つて衣食するの惠みを受けてゐるものの、纖細なる鑑賞眼の所有と確實なる史的知識の教養によつて、獨自の思想的立場に於て公正を失はぬ、主張を有する所見の陳述をしばしばする事とを要とするものであることを痛切に感じる。

われらが略一半世紀の新詩起伏の狀を攷究して與へられた教訓は、あまりにみのり少き詩品の過去を有さねばならぬことの寂寞感と、なほ當分は續くであらうところの現建設時代の心なき大衆が恣にする無批判的偏倚に對する憤懣とにより、徒らに外容を容飾して集合的運動を試みたことが、表面的膨脹以外內容に些かの價値的重量を加へないばかりか、かへつて斯る空騷ぎが思慮なき青少年の稚醇なる魂に惡感化を與へ、昨今續出する夥しき片々たる詩冊子の發行の裏に印刷慾と功名心と以外には、青年らしき素樸なる憧憬も熱心なる研究も獨斷的にして創作的なる批判も尠く、空しく現代詩家の輕蹤と無反省と無論理と無研究と無批評とを學んで、あたら尊かるべき青春の夢と血汐とを、汚泥の中にわれと自ら蹂躪して之れを知らぬが如き結果事態を生じてゐることで、これを誰もする、何時の時代にも

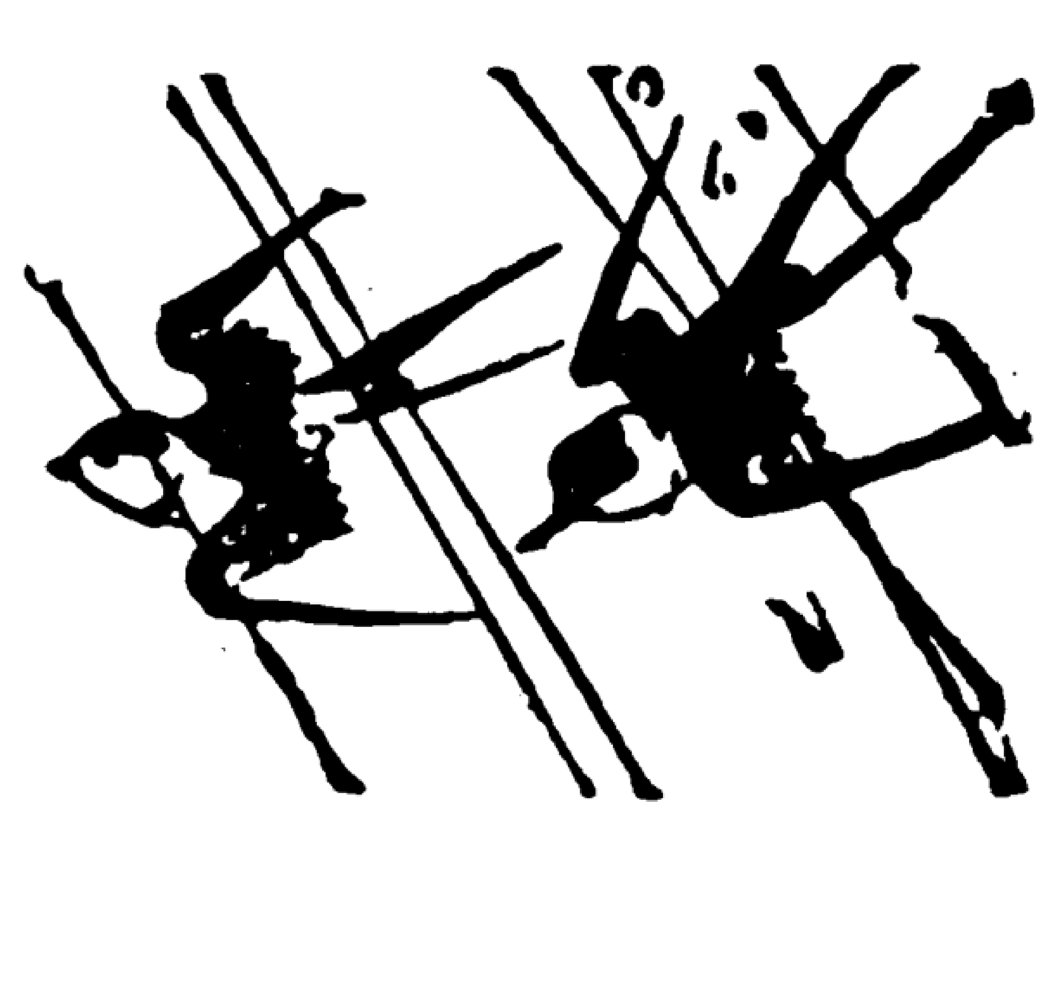
ある若者の青春の濫費と冷視し傍觀してをくことは、民族を信じ、未來を信じ人間性を信ぜんとするほどのもののとるべき道ではない。思想の轉機に際し、時藝孤寂の心境をあくがれる作者ごときすら、本能的にしばしばかゝる冷觀に對して憤懣することが多い。「象牙の塔」に閉籠つて民衆を下瞰しながら、その生活と、生活の中に在る神の意志と、美しきもののおぼめきとを得悟らぬ累代貴族の心理にひとしいやうに將へるならば、速かにその餘りなる無知を省みる要があらう。現代に於てフランスに詩の流派の獨占はないといふ意味のことを講演したレニエの言は、一人が一派であり、複雜多岐なる晩近人の情詩生活を簡單に粗略に一括して凡てのものの個性の特色、感情の陰影、思想の特異性を認めないやうなことの既に行はれがたい事實を明らかにしてゐるのである。

來るべき日本の近代新詩は、その基調に於てこそ、すべての思想の根本が然るごとく、理想主義的なるものと、現實主義的なるものとの二つに分たれるであらうが、リヤリスティックのアイデアリズムはアイデアリスティックのリアリズムと隣りし、實驗理想主義といひ、浪漫的リアリズムといふもの。過去の嘆美者、未來の憧憬者、現實の謳歌者の中にも踏む足たしかな浪漫家あれば、架空の現實を空想するリアストもあり、古代におくがれる者宛然として未來の建設者たらんとし、未來に憧れゝのしばしば過去に沒頭する。未來派、表現派、寫象派、本然派、浪漫派　自然派、民衆派、象徵派、凡そありとあらゆる詩派、詩的傾向は　かつてフランスに五十派あつたならば　一百派、二百派とならうともそれは懸念には及ばない。各人その顏の異るが如くに異れる流派を持つ。小さき流派の不自然な規約に縛られることが、かつて一番著しく詩人を殺害した。緊られた詩人は流派のために個性を失し、傾向を誇張し統一せんとするその一團の最優者のために旗手となつてその馬前で無駄な討死をとげたのである。

民衆詩人が新らしくて象徵詩人が古いのか。新古に價値の標目はないが故に、後進を新らしいと稱する意味で、此新流派の新新は認められるが、然し、詩神は傾向の新古を問はず「美しきものの上にのみその姿をあらはす。象徵派は現實に身は在つて現實を通して想像の世界の實在性と美とを確信した。ギリエ・ド・リール　アダムが「感激」と「嘲弄」とを腦中に雜居せしめ、「この行動が破壞的であると同時に構成的である」ことに基き「當代の輕信と生意氣（プレタンション）とを痛切に且つ辛辣に嘲弄」し、「一步を進めて現實それ自身を否定し」たのは、「ヴヰリエに從へば、」この世界は思想の現れたる外形に過ぎぬと見て居る」（「佛蘭西

詩派の過去現在未來の詩人」レニエ談、堀口大學譯「日本文學」）からで、象徴派の「人々が今日の詩人であるならば、之等（象徴派）の詩人は矢張又、明日の詩人で」あると斷じたレニエの意は、同時に、最新詩人らの「生きんと欲する」その生活を「直接に、簡率に親密に叙情的に言はんと欲」したので、「彼等は人間を彼等の考（パンセ）に於て、彼等の感觸（サンサシヨン）に於て、彼等の感情に於て、表明せんと」（同上）し、「詩神を誘ふて詩神をして海の鑿々たる音を聽かしめん爲めに海波の打寄する海邊に坐せし」（同上）めた事實を認容して、「詩には、過去の詩だの、未來の詩だの、現在の詩だのと云ふが如きもののある筈はない」（同上）詩神は到るところに氣輕にしかし嚴密の意味に於ける「美しきもの」の上にそのかげを現はすので、ある範疇によつて詩感を限局し、感情を矯め、個性を曲げ、思想を强ひんとするは、あらゆる時代のあらゆる社會を通じて、詩的凌辱の最も甚しきもので、同時にこれは人間性の美性に對する罪惡である。未來の日本詩は、かゝる無知なる暴虐にこそ宣戰して、民族性に立脚する普遍的なる人間性の最廣最深の個所までおのおの堀り下げ堀り擴げて行つた時、初めて最も美しく、最も詩的眞實に富める、個性の詩が花開くであらう。最も個人的なる詩のみが實在性と美とを保持し、史家評家の公正なる彈正臺上にあつ

一最も[illegible]を表示せられたるのである。（大杉）



今日の俳句

高濱虚子

俳句は十七音詩であります。

俳句は四季詠物の詩であります。

この二つの特色が俳句を形作つてをります。

これは二百年來變らなかつたところでありますが、近來舊物破壞の新運動が俳句界にも起り來つて、十七音の形も四季詠物の精神もぶち壞して、即興、即感、即事を凡そ一息に讀み去る程度に、字數の制限なしに、吟詠するものをも俳句と稱へるものが生ずるやうになりました。碧梧桐もはじめはこれを俳句と稱へ、却つて舊態を守る我等の俳句を月並俳句とか殿堂俳句とか之を蔑視する意味で惡し樣に呼んでゐましたが、近來は自分等の作るところのものを詩と呼びまして、從來の俳句とは區別するやうになりました。我等の俳句を殿堂俳句とか稱へて惡し樣に呼ぶことは今も尚ほ同じやうですが、自分等の作るところのものを單に詩と呼びまして、之を俳句と稱へなくなつたのは聰明です。同じく字數の制限なしに無季の散文詩を作るものに井泉水があります。さうして彼は自分等の作るところのものを俳句と呼びまして俳句といふ名稱に未練を持つてゐます。之は愚なことだと考へます。新運動を起さうとする彼等の志は諒とします。何故に此の古い名に未練を持つてゐるのでせう。此は彼等の新運動の精神と矛盾してゐるやうに思はれます。

子規は曾て私達の昔試みた亂調といふものに對して斯んなことを言ひました。斯ういふ句に對して、俳句でないといふ人がある。其は正しく其通りだ。五七五調でないものは俳句ではない。俳句とは五七五調のものを、しか呼ぶのだ。しかし此は俳句で無いから價値が無いとは言はない。文學であれば俳句で無くてもよい。と斯樣な意味のことを言つてゐました。

其通りです。碧梧桐や井泉水の作るところのものを吟詠して見て、價値ありと感ずれば之を一種の散文詩として推重しま

す。併し之を俳句と呼ぶことは無意味です。何となれば十七音詩を俳句と呼び習はし來つてゐるからです。彼等の作る詩は意識して十七音を破壞してゐます。私等の昔作つた亂調といふものは其名の現はす如く十七音を基準として、個々其を破りたるものをしか呼んだのであります。どこ迄も十七音を基準としまして、一度亂れても亦た其所に落着かうとする性質を持つてゐます。彼等の散文詩は十七音を離れて、全然別個の天地に立たうとするものであります。子規は亂調をすら俳句でないと言ひました。彼等の作る散文詩をどうして俳句と認めることが出來ませう。又俳句といふ舊名稱に拘泥することは彼等自身に取りても不利益です。新らしき旗幟を樹てやうとするものが古い名稱に拘泥することは其意味に於て徹底しません。宜しく新らしき名稱を選ぶべきでせう。

俳句は十七音詩であります。

俳句は四季詠物の詩であります。

此二つの特色が俳句を形作つてゐます。嚴然として俳句ならざるものと俳句との區別を明にしてゐます。

十七音といふ制限は、凡て其言はんとするところのものを此字數に限らねばならぬといふ窮屈を先づ感じさせます。併し同時に其天地で自由に言はんとするところを言ひ得る得意を感じさせます。又た內容の單純化を思はせます。單純化といふことは實に複雜を思はせます。即ち單純の複雜化といふやうなことを想はせます。次に又言語の鍛錬、琢磨を想はせます。こゝでも亦た言語の單純化を想はせます。同時に單純の複雜化といふことを想はせます。

四季の季題を詠ずるといふことも亦た俳句の一大特色であります。こゝでも亦た單純化、複雜化をくり返さねばなりません。思想から言つて季題を詠ずるとは單純化になります。同時に亦た季題は様々の連想を生んで複雜化になります。

斯る性質は俳句の古今を通じて同一です。我が俳句が十七音詩、季題詠物の詩である限り同一です。

唯其中に在つて元祿、天明、明治、大正と俳句に多少の變化があります、今其變化のあとを實例の句に就いて概略しらべて見ませう。

先づ元祿の芭蕉の句は

花のくも鐘は上野か淺草か
飮みあけて花いけにせむ二升樽
木のもとに汁も膾もさくらかな
留守といふ小僧なぶらむ山櫻

青柳の泥にしだるゝしほひかな
おとろへや歯に喰當し海苔の砂
ふるいけや蛙とびこむ水の音
ながき日も囀りたらぬひばりかな
ほろ〳〵と山ぶき散るか瀧の音
草臥て宿かるころや藤の花
入相の鐘もきこえず春のくれ
ゆく春を近江の人とおしみける
燕子花似たりや似たり水の影
さみだれに御物遠や月のかほ
ひとつ脱でうしろにおひぬ更衣
牡丹蘂深くわけ出る蜂の名殘かな
なつ衣いまだ虱をとりつくさず
あらしやま藪の茂りやかぜの筋
野を横に馬ひきむけよ郭公
ほとゝぎす大竹藪をもる月夜
わが宿は蚊のちいさきを馳走かな
蚤しらみ馬の尿するまくらもと
世の人の見付ぬはなや軒の栗
水鷄啼と人のいへばや佐谷泊り

笠しまはいづこ五月のぬかり道
五月雨をあつめてはやし最上川
さみだれや色紙へぎたる壁の跡
五月雨の雲ふきおとせ大井河
夏くさやつはものどもが夢の跡
うき我をさびしがらせよ閑古鳥
しづかさや岩にしみいるせみの聲
ひるがほに米つき涼む哀なり
面白うてやがて悲しき鵜舟かな
きよたきや浪に散こむ青まつ葉
荒海や佐渡に横たふあまの河
ひや〳〵と壁をふまへて晝寢かな
家はみな杖に白髮の墓參
ひいと啼尻聲かなしよるの鹿
ゐのしゝも共に吹るゝ野分かな
ふき飛す石は淺間の暴風かな
馬に寢て殘夢月遠し茶のけぶり
名月や北國日和さだめなき
名月や門にさし來る潮がしら
名月や池をめぐりて夜もすがら

碪打て我に聞せよや坊がつま
菊の香や奈良にはふるき佛達
あき風や藪もはたけも不破の關
塚もうごけ我泣聲は秋の風
あか〳〵と日はつれなくも秋の風
はつ時雨猿も小みのをほしげなり
旅に病て夢は枯野をかけ廻る
口上に替落しけり土大根
冬ごもり又よりそはむ此はしら
金屏の松の古びや冬ごもり
寒けれど二人旅ねぞたのもしき
鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎
おもしろし雪にやならむ冬の雨
二人見し雪はことしも降けるか
初雪や水仙の葉のたわむまで
住つかぬ旅のこゝろや置火燵
うか〳〵と年よる人や古暦
ふるさとや臍の緒に泣く年の暮

即ち是等芭蕉の句を見ると季題（即花、月の類）を吟味するものともいへるし、季題を借りて芭蕉の感懐を陳べたものともいへます。即ち是等の句は季題を芭蕉に主として、芭蕉の感懐を背景としてゐるか若くは芭蕉の感懐を主としてゐるものであります。單に景色を叙寫してゐる如き句であつても其中に芭蕉が沒入してゐます。

たとへば「花の雲」の句にしても、花が一面に咲きみちてゐる、其中でつき出した鐘は上野か淺草かといぶかる、其いぶかる心持は作者の心持であります。花が雲の如く咲き滿ちてゐる、其長閑な日に其の鐘をうち出した。秋よりは清澄な日に其鐘の音もはつきりと何處といふことは聞き取れるのであるが、一面に霞籠めた春の日はどこといふ事がはつきりと判らぬ、判つてゐるのかも知れぬが、其が判らぬ如く裝ふところに打興じた作者の心持があるのであります。即ち芭蕉の感懐が主になつてゐるのであります。

次に「飲みあけて」の句も、二升樽を飲みあけて、其を花生けにしやうといふのは、芭蕉の心持であります。飲みあけたら打棄らかしてしまうのが普通であるが、其を花生けにしやうといふのは佗人芭蕉の境界であります。

次に「木のもとに」の句の如きは、全く描寫的の句と見えますが、仔細に點檢すると、櫻の木の下で汁も膾も櫻になつてしまつた、といふところは其描寫に打興じた趣が附き纏うて矢張

り芭蕉の興趣を覗ふことが出來ます。之を今日の句に比べて見れば其差異が明白であります。

「古池」の句に至つても、單に景色を敍した句とは見ることが出來ませぬ。卽ち古池に蛙が飛込んで水の音がする、如何に深寂の趣があるではないかと芭蕉が親しく人に指示した感があります。

要するに芭蕉の感懐といふものが芭蕉の句の根柢を爲してゐます。

蕪村の句に至ると、

おそき日のつもりて遠きむかしかな
うたゝねのさむれば春の日暮れたり
大門のおもき扉や春のくれ
春風や堤長うして家遠し
春雨にぬれつゝ屋根の手鞠かな
物種の袋ぬらしつ春の雨
瀧口に燈を呼聲や春の雨
ぬなは生ふ池の水かさや春の雨
はるさめや暮なんとしてけふも有
足弱のわたりて濁る春の水
春の海終日のたり〱かな
水ぬるむ頃や女のわたし守
行春や白き花みゆ垣のひま
行春やおもたき琵琶の抱心
御忌の鐘ひゞくや谷の氷まで
浪華女や京を寒がる御忌詣
畑打や木間の寺の鐘供養
畑打よこちの在所の鐘が鳴る
畠打や鳥さへ鳴ぬ山かげに
野とゝもに焼ける地藏の袴かな
たらちねのつまゝずありや雛の鼻
鶯や茨くゞりて高ふ飛ぶ
むくと起きて雉子追ふ犬や寳寺
木瓜の陰に貌類ひ住む雉子かな
居風呂に後夜きく花のもどりかな
ねぶたさの春は御室の花よりぞ
みじかよや毛むしの上に露の玉
みじか夜や伏見の戸ぼそ淀の窓
五月雨や大河を前に家二軒
さみだれや佛の花を捨てに出る
さみだれや名もなき川のおそろしき

さみだれや水に鐙ふむ渡し守
あか汲て小舟あはれむ五月雨
石工の鑿冷したる清水かな
石工の飛火流るゝ清水かな
ころもかへ母なん藤原氏なりけり
蚊遣火や柴門多く相似たり
蚊遣してまゐらす僧の座右かな
鮓をおす石上に詩を題すべく
すし桶を洗へば淺き游魚かな
くづ水にうつらで嬉し老の貌
絶頂の城たのもしき若葉かな
閻王の口や牡丹を吐んとす
牡丹散て打かさなりぬ二三片
方百里雨雲よせぬぼたんかな
花いばら故郷の路に似たるかな
路邊の刈藻花さく宵の雨
燈ともせといひつゝ出るや秋の暮
枕上秋の夜を守る刀かな
月天心貧しき町を通りけり
白露や茨の刺にひとつづつ

旅人の火をうちこぼす秋の原
朝霧や村千軒の市の音
うき我に砧うて今は又止みね
化さうな傘貸す寺のしぐれかな
大とこの糞ひりおはす枯野かな
石に詩を題して過る枯野かな
蕭條として石に日の入る枯野かな
鍋敷に山家集あり冬籠
冬ごもり壁を心の山に倚
埋火や終には煮る、鍋のもの
腰ぬけの妻うつくしき火燵かな
西吹けば東にたまる落葉かな
二村に質屋一軒冬木立

の如く矢張り蕪村の感懐が主になつてゐるものと、今日の描寫の句とが入り交つてゐます。

「おそき日の」の句の如きは全然感懐の句です。併し「春雨に濡れつゝ屋根の手鞠かな」とか、「物種の袋濡らしつ春の雨」とかいふ句の如きは、其所に蕪村の感懐と認むべき何物も無くて、全く蕪村の眼に映じた景色を描寫したといふべきものです。

蕪村に至つてはじめて描寫の筆が作者の感懐を離れて獨立し

たと言つてもいゝでせう。同時に芭蕉の句程の深みが無いといへばいへます。

併し是等の句は少數です。

足弱の渡りて濁る春の水
春の海終日のたり〳〵かな

の如き矢張り感興を主にしたものが十中七八に居ります。足弱の女が渡つたから春の水が濁つたといふのは春水に對して興じた蕪村の興味が主になつてゐます。「ひねもすのたり〳〵かな」といふのも斯の海に對する蕪村の感懷が主になつてゐます。春の海は斯の如くなるべしと感じた其感じを現はした句であります。

明治の子規の句に

初芝居團十郎の烏帽子かな
初芝居見て來て曠着いまだ脱がず
あたゝかな雨が降るなり枯葎
赤飯の湯氣あたゝかに野の小店
石手寺へまはれば春の日暮れたり
宇治川やほつり〳〵と春の雨
春雨や傘高低に渡し舟
會の日や晴れて又降る春の雨
さそはれし妻をやりけり二の替
すり鉢に薄紫の蜆かな
赤門を入れば椿の林かな
萍や池の眞中に生ひ初むる
椎の舍の主病みたり五月雨
つゝじ多き田舍の寺や花見堂
地に落し葵踏み行く祭かな
日曜や浴衣袖廣く委蛇〳〵たり
わが物も昔になりぬ土用干
障子あけて病間あり薔薇を見る
椅子を置くや薔薇に膝の觸るゝ處
河骨の水を出兼ぬる蕾かな
河骨の花起き直るさてのあと
初秋や三人つれだちてそこらあたり
朝寒やたのもと響く内玄關
やゝ寒みちりけ打たする温泉かな
長き夜や障子の外をともし行く
藤澤の竹も久しや庵の秋
ある僧の月も待たずに歸りけり
琵琶一曲月は鴨居に隱れけり

月並る經月會の終りかな
心細く野分のつのる日暮かな
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺
つり鐘の蒂のところが澁かりき
御佛に供へあまりの柿十五
三千の俳句を閲し柿二つ
野分待つ萩のけしきや花遲き
合點ぢや萩のうねりの其事か
市に得し草花植る夜半かな
のら猫の糞して居るや冬の庭
小夜時雨上野を虚子の來つゝあらん
雞頭の黑きにそゝぐ時雨かな
いくたびも雪の深さを尋ねけり
雪の家に寢て居ると思ふ許りにて
冬川の砂とる土手の普請かな
風呂吹の一きれづつや四十人
お長屋の老人會や鯨汁

の如く漸く作者を離れて句が成立たうとしてゐます。即ち作者の感懷を陳べるといふ事は句の上に現はれずして單純に景色を描寫してゐるものが多くなつて來てゐます。たとへば

[illegible]

といふ句は、子規が宿の淋しさに立つて、彼女の状態を觀察して詠じた句です。[illegible]を見て來た女が、まだ[illegible]状態から覺め切らずに其曉昏を待たまゝでゐるといふ状態を描いた句です。此事柄に對して作者は何の交渉もありません。唯女が左樣の状態にゐることを冷靜に觀察して描寫したまでゝす。

あたゝかな雨が降るなり枯葎

此句も唯春前のまだものゝ芽ぐまぬ時分に、枯葎の上にあたゝかな雨が降つてをるといつたゞけの句であります。此「あたゝかな」といふ言葉には主觀の交り易い傾きがありますが、更に主觀らしきものはなく靜平に叙されてゐます。

併し又、

わが物も昔になりぬ土用干
障子を開けて病間あり薔薇を見る
椅子を置くや薔薇に膝の觸るゝ處
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺
三千の俳句を閲し柿二つ

の如き子規自身に即した句も數あります。大概子規の句でひしひしと人に迫るやうな句は、其病苦に基づいた句であります。其が一旦大正の今日に至りますと、

念力もぬけて水洟たらしけり
秋の谷とうんと銃の谺かな
厄すてし戻り聲するめでたさよ
たふやかに年寄耳や寶船
傀儡の頭がくりと一休み
爐話の梟をこそぐる噫かな
雪解のゆら〳〵として枝垂梅
囀を身にふりかぶる盲かな
白酒やなでてぬぐひし注零し
月をしかむしぼり泪や爐火の醉
大阪の煙おそろし和布賣
山吹に留守かや障子すきたれど
もの憑の泣きし睫毛やはたゝ神
口笛に獨りそゞろぐ涼みかな
稻車老もきほひて從歸る
雛壇や閏遲れに百姓家
桜の芽やつと翔ちかはる蝿二つ
沈丁を流るゝ虻やたてよこに
嬌柳さはらず伸べし釣瓶竿
わか柳一とすぢのりて藥廟

阿波野青畝

虷煙さらひ〳〵て寒さかな
かたまつて哀れさかりや曼珠沙華
茸狩やぬぎすて衣一と筵
せゝらぎやかゝる一葉に水遊ぶ
谷紅葉見遙しつゝ廊まがる
初鏡尼となりても身だしなみ
樹の間もる月にさまよひ厄落し
落柿舍やなだれかぶさり雪の藪
佇むやさと打ち登り蝌蚪の水
長雨や汀山吹大ひたり
花人に夕鐘袋ひなりわたり

田中王城

右手につく夜寒の比叡や加茂堤
秋風に錠かゝり居る清水かな
白露や草の中なる手水鉢
眼前の木洩れ日ろれし落葉掻き
風落葉岩にはりつき暫らくは
頭揚ぐれば日を失し居り落葉掻き
二株の葉牡丹瑠璃の色違ひ

西山泊雲

鈴木花蓑

汀の[illegible]

落葉掻く音夕霽みて社裏

早潮波月潮りぬ流されぬ

夕紅葉とみに水音澄みわたり

干布團外し抱へて母歸宅

短日やはだかり陰る嵐山

野々宮やさしわたりたる時雨月

美しの湖上の虹や若菜摘む

風船のはやりかしぎて逃げて行く

囀や月に終りし一とくさり

一枝や魁け咲ける梅廟

噴水や月の光に消え入りて

噴水やふりかくされて雨の中

久保より江

宿の子をかりのひいきや草相撲

野分めく風やしをんを右左

朝かげや露の芝生の投げ箒

從容と鍬がもとの小かまきり

主客たゞあるがまゝなりさわやかに

水原秋櫻子

[illegible]

金木犀[illegible]

打てばひゞくわれと思ふや秋の[illegible]

烏猫こたつの上にあくびかな

髮洗ふせすぢ傳はる寒さかな

人形がかざしてゆるゝ笠の菊

好晴や日にけに荒れて花畠

年わすれ舞妓と假のめをと仲

掛稻や多摩の横山あを〳〵と

夕東風や海の船ゐる隅田川

多摩川や堤燒き居るわたし守

鋤牛に水田ひかりて際しらず

ふるさとや馬追鳴ける風の中

高嶺星蠶飼の村は寢しづまり

鳴きのぼる雲雀の影や蛇籠あみ

梨棚や初夏の繭雲うかびたる

屋根石や前山燒くる火明りに

山口誓子

溝菲のかさのうてなに溜り水

桝主の肩にをかしや焚きぼこり
初猟や深泥ケ池へ道をとり
筧水ありく月に眞一文字
踊り子の脱げし草履やかりそめに
お彼岸や音羽の瀧のにぎやかに
かんぬきをかけゐる尼に月昃り
濁り江に芦の牡蠣船かゝり居り
本船へ氷上暮れて往來なく
日當りて雪嶺雲とけぢめあり
夜を歸る枯野や北斗鉾立ちに
猿の掌にかけら鏡や閑の秋
若竹に水旅して朽樋かな
瀧茶屋や床の下ゆく早瀬波

（是等の句はホト、ギス本年一月より六月迄の雑詠の中から七氏の分を抜萃したのであります。大正になつてから今日迄の句の變遷をしらべて見るのも面白いが、こゝには簡單に大正の特色を述べる計りでありますから、手近のホト、ギスの中から抜きました。又此等七氏に限つたことも比較的句數が多いといふに過ぎません。）

の如く、其悉くが、作者を離れて、其描かれた物の興味に生きてをります。（やがて其が作者の興味になりはしますが）たへば、

念力も抜けて水洟垂らしけり

の句の如きも、主觀詞が用ひてあるに拘らず、第三者の人を描いたものです。即ち或一人が念願を掛けて渾身の力を振つて或仕事をやつて居つた。ところが終に失敗をして一念の力もがくりと抜けてしまつた。其拍子に水洟を垂らしたといふ句です。念力の抜けた人の狀態をよく描いてゐます。

秋の谷とうんと銃の谺かな

秋のもの靜かな谷に偶々銃の音がして其が山に響いて谺が聞こえた、唯とうんと鳴り響いた計りであとは又寂寥としてゐる、といふ句である。此句も其客觀の景色を巧みに叙してゐる計りで何等此作者と特別の交渉はないのであります。

かたまりて哀れさかりや曼珠沙華

此句は曼珠沙華のかたまつて咲いてゐるやうすをいつた句であります。「哀れ」といふ主觀詞が使つてあるに拘らず、其現はさうとするところは客觀如實の景であります、曼珠沙華がかたまつて咲いてゐるのを作者が「あはれ」と見たことには相違ありませんが、しかし「あはれ」と見るよりも、其草の中に点々しい赤い花がかたまり咲いてゐることに興味を持つて此句は出

來たものであります。「あはれ」といふ主觀語は作者の物に對する情緒を現はしたと見るよりも、適切に曼珠沙華の狀態を現はしたと見る方が至當なのであります。

花人に夕鐘震ひなりわたり

櫻を見に來てゐる人に折節其近所の寺で撞き出す夕暮の鐘が大變な響を立てゝゴーンと鳴り渡つたといふのであります。唯入合の鐘が鳴つたといふだけでは陳腐極つた句でありますが、其鐘の音が格段に強い響きを立てゝ其花を見て居る人の耳に響き渡つたとある爲めに、其夕暮のいくらか靜かに、花を見る人の草臥れてゐる容子などが想像されます。これも「震ひなりわたり」と力を籠めて言つたところは作者の主觀でありますが、併し其主觀をかりて客觀の景色が的確に描かれてゐます。作者は一園に其客觀の景色を描くことに力を盡くしたのであります。

風落葉岩にはりつき暫らくは

風が吹いて來て落葉が岩に吹きつけられた、暫らくはぢつと吹きつけられた儘になつてゐて岩に張りついたやうになつてゐる、といふ句であります。斯ういふ句は元祿にも天明にも明治にも無かつたものであります。

早潮波月溯りぬ流されぬ

早潮が波立つてゐる、其處に月影が映る、其月影の映つた態を極めて微細な感覺で描寫したものであります。即ち一旦月影が早潮を溯つた如く見えた、がすぐ又其早潮に押し流されたた如く見えた、といふのであります。其早潮の暫くも休まらず、常に波立つてゐるので、斯る錯覺を起すのであります。これも大正に至つて始めて現はれた句であります。

宿の子をかりのひいきや草相撲

旅の宿にゐる時分、其宿の子が草相撲に出た。草相撲といふのは草の生えてゐる野原で素人相撲を取ることをいふのであります。其草相撲を見に行つた。いづれも知らぬもの許りである中に唯宿の子が交つてゐる、別にひいきといふ程ではないが、其宿の子をかりにひいき相撲にして、其草相撲を見るといふのであります。此句は元祿、天明に似通つた趣があります。殊に蕪村などの句を見るやうであります。此作者の句は主觀味が勝つてゐます。大正になつてもさういふ句もある事の一例になることゝ思ひます。此作者のみならず、他の作者にも此程の句があります。大正の俳壇にも斯ういふ句は亦數多いのであります。

高嶺星蠶飼の村は寢しづまり

高嶺の上に星がきらめいてゐる。其高嶺の麓に在る蠶を飼つてゐる村は寢靜まつてゐる、といふ句であります。其蠶飼の村の寢靜まつてゐる上を高嶺の星は明に照らし輝いてゐるやうな

念力もぬけて水洟たらしけり
秋の谷とうんと銃の谺かな
厄すてし戻り駈するめでたさよ
たふやかに年寄耳や寶船
傀儡の頭がくりと一休み
爐話の鼻をこそぐる噓かな
雪解のゆら〱として枝垂梅
嚔を身にふりかぶる盲かな
白酒やなでてぬぐひし注零し
月をしかむしぼり泪や爐火の醉
大阪の煙おそろし和布賣
山吹に留守かや障子すきたれど
もの憑の泣きし睫毛やはたゝ神
口笛に獨りそゞろぐ涼みかな
稻車老もきほひて從歸る
雛壇や閏遲れに百姓家
桜の芽やつと翔ちかはる蝿二つ
沈丁を流るゝ虻やたてよこに
嬌柳さはらす伸べし釣瓶竿
わか柳一とすぢのりて藥廂

阿波野青畝

軒煙さらひ〱て寒さかな
かたまつて哀れさかりや曼珠沙華
芋狩やぬぎすて衣一と筵
せゝらぎやかゝる一葉に水遊ぶ
谷紅葉見遙しつゝ廊まがる
初鏡尼となりても身だしなみ
樹の間もる月にさまよひ尼落し
落柿舍やなだれかぶさり葛の蔓
佇むやさと打ち曇り蝌蚪の水
長雨や汀山吹水ひたり
花人に夕鐘殷ひなりわたり

田中王城

右手につく夜寒の比叡や加茂堤
秋風に錠かゝり居る清水かな
白露や草の中なる手水鉢
眼前の木洩れ日うれし落葉掻き
風落葉岩にはりつき暫らくは
頭揚ぐれば日を失し居り落葉掻き
二株の葉牡丹瑠璃の色違ひ

西山泊雲

[illegible]

落葉掻く音夕霧みて社裏

早潮波月潮りぬ流されぬ

夕紅葉とみに水音澄みわたり

干布團外し抱へて母歸宅

短日やはだかり陰る嵐山

野々宮やさしわたりたる時雨月

美しの湖上の虹や若菜摘む

風船のはやりかしぎて逃げて行く

蜩や月に終りし一とくさり

一枝や魁け咲ける梅庵

噴水や月の光に消え入りて

噴水やふりかくされて雨の中

鈴木花蓑

宿の子をかりのひいきや草相撲

野分めく風やしをんを右左

朝かげや露の芝生の投げ緣

從容と鍬がもとの小かまきり

主客たゞあるがまゝなりさわやかに

久保より江

この[illegible]

金木犀銀木犀も寄□はず

打てばひゞくわれと思ふや秋の風

鳥猫ふたつの上にあくびかな

髪洗ふせすぢ傳はる寒さかな

人形がかざしてゆるゝ笠の菊

好晴や日にけに荒れて花畠

年わすれ舞妓と假のめをと仲

掛稲や多摩の横山あを〳〵と

夕東風や海の船ゐる隅田川

多摩川や堤燒き居るわたし守

鋤牛に水田ひかりて際しらず

ふるさとや馬追鳴ける風の中

高嶺星蠶飼の村は寝しづまり

鳴きのぼる雲雀の影や蛇籠あみ

梨棚や初夏の繭雲うかびたる

屋根石や前山燒くる火明りに

水原秋櫻子

蓮華のかさのうてなに溜り水

山口誓子

て考へる時に、それは人も住家も空しい地理學上の空地を指すのではなく、都市の集團を意味するのである。まことに建築は文明の母であり、大工業の先驅でたつた。而して科學の進歩するに伴つて一般工業の著大なる發達を見たる今日に於ても依然として最大の工業なる事に變りなく、人類の存する限り永遠に其地位を保つべきものである。

自分は先きに文字「Architecture」と「建築」とを對照させて特にこれに留意せらるゝ事を希望した。其理由は此建築なる文字が、古く支那に於ける熟字でもまた我邦のそれでもなく全く英字の Architecture の譯語として生じたものであり、原字の意味が一般の建物を意味するのではなく寧ろ其中の或特殊の抽んでたるものを指して居つたと同様に、譯字も亦特殊の意味を持つものと解釋せられ、應々にして見解を異にする人のあるが爲めに、最初に此點を論じて自分のいはんとする所の建築の意義を明確に定めておきたいからである。

元來「建」の字は、其本義は立法の謂ひで轉じて建立の稱となつたものである。即ち「置く」の意と「竪つ」の意を有し、邦語では此字を「たつ」にあてゝ居る。又「築」の字の本義は牆即ち土塀や石塀などを造るときこれを突き固めるの謂ひで、轉じて「築營」の義即ち土木工事の意味となつたものである。即ち動詞としては「土石を積重ねてうち固む」の意及び「家屋を構へ造る」の意であり、古來これを邦語の「つく」「きづく」に充てゝ居る。また名詞としては「牆垣、家屋などの造りたるもの」及び其他「一般土木工事」の意味を有するものである。古い時代からの熟字を集めた書物で、支那の康熙年間に勅命に依て編纂された佩文韻府に就て見るに、築の字より成る辭句で家屋や土木工事等に關係あるものには、「新築」「創築」「增築」「修築」「營築」「架築」「構築」などはあるが、「建築」といふ字は全くない。

又自分の今日迄知れる限りに於ては、邦語の古い書物や德川時代刊行の節用集や工匠關係の書物などに就て見ても、此の文字は全く見當らない。

或は歐洲語の支那譯にもやと、燒失前の東京帝國大學の圖書館、早稻田大學の圖書館や、知人の藏書家に依つて、English Chinese Dictionary 即ち英華字典にこれを求めた。そして得たところの最も古きものは西暦一八六六年の香港版のそれであつたが、之に依れば、Architecture に「工匠務」、「造宮之法」、「起造之法」等の譯語が見出されるが建築といふ文字はない。又 Architecture の本をなせる文字 Architect を見るに、これには「工匠」、「起屋師傅」、「建造工人」、「起匠師傅」等の譯

語を見るが建築に關する文字はない。ただ其內容[illegible]しき

數種の英華字典を見たが大體に於て同樣のものであつた。

次に前述の圖書館及び藏書家に就て、古い蘭和の字典や、佛和、英和、獨和等の辭書を調べた。そして文久二年江戸開版（西曆一八六二）の英和對譯袖珍辭書に於て初めて此文字を發見した。洋學年表に依れば文化八年（西曆一八一一）に本木庄左衛門氏の英文和解出で、弘化四年（西紀一八四七）に藤井三郎氏の英文範が出て居る筈だが是等の書物はまだ見る事が出來ずにゐる。此の英和對譯袖珍辭書は當時我國洋學研究の權威たる蕃書取調所の人々の努力に依て編纂せられたもので、Architecture に「建築學」を、Architect に「建築術の學者」なる文字を當てゝゐる。そして Architecture に似寄りの文字 Building の譯字には「家室」を、又 Architect に對する Builder には「大工棟梁」「造物者」「船大工」「建てる人」の四字をあてゝゐる。之に依つて見ると Architecture と Building とを明瞭に區別してゐる。此辭書の編纂が、如何なる書物を參考にしたものであるか、必ずや英華字典に據るところ多かる可き事は誰しも想像するところであるが、假令自分の見た英華字典の最も古いものが一八六六年の香港版のもので、此の辭書の一八六二年に後るゝ事四年であるにしても、その字典にも其後出版せられた其等にも、其の建築なる文字の[illegible]築」が英字 Architecture の邦譯文字と見て差支ない筈である。

日露戰役前後から日本の文化が支那に輸入せられて、今日では日本流に建築なる文字が書物や新聞紙などには表はれて居るが、支那では最も普通的の俗語として日本の家作とか普請とかいふところには「起蓋」が用ゐられ、稍改つた俗語には「起造」が、文語には「營造」が用ゐられてゐると聞く。

誤謬や推考の不充分なところは識者の教を乞ふ事として、上述の如く自分の今日まで知り得たところでは、文字「建築」は英字 Architecture の邦譯なり、として差支ない筈である。

其所で第二段には、此アーキテクチュアとは本來何を意味するものであるかといふ事になる。先づ文字の根原に遡て探求して見ると、これは拉典語の Architectura に出で、更に其起りは希臘語の ἀρχιτέκτων（即ち木工の頭の意味）から發して居る。そして此の拉典の Architectura に關する古い書物が幸にも今日まで殘つて居る。これは西曆一世紀に書かれたもので、即ち約二千前の羅馬の建築家 Vitruvius が時の皇帝アウグスツスに奉献したものであり、これが永く伊太利建築界の指導の書物となつて傳はつた。書物は十篇より成り、その目次を一々

に列擧する事は出來ぬが、其の内容の大體は、建築士の教養、建築の基本原理、都市計畫に關するもの、住宅の起原、各種の建築材料と構造、氣候と建築との關係、室の布置、外觀美や裝飾に關する法則、神殿・バジリカ・市場・寶庫・監獄・元老院・劇場・浴場・競技場・城壁・柱廊・港灣・阜頭・防波堤等の設計、飲料水、水道及貯水漕、天文及び氣象との關係、日時計及び水時計、機械學、水力學等に至るまでを網羅した建築の百科辭典である。

十五世紀から十六世紀へかけての伊太利のあのルネサンス時代に、羅馬藝術の復興が始るのであるが、當時此書が羅馬建築の研究に頗る役立つたものである。

ルネサンスといふ意味は、伊太利語のレナツチメント、即ち既に廢絶したる或は衰退したる事物の復興を意味する文字に出で、文藝復興或は學藝復興と譯されてはゐるが、實は近代精神への運動の起りであつて、單なる古典復興の運動ではなかつた。併し乍ら此運動の西歐諸國への傳播と共に羅馬建築の模倣復活が是等の地方に浸潤し、これに伴つて此の拉典語 Architectura が各地に傳はつた。伊太利語で Architettra とよばれた此語は佛蘭西では Architecture とかゝれた。英吉利には發音は異るが佛蘭西綴りの儘ではいつたものである。この文字の佛英で用ゐられ初めたのは十六世紀であつた。

以上の如く、羅馬建築の復興と結び付いて此の文字が西歐國に傳播したので、古羅馬式を模倣するやうな立派な建築だけに此文字が用ゐられ、其國々に在り來りの建物などには用ゐられなかつたのである。斯ういふ事から、此 Architecture は英語の Building といふやうな文字とは獨立して特殊の建築を指すものとせらるゝに至つた。ルネサンスの初期に於てはこれが燦然として藝術の花咲ける伊太利より將來せる古典復興の建築を意味するものとせられた事から引いて、これは後に述ぶる事ではあるが復興建築の流行が止まつても依然として其國の代表的美術建築のみを指したものである。Architecture なる語が斯ういふ風に用ゐられるやうになつたのはまた二つの理由がある。其の一つはルネサンスが貴族と自己意識の强かつた學者及び藝術家に依つて目覺めた運動であつたが爲めに、假令それが近代主義への漸進であつたにしても、一面に貴族主義的・事大主義的の傾向があり、又ルネサンス當初の建築家達は、一人にして同時に畫家彫刻家金匠玉匠などを兼ねた人々であつた爲に、建築の實用上の考察は薄らいで、當時の生活から來る直接の用途と一般構造には無頓着に、たゞ出來上つた作品の效果に對する鑑賞を目途とするやうになり、意匠の美を求むる自由表現の藝術として取扱はれがちの唯美主義の傾向を持つてゐたからであ

る。

如何に此唯美主義が跡をなしたかは、哲人フランシス、ベーコン（一五六年——一六二六年）が其建築論のうちに斯う書いて居るのに見ても知る事が出來る。「家屋は住まんが爲めに建てるもので、眺めんが爲めに建てるものではない。されば均齊實用共に得らる時には先づ撰ぶ可きは實用である。美の爲めのみの家屋の結構の如きは彼の小費用をもつて建てる詩人の空想裡の莊麗魂を奪ふ殿堂に任すがよい、云々」とあるがそれである。

事實十八世紀に至つて羅馬模倣は少しく衰へ、新に發見された希臘建築の模倣が始まる。併しこれとても依然として古典復興には相違なかつた。

十九世紀に入つては各國民の國民的自覺と、これに伴つて起つたローマンチシズムの運動とに依つて、自國の古い建築に眼を向けしむるに至つた。自國の古い建築とは中世紀の建築である。茲に古典復興の建築と共に中世復興の建築が併立して行はるゝに至つた。斯くの如くにして、彼れは古典式の是れは中世式の建築家であると區別せらるゝやうになり、次では一人の建築家の作物に於ても或種のものには古典式を他の種のものには中世式を用ふるといふやうに、所謂撰擇主義とか折衷主義とかいふ時代に入ると、既に建築は依然として古典主義の下に取扱はれたもので、其後此の撰擇の領域は益々廣まり行つて、埃及・亞細亞等の地方のものはもとより、自國の初期復興式をすらこれを意匠の材料として用ゐる時代に及んでも、此傾向はやまなかつたものである。斯の狀態は特に說明を要せずとも、建築には必ず何々式と稱へて或種の古代衣裝を以て「きものきせる事」を主要なる問題として居つた其事が直ちにこれを物語る。

即ち文字 Architecture は依然として Building なる平凡平易なる文字と區別せられたところの事大主義・貴族主義・唯美主義の文字であつた。そしてこれが同樣の意に於て我邦にも入り來つたものである事は後に述べる事とし、茲には暫く歐人の此語に對して說けるところを掲げやうと思ふ。尤も、譯された原字の關係と、明治時代の教育に——今でもさうであるが——外國語は主として英語が用ゐられ他の術語と同じく建築の術語が多く英語に依つた關係と、一つは自分の手元にある參考書の關係上、茲では主として英書に依つて述べる。

世界的の建築史家であり且評論家であつた彼のゼームス・ファガツスンは十九世紀後半に著はした建築史の第一卷に於て斯う書いて居る、「Building に裝飾が加へられた時に Architecture となる」と。先きに擧げられた文久二年江戸開版の英和對

譯袖珍辭書には Building を「家宅」としてあつた。併し今日では一般にこれを「建て物」と譯してゐる。であるからファガツスンの此語は「建物に裝飾が付けられた時に建築となる」と斯う譯すべきである。

當時の新人ラスキン、最も卓越せる評論家であつた其のラスキンですら、十九世紀の中期に於ける共著「建築の七燈」に於て「建築とは人間に依つて建てられた建物を、其用途はどんなものであるにせよ、それ等の建物を見ることが、人間に精神上の健全と力と快樂とを與へる助けになるやうに整理し裝飾する事である」と說き、そして「總ての考究の手始めに先づアーキテクチユアとビルヂングとの區別を十分明かにする事が甚だ必要である」と述べて居る。併かもなほ其次に、「されば玆に吾々はアーキテクチユアなる名稱をば、その工作の要件として建物の必要と通常の用途を取容れて、其形態に崇高な或は美しい而もそれ以外にしては必要でない或性質を印刻する所の術に對して與へる事にしやう」と書いてゐる。

ラスキンのいはんと欲した所のものは、建築家の全魂を打込んで造つたものでなければ眞によい建築といはれる可きでない。單に用途や構造などといふやうな事を部分的に考へて製作に携はつた所で眞の建築は得られるものでない。と斯ういふやうな意味であつたに相違ないと想像されるが、語に表はれたは余りに偏し過ぎて居る。其の最も甚だしい句は、此の「建築の七燈」の附錄第一や、「ザ・クラウン・オブ・ワイルド・オリーブ」などの著書にある、建築とは彫刻或は繪畫を以て裝飾されたものでなければならぬ、これ以外のものは單なる建物に過ぎない、といふ意味の語である。

文久二年の英和對譯袖珍辭書が何を參照して譯されたか不明であるが、Architecture が全く原字と同じく取扱はれて、「建築」などゝいふ新字が當て嵌められ、そして Building とは全く區別して譯された事に深く注意する必要がある。兎に角、建築が英字アーキテクチユアの邦譯新字であつたに係らず、明治初年頃に於ては、此の語が「鐵道の建築」といふやうに官廳用語として寧ろ土木工事の方に慣用された事は當時の文書に散見する。

明治四年に創立された工部省附屬の工學寮、これは明治十年に工部大學と改稱され、更に明治十八年に帝國大學の工科に合併せられて同工科大學のうちに入れられたものであるが、此の工部大學はグラスゴー大學の分身といつてもよい程のもので、同大學より教師を聘し、學科課程の如き總て英文にて立案し、更にそれを邦譯したるものであるが、是等工學寮工部大學、それからまた帝大の工科大學に於てすら、初めの間は今日の建築

學科と呼ばれ、そして此造家學科は初等土木學科や機械學科其他の學科に於ける必修課目たる Building Construction が與て建築構造と呼ばれてゐたものである。

以上の如く、建築がアーキテクチュアの譯字として現はれ乍らも、明治初年に於ては其使用は寧ろ逆であつて、實用的には土木工事の如き處に用ゐられ、或は Building の譯字として掲げられ、そしてデパートメント・オブ・アーキテクチュアの方が造家學科となつて居た如きは、まだ此文字の意義の確立と普及とがなかつた事を證明するものである。實際此語の意義が確立し普及するやうになつたのは最近の事である。その最も明らかなる證據は、現今日本に於て最も有力なる建築學者の會合である建築學會が明治三十年迄は造家學會と呼ばれて居り(會の發行する雜誌名は建築雜誌となつてはゐたが)、帝大の工科大學の造家學科が建築學科と改稱されたのが明治三十一年である事に就て考へても明かな事である。

以上の如き經路を以て此語は其頃から極端にアーキテクチュアの譯語としてのみ用ゐられやうとする傾向を示し來つた。それは當時我邦に於ける唯一の建築學に關する講座であつた今日東京の帝國大學の建築學科の教授連に於て此の文字が先きに述

おてあり。其最も興味の[illegible]工學大辭典の「ケ」の部に於ける當時の東京帝國大學教授であつた恩師中村博士の建築學の解説である。それには斯う書いてある。「建築學とは建築物を造營する事に關する學術をいふ。我てこゝに建築物と稱するは建物と全く同じといふ可からず。また構造物とも異れりとす。建物は總て材料を以て組立てゝ造られたるものにして地上に作り、即ち粗朴なる倉庫、牛舍、茅舍等何れも建物なり。されば建物は平凡醜陋若しくは粗拙劣なるを妨げざるなり。然れどもこれ等を建築物と稱する事を得ず、質に建築物は美術的建物の謂にして、若し其國建築といへば、その國の代表的建築物を指すこと勿論なり、即ち國會議事堂、大劇場、伽藍の如きこれなり、云々」と。此文のうちの建築或は建築物と稱するは Architecture を、建物と稱するは Building を、構造物と稱するは Structure を意味して居る事は明らかな事である。

茲に此句を引用したのは決して恩師の舊き論文を批判せんが爲めではなく、これを以て當時の我々が如何に建築を解してゐたかを示さんが爲めである。

自分は先きに、フェルガッスンの句を掲げ、次にラスキンの

說を擧げた。これはたゞ二つの例を示しただけに過ぎず、十九世紀後半の英國の建築學者や美術評論家の殆ど悉くが以上の如き意見を以てゐたものである。そして中村博士の何が全くこれに基いて居ると見て差支ない。

ルネサンスは近代主義の濫觴であり乍ら、それが最初上流者に依て取扱はれた文化であつた爲めに、藝術は却つて民衆から分離した。建築が斯くの如く煩瑣なる特殊の意義を持つたのも全く同じ傾向からである。しかも十九世紀末からの物質科學の著大なる進步、これに伴つて生じた精神科學の發達、この兩者の醒らせる民衆的思想、これ等の關係から建築の定義も自ら變らざる事を得なくなつたのである。

フエルガツスンの所謂裝飾された建物といふ事は寧ろ美術的に抽んでた建物といふ事を意味し、中村博士の論の內容の如く解するがよく、また先きに揭げたラスキンの「建築の七燈」中の議論は、人に感動を與ふる建物と解すべきである。

今小兒に粘土を與へたとする、小兒はこれを用ゐて必ず造形的の遊戲をなすものである。そしてそこには自ら二つの異つた形式がある。即ち其一は人體動物の如き自然の物象にかたどるもので、他の一は自由なる幾何的立體或は其組合せの形成をなすものである。小兒の斯の如き行動は本來人間の本能的衝動に基くもので、前者は彫塑藝術の基をなし、後者は建築の藝術的形成原理の基をなすものである。建築が人に感動を與へる所以のものは、主として此原理に基く形態の如何に存するもので、裝飾の如きは寧ろ僅少の關係を有するに過ぎない。勿論、均齊を得たる人間の體軀はこれ自身に於て既に美しくあり乍ら、これに裝飾、首飾等を施す時に一層美觀を發揮する事のあると同時に、建築の或要部に施されたる裝飾に依つて更に美を增すことはあつても、裝飾は決して建築美の第一義のものといふ事は出來ない。しかも建築のどこからどこ迄が骨骼で、どこからどこまでが裝飾であるかは決して區別し得るものではない。例へば窓帳を懸ける事は建築の一の要素であるから、これを單に裝飾といふ事は出來ない。壁紙を貼る事も、壁の表面は肌理荒く色も灰色と定まつたものでないから、人間が顏に紅粉を施すやう本來自然に定まつて居るものを裝飾するのと同じに見なす事は出來ない、設計の當初から壁を青くし床をモザイックにしてといふやうに意匠せらるべきものである。若しこれを裝飾といふならば、石壁の色も屋根瓦の色も裝飾であるべき筈。以上は色彩に關した事項であるが、然らば建築裝飾といふ語を彫刻的の部分に解して、曲線形をなせる屋棟や凸凹を附した蛇腹を裝飾と見る可きであるか。建築は其目的とする用途と、これを構成する材

成すものであるから、是等の二條件は甚だ有機的に結合す可きもので、茲に擧げたる例の如きもこれを裝飾として其本體と別けて考ふることは不可能である。

以上の事は例へば、人間の言葉は法律の條文か何ぞのやうに單純に、然し乍ら無味乾燥に事物を云ひ表はすのが本當で、さうでない部分を單に言葉の裝飾であるとはいひ得ぬと同樣である。儀禮の文は儀禮の文として、詩は詩として、根本的に一つの形式をなす可きものである。勿論文章もさうであると同じく、此の建築はあの建築よりも貧相であり、あの建築は此の建築よりも虛飾的であるといふ事は出來る。

此點に於て哲人エマースン(一八〇三年——一八八二年)は其論文「社交と孤獨」のうちの藝術なる章下に於て良い事をいつて居る。それは、 Architecture and eloquence are mixed arts, whose end is sometimes beauty and sometimes use. と云ふのである。これを明瞭な邦語になほす事は困難であるが、先づ大體に於て、「建築と能辯とは混合藝術であつて、其目的は時には美にあり時には實用にある」といふ可きであらう。

埃及のピラミッドの如き單純なる建築が、特に企てられたる或種の形態を有するものよりも人を感動せしむる場合の多き、

滿たして居る事[illegible]

自分は建築の意義に就て思はずも少しく長く論じすぎたやうに思ふ。併し其間自ら各種の事項を暗示し得たと信ずる故に、それは決して徒勞であつたとは思はぬが、是等に關する議論は先づ茲に止め、既に述べ來つた所の意見を概括して下に揭げやうと思ふ。即ち、

地上に存する一切の營造物、(法律用語たる營造物と混同せられぬ事を注意する) 小にしては箇々の建物、更に小にしては家具調度、大にしては都市(都市は全體として一の有機的營造物である)、是等を其目的に應じて計畫し且つこれを構造する技術を建築と呼ぶ。

今自分は小にしては箇々の建物といつた、その建物とは單に家屋のみを指したのではない。家屋とは大小孰れにしても壁を以て或空間を劃し、屋根を設け、窓入口を有し、內部を一室或はそれ以上に區劃した構造物で、風雨や寒暑から安全に其中にあつて、人間日常の生活を營む所のものであるが、建物とは此他になほ橋梁も墳墓も記念碑も門墻の如きをも含むものである。

建築なる語は是等の營造物を計畫し、且つ構造する技術を指

すものであるが、また多くの場合に於て是等の營造物そのもの及び是等營造物の樣式をも指すものである。例へば「何々建築の落成」とか或は「支那建築の色調」とかいふやうに。

建築が以上の如く一切の營造物を其目的に應じて計畫し、且つこれを構造する技術を指するにしても、それには當然造形といふ空間形成の藝術的行動を作ふものである。これを發生的に見て、家屋が本來自然の脅威と他の動物の襲撃を防ぐために作られたにしても、橋梁が實際に流れを横切る爲めに作られたにしても、其他の建物がまた斯くの如く、總てが必要の爲めの勢から發したにしても、一方に人間には本來空間の形成に對する藝術的欲望があり、其形成原理が彫刻物の如く自然の事物的表象に依らず、全く自由なる幾何學的表象をなしたものがまた建築の基をなして居る事は疑ふべき餘地なく、今日の建築は必要の爲め目的に依據しつゝこれに造形的慾望の融合して發達し來つたもので、此意味に於て建築とは、其營造物の意義目的を理想化的表現の内容として、其これを構成する材料の性質に順應しつゝ、形成原理に依つて空間の形成をなす事を指すもので、又斯の如くして作られたものをも意味するものである。と斯ういふべきである。

[illegible]、現在の意味に於ける土木と建築との關係を述べて此章を終らうと思ふ。

建築家が Architecture の釋語であることは既に述べた。土木といふ語が古く存在する語ではあるが、土木工學とは全く Civil Engineering（英字だけ述べる）の譯語として出來たものである。此の土木と云ひ建築といふ字は定義通りに解譯すれば全く同じものとなり、實は土木といふ字を Architecture の方に、また建築といふ字を Civil Engineering にの方當嵌めても一向に差支ないやうである。かういふやに兩語の間には甚だ不徹底の所あり、且つ Civil Engineering を單に土木工學と譯した事が甚だ不適當であつた。なぜかといふに、元來 Civil といふ字は、Military 即ち武に對しては文治、又 Religious 即ち宗教に對しては行政といふ意味をもつもので、此場合に寧ろ「公共」といふ意味に取做ふべきものであらうと思ふ。Civil Engineering といふ語はたしか Military Engineering 即ち軍事工學に對して出來た字のやうに記憶する。つまり Civil Engineering といふは、公共的に、道路を作つたり橋を架けたり、外觀などを主としない建物を建てたり、港を築いたり、土を切り取つたり埋めたり、河川をなほしたり、鐵道を作つたりする仕事を指したものである。

先きに擧げた羅馬時代の Vitruvius の書物に依つて見ても

區別は全くなかつたゝないのみならず土木工學をもまたこれから區別しなかつた。そしてまたルネサンスの初期に於ても此區別はなかつた。然るにさきにも述べた通り、當時建築に屬する仕事は、用途より來る間取りや構造等を科學的に研究するよりも寧ろ、如何なる衣服を建物に着すべきかにあつた。そして建築家は所謂美術家といふ名と共に、實用的なそして大きな所謂土木工事をする（Civil Engineering とはだんだんと遠ざかつた。そしてまた（Civil Engineering に屬する方の人は外觀の美などに付ては殆ど教養を欠いで居つた。

併し近代科學の急激なる發達に伴つて、建築の方も、用途や構造に就て考案を練る事が重大視せられるやうになり、個々の家よりは大經營のもとに大建築――ずつと大きくしては都市全體の如き――が營まれるやうになつたと同時に、藝術思想の發達に伴つて、山を切りくずやうな殺風景な仕事に對しても美觀を度外視する事はゆるされなくなつて來た。

玆に於てまた昔に歸て、土木と建築といふ區別が當然徹底されるべき形勢をもたらして來るやうに思はれる。

一九二二年（大正十一年）一月、獨逸聯邦中のプロエセンに於ては、高等工學校（他國の工部大學に當る）に於ける學科の [illegible] teilung für Architektur）と土木工學科（Abteilung für Bauingenieurwesen）とは區別が徹底せられ、特に Fakultät für Bauwesen となつた。これは普通建築科とでも譯すべきであらうか。

この事實は時代の表現をなすものと見て差支ないであらう。

（二）原始的時代の建築

自分は既に建築なる語の意義を論ずるに當て、其大體を發生發達の順序に取扱つた。内容の複雑なものを平易に說明するには此方法に依るが便利である。自分は以下建築そのものも出來得る限り此の形式に依つて說かうと思ふ。

誰れの句であつたか、Architektur ist die Rhythmische Verkoerperung des Zeitgeistes. 即ち、建築は時代精神の韻律的具象であると。此意味に於て、總ての民族の總ての時代に於ける文化の消長は建築に表象せられるものであるから、發生論に記述せられた建築は、單に建築を知らんが爲めに讀む人のみに役立つものでない事を注意せられたい。

偖、最初に人間文化の最も幼稚な時代の建築はどんなものであつたかを見やうと思ふ。

すものであるが、また多くの場合に於て是等の營造物そのもの及び是等營造物の樣式をも指すものである。例へば「何々建築の落成」とか或は「支那建築の色調」とかいふやうに。

建築が以上の如く一切の營造物を其目的に應じて計畫し、且つこれを構造する技術を指するにしても、それには當然造形といふ空間形成の藝術的行動を伴ふものである。これを發生的に見て、家屋が本來自然の脅威と他の動物の襲撃を防ぐために作られたにしても、橋梁が實際に流れを横切る爲めに作られたにしても、其他の建物がまた斯くの如く、總てが必要の爲めの勤勞から發したにしても、一方に人間には本來空間の形成に對する藝術的欲望があり、其形成原理が彫刻物の如く自然の事物的表象に依らず、全く自由なる幾何學的表象をなしたものがまた建築の基をなして居る事は疑ふべき餘地なく、今日の建築は必要の爲め目的に依據しつゝこれに造形的慾望の融合して發達し來つたもので、此意味に於て建築とは、其營造物の意義目的を理想化的表現の內容として、其これを構成する材料の性質に順應しつゝ、形成原理に依つて空間の形成をなす事を指すもので、又斯の如くして作られたものをも意味するものである。と斯ういふべきである。

[illegible]現在の意味に於ける土木と建築との關係

を述べて此章を終らうと思ふ。

建築家が Architecture の釋語であることは既に述べた。土木といふ語が古く存在する語ではあるが、土木工學とは全く Civil Engineering（英字だけ述べる）の譯語として出來たものである。此の土木と云ひ建築といふ字は定義通りに解譯すれば全く同じものとなり、實は土木といふ字を Architecture の方に、また建築といふ字を Civil Engineering にの方當嵌めても一向に差支ないやうである。こういふやうに兩語の間には甚だ不徹底の所あり、且つ Civil Engineering を單に土木工學と譯した事が甚だ不適當であつた。なぜかといふに、元來 Civil といふ字は、Military 即ち武に對しては文治、又 Religious 即ち宗教に對しては行政といふ意味をもつもので、此場合に寧ろ「公共」といふ意味に取做ふべきものであらうと思ふ。Civil Engineering といふ語はたしか Military Engineering 即ち軍事工學に對して出來た字のやうに記憶する。つまり Civil Engineering といふは、公共的に、道路を作つたり橋を架けたり、外觀などを主としない建物を建てたり、港を築いたり、土を切り取つたり埋めたり、河川をなほしたり、鐵道を作つたりする仕事を指したものである。

古きに於ては羅馬時代の Vitruvius の書物に依つて見ても

區別は全くなかつた。ないのみならず土木工學をもまたこれから區別しなかつた。そしてまたルネサンスの初期に於ても此區別はなかつた。然るに先きにも述べた通り、當時建築に屬する仕事は、用途より來る間取りや構造等を科學的に研究するよりも寧ろ、如何なる衣服を建物に着すべきかにあつた。そして建築家は所謂美術家といふ名と共に、實用的なそして大きな所謂土木工事をする Civil Engi eering とはだんだんと遠ざかつた。そしてまた Civil Engineering に屬する方の人は外觀の美などに付ては殆ど教養を欠いで居つた。

併し近代科學の急激なる發達に伴つて、建築の方も、用途や構造に就て考案を練る事が重大視せらるるやうになり、個々の家よりは大經營のもとに大建築——ずつと大きくしては都市全體の如き——が營まれるやうになつたと同時に、藝術思想の發達に伴つて、山を切りくずやうな殺風景な仕事に對しても美觀を度外視する事はゆるされなくなつて來た。

玆に於てまた昔に歸て、土木と建築といふ區別が當然撤廢されるべき形勢をもたらして來るやうに思はれる。

一九二二年（大正十一年）一月、獨逸聯邦中のプロエセンに於ては、高等工學校（他國の工部大學に當る）に於ける學科の區別……teilung für Architectur）と土木工學科（Abteilung für Bauingenieurwesen）とは區別が撤廢せられ、單に Fakultät für Bauwesen となつた。これは營造學科とでも譯すべきであらうか。

この事實は時代の要求をなすものと見て差支ないであらう。

（二）原始的時代の建築

自分は既に建築なる語の意義を論ずるに當て、其大體を發生發達の順序に取扱つた。內容の複雜なものを平易に說明するには此方法に依るが便利である。自分は以下建築そのものをも出來得る限り此の形式に依つて說かうと思ふ。

誰れの句であつたか。Architectur ist die Rhythmische Verkoerperung des Zeitgeistes. 即ち、建築は時代精神の副律的具象であると。此意味に於て、總ての民族の總ての時代に於ける文化の消長は建築に表象せられるものであるから、發生論に記述せられた建築は、單に建築を知らんが爲めに讀む人のみに役立つものでない事を注意せられたい。

偖、最初に人間文化の最も幼稚な時代の建築はどんなものであつたかを見やうと思ふ。

既に述べた通り、建築は獨り家屋のみを指すものではなく、橋も墳墓も門も、其他斯の如き構造物の總てを含むものであり、また古く靈魂の存在に關する信念は、家屋が立派なものになる前に墳墓が巨大にして且つ永續性を帶びた建築になつては居るが、建築の起りは家屋に存し、また家屋のうちに於ても、神に對する信仰の對象として作られた宗教的建築が最も早く發達する場合が多いが、家屋のもとは總て住家に歸着するもので、此章に於ては主として住家の發生と其幼稚時代の狀態に就て述べる積りである。

人は能く原始時代といふ語を用ゐる。これは恐らくは英語のプリミチーブ・エーヂの飜譯であらうと思ふ。これを原始時代と譯するは當らない。總て物の原始といふは其物の最初の出發の一點である可き筈、併も其下に時代といふ語を附して原始時代といふは頗る妥當を欠いで居る。それで自分は寧ろこれに幼稚時代、草蒙時代、原始的時代といふやうな文字を當てゝゐる。

偖其原始的時代の建築はどんなものであるかと斯う考へる時に、其所には二つの見方がある。即ち一は現時の世界に於て最も野蠻の狀態にある民族のもてる建築、他は遠く遡つて極めて遼遠の時代に存在した人間の營爲に就て見る事とである。

一六四二年、和蘭人が最初に濠洲の南方のタスマニアを發見した時、そこに孤立して居つた人種は、世界に於て最も幼稚な文化のもとにあつたものだといふ事が知られて居る。其當時に於て此の人種は如何なる家に住まつて居たかといふに、家らしいものは持たなかつた。それでは全然家なしで所謂樹下石上を宿としたものかといふにさうでもなかつた。多少人工を加へたものを持つて居た。しかもそれは屋根もなく粗末の木の枝を組合せた風除けともいふ可き籬のやうなものを以て周らした地上に過ぎなかつた。

ダーウインが南米のフエジア人の小屋に就て、述べて居るのがまたこれに當つてゐる。即ち「それは大きな圓錐形の乾草堆に似て居る、單に數本の折つた樹枝を地面に突き刺し、その一側が草や蘭の束で不完全に葺かれてゐるだけである。（中略）ヂヨージ・ロードに於て余は是等の裸體の人間の一人が眠つてゐた一つの場所を見たが、それは野兎の巣位の覆ひしか與へられてゐなかつた。」と斯うである。是等が恐らく建築の最初のものであらうと考へられる。

次には總て小屋が出來る順序であるが、小屋として最も低級なものは濠洲土人のそれである。これは樹枝や若木を荒く編んで「しんに」とし、木の葉や草などを寄せて上を被ふた圓錐形

の、圖に示した[illegible]に極めて簡單なものである。（第一圖）



第一圖

勿論斯くの如き小屋の中に始終居るといふわけではなく、彼等の流浪中の一日かそこいらの假の住ひとして用ひられるものである。

此他にもなほ南亞米利加や亞佛利加などにも是れと同樣な幼稚な小屋を家として持つ土人がある。

要するに是らの小屋は鳥の巣と同樣に枝や草などを編んで丸い形に作るものである。西暦紀元前三世紀頃の著作だといはれてゐる、韓非子の五蠹の篇に「上古之世、人民少クシテ禽獸多シ、人禽獸蟲蛇ニ勝タズ、聖人有リ、木ヲ構ヘ作リテ巣トナシ、似テ群害ヲ避ケシム、而シテ民之ヲ悦ビ、天下ニ王タラシム、號シテ有巣氏トイフ」とある。巣とは枝や柴などを折り構へて作つた棲み家を指すもので、こゝに述べた幼稚な人種の小屋の如きを指したものに相違ない。これはその當時實際さういふものがあつたか、或は單なる推考か、今でも市街地の城外に簡單なる竪穴住ひの住民のある支那の事であるから、事實に基いての話と見てよからう。

以上比較して[illegible]るが、ずつと古い人間の遺跡から發見されるものにはどういふ状態にあるかといふと、最も古いところで西暦紀元前五萬年頃のものと呼ばれる舊石器時代のムスチエー期のものが佛蘭西で發見せられて居る。ムスチエー期とはドルドイニュ縣のヴェヅェール河の谷にある多くの洞穴のうち、ラ・ムスチエーの洞穴に從て名けられたもので、其洞穴の形成から述べると、河は時の經過と共に石灰岩を掘り下げ、兩岸に懸崖を形作つた。そして是等懸崖に於ける洞穴は河水が岩の軟い部分を段々に堀込むことに依つて生じたもので、是等が恰も人間の住居に適するものとして殘り、氣候が寒くなるに從つて、人間は探し廻つて此の出來合ひの家を見出したものと想像される。

尤も地質學上からいへば、第四氷河時代に至つて人間は是等の洞穴に住ふやうになつたもので、其すぐ前のシエル期やアシユール期の温い間の家は、タスマニア人の持つそれ位の程度のものであつたと想像され、そして此第四氷河時代のムスチエー期に至て自然の洞穴に住するやうになつたものと推考される。

次で此第四氷河時代も漸次に溫暖な氣候に變つて來て、西暦紀元前三萬五千年頃から一萬五千年頃にかけて、歐羅巴には草地時代と呼ばれる時代が來る。今迄氷に埋れてゐた其平原も、

新しい生物の領域となり、地は灌木や牧草で覆はれた草地と變つたのである。そして其等の動植物が此方面に擴がるに從て、食物なる是等の動植物の跡を追ふて新しい人種が歐羅巴に入つて來、そして古い氷河時代の人種は絶滅したといはれてゐる。

此草地時代はまた後期舊石器時代といふ名を持ち、此時代になると洞穴の內部も多少整理せられ、また別に地上の小屋も持つたものである、と想像される。

草地時代の第一期をオリニヤツク期と呼ぶが、此のオリニヤツク人の洞穴には內部に見事な壁畫がある。それは當時の獸類の繪であつて、それは頗る巧妙を極め、黑、鳶色、赤、黃、白の鑛物質の繪具を用ゐて描いたものである。これが現存する室內壁畫裝飾の最古のものといつてよく、佛蘭西や西班牙の洞穴では今日に至るまで其色彩は依然として保たれてゐる。是等の壁畫の目的は單に美しく見せやうとか娯しみに描いて見やうとかいふ動機に依つてなされたものでなく、彼等の生活の爲めの狩獵に對する一つの禁厭として熱誠をこめて祈つたものであると推考される。總て建築裝飾の古いものは斯くの如く魔術的の意味や宗教的の意味をもつもので、單に輕い意味で美しく見せやうといふやうな動機から來たものではない。前章に於て自分は建築裝飾に付て少しく論議を試みた、今また玆に少しくそれに觸れて見たいと思ふ。建築裝飾の起源は以上の如くに見られるのである、なほ例を埃及建築にとる　埃及の古い寺院の入口には兩翼を持つた球の意匠がついてゐる、如何にも建物にピッタリと適合したよい裝飾である。これが面白いからとそれを今建てる事務所建築に應用したとする。するとそれは甚だ可笑しなものになる。なぜかといふとそれは埃及人に取つては、其生活から到底切りはなし得ない大事な宗教的象表物であつて、或る意味を以てゐるのであるが、現在の吾々の事務所建築には何等の意味をなさぬのみでなく、其本來の意義を思ふと寧ろ滑稽なものになるからである。



草地時代はオリニヤツク期、ソリユードレ期、マドレーヌ期

第二圖

つまりあつたことといふのであるが、[illegible]時代人のもつた小舍はどんなものであつたかといふと、マドレーヌ期の遺蹟からは、其小舍を表すものと考へられる構造の數種が發見されてゐる。これによる暗示を基としこれを現存せる文化の程度の幼稚な土人の小舍に照らして、南亞弗利加のブッシュ土人の小舍のやうな形式のものと、又他に、中央に中心柱を立て周圍に同く若木や樹枝などが地に刺されて、その上方を中心柱に寄せかけて屋根を支へた形式のものとあつたと想像される（第一圖）。其中心柱に寄掛けられた若木や樹枝が垂木を形作りそして其垂木の方向と直角をなしてこれに小さな枝が組合はされゝば、出來上つたものゝ上を獸皮で蓋ふか或は粗い草葺にすることは想像し易い事である。かくして可なり安樂な小屋が出來上る譯で、これは次の時代の新石器時代に一般に用ゐられた型である。新石器時代の斯くの如き小舍にあつては、地面に圓形の竪穴を掘つて、其掘り上げられた土は穴の上の周圍に積上げられ、周圍の垂木形の若木や樹枝は此盛土の上に突刺されるやうになつて居るものである。マドレーヌ期のものが又恐らく斯うであつたと想像される。

即ち草地時代の人間は、横穴と竪穴と二つの住居を持つてゐた譯けである。西暦紀元前六世紀末から五世紀始にかけて支那に[illegible]はれる詩經、其詩經の大雅に「古公亶父陶復陶穴未ダ家室アラズ」とある。陶復は横穴、陶穴は竪穴を意味するものであつて、誠によくこれに當つて居る。

マドレーヌ人が段々と北方に移るや、この南歐西の洞穴住居の記憶を持つて行つて、今日のエスキモー人の建築風を傳へたのであらうか、エスキモー人は非常に興味ある洞窟住居や其他雪地を以て巧に構造される住家を有する。また遺跡から石の燈が發見されてあるが、これはマドレーヌ人が家の中を今日のエスキモー人がやるやうに、苔の燈心を石の燈の中で燃して室を照したばかりでなくまた室を暖めたことを暗示してゐる。

アルプス山に棲むモルモットの一種が、夏になると涼しい山の上に住み、冬は温い山腹に穴居するやうに、或る種の氣候に於ては夏と冬と家を別にするのは全く自然であり、また一方自然の洞穴が漸次に人工的の洞窟に變つて行くのは進化の途に於て當然なことである。

前漢の宣帝の時即ち西暦紀元前一世紀頃以前に出來たといはれる、周末から秦漢時代にかけての古禮に關するものを集めたあの禮記、其禮記の禮運篇に次の記事がある。「先王未ダ宮室アラズ、冬ハ即チ營窟ニ居リ、夏ハ即チ橧巢ニ居ル」と。營窟と

は營造せる洞窟で即ち横穴である。エスキモー人のも營窟である。又槽巣とは薪柴を集めて作つた樓家を意味する。支那の横穴住居は今日でもなほ盛に行はれて居る。天照大神が天の岩戸に隱くれさせられたといふその事から、我邦にも古くはさういふものがあつたらうと想像する人もあるが、神話の記事を以て直ちに大古の風俗を斷定することは危險である。支那の横穴住居の事は後章で述べる事として、茲では冬は營窟に夏は槽巣に居るといふやうに二つの形式の家を持つ事は、舊石器時代から新石器時代へ引きつがれたといふ事を述べておく。

前章で述べたあのアウグスツス皇帝に仕へて建築書十篇の著述をしたビトルビウスがまた其著に斯う書いてゐる、「最初の避難所を作つた時に、或者はそれを綠の枝で作り、他のものは山腹に穴を掘り、また燕の巣と其製法を眞似て泥と小枝で隱れ家を作つた」と、それは確かにさうであつたに相違なく、彼の推考はまた今日の科學者の研究と一致する。

ビトルビウスは茲に燕の巣と其製法を眞似て泥と小枝で隱れ家を作つた、と斯ういふて居る。これもたしかに一面に於て斯ういふ進化を取つて居る。先きに述べた樹枝を編んでこれを「しん」としてそれを樹の葉や草で覆つた家は、誠に小鳥の巣と同じ手法で、その小鳥の巣を地上に伏せたと同じ形である。

此の樹枝や若樹木で編んだ「しん」の上に覆ふ樹の葉や草を風吹きまくられぬやうに、或は屋内と屋外との間の熱の傳達を防ぐために屋根を厚くするやうに、其他なほ此のやうな理由から、雨の少い地に於ては、是等の樹の葉や草を泥で粘ばしけて行く事は當然起り來る考である。これがビトルビウスの所謂燕の巣で、やがては草や樹の葉よりは泥の方が主となつて、草を苆(スサ)として泥に混じ、これを樹枝の「しん」の上に塗り付けて行く方法と代る。此の樹枝を「しん」にして草の苆を入れた泥壁は恰度我邦の家の泥壁の兆をなすもので、是等の壁はまた世界至る所に存する。そして次には此の泥壁の中へ石を混じて樹枝を「しん」として塗り固める事になり、やがては樹枝の「しん」なしに石塊を泥で固めて積んで行く事になる。これは精しくは後章に於て述べる筈であるが、この方式の行はれる時代になつてもまだ小舍は依然として圓錐形をなし、恰度燕の巣を倒にしたやうな、即ち釣鐘を伏せたやうな形をなして居る。

釣鐘を倒にしたやうな圓るい小屋、總て原始的時代の小舍は圓るかつたといふ事が出來る。自然のものは大體に於て圓るいものが多い。地球も大陽も月も圓るい、果物も圓るければ露も圓るく鳥の巣も圓るい。人間の初め作つた小舍も斯のやうにして圓るかつたものである。

[illegible]なかつた。是に地を掘下げて床と屋根の間の高さを増した。掘られた土は掘り下げられた穴の周圍に積まれた事は既に述べた通りである。茲に初めて屋根と壁とが分れた。即ち掘り下げられた周圍に切り立つた部分が壁を構成するに到つたわけである。即ちこの地の中に掘り下げられた壁が、やがて地上に立てられる壁の基をなすものである。此の如く地下に掘り下げて床と壁とを作り上に屋根を設けた住ひが、先きに述べたやうに洞穴のやうな横穴の住ひに對して竪穴住居と呼ばれるもので、此の圓形をなせる竪穴の遺蹟は我邦にも存する。併し何分にも遺蹟となつては地面が窪んで居るといふに過ぎないから、長い歳月の間に自ら煙滅し易く、土地の開墾に伴つても其形跡を失つた筈で、どこにでも見られるといふ譯にも行かぬ、本土では陸奥の一部にあり他は北海道から千島樺太等に存する。大さは徑七八間位から小にしては二三間、深さは五六尺から一尺に達しないものもある。大概群集して當時の住居配置の狀が察せられるといふ事である。考古學者に依つてこれは先住民即ち石器時代の民のものだといはれてゐる。

　斯くの如く小屋は初めうちは圓るかつた。圓から四角にうつるのは相當の年代を要した筈である。古代の希臘であつた地に[illegible]つて行く道程にあるものと見做す事が出來る。人間が四角を用ゆるやうになつたのは、即ち直角の觀念が生じたのは相當に文化が進でからだといはれて居る。この觀念の生じた原因に付ては人に依つて種々の說をなして居り、且つ物の原因を唯一つに定めてしまう事は不當であつて、一つの事件が發生することにはそれには幾つかの動因が働いて居るに相違ないが、併し乍ら此の直角の觀念が生じたといはれる有力な說は、物を織る事から來たといふ說である。即ち竪の糸へ横の糸を織り付けて行くと、其の經緯兩方面の糸は必ず直角に交る、そこに自ら直角の觀念が生ずる、と斯う說かれある。

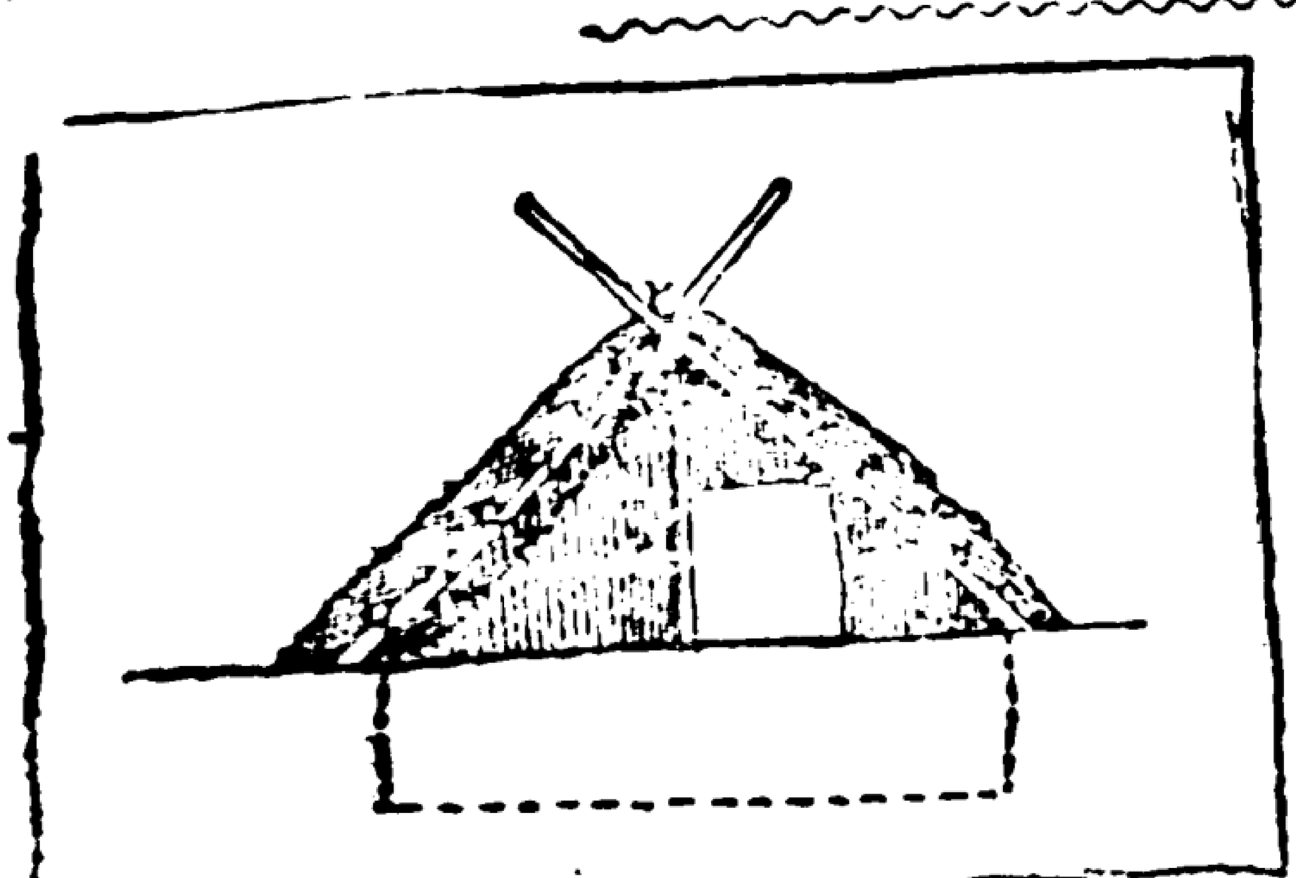
　直角の觀念が生じても、これを自由に描き出す事は文化の比較的幼稚な時代には極めて困難であつたに相違ない。そして種種な試みと經驗とでやつと斯ういふ事がわかつた。即ち或る長さの三倍と四倍と五倍のもので三角形を作る、解り易くいへば各邊を三尺と四尺と五尺となる樣に三角形を作る、さうすると三尺と四尺の邊の間に狹まれた角が直角をなす。この事を知つた人の歡びは果してどんなものであつたらう。若し一人の人が最初これを發表したのであつたならば、恐らく其人は魔術者と

見られたかも知れない。聽ては此の不思議にしてしかも生活上重要なる幾何學は一つの魔法として神に仕ふる長老達より外、一般民衆の知る事を許されなかつた事であつたかも知れない。我邦の大工は今でも「三四五(サシイ)」といふて此の三角形を木で造り、家の建築の當初にこれを用ゐて地上に圖取を作る。

織物が出來たのは新石器時代になつてからだといはれて居る。從て四角な家の出來たのは新石器時代からであるべきだ。新石器時代とは舊石器時代に對する名稱で、其の舊石器時代は地質學上の前世紀、即ち第四紀層中の洪積層即ち東京地方に於けるあの赤粘土の層に屬するもので、人は木の實や珠果や塊根や狩獵や漁獵とに依て生活をして居たといはれ、石器として用ゐたものは打製石器、即ち石を打ち缺いて尖らして刃をつけたもので、これを用ひて物を切つたり刺したりしたものである。新石器時代とは地質學上では現世紀に屬し、第四紀層中の沖積層で、東京地方では赤土の上にある黑土が此の層に屬するものである。此の時代には馬、犬、羊、山羊などの動物を馴らしてこれを家庭生活に利用する事を知り、食用として大麥、小麥、黍などの穀物の栽培、林檎、梨子、葡、木苺などの果樹の保護が起り、羊毛及び植物の纖維を紡いで物を織る知識が出來て、是等の材料として亞麻の栽培を生じ、日常の武器として弓の使用を知り、陶器の製作が始められ、死人の埋葬は今や儀式的重要を持つ一事件となり、これと宗教思想の發達に伴つて、だんだんに巨石建造物が發達し行く基をなした。此等の建造物に付ては後章に述べる。

新石器時代といふ名稱は、舊石器時代の石器が打製石器であるのに、此時代の石器は表面が平滑に磨かれてあつて、磨製石器と呼ばれ前石器よりも時代が新しいからであるが、我邦のもののやうに此期に入つて後も打製品をも用ゐてゐた土地には不適當な名稱である。兎に角、此時代から農耕時代に入るのである。

此時には既に直角の觀念の發達し居つた事は既に述べた。圓い竪穴住居の外に長方形の竪穴住居が生じた。



第三圖

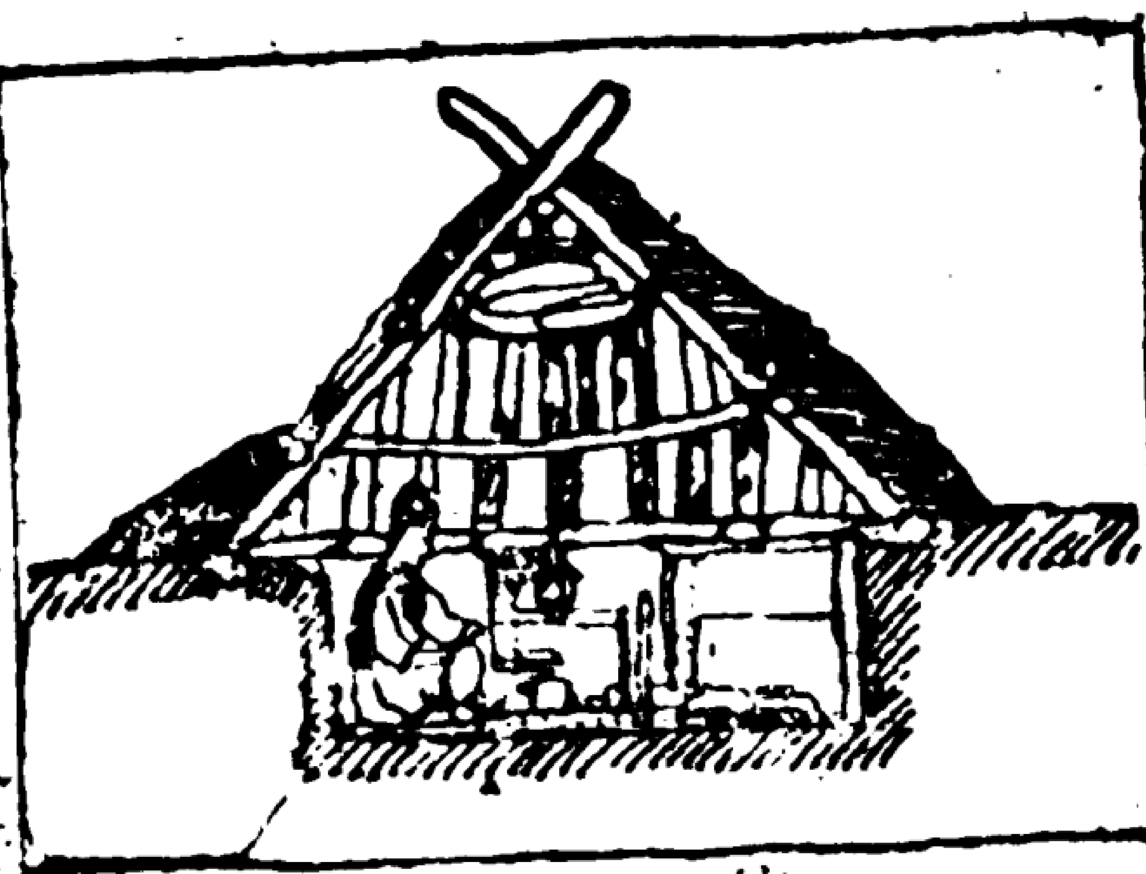
こゝに我邦の匠家に昔から言ひ傳へられた「天地根元の宮造り」といふものがある。これは先づ長方形の穴を地に掘り、其の長方形の兩端の中央に當る所の各々柱を立て、兩柱の上に桁を渡し、その桁の上に持たせて左右の地上より木を斜に渡し架ける、これを合掌(ガッショウ)と呼ぶ。此の合

横木を架け渡し藁を以て合掌に縛り付く、これを棟梁と呼ぶ。合掌の上部は十文字に交叉し、その交叉部に横木を渡して縛り付く、これを棟木といふ、斯くして棟木より桁梁の上へかけて垂木といひて細き樹枝や眞竹の類を縛り付け、上を藁で葺いたもので、其両端に生ずる三角形の壁をなす所には蓆を垂れたものだといふ事になつてゐる。そして是等の屋根勾配は孰れも地平線と四十五度の角度をなし、從て左右の合掌は九十度に交り、屋根は二等邊直角三角形をなす。複雜なる角度の觀念の發達しなかつた時代には、此の勾配が最も簡單で取扱ひ易かつたものである。なぜならば、底邊の二分一の高さを底邊の中央より立つれば此の形を得るからである。天地根元の宮造りには多少の想像説もあるであらうが、大體に於てプランが矩形をたせる竪穴住居の形式を物語る。

朝鮮に現在する竪穴の形式がほゞこの構造に一致する。今茲に人類學雜誌第二十九卷第四號より太田天洋氏の報告を借用する。前略、竪穴は朝鮮各地に分布して居ると說き、今室は其形式に於て第一オウム、第二ヨクチョー、第三チイプンサランの三種に區別して見る事が出來る。第一は朝鮮語オウームなるも漢譯すれば芽幕即ち芽の出る幕で、日本に於ける室即ち野菜類を

一尺位掘下げて、一隅乃至二隅に柱を立て……て其上には木を渡いて、又其上から茅を以て葺き、下方に土を防ぐ爲めの護石を配列して屋根が出來上てある。……第二ヨクチョーは漢譯役所であつて、日本語で云へば役場即ち工場又仕事場といふ意味である。圖の如く前のオウームが少し進化したものと見て形式は殆ど同樣といふて差支ない。……朝に八時頃から夜は十二時一時頃迄仕事して此に出臥するのである。而して仕事は草履作りであつて、穴の中の濕氣のある所でなければ草履が丈夫でないといふ迷信があるからである。……第三チイプンサランは漢譯すれば深舍舘、サランは客室といふ意味でチイプンに深いといふ義、要するに深い客間といふのである。下層住民の部落にあるものであるが、京城附近に於ても見出すことが出來る。つまり村落の中に共同的にこれを一個所作るのである。貧乏村であつて何れの家にも客間を持たぬ者等が共同的に使用せんが爲めに作つたのである……正月などは十人二十人の若い者が寄合つて、ランプを燈し、太鼓を叩き謡を唄ひ笛を吹きなどして、夜の十一二時までも娯樂に耽つて居るのである。彼等はまた此所に博奕を打つこともするが、平常に客人を接待する爲めに共同的に使用するのだといふて居る。圖は同誌に依つ

たヨクチョーの橫斷圖を掲げたものである。



それが如何に天地根元の宮造りに似通て居るかは一見して明瞭な事である。我邦に於ても、自分の幼い時分には、今日の所謂水平社四部落に此種の草履造りの「むろ」を見圖た。是等の竪穴の形式はまたエスキモーの夏季に用ゐる小舍に髣髴たるものである。斯の如き竪穴住居は支那内地に於て徐民部落に各所に見らるゝ所のものである。尤も北海道色丹や樺太アイヌの現今の穴居は、矩形をなせる竪穴の周圍に木の掘立柱を立て、其上に屋根を作つてゐる。

扨て話は少しく前にもどつて、舊石器時代の最後なる草地時代から農耕時代に入る中間の過渡時代に森林時代といふものがおかれる。歐羅巴の此時代は約西曆紀元前一萬五千年頃と考へられてゐる。氣候が次第に溫和になり濕氣が增して來るに從て、森林が發生して來た時代といふので此名がある。また一名をアジル期と呼ばれる。

アジル期になると人間は段々と水に引きつけられたやうに見える。ノールウエーやスヰーデンに此期の遺物が殘つてゐる。それ等によれば、住居は湖水の中に止められて、非常に大きな筏の上に建てられた事を示して居る。彼等が何うしてこんな妙な家を態々建てたのかは判然しない。其頃は恐しい猛獸はもうゐなくなつてゐたからして恐らく人間どうしの敵を防ぐ爲め水中に避難所を建てたのであらう。

この事から引いて新石器時代になれば、人間は水中に杭を打ち込んで其上に所謂杭上家屋を建てる事になる。瑞西や北伊太利地方には明かに幾多の湖上生活の跡が發見されてゐる。又アイルランドやスコツトランドに於もこれに類似した湖や沼などにある小島の上に住宅の跡が窺はれる。嘗て信濃の諏訪湖の減水した折に湖底から杭上家屋のあとが發見せられたといふて考古學者に研究された事があつた。希臘の歷史家ヘロド、ス（西曆紀元前四九〇年—四〇九年）は、バルカン半島のルーメリヤに於けるプラシアス湖の湖上住宅に付て、住民は高い杭で支へられた床の上に住んでゐる」と書いて居る。杭上家屋は新石器時代から銅器時代の初期頃迄此の地方に於て用ゐられて居たと想像される。瑞西や北部伊太利の杭上住家に關しては次のやうな研究が發表せられてゐる。「是等の家屋を乘せてゐる杭には時には割木を使つてゐる事もあるが、大抵は種々の木の皮附きのまゝの丸太を用ゐて居る。木の先端は石斧——後期のものは背銅や鐵の斧——で尖らして岸から程遠からぬ砂や泥のうちに

打込んでゐる。杭頭に皆水平に揃へて上に板か丸太を取付けて梁としてゐる。其取付方も時には木の釘を用ゐたものもある。又構造を堅牢にする爲めに横梁を使つて床下の所で杭をつよめてゐる部分もある。杭の一番外の列のものには種々の出來事の防禦物として役立てる垣樣の被覆物が結付けてある。又湖底が深い所には粗朶で沈床が作られてある。當時上にあつた床の上には泥や粘土や砂利などで作られたコンクリートやうなものが硬く打たれたやうになつてゐる。そして家は大抵矩形に出來てゐるが時には圓形のプランをなすものもある。家の壁は我邦の壁のやうに粗朶で小舞を編んでこれを「しん」にして泥壁を作つたり、藁でかこつたりしたらしい。其理由は、今迄發見された燒けた粘土の大きな片の中に、粗朶の編んだものゝ入つて居るのがあるからで、そして又一方から是等の家や部落が燒け落ちた事が證されもする。或場合には壁は粗朶から構造されてゐたと見てよい。各家には必ず三四個の大きな平たい石で出來た竈を備へてゐる」。圖は是等北伊太利や瑞西等の水上家屋の想像圖である。(第五圖) 或學者はベニスの市街を水上家屋の村の傳統的形式であると說いて居る。



第五圖

此の杭上式の家は現今に於ても世界の各地に散在する。圖は日本に最も近き南洋の杭上家屋である(第六圖)。自分の見たものはシンガポール附近のものであるが、必ずしも水中に杭を打込んだものとのみとは限らず、水邊に立てるものもさうであるし、また全然陸上にあるものもさうである。



第六圖

我國に於ける嚴島神社の社殿、琵琶湖に浮べる堅田の浮見堂の如き、是等杭上家屋に對して極めて濃き似寄りを持つ事には誰しも氣付く事であらう。似寄を持つ許りでなく、構造上に於て杭上家屋に相違なく、伊勢の神社の如きは陸上にありても杭上家屋には相違ないのである。

人々のいふ如く、其家屋の形を以て伊勢神宮を所謂天地根元之宮造りと直接の關係あるものとし、入口の有樣と妻入(東京附近の屋根は四方流れになつてゐるが、最も簡單な屋根は二方流れになつてゐる、その流れの勾配の附いて居る方を平(ヒラ)といひ、これと直角をなして屋根の下に三角の壁を形作る方を妻といふ、蓋し端(ツマ)のあて字である、その妻の方に入口あるを妻入り

といふ）の形式を以て、出雲の大社を天地根元之宮作りと直接關係ありと說くのも自分の取らざるところである。

勿論、所謂天地根元之宮造りなるものは、多少是等の關係を說かんが爲めの作意ありと見て差支ないやうである。

原始的時代の建築といふ題下の話は玆に止め、なほ不充分のところは次章に、これを補ひたいと思ふ。

（三）建築の基本的三方式及びそれからの進化と分化

前章に於て原始的時代の建築に就て述べた折、其の古いものは樹枝や若木を編んで作つた圓錐形の小舍と洞穴とであり、樹を編んでそれを「しん」として樹の葉や草で上を破ふた小舍からは、其樹の「しん」を中に、草を莇（スサ）（總て濃き泥狀の物質に混じて一體として密着せしめる助けをなさしむるもので纖維質のものを細かく切つたものを指す、スサ又はツタといふ）として入れた泥で包む小舍が生じ、軈てはそれが「しん」を用ゐずに石片と泥をねばして積上げて行く小舍への途をとる事を述べた。洞穴も最初は自然の横穴であつたが、軈ては人工的に刳りぬいた洞窟、即ち禮紀にいふ營窟となつたものである。

尤も以上の事項は、考古學者の所謂先史時代から現代への連鎖的考察である。

地質學者や人類學者は、舊石器時代を含んで其の時代迄を[illegible]世紀に、新石器時代からを現世紀或は現代と呼び、考古學者の多くは、石器時代を先史時代、これに次で傳說のみあつて記錄の不充分の時代を原史時代、次を歷史時代と呼ぶ。勿論是等の時代別は判然と期間を限定し得るものではない。自分の今玆に現代と呼ぶのは所謂先史時代以後を總て含むものである。

現代に於て、最も原始的の建築方式と見做れる可きものは、木を編んで作るものと、泥を固めて作るものと、穴を刳りぬいて作るものと、此の三つである。

一般動物に於ても、自己の分秘物を以て自己を包むものの外は、其棲家は大體に於て此の三つを出ない。先づ編むものに就て考へて見ると、直ちにうなづかれるものは鳥の巢であり、鳥類は巧みに樹枝や草などを編んで其巢を營む。ギニア地方の猩々なども亦た此の種の巢を作るといふ事であり、或種の魚類や鰐なども同じ方法で棲家を作るといふ事である。

次は刳りぬく方式であるが、これに付て狐や兎の事は誰もが知るところであり、河獺、野鼠、モルモットや、昆蟲類にも、或種の蜂の如きものがあり。その他にも數多い。泥を固める方式のものゝ、誰れもが知つてゐるのは燕、蟻、土蜂などで、其

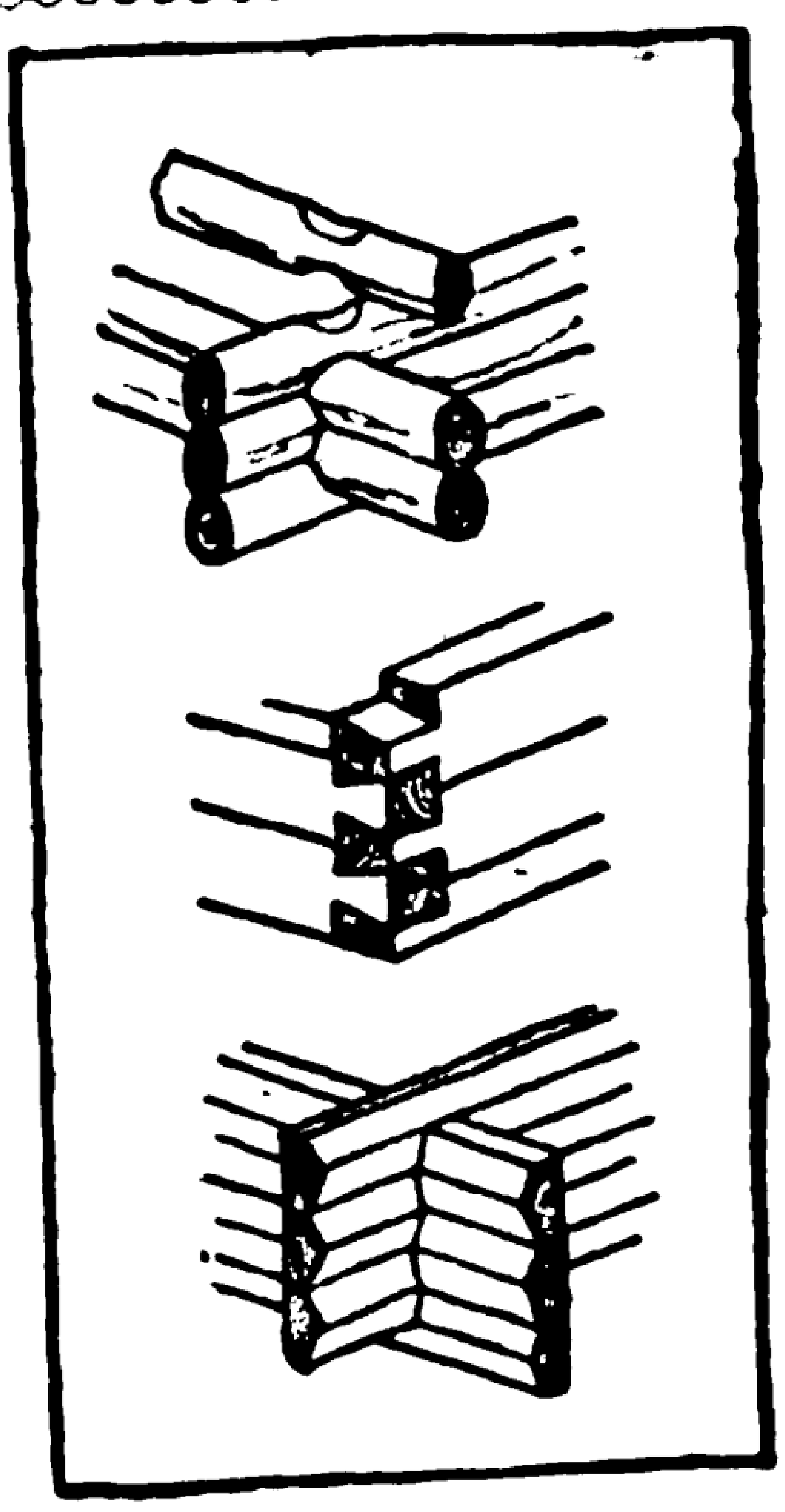
他獸類にも海狸のやうなものがある。

羅馬帝政初期の建築家ビトルビウス（前出）が、人間が最初の避難所（シェルター）を作つた時、或物は樹の枝で造り或るものは山腹に穴を穿ち、或者は燕の巣をまねて泥を用ゐた、と說いて居るのは、蓋し羅馬の領地であつた四隣の地方の土民を觀察しての事であつたらうが、當を得て居るものと思ふ。

此の編む方式と固まらせる方式と刳りぬく方式との三つを、自分は建築の基本的構造方式と呼ぶ。そして、是等三つの方式は、各其地的環境の如何に依つて生じた筈である。即ち樹木の多い地方とさうでない地方、加工するに便利な土質とさうでない土質、雨の多い地方と少い地方、まだ他にもかういふ關係があるであらうが、是等の方式の發生は各斯の如き環境の支配を受けたものである。手頃の自然石を積上げる事位は早く知つたであらうが、煉瓦を積むには泥と一緒に用ゐられた筈である。そして總て是等の家に於ては既に述べた通り屋根或は天井と壁との區劃はつかなかつたもので、壁は最初地下に掘り下げられた竪穴の崖として生じ、やがてこれが地上に立ち上る壁への途をとる。

在來、木造・石造・煉瓦造といふやうに、何々造の建築といつて構造的に分類してゐる方法は、孰れも壁に就ての問題から來て居る。今自分の茲に何々式と呼んで說明を進めて行かうとするのもまた主として壁に就ての問題である。

先きに述べた通り、若木や樹枝を以て圓錐形に編んだ小舍は、軈て矩形をなせるそして大きな樹を編み組んで作る建築に進化するものであるが、此の編


第七圖

む方式から二つの式が分化する。即ち、其一は井籠組式で、他は架構式である。或はもつとくだけて一方を校倉式他方を組み立て式といつた方がよいかも知れぬ。

先づ井籠組とは圖の如く木を組み上げ行くもので、英語の log wall がこれに當る（第七圖）。樺太や西比利亞などに見るあの横に大きな木材を組合せながら積上る方式、これの最も手近なのは北韓にある。森林地方には世界の各地に散在する。若木や樹枝を大ざつぱに竪に編んだものから樹幹を稍正しく横に編んだものに進化する。初めは樹幹を丸太そのまゝにて組合せ、其間隙を草や泥を填充する事に依つてふさいだものであつたが、次には上下になる材の合肌を適當に削り、組合せの[illegible]

を缺き取つて積み立て、其肌の間の細そいすきまは苔の如きものによつて塡充したものである。樺太、西伯利亞、北韓等にあるものは此の式で、帝國ホテル裏の交詢社の建物がまたこれに似せて造つたものである。內地に古來校倉として存するものは、其橫材を三角形に（正しく云へば六角形）に削りて組み合せたものである。校倉は今日奈良の正倉院や東大寺の法華堂、おなじく手向山八幡、京都の東寺、高野山金剛三昧院などに見られる。校倉といふ名稱は、拜む形式に「掌を合せ手を交へて」といふ事があるが、その手を交へてとは指を組合す事をいふので、木を交へて造つたものであるから斯ういふのである。古書の朝倉の宮などゝいふは、全く校倉の轉化で、井籠組の宮殿であつたらうなぞとの說がある。瑞西地方に現在あるものは四角な角材を組合せたものである。（第七圖上圖は樺太西伯利亞等のものを中圖は瑞西地方のもの下圖は我邦の校倉）井籠組とは橫材を矩形にだんだんと積んで行くから名けられたもので、校倉とはその積んで行く木材の四隅の組方から名けられたものである。

我邦の神社や樓門などに見られる或種の板壁、それは太い丸柱の間へ厚い板をおとしこんで行くあの壁の方式、柱へ竪にほられた溝へ厚板の端を嵌込み乍ら落してだんだんに積み上つて行く板壁の形式を、これは勿論架構式と混交したものではあるが、自分は井籠組の分化と見て居り、又希臘神殿などの石壁の形をも此の井籠組と同じ手法と見るのである。これは希臘式の神殿の壁——あの形式の石壁だけに對してだけいつて居るので、恰度四角な橫材を井籠組に積んで行くと同樣に、其厚さは壁の全厚だけある大きな石の正しく正方形に切られたものを橫に整然と積んだあれである。此の井籠組からの直接の分化ではないが、同じ手法と見る可きである。羅馬のものになると最早、外觀は希臘のものと同樣であり乍ら、其內部は煉瓦やコンクリートからなり、單に外部だけに石材を貼り付けた形式のものが多くなる。

總て人類文化の過程に於て、或る製作物に對する技巧の習熟さは總てその慣習的手法を他の材料の上に繰返し行くやうになるものである。例へば石器時代の石槍の形は銅器時代になつてもこれに似せて銅で作り、鐵器時代になつても其慣習形式を繰返して居るが如き、同樣に矢の尖端に付けられる鐵の鏃が石器時代の石の鏃と全く同形であるが如き、あの陶器の水瓶、それは直徑に比して背が高く、細い耳形の「とつ手」がついて居る、そして口の鶴の首のやうになだらかに曲つてゐる、所謂[illegible]瓶といはれるあの水差しなどは、其の形の起りが銅器に發して居

る事を明瞭に物語るもので、今日これを作つて居る人には決して銅器を模造して居るといふ意識は毫も働いてゐないほど全く陶器に其慣習的形式が移つたものである。建築にも全體として、或は其部分々々に於てさういふ過程からなり立つた所は中々多い。希臘の石の神殿は木造の神殿そのまゝの形を傳へて居る（壁に對しては泥煉瓦を積み上げたものから來たとの說をなすものもあるが、自分の前に述べて居るのは石積の手法に付ていつて居るのである事を呉々も注意せられたい。）高野山の結城秀康の墓、それは堂の形をなせる石造の建物であるが、それは其隣りの秀康の墓と同じく、木造家屋その儘を模造して石材で組み立てゝ造つたものであるが、若し其の時代に外國建築の影響などなしに、我邦に石造建築が勃興したならば、あの形などがそのまゝ石造に代つて居たものであらう。勿論この話は井籠組とは無關係のもので、或る製作物に對する技巧の習熟さが總てその慣習的手法を他の材料で作るものゝ上にも及ぼして行くといふ事の例としてあげたに止る。

此の井籠組の手法は間もなく行きづまつて、遂にそれより何等の進化をも齎らさず、石のものもたゞやたらに大きな石で積む位になつたものである。その例としてこれは羅馬時代に入つた後の事ではあるが、小亞細亞シリアのバールベックの大神殿の如きは、一丈か十二尺に幅一丈か十一尺、そして長さが六十尺以上といふやうな、石の大角材を用ゐて居る。これは大なる石材で積んだといふだけで、原理から見て進化といふ事は出來ない。

次ぎは編む方式から進化し分化した他の構造、即ち架構式或は組立て式といふ方式に付て述べやう。

圓い平面から四角な平面に代り、壁が出來、雜然と編まれたものが整然と規則正しく編まれる事になると次のやうになつて來るのは當然である。それは丸太の柱や桁やなどで大體の家の形が組まれ、その組み合はす處を繩で結んで、斯うして先づ骨組が出來る。そして其の骨の間の壁の部分を作るためには、其間を草や葉や皮などで編んだ蓆のやうなものでふさぐか、或は以上の骨組となつて居る力材の間を、小枝や葉や皮や竹のやうなものを以て縱横に編み組んで、今日でも我邦に於て最も多く用ゐられて居るあの泥壁下地の小舞のやうにし、その上に泥を塗る、とかういふやうに發達する。此の小舞を中に包んだ泥壁の形式は前にも述べた如く世界中到る處にある。以上の如く力材を以て建築の骨組を作る方式を架構式と呼ぶ、組み立て造り或は組立て式といふ文字は意味に少し不明瞭のところがあるが、平易な文字に於ては斯うも呼んで居る。

架構式に於ては當然、骨と肉或は骨と皮とは別なものになる譯で、建築の如き構造物にあつてはその骨組に依て、床にかゝる荷、屋根の重さ、吹きつける風力、地震其他斯ういふやうな總ての外力に耐へ、夫等の骨の間を他の物質に依つて塡充するか或はその骨を内に包んでこれを他の材料で被覆することが最も合理的でまた經濟的である。前者を「しんかべ」と呼び後者を「おほかべ」と呼ぶ。

架構式の話は大體こゝにとゞめて、其進化に付てはこれを後章に讓る。

先きに述べた、木を編んで作る家と泥のやうなものを固まらして造る家と刳りぬいて造る家のうち、其の編んで造るものに付ては概要を既に述べた。次には固まらせて造るものに付て述べやうと思ふ。

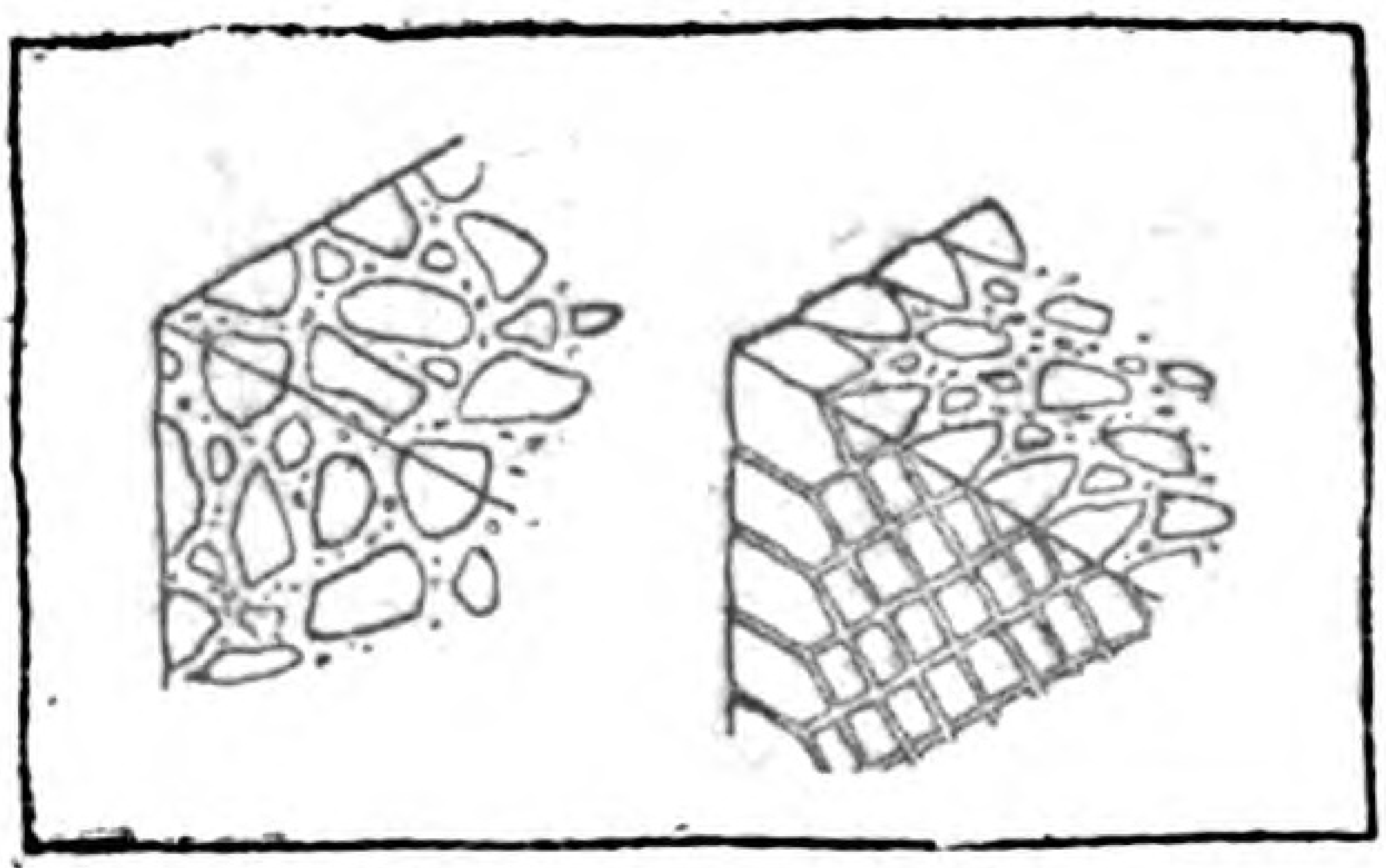
固まらせる方式のうち、最も簡單なるものは、最初に泥の軟かい一塊り、それは兩掌で持てるだけの一塊りを地上におく、次にまた同樣な一塊の泥を前の隣りにこれと接しておく。斯樣にして行つて、結局地上に圓く泥の環狀を作つて其乾きを待つ、これが固まつたところでその環上にまた泥の軟い塊りを一つ宛粘しつけて載せならべ、圓い環の高さを增す、その時第二番に載せる泥の環は第一のものよりは稍々内方に傾かせてつけるのである。斯うして更に其の固まるのを待て、第三の環はり内側に傾かせるやうにして粘し付けて行く、斯の如て行くうちに結局椀を倒にしたやうな形が出來上る、これを球蓋（ドーム）と名ける。世俗で圓頂屋などゝよぶが餘りよい名稱ではない、また圓屋根といふ事があるが、これはこれから先きに述べる穹窿（ボールト）と誤り易い。勿論これを泥だけで積み固めるよりも、中に手頃の石塊を積込んで行つた方が、工事にも便利であり、耐久的でもある。此の石塊を入れた、球蓋は今日でも、地方に依つては土民の家に盛に用ゐられつゝあり、最も多くは西亞細亞地方の民家に存する。

次に此の固まらせる方式の他の形は圖のやうに崖に沿ふて作るのである。先づ垂直に立つ崖の面に對して軟かい泥の塊りをアーチ形に粘しつける。そしてその乾き固まるを待つて更に第二番目の泥を此上に粘しつける。併したゞ粘しつけて行つたの



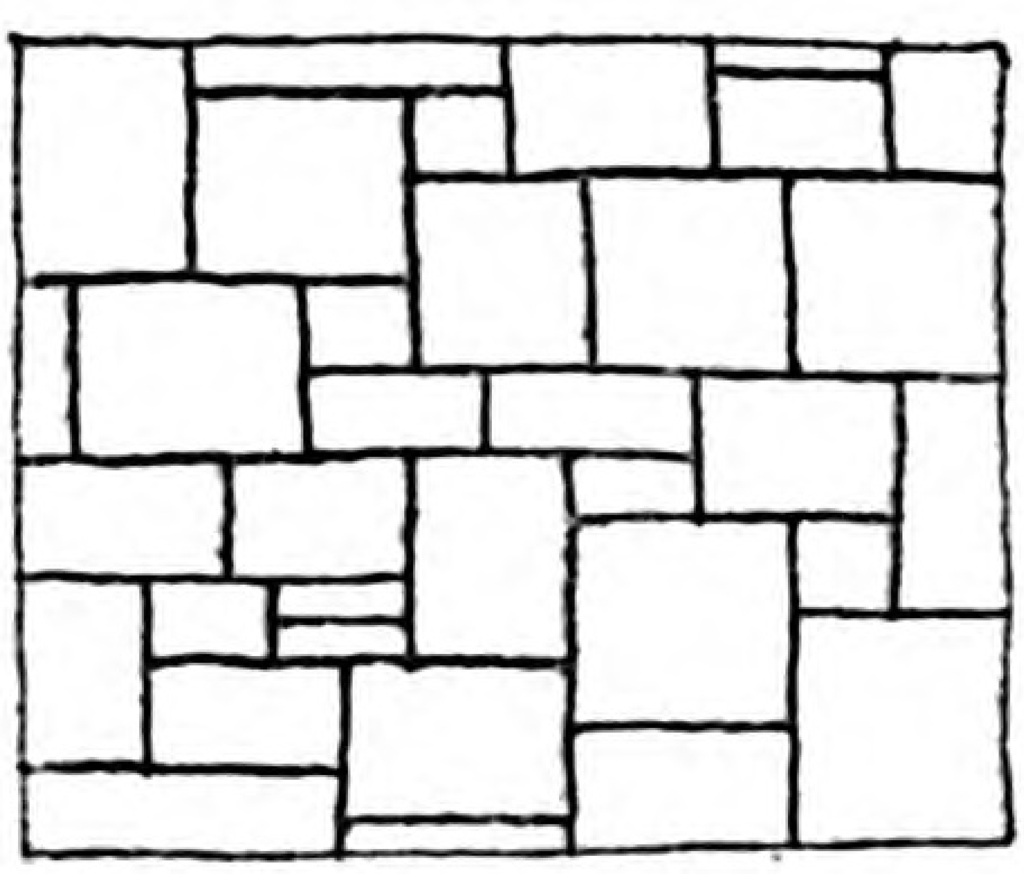
第八圖

では、軟い泥の事であるから乾き固まる前に重力の爲めに落下してしまう。それを防ぐ爲めに、泥を置くときに圖の如く勾配をなして斜に傾かして前の固つたもの丶上へ積んで行く、これを繰り返して行く間に、自然と筒形の屋根が出來る。(第八圖)これが穹窿（ボールト）と呼ばれるものである。最初は崖先きに作つたものが、やがては崖でなく垂直な壁を築いて、これに穹窿形を粘しつけて行くやうになる。勿論此方式のものも其内に石を混じたものがある事は先きに球蓋の所で述べた通りである。是等球蓋も穹窿も軈ては其下に垂直の壁を持つやうに進展する。


第九圖

偖て此の固まらせる方式からどんな進化と分化との途をとるかといふに、そこには積固め造り（或は積立て作り）と練固め作りとが出來て來る。

先づ積固め式の方を述べる事とする。泥の中に石塊を入れて固めて行つたのが軈て石塊と泥とを以て粘しつけて積み固める事に代り、更に石塊を積むに其間に泥を用ゐる方法に代つて行く、即ち泥が主體で石塊が從體であつたものが、石塊が主體で泥が從體に代る。これが積固め式の一つの典型である。文化が進んで石材が矩形の立方體に切る事が出來、また他に粘着材の發見があると、これが整然たる石積へ進展の途をとる。しかも此方法は前の希臘式のやうに大石を間に何等の粘着材を用ゐずに井籠式に積むものとは異り、小さい角石を粘着材に依つて積んで行くのである。羅馬建築の Opus incertum と Opus reticulatum との比較はよく此間の關係を物語る。Opus は「工事」を意味し、incertum は「不確か」、reticulatum は「網目形」を意味す。即ち圖に見られる如くである。(第九圖左はインセルツム右はレチクラツム)。又西歐羅巴の中世紀に於て行はれたる石積の典型がまた同樣の進化に基いたものである。(第十圖)羅馬のものは粘着材として火山灰を用ゐ、中世紀のものは石灰を用ゐて居る。石灰の使用は極めて古くから知られたもので、石灰石を燒けば其内の炭酸瓦斯を排出して所謂生石灰を得、これに水を注げば粉末の狀態にて所謂沸化石灰を得此の沸化石灰を水にて充分練合せて使用すれば空氣中の炭酸瓦斯を吸收して硬化し、原石の固さに復さうとするものである。これを利用して粘着材に用ゐるものであ


第十圖

る。火山灰の事は後に説明する。

積固め式の他の典型が、また次に述べるやうに固まらせる方式から分化する。それは泥を柔い狀態に於てべたくと粘し付けて行く代りに、其泥を固まらせてこれを以て積み上らうとする考へが起つて來る。そしてだんくと泥のうちに苆を混じて充分に練合せ、それを廣さ一尺四方位、高さ二寸程の底なしの木箱に入れて立方體に作り、直ちに箱をぬきとつて其儘陰乾(カゲボシ)にする。そして固まつたものを集めて、これを薄い泥汁で粘し付け乍ら積み上げるのである。要するに燒かない煉瓦を積むと思へばよい。これは生活程度の低い、そして近代科學の行き亘らない地方で、降雨の少ない所では今でも用ゐて居る。手近なところで支那内地では盛に用ゐられてゐる。古い所では古代埃及の古王國時代のマスタバと呼ばれる貴族の墳墓がこれから出來て居り、今になほ存して居る。かういふやうに燒かない煉瓦で積む壁であるから、其壁の厚さはずつと厚くする必要がある。やがて泥を固めてこれを燒くと固くなり、そして力も強く永續的のものが出來るといふ事を知るやうになり、玆に於て窯燒煉瓦が出來た。支那では一般に煉瓦の事を磚・塼・甎といひ、燒かない煉瓦を坭磚・土磚といつてゐる。

燒いた窯燒煉瓦も最初のうちは中々貴重なものであつて、これで壁全體を積むといふ事はなかつた。依然として中味は[illegible]煉瓦で積み、外側だけを風雨に耐へるやうに、そしてまた外觀をよくするために煉瓦で積んだものである。そして其等の煉瓦の間の粘着材（英語で Mortar といひ日本の匠語では「トロ」といふ」）には土瀝青(アスファルト)を以つてしたものである。また石灰や火山灰の知られなかつた時代であるから。

即ち泥の煉瓦を積むには薄い泥汁を用ゐ、燒いた煉瓦を積むには土瀝青を以てしたものである。古代西方亞細亞、即ちバビロニアやアッシリヤあたりでは、其宮殿建築の壁が、「しん」は泥煉瓦のそして皮は大理石や、燒いた煉瓦から成る壁で出來てゐた。

是等の壁の外側に積む燒いた煉瓦に裝飾として何か模樣を出したいといふ考へから、それに浮彫を施して燒く事になり、更に其上に釉藥を掛けてそれで色彩を施すことになつた。支那では漢時代に浮彫をした塼があり、又世界的に見れば此の浮彫を施した上に釉藥を掛けて寄せ貼りにして、大きな形に動物や文樣を表はしたものが古くアッシリヤ時代に既に存する。

是等の裝飾的の燒物はTerra(テラ) Catta(コッタ)と呼びならはされてゐるテラは伊太利語で「土」、コッタは同じく「燒きたる」といふ語義で、「燒いた土」であるからこれを廣義に解すれば陶の種類に屬

するものは総てテラコッタといはれるべき筈である。然し煉瓦用の陶の大きなもので裝飾的のものに附せられる名稱である。

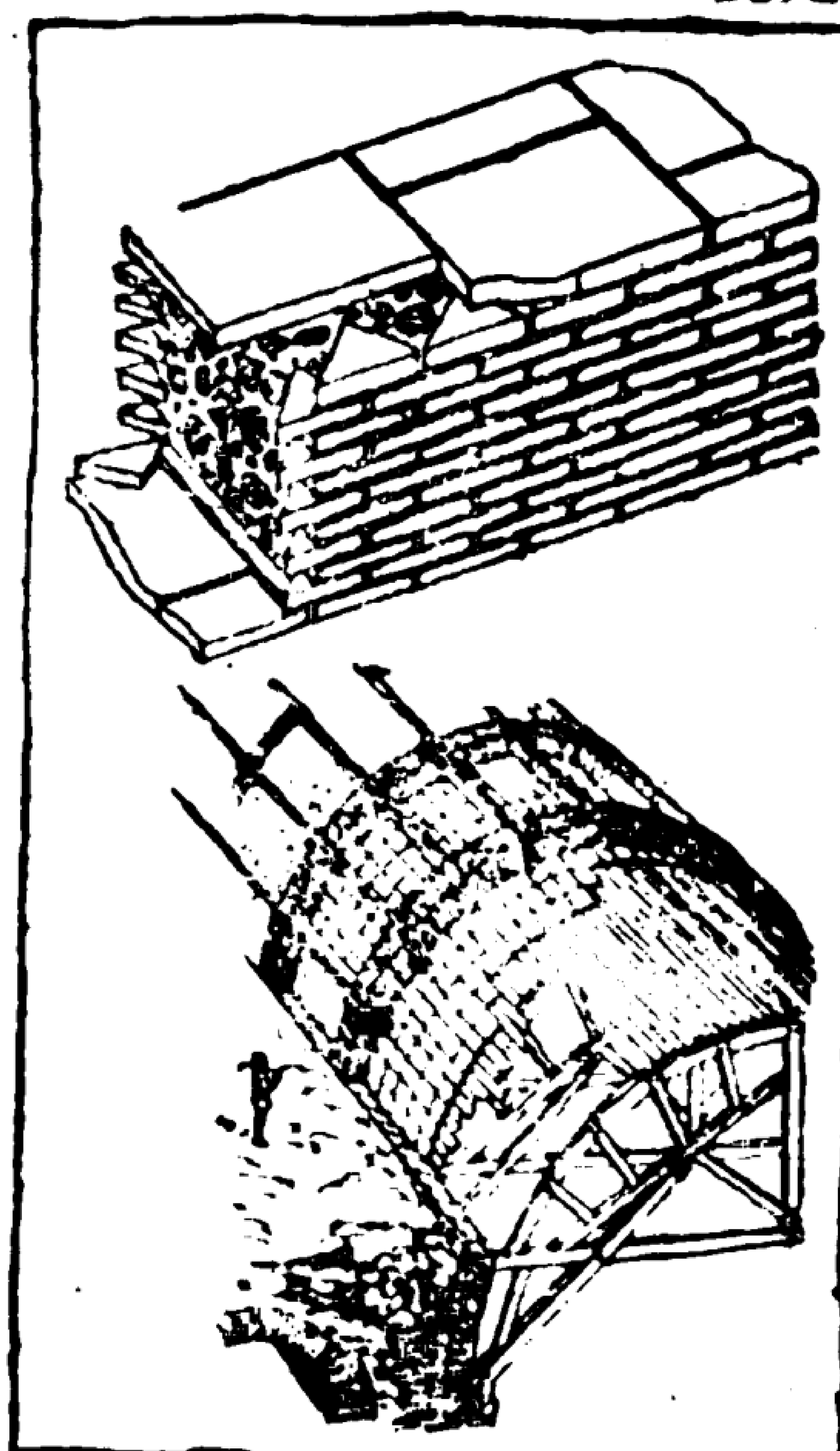
兎に角、斯くの如く燒いた煉瓦が使はれるやうになつても、最初のうちは壁のしんは泥の煉瓦であつたが故に、壁の厚さは頗る厚いものであつた。例へばアッシリヤの宮殿のうち、コーユンヂクのそれが幅二十七尺の室で十五尺の壁厚を有し、ニムロドのそれが幅三十二尺の室で廿五尺の壁厚から出來てゐたといふ狀態である。軈て此方法が段々進んで遂には壁はしん迄燒いた煉瓦を以て積むことになる。

自分は先きに固まらせる方式が積固め造りと鑄固め造りとへ分化し進化し行く事を述べ、今茲に積固め式の壁に就て説明した。次には鑄固め式への進化に就て説明し、而して後兩式の屋根に及ぼさうと思ふ。

鑄固め式の出來るのは火山灰の發見があつて後の事である。元來火山灰は天然の噴火作用に依て灼熱された粘土であつて、多量の可溶性硅酸と礬土とを含有し、石灰に接觸するとこれと化合して容易に硬化作用を呈し、そして出來上つたものは石に似たる硬質の物質である。人間が此の作用を利用して、泥の代りに火山灰と石灰と砂とを混じたるものを用ゐ、其うちに砂利や石塊を入れて固まらせるに至つた。即ち今日の所謂コンクリート造であつて、西暦紀元前二百年頃にはもう既に利用されたのでカルターゴやアレキサンドリアあたりでは既に用ひられてゐたので、軈て此方法が羅馬本國に移入せられて、盛に大建築に使用せられたものである。勿論他の一般文化の進步と伴つて、是等のコンクリート材料をだん／＼に精しつけて固まらせるといふやうな事はなくなり、木造の假枠を立てこれに板の假枠を取りつけ、壁の厚さに添ふて其兩面に設けた此の假枠のうちに是等の混合材料を流し込み打固めて凝結させるに至つたものである。

羅馬人の理想とせる恆久の都市、七丘上に立てる羅馬の恆久といふ意味は、政治的の意味を有したと同時にまた實質的に其建築の恆久といふ意味を意味したものであつた。そして最初の皇帝アウグスツスをはじめとして各時代の皇帝は、此材料を用ゐて鋭意羅馬市の改築を行つたものである。勿論、羅馬に於ては、此のコンクリート構造は、火山灰と石灰と砂とを混じたものゝ中に頭手の石塊を入れてこれを假枠のなかで打固めるオプス・インセルツムから、表面方形をなし後ろの尖つた石を網目形に整然と積上り乍ら、所謂裏込(ウラゴメ)としてコンクリートを打ち行くオプス・レチクラツムに進んだ事は既に述べたが、これが更に三角形の平面をなせる煉瓦の頂角に當る方を内部に入れて積み上り乍ら裏込めコンクリートを打ち行く方式に發達進化したも

ので、茲に積固め造りと鑄固め造りの混交が行はれ、此の式に依つて大建築が出來たものである。



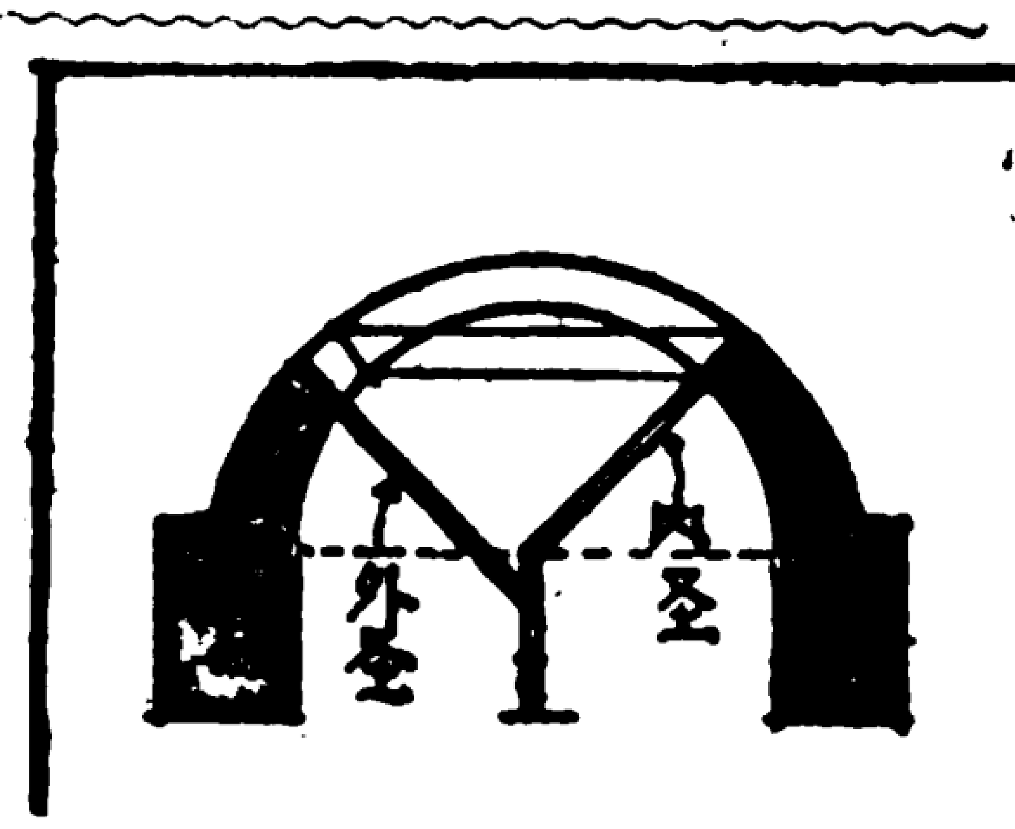
第十一圖

十五世紀には羅馬は全く滅亡し、蠻族による度々の破壞掠奪に遭遇し、更に幾多の變遷をけみし乍らも、今日なほ帝國隆盛時の尨大なる建築遺跡をとゞめ、そのうち或物はなほ完全に使用されつゝあり、また當時の殖民地であつた地方の遺跡のうちにも使用に耐えつゝある家屋橋梁等の存するものあるは、全くこのコンクリート構造に基くものである。

以上、固まらせる方形からの壁の二つの分化を説明した。まだ殘つて居る所のものは、其屋根である所の球蓋と穹窿とに就てゞある。

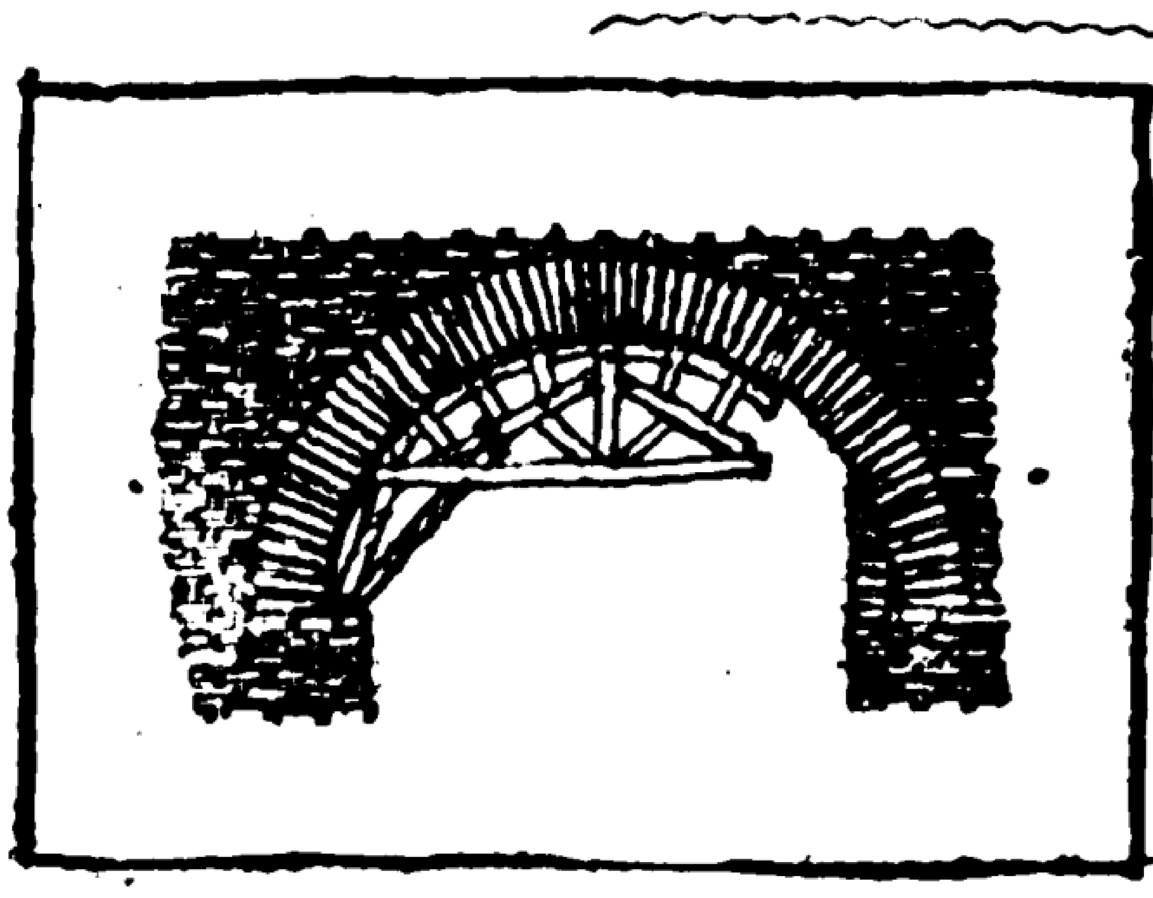
先づ積み固め造りの方に就て述べやう。固まらせる方式の球蓋は先きに述べた通り、一段ごとに內方に泥を粘ばしつけて行つて段々と椀形を構成されたものであつた。

燒物が出來てからもこれを積んで行く方法は同様の形式に依て漸次に內方に傾斜せしめ乍ら積み出して行つたもので、建物も次第に大きくなるに連れて、其內徑を正しく定める爲めには圓の樣に假りに中心を立てた垂直の柱から自由に廻轉し得る棒を出して、此棒を半徑として材料を積み固めつゝ上り行き乍ら、棒を廻して球蓋の內側と外側とを定めて行つたものである（第十二圖）。



第十二圖

穹窿の方はこれ亦、もとの泥で粘し付けて行つたと同樣に前掲第八圖の下のやうに煉瓦を斜めに傾かせて上に上にと積み上げて行つたものである。これが第二段に於ては圖の如く木を用ひて弧形の假枠を造り、この假枠の上に垂直に arch（アーチ）を積む事になる（第十三圖）。アーチは支那文字の栱に當る、我邦の匠語ではその栱の各片がお互にせり乍ら持ちつ持たれつするといふ意味に於てこれをこれを迫持（セリモチ）といふ。此の假枠を用ゐて栱を架する方法は火山灰の發見あつて後の事で、羅馬時代に於ては大徑間の穹窿を構造するのに、假枠上に或間隔を有せしめて、力材となる栱を煉瓦にて積み其の間にコンクリートを塡充したものである。（十一



第十三圖

圖の下）これは先きに壁の所に於ても述べた如く積立て造りと鑄固め造りとを混交せしめて發達した大羅馬建築法である。

以上の外に此の球蓋と穹窿とには整石積み即ち石材を正しい寸法にキチンと切つて表面を平らに仕上げて圖のやうに積む方法がある。此の方法に依れば石片と石片との間を必ずしも粘着材を用ゐて凝固せしめずとも、相互に迫り持ちになりて平衡を保ち得る。此の方法にこそ迫持ちの名を冠す可きである。是等の方法は相當の大さのものに迄は用ゐられたが、大構造法にまで進展しなかつた。

球蓋や穹窿は古く支那に傳はつて居り、繪に見る南支那の虹橋は整石積みの穹窿からなるのものである、自分は蒙古に近き張家口で城門に於ける煉瓦造の球蓋の見事なものを見た。

朝鮮の慶州に於てもまた支那の唐時代になれる新羅朝の球蓋と穹窿を見る事が出來る。前者は佛國寺奥の院の石造の佛殿で、それは球蓋の原理に對して多少不合理なものではあるが、整石積の球蓋を模したものであり。後者は半月城跡にある氷庫のそれで見事な整石積みの穹窿である。

我邦に於ては此の球蓋を見る事は出來ぬ。東京博物館内の表慶館や大阪中之島圖書館の屋根が此種の外形を模したものであるが實は内部に架構式で骨組を作つて上を球形に被覆したものに過ぎぬ。尤も文藝復興以後の西洋に於ける球蓋は殆ど總て此の式に依つて作られたものである。我邦に於ける穹窿の古きものは徳川時代に南支那の影響を受けて出來た長崎を始め九州地方に於ける石橋がこれである。即ち整石積みの穹窿から成り立つ。

以上、建築の基本的構造の三方式のうち、編む方式と閉き合せる方式との進化と分化とに就て其大略を述べ終つた。最後に刳りぬく方式が進化と分化とへのどんな途をとつたかに就て述べやうと思ふ。

刳りぬく方式、即ち禮記にいふ營窟、此の方式は埃及に於ては古く墳墓や神殿などに行はれて立派なものも出來て居り、印度や支那の寺院にもまた壯麗な營窟式のものを見、支那に於ては現時なほ、内に數室を有し馬車をも其内に引込み得る旅宿すらあるが、それ等はたゞそれが大きく或は見事に作られたといふ丈けで進化と見る事は出來ない。たゞ今日は長いトンネルとなり地下鐵道などに便宜を與へて居る。他に此の刳りぬく方式から、地上の石丘を彫り刻んで宗教的建築物を作り出す方式への分化が印度あたりに行はれた事もあつたが、それも或る僅かの例の存するのみで、それから何物を生み出し得ないのはいふ迄もない事である。

以上で建築の基本的三構造方式の話の大略が濟んだわけである

る。

そのうち刳りぬく方式に就ては何等の進化もないから以下これに觸れぬ事とする。

編む方式から井籠組と架構式との二つが分化し、井籠組は今日なほ行はれて居るが、比較的大なる材料を多量に要し、森林地にても非らざる限りは極めて不經濟であり、石材を以てするものもまた同樣であつて、大なる建築物に外面裝飾として貼付けに依つてこれを模倣する外は、石塀の如きものに用ゐられるに過ぎず、進化は止まつたと見做す可きであるから、これまたこれ以上話しを進めやうとは思はぬ。

編む方式の系統に他に小舞壁式のあることは既に述べた所であるが、是等編む方式より出でたる架構式と小舞壁式と、固まらせる方式より出でたる積固み式と鑄固め式と、此の四つの進化と混交とを次章以下に於て論じやうと思ふ。

（四）組立て造りと積固め造りと鑄固め造りの進化と混交

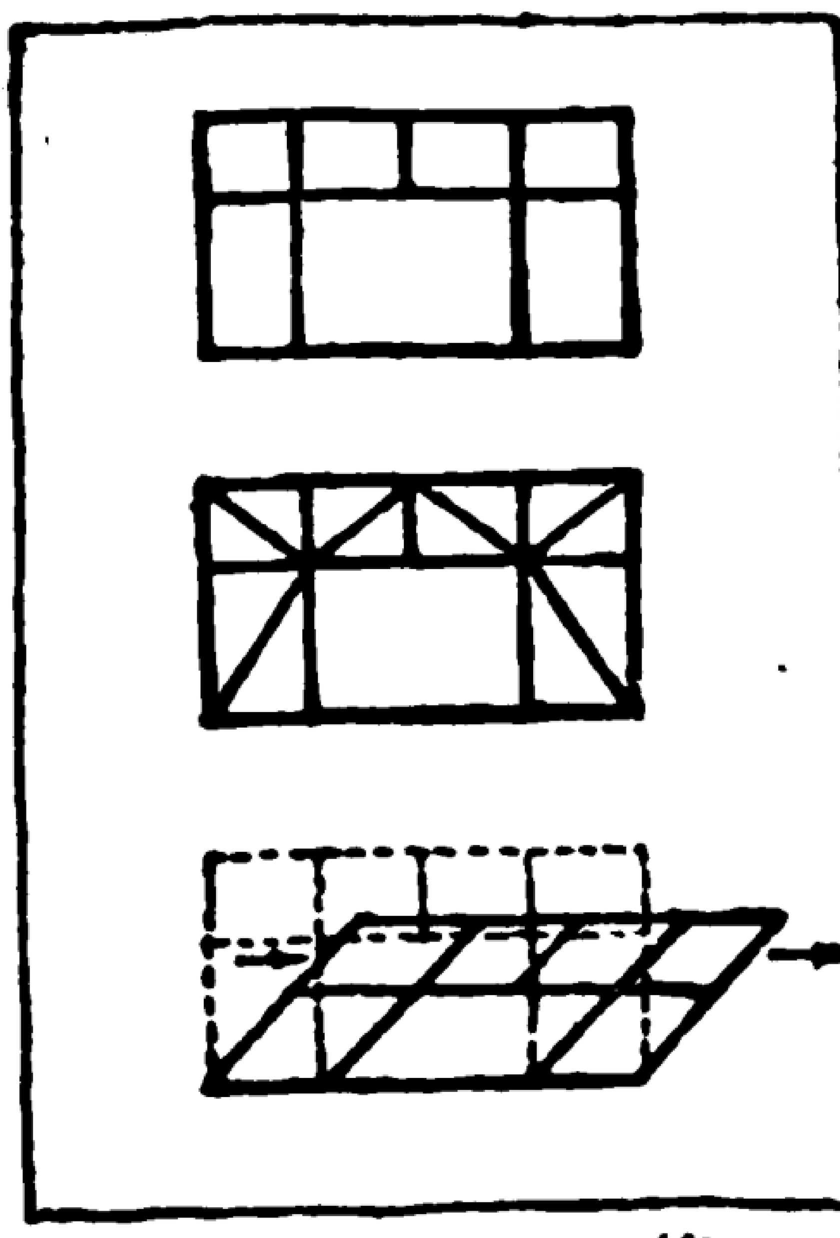
前章に於て、以下架構式と小舞壁式と積固め式と鑄固め式の進化と混交とに就て一論すべき旨を述べた。併し此のうち小舞壁式の極めて著しき進みを見るのは最近代のことであるから、此問題に關してはしばらく後廻しとして、此章に於ては架構式と積固め式と鑄固め式との進化と及び各式の混交に付て論ずる積りである。

先づ架構式から始める。木造架構式は最も合理的で施工も簡便に經濟的の構造であるから、最も廣く分布され、最も永く行はれて居る。我邦の建築は始終一貫木造架構式からなつてゐる。支那建築と雖ども殆ど悉くがこれで、一見煉瓦造か石造かのやうに見える宮殿建築の如きものすら、木で架構式に骨組を造つて其骨組の間に是等を塡充したか、或は其骨組をも是等のもので被覆したものである。全盛期の希臘でも羅馬でも、神殿とか宮殿とか政廳とか城砦とかいふものゝ外はまた同樣の方法に依て建築せられて居つたのであり、現在でも地方の民家などは架構式によるものが多い。埃及の田舍に見るマスタバ形の傾斜した泥の家も、其壁の内部の骨組は木からなつて居る。

中世記の西歐羅巴、即ち今日の英吉利、佛蘭西、獨逸、和蘭、白耳義等の家屋が、寺院、城砦、宮殿等を除いては民家の殆ど全部が木造架構式からなつたもので、其壁の實體は我邦に於て現に用ゐられつゝあるやうな編んだ小舞を「しん」とした泥壁からだんだんと、架構材の間に煉瓦を塡充するやうになつたものである。北米合衆國に於ては木造架構式は田舍の家に於

て現に盛に用ゐられて居る。

是等架構式の構造法のうちで、西歐羅巴のものと日本や支那などのものと根本的に相違して居る點が一つある。それは日本支那などでは垂直材（柱の如き）と水平材（桁や梁の如き）とのみを用ゐて架構し、所謂「すじかい」材はこれを用ゆる事を嫌つたものである。古代の埃及や希臘に於てもこれに類する思想はあつた。然るに西歐羅巴に於ては好んでこれを用ゐて居る。今これを圖示すればAは所謂東洋風（主として支那以東をいふ）のものでBは所謂西洋風のものである。（第十四圖）即ち上圖には「すじかい」材なく中圖にはこれを存して居る。「すじかい」材なきものは横力に對する抵抗力頗る弱く、下圖に於ける矢の方向に力を受くれば見らるゝ如くひしげる傾向を持つて居るが、「すじかい」の入れてあるものにはこれがない。即ち四邊形は其各邊だけが定まつてあるものでは、是等の邊に依て殆ど無數の四邊形を形作り得るが、三角形は三邊が定まれば自ら其各頂角の角度も定まり、たゞ一つの三角形しか描く事が出來ない。これが力學上三角形不變の原理と呼ばれるもので、架構式に於てその各材が矩形を形作るやうに交るところには、其間に斜に「すじかい」を入れてこれを三角形に別つ事にすれば横力に對して充分なる抵抗を有し得る事になる。依つて窓や戸には止むを得ないがその他の部分には出來るだけ「すじかい」を用ゆる方が堅牢なる建築を得るわけである。此の點に於て西洋のものは東洋のものゝ上位にあるといはなければならぬ。しかも此の事は近代科學の發展に伴つてさう進歩したのではなく、全く古くから斯うする習慣となつて居つたものである。


第十四圖

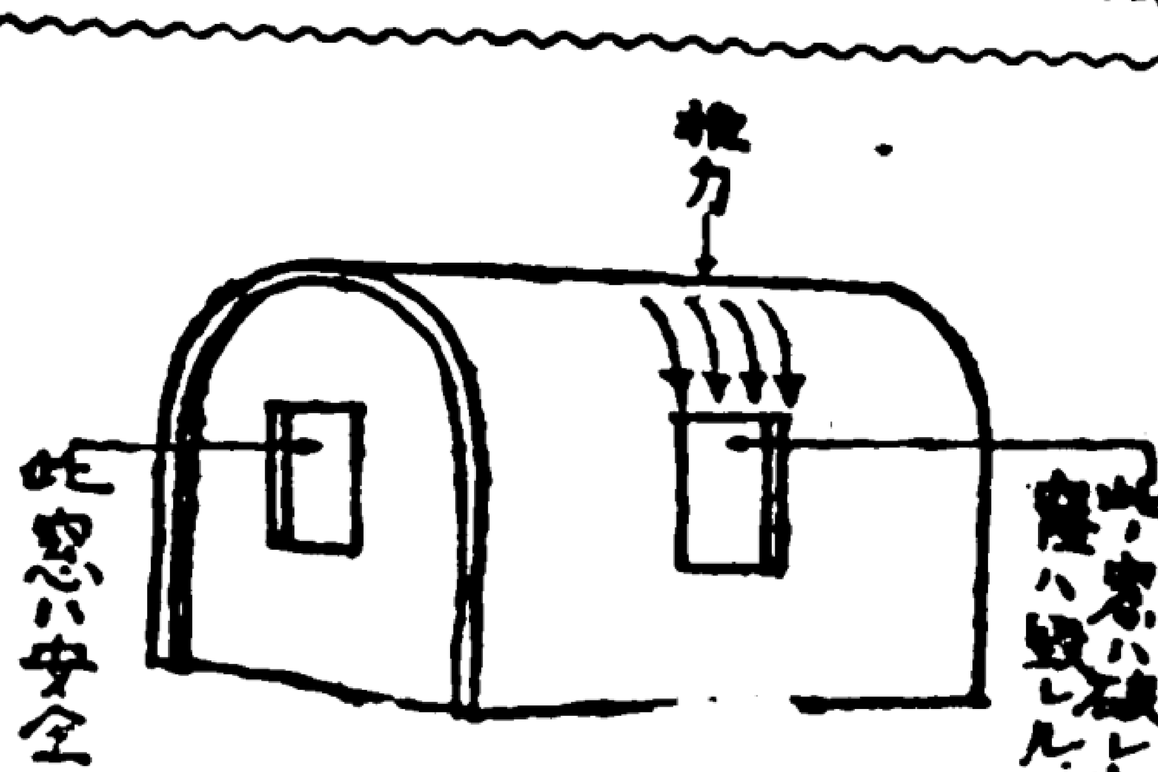
奈良の大佛殿は世界一の大木造架構であるに相違ない。天平期當初のものは更にこれよりも大きかつたものである。又北京紫禁城内に於ける各宮殿、或は明陵に於ける稜恩殿の如きはこれまた世界に誇り得可き架構式の建築である。しかしそれは極めて大きいとか或は眼を驚かす許りの色彩や彫刻がついて居るとかいふに過ぎない。その架構式の力學上の原理に叶つて居るといふ點に於ては、到底西歐中世紀の民家にも及ばない。

西洋風の架構式は斯くの如く既に早く進歩した構造であつた。勿論それが更に大なる發達をしたのは、力學の相當進歩した十九世紀からの事ではある、是等の問題は總て後章に譲る、只には、建築學の發達の上に大なる役目を演じたのは力學のうちの靜力學であるが、それは主として架構法の原理として取扱は

れ其狀態に於て發達したものである。といふ事だけを特に述べて置く。

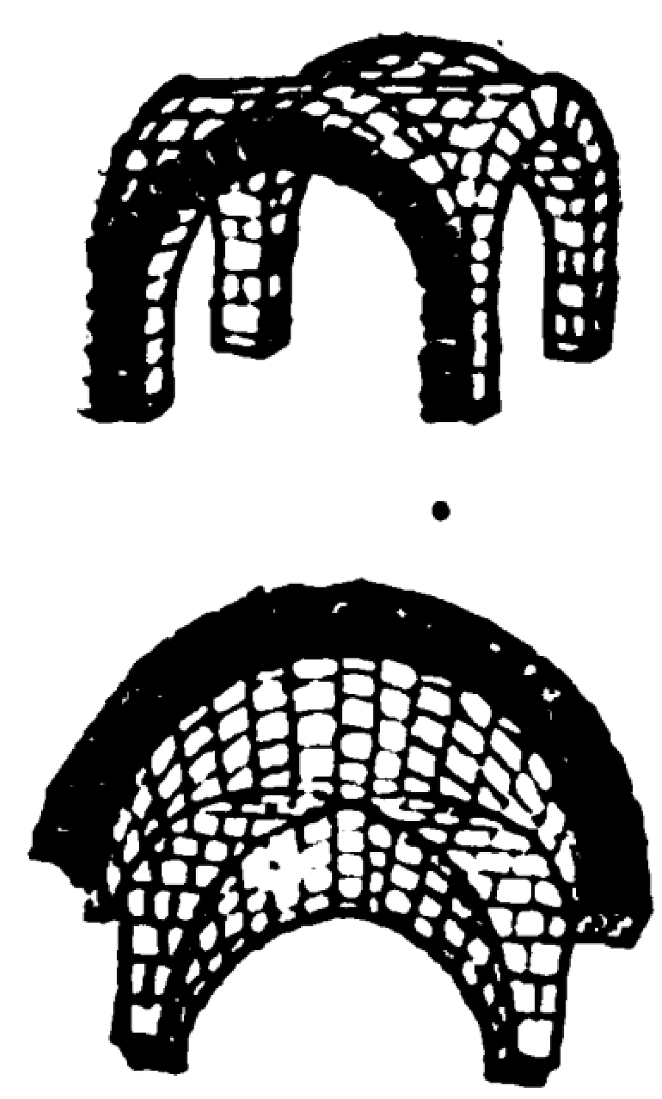
次は鑄固め式に就て述べる事とするが、架構式の發達が主として屋根や梁の如き横に架け渡すものにあつたが如く、鑄固め式の問題もまた同様であつた。そして兩方とも最も多く力を注がれたのは、大なる徑間を如何にして屋根を以て覆ふ可きかにあつた。架構式の方は木材の如く細くして長き材料を以て如何にしてこれを組立てんかにあり、鑄固め式の方は凝結力強き材料を以て如何にしてこれを一體として鑄出さんかにあつた。鑄固め式の最も利益とする處は、耐久的であり耐火的であるといふ點に存する。巨大なるもの、世界に冠たるもの、而して恒久的なるものを望んだ羅馬人に依つて、當時の工學に於て能ふ限り研磨せられて、大なる室を必要とする幾多の建物に、殆ど放膽的ともいふ可き狀態を以てこれが應用されたのは寧ろ當然であつた。

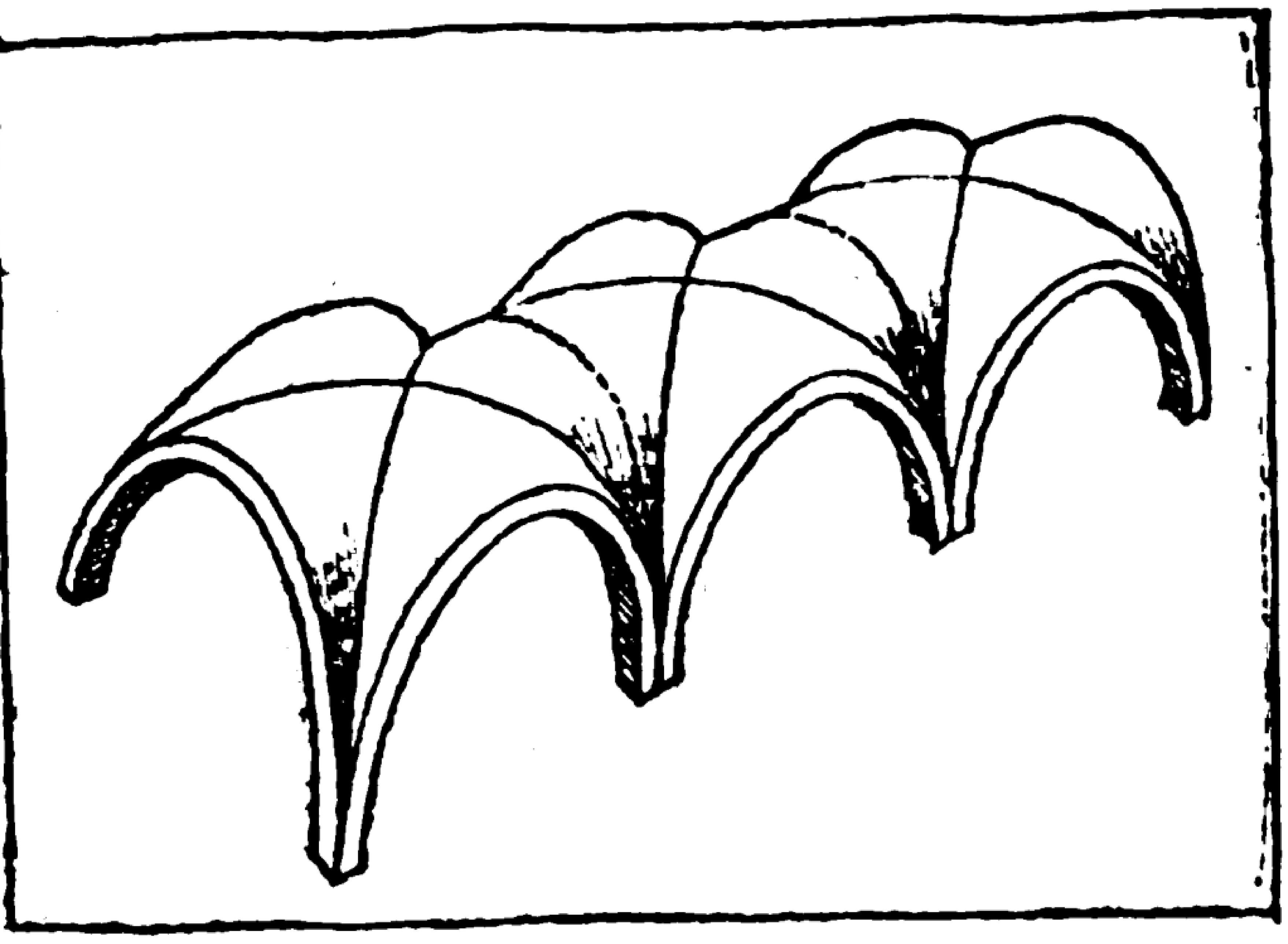
耐久的耐火的といふ事は建築の重大なる要素である。雨のもらぬといふ事が建築の一つの要素であるのに、これは耐雨建築であるといふて一つの家屋を指さしたならば、人は此の笑ふべき言葉を何と聞くであらう、これと等しく耐火建築といふ言葉が、科學の進歩したる今日に於ては一笑に附せらる可きものに相違あるまいと思はれる。鑄固め造りの耐火的である點は最も要な特徴である。建築は壁だけが耐火的であつたとて屋根がさうでなかつたならば、これを耐火建築といふ事は出來ない。此鑄固め式に於ては屋根を球蓋や穹窿になし得るといふところに意義がある。尤も球蓋や穹窿は其の小なるものは石を正しく楔形に切つたもので造られて、それが羅馬に於ても用ゐられたが、孰れも徑間の小さい部分に限られてゐた。そして此の式のものは此の儘では大きく發達をしかつた。



第十五圖

穹窿の最初のものは一本の筒形になつてゐた事は既に述べた通りである。此の筒形穹窿に窓や入口を附けるには、圖の如く其兩端に於ては容易であるが、兩側の方に設けるのは困難である（十五圖）、これは上より來る重い穹窿の推力がこれに加はるからで、そのために窓の上にある壁は窓の處に落ち込んで窓は破壞し穹窿は毀たれる。此問題を解決す可く交叉穹窿が生れるに至つた。解り易く説明すれば、圖の如く二つの筒形を交叉させるのである（第十六圖）、斯うすると上の穹窿の重量は四隅の脚で支へる事となり、四方とも窓を取る事が自由となる。長い室を作



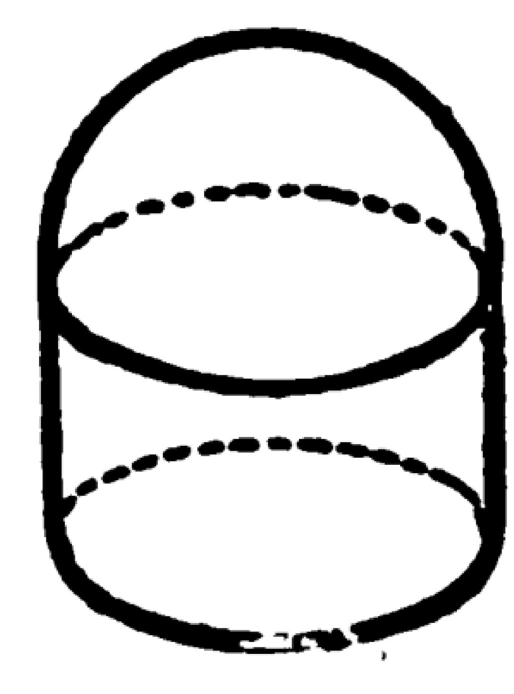


第十七圖

らんとするならば又圖
第のやうに何個も連續す
十ればよい道理であり
六(第十七圖)、横にも廣
圖い室を要するならば更
にこれを横に合はせれ
ばよい。事實斯ういふやうにして羅馬時代には穹窿屋根の大きな室が造られた。例へば羅馬にあるコンスタンチン帝のバジリカ(裁判所に用ゐられまた或種の集會に用ゐられた建物)の建築の如きは、紀元三百十一年即ち日本でいふと仁德天皇時代に造られたものであるが、徑間八十三尺・長さ二百六十五尺の間を柱なしに下から天井の中央部まで百二十尺の高さある穹窿構造にしてある。しかも此の長い形の兩側に更に穹窿屋根の長いものを並べて取附けたもので、結局、徑間百九十五尺・長さ二百六十五尺の室に、内部へ四本の大柱を建てただけで大穹窿天井を建てこれを覆ふたものである。蠻族の侵入後、大部分は毀たれたが、此の耐久的建築の壁體と穹窿の或部分は屹然として小山の如く殘つて居る。

以下引續いて中世紀の西歐基督教伽藍に於ける穹窿の大發展に至るまでを論ず可きであるが、さうする事よりも其前に球蓋建築の進步を述べる方が、說明の上からいつても時代の順から見ても都合がよいから此の方を先きにする。

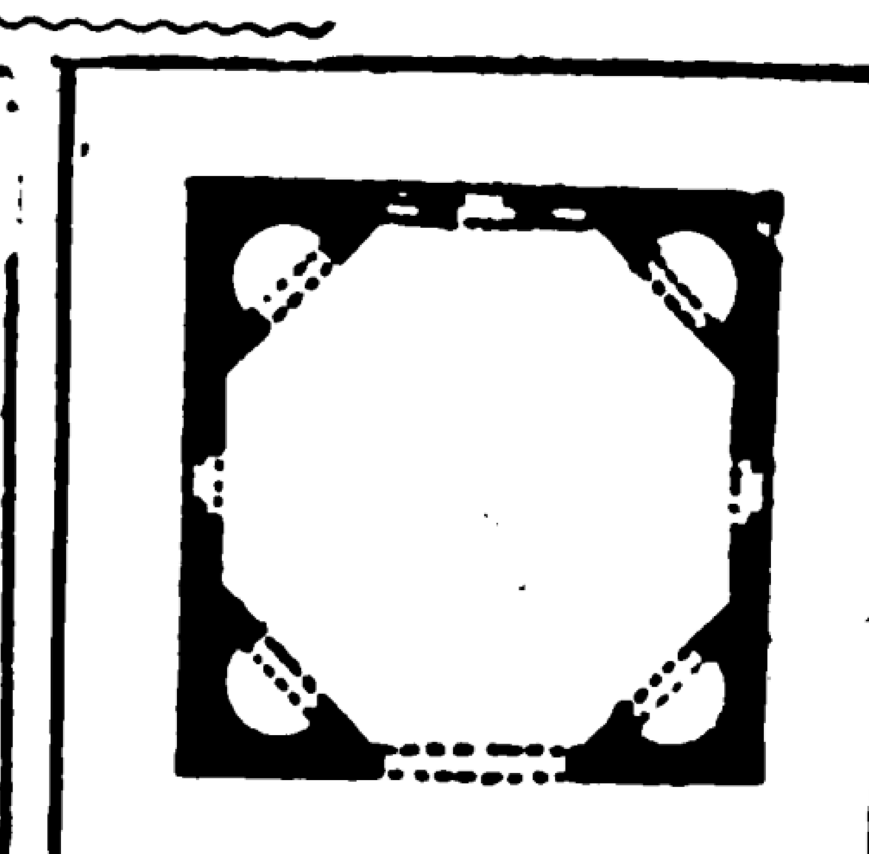
鎔固め式の發生に於て既に球蓋構造と穹窿構造とがあつた事は先きに述べた。その球蓋構造の方は、地上に垂直な壁が生じてその上に此の球蓋を架するやうになると、最も簡單にこれを處理するためには其壁を筒形にする事である(第十八圖)。從て此の壁に依つて取圍まれる室は其平面が圓形をなさなければならぬ、所謂圓い室でなければならぬ。羅馬に於ては此の方法に依つて大きな室を造る事に到達した。西曆一二〇年から一二四年の間、即ち後漢の安帝時代、我邦の景行天皇の御代に、時の皇帝ハドリアヌスに依て建てられたパンテオン殿堂、それは幾多の星霜を經乍らも其實際に何等の損傷を受けず今日



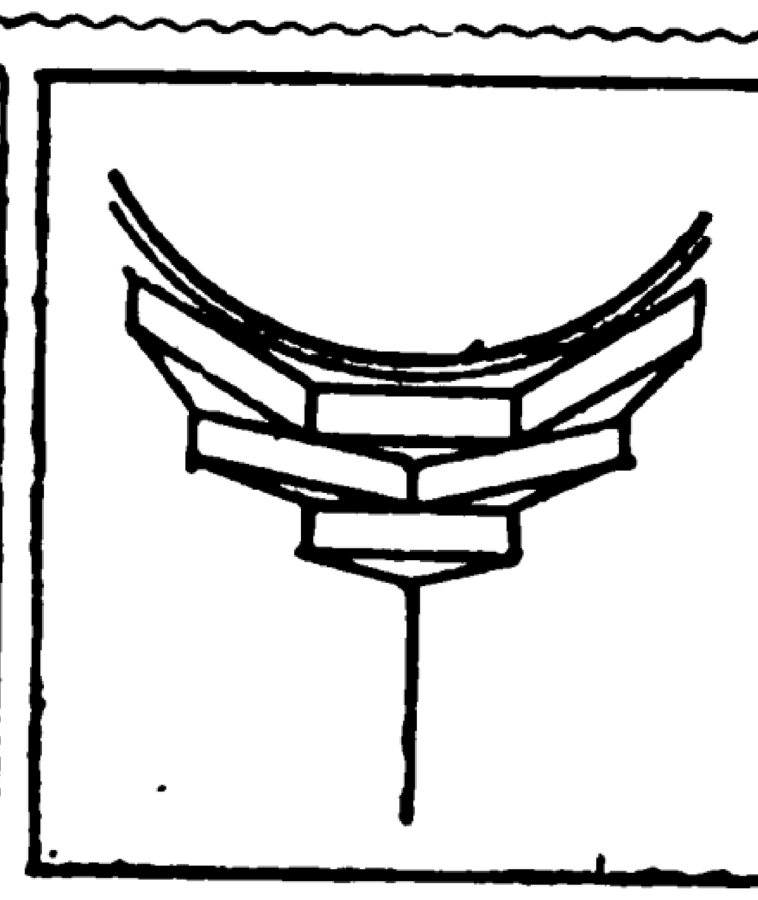
第十八圖

なほ礎として使用されつゝある其殿堂は、內徑百四十二尺余（約二十四間弱）の大さを有して居る。恐らくこれは此種の建築中最大のものであつたらう。

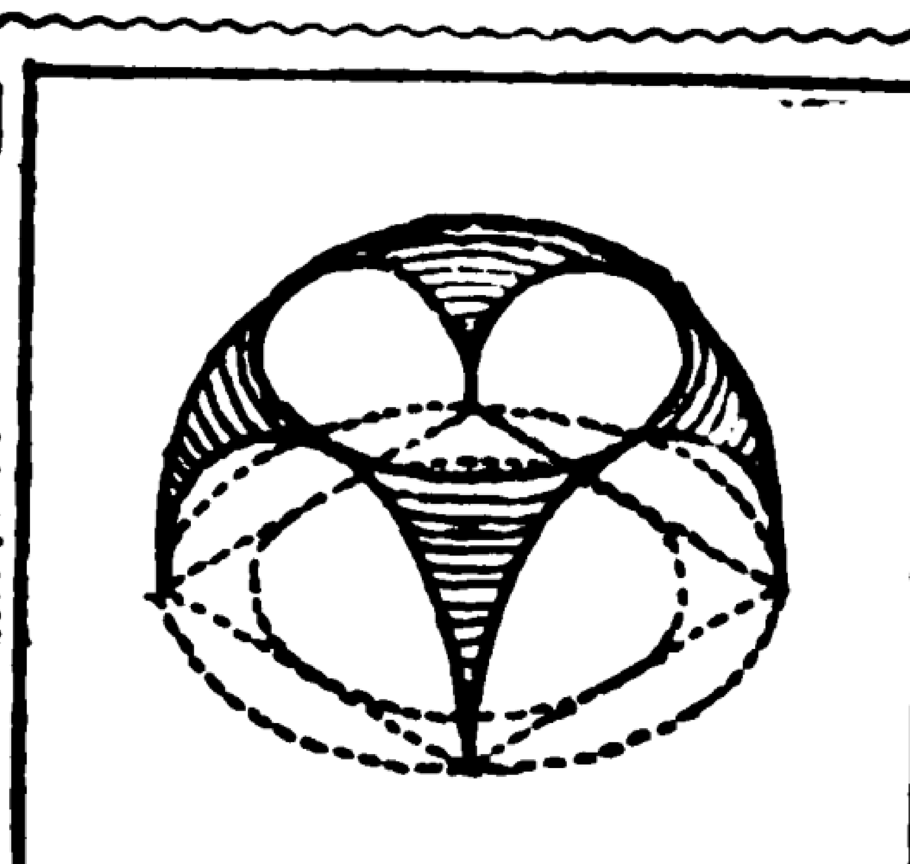
併し乍ら、球蓋構造それは眺めんが爲めの形からそう造られたものではない。鑄固め式の當然の發達からさうなつたものである。しかも此の方法に依つて屋蓋を架せんとするには必ず丸い室にせなければならぬといふのでは甚だ不便極まるものといはなければならぬ。人間の體軀が大體に於て矩形をなせる以上、一般の器物が矩形に進化し來つた以上、室の形はまた直角をなして交る壁に依つて圍まれる事を便とする。その直角をなして交る壁に依つて圍まれる室に架せられるやうに此の球蓋が或る進化の途をとるに至つた。それは斯ういふ事である。先づ最初は正方形の室に球蓋を架する方法が行はれる。それには壁上に球蓋の起る部分をこれに沿ふて出來るだけ多角形にする事である。多角といつてもさう復雜な多角形は出來ないから、八角形にする事になつた。しかも室を方形として使用するには壁に於て其八角形の隅切りの部分に入り込みを作つて、上部で球蓋の起る處には梁の役目をなす壁を作つて八角形になす事である。其の隅切りの部分への入り込みとして龕（英語のNiche）を造つた（第十九圖）。併し室をほんとうに四角に使用するにはこ



第十九圖



第二十圖

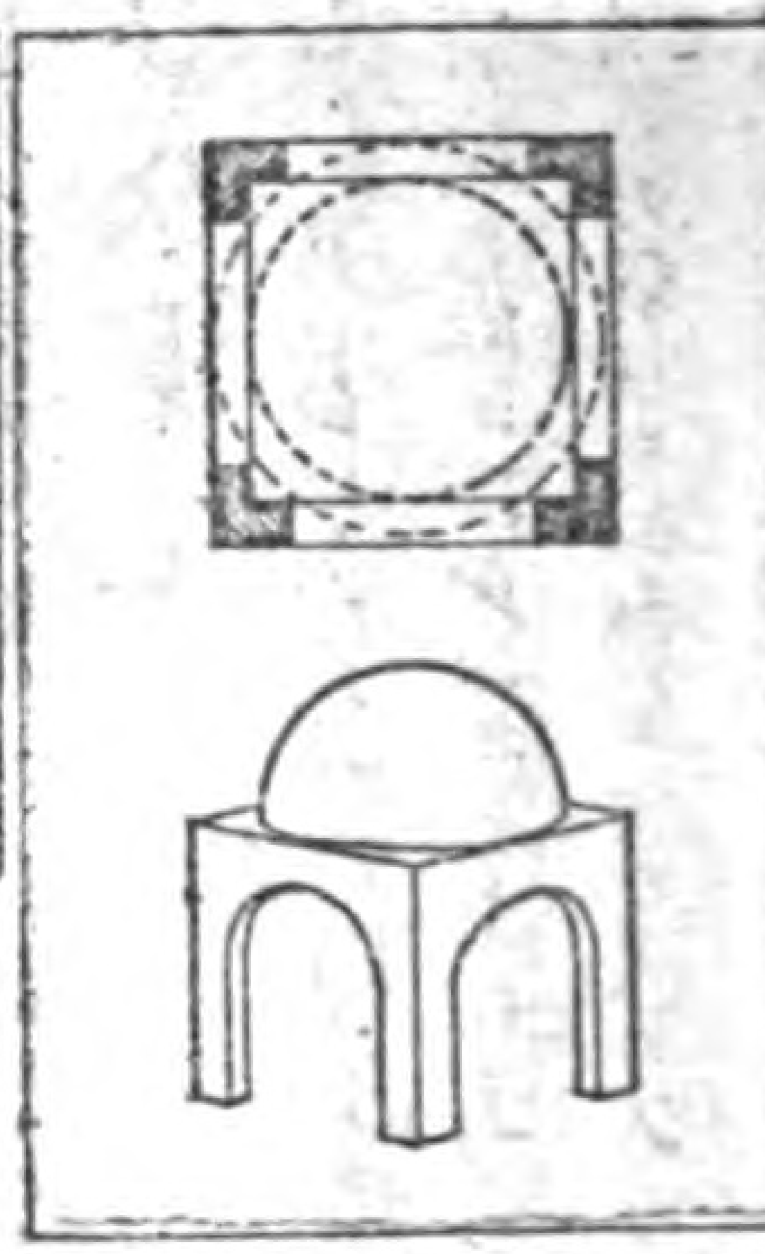


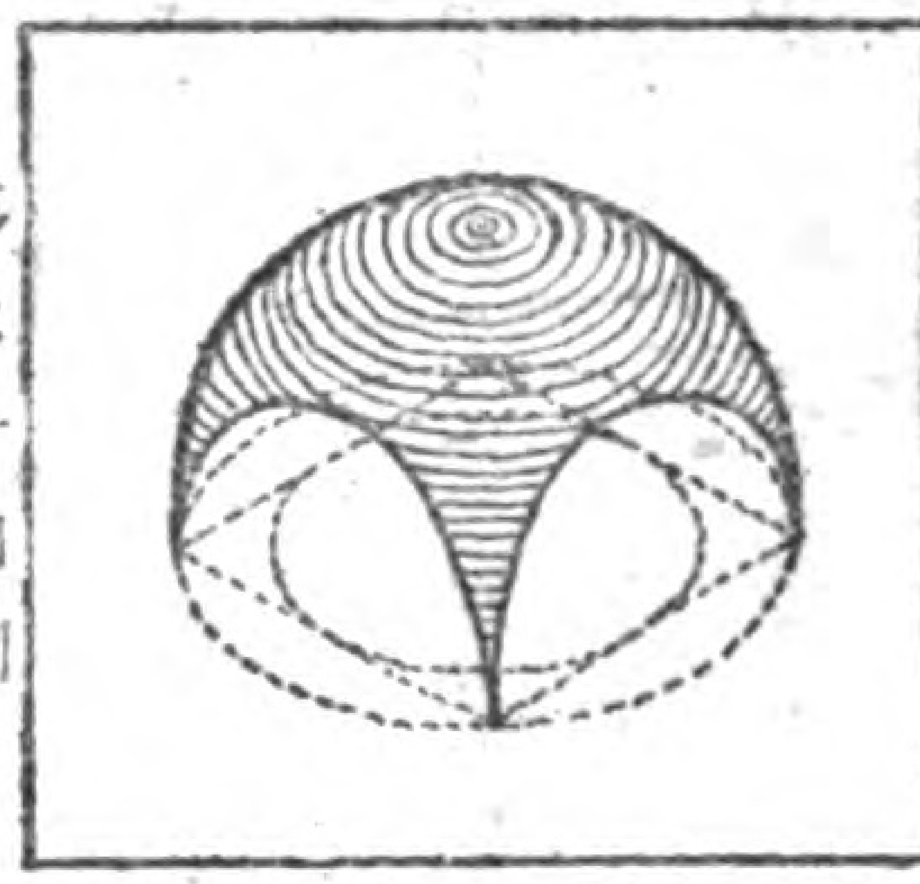
第二十一圖

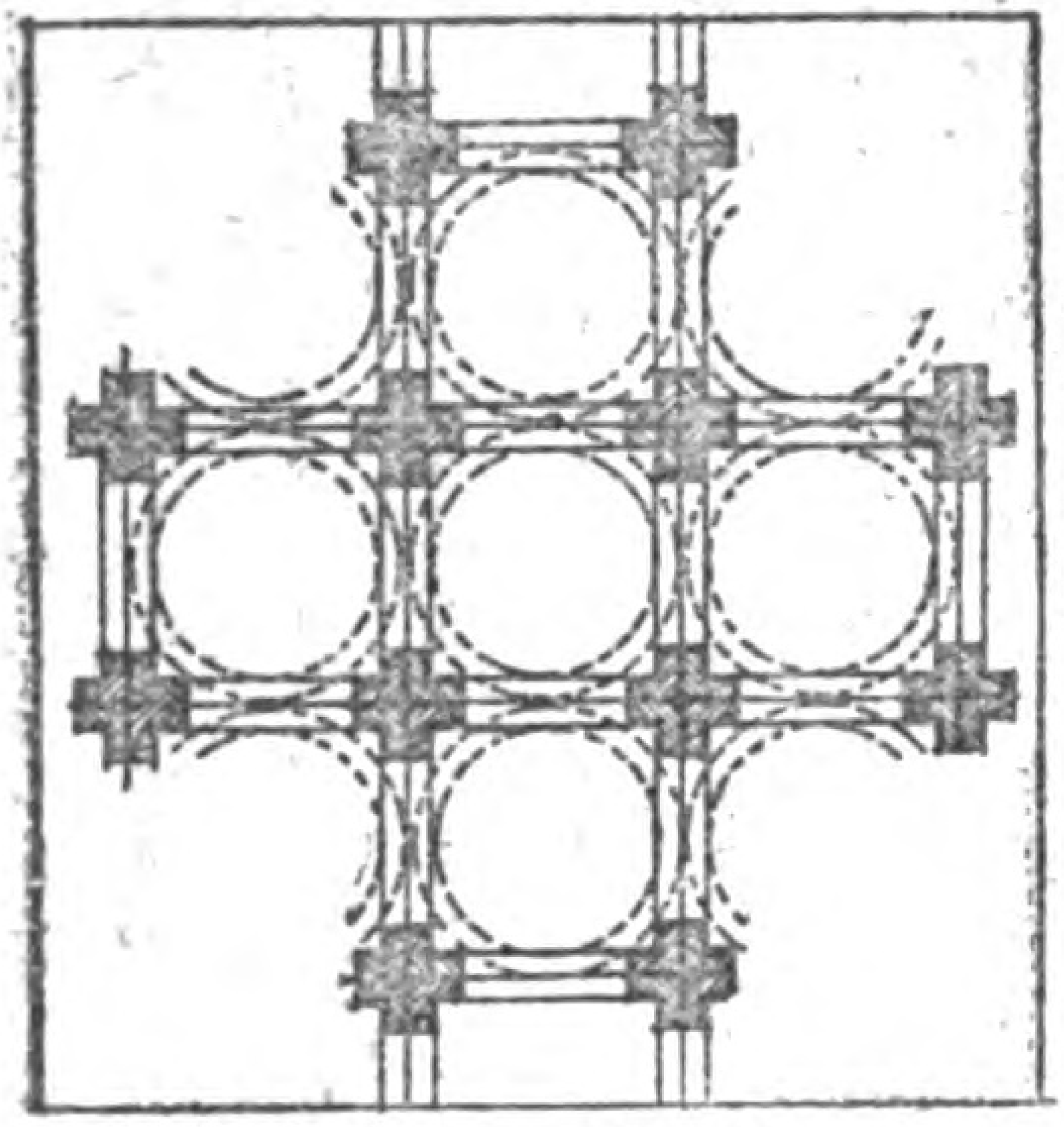
うするよりも天井に近く「持送り」形に壁を出して行つて八角にする方が便利である（第二十圖）。その「持送り」形が軈て球面三角に進化する（第二十一圖）。此の球面三角をなせる部分をペンデンチーブと呼ぶ

扨て今迄は此の方形の室の四壁が閉ざされてゐたものとして論じてゐたが、是等の四壁は上を拱(アーチ)にさへすれば四隅の柱形だけで上の球蓋降を支へ得ることになる（二十二圖）。內部に於けるペンデンチーブから球蓋に移り行く處は圖の如く甚だ巧妙に一つの曲率をなして中空の球體の一部として取扱はれる事にもなる（第二十三圖）。先きに述べた蒙古に近い北支那の張家口の城門にある雲際構造は全く此式からなる。

更に角四隅の柱さへ上の球蓋から來る推力に耐える太さになれば、正方形の室の隅の四本の柱の上に球蓋を架し得る事になる。斯うなるとこれを合せて行きさへすれば如何なる大きな室

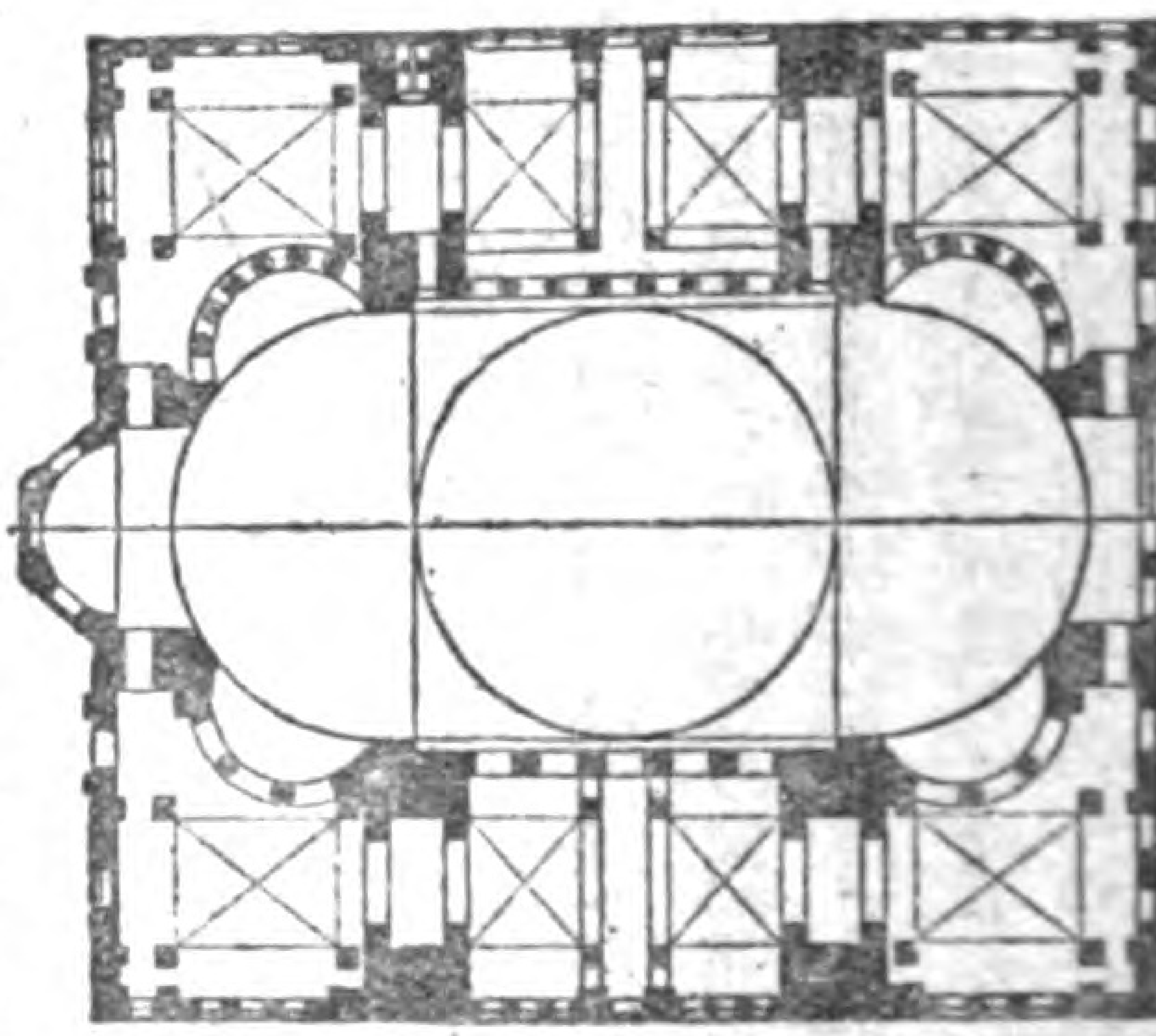

第二十二圖


第二十三圖


第二十四圖

と雖ども列をなせる多數の球蓋にて覆ひ得る事となる（第二十四圖）。此の種の室は今日なほサラセン式（土耳古や埃及などの地方の）建築に見る事が出來る。

此の理に依つて中央に球蓋を架し、其前後に半球蓋を架して長方形の室を作つたものゝ大きな實例は、コンスタンチノプルにあるサンタ・ソフィアの大伽藍である（第二十五圖）。サンタ・ソフィアは土耳古人の手に移つてから回教寺として用ゐられるに至つたけれども、當初はチュスチニアヌス帝に依つて西暦五三二年から五三七年の間に出來たものである。これは幅約十八間、長さ約三十六間、即ち坪數約六百五十坪の室を内部に何等の柱

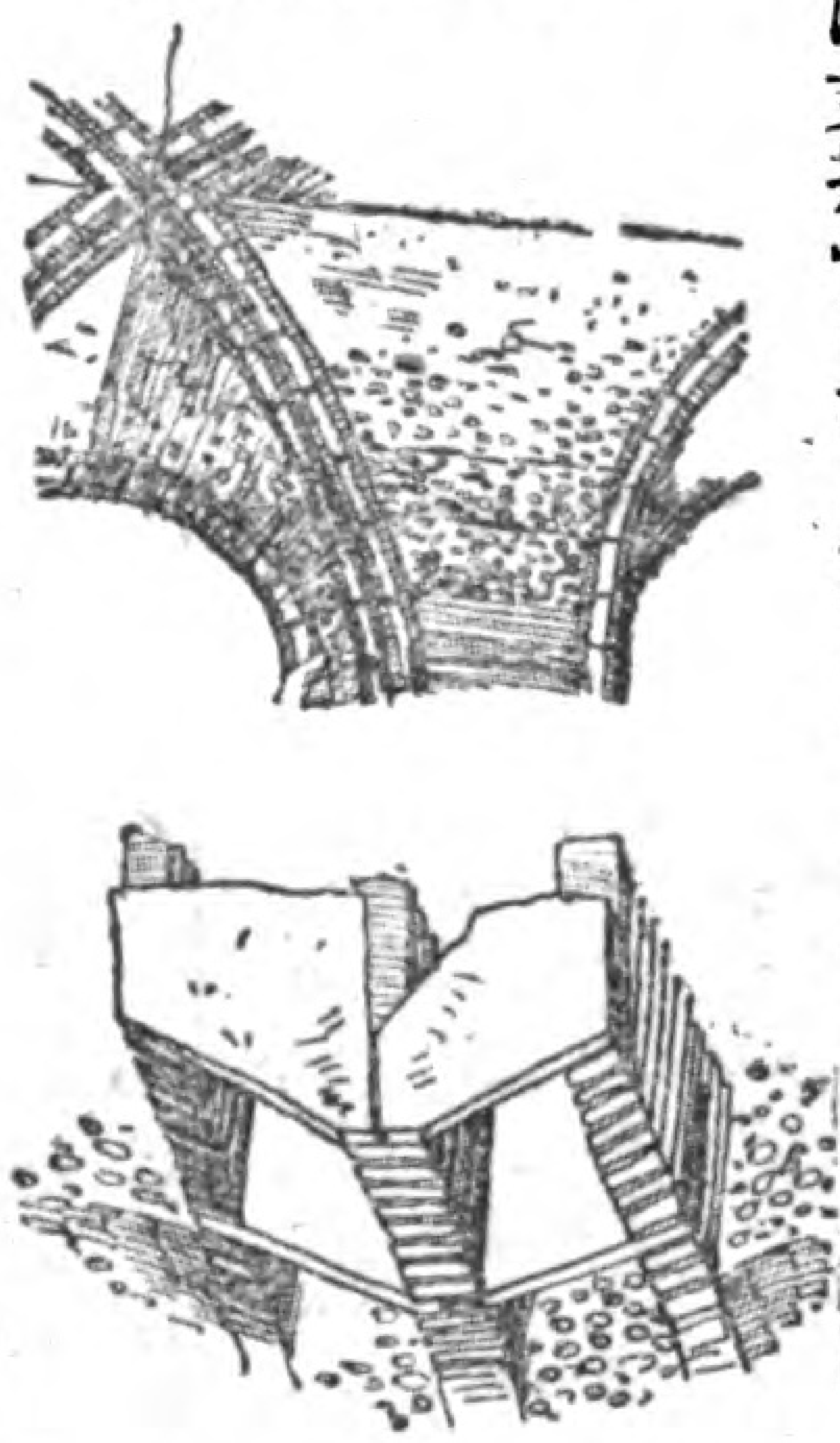

第二十五圖

をおくことなく、球蓋構造に依つて屋根を架した驚く可き建築である。光線は球蓋の基底に近く穿たれた四十個の拱式小窓から導かれ、球蓋に用ひたコンクリートには重要を輕くする爲めに多孔質の輕石を使用して居る。大きな球蓋を構造するに此の方法を用ゐるのは東羅馬式即ちビザレチン式の慣習であつて、中には細長い壺を横に連續して並べてこれをコンクリートの「しん」としたものである。また平たい棟瓦で積上つたものもある。サンタ・ソフィアの球は内徑で約十八間のものであるが、こんな大きな球蓋をどんな方法に依つて架したかといふと、これは下の方から順次に閉らせて行く事球蓋の發生のところに於て述べたのと同樣にして行つたもので、其基準を一定させるためには、假りに中央に柱を立て、其柱より自由に廻轉し得る棒を出して、此の棒を半徑として材料を積み固めつゝ上り行きながら此の棒を廻して球蓋の內側と外側とを定めて行つたものであることは先きにも述べた通りである。

泥を椀を伏せた形に固めた小さい球蓋はこんな大きなものを造り得るこんな合理的な構造にまで進化した。これが後に述べる中世紀の西歐羅巴の穹窿構造と良い對照をなすものである。そして此の構造法の進化はこれで止まつてしまつたが、近代に於て鐵筋コンクリートの進歩に伴つて、これがまた將來或る開展をなすのでなからうかと思はれてならぬ。

扨て茲に再び話は羅馬の穹窿にもどつて、羅馬建築の殆ど總てがさうであるが、先きに述べた交叉穹窿も、これをコンクリートで打つときに、其のコンクリートの凝固せぬ間にこれを充分に支持せしむる爲めに、前章に於て述べた筒形穹窿に煉瓦積みからなる力材を用ゐた事と同様に、圖の如く其交叉部に練瓦の力材を用ゐたものである（第二十六圖）。

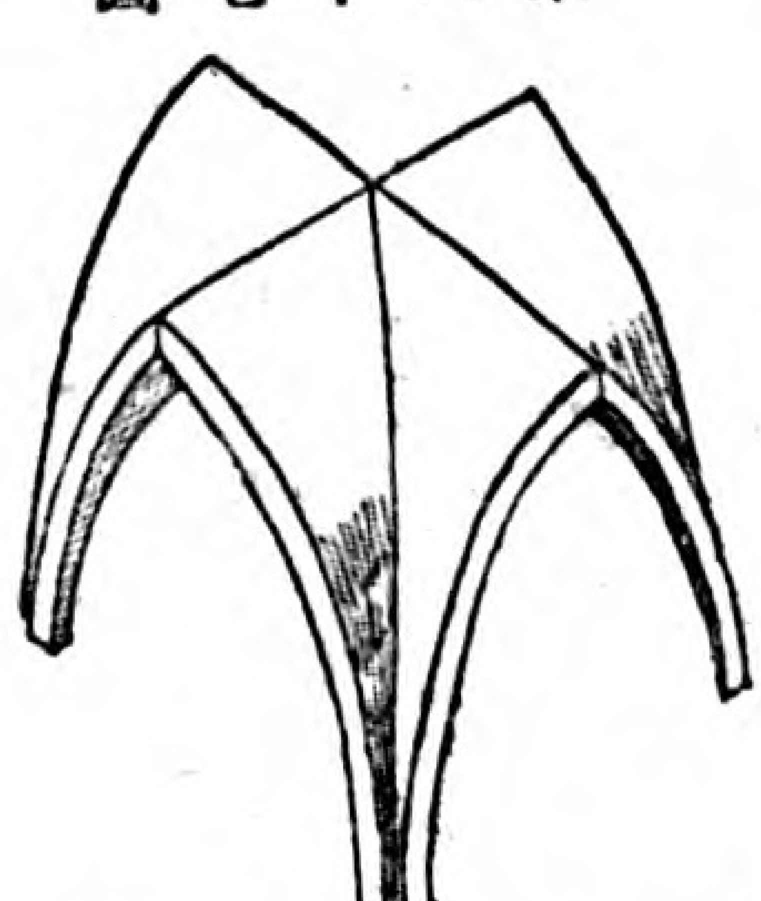
第二十六圖



假令その力材がコンクリートの凝固する迄を支持する爲めとはいへ、力材をコンクリート中に入れたといふ事は幾分鑄固め式と架構式との混交、それは進化への途にある混交である事が認められる。

扨て、此交叉穹窿の構造に於て、等しい半徑の圓弧よりなる筒形を交叉せしむる事は比較的容易であるが、異つた半徑の二つの筒形穹窿を交叉せしむる事は、幾何學上より圖を構成する上に於ても實施に當ても頗る困難とするところである。此の問題を解決す可く、圖の如く尖頭アーチの連續より成る二つの穹窿を交叉せしむるに至つた（第二十七圖）。併しそれは羅馬時代に達せられたものでなかつた。この尖頭交叉穹窿の架法は穹窿構造の大飛躍に至る前提であつて、しかも此の原理が發見されたのも大飛躍に達し得たのも中世紀に於ける佛蘭西と英吉利とにあつて、寺院建築に於て行はれたものである。基督教の全盛を極めつゝあつた十二世紀に於て大伽藍建築に發生し、十三十四十五世紀の間大發展を極めたものである。何等の記錄を知る事なしに、何等の裝飾的部分を見る事なしに、是等の伽藍其もの丶眞の構造それ自身が當時の熱烈なる基督精神を物語て居る事は、此偉大なる構造にふれたるもの丶總てが直ちに感ずるところである。

第二十七圖



斯ういふ狀態であるために、尖頭交叉穹窿の起原に關して本家爭ひが英佛兩國間の建築學者の間に絕へざるところである。

だそれは何時何處に於て發生したと見るのが正しい。

中世紀の是等諸國の伽藍構造が「固まらせるもの」より發したる積固め式である事は前章に於てこれを述べた。即ちそれが正しく切られた小石材を粘着材たる石灰を使用して積み上げた積固め式であるといふ事は既に述べた。そしてその積固め式によつて此穹窿が用ゐられたのである。しかもそれが架構式の原理に依つて構成されたのである。即ち石骨穹窿構造ともいふ可きものである。

鑄固め式に依つて生じた大穹窿構造は、中世紀になつて積固め式に途を讓つたのである。尤も、比較的大なる石塊を用ゐて作れるコンクリート造と整形正角をなせる小石材を粘着材に依つて積み立てたる石造とは、一方は其斷面雜然として泥和せるに對し一方は整然と固まれるといふ差こそあれ、原理に於ては全く同一であるといふて差支へない。

文化の總ての方面に於て、それは確かにさうである如く、一度完全に達し隆盛を極めた事物——最も良い例は宗教や藝術なぞであらうが——、それにはたゞ衰頽と退化とあるのみで、それからは決して新鮮にして潑溂たるものは生れ出るものではない。自分は先きに羅馬式交叉圓筒穹窿から中世紀の架構穹窿が生れたといつたが、それは彼の驚く可く尨大なるコンクリート穹窿、それは發達の極に達したるあの鑄込法から生れ出たものではない。それは先きに此のまゝでは發達しなかつたと述べたあの模形に正しく切られた石材を以て造つた小徑間の圓筒交叉穹窿から生れ出たものである。

羅馬の事實上全く亡びたのは紀元四七六年であるが、その以前から羅馬の衰頽は甚だしかつたものである。コンスタンチン帝以後は大建築は殆ど出來なかつた。建築技術の如きは日に日に甚だしく退化し頽落して、事實上滅亡せりと年代づけられる前に既に多くの良い技術は殆ど忘れられたといつてよい。其後羅馬市に建つた基教寺院の如き、孰れも帝政時代の廢墟から石材を持ち來つて、之れを加工する事すら殆どせず、柱はもとの柱のまゝ、壁材の如きも故の切石を適當に組合はせるといふ事にだけにして積み上げ、屋根は孰れも木造架構式に組んだものであつた。斯樣にして建築は次第に衰頽し、もと西羅馬に屬した地方に於ては、石造建築すら建てられること稀なるに至りコンクリートの如きは全く忘れられてしまつた。斯のやうな狀態が永く續いて、新しい藝術・新しい建築の萌芽は、總ての文化と同じく八世紀末のカロロ大帝の統一以後に始まるのである。しかも多少とも見られる建築の初まるのは十一世紀からである。是等の建築は——一般藝術も同樣に——「羅馬式の流れをくめ

る」「羅馬式に類似を持つ」「未だ纏まらざる」といふやうな意味から、ローマンス或はローマネスクと呼ばれる。羅馬時代の楔形の石材を迫持ちにして構造した石造穹窿は淡き命脈を此のローマネスク建築に傳へて居る。

羅馬の圓筒形交叉穹窿は兩方の直徑が同じであつたが、ローマネスクではその寺院建築に於て直徑の異る二つの圓筒穹窿を交叉せしめる必要を生じた。技術の退歩した時代に此問題を解決して手際よく天井を架ける事は困難な仕事であつた。其最も不手際の生じ易い處は下から見られる兩穹窿の交叉線の稜角にあつた。これを隱すために、圖の如く、其稜角の上を被ひ乍ら稜線に沿ふて紐形に長く延びた突出物を取付けた（第二十八圖）。これが最初は眞に稜角の不手際を隱す爲めの裝飾であつたが、軈て穹窿の重量をしつかりと此の交叉部に於て受ける役目をなす力骨（チカラボネ）に代つた。これは確かに大なる進化である。既に力骨が出來るとこれが架構式に於ける架構と

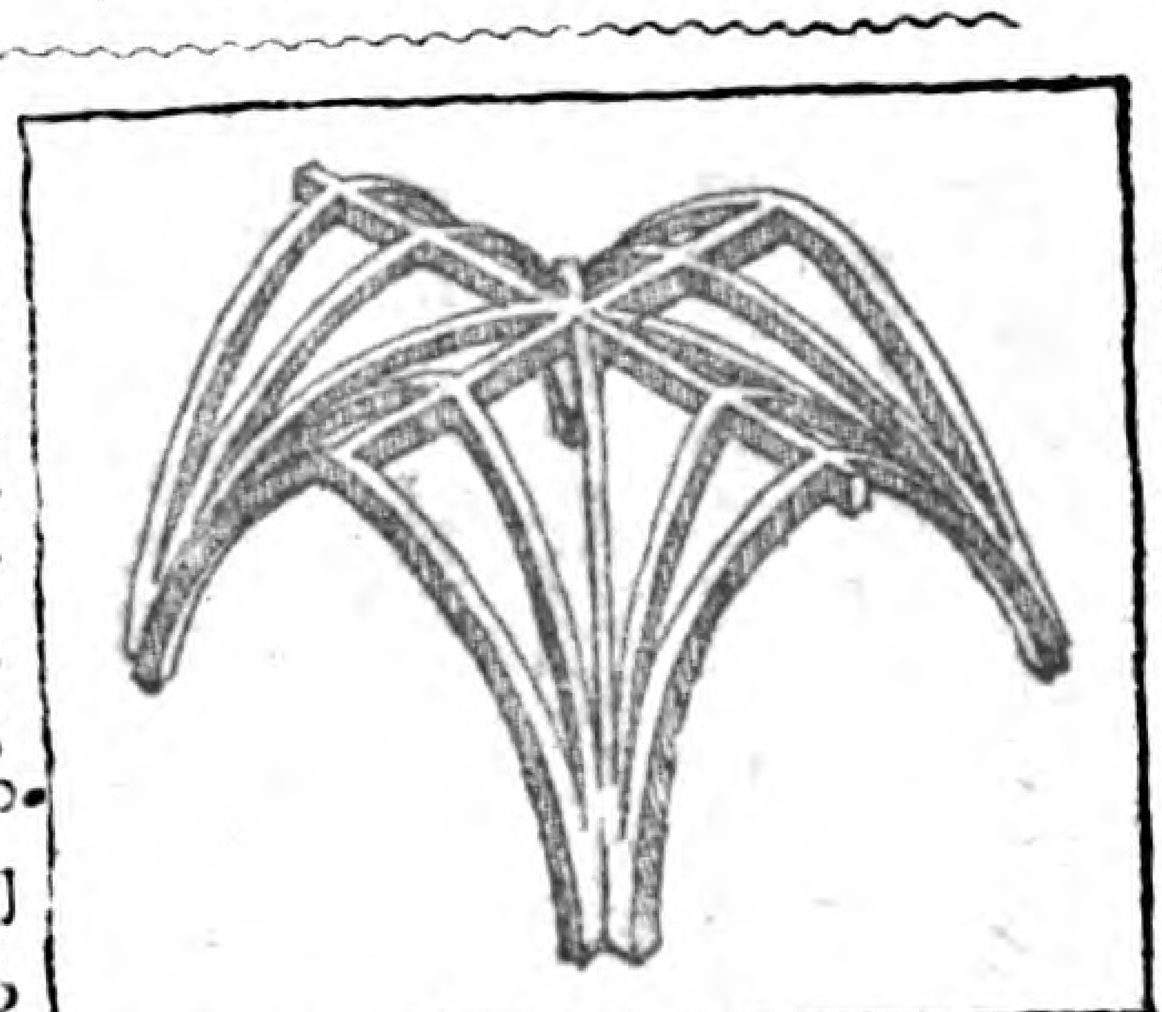
第二十八圖



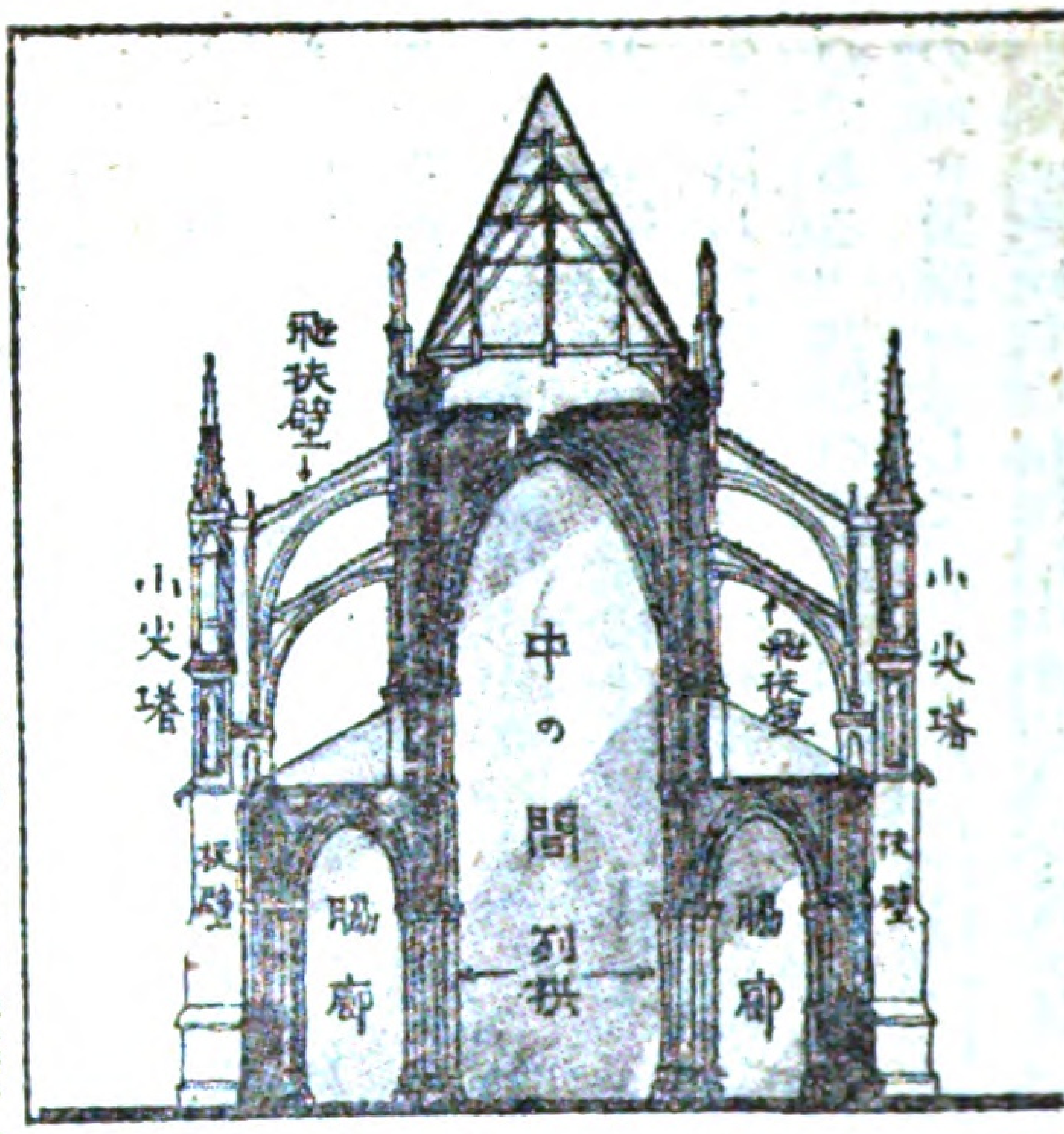
同じ役目をなすが故に穹窿の厚さを減じても差支ない事になつた。此の力骨は所謂肋材（リブ）と呼ばれて漸次に完全なものになつて行くと同時に、寺院天井は、これも異つた半徑の圓筒穹窿の交叉の困難を解決す可く生じた尖頭交叉穹窿に代り行き、肋材の數も増加し來つて、圖の如く恰も洋傘の骨のやうになり（第二十九圖）其肋材の間即ち洋傘の布貼りに當る處を平たい石で粘着材を用ゐて迫持にして塞くといふやうになつたのである。即ち先きにも述べた通り石造の積立て造りもいつかは木造の架構式と同一原理を採用するに至つたのである。しかも其基本をなせる穹窿構造の原理を捨てずして、兩者を合せ得たる所に此建築式の偉大さがある。斯くの如き構造法は、種々の壓力に對し必要の彈力を與ふるやうに、粘着材を用ゐて小石片を積んで構造する石材建築でなければ決して發達し得なかつたのである。勿論此事は獨り屋蓋に於てのみでなく、壁體もまた骨と皮とに別かれ、其骨は扶壁（バットレス）の形を取つたのである。

此ゴシック寺院は其内部は長さに添ふて中央の中の間と其兩側の脇廊とに三部に別れてゐる。そして脇廊上の穹窿の肋材にか

第二十九圖



ゝる推力は、一方を脇廊と中の間との間の列拱の拱柱で支へさ



第三十圖

せ、一方を外壁の扶壁へ支へしめる。又中の間の天井の穹窿の肋材にかゝる推力はこれを其兩壁に於て支へさるけれども、こゝの壁は厚くとることが出來ないから、脇廊の扶壁、を太く高く上部に突出させて、中の間の壁からその扶壁へ弓形の飛控壁(フライイング・バットレス)を斜に架け渡す、そして此の飛控壁を通して來る推力と平衡を得させるやうに、脇廊の控壁上には「重もし」として小尖塔(ピネークル)を乘せるものである。(第三十圖)

以上の如き構法であるから、全建築物の構造は肋材(リブ)、拱柱(ピーアー)、拱壁(ペントレス)、飛控壁(フライイング・バットレス)に依つて架構式と同理に組まれたものといふ事が出來る。であるから脇廊の側壁は、扶壁の間は所謂帳壁(カーテンウオール)となつて上からの重量は殆ど受けぬ事となる、それ故にこゝを大部分大硝子窓にする事が出來た。

斯くの如く壁より天井に渡りて其全體を骨と皮とに別ち、極めて巧妙に力學上の平衡原理に合致させたところ、誠に驚歎に値するものである。而して此の所謂ゴシック建築の美は、其卓越せる構造の何物にも覆はれる事なく、心ゆくまでに眞と力とを表現したところに存する。

中世紀は學問としての科學は甚だ幼稚なものであつたが、その實際的應用の科學は、建築に於て驚歎すべき發達を見た。先きにも木造架構式の處に於て中世紀の西歐羅巴の安定架構の事を述べた。此の如き架構の知識を有せる西歐人が、此の石骨架構穹窿式に到達す可きは當然の事とは申し乍らも、誠に驚異賞讃に値すべきものであつて、此點に於ては、埃及建築も西亞細亞建築も、希臘建築――希臘の科學は古代に於て系統的知識として發達したが、學問は學問として實際的方面から獨立し、應用的には却て前代の埃及や西亞細亞や又後の羅馬よりも遲れて居たものであり、希臘建築はたゞ洗練の美を有するのみである――も、廣大と永續的特性を誇つた羅馬建築も、更に此のゴシック建築に次で表はれるはネサンス建築も、もつとつき込んで十九世紀後半までの建築も、印度建築も支那日本の建築も、此普通ゴシックと呼ばれる中世紀の西歐建築には構造原理の上に於

て到底脚下にも寄り付く事は出來ない。此樣式こそ建築に於て恐らくは最も本源的なものであらう。此建築の斯くの如き構造から自ら生じ來る飛翔的形態には、そこに當代の人々の天空に憧れた熱烈な情熱のこもれるものがあり、誠によく時代の其敎精神を物語る。

ゴシツクの人は石の上に石を積んだ。高く高くと。巨人等のやうに神を攻撃するためではなく、神に近づかん齋務めにであつた。（ロダン）

完全にこのゴシツク藝術の内容を言語に盡さん事は不可能である。それは淡々として明瞭で快活に、情熱的で神秘的でしかも高雅である。力强く、明快に鋭く、强壯にして且つ健全である。それ等を單に形式の示す言葉に於てのみ定義せん事は誤りである。それは精神を、渦間を、一時代をすら體現してゐた。力と平衡とに關する時代の理想は極めて强烈なる一種の建築を生み出したのである。小石材は集められて力强い架構となつたのである。其等の柱身、其等の肋材、其等の扶壁は、凡て弓弦の如き緊張を示して、若しそれが打敲かれたら、其張力は音樂的曲調を響かすでもあらうほど、全體が强い緊張を表現してる。

積固め式の發達は先づこれで止まつてしまつた。この以後はもう何等の發展をも見せずに寧ろ退歩した。隆盛を極め完全熟達の域に達した藝術からは最早や何物も生れ出ない。それは絕頂であるからである。

然らば積固め式は現在如何なる狀態のもとにあるかといへば、今日は鐵骨及び鐵筋コンクリート構造の發達があり、これが最も盛に用ゐられ、是等の新建築構造に於て、それは單に被覆材として二次的用途をなすに過ぎない。

積固め式は他の方法と融合して現在或種の進化の途にある。

架構式の原理に至つては學術的に益々進歩し、益々博く用ゐられつゝある。

總て是等の構造の學術に關する事項は、架構式も積固め式も、また別に後廻しとして殘して置いた小舞壁式も、一括して科學の發達と建築構造の進步なる章下に於て、述べる事とする。

（五）科學の發達と建築構造の進步

文藝復興以後の建築は、最初は羅馬への、次では希臘への模倣であつて、それは單に趣味の建築であるに過ぎなかつた事は第一章に於てこれを述べた。佛蘭西英吉利に於て中世紀にあれ程發達した第一原理の建築は此時代に於ては全く衰微し終つたものである。そしてこれから近代に至るまでの進步發達はまたもや徐々とした道をたどつたものである。それは當然力學の發

述と作はねばならなかつたからである。

文藝復興の現はれの一つは古典學藝への逆もどりであるが、しかもそこからは自ら近代科學の萌芽があつた。人本主義的の思想と自由討究の精神とがそれの眞髓であつて、是等が古典學藝の形式を借りて起つたと見る方が正しいかも知れぬが、兎に角斯の如き關係の下に、學問はまたもや希臘風の系統だち組織だつた正確な知識として復活した。建築の構造學に最も密接な關係を有し殆ど其根本をなす可き靜力學の如きも、それが系統だち組織だつた學問と離れて、實用的の發達をなすといふ事は出來なくなつて來た。

元來力學の祖は希臘に於けるタレンツムのアルキタス(約紀元前四世紀の人)であつた。彼れの研究の今日に傳はるものはないが、約同時代のアリストートルは、槓杆の作用を科學的問題として認識しこれを式で說いて居るといふ事である。アルキメデス(紀元前三世紀の人)は重力の平衡に付て意見を發表してゐる。これが靜力學の始まりといつてよい。併し乍ら希臘では構造原理は發表しなかつた。其理由は、埃及や西亞細亞や羅馬では科學は實際的知識から成立つたのに、希臘の科學はこれに反して組織高い思索から成立つたからであつた。そして、其結果實際的利用に欠けてゐたのである。故を以て、彼の藝術を以て系でた希臘建築も工學上からは殆ど見るべきものがなかつたのである。高雅端麗を以て古今に絕する彼のアテネのパルテノンすらも、これを構造原理の上から批判すれば、殆ど價値なき幼稚極まるものといつてよい。

科學の總ての方面に於て、組織的知識の發達に貢獻した希臘人の役割はたしかに大きなものであつた。この理性的であり思索的であつた民族の科學の成長に寄與したる所は實に偉大なるものである。然し乍ら科學の大なる萌芽は寧ろナイルの河堤やチグリス・ユウフラト兩河の低地に於て見出される。そして是等の地方に於ける文化は希臘のそれの如く知的であり理論的であるといふよりは、寧ろ實際的でありそして宗教的であつた。斯の如き關係から建築の構造的方面が寧ろ希臘のそれよりも偉大であり眞實であつたのは當然な事である。

古代埃及人の幾何學や數學は理論を重じなかつた。それは具體的問題即ち地積の測定や食料の計算や建築の角度の如き實際的解決に關係してゐた。彼等の工學上の知識は、熟達に依て幾百噸の重量ある方尖碑を建てる技術を會得して居た。

バビロニア人の數學は天體の觀測と度量衡の正確に關して發達した。又機物としての梃子や滑車や旋盤などは古く使用されたの彼等の建物には吾人に取つて全く近世的と思はれる下水や

上水の系統が供はつて居た。

埃及人に取つて面と立體、面積と容積の問題であつた幾何學は、希臘人に取つては線と角度の研究となつた。數學は抽象的で幽玄なることを主調とした、圓錐體をいろ〳〵の角度をなす平面で切つて、そこに生ずる種々の曲線に對して研究するやうな事をした。

アルキメデスは日常の必要の滿足と結合された技術は賤む可く卑俗なものであるとした。アリストートルに依ては、科學は總て一般原理の公式化に達して而して後形而下の研究にもどらねばならぬと考へられた。

文藝復興以後の學問はまたもや此抽象的の途をたどつて、そしてその一般原理の公式化の一段落の濟むまでは工學の發達は徐々たるものであつた。

羅馬人は希臘人の抽象的で思索的であるに對して、これは實際的で統括的であつた。羅馬人の科學に於ける興味は、それが實際生活上に直接關係のある事が證據立てられた時に强かつた。

羅馬の科學を代表するものは、第一章に於て述べたヴィトルヴィソスの著書「建築十篇」Da Architectura libri Decem)である。此書は永く伊太利建築の指導者として傳はり文藝復興以後屢々各國語に飜譯された。英譯ハーバード大學版、四六二倍本、スモール・ピカ形の活字で三十五行三百二十頁を算する書である。その內容の概略は既にこれを掲げたが、これに依つて見るにヴィトルヴィソスの目的は、科學の研究から得たものを實際的知識に振向けるにあつた。そして彼は夫等諸科學を自己の專門とする工學に於ける利益に回向する爲めに、勤勉な學徒である事を示してゐる。羅馬人は科學に於ても美術に於ても遂に希臘に卓越する事は出來なかつたが、工學に於ける發展は彼等の統括的であり實際的である民族的必要にぴつたりと應じたので、此の分野に於ては遙に希臘人を凌駕してゐた。

中世紀の科學の發達を阻んだものは、主として基督教的理想と異教的思想との衝突であつた。此世を穢土と感じ、ひたすらに未來の天國にあこがれた人々にとつては、科學の研究は意義をなさなかつたものである。單に意義をなさない許りではなく、此の非現世的の思想は、古代の教父に依て希伯來の教條と希臘後期の哲學思想とを融解して組織せられ且つ異教徒の攻擊を防がん爲に主として論爭の武器として造られたる神學の上に其礎を置いたが爲めに、眞理の探求を主とした自然科學に對しては强烈に挑戰して地上より其姿を沒せしむるに至つたものである。

所謂暗黒時代と呼ばれた中世紀の前期も、第八世紀の後半カロロ大王の統一頃から稍々開明の曙光を現はしはじめ、更に十字軍の結果はサラセン文化の影響を受ける事になつて、益々人智の開發を催促し、學術の研究も漸く盛となつて來た。

これより先き、アテネに次で榮えたアレキサンドリアの智腦文化は、サラセン人に移つて、そこで印度の藝術と科學とがこれに融和せられ、九世紀に於ては北サラセン文化の隆盛は其絶頂に達し、バタダットの教主の地位は科學の中心となつたものである。代數學の最初の著はセラセン文字に依つてかゝれ、物理學及び化學は天文學と等しく其發達をサラセン人に負ふ所多いのである。

西歐人の回教徒に對する進撃の大運動たる十字軍は一〇九六年から一二七〇年に亘る七回を以て終つた。回教徒の西班牙併呑は八世紀の初期であつた。東方に於て十字軍の遠征屢々なるに當り、西班牙にも亦十字軍が起つて、基督教徒は漸々勢力を回復し、一二一二年には回教徒は南方に窘縮せしめられ、北部三分の二は全く基督教徒のものとなつた。

西方基督教國中世紀社會の組織は十三世紀に於て完成された。此の時代こそ基督文化の完成に於て偉大なる時代であつた。それはサラセン文化に負ふところ少くないのである。そして

[illegible]から新様式の建築が流出するに至つたのである。この様式こそ建築に於て第一原理のもとに成り立つて居る事は既に述べた。其所には材料の曲率を應用す可き何等[illegible]な數學もなかつた。扶壁の推力を測定す可き何等組織的な力學もなかつた。しかし經驗は徐々として撓まざる不斷の實驗の結果こゝに到達する事が出來た。しかも其構築をなすところのものは、神に對する憧憬、天國に對する熱情であつたのである。

先きにも、實際的宗教的の民族であつた古代埃及人や西亞細亞人の建築が理性的であり思索的である希臘人のそれよりも偉大であり眞實であつた事を述べた。中世紀チユートン民族の建築がまたこれを物語る。

文藝復興以後の文化はチユートン民族の文化である。文藝復興を中世紀思想と反對な古典への逆もどりと見るよりは、中世紀の苗圃に培はれたチユウトン民族の文化が、ここに最初の花をつけたと見るがよいかも知れぬ。

中世紀の文化が爛熟の域に達した時には、伊太利は既に歐洲中の富力と知力の最もすぐれた國であつた。加ふるに希臘系なる東羅馬帝國に接近して絶えず多少の感化を受けて居たから、純粋に古人の思想を研究しやうとする風が自然に他國よりも早く

起つた。それに十四世紀末から十五世紀にかけて東羅馬帝國が漸く土耳古の壓迫を受けて來た時、希臘學者が陸續として伊太利に逃れ來つて上流者の歡迎を受けた、折から人心伸張の機運に向つて居たので、其等の學者の感化に依て古書を正解し其內容が研究さるゝに至り、人本主義的（ヒウマニスチック）の運動は漸く進展を見るに至つたのである。要之、隱喩的にルネサンスなる言葉に依つて表はされたる此「再生」は事實「人本主義的精神」と「學問の復活」との傳播であつた。

學問の復活！、それはまたもや希臘風の系統だち組織だつた正確な知識として復活した。其處には既に早く力學の萌芽が認められる。それは先づ十五世紀の建築家アルベルチに依て始められた。彼は平衡の原理と運動の標準的原理の研究を發表して居る。アルベルチに次では彼の有名なるレオナルド・ダ・ヴィンチ、此の偉人はよほど實驗的にそして秩序的に靜力學の研究を發表してゐる。彼れこそ寧ろ現代靜力學的科學の始祖といつてよいであらう。併し乍ら殘念な事には彼の自筆のノートブックが未完成に終て居る事である。このノートブックが整頓せられ公刊せられたならば、科學者としての彼の名聲は確かに今日美術家としての名聲に壓倒されなかつた筈である。のみならず剛體の重學は十六世紀の初頭に於て明白にせられた事であらう。從て結局、應用力學の進歩はルネサンス建築をして單に古代の形式模倣を事とするやうな墮落を來さしめず、近代建築の發達をもつと早く持來した事に相違なかつた。

彼は常に主張して眞の科學は觀察に依りて初まるものとなし、場合に依つては數學的推理を適用する事が出來れば更に其確實の度を增す事を得といつて居る。彼は後年ガリレオに依て證明された慣性の原理を說き、永久運動の不可能なことを理解し、また槓杆の法則を說明し、それを以て基本的機物として、一切の他の機物はそれの變化せるもの若くは其の複雜となつたものと思惟して居た。又彼は液體の壓力に關するアルキメデスの思想を復活し、また流體力學を論じて居る。其他天文學、人體解剖學生理學に於ても卓越せる地歩を占め、眞に文藝復興の眞精神の權化とも見らる可きものであつた。

ダ・ヴィンチ以後、幾多の科學者を輩出し、科學は近代に至るまで次第に加速度を以て進みつゝあるが、茲では是等の總てに一々觸れて居る事は出來ない。今自分の茲になさんとするところは主として靜力學に付て述べ、これが工學の進歩と相交渉して建築構造の發達する其道程を說けばよいのである。

ガリレオ・ガリレー（一五六四―一六四二）の永久的な事業の一は實驗的で且つ數學的な力學の基礎を建設したにある。ル

ネ・デカルト（一五九六―一六五〇）の事業中著明なものは、確實な數學的地歩と、思索的な物理學の學說と、深遠な批評哲學の結合であつた。殊に數學に於ける彼の最大事業は幾何學の問題に代數を應用した事にある。

ガリレオとデカルトとは、ニウトンの爲めに地盤を清める爲めの所謂「露拂ひ」であつたといつてもよい。あらゆる時代を通じて科學界の最大偉人たるアイザック・ニウトン（一六四二―一七二七）、彼れの事業のうち吾人建築學に取りて特筆す可きは、微分積分の發見と、多くの力學上の理論とにある。

科學――主として靜力學の進步が著しくあつたに係らず、建築構造は一向に進步を示さなかつた。それは構造と力學と別々の對立であつたからである。此狀態に於て十八世紀の終末まで續いた。

ダ・ヴインチは書いて居る、「先づ理論を組立て然る後實地に向ふ可し、然らずんば汝は舵なき舟上の水先案内の如くならん」と。これは古くアリストートルに依て、科學は總て一般原理の公式化に達して而して後形而下の研究にもどらねばならぬ、と考へられたのと全然同一である。

科學がどこまでも組織立ち系統立つた正確な知識として進みつゝあつたに對して、ルネサンスの建築は主として趣味の問題として取扱はれつゝあつた。しかも其趣味にも一種の型にあつては曉の露の如き新鮮さがあつたが、程なく建築は形式のうちに嵌め込まれるに到つたのである。

レオナルド・ダ・ヴインチが曾てその沈默の大技術室に於て始めた事が、ガリレオとニウトンとに於ては、更に革新思想に對する渴向的の力を得、制し難き勢力を出て突進した。今や實に古代以來その科學的理論の第二の主要期が始まつた。その先頭に立てるものはガリレオ自身に依て取扱はれ彼の名に依て稱へられた靜力學上の「問題」、即ち、其一端が壁に固定せられ、其れ自身の或は其れに加へられた重量に依て破折せる梁の問題であつた。これ即ち最初の「曲り」に對する强さの理論」であつた。

ガリレオはまた合理的構造の研究者であつた。彼は、中空體は同一の重さの中實體よりも挫屈力に對してよく耐える事を發見した。

平衡の學理としての本來の靜力學の基本原理はガリレオの時代に既に完全に知られてゐた。それ以上の科學上の發展は、同樣にガレリオと共に始まつた個體の運動に關する理論としての動力學の發展と並行して進んで居る。

英のフーク（一六三六―一七〇三）及び佛のマリオツト（一

六二〇—一六八四）を經て、端のオイラー（一七〇七—一七八三）に依て作られた「屈曲に依る破壞に對する強さ」に就ての方程式に至るまでの彈性理論の完成、特に曲りに對する強さの理論も亦架構の計算を助長した。十八世紀の後期に佛のクーロム（一七三八—一八〇七）は平衡軸即ち中軸の正しい位置を與へ、既にダ・ヴィンチに依てその重要な事を認められてゐた力の能率を計算し、而して横斷面に顯はれる內力即ち剪斷應力を最初に認めた。

此の發見と相伴つてきたその說明の分析的並に綜合的の方法が完成した。數學的計算には既に抽象的符を以て計算する代數が成立つてゐた——それにあづかつて最も力あるものはヴィエタ（一五四〇—一六〇三）であつた。原因と結果との間、及び全體と部分との間の關係の表現が「方程式」となつた。是等の分析に圖解法を導き入れたのも亦ヴィエタであつた。安定の吟味は數を以て示せる公式及び比較的圖式解法を得せしめた。ここに於て實に此種の表及び案內書が迅速に相次で現はれるに至つた。そしてそれは佛國に於て最も隆盛であつた。

茲に至て初めて不完全ながらも、アリストートルの所謂「一般原理の公式化」の一階梯に達した。ダヴィンチの「先づ理論を組立てよ」の一段の組立てが出來上つた。其所には當然不充分ながらも「形而下の研究」が來らねばならず。「然る後實地に向ふ可し」の實地が始まらねばならない。

系統立ち組織立つた正確な知識としての純粹科學が應用工學に途を與へた。そして先づ木造梁の架構が發達した。尤も、徑間の大さと、上に掛る重量とに基きての木造梁の大さの表は十八世紀の初期に既に佛蘭西の學者に依つて經驗から定められたものはあつた。併し乍ら力學上の計算からの解決は茲に於て漸く其緒に達したのである。

此の力學上から架構上の大さを算出する事の合理不合理、適不適の論戰は當時の巴里に於ては極めて劇烈であつた。そうして十九世紀の初期に於てもなほ強く持續した。

此の問題に對する論難は一八〇九年から一八一一年の間に建築された巴里の麥市場の球蓋の落成に依て殆ど緩和された。在來致したる此市場の建物は一八〇二年の火災に遇ふて破壞せられ、而して如何にしてこれを耐火的に設計すべきかは長年月間總ての人の興味を以て迎へた問題であつた。此問題が新舊二派の抗爭を熾烈ならしめ、計畫に計畫が相次で現はれた。或建築士はこれを石造穹窿にしやうと主張した。然し乍ら遂に一八〇九年に建築士ベランジエーの大膽なる計畫が用ゐられる事になつた。その計畫は徑四十米突の球蓋を鑄鐵の助材で組立て、鋼

版を以てこれを葺かんとするものであつた。此計畫のために工師プリユネは計算の方面を擔當して正確な明細書と全體の構造の規矩と並に有らゆる寸法の一覽表を供給した。此設計はたゞに鐵建築の歴史上極めて重要なものであるのみならず――それ以前に大なる鐵橋が設計されたが――就中今日の鐵建築に於ける靜力學的計算が獲得した優勢の始まりをなすものである。此事件の重大なる事は巴里に於て大に認められ、一八一一年の落成式にはナポレオン皇帝すらも出席した程である。

自分は今茲に建築への鐵材の使用に就て少しく述べる必要を認める。建築への鐵材の使用は希臘羅馬時代にありては、僅かに石材相互の接合に使用せられたものである。中世紀に於ては其使用は寧ろ廢められた。其最も多く使用されたのは入口の扉や障碍などの裝飾的の格子である。十四世紀に於て歐洲では水力を利用して溶鑛爐に風を送る方法が採用され、そのために生産品の良質なる事と産量とに於て大に製鐵業の進歩を來し、爾來數百年段々と盛になつて來たが、先づ木炭の缺乏を來たし、殊に英國に於ては甚だしく其影響を被つて、一七一三年頃から其製法に石炭を使用する事となり、爾來長足の進歩を來したものである。歐洲に於て鐵材を始めて構造物に用ゐたのは、一七七三年―一七七九年に架せられた英國シロプ縣ブロズレ村に於てセバーン河の徑間百尺の鑄鐵アーチの橋だといふ事である。家屋に於ては一七八五年佛國ブーロニユに於て床梁を鑄鐵で架したのが最も早い記錄だといはれて居る。しかも是等の比較的單純な使用は麥市場の球蓋に於て複雜なものに代つた。傳統的の材料、例へば木材、石、煉瓦の如きものを以つて梁や屋蓋を構造する間は、多少の複雜、多少の過大はだうにでもなつたらう。それは在來の經驗に依ればよかつたからである。併し乍ら鐵の如き新材料を用ゐて、しかも斯の價高き材料を用ゐて、新結構を試みやうとするには、最も經濟的に使用す可く時代の學問にたよらうとする事は當然である。或は力學が既に斯の新材を實地に應用し得る迄の發達の域に達したと見る方が正しいかも知れぬが、兎に角茲に於て一般工學とは別の途を取つて組織的の科學として發達し來つた力學が工學と親しい接觸をなすに至つたのである。即ちこれが靜力學的計算が獲得したる優勢の始まりである。

然し乍ら、力學者と實際家との間の個人としての論爭は其後も持續した。これは單に彼の十八世紀の末期以來醸成された Architect に對する Builder 及び Engineer の抗爭の特殊の形に過ぎなかつた。讀者はなほ一度第一章にもどつて Architect と Builder と Engineer の意義に就て吟味するの必要がある

と思ふ。なぜかといふに今茲にまた再び是等の説明を繰返すことは自分のよくせぬところであるからである。兎に角此等は孰れも正鵠を失して居た。Builder 及び Engineer の側では建築は「總てが幾何學に基き、全部「數學的科學の娘」であつて、その「科學的歸化は今や必然になつた」と主張した。これに對して所謂 Architect の側では、理論の確實性を否認し、「計算を行つたにも拘らず崩壞した建築物の全部の表を擧げて、各藝術的作物を決定する「個人的天才」の力を表明したりした。實際、當時の Builder や Engineer の側では新科學を實地に應用せんとする熱心の餘り犠牲を出したものも相當にあつた。

巴里に遊んだ人、或は何か巴里の歴史や藝術に關する書物を讀んだ人で、カルチ・ラタンのスフロ街にたつパンテオンを知らぬ人はあるまい。其玄關正面にロダンの有名な彫刻「考ふる人」の像がおかれ、内部にシャバンヌの壁畫があつたりするので一層有名な、すぐれた形を備へてゐる古典式の建築このパンテオン堂は、これのたつて居る街を堂の作者にちなんで名付けた其名のスフロに依つて、十八世紀末から建てられたものである。そして此建物はこの秀でた建築家スフロの設計のもとに、其結構の一部は數學者に依て計畫されたものであつたが、これ程の建物も一八〇四年に其球蓋が陥落した爲めに、これがまた計算の確實性に就て當時の輿論を動かす一つをなしたものである。斯の如くして靜力學的理論及び計算は漸次に進んで、純正科學と工學との接觸とを次第に濃厚ならしめた。そして是等の理論及び計算と相結んでこれが發達に協力したのは圖式解法の進歩であつた。これは解析的研究と幾何學的觀念から出た綜合的研究との結合に依つて起つたので最初、力の大きさを其力の方向に並行に引いた直線の長さで表はしたのは、シモン・ステブインヌス（一五四八年—一六〇三年）で、彼は一五七六年に於て既に圖式法を創始して、「一點に働く三力はそれが直角三角形の三邊に並行して且これに比例する時に平衡を保つ」といつた。後一六八七年にニウトンが「力の平行四邊形」の説を發表し、同じ頃にヴァリニョンが「力の多角形」及び「索狀多角形」を發表して居る。これが「圖式力學」の基本をなすもので、これから次第に發達したものである。

是等建築に於ける材料及び構造の強弱に關する力學が、數學的科學と實地との密なる接觸に依て、科學的に信憑し得可くまた容易に適用し得可きやうになつたのは十九世紀の後半期からである。

そして是等の學問が先づ哲學的思索に依て假定が導かれ、物理學實驗と數學及幾何學とに依つてこれが正確なる知識の形を

とりながらも　第一の假定の正確さが證明せられ　其方法の開明せられる頃には、軈て第二の思索が生じ、そして其證明の完成せられる頃には更に第三の思索を生ずるといふやうに、力學は今日益々高い考察に進められ乍らも、大體に於て建築は力學上の計算から一通りは合理的構造を得る程度に達せられたのである。そして其達成は主として架構式の問題としてゞある事に深く注意する事を要する。

玆に、アリストートルの考へてゐた事は建築に於ては二千二百有餘年後に於て、レオナルド・ダ・ヴインチの言つたふとは四百有餘年後の今日に於て大體に於て達せられれのである。併もなほ今日の建築は力學上の計算に大なる束縛を被りつゝある。これで到底、建築を其用途に應じて必要な形に思ふがまゝに構造する事は出來ない。力學は一方に於て益々高い思索に進み行かねばならぬと同時に　他方に於て一通り研究の達せられた部分は　廣く一般化されつゝ、極めて容易に構造に應用せらるゝやうな形をとらなければならない。

是等力學理論と相並行して發達し、力學のお蔭を被れる事の多いのは鐵骨構造と鐵筋コンクリートと構造とである。建築への鐵材の使用に就ては先きに少しく述べた。併しそれは十九世紀初期の鑄鐵の使用までゞあつた。鐵材は其性質上架構式に組まれるのが得意であるから架構式に發達した。爾後製鐵の發達は鐵材の用ゐられるもの次第に多く、一八五一年に於ける英國の工業博覽會に、水晶宮といふ硝子張の大建築が出來たが、其高さ約二十五間、坪數二萬一千五百坪といふ此建物の骨は鑄鐵からなつてゐる。

一方製鐵事業の進歩は益々著しく、一八五六年にはヘンリト・ベセマーの製鋼法、一八六三年にはジーメンス・マルチンの製鋼法が現はれ、溶鐵溶鋼の製法が盛となつて來た。

一八八八年に出來た蘇蘭土のフォース橋は、長さ一哩半の間を鐵骨で架渡し、これに要した鐵骨は五萬噸に上り　毎日三十人のペンキ職が三年半の時日を以て僅かに一回の塗り上げをなすに至り　漸く塗り上つた際には、再び元に返て塗り替へなせればならぬほどのものである。一九〇〇年の巴里博覽會に出來た彼のエッフェル塔の如きはまた鐵工事の驚く可きもので高さ約百五十間を算して居る。米國の市俄古や紐育などでは丁度此頃から鐵で架構式の骨組を造つてそれを煉瓦や石で被覆する建築が出來、これが揚水機や煖房裝置や昇降機などの發達に伴つて、十階、二十階といふやうに次第に高層建築が生ずるに至つた。一九一二年（？）に竣工した紐育のウールウォース・ビルングの如きは　階數が五十五階　高さ地上から百三十間、建築

千五百坪　總延坪が四萬坪、升降機二十八個、總て上下せば一度で四哩を動く事になり、外部の窓硝子だけで面積千五百坪電燈線の長さが八十七哩といふやうな巨大なるものである。

是等鋼鐵を以て架構を組み、外部を煉瓦を以て破覆したものが鐵骨煉瓦　コンクリートをしてたものが鐵骨コンクリートと呼ばれるのである。鐵骨はこれを耐火材料を以て破覆せぬ限りは火災に對して極めて弱く、大正六年國技館の燒けた時の如きは二時間を出でざるに鐵骨は飴の如く曲つてしまつた。鐵骨構造には現今普通軟鋼を用ゆるものであるが無破覆の場合には華氏の千度に於て既に損傷を受けるものである。であるから鐵骨構造を耐火ならしむる爲めには煉瓦やコンクリートの如き耐火材料を以てこれを被覆する事を必要とするのである。即ち架構式を主として積立て式及び鑄固め式を副とした構造法である。

次は鐵筋コンクリート構造の話であるが、此構造は先に述べた「小舞をしんとした泥壁の、その小舞を細い鐵棒で組み、其泥にコンクリートを當てたのと全く同じものである。それは決して泥壁との期せざる偶中ではない筈で、張力や彎曲力に對して比較的强き材料をしんとして、これを凝固する性質の材料の中に包み込む是等の手法は、古代より殆ど無意識的に知られて居る傳統である。

古代のコンクリートは其材料として火山灰石灰と砂と小石とを用ゐた。火山灰は天然の噴火作用に依て灼熱された粘土で多量の可溶性硅酸及礬土を含有して居り、石灰と接觸するやこれと化合して容易に硬化作用を呈するものなる事は先きにも述べた筈だ。しかも此の火山灰の使用は中世紀の歐洲にては永く忘れられて居た。

人造セメントの發明は一八二四年卽ち日本の文政七年に、英國でなされたもので、ポートランド産の石材の色に似て居るから、ポートランド、セメントと名付けられてゐる。日本でもまた同樣に呼ばれて居り、我邦では明治七年に此製造が始まつて居る。此の人造セメントは、粘土質及び石灰質の材料を適當に調合して交ぜ合せ、最初の熔融點に達する迄煆燒したる後水と石膏（生のもの又は煆燒したもの）を加へて得たる溶滓を粉末にしたものである。そして其の凝結に付ては、其中に含有する硅酸と石灰とに水を加ふるに依つて起る化合に因るもので、酸化鐵、礬土、アルカリ等も亦與て力ありとせられてゐる。そして其使用は最初のうちは、これに砂、或は石灰及砂を混じて石煉瓦等を積むに用ゐる粘着材にするか、又はこれに砂と小石、或は石灰と砂と小石を混じて一般基礎用のコンクリートを造るに限られたものであるが、それが次第に壁體にも用ゐら

ゐるやうになり、遂で鐵筋コンクリートが世に普及し、或は床板や柱や其他建築の總てをこれで行ふやうになつた。これは先にも述べた如く鐵骨とは異つて比較的細い軟鋼の棒を編んで、こんの編んだものをコンクリートで包むものである。

元來コンクリートはこれを押潰すには容易ではないが折るには甚だ容易である。即ち壓力に對しては強く張力に對しては弱いのである。然るに鐵筋は之にに反して張力に對しては強く抵抗するを以て、これをコンクリートの中に入れゝばコンクリートの弱點を補ひ、押潰さうとする外力に對してはこれをコンクリートに依頼し、引張らうとする外力に對しては鐵筋がこれに當るといふ樣に、二つのものが共同作業をなす事に依て丈夫なものが得られるわけである。斯ういふ事が十九世紀の中葉以後になつて實驗せられた。そして茲に鐵筋コンクリート構造が建築に用ゐられる事になつた。其方法は、鐵筋を編んでその周りに木で假枠を作つて、其中にコンクリートを流し込み、固まつたところで外の假枠を取りはづすので、結局銅器や鐵器のやうに一體として鑄出されるもので、どこが接目であるといふところがない。であるから少し氣取つた呼び方では Monolithic Construction などいふ。Mono は單一 lith は石といふ事で、一つの石から成つてゐる構造といふ意味である。茲に鑄固め式がま

た目に調和を[illegible]

併し乍ら、これでは[illegible]床を作るのには[illegible]架構式のやうにどこもかしこも同じ厚さに打ち上げるといふ事は甚だしく不經濟であるから、架構式と同じやうに柱や梁に當る部分を大きく、その間の壁や床やを薄くする方法を取つて居り、又架構材を此の構造法で鑄出して、出來上つて後其の架構の間を他の材料で填充するといふ方法もとつて居る。此のやうに鐵筋コンクリート構造法であつても亦、其方式が以上述べる通りのものであるから、これは鑄固め架構式といふのが最も適當した言葉のやうに思はれる。

なぜこれが理想的構造法であるかといへば、これは當然耐震構造に容易に出來るからであり、またコンクリートは熱に對して強く攝氏の二千度位の熱に遭ても殆ど何等の損傷を受けず耐火構造が容易に得られるからであり、その上更に強い酸や強いアルカリに對しても反應を受けることなく、耐久的の建築が得られるからである。

之を要するに將來の建築構造は、依然として架構式への進化であり、これに伴つて鑄固め式への進化と、此兩者の混交にありといふ事が出來る。そして是等の材料としては鐵とコンクリートである事は總ての識者の一致するところであらう。

嘗てラスキンは其著「建築の七燈」のの第二章「眞實の燈」中に鐵の使用に付て斯う述べて居る。即ち「近頃我々が陷らぬやうに用心すべきこの種の墮落（構造の虛僞的假裝の類をいふ）を最多く生ぜしめる原因は恐らくかの如何はしい形を生み而もその適當の法則をも制限をも定める事の容易ならざるあるもの、即ち鐵の使用である。（中略）理論上からは何も鐵が木と同様に使用されてはならぬといふ理由はないやうである。而も全部金屬構造に適當される新な建築法則の組織が發展される時代が多少近づいてゐる事であらう。（中略）私が眞の建築は鐵を構造材料として認容せず、ルワン大寺の鑄鐵の中央尖塔或は我々の停車場や我々のの教會堂のあるもの丶鐵の屋根や柱の如きは全然建築でないと想定する事は恐らく許されるであらう。（中略）思ふに、金屬はセメントの如き連接物として用ゐられても、支持物としては用ゐられないことである。（中略）それ等の使用はいつも而して明かに單なるセメントの力に依つて代らせ得るやうなものたるべきことである。（後略）」といふやうな事をいつて居る。支那の古い言葉にも金城鐵壁といふ事がある、此言葉から來る感じは鐵に何等の被覆を施さずにその儘むき出しにした壁を思起させる。ラスキンも亦鐵が斯ういふやうに用ゐられるであらうと思て居たのに、ルワン大寺の鐵の尖塔や、其當時用ゐられてゐた鐵の屋根や鐵の裝飾的の柱などに付て論じて居る事や、なほ文中當時の製甲職鬪組なども引用してゐるのでもわかる。それにまた此文に依ても諒解せらるゝ如く、ラスキンはセメントがまた石や煉瓦の膠着材として用ゐられることをよみし乍も、それが今日の如く主たる壁體を造るものとしては、更にそれをその儘壁體の表面仕上げに用ゆるが如きは、到底ゆるされぬ事としたに相違あるまい。

しかも時代の推移と伴つて斯ういふ思想は著しく進んだ。結局建築の形は其の時代の用途と材料とに依て決定さる可きであるといふ考が行き渡つた。

近代建築に於ける新材料は、主として鐵とコンクリートと硝子とである。鐵とコンクリートに就ては既に述べた、自分は今玆に硝子に關して述べたいと思ふ。

硝子は既に有史以前の埃及に於て用ゐられた、併しそれは嵌込みの方法に依つて飾玉の如き裝身具として用ゐられたものである。酒盃其他の容器として用ゐられたのは紀元前二千年乃至千五百年以後の事である。硝子は埃及を起點として各地に傳播したので、建築には最初壁面裝飾として用ゐられた。それは本來瑠璃の如き寶石を模倣するために、若しくは或場所を蒼空の意味にするためであつた。即ちモザイツクとして壁に貼り付け

られたものである。透明無色の硝子は、紀元前三六〇年希臘で發明した。

硝子で温室を作つた事は羅馬時代にある。窓に硝子を用ゐた最初の遺跡はポンペイ市の浴場である。それは鑄込んで作つた一枚板で大さは三尺六寸餘であつた、同市の「ファウンの家」では青銅の骨の小さな鑄製硝子を篏め込んだものが用た。羅馬の末期に近く窓に硝子の使用が増して來ても、それは極めて稀で羅馬人は窓に多くは雲母や雪花石膏(アラバスター)やリンネルなどを篏めて居た。そして彼等が硝子を家に取付ける方法は、一つは中世紀の方法と同じく青銅や銅や鉛などで枠を作てするものと、他は大理石の扁板を窓いつぱいに取付け、其板に多くの圓形の孔をあけて其孔に色硝子を篏める方法とであつた。

透明硝子は既に希臘で發見されたが羅馬時代の窓硝子は一般に綠色を帶び透明ではなかつた。故に窓に用ゐるために透明の白硝子を得やうと當時の工人は頗る苦心したものであつた。かく無色透明の窓硝子を得る事が困難であつた結果として、自然に硝子の着色を窓の場合に利用してそれを裝飾的意味に於て用ゐる傾向が生じた。即ち種々の色硝子の小片を金屬骨でおさへてモザイックとして窓に篏めたのである。併しこれは既に基督時代に入てからで最も古い記錄は三三七年コンスタンチン帝の建てたサンパロ寺院に關する記述である。それによると窓は色硝子のモザイックで恰も春の花野のやうに輝いてゐたといふ事である。此の方法が進んでカロロ大王の頃から、ステインド・グラスにして寺院の窓に種々な形象を表はす事が始まつた。

硝子の製法は中世紀を通じてヴェニスのムラノが最も盛であつて、そこから歐洲各國に傳はつた。漸次盛となり、次で英吉利にも亦盛となつた。窓に使用せられる硝子としては十八世紀の後半に板硝子を鑄造する方法が完全にせられた。其性分に於ても、在來のものは加里石灰硝子（或は單に加里硝子）といふボヘミアのクリスタル硝子はこれに屬す）や、加里鉛硝子（或は單に鉛硝子ともいふ英のフリント硝子はこれに屬す）などであつたが、一七九七年曹達製法が發明せられ、一八〇八年には硼硝の應用せらるゝあり、又燃料に於ても薪材より石炭となり、瓦斯に遷つたが、特に一八五六年に於けるジーメンスの瓦斯窯改良は硝子製造に一紀元を劃したものであり窓に用ゐらるゝ硝子の殆ど全部は曹達石灰硝子で、其一部分の鑄込硝子を除いては、殆ど總てが、一度吹細工で中空球形に吹き出したものを其球形を斷ち割いて平らに延ばしたところの所謂薄板硝子である。

硝子は鐵コンクリートと等しく近代建築には益々盛に用ゐら

るゝものであつた。是等三者は、建築の形態に對して新しき途を與へるものである。此の三つの近代科學の生產が新建築の形態を定めるといふ此の句は、近來盛に唱道されつゝある建築家の間の言葉である。

(六) 用途の上より見たる建築の發達

第一章に於て概要を論じたるが如く、建築は構造の上からと、用途即ち使用目的の上からと、空間形成の藝術の上からと、此の三つに基いて考察する事が出來るし、またさうする方が建築といふものを知るのに最もよい方法である。構造の上からの發達史的考察は既に述べた。次には用途上よりの考察を述べる積りである。

實をいふと、用途あつての建築で、用途に從て構造せられ、用途のために建築せられる其形態を、空間形成の原理に依て美化しやうとするものであつて、用途こそ建築の第一の目的である。

勿論、實際の創作に臨んでは、以上の三者は渾然として一に綜合せられ、所謂三位一體の境地に立たねばならぬ事は勿論であるが、研究の上に於てはそれは自ら三者に分解せらるべきもので、そのうちに於て、用途こそ其根本をなす可きでる。しかも私が構造を先きに述べた理由は斯うする方が說明の都合上便利であつた爲めに過ぎない。

用途の上より見たる建築の發達は、其の「種」ともいふ可き原始的の小舍、人や獸の自然に踏み別けた小徑、流れに渡された一本の丸太橋、小舍の集合よりなる村落、村落と村落との間に出來た物と物との交換場などから出發する。次で墳墓、宗教的建築物、村の集會所、貯藏庫、見張場等に及び、更に城壁、神殿、宮殿、官衙、都市に至り、次で都市の中心市場、劇場、奏樂場、體操場、浴場、闘技場、競馬場、記錄所、圖書館、美術館、公會堂、市會議事堂、裁判所、取引所、會館、立像及記念建造物、凱旋門、大倉庫、造船工場、橋梁、給水裝置、下水渠等の出現となり、學校、奏樂場、病院、宿泊所、施療院、養育院、旅館、印刷所へと進化と分出とがあり、また商工組合會館、商品取引所、商業會議所、稅關倉庫、銀行等が出來、十九世紀に入つて一般文化の急激なる發展に伴て更に新用途の建築が增加し、又在來の公共的の建築も質と量との上に於て大に進步し、市廳舍、各官廳、消防署、學校病院、圖書館、銀行、博物館、國會議事堂公會堂、音樂堂、劇場、學會、研究所、市場、取引所等の建物が新設、增築或は改良せられ、又都市全體の改良が計畫せられるやうになる。そして更に進んでは大資本主義の起業に依て、廣大なる工場、大商店、事務所建築が出現し、又

一方蒸氣機關や電動機等の進歩に伴つて、都市に極めて尨大のものとなり、同時に大停車場、大倉庫、大旅館、大市場等を生み、衛生問題と風教問題とに伴ふ社會政策は、病院、學校、監獄や勞働者の住居の改良を促し、職業紹介所や簡易食堂等の出現となる。また一方一般工學の進歩は大共同住宅を可能ならしめ、飛行機飛行船の格納庫、ラヂオ放送場等の新建築が生ずるに至る。

（七）空間形成の藝術としての建築

勤勉に於てはあの蜜蜂が汝を教へる事が出來る
熟練に於ては蟲が汝の師である。
汝の智識は撰ばれたる天才達と汝の分ち持つところ、
藝術は、ォ、人間よ、汝獨り持つところである。
（シルラー）

比論的に、自然は最大の藝術家であるといふ事を吾々は否定しやうとはしない。然し乍ら吾々が特殊の觀念として藝術と自然とを對立させる限りは、シルラーの言葉の如く藝術は人間汝獨りの持つところである、といふ可きである。

人も知る如く、カントが人間に生來のものと考へた空間的觀念が、此の人間の藝術の形體の基礎を成す可きである。

私はこの章に於て、空間形成の藝術としての建築の話しをしやうと思ふのである。

それは必然に、塊（マス）と線と調子との上から考察される可きで、從つて、第一には安定が論ぜられ、そして次第に、釣合ひ（コンビネーシヨン）とか變化と統一とか、適應（フィットネス）とか、均衡と對照とか、實體と空所との關係とか、明暗とか、色調とか、壁面の肌觸りとかに付て論ぜられる可きである。

然し乍ら建築に於ては自然界の物像を對照とした彫刻や繪畫とは異つて其空間形成を到底用途と構造から引き離して考へる事は不可能である。そこで、（一）その外觀に於てその構造の性質を表現する事、（二）その建築の建てられた目的に從ひ、且つ其の市なり、國家なり、宗教なりの職分を表白する事。此の二つの意義を持つ可き事を必要とする。英吉利の美術評論家ボルドウインブラウンはこれを有意義の形（シグニフィカント・フォーム）（Significant form）と呼んで居る。このシグニフィカント・フォームこそ空間形成の藝術として建築の第一義をなす可きである。ゴシックの伽藍が見る人をして驚嘆あく能はざらしむるものは全くこれに基因する。

併し乍ら更にも一つ踏み込んで考へるときは、眞に美の根柢をなす可きものは、結局、製作者の熱情と歡喜とでなければならぬ。しかもそれは、單なる一事物に因はれたる強い刺戟や、有頂天の喜悅から來たものであつてはならぬ。それはゴシック時

の西歐人の神に對して抱いて居たやうな熱情と敬虔とでなければならぬ。ゴシック伽藍の見る人をして驚嘆おく能はざらしむる所以のものは實は此の點に存するのである。しかも時代は既に過ぎた。中世の寺院に對するものは今日の公共建築物である。そして新しい宗教心、新時代に於ける熱誠なる精神は、都市に對する愛、國家に對する崇拜、民族の向上に對する渴仰の上に築かれねばならぬ。如何に空間形成の外面的形式を學ぶも、シグニフイカント・フォームを意得するも、目的に基いての推究のみを以てして、此の情熱なくんば、到底よい建築は得られるものではない。

（八）建築の施工に關する變遷と發達

家を造ることは、最も古い時代には住む人自身がこれに携はつた。最初の建築家は女であつたといはれて居る。文化の幼稚時代には男は大抵狩に出て、女は專ら家事を司り、建築までもその手に依つてなされたといふ。兎に角自分の家は自分で造つたものであつた。團體の公共用のものには協同これに當つたこと勿論である。軈て次第に家を造る專門家が出來て來る、併し最初は主として、神殿、宮殿、城壁等の特殊な要所とか、裝飾とかいふものに限られてゐたものであつた。そしてそれ等の智識を持つた人々は、魔術家のやうに人々から畏敬されてゐたものに相違なかつた。

『兎に角斯ういふやうにしてだんだんと、木を挽くもの、石を積むものなどに至るまで種々の匠人が生れて來、そして個人の家でも或る特殊の場所はだんだんと是等の匠人にまかせるやうになつて來る。是等の匠人は比較的其數が少く、親方とか棟梁とかいふもの丶下に集まつて居たものである。そして建築は次第に是等の棟梁に依賴せられて請負とも常備ともつかぬ方法で建築をする風習になつて來た。そして例へばこれが大きな寺といふやうなものであると、大棟梁の下に比較的大組織で工事がなされた。是等大棟梁は今日の所謂建築士で、利益よりも寧ろ自分の技術を重しとして居つた。然し大きな工事になると、職工の手間や材料價格などの點に於て、依賴者もこれを棟梁と商取引の形式に依て契約した方が便利であり、棟梁の方もさうする方が利益であるから、追々請負制度が生れるに至つた。棟梁は技術家で利益に疎いので、商人が、例へば材木商のやうな者が一緒になつて請負ふた場合も多からう。勿論大きな仕事になると、依賴者の方にこれの奉行のやうなものが出來て大體の事は奉行の指揮に依つたものである。

歐洲では文藝復興期に入つて、建築が昔の羅馬式を復活させ

る仕事となつて表はれ、考古學的の研究が盛となり、同時に畫家や彫刻家か建築に携はるやうになつた。茲に初めて意匠設計を事とする建築家が生れたのである。それでもなほ、かのミケロアンジエロでさへ、石を切り出す事に頭を使つたり、自分で直接手をかけたりしてゐたやうに、單に製圖に依つて意匠を作るだけではなかつた。

斯様　して建築が其形態の上にも用途の上にも復雑なものとなつて來　これは普通の大工や石屋の棟梁では出來なくなつて來た。それにまた一方工學が進歩して來て種々の新材料が用ゐられるやうになつて來たから、總てこれ等に對する學術的訓練を得たものでなければ設計に携はる事は出來ぬやうになつて來た。勿論これは社會萬般の　こと皆そうなつて來たのであるから、斯くの如くして次第に分業的になつて、設計をするものと請負をするものとは自ら分れるやうになり、また直接の工事に當ても仕事に依つて種々の專門家を生じて居る。

しかもまた近代になつてからは、それが以上の如く分化されゝまた全體が綜合されて行くやうになつて來た。

總ての仕事は、小組織の下に於ては其各部分が不充分ながらも種々の職能をもち、大組織の下に於ては各部は完全に獨立して各完全なる特殊の職能を有する、と斯う行くのが理想であるやうに思ふ。

即ち近代に於ては、所謂大資本主義の下に各部が細かく分業になりつゝ、それが大きく綜合統一されるやうになつて來た。

これを醫師に例ふれば、町の開業醫は總ての病者を診察し且つこれに投藥する。大病院でもまた其通りである。たゞ此の方は其内部が極めて分業的になつて居るのが町醫者とは違ふのである。普通の町醫者と大病院、それから此外に中間階級として或特殊の病氣しか見ない、そして處方箋しか書かない醫師と、且つこれに伴つて醫師の處方箋に依て調劑だけをする藥劑師とが出來た。即ち大體から見て以上の如く三つに別ける事が出來るのである。而して此三者鼎立が今日の社會状態に於て凡ての方面に存在してゐるやうに思ふ。

建築の施工に於てもまたさうなつて居る。小さい家を建てる場合、大工は間取から構造から、他の諸職の指圖から材料の買入から請負まで總てをやる。大資本のもとになり立てる大請負會社はまたこれと同様な事をやる。そして其の兩者の中間に設計と監督のみをなす、所謂建築士が存在して居る。しかも我國の状態に於ては、此建築士の設計なるものを其監督の下に於て仕事する請負者――恰度醫師の處方箋に依つて調劑のみをする藥劑師の如き請負者がないといふ不思議な状態にある。これに

對する研究を今日大に必要とする所以である。

(九) 日本建築の變遷と發達

日本には古來家に二つの流れがあるやうに思はれる。一つは先に述べた杭上家屋式の比較的四方打開いた家と、も一つは土間を床として四方を泥壁で閉した家とである。此の二つがいつか混交して今日の家が生じた。それは、貴族の住家であつた所謂御殿風の家が高い床を持ち、四方が開けてゐ、壁を作ることがあつても決して泥壁にせず板壁にして紙を貼つて仕上げるのを見、また一方田舍の百姓家の土間が薄暗いまで泥壁で圍んで居るのを見て、この二つを先きに述べた建築構造の發生に照らして考察すると、其間に自らうなづかれるものがある。あの百姓屋は初め四方泥壁で閉した形式のものであつたが、いつか貴族邸宅の形式をとり入れてそれを座敷に取りつけたものである考へられる。これは何れの國に於てもさうであるが、文化のある時期に於て下流者が上流者の生活の模倣し、そして兩者の混交よりなる文化が生れ出づるのである。英國の一般住家に於ては特に其あとが顯著である。日本のものも以上のやうに見る事が確かに正しいと思ふ。四方打開いた家は上流者からの流れであつたから勢力を得て、閉ざゝれたものに打勝つたとであらうし、なほそこには日本の風土の影響もつよく働いた事勿論である。

日本の建築は終始一貫木造であつた。羅馬式の石材穹窿架法は唐時代に朝鮮の東南端まで入つて來て、そこに代表的の遺物が存して居る程であるのに、我邦には遂に來なかつた。勿論支那にも朝鮮にも家が全部石造や煉瓦造で出來て居るのはなく、是等の材料は木造架構の被覆材として用ゐられるものであるが、兎に角橋梁や城門城壁や其他特殊なものには木造でないものがある。それが三韓や唐あたりと交通のあつた際に我國に入つてこなかつた事を、單に我邦には木材が多いからの、良い石材が少なかつたからの、或は地震國であるからのといつて手ツ取り早く片付けてしまふのはよくないと思ふ。なぜかといふに、南滿との交通の比較的繁げかつた徳川時代の長崎を中心として此種の橋梁が相當に九州地方に於て架せられたものがあるからである。

元龜天正以後、城廓建築が發達したにしても、其城壁は、土壘の上に甚だ不手際に石を張付けた、幼稚な石工事に過ぎなかつた。煉瓦は長崎の支那寺に僅かに其名殘を止めて居るだけである。

兎に角、構造を主として考へる場合には徳川時代の本土に於ける建築は九州の以下にあつた。といひ得る。

邦人の建築に對する思想は中古に於て鴨長明や兼好法師の筆によくあらはれて居る。今より七百余年前、長明は其著方丈記に於て、安元の京の大火、治承の大風、治承の遷都、養和の飢饉より說き及んで、「すべて住家をつくるならひ、かならずしも身のためにせず。或は妻子眷屬のために作り、或は親眤朋友のためにつくる。或は主君師匠及び財寶牛馬のためにさへこれを作る」云々、「知らず假りの宿り誰が爲めに心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむる」とて、山上の風景のよい所へどこへでも移し得る家を作る、といつて居る。

また六百年前に兼好は其著徒然草のうちに、「家々のつぎ／＼しくあらまほしき事假の宿りと思へど興あるものなれ」と說き出し乍ら、それに引續いて、「多くのたくみの心を盡して磨きたて唐大和の珍らしくえならぬ調度ども並べおき、前栽の草木まで心の儘ならず作りなせるは見る目も苦しくいとわびし、さてもやはながら住む可き、又時の間の煙りとなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ」といつて居る。

降て近世に於て山鹿素行は、其著武教小學に、「凡そ衣服は體を覆ひ隱すが爲めなり、食は命を全するが爲也、居は雨露を凌ぎ體を休ぜんが爲なり、然ば衣食住はたゞ用るに足る事を知て」云々といつて居る。

又吉田松陰の武教講錄には、「[illegible]つけにて[illegible]の最も凌む可き所なり」云々とある。

前二者は佛教思想より、後者は武士道の上よりの言であるが、今こゝに是等に付て論ずることはしばらく見合せ、これに對して、寛政年間に學者本多利明の書いた經世祕策が、江戸の火災を論じて石造建築をあげ、歐州の都會の如く江戸を改造せんとせる意見の如きは、極めて進んだ考といはなければならぬ。しかも「歐羅巴洲とても國初より石家作にもあるまじ、度々の火災に遇ひ懲々して石家作制度建立せしなる可し」といふに至つては實に達見といはなければならない。

それは所謂洋學の刺戟によつて起つた考である事は明瞭である。そして此の思想は現代に至るまで次第に廣まり來つたものである。

（十）明治以後の日本の建築

明治時代に入て日本の建築は、歐洲からの影響に依つて次のやうな變化を受けた。

（一）、歐洲から新に移植せられた文化に對して生じた新用途の建築。即ち、諸官廳、學校、議事堂、市役所其他の公署、兵營、病院、停車場、博物館、圖書館、博覽會場、諸會社、銀

行、取引所、商業會議所、工場、寫眞屋、倶樂部、基督教會堂、公使館、歐米人向の住家、各旅館及び料理店等が歐米建築の模倣に依て建築せられた事。そしてこれに伴つて、觀覽場、倉庫、商店等に同樣の經路を採るものが次第に增加して來た事。

(二)、大學、專門學校其他に建築學教育の部門を設けられ、從て智識ある建築技術家が社會に輩出し、是等の人々が次第に重要なる建築に携はるに至つた事。

(三)、貴族及び富者が歐米風の室を外觀もそのまゝに、古有の形をなせる邸宅に接續して建築し、木に竹を接いだやうな不可思議な形式の住家を生じた事。

(四)、建築材料として煉瓦、石材、セメント、鐵材、硝子等が使用せらるゝに至つた事。

(五)、普通の住家に於て在來の構造及び樣式に硝子障子と亞鉛引鐵板葺きの屋根や同じ軒樋などが普及した事。

六、名古屋岐阜地方及び酒田地方の大地震に鑑み、學術的に耐震構造の研究の始められた事。

箇條別けにして書いて見れば先づ斯んなものである。

これを變遷の順序に述べて見れば、

第一期、西洋建築の無自覺なる模倣時代、これは明治初年から二十七八年の日清戰役頃まで續く、

第二期、國粹の回顧と震災に對して科學的研究時代、これは日露戰役迄と見る事が出來る。日清戰役後から一般の趨勢が日本の古美術に對する覺醒を惹起した。これは根柢に於て深く根差した國民的自覺に依る事勿論であるが動機は歐人からの刺戟に依る。此時代から奈良に於ける建築の研究が盛になつた。當時の建築學者たちの熱心な研究は、寧ろ却て他の藝術史家や文學家などに影響を及ぼした。耐震構造の研究は文部省に震災豫備調査會が設けられ(明治二十六年)、その下に集まつた帝國大學の教授連に依つてなされた。そしてこれ等の研究は次第に進んで行つたものである。輿論界は以上の如くであつたが、建物の外形は依然として歐米の模倣であつた。用途を歐米に取つた以上、其外形に於ても我邦に於ては意味をなさぬ特殊な歐米の傳統形式の續いて行くのは、文藝復興以後の西歐洲の建築に鑑みて止むを得ぬ事である。

第三期、批判的時代、これも獨り建築界のみに顯はれた現象ではなく、日露戰爭後から一般的思想界は著しく自覺的になつて、廣き眼界と自動的態度とを以て海の四方を見渡し、そして新しいものを迎へるにも總て批判的に自己を本位としてそれを決しやうとする傾向が際立つて來た。しかしこれは建築界に於ては評論に止つて、實際の建築にはたゞたゞ歐米新流行の建築

を他の人よりもいち早く模倣しやうとなつたに過ぎなかつた。然乍ら耐災構造に目覺めたる構造上の研究は次第に進んで來たもので、その狀態に於て大正時代に引きつがれて居る。

明治と大正との限界は先帝の崩御といふ事であるから、兩時代に就て建築上の區別をする事は困難である、大正の建築界は明治末年に起つた諸問題の完成として見なければならぬ。ただ玆に明治時代に於ては殆ど論議せられた問題ではなくて、大正時代に入つて起つた來た事項が二三ある。一は住宅問題であり他は都市計畫の問題であつた。

大正十二年の大震災はたしかに、日本の建築界に新時代を劃する出來事であつた。

そこで先づ大正十二年まで の建築界の重なる時項を擧げれば、

一、都市計畫起り、都市の建築が全般として統一的法規の下に建築せらるゝやうになつた事、

二、鐵筋コンクリート構造、鐵骨構造が隆盛となり、耐震耐火の建築が各所に建てられるに至つた事

三、從つて是等の進歩したる構造法が都市の地價の上昇と伴て、高層建築を起さしむるに至つた事

四、住宅問題及び生活改善の輿論起り、住宅を眞の現代文化に伴はしめやうとする氣分になつて來た事

五、デモクラシー及び經濟思想の傳播より、勞働者の住宅、簡易食堂、市設市場、食料倉庫等が建築せられるやうになつた事

などである。

大正十二年九月の地震に依つて、耐震耐火の建築は眞の實驗を經て一般の進歩を示し、都市計畫は帝都に於ての實行期に入つたものである。

（一一）結　尾

玆に最後に將來の建築に就て述ぶ可き筈であつたがこれは中止した。

第六章以下は、紙數の關係と時間の都合から、極めて小さく短縮した梗概をかきつけたに止まる。是等の問題は他日稿を改めて述べたいと思つて居る。

（大正十四年五月記）

變態心理現象の解說

中村古峽

一　變態心理の種類

變態心理はその包有する範圍が頗る廣汎なのと、又その取扱はれる材料が非常に豐富で且つ珍奇なものが少なくないのとで、專門の研究家には勿論、一般世人の興味を惹くことも亦頗る多い。普通心理の方は、吾々の日常生活に於いて、餘りに屢々目に慣れ耳に熟してゐるところから、吾々はこれに對して殆ど何等の感興も又研究心もそゝられない。吾々は若し或る物が欲しいと思へば、直ぐ手を伸ばしてこれを捕へることが出來る。吾々は又面白い話を聞けば直ぐ愉快になり、厭な話を聞けば何となく不愉快になる。吾々は又色々な事實や經驗を頭の中に記憶してゐて、必要な場合にはそれを憶ひ起すことが出來る。――およそ是等の現象は、考へて見れば隨分微妙な吾々の心理作用に基くものであるけれども、吾々は朝夕あまりにその作用に慣れてゐる結果、別にこれに對して不思議だとか珍らしいとかいふ感じが起らぬ。寧ろ普通あたりまへのことのやうに考へてゐる。しかし今茲に、夢の中で諸所を歩き廻つたり、或ひは普通の人には見えない色々のものが目に見えたり、或ひは心にもないことを口に出したり、手に書いたり、或ひは狐に憑かれたり、神に憑り移られたり、或ひは倏忽の間に全くの別人となつて、その性格から、職業から、姓名までも一瞬間に變つたりするやうなものがあると聞くと、誰しも好奇心を動かして、その原因を探究して見たくなるのは無理もないことである。畢竟それは世人の耳目に觸れることの少い變態な心理現象に屬するからである。

しかし、一概に變態心理といつても、その中には色々の種類のものが含まれてゐる。或る學者はこれを二種に大別して、一つを普通より以下のもの、即ち下常心理とし、他を普通より以

上の、即ち色情心理[illegible]は前者の例であつて、天才者の作品、宗教上の神秘的諸經驗、精神感應、千里眼的能力等は後者の例である。また或る學者は變態心理を先づ個人的變態心理と團體的變態心理（即ち所謂群衆心理）とに大別し、更に前者を小別して（一）缺陷ある心理及び例外的のもの、（二）一時的な變態、（三）永續的な變態の三としてゐる。缺陷ある心理とは、白痴、低能者、變質者、犯罪者等の心理を指すのであつて又例外的のものとは天才者、偉人、英傑等のそれを指すのである。また一時的變態とは、普通常態の人々にも屢々一時的に現はれる變態心理であつて、あり觸れた錯覺や幻覺や夢の現象から、失神、催眠、夢遊、自働、憑依等の狀態を包括するのである。一般に狹い意味でいふ變態心理とはこの部類を指すのであつて、世人の好奇心を惹くことも多い代はりに、最も多くの誤解と謬妄をも生んでゐる。最後に永續的變態とは、早發性痴呆を始め諸他の精神病または精神錯亂の種々なる形式を總括するものである。

以上の如く、變態心理の範圍は非常に廣汎に亙つてゐるけれども、與へられたる紙數の上では到底その全斑を網羅するとが出來ないから、私は主として前述の狹義の變態心理の中でも、特に一般の讀者に興味のありさうな二三の現象に就いて、多少

[illegible]りである。

二　變態心理の諸現象

私がこの數年來取扱つて來た多數の被驗者の中に一人の珍らしい婦人がある。彼女の心理狀態と並にその行爲とは實に千變萬化であつて、殆んど生きたる變態心理學教科書であるかの觀がある。で、私は先づこの婦人の行動の大要を記述して、私がこれから解說しようとする變態心理現象の如何なるものであるかを例示したいと思ふ。

この婦人は明治二十年生れであるから今年で數へ年の三十九になる。生來虛弱で、子供の時の發育は頗るよくなかつたさうであるが、しかし今別に身體的に病氣といふほどのものを持つてゐない。只脊椎が少しく後屈してゐるが、これは子供の時、大酒家の父親に酷く蹴られた爲だといふ。性質は極めて內氣で、口數も少く、動作も遲鈍で、且つ氣の毒なほど愚直である。その上、子供の時分から、癎癖な父親の酒の世話ばかりさせられてゐた習慣で、（母親はいつも夫の虐待に堪へ兼ねて逃げ歩いてゐた）日常の態度が不安さうに怯々してゐた。頗る暗示感受性に富み、容易に催眠狀態に導くことが出來る。學校教育

變態心理現象の解說

中村古峽

一　變態心理の種類

變態心理はその包有する範圍が頗る廣汎なのと、又その取扱はれる材料が非常に豐富で且つ珍奇なものが少なくないのとで、專門の研究家には勿論、一般世人の興味を惹くことも亦頗る多い。普通心理の方は、吾々の日常生活に於いて、餘りに屢々目に慣れ耳に熟してゐるところから、吾々はこれに對して殆ど何等の感興も又研究心もそゝられない。吾々は若し或る物が欲しいと思へば、直ぐ手を伸ばしてそれを捕へることが出來る。吾々は又面白い話を聞けば直ぐ愉快になり、厭な話を聞けば何となく不愉快になる。吾々は又色々な事實や經驗を頭の中に記憶してゐて、必要な場合にはそれを憶ひ起すことが出來る。――およそ是等の現象は、考へて見れば隨分微妙な吾々の心理作用に基くものであるけれども、吾々は朝夕あまりにその作用に慣れてゐる結果、別にこれに對して不思議だとか珍らしいとかいふ感じが起らぬ。寧ろ普通あたりまへのことのやうに考へてゐる。しかし今假に、夢の中で諸所を歩き廻つたり、或ひは普通の人には見えない色々のものが目に見えたり、或ひは心にもないことを口に出したり、手に書いたり、或ひは狐に憑かれたり、神に憑り移られたり、或ひは倏忽の間に全くの別人となつて、その性格から、職業から、姓名までも一瞬間に變つたりするやうなものがあると聞くと、誰しも好奇心を動かして、その原因を探究して見たくなるのは無理もないことである。畢竟それは世人の耳目に觸れることの少い變態な心理現象に屬するからである。

しかし、一概に變態心理といつても、その中には色々の種類のものが含まれてゐる。或る學者はこれを二種に大別して、一つを普通より以下のもの、即ち下常心理とし、他を普通より以

上のもの、即ち超常心理と名づけてゐる。白痴や低能者の心理は前者の例であつて、天才者の作品、宗教上の神秘的語録、精神感應、千里眼的能力等は後者の例である。また或る學者は變態心理を先づ個人的變態心理と團體的變態心理（即ち所謂群衆心理）とに大別し、更に前者を小別して（一）缺陷ある心理及び例外的のもの、（二）一時的な變態、（三）永續的な變態の三としてゐる。缺陷ある心理とは、白痴、低能者、變質者、犯罪者等の心理を指すのであつて又例外的のものとは天才者、偉人、英傑等の心理を指すのである。また一時的變態とは、普通常態の人々にも屢々一時的に現はれる變態心理であつて、あり觸れた錯覺や幻覺や夢の現象から、失神、催眠、夢遊、自働、憑依等の狀態を包括するのである。一般に狹い意味でいふ變態心理とはこの部類を指すのであつて、世人の好奇心を惹くことも多い代はりに、最も多くの誤解と誣妄をも生んでゐる。最後に永續的變態とは、早發性痴呆を始め諸他の精神病または精神錯亂の種々なる形式を總括するものである。

以上の如く、變態心理の範圍は非常に廣範に亘つてゐるけれども、與へられたる紙數の上では到底その全班を網羅することが出來ないから、私は主として前述の狹義の變態心理の中でも、特に一般の讀者に興味のありさうな二三の現象に就いて、多少の解説を試みたいと思ふ。固より出來るだけ通俗的に記述する積りである。

二　變態心理の諸現象

私がこの數年來取扱つて來た多數の被驗者の中に一人の珍らしい婦人がある。彼女の心理狀態と並にその行爲とは實に千變萬化であつて、殆んど生きたる變態心理學教科書であるかの觀がある。で、私は先づこの婦人の行動の大要を記述して、私がこれから解説しようとする變態心理現象の如何なるものであるかを例示したいと思ふ。

この婦人は明治二十年生れであるから今年で數へ年の三十九になる。生來虛弱で、子供の時の發育は頗るよくなかつたさうであるが、しかし今別に身體的に病氣といふほどのものを持つてゐない。只脊椎が少しく後屈してゐるが、これは子供の時、大酒家の父親に酷く蹴られた爲だといふ。性質は極めて内氣で、口數も少く、動作も遲鈍で、且つ氣の毒なほど愚直である。その上、子供の時分から、癇癖な父親の酒の世話ばかりさせられてゐた習慣で、（母親はいつも夫の虐待に堪へ兼ねて逃げ歩いてゐた）日常の態度が不安さうに怯々してゐた。頗る暗示感受性に富み、容易に催眠狀態に導くことが出來る。學校教育

としては、漸く尋常四年を終へただけであるから、平素はやつと假名交りの手紙が書ける位ゐで、大した讀書力のある筈もない。裁縫は最も不得手である。十八歳の時初めて結婚したが僅か一ケ月ばかりで離縁となり、その翌年再び嫁いだがこれも三ケ月經たぬうちに又離縁となつた。廿四歳の時三度び緣付いて、これは約一年ばかりも同棲してゐたが、その間に片付いた先の家庭の或る事情から、入水して自殺を企てた。それ以來彼女には、左に述べるやうないろ／＼な變態現象が現はれることとなつた。

先づ第一に彼女は**二重人格者**である。彼女の平生（第一人格）は今も云つた如く、極めて内氣で、無口で、且つ遲鈍であるに拘はらず、一度びその第二人格が現はれると、彼女の性質は全く一變して、非常に快活な、寧ろ輕躁な氣分となり、口數も多く、動作も敏捷に、且つ皮肉で頓智頓才に富み、むつかしい漢字も澤山に知つてゐて、時には無韻の漢詩（七言絶句や五言絶句に似たもの）を作ることもあり、和歌や俳句めいたものを拈出することも珍らしくない。そして此の第一人格の狀態と第二人格の狀態とが、或る期間を隔てて交替に現出するのである。これを**人格變換**の現象と名づける。

次に彼女は又時々睡眠中に突然跳ね起きて、獨りで談笑したり、臺所の仕事をしたり、稀には戸外へ飛び出して、停車場まで人（勿論夢想中の人）を出迎へに行つたりすることがある。そして翌朝になると大抵は皆記憶してゐない。こんなのを**夢遊**現象と呼ぶ。特に私が催眠狀態から導いた彼女の夢遊狀態にあつては、彼女は更に又不完全ながら全然獨立した別個の人格——大酒家で、且つ漢學の素養深かつた其の亡父の醉態を髣髴せしめる第三人格——となつて、言語動作共に著しく男性的となり、自ら名を久成と名乘り、唐詩選や三體詩の中の詩を朗々と高吟し、或ひは謠曲、能狂言、筑前琵琶、端唄など、何でも來いの多藝多能者となる。而も覺醒後は全然その記憶がないのである。彼女はまた其の第一人格に於いては、第一回目の結婚と第二回目の結婚とに關する事實を全然忘却してゐる。只第三回目の結婚だけしか記憶してゐない。このやうな病的な忘却を名づけて專門語では**記憶喪失**（又は**健忘症**）といふ。（序に附加するが、彼女の第二人格は、第一回の結婚も第二回の結婚も多少記憶してゐる。然しそれについて多くを語ることは非常に嫌つてゐる。またその第三人格は今も云つた通り男性的であるから、却つて勝代といふ空想的の妻を持つてはゐるが、自分自身が三回も他人の妻となつたことなどは全然考へてもゐない。強いて問糺さうものなら酷く怒られてしまう。）

彼女は又その夢遊狀態中にあつては、常にその想像的光景の中の人物の姿を見、またその聲を聞いて、恰もその人々が彼女の眼前にあるが如くこれと頻りに對話談笑するのである。かういふ幻覺は稀には、彼女の第二人格の出現中にも起る。

彼女はまたその父親は、その地方に於ける智識階級の一人であつて、相當の職務に從事してゐたにも拘らず、無學文盲の土方であつたと信じてゐる。又彼女の第三回目の夫も、その地方に於ける有識階級の一人であつたに拘らず、これも土方であつたと信じてゐる。そして私が如何に確實な反證を舉げても頑として應じない。かかる虚僞の信念を名けて妄想といふ。彼女にはまた、その第二人格の出現中、往々被害的な妄想もあつて、ある時は食事をすると火事が起るといつて終日絶食したこともあり、ある時は又鐵砲玉が何處からか飛んで來るといつて、室内で傘をさしながら仕事をしてゐた事もある。

彼女はまたその第二人格が現はれると、常に異様な服裝をして、外出したくて〳〵堪らなくなる。如何に私達が警戒してゐても、ちよつとした瞬間に直ぐそれを實行する。例へば髮を異様に結つたり、或ひは色々な野菜物を髮飾に頭にぶら下げたり、或ひは顏全體を眞黒に染めたり、或ひは派手な長襦袢を羽織つて、帯を胸元でやの字に結んで戸外へ飛び出したりする。時には又來客のある座敷へ突然床几を持ち出して、その上へ立つて異様な手振をして、生花師の眞似をしたがる。幾度小言をいつてもそれをやらずにはゐられない。また物を並べるには必ず對角線形を好んで、例へば膳立をするにも、茶碗や、箸箱や、小皿や、醬油注ぎや、小楊枝入れなどを、きちんと食卓の上へ對角線形に一直線に並べておく。それを崩すと泣き出すこともある。或る時の如きは、茶箪笥や戸棚にありたつたけの皿小鉢を持ち出して、臺所口から往來まではすかひに並べたこともある。どうしてもさうせずにはゐられないのである。かういふ止むに止められぬ動作を名けて、強迫觀念に基く衝動行爲といふ。

彼女はまた同じ狀態中に於いて一度端唄でも歌ひ出すと、同様の歌を何時までも〳〵歌つてゐることがある。時には寝床に入つてまで一睡もせずに歌ひ續けてゐることがある。こんなのを常同行爲といふ。

なほ以上の外にも色々の變つた現象が現はれるが、さう細かな點までは言及する必要もないと思はれるからあとは略する。

さて以上に別記した現象は、一見した處では何れも個々別々の獨立した徴候であつて、其の間に何の關係も聯絡もないものに見えるかも知れないが、しかし少しく仔細に考察して見ると、

是等の變態心理現象には、一定の共通した特性のあることが分る。之れを說明するためには、先づ今日の變態心理學の全體に亙つて最も重要な任務を帶びてゐる『精神の分離』または『意識の分裂』といふことに就いて少しく述べておく必要がある。所謂潛在意識說がこれである。

三　意識の分裂

『狂氣の心理』といふ著書によつて名を知られてゐる英國のバーナード・ハート博士は、意識分裂といふ此の極めて專門的な厄介な學說の概念を、非常に通俗的な卑近な文字でよく說明してゐる。以下私はハートの所說を基礎として、多少の蛇足をそれに附加して見たいと思ふ。

今吾々が心眼を開いて與へられたる瞬間に於ける吾々の精神內容を綿密に觀察すると、吾々の全識野は全く分割することの出來ない統一體をなして、一定の目的に向つて進行する一樣な思想の流れと見えるだらう。即ちその時には吾々の感覺も觀念も注意も意欲も、すべて皆或る一つの共通の目的のために結合されて、決して各々がそれ〴〵自分勝手の方向に進む個々別々の部分から成立つてゐるとは見えないだらう。例へば今若し私が或る數學の問題を解いてゐるとしたら、その瞬間に於ける私の全識野は、その問題の解決に必要な諸種の心的過程からのみ成立つてゐるものと見える。數分間の後、私の注意は或ひは數學の問題から離れて、次の日曜日の計畫の方へ外れて行くかも知れない。しかし其の時には數學の問題は一時吾々の識野から退却したのであつて、數學の問題と日曜日の計畫とが双方同時に吾々の精神を占領することは出來ない。ただ吾々の注意が迅速にこれからあれへと移動したまでであると、見えるだらう。

ところがこれは只理屈の上だけでの眞であつて、實際の事實をよく觀察して見ると、吾々は一方に於いて數學問題の解決または其の他の仕事に從事しながら、同時に心の他方に於いて次の日曜日の計畫や、或ひはその他色々のことを考へてゐるものである。そしてその從事してゐる吾々の仕事が、自分の手に入つた熟練した仕事であればあるだけ、この他方に於ける同時的活動も亦ます〳〵著しく行はれるものである。即ち吾々の精神は、屢々一定の目的に向つて進む統一ある思想の流れを形成しないのみならず、却つて反對に、各々自分勝手な發達を遂げた、多少孤立した心的過程から成立つてゐることが多い。かくの如く、吾々の精神が個々獨立した斷片に分離して、その各斷片には何等共通の目的に達せんとするやうな統一のないのを名づけて、心理學上これを意識の分裂といふ。

更に一例を加へてこの意義を明瞭にしよう。今私がピアノに向つて一曲を彈奏してゐると假定する。この時若し私が熟練した音樂家であつたとしたら私はそれと同時に音樂とは全く別な、或る複雜なる思想の連鎖を追うて、他の面倒な事件の解決に從事することも出來よう。この場合に於いて、私の精神は統一ある識野を現はしては居らず、却つて二個の部分又は二個の過程に分裂してゐる。而もこの兩過程の何れもが多大の精神能力を消費してゐる。——一方の曲譜はまだ新規のものであつて、而も絕えず調子を變へて彈かなければならぬし、又他方の面倒な事件の解決も、その性質が非常に複雜である場合の如き。——この兩方の精神活動は、互ひに殆んど全く關係のない獨立したものであるが、なほ兩者を同時に遂行することが出來る。故にこの時の識野は二つの部分に分たれねばならない、換言すれば或る程度の意識分裂が行はれねばならない。これと同樣の解釋が、他の種々の同時的精神活動の上にも通用し得る。例へば熟練な職工が熱心にその複雜な、纖細な手仕事を營みながら、彼の精神は同時に何か他の厄介な問題に喰ひ入つて、その解決に腐心してゐるやうなものである。

四　自働手記

しかし以上の場合には、意識の分裂は單に一時的であり、また部分的性質のものである。兩者の活動は本人の精神の統御の下に行はれ、且つ何れも本人の意志で自由にそれを放棄することが出來る。しかし意識分裂のもつと著しい程度のものになると、この統御は最早や存在しなくなる。その最適例は自働手記と呼ばれる現象である。

自働手記は時としては比較的常態の人々にも現はれるが、ヒステリーといふ精神障碍の症狀を持つた人に於いては最も完全な發達を遂げる。ヒステリー患者には、よくヒステリー性の麻痺といつて、身體の處々、または半身に感覺脫失を來してゐるものであるが、今右手が無感覺になつてゐるかういふ患者の指間に鉛筆を挾んでやる。そしてその手を布幕か何かの外へ出して、本人の視覺に觸れないやうにしておく。それから本人を放心狀態に導くか、若しくは面白い談話か何かで本人の注意を他に奪つておいて、その無感覺の手に何か刺戟を與へるか、若しくはその耳元で何かを私語くと、本人は全然それを感知しないに拘はらず、無感覺の手が獨りでに動いて、刺戟に對する應答をしたり、又は私語に對する答辯を書き出して來たりする。而も本人は自分の手が今何をしてゐるか全く知らず、又その書いた事柄に就いては、尙更何も知らないのである。こんなのを自

動手記といふ。殊にこの自動手記に現はれる事柄は、本人が今は全く忘れてしまつてゐる過去の經驗に關することが屢々あるので、さういふ過去の忘失されたる記憶を復活させる目的で、この實驗の行はれることもある。

この實驗は、必ずしも常にヒステリー患者の無感覺の手を要しない。常態の人が手に鉛筆を持つて放心狀態になつてゐるか、若しくは他に注意を向けるかして練習しても成功することがある。プリンス博士の實驗した一被驗者で非常に猫を恐れる人があつた。殊に白猫を恐れるのであつたが、何時そのやうな經驗を得たか想ひ出すことが出來ない。しかしこの人が自動手記の方法で實驗されると、手は自働的に活動して、その人がまだ五六歲の幼時に、ある日白猫と戯れてゐた際、突然その猫が怒り出したため、非常な恐怖に襲はれたことを詳細に書き出した。のみならず、その自働手記は事件の起つた部屋の設備から敷物の模樣、窓掛の裝飾的意匠や家具等の詳細に至るまで、少しも事實と違はず書き記した。

自働手記で有名なヴェロール夫人は、自分で自分の自働手記の精細なる記錄を報告してゐるが、調査によると、英語や、希臘語や、羅典語等で出た多數の手記は、何れも創作の文章ではなくて、彼女が以前に何かの書物で讀んで、すつかり忘却してゐた句ばかりであつたさうである。

また速水博士の實驗せられた一婦人は、自働手記で多くの和歌や俳句を書いたが、それも大抵はその婦人が以前に各種の雜誌で讀んで忘れてしまつてゐるものであつたことが分つた。また或る時は「惡魔が乘り移つてゐる」といふ文句が完全な佛蘭西語で出て來た。しかもこの婦人は佛蘭西語はまだ一語も習つたことがないのである。これも調べて見たら、夏目漱石氏の小說『三四郎』の中で、彼女が嘗て見たことのある佛蘭西語であつた。

私も嘗て四十五歲になる一婦人の自働手記を實驗したことがある。彼女は私と熱心に談話を交へながら、右手では、その談話とは何の關係もない別のことをすら〳〵と自働手記するのである。その速さは談話の速度よりも遙に速かつた。時には二人の談話に對する批評めいたことを書き現はしたこともある。また或る時の如きは、右手と左手とで同時に別々のことを手記したこともある。左手の方には勿論左文字が出てゐた。この婦人は、私が今まで實驗した中では、最も自働手記に巧みな被驗者であつた。

五　自働器具

しかしこの自働手記の現象は、一種の器具を用ふる時には一

書早く現はれることがある。大抵の自働手記者は、最初は皆この器具の媒介によつて、その現象を誘發されてゐるのである。その器具には色々の種類のものがあるが、最近我が邦でも流行したものには、コツクリとプランセツトとの二種がある。

「コツクリ」は通常「狐狗狸」の字をあてて、而もさん附で敬稱されてゐる。ある地方ではまた「お傾き」ともいふ。一般には日本固有のもののやうに考へられ、或ひは今より數百年前、切支丹の宗徒が我邦に傳へたともいはれてゐるが、故井上圓了博士の考證に據ると、そんなに古いものではなく、明治十七年頃亞米利加の一帆船の乘組員が伊豆の下田に滯在中、これをその地の人に傳へたのが起源ださうである。それは長さ一尺二三寸の細い竹を三本組合せて、その中程を紐で縛り、それを三脚規のやうに開いて、その上に盆又はお櫃の蓋をうつ伏せに載せる。そして列座の人々が、片手又は兩手をそのお盆の上に輕く乘せて、放心狀態になつてゐると、その足の一つが自然に動いて來て、色々な問に答へるのである。例へば列座の一人が「ちよつと狐狗狸さんにお伺ひ致しますが、明日の天氣は晴でせうか又雨でせうか。晴だつたら足を一度上げて下さい。雨だつたら足を二度上げて下さい」といふと、狐狗狸さんは任意に足を上げる。かくして列座の人々の年齡や、兄弟の數や、紛失物の在處や、或る事件の結果などを言ふのである。(その答へは當ることもあり當らないこともある。その當る理由は後で說明する)またその手を載せる人は通例は三人と定められてゐるが(これは狐狗狸さんの足の數に順應したものだらう)決して三人に限つたことはない。一人でも二人でも、乃至は四人でも五人でも同じことである。その主動者は大抵一人であつて、他は只その運動に引きずられてゐるだけである。

「プランセツト」も亦狐狗狸さんと全く同一の原理から案出されたものである。これは小さなハート形(方五六寸から七八寸許り)の木片に短い足を三本つけて動き易くしたもので、その一本の足の代りに鉛筆を挿入しておく。そして狐狗狸さんと同樣に一人又は二三人がその上に手を輕く載せてゐると、プランセツトは自然に動き出して、色々のものを鉛筆で書き出す。この點に於いて狐狗狸さんよりは餘程進歩したものである。その書くものは、最初は只無意味な線が多いのであるが、段々熟練して來ると、時には或特殊の人には最初から直ぐ、立派に意味のある文章や繪畫などが現はれる。そして前述の自働手記と同じく、屢々過去の忘失したる記憶や經驗がこれによつて復活することがある。プランセツトに據る自働手記は、日本でも今日まで大分著名なのが澤山出た。

西洋の心靈術で八釜しい「テーブル・ターニング」で大きな卓子の廻轉するものは、又羅馬の昔から神秘的な卜占法として用ひられてゐた「魔法の振子」で振子が動くのも、又最近に日本で流行た鷄卵の雌雄甄別器が自然に運動を起して來るのも、皆これと同樣である。

是等の自働現象は一般には神靈若しくは他の精靈的のものが、自働手記者の手を借りて、世界に彼れの意志や欲望を發表するために活動するものだと神秘的に解釋されてゐる。從つてその書記された事實を絕對の眞理であるが如く自信し、それがために古來から今日まで、世界各國民の間に幾多の迷信と弊害とを流布して來たのであるが、何もそんな空想的假說を作る必要はない、この現象の說明は簡單である。意識分裂が起つたのである。但しこの場合の分裂は前に述べたものよりは遙に複雜であつて、識野は二個の別々な部分に分れ、一方は談話を交へつゝ、他方は自働手記となつて現はれる觀念の體系を包有するのである。從つてその分裂したる觀念體系の正確に知つてゐること、又は確實に豫測し得ることとは見事に當るが、その他のことは、まぐれ當りに當ることよりも、當らないことの方が多いのである。さて此の兩部分は何れも複雜なる精神過程を現はすものであるが、而もそれは互に無關係であるばかりでなく、全く他方の存在を知らない。實際この場合に於ける當人の精神は、二つの小さな精神に分裂されたやうに見える。そして二つの異なつた仕事に從事し、二組の別々な記憶を用ひ、且つその相互間に何等の關係をも有しない。これが意識分裂の最も完全な型式である。しかしながら、このやうに進步した意識分裂が、一見如何ほど奇妙に且つ神秘的に見えても、それは只普通の何人に起る初步的な、單純な意識分裂が、誇張した、擴大した形式を取つたに過ぎないことは直ぐ理解されよう。

六　夢游現象

更に今述べたよりも少しく異つた意識分裂の他の型式を述べて見よう。吾々の常態精神の特性たる一樣な思想の流れには、觀念の持續中に於て何等の間隔もまた罅隙もない。一の新しい觀念が如何ほど突然に意識に上つたとしても、それは常に或る觀念聯合の連鎖に依つて外見上の間隙が連接されてゐることを說明し得る。のみならず、與へられたる或る瞬間意識は、常にその直前の瞬間意識に起つた心的過程を完全に知つてゐる。さて此意識の流れの連續が突然に止まつて、その流れが急に中斷されることのあるは、想像するに難くあるまい。さうすれば、斷絕直後の意識の內容は、斷絕直前の瞬間に於ける意識の內容

とは全然別なものとなる。兩者の間のすべての關係は切斷せられ、それが爲に第二の瞬間意識は全く第一の瞬間意識中に含まれてゐたものを知らないのが常である。實際吾々の精神は、突然新らしい觀念體系を以て滿たされることがあると同時に、その直前の瞬間に滿たされてゐた觀念を全く知らないことも有り得べきである。そこで意識の分裂は、前の自働手記の場合に於けるが如く、二つの部分が同時に別々に起るばかりでなく、また或る瞬間の意識がこれに先立つ意識からも分裂し得べきものである。この時を異にして起る意識分裂の實例は、即ち夢遊現象である。

夢遊現象も前述の自働現象と同じく、單純なものから複雜なものまで色々の階段がある。その最も單純なものは、急に床の中で起直つてすぐ又横になるとか、或ひは部屋の中を二三度うろ／＼としてから床に入るとか、又は無意味に雨戸を明けたり押入の中を掻廻したりする位ゐで終るのであるが、その複雜なものになると隨分長時間に亙つて緻密な動作を行ひ、時には恐ろしい崖の上や、屋根の庇のやうな危險なところを平氣で走り歩くことゝある。これはその時の本人の全精神が夢想の光景中に吸收せられて、覺醒狀態に於けるが如く危險とか恐怖とかを感じないから、却つて安全に行動されるのである。しかし若し不幸にしてその危險な位置にある際、夢遊狀態が醒めると、恐怖のために屢々死地に陷ることがある。かの民間で神隱して會つたといふ子供などが、（神隱しのことは後にもいふ）時々高い木の梢に跨つたり、又は深い谷間に落ちたりして死してゐるのを發見されるは、これが爲である。リボーの報告してゐる一例には、ある軍人が毎夜夢遊病の發作に襲はれると、その廐から馬を引出してこれに跨がり、二三時間も險阻な山路を遠乘りした後無事に歸つて來るのが常であつた。數年前東京市内の某商店で、小僧の一人が惡漢と格鬪してゐる夢を見ながら夢遊狀態を現はし、一緒に寢てゐた一朋輩の咽喉を絞め殺したことは、當時の新聞にも出てゐたことであり、又二三年前茨城縣下でも同樣の理由でその妻を毆殺した農夫があつた。夢遊狀態にある者は、眼は大抵普通に開いてはゐるが、その視線は主として前方にのみ固定せられ、自己の夢想と關係のあるものだけは正しく見たり、また聞き分けもするが、その他の周圍の事情には殆んど無關係である。そして一度び覺醒すると、夢遊狀態中のことは悉く忘却してゐる。この記憶喪失の現はれるのが夢遊現象の特徴になつてゐる。

前に擧げた私の被驗者なる一婦人の實例に就いて見ても分る通り、夢遊狀態に置かれた彼女の識野は、忽ちその直前の思想

の連鎖を失つて全く異つた觀念の一群を新たに迎へるのである。即ち彼女はその前にはたとへ何をしてゐたとしても、夢遊狀態が始まるや否や、彼女のまだ幼い頭腦に烙印の如く强く印象せられた、其の亡父の醉態に關聯した觀念や記憶が急に意識の中に侵入して來る。そして彼女の全精神は、父の酒席に侍つてゐた幼時の回想の中に吸ひ込まれ、その結果、彼女自身が兎も亡父そのものであるかの如く振舞ふやうになる。そして自分自身の全生涯や、また今現に自分の周圍に行はれつゝあることには、全然沒交渉になつてしまふのである。それから夢遊狀態が止むと、彼女は再び正氣に歸る。詳しくいへば、夢遊狀態を構成してゐた觀念の連續は急に意識から消えて去つて、反對に夢遊狀態の起る直前の瞬間に彼女の精神を占領してゐた觀念や行爲が、又突然これに取つて代るのである。だから本人は、その夢遊狀態中に起つたことは何にも知らない。彼女の記憶は夢遊狀態の起つた丁度その瞬間から、夢遊狀態の止まつた丁度その瞬間まで、全く空隙を示してゐるのである。今若し吾々が識野を活動寫眞の映寫幕に譬へるならば、常態の意識過程は一個のフイルムで作られた映畫の連續的變化に相當するが、夢遊狀態に起る分裂した意識過程は、一個のフイルムを中途から突然切斷して、全く異つた標題のフイルムをそれに置き換へたやうなものである。之に反して自働手記に見る意識分裂の形式は、二個のフイルムを使用して、同じ映寫幕の異つた部分に映寫したやうなものである。

七　二重人格

夢遊現象の發作に伴つて識野に起る觀念の分裂體系には、その複雜と發展の程度に色々の差がある。私の被驗者の例に於ては、その構成が比較的單純で、亡父の醉態に關聯した觀念以外には殆んど何物も含まない。故に夢遊狀態の進行してゐる間、彼女の精神生活は只その觀念の表出のみに狹められて、其他の事には殆んど何の印象をも感受せず、且又自分の周圍の實際狀態に自分を適應させることも出來ない。然しながら、或る場合には、この分裂したる觀念體系が一層廣く又一層完全に發展して、その中に本人の精神生活の全領域を包有してしまふこともあゝ。かゝる場合には本人の行爲は比較的常態に近く、分裂體系がその識野の全體を占有してゐる時ですら、環境に適應し得るものである。かかる場合は最早や夢遊狀態とは云はず、別に**二重人格**と呼ばれてゐる。

二重人格は、その表現が如何にも戲曲的性質を帶びてゐるが爲に、非常に俗間の興味をそそり、小說や活動寫眞などにも屢

く織り込まれて、盛んに魅力的な材料を供給してゐるが、その實例は既に多く世に發表せられ、またその不完全なる形式のものは、それほど珍らしいものではない。現に前に擧げた私の被驗者なども多少不完全ではあるが、一種の二重人格者である。

古來二重人格の最も完全な實例として擧げられてゐるのは、有名な米國の心理學者ヰリアム・ジエームズ教授の取扱つた牧師アンセル・ボーンの話であるが、この話は既にあまりに諸書に引用され過ぎてゐるから、私はこれとよく似た話でオスボーン博士の報告した一例を簡單に紹介しよう。

「一八九〇年の頃米國フイラデルフイアに近いある繁華な町に、A某といふ一人の金物屋の主人が住んでゐた。彼は少年の時分から職務に忠實で、早く相當の蓄財もしたので、遂に自分で、店を開いて、多數の徒弟も養ひ、店の信用も厚かつた。

處が或る年十一月某の日曜日に彼は突然姿を隱した。その時は丁度夕飯の前で、彼の細君は既に食事の仕度も出來てゐると云つたのであるが、彼はその食前にほんの五六分間散歩して來るといつて、外へ出たまま歸つて來なかつた。衣服は勿論平常着のままで、また金は一文も持つてゐなかつた。其處で家人は非常に心配して、或ひは新聞に懸賞廣告を掲げ、或ひは探偵會社に依頼して彼れの行方を搜索したが、終に皆目分らなかつた。

約二ケ年も經過した後、遙か南方の或る町の或る鐵物屋で、多勢の職人が働いてゐた時、その中の一人が突然仕事の手を止めて、非常に當惑した顏附で、「此處は何處だらう。此處は俺の店ではない。俺は一體何處へ來てゐるんだらう」と叫び出した。その男はB某といつて、十數ケ月前ふらりと此の町へやつて來て、この店へ傭はれたのであつた。彼は極めて靜によく働いたが、その經歷に就ては仲間の誰も曾て知る所がなかつたので、彼等は皆この內氣な男を嘲笑してゐた。處が今突然彼がこんなことを叫んだので、皆が驚いて彼を見ると、彼は額に汗を流して神經をぴく〳〵とさせてゐる。其處で皆が彼に向つてB某と呼んだが、今の彼に取つてはそれは自分の名ではなかつた。彼は終に感極つて、戰慄しながら主人の處へ行つた。主人は彼れの物語を聞いて吃驚した。

十數ケ月の彷徨と勞働の後に、彼の第一人格が又覺醒した。彼は北部に於ける自分の家庭のこと、家族のこと、そして繁昌してゐる店のことを段々に憶ひ出した。それから遂に彼の不幸なる日曜日の回想が漠然と浮んで來た。食事仕度が細君の手に依つて既に出來てゐたこと——彼は只五六分の散歩を取るため外出したこと——などを憶ひ出した。然しその後のことは全部

白紙であつた。彼は現在の工場で十數ケ月間一生懸命に働いた。そして充分なる賃銀を得てゐたに拘らず、一錢の金も持つてゐなかつた。彼がその金をどうしたかは全く知れなかつた。」

この話の場合に於いては、長い間の意識分裂が起つたものであることは一見して明かである。常態の意識の流れが突然斷絶して、全然異つた心理過程の連鎖がこれに取つて代つたのである。この新しい體系は本人に二ケ年間も秩序ある生活を送らせるに足るだけの複雜なる構造を持つてゐたが、それが突然消失すると又以前の精神の流れが復活して來た。かゝる例が夢遊現像と異る處は、たゞそれに關係ある觀念體系が一層精細に發展しただけである。

八　人格變換

上述の例に於いては、第二人格は只一度しか出現してゐないが、時には第一人格と第二人格とが、屢ゝ交替に現出することもある。これを**人格變換**といふ。佛蘭西のアザムといふ醫師によつて報告されたフエリダといふ少女の話は其の最適例である。この話も牧師アンセル・ボーンの話と共に非常に有名で、うるさく諸書にも引用されてゐるが、交替性二重人格の實例としては、これに匹敵するだけのものがちよつと他に見當らないので、煩を忍んで爰に簡單にそれを書きつけて見よう。

フエリダといふ女は生來餘り快活た方ではなかつたが、十三歲頃から既にヒステリーの初期の徵候を現はし、性質が徐々憂欝となり、屢々頭痛激しく、時には喀血したこともある。元來が怜悧で、教育も相當に受け、殊に裁縫はその得意とする所であつたが、十四歲の頃から、折々編物などしてゐる際に、知らず〳〵頭を垂れて數分間の昏睡に陷ることがあつた。處が今度頭を上げると、彼女の人格は一變して、先の憂欝であつたものが非常に快活な少女となつてゐた。しかし日常の業務を取ることは少しも變りがないので、最初は家人も氣が付かなかつた。すると數日間も經つと又以前と同じ昏睡が始まつて、今度目を醒ますと再び元の憂欝な少女に戻つてゐる。そして其の時には、先の快活であつた時の經驗は全然忘却してゐるのである。

このやうな變換がその後も幾度となく繰返され、かくて數年を經過するうちに、第一人格の狀態と第二人格の狀態との相違が、段々著しくなつて來た。そして彼女が第二狀態にある時は、第一狀態のことは記憶してゐるが、第二から再び第一に戻つた時は、第二狀態中のことは全然記憶してゐないのである。その證據には、フエリダが追々年頃になつて、自分の家に屢ゝ出入する或る男子と相思の間となつて、終に第二狀態中に懷姙

したが、彼女が第一狀態に復歸した時は、毫も自分の懷妊のことを知らず、隣人がそのことを打開けると非常に驚いて、忽ちヒステリーの激しい發作に襲はれた。更に興味あることは、最初のうち彼女の人格變換は、第一狀態の方が長くて第二狀態にあることは極めて短かつたが、其の後段々第二狀態の方が長くなつて、彼女が廿七歲になつた頃には、第一と第二との期間が殆んど同じ長さで繰返されるやうになり、更に其の後は以前とは反對になつて、第二狀態の方が次第に長くなり、三十二歲の頃から第二狀態の方が却つて普通となり、第一狀態が次第に短くなつて來たことである。その頃既に彼女は件の男子と結婚して、二人の子の母親となり、夫と共に雜貨店を營んでゐたが、夫には他に一人の情婦が出來てゐた。處がフエリダは、第二狀態の時には非常にその情婦を憎んで、常に嫉妬の炎を燃やしてゐたが、偶々第一狀態になると、萬事を忘れてその情婦と親密にしてゐた。しかし三十九歲の頃からは、彼女は全く第二狀態のみの人となつて、その生を終つたといふことである。

前に擧げた私の被驗者である二重人格の女なども、フエリダほど顯著ではないけれども、亦このタイプに屬するものである。三四年前までは、彼女の人格變換は殆んど毎月一回の割合で起つた代りに、第二狀態はほんの二三日か精々一週間までで終つたが、其の後は變換の度數が兩月に一回、若しくは三四ケ月に一回と段々少くなると同時に、第二狀態の繼續期間は三週間乃至一ケ月に亘るやうになつた。處が昨年九月、紙幣を盜用して約半年間行方不明であつたが、本年二月中旬にまた飄然と歸宅してから後は、殆んど第二狀態のままで今日に至つてゐる。或は最早や再び第一狀態に復歸することはないかも知れない。

時には又分裂した人格が二つでなくして、三つ、四つ、乃至はそれ以上であることもある。これを總稱して**複重人格**といふ。今日まで報告された複重人格の中で、最も多くの分裂人格を持つてゐたのは、嘗て印度の一新聞にドクトル・ヰルソンといふ人が發表してゐた一少女である。彼女は十三歲までは全く他の子供と變らぬ普通の少女であつたが、その年重症のインフルエンザに犯され、それが癒えると間もなく實に十種の人格變換が始つた。ヰルソン氏はかう書いてゐる。――「其の變換は余の眼前で、十種の全く異つた又明かに認め得られる人格を展開した。此等の各人格は何等の正確な順序なしに變換して行つて、他の九種の内のどの人格でも、彼女が全然知らない觀念や、特性や、技能を現はした」と。

九　通靈現象

此處まで說いて來ると、世間で、特に心靈派の學者間で神秘的に解釋されてゐる所の憑靈の現象なども、亦意識分裂の一種に過ぎないことが明白になるだらう。今假に此處に一人の狐憑者なるものがあつて、その人の精神狀態が、一方に於いては當人の正氣な意識活動があるに拘はらず、同時に又他方に於いてその憑依物に類する言動があるならば、それは前述の自働手記の場合と同じく、分裂意識の同時的活動である。若し又その當人の正氣な意識活動と、憑依物の所爲と思はれるやうな意識活動とが交互に現出するならば、それは夢遊現象若しくは二重人格と同じく、分裂意識の交替的活動である。若し又當人が、自分には狐が憑移つてゐるといふ誤つたる信念に囚はれてゐるならば、それは後に說くところの妄想（憑依妄想）であらねばならない。

狐以外の憑依物――例へば生靈、死靈、犬神、狸、貉、蛇、其他草木、金石、天狗、惡魔、物怪等――に於いてもまた同樣である。古來宗教的に非常に神秘視せられ、往々一宗の開祖と仰がれるに至つた神憑者に於いてさへも亦同じである。ただその憑移つたと思はれる對象が、神か、狐か、將た生靈か死靈だけの相違であつて、その當人の精神過程は皆同樣である。

從つてこれらの神憑者がいかほど嚴肅に神の態度を裝ひ、またいかほど莊重に神の言葉を弄したとしても、決して驚き怪むに足りない。それは只本人の分裂したる觀念體系に過ぎないからである。かういふ神憑者は屢々自分自身の心にもないやうな、又一見したところでは到底當人自身が知つてゐる筈もなささうな、六かしい宗教的の言葉を知らず／＼口走つたり、或ひは神秘的な文字を書き連ねたりすることがある。すると世俗ではそれを尊んで、有難い神意の表現であると思惟し、前者を「御口先」後者を「御筆先」といつて崇敬する。しかし是等は心理學上からいふと、前に述べた自働現象の一種に過ぎないものであつて、その御口先や御筆先の內容を細密に調査して見ると、或ひはその當人の精神內に日常抱持されてゐる主義主張や、持論や妄想の出てゐることがあり、或ひは最も神怪視されるものでも、高々當人自身が全然忘却してゐた過去の記憶や、知識や、經驗の再現されたものに過ぎないこと、かのプリンス博士の被驗者の一例や、又ヴエロール夫人の自働手記に異ならない。或ひは、若しその神憑者が職業的の神降しのやうなものであつたら、修業中に師匠から習ひ覺えたことを其のまゝに口走つてゐることもあり、時には又全然意味も聯絡もない、斷片的な、言語錯亂症や濫書症を呈出してゐることもある。一例をいへば、數年前、一時我が日本の思想界や宗教界を惑亂させた

といつてよいほどの大騷きをさせた、あの大本教團の御筆先の如きも、私がその直筆に就いて精査した處に據ると、殆んどいふにも足りないほどの低級なものであつて、豫言だの、天地の經綸だのいふ種類の文字は一つも見當らない。そして麗々しく「大本神論」と題して活字で天下に發表してゐた所謂御筆先の豫言なるものは、すべて皆出口王仁三郎が僞作してゐたものであると云ふことが分つた。

西洋の靈媒とか、日本の巫女（みこ）、口寄せ、ありまさ、神降しなどいふものも、皆これと同樣の現象であることは云ふまでもなからう。世俗でいひ傳へられてゐる「神隱しに會ふ」とか「天狗に浚（さら）はれる」とかいふ話の中には、隨分神怪不可思議なものもあるが、何れも前述の夢遊現象の一種であるか、又は人格變換の一種であることは、詳しく說明する必要もなからう。中には僅かに二三日間で日本のありとあらゆる高山を跋涉して來たやうな話もあるが、それは自己暗示、またはその犧牲者を引張り廻した所謂行者山伏（やまぶし）などの暗示によつて、幻覺を見せられたに過ぎないのである。

一〇　意識分裂の特性

以上述べ來つた諸種の變態心理現象は、何れもある觀念の體系又は思想の連鎖が、殘餘の意識から分裂して、獨立の存在を取つたものであることが分る。さて是等の現象を一層精密に研究して見ると、自働手記にも夢遊現象にも共に顯著な特性が二つ現はれてゐる。その一は、意識の主體（普通にいふ人格または自我）がその分裂した體系のことを全く知らないことである。私の被驗者の例について云つても、彼女が常態に復歸した時には、その夢遊狀態中の期間を占領してゐた醉漢の行動や觀念に就いては何の記憶もない。又その二は、分裂した體系は自治的に發展する。即ち意識の主體には何の關係なしに、自分自身の進路を辿つて、その人格性の統御から全く免除されてゐることである。同じ私の被驗者に就いて云ふと、彼女はその夢遊狀態中に何をなすべきか、豫め決定しておくことが出來ない。亡父の醉態に關聯した觀念が獨立の體系として發展して來て、これに對して彼女の人格性は何等の統御をも加へることが出來ないのである。

自働手記の現象にも亦同じ特性が現はれてゐる。第一に、本人は自分の手が果して何を書いてゐるかを全く知らず、また自分の手が動いてゐるといふことすらも知らない。第二に、その人格性は自分の手に何を書けと命ずる力も持たず、又迸り出る觀念の連鎖を少しも變更させる力も持たない。

此處に問題が起る。さて以上の二つの特性は、双方とも、分裂されたる觀念體系には缺くべからざる重要な特徴と認むべきであらうか。或ひは又この兩者の中の何れか一つが現はれさへすれば、それで意識分裂といひ得るであらうか。若し又何れか一つだけでよいとするならば、どちらがより重要な特徴であらうか。人格性が分裂した體系の存在を知らないと云ふ方の事實か。或ひは又分裂したる體系が自分勝手に發展して、人格性の統御を受けないといふ方の事實か。

これは少しく仔細に觀察すると、直ぐ次のやうなことが分る。即ち第一の特性を現はす場合は、すべて必ず第二の特性をも現はさればならないと。今若し或る患者の精神が、人格性の絶對に知らない觀念體系を容れてゐるとしたら、この觀念の體系は明かに獨立してゐるものであつて、從つて人格性の統御を受けてゐないものでなければならぬ。故に第一の特性は、第二の特性を豫め假定してゐるものである。實は第一の特性は、第二の特性を强度ならしめたものに過ぎない。第一の特性を現はす總ての場合は、啻に分離した、獨立の、自治的の觀念體系を持つてゐるばかりでなく、更に又その觀念體系の存在を人格性は知らないのである。だから吾々はかう結論することが出來る。「知らない」といふこと（第一特性）は、「獨立」といふこと（第二特性）の一特例に過ぎず、從つて「獨立」の方が一層根本的で且つ普遍的の特性であると。そこで意識分裂といふことは、たゞ此の獨立といふ根本的特性だけを示すものであつて、人格性が知らないといふ方は單に二次的の特性に過ぎないと見るべきである。茲に於いて次のやうな定義が生れて來る。觀念の體系が人格性から分離して、その進路や展開が人格性の統御から離脱すると、この觀念の體系は分裂したと稱せられると。

二　强迫觀念

さて吾々は之から更に進んで、最初に列擧した諸現象の中で、この意識分裂の定義に當て嵌るものがまだ有るか無いかを調べて見よう。先づ强迫觀念に就いて考察しやう。强迫觀念とは、吾々の思想の進行中に、突然吾々の意志に逆らつて意識の中へ侵入して來る觀念のことであつて、前にも述べた如く、止むに止まれぬ心の衝動である。そして自分自身にも確かにそれが病的であることをよく自覺して、何とかしてその觀念から逃れようと努力してゐるに拘はらず、執拗に實行を迫つて來るものである。例へば計算强迫觀念ならば、數へなくてもいゝものを數へずにはゐられない。往來を歩いてゐると足數を數へ、友人の家を訪問すると天井の節穴を數へ、汽車に乘つてゐると

電信柱の數を數へ、本を讀んでゐると行數や字語を數へるやうなものである。また入念强迫觀念ならば、何事でも一度の注意だけでは安心が出來ない。外出の時火鉢の殘火をちやんと始末しておきながら、何度も戻つて來て見直したり、少しく込み入つた手紙であつたら、封をしてから又文言が氣になつて、更に封を切つて讀み直して見たり、金包を他へ屆ける時などは、中味が果して有るか無いか氣になつて、その人の門前まで行つてから、密かに包みを開けて見たりするやうなものである。この種の現象で最も多く見るのは、謂はゆる潔癖狂（潔癖强迫觀念）であつて、有らゆるものが不潔に感じられ、または黴菌が附着してゐるやうに思はれ、朝から晩まで、終日手を洗はずにはゐられないものである。

誰でも知つてゐる話であるが、博士ジョンスンは倫敦の市街を歩く時には、必ず郵便箱に手を觸れる習慣があつて、若しも一つでも見落すとわざ〳〵後戻りして手で押さへて行く。彼は又家の戸口を跨ぐ時には、必ず右足とか左足とかから始めることに定まつてゐて、若し誤つて間違つたら必ず後戻りしやり直した。またナポレオン一世は自らその軍隊の先頭に立つて、市街を歩く時ですら、戸毎の窓の數を勘定せずにはゐられなかつたといふことである。是等も勿論强迫觀念の一種である。若し前に擧げた私の被驗者に向つて、「お前は何故に食卓のものをそんなに斜かひに並べるのか」と問ふと、彼女はいつもかう答へる。「私は何故だか自分にもわけが分りませんが、かう斜かひに並べなければ安心が出來ないのです。かうしないと何だか氣持が惡くて、どうしてもさうせずにはゐられません」と答へる。即ちこの被驗者には、茶碗や、どんぶりや、皿小鉢を見ると、直ぐ一定の觀念體系が起つて、彼女の人格性はその觀念の展開して行くのを統御することが出來なくなるのである。勿論彼女は明らかに自分の行爲を知つてゐるが、それを變更しまたは制止することが出來ない。即ちこの症狀では、觀念の一體系が人格性から分離して、單獨に展開するのであるから、これは意識分裂の定義に當てはまるものである。但しこの型の意識分裂は、その人格性が分裂した體系の存在をよく知つてゐるといふ點に於いて、自働手記に見るそれとは異つてゐる。しかしながら、分裂體系の獨立といふ點は兩者共に同一である。

一二　諸種の幻覺

次には幻覺に就いて考察して見よう。幻覺は前にも既に例示した如く、全然虛僞の感覺であつてその現はれる器官に應じて、これを幻視、幻聽、幻味、幻嗅、幻觸等と名づける。これ

は常態の人々にも屢々現はれるが、（夢は誰でも經驗してゐる幻覺の一種である）精神に多少の異常を來してゐる者には特に多く現はれる。中にも幻聽が最も普通である。その聲は、時には愉快な性質を帶びてゐることもあるが、大抵は不愉快なものであることが多い。例へば「馬鹿」とか「意氣地なし」とか云つて、常に自分を罵詈嘲笑する聲を聞いたり、若しくは「汝は過去の罪惡により近々のうちに死刑に處せらるべし」と絕えず脅迫する聲を聞いたりする如きである。しかし此の場合、それらの聲は決して外界から來る實際の聲でないことは分つてゐる。患者自身には、その聲が全く眞實のものと聞えるかも知れないが、傍觀者から見れば、それは單なる空想の產物に過ぎない。換言すれば、その聲はたゞ患者の精神內にだけ存在するものであつて、實は彼自身の意識の一部分に過ぎない。しかし其の聲は精神の一部を形成してゐるけれどもなほ人格性の一部となつてゐないことは明かである。故にその聲及び其の聲の表はす觀念體系は、患者自身の意識の分裂したる部分と認めなければならないことは分り切つたことである。嚴密に云へば、その觀念體系は人格性から分離したものであつて、そして其の分裂した體系は、幻覺の「聲」といふ手段を取つて自己の存在を人格性に告げてゐるのである。即ち患者の意識が二部分に分割されて、その一方が他方に向つて話しかけてゐるのである。

幻視に就いても亦同じことが云へよう。吾々が每夜見てゐる夢の大部分は、幻視の性質を帶びてゐるものであるが、その夢は、少しく注意してこれを解剖する時は、すべては自分自身の意識の一部が幻影の形を取つて現はれたものに過ぎないことが理解されるであらう。また透明體幻影といふことがある。水晶の玉又は硝子の玉、或ひはコツプに盛られた水面、或は鏡の面などを凝視しつゝ無念無想の狀態に入つて行くと、忽ちそれらの透明體の面に樣々の幻影が現はれて來るのである。古代の希臘や其の他の國々では、これを以て神託を伺ふ唯一の手段としてゐた。今でも紛失物若しくは置き忘れた物品の所在を探知するがために屢々この方法が用ひられてゐるが、これも分裂意識の活動に外ならないことは、前述の自働手記によつて過去の忘却されたる記憶が復活し來るのと同理である。德川時代の御殿女中などが、夜半の丑三つ時に大廣間の鏡の前に坐つて、一生懸命にその面を見つめてゐると、自分の未來の姿がまざ〳〵と鏡面に現はれて來るので、それによつて一生の運命を卜占したといふ話も、亦自己の分裂意識の影を見てゐたに過ぎないのである。

一三　二重體と幽靈

所謂二重體の奇現象なども亦幻覺の一種と認むべき場合が多い。二重體とは、一個の身體が二個に分離して、同時に二個所に於いて別々に働作し得るといふ說であつて、また離魂病とも呼ばれてゐる。古來幾多の傳說や奇話がこれに關して傳へられ、特に古代の希臘人及び羅馬人の間には、全くこの現象が事實として信ぜられてゐた。心靈派の著述には不思議な實例が澤山に記載されてゐるが、今その中から、ロンブローゾの擧げてゐる一例を左に紹介しよう。

「一八四五年リヴォニアで起つた事實。生徒四十五人の女子寄宿舍に於いて、セージ夫人といふ先生は、同時に二個所に居り二人のセージが坐つてゐる。一人は黑板で白墨を手にして算術を行ひ、一人は手に何も持つてゐない。又或る時諸生徒の面前で、食堂で食事をして居つた所が、その二重體が椅子の後に立ち、食事はせずに夫人の身振を悉く模倣して居た。或る日風邪で臥床して居た時、友人のランゲル夫人が看護して呉れて、本を讀み聞かして居たら、靈體が室內を步いて居るのを見て吃驚した。

又或る日生徒に刺繡をやつて居つた時に、セージ夫人が庭園で花を取つて居るのを見た。然るに其の二重體は居間の大きな安樂椅子に腰を掛けて身動きもしないで居た。二人の生徒が傍へ行つて見たら、瓦斯から出來たやうな身體で、少しづゝ段々と消えてしまつた。セージ夫人は初め庭で働いて居つた時に眠つたやうな狀態で居つたが、その事を聞かれて空いてゐる椅子のことを考へ、生徒が先生の居ないので騷ぐだらうといふことを恐れて居たと話した。この狀態が十八ヶ月間續いて夫人はそのために免職された。去るに臨み、夫人は同じ理由で免職されるのは是が十九回目であると云つた。」

成程このまゝに見れば隨分不思議な話である。しかしこれが又、見る方の側の幻覺でないといふ證據が何處にあらう。多勢の人々が同時に見たからといつて、決して幻覺でないといふ證據にはならない。群衆幻覺は屢々實際に經驗せられるところである。殊にこの夫人は、同樣の理由で免職させられること之で十九回目といふ折紙附の人であるのに於いておやである。

最近私の會の一會友から、これに類した非常に興味ある實例を報告せられたので、爰に簡單に紹介して見よう。

時は本年五月九日午前五時過。場所は、東京市內日本橋區の眞中。右の會友の知人ＳＳ氏の自宅で起つた出來事。

ＳＳ氏は本年廿一歲の青年、非常に文藝に趣味を有し、特に露國作家の作品を愛讀してゐる。生來有名な朝寢坊であつたが、最近は努力に依つてその習慣が殆ど矯正されてゐる。身體

的にも精神的にも至極健康で、今までには不思議な經驗や幻影等を見たことは一度もないさうである。

其の日SS氏は、朝の五時頃一寸目を覺まして、床から起き出さうとした時、家族の一人が枕邊に來て、事務室の窓の上の日除けが懐れてゐるから直ぐなほしてもらひたいと云つた。そこで寢卷のまゝ起き上り、自分の六疊の寢室から事務室に出で、窓の方へ歩いて行つた。その窓はほゞ東に向いて開いてゐて、外は一間許りの路次を隔てゝ隣りに鐵筋コンクリートの高い建物が立つてゐる。寢室から窓までの距離は約十間ぐらゐ。さてSS氏は寢卷のまゝで其の約半ばほどまで近づいた時、自分と全く同じ寢卷を着た、自分によく似た男が、既に自分より二三間先に窓に近寄り、机の上に倚子を二つ重ねてその上に乘り、窓かけをなほしてゐるのを見た。誰だらうと考へてゐるうち、そのよく似た男が一寸後方を振り向いたが、豈圖らんやそれは全く自分であることが分つたので、全身の血が一時に止まつてしまふほど吃驚すると同時に、全く意識を失つてしまつた。氣がついた時に、頭部に繃帶して床の中に橫はつてゐる自分自身を見出した。

さて家人の話に據ると、SS氏は床から起き出て直ぐ窓の處に行き、机の上に倚子を二つ積み上げて、その上に乘り、窓かけを直しながら一寸後方を振向いた刹那、二つ積み重ねてあつた倚子が崩れて仰向けに床の上に墜落し、氣絶した。五六分位で呼吸は恢復したが、約三十分間は人事不省のまゝで經過したさうである。

これなどもSS氏の記憶だけでは所謂二重人格の一實例にもなるのであるが、家人の證言によつてその眞相は直ちに理解され得る。即ちSS氏の當時の精神狀態は、目は覺めてはゐたが、まだ半醒半睡(ヒプナゴギック)の境地を彷徨してゐたものと見て差支へなからう。或ひは他の何等かの考へに意識が囚はれてゐたので、當面の仕事に對しては放心狀態になつてゐたとも想像されよう。故に寢所から二三間ほど歩いたまでは明瞭に記憶してゐるが、自分で机の上に倚子を二つ積み重ねてその上に乘つたことは全然記憶がないのである。しかしながら、身體感覺においては確に高い所で手を働かしてゐるだけの動作が漠然と意識せられるので、其處で自分自身の姿が客觀的に幻覺となつて認知されたのである。(夢の中ではこんな經驗は屢々ある。)そして、それは丁度前述の自働手記に於いて、分裂意識の活動を、殘餘の意識が見て驚き怪しむと同樣に、SS氏が自分自身の幻覺に驚き怪しみたから、ふと振向いた途端、初めて全自我意識がはつきりと復活して來たので、其處にSS氏の精神に急激な混亂を來し

て、大いなる衝動に打たれると共に椅子から墜落して人事不省に陷つたのである。

矢張り一種の幻覺である。吾々が幽靈を見る心理なども、亦これから推して知るべきであらう。

一四　妄想

更に妄想に就いて考察を試みよう。妄想は幻覺と密接な關係のあるものであつて、大概は幻覺に伴つて起るものである。この兩者の區別は、前にも云つた如く、幻覺は虚僞の感覺であるに對し、妄想は虚僞の信念である處に存する。故に若し人が客觀的に實在しないものを見るならそれは幻覺を持つてゐるのであつて、若し又「我は天下の將軍なり」とか、「我は某皇族の落胤なり」とか、全然事實にないことを信じてゐるなら、それは妄想を持つてゐるのである。妄想にも色々の種類があるが、大別して憂鬱と被害と誇大との三に分けられる。

憂鬱妄想とは、極めて卑屈な、受動的なものであつて、常に自分自身を實際よりも無能力、無價値と考へ、自分自身を非常に卑下し、苛責し、悲觀するもの、或ひは自分には罪も何も犯してゐないのに、重大なる罪惡を犯したと信じてゐるもの、或ひは自分の身體には何も病氣らしい病氣がないのに拘はらず、自分は非常に病弱なもの、自分は既に不治の難病に罹つてゐると信ずるもの、などである。また被害妄想とは、自分は絶えず他から迫害を受けてゐると考へるものであつて、或ひは刑事につけねらはれてゐるとか、探偵に密行されてゐるとか、或は他から毒害されやうとしてゐるとか、或ひは友人達が寄つてたかつて、自分を陷れる計略を廻らしてゐるとか、或は何の根據もなしに妻の貞操を疑ふとかいふ類のものである。また誇大妄想とは萬事を自負自尊的に考へるものであつて、我は世界の帝王なりとか、吾は釋迦の再來であるとか、我は國常立尊の化身であるとか、我は百萬長者であるとか、我は大發明家であるとか、我は世界一の美人であるとか考へてゐるものである。

妄想の最も顯著なる特徴はその不動性であつて、說得だの道破だのといふことを超越してゐる處にある。迷信は、その方法の宜しきをさへ得れば、なほこれを道破し說得して正道に導くことを得る。しかし妄想は、いかに論理的の說明を以てその不可能なることを說き聞かせても消失するものではなく、又いかに矛盾した、或ひは明白な反對の事實が現はれても動揺するものでない。却つて其等は益々その妄想を强固ならしめる手段となるに過ぎないのである。故に今吾々が松澤病院の蘆原將軍に向つて、君の考へは間違つてゐるといふことを、いかほどり

強く說き聞かせても無益であつて、彼はやはり依然として、俺は天下の蘆原將軍であると威張つてゐるのである。恐らく彼は、自分の前身が金次郎といふ櫛屋の職人であつたことを記憶してゐるに相違ない。又自分の家系や家族の過去の經歷をも熟知してゐるに相違ない。また自分の現在は、精神病院の一室に監禁されてゐる身であるといふことも能く知つてゐるに相違ない。しかも是等の事實は、自分が天下の蘆原將軍であるといふ信念と全然矛盾してゐることには毫も思ひつかないのである。彼は依然として自ら天下の將軍を以て任じ、彼れの命令一下すれば、百萬圓の軍資金ぐらゐは忽ちのうちに集め得ると豪語してゐるが、而もその次の瞬間には醫員や看護人に手をさし伸べて、卷煙草や小使錢をねだつたり、または自分で箒を持つて病室の掃除をしたりするのである。この矛盾の心理は一見した處では、到底說明も理解も出來難いやうに見えるが、しかし患者の精神が意識分裂の狀態にあることに思ひ至れば、謎は忽ちに氷解する。即ち彼の精神は、最早や單一の目的に向つて一定した方向に進む統一ある意識の流れを現出することなくして、各々自分勝手の發展を遂げ、その仲間の意識に會つても何の影響をも受けないやうな、分裂した狀態から成立つてゐるのである。患者は自分が將軍であると信ずる、同時に彼はまたその信念と全然矛盾した事實にも感づいてゐる。而もこの二つの相反した事實は、彼の心意の中に共存して、互に衝突することもなく、又互に他方の眞意を理解することもない。この二つの意識は、恰も嚴重なる障壁に依つて仕切られたる理窟拔きの部屋の中で銘々勝手の方向に流れ、この障壁を貫いては如何なる思想も論理も通過することを許されないやうなものである。同樣に患者の信念は吾々の科學的論據によつてその不可能を說破されることはない。彼は吾々の理論の要點を立派に理解する、けれどもその眞意は彼の妄想を包有する部屋の中へは侵入することを許されない。それは丁度水と油とを一緒にしようとするやうなもので、いくら攪きまはしても直ぐ別々になつてしまふ。

先に擧げた私の被驗者の妄想に就いても、亦同樣のことが云ひ得るのである。

この現象は非常に奇怪な病的なものに見えるかも知れないが、しかし理窟拔きの部屋に閉ぢ籠つて頑強に自分自身だけを守つてゐる意識の分裂作用は、決して精神病院の住人にのみ限られてはゐない。普通の各人の心理にも亦起り得る共通な、そして殆ど避けがたい事實である。吾々の抱持してゐる政治的意見や道德的見解などいふものは、少しく精細に分析すれば、隨分と理論に合はない、矛盾だらけのことが多い。而も吾々はな

ほ少年時代からの傳統的信念に支配されて、この矛盾に對して別に苦痛を感じてゐないのである。

一五 結論

以上説き來つた處によつて、諸種の變態心理現象は、皆吾々の意識の分裂作用に基因するものであることが分つた。そして此の作用は、程度に種々の差こそあれ、各人に共通の心理過程である。茲に於いて次の結論に達し得る。――變態心理現象と常態心理現象との間には、決して一定の境界線はない。ただその程度の如何に依つて何れかに定まるものである。從つて或る種の變態心理現象が、如何に極端に、珍稀に、また突飛に見えたとしても、それは何れも皆吾々の常態心理の中に於いて、既に萠芽を含有してゐるものであつて、決して全然最初から何も無かつたものが新たに現出したのではない、と。

附記 變態心理現象として解説すべきものは、まだ以上の外にも沢山にある。特に催眠現象と精神作用のことについては、是非とも多少言及したいと思つてゐたが、時間がないので止めにしました。偏にお詫びいたします。（五月廿五日）

犯罪の進歩と探偵の進歩

醫學博士 小酒井不木

緒言

科學の進歩と共に、犯罪及び犯罪者の科學的研究は、最近に至つて著しい進歩を遂げた。第十九世紀の中頃、イタリアのロンブロソーが「犯罪人類學」を建設した頃から、犯罪者の研究從つて犯罪の科學的研究が盛んになり、ことに第十九世紀の終りから、第二十世紀にかけて、犯罪の科學的研究即ち科學的犯罪探偵法の研究はめざましい發達をして現今の狀態に立ち至つたのである。

科學的探偵法の進歩と共に犯罪そのものにも「進歩」を來し

たことは、やはり爭はれない事實である。尤も「犯罪の進歩」といふ言葉は、犯罪の本質の進歩といふ意味ではなくて、主として犯罪方法の進歩をいふのである。そして此處で言ふ「進歩」は、たゞ「科學的になつた」といふ意味に過ぎないのであつて、普通私たちが「進歩」といふ言葉から聯想する、「喜ばしい」意味は毛頭ないのである。探偵方法が進歩すれば、當然犯人の方では、それに對抗して、容易に探偵されないやうな方法を講ずるのであつて、この意味に於て探偵方法が進歩すれば、犯罪方法もある程度まで進歩する譯である。時には探偵方法よりも先に、犯罪方法が一段の進歩を示し、犯罪方法の進歩が探偵方法の進歩を導くやうな場合がある。例へば毒殺の歴史のある時期に於ては、新奇な毒が使用される毎に、その毒の檢出法又はその毒の人體に及ぼす影響の研究が始められるといふ有様であつた。その外の犯罪についてもまた同様な場合があつて、「犯罪者は藝術家で、探偵は批評家である」といふ言葉も、あながち奇拔ではないのである。

犯罪方法が進歩したといつても、現今の凡ての犯罪が、最も進歩した方法で行はれるといふ意味では決してない。この點に於て、「犯罪の進歩」と「探偵の進歩」とに、多少の意義の相違がある。何となれば、探偵の際には、どんな小さな犯罪にも、最も進歩した方法が應用されるか、或は少くとも應用されたことを欲せられるからである。ところが、犯罪は必ずしもさうでなく、ことに突然性殺人の如き場合には、現今でも原始人類の行つたやうな、原始的な方法が採用されるのである。尤も、凶器に「進歩」のあることは否み得ないが、日本の殺人例を調べて見ると、ピストルの使用されることは甚だ稀であつて、多くの場合に、依然として斧や鉈や短刀などが使用されて居るのである。殺人ばかりでなく、掏摸や詐欺なども相も變らぬ「昔ながら」の方法で行はれて居る。

探偵が最新の方法で行はれて居るに拘らず、犯罪が舊式な方法で行はれ易いといふことは、決して理由のないことではない。然らばどんな理由があるかといふに、探偵に從事するものは通常頭腦の優れたものであるに反し、犯罪者に多くは「愚」なものであつて、人類學的に「野蠻」であると同時に、その「智慧」もまた野蠻人に近く、從つて最新の方法を應用しやうともしないのである。勿論中には智慧の勝れた犯罪者がないでもなく、又、事情によつては、最も進歩した方法を行はねばならぬ場合もあるけれども、かやうな必要に迫られない限り、舊式な方法によつて滿足するのが、一般犯罪者の常であるから、今後如何程科學が進歩しても、多くの犯罪は、やはり舊式な方法で

行はれるにちがひないのである。探偵小説には、色々な、巧妙な、新奇な犯罪方法が描かれてゐるけれども、それは畢竟小説であつて、實世界の現象ではない。

以下私は、最近の犯罪方法と探偵方法との概略を述べて、上記の事情を一層明かにしたいと思ふのである。

竊盜方法

竊盜方法のうち、比較的科學的知識を必要とするのは、主として「金庫破り」である。然し、これとても、犯罪者それ自身は、大した知識を持つて居る必要はないのであつて、たゞ與へられた道具によつて、手際よく金庫を破りさへすればよい譯である。金庫製造業者の方で、段々破りにくい金庫を作るために、犯罪者の方では、更に、それを破る方法を工夫するに過ぎない。

最初木製であつた金庫は、後に鐵の帶をかけられることになり、更に鋼鐵製となり、その上に、色々な複雜な錠が工夫されたが、犯罪者の方では、火藥を用ふるやうになり、更に、彼等の所謂「スープ」即ちナイトログリセリンを以て、容易に破るやうになつたので、この時から金庫製造業者は非常な工夫を凝らさねばならぬことになつた。私はこの時期以後の金庫の發達に就て特に記して置かうと思ふ。

金庫破壞にナイトログリセリンが使用されるやうになつたとき、金庫製造業者は二つの難點に遭遇した。即ち、金庫の材料として、錐を以てしても孔のあかぬ、而も、ナイトロの爆破力にも堪へる物質を選ばねばならなくなつたのである。然るにナイトロの爆破力に堪へる物質は通常錐で穿たれ易く、錐で穿たれ難い物質はナイトロのために爆破され易いのであるから、金庫製造業者は、はたと當惑せざるを得なかつた。

ところがこの難點は遂に、英國人サー・ロバート・ハドフィールドによつて解決された。それは即ちマンガン鋼鐵の發見であつて、約十三パーセントのマンガンを含ませた鋼鐵は、ねばり強くて硬く、最早盜賊に破られる憂はないといふことがわかり、これが歐米各國の金庫の製材として用ひられるやうになつたときは、一時、金庫破りが中絶された程であつた。

然しこれも長い間ではなかつた。といふのは、このマンガン鋼鐵をも容易に破る方法が發見されたからである。それは何であるかといふに、かのアセチレン酸素吹管の使用であつて、酸素とアセチレンを別々の器に入れ、二つの瓦斯を管に通じて火をつけるときは、その強い火力によつて、さすがのマンガン鋼鐵も數分のうちに溶かされてしまふのである。而もナイトロの

如く、大きな爆音を發しないのであるから、實に理想的の金庫破壞器といはねばならない。アメリカではアセチレン酸素吹管を Torch と呼び、これを使用する盜賊を Flame burgler と稱してゐる。

そこで再び金庫製造業者は頭を惱ますことになつた。何しろアセチレン酸素吹管の發する熱は、華氏七千八百度といふ高いものであるから、それに堪へる物質を作ることは、容易なことではないのである。たゞ然しながら、吹管の出す熱も、金屬のために導かれ易いのであるから、極めて厚い鋼鐵板を使用しさへすれば、吹管の威力に、ある程度まで抵抗することが出來るのである。そこでこゝ數年來、或は鑄鐵の厚い板、或は鑄鐵に鋼を混じたもの、その他色々のものに就て實驗されたが、もとより十分滿足し得るものは出來なかつた。

ところが最近に至つて、ドナルドソンといふアメリカ人が、十數年來の研究によつて、殆んど完全に近いものを發見したのである。これは二種の抵抗力の強い金屬の、一つを心とし、他を皮として作るのであつて、この金屬で出來た金庫は、コロンビア大學での實驗によると、アセチレン酸素吹管では決して破り難いといふことである。

この新發見の金屬で作られた金庫が世界に普及するには、何十年も先のことであつて、今では Flame Burgler の黃金時代といつてよく、アメリカあたりでの「フレーム・バークラー」の跋扈は實にすさまじいものだといはれて居る。又、たとひ、ドナルドソンによつて發見された金屬を以て作られた金庫が世界中に行き渡つたとしても、從來の成行から考へて見れば、恐らく、更にそれをも破る方法が工風されるだらうと思はれる。かくて、金庫製造業者と金庫破壞者との戰爭は、永久にその勝敗を決しかねるであらう。

かくの如く、一方に於ては最新式の金庫が製造されやうとして居るにもかゝはらず、舊式な金庫もまた、依然として製造され販賣されて居る。だから大部分の盜賊は、やはり舊式な方法によつて金庫破りを行つて居るのである。ことにわが國では、金庫の發達も比較的遲々たるものがあり、盜賊は殆んど皆舊式な方法に依つて居るやうであるから、Flame burgler の尤たるものは、當分まだあらはれて來さうにない。

西洋でも日本でも、盜賊には迷信家が甚だ多い。アメリカには比較的少いやうであるが、歐洲各地で盜みを働いて歩くジプシーの群は極めて迷信深くて、發覺を防ぐために、現場に脫糞したり、自分の持物を殘して來たりするので、それがため却つて發覺され易いことがある。日本の盜賊もこれと似たやうなも

ので、暗殺さへかくさうとするものは甚だ少ないやうである。

時代によつて、窃盗の種類が變化したり、増減したりすることは、必ずしも、窃盗の進歩とは言はれない。自働車を盗んだり、郵便局の赤行嚢を奪つたりすることは、大昔にはなかつたことであるが、これは別に窃盗方法が進歩したのではなく、盗む品物が變化したに過ぎない。又、團體的に活動する盗賊たちは、電信電話を利用したり、新らしい暗號を工夫したりして、外形上、頗る進歩して居るやうに見えるけれども、これもたゞ舊い方法を「科學的」にしたゞけのことである。

詐欺方法

詐欺は窃盗と異なつて、元來智慧を必要とするものであるから、それだけ時代の進歩と共にその方法に進歩がありさうに思はれるけれども、その實、依然として舊式な方法が試みられて居る。一寸考へると、アメリカあたりでは、定めし、巧妙な、新時代的な詐欺が行はれて居るだらうと思はれるけれども、その實は、昔ながらの方法が應用されて居るのである。それ故、私は、これから、アメリカで最も多く行はれて居る詐欺方法について述べて見やうと思ふ。一時、アメリカでは「石油詐欺」と稱して、油田を發見したと欺いて、人々から金を捲り取ることが流行したが、近頃では昔に逆もどりして、「贋金」その他の二三のものを種とする詐欺が行はれて居るのである。

The Green-goods Game（贋造紙幣詐欺）。これは一口に言ふと、大藏省から紙幣を印刷する原版を盗み出したと言ひ觸らし、それを種に人々から金を捲り取る方法である。先づ詐欺者は偽の新聞を作つて、「先日、大藏省では紙幣の原版を盗まれたが、あの原版で印刷されては、紙幣の眞僞を鑑定することが出來ぬから、當局者は大に狼狽し、躍起になつてその原版を捜索して居るのである。」といふ意味の記事を印刷し、それを切抜きの形にして、それに一定の文句の手紙を添へて、慾の深さうな田舎の金持ちに送るのである。その手紙の文句は、「同封の切抜きにある如く、大藏省は紙幣の原版を盗まれたのであるが、その實盗んだのは我々であつて、我々はこの原版によつて多數の紙幣を製造した。で、この際この紙幣を廉價で御賣りしたいと思ふから、若し御氣に入つたなら、ニューヨークの××ホテルへ御越しを願ひたい」といふのである。

一寸考へて見れば、これが詐欺だといふことぐらゐすぐ看破することが出來さうであるのに、世間は廣いもので、澤山の仕入れ金を携へて、のこ〴〵ニューヨークへ出かけて來る連中が少くない。來て見ると、身なりの立派な、上品な紳士が出

せくれて、二つ三つ話すうちにすつかり先方を信用してしまふ。すると先方の男は、いゝ時機を見はからつて一枚の、手の切れるやうな紙幣を取り出し、これが自分たちで作つたものであるから、試みに銀行へ行つて銀貨に換へて來て見なさいといふ。少し冒險であるけれども、銀行へ換へに行くと、何の文句もなしに換へてくれる。で、すつかりその人は喜んでしまふのであるが、銀行で換へてくれるのも道理、その紙幣こそは政府の發行したばき〳〵の本物だからである。

さて二三日滯在して居るうちに、その人は少しく不安になつて來る。根が盜人たちを相手にして居ることであるから、いつ何時、彼等が自分の携へて來た金に眼をつけるかもしれない。さうなつては大變だから、いつそ彼等の發行した紙幣を買ひ取つて、早く歸つてしまはうと決心する。この決心を詐欺師たちは待つて居るのである。彼等は寸分ちがはぬ二つの鞄を持ち、そのうちの一つに紙幣を一萬弗ばかり入れて置く。そしてそれを五千弗ぐらゐに賣るのであるが、その際先方へはもう一つの方の鞄を渡してしまふ。その鞄の中には、紙幣の大さに切つた新聞紙がはひつて居るだけで、家に歸る途中で開いて見て、その人は吃驚仰天。訴へれば、自分も紙幣僞造計畫した罪に問はれるし、ニューヨークへ戻つて見れば詐欺師の連中はもはや風を喰つて逃げた跡である。かくて、五千弗の金を、まんまとまき上げられて泣寢入りしなければならない。

Gold-brick Swindle.（金塊詐欺）。これは多く田舍の銀行家がかゝる詐欺だといはれて居る。通常二三人の白人とインド人又は黑人とが結託して行ふのであつて、先づ白人の一人が銀行へ金を換へに行つて銀行家と懇意になり、時機を見はからつて、「實は……」と切り出すのである。その話によると、ネヴダ州のこれ〳〵といふところに、ある印度人が、先祖代々から傳はる無垢金の塊を持つて居る。インド人のことであるから、その眞價を知らないによつて、廉くお買ひになつたらどうか。そのインド人を私は知つて居るから、紹介してもよろしいといふのである。

慾の深い銀行家の心は頗る動かされる。とう〳〵しまひには、その白人に連れられて實物を見に行くことになる。先方へ行くと、淳朴なインド人は中々家寶を見せやうとしないが、やつとのことで勸めて見せて貰ふと、光輝燦然として目も眩むばかりのもの。更に長い間說きすゝめて遂に手離させることになり、それを持つて二人は町の貴金屬商をたづねて果して純金かどうかを鑑定してもらふ。外部の何處を削つても、又中心の部分を堀り出して調べて見ても、黃金に違ちがひないから銀行家

に喜んで、やすく買ひ取るのである。

その實その金塊の內部は鉛であつて、表面と中心のところに金があるだけである。まるで、御話しにならぬやうな方法であるけれど、それでも、この詐欺にかゝつた人は、アメリカの警察記錄に十萬以て數へる程あるといはれて居る。而も、かやうな馬鹿々々しい詐欺にかゝつた人は、警察へ訴へ出ることを恥ぢて默つて居るから、實際には、もつと〳〵多いだらうといはれて居る。

The Old Spanish Game （西班牙詐欺）。スペインの僧院に居る某富豪の美しい一人娘が、親たちに死別れて寂しく育てられて來たところ、丁度年頃になつて結婚したいと思ふけれど、彼女の繼ぐべき莫大の財産は、こゝに纏まつた金がなくては手にはひらない事情になつて居る。だから若し同情ある人が一時その金を取り換へてくれるたらば、後に十分の謝禮もするし、又場合によつては一生身を委せてもよい。更に尚、好意を持つてくれる人は、西班牙へ來てもらひたい。…………かういふ手紙が、アメリカの慾の深い、同時に鼻の下の長い金持ちのところへ配られるのである。

さて救ひの主がはる〴〵スペインへ行くと、美しい娘と二人の乳母とが涙を流して感謝し、事情を話して金を受取り、受取つたが最後「おさらば」で、莫大な費用を水泡に歸さしたものも少くはない。

西班牙詐欺は、この外にも色々あるが、その原理は皆これに似たものであつて、「僧院」が「牢獄」とかはつて居たり、「金のいる事情」が「從兄に脅迫せられて居る」などとなつて居たりするだけである。而も從來、この見え透いた詐欺にかゝつたものは甚だ多く、西班牙詐欺の普ねく知れ渡つて居る現今でも、その犧牲にあげられる人は決して稀でない。この一事を以て見るも、世の中には御目出度い人の少くないことがよくわかるのである。

Matrimonial Swindles （結婚詐欺） これに女が囮となつて男を釣りよせるのと、男が囮となつて女を釣りよせる場合とがある。新聞に涎の垂るやうな求婚廣告を出したり、或は結婚媒介所の手によつて、あまい男女を釣り寄せて結婚し、いゝ加減に金を搾り取つてから「左様なら」をするのである。アメリカでは、四十歳から四十五六歳ぐらゐの、所謂「危險年齡」の男女がこの詐欺にかゝるといはれて居る。

この外にまだ色々の詐欺方法があるけれども、以上がアメリカで現今行はれて居る主要なものであつて、いづれも二百年も三百年も前に行はれたその儘の方法に過ぎない。アメリカばかりでなく、詐欺師の仕組む詐欺は世界のどこの國にも古くから存在

して居るのであつて、試みに西鶴の弟子團水の著はした「晝夜用心記」といふ詐欺小說の「始めの私語後悔千萬」といふ一章を讀むならば、その原理が前記 The Green-goods Gameと如何によく似て居るかがわかる。

「毎日金壹歩宛あるひは小判を持ち來り、小振なる豆板に兩替して歸る男、あるときひそかにさゝやきけるは、何と此比たびたび持つて參る壹歩小判は、似せ金とは見えませぬかといふに、亭主手代不審におもひ吟味するに、すこしも惡金にはあらず、極上の壹歩小判なりといふ。此男小聲にて、何を隱しませう、これは私細工にいたし覺えて、一兩年ぼつぼつと銀にかゆるにいづれの兩替屋にても、うさんがる貌もなく、妻子五六人ゆるりと暮しけるが、殘多いことは、今すこしもとでさへあれば、二歩づつつぶせば、毎日二三兩づつは出來る事なれども、何を申しても手前に種がなければと悔みぬるに、兩替屋おどろき、其一歩小判幾たびかひねくり廻して見れども、あしき所見えず、さりとは世には名人もある物哉と感じ入り、さて慾に目の見えぬ世界にて、かたかげへ此男をまねき、亭主耳へ口をさし寄せ、此ごとくにあつらへたし、細工料は畢竟試歩が貳兩になれば、其方と等分に分取にいたすべしといふに、いかにも心得申したり。今百兩あれば四百圓に仕る事、手に入たる細工自慢。しからば先づ五十兩追付もたせ遣すべし。所は若宮通屋町北側二軒目のうら、白かね屋槌右衞門と聞届け、先づ五十兩もたせやり、出來次第持參の契約して、十日二十日三十日過ぐれども沙汰なければ、不思議に思ひ、兩替屋自身に尋ね行き、何と出來るかといへば、何をあつらへ給ふといふ。内々申し合せたるかの壹歩小判の事よといへば、槌右衞門、氣もない顏にて、我等は刀脇指の緣頭の細工の外に覺えたる職なし。壹歩小判御用ならば、金座といふて公儀より仰付らけるゝ役所あり、外ですれば磔にかゝるは御存知なるべし。たゞし似せ金の誂へ人ならば、御自分は御法度そむかるゝ人かと、惡口いはれて大に驚き、何と五十兩は何のために其方へは渡したるぞと、額に筋をたてゝ申せば、其五十兩は何にせよとて此方へはこされたるぞ、我等覺えなし、合點ゆかずば御公儀樣へ似せ金の誂へ人と訴人めさるべし。其はつひに仕たる事なければ、身が涼しいと、眥て取りあはず。兩替屋膝たて直し、最前此方へ持參したる一歩小判はいかにといへば、それは正眞も正眞、金座の新吹なり、其金の似せ正眞は、金座の役所にて吟味して見られよといふに、役所へ見せければ、なるほど此方の新吹にちがひなしと申すに、力なく、兩替屋みす〳〵五十兩かたられたれども、取返さんとすれば、似せ金の訴人を自身するに同じければ、ど

うせる事もない仕合せ」

もとよりこの話は小說であるが、或は實際に行はれたことかもしれない。いづれにしても前記の僞造紙幣詐欺と全く同じ仕組みであつて、詐欺としては、却つてこの「黃夜川心記」の方法の方が一段すぐれて居るやうでもある。

かくの如く、一時に一人をだます詐欺師を英語では Minor Confidence Man と呼ぶのであるが、これに對して、一時に多數の人をだます詐欺師は Major Confidence Man と呼ばれて居る。多數の人をだます詐欺師も、やはりむかしから存在して居たのであつて、「黃夜川心記」の中にも、「利易の借金屋」と題するこれに關しての物語があるが、近來は、新聞紙の發達と共に、新聞廣告によつて堂々として行はれるやうになつたから、或は一段の進步を來したといへないこともない。日本で最も普通に行はれて居るのは、新聞に、ある懸賞問題を廣告して、その答案を募集し、正解者に、抽籤によつて左記の賞品を呈すると、色々の貴重品の名をならべ、さて、應募のハガキが來ると、抽籤の結果、貴下に一等賞が當つたから、所定の賞品を送らうと思ふについて、荷造費と郵送費と合計一圓を至急送つてもらひたいと言つてやる。で、その金が送られて來ると、賞品は直ちに郵送される。けれどその賞品は郵送費ともに二十錢內外にもので、一人につき[illegible]のである。この外なほ[illegible]、[illegible]、いづれもこれに似た詐欺である。彼等に言はせれば詐欺でないといふかもしれぬし、又實際法律でも禁止する理由がないと見えて、依然として行はれて居るやうであるが、その原理は立派な詐欺に外ならぬ。

懸賞問題を廣告する詐欺は英國あたりでも盛んに行はれて居るらしく、これに引つかゝる人は隨分澤山あるやうである。けれど何といつても詐欺にかゝる各個人の損害高は甚だ少ないのである。

然し乍ら、時として、各個人の損害高が可なりの金額に上る場合もある。先年日本で行はれた通稱石井某の「株式責任買」の詐欺の時には、多額の金を棒に振つた人が少くなかつた。ニユーヨークあたりでは、潰れた石油會社や鐵道會社の株を巧みに賣りつけて詐欺を行ふものがある。

又、科學的智識を種に新らしい製造會社を起して詐欺を行ふものがある。先日、日本で、藁から綿を製造する方法を發見したと稱して會社設立を企てたものがあつた如く、西洋では糞便からアルコホルを取る方法や、海水から黃金を取る方法を發見したと稱して、大會社を設立し、集まつた金を握つて雲を霞と

逃げかくれてしまふものがある。いづれも最初に株主に實驗して見せるのであるが、慾に目の眩んだ人たちは、手品であることに氣づかずして尊い臍繰金を出して會社の株を買はうとするのである。

詐欺に類するその他の犯罪、例へば人々の迷信を利用して金を取る犯罪や、（即ち昨今歐米で流行して居るクリスチアン・サイエンスの惡用のごとき、）文書を僞造する犯罪や、火災保險金を詐欺するための故意の放火などにも、別にその方法に於て大なる進歩を認められて居らぬ。又、詐欺とは少し性質がちがふけれど、Black mailing 即ち、他人の弱點に乘じて、金を强請したり、子女を誘拐して代償金を强請する犯罪の方法にも、これといふ珍らしいものはないのである。

殺人方法

竊盜や詐欺の方法には、上記の如く、多少の進歩が認められないでもないが、殺人方法に至つては進歩といふことが殆んどないと言つてよい。殺人に用ひられる兇器のうち、ピストルの改良進歩はめざましいものであるが、ピストルが進歩したとて、必ずしも殺人方法が進歩したとは言はれない。又毒殺の際、色々目新らしい毒が使用されたといつても、必ずしもそれは毒殺方法の進歩ではない。殺人は、行爲そのものが野蠻であるからどんな方法が用ひられたところが畢竟「野蠻」であらざるを得ない。

一寸考へて見ると、科學が進んだから、巧妙な殺人方法でもありさうに思はれるけれど、現今行はれる殺人例に、どうやつて殺したかわからないほど巧妙なものは甚だ少いのである。一般に計畫された冷血性の殺人の數は、計畫されない突發性、情熱性の殺人の數よりも少ないのが常であるから、殺人方法の一般的進歩は望み得ない譯である。

更に「動機」の方面から考察して見るに、今も昔もあまり變つて居ないのである。昔から最も多い殺人の動機は、貪慾、復讐、除去（邪魔になる人を除くこと）、嫉妬その他の情熱性動機、人が殺して見たいための殺人、監獄に入れられたがため反抗的に人を殺さうと決心することなどであつて、世の中が進歩しても、別に新らしい動機が殖えるといふやうなことはない。尤も、精神異常者の殺人の動機には可なり奇拔なものがないでもないが、それは問題外の話である。

時として、殺人專門の團體などが組織されることがあるけれども、これとても決して珍らしいことではない。第十九世紀の半ば頃アメリカにモリー・メギュアスと稱する、アイルランド人の血を受けたものたちの組織した暗殺團が出來、ペンシルヴニア州

にその根據地を開いて、アメリカ全土を震駭せしめ、最近にもこれに似たやうな殺人團がアメリカに出來て金員を貰つて殺人の依頼に應ずるといふやうなことをも行つたらしいが、これなどは第十六、七世紀頃に全盛を極めたイタリアの毒殺團に比較すれば、敢て論ずるに足らないものである。

理窟から考へて見ても、殺人團などといふものは、探偵術の發達した現今よりも、むかしの方が存在しよい譯である。毒の知識の發達しない時代には、毒殺は實に理想的の殺人方法であつた。「理想的」といふのは、「探偵されない」といふ意味である。第十七世紀の終りから第十八世紀の始めにかけて、イタリアのトツフアナといふ女が賣り出した「トツフアナ水」は、砒素化合物であると稱せられて居るが、當時にあつては理想的の殺人劑であつた。ところが第十九世紀に至つて、化學が發達して來たら、人々は砒素化合物を「愚人の毒（フールス・ポイズン）」と呼ぶやうになつた。即ち、砒素劑はいつまでも屍體に殘るために、容易に毒殺を發見されるからである。現今では、どんな毒を使はうとも、恐らく「愚人の毒」と言ひ得るだらうと思ふ。

然し、「愚人の毒」といふ言葉は既知の毒に對して言ひ得るだけであつて、未知の毒に對する言葉ではない。だから、新らしく發見された毒によつて殺人が行はれた場合には、たしかにさ

「探偵」を[illegible]の方面に於てのみ期待しうるといへないこともない。先年シカゴでハイドといふ醫師が、百萬長者なる叔父のスウォープを殺さうとして、チフス菌を藥劑にまぜて嚥ませた如きは、純然たる毒殺ではないけれど、新らしい毒殺方法の一種と見做すことが出來やう。一九一〇年ロシアの首府ペテルスブルグの醫師パンチエンコは、他人の依頼によつて約四十人ばかりをヂフテリヤ毒素を始め、その他の病原菌毒素で殺したことがわかつたが、發見の緒となつたのに、ドラシー伯の依頼によつてブツルリン伯をヂフテリヤ毒素で殺した事件であつて、當時ロシヤ全土の人々を騒がせたほどであつた。といふのは、日露講和談判で名高いウイツテ伯が、總理大臣をやめてから三四年後のことで、醫師パンチエンコは、ウイツテ伯の親戚であるといふ噂によつて、世間の注意する所となつたのである。

生命保險金を奪ふの目的で行はれる殺人は、比較的新らし味のある犯罪であるが、この際最も多く選ばるゝ方法は、やはり毒殺である。即ち殺されたといふことがわかつては、犯罪者の身が危ふくなるばかりでなく、肝腎の保險金を奪ふことが出來ぬからである。又、頓死では疑ひの種となるから、疑はれぬやうに醫師の診斷書を得るためには、やはり毒殺が便利である。

尤も英國のジョージ・ジョセフ・スミスのやうに、三人の女と結婚して、いづれも浴槽の中で溺死せしめ、過失で死んだやうに見せて保險金を奪つた例もあるけれど、この方面のわが國の代表者たる川本匡や、アメリカの代表者たるモナハン夫人は、やはり毒藥を用ひて居る。川本匡以前に和歌山縣の某活版業者は、砒素劑を以て四人の細君を殺して保險金を奪つたが、川本匡ほど世間の話題とならなかつた。川本匡は告發された當時、二十九歳であつて、彼は早稻田大學の商科を一年だけで退學し、全然醫學を知らなかつたにも拘はらず、醫者の代診に雇はれたりしたので、自由に毒藥を手に入れることが出來たのである。さうして彼は大正九年に、自分の關係した二人の女を、一人にはストリキニーネを飲ませ、他の一人にはモルヒネを注射して殺したのである。なほ彼はその外に、書生として雇つた青年をも同様の手段で殺さうとしたが、それは未遂に終つたのである。モナハン夫人は、一九〇六年から一九一六年に至るまでに三人の良人と一人の姪を砒素劑をもつて殺し、その保險金を詐取したのであるが、砒素中毒など、大ていの醫者にはわかりさうであるけれども、かうして三人も四人も、發覺することなしに殺し得るところを見ると、犯罪者にとつては、文明開化の世の中も、案外甘いものに思へるかもしれない。

毒殺を離れてその他の殺人方法に就て考へて見るに、やはりこれといふ進歩したものは見當らない。先年アメリカ西部の一市に住んだウイリアム・マーシュといふ元判事を、その甥が、浴室のタヲルかけに針金を結んで、屋外の電線と連絡せしめて電殺した事件が起つたけれど、とりたてゝいふ程巧妙な殺人方法ではないのである。

以上私は犯罪方法の「進歩」に就いて語つたから、これから探偵方法の進歩について記して見やうと思ふ。

探偵方法の變遷

探偵術は最近に至つて著しい進歩を遂げた。けれど、如何に探偵術が發達しても、それを運用する適當な人がなければ、探偵の實をあげることが出來ないのである。又、探偵といふ仕事は、「探偵」ばかりに委ねらるべきものではなくて、一般人民が、よく理解して居なくてはやはりその目的を達することが出來ぬ。例へば殺人が行はれたとき、その現場は、多くの場合に無理解な人民によつて踏み荒されてしまひ、專門家の到着した時分には、何の手がかりも無くなつて居るのが常である。それ故如何に探偵科學が發達しても、一般の人々が十分理解を持たなければ、依然として、昔の「見込捜索」を繰り返すに過ぎな

いのである。

なほ又、探偵科學が發達したといつても、もと〳〵探偵科學なるものは、主として、發見された手がゝりの研究闡明にあるのであつて、手がゝりが得られない時は、科學の應用は全然不可能である。從つて迷宮に入る事件は、現今決して少くないのであつて、今から四年前、ドイツのある森の中で行はれた殺人事件の際、探偵は、思案にあまつて、交靈術を行ふ女を雇つて來て探偵しようとした位であつた。先日、兵庫縣の打出で行はれた二婦人殺し事件では、有力な嫌疑者が二人出たゝめ、官憲では何れとも決しかねて、現に（私が今この稿を書いて居る五月十九日には）京阪地方では、人々の論題となつて居る。尤も先日一方の嫌疑者の方に確定したといふ報道はあつたが、何分にも、物的證據があがらないため、今なほ、他の一方の嫌疑者を放免するに至らない。物的證據といふものは、決して探偵小說に描かれてあるやうに、うまく見つかるものではなく、其處が實世界の探偵の苦心を必要とするところである。上記のやうに、一つの事件で二人の嫌疑者があらはれたやうな場合、西洋中世では、人相の惡い方を眞犯人と定めたといふことであるが、大正の聖代では、たとひある程度迄、犯罪人類學上さうしたことが肯定し得ないでもないとはいへ、誰も承知するものが

たく、又昔のやうに、探偵などに賴ることも出來ないから、物的證據の得られる迄は、どうにも手の下しやうがない譯である。

探偵科學の發達につれ、物的證據の檢査が分業的に行はれるやうになつて以來、動もすると人々は、犯人搜索が法醫學教室の屍體解剖や、鑑識課で行はれる顯微鏡的乃至化學的檢査ばかりで遂行されるやうに思ふけれど、これは大きな誤である。法醫學者の鑑定や鑑識課での鑑定は、犯人探偵といふ大きな鎖を作りあげる一つ一つの鐶に過ぎないのであつて、その鐶を適當に組合せて、寸分の隙のない鎖を作るのは探偵自身の腕によらねばならない。而もその鐶を組合せるためには、犯罪者の性質をよく知るばかりでなく、人間そのものをよく知つて居らねばならない。即ち探偵は犯罪學、犯罪心理學に通曉して居ると同時にドイツ語の所謂 Menschenkenner（メンシエン・ケンネル）（人間をよく知つて居る人）でなくてはならないのである。大岡越前守が科學のあまり發達しなかつた時代に生れて、あれだけの仕事が出來たのは要するに、越前守その人が、「メンシエン・ケンネル」であつたからである。フランスの探偵たちが、現今に於ても探偵のモットーとして、Cherchez la femme（女を探せ）Cherchez l'ennui（倦怠を搜せ）Cherchez l'amour（戀を探せ）等の言葉を愛して居るのは、決して故なきにあらずである。

から言つたからとて、決して私は、「犯罪探偵」の領域にかける科學の功積を輕んずるものではない。むかしの「見込搜索」の言葉が「科學搜査」の言葉に代へられやうとする位、探偵術は科學の恩惠を蒙つて居るのである。「科學搜査」なる言葉は、單に、科學的知識を應用するといふ意味ばかりでなく、搜索の仕方が科學的であるといふ意味である。又、科學的といふ言葉は系統的、組織的といふことを意味し、從つて、「科學搜査」とは、むかしの「見込搜索」が直觀とか偶然の解決とかに便つて、漠然たる方針で進んだのに對し、「科學知識と器具とを應用し、推理の力を働かせて、系統的組織的に活動すること」をいふのである。

科學的器具の應用がどれ程犯人逮捕を便利ならしめたかは、寫眞の電送乃至無線電送の一事を以ても明かに理解することが出來る。先年米國のピッツバーグで、某婦人が惡漢のために寶石を强奪された。婦人が直ちに警察へ出頭すると、係りの人は澤山の前科者の寫眞を婦人に示した。すると婦人はそのうちの一枚の寫眞を指して、どうもこの男らしかつたと言つた。係りのものが記錄を見ると、なにがしジャックといふ男であつたので、忽ちジャックの行衛を搜すと、現にポートランド行きの汽車に乘こんで居るとわかつた。そこで警察では時を移さずジャックの寫眞をポートランドの警察に電送し、警官がその寫眞を携へて停車場で待つて居ると、果してジャックが下車したので、有無を言はさず逮捕して訊問すると、遂に、包み切れずにその罪狀を自白した。この話を、その昔、箱根の關所を始め、各關所へ「人相書」をまはして犯人逮捕を依賴した時分のことゝ比較したならば、誰しも感慨無量であらうと思ふ。

さて、人相書の時代から、現今の「科學探偵」の時代に至るまでには、決して一足飛びの進步によつたのではなく、その間に幾多の變遷が行はれて居るのである。犯罪科學の發達も、その他の一般科學と同じく、西洋の方が、日本よりも早かつたから、今こゝで、西洋の犯罪科學發達史について述べるならば、凡そ三つの時代を經過して居るのである。第一は所謂混沌時代で、前身が犯罪者であつたものが探偵に從事した時代、第二は所謂經驗の時代で、優れた推理觀察の力と、豐富な經驗によつて探偵の行はれた時代、第三が所謂、現今の科學的時代であつて、觀察と經驗とに基く研究方法を應用して探偵の行はれる時代がこれである。

これと同時に犯罪探偵の學問そのものも發達し、主として三つの起原から出發した。第一は即ち經驗家自身の著述であつて、かのフランスのヴィドックの著書や、ドイツのアヴェ・ラ

ルマンの著書に、第十九世紀の探偵たちの寶典であつた。第二は即ちドイツのメッツゲル、ミッテルマイエル等に始められ、オーストリヤのグロースによつて完成された裁判心理學、第三は、法醫學及び化學の發達である。この外に、ロンブロソーによつて創められた犯罪人類學も、探偵にとつて必要な學問の一つである。

以下私は、探偵科學の各分科がどの程度の發達を遂げたかを順次に記載しやうと思ふ。

個人鑑別法の發達

探偵科學のうち、最も目覺ましい發達を遂げたものは「個人鑑別法」である。私たちの耳に入る犯罪の大部分は、常習性犯罪者によつて行はれるのであるが、個人鑑別法の發達しない以前には、犯人を逮捕しても、それの名乘つて居る姓名が本名であるかどうか、又それが前科者であるかどうかを鑑別する事は出來なかつたので、警察では非常な不便を感ぜざるを得なかつた。

ところがこの難關はフランスのベルチヨンによつて破られたのである。一八八二年三月、當時三十歳の青年人類學者ベルチヨンは、その頃人類學研究に用ひられて居た人身計測法を犯人鑑別に應用してはどうかと考へつき、二三度の研究の後一小冊子を發表し、更に一八九三年に至り、それを改稱して所謂ベルチヨン氏個人鑑別法 Bertillonage（ベルチヨナージ）を創定したのである。

ベルチヨナージの原理は、人體に在る黑子、斑痕、文身等特殊の標章は、一生を通じて不變であると同時に、個人々々にその位置が異つて居ること、毛髮、眼の色、鼻、耳、顏等の形狀もまた個人々々で異なつて居ること、身長、腕の長さ等は、各個人で異なつて居るばかりでなく、成長の後はその長さが不變であるといふことから、之を記載し計測して分類するのである。即ち第一に眼の色、髭と頭髮の色、皮膚の色を記載し、第二に、斑痕、黑子、文身の形狀位置を記載し、第三に身體の一定の部位の計測を施して之を記載するのである。その部位として選ばるゝものは、(1)身長、(2)兩腕を擴げた長さ、(3)坐位に置ける軀幹の長さ、(4)頭の長さ、(5)頭の幅、(6)左右頰骨の間の長さ、(7)右耳の長さ、(8)左の足蹠の長さ(9)左中指の長さ、(10)左の小指の長さ、(11)左の前腕と手を伸し、腕の關節から中指の先端に至る長さの十一箇所である。これ等のことをカードに記載して、なほ、その顏の正面と右側面との寫眞を添へるのである。

これによつて、逮捕された犯人が如何に身許を包んで居ても、若しその犯人が前科ものであるならば、直ちに看破される

ことになり、世界の警察は、擧つてベルチョンの偉大なる功績を賞讃した。然し乍ら、このベルチョナージには二つの缺點がある。それは何であるかといふに、第一にこの方法は年齡二十歲以上六十歲以下のものにのみ適用されるに過ぎないこと、第二には、同じ人間の測定を行つても、測定する人によつて、その數が一致しないことである。もとよりこの缺點はさほど大なるものではないけれど、人々は、若し、ベルチョナージよりも正確で而も簡單な個人鑑別法があつたならばと思はぬではなかつた。

すると遂に人々の希望が叶つて理想的の個人鑑別法が發見されるに至つた。これがかの有名な「指紋法」であつて、それを大成したのは英國のフランシス・ガルトンである。指紋法とは兩手の指の尖端の部分の内側にある紋樣の隆線の形狀を記載し分類することを言ふのであつて、人身測定法よりも遙かに優れて居るのみならず、指紋による鑑別は正に絕對的のものである。何となれば、第一に、同じ指紋を有するものがこの世の中に決して二人となく、第二に、指紋は母胎内にある時期（姙娠第七ケ月以後）から、その人が生れて死ぬ迄決して變化せず、第三にたとひ一旦小刀で削り取つても、指全體を切斷しない限り、同じものが出來て來るからである。

かくて一たび罪を犯してその指紋を記載されたものが、二度目に罪を犯してその身許を隱して居ても、更にその指紋を採つて原簿のそれと比較して見るならば、直ちに看破することが出來るのみならず、若し前科者が犯罪を行つて、現場に指紋を殘して行つたとすれば、たとひ逃げかくれて居ても、比較的容易に搜し出すことが出來るのである。又指紋も寫眞と同じく電送することが出來るし、鑑別のためには寫眞よりも遙かに正確であるから、指紋法は實に理想的の犯罪探偵法と言つて差支ないのである。

さて指紋を如何に分類するかといふに、その記述はあまり長くなるから、興味を持たるゝ讀者には、拙著「殺人論」又は「科學探偵」を參照して頂くことにして、私はこゝに、犯行現場に遺された指紋の採り方を簡單に述べて置かうと思ふ。指紋がガラスなどに附いて居るときには、そのまゝ寫眞に撮つてもはつきりあらはれるが通常は一定の物理的又は化學的操作を行つて、はつきり現出せしめ、それを寫眞に撮るのである。物理的方法とは指紋の脂肪と容易に結合する色素の粉末を輕く振りかけるか又は毛筆の如き柔い刷毛に粉末をつけて指紋のありさうなところを輕く撫でることであつて、粉末としては鉛白粉、光明丹、石鉛末、辰砂、チオノール・カルシウムなどが用ひられる。次に化學的方法としては、硝酸銀溶液を塗つて日光に曝し

たり、インキを塗つたり、オスミウム酸を塗つたりするのである。通常紙の上などについて居る指紋は、化學的方法によつてあらはすのである。

嚴密に言へば指紋はその形狀が簡單であるために、之を贋造することが出來、犯人が自己の罪を他人にかぶせるために、贋の指紋を殘して置かぬとも限らない。例へば他人の指紋を寫眞にとつて、クロムゲラチンの上に燒きつけて、湯をかけると、ゲラチンの「版」が出來、それをガラスなり木片なりの上に押せば、立派な贋の指紋が出來る譯である。然しこれには非常に優秀な技術を要するので、通常はゴム版などが使用されるらしい。そこで最近には、指紋の顯微鏡的檢査が行はれ、指紋の線の中に見られる「汗孔」の形狀をも研究することになつたのである。無數の汗孔の形狀は一つ一つ違つて居るのであるから、ゴム版では決して僞造することが出來ず、從つて指紋の眞僞の鑑別は容易に出來るのである。

個人鑑別法に就て、なほ一言して置かねばならぬことは、殺人事件の際に於ける屍體の身許鑑別法である。殺された屍體の身許がわからなければ、犯人の搜索に困難であるばかりでなく、たとひ有力な犯人を逮捕しても、その犯人が白狀しない限りは、有罪と決定することが出來ぬのである。一時仙台地方の大騷ぎとなつた―大井殺事件―も、殺された屍體が何ものであるかわからなかつたゝめに、有力なる犯人嫌疑者として逮捕され有罪と決定された工藤某は、先般大審院で無罪の判決を言ひ渡された。それ故殺人探偵の際には、先づ殺されたものが何の誰であるかといふことを決定しなければならない。時には犯人が故意に屍體の顏面を傷けたり、又は首を切り落してかくしたりすることがあり、又時には、被害者が年月を經て白骨となつて居る場合があるから、屍體の身許を定めることは容易ではないのである。然し、現今では屍體の肉附が行はれたり、その他の科學的研究の進步によつて、追々その困難が打ち破られやうとして居るのである。

法醫學の發達

法醫學は、まだ／＼充分な發達をしたとはいへない。けれど、日進月步の醫學の應用方面であるだけ、輓近の進步は可なりに著しいものがある。死後の時日の經過に至つては、現今の法醫學によつてはこれを確定することは出來ぬが、死因の鑑別はよほど正確に行はれるやうになつた。自殺他殺の區別は、屢ば鑑定者を迷はすものであるが、この鑑別も比較的容易となつて來た。ことに毒殺屍體の鑑定は、化學の力と相まちて、滿足

に近いまでに行はれるやうになつた。試みに德川時代の法醫學書として、その當時の探偵の聖典となつて居た「無寃錄述」中の「毒藥死」中の一節を讀むならば、私たちは大正の今日に生れたことを、切に感謝したくなる。

○毒藥ニアタリテ死タル者ノ屍ハ、口眼共ニ開キ、面黑紫或ハ靑シ、口眼耳鼻ノ內ニ血ガ出テアルベシ、唇ハ破レ舌ハ爛レ、口ノ內黑紫色ニシテ、手ノ指ノ爪靑シ、時ニ銀釵ヲ喉ノ中ヘサシ入テヲキ、少時シテ取出シ見レバ其釵黑色ニナツテ出ル時ハ極テコレ生テ居ル內ニ毒ニアタリテ死タル也

○蟲ノ毒ニアタツテ死タ屍ハ總身上カラ下マデ面モ胸モ靑黑キ色ニナツテ、或ハ腹ハ脹レ又口ノ內カラ血ヲ吐キ、糞門の內ヨリ血ヲ瀉ス

○果ノ毒、金石ノ毒ニアタリテ死タル屍ハ、身ノ內ニ一二ケ處モ靑ク腫タル所アツテ握リ拳ニテ打タ痕ニ似テアルベシ、或ハ又大キク一所ニ靑黑色ニ成テモアリ、爪ノ甲モ黑ク又身內ノ肉ノアツマル所ニ少ヅヽ血ガアルベシ、或ハ腹脹レテ血ヲ瀉ス也

○草ノ毒ニアタリ死タル屍モ蟲ノ毒ニアタリタルニ似タルモノ也、唇ハ裂テ齒齦靑黑色也、又草ノ毒ニアタリテ一晝夜過テ耳目口鼻大小便ノ二道ヨリ血汁流出ル也

○毒石ニアテラレテ死タル屍ハ四時共ニ一日過レバ總身ニ瘡ヲ生ジ靑黑色也、皮肉モ亦靑黑色ニ成テ眼睛トビ出デ舌ノ上ニブツ〳〵トモノガ出テ裂テ出デ唇モ裂ヤブレ兩耳脹テ大ニ腹肚モ脹レ糞門モ脹レ、裂指ノ爪靑黑色也、若シ飽テ此毒ニアタレバ上半身が色カワリ、右ノ通ニナリ、飢テ此毒ニアタレバ、下半身ガ色カワリ右ノ狀ニナル也、男子ハ外腎モ脹テ大ニ成テ居ル也

「無寃錄述」に記された鑑別法の悉くが、このやうなものでは決してなく、縊死絞死の區別などの記述は可なりに首肯し得べきものがあるけれどいづれにしても、昔の法醫學の一斑はこれによつて知ることが出來る。無寃錄述は支那の書物の抄譯であるが、西洋でも、その昔の鑑定は、凡てこれに類したものであつた。

この外、法醫學に於て、最も發達して居るものの一つは、血液と毛髮の鑑定である。殺人現場、兇器、嫌疑者の衣服等に附着して居る、血痕の鑑定が如何に探偵の方針に重大な轉向を與へるかは今更言ふ迄もないことである。例へば現場に發見された兇器に、人間の血以外に猫や犬の血が附着して居たとすると、それによつて事件は色々の方面へ發展して行く可能性がある。むかしは犬の血か人間の血かを決定的に鑑別することは不可能であつた。時には刀に犬の血がついて居たゝめ、人を斬つ

たものとして冤罪に問はれるといふやうなこともあつた。然るに現今では、免疫學、解剖學の發達によつて顯微鏡的乃至免疫學的檢査で、どんな動物の血液でも誤りなく鑑別することが出來るやうになつたのである。ことに最近には人間の血液に四種類あるといふことがわかり、それによつて、ある場合には、血液檢査で、親子の關係が知れるやうになつたのである。無冤錄述の「辯親生血屬」の一節には、

「洗冤錄ニ滴骨親ヲ試ミ驗ス法ニ云、某ガ父母ノ骸骨ノ上ニ其子ノ血ヲシボリテ滴レバ血ガ沁コム也、若マタ骨肉ノ親子ニテ無トキハ血ノ沁コムコトナシ、疑シキコトナレドモ、古モ其例アリトテ史ヲ引テ曰、昔、豫章ト云所ヘ封セラレシ王綜ト云人ハ梁ノ武帝ノ第二ノ子也、綜ガ母ハ吳淑媛ト云女也、初ハ齊ノ東昏王ノ宮女ニシテ寵ヲ得シ也、東昏王亡テ武帝ニ取ラレテ吳淑媛モ亦武帝ノ宮女ト成、幸セラレテ七月目ニ王綜ヲ生ム、宮中人皆、産ノ早キヲ疑ヒシ事也、王綜年十四五ニ及テ夢ニ一人ノ年少キ肥テ壯ナル人來テ王綜ガ首ヲヒツサゲルト見ルコト度々ノコトナリシ故ニ、王綜モ合點ノユカヌコト丶思テ、其ヤウスヲ母ニカタリテ、其夢ノ人ノ容貌ヲ云立ルニ、正シク東昏王ノ姿也、淑媛ガ答ニ、我武帝ニ幸セラレテ七月目ニ汝ヲ生、イカデカ武帝ノ皇子ニテアルベキ、東昏王ノ王子ニ疑ナシ、必ズ人ニ此コトヲ洩シタマフナト云ケリ、是ヨリ王綜日夜ナゲキカナシミテ、自分ノ別室ニテ齊ノ先祖ヲ祠リ又ヒソカニ曲阿ト云所ニ行テ齊ノ明帝ノ陵ヲ拜シ怠ルコトナシ、然レドモナホ疑シク思テ、俗說ニ聞タル、生ケル子ノ血ヲ死ル父ノ骸骨ニ灑ゲバ、血沁コメバ即チ父子タルノ驗也ト、コレヲ試ミントテ、ヒソカニ東昏王ノ墓ヲアバイテ骸骨ヲトリ出シテ血ヲ灑イデ試ミシニ沁コミシト也、其後西州ニ居ラレシ時次男生レシニ、王綜猶又試ミントテ其子ヲ一月餘過殺シテウヅンデ置テ後ニ其骨ヲ取出シ、我ガ血ヲ滴テ試ルニ又沁コミシト也、此ヲ以テ觀レバ洗冤錄ノ說ヨツテ來ル所アリ一概ニ疑フベカラズ」

とあつて、死んだ父や子と、生きたものとの關係を血液によつて鑑別することが書かれてあるが、かやうな鑑別は、現今の法醫學でもまだ出來ないのであつて、勿論、上記洗冤錄の鑑定法は迷信的なものに過ぎない。

毛髮もまた殺人現場に屡ば發見されるものであつて、探偵の際有力な手がゝりとなつた例は甚だ多い。被害者が犯人の毛を握つて居るといふやうなことは、小說ばかりではなく實際にもあることである。顯微鏡的檢査によれば、人間の毛と他の動物の毛とをはつきり區別することが出來るばかりでなく、同じ人間の毛でも、それがどの部分に生えて居た毛であるかといふこ

とをある程度迄知ることが出來るのである。毛髮が手がゝりとなつて解決された數々の事件は、拙著「科學探偵」に讓つて此處には繰返さない。なほ頭髮の遊離端から、理髮後凡そ何日を經過して居るかといふことも略ぼ推定が出來、男女の頭髮の區別も、色々の條件を考へれば鑑定することが出來るのである。

顯微鏡的檢査の進步

顯微鏡的檢査は法醫學の領域に於ても、甚だ重要な部分をなして居るが、探偵科學全般の上から見れば、實に肝要中の肝要なるものであるから、特にこれに就て委しく記述しやうと思ふのである。顯微鏡は單に物の形態を判斷するに役立つばかりでなく、所謂顯微化學的に物の化學的性質をも知ることが出來るのであるから「探偵」には一日も缺くべからざる道具である。コーナン・ドイルの探偵小說を讀まれた方は、シャーロック・ホームズがロンドンの各區の塵や、各地に産する煙草の灰の研究を行つたことが書かれてあるが、實際、現場に遺留された帽子の中の塵からでも、ある場合には立派に、その帽子の持主の職業や身許を知ることが出來るのである。

個人鑑別法の創設者ベルチョンを生んだフランスは、更に探偵學の大家エドモン・ロカールを生み、ロカールの著 Manuel de Technique Policière は、現代探偵學界の最大權威とされて居るが、その中には、如何に顯微鏡的檢査が探偵に缺くべからざるものであるかが說かれてある。現代の探偵學の大家にはローザンヌのライス、リエージュのストッキー、マドリッドのフエレル、ベルリンのポップなどであるが、これ等の人々に劣らぬ名聲を博して居るのが前記ロカールであつて、ロカールは今リヨン警察の鑑識課長をして居て、これまで幾多の難事件を解決したのでフランスの人々は、若し二百年前にロカールが生れて居たならば、盜人の妻女たちは、その子をおどすとき「そら、ロカールが來た」といふにちがひないなど、戯言をいひつつある程、彼の功績は大きいのである。私はこれから、彼の解決した事件の二三を擧げて、顯微鏡的檢査の進步を紹介しやうと思ふ

筆蹟鑑定も多くの場合に顯微鏡的檢査によつて行はれるのであるが、ロカールはこの筆蹟鑑定に極めて秀でゝ居るといはれて居る。ことに先年フランスのトウル市をさわがせた匿名書翰事件、即ち何者ともわからず、同市の上流の人々に匿名書翰を送つて、三人の人を自殺せしめ、多數の人を重い神經病にかゝらせた事件を、ロカールがその筆蹟から、見事に、發信人をつきとめて以來、彼の名聲は愈よ高くなつたのである。匿名書翰

は通常ヒステリー性の女子によつて行はれるのであるが、このときもやはり一女子の仕業であつたのである。

ロカールは犯行の現場に發見された織物類や、犯人嫌疑者の衣服は、どんなものでも悉く紙袋に包んで、五分間づゝ、箒でたゝいて、そのほこりを顯微鏡で檢査することにして居る。何となれば、前にも書いたとほりそれによつて、例へば犯人嫌疑者の職業や、その出入した場所がわかるからである。又、靴の土塊は、それが歩いた場所の悉くを示すものであつて、例へば、被害者の靴の土塊を檢査すれば、被害者の最近の行動を知ることが出來るのである。

最近パリーの場末のある淋しいところに一人の男の屍體が發見された。檢屍の結果、致命傷は頭部の打撲傷だとわかり、屍體の附近には、格鬪の跡がありありと見えて居たから、いふまでもなく他殺屍體だと決定された。警察は直ちに犯人搜索に取りかゝり、數日を經て平素被害者と仇敵のやうな間柄であつた男を嫌疑者として逮捕した。ところがその男は猛烈に無罪を主張し、警察でもこれといふ確かな證據がなかつたので、頗る當惑して、遂にロカールに事件の解決を依頼した。するとロカールは、嫌疑者の上衣を脱がせてこれを紙袋の中に入れてたゝき、次に屍體の上衣を脱がせて同樣のことを行ひ、然る後、集めた塵埃を檢査して見たところ、兩者の塵埃の含んで居るものは、何から何まで一致して居たのである。從つて嫌疑者と被害者とは、被害者の殺される前に行動を共にして居たことと、及び、殺害の現場に居たことも證明され、この動かぬ證據をつきつけられて、嫌疑者は自白した。

又、ロカールは、犯人嫌疑者が逮捕されて來ると、直ちに、その爪垢を洗ひ落して、その中に含まれて居る物質を檢査することにして居る。リオンの銀行の一書記が、愛人を絞殺した嫌疑で逮捕されたが、彼は警察で色々訊問しても、どうしても罪狀を自白しなかつた。それのみならず彼は、女が絞殺された時間には、他の所に居たといふ所謂時間的無罪證左（Alibi）を舉げたのである。そこでロカールは、書記の爪の垢を洗ひ落して檢査にかゝつたところ、その中には人間の皮膚の表皮や血球が見えるばかりでなく、おしろいの粉末が立派にあらはれたのである。殺された女の頸筋に爪でひつ掻いた痕があつたばかりでなく、そのおしろいの粉末は、女の常用して居たおしろいと同じだつたので、この動かぬ證據に、件の書記も恐れ入らざるを得なかつた。

ロカールは又、犯人嫌疑者の耳垢の檢査を怠らない。炭坑で働いた男の耳垢の中に、その男が炭坑生活をやめてから、一年の

後にも、石炭末の發見された例である。最近、マルセーユで贋造紙幣の發行を企てたものがあるので、警察では嫌疑者として、同市のカフェーの主人を逮捕した。といふのはそのカフェーの主人がむかし、紙幣贋造をやつて刑務所へ入れられたことがあるからである。さて、警察がその男の身體は勿論家宅の捜索を嚴密に行つても、何一つ證據を得ることが出來なかつた。そこでまたロカールの探偵を仰ぐことになつたが、ロカールはその男の耳垢を取つて、その内容を檢査した。するとどうであらう。その耳垢の中には、印刷用インクの飛沫を始め、石版印刷用の石の粉末、彫刻用の藥品の結晶が發見され、從つて紙幣贋造の歴然たる證據が得られた譯である。

日本では、あまりピストルが使用されてゐないが、アメリカではピストルによる殺人が甚だ多く、從つてアメリカにピストル鑑定の大家が出た。その名はアルバート・ハミルトンと言つて、やはり科學探偵の錚々たるものである。屍體の中から發見される彈丸を檢査すれば、直ちにそれが、何口徑の拳銃から發射されたかといふことがわかるばかりでなく、同じ口徑の拳銃でも、各拳銃そのものの個性が、彈丸の上にはつきりあらはれるものであるから、彈丸を特殊の顯微鏡で檢査することによつて、どの拳銃から發射されたかといふことをはつきり定めることが出來るのである。先年米國のエルマイラで强盜が横行し警察では捜索の結果、ある男に目星をつけ、署長と探偵とでその下宿を襲つたが、不幸にして二人は先方の男に銃殺されてしまつた。直ちに非常線が張られ、捜索の結果、ある家の地下室に降りて行く階段のところに、足を挫いた一人の男が隱れて居ることを發見し、その男の懷中を取調べると、三發だけ發射された拳銃が出て來た。そこで警察では嚴重に訊問を行つたが、男はどうしても自白しないので、ハミルトンに賴んで現場の捜索をしてもらふことになつた。

現場捜査の結果、次のことが推定された。即ち、署長と探偵とが、下宿の表扉を開けてはひると、それと同時に犯人は第一發を見舞つた。その一發は探偵を傷けたが、二人はひるまず突進すると、犯人は探偵に第二發を見舞つた。探偵がたほれると犯人は署長をめがけて第三發を見舞ひ、署長は腦天に傷を負つて即死したのである。ところが三發の彈丸を調べて見ると、三發ともその製造所がちがつて居るので、ハミルトンは不思議に思つて、男の持つて居た拳銃と檢べ合せて見ると、その三發は、その拳銃から發射されたことが明かにわかり、後にその男は罪狀を自白した。

以上の記述によつて、顯微鏡的檢査が探偵の際極めて大切な

ものであるといふことを讀者は略ぼ了解して下さつたであらうと思ふ。これによつて、現場に存在する、眼に見えぬやうな物質も、時によつて最も有力な手がゝりとなることをはつきり理解することが出來ると同時に、犯罪が行はれたときには、誰も手を觸れぬ先に、腕のすぐれた探偵が現場へかけつける必要のあることをも納得出來る。だから、英國の探偵ウイルダーは、Hands off（手を觸るべからず）といふ言葉が眞に必要な場合があるとしたら、それは犯行の現場に於て用ふべきものであるといつて居る。

顯微鏡的研究法は刻一刻と進歩しつゝあるのであるから、やがてはもつと〳〵優れた探偵法が發達するにちがひない。

殺人探偵の順序

犯罪探偵に顯微鏡的檢査の必要なことは上記のごとくであるが、どの犯罪も顯微鏡の力によつて解決されると思ふのは大きな誤である。前に述べた如く法醫學的鑑定にしろ、顯微鏡的鑑定にしろ、畢竟一つの手がゝりに過ぎないのであつて、ある場合には、それ等の鑑定をまたずとも立派に探偵の實をあげることが出來るのである。凡そ探偵の際には一定の順序によつて、搜索すべき事項を洩れなくすることが必要であつて、その事項を抜かしたり順序を誤つたりするときは、折角の鑑識も周密な搜索も無駄になることがあるから、現今の「科學探偵」には搜索の事項とその順序を「科學的」にきめるといふことが、最も大切な要素を爲して居るのである。それ故私は先づ「殺人」を例にとつて、どんな事項を搜索すべきかを述べて見やうと思ふ。これは主としてアメリカのサイラス・チエピンの記述に従つたもので、チエピンは私とちがつて、實際家であるだけに、探偵を職として居る人にも多少の參考となるであらう。

一、探偵は、事件の解決に當つて、世評や、先入見や、新聞記事や、近隣の人の噂に迷はされてはならない。實際、探偵に從事するものが先入見を得る程危險なことはないのであつて、從來の探偵的誤謬の大部分は、探偵が先入見に迷はされたゝめに起つて居る。

二、探偵は警察醫又は被害者のかゝりつけの醫師から、自殺でなく、他殺であるといふことを、はつきり定めて貰つてから出發しなければならない。

三、探偵は、如何なる人の言ふことをも、（たとひ事件には少しも關係のなさゝうな人の言葉でも）、その儘信じてしまはずに、それが果して信を措き得るかどうかを確めてかゝらねばならない。

四、探偵は被害者の家族知己の凡ての人に（出來るならば）逢つて、被害者に就ての、それ等の人々の話をよくきゝ取らねばならない。

五、探偵は被害者の敵であるらしく思はれる凡ての人に面談しなければならない。

六、探偵は、被害者のかゝりつけの醫師から被害者個人の歴史をきゝ、醫師自身の事件に對する意見を聞かねばならない。

七、探偵は、被害者に顧問辯護士があるならば、その辯護士を訪ねて、事件に對する意見をきかねばならない。

八、探偵は、被害者の同僚なり商賣仲間なりをたづねてその意見をきかねばならない。

九、探偵は、被害者を最後に見た人又は人々をたづねて、何か特別な事情が被害者の身の上に起りはしなかつたかどうかを聞き出さねばならない。

十、若しピストルによつて殺人が行はれたならば、ピストルの音を聞いた人を捜し出して、正しい時間を決定しなければならない。

十一、ある人が犯行の現場から姿をかくしたなら、その人の何者であるかを十分つきとめねばならない。

十二、現場で兇器が發見されたならば、それが被害者のものであるかないか、又、被害者のでないとしたら、誰の所有にするかを定めなければならない。

十三、兇器が屍體の傍に發見されなかつた場合には、出來る限り手を盡して、その在所をつきとめねばならない。又、ピストルの彈丸が發見されたならば、それに匹敵する拳銃を捜して、その持主を定めなければならない。（必要な場合には專門家に依賴して鑑定を受けるべきである。）

十四、毒が使用された場合には、その分析をして、その毒を賣つた藥局の人について、出來得る限り委しく事情を取り調べねばならない

十五、探偵は被害者の死によつて、誰が利益を受けるかといふことをよく調べなければならない。然しこの際、最も屢々探偵は先入見を得易いために十分用心しなければならない。

十六、强迫狀や、被害者が强迫されたやうな事情を發見したならば、それを愼重に研究しなければならない

十七、事件に關して匿名の書狀が警察へ屆いたならば、一概に排除しないで、その內容を愼重に考慮研究しなければならない。

十八、殺人の動機、ことに、嫉妬とか憎惡とかに關する事情の有無について十分の探索を行はねばならない。

十九、若し嫌疑者が見つかつたならば、その人の家庭の事情、過去の生活について十分に取調べなければならない。その常識と犯罪學的知識を應用して觀察を試み、人相などに心を迷はされぬやうにしなければならない。

二十、かくの如くして得た結果のうちから探偵は事件に關係した肝要な分子を捜し出し、更にそれに從つて、出來得る限り、物的證據を捜し出さねばならない。

二十一、若し、被害者が、最近旅行をなし、その旅行中の行動が家族にわかつて居ないやうな場合には、被害者が旅行先で交際した人々を捜し出して事情を探らなければならない。

二十二、探偵の結果、犯人が某又は某々等であるとわかつたならば、十分に注意して犯人の過去の生活を檢べ上げ、犯罪學上の知識を以て觀察し、その性格が事件によく當てはまるかどうかを研究し、なほ遺傳等の有無に就ても、調査しなければならない。

二十三、現場に足跡があらばそれを描寫したり、型を取つたりし、又、指紋があらばそれを方式に從つて採取し、その他の微細な物體の檢査をも行はねばならない。なほ最初に現場の寫眞撮影を行ふべきこと言ふまでもない。

以上が、殺人探偵の際行ふべき必要な事項であるが、もとより各事件に際して、それ〴〵特別な捜索事項の出來て來ることは言ふまでもない。又上記の事項の記述は、必ずしも捜索順序に從つて書いてあるのではないから、それは探偵に從事するものが適宜の順序に並べて行ふべきものである。この様に箇條書きにして見ると、探偵といふ仕事は如何にも厄介に見えるけれども、熟練な人は、このうちの大部分を數時間に片づけてしまふのである。

この外にまだ探偵としては、嫌疑者の跡をつけたり(Shadowing)、嫌疑者と接近して秘術をきゝだしたり(Roping)するやうなこともしなければならぬが、これは、昔の探偵の際にも行はれて居たことであるから、こゝに記述すべき範圍ではないのである。

要するに現代の探偵術の主眼とする所は、探索の仕方そのものを科學的に行ふことであつて、たとひ、各種の科學的知識や器具が進歩しても、探偵に從事する人自身の頭が科學的にたらなければ、進歩したとはいはれないのである。探偵術が前記のやうに進歩して居るにも拘はらず、日本などで行はれて居る探偵法は、大部分、舊幕時代の見込捜索を繰返して居るといふ有様である。科學探偵の進歩は、技術そのものの進歩が問題ではなくて、探偵に從事する人を先づ「科學的」ならしめるのが肝要

な問題である。そしてそれと同時に、一般人民もまた、既に述べたごとく、科學的に訓練さるゝ必要があるのであるから、犯罪の進歩が、犯罪者だけの關係したことであるに反して、探偵の進歩は一般人民の關係したことであらねばならぬ。

結言

探偵術の進歩に就てはこの外にまだ言ふべきことが少くない。たとへば寫眞術と探偵術との關係や、心理學的探偵術（これはまだ實際には應用されてはゐないが）のことなど書くべきことが多いが、以上の記述によつて、讀者は探偵學の大たいの輪廓だけを會得して下さつたであらうと思ふ。そして若し委しいことを調べて見やうと思はるゝならば、前記ロカール（E. Locard）の著書や H. Gross : Handbuch Für Untersuchung-richter をおすゝめしたいと思ふ。

なほ又近代犯罪の傾向、犯罪心理について調べて見たいと思はれる方にはWulffen: Psychologie des Verbrechers やStekel : Störungen des Trieb- und Affektlebens をおすゝめしたいが、後者はあまり「專門的」であるから、手頃なものとしてはHavelock Ellis : Criminal がいゝと思ふ。最近私は「近代犯罪研究」なる一書を著はしたが、強ひておすゝめする勇氣はないけれど、買つて頂けば幸甚の至りである。

最近の新聞紙を見ると、我が國至るところに、强盜、殺人事件が頻々として起り、警察では頗る頭をなやまして居るやうである。而も、かやうな事件の新聞記事は、他の記事よりも餘計に人々の注意を惹くものであるから、それが一つの暗示となつて、他の犯罪を導かぬとも限らない。實際、「模倣による犯罪」は近代犯罪の特徴の一つに數へられて居るのである。だからこの際一般の人々が、犯罪及び探偵に關して十分な理解を持つことは、間接に犯罪を防ぐ手段となり得るかもしれない。尤もどんな小さな犯罪にも、それが起るについては、單に個人的な動機ばかりでなく、もつと／＼複雜な社會的の原因によるものであるから、犯罪について十分な理解を持つといふことは何人にとつても困難であるけれど、之に反して、「探偵」の仕事に理解を持つことは比較的容易であるやうに思ふから、少くとも現代の科學探偵がどんな方面に進んで居るかといふことは、誰もが一通り知つて置いてほしいと思ふのである。

探偵術が完全に發達しても、それによつて犯罪を未發に防ぐことはもとより期待し得ないけれど、早いうちに犯罪者を發見して「治療（トリート）」すれば、それだけでも犯罪防止のたすけとなるから、私は探偵術の一層の進歩を祈つてやまないものである。（完）

現代戰、未來戰

——陸戰の技術的奇襲——

櫻井忠溫

クルツプの若い奥さんと「クルーソウ爺さん」との喧嘩、それが歐洲戰爭であつた。

歐洲戰爭は、つまり獨逸のクルツプ會社の女主人「大砲皇后」ベルサ、クルツプと、佛國シユナイダー會社の持主「クルーソウ爺さん」との戰爭であつた。クルーソウはスナイドル銃で名高いシユナイダー會社のある土地の名だが、持主は「クルーソウ爺さん」で通つてゐる。

クルツプの奥さんは、戰爭がなければ店が繁昌しないとあつて、盛んに色目を佛の政治家、新聞記者に使つて、獨に對する敵愾心を高めることに力めた。それで獨の軍事費もスラ〳〵と通過して、自然に大砲の賣れ口がよくなつた。

何んでもクルツプは戰爭製造費として年々一千萬圓からの金を撒いてゐたといふことで、それでスラ〳〵と歐洲戰爭といふものが出來上がつた。「クルーソウ爺さん」も戰爭屋に大砲や鐵砲を賣りつけに歩いて、しこたま儲けた。

ベルサの奥さんや、「クルーソウの爺さん」の商賣繁昌はいゝが、それがため世界は六千七百萬といふ大軍を動かし、二千六百萬といふ人命を損ひ、四十億といふ大金を使ひ、五年といふ長い月日戰爭を仕つゞけた。罪なことをしたものである。

クルツプの大砲が鳴ると、「ベルサの奥さんが喋舌り出した」と佛蘭西兵がいつた。シユナイダーの大砲が鳴ると、「クルーソウ爺さんが咳き出した」と獨逸兵がいつた。

クルツプの大砲で戰爭の最初から大きな彈を送つたのが四十二サンチといふ奴で、見たことも聞いたこともないのが飛び出して來た。一發の重さ一瓲（トン）、二百七十貫、價三千圓也といふ奴が、ブン〳〵飛んだのだから佛蘭西兵驚いたのも無理はなかつ

た。旅順でステッセルは日本軍が二十八サンチをこゝまで持つて来やうとは思はなかつた、といつたが、それどころか、鐵砲風呂のやうな彈がドカン／＼と落ちたので膽を潰してしまつた。其の内五十二サンチといふ途方もない奴が佛の戰線から頭を出しさうになつたので、こんどは獨逸兵が膽を潰した。

さうして「大砲皇后」と「クルトソウ爺さん」との戰爭が續いた。巴里郊外に砲彈が落ちて、酒場でもつれ合つてゐる若い男や女が腰を拔かしたりしたことがあつた。それが獨軍の二十一サンチ加農で三十里の遠方から飛ばしたのである。

昔、九州の南のある國が、英艦に砲擊されたことがある。其の國の侍は大砲を傳馬に乘せて沖へ漕ぎ出した。陸から打つても屆かぬからである。其の内矢頃を計つてドーンと打ち放したが、彈は軍艦どころか水の中へボチヤンと落ちた。「漕げ、々々」と近づいて行つては打つたが、彈は水の中へ落ちるばかり。

其の内轟然たる響して英艦から打ち出した彈に中つて、船は沈んだが大砲は浮いたといふことがあつた。石が流れて木の葉が沈む、といふが波間にぽか／＼と泳いでゐたといふのだから珍である。

この浮大砲といふのは竹の箍を嵌めた木の大砲、花火の筒である。器械の簡易な割には——恐ろしい簡易なものだが、これで、其の頃の大砲としては立派に役に立つてゐたのである。

この浮大砲が日露戰爭にも出たから馬鹿にならぬ。敵の鼻先へ持ち出して、鐵條網を吹き飛ばさうといふ大砲である。今なら迫擊砲といふ名でもつくのだらう。

木の大砲から僅か十年後に四十二サンチだの、五十二サンチだの、十三里も飛ぶ佛の二十八サンチ加農、三十里の遠き巴里を打つた獨の二十一サンチ長距離加農などといふものが出て來た。木の大砲ですましてゐたところから見ると大變な變り方である。

×　×　×

「砲彈を以て地上を耕す」といふ言葉が歐洲戰爭中にあつた。「鐵血殺山山形改」といふ文句通りに、戰場を掘つて掘り返し、人間といふ人間は頭を地上に出すことの出來ないやうにしたものである。

普墺戰爭の普軍は重野山砲合せて七百七十門、普佛戰爭の獨軍は九百八十門、日露戰爭の日軍九百九十門、露軍千二百門に過ぎなかつた。これだけの大砲では彈の雨を降らさうにも、地上を耕さうにも高の知れたものである。彈からいふと、普佛戰爭の獨軍五十萬發、日露戰爭の日軍百五萬、露軍百五十萬に過ぎない。

これが歐洲戰爭になると、英軍大砲七千門、佛國九千七百門、獨軍一萬七千門、彈英の三億、佛の三億五千、獨の六億といふ夥しい數である。

ソンムで英佛軍は戰場を埋めるつもりで二千萬發からの彈を用意してかゝつた。ベルダンで獨軍の砲彈は一千メートルの正面、五百メートルの深さ——七町四方に足らぬ地面に五時間八萬發といふ彈を落した。森も、山も、村も潰れてしまひ、戰場に青いものは見られなくなつた。

戰死者の數に割り振つて見ると一人を殺すに二千發からの彈を使つた勘定になる。一發の價大物小物を平均して三十圓くらゐにならうから、一人當り六萬圓といふ金になる。戰爭も安くは出來ない。日露戰爭に使つた露國の總經費を日本兵一人の戰死者に割り當てると四億何千圓かになる。それが砲彈だけで一人當り六萬圓とは打つには打つたものである。

普佛戰爭で、獨軍は砲彈なら八發半、小銃彈なら三百五十發で一人の佛蘭西兵を殺したことになる。日露戰爭では砲彈四十發、小銃彈千五十五發で一人の日本兵を斃し、日本軍砲彈二十三發、小銃彈九百發で一人の露兵を斃したことになる。無駄彈も無論多いのだが、追々人間が體を出さなくなるので彈の中りが惡くなる。そこで戰爭が追々に長引く。しかし一人當り二千發といふ有樣、小銃彈なら何十發とか八ら云ふことはないまでに一人の人間を殺せなくなるとは戰爭もよほど贅澤なものになつた。

第二軍が南山で使つた砲彈は僅かに三萬四千發であつたが、それでも半年分の砲彈を一日で打つたといふので叱られたといふ話がある。一九一五年シャンパニーで佛軍は六日間に百八十萬發を打つて尙足らなかつた。日露戰爭では全期を通じ日本軍の使つた砲彈は百餘萬發で、シャンパニーの三四日分にしか當つてゐない。

かうまでして人間は戰爭をしなければならぬかと思ふと淺間しき次第であるが、兵隊を失くし、銃砲や大砲を潰したところで、戰爭が止むわけのものではない。人間を廢棄しない限り戰爭は絕えない。人間の歷史あつて以來僅かに百五十年の平和があつたのみで他は皆戰爭の歷史で滿されてゐるといふことから見ても戰爭は人間の病氣なのだらう。

× × ×

一九一七年の春佛軍のマルメゾーンの攻擊には、一キロメートル……凡そ一町の間に百五十門といふ大砲を並べた。七メートルに一門の割である。同じ年の秋ノランドルの攻擊には一キロメートル二百四十門、四メートルに一門。獨軍でも一九一八年春には一キロメートル七十四門、十三メートルに一門といふ

大砲を並べた。

人と大砲との割合を見ると、歐洲戰前列强では步兵一千人―一大隊に最小限野砲三門四、最大六門三、平均四門七といふ割合であつた。一師團五十門といへば日本の師團砲兵の倍になる。佛蘭西では步兵一大隊に對し五門から七、八門、英、米、獨では四門、七を標準とした。

今日では段々多くなつて、獨逸では步兵一大隊に八門、佛蘭西では九門、五といふことになつてゐる。步兵が機關銃を使ふことになつてから、人間は減つても大砲は多くなつて來た。

野砲の彈は四五千メートル――一里ほどしか利かなかつたが、このごろでは一萬メートル――二里半くらゐは普通になつた。彈が遠方へ飛ばなければ、何線にもしつらへてある敵の陣地の奥まで屆かない。步兵が敵線に近づいても、瞬く間に叩き潰されてしまふ。

このごろ瓦斯砲　電氣砲といふ名がポツ／＼新聞に見えるやうになつた。大砲を火藥で打つやうな手ぬい時代でなくなりかけたのである。彈を一々大砲の穴へ入れて打つといふことも何とか工面のありさうなものだから、瓦斯や電氣で彈を打つくらいのことは出來さうなことである。

電氣砲は次の戰爭には必ず出る奴で、米國や獨逸では盛んに研究してゐる。射程二百里、といふから東京で打つた彈［　］れば富士山を右に眺め、一氣に名古屋を拔け、京大阪を越［　］姬路、岡山も過ぎて、廣島近くまで飛ぶことになる。東すれば青森、津輕海峽を越へて北海道へ落ちる。

煙も火も出ない、音もしない、といふのだから戰爭は少しく淋しくなるがよく中る、値が安いといふ申分のない大砲である。

大砲の相棒にヅー體は小さいが機關銃といふのがある。人のいふことをキカン銃といつて手におへぬいたづら者である。

この小僧の口からは噴水のやうに引つ切りなしに彈が出る。一瞬間チツとしてゐると最初の彈穴へ次の彈が飛び込むくらいの早さで出る。彈の棒が出るやうなものである。此奴の眼にかかつたら最後、千人が二千人でもコロ／＼とやられてしまふ。

全身四十何發といふ彈を受けた至つて彈運のいゝ男があつた。これが機關銃である。ある隊では七十發からの彈を頂戴したものがあつたさうである。一々彈傷を數へてゐても大變だから、かういふのは全身蜂巢銃創といつてゐた。

小僧一分間に六百から彈を吹き出す。九百といふのがあるが、小僧でも鼠小僧くらゐに當る奴である。

一發づつ出しては面倒だといふので、普佛戰爭當時佛軍には

ミトライユースといふ大砲があつたといふ記錄がある。十數門の大砲を組み合せたものださうで、中には三十門五十門と組合せたのもあつたといふことである。これが一度にドドンドンと頭を揃へて出たら豪勢なものだらう。しかしこれは大砲ではなくて鐵砲だらう。

一人の兵に扱はれるのに輕機關銃といふのがある。これが步兵の小さいグループの核であつて、一つ一つのグループがこれを中心として戰爭する。

米國では一中隊十八挺、佛國では十二挺、英國では八挺といふ輕機關銃がある。日本ではこれまで一中隊三挺しかなかつたが、これから六挺に殖える。

× × ×

砲彈には煙を吐くの、火を吹くの、毒氣を吐くのといふ種類がある。

人間を詰めた彈があるといへば珍彈奇彈に違ひない。英國のドオバア海峽が渡れないで苛々してゐる獨軍はクルップに命じて、人間を詰めた砲彈を拵へたらよからうと、英國のある漫畫家が人彈を打つてゐる大砲を描いた。これがほんとうの肉彈といふのだらう。彈の中へ這入る前に愛人と抱き合つて別れを惜んでゐる場面などもある。

大戰中英國の發明局とかで戰爭妄技の新案を募集したところが、中にやはり Human Bullet といふ案があつた。人間が砲彈の中へ這入つて自分で舵を取つて、思ふところに落ちるといふ迷案である。

こんな漫彈は別として、砲彈で煙幕を張つたり、戰場を燒き拂つたり、毒瓦斯を撒いたりする彈がある。歐洲戰爭中砲彈の四分の一は毒瓦斯彈であつたくらゐ戰場の樹も石も土も毒氣に蔽はれ、人間は目も鼻も口もあけてゐられなくなつて、蛸の化物みたやうなマスクを冠つて青い息を吹いてゐた。

一八八〇年十月、今から五十年前、佛蘭西のある漫畫家は歐洲戰より五十七年後一九七五年の戰爭を描いてゐる。それには立派に飛行機、タンク、運動砲臺、毒瓦斯、長距離射擊砲などといふものがある。其の戰爭は、あらゆる武器で戰つたが勝敗決しないので、タンクと毒瓦斯の攻擊を以て一方軍が勝を得たといふ筋のものである。其の繪には步兵が鐵砲を持つてウロウロしてゐるやうな場面はなく、車輪のやうなタンクが戰爭の主人公となつてゐる。

そのころになると、歐洲人や米國人の全盛は歷史に殘るだけで世界は新興民族の時代となつてゐるのださうである。

山があれば山を拔き、海があれば海を裂く、意の如くならず

るなし、といふ機械萬能の戰爭である。旅順では塹壕を堀るのに鍬が棒のやうになり、一日に一尺しか堀れなかつただのといふことがあつたが、岩山をくり拔くにも指で豆腐に穴を明けるやうになれば便利である。繪空事にもせよ旨く考へたものである。

歐洲戰爭は五十七年後まで待ち切れないで、繪空事が繪空事でなくなり、タンクでも飛行機でも、毒瓦斯でも、穴堀り器械でも皆戰場に出て來たのである。

狸を松葉でいぶす式の計略が新戰法の毒瓦斯戰なのである。毒瓦斯は一九一五年四月二十二日、英佛軍聯合軍がイープルを攻擊してゐた眞最中、不意に獨軍が毒氣を吐いたので、聯合軍ヘロ／＼になつたのが抑もの始まりである。聯合軍側怒つたの怒らぬのではない。非人道だ、野蠻だのといつて膨れ上がつたが、腹が立つなら腕で來いといはれて見ると、戰爭といふものは無茶が原則である。無理が通れば道理引つ込む、長いものには卷かれる。そこで聯合軍泣寢入りとなる。

獨軍が大砲を引つぱつて白耳義に這入つて行つた。中立も糸瓜もあつたものでない。くやしけりや腕づくで來いといはれて見ると、だれも手を出すものがない。

吞乎々々して大砲を引き廻すのだから滅茶々々の工合である。いくら腹を立てゝも仕方がないことになつてゐる。

八面六臂に切り廻してゐる獨軍から見れば「そんなコセ／＼したことをいふな」などといつてゐたかも知れぬ。仁川でワリヤークの將校を某國の將校が料理屋へ招待した。某國の將校は劍舞か何かで大にあばれ、お客さんの頭をムサンコに叩いたりしたところが、先方ではこれが賓客を遇する最上の禮とでも思つたか大に嬉しがつて艦へ歸つたところ、夜中艦は水雷にかゝつてブク／＼と海の藻屑となりにけりと來た。

醉のさめぬ中に早や寢床の下に水が突いて來やうなどとはゆうべの夢にも見なかつた。ブツ／＼といくら小言をいつても水の中からではよく上に聞えない

戰爭もコセ／＼してゐては馬鹿を見る。諸事簡單に片付けること。

毒瓦斯を使つたからといつて腹を立てゝも仕方がない。

一九一八年春、更に獨軍砲兵は毒瓦斯を以て英砲兵をサン／＼な目に逢はした。

かうなると、非人道だの何だのといつてゐても追つつかない。自分でも使はなければ損だといふことになつて、毒を以て毒に酬ゆるやうになり、盛に毒瓦斯戰が始つた。

× × ×

砲彈で頭を碎いたり、劍で人を刺したりすることから見れば、毒瓦斯ははるかに人道的であると米國の軍事當局者が言つてゐる。或は然らんであるが、華府會議では海牙條約を尊重して之を戰爭に使用せぬことに協定しながら、其年米陸軍卿は下院で「毒瓦斯の效力絶大なると、戰時之を急造し得ることより、我國が今日まで多大の努力を以て築き上げたる毒瓦斯の施設研究を廢止することは國軍のため一大損失である」と演說した。現に米國陸軍省內には化學戰部なる一局があり、八千萬圓の初度費と、年々四百萬圓の維持費を投じて大工廠を設け、瓦斯聯隊や化學戰學校まで建てゝ研究に熱中してゐる。

かうなれば、海牙條約も糸瓜もあつたものでない。毒瓦斯制限などテンで頭に置いてゐない。

米國エッヂウット毒瓦斯工場では、一呼吸にて倒れる毒瓦斯ホスゲン一日製造量八十噸、皮膚の糜爛するイペリット百噸、其他五十噸、合せて二百三十噸と云ふものを作つてゐる。

東京が飛行機の襲撃によつて爆彈の御見舞を受けるとしたら、百噸で市民は殆んど中毒のため死し、二百噸なら全滅するそれが米國一工廠一日の製造量にも足らぬのである。

毒瓦斯の原料は鹽素であつて窒息性のヂホスゲン、糜爛性のイペリット、レヴヰシットなどがあり、一地方を全く毒煙で蔽ふたり、地中に埋めてそこを長く有毒地とする。

變り種としては盛に嚔を催さしむるディフェニール、クロラーシン、止め度もなく落淚せしむるブロンベンシルアニートなどといふものがある。嚔や淚の出放題も厄介なものである。鐵砲を打たうにも嚔や淚が引つ切りなしに出ては何とも手がつけられない。クロールピクリンなどといふ奴にかゝると、肺を刺戟して死に至るまで泣き通すといふのだから恐ろしい。今にカラ／＼と笑ひ通して死ぬるといふ毒瓦斯も出來るだらう。

× × ×

步兵は七八人づつチョコ／＼と二十日鼠のやうに驅る。その上をドーンパパンと砲彈が破裂する。三番叟や福助がヒョコヒョコと飛び出しはせぬかと思ふほどの美觀である。

バタ／＼と夕立の雨のやうに彈が落ちる。地に落ちて破裂するのはグル／＼と地を扛げて土煙が濛々と渦卷く。クワタ／＼と機關銃が騷ぎ立てる。

步兵は壕から拔け出る。また煙が蔽ふ。石に躓いたやうに前にのめるのもゐれば、板を倒したやうに後に倒れるもののもある。

そこへ河馬のやうな怪物がノソリ／＼と這ひ出る。それが頭からクワタ／＼と火の粉を出しながら步く。

白い、黄ろい、黒い煙が敵線に渦卷く、火が吹き出る。プロペラの音が地を擦るかと思ふと又遥か雲の外に去る。

昔なら歩兵も木柵のやうに並んで平押しに押したものである。それが今では人間が地上に頭を出すことすら六かしくなつて來た。そこで小さい固まりに分れて以心傳心で進んで行く。

ヒツポのやうな怪物、それがタンクである。ノソ〳〵と伺ふところは如何にも不恰好だが、それで恐ろしく向ふ意氣の強い奴である。

芋蟲のやうな恰好で伺ふといふので芋蟲自動車だのといふ綽名がある。日本では戰車といふがタンクで通つてゐる。

タンクの生れ故鄕は英國である。歐洲戰爭の半ば頃、英國の陸軍が思ひ付いて、タンクを作つたが、それを見た獨逸探偵が何に使ふのかと尋ねた。すると技師は「これはメソポタミヤの戰場に送る給水用のタンクだ」と說明化して答へた。それ以來タンクの名でどこでも通るやうになつた。

二千年とかの大昔、シリユス王のバビロン征伐、シリー人の雜馬徒入にも戰車を使つたさうで、大きな木箱に車をつけて中から心棒を廻しながら、敵陣へ押込んで行つたものださうである。秀吉も朝鮮でこんなものを使つたといふことである。

塹壕と鐵條門とでこびりついた戰線を突き破る手段に盡きたので、考へついたのがこのタンクである。

一九一六年秋ソンムの會戰に於て、九月十六日ハボーム南方で英軍タンクが始めて怪姿を戰場に現はした。

ヒツポのやうな奴がノソ〳〵と伺ひ出たのだから驚いたのは獨の兵隊である。四十二サンチで度膽を拔いたつもりのところ、砲彈ぐろみ歩いて來るといふのだから驚いたのも無理はなかつた。傍若無人どころでなく、樹でも、家でも、鐵條網でも、壕でも押し倒す向ふ意氣の強い、荒木又右衛門みたやうな奴なので、手がつけられなかつた。

四十二サンチ、五十二サンチが飛び出したり、タンクや毒瓦斯が出たり、夢にも思はないものが不意に出て戰場をあばれるといふ技術的奇襲が將來益々激しくなり、互に珍品で以て競爭するやうになるだらう。たゞ後塵を拜するばかりが能でない。

人間が眞晝中頭を出すことが六かしくなつたので、夜の戰爭が盛んにならう。それには晝も暗くしたらよからうといふことを考へた人があつた。つまり太陽を黒い風呂敷で包めばいゝのだから、暗い光線で太陽を蔽ふたがいゝといふことになつたしかし世の中には明るい光線はあつても、暗い光線といふものがないのでこれは當分お預りといふことになつてゐる。

氣球に磁石をつけて、敵の兵器を空中に吸ひ上げるための、セ

メント液を撒いて敵軍を困めるだの、眞空發射管で敵を敵の塹壕に送るだの、といふ珍案が英國にあつた。今にこの珍案も實現して、人間のコンクリートが出來たり、麥酒が出來たりする時代も來るだらう。

英軍がタンクを作ると、佛軍でも盛んにシュナイダーや、シヤン、シャモンで無數のタンクを作り上げた。

英佛軍のタンクは最初十三噸から三十噸級のものであつて、家が動いてゐるやうな奴であるが、追々輕快なものが流行して、佛軍では六噸型の輕タンクを用ゆるやうになり、戰爭の終りまで、輕タンクが奇襲的に使はれて偉功を奏したのである。

タンクにも男性女性がある。機關銃の外に速射砲を持つてゐるのが雄タンク、大砲のないのが雌タンク、と理屈に合つた名がついてゐる。

米國には水陸兩性タンクがある、水も潜り、陸にも上がり速いのは一時間に二十哩も走る奴が出來た。

重タンクで一時間四哩、輕タンクで五哩、四十五度の坂は昇り降り自由、二メートル半から六メートルの深い壕を越へる。

日本には見本品一二輛しかなかつた。併しこれから戰車隊二隊が新設され漸く四十輛のタンクが出來ることになる。

之に比する佛國は三千四百輛、米國三百六十輛、英國百六十輛、伊國六十輛、獨國百八十輛といふ數である。そして日本は僅かに四十輛、それも三年後でなければ完成しない。

更に角押しの強い奴で、かういふ怪物が數百數千と押して來たらたまつたものではない。今後は人間がノコ〳〵と戰場を迂路つき廻るやうな時代はなくなるかも知れぬ。一人一人のタンクも出來、固い頭でゴツン〳〵と突き合ふやうなことにもならう。步兵の一部がタンク隊に代はる時代は必ず來ると思ふ。遂に戰爭はタンク對タンクの戰爭となるだらう。

かうなると人肉の力の値が下つたやうだが、機械戰ばかりでは勝負がつかない。人間共の者を居らなければ戰爭は止みつこない。ところがお互頭を出さぬと來てゐるから困り者である。

獨軍はそれに苛立つて、西方戰場のシャトーチエリーへ百個大隊の大突擊隊を突き出したことがある。手に手に五寸釘を打ち込んだ棒を振り廻して突擊した。こんな奴に頭を毆られたら大變だといふので、佛軍はグラ〳〵後へすさつた。それが爲め戰線がひどく縛入した。これが獨軍最後の活躍であつたが、英國では、このころ機械の前に人間の力は僅かに百分の一の値しかない、腕力主義は今の戰爭の役に立たぬといつてゐたが、獨軍のこの突擊を見て、戰場に楔を打つものはやはり肉體だといふことに傾いて來た。つまり機械を使ふ程度が高まつただけで、內

體」精神力は依然として、戰爭第一の力といふことに變りがない。

×××

四月二十五日のワシントン・ヘラルドに、富士山のある國から蝗の群のやうに天を覆ふて無數の飛行機がアメリカの領土へ襲撃し大きな見にくい手を廣げてフイリッピン、グワム、布哇、アラスカを攫まうとしてゐる漫畫を掲げてゐる。そして日本の戰爭準備斯くの如しと、米國より市街鐵道のレールを輸入してそれを鋼塊に鑄直してゐるの、綿火藥用綿花を便船毎に輸入してゐるのといふやうなことを書いてゐる。

又このころ未知の米人が、一枚の新聞漫畫を切抜いて私に送つて來た。それは亞米利加の領土から無數の飛行機が飛び出して、それが天にU、S、Aといふ字を書いてゐる繪で、その側に鉛筆で「日本の奴等よ、この飛行機の雄姿を何と見るや、一體貴國には幾何の飛行機ありや、速かに一報せよ」と書いてある。おせつかいなことをする男もゐるものである。

日本の飛行機を之れ程氣にするにも及ぶまいが、日本にゐる米國の通信員は、よく日本の飛行機の數や製造所を尋ねたがる。三月十七日ワシントン國際發電報として二三の日本新聞に、米國航空次長ミッチエル少將は下院航空調査委員會で、日英は世界に於ける空軍の最強國である。之に反し米國の現兩者より下りて佛國と略ぼ同一の狀態に在りと說明したと報ぜてゐた。

三千機からの飛行を持つ米國、それが千五百機の佛國と同級だとは白々らしくもよく言へたものだ。佛國の三千九百機を第一位とし、之に亞ぐは米、英千五十、露七百三十、日本僅かに五百機である。今回四個師團を減じ、其の金の一部を空軍の擴張に充てることになつたが、それとても三四百機を增すに過ぎない。

ミッチエル氏も之を承知しながら、日英は空軍の最強國だなどと振れ廻す。米國が獨逸に對し宣戰を布告した時、ハトストの新聞が「眞の敵は獨逸にあらずして日本なり」といつたことがある。當面の敵を敵とせず、却つて日本を敵としたなどは旨い宣傳であつた。日本に頭を出さすまいと一本の釘を差したところに旨みがある。日英の空軍に口を出したなどは面白い問題であつて、さすがに腹の黑さよと感心しないで居られぬ。

今後の戰爭は先づ空中勢力の爭奪から始まるだらう。空中には限界がない。どこでも戰場である。我に敵機を制駁する勢力がなければ上空は常に敵のものである。然る場合地上部隊にタンクがあり、四十二サンチがあり、毒瓦斯があつても役に立た

ない。

敵機が日本に接近する島嶼か陸地を根據としたら、天候さへ許せば毎晩でも日本の要地を爆擊し得られる。東京を焦土とするには二十四時間で十分だ、三時間でも間合ふといつたある外國の專門家があるが、日本の家屋のやうに木と紙とで作られてゐる市街は燒夷彈を兎の糞のやうに撒かれただけで燒き盡されてしまふ。米國大爆擊機バーリングが十二時間航續するとして爆彈を持つと二千四百キログラム、五百グラムのものだと四百八十個持てる、六七割破裂するものと見ても東京は見る／＼内に火になつてしまふ。

歐洲戰爭中、佛國の都市で敵機のため最も多く爆擊を受けたのはダンケルク市街の百七十七回、五千九十二發。巴里は七十回、千五百發の爆彈を受けた。東京が今のやうた建物であれば僅かに一回數個所の爆擊だけで、震災以上の慘事になるだらう。

米國ツエペリン型ＺＲ３號は、七十時間の航續力があり、三十人を載せ、四十一噸の搭載量がある。東京はグワム、又はマニラを中心とする半徑に包まれ、飛行機でも搭載量を減じたら活動半徑を延ばすことが出來る。ウイツカース、ヴイミーのやうな大型爆擊機になると活動半徑は千五百キロメートルに及び、小笠原島を根據とすれば樺太から鹿兒島までを包み、沖繩を中心とすれば北海道の果てから、九州の南端までを包むことになる。

五十キログラムの爆彈は石造の二階建を貫き、五十キログラムは三階建を、百キログラムは四階五階建を、百五十キログラムは七階建を地下室まで貫く。

巴里が東京式の建物であつたら、七十回は愚か一回の爆擊で火になるだらう。五千餘發の爆彈に見舞はれただけダンケルクは市街らしい市街であつたと言へる。安全な地下室がなければ敵機の襲擊を受けても逃げ場がない。木造のペラ／＼家では瞬く間に人も家も燒き盡されてしまふ。火を消さうにも水では消えない燒夷彈を落して來る。

ニユーヨーク、北京間を四十時間、無着陸の飛行機が出來たと、このころ米國で發表してゐるが、飛行機一つにも乘れない地下室文化に陥してゐるオールバツク連は少しく出でて大空を仰いで見るがいゝ。オールバツクといへば飛行家が兜を被るため頭の保護に延ばしてゐるので、地下室人には用のないものである。

飛行機の高度のレコードは佛國の一萬一千百四十五メートル富士山の高さの三倍である。航續時間としては一晝夜伸開では

完全に一日半無着陸といふ例がある。米軍でも空中で油を補給して一日半を翔つたレコードがある。速力では米國で一時間四百二十九キロメートル二五―百三十五里を一氣に飛んだ。東京を發つとしたら一時後に京都にゐる勘定である。

東京驛を發ち、東海道線に沿ふて行くものとして、一時間に人間が芝公園まで歩く間に、人力車は二里の札の辻まで、馬は二里半の品川まで、鳩は十五里の大船まで、自動車は二十里半の茅ケ崎まで、汽車は二十三里の國府津まで、飛行船は三十里半で山北の上を、爆撃機は四十一里の三島を、偵察機は五十六里の江尻を、驅逐機は七十七里の濱松を飛んでゐることになる。その時もう京都の空を飛んでゐる飛行機があると思ふと、ウカウカと峠の茶屋で一ぷくといふわけには行かぬ。

飛行機の價は一機一二萬圓のものであつたが、今日では四五萬圓となり、爆撃機は七八萬圓から十四五萬圓にもなつた。金屬製飛行機となると更に高い。保存命數は二百時間飛べば廢物となり、毎年二回は更新しなければならぬ。外國物を買へば少しは安いが戰時の間に合はない。米國は一九一七年春六億四千萬弗の金をかけ、工業力の全能を盡して飛行機の製作にかゝつたが、それが佛國の戰場に出たのは、翌年の五月、大戰參加後十三箇月目であつた。平時から準備されてゐなければ、戰時何億の金を注ぎ込んでも間に合はない。

×××

飛行機を打ち落す大砲が高射砲である。飛行機は飛行機で落せばいゝが、戰場以外の對空防禦は高射砲の外にない。

都市の周りに網を張つたり、煙幕を張つたりすることも考案としてはある。電波を送つて飛行機を落す時代も來るだらう。熱線を送つて飛行機を燒き落す考案を立てた人が獨逸にあつたが、電氣で飛行機や自動車を操縦することも出來さうだから――操縦手なしで――飛行機を落すことは大した難題でない。

歐洲戰爭中北海のある所で波止場が自爆的にメチヤ〲になつたことがある。當時獨軍の飛行機が低空に飛んだので、電波を送つて破壞したのだらうといふことになつたが、今に疑問のまゝに殘つてゐる。このころ流行兒の問題となつた殺人光線も眉唾ものではあるが、獨、佛、英、伊では盛んに研究されてゐる。光波で目標を交叉して破壞作用を行ふのだから、理屈もあり、あながち夢ではなささうだ。

伯林の市中の全自動車が一時に止つたの、巴里からルーマニヤ通ひの飛行船がバイエルンの上空で發動機が止まつただのといふ風説もあつた。

高射砲の彈が飛行機に屆かなければ、敵機は機下に破裂する

…を見ながら、悠々として空に浮んでゐるだらう。歐洲戰では八千發か六千發に一發しか中らなかつた。それが五千に一、三千に一、千に一となつて、終には五六百打つて一發中るやうになつた。理屈としては中るべきだが、相手が空飛ぶ鳥と來てゐるので、註文通りには行かぬと見える。

歐洲戰爭中、獨軍高射砲は一千五百八十八、佛軍は四百の飛行機を射落してゐる。

米國には三百十門、佛國二百門、伊國百二十門、英國二十四門の高射砲がある。日本は今度英國と同數のものを新設する。

高射砲は陣地に固定するものと、自動車に乘せて自由に敵機の方向に動くものとがある。千メートル以內の飛行機に對しては高射機關銃もある。支那兵の人力車式高射銃といふのは、人力車に乘つて飛行機を鐵砲で追つかけ廻るのださうである。

× × ×

今度は人間である。

歐洲戰で交戰國の總兵數は六千七百萬といふことになつてゐる。足を延ばして一列に寢ると地球を四周するさうである。日露戰爭の總兵力は僅かに二百萬に過ぎなかつた。

日露戰爭の戰線は最大五十里と思ふが、歐洲戰では露獨正面のリガ灣より黑海に至る四百四十里、佛戰場の北海より瑞西國境に至る百九十里、伊戰線の百里、合せて七百三十里といふ大きさであつた。

國家總動員組織の發達した國であつたら一千萬の人口に對し百萬の軍隊を戰場へ送ることが出來るとしたものである。獨逸は女護島一國となつたくらゐ男といふ男は戰場に出た。そして女は職工となつて、十二時間働き通し、一ヶ月一日の休日も進んで工場に働いた。

一九一六年十一月、祖國勤務補助案が獨逸議會に提出された時、時の宰相フオン、ベートン、ボールウエツセは、火砲彈藥の製作に從事するものは、塹壕內の軍隊と何等變ることなく、無爲徒食の輩は敵國を助くるものである、と演說した。

一畫工も戰場に出てタンクや、大砲の所在を晦ますやうに彩つた。森や家を描いた畫布を張り廻して、そこに砲兵の觀測所を作つた。

學生は、一兵卒として風荒き北海々岸フランドルの攻擊に加はり、鉛雨の下、泥深きイーゼル河や、ランゲマルク、ジクスムンド村に突入して、獨逸青年のために大に氣を吐いた。

人間が多いからといつて戰爭に勝つとは限らぬ。それには相當の訓練がいる。旅順でノオーク將軍は、攻城の初期より十月頃までは、日本軍も强かつたが、十一月からは新到も鈍つたと

いつた。「全滅」といふ二字が旅順戰を物語る代表語であつたとほり、死んで死に盡し、碌に鐵砲の持ち方も知らぬ兵隊が出掛けたくらゐであつたから、敵側から見たら攻擊が鈍つたと見えたらう。

米軍が歐洲戰に頭を出したといふことは、餘程御自慢と見えて、このごろ米國物の映畫に、米軍が佛國の戰場で働いてゐる場面を取り入れたものが非常に多い。

米軍が遙々佛國に戰ふなどといふことは驚異に値することであるが、さう役にも立つてゐなかつたやうである。一九一七年四月參戰に決して、九月佛國に渡るまで、日夜訓練に怠りなく、佛國內でも二ケ月、更に戰線の後方で一ケ月の訓練を施した。

それでゐて、米軍が眞に戰線に出たのは一九一八年春以後であつて、それでも單獨に戰線を負擔し得ないで、一聯隊くらゐづつ英佛軍の中へ交ぜて使つてもらつたものである。

師團と纏つて第一線に立つたのは、同年五月末モンディヂーユの戰鬪が皮切りで、サンジヘールの最安全地で戰鬪したのは九月以降、前後一年半にして始めて二箇師團を纏めて使つた。

それでも歐洲戰爭の楔を打つたつもりでゐる。

× × ×

とにかく、戰爭が大がゝりになつて來た。舞台も追々大きくなるので、一年や二年で片付く戰爭といふものはなくなるだらう。

二百里も飛ぶ大砲が出たり、甲蟲のやうに一人一人のタンクが飼ひ出したり、光線で人を燒き殺したりといふやうな時代になると、戰爭は益々技術的奇襲——珍品で以て泡を吹かさなければ勝目がないことになる。(一四、五、二五稿)

○

海軍及海戰の話

水野廣德

國民教育の進歩と社會教育普及との御蔭で、今でこそ小學校

の生徒すら軍艦の種別と兵器の種別ぐらゐは大體承知して居る。山間の青年すら華府會議の海軍比率が何うのと雄辯を振つて居る。然るに僕等が初めて海軍兵學校に入り、金錨の帽章に短劍をちやら付かせながら夏冬の休暇に大に錦を故郷に飾るつもりで得意滿面、肩を軍國主義的に怒らして田舍の町を通ると、小學校の生徒達が珍らしさうに「拔ける」とか「拔けぬ」とかガヤ〳〵騒ぎながら短劍に付いて來たものである。商家のカミさんや小倅達が、

「アレ何ぞやの、

「劍が短かいけん樂隊ぞなもし

「色の黑い樂隊ぢやこと

などと評されて、日本のネルソンの卵を以て自任せる若い海軍生徒の階級的自負心を尠なからず傷つけられるのが常であつた。此頃の海軍士官の理想は元帥東郷でなく、アドミラル、ネルソンであつた。今では鐵道の官吏も、稅關の役人も、殖民地では小學校の先生まで短劍を佩用して大に人民共に威嚴を示して居るが、當時に在つては短劍は海軍士官と軍樂隊との特占物であつたのである。此の短劍に憧れて海軍出身を志した青年もあれば、海軍士官に嫁いだ娘さんもあるであらう。

軍樂隊と間違へらるゝ位はまだ上等の方で、買物をした店の番頭君から、

「海軍さんは月給は澤山お貰ひになるし、珍らしい牛肉は御見になるし、それに軍艦では毎日西洋料理じやさうじやなもし。私等もモツと若いと海軍になるんじやけんど…。海の中で戰爭をするのには矢張り長い刀は不便じやけん、そんな短かいのじやなけりやいかんのじやらうなもし。海の中の戰爭も夏は好へじやらうが冬は隨分冷たからうなもし、

などと奇問を發せられる。海軍と云へば海の中で泳ぎながら切合ひでもする樣に考へて居るらしい。併し海軍士官の短劍をそこに理由づけた點に於て、此の番頭なか〳〵論理的である。

さうかと思ふと親戚の老人から

「御前今水雷に乘つて居るのかい？ 水雷は勇ましいが危ないさうじやの、海の底を潛つて行くのじやさうじやが、それで中に入つて居る人間が能く生きとるものじやの。歸りは矢張り泳いで歸へるのかい？

水雷艇と魚形水雷とをゴツチヤにして居るのだから返答に困る。

之が三十年前に於ける日本人の海軍に關する一般知識であつたのである。社會の木鐸とかを以て自ら任ぜる新聞記者すらも、日露戰爭頃までは十二吋砲と十二珊砲との差別を知らず、戰艦

の軍砲が十二珊砲であつたり、巡洋艦に十門の十二吋砲を載せたり、頻りに新式軍艦を紙上で製造したものである。斯く云ふ僕なども海軍に出身する迄は海軍の何であるかを知らず、唯一二度軍艦を見物したる時其高い柱の上で猿の如く敏捷に作業せる水兵を見て、海軍といふものは危ない仕事をするものであると感じた位に過ぎなかつた。

中學校の何年の頃であつたか、僕の町から餘り遠からぬ瀬戸内の釣島水道と云ふ處で「千島」といふ一千噸位の軍艦が英國の汽船と衝突して沈沒し大騒ぎをしたことがある。此の「千島」は前年佛國にて建造し日本に回航中臺灣附近で乗員諸共幽靈の如く消へて化舞つた軍艦「畝火」の代艦として建造せられた軍艦で、之も佛國より回航の途中今日は愈々呉軍港に入港すると云ふ朝やられたのである。今日の入港を今か／＼と港を眺めて待ち佗びた乗員の妻や子や父の數はどんなであつたらう。最初の「畝火」が行衛不明となり、其の代艦の「千島」が沈沒するとは、誠に不思議な因縁である。「畝火」の消失に續いて「千島」の沈沒を目の當りに見せ付けられたる地方人の頭には「軍艦は危險なもの」との印象が相當深く刻みこまれたらしい。海軍出身希望者にして父兄の反探の爲め目的を變更した友人も尠くない。併し海軍に出身したる者の殆んど總てが今日退人して世間の落伍者となれるに反し、父兄の反對に依つてイヤ／＼ながら他の方面に向ひたる者の多くは、今正に活動の盛期に入つて居る。實にや世は塞翁の馬である。

○

海軍とは文字の示す如く海上の軍隊である。英語と佛蘭西語とでは Navy と云ひ、獨逸語では Marine、伊太利語では Marino、露西亞語では何と書くか知らない。「ネビイ」は航海の意味より來り、「マリン」「マリノ」は海の意味より來て居る。支那や日本に於ては以前は專ら水師とか、水軍とか、舟師とか書かれた。日本では不都合にも海賊衆などと呼んだこともある。尤も今の陸軍の起原は昔の野武士で何れも國泥棒、城泥棒であつたのだから、海軍の海賊も或は適稱であつたかも知れぬ。海軍と云ふよりも水師、水軍などの方が、何となく意氣で文學的の樣な氣持がする。

之を小學校の教科書的に說明すれば「海軍とは軍艦に乘つて海上で戰爭をする軍隊なり」とでも言はうか。中學生的に今少し氣取つて言へば「海軍とは國家防衛の爲め海上に策動する軍隊なり」とでも解說する。何れにしても海の上で仕事をする軍隊の謂ひである。

河童と呼はる、海軍々人とても人間並に空氣を吸うて生きて

居る以上、海の上で仕事をするには船に乘らねばならぬ。如何に劍が短くても、昔の番頭が跳ねた如く泳ぎながら戰爭は出來ない。海軍々人が任務を行ふ爲めに乘れる船を總稱して軍艦と云ふのである。素より海軍の兵語的に言へば軍艦の外にも驅逐艦もあり、潜水艦もあり、特務艦もあり、掃海艇もあり、敷設艇もある。又國際法より論ずれば軍艦とは軍艦旗を掲げねばならぬとか、海軍將校に依つて指揮されねばならぬとか、小面倒な規定もあるが、海戰武器を裝備せる海軍用船は悉く軍艦と云つても常識的には差支へないであらう。

陸軍に在つては軍隊構成の要素は「人」と「武器」とである。武器は時代に依つて變遷し相違がある。現代のタンクや毒瓦斯が無くても、大砲や小銃があれば戰爭は出來る。大砲小銃が無ければ弓矢で戰ふ、刀鎗で戰ふ。之が無ければ棍棒でなぐり合ひ、石を投げ合ふ。何も無ければ動物の如く嚙み付き合ひ、引搔き合ふ。之でも戰爭の目的は達せられる。故に陸軍の第一要素は武器よりも人である。海軍に在つては軍隊の要素は「人」と「船」とである。人が如何に多く、武器が如何に精鋭でも、船が無ければ海上の戰爭は出來ない。故に海軍の第一要素は人よりも寧ろ船である。左ればこそ陸軍擴張は人間の增加を意味し、海軍擴張は軍艦の增加を意味して居る。

海軍の主體は軍艦である。故に海軍の歷史は軍艦の歷史である。軍艦の歷史は或る意味に於て造船の歷史である。軍艦無ければ海軍なく、造船發達せざれば海軍も亦發達しない。往時武器未た進步せず、造船尙ほ幼稚なりし時代にあつては、軍艦と普通船舶との間に截然たる區別は無かつた。否な寧ろ軍艦と稱すべきものがなかつた。嚴格に言へば軍艦とは海上の戰鬪に適する如く特殊の構造と設備と艤裝とを有せるものでなければならぬ。又海軍々人とは海上の戰爭に從事せしむる爲め特殊の組織と編制と訓練とを施せるものでなければならぬ。普通の船舶に普通の武裝人間を乘せたばかりでは軍艦とも海軍とも言へぬのである。

併しながら軍艦なくとも、海軍なくとも、海戰は行はれる。海戰とは海上に於ける戰爭行爲である。漁夫が漁區の爭奪から橈を以て打合ひ、水竿を以て突合ふのも一種の海戰行爲である。唯私鬪と公戰との別あるに過ぎない。源平壇浦の合戰の如きも激烈なる海戰ではあるが、其の船は軍艦でもなく、其の軍は海軍でもなく、唯貢米輸送の荷船を徵發して之に義經や知盛が乘り込んだに過ぎないのである。秀吉征韓役に於ける我か水軍の如きも亦之に近きものである。軍艦として特殊の構造を有し、施設を備へ、海軍々人として特殊の組織を有し、訓練を

したる朝鮮水軍と戰ふて大敗したるは當然と云はねばならぬ。

○

漢の張騫が西域に使して羅馬帝國に行つたことや、伊太利のマルコポーロが元主忽必烈の客として東洋に來たことなどの遇發事は別とし、東西文化の觸接は第十五世紀末バスコ・ダ・ガマが喜望峰航路を發見し、西洋船舶が東洋に來航したる時より始まつたのである。地球上に人類が發生して以來幾百萬年間、宇宙の大より見れば實にケシ粒程の此の世界に於て、僅に四百年前迄は東西兩洋人が目と鼻との間に住みながら、別々の文化の下に生活し來たりたるなどは、後世より考ふれば嘘の様な話であらう。陸上に於ける東西文化が相異つて居るが如く、海洋文化も亦東西著しく相異つて居る。

東洋の文化を代表するものは支那文化である。而して支那は大陸國である。故に支那文化は大陸に發生し、大陸に成長し、大陸に爛熟したるものにして徹頭徹尾大陸的である。三千年の古き歴史を有する支那の文化に、海軍に關する政治、海軍に關する文學は殆んど發見することが出來ない。侵略御免時代に在つては外國攻略と、外國の侵襲に對する防衛とが政治の最大重要事であつた。支那の敵は歴世常に北方の蠻賊であつて、海上よりの侵襲は明末倭寇の跳梁に至る迄殆んど絶無であつた。左れば北方の陸敵に對しては萬里の長城の如き現代人の夢想しき堅固なる防備を施しながら、海上に對して殆んど無防備の狀態に開放せられて居た。春秋戰國以來不斷に干戈を動かし、陸戰に掛けては百練千磨の民族でありながら、倭冦の侵襲に對しては殆んど策の出づる處を知らなかつたのも、海上防備に全然無知識無經驗なりしが爲めである。支那兵書の經典とも云はるゝ「孫子」「呉子」を始め七書を通して見るも海上作戰に關しては全く語る處、教ゆる處が無いと云つても良い。

支那は大陸である。而かも地勢平坦なる大國である。北に黄河、南に揚子江の大江河が相並んで東西に貫流して居る。之を開通して運河を設けば南北の交通運輸に差支はない。風濤險にして舟行難なる海上に態々交通路を求むるの必要がない。所謂南船北馬の南船とは専ら運河の舟行である。而して漢隋唐宋等の如き支那文化の全盛期に於ける文化の中心は海を距つること遠き内地に在りたるが爲め、其の政治に關係せると、藝術に從事せるとを問はず、所謂時代の文化人なるもの、多くは眞の海洋を知らず、唯僅に大江湖を見て海を推想したに過ぎなかつたであらうと思はれる。是等の地理的事情の下に支那に於ては政治として海洋政策を講するの必要がなかつた。海洋經營を業するの餘裕が無かつた。海洋交通なきが故に自ら藝術としての海

洋文學が生れなかつた。海洋經濟が行なはれず、海洋文學が生れないから、國民に海を利用し、海を讃美し、海を愛し、海に親むの思想が發生しない。海と云へば唯渺茫無際、萬頃の蒼波とか、怒濤彭湃、狂浪滔天とか云ふ極めて疎漫なる概念を有するに過ぎなくなつた。

○

神功皇后の三韓征伐以來始めて支那文化を輸入したる我國は隋唐宋を經て近世に至るまで、制度文物盡く支那を師とし、支那を模倣し、支那に追隨し、唯其の及ばさらんことに汲々として日本獨特の文化を創造するの遑がなかつた樣である。從つて支那に無きところは日本にも亦無く、支那に缺くるところは日本にも亦缺けて居る。支那には古來海の政治がない、海の文學がない、從つて日本にも亦海の政治が無かつた。海の文學がなかつた。」

東西古今の歷史に徵するも、由來大陸の人間は保守的である。海國の人間は進取的である。是れ素より陸は永久不變であり、海は刻々轉流する自然の感化にも由るであらうが、一は又海洋は交通自由にして異國文化に接觸すること繁きに反し、大陸は高山大河に遮きられて異國文化の刺戟を受けること乏しきに由るものであらう。我國は海國である。而かも土地面積に比して海岸線の長きこと世界に比なき第一等の海國である。茲に建國の皇祖皇宗は何處よりか海に浮んで此の國に移住せられたのである。左れば建國の歷史より云ふも、國土の形勢より見るも、我國民は最も多量に海國思想海國氣分を有たねばならぬ筈である。夫にも拘はらず我國民は二三十年以前までは、海軍とは海山を泳きながら切合ひをするものと思つたり、或は一葦帶水とも云ふべき朝鮮海峽をば鳥も通はぬ玄海灘と恐れたり、海國民としての常識もなければ氣魂もなかつた。是れ素より德川幕府の峻嚴酷烈なる鎖國政策に依り、三百年に近き間國民が全然海洋と絕交したることが主たる因由ではあるが、一は又大陸國たる支那より輸入したる文物制度習慣道德等の感化影響によりて海國的國民性を萎微銷磨したるに由るものと信ずる。

支那、日本に於て海洋政策海上施設の頗る振はざりしに反し、其の中間に介在せる朝鮮に於ては是等の事業が一時大に發達したる時代がある。元來海洋政策と造船事業とは恰かも唇齒輔車の關係を有し形影相離るべからざる性質のものである。軍事と商事とを問はず、凡そ海洋政策の實行を期する爲めには造船事業の發達に待たねばならず、造船事業の發達を圖るためには海洋政策の保護に依らねばならぬのである。西洋諸國の木帆する迄は日本及支那の造船術は甚だ不振なりしに反し朝鮮の

船事業は頗る發達して居たのである。

彼の後一條帝の寛仁年間に我九州沿岸を刧略したる刀夷の船は、其の船體の壯大、其の構造の堅牢なりしこと當時我國民の驚異したる處である。然るに朝鮮の舟は尚ほ一層進歩發達し、外舷には鐵板を張り、衝角を備へ、船內には甲板を作り、戰樓を設け、刀夷の强艦隊を一戰の下に全滅せしめた。恐らく世界に於ける裝甲艦の嚆矢であらうと思はれる。蒙古來襲の時に於ける船舶の大部分は朝鮮に於て建造せられたのである。舊誌に依れば蒙古は文永の役には兵艦一千隻、弘安の役には各艦三千隻の建造を朝鮮に命したとある。

獨り造船事業の發達したるのみならず、海防政策も亦大に整備し、秀吉征韓の當時朝鮮に於ては慶尙、全羅、忠淸の三道に各左右の水師營を設けて軍艦を備へ、水士を練り、統制組織ある常備海軍を有して居たのである。加藤喜明が如何に陸戰の雄たりとも一夜にして李舜臣となることは出來ない

○

東洋文化の淵源たる支那は大陸國にして而かも其民族は大體に於て統一せられて居た。之に反し西洋にては諸種の異民族分立對峙して攻爭殆んと絕ゆる時が無かつた。異民族の戰爭は殘忍である、酷烈である。「年を經し絲の亂れの…」など丶之居氣たつぷりの悠長な戰爭ではない。敗くれば全民族殺戮さる丶か奴隷に賣らる丶かの二つである。從つて勝たんが爲めに自ら武器が發達し、戰術が進歩する。加之西洋の地形は半島海灣出入して對岸と遐邇相望んで居る。戰ふては取るべく、商ふては利すべく、こ丶に海上交通が自ら開け、海洋經營が自ら行はれる。支那の文化が大陸に發生し、大陸に成長したるに反し、西洋の文化は海岸に發生し、海洋に發達した。往時海上無警察にして海賊御免の時代に在つては　能く海洋を支配するものは貿易の利を獨占することが出來た。是に於てか海賊を防ぐ爲めに　海敵を擊つ爲めに海上軍隊必要を生じた。之が海軍の濫觴である。

凡そ陸軍と海軍とを問はず、軍備の目的は他國を侵略するか或は他國の侵略を防禦する爲めである。侵略は慾望であるが防禦は自衞である。慾望は贅澤事であるが自衞は必要事である。必要は常に進歩を促かし發達に導びく　世界に於て今日最も海軍の發達せる國は英國である。英國は我國と等しく四面環海の島國で南には近く佛蘭西を控へ、東には小海を挾んで諸典半島と相對し、西にはビスケー灣を距て丶西備半島と相望んで居る。初めノースマンのヴキキングシップに侵され　續いてデーン人に襲はれ、外敵の侵襲抄掠連年絕ゆる時がなかつた。是に

於て自衛の必要は海軍の創設を促がした。而して之を爲した者が彼のアルフレツド大王である。後更に佛國ノルマンの爲めに國を奪はれ、西班牙の無敵艦隊に脅かされ、佛、蘭と覇を海上に爭ひ、遂に近代の大海軍を設立し、ジヨンブルをして「ブリタニヤ、ルールス、ゼ、ウエーブス」を謳はしむるに至つたのである。然るに我が國の如きは英國と同じ海島國でありながら、蒙古の來襲以外古來大なる海の敵襲を受けたることなく、從つて海防の爲め海軍を設置するの必要を促がされなかつたのである。之に反し朝鮮の海軍が一時大に發達したるは倭寇の侵襲に對する自衛の心要が此に至らしめたものである。倭寇の終息と共に朝鮮の海軍も衰滅した。

　西洋の海軍は二方面に於て發達した。其の一はスカンヂナビヤ半島のノースマンに起つて英國を中心として發達したる大西洋の海軍である。他の一は小亞細亞のフヰニシヤに始つて伊太利を中心として發達したる地中海の海軍である。狹長堅牢なる龍骨船に長橈短帆を備へ、船側には圓盾を立て連ねて、北海の激浪ビスケーの怒濤を物ともせず、歐洲の北岸のみかは、遠くジブラルターを越へて地中海までも侵入し、隨所に劫掠を恣にしたるヴヰーキングシツプの活躍は八幡甲螺の我が倭寇の勇猛に彷彿たるものがある。英國を奪ふて王となりたる佛國のウイリヤムは實に此のヴヰーキングの流を汲むノースマンの子孫である。

　世界最古の文明を有せる東地中海は世界海上貿易の搖籃地である。海運の鼻祖たるフヰニシヤの昔より希臘羅馬の盛時を經て、ベニスのゴンドラ船に海上の榮華を極むるに至る迄、地中海は歐洲に於ける貿易交通の中樞であつた。海運の盛んなる處自ら海賊の蔓るは、砂糖に蟻の付くが如しである。日本の瀬戸内海が海賊の巣窟であつた如く、地中海も亦海賊の稼き場所であつた。或は帆を絞つて島影に隱れ、檣を仆して波間に潜み、夜に入れば人目を晦ます黒帆に風を孕まして蝙蝠の如く暗の海を縱横に馳せ廻り獲物を見れば近づき逼つて投げ繩梯子に白刃を振つて躍り入る。財貨を掠奪し、乘客を虜掠し、美人は弄んで後奴隷に賣飛し、男子は鎖に繫いで橈奴とする。オツトマン土耳其の盛時に至つて地中海海賊の暴威は其の極に達し、隊を組んで港灣を襲ひ、海邑を荒らし、跳梁跋扈至らざるなかつた。斯くて土耳其とベネチヤ間に於けるキプラス島の爭奪を動機として西歐地中海諸國の憤起となり、史上に名高きレパント大海戰を誘起したのである。

○

　中世紀の頃大西洋方面に於ける英國と佛、蘭、地中海方面に於けるゼノアとベニストハ互に海上の覇權を爭つて相下らず、

交戰連年殆んど解くるの遑なく、之が爲め大に歐洲海軍の發達を促した。而して風濤荒き大西洋方面に在つては帆走的に發達し、風波靜かなる地中海方面に在つては櫓走的に進步した。英海軍中興の祖と云はるゝヘンリー七世（第十五世紀後半）の軍艦の如きは、其の大サ一千噸を越へ、二層の甲板を設けて三檣若くは四檣を有し、各檣上下二段の帆を展し、十餘門の大砲と百門以上の小砲を備へたる純然たる帆式軍艦であつた。之と異り地中海方面に在つては十六世紀の後半レパントの海戰に至る頃までも、軍艦は尚ほ櫓走を主とし、其大なるものは漕座を二段三段に構へて櫓數百を算し、一本の櫓に三人五人の櫓奴を鎖繋し、舳艫の戰樓に數門の大砲を備ふるを例とした。又以て自然が人文に及ぼす影響の如何に大なるかを窺ふことが出來る。

檣樓重疊空を衝き、船體高大城の如き大艦が列伍整齊、黑煙を漲らし白波を蹴立てゝ進む現代軍艦は素より豪である。其の戰ふや巨砲齊發、百雷轟き、雲煙渦卷き、巨彈飛んで海波逆立つ現代の海戰は素より壯である。左れど又往時數百の櫓漕船が舳艫相啣み、船舷相並んで、錦旗を海風に飜へし、整調正しく櫓端波を打つては渦を卷き、櫓翻飜つては日に閃めき、而かも其の戰ふや接戰衝擊、白刃相打ち、長戟相交り、舷砕け檣飛ぶの光景は壯烈であつたであらう。

小銃の發明が陸軍の兵制戰術を根本的に變革したる如く、大砲の出現は軍艦の構造と海軍の戰術とに大革命を招來した。大砲の起原は諸說區々にして明らかでない。西洋に初めて大砲のの現はれたるは十四世紀の中葉であるが、之より先き東洋に在つては蒙古の我國に來襲したる時（一二七四年）、既に蒙古の兵船には霹靂砲と稱する大砲を備へ、炸裂彈を發射して我軍を惱ましたることより察すれば、大砲は最初東洋に於て發明せられ、後西洋に輸入せられて發達したるものゝ如く思はれる。航海に最も必要なる羅針儀の如きも最初東洋人の發見に關するも、之を今日に發達せしめたるものは西洋人である。東洋人には發明の思索はあるが之を實生活に適用するの能力が缺けて居る。

最初西洋に於て用ゐたる大砲は木製の容筒に石丸を裝塡したるもので主として攻城に使用し、發射數は一門につき一日一發の割合で夜間裝塡し翌朝城内に打込むを常としたのである。一日一發の大砲が今日一分數發乃至十數發の大砲と進步した。人智の進步驚くべきである。大砲を初めて軍艦に裝備し海戰に使用したるは、大西洋方面に在つては一三七二年佛西聯合艦隊と英國艦隊とのラ・ロシエリーの海戰である。爾來製砲の術次第に進步するに從ひ發射速度は增加し、射程は延伸し、十五世紀の後半に至りては帆走と櫓走とを問はず、大砲は軍艦の主要武

器となつた。一五八八年に英國を襲ひたる西班牙の無敵艦隊は百三十二隻の軍艦に二千四百四十一門の大砲を備へて居たと云ふことである。

斯くて軍艦の戰鬪力は一に備砲の多少に依つて決せらるに至り、各國競ふて多砲艦の建造に從事した。多數の大砲を積む爲めには艦體が大でなければならず、艦體が大且つ重となれば最早や橈に依つて操從することが出來ない。加ふるに大砲射程の延伸は舷々相摩する敵艦乘取戰術を困難ならしめたるが爲め、橈走艦は自ら其の影を海軍より沒し、世界の軍艦は帆走式に統一せられたのである。十九世紀の初頭ネルソン時代に至りては帆走艦は殆ど發達の極に達し、艦體の大サは二千噸を越へ、百餘門の大砲と上中下三段の甲板に鵜の巣式に並列裝備し、高き三本の檣には各四枚乃至六七枚の帆を張り、之を自由自在に操つること其の技亦玄妙の域に達した。トラフアルガーの海戰にネルソンの旗艦たりしビクトリー號は艦齡四十年の老艦なりしも大砲百門を備へて居た。尤も製鐵事業の尙ほ幼稚なりし時代とて、最大砲と雖ども口徑五六吋に過ぎず、球彈を砲口よりつき込み、俯仰機も施廻機もなく、艦の動揺と回轉とに依つて照準を行つたのである。十六吋の大砲塔が裝塡より俯仰施廻に至る迄、指尖一つで出來る今日より見れば僅に一世紀以前のことなかつたのは實に何の故である。

○

大砲の出現と其の進歩とに依つて急速に發達したる軍艦は十九世紀の中葉に至り相尋いで第二第三の革命を來した。即ち其一は鐵船の出現である。其の二は蒸氣機關の發明である。軍艦は其の任務の性質よりして多砲搭載するに拘はらず、木艦時代の軍艦が其大サと備砲の數とを或る程度に制限せられて發達を停頓したる所以は、船材が脆弱にして妄りに艦體の増大を許さゞりしが爲めである。鐵船の建造は此の缺點を消滅せしめ、爾來造船術は製鐵業の發達と共に驚足的進歩を爲し、軍艦の大サは年に增し月に加はり、華府協定の制限なければ今頃は恐らく十八吋砲を有する五萬噸の巨艦を海上に見たであらう。

數年前倫敦に於て「半世紀前」と云ふ活動寫眞を見たことがある。其の筋書中に、或造船所の青年技師が初めて鐵船の建造を計畫し之を社長に建議した。禿頭の老社長之を見て怒るまいことか、鐵の船が水に浮ぶなどゝは大地がひつくり返つても有り得べきことでない、人を馬鹿にするにも程がある。彼奴きつと英國の船を沈沒さす爲めに斯んな事を云ふ外國のスパイか、左もなければ氣が狂つたのに相違ない。とて直に青年技師を免職して仕まつた。芝居の筋書通り青年技師と戀中であつた社長

の娘が親爺にお極りの駄々を捏ねたので、社長も已むを得ず技師をして試みに鐵船を造らしめた。結果良好、親爺大悅び、遂に娘の婿として社長の位置を讓つたと云ふ御目度いフイルムがあつた。素より活動寫眞の作話ではあらうが當時に於ける人間の知識程度を察することが出來る。厚サ十二吋の裝甲鈑を有する今の軍艦と併せ考へて夢の樣な氣がした。

蒸汽機關を始めて船舶に使用したのも亦十九世紀の中頃である。汽船の發明者たる亞米利加人ソルトンが小舟に蒸汽機關を据へ付け、始めて巴里のセーヌ河で試驗したる時、變な恰好をした舟が帆もなく、櫓もなく、人も見へぬのに、煙突から黑煙を吐き出し外輪車に河水を蹴散らしつゝ甚だノロ／＼と匍ひ出したるを見て、見物の一婆さん、獨逸軍が初めてタンクに出會つた以上に驚いて仕舞ひ、河から化物が匍ひ出て來たとて、ビックリ仰天氣絕したと云ふ實話がある。氣違扱ひにされた鐵船建造や、婆さんをして目を廻はさしめた蒸汽船は當時の最高知識であつたが半世紀後の今日では最早や常識以下となつた。明治三十年前後僕等が江田島の糞を食つた頃には、大砲の俯仰は挺で捏ねくり、旋廻は綱で引つ張り廻はし、遠洋航海は「トップ發れー」の帆前で訓練されたのである。世の中の進歩が恐ろしくもあり、賴もしくもある。

攻擊武器たる大砲の發明に依りて第一革命、防禦裝置たる船の建造と、推進機力たる蒸汽機關の發明に依る第二第三の革命を經て、軍艦は遂に現代の如く排水量三萬五千噸、備砲十六吋砲、裝甲の厚サ十二吋、速力廿四節、乘組千四百人、建造價格七千萬圓と云ふベラボウなものに迄發達したのである。軍艦一艘造る爲めに日本全國の地租全部を食つて仕舞ふとすれば、世の中に此位大金食らひは外にあるまい。

○

聊か水兵の教科書めく嫌はあるが、之も知識の常識化、常識の知識化の一端として、筆の序に軍艦の種別に就いて簡單に述べやう。陸軍にも步騎砲工の諸兵科は勿論、梅干漬物を運ぶ輜重兵までもある如く、海軍にも亦用兵上の目的に依り種々の軍艦がある。日本海軍では之を戰艦、巡洋戰艦、巡洋艦、驅逐艦、潜水艦、航空母艦、特務艦などゝ分類して居る。

戰艦とは戰時艦隊の中堅となるもので、攻防の兩力最も強大で行動力も亦大でなければならぬ。從ふて艦體は高大強堅、外觀最も莊重を極めて居る。我國では華府會議で問題となつた陸奥が其の代表的のものである。之が要目は排水量三萬三千噸、備砲十六吋砲八門、五・五吋砲二十門、裝甲十二吋、速力二三・五節、乘組定員一千三百十六人である。華府協定後に於ける我

國戰艦は扶桑、山城、伊勢、日向、長門、陸奥の六隻である。

巡洋戰艦とは戰艦の稍や巡洋艦化したるもので、戰艦と共に艦隊の主力を形成するものである。唯戰艦に比すれば攻防兩力に於て稍や劣り、行動力に於て之に優れるものである。華府條約にては戰艦及巡洋戰艦を以て主力軍艦と規定して居る。此種の軍艦は華府協定の結果米國には一隻もなく、英國に四隻と我國に金剛、比叡、榛名、霧島の姉妹艦四隻あるのみである。其の要目は排水量二萬七千噸、備砲十四吋砲八門、裝甲八吋、速力二七・五節で、英國の巡洋戰艦フードは排水量四萬一千噸を有し、現在世界に於ける最大の軍艦である。

巡洋艦とは専ら輕快敏速を主とし、主力艦の手先となり、耳目となりて偵察哨戒等に任じ、或は味方奇襲艦艇を掩護し、或は敵の奇襲艦艇を擊壞し、其他通商保護、敵船破壞等に用ゐるものである。華府會議に於ては英佛の意見衝突の爲め各國の比率協定不調に終はり、今日英米日の間に於て互に「多いとか」「少いとか」睨み合ひ、漸く其の擴張競爭を惹起せんとして居る。其の排水量は三四千噸より一萬噸を限度とし、備砲は排水量に應じて五、六吋より八吋を限度として居る。此種軍艦に最も尙ぶ處は速力の優駿なることで、今日に於ては三十節以上を有するにあらざれば其の任務を遂行することは不可能である。

我國には新式巡洋艦と稱するもの未成艦を合へ二十五隻を有し、英は四十七隻、米は十八隻を持つて居る。

驅逐艦は以上の諸艦が何れも大砲を主武器とし、魚雷を副武器とせるに反して、魚雷を主とし大砲を副とし敵艦に肉薄して魚雷襲擊を行ふものである。其他彼我潛水艦の擊攘掩護、艦隊の警護、商船の護送等、巡洋艦の足らざる處を補ふに用ゐられる。元來驅逐艦の名稱は水雷艇を驅逐する意味より起りたるもので、水雷艇の消滅したる今日では驅逐艦の名は意味を爲さない。寧ろ水雷艦又は魚雷艦と呼ぶ方が適切なる名稱である。其の大さは五六百噸より千四五百噸に達し、速力の駿速なることが第一要件である。普通三十節以上を有し新式のものは三十六七節に達するのもある。現在我國の驅逐艦は未成のものを合すれば百〇四隻を數へ、英は百十九隻米は、三百二十一隻である。

潛水艦は水中を潛る驅逐艦で、敵艦に對して魚雷の潛航襲擊を行ふことが唯一の任務である。其の大さは水上排水量四五百噸より一千噸内外を常とし稀には二千噸を超過するものもある。水中排水量は水上排水量の二割乃至三割を增加する。速力は水上二十節内外、水中十節内外で、水上航行には蒸汽機關若くは内燃機關を用ゐ、潛航には蓄電機を用ゐる。潛水艦は敵の爲めには最も恐るべく、自己の爲めには最も危險なる軍艦で、

歐洲大戰中獨逸潜水艦の勇敢なる行動は聯合國の船舶一千萬噸と軍艦數十隻とを撃沈し、嘗て不動と思はれたる英國の海權を危殆に陥いれたると同時に、獨逸潜水艦の喪失も亦數十隻の多きに達した。水中より水底へ生きながら葬らるゝ、乗員の苦痛と悲哀とは廣島灣で沈沒したる佐久間潜水艇長の遺書に依りても知ることが出來る。各種軍艦中最も殘酷なる最も非人道的なるものである。現在數は日本七十八隻、英國七十四隻、米國百三十一隻である。

敷設艦艇とは敵港灣の封鎖、味方港灣の防備或は水路閉鎖等の爲め機雷を沈置敷設する艦艇を云ひ、之に適應する特殊の設備を有せる水上艦艇若くは潜水艦艇を使用する。掃海艇とは敵の敷設したる機雷を掃除して我が艦船の爲めに安全なる航路を開通する水上特種艦艇である。機雷或は機械水雷とは火藥を充塡したる機罐で、球形圓錐形圓筒形など種々の形式あるも、其の用途は敵に覺られざる樣之を水中に沈沒し、敵艦之に觸るれば電氣若くは化學作用に依りて爆發し、敵の艦底を破壊するものである。魚雷或は魚形水雷とは其の形恰かも魚の如く、軍艦、驅逐艦、潜水艦等の發射管より射出し自力に依りて水中を潜進し、敵艦の艦底を衝撃爆破するものである。

華府會議に於ては以上の諸艦艇を補助艦艇と稱し、更に之を水上と水中に區別して居る。之に對する各國の比率は英米佛の意見不一致の爲め協定成立せず、各國の自由建造に放任せられて居る。

航空母艦は航空機の出現に依つて生れたる新艦種で、敵地に對する空中攻撃或は艦隊に随伴して海洋偵察等を行ふ爲め航空機を輸送並に給養する航空機の移動根據地とも云ふべきものである。成るべく多數の航空機を成るべく速かに輸送する爲め、其の艦體も其の速力も大でなければならぬ。華府協定に依り其の最大排水量を二萬七千噸に制限せられたるも、各國とも今日尚ほ未だ之に適合する如き新式母艦を有するものはない。我國にては華府條約に依りて廢棄さるべき建造中の巡洋戰艦赤城(四萬噸)を航空母艦(二萬七千噸)に改造しつゝある。日英米の比率は主力艦同樣三五五である。

特務艦とは水雷母艦、病院船、工作船、其他各種の運送船の總稱であるが、あまり煩雜に亘るから詳説を略する。之で新兵教育を終はる。

〇

今や軍備縮小の叫びが高い。ゼノアに於ても、華盛頓に於ても、之が實現に力めて居る。國民が生活難に泣きながらも尚ほも國費の三割四割を惜氣もなく海陸の軍備に投じ殺人の術を練る。而かも戰端一たび開けば昨日の友も忽ち今日の敵となり、

相殺し、相傷け、愛する夫、愛する子、さては愛する親までも戰場に驅り出されて、或は壕の埋草となり、或は鱶の餌食となる。人間を離れて冷靜に考ふれば軍備ほど馬鹿々々しいものはない。戰爭ほど悲慘なものはない。仁義博愛を說く教育宗教道德の根本が疑はれる。此の世界に軍備が撤廢せられ、戰爭が絕滅したなら、人生は如何に安易に如何に幸福であるであらう。戰爭を目的とする軍備の世界に存することは人類の恥辱である。併しながら現代の人間の强慾と奸譎と猜疑と怯懦とは近き將來に於て軍備の撤廢は愚か、思ひ切つた軍備の縮小すらも實行せられそうにもない。殊に最近一二年間に於ける世界の風潮は、千萬人の同胞を殺戮したる歐洲大戰の苦熱も早や喉元を過ぎたものゝ如く、再び軍備擴張、軍備競爭の氣運さへ見へる。ヒンデンブルグ將軍が獨逸大統領に當選し、田中義一大將が政友會の總裁となる今日とて、明日の軍艦を畫くことも滿更ら夜明けの幽靈でもあるまい。

世界の五大海軍國たる日英米佛伊の海軍を或る程度まで制限縮小したる華府條約の有効期限は大正廿二年迄である。國際聯盟の軍縮會議、第二華府會議の幕開けは今の處何時の事か判らない。併し現定華府條約の有効なる限り主力軍艦には手が付けられない。巡洋艦も軍艦としては其の排水量と備砲の口徑とが制限せられあるを以て著しき變化は起らぬであらう。潜水艦潜水艇に今日最早や型に嵌まつて仕舞つて居る。

華府條約滿期に際し更に縮小の新條約を協定するか、現條約を其儘繼承するか、或は又之を破棄するかは今日尚ほ未だ確たる豫想が出來ない。恐らく破棄されることはあるまいと感察されるも、萬一破棄されたる場合には世界は再び海軍擴張の競爭となり、各國民は軍費の負擔に苦しむと共に國際敵愾心は强烈となり、十年を出でずして第二の世界戰が勃發するであらう。而して其時の軍艦なるものは何んなものであらう。

科學の進步速にして朝に夕の變化を圖られざる如き現代に於て新兵器の出現を豫め否認することは冒險の言である。目下世間に傳へらるゝ如き鋼鐵をも燒き貫く熱光線なるものも果して成功するとせば、是れ軍艦の大革命である、否な軍艦の消滅である。否な更に戰爭の絕滅である。我等は斯かる新兵器の一日も速に發明せられんことを祈ると共に、我等の常識は其の成効を危ぶむものである。

我が陸軍に於ては今日歩兵と砲兵との間に軍の主力爭が始つて居る。海軍に於ても嘗て潜水艇の現はれたる時、戰艦と潜水艦との優劣論が賑つた。而して歐洲大戰の實驗に依り、戰艦の主力は依然として强大なる戰艦に存することに決論せられた。潜

水艦に依つて一たび其の地位を危ふせられたる戰艦は飛行器の發達によりて再び其の存在が疑はれた。然るに幾たびか實驗の結果、現在飛行器の攻擊力を以てしては戰艦有効論に歸着した樣である。潛水艦は最早や戰艦の敵でない。飛行器亦未だ戰艦の地位を覆へすに足らずとせば、今後の戰艦は如何？と云ふ問題が起る。

華府協定あらざりせば戰艦巡洋戰艦は今日既に排水量五萬噸、備砲十八吋砲に達し居ることは疑問の外である。五萬噸の軍艦一隻の建造費は今日の物價を以てすれば八十萬圓乃至九千萬圓を要する。軍艦膨張の此の趨勢を抑止して三萬五千噸十六吋砲に食ひ止めたる華府條約は實に世界の恩人である。殊に財政難に苦しみたる日本の恩人である。我等は華府條約に禮讚せねばならぬ、日本全權に感謝せねばならぬ。平和を愛し軍費の輕減を望む國民は華府條約が繼續せられ、且つ尙ほ一層大なる軍備の縮小制限に努力せねばならぬのである。

華府協定廢棄の曉に於ては三年の中に五萬噸、十八吋砲主力艦の出現は豫想することが出來る。而して將來主力艦の變革を促すことありとすれば、それは潛水艦にあらずして飛行機であらう。今後飛行機の攻擊法が進步し爆破力が大となるに至れば、現在の如き形態尨大なる戰艦巡洋戰艦は最も不利益である。然る時主力艦は現在の側面防禦たる舷側裝甲のみならず、上面防禦の爲め甲板裝甲の必要を生じ、朝鮮水軍の名將李舜臣の創建したる龜甲船の如きものとなるであらう。此の傾向は旣に現はれて居る。

巡洋艦、驅逐艦は多少其排水量と備砲とに變化を來すならんも、現在と大差なかるべく、潛水艦も最早や大なる發達を豫期し得ない。空中攻擊を避ける爲め將來「潛水戰艦」「潛水巡洋艦」の出現を說く者あるも、斯くの如きは戰艦巡洋艦の根本任務を忘却したるものである。魚雷襲擊と機雷沈置以外に潛水艦の爲し得る仕事はない。

軍備の縮小撤廢が人間の道義心に基づく內科療法に依つて行はれぬならば、最早や科學の威力に依る外科療法に待つの外はない。各國民の軍備萬能病は已に膏肓に入つて居る。此の病根を排除する爲めには一時の苦痛を忍ばねばならぬ。人を殺して人を救へば人を殺すも可なりと云ふ。一發の彈丸に全艦粉碎する如き物凄き彈丸出でよ。一發の爆彈に全市全滅する如き恐ろしき毒瓦斯出でよ。然る時人間は初めて戰爭の不可能を覺り、大金食ひの軍艦も自ら影を波間に沒するであらう。

○

武器未だ現はれず、火を以て燒き扶ぐりたる獨木舟に乘り、

木行を以て戰ひたる太古の海戰より百五十貫の巨彈を二萬米突の遠距離にブツ飛ばす現代海戰に至る迄、古今東西海戰の數は空の星ほどあるであらう。變化極まりなき人間の顏にも、人間の心にも似たものがあるが如く、人間社會に於て人間に依つて行はれたる海戰にも類似のものが尠くない。其の著しきものの二三を擧げて古來海戰の模樣を偲ひたい。

海上に强敵を有せざりし支那には近代に至るまで大なる海戰なるものがなかつた。樓船將軍、艨艟將軍などの嚴めしき名は史上に存するも、何れも揚子江上に於ける水軍の將である。揚子江の水戰中最も有名なるものが彼の赤壁の戰である。時代は支那戰爭の最も劇的化したる今より約千七百年前の三國時代に遡る。魏の曹操、蜀の劉備を江陵に敗り大に舟師を治めて揚子江を東に下り、更に吳の孫權を衝かんとした。操が權に遣りたる檄狀に依れば「水軍八十萬の衆を帥ひて」とある。八十萬と云へば一艘に八百人を乘せても尙ほ一千艘の舟を要する。此時代にそんな大きな船とそんなに澤山の船が揚子江の上流にあつたとは思はれない。假りに一割の八萬人と見ても三百人づゝ乘せて尙ほ二百八十艘を要する。夫れにしても水軍としては大軍である。

新勝の餘威に乘じて天下併呑の燃ゆるが如き覇氣に滿てる曹操が、此の大水軍を率ゐて舳艫千尺山の如くなる天下の艦隊を赤壁の中流に浮べ槊を橫へて「月明かに星稀に烏鵲南に飛ぶ」と歌ひたる得意の樣も思ひやられる。蘇東坡は「舳艫千里、旌旗蔽空、釃酒臨江、橫槊賦詩、固一世之雄也」と賦して居る。是れ亦戰國男兒の快であらう。

魏の水軍は鬪艦艨艟數百隻、水も堰き止め空も蔽はんばかりに舳艫相銜み、旌旗相際き、威風堂々流に沿ふて赤壁の險に迫した。東坡の所謂西に夏口を望み、東に武昌を望み、山川相繆はり、鬱乎として蒼々たる險要の地である。吳の將周瑜は精兵三萬を率ゐ江を遡つて魏軍を迎へ、進んで赤壁に相遭ふた。兩軍距離を保つて相對峙し矢石未だ發せざるも戰氣は磅礴として大江に漲つて居る。正戰を以てしては衆寡到底相敵せざる吳軍は田單の火牛ならぬ火船の計を運らし、戰艦十隻を艤して之に油を注ぎたる枯草枯柴を滿載し、帷幔を以て之を覆ひ其の上に旌旗を立てゝ普通の戰艦の如く裝ふた。

斯くて先づ軍使を魏軍に遣して僞つて降を請ふ眞似し、偶東南の强風起るに乘じて全軍錨を拔き、僞裝戰艦十隻を先頭とし餘軍之に踵ぎ魏軍に向つて進んだ。魏の水軍は吳軍降ると信じ備を弛めて傍觀せる中、吳の戰艦は江の中流に達するや忽ち滿帆を張ると共に先頭の戰艦十隻に一齊に火を放つた。

火は强風にあほられて見る〳〵滿船に延り、炎々たる火焔を空に漲らしつゝ矢の如く魏軍に向つて突進した。舳艫を連繫して備を怠りたる魏の軍艦は不意の敵襲に繫索を斷つ遑さへもなく、忽ち猛火に包まれて驚き惑ふ軍卒は逃ぐるに場所なく、溺死する者、燒死する者數知れず、阿鼻叫喚水火の地獄を現出した。魏軍の混亂に乘じ吳の水軍は鼓噪して疾攻急擊、遂に八十萬と號したる魏の水軍を一擧に殲滅した。江水爲めに熱く水色紅を赤壁の岩と爭ひ、死屍燒木江を埋めて水流爲めに止まるばかりである。赤壁で周瑜田單を舟で行き。

萬骨江に沈んで英雄亦土と化し、獨り赤壁の流悠々として千古の月を宿す。感慨ある者東坡ばかりではあるまい。

×　×　×　×

一五八七年西葡聯合艦隊は司令長官グヅマン公統師の下に大小百三十隻の大艦隊を以て英國征服の途に上つた。其の噸數五七、八五八噸、備砲總數二、四四一門、戰兵一九、二九五人、帆手梯手三、〇〇〇人で、魏の水軍八十萬と號するに比すれば聊か尠きも、當時歐洲第一の海軍國たる西班牙葡萄牙の精銳强卒をすぐりたるものである。船には恰大城の如きガレオン艦あり、强堅鐵の如きガリーズ艦あり、人には前年土耳其の大艦隊をレパントに全滅したる歷戰の勇將猛卒あり、無敵艦隊の稱亦徒爾ならずである。

英國に於ては無敵艦隊の來襲を聞くや、朝野震駭恰かも蒙古來襲當時の我國と異ならず、直に全國に檄して壯丁を募り、船舟を徵し、大小二百隻より成る艦隊を編制し、海軍大將ホーワードを司令長官に、ドレーキ、ホーキン、セーモアなどの勇將を司令官に任じ、西班牙艦隊をプリマス軍港の沖に邀へ戰つた。西班牙艦隊は決戰を好まず且つ戰ひ且つ避けつゝ英國侵入の陸軍と合する爲め進んで佛國カレー港の沖合に投錨した。

英艦隊は西班牙艦隊を追躡しつゝカレー沖に到り敵と約一里を距てゝ碇泊し敵狀を監視した。日は何時しか暮れて夜色沈々風衰へて檣索の唸りも聞かず、星影淡きカレーの沖には大艦巨船の物凄き黑影が巖の如く靜かに浮んで居る。眠れる如き海には巡邏の哨艦が掻き亂す波の響のみが婆娑として聞ゆるばかりである。

海峽の潮は今しも變つて英艦隊の方より西班牙艦隊の方に向つて、錨鎖も斷たんばかりに强く迅く流れて居る。英艦隊の側に忽ち一團の火光が現はれた。船火事？　火は見る〳〵殖へて二つ三つ四つ遂に八つに迄達し猛烈なる勢を以て燃へ擴つた。英國艦隊より放ちたる火船である。眠むれる如き西班牙艦は驚駭狼狽、帆を揚くもの、檣を備ふるもの、錨を揚ぐるもの、非

常號笛の聲、叱咤怒號の聲、喧々囂々暗中に響いて居る。

火船は急潮に送られて刻々に近づき來る。强潮の爲め錨鎖は緊張して錨を拔く遑がない。西班牙艦隊の多くは錨鎖を切斷して錨を拋棄し、辛ふじて沖合に逃れ出た。幸に火船の爲めに燒かれたる軍艦は無かつたが、暗夜の混亂に擱岸したる船もあり、衝突したる船もある、英艦隊は翌朝西班牙艦隊の陣形未だ整はざるに乘じ、急襲大に之を打破つた。無敵艦隊の全滅的敗因は此夜の火船攻擊にあるのである。

○

支那の海戰に今一つ有名なるものは厓山の戰である。此の海戰は恰かも我が壇の浦の戰に彷彿たるもので、而かも尙ほ一層悲慘に尙ほ一層慘烈である。

秦の始皇の焚書に依りて一時衰微したる孔孟の敎は、宋時代に至り周、程、朱等諸家の碩儒鴻學の輩出に依りて大に復興し、大義名分を尙び、忠孝節義を重んじ、支那の忠君道武士道は此時最も其の高潮に達した。南宋の岳飛、張巡、文天祥の如き其の誠忠義烈實に東洋的武道と臣道との精華である。

南宋、元に侵されて勢日に蹙まり、浙江福建悉く守を失ひ、南遷又南遷、張世傑等帝昺を奉じて纔に廣東の一海角厓山(珠江々口)に據つた。金殿玉樓の夢破れて蓬烟深き海南の絕地に波の間に〳〵假住居、恰かも源氏に追ひ落されて寸土尺地の身を置くべき處なく、纔に氏の赤旗を壇の浦風に飜へしたる平家の末路と同じである。

元將張弘範水軍を率ゐ來つて厓山を攻めた。宋將張世傑等殘兵を勒して力戰克く禦ぎ屢々元軍を却けたるも、內に士卒疲れて外に援兵の到るなく、兵勢日に衰へて復た奈ともすることが出來ない。東京灣に走つて再擧を圖らんか、西安南に逃れて後圖を策せんか、將に明朝の滿潮を期して港を脫出せんと謀つた。之を諜知したる元軍は軍を分つて四隊と爲し、潮時に乘じ南北より宋軍を夾擊した。艦々相摩し、劍戟相打ち、血は海水を染めて喊聲天を撼かすばかりである。宋軍死力を竭して戰ひ一旦元軍を敗りたるも、元軍更に新銳を加へて來り攻め、孤軍無援の宋軍は衆寡敵せず、士卒疲憊して最早や戰ふの力がない。元將弘範親ら一軍を率ゐて急に宋軍の前面を衝いた。宋將世傑疲卒を鼓舞して勇戰奮鬪勝敗尙ほ未だ決せざる時、宋軍に阿波の民部義重あり、一船の檣旗俄かに引き卸されて元軍に降伏の意を表した。宋の軍船之に倣ひて檣旗を撤するもの相踵ぎ宋軍忽ち總崩れとなつた。

世傑之を見て大事の既に去るを知り、精銳を抽きて本軍に退いた。元軍之を追ふて直に宋の本軍に肉薄した。個々日暮れて

風雨大に起り天海晦瞑殆んど咫尺を辨じない。世傑間に乘じ舫索を切斷し戰艦十六艘を率ゐて怒濤を衝き暗夜を冒して港外に脫出した。宋の帝船之に續かんとしたるも船體大なる上諸舟其の周圍に繫舫せるが爲め進退操從自由ならず、遂に世傑の舟と相失した。二位局ならぬ御史陸秀夫、事の最早や救ふべからざるを知り、妻子の敵に辱しめられんことを恐れ、先づ之を驅つて海中に投ぜしめ、自ら幼帝を負ふて海に沈んだ。

南無と唱ふる聲諸共に波の底にぞ入り玉ふ。悲い哉、無常の春の風花の御姿をさそひ奉り、情なき哉、分段の荒き波龍顏を沈め奉る…雲上の龍忽ち降つて海底の魚となるの悲劇である。「今より後こそ女房達の珍らしき東男を御覽ずれ」との知盛の言葉ありしや否やは知らねど、後宮諸官の海に投ずるもの十餘萬人、死屍海面を掩ふて水色を見ずと言ふことである。關東大震災に於ける吉原の死の池を幾百倍したる悲狀慘景、之も一人の慾望を滿たさんが爲めの犧牲である。此歲我國に於ては北條時宗元使夏貴周福等を博多に斬つて元弘國難の種子が蒔かれた。

源平壇の浦の海戰は平家物語に依りて既に世人の知れる處である。

○

レパントの海戰は第十六世の中葉に至りて歐洲の東半を攻略し、亞弗利加の北岸を席捲し、兵威隆々全歐を震駭せしめたる土耳其海軍と、新たに亞米利加大陸を發見し、印度洋航路を拓きて海運盛昌世界の富をかめたる西地中海諸國の聯合艦隊との決戰である。新月旗の回教艦隊勝つか、十字旗の基督教海軍勝つか、此の勝敗は東西文化の盛衰、東西民族の興廢を支配する大事の海戰であつた。

一五七一年地中海に秋風立ち初むる十月七日、土耳其海軍の宿將アリー・パシヤの率ゐる戰艦二百八十四艘、戰士二萬五千人より成る土耳其艦隊と、當年二十二歲の青年貴公子ドン・ジユアンの率ゐる戰艦二百八十艘、戰士二萬八千より成る基督聯合艦隊とは、希臘コリンス灣頭レパントの中に於て相遭遇した。兩軍の陣形既に整ひ、合戰は日の正午より始まつた。土耳其に取りては西歐蹂躪の血祭戰、聯合軍に取りては三十年前プレブサ敗戰の弔合戰、何れも負けてはならぬ戰である。

激戰既に刻を移し兩軍入り亂れて接戰格鬪、叱咤怒號、砲煙漲り、白刃閃めき、破船海を埋め、碧血波を彩るも勝敗尚ほ未だ決しない。土耳其司令長官アリー・パシヤは味方の旗色稍や勝くと見るや、勝敗を一擧に決せんものと回教經典の句を金繡したる白色の大旗を旗艦の檣頭に飜へし、司令官パーデブ及びミ

チレネの旗艦を左右に備へ、同盟軍の司令長官ドン・ジュアンの旗艦に向つて驀進した。ドン・ジュアンは神聖同盟の錦旗を旗艦リール號の檣頭に揭げ、コロンナ及びベニエル兩將の旗艦を左右に控へ、堅艦三隻檣を收め舳を並べて敵の突撃を待つて居る。殺氣空に滿ちて風腥い。土耳其旗艦は銃砲を亂射し、海波を沸かしつゝ敵の旗艦を唯一擊に乘り沈めんものと、我が舳も碎け、敵の龍骨も折れよとばかり全速力を以てジュアンの旗艦目掛けて衝き込めば、轟然たる猛音と共に土艦の船首は深くリールの艦腹に突入した。兩船は衝突の反動に依り一旦離れたるも再び進んで互に舳艫を反對に舷側を接着した。斯かる間に土軍のバーデブパシャは聯合軍のベニエルの旗艦を、ミチレネパシヤはコロンナの旗艦を目掛けて各之と接觸し、兩軍六隻の軍艦こゝに一團となつて猛激なる大接戰が開始せられた。海は風なくして波洶湧し、空は雲なくして霹靂轟き、舷碎け、檣折れ、聯合軍喇叭を鳴らして突擊すれば土耳其軍喊を打つて猛進した。

銃戰少時の後聯合軍の將士は白刃を閃めかしつゝ舷側を飛んで先づ土耳其の旗艦に猛襲した。聯合軍二回突擊して二回擊退され、第三回には土耳其の戰士長刀を振つて聯合軍の旗艦に逆襲した。聯合軍司令長官ドン・ジュアンは全身鋼鐵の堅甲に鎧ひ、艦尾旗艦の下に立つて紅潮血を濺ぎつゝ叱咤すれば、當時の名ある四百の西班牙銃手は胸甲頸被に身を固め、舷墻を小盾に銃火を並べ、檣を棄てたる三百の檣手は長劍大刀を振り翳して銃手の後に控へて居る。土耳其の司令長官アリーパシャは幾戰場に殘り來つたる豪膽勇猛の老將軍である。飛び來る彈雨を物ともせず、艦尾の樓上に倚坐し泰然として戰を督して居る。正に一幅修羅の活畫である。

斯くて攻守幾たびか地を代へて壯烈淒慘なる白兵戰が交へられた。土軍奮戰してドン・ジュアンの麾下に逼まり將に旗艦リールを奪はんとしたる際、偶聯合軍新鋭の援兵を得て忽ち戰勢を回復し、勢に乘じて土耳其旗艦に對し猛襲猛擊を加へた。土軍援兵到らずアリーパシャ遂に敵鋒に斃れ、土艦復た一兵の存するなく、伏屍累々甲板に重なり、鮮血淋々艦底に漂ひ、コーランの金旗は土耳其旗艦の檣頭より引き卸された。

司令長官を失ひたる土耳其艦隊は遂に總敗軍に陷り、戰場を脫したるものは僅に六十隻に過ぎなかつた。之より土耳其の國威漸く衰へ地中海の海權は長く基督教國の握る處となつた。アチラ、鐵木眞、成吉汗、オツトマン、此の敗戰こそ東方西侵の最後の止めであつた。

× × × × ×

豐臣秀吉の征韓第二役我が軍頗る振はず、秀吉慨憤の裡に世を去るや、遺命に依りて在韓軍を撤退することゝなつた。時に小西行長最右翼の順天に在り、島津義弘泗川に在り、明將と和し將に日を期して退韓することゝなつた。明の海將陳璘之を聞き、裨將鄧子龍及び韓の海將李舜臣等と共に我が軍の退路を扼せんが爲め、明韓連合の水軍を率ゐ順天の海に進み來つた。行長脱することが出來ず、救を島津義弘に求めた。義弘、既に泗川を退いて巨濟島に在り、行長の請援に接するや宗義智、立花宗茂等と兵船五百餘艘を率ゐ直に順天に向つて進撃した。敵軍之を知り我を海上に激撃せんと欲し、艦隊を率ゐて夜半順天を發し慶長三年十一月十九日朝まだき、露梁津に於て我が水軍と遭遇した。

時に天未だ明けず、殘月朧に檣頭に懸り、濛氣深く海面に垂れて物影を判せない。敵は櫓聲を忍んで潜行し來り俄に我が先頭を急襲した。水戰に馴れざる我軍は不意を襲はれて驚き狼て、陣を整ふる遑もなく一時混陣に陥つた。明の裨將鄧子龍年已に七十を越ゆるも豪勇壯者を凌ぎ、自ら輕舸を馳せて頻りに我船を襲ひ、鐵鍇を掛けては引き寄せ、引き寄せては擲彈を投じて之を燒いた。爲めに我兵船の燒かるゝもの多く、士卒亦多く死傷し、戰況漸く不利ならんとした。義弘之を見て大に憤り、矢石を冒して親ら艦頭に立ち士卒を勵まして衆を指揮した。我軍亦奮戰遂に子龍を斃し其從士二百餘人を鏖殺した。

韓將舜臣之を聞いて大いに怒り麾下を提げて疾驅し來り直に義弘の船に逼つた。義弘邀へて之と戰ひ、我は接戰を以て敵船を奪はんと迫まれば、敵は火攻を以て我船を燒かんと避け、矢丸雨降る中に追ひつ、追はれつ、戰は次第に激烈となつた。砲聲濛々、喊聲轟々、船を燒く火は曉の空を焦して居る。

やがて天全く明けて濛氣散ずれば、彼我の兵船は入り交り、入り亂れ、五色の旗旗は朝風になびき、劍光旭に輝き、銃砲山に谺し此處に我兵船の燒かるゝあれば彼方に敵船の碎かるゝあり、戰は今將に酣である。偶々我一隊進んで敵の中堅を衝き、明將陳璘の船に逼つて將に之を獲んとした。韓將李舜臣は水戰に掛けては古今獨歩の名將である。獨創の戰艦に駕して奮戰する中、陳璘の危ふきを見るや、直に舳艫を回へして救援に赴き、群がる我兵船を突破して漸く璘を救出すると共に其身亦飛丸に中りて戰死した。

斯くして激戰數刻、我は敵の二將を斃し得たるも我兵船の喪失二百艘に達し、行長亦間に乘じて順天を脱出したるを以て戰は止めて釜山に退却した。

倘ほ日本海々戰とトラファルガー海戰及び明日の海戰を書く

つもりであつたが、締切期日の切迫と原稿紙缺乏とのため尻切れトンボながら此處に筆を擱く。

氣象に及ぼす太陽活動の影響

國富信一

太陽の勢力と云ふものは地球上の氣象に非常に大きな影響を與へる事は勿論云ふ迄もなく寧ろ太陽あつての氣象であるから、若しも太陽の活動力に何等かの變化が起つたなら其の變化は當然氣象上に影響を及ぼすべき筈である。換言すれば氣象上の諸現象の殆んど大部分は其れを起す可きエネルギーの根元が太陽に存在する以上エネルギー源（ソース）たる太陽の勢力の增加或は減少は直接又は間接に地球上に何等かの形となつて現はれて來なければならない。

其處で先づ問題となるのは果して太陽の活動勢力に變化が起るものであらうかと云ふ事である。我々が常に見る太陽は儼々として天空に輝ける大なる球體であつて其れは一定不變の大勢力を持續せる如き狀態を示して居る。昨日眺めた太陽と今日の其れと否數年后に於ても其處には其の本質上に寸毫の變化もありとは思はれない。

然し若し我々が一寸の小さな望遠鏡を所有して其れにより絕えず太陽面に注意を傾けて居るならば、我々は太陽面の靜中にも動的なる或る變化を常に認める事が出來るであらう。之れが即ち太陽自身の活動力の消長であつて、其れが形となつて現はれるものが所謂黑點と稱する太陽活動の表徵である。私は天文學者では無いから此の太陽黑點及び太陽其のものの本性に就ては深い知識も無い。然し斯くの如き太陽黑點の出現に依つて表はされた太陽活動が如何なる影響を氣象上に及ぼすかを知る爲めには是非共之等兩者の性質を知らねば成らない。故に次に私の知る範圍で太陽及び其の表面に現はれる黑點の性質の概略を記して見やうと思ふ。

太陽の構造と其の性質　太陽は一言にして云へば恒星の一

つである。即ち宇宙間に散爛する星の一つであるが其の地球からの距離が宇宙の大に比して極めて近い爲めにかなりの大さを示して居るに過ぎないのである。而して其の地球からの平均距離は約一億五千萬哩(三千七百四十萬里)程で地球に較べると其體積は地球の約百三十萬倍、質量は三十三萬倍であるから太陽の平均比重は却て地球の其れより小さく地球の平均比重の約四分の一しか無い。然し兎に角極めて、大なものであるから赤道に於ける重力なども地球の約二十八倍位になつて居る程の大なる殆ど完全な球體である。

扨斯樣な太陽を眺める時先づ第一に我々の眼につくのは其の白色に輝ける表面である。此の表面の輝いて居る部分は光球と名付ける所で之れより内部になると望遠鏡などの力に依つては我々が窺ひ知る事の出來ない所である。

所で太陽の光球から出る光を分光器即ち硝子の三角稜でなど色帶に分散させ其中に現れるスペクトルを檢査して見る時は其れは明かに連續スペクトルを示す事から考へると光球を構成して居る物體は極めて高溫にある固體、又は液體である事が判る。

更に光球を蔽ふて其の上層には厚さ五百哩乃至千哩以上の瓦斯體の厚い層が存在して居る。元來太陽の實體の溫度は攝氏の六千度位になつて居るものであるが斯かる溫度では大抵の物體は融解して液體となつて仕舞ふ。そして其の液體からでる蒸氣が前述した樣に太陽面を蔽ふて厚い瓦斯體の層をなすものである。從つて此の瓦斯體の層は太陽の實體の溫度よりは遙かに低溫度である可きである

物理光學に於けるキルヒホッ氏の法則に從ふと固體或は液體の出す光を分光器で分けて其處に現はれた色帶を精細に吟味して見ると其れは前にも述べた樣にスペクトルを示すのであるが此の時若し發光體と分光器との間に發光體と同じ物質の低溫度にある瓦斯體を置く時には此の瓦斯體は發光體が出す光を吸收して、其物質が出す輝線スペクトルの部分が黑線に變ずるものである。之は光波の共振作用に基くものであつて此種の黑線を吸收スペクトルと稱し此の現象をスペクトルの逆變と稱する。

扨太陽面から直接來る光を分光器で分つて其處に現れたスペクトルを精細に檢すると前述した樣な黑線が殆と無數と云つても善い程澤山に並列する。之れは即ち光球中に存在する多くの物質の出す輝線スペクトルを其等の物質の光球上に浮べる瓦斯體が吸收した爲めに生ずる現象である。故に此の現象から、光球上にある瓦斯體層を黑變層と命名して居る。又此の現象から逆に太陽の光球又は黑變層中に存在する物質が何であるかを推定する事が出來る。然し黑變層を構成する瓦斯體の溫度が光球

の其れに比して低いと云つたが、之れは勿論相對的に考へた場合の事であつて黑變層自身の温度は決して低いものでは無い。其れ故若し黑變層だけから來る光を分光器で吟味して見ると其れは高温度にある瓦斯體に限つて現出す可き輝線スペクトルを示すものである。

而して此の事實を證據立てる興味ある實驗が千八百七十年の日蝕の際にヤング氏に依つて爲されて居る。當時ヤング氏は分光器を用ひて太陽スペクトルの研究を行つて居たのであるが、日蝕前には分光器に依つて分散された色帶中には殆と無數の黑線が現はれて居たのである。然るに丁度太陽の光球面が全く月に蔽はれて遂に皆既日蝕を示した際に黑變層から來る光のスペクトルは突然黑線が輝線に變じて仕舞つたのである。此の事實は明かに黑變層を構成する瓦斯體の温度が其れ自身では決して低温度でなく發光體として輝線スペクトルを出すに充分な高温度にある事を示すものに外ならない。

更に黑變層の上には五千哩乃至一萬哩程の厚みに瓦つて居る、輕い瓦斯體の包被があるもので此の部を彩球或は色球と稱する。日蝕の際などに美麗な深紅色を呈して遠く太陽から射出されて居る如き形をなすコロナは此の層中で起るのである。而して此如き美麗な色彩は此の高層を構成して居る水素の出す色と考へられて居る。

即ち太陽は光球部、黑變層、彩球部の三層に分つ事が出來るが之等は勿論靜止せるものではなく其の間には地球の大氣中に起る如き對流なども勿論起つて居るであらう。而して太陽の温度が地球のに較べて極めて高い事から考へると之等對流等の如き擾亂は地球上のと比較にならぬ程活潑なものであらう。

其處で太陽面の擾亂狀態又は太陽中に於ける色々な物質の分布狀態を調べる爲めに或る元素の出す色を用ひて太陽面の寫眞を撮る事がヘール氏に依つて發明されたのである。之れが即ち太陽分光寫眞器と稱するものである。其の概要を示せば、先づ望遠鏡内に生じた太陽の像から來る光を細隙を通して三角稜で分光せしめた上、其處に生じたスペクトル中の任意の元素例へば水素に相當する線を選んで丁度其の線の光のみを得る樣に第二の細隙を作る。そして其の線の光を寫眞の乾板に導く。此の時第一の細隙を望遠鏡内の太陽の像に沿ふて動かす時は乾板上には明かに太陽面上に於ける水素元素の分布狀態が撮される譯である。

又同樣な事をカルシウムの出す線を用ひて行へば太陽面上に於けるカルシウムの分布狀態が知られる事となる。斯樣な方法に依つて太陽面上の擾亂狀態又は色々な物質の分布狀態を知る

事が出來るが其の結果に依ると種々な珍奇なる現象が發見されたのであるが共等の現象を說明する前に是非共太陽活動の週期的消長と共れに伴ふて太陽面上に現はれる黑點に就て述べなければならない。

太陽活動と黑點　太陽面を望遠鏡の對眼レンズの前に燻し硝子を附して見るか又は單に燻し硝子だけを通して肉眼で眺めても時に依るゝと其の面中に小さな黑い星を見出す事が出來る。其の昔は此の黑斑は他の天體が太陽面を遮るために生じたもの例へば水星の太陽面通過の際の如きものであらうと考へたものであるが、其の後正確な觀測の結果に依ると全く太陽中に生じた黑斑である事が證據立てられたのである。

黑點發見の歴史は極めて遠く東洋に於ても支那の舊史には既に之れに關する記事が載せてある。試みに和漢三才圖會を繙いて見れば「日」の所に、丸い太陽の畫を描き其の中に三本足の烏の畫が描かれ其の註として「按有金烏陽烏名而謂有日中烏則似實有之者蓋太陽火中時有黑氣如烏者而已何能得見眼精羽翼三足等之全備」とある。即ち支那では太古に黑點を金烏又は陽烏と名付け丁度月中の黑斑を玉兎に擬へた樣に烏に見立てしものを識者が烏ではなく黑氣であると喝破したのである。

元來支那にはかなり古くから天文學上の研究が盛んになつて居たのであるが黑點に於ても其の發見は極めて古く漢の河間既に「太陽火中有黑子」等の記事が載せてあると云ふ程である。又黑點は當時不吉の兆として黑點現はるれば臣君を弑するの兆であるとか國亂るゝの兆であるとか云ひ傳へたと聞いて居る。勿論當時は望遠鏡も無かつたのであるから肉眼で見得る大黑點を見ての事であらう。黑點の大なるものは燻し硝子を用ひて見得るが、朝霧を通して太陽が赤く見える時や先々月東京附近で觀測された樣な細塵が大氣中に瀰滿して居る時に其れを通して見る太陽中に發見される事もある。

扨黑點が科學的の組織立つた研究の下に置かれる樣になつたのは何時の頃からであるかと云ふと西暦千六百年の頃彼の有名なガリレオ氏が望遠鏡を發明してから此の方である。然し實際規則だつた正確な觀測記錄を殘す程に充分な研究に從事したのは千八百二十六年からである。斯樣に黑點發見の歴史は隨分古くとも之れが科學的に研究され始めたのは極めて最近な事に屬するから黑點に關する研究は今日でも尙過渡時代に屬して之れが充分なる解釋は得られて居ないのである。只今迄凡そ百年間の研究結果に依つて我々は黑點から如何なる事を學んだであらうか、玆に其の大要を記述して見やう。

太陽の自轉　今我々が太陽面中に一個の黑點を發見したとす

る。此の黒點が時々刻々に如何なる變化を爲すかを觀察して見やう。勿論其の黒點は形や大さも變つてゆくであらうが大なる黒點になると地球全表面積の三四十倍もあるのがあつて、之等大黒點はそう見る間に變ると云ふ樣な急激な變化はせぬから、今暫らく形や大さの變りは考へずに、黒點の運動だけを調べて見る事とする。扨黒點の運動を日々注意して見るに、其れは必ず太陽の東端から現れて徐々に西方に移動し、十三日程で遂に西端へ沒する。斯樣な事は何の黒點にも何の黒點にも、必ず起る規則正しい變化であるから、之れを黒點の運動とは認められない、即ち太陽自身が略二十六日程の週期で自轉をすると云ふ事になる。夫れ故黒點自身の固有運動は極めて小さいものとして、黒點の運動から太陽の自轉週期を見出す事が出來る。其の結果茲に面白い事が發見されたのである。其れは太陽の自轉が其の赤道地方と極地方とで異ると云ふ事である。例へば其の觀測結果の一つを記るせば次の如くである。

太陽面の緯度	零度	十五度	三十度	四十五度	六十度	七十度
其の緯度に於ける太陽自轉の週期(日數)	二五・四	二六・四	二七・六	三〇・〇	三三・九	三八・五

斯樣に太陽自轉の週期は太陽面の赤道から極の方へゆくに從つて次第に長くなる。即ち赤道が自轉の速度の最も大なる所である。此の事實は太陽が地球とは違つて流體若しくは半流體である事を示すものに外ならない。然し後に述べる樣に黒點の太陽面に現はれる位置は略々一定して、赤道に近い一帶の地方だけに限られて居る故、極地方の自轉週期は黒點の運動では測定する事が出來ない。又黒點には小なりと雖も固有の運動があるから、其の爲めに黒點の運動から算出した自轉の週期は不正確となる事を免れない故、之れが測定にはドツプレルの原理を利用した正確な方法もあるが、之れは目下の問題の圏外に屬する故茲には觸れぬ事とする。

即ち黒點は太陽の自轉に伴ふて太陽面を平均二十七日程の週期を以て一周するのである。故に小さな短壽命の黒點は一自轉週期の間に既に消失して仕舞ふものもあるが、大きな壽命の長い黒點になると數週期以上も存在して、其の間に形狀や大さの種々な變化を示すものがある。

又太陽の自轉の軸は地球の黄道面に對して約二十三度半の傾きをして居る故、四季に依り地球から見た太陽の自轉軸の傾きが變つて來る事も黒點の運動を觀測する人にとつては考へねばならぬ事である。

太陽黒點の週期　次に永い間の黒點の出現數を考察して見る

とする。今年々に現はれた黒點數を調べて見ると、其れには極めて規則正しい變化がある事が判る。其の一例としてウルフ氏が獨特の單位を用ひて表した年々の黒點數所謂ウルフの黒點數と稱するものを次に表示して見る。

年次	黒點數
1900	9,5
1901	2,7
1902	5,0
1903	24,4
1904	41,9
1905	62,8
1906	52,9
1907	64,5
1908	47,3
1909	45,3
1910	20,0
1911	5,4
1912	3,6
1913	1,4
1914	9,6
1915	46,0
1916	55,4
1917	98,8
1918	77,6
1919	63,1
1920	38,7
1921	24,7
1922	14.7
1923	5,5

之で見ると先づ千九百一年は黒點數が最少の年で、其れから漸々其數を増し六年を經た千九百七年に最も多い數に達し、以後減少し始めて千九百十三年に最少數となつて居る。此の年からは再び前と同じ行程を繰り返して千九百十七年に最も多く、以後減少して昨年が最少數を示して居る。即ち約十一年目毎に最少數が現はれて其間に最多な年が挾つて居るのである。此事實は頗る重要な事で、之が果して黒點が觀測されてから今迄一定不變に維持されて居る事實であらうかと云ふに、勿論確然と十一年目毎に最多又は最少の年が現れるとは限らず、時によると八九年目位の短かい時もあるし、又十五年位の長い間もある。此の關係を明かにするためには十七世紀あたりから引續き觀測された太陽黒點最多の年と最少の年とを表で表して見やう。

黒點數最多の年	次の最多の年との差	黒點數最少の年	次の最少の年との差
1610.8	…	1615.5	…
1619.0	8.2	1626.0	16.5
1634.0	15.0	1639.5	13.5
1645.0	11.0	1649.0	9.5
1655.0	10.0	1660.0	11.0
1666.0	11.0	1675.0	15.0
1679.5	13.5	1685.0	10.0
1689.5	10.0	1633.0	8.0
1698.0	8.5	1705.5	12.5
1712.0	14.0	1718.2	12.7
1723.5	11.5	1 27.5	9.3
1734.0	10.5	1738 7	11.2
1745.0	11.0	1750.3	11.6
1755.2	11.2	1761.5	11.2
1766.5	11.3	1763.7	8.2
1775.5	9.0	1778.4	8.7
1784.7	9.2	1788.1	9.7
1798.3	13.6	1805.2	17.1
1810.6	12.3	1816.4	11.2
1823.3	12.7	1829.9	13.5
1833.9	10.6	1837.2	7.3
1843.5	9.6	1848.1	10.9
1856.0	12.5	1860.1	12.0
1867.2	11.2	1870.6	10.5
1878.9	11.7	1883.8	13.3
1889.6	10.7	1894.1	10.2
1901.6	12.0	1906.4	12.3
1912.5	10.9	1417.1	10.7
平均	11.34	平均	11.66
全平均	11 50		

斯くの如く黑點の出現する數には一定の週期があつて、多くなつたり少くなつたりするものである。そして其の週期も確然と一定したものではないが略々十一年强の週期である。故に今より前の黑點數最少又は最多の年が判れば、其れから次に來る可き最多若しくは最少の年を推定する事が出來る。例へば昨年が黑點最少の年であつたから次に來る可き最少の年は大正二十四年前後であらうと云ふ事が略々判定される譯である。

黑點の此の週期は前に述べた樣に極めて著しいものであるが、之れが原因は何であるかと云ふ事は難かしい問題であつて、恐らく太陽自身に此の週期的の活動が起る爲めであらうと云ふ事に諸學者の說が一致して居る樣である。

又黑點最少の年と最多の年とは、黑點の實際出現した數の上にどれ程の差があるかと云ふに、例へば最近の黑點最少の年であつた千九百十三年に就て見るに、全日數三百六十五日の約九十パーセント即三百三十日程も一つの黑點さへも見ぬ日があつた程であるに反して、黑點最多の年には殆んど連日黑點が認められ、然も多い年には一日に七十個以上の黑點が太陽面に現はれて居る事から考へて、如何に黑點の十一年週期なるものが顯著であるかを窺ひ知る事が出來やう。

更に著しい事實は黑點の現はれる太陽面の位置の變化である。

先づ黑點が現はれる位置は太陽面の赤道を中心として南北共に緯度にして約四十度迄の範圍に止まつて、其れ以上の高緯度には決して現はれぬ事である。然も其の顯はれる位置が十一年週期に從つて變化すると云ふ著しい性質を現はして居る。



第一圖は此の狀況を物語るもので圖に於て橫に取つたのは千八百五十四年から千九百十二年に至る年次で、縱に取つたのは左側が一年間に現はれた黑點の全面積、右側が其の年に現れた黑點の平均緯度を角度で示してある。而して實線は英國グリンウヰツチ天文臺で觀測した結果から出した黑點の面積の年々の變化を示し、點線で示したのが其の年々に現はれた黑點の太陽面上の平均位置の變化を表はして居る。

此の圖で見ると黑點が最少になつた年には、黑點の現はれる位置に急激な變化が起つて居る事が認められる。例へ

ば千八百九十年以後黒點數は次第に増して千八百九十三年頃に最多に達し其れより次第に減少して居るが、其れの現はれた平均緯度は千八百九十年より次第に減少して、千九百年頃には赤道に極めて近い部分だけにしか現はれぬ事となつて居るが、更に黒點數最少の年である千九百三年を越えると急に其の出現する位置が高緯度に移り、茲に判然とした不連續を示して居る。如斯き顯著なる不連續性は宇宙間の凡ての現象を通じて稀に見る珍奇な現象であると共に科學上に最も大なる謎として未だに解決せられざる大問題である。

黒點の性狀　望遠鏡を以て太陽黒點を精細に調査すると、我々は之れを三部分に分つ事が出來る。然かも今迄多くの學者の研究した結果に依ると之等の三部分は夫々獨立したもので、一方が變じて一方に變ると云ふ事は無いと云ふ事である。先づ黒點の中心に近い部分は眞黒に見える部分で之れを暗黒部（アンブラ）と稱し、之れを圍んで半黒部（ペナンブラ）があり、更に半黒部を圍み際立つて輝ける白明部（フッキュリー）がある。然し何の黒點にも必ず之等の三部分が存在して居るとは限つたものでなく、一つの半黒部内に數多くの暗黒部を含む場合もあるし、又白明部たるフッキュリーのみが存在する事も多い。

又此の大さも前に一寸述べた様に驚く可きもので地球の直徑は約八千哩程であるが黒點中には暗黒部だけで其の直徑が五萬哩にも及ぶ者がある。大正十年五月十三日頃に現はれて地球磁氣の上に大變動を與へたものなどは、暗黒部だけの面積が既に地球全表面積の約三十六倍にも相當し、其の白明部迄を包含せしめたならば實に莫大な大さになるのであるが、其れも太陽の大に比すると其の面上の一粟粒としか見えぬのを以てしても、如何に太陽が大なるかを窺ひ知る事が出來やう。

黒點の極性　前に述べた太陽分光寫眞器を以て黒點附近の水素の分布狀態を寫眞に撮つて見る事に依りヘール氏は實に偉大なる發見をなしたのである。其れは水素が黒點の周りに渦動をなして旋回する事である。之れは黒點の研究上に重大なる結果でなくてはならない。

元來發光體を磁場内に入れて其の光の「スペクトル」を驗する時には通常磁場外で行ふ場合と非常に異つた狀態を示すものである。即ち通常一線であるべきスペクトル線が磁場に入れられた發光體からは、夫々磁場に直角な方面或ひは平行の方向から見るに從つて三本又は二本以上に分裂して見える、此の現象は千八百九十六年ゼーマン氏が始めて發見せる事實で、ゼーマン效果なる名の下に物理學を學ぶ人の既知の事實である。此の現象は然しながら、逆に用ひて發光體からのスペクトル線を驗

する事に依り、其れが磁場にあるや否やを判定することが出來る。

嘗て太陽黒點から來る光を分光器に依つて光を分散せしめて其スペクトルを驗した時に、我々の驚異はそれの多くのものが二本三本或は其れ以上に分たれるか或は線の幅が擴大されて居るか或は他の偏光などの現象から推して明かに「ゼーマン効果」を表はして居る事實を認めた事であつた。此事實は實に黒點の本質を知る上に絶大な福音を齎したものと云はねばならない。

何故ならば此の事實から推して我々は明らかに黒點の中心附近に於て、其の面に垂直な強い磁場が存在する事を是認せねばならなかつたからである。そうして之れは又ヘール氏の分光寫眞から黒點附近の水素の分布を示す寫眞と對比して次の如き判定を下さねばならない。

即ち黒點は高溫度にある水素瓦斯の渦動である。そうして斯かる、高溫にある物體は一般に電離せる故に其の帶電して居る水素分子が黒點の周りに渦を卷いて居る以上、一般圓電流の理に依つて渦動の面に垂直な磁場を生じなければならない。而して此の磁場は又明かにゼーマン効果を、其磁場内にある發光體より出す光のスペクトルに生ぜしめなければならない事を論定する事が出來・從つて前述せる事實と全く一致した結果に到達するのである。

即ち黒點は、太陽面上に起る一種の渦動であつて其の後の研究に依れば、其の廻轉の方法にも亦二種ある事は丁度地球上の高氣壓及び低氣壓の渦動に類似して居る事も發見されて居る。即ち黒點部では太陽面の上層の瓦斯が黒點の中心に向ひ吸ひ込まれて居るやうに運動し、下層では之れと反對に中心より吐出される様に動く、然し丁度中層に當る部分では、垂直氣流のみを生ずるといふ様な、丁度地球上高氣壓旋風の如き運動をする瓦斯が存在する一方に、下層では中心に向つて吹き込む様な・丁度地球上の低氣壓旋風の様な氣流の配置をする瓦斯體の運動が、丁度前者と對をなして一系をなすものが多い。斯様に黒點は渦動である以上自分自身の固有運動も亦現はれて來なければならないが、其の方面は存在を肯定されて居るのみで深い研究も記録されして居らない。

又更に此の對をなした黒點に、ヘール氏は二つの名稱を與へて居る。即ち二つの黒點中のいつもの先立ちになつて現はれて來るものを先驅黒點（リーダー）と名付け、之れに續くものは追從黒點（トレイラー）と名付ける。然るに前述した様に此の二個の黒點は互に反對な磁性を示して、先驅黒點は千九百一年から千九百十三年迄の黒點週期中では北半球で、何の磁性を示

し、追從黑點の方が正の磁性を有して居たのである。然し南半球では此の磁性が逆となり先驅黑點が正の磁性を有して居た。けれ共之等の性質は黑點週期が新しくなると全然逆となる性質を持つて居る。但し先驅黑點よりも追從黑點の方が常に高緯度にある事は南北兩半球とも共通な性質である。

斯樣に黑點が對となつて現はれ、其の磁性が二つ互に逆となつて居る事に就て、ヘール氏は千九百十五年に面白い實驗を行つて居る。氏は玆に眞鍮の針金を密に卷いて長い螺旋を作つたものの所々に小圓板を互に平行に附着せしめ之れを水中で廻して見た所が、螺旋は下方から次第に持上つて來て遂には下方が水面までも達して螺旋はU字形をなしたのであつた。之れを水上から見れば、水面に現はれた螺旋の兩端は其廻轉の方向が逆であると共に、若し之れに電流を通過せしめたならば其の磁性も亦逆にならなければならない。故に對となつて現はれる黑點も、此の實驗の樣にして出來たもので、此の二つの黑點はやはり螺旋で行つた實驗の場合の如く內部では互に連絡して居るものであらうと說明して居る。

然し少しく立入つた上、如何なる理由、如何なる操作に依つて斯かる渦動が生ずるであらうかと云ふ事に就ては、諸說紛々として今日尙諸學者の研究問題として殘されて居ると答へるより外はない。さうして今日迄發表せられて居る黑點の成因には隕石に依ると云ふ說、太陽中の噴火的操作に依るといふなどがあるが、之等はすべて疑問として殘されて居るものである故玆に其の二三を記述する事は只徒に誤解を招く恐あるのみである。

斯くの如く黑點には今猶未知の問題が多く殘されて居るが、玆に大問題であるべきものは如斯き黑點が如何なる影響を如何なる操作の下に與へるであらうかと云ふ事で、勿論、地球大氣中に起る色々の現象と太陽黑點との關係は、適確な解決を與へられて居る譯では無いけれ共、黑點と地球磁氣の變化、黑點と極光、黑點と氣象との因果關係は日々に新しく學者の不斷の研究が加へられて居て、此の方面からして又黑點そのものの本質を調べる手がかりが得られる事となる。即ち地球上の氣象と太陽黑點との關係を考察する上に、後者の示す十一年週期などが氣象にも現はれて居る事などが、此の種の研究の手掛りとなるのである。

太陽活動と氣象との關係

以上で先づ一と通り黑點の性質を略述したので、次に其の氣象上に及ぼす影響に就て記載して見やうと思ふ。然し太陽活動の變化と氣象との關係が研究され始めたのは極めて最近の事で

あつて其後諸學者の不斷の努力に遂に地球磁氣、極光等の諸現象が太陽活動と密接な關係を有する事を證明したのであるが、之れが氣象との關係に就ては今日尙研究の途次にあるもので判然した結果を得られて居ない。又其れに關する論文の數も實に莫大なもので、或る者は他の者に對して全く反對な結果を示して居る。故に之等甲論乙駁の紛々たるものを一々錄する事は徒らに煩雜を招くのみである故に、玆では其の中現今權威ありとして一般に認容されて居るものに就て述べて見やうと思ふ。

一 太陽活動の氣溫に及ぼす影響 太陽活動と地球上の氣溫との關係は既に千八百七十年頃からケッペン氏が研究し始めた事で、氏は溫帶地方に於ける氣溫の年平均値の變化と太陽黑點數の增減とを比較調査したのであるが、其の結果は黑點數の少ない年には一般に氣溫が高いと云ふ事實を見出した。併し此の結果は一概に斷定する事を得ないもので、所に依り其の關係を異にする事は勿論である。

ウォルカー氏は全世界の各地に於ける氣溫と太陽黑點との間の關係を調べた結果として、太陽活動の氣溫に對する影響が土地に依つて異る事を示した。即ち其の土地には全く特有な地勢的影響からして、大陸的氣候を有する所もあらうし、海洋的氣候を有する所もある故、之等地方々々によりて太陽活動が全く同じ影響を與へると考へる事は無理な事であつて、夫々異つた影響を蒙ると考へるのが最も至當な事である。

故に地方地方に依り長い間の觀測結果から太陽活動と氣溫との關係を求めて其れ等の結果を總括した上論斷を下さねば、眞に判然なる兩者の間の關係を見出す事は出來ないのであるが、此の研究はあまりに大規模に過ぐるため未だ完成せられて居らぬ樣である。

又太陽の活動は太陽が出す輻射量と直接關係する事は當然考へられる可き事であるが、アボット及フォール氏は此の兩者の關係を研究した結果、太陽輻射は一般に黑點數の多少に從つて增減するものであると說いて居る。而してクレイトン氏は全世界の各地點に於て太陽輻射と氣溫との關係を調べた結果、一般に熱帶地方では氣溫は太陽輻射に伴ふて變化するが、溫帶地方では此の逆で、更に極地方へゆくと再び太陽輻射に伴ふて增減する事となる。故に之れから推すと黑點の增減も溫帶地方と熱帶及寒帶地方では逆になる事が考へられる。

兎に角氣溫と太陽活動とは何等かの關係はあるが、其の關係は一定した法則に從ふものではなく、其の時の氣象狀態に依つて何れへも變り得る程度のものであらう。從つて今年の前半の氣溫が低かつた事は勿論太陽黑點の數が今年から增し出した

に幾分影響されて居る事であらうが、其の影響が他の、やはり氣候に影響する原動力の勢力に比して幾何の勢力を有するかを知らねば、確然たる事を論定する事は出來ないのである。然し此の事は容易ならぬ大問題で、之れが解決は尙遠き將來に俟たねばなるまいと思ふ。

二　太陽活動氣壓に及ぼす影響　黑點と氣壓との關係は初め一年中に現はれた低氣壓の數と黑點數との比較から始められたのである。先づモーリシウス天文臺のメルドラム氏が熱帶性低氣壓と黑點との關係を調べた所によると、黑點最多の年には最少の年よりも熱帶性低氣壓の出現數が多い事になつて居る。此の事はポエイ、マクスウエル、ホール其他の人々の研究で證據立てられて、先づ低氣壓は黑點數の多少に從つて增減するものであると云ふ事に一致して居る。然し氣壓の變化と黑點が何う關係するかと云ふ事は大問題で、未だ充分な結果が見出されて居ない樣である。

所が氣象上で重要なのは氣壓の變化であつて、日々の天氣豫報も全く氣壓の變化が何うなるかと云ふ問題が主なるものとなつて居る。故に此の兩者の間の因果關係を見出す事は重要な事でなくてはならない。勿論太陽活動と氣象との關係で今迄調査されて居るものは年々の變化と云ふ樣な大きな問題が多く、日日の變化などは太陽活動以外の他の原動力の方の影響が大であるため、其れに蔽はれて判然と兩者の關係を見出す事は出來難いのであるから、未だ日々の天氣豫報に用ふるには多少の年月を要する事であらうと考へられる。

然し年々の變化に就て見ると各地方毎に稍規則正しい變化が見出される事から、太陽活動の消長は兎に角長期の豫報をなす上に於て考察せらるべきものではなくてならない。即ち黑點數が增しつゝある年とか減じつゝある年とかは、氣象上にも多少の變化が來るのが當然であつて、其の影響が如何なる操作に依り如何なる程度まで起り得るかと云ふ事は、今後の問題として殘されねばならぬ事である。

太陽活動即ち黑點の消長は尙氣溫、氣壓以外にも、米作、極地に於ける氷の面積、梅雨、雷、降水量、地震回數等にも影響を及ぼすと論ぜられて居るが、何れも確然としたものでない。

例へば米作にして見ても其れに及ぼす影響は極めて多いのであつて、之等多くの原動力の合成したものが米作をして良好ならしむるか又は不良ならしむるかに依つて定まるものであつて、太陽活動は實に之等多くの原動力中の一部分であるに過ぎないのである。故に太陽黑點が米作に影響すると云つても、其れは第二次的の影響としか考へられないのである。

つまり結論としては太陽活動の勢力又は太陽黒點の勢力は實に大なるもので其の地球磁力に及ぼす作用、極光を生ぜしむる力などは一大驚異である。然し其れが氣象に及ぼす影響は極めて復雜なもので氣候が變調を來すに及んでから之れは太陽黒點の影響ではあるまいかと推定する程度にしか未だ研究の歩が進んで居らぬので現時諸學者が不斷の勢力を之れが解決に傾倒して居る故近き將來には之れが解決を見て、更に太陽活動の勢力の偉大さに眼を敲たしむる時が來る事であらうと思はれる。

地球史斷片

理學博士 早坂一郎

一

カント、ラプラスの星雲説と云うものを、或少くもさう云う言葉を子供の時から幾度聞かされた事であらう。小學校や中學校の頃は星雲説と云うものゝ説くところは地球の出來方を直ちに説明するものであるかの様に教へられた―否覺えたのであつたが、その後次第に教へ方や覺え方が變はつて來たのか、それとも星雲説そのものゝ影がうすくなつて來たのか、兎も角今では一つのクラシツクとして取り扱はれかけて來た様に見える。地質學の教科書などに星雲説が掲げられる時には、これは單に其の後の新説、例へば微遊星説(プラネテシマル)などを景氣よく押し立てんがための踏み臺としてである場合が近年著しく見えて來た。

星雲説は其後の多くの學者に依つて、其後の新しい發見や研究を土臺として、様々な點で非難される様になつたのである事は云うまでもなからう。

微遊星説と云ふのはそれ等の様々の非難のない様に、近年になつてアメリカの地質學者チエンバリンと天文學者ムールトンとが提唱した學説で、渦狀星雲を天體發生の根本に置く故に、又渦狀星雲説とも呼ばれて居る。之れがどんな學説であるかは此處に述べる必要もなからう。近年すばらしい勢力を振ひ、從

つて隨分屢々通俗の雜誌や書物などにも現はれたから。

此學說の創唱者がアメリカの學者であるばかりでは勿論あるまいが、特にアメリカの本には現在でも最も普通に此說が地球成因論の條に入れてある。

しかも此有力な學說も亦、そのメカニズムの最重要な一段たる二つの天體の衝突と云ふ出來事が、宇宙間に於ける天體の分布の密度の點から考へて、公算的に、到底チエムバリンやムールトンなどの主張する程容易にあり得る事ではないとして非難されて居る。のみならず却つて二つの天體の衝突と云ふ事は不可能であらうとの議論の方が今は有力の樣である。又微遊星說で說く世界の恒久的循環も熱力學上は不可能であらうと物理學者の側から論じられて居る。

要するに、地球が如何にして出來たかと云ふ事柄は、何時も太陽系（殊にカントなどの時代頃）や天體全體の發生と云ふ大事件の一部分としてのみ考へられて來たので、さう考へる事がつまり地球發生論の科學的な行き方なのである。斯樣な考へ方は幾通りもの學說として昔から世の中に現はれたが、何れもどこかにひそんで居た不備の點が發かれて次ぎの學說へと發展して行くものゝ樣である。グラバウは北京大學でやつた地史學の講義の内に地球發生に關する以上兩種の學說を紹介し、批評した後に『將來新學說發明、或者可以把這一種舊學說推翻、不新學說總是由舊學說演繹來的、所以舊學說的價値、仍舊不能消滅』と述べて居る。

宇宙間に不均等に分布して居る無數の微遊星、即所謂宇宙塵（コスミックダスト）が先づその密度の大きいところを中心として密集し、此密集は次第に熱を發して漸次高温となり、白熱狀態まで達するのであるが、それから再び冷却に向つて、遂に廣色の光を發する程度になつたものゝ一つが吾が太陽である。之れが太陽の進化の徑路に關して今日考へられてゐるところの大略である。微遊星が集合して太陽系となり、それから恐くは同轉中に分裂に依つて次第に海王星、天王星、土星、木星、火星、地球、金星、水星等の遊星を生じたのであらう。月の樣な衛星は又その遊星から同轉に從つて分體したものであらう。

地球の出現について、今日の科學は昔からの多くの學者の研究をも土臺として、之れ丈けの事を云ふ事が出來るのである。地質學の取り扱ふ地球は之れから先きの地球である。

二

先づ第一に地球はどんな形をして居るかを色々な立場から考へて見やう。

地球が回轉楕圓體である事は初等の地文學の教科書の内にも教へてある通りである。地球が大體球狀をなして居ると云ふ事は、既に古代に於いて哲學者のピタゴラスやアリストテレス、天文學者のヒツパルクやプトレメウスなどに依つて唱へられた事だそうで、その後中世にはいつては却つて此考が失はれたのであつたが、十五世紀の末の頃、コロムブス、マジエランなどの探險家の努力に依つて再び注意される樣になつたのである。吾々が地文學で教へられる地球の形は、その後測定に依つて此昔の考が完成されたものに外ならない。

赤道に於ける直徑と、極を結ぶそれとが違ふとか、乃至はそれに類する樣な教科書的な事柄はなるべく割愛する。地球が球形に近いと云ふのは云ふまでもなくその概形であつて、その表面にはもとより大山脈あり大海洋ありて細かく見れば中々不規則なものである。世界最高の山頂が八千八百四十メートルのエエレストで、世界最深の海底は昨年八月我海軍の特務艦滿洲が房州の南端から南約八十浬、三宅島の東方約九十浬の地點で測定した九千九百五十メートル以上のところである。假りに九千九百五十メートルとしても、從來最深いと考へられたミンダナオ(フイリツピン群島中)の東約五十浬の九千七百八十八メートルに較べて百六十二メートル丈け深い事になるのであるが、此深さとエエレストの高さとの差一萬八千七百九十メートルを、地球の平均半徑に較べると大凡三百三十九分の一となるわけである。つまり、直徑六尺七八寸の球の表面に於いて一分の差と云ふ事になる故に、地球の表面の山や谷を、乾からびた林檎や蜜柑等の表面に較べるのは、針少棒大のそしりを免れない事である。

然しながら、一方から云へば、高低の差の數値は極めて小さいとは云へ、海洋は陸地と相對立して存在する事も事實である故に、そこに又別の見方を生ずることになる。蜜柑の皮の皺に較べれば遙かに小さい高低の差でも、回轉楕圓體としての地球の理想的表面たるジエオイドに比較すれば、甚著しい不規則な表面を結果して居るのである。ところで此高低の變化著しい地球表面に、又何等かの規則正しさを見出さうとする努力が學者に依つて試みられた。その一例としてはグリンーグレゴリーの四面體說(テトラヘドラル、セオリー)が最面白からうと思ふ。如何なる方法で出來たにもせよ、高熱の太陽の樣な狀態を地球も一度は經過したらうと考へるのは無理もなさゝうだが、若しさうだとすれば、先づ表面に殼を生じた地球が次第に進んで行く冷縮の現象に伴つて、その容積は漸次縮少して行くだらう。然し地殼は最早凝結して居る故に、内部の縮小に伴つて一様に縮小するとは出來さうにない。

今一つのテニスのボールから、徐々に中の空氣をぬけば、最普通には四ケ所に大きい窪みを生じて大體に於いては四面體的の形になる。之れをグリーンは地球の漸次的冷縮の結果に應用したのである。そしてグレゴリーが後に更に之れを補正して、兹にグリーン—グレゴリー說と呼ばれる樣になつた。

北極地方には北極洋があり、南極地方には之れに反して南極大陸がある。南極大陸からは僅かの距離をへだてゝ南米、濠州及びアフリカがあり、何れも夫々北方へその延長を有つて居る。南米は中米、北米を經てアラスカに至り、濠州は東印度諸島を經てアジア大陸につらなり、シベリアに終つて居る。アフリカは地中海を越えてヨーロツパに出で、ウラル山脈以西の一帶をしめて遂に北氷洋に達するのである。ペルシヤ灣の邊から北方は現在は陸地になつて居るものゝカスピ海などが今尙ほ示して居る樣に、地球發達史の極めて若い時代に土砂で埋もれた海洋底であつた證據がある。斯樣にして、先きの三つの南北の陸地と三つの海洋とが交互して地球の表面を形造ることになる。つまり四面體がその底面を北方に向け、頂點を南極大陸に置き、他の三つの面はそれ〴〵太平洋、太西洋及び印度ウラル海に相當し、稜の內の三つは先きの三つの陸で、底面を限る他の三つの稜はアメリカ、アジア、ヨーロツパの北端の緣に相當するわけになる。四面體の面には水を湛へて海となり、稜や點は大陸となつて水面上に現はれて居るのである。

尙、三つの長い陸が何れも南方に於いて東へずれて居るのは、地球の自轉の結果であると考へ、地中海を延長した方向に於いて、帶狀に地球をとり圍む大きい海盆—之れもアジアの南方では若い時代の地殼變動のために不明瞭になりはしたが—は又同樣に此自轉運動の結果だとされる。

此學說は、地球の形の根本が以上の如く四面體的にならうとする傾向を有つと說くので、もとよりその後に起る多くの地殼變動—嚴密な意味の地質學で取り扱う樣々の現象は、斯樣な基本形の上に於いて、大陸と海洋分との境界部に沿うて局部的にあらはれるものであるとするのである。

地球の形を幾何學的の基本形に歸しやうとしたのはグリーンがはじめてではなく、既に古くエリー・ド・ボーモンが地球上の大山脈の配列を結晶學的な十二面體の稜として說明した事もある。然し四面體說はそれとは違つて、極めて多くの地質學的現象を說明する事が出來たので、一時大いに珍重された事があつた樣だ。

今日の地質學は、大洋底と大陸との大體の位置は古來變化のなかつたもので、發達の變と云うも實はかゝる大洋と大陸との

接する地帶に於ける海水の稍大規模な進退の結果であると考へて居る。之れが即大陸及海盆の固定說（パーマネンス）である。之れには所謂地史學に於いて、各時代の地層をつくる岩石の性質や、殊にはその內に保存される化石生物の性質などの研究から充分に證明されるところである。

一例を擧げれば、大昔——地史學上で所謂カムブリア紀（古生代最初の時代）の生物界を見るに、此時代には世界中海の中に三葉蟲と呼ばれる節足動物が著しくはびこつた時代であるが、北アメリカの西半分の地方、即太平洋側の各地で發見される三葉蟲の種類が、不思議にも我が東洋、殊に支那、滿洲、朝鮮等の同時代のものと頗よく一致する（日本は此時代斯樣な生物が棲み得ぬ程深い海底にあつたのだらう。然るに北アメリカの太西洋側のカムブリア紀化石系は却て太西洋を越えた西部ヨーロッパのものに近い關係を有つて居る。同樣な關係はその後の時代の生物界についても認める事が出來る。

も一つの例は印度太平洋（インドパシフィック）式生物群である。今日の地中海地方から小アジア、印度等を經て、東南アジアを含む一帶は、地史學上の古い時代から一とつゞきの海に蔽はれて居たものである事は、之れも矢張り古生物學的の研究から結論されるところである。我國の各地に產する古生代の化石が數多い中に、殊に地中海地方、小アジア各地、印度、印度支那、支那東印度諸島北米南端部地方等、限られた地方からのみ產する、特別な形態を有つ著しい種類が含まれて居る事は、學界近事の發見ではあるが、廣く認められた重大な事實である。斯樣な生物遺跡の發見は、その地方が當時比較的淺い海岸地方である事を示すもので、つまり當時の海洋と陸地との擴がりが大體に於いて復舊され得るわけである。印度太平洋系生物群を含む赤道方向の海盆、即今日の地中海を延長した帶狀の海洋は、地史學的に比較的近代まで、縮小されつゝも存在したので、之はテーチスと云ふ名で地學者に記憶されて居るものである。

斯くて地球四面體說は可なり良く多くの地質學的現象の根本を說明する樣に見える。地質學にとつては、單に面白い考と云ふ以上に相應に注意すべき學說として取り扱はれて來た樣であつた。

最近に、コーベルは、現存の六大洲の外に今日の太平洋の範圍に更に二つの大陸の存在した事を想像して、地球の形を八面體的のものと論じて居る。之れは幾何學的に地球を見る見方の最近のものである。

三

地球の出來やその後の發達に關する考は從來は冷縮說萬能であつた。即、段々熱を失つてそのために收縮し、その收縮の結果地殼に皺を生じ、或ところは山となり、或所は海となつたと說いたのである。四面體說の如きも亦確かに此カント、ラプラス以來の冷縮說の一種である。

然るに地質學の研究も次第に細より微に入つて、漫然と唱へられた——少くも今日から見ては論據の不充分な樣々な假說學說と云ふものを一々嚴密に吟味して見る樣になつた。例へば冷却收縮と云ふ根本の假說についても、地殼中に含まれて居るラジウムなどが熱を出すわけであるが、その熱の量は全體として地球が放出する熱量よりは遙かに多いと云ふ事が物理學者側から唱へられて居る。又若しも地球が次第に冷縮して生じた皺が或は山となり或は海底をこしらへたものとすれば、一方には岩石の熱に對する物理的性質がわかる故に、逆にそれ等の岩石の皺の程度から、それを生ずるに要した冷却の程度がわかる筈である。斯樣な計算は實際アルペン等で行はれたもので、それに依ると、從來の冷縮說が頗疑はしいものになると云う。

その外には、樣々な陸棲動植物の化石の上から判斷して、どうしても地質時代には相連なつて居たに相違ない大きな島などがある事も亦冷縮說では完全に說明が出來ないと云ふ反對もある。

冷縮說が承認されなくなつてから隨分長い年月を經たものゝ樣に思はれる。その間に、地球上のあちらこちらの陸地や山脈や海溝などの形狀、配列等に關して樣々の學說が現はれた。各大陸の全體としての地貌、海洋底の地形等はいつも面白い議論の種子を播いたのであつた。然し地質學者達が提唱する樣々の學說は屢々細かな、しかし極めて重要な點を度外視し、若くはそれ等に氣付かぬ大體論に過ぎなかつたのを見る。地球物理學的の原理にその論據を置く事が最大切である事が近年多くの學者に依つて認められて來た。

千九百十五年にエーゲナーが公表した大陸移動說と云うのは、地球の形狀を直接に論じて居るのではないが、然し今此處で述べたならば非常に面白からうと思う。エーゲナーの新學說にはダツチ、アンドレ、デリーその他の左袒者もあつて、近頃は盛んにもてはやされたものである。それは以上述べた樣な、冷縮說では說明の困難な多くの問題を頗都合よく解釋する事が出來るからである。

昔から地球は外に地殼があり、その內側には灼熱の熔融體(近代の言葉で云へば岩漿(マグマ))があると考へられて來た。此事については後節に述べるとして、要するに、大陸は割合に比重の

小さい。珪酸鹽類やアルミナ等から成る物質（岩石）から成り、地殼の内洋洋盆の基底をなす部分は之れよりも比重が大きく且つその性分もマグネシウム等の如き重いものを含み、そして熔融し易い物質から出來てゐると云う考が學者に依つて唱へられて居た。エーゲナーの學説は此處にその議論の出發點があるので、先づ大陸をつくつて居る輕い物質は板状を成して重い熔融體の上に浮いてゐるのだと假定する。

古生代ー地質學では地質時代を始生、現生、古生、中生、新生の五代に分けるがーの時代までは地球上の大陸は凡て相連つて一とつの陸塊を成して居た。然るにその後の時代になつてー多分中生代末の白堊紀の頃に幾つかの部分にちぎられて浮動して今日の陸地と海洋との配列を結果したのだと云うのがエーゲナーの學説の根本である。エーゲナーに此考を懐かしむるに至つたのは、既に古く學者の注意を引いた太西洋兩岸の海岸線の大凡並走して居ると云ふ事實である。ヨーロッパからアフリカへかけての海岸の形を、北と南のアメリカの東の海岸へ持つて行けば、殆全く一致してそこにヨーロッパ、アメリカ、アフリカが一とかたまりの大陸となつてしまう。之が今日の吾々の見る様に相離れたのはつまり大陸をこしらへて居る輕い物質の板が次第に反對の方向へ流れ去つたためだと云ふ。印度洋も亦同様で、アウストラリヤと印度とがアフリカの東岸から離れた爲めに出來たものだと説いて居る。

エーゲナーは此新學説の主張のために種々の方面からその證據を舉げやうとつとめて居る。地球物理學的方面、地質學的方面、地史學的方面、測地學的方面等にそれぐ＼相當の論據がある様に見るのである。此學説の強味は、近世地球物理學の所産たる均衡（アイソスタシー）の現象をも含むところにある、均衡と云うのは千八百六七十年の頃プラットやダットンなどが提唱した概念で、つまり海洋底をなす地殼は重く大陸をなす部分は輕いが、大陸は削剝の作用が不斷に行はれて益々輕くなり、海洋底は堆積物に依つて益々重くなると考へるのである。そこで地殼は均衡狀態を求める。そこに生ずる力が山脈を形勢する原動力となると云ふのである。大山脈が大洋と大陸と相接するところに發達するのは此理由に基くのであると均衡學説では主張して居る。斯様な現象は冷縮説では説明がつかぬのである。

大陸移動説は實に最近に於ける地質學的の最立派な學説の一つである。近頃此説をそのまゝ小さな局部的の現象にもあてはめて見やうとする人達も時折見受けられる程である。然し最早此「新學説」にも諸方から反對の聲が舉げられはじめた。ディーナー、ゾエルゲル、コスマト、ヤヲルスキその他の地質學

者、古生物學者等は夫々の立場から異論をさしはさんで居る。堤防を破壞する蟻の孔的の缺陷は此處にも多數あるやうに見える。然し此學說が如何に壯大なものであるかは等しく感動せざるを得ぬ。此處にも亦、先きに引いたグラバウの講演の一節が實にふさはしいと思ふ。

四

今までのべたところに、海洋盆の出來方について二つの說明法が現はれた事は、注意深い讀者の氣付いたところであらう。一は即四面體說に基く不變的、永久的の海洋盆で、他は大陸移動說の要求する比較的後世（地史學的に）の陸地間の裂罅である。

之等に對しも一つの違つた見方は、今日の太平洋は月が飛び出した痕跡だと云ふピッカリングの說である。天文學者ダーヰンは、數理的に月が地球から分離した年代が約五億六千萬年程以前の事であると說いたが、ピッカリングは太平洋海盆の容積や形狀などを月の容積に較べ、なほ前述のアフリカ――ヨーロッパの太西洋岸と、南北アメリカの太西洋岸との屈折の大體一致する事などに着目して、月はどうしても地殼を生じた後に遠心力で飛び去つたものだと考へられると云ふ。

斯樣な考は太平洋及び太西洋の出來方をば一應說明するけれども、然し他の海洋と陸地とに關しては必しも滿足な說明を與へる事が出來ぬのみならず、地殼が出來てから月が飛び去つたと云ふ根本の假定にも異論は少くなからう。

昔の學者達は、有名なライエルなども、海洋盆と大陸とが大體に於いて固定的だとは考へて居なかつた。大陸及海洋の永久性をはじめて唱へたのは有名なデーナで、彼は千八百四十六年の頃既に『大陸の表面には淺海の堆積物はあるけれども、深海性の堆積物は見付からぬ』と喝破した。今日では以上のべた學說の何れもが含んで居るところは海洋及大陸の永久性である程に、此思想が地學者の間に一般化されて居る。

五

均衡學說に於いても、又ヱーゲナーの大陸移動說に於いても、輕い陸地が重いそして熔けた若くはやはらかな部分の上に浮いて居るものと考へて居る。輕い方をシアル（Sial 之れはシリカとアルミニウムとの頭文字をむすびつけた語）と云ひ、重い方をシマ（Sima 同じくシリカとマグネシウムから）と呼ぶが、ヱーゲナーはシアルを浮かべて居るシマは恐く一千キロメーター以上の深さを有つて居るものだらうと考へて居る。

地殻の厚さと云う問題は又中々面白い。地殻には厚さがあつて、その内側は熔融帯だらうとは一般に考へるところである。均衡説の方では地殻が不均衡になつた時に調整するために生ずる影響は三十七哩乃至六十哩位の深さまで達すると云う。即大凡六十キロメーター乃至九十キロメーターになる。もし大陸移動説と均衡説とを組合はせれば、シアルの板の厚さは大凡此位と云う事になるのである。

ハイムの云ふところに依れば、凡ての岩石は四千メートル乃至六千メートルの深さに於いても尚壓力には抵抗して居ると云ひ、又恐らくは一萬メートルの深に於いても同様であらうと云ふ。その後アダムスやバンクロフトの研究に依れば、例へば十七キロメーターと云ふ様な深さに相當する壓力に於いても岩石にはなほ細かい空隙が存在するとの事である。然し柱狀の岩石に依る實驗と實際の地下の深所とでは壓力の加はり方が全然違うので、直ちに類推する事は不可能な事であらう。近年は外部の破壊し容い帯(テクトノスフエーレ)と内部のプラステックな帯(アステノスフエーレ)とを分つて考へる様になつた。兩者の境界をヰリスは四十哩位の深さにありとし、タムマンの如きは百五十乃至三百キロメーター位の深さに於いて特別にプラステックなところになるだらうと云つて居る。

地殻の厚さと云ふ問題から地球の内部の構造に關して考を向けさせられる。地質學の關はるところは地殻のホンの表面丈けなのであるが、然し表面的な現象の背後にはその原因となる深い根底があるのが普通である。實は之れまでのべたところも地質學的現象の根底となるべき様々の問題の大要なのである。

先きにはシアル、シマが話に出たが、之等兩者は所謂岩石圏を構成するものである。最初に有名なジュスが提唱し、後にヰーヘルドが補足した地球の構造觀が今日最普通に採用されて居るところの様である。

ジュスーヰーヘルトの考に從へば、地表から千二百キロメートルまでは前述のリトスフエーレで、その上部はシアル、その下部はシマになる。千二百メートルのところから中心までは重圏又は中心圏で、その全體の深さは大凡五千二百キロメートルに達する。その内上方の千七百キロメートルの部分は更に二つの部分に分かれ、上部はクロフエシマ(Crofesima)で、クロミウム、鐵、硅素、マグネシウムの頭文字から組合はせたもの)で下部はニフエシマ(Nifesima 即ニッケル、鐵、硅素及マグネシウム)と名けられる此の部分以下、即最内部を占める大凡

三千五百キロメートルはニフエ（Nife 即ニッケルと鐵）で最も重い部分である。

以上五つの部分に分けたのは、地球が内部と外部とで著しくその比重を異すると云ふ物理學上や地震學上の研究の結果に基くものである。最外部のシアルは比重二・七、シマは二・八乃至三・四、クロフエシマは四、ニフエシマは五乃至六、ニフエは六乃至十二又はそれ以上である。

地質學者が平常取扱ふ地表の岩石の比重は二・七内外であるが、地球全體の平均比重は種々の方法で大凡五・五位と決定されたのはよく人の知るところである。從つて地球の内部には餘程重い物質があるに相違ないとは誰でもすぐ氣のつく事であらう此事の説明がつまり前述のジユス―ヰーヘルトの假定である

七

地殼の厚さと云ふ事から話は轉じて地球の構造の事にはいつてしまつた。そして地球の内部の狀態の一面をも窺つた。そこで次手に地球内部の熱の狀態を考へて見やうと思ふ。

一體地球の熱の源は之れを外部から即太陽から來るものと、内部即地球自身がその内部に有つて居るものとに區別すべきである。ところで地球表面に於ける温度は先づ全く太陽の恩惠に歸すべきものであるが、地下の熱はその源を地球の内部に有つものである。

地球の表面から約二十五メートル以下のところでは一年又は晝夜の寒温の差を示さないがそれ以下では所謂地下增温率に從つて下へ行く程高温になる。今日まで鑛山の坑道やその他の穿孔の底で觀測したところに依ると增温率即攝氏一度の上昇を生するために降るべき距離は大凡三十メートル位を平均とするが、然し之れは地下の岩石の種類や地質的相違―例へば我國の様な火山地方では此値が小さいと云ふ様な―に從つて著しく變化する。故に此增温率には未一定の値がないと云ふべきであらう。それも其筈である。今日まで人間が地殼に向つて穿ち得た最深い孔は上部シユレジアのもので、二千二百四十メートルに達し、人間の力の偉大さを一方に於ては證明して居るけれども、さてそれを我が大地球に較べて見ると、此大なる深さも實は半徑の三百分の一内外の毛孔の様なものに過ぎぬのである。

此程度の深さについての觀測は外にも澤山あつて、大體に於ては地熱は深さに比例して增すものであるらしい事が知られて居るが、然し更にもつと深い所へ行つたならば此の割合は恐く幾何級數的に增して行くものだらうと考へられる。火山から流れ出る熔岩が屢々千度以上の高温を示す事から考へて見れば、

既に地下數キロメートルの深さの邊に極めて高溫のところがあるだらうとは容易に想像されるところである。そこで一般に考へられて居るところは、地下百キロメートル位の深さでは岩石は凡て熔融狀態にある程の高壓の下にあるだらうと云ふ事である。キーヘルトその他の地球物理學者は、地表の殼と地心の堅い核との間には百乃至二百キロメートルの厚さの熔融狀の岩漿(マグマ)帶があるものだらうと云うて居る。そしてキーヘルトは地心の部分に於いてもその溫度は攝氏の三千度を超えぬだらうと結論して居る。

八

以上長たらしく述べたところは、如何にも無味乾燥な科學的記載の樣であるが、然し人智のはじまつて以來長い間考へても尚その本性のはつきりせぬ地球に關して、最近科學者が大凡どんな解釋を下して居るかと云ふ事の極めて概略を傳へるには幾分の役には立つと思ふ。勿論此處に述べた問題以外に尚考ふべき事は數多あるのだが、大概にして切り上げて、以上の樣な諸性質を具へて居る地球が出來上つて以來經過して來た歷史の內から二三の面白いエピソードをお話しやう。

通例地史學(又は地球發達史學)ではその第一ページを所謂原始凝結殼の生成したところから書き起すのである。之れは云ふまでもなく地球の星時代に引きつゞくもので、凝結殼を生ずるに至つて地球は自ら光を放つ事がなくなつたわけである。

原子凝結殼が出來て以來地球上に生命の出現するまでの極めて長い時代を總稱して無生代(アゾイッシェスツァイトアルテル)と呼び、それを更に分けて無水時代(アンヒドリッシェエポッヘ)とそれに次ぐ海洋時代(オッエアニッシェペリオーデ)とに區別する。海洋時代になつてはじめて地球上に水成岩層を生じたのである。何故ならば無水時代には水は凡て水蒸氣の形で氣圏に存在したからである。海洋時代になつてもそのはじめの頗長い間は海水の溫度が著しく高かつた爲めに、未だ生物の生活をゆるさなかつたらう。のみならず當時なほ地殼が薄かつた故に、他の天體の影響に依つて地球內部の熔岩に潮汐の作用が生じ、そのために岩漿が極めて屢々地表へ流れ出たものに相違ない。

海洋の水の溫度が或程度まで下がつた時にその水中に如何なる方法かで生命の最初のものが出來上つたのである。生命の起源については隨分色々の方面からの研究があるが、未だ滿足な回答には接する事が出來ない。然し兎も角も生命の種子が水中に現はれたらうと云ふ事には多くの學者の考が一致して居る。勿論その水を鹽水だと考へる人と淡水だつたと主張する人とはあるけれども、その優劣はもとよりわからない。

海洋時代の後期に生命が現はれたと云ふ者は、實を云へばその頃の堆積にかゝる水成岩中に吾々が僅かに生物の遺跡だと認め得るものが存在するとからの推論で、スカンヂナヰアやフインランドなどで發見された此古い時代の化石は實は吾々が生物進化論の教義から歸納する樣な原始的な種類では無い。恐くは二枚介類（現今ではハマグリなどを代表者とする軟體動物の一群）に屬するものだらうとさへ考へられて居る。故に、眞の原始生物―現在吾々の知る範圍ではアメーバの樣なものがはじめて出現した時から、斯樣な化石を含む地層が堆積するまでには實に莫大な時が經過したものに相違ない。吾々は此海洋時代の最後の一期を始生代と名けるが、然し眞の始生代はもつと〳〵古い時代にあつたのである。始生代の次には原生代と云ふ時代が來るが、此時代の地層中に含まれる生物界は始生代のそれに較べて一段と進んだものであり、更に、その次きの古生代になれば生物界の發展は實に盛んなものである。之れまで水中生活をつゞけて來た生物が陸上にはひ上つたのも實に此古生代中葉の出來事であつた。之れに次いで中生代、新生代があつて、最後に新生の一部として吾々の現代が來る。人類全盛の時代である。

古生代前半までは凡て水棲植物と水棲無脊髓動物の世界であつたが、古生代の半頃には魚類が出現して、所謂魚類時し、一方には陸棲植物の著しい繁茂が古生代末に起つて所炭紀時代を劃し、吾々の現代文明の發達のために一大原動力となつた歐米各國の大炭田を結果した。日本本土には此時代の石炭は無いが、朝鮮では僅かに平壤の地方に此時代の炭田がある。滿洲や支那の南北等、アジアの大陸には廣く此時代の堆積にかゝる炭層が發達して居る。濠洲も亦同樣である。

動物化石のみに着目して吾々は古生代後半を魚類時代と呼ぶ事がある。

中生代は爬蟲類の時代である。身長數十尺の巨大な爬蟲類が地上を獨占したのみならず、水中にも覇を唱へ、小形の身輕なものは空界を征服した。動物で空中を飛んだ最初のものは、古生代末の大森林に住んだ昆蟲の類であらうが、脊髓動物の内では鳥類でなく却て爬蟲類であつた。鳥類は爬蟲類の或物から分かれて別の途を辿つて發達したものなのである。植物界は中生代の後半に於いて今日吾々の見ると同じ樣な種類のものとなつた。

哺乳動物が世界を征服したのは新生代である。此時代の前半に於いては人間は未だ影もなかつたが、然し中生代に於ける爬蟲類と同樣に新生代には巨軀の哺乳動物が水陸兩界に横行し

又蝙蝠の如く空をかけつたものもある。巨獸がそろ／＼行きづまりになつた時に、アジアの南方の一角から人類と云ふ異様な二本足の動物が頭を擡げて來た。

地史學は大抵此邊でその卷を終るのである。

九

地球發達史の第一部は之れを生物界の變遷に費やした。それは地史學の依つて以つて立つところの地層の歴史的の區分の根底には、地層中に含まれる生物界の記錄と云うものがあるのだから、決して不當でない。

ところで生物界の消長は様々の外的境遇の支配を受くるものである事は、近年地理學者がしきりに人類の文化史と氣候の變遷とを結びつけやうとしてる事を例にとるまでもなく明かな事である。

地史學上の生物界の記錄にも明かに斯樣な實例を認める事が出來る。石炭紀時代に世界の隅々まで羊齒類の様な植物の大森林が繁茂した事は、その時代に地球上の氣候が全體として著しく温暖で、且つ濕氣に富んで居た事を意味すると云うのは學者間の定說である。その原因としては、その頃に盛であつた火山噴火の現象に伴つて、空中に炭酸ガスの量が著しく增加し、それが太陽の熱を吸收し、又地熱の放散を妨げたためだと云うアレニウスの說が有力である。

氣候に關して云へば、石炭紀の後につゞく時代（二疊紀）には各地に—主として今日の赤道地帶の地方に著しい氷河現象の起つた證據がある。つまり寒冷な氣候の現はれた事を意味すると云へよう。

中生代は比較的靜穩な時代で、地球內部のエネルギーが此期間に充分蓄積した爲めでもあらう。新生代にはいつて地球上の各地に激烈な火山活動がはじまつた。我國は地中海地方や東印度諸島や、南北アメリカの西岸地帶と共に世界中の火山地帶をなして居るが、その活動が開始されたのは新生代初期即所謂第三紀の頃なのである。今日の火山作用はその名殘に過ぎない。日本本土、殊に東北日本ではその面積の大半が第三紀時代及びその後の時代の地層から成るが、その大部分は火山噴出物の堆積して出來た凝灰岩、若くは凝灰質の岩石である。此時代は一方には日本本土に産する著しい石炭層の堆積した時代で、例へば常磐地方、北九州、北海道、樺太等の炭層の大部分は此時代のものなのである。此處にも亦吾々は激烈な火山作用と著しい植物の繁茂とが相伴ふ事實を見る。そして此第三紀に引きつゞいて第四紀となるのであるが　之れは所謂洪積世で、世界各

が廣大な水の層に包まれた大氷河時代である。之れも亦恰度古生代末（石炭紀から二疊紀にわたる）の形勢と頗よく一致する樣に思はれる。

順序は逆になつたが、古生代の直前の頃にも世界各地に氷河現象のあつた證據がある。支那でも揚子江中流の所謂三狹地方に此時代の氷堆石（モレーンス）が發見されたものと云はれて居る。そして此時代の前は先きにのべた樣に熔岩が盛んに地表に流れ出た火山時代なのである。

斯樣にして吾々は地球表面の氣候が大體に於いて周期的に變化したものであるかの樣に感ぜしめられる。もとより細かに論じたならば樣々の不規則はあらう。

洪積世の氷河時代は全世界的のもので、日本にも少くも高山地方などにはその現象があつたものらしい。日本に近ひところでは支那でも最近その痕跡が發見されて居る。此時代の氷は所に依つて回數は不同の樣であるが兎も角も數回くりかへしたもので氷成層の研究に依つて氷期と間氷期とを分ける事が出來る。そして或學者は吾々の此現代はその間氷期の一つに外ならぬものだからと云うて居る。若し之れが本統とすればやがては吾々の現代も厚い氷河の來襲に依つて見る影もなく踏み潰されてしまう運命にあるわけである。

十

洪積世の大氷河時代の原因に關しては、多くの歐米各國の學者達が苦心して研究し、天文學的、氣象學的、地質學的等樣々の方面から色々な學說が提案されて居る。氣候の變化の周期的な事については既にのべた通りであるが、アレニウスなどの云うて居る樣に空氣中の炭酸ガスの量の變化や、エネルギー放散後（即火山噴化の現象後）の冷却と云う漠然とした考丈けでは何となく物足りなく、靴を隔てゝ痒ゆきを搔くの感じがないでもない。地質學的に云へば地球の表面に何等か大規模な地殼變動が起つて、その爲めに氣界の狀況に著しい變化を起した樣な事がなからうか。斯樣な疑ひを念頭に置いて、地球發達史に現はれた造山作用（オロゲネーゼ）の著しかつた時代を調べて見る。

造山作用の產物は山嶽である事は云うまでもない。然し一方には流水は不斷の勢力をもつて、地殼の少しでも高くなつたところを削つて、所謂基準面（ベース、レヴェル）まで引き下げやうとする。從つて此削剝の作用が充分働かない間は文字通りの山嶽が見られるわけであるが、もし極めて長い時間を經過すれば遂には山嶽の外形は消滅してしまう。斯うなれば最早山嶽は地質學者の見にのみ見える樣になる。即、その後の新しい地層に被はれてか、若

くは稀には毀はれないで殘つて居る此古代の山嶽の殘骸は烈しく皺曲した廣大な面積を占める地層である。

斯様な見方で世界各國の學者が調査したところを見るに、比較的限られた據りの山嶽は相應に屢々出來て居る樣であるが、全世界的に造山作用が盛であつた時代は先づ最近のものが新世代の中頃、即第三紀の末から第四紀の初頭頃のものである。それに先だつものは石炭紀末から二疊紀へかけて起つたもので、それに引きつゞいた二疊紀末の局部的なものは日本本土などに於いても起つたものの樣である。之れより先きのものは、古生代の中頃に餘り著しからぬものがあり、東洋では支那などにもその頃の造山作用の痕が殘つて居る樣だが、それよりも遥かに全世界的なのは古生代の直前の原生代の末葉頃のものである。支那を自然地理學的に可なりはつきりと南と北とに分かつ秦嶺山系の基盤構造の如きは恐く此時代に既に出來たものであらう。原生代以前又はそのはじめ頃にも著しい造山期があつた樣だと云はれて居る。

以上の全世界的な造山期を、前述の氣候史の最著しかつた時期とを比較すると、それが頗よく一致するのは著しい事實で、つまり之等の時期に於ける氣候の稍急な冷却は、一方には山嶽が生じて其地方一帶が寒冷になつたがそれと同時に何千尺或は恐くは何萬尺の高さの大山嶽が氣界の狀況を著しくかき亂した事が、前世界的な氣候の激變を引き起す原因となつたものであると云ふべきである。勿論、太陽系全體が寒冷な星雲の中を横ぎる樣な偶然の機會があつたのだらうと云ふ樣な學說も大いに顧慮せらるべき考であるかも知れない。

大山嶽は濕風を支へて雨をかもし、雨は寒冷に遭つて雪となり、不滅の雪は絶えず增加し、集積して氷河を現出するに至つたのである。

洪積世の大氷河時代は僅々數十萬年程度の昔の出來事であつた。故にその頃に生じた大山脈は今日も尚委側剝し去らるゝ事なく吾々の眼前に横はつて居り、その面には氷河作用の痕跡若くは著しく縮まつた氷河そのものさへを擁つて居る。アルペン、ヒマラヤ、ロッキーの如きは凡てそれで、日本島孤の如きも亦その内の一つである。之れに反して古い時代の氷河現象は主として氷に依つて運搬された特殊の堆積物の存在に依つて示されるのである。

十一

地殼の變動として重要なものに、造山作用と對峙する造陸作用と云ふのがある。之れは造山作用が比較的限られた幅の陸地

が褶曲して、然かも稍突發的に隆起する現象を意味するのに對して、大きい面積の地盤がその構造の變化を受ける事なしに永續的に極めて徐々に上昇する現象を指す。然し嚴密に云へば前者に伴う後者、後者の時に伴う前者があつて、兩者の區別は必しも確然たるものではない。然し要するところ造陸作用は地殼が地心に對して放射的（ラヂアル）に動く運動で、之れは一面に於いては陸地の永久的上昇及下降と云ふ現象で云ひ表はす事が出來るが、造山作用の方は地殼の切線的（タンゼンシアル）の運動に當るのである。

地史學的に云へば主要な造山期は主要な造陸作用の時代と交互した形跡がある。原生代の中葉、古生代の大部分中世代の大部分等は凡て造山作用の烈しかつた時代の間にはさまり、洪積世以後現代へかけては又一つの造陸期或むしろ地盤の上下運動の著しい時代へはいりかけて居るものゝ如くである。陸地の上昇は陸地の面積を擴張し、その下降は縮小を來すのである。斯樣な時代は火山活動、褶曲作用、斷層等の樣な現象がなく、從つてその名殘も認められない故に、地史學者の目には靜穩な時代としてうつるのである。

靜穩な造陸期に向つて居ると考へられる今日、關東大地震の夢の未醒めきらぬのに、山陰地方の大地震の新聞號外が屆いた。恐くは誰しも現在は決して地質學的に靜穩な時代だとは考へ度く無いだらう。日本ばかりではない。世界の地震帶と云はれる環太平洋地域、印度地中海中米地域その他に起つた大地震で、吾々の知つて居るもの丈けでも中中少くはないのである。然し環太平洋地域、地中海印度地域等は、既に述べた樣に大陸と深海との境界の不安定な破壞地帶又は所謂ジエオシンクラインと云うて、絶えず沈降して行く地帶である。故に第三紀の頃には到底想像する事も出來ぬ程激烈であつた破壞作用の名殘が斯樣な特殊の弱い地域に今尚その跡を留めて居るものと見るべきであらう。之れは前に火山活動に關して述べた事と恰度一致するところである。

十二

最後に地球の年齢の問題に關する議論の歴史の概要と、その今日の一般的な說とについて一言して此稿を終り度い。

歴史的に云へば、有名な『地質學原理』（プリンシプルス、オブ、ジエオロジー）の著者チヤールス・ライエルなどが地球の年齢を計算しやうと試みた最初の學者であらうと思う。ライエルは『原理』（プリンシプルス）(地質學原理は地質學史上のクラシックの一として通例斯う呼ばれて居る)の內に、生物界の變遷の歴史を十二の階梯に分かち、その各時代の生物界の各の種（スペシース）が全く變はつてしまうのには二千萬年を要すると考へ、十

二の階梯全部に對しては二億四千萬年を要したと論じて居る。

此年數はつまり古生代から現代までに地球の經過した時の長さの概略である。その頃クロルが古生代のはじめから現代までの年數を六千萬年、それ以前の地球の歴史を一億四千萬年と推定したが、ライエルの弟子であり且つ友人であつたダーヰンは生物の進化の狀況から云へば之れ丈けでは到底不充分であると論じて居る。ダーヰンやライエルは何れも地質學者であり生物學者でもあつた。ダーヰニズムは本來ダーヰンがライエルの地質學に依つて暗示されたユニフオルミタリアニズムの思想にその根底を置いたものである。ユニフオルミタリアニズムは即カタストロフイズムに對抗して起つた、當時の新傾向、新主張であつた。此新主張に依つて所謂大變地災（カタストローフエン）が度々起つて生物界の創造が繰り返へされたと云ふ、古い思想が破壞されてしまつたのである。從つてその後の地質學の内には此勝利の氣分が十二分にしみ込んで居り、そのまゝで近年までの存在をつゞけ、發展を遂げて來たのである。

當時の地質學に於いては、無限とも云うべき地球の歴史は、僅かに古生代とか中世代とか云う大きい單位に分ち得る丈けの資料があつたのみで、かゝる大なる單位の間は凡て全くユニフオルムなものであると考へるより外に方法がなかつた。然るにケルヰン卿のトムソンが、その專門の熱力學の方面から地球の存在は決して無限的のものではなく、確かに或限界がある筈だと論じ、その專門の立場から地球の年齡を計算した。トムソンの與へた數字は數回にわたつて次第に減小されて、遂には最小値が二千萬年となつた。

地質學の側では、或は水成岩の堆積の速度から、或は流水の削剝作用の早さから、多くの學者が地球の年齡の計算を試みた。その一々を此處に數へ上げる事はやめるが、彼等の最多數が到達した結果は大凡八千萬年乃至一億年と云うのであつた。之等の値は凡て地球表面に水成岩が生じはじめてから現在までの年數である事は注意を要する。尙之等の計算の背後には例のユニフオルミタリアニズムの思想が意識的にか無意識的にか存在して居る事は忘るべからざる事實である。そして同時に物理學者側で得た小さな値が少からず後者の地質學者達の思考力を支配した事々をも吾々は認めなければならない。

然るに本世紀にはいつて、ラヂオアクテイヰテイの發見があり、それからその頃までは豫期されなかつた熱エネルギーの本源の存在が知らるゝに至つた。從來物理學者の考へた地球年齡の問題も根本から覆へされるに至つたわけである。即、ラヂオアクチヴな元素の崩壞の速度を計算し、その生成物たる鉛やウ

ラニウムなどの各地質時代の地層中に存在する量を計算し、鉛やウラニウムの源は全くラジウムの崩壊に依つてのみ生じたものと假定して、それ等の地層の經過した年數を計算する事が出來るわけである。斯樣な方法でストラット其他の學者の計算したところに依れば、始生代の岩石は十四億乃至十六億年を經過したと云ふ結果になる。

然るに、本來は大きい値を採用する傾向を有つて居た地質學者等も、此大きい値に向つては唯驚くばかりで、最早一億年程度の數値から離れる事は何となく忍び難くなつて居たのである。

最近になつて地質學者の頭の中には、地質學的の諸現象が地史を通じてリズミツクに起つたものであると考へる傾向を生じた。地層の堆積の起る原因も、堆積する盆地のリズミツクな沈降にあると云ふ樣に考へる。一とつゞきの厚い地層があつても、その内には屢々粒の大きさ、色の濃淡、黑白等で識別される多數の薄い層(ベツド)がある。之等の薄層間の境界はリズミツクな沈降作用の間に來る或時間を有つて居るわけである。その時間は長短樣々ではあらうが、地球發達の歷史の間には積つて隨分長い時間となるわけである。加ふるに、第三以來の大地殼變動(造山作用、造陸作用等)の結果、地球表面に高低の差が著しくなり、現代は削剝作用の最烈しいリズムに相當する。故にこの事情を考に入れて問題の解釋に向へば、地層の堆積がはじまつて以來の年數はユニフオルミタリアニズムの立場で計算したよりは大きくなるべき筈で、全く地質學的な從來と同じ樣な計算法で計算しても、古生代以來の年數は大約二億五千萬年位のものとなるとバレルは云うて居る。此數字は先きにライエルやダーキンが生物學的の根底から推論した數字と一致するから面白い。

生物の進化の速度と云ふものは今日未だ測定してない故に、進化の速度を時の單位とする事は出來ぬ。ライエルやダーキンの與へる古生代以後の年數が『想像』であると云はれるのはそこに理由があるのである。然るに、地質學的に云ふ地層の斷絕——所謂不整合の大きさは、上下兩大層群中の生物界の不連續に依つて判斷されるのである故に、全く比較的のもので、何等絕對的の數を與へない。故に、地層の厚さと水成岩の堆積速度とから算出した年數の内には之等不整合に相當する時間——之れは地層堆積の時間に比して決して遜色のない、或はそれ以上の時間であるかも知れない——が含まれて居らぬわけである。故に、最初の地層の堆積して以來の時の實際の長さは地質學的方法で算出された年數に比して遙かに大きいものであるに相違ない。

一方には、先きにものべた様に、地史學的に最古い化石生物は生物學的に云へば既に著しく進歩し分化したもので、生物學者の側からは眞の原的生物から此所謂原始生物に達するまでに經過した時間は、最古の化石を含む地層が堆積して以來今日に至るまでの時間よりは長かつただらうとさへも云はれて居る。クロルの計算（前出）なども明かに此見解と一致する。

斯様に考へる事に依つて、ラヂオアクテイヰテイの方面からの計算と地質學的方法に依る計算との間の外見上の著しい相違が融和され居るものであらう。バレルは地球の年齢を之等兩方面から考察して、最古の地殼が出來て以來二十數億年と算定して居るとの事だが、理論上は之れに反對するだけの材料はなささうである。

溫古知新と云ふが、地史學は溫新知古である。現在眼前に見る様々の出來事を根底として吾々は地史の記錄たる岩石の諸相を讀むのである。故に讀む人の心的態度に依つて多少違つた結果に達するであらう。然しながら登る道は別々でも、達する高嶺は同じであるべきで、要は現在を最よく知る者が過去を最よく讀破する者である。

地史學的年代記を讀まんがために現在を知らうと試みられつつある幾つかの方法の内、特に著しいものが二つある。一はスエデンのデ・エール夫妻が代表する氷積層と間氷積層とを數へる方法で、他はハンチングトン等が試みた古い大古の年輪を數へる事である。前者は氷河の季節的進退（溫暖の氣候には氷は極地へ向けて引き退き、堆積物は氷のとけた水の下で起り、寒冷の季節には同じところに氷積層が累積する）に依つて氷河時代の長さを年數で表はさうとするのだが、之れを利用すれば氷河時代の古さも大凡わかるであらう。後の方法も主として氣候の變化の記錄として、地層の代りに年輪を用ゐるので、根底は同じである。

最よく現代を知る者は最よく過去の記錄を讀み得る者であるとは今のべたところである。そして最よく歴史を系統立てるためには出來る丈け多方面の知識が協力するを要するであらう。學術の群雄割據は最好ましからざる事ではあるまいか。

（五月二十五日）

進化と遺傳

理學博士　石川千代松

生物が最初から今の有樣で出來たものであるか又は、違つた有樣なものであつたが夫れが長い間に段々と變り今日の樣になつたものであるか。之れが昔時から考へられた事で、極めて古い時分にエンペドークルスと云ふ學者は宇宙に地、水、氣、火どの四つの元素があつて、之れ等が愛憎で色々に動き又色々に結合され始めに植物が出來、次ぎに動物が出來たのである。して又それ等植物又は動物と云ふも夫れは今日我々が見る樣な一個々々の植物又は動物でなく、其部分、又は器官であつた。例えば動物で云ふて見ると、顏もないのに眼が出來たり、胴もない内に手足が出來たり、頭のない胴體が出來たりしたのである。して之れ等の部分又は器官が自然の力に依つて色々に結合されたものであるが、其多くのものは生存して行く事の出來ない樣なものであつて無論畸形の化物であつたが、其内僅かなものでは結合が能く出來て、生存して行く事と生殖して行く事とが出來たのである。

エンペドークルスの說は斯樣に不思議なもので、實に馬鹿馬鹿しいものではあるが、面白い事には此考を能く味はつて見ると今日我々が云ふ處の陶汰の考が知らず知らず其内に這入つて居る事である。夫れと云ふて無論其當時既にダーウヰン、ウオレースの陶汰說を彼れが考へたと云ふのではない。けれ共エンペドークルスの此の不思議な考の内に陶汰の夫れがあつたと云ふのは、彼れが、生物界には澤山の生活に不適當なものが出來るが其内適當なもの丈けが生存して行くものであると云ふ點に於て今日の陶汰說と一致して居るのである。

斯樣に古い時既に生物の出來方に付いて考へた人はあつたが、其后三千年の間別に斯樣な事を考へた人がなかつたのも亦不思議である。

處が西暦十七世紀になつて英國の醫者でジョン・レーと云ふ人が動植物の種は天帝が最初から今日の有樣で造られたものであると云はれたが、此考へがスヱーデンの有名な博物學者のカ

ール・リンネに依つて最力强く唱へられた。

其后十八世紀の末になつてラマーク、ダーウキンとゲーテの三人が略同時に生物は變遷進化するものであると云ふ事を云ひ出して其當時中々八釜しい議論が學界に鬪はれたのである。

併し此時分にはまだ事實も充分に判つて居なかつたので、之れ等の人々が唱へた事も夫れ程多く學者の注意を引かなかつた。

處が調度ラマークの進化說の大著が出た時に生れたチャーレス・ダーウキンが二十三年間も事實を集めて研究した結果一八五八年に、其當時彼れとは全々無關係で殆んど同一の陶汰說を考出したウワレース氏と共に陶汰說を公にせられたのと、其翌年ダーウキンが種の起因と云ふ大著を出されたので、陶汰說は先づ措いて、生物は現今の有樣で出來たものでなく、始めは簡單なものであつたが、久しい間に段々と變遷して今日の樣なものに成つたのであると云ふ前に云ふたラマーク等の說を決して疑ふ事の出來ない樣に迄證明したのである。

之れが今日誰れも云ふ所の生物進化の學說であつて、今も云ふた通りそれは既に十八世紀の終り頃から唱へられては居たが其疑ふ余地のない迄に證明されたのは全くダーウキンの力に依るものである。

尤もダーウキンが種の起因を書かれた時にはまだ細胞に關する委細の事實も明かでなかつたし、從つて生殖細胞が如何にして一個體内に出來るやも無論判然して居なかつたのである。又卵の受精に關する事柄の如きも一八七三四年頃に至つて始めて判つて來たのであるから、之等の事實もダーウキンは其當時知らなかつたのである。けれ共之れ等事實が判つて來てからダーウキン論が益々確實になつて來た事は誠に面白い事で、又如何にダーウキンの考へが正しかつたかとも考へられるのである。

一寸簡單に又最も判り易く進化の事實を書いて見ると、生物の始めは何れも皆細胞と云ふもので、我々が今日知る處の生物で最も劣等なものは一つの細胞である。之れ等のものを單細胞生物と呼び、其最も簡單なものはバクテリアの如きものであると考へられて居る。此バクテリアは全身が原形質と云ふ物質から出來て居て、其體内には染料で染まる澤山の物質が顆粒の形をして這入つて居る。して之れ等の顆粒は當時は體内に散在して居るが、バクテリアが分體をする時になると一緒に集まつて來て一塊となるのである。

アメーバでは此染色粒が常時から體内で一塊となつて居て彼樣に細々散在する事がない。生物學者は此染色物の集まつたものを核と名づける。して原形質塊で核のある物を細胞と云ふ。

我々の身體を見ると何れも皆斯様な細胞の集りから出來て居る。例えば我々の皮膚を見ても之れが澤山の細胞から出來る事が判る、之れ等は無論肉眼では見へないが。適當な方法で皮膚の一片を薄く切つて見ると、上の方には澤山の鱗の様な細胞があつて、少し下の方に行くと之れ等が六角の形になり、最も下では其形が高くなつて圓筒形となる。であるから一寸見た處では吾々の皮膚は謂度澤山の煉瓦から出來て居る壁の様なものである。

我々の身體が細胞から出來て居るのは皮膚計りでなく、我々の胃も腸も心臓も血管も肝臓、肺臓、腎臓、骨其他總の部分も皆細胞から出來て居るのである。例えば我々の血を一滴取つてそれをスライドの上に置き顯微鏡で見ると、澤山の赤色をした圓盤形のものと、其間も少しづゝ白色又は殆んど無色で形の定まらないものとが見へる。此無色のものは白血球と云ひ、赤色のものを赤血球と云ふ。之れ等赤白の血球は又細胞であるが、赤血球の方では、獸類では核が無くなつたものである。併し白血球には立派な核が見へるし、又其細胞體は表面から突起を出したり之れを引き込めたりして、自動をするのが見られる。

であるから我々の身體は何れの部分から何れの部分迄皆細胞から出來て居るのである。

處が誰れも知る様に吾人々間は動物の内では一番高等になるもので、我々は結婚すると婦人の胎内に子供が出來るのである。夫れが胎内に出來てから十ヶ月も立つと赤子となつて産れて來るのである。生れた子供は多くの場合では母親の乳を吸ふて生きて居るし、又段々夫れで大きくなる。人間で此間が一ヶ年位で、其後子供に齒が生へて來て、母親の孔を吸はない様になる。

母親の胎内から赤子が生れて來るのは人間の他に又猫犬馬、鼠等も同様であつて、又其生れた子供が母親の乳を吸ふて生長するのも之れ等獸類では同一である。唯其生れた子供の身體の有様が色々のもので違ふのである。從つて又母親が乳を飲ませる間も違ふのである。

其外色々の獸類で同時に生れる子供の數や胎盤の形杯は色々違つては居るが、全體に云ふと獸類と人間とは胎生である處や子供を哺乳する事やが同一である。其他又溫くて常に一定の溫度のある血を持つ事や、全身に毛が生へて居る事や其他身體の構造等に於て人間と他の獸類と同一の點が多いのである。

であるから之れ等を一緒にして哺乳類と云ふて置くが、細かく云ふと獸類の内にもカモノハシと云ふ様なもので、其子供は獸の形をしたものでなく、家鷄の様に卵子であるものがある。又

カンガルーのやうに生れて來るものは既に獸の形はして居るが、母親の胎内に居る時に胎盤の無いものがある。

處が之れ等二つのものを除いた外の獸類は何れも皆胎盤のあるものである。けれ共其内に鼠、ウサギの様なものだの、馬牛の様なものだの、クジラの様なものだの、猫、虎、犬の様なものだの色々のものがある。又サルの様なものは吾々人間に能く似たものであつて其内では類人猿と云ふて、我々に最も近いものがある。

其外獸類の他に鳥、爬蟲類、兩棲類、肺魚類、魚類と云ふ様なものは何れも脊椎骨を持つもので、之れ等を一緒にして脊椎動物と云ふ。

脊椎動物の他に又脊椎骨のないものが澤山あつて、之れ等を總稱して無脊椎動物と云ふ。此無脊椎動物にはタコ、イカ、ハマグリ、カタツムリの様な軟體動物もあるし、ハチ、蝶、蚊、蠅、トンボ、バッタの様な昆蟲もあるし、ムカデ、ヤスデの様な多足類もあるし、クモの類もあるし、エビ、カニの類もあつて、それ等を節肢動物と云ひ、ヒル、ミヽズ、ゴカイの様な環節動物もあるし、クラゲ、ヒドラと云ふ様なものもあるし、海綿の類もあるし、又始めに云ふた單細胞から成る動物もある。

生物學者は生物全體を二つに分けて其一を植物界と云ひ、他の一を動物界と云ふが、最も下等のものになると夫れが植物であるか動物であるか判然せないものがある。有名な動物學者へッケルと云ふ人は之れ等動植物の中間にあるものをプロチスタと名づけて一つの界としたのである。併しハックスレーが云ふ様に此プロチスタの界を造つたとてそれで植物と動物とが判然と分たれるものではなく、之れを造ると之れ[illegible]動植物の間が曖昧であつたのが、今度は、曖昧の場處が二つになるから、之れは反つて困難を增す事になると云ふた。ハックスレーの此言は實に當を得た事であつて、實際動植物の中間に位して居るものは實に澤山あつて、之れ等が又此一物が同一の處から出て來たものである事を證明する譯である。で又動物で云ふて見ると、其界の内に單細胞から出來る原生動物があり、夫れから海綿動物、腔腸動物、蠕形動物、節肢動物、軟體動物、棘皮動物、脊椎動物と云ふ様なものがあるが、之れ等が何れも皆原生動物から進化して出來たものであると云ふものが、之れが今日の進化學が敎ゆる處の事である。

處が此進化は如何にして出來たものであるかと問ふと、夫れは原生動物の内にも既に色々の進化が出來たのである事が判る。尤も我々は一番始めの生物が如何にして出來たかは知らないが今日の生物體を構成する物質が悉く皆此地球にあるもので

あつて見ると、之れ等の物質が如何にかして結合し、遂に原形質塊が出來て最初の生物が出來たものであるだらうと思はれるのである。して此様な原形質塊は無論最も簡單なもので其全身を構成する物質は同様な少しも分化せないものであつたらう。即ち原形質の單位は無機物質の夫れに比べると複雜したものであつたらうが、之れ等單位は相互ひに同じものであつたらうと思はれる。

斯う云ふても之れは事實でなく、唯多くの學者達が斯う考へるのである。何せと云へば今日では斯様な生物はまだ一つも見付からないからである。

夫れで我々が知る最も簡單な生物は前に云ふた様なバクテリヤである。此バクテリアには原形質内に既に染料で染まる粒々があつて、それがバクテリアが二個に分體する時に一緒に集まつて來て核となるのである。それから次ぎに核のある多數の單細胞動植物があるから、詰り核は斯様にして原形質内に出來たものだと見る事が出來やう。で何んの爲めに核が出たかと云ふと之れは原形質の内に外圍に對する仕事と消化や生殖に關する仕事とが分れて司どらるる様になつたからであるだらう。

何んにしても細胞體内に分業が起つたもので、其の一番始めが外圍に對する仕事と生殖の如き事に對する仕事とであつたらふ。此二つの仕事は生物體に取つては最も肝要なもので、我々人間の如きも皆此二つの大きな仕事をして居るものである。夫れは我々も皆生活して居るし、又生殖をするのである。であるから此生活と生殖とは何れの生物にも最も肝要な事であつて之れが原始生物でも既に分れたのである。

夫れから之れ等單細胞の生物は如何なる事を致すかと問ふと、夫れは他の物質を體内に取つて自分の體質と同一のものとするのである。之れが同化作用で、多くの植物は無機物から之れをなし、動物は植物又は他の動物を取つて之れをするのである。何れにせよ生物體を構成する原形質は同化作用をするもので、夫れで體質が增加するのである。

處が何れの單細胞生物も或る處迄體質が增加すると二分して二つになるのである。之れを分體生殖と云ひ、一つの生物體は斯様にして二つとなるのである。

單細胞生物は何れも皆斯様にして增殖するものであるから、之れ等には決して死ぬと云ふ事はないのである。成る程一つの體が二分して二つになるのであるから、二分する前が親であつて分れた二つは子供の様であるが、子供は實は親の體の續きであつて子供が出來ればとて親の體が失せるのではない。ワイスマン博士が戲談半分に云はれた様に一定のアメーバが二分せん

する時に各半體は娘を産むと思ふだらふが、二つの體は前のものの半體であるから何れが親で何れが娘であるとも云へない譯であると。であるから之れ等單細胞生物ではまだ死と云ふ現象は知られて居ないのである。

であるから彼れ等は實に不老不死で、彼等の浦島太郎は玉手箱を開けても悔がる事もないのである。

處が斯樣な單細胞生物も其儘で細胞内に段々と分業が出來、其内には主として運動を司どる部分が鞭毛又は纖毛となつたり、又は眼點が出來て、光線又は溫度に感ずる事を致したり、或は筋肉の樣なものだの神經の杯なものの樣が出來て、單一の細胞内に色々の分化が生じて來たのである。併し單細胞の體内に生ずる分化は大概定まつたもので今日見る處の纖毛蟲のゾウリムシやラツパムシ杯は其頂上に達したものであらふ。

で斯樣な單細胞蟲が分割した時に分割體が離れないで一緒になつて居たものがあつたとすると、其澤山の細胞の間には其位置其他の事柄から又今度は細胞と細胞との間に分業が起つて來て、夫れで異細胞生物が出來たのであらふ。

之れも無論始めの内は同じ樣な細胞が集まつて居たから夫れは單細胞生物の群であると見ても宜しいのである。處が斯樣に澤山細胞が一緒になつて居ると、其相互の位置其他で外圍に對する事柄が違つて來るので、各細胞が致す仕事が變つて來る譯になる。で夫れが又單一な細胞内に起つたのと同樣、群の外界に對する仕事をするものと、內部の仕事をするものとが出來、生殖の仕事は內の方にある細胞が致して他の仕事は主として外面にあるものが致す樣になつたのであらふ。即ち此場合でも生活の仕事と生殖の仕事とが先づ分れたのである。

して斯樣なものは唯我々が腦裡に考へる許りでなく又既に生存して居るものもあるのである。例えばマゴスソエーラと云ふものは單細胞の有樣で居る時と澤山の細胞の集まつた樣な時とがあつて、調度單細胞生物と多細胞生物との中間に位するものである。夫れからパンドリナと云ふものになると、始終十六の細胞が一緒になつて居るが、それ等十六の細胞は各々が生活と生殖兩方の仕事をして居る。夫れがプレオドリナになると、生活細胞が段々出來て來、ボルボクスでは一千以上もある生活細胞の内に四つ位（最も少ない場合では）の生殖細胞がある。

夫れから他の多細胞動物の間に又段々分業が起つて來て、遂に前に云ふた樣な色々の動物では生活細胞の仲間が出來たのである。

處が玆に面白い事には何れの動物の仲間を見ても、夫れ等は今日の處では大概大層分化して居るもので、或は夫れ以上分化

發達する事は出來まいかと思はれるのである。例えば一つ弁推動物を取つて見ても、魚類にも板鰓類、硬鱗類、硬骨類等があるが、之れ等は皆其方では充分に分化したもので、之れ等が夫れ以上に進化するものとも思はれない。夫れ計りでなく、之れ等は皆進化の頂上に達したもので、或は其或るものは既に下向きになつたものではあるまいかと思はれるのである。即ち魚類でも硬鱗類の如きは既に遠い昔時全盛であつたし、兩生類や爬蟲類も夫れより後ではあるが、之れ等も今日では最早や全盛の時代は遠く去つたのである。鳥類や獸類は夫れに比すれば遙かに後ではあるが、之れ等も今は既に消滅したものが多い。

夫れから此發生進化が如何にして出來たのかは之れは又面白い問題で生物は生活中色々の刺擊を受けるもので、其爲に色々に變るものである。孟母三遷の教は何れの生物にも通用せらるるもので、同じタンポヽでも高山に植へたものと原野にあるものとは違ひ、琵琶湖に行くと小鮎と云ふ小形の鮎が居る。處が此鮎が小形であるのは、夫れは其棲息する場處の關係からでつて、之を好都合の河川に放流すると又大きな鮎になるのである。處が此小鮎は夫れは夫れは久しい間—或は人類がまだ此世に出ない前から—琵琶湖に居て小さくなつて居たものである。然るに之を適當な河川に放つと大鮎になるのは面白いではないか。

であるならば、生物は外圍の爲めに變らないものであるか。之れが面白い問題で又生物進化の上から計りでなく、又人生にも甚だ肝要な問題である。

前に云ふた様にラマークが唱へた進化の原因は全く之れで、生物は生存中外圍の爲めに變ずるものである。して此變化が後世のものに遺傳するのである。夫れで生物は段々と變つて行くと云ふのである。

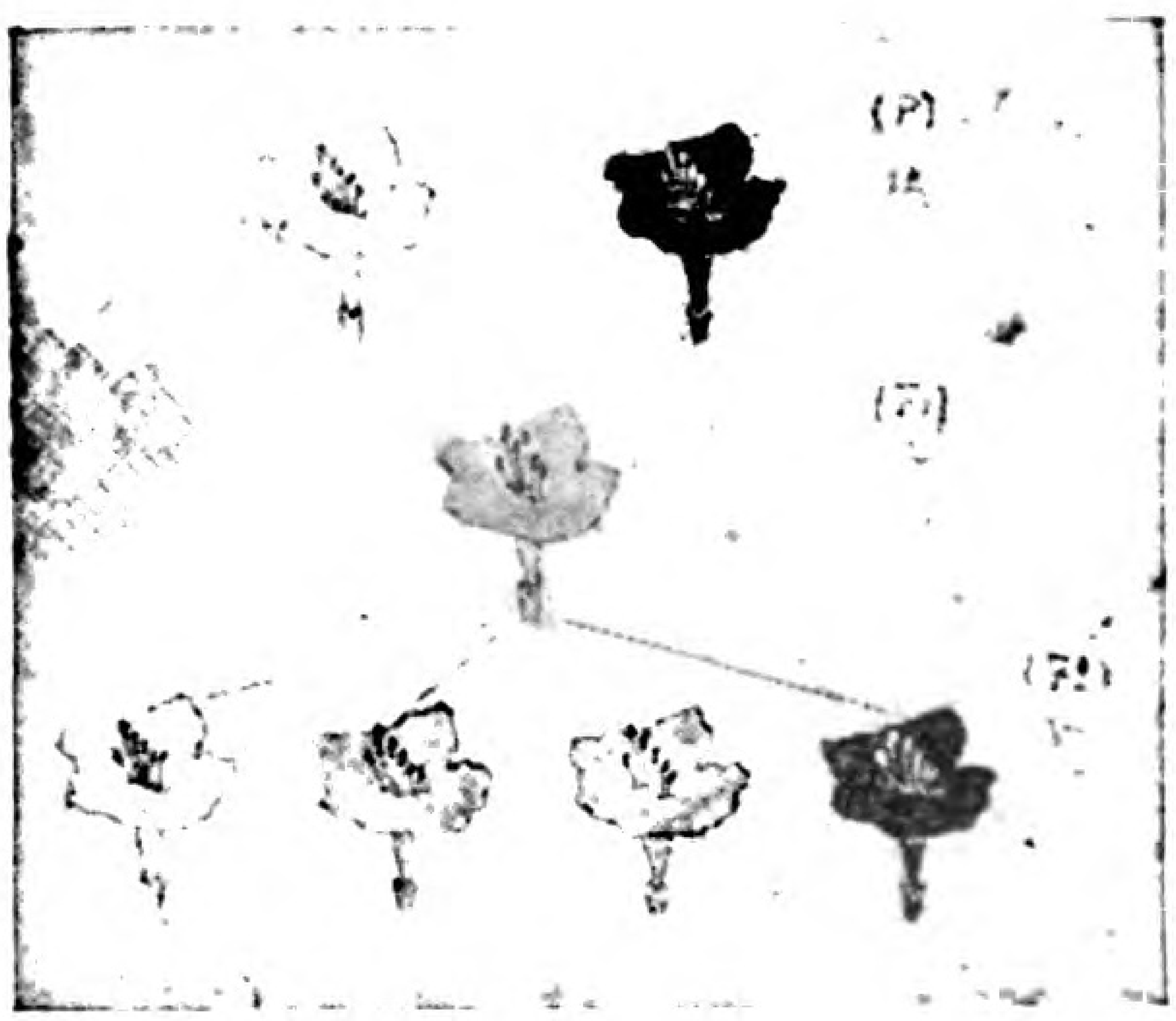
ダーウヰンは或る處迄はラマークの此說を採用したが、其外に陶汰說を出して變異と遺傳は自然界にあるものとし、此變異に陶汰が働いて生物が段々に變るものであると說いた。ダーウヰン后に進化を云ふた人々は殆んど皆ダーウヰンと同様に考へて居たが　生殖細胞の出來る事を段々調べて見ると　茲に面白い事實が判つて來た。夫れは　生殖細胞は親の體内に出來るものであると一般に考へられて居たが、事實は全然此れと反對である。解り易い例で云ふて見ると久しい間家鷄が卵子を生むと思つて居たが、夫れは間違いで、其實卵子が家鷄を生むのである。人間で云ふて見ると　吾々の身體は母の體內にあつた卵子から出來て來るので、其卵子は又其前の卵子から出來て來たのである。であつて見ると卵子は地下を走つて居る蔓根の様なも

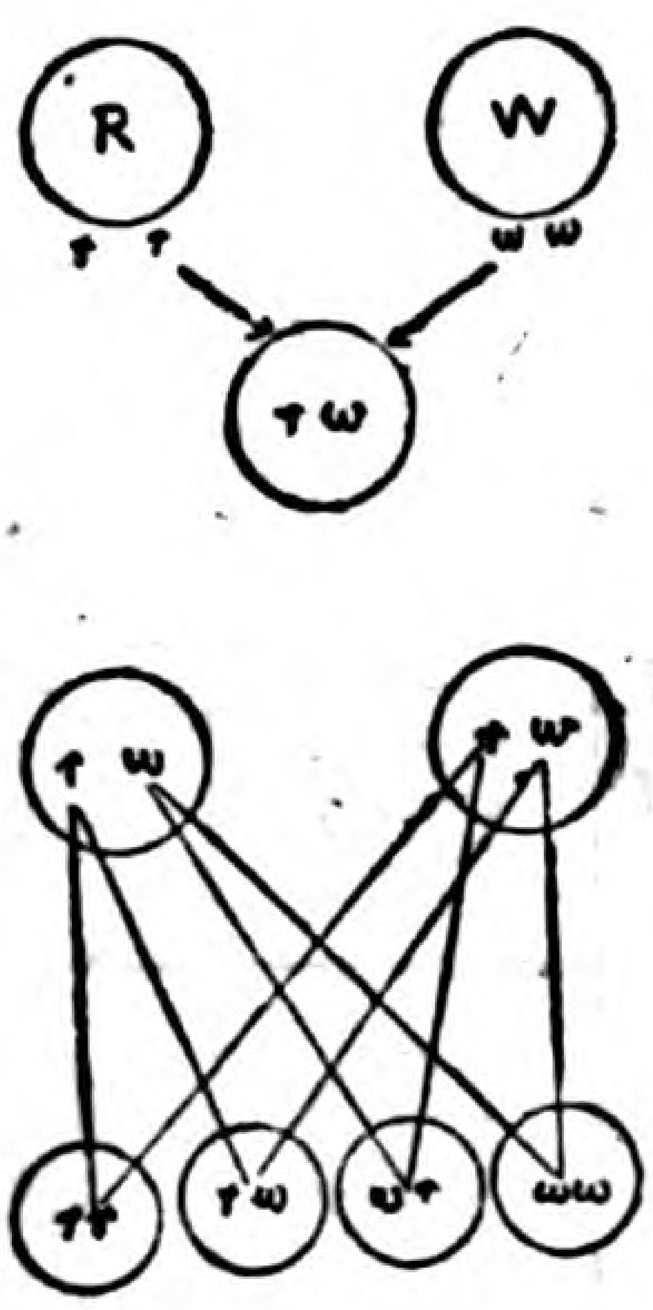
ので、此莖根から年々歳々幹や葉が生えて來るが、之れ等が個體である。で芝の様な植物を考へて見ると　其地下に走つて居る莖根は生物體の生殖細胞又は生殖質に比ぶべきもので之れをアベコベに云ふと此莖根から毎年生へる緑色の莖や葉が之れが個體である。地下にあつて長く生きて居る莖根が生殖質で　夫れから毎年生へて來る葉や幹が個體である。

斯様な事を考へ又之れを事實で證明されたのは、それは十九世紀の末から二十世紀の初めに動物學上で雷名を轟かした彼のワイスマン先生であつて、之れが彼の有名な生殖質連續說と云ふものである。

誰れも知るメンデルは夫れより遙か前に遺傳の事實を研究して生物の單位は純粹に保存せられて行くものである事を證明し、二つの相對する單位が受精に依つて一個體内に入つて來て子供が出來ると箇置な場合には中間の形質が現はるるが、此子供の體内にある生物細胞では之れ等の單位は全く混じつたものでなく　其孫になると二つの單位は又離別するものである。と云ふ事を澤山の事實で證明した。

であつて見ると生物の變化は直接に外圍の爲めに變ずるものでない事は明かな事實である。之れは今云ふたメンデルの實驗でも亦ワイスマンの研究でも判る事である。

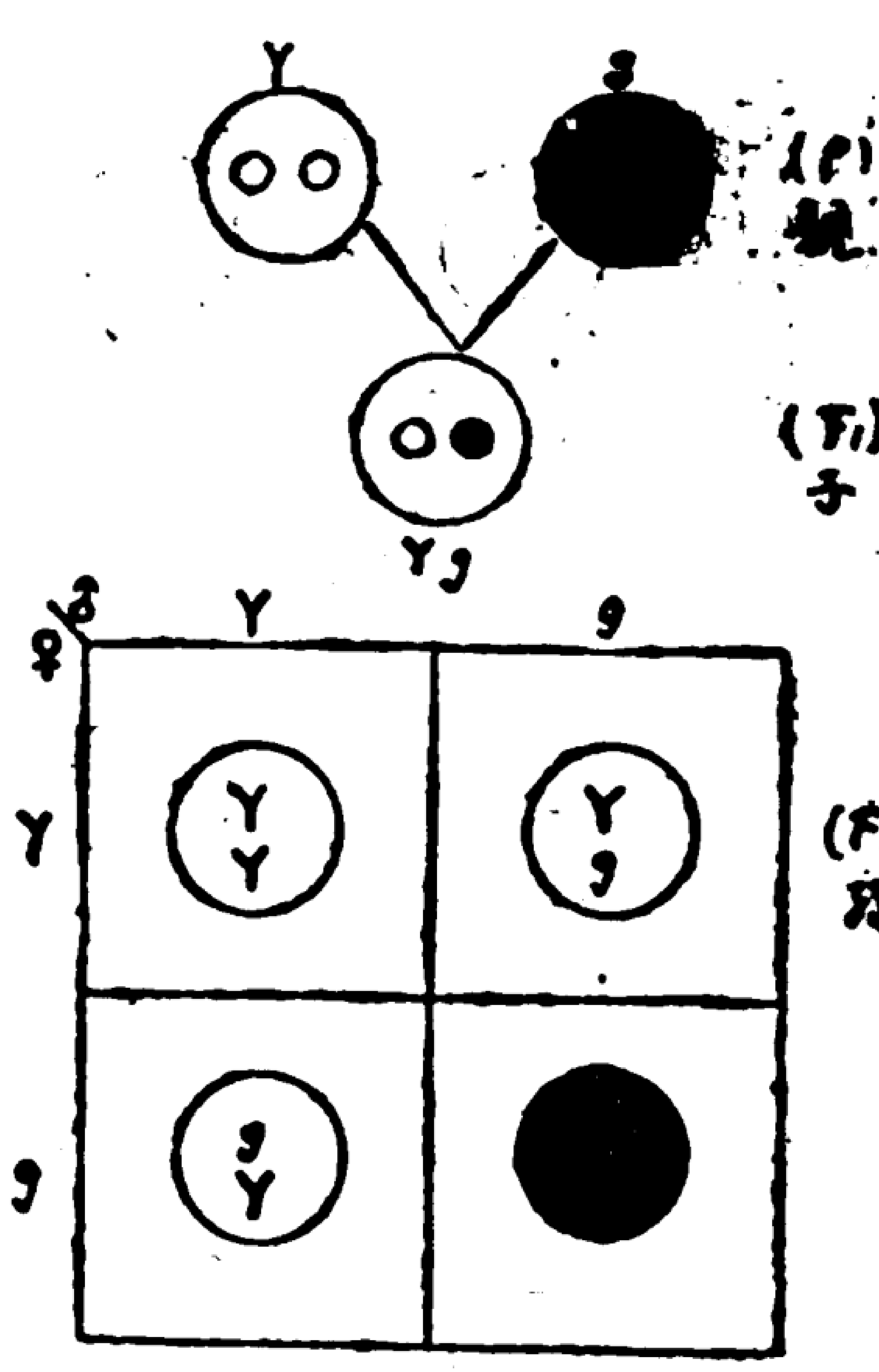




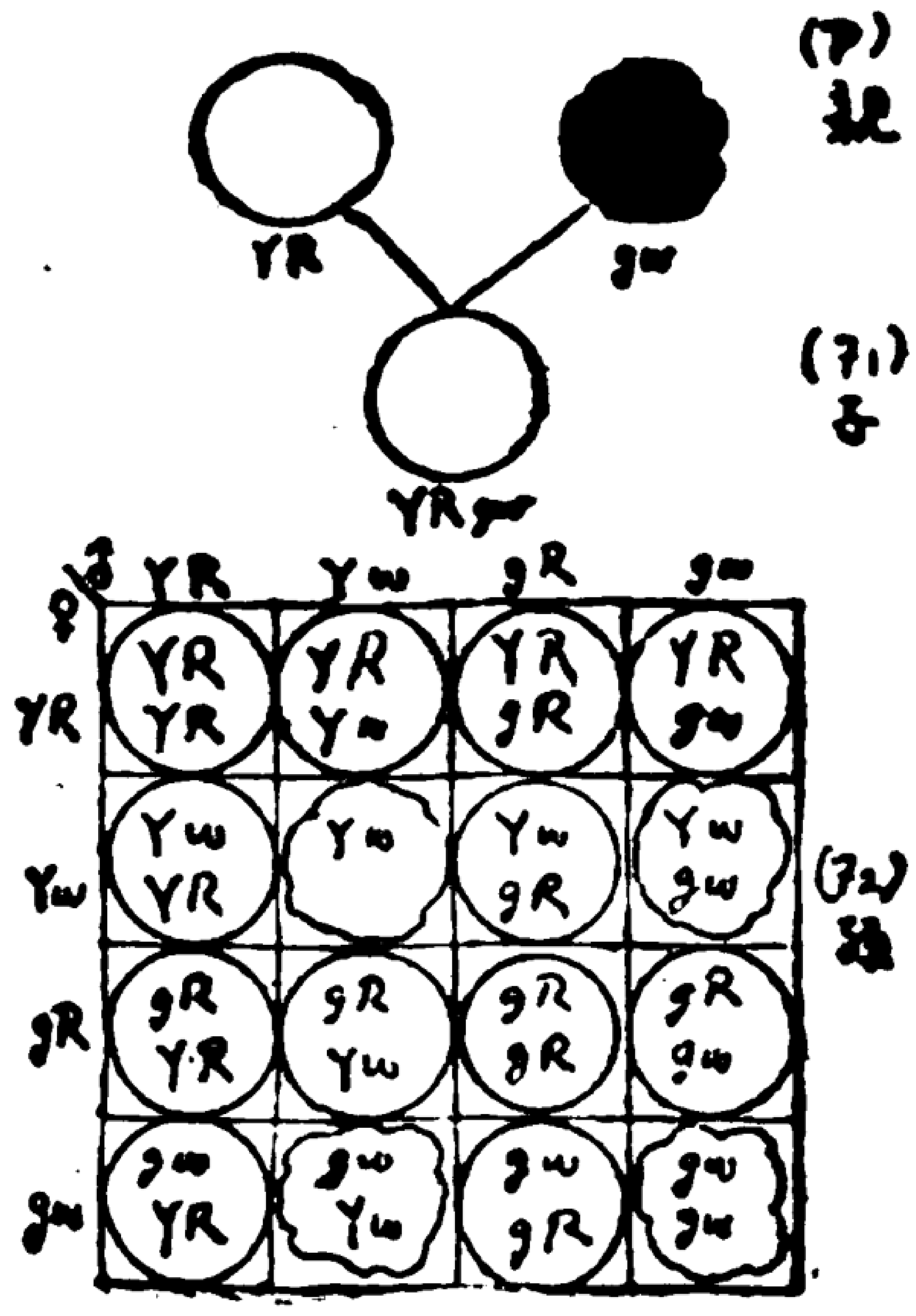
親
子
孫

併し玆に遺傳に關して最も面白くて又最も大きな進步は今云ふメンデルの實驗で、例へばヲシロイ花で白いものと紅いものとがあるが、此二つを掛合せると中間の桃色の花が咲く子供の植物が出來る。處が此桃色の花のもの同志の掛合せから出來た孫の植物は其數の四分一が紅い花の咲くもので、四分一が又白い花のもので、殘りの四分の二が桃色である。夫れは今云ふた生殖細胞にある紅白の單位が純粹に分れて居る事を示すものである。であるから白と紅の花粉と卵子とが一緒になつて出來た子供の花が桃色に見へて、二つの色が混じた様ではあるが、之れは此子供の植物の身體で斯やふ見へ

るので、其生殖細胞では此白と紅の單位は純粹に分れて居るのである。之れを式圖で示し、紅い單位をRとし、白をWとすると、此二つの掛合せから出來た子供の植物にはRとWとで其花の色は桃色である。けれ共其生殖細胞にある單位は或は白或は又紅と云ふので一般に此紅が半分に白が半分である。であるから、其花粉も半數が紅で又半數が白である。之れ等が一緒になると、WとWとが一緒になつて白花の咲くものが出來、RとRとが一緒になつて紅花のものが出來、WとRとが一緒になつて桃色のものが出來るのである。して之れ等の內でRとR又はWとWとは四分一づゝであるがRとWとは四分の二丈け出來る事になる。夫れで此面白い數が出來るのである。であるから白と紅と云ふ二つの遺傳單位が掛合せられた場合には子供の體內の生殖細胞には或は紅又は白と云ふ單位が分れて出來る譯で、之れ等が掛合せられると四つの掛合せが出來るのである。處が茲に又面白い事には斯樣に二つの形質が一緒になつた場合一つの方のが子供に現はれて他の方は現はれない事が往々ある。例へば豌豆に黃色のものと綠色のものとがあるが、之れ等を掛合すると、夫れから出來た子供の豆は黃色で綠色の處は少しも見へないのである。で斯樣な子供同志の掛合せから出來た孫は四分の三が黃で四分一が綠色である。夫れは此四分の三の內の一が本統に黃色なので、二は黃と綠とが半分づゝ入つて居るのである。であるから斯樣な場合には生殖細胞が持つ單位は黃又は綠であるが、身體細胞で現はれるものは黃色である。斯樣な時には身體に現はるものを優性と云ひ、現はれないものを劣性と云ふ。

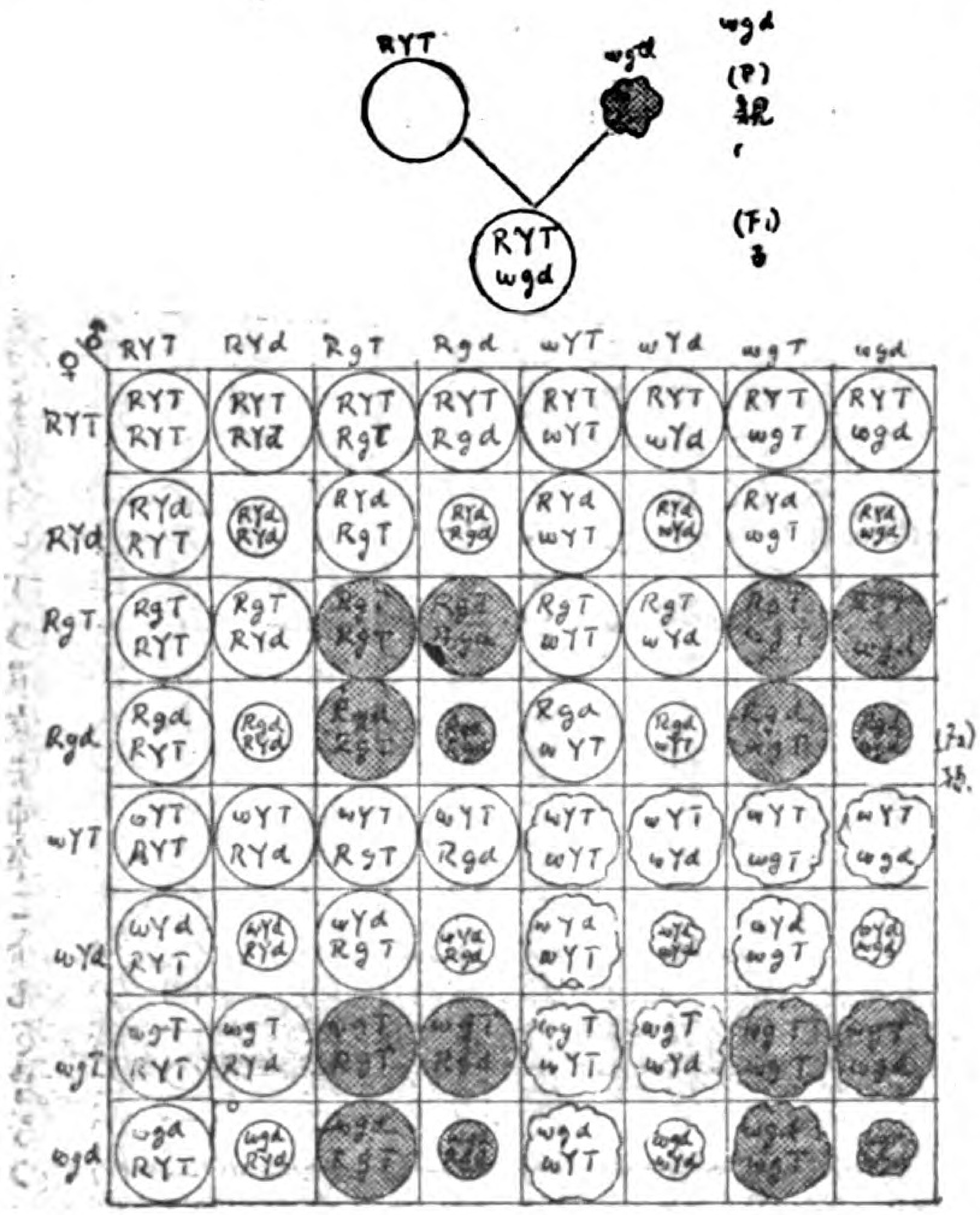


豌豆で黃色(y)のものと綠色の(g)ものとの掛合せの子と孫
上は兩親で、Pに示すのは生殖細胞、次ぎは其掛合せから出來た子で黃綠が入つて居るが黃が優性であるから、豆は黃色に見る、併し其體內にある生殖細胞では黃と綠の單位が分れて居るので、之れ等が次ぎの孫の代で示す樣になるのである。



次ぎに斯様な場合に若し相對の單位が各生殖細胞に二つゞつあつたらば如何であるかと云ふと、之れ等が掛合せられると二つと二つとで四つになる譯である。之れが掛合せられて孫が出來るのであるから、此孫の體内に入つて來るものの數は四と四を掛け合せたもの即ち十六になる譯である。之れを又式圖で示すと、今云ふた黄綠の豆では子供と孫とが第四圖に示す樣であつて其の割合が九三三一となるのである。

之れがメンデルが遺傳に就いて發見した大きな事實であつて、此割合は今云ふた樣な相對形質が三つでも四つでも全然同



じ様になつて行くのである。例之ば夫れが三つの場合に出來る生殖細胞は八種であつて、夫れが掛合せられると八八で六十四になるので、之れが又二七、九、九、九、三、三、三、と一と云ふ違つた遺傳單位を持つた個體に分れるのである。

之れは何を意味するかと問ふと第一に生殖細胞にある遺傳單位は純粹に一代から次ぎの代に傳はるものである事と相對のものは生殖細胞では一緒になつて色々に現はるるが、生殖細胞で再各々が分離する事である。之れに關して面白い事はワイスマン先生に依つて始めて論ぜられ其後澤山の學者に證明せられた生殖細胞成熟の時に起る染色體の減數分割で、之れが今云ふメンデルの遺傳法則を細胞の方から說明するのに最も都合の好き事である。今試に之れを簡單に說明して見ると左の樣である。

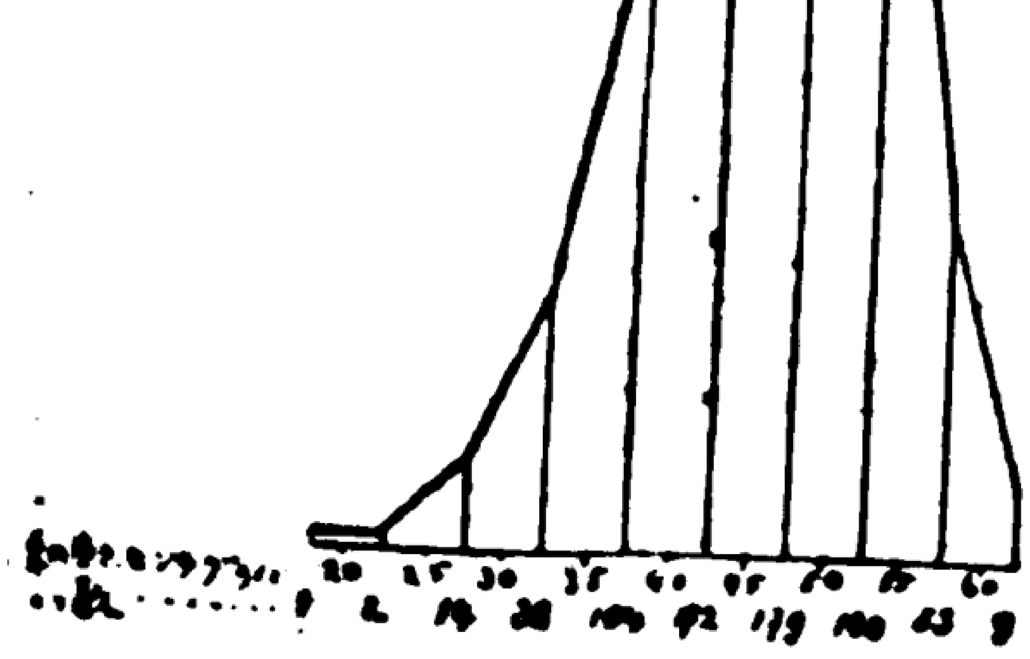
・普通細胞の分裂の時に染色體は縱に分れて其半分づゝが娘細胞に入るものである。處が生殖細胞では染色體は一度合して其數が半減し次ぎに之れが二回分れて四分するものである。故に花に受精で出來た染色體が若し生殖細胞に四つあれば、之れ等が一度合して、其數が二つになり、夫れが二回分割して八つになるのである。で之れ等八つが四つの細胞に入るのであるから、各細胞には二つづゝの染色體が入る譯になる。例之ば茲に赤い花の咲る白粉花があつて、其二つの染色體は赤であり、又他の白粉花は白で其染色體は白である。すると、此二つが受精で一緒になつて、夫れから草が出來ると其花には紅と白とが這入つて居て、桃色になるのである。處が其生殖細胞には紅と白との

染色體が別々になつて居るから白計りで入つて出來る子供と赤計り入つて出來る子供と赤と白とが入つて出來る小供とが出來る譯で、夫れが前にメンデル式で示したのと全く同一の一、二、一と云ふ割合になる譯である。

であるからメンデルが實地に見付けた遺傳の法則は實に能くワイスマンの生殖細胞の減數分割で說明する事が出來るのである。無論之れは形質が二對でも三對でも四對でも全く同じ事で、何れの場合も皆此ワイスマンの減數分割で好都合に說明する事が出來るのである。

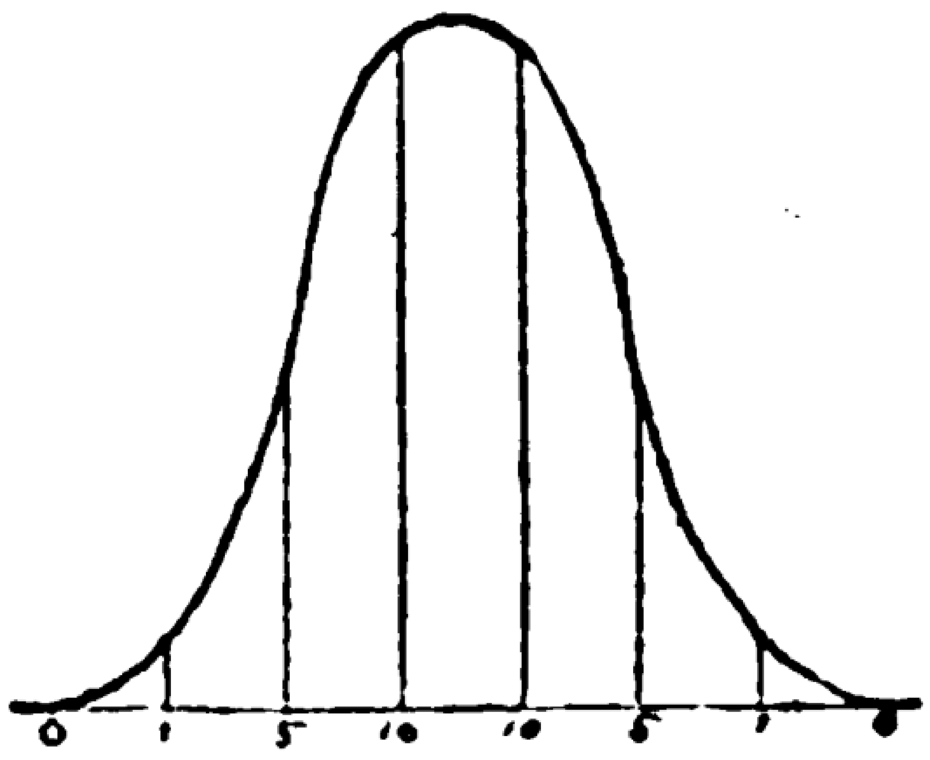
併し斯樣にして遺傳單位が幾代も純粹に傳はつて行くもので、夫れが外圍の影響に依つて少しも變らないものであるならば、如何にして種類が變るものであるだらふか。之れが甚だ六づケ敷い問題で今日迄多數の生物學者の頭を腦ましたのも實に之れである。

又他の方面の實驗でも夫れが又さうである樣に見へるのである。例えば色々變つた遺傳單位が混じて來ない純粹な遺傳系統のものが生殖して子供が出來る場合に其子供の內に澤山の違つたものは出來るが、其變異は一定の範圍內にあるもので、夫れより上にもならなければ又下にもならないのである。單細胞動物で分割生殖をするもの又は異細胞生物でも一個體內で受精をするものでは之れが知られるのである。ヨハンセンは一粒の豌豆から出來た株に咲いた花を自個受精で豆を造つた處、之れ等には無論色々の點で違つたものが出來た。一つの例を擧げて見ると、斯樣にして得た豆の一株に出來た豆の數が七一二あつて、其目方が二〇から六〇センチグラムであつた。即ち之れ等七一二粒の豆の重さは二〇から六〇の間に色々違つて居たが、之れ等が如何樣な數になつて居るかを云ふと、一五と二〇センチグラム間のものが一粒、二〇と二五間のが二粒、二五と三〇とのが一四、三〇と三五間のが三八、三五と四〇との間が一〇四、四〇と四五間が一七二、四五と五〇間のが一七九で夫れから又數が段々減じて來て五〇と五五間が一四〇、五五と六〇が五三六〇と六五間のが九であつた。之を式圖で示して見ると、第六圖の樣なものになる。で之れをカーブにすると、がらすのプロバビリチイ、カーブに近いものが出來る。尤も此カーブは少し豆の數が千とか二千とか云ふ樣に多くなると、一層計算的な規則正しいカーブに近いものになるのであらふが、數が少いから斯樣なものが出來たのである。併しそれにしても面白い事は中位の重さのものが最も多いので輕いものも重いものも割合が少い事である。



之れは豆が出來る時に營養其他が最も宜しい具合に行つて重いものが出來るのも、亦其具合

が悪くて輕いものが出來るのも、何れも比較的に少いからである。バウエルに云はせると、重い豆が出來るのには先づ左の五つの事が必要であらふ。此五つの事とは(一)莢内にある豆粒の數の少ない事、(二)枝にある莢の少ない事、(三)枝に葉が多い事、(四)莢の大い事、と夫れに(五)枝に能く日が當る事とであつて、それに反對な事柄は豆の重さを減ずるものである。處が之れ等五つの事柄が皆揃つて重い六〇サンチグラムの豆が出來る場合も誠に少なければ、又それが皆欠けて、最も輕い二〇サンチグラムの豆が出來る場合も誠に少ない譯である。して此五つの場合が如何樣になつて來るかと問ふと、之れはバウエルが云ふ樣に五つが全く備はつた場合が一回で之れを+5で示し、其反對を−5で示すと、+5と−5が各一回、+3と−3が各五回、+1と−1とが各十回になる譯である。夫れで今も云ふた樣に試驗した豆の數が千以上もあれば、次ぎに示す樣な規則正しいカーブが出來るのである。



處がそれ等の豆は今も云ふた樣に自個受精から出來たものであるから、其生殖質は略同一である。であるから、之れ等の相違は全く今掲げた樣な色々の外圍影響の爲めである事は明白である。で茲に甚だ面白い事はそれ等に豆の内で一番重いものを蒔いて次ぎの代の豆を取つても、其内に出來る豆は決して重いもの許りでなく、又輕いものも出來て、其内の變異は又前の時と同じ樣に二〇サンチグラムから六〇サンチグラム迄である。夫から此反對に今の豆の内で一番輕い二〇グラムのものを蒔いても其株から又豆を取つて見ても夫れが又輕いもの許りでなく、前のものと同樣に輕いものと重いものとが出來て、其變異は矢張り二〇サンチグラムから六〇迄の間である。でもそれは一つの豆から得たものであるが、事實は斯樣であるから斯樣にして得た豆の重さは出來たもの丶内で重いものを取つてもそれから夫れ以上に重いもの許りを得る事は出來ないし、又輕いものからも夫れ以下に輕いものを造り出す事は出來ないのである。それは前に述べたワイスマンの生殖質說を裏書するもので、豆の大小は外圍の影響に依つて出來るからである。

處が乾物屋杯にある澤山の豆を取つて一々之れを蒔いて夫れから次ぎの代の豆を造つて見ると、Aのものでは今云ふた樣に重さの變異が二〇から六〇の間にあるものがあるかと思ふと、Bの豆ではこれが三〇から七〇の間のものもあり、又は四〇から八〇迄のものもある。併し其何れのものを取つて子供の豆を造つて見ても一豆から出來たものでは其變異の範圍は同じ事で三〇から七〇迄のものでは三〇のもの同志からでも矢張り三〇から七〇迄の間のものが出來て決して二〇のものも出來なければ又八〇のものも出來ない。夫れで一ケ處にある豆を澤山取つて斯樣な試驗をして見ると、同一の場處にあるものでは、大槪斯樣に一定した變異を示す事が判るのである。例えばAの豆で

は其異が二〇から六〇迄、Bでは三〇から七〇迄、Cでは四〇から八〇迄と云ふ様に幾つか斯様な遺傳系のものが區別されるのである。ヨハンセンは之れ等を純系と云ふ。であるから、ABCD等のものは各其重さに於ては違つた遺傳系のものである事は明かでAは變つてBにはならないし、Bも亦Cには變らないのである。即ちAもBもCもDも各一つづゝの純系であつて其一々の内では今も云ふた様に今迄あつたものより以上に重くも輕くもする事は出來ない、全體に云ふと幾等か其平均の重さより重くなることである。けれ共此重さも決して其内で一番重ひものより重くならないのである。夫れは今云ふた様に純系のものが其變異範圍を出て重くなる事が出來ないからである。

若し事實が斯様であつて見ると、陶汰は如何になるか。若しも總ての動植物の變異が今云ふた様なもので、生物の變異は全く其生殖質に依るものであるならば、如何にして生物の變遷進化が起つたのであらふ。今云ふた例でもさうであつて、如何にして豆の純系が出來たのであらふ。

古い時から此事に氣付いた人の一人はネゲリイで、彼は色々の點から生物體に働く外圍の影響は其働いて居る間には生物を變ずるとも、それが止まると生物は元來の有様に戻るものであると論じて居た。又彼れは唯夫れを論じた計りでなく、無論又幾つもの例證を擧げて之れを説明し、生物體を構成する原形質は時々變ずる傾向のあるものだと結論して居た。夫れから後にドフリイスが彼のムタチョン説を出して種の變遷進化を説明したが、進化は之れ等學説に依つて完全に説明する事が出來るか?。

又一方には陶汰だが、ムタチョンと陶汰とはドフリイス等が云ふ様に全く關係のないものであるか。ワイスマンはムタチョンも詰る處は生殖質の變異から起るもので、其本原は生殖質の單位間に生ずるものであると云ふて居る。此議論は理論的には考へ得る事で、生物の個體間に生存競爭のある事は誰れも爭ふ事の出來ない事實であれば、一個體内にある器官又は組織内にも之れがあるもので、細胞體内にも夫れがあつて、染色體内の遺傳單位も色々違つたものである以上は其間にも競爭がある筈で、其結果陶汰が行はるるものと考へらるる事は決して無理でないのである。して見ると今云ふた豆の純系其他の起因は詰り之れ等の陶汰に因るものであると決論する事は出來ないであらうか。併し我々は事實に重きを置くもので如何に理論的に之れが斯くあるべきものであると云ふても、事實に於て夫れが證明されない以上はまだ夫れが眞の説明として取る事は出來ないものである。ワイスマンの生殖質單位間の陶汰説が事實に依つて證明さるるであらふかは今后の研究に待つべきである。

氣象漫談

平田徳太郎

定めないものは天氣である。口善悪なき人々は天氣豫報を當てにならぬものの代表として居る。學者技術者が身を削る苦心を以て發する豫報は、往々裏切られて、嘲笑を以て酬ひらるゝ程、それ程天氣の變化は複雜である。此の天氣の變化を支配する諸原因を舉げて、一々説明することは至難のことでもあり、今の場合無用のことでもあるが、大體二つの主なる因子を舉げることが出來る。それは氣壓の配布狀況と、其の地方の地理的條件とである。例へば冬は亞細亞大陸方面に優勢な高氣壓が出來る。其の爲に本邦では一般に西北の風が吹くのが通例であるが、此の際日本海沿岸地方、所謂裏日本方面では、天氣が曇り勝ちで、やゝともすれば時雨空になつたり、小雪が降つたりする。反對に表日本方面、殊に關東地方では斯うした際には毎日好天氣が續く。即ち同一の氣壓配布の狀態であつても、其の地方の地理的關係に依つて天氣が相違するのである。併し同一地方では同樣の氣壓配布のときには大體同樣の天氣となるのである。此の事實は天氣豫報には重要な事柄、否寧ろ豫報の根柢である。大體地球上の氣壓の配置は季節に應じて略定形がある。殊に冬と夏とには其の型式が顯著であつて、冬は冬らしい天氣、夏は夏らしい天氣といふのが、地方に依つて略定まつて居るのはこの爲である。併し冬から夏に、又夏から冬に移り遷りの中間季節には、此の型式が兎もすれば亂れ勝ちで、何方に傾くのか捕捉し難いことが多い。天氣豫報のはづれ勝ちなのは此の時である。而かも此の時は春は花見、秋は散策の、年中行樂の季節で、一日でも豫報がはづれると世間の非難が甚だしい。氣象臺や測候所のなやまされること夥だしい。

○

斯く一地方の天氣には略季節に應じて定形がある。海岸には海岸の定形があり、山地には山地の定形があつて、風向の變化が定まつて居る。風向や雲行を注意する人には、これが平常と違ふことによつて、天氣の變兆を豫知することが容易である。しかし

天氣の變化にもいろ〳〵ある。所謂疾風迅雷の如き急激に起るものと、徐々に一定の經過をたどりて來るものとある。この變化を起す原因となるものの中で最著しいものは低氣壓であらう。

○

低氣壓は大氣中に出來る渦と考へられてゐる。しかし低氣壓内部の氣流や、温度を詳細に調べた結果、低氣壓の組立てに關する解釋は段々變つて來た。始め低氣壓は純然たる渦流で、其の周りでは空氣は時計の針の廻ると反對の方向に（北半球では）中心に向つて流れ込むものと考へられた。この考から低氣壓の移動に伴ふて起る天氣の變化を説明しやうとした。しかし此の解釋では實際の天氣の變化を説明するに適切でないことは夙に注意せられて居た。つまり純然たる渦流であるならば、中心の周りに於ける天氣の變化はどの方向にも略同樣のことが起らなければならないことになる。實際には例へば中心から東南の方面と、西北の方面とでは、天氣の變化は全然相違して居る。こんなことは單純な渦流としては解釋がつかない。そこで低氣壓の解釋に一歩を進めたのは英國の學派であつた。其の後歐洲大戰の終り頃に、諾威學派の一派が、更に一段の歩を進めて、今日では此の學派の解釋が一般に承認せられて居る。

○

諾威學派が新説を提唱するに至つた迄には一つの挿話がある。元來天氣豫報の基となる資料は、廣く地球面上各地の氣象狀況を知ることにある。本邦ならば尠くとも支那大陸、南洋、太平洋方面の狀況までも知らなければならない。歐洲に於ては此の必要上廣く國際間に電報を交換して、各國互に利用して居るのであるが、大戰中は同盟側と聯合側とは、全然電報の通信を斷つて、お互に知らしめない。勿論天氣豫報も公表しなかつた。殊に諾威の樣な中立國では、何處からも通信を得る途がない。それで之れまでの方法で天氣豫報を行ふことが不可能になつた。止むを得ず風向や、雲行等を詳細に觀測して豫報する方法を考へた。つまり農夫や船子のやる天氣豫報と同樣、全く原始的な方法に戻つたのである。方法は古いが、これをやる人の頭は鋭敏であつた。其の結果遂に低氣壓の構造に關する新發見に到達したのである。

○

諾威學派の解釋に從へば、中緯度地方では、極地方から來た氣流の先端と認められるものがある。即ち此の先端のところでは温度や、風向等が判然と變つて居る。それでこの先端のところを不連續線といふ。この不連續線が何かの原因で屈曲して凹んだ所に低氣壓が出來るといふのである。故に低氣壓は渦流で

はあるが、その北面は極地方面から來る低溫の氣流であり、南面には比較的高溫の氣流があることになる。そして低氣壓の中心となる處から、低氣壓の進行して行く前方にあたる不連續線のところでは、南方から來る暖氣流は、北方の寒氣流を乘り越して上昇する。暖氣流が充分に水分を含んで居れば、上昇に伴つて雲を生じ、雨を降らすのである。又中心より後方になる不連續線のところでは、寒氣流が暖氣流の側面を襲ひ、之を押し上げることになる。このとき押し上げられた暖氣流の中の水分は、上昇の爲に凝結し、雨を降らすことになる。つまり低氣壓の前方の或部分でも、又後面にあたる或部分でも、氣流の上昇によつて雨が降ることになるが、上昇の仕方が前後同樣でない。後方では押し上げられる作用が急激である。それ丈け雨も急であつて、且つ風向がこの前後に偏南から、偏西の向に急に變る。それでこゝでは往々陣風（スコール）の現象を起すことがある。故に中心より後方にあたる不連續線を陣風線とも稱する。

○

低氣壓が其の地を通過するときの天氣の變化の順序は、始め東又は東南の風で次第に天氣が惡るくなり、雨も漸次勢を增して所謂地雨となる。

そして低氣壓の通過し去らうとするときに陣風線に會し、一陣の狂風と共に雨が一しきり激しくなり、風向が西に轉ずれば低氣壓が通過し去つたので、天氣が快復するといふ順序になる。

この陣風線の來る前には、場合に依つて一時雨が歇むこともあり、又天氣が殆んど恢復した樣になることもある。又時によつて陣風線に於ける狂風の現象がさ程に著るしくない時もある。

不連續線に於て溫度の急變することは、平地ではさ程顯著でない場合も多いが、高山の上などではこれが著しく分かる。高山では溫度は晝夜の變化よりも、寧ろ風向の變化の爲に急に變ることの方が激しい。

右の樣な低氣壓の解釋は、總ての低氣壓に對して當て嵌まるものともいへないが、大體中緯度の地方に發生する低氣壓には、これに嵌まるものが多い。不連續線の考が、天氣豫報の上に多大の効果を與へて居ることは否定し難い。この不連續線は低氣壓にのみ伴ふのではなく、寧ろ不連續線に沿ふて低氣壓が出來るのであるから低氣壓がなくつても、不連續線に出遇へば天氣が變る。それで不連續線が何處にあつて、それがどう變つて行くかを探すことが天氣豫報の術であるとも云へる。尚この方面の研究は進步の道程にあつて、本邦の學者の中でも藤原、小林諸氏の研究は、この學說の發展に寄與することの多いのは誇るに足ることである。

○

今日では雨といへば、直ぐ低氣壓は何處にあると聞かれる程に、低氣壓は人氣者であるが、實は天氣豫報の上からは、低氣壓は最も取扱い易いものである。何故なれば、其の發展の徑路は略豫察するに難くないからである。しかし雨は決して低氣壓や不連續線にのみ伴ふものではない。低氣壓に對して高氣壓は、一般に好天氣を齎すものとせられて居るが、實は此の高氣壓の方が甚だ油斷がならないので、殊に勢力の弱い高氣壓は、局部的の雨を降らすことが尠なくない。のみならず優勢な高氣壓であつても、夏季は局部的ではあるが、往々猛烈な雨を降らして、出水の被害を來たすことが稀でない。が、この高氣壓に伴ふて來る雨に就いては、未だ適確に豫報せられるまでに研究が進んで居ない。私の經驗では朝鮮や本邦ではこの種類の雨を解決することが肝要であると思ふ。この外に尙低氣壓に關係の無い雨に、地形的に起るものがある。冬季の裏日本方面の雪は多くは地形的のものであることは前にもいつたが、關東、東北方面、殊に其の東半部では、偏東風に伴つて陰濕な天氣がつゞき、あまり強くはないが、降りみ降らずみの雨がつゞくことがある。こんな時の雨は、風向が一變するまでは天氣が恢復しない。こういふ場合には、よく南洋方面から颱風が進んで來て、其の通過の爲に、氣壓の配置を一變せしめ、始めて天氣が恢復する場合が多い。これもこの方面の地形と氣壓の配置とから來るもので、地形的の雨と稱すべきものである。又晩秋初冬によくある、裏日本方面、及裏日本の影響を受ける山間部に見るしぐれも、地形的のものであつて、略定型の氣壓の配置に伴ふのである

○

雨の種類の中で最も痛快を極めるものは夕立であらう。これは一般に雷雨と稱する部類に屬する、急激に起る天氣の變化であつて、これ程男性的な自然現象は恐らくなからう。斯樣な急激なる天氣の變化は、何うして起るか。ここに自然現象の微妙なる働きがある。その一端を明かにせんが爲に、――獨り雷雨のみならず、一般の雨を解釋するにも必要である――此の場合に起る、空中のからくりを少しく述べたい。空氣が何かの原因の爲に上昇運動を始めたとすると、上層は氣壓が低いから、自然其の空氣は膨脹する。膨脹する爲には自分自身の熱を消費して、其の周圍に對して仕事をすることになる。隨つて其の空氣は冷却する。斯樣に上昇の爲の溫度の冷却する割合は、一千米に對して十度となる計算となる。ところで通例空中では上方に昇るに從つて溫度が低下するが、その割合は一千米に對して六度内外である。假りに地面上で二十度であるとすると、此の

時一千米の上空では十四度位である。しかし地面の空氣が何かの作用で上昇して一千米の高さに達したとすれば、十度になることになる。故に斯様な場合に、何かの原因の爲に空氣が上昇し始めても、上昇した空氣の方が何時も周圍の空氣よりも溫度が低くなるから、隨つて周圍の空氣よりも比較的重くなつて、上昇をつゞけることが出來なくなる。即ち一旦上昇運動が起つても、直きにそれが止まることになる。斯ういふ場合を氣層が安定であるといふ。然るに或作用の爲に下層の空氣が特別に熱するとか、又は上層の空氣が特別に冷却して居る場合には、上方に溫度の低下する割合が、普通の場合よりも急になり、一千米に對して十度の割合よりも尙一層激しくなることがある。斯ういふ場合に空氣の上昇が起つたとすれば、上昇した空氣の方がいつも周圍の空氣よりも暖かで、隨つて輕いことになるから、どこまでも上昇をつゞけ得る。周圍の空氣の溫度が上方に低下する割合が大きければ大きい程、上昇作用が盛んであるべきである。そこでこんな場合には、一旦上昇が起ると、その作用はどこまでも續けられることになる。斯樣な特別の狀態にある場合を不安定であるといふ。雷雨はこんな場合に起るのである。夕立につきもの〻夕立雲——積雲——の形の突兀たる偉觀は、氣流の上昇作用の如何に盛であるかを語るものである。

○

しかし一寸斷つて置かねばならぬことは、どこまでも上昇をつゞけるといふたが、上昇の高さには實は際限がある。即ち夕立雲の上端の高さは、地上約十キロ米位より高くなることはない。といふのは、大體氣界は二つの層から成るものであることは、近來上層の探究が盛になつた結果判つた事實である。そして地上約十キロ米位までは溫度は上方に低下するが、それより上層では、溫度は殆ど一定で、上方に溫度の低下するといふことはない。從つて空氣が上昇して雲となり、又雨を起すといふ作用は、上方の溫度の低下する地上十キロ米以內にのみ起る現象で、これより上層にはこんな現象は起らない。つまり十キロ米以上の上層では天氣の變化がなく、いつも晴天である。要するに天氣變化の現象は、僅に地上十キロ米位迄の高さの間にのみ起るのである、故に最も高い雲と雖も、此の高さを越すことはないのである。而してこの天氣の變化の起る高さ以內を對流圏といひ、その上の層を等溫層と稱する。

○

そこで雷雨を醸成する氣層の不安定狀態は、どんな場合に起るかといふに、例へば盆地を爲して居る地では、夏日は特に地面近い空氣が熱せられ、この爲に上下の溫度の差が急になるの

である。こういふ特別の場所に雷雨が起り易いので、雷の發生する場所は略一定して居る。東京附近に來る雷の多くは、甲府附近の盆地に醸成せられると謂はれて居る。又反對に上層の特別に冷却した爲に、氣層の不安定になる場合の例としては、海上に起る雷がある。海上では晝夜ともに温度の變りが少ないが、其の上層では或場合には夜間特に冷却することがある。そんな時には上層の最も冷却した曉方に雷が起る。内陸では雷は夏日の午后に多いのに對して、海岸地方は雷の曉方に多いのはこの爲である。又上層に寒氣流が襲來して氣層を不安定ならしめる場合もある。冬の雷はこんな場合に起ることが多い。又斯ういふ熱的作用以外にも、低氣壓の陣風線にあたるところで、急に氣層が押し上げられる爲に雷を起すこともある。この場合にも、大體氣層が不安定である場合に、現象が著るしく起るのである。

夕立の樣な俄雨の來る前には、一般に風の無い極く穏かな天氣の日であるが、この一見靜穏に見へる間に、氣層の不安定が醸成せられて居るのであるから油斷がならない。果して氣層が不安定になつて居るかどうかといふことは、上層で實地觀測して見るより外ないので、普通の地上の觀測丈けで、之を看破することは出來ない。只こんな場合には、よく不安定になつて居ると推察する丈けである。今日では、飛行機で一二時間で二三千米も上層の觀測をして來ることも出來る。又凧や風船を飛ばして觀測する方法もある。が、日本では現在茨城縣に高層氣象臺が一つあつて、毎日上層の觀測をやつて居るのみで、上層の模樣の判然しないことは、こんな突發的な天候を豫報する上に、甚だ遺憾なことである。

○

夕立は突發的なもので短時間に終始するものであるが、其の經過に略一定の順序がある。最初蒸し暑さを感じ、風は無風に近いが、愈々雨の將さに來らんとする二十分位前になると風が一時全く靜まる。次で暫くすると微風が起る。この風は雷雨の來る方に向ふ。これが數分つゞくと、次いで一陣の冷たい急風が來る。この方は雷雨の中心から送り來るので、その風の吹き來る方向が、即ち雷雨の進來する方向である。これについで沛然たる驟雨が到るといふ順序である。雷雨に伴うて起る一つの著るしい現象は、氣壓の急變である。雷雨が始まると同時に氣壓は急に高まつて、其の後漸次平復する。其の變化の曲線は丁度鼻の恰好に似て居るので、專門家はこれに雷雨の鼻の名を與へる。

雹は雷に伴ふ現象の一である。雹の構造は雪片を心核として其の上に氷層と雪層と交互に重なつて出來たものである。其

の構造の上から見ても、空中上層の雲層の上下を往復する間に、次第に大きくなつて、終に降下して來るものであることが分かる。記録には雹の大さ拳大の如しとか、雞子の如しと云ふものもあるが、誇張もあつて悉く信用は出來ないが、大豆位のものは珍らしくない。こんなものを空中に支へて掀擲して居る氣流の强さを想像して見るがよい。如何に强烈な上昇氣流が、雷雲の中に行はれて居るかを推察せられるであらう。

○

雷に伴ふ現象の中で、最も偉觀なのは、いふ迄もなく電光であらう。其の陰陽電氣の放電であることは、ベンヂヤミン・フランクリン以來誰も知つて居ることであるが、實驗室で五六寸の火花を出すにも多大の電壓を要することから考へても、非常の電壓がなければならぬことが知られる。斯樣な電氣は如何なる作用で起るか。これは長い間の疑問であつたが、現ロンドン氣象臺長であるシンプソン氏が、先年印度シムラ氣象臺に在勤中に、雨の帶電性を實測した結果、一説を提唱し、今日ではその説の眞なることを一般に認められて居る。氏の説は、其の以前にレナードが瀑布の水が岩の上に碎けるとき、其の散つた水滴と、同時に空氣にも電氣を生ずることを發見したが、この事實を應用したものである。この説に從へば、氣流の上に支へられて居る水滴は、段々大きくなれば分裂する。其の分裂するときに水滴は陽電氣を帶び、周圍の空氣は陰電氣を帶びる。一旦電氣を帶びた水滴は、互に結合して大粒になり易い——之は雷雨性の雨の粒の大きい理由である——大粒になれば、從つて分裂し易くなる。斯く屢分裂や結合を繰り返へす間に、段々澤山の電氣を生ずる。そして一方に空氣に生じた陰電氣の方は、更に上昇して上方の雲に陰電氣を與へる。斯くて壯烈な放電を爲すに充分な電壓を生ずるに至るのである。そして陽電氣を帶びた大粒の雨滴は、最初强烈な氣流の中に支へられて居るが、次第にこの氣流の外側の方に運ばれる。そこでは氣流の强さが段々弱くなる爲に、之を支へることが出來なくなつて、どつと降つて來る。これが雷雨の始めに降る强い雨で、この雨は陽電氣を帶びて居る。又雷雨の終頃に降る雨は、陰電氣を帶びて居るが、空氣に起つた陰電氣が、上層の雲にその電氣を與へ、この雲が漸次雨滴となつて降つて來たものである。

雷は非常に廣大な區域に、殆ど時を同うして起る場合もあるが、又或地方に起つたものが、漸次發達しつつ進行するものもある。進行の方向は大體西方から東方に向ふものが多く、其の速さは一時間十里位のものが多い。

○

私は雨につきて大分長く談義を費したが、雨や、雷は氣象現象として最も著しい事柄でもあり、又最も興味の深いものであつて、これについて述べれば際限もない。尚雨と共に本邦で大事な現象は霧である。之亦趣味としても、又交通、産業其の他の關係からも大事な事柄で、說くべき事が甚だ多いが、今は其の季節でもないから、少しく方面を代へて、他の問題に移らうと思ふ。

○

氣體である水蒸氣が凝結して水の形となる作用の一は、上昇して冷却することであつて、雨の成因はこの作用によることは已に述べた通りである。其の外に溫度の異なる氣流が混合して、溫度の高い方のものが冷却する場合、及び冷たい物に接觸して漸次冷却して凝結する場合もある。後の二つの作用で生ずる現象の中で、霧もその一つである。

霧の最も偉觀を極めるのは海上のそれであらう。その廣大なる區域を覆ふ點に於て、又其の長時間——時としては數日に亙ることがある——永續する點に於て、到底陸上の霧と比較にならない。北海道東岸や、朝鮮南岸は其の名所であつて、夏季の霧季節には航海者の惱まされること夥しい。全く視界を遮ぎつて、眼前咫尺を辨ぜざる物凄さは、實地遭遇した者でなければ想像が出來ない。海上の霧は海流の關係であることは、夙に考へられて居たが、暖流を越して吹き來たる暖風が、寒流の上で冷却する爲に起るのであることが明らかとなつた。故に海上で霧に遭遇した場合には、空氣の溫度が水面の溫度よりもいつも高い。強いて霧から脫出しやうとするには、水溫の高い方に進むより外ない。霧の起る場合は、暖流の方から、寒流の方へ徐徐に風の吹來るときであつて、斯ういふ風が數日引きつゞき吹くときは、霧は容易に霽れない。やはり氣壓の配置が一變して、風向の變るのを待つより仕方がない。

海上の霧に對して山上の霧は、其の出來方が大分違ふところがある。下層雲の高さは一千米位のものであるから、この程度の高山上ではよく雲に被はれ勝ちであつて、霧の中に居ると思ふのは、實は雲の中に居る譯である。この高さをも少し登れば雲海の表面を瞰下する壯觀を見ることが出來る。

○

海上や高山の上などの特別な場所でなく、普通の平地や、谷間などに起る霧は、地面の冷却したときに出來るので、初秋の朝に多い。又山間では一種特別な霧を見ることが出來る。それは山風——山地では晝間は谿を吹き上げる風の起るのに對し、夜は山から吹き卸す風が起る——の強迫の爲に、峽間の空氣が前面の山腹を沿ふて押し上げられる。この爲に山の中腹に棚引

く霧を起す。これは平地や、谷間に地面の上に出來る霧と異つて、山地に起る特殊の霧で、勿論早晩に限るもので、日出後山風が衰へてくると消失する。山中の景觀としては見逃すべからざるものである。元來こういつた或場所に限つて生ずる霧——局地的の霧は、天氣の定まつたときにのみ起るので、朝霧がかかれば其の日の天氣は良いと見てよい。こういふ霧はすべて日出後程なく消ゆるのが常で、もしそれが異常に永引くときは、天氣に變兆があるので、やがて天氣の惡化するを告ぐるものがある。

○

秋の霧に對して春のかすみは、本邦特有の景觀である。かすみも水蒸氣の現象である點では霧と似た點もあるが、かすみの内に居ても、霧の樣に水滴を認めることは出來ない。只之を通して遠景を見たときに、かすんで居るのでそれと識られるのみである。かすみがいかにして、いかなる場合に生ずるかは、餘り明らかになつて居ない。といふのはかすみ其のものが何んであるかが明かになつて居ないからである。元來かすみの樣な空氣の溷濁を生ずる原因は幾通りもあり得る。霧の樣に水蒸氣の凝結した微粒の空中に浮游して居るとも其の一であるが、水蒸氣がなくとも、烟の如き微塵が澤山に空中にあることも其の一である。都會地附近の地平線のボンヤリして見へるのは、この烟塵であつて、これを烟霧とも稱する。古來詩歌にうたはれた、かすみは、今日都會地や、工業地に見る烟塵でないことは明かであるが、空中に浮游する細塵は、必ずしも都會地の烟や塵のみが、其の原因でないから、かすみも烟塵の一種であると考へられぬことはない。この外に全然水滴や、烟塵がなくとも、遠景がボンヤリ見へることはあり得る。それは光の反射屈折の爲に起る現象で、空氣の密度が一樣でなければ、之を通過し來る間に屈折や反射で、薄い幕を透して見る樣に見へることもあるべきである。かすみはこれ等の何れに屬するや、恐らく此の内の何れでもあり得ることなので、時と場所とによつて、かすみにも種々な種類があるべきなのであらう。古來かすみは春より初夏のものと定められて居るが、何故に特にこの季節に空氣の溷濁——かすみといふ名に對して、甚だ殺風景な言ひ方ではあるが——が起り易いかといふことを考へて見るに、山地では殘雪の季節で、山腹の地面は尙冷たい。

しかし平地では已に可なりに溫度が高くなつて居る。平地であたゝめられた空氣が、徐々と山腹に沿ふて登るとき、山腹の冷たい地肌に冷された部分に、霧といふ程に濃くはないが、水滴の凝結を生ずることもあり得やう。山の或方面、例へば河のある方のみかすんで見へる場合などは、こんな現象であらうか

と思はれる。又特別に或方面のみでなく、一體にかすんで居る場合には、細塵の作用が大に與つて居るのであらう。この季節に細塵の特に多いのは、蒙古方面の黃砂が運ばれて來るのである。蒙古の砂漠方面では、冬より春にかけては、全く雨も雪もなく、地面が乾燥しきつて居る。この際に此の方面に低氣壓が起ると、其の中心で高く上空に黃砂が捲き上げられる。上層では常に西風があるから、之に運ばれて日本の方へ來る。それで支那大陸に強勢な低氣壓が起つて、之が東方に通過し去つた後、黃砂の本邦に來るのは、二三月頃から五月頃迄に最も多い。この黃砂の内の微細なものは、長く空中に浮游し居ることは、低氣壓の去つた後、數日又は十數日もたつてから、適々降雪のある際に、雪に混つて赤雪となつて降るとのあるのでも分かる。この細塵は水分を吸收附着する性質を持つて居るから、本邦の様な水蒸氣を多分に持つた空氣の中では、これを心核として微細な水滴を作り、日本獨特のかすみの現象を呈するのであらう。

指南車を胡地に曳き去るかすみ哉　蕪村

は大陸の縹渺たる平野にかすみを配し、着想としては雄大であるが、實は北方支那には、日本に見る様なかすみはない。空氣は乾燥し切つて、飽くまで清澄であるか、然らざれば濛々たる砂漠である。水分の潤ひを持つた、春にふさわしいかすみの情景は日本に獨特のものである。

○

霧を語りかすみを談じ大分閑談に耽つたが、氣象學の領域はこうした方面のみを主眼とするものでもない。少しく實世間に對する應用方面の一二を附加へて置くことも無益でなからうと思ふ。天氣豫報も氣象學應用の一に相違ない。凡そ人間の生活に天氣と交渉のないものはない。働く人にも、病人にも、はた又晴耕雨讀といつた閑人にも。そこで明日の天氣を正確に知らしてくれるものがあつたら至極重寳な譯である。氣象臺や測候所はこの役目をするといふので、多くの人は其の存在を認めてくれる。そこで唯一の金看板たる天氣豫報がはづれると氣象臺無用論が起る。勿論當事者としては、天氣豫報の正確を期する爲に、あらゆる手段を盡して居るであらうが、理論そのものに於ても未だ解決のつかないものもないではない。又明かに分つて居ることでも、之に對する手段——設備が整つて居ない爲に、見す〳〵不覺を取る場合もある。前にも述べた上層の模様を探る設備のないなどもその一例である。何事によらず理想通りに行かぬ世間の仕事では、止むを得ないとしなければなるまい。日曜の豫報にだまされた腹立ちまぎれに、無用論などを唱へず、も少し氣長に見てやることも必要であらう。勿論尚進歩

の道程にあるものではあるが、天氣豫報の外に、いかなる方面に應用さるるかの一二をこゝに述べやうと思ふ。

○

氣象の應用として目下研究せられて居て、略可能を信ぜられて居るものは長期豫報である。之は季節の大勢を豫報するのである。斯くいへば明日の天氣も滿足に當らぬのに、二ケ月も三ケ月も先のことを言つたとて、當てになるものかといふ人もあらう。しかしこれから二十四時間以内に起るであらうことを言ひ當てることは困難であるが、二三ケ月先には斯ういふことはこの程度であらうといふことを言ふのは、案外容易なことである。季節豫報では、今年の梅雨季節は例年よりも雨が多いか少ないかとか、今年の七八月の暑氣は何の程度であらうとか、又は今年の冬の寒さや、降雪の程度といつた樣な、或季節に特殊なことを豫報しやうといふのである。これは主に農業方面に對して利用せんとするもので、このことが可能であるとすれば、次には農産物の收穫量を豫報するといふことになるのである。農産物の收穫量は其の生育上重要な或期間の天候經過に依つて略定まるものであるが、其の季節の天候の大勢の豫察が出來れば、自然收穫量の豫報が出來るといふことになるのである。これは獨り或地方に限つたことでなく、本邦内は勿論、米作、蠶繭、綿花といつた樣な、國民需要品の產地について、豫想がつく筈であるから、これが二三ケ月乃至數ケ月前に略適確に出來ることになれば、產業に將又經濟界に裨益することは尠くあるまい。そこでこの樣な長期豫報を行ふ爲には、廣く全地球上の氣候狀態を知らなければならない。この必要から各國の觀測成績を一定の形式で發表し之を纒めて出版することに申合せてある。廣く各方面の氣候の經過を調べて見ると、或地方の或季節に起るべき特長に對する豫兆は、意外な地方に數ケ月前に表はれて居るといふことが知れる。蓋し或地方の或季節の天候の特長を支配するものは、地球上に於ける氣壓配布の大勢である。前にも擧げた例について言へば、本邦の冬季の寒さや裏日本方面の降雪は、此の季節に亞細亞大陸にある、大高氣壓の消長に關係して居る。この大高氣壓はこの季節中略一定の場所を占めて居るものであるが、其の盛衰消長の豫兆は、已にこの季節の始まる前に何處かに表はれて居る。それでこの豫兆を巧みに探しあてれば、その時に冬の寒さや裏日本の雪が豫想せられるのである。世界各地の氣象事情の比較研究から、斯ういつた關係が案外確實に結ばれて居ることが明かとなつて、此の方面の研究が追々盛になりつゝあるから、實用に供せられる時期は決して遠いことではなからう。

○

或人は日本には天然資源の誇るべきものがない。この貧弱なる天然資源の中で唯一つ雨の多いことと丈けは誇りであるといつた。日本の雨量は慥に世界——少くとも文明諸邦——中では獨り卓越して居る。大和の大臺ヶ原山で大正十二年の九月に廿四時の雨量一千十一ミリ米を觀測したことがある。これは中緯度の地方では普通一ヶ年間の雨量に匹敵する量である。なる程雨は日本の誇る可き天然資源であるが、しかしこの雨はいかに國民生活の上に利用せられて居るか。日本に水利の行はれるのは雨の多い爲めである。近時水力利用の發電の企劃せられるのも雨のお蔭である。が、しかし雨は自然に蒸散によつて失はれ、又河川となつて海に流出し、利用せられるのは僅に其の一部分に過ぎない。しかも少し雨の調子が狂へば忽ち出水氾濫して、國土を破壊し、産業を荒頽せしめ、利用どころか反對に國費を消耗することと夥しい。又一面には折角發達しかけた水力電氣も、今年初頭の渇水期には、水力の不足の爲に火力の補給がなければならないといふ心細い有樣であつた。しかも今年位の渇水は決して珍らしいことでもなんでもない。勿論昨年中の雨量は多少尠い方ではあつたが、過去の記錄に徴して決して稀な程の寡量ではなかつた。しかもこの有樣であつて見れば水力利用の將來も賴もしいとはいへない。勿論これにも便宜主義の爲に、設計が理想的に行はれなかつたといふ缺陷もあつたであらうが、一面には唯一の天然資源たる雨の善用に對する研究と施設とに缺けて居たことを見逃すことは出來ない。出水の被害は下流の改修に依つてのみ救はれるものと考へるのは、多衆人の目に觸るところ丈けのことである。水害輕減の爲にはもつと根本的の問題がある筈である。更に或季節にあり餘る水を保留して、冬季の涸渇を救ふの工夫はないか。河川の水理と氣象との關係の研究は、特に本邦に於て最も有意義なる仕事である。水源地方に設置してある森林測候所は、この方面の調査の爲の一機關である。これも氣象の實際的應用の一方面である。

○

氣象と居住、氣象と衞生、將又人間活動の能率と氣象との關係、此等の問題は夙に夫々の方面に於て考究せられて居ることであるが、之れを更に組織的に進めることも、氣象應用上の重要な仕事である。國土の風土の關係は、之を人力を以て如何ともすることが出來ない。この國土を土臺として社會を爲して居る以上、永久に其の風土の支配を脫することが出來ない。之に反抗することは無法極まることで、結局之を善用して、住み良き世界、能率的な世界を造るより外にない。即ち氣象と人間生活の樣式との調和を圖り、進んで風土の善用を圖ることが、よき社會を建設する手段でなければならぬ。氣象臺や測候所は、天氣豫報を一枚看板として居るものと思はれることは困ることで、よくこの事業を了解して極力獎勵せられることは、一般世人に對して望ましいことである。

文藝の映畫化と音樂のラヂオ化

藝術の映畫化に就いて

萩原朔太郎

　著名なる文學を活動寫眞にすることは、藝術の民衆化といふ方面で、非常に効果が多いと思ふ。今日のやうな時代では、人人が落付いて讀書する餘裕がない。特に古典に屬する長篇の文學などは、一層さうであり、生涯かかつて讀む機會がない。然るに一方では、時代が多方面の常識を民衆に要求する。今日の民衆は、すくなくとも文學の常識として、古來の世界的名著、たとへばミルトンの失樂園、ダンテの地獄篇、ゲーテのファウスト、ホーマーのオデッセイ、それからアラビアンナイトや、ドンキホーテや、ガリバアの旅行記や、その他の一般的名著を知つて居らねばならぬ。同時に自國の代表作を知ることも必要で、我が國で言へば、源氏物語、平家物語、古事記の類を始め馬琴、西鶴、春水等の小說も、國民常識として一應は讀まねばならないのだ。

　かく今日は、民衆に課せられた讀書の負擔が非常に多く、しかも時間の餘裕が益々すくなくなつてゐる。以上の多き多數の名著は、その梗概を讀破するだけでも容易でない。その上に讀書といふことは、非常に頭腦を疲らせる仕事であるから、一般の民衆はあまり好まない。圖書館といふものも、民衆文化の普及的意義からは、今日既に時代遅れであり、博覽會や馬車と同じく、もはや古風の詩美に屬してゐる。

そこで現代の通俗文庫は、どうしても活動寫眞でなければならない。活動は眼から印象が入つてくるため、讀書の如く頭腦を疲らすことがない。それに短かい時間の中に、よく作の梗概を會得できる。その上尙一の得點は、古典の堅苦しい文學を、興味本位の通俗に嚙みこなして、素養のない民衆にも解り易くして見せることだ。尤もそれだけ原作の眞趣が失はれ、名作の價値を傷つけるわけであるが、一般の民衆常識として紹介するには、それで充分であり、それ以上の理想は望まれない。何となれば民衆は、藝術の深い素養をもつてゐないから、通俗的の興味が無い限りは、彼等を牽きつけることができないのである。

かくの如く「藝術の映畫化」は、實に「藝術の民衆化」といふことに意義を有する。所謂「文藝映畫」を見る人は、鑑賞の基準を此所に置き、その常識で價値を判斷すべきである。さうでなく、もし實に純粹の藝術を寫眞に要求するならば、いつでも必ず失望するにきまつてゐる。所謂文藝映畫の鑑賞における興味は、いかに巧みに原作を通俗化したか？　といふ見方にあるので、いかに忠實に原作を紹介したか？　といふのでない。といふのは、今日の活動寫眞なるものが、多數の民衆を對手にする娛樂的の興行物であり、本質的に通俗のものであるからである。活動寫眞に高級な藝術を要求するのは、民衆娛樂の本質を忘れてゐる、一の沒常識にすぎないだらう。たゞ劇における自由劇場のやうに、小人數の識者ばかりを會員とし、限られた範圍で興行するものならば、吾人の欲求してゐる如き、眞の高級の藝術映畫が見られるだらう。今の所で言へば、その最も高尙で「藝術的」と呼ばれる映畫も、實は一種の通俗小說にすぎないのである。（すべての高級映畫に就いて、その興味の中心を考へて見よ。いかに淺薄で通俗であるかゞわかる。）

それ故に翻譯映畫は、その原作を知らない人が、興味と好奇心で見るのであつて、既に原作を讀んでゐる人は、決して見ない方が好いのである。見れば必ず失望するに極つてゐる。名著の原作から受けたやうな藝術的感動は、どんな名監督の翻案からも、決して受けることができないのだ。尤も原作の性質により、或る程度のものは成功する。一般に古代の文學は、事件を筋で運んでゆくため、映畫に翻案することが容易である。しかるに近代の文學は、ずつと心理的であり、氣分や、思想が主になつてゐるため、映畫に寫すことが困難である。私の見た範圍でも、比較的古典文學の映畫化には難がすくなく、近代文學の

方で著るしく原作を傷つけてゐる。ドストエフスキイの「カラマゾフ兄弟」や「罪と罰」の映畫化などは、所謂ファンの喝采するに關らず、翻譯としても失敗である上に、映畫それ自身の興味がなく、實に退屈千萬のものであつた。その他近代文學の翻譯映畫で、一として感心したものに出逢はない。單に原作の感動がないといふのでなく、映畫それ自體として退屈なのである。そこで所謂「文藝映畫」なる觀念が、概ね私には「欠伸の出る映畫」を表象させる。けだし映畫中での、最もつまらぬものは文藝映畫である。

　思ふにこの失敗の理由は、監督や筋書者が、生じつかの藝術意識で、原作に忠實にならうとするからである。映畫は始から文學でない。映畫で原作を生かさうとするならば、全く原作のプロセスを叩き壞して、全然別な組織の上に、その「精神」だけを抽象せねばならないだらう。強ゐて映畫に文學の組織を求め、木に竹を繼ぐやうな無理をするから、不自然で退屈なものができるのである。むしろその藝術意識を捨ててしまひ、文藝の民衆化を目的として、思ひきり原作を通俗化し、ひとへに興味本位のものとして、大體の骨格だけを紹介するやうにせよ。さういふ仕方で行つたものは、今迄にも決して失敗してゐない。

　そこで私の望んでゐるのは、「藝術の映畫家」ではなくして、逆に「映畫の藝術化」である。與へられたる原本を、映畫に翻譯するといふのでなく、始から映畫それ自身を、藝術として創作することだ。しかしこれも前言ふ通り、自由劇場の組織でない限りは、思ひ切つたことができないだらう。劇の方には「讀む脚本」といふものがあり、それだけで藝術品たり得るけれども、映畫の方は、寫眞となつて始めて表現ができるのだから、上演不可能のものは仕方がない。そして上演の可能性は、一般の通俗向にあるのだから、藝術映畫の實現は、今の所では困難である。せいぜいの所で、通俗の中に藝術味を暗示する位のものだ。

　それ故に我々は、今日の所、映畫に藝術を要求しやうと思はない。映劇に對する僕等の興味は、純粹に娯樂本位であり、ただ面白く、氣持ちの好い時間をすごさしてくれれば滿足なのだ。即ち僕等の鑑賞は、それが娯樂として、いかに氣が利いてゐるか？　いかに監督の機智が働らいてゐるか？　いかに俳優が表出するか？　等の興味にのみかかつてゐる。即ち探偵小說や筋書小說などに對する興味と同樣であり、單に「氣の利いた頭腦」を監督に要求し、技巧の末技々寫眞と俳優とに見れば了

いのである。

映畫の本質をかうして見ると、世界第一の頭腦の所有者は、どうしてもチヤツプリンである。悲劇、喜劇、史劇等のあらゆる映畫を通じてみて、矢張最も面白いのはチヤツプリンの映畫である。しかし近頃では、ロイドの方が人氣が高いやうに思はれる。

ロイドの喜劇は、實に「新時代そのもの」の象徴である。所謂「新時代」の何物たるかを知らうとする人は、ロイドの映畫を見るに限る。陽氣で、明るく、無邪氣で、自由で、快活で、皮肉や陰謀の暗い影が少しもなく、眞に自然兒のオープンハートであり、若き民族の有する潑剌たる元氣と精力が躍動してゐる。即ちロイドそれ自體が、アメリカニズムの生きた象徴である。今やアメリカの新興文化は、ジヤヅバンドとロイドの映畫で、全世界を風靡しやうとしてゐるのだ。（汎米國主義を世界に宣傳し、アメリカ魂で世界を統一することが、米國の內部で計畫されてゐる。先年の決議によれば、活動寫眞宣傳中、ロイド映畫が第一位に選ばれたさうである。）

映畫に對する私の不滿は、色と浮出しのないことである。色彩といふものが全くなく、立體としての奥行もなく、陰氣で眞黑の影繪が、薄ぺらのシーツの上で動いてゐるのを見てゐると、何とはなしに悲しくなつてくる。生きた人間ではなく、手ごたへのないそれの影、厚みも色もない、幕に寫つた陰氣の影繪を、いつしんに見てゐる人々の心を思ふと、この世紀の文明といふものが寂しくなる。

この一の感情は、私の映畫に對する根本の憂鬱である。色もなく、聲もなく、匂ひもなく、そして肉體そのものが實在しない。幕に寫る幽靈の動作を見てゐるといふ意識が、たまらなく私を憂鬱にする。しかもそれが、この時代における唯一の民衆娯樂であり、地球のすべての人間どもが、唯一の慰安をそれに求めてゐるではないか。活動寫眞に對する憂鬱は、實に「文明の沒落」である。「人間の末路」である。機械文明に心醉して、唯物思想に靈魂をくびられ、生きた肉情を失つてしまつた所の、あはれな道具のやうな人間共が、陰氣な壁に映つてゐる、眞黑の影繪を見て悦んでゐる。悲しい世の中のすがたでないか！　活動寫眞館の中に入るとき、いつでも絶望的な厭世思想が、私の心に湧いてくるので、苦痛にたまらなくなるのである。それ故に私は、活動が好きでありながら、それを見に行くことを好まない。

もし映畫に色彩と浮出しがついたならば、私の病的な憂鬱性が、ずつと輕くなつてしまふであらう。なぜなれば、それは「眞黒のさびしい影繪」でなく、現實の色と厚みを有する、生きた肉體の再現であり、この三次元の空間に棲む、實の生物の幻燈だから。

毒を制するものは毒である。人類の娯樂に於ける文明的頽落は、より進歩せる文明によつて救はれねばならないのだ。「色なき世界」は考へるだに陰慘である。「厚みなき世界」は思ふだに畸形である。世界の民衆が、いつまでもかかる不倫の娯樂を愛し、畸形にして陰慘な趣味に惑溺してゐることは許されない。それは文化の健全性から許されない。正義人道のためにすら、映畫は改良せねばならないのだ。もし眞に完全なる「天然色立體映畫」を發明する人があるならば、その文化的名譽は不朽であらう。但し現在せる如きものは、尚不完全の玩具にすぎない。

藝術映畫といつても、現在のものは單に演劇映畫にすぎない。もつと技術が進歩したら、美術映畫（動く繪畫）や、叙情詩映畫（寫眞で表現する詩）などが創案されるであらう。そして活動寫眞そのものが、畫家のカンバスや繪具に代り、詩人の思想や韻律に代り、一の新しき藝術表現となるであらう。僕等はその未來を期待してゐる。

科學と藝術との抱擁

上司小劍

何にしても科學の世の中である。科學は曾つて宗教を袋たゝきにし、それから藝術と握手してゐる。機械の發明が産業革命を促し、人間の經濟組織や生活様式に非常の動搖を與へたことは誰れも知つてゐる。宗教の權威が衰へたのを科學の進歩に歸

することも、また子供にだつてわかつてゐる。たゞ科學が藝術と闘い握手をしてゐることを、最近まで見落してゐた人はなかつたか。同じく人間の頭から出たものであつても、科學と藝術とは出發點も到着點もちがつてゐる。科學は外を行き、藝術は内を行く。並行線であつても時々相觸れて熱をおこし、火を發する。しかしそれは衝突でなくて握手である。それが繩のやうに綯はれて一つの線になることがないとも限らぬ。

寫眞術の發明が出來た時、わからず屋の俗物どもは、もうこれで、繪畫にも彫刻にも滅亡の世界が來たと思つたさうだ。ところが、繪畫彫刻は寫眞をいつくしみ、寫眞は繪畫彫刻を敬ふて、繪畫に啓發さるゝことが多かつた。繪畫は別だん直接に寫眞の扶けを得たとも思へなからうが、何かに就けて便宜を受けたことがあるにちがひない。これを藝術と科學との第一回の握手だと視てもいゝだらう。

科學の進歩は、宗教を殺したゝきにして其の力を弱め、機械の發明を促して產業革命を起し、經濟組織の變動を致し、社會革命の因を作つた如く、藝術にもまた革命を起させつゝある。しかしながらそれは前にも言つたとほり、宗教に對するが如き衝突の結果ではなくて、穩かな結合を基礎とするものである。藝術は決して科學のために其の根柢をぐらつかせるものでない。天動說が地動說に變つたとて、藝術は平氣だ。保守的藝術家の中には、科學を毛嫌ひするものがあつても、科學者には藝術を敵とするものがない。

科學と藝術との握手は、最近に於て、活動寫眞とラヂオとに頗る親密な場面を見せてゐる。印刷製本術の進歩といふやうなことも、やはり科學と藝術との親密さを濃くするものである。藝術の根幹は動かないでも、藝術家が其の創作を發表するためには、ますます多く科學の力を借りることになつて行く。

私は、近き將來に於て、舞臺藝術のすべてが映畫に併合さるるのを疑はない。今日にあつても、活動寫眞は演劇に比べて、遙かに多く人の興味を惹き付けてゐる。これがおひおひラヂオによつて音樂を各々の家庭に放送するが如く、微妙なる光線の應用で、映畫をも各々の家庭に放送することが出來るやうになつたら、文藝の映畫化はいよいよ極點に達するであらう。ラヂオによつて音樂及び臺詞を放送し、新らしい發明によつて映畫をば同時に、巧妙に放送するならば、自宅に寢てゐて芝居が見られるやうになるといふものだ。それがそう遠いことでないのは、今からたしかに豫想が出來る。百年はおろか、五十年前に於ても、今日の活動寫眞やラヂオのことを豫言するものがあつたら、世人の多くは狂人と見たであらう。しかし今日に於て映

藝の放送を豫言したとて、嗤ふものはゐるまい。狂人扱ひにもされまい。或は我々の全く豫想しない驚くべき科學上の大發明が次ぎに控へてゐるかも知れない。さうして科學と藝術との握手はいよ〳〵固くなるであらう。既に遠距離寫眞の實驗が成功してゐるのだもの、映畫の放送は何人にも豫想され得る。

音樂の一轉機は既に蓄音機によつて十分にみとめられた。蓄音機によるレコード音樂は完全な音樂である。演奏者を前にしての演奏と何んのかはりもない程度に、優秀な機械とレコードとは進歩してゐる。こゝにも科學と藝術との固い握手がある。小説家の小説を原稿で讀むのが演奏者を前にして聽く音樂と同樣で、活字になつた小説を新聞雜誌や書籍で讀むのが蓄音機によるレコード音樂と同樣のものだ。前者が少數者の物好ずきであつて、後者は萬人の愛好し得る萬人のための藝術である。藝術は科學による、科學を媒介として少數から多數に結び付くのだ。限られたる場所、人、時刻といふ不自由さから遁れて、音樂をば萬人の自由な鑑賞にまかせたものは、蓄音機である。ラヂオもまた蓄音機と同一種類の姉妹關係にある。ラヂオのために蓄音機が驅逐されるかの觀があつたのは、西洋でも現在の日本と同樣だつたらしいが、それは一時的のことで、この姉妹はすぐに仲直りしてそれ〳〵の特色の上に、音樂の普遍と藝術の萬人共樂とのために働いてゐる。ラヂオには一方に通信といふ役目があつて、どうもそれに牽制されるが、蓄音機は概ね音樂に専用することが出來る。それに時間の拘束がない、ラヂオに比して、いろ〳〵の點で更に自由だ。其の上日本の現在では外國のいゝ音樂はやはり蓄音機でなければ聽くことが出來ない。別だん蓄音機の辯護をするわけではないけれども、ラヂオとは姉妹關係にあるが故に、ラヂオを說けば、どうしたつて蓄音機に及ばざるを得ない。いづれにしても、音樂家の仕事はこれから吹き込み本位になつて、修業にも練習にもそれを基調にするから、聽衆を前にしての演奏は一種のカスみたいなものになるであらう。即ち科學と藝術との結合なのである。ラヂオや蓄音機は器械から出る聲だから趣味に乏しいなぞと、保守的なことを言ふ人があるかも知れないが、そんなことを言へば、器樂の發明といふ古代に出來た事實をどう考へるか。笛でも太鼓でも既に器械から出る音ではないか。ヴアイオリンが可なり遠く、演奏場の三四階までもハツキリ聽えるのは、其の胴の構造によるのだ。詰まり器械だ。ラヂオや蓄音機は即ちヴアイオリン三味線の胴の延長或は改良にひとしいもので、それが多量に科學の力のおかげを蒙つてゐるまでだ。科學と藝術との握手だ。結合だ。抱擁だ。

映畫にしても其のとほり、舞臺に於いて演ぜれる〻從來の芝居だつて、劇場の構造や舞臺の照明には、ずいぶん科學の力を借りて來てゐた。それが更らに多く科學の力を借りるやうになつたまでゞ、これから更らに大に科學の力を借りて、もつともつと自由な、萬人平等の鑑賞物にしなければならないのだ。前に言つた映畫の放送の如きも、其の第一着の仕事に數へたい。

文藝の映畫化と音樂のラジオ化

長田秀雄

1

人類は原始時代に屢々飢饉のために苦しめられた。その結果、食物を乾物にしたり鹽物にしたりして貯藏する事を思付いた。そして何時となく干物や鹽物から特殊の味を感得するやうになつた。くさやの干物が食通の間に珍重され、鮭の鹽物が、生鮭と違つた一種の風味を喜ばれるやうなのが、即ちそれである。その他、豚のハムや、牛酪、腸詰各種の罐詰など數へ來れば、實に多種多樣である。

然るに人智は何時の間にか異常な進歩を遂げた。

今や、乾物鹽物と云ふやうな原始的な貯藏法だけでは滿足しなくなつて、冷凍法や、冷藏庫のやうな科學的な貯藏法が行はれるやうになつた。

冷凍魚や、冷藏の牛肉は、外觀は生魚や生肉とちつとも違はない。それは確かにさうだ。

が、然し、屠殺したばかりの肉と、長い間同一の狀態に置かれた死肉とは、どうしてもその味が違はなければならない。

冷凍魚や冷藏肉は、一般に不味だと云はれてゐるが、その内、貯藏法が、同一步進步して、或は生肉にない特殊な味をつけ得るやうな時が來るかもしれない。

無論、これは私の單なる夢想に過ぎないのである。

2

人類はありのまゝの自然を補ふために藝術を創りだした。だから、彼等の環境の相違によりて、その藝術には、各特殊な味がついてゐるのである。

地球が圓い球であり、世界は有限の存在である事がハッキリ分つたのは、科學の進歩したためである。そして、科學の進歩は、世界の交通を滑らかにした。即ち、人類が科學によつて、ハッキリ世界を意識すると一緒に、各地の交通を滑らかにするために、彼の努力を惜しまなかつた。

二十世紀の初にあたつてキネマと、ラジオとが發明された。

キネマは藝術の冷凍であり、ラジオは、人類の世界の意識を、彼の一身に凝集させる仕事である。言を換へて云へば、キネマは縱の連續であり、ラジオは横の擴がりである。

食物が鹽藏されたり、干物にされて、一種の風味をそなへるやうに、キネマ自身の性能が、何時となく文藝の映畫化に一種の味をつけてきたのは、誰も知つてゐる事であらう。キネマは啞者の藝術である。すべての內容が動作と表情と情景によつて、表現されなければならない。そのかはり、人間の身體を實際に使つてゐる演劇などよりはるかに異常な空想的な內容を、表現し得る譯である。また、キネマに、夢のやうに柔らかい曲線を描く事がなし得ない。どんな曲線も實はごくこまかな直線の折れたのである。即ち一囘轉毎に一つの直線をつづり合せて、人間の曲線の動きをつくるのである。だから、何處となくチカチカとして刺すやうな神經的な味が出て來る。

キネマのこの神經的な表情と異常な空想が、近代の文明に適に反射してゐる。

3

ラヂオの發達は、極めて最近の事である。從つて、音樂のラジオ化は、只今のところではまだまだ、さう、ハッキリと現はれてきてゐないやうである。

キネマが啞者の藝術であるやうに、ラジオの音樂は、盲目の藝術であると云へると私は思ふのである。

我々が音樂會で音樂をきく場合、演奏する音樂者の表情と動作とが、どのくらい彼の音樂に、味をつけてゐるかは、つねに音樂をきく人のよく知るところである。

ところがラジオできく場合には、我々は演奏者の形をみる事が出來ない。たゞ、純粹に音ばかりが、我々の耳に入つてくるのである。

即ち、我々は一面耳でその音の快よさを味はひながら、腦裡でひそかに演奏者の表情動作を思浮べてゐる譯である。敏感な演奏者は、これまで自分の表情動作で補つてゐたあるものを、音樂の上に加へやうとする違ひない。

私は音樂のラヂオ化とともに、きつと、音樂の上に、かう云ふ新らしい表情の分子がふへてくるだらうと信じてゐる。

文藝の映畫化未し

菊池寛

日本に於て、文藝の映畫化など、まだ〳〵遠い未來である。松竹、日活、その他の映畫製作者が、たゞ金儲け主義で文藝に對して、正當なる認識と敬意とを拂はざる以上、文藝の映畫化は到底望まれない。

その適例としては、先日松竹で作つた「坂崎出羽守」である。松竹に少しでも文藝に對する誠意であつたならば「坂崎出羽守」を主題とする以上、山本有三の「坂崎出羽」を原作として、使用すべきが、當然である。然るに、わづかの原作料を出すことを惜しんで、俳優輩の自作自演をやり、しかもその作意丈は、山本のそれを模倣せんとするのであるから、文藝に對する誠意は、皆無と云つてもよいだらう。ホンの少しでも、文藝に對する誠意があるならば、山本の作品を原作として使用し、文藝映畫と銘を打つたならば、興行價値の上から云つても、原作料を償つて餘りあるだらう。たゞ多慾愚昧の經營者にはかゝる見安き道理も分らないのであらう。

よき脚本なくして、よき演劇なきが如く、よきストリイなくして、よき映畫あらんやだ。シラノ・ド・ベルジュラツク映畫の價値が、結局、ロスタンに負ふところ多きが如く、文藝なくして、映畫なしと云つてもよいだらう。

たゞ現在の映畫界は、一般に無學である。映畫關係者の片言マジリの文藝が、映畫の題命を決定し、内容に影響をしてゐる。映畫の題名などが、大抵はカタ言で、舌タラズである。あゝし

た題名や、辯士の間違ひだらけの說明口調が、どれほど正當な文藝文章を破壞するか寒心に堪へざるものがある。

また眞に文藝を映畫化するためには、現代の映畫俳優は、到底その任に堪へないだらう。

たゞ人形の如く生命なき女優は、スキン・ヂープの美しさである。何等智的生活の背景がない。深い精神的生活なき女優に、文藝映畫のヒロインたることを望むなど、到底ムリであらう。

近來、直木三十三、久米正雄、高田保、岡栄一郎、畑中蓼坡の徒聯合藝術家映畫協會を組織して、映畫界革新の事に當らんとしてゐる。成功するかどうかは知らないが、とにかく文藝映畫を制作し得る可能性ある唯一の團體とも云ふべきか。

映畫の文藝化と音樂のラジオ化

室生犀星

文藝映畫といふものは全くのところ面白くないものである。ドストエフスキイでも、トルストイでも、それからユーゴーでも、どうも面白くない。妙にクラシカルな苔が生えてゐるやうで、活字でよむほどの手應へがない。これはむしろ當り前のことだと思ふ。活動寫眞のねらつてゐるところと、作家のねらつてゐるものとが、いつも継ぎ剝ぎになつてゐるからだ。それに何ともいへない古くさい感じがする。

「罪と罰」など大變感心した人もあつたがわたしには興味がない。「ジゴマ」の古シヤシンを見る氣はあつても「ミゼラブル」の古シヤシンは見る氣になれない。

チヤリイ・チヤツプリンのやうな男が好きな監督を振つてゐたら、文藝的作品なんかなくともいいだらう。「巴里の女性」を見ない前にもチヤツプリンといふ男が何となく凝つてゐると思つたが、その映畫を見て、いかにもきびきびとした切れ味のよい監督振りには感心をした。そして人と人とが邂逅する場合で

も、何んでもない日常的な出來事の中へ交ぜて、重大な運命を齎せてゐる。――「巴里の女性」の中に小さい紙包み風な荷作りが一つ床の上にころがつてゐたが、それがかなりな時間の經つたあとで、小間使がひよいと持つて行つたやうだが、ただ、それだけのことではあるが、さういふ細かい監督ぶりには感心した。

活動寫眞といふものを見物するわたしの心もちは、さういふ文藝的なるもの乃至作品的なるものではない。唯、素的にあたらしい人生である。そして素的にすぐれた監督と、とてもの凄い美人とあれば大概いいものがつくれるし、それ以上望まない。實際美しい女優の表情の間に他に事件を押しひろげて行つても、それだけでもでき上るのだ。だいぶ前にフランチエスカ・ベルチニが一つ一つの表情の動きを大寫にして、その間に事件を運ばせた手法を見て感心したが、いまでは、そんな事など珍らしくなくなつた。このごろ見た「キイン」や「嘆きのピエロ」などは、まるで目まぐるしいばかりに斷片的な映畫をやたらに急激に運ばせる珍らしいものであつたが、表現派が「カリガリ博士」以後のものが詰らないやうに、これなどもあと二つか三つくらゐは面白いが、それ以外はやはり飽きられるだらう。

日本では監督はどういふ作品でも、作家のねらつてゐるところなどにお關ひなしに勝手にぶちこはすさうである。恐らく外國でもそんなことはあらう。われわれの作曲が作曲家によつて縱横無盡に誤曲されるやうな比ではない。しかしわたしはそれだつて關はないと思つてゐる。一々作品にこだわつてゐては監督も充分にできまいと思つてゐる。監督は縱横無盡に己れの道をとるべきである。

グリフヰスやドミユなどはもう監督として古手の大家になつてしまつて、いま若いのが續いて現はれてゐる。しかしグリフヰスの象徴的な手法やドミユの近代的な手法がどれだけのものを教へたかは言葉に現はせないくらゐである。そしてこの二人の大監督も、いはゆる大作品的なるものには大概失敗してゐる。その巨費を投じた大作品的なるものの、その中の何んでもないところにむしろ腕の冴えを見せてゐるらしいのである。グリフヰスがギツシユを愛してゐる氣もちは大作品的なるものに遙かに遠いものでなくてはならないのである。

映畫はすぢを追ひながらその本來の使命はやはり藝術的なる

ものの効果をモットオとしなければならない。だが今のところあまり文藝的にはならない　下手に文藝的になることはすこしも面白くないものになるからだ。映畫は面白くなければならない。（わたしの言ふ面白いといふことは人生の何も彼も含んでゐるものを言ふ。）

　ラジオが始めて來たとき自分は田舍にゐて、一體ラジオといふものはどんなものだらうと不思議に思つてゐたが　東京へ來て聞いて見て、聞きなれないせいか、蓄音機の雜音を排したやうなもので大した變つたものでないと思つた。それにやはりあゝいふラッパのやうな口から、妙に機械的な感覺的意識の下できくのだから、感心してきいてゐながら對手が象の鼻のやうな穴から出てくるので、變な氣がしてならない　――しかしそれも蓄音機のやうにだんだん吾々の日常生活になれて來たら、そんな變な考へなくして聞かれるやうになるかも知れないだらうが、いまのところ落着かない氣もちである。あまつさへ自分の家庭にあゝいふしろものを取つけてまで音樂などに親しまうといふ氣は、どうしても起らないやうである。

音樂のラジオ化

田邊尚雄

　ラヂオの發明とその實施に依つて音樂が著しく普遍的になつて來たことは今更述べる迄もないことで、之に依つて音樂が著しく水平的になつて來た感がある。即ち各種の音樂が誰にでも平等に與へられるといふことになつて來た。今迄は音樂の世界には非常な凸凹があつて、非常に高い所もあるかと思ふと、また低い所もあり、而かも各々の山の間には深い谷が存在して居て、一方の山から他の山に行くのには種々の障害があるので、各々の人は皆自分の趣味境遇、教育の程度等に從つて、別々の山に向つて集まつて居たのである。それ故一方の山にのみ登つて居る人は、他の山に住んで居る人を異端視して居る傾が多か

つた。例へば洋樂の山だの、日本音樂の山だのあり、又日本音樂の中でも三味線樂、例へば長唄の山、清元の山、義太夫の山、端唄の山、箏の山、尺八の山、琵琶の山、浪花節の山などゝいふ山が、各所に聳えて居る、尤も可なり高い山もあり、また低い山もあるが、皆それ〴〵その一つの山に居を構へて居て、他の山などは異國視して居たのである。中には箏の山や謠曲の山のように、自分の山に要塞を築いて容易に他をして侵入せしめないような軍國主義の世界もあつた。それで各山には家元などといふ主權者が居て暴力を逞しくして居たのである。その時代には之等の各山を跋渉するのには非常な健脚な旅行家を必要としたのである。然し當時の世の中には斯様な大旅行家は極めて稀で、大部分の人は鎖國的の考へを持つて居たのである。

所が蓄音機なるものが現はれて來てから以來といふものは、此の各山の間には交通が非通に便利になり、殊に近頃非常な勢ひでレコードが普及されるに至つたのは、恰かも各山の間に鐵道や電車や自働車などの交通が開けたのと同じことで、自由にどこの山にでも勝手に行き得ることゝなつたのである。即ち旅行が非常に便利になつて來た。尤も中にはまだ山に要塞を築いて居て、斯様な便利な鐵道の敷設をすら拒むで居る軍國主義者も無いではない。斯様な人は結局文化に遲れるといふとになつて自ら不利益を招くのである。近頃は大部此の不利を知つて、要塞を撤去した音樂者も少なくはない。箏の家元でも、謠曲の家元でも、清元でも、長唄でも、斯様な軍國主義を去つてレコードに吹込むやうになつて來た。宮中の雅樂ですら既に吹込みを喜んで居られる有様である。

斯様に蓄音機の普及に依つて、各山の交通は非常に便利になつたが、元來旅行の嫌ひな癖のある日本人などは、汽車や電車で旅することを非常に面倒に考へて居る。之れは昔の封建時代、鎖國時代の悪習である。それと同じことで、蓄音機を利用して各種の音樂を廣く自由に味はふといふような考へを持つて居る人は極く稀で、やはり唯自分々々の舊地なる山に立籠つて居て、此の便利なる交通機關を利用しようとしない野蠻な人が多い。ラヂオが實施されるといふ今日の文明の世の中にあきれた人達である。

所がラヂオといふものが出現をして之れが理想的に實施されるといふことになると、之れは大變革であつて、即ち各山を悉く切り崩して谷を埋め、平地にしてしまつたことにある。而かも從來各山の上に孤立して建てられた街を、此の平地の上に集めて一つの大きな都市を作つたことになる。我々は自由に此の都市の中に住むことが出來るのである。即ち我々はラヂオに依

て每日各種の音樂を平等に與へられる。我々は平等に之に接觸して之を批判し得ることになるのである。

尤も此の平等が實現されるのには、其所に社會組織の大改造が必要である。封建時代の儘の思想で、此の自由な大都市を經營し、之を維持して行くことは出來ない筈である。先づそれには軍國主義の大名を取り除いてしまはなければならぬ。即ち家元の廢止が必要である。尤も家元を尊敬するなといふことゝは違ふ。城廓を取り去り、大名に統帥權を除き去り、以て之を華族に列し、單にその威嚴を保たしめればよい譯である。今日の時代に家元なる暴君を設けなければならぬ必要が何處にあるか。有害無益である許りでなく、ラヂオの實施に對して最も大なる障害となるものは先づ第一に家元制度の撤廢である。昔は家元といふことの組織が藝術の發達に効果があつたことは、恰かも封建時代に大名の存在が社會の組織に大功があつたのと同じことである。然し今日に於ては家元の制度は有害無益である。謠曲は餘程まだ封建時代の面影を持つて居るから、今日でも可なり堅固な要塞が築造されて居る。之に立て籠つて居る勇士達は皆忠勇無双の士で、各々其の君の爲めに一命をなげうつて働らかうといふ士である。それで此の要塞は難攻不落と考へて居る。然しそれでも新戰術が出現して來た今日に、必ずしも難攻不落ではない。近頃に至つて多少その城廓が破れて來た傾が見える。梅若問題などは一つの時勢の進歩であつたのである。將來の理想はやはり家元制度の廢止にあるのである。今の世に之れを唱導すると、所謂危險視するのである。恰度維新前の改革者を幕府が目して居たのと同じことである。その改革者の中で最も急激な過激思想として最も多く幕府から惡まれて居た派といふようなものは、之を能樂界に於て見れば、つまり能樂五流の廢止といふ問題である。此の問題を今の時代に言ひ出せば首でも切られるかも知れない。先づ體刑は免かれない。彼等の考へを申せば、つまり今日の時代に於て能樂の五流が對立して、その各々が同じ二百番内外の曲を對抗せしめて居る必要はない。之れは宛かも昔し各大名が小さな領地を對立せしめて、その各々に於て悉くの必要品を作り出して居たのと同じことである。山國で食鹽を作り出し、海岸で銅鐵を採堀しようとしても駄目だ。五流の夫れ々々の價値は勿論認めることは惜しまない。然しその眞の價値は各々その特有の性質を發揮した少數の曲に限るのである。一曲が凡ての五流に於て平均の價値を有するものではない。一流で『羽衣』の如きが傑出して居れば、他流では『田村』の如きが傑出して居る。或る曲が數種の流派に於て平等に面白味を持つて居るといふものは殆んどな

つた。例へば洋樂の山だの、日本音樂の山だのあり、又日本音樂の中でも三味線樂、例へば長唄の山、淸元の山、義太夫の山、端唄の山、箏の山、尺八の山、琵琶の山、浪花節の山などゝいふ山が、各所に聳えて居る、尤も可なり高い山もあり、また低い山もあるが、皆それ〳〵その一つの山に居を構へて居て、他の山などは異國視して居たのである。中には箏の山や謠曲の山のやうに、自分の山に要塞を築いて容易に他をして侵入せしめないやうな軍國主義の世界もあつた。それで各山には家元などといふ主權者が居て暴力を逞しくして居たのである。その時代には之等の各山を跋渉するのには非常な健脚な旅行家を必要としたのである。然し當時の世の中には斯樣な大旅行家は極めて稀で、大部分の人は鎖國的の考へを持つて居たのである。

所が蓄音機なるものが現はれて來てから以來といふものは、此の各山の間には交通が非通に便利になり、殊に近頃非常な勢ひでレコードが普及されるに至つたのは、恰かも各山の間に鐵道や電車や自働車などの交通が開けたのと同じことで、自由にどこの山にでも勝手に行き得ることゝなつたのである。即ち旅行が非常に便利になつて來た。尤も中にはまだ山に要塞を築いて居て、斯樣な便利な鐵道の敷設をすら拒むで居る軍國主義者も無いではない。斯樣な人は結局文化に遲れるといふとになつて自ら不利益を招くのである。近頃は大部此の不利を知つて、要塞を撤去した音樂者も少なくはない。箏の家元でも、謠曲の家元でも、淸元でも、長唄でも、斯樣な軍國主義を去つてレコードに吹込むやうになつて來た。宮中の雅樂ですら既に吹込みを喜んで居られる有樣である。

斯樣に蓄音機の普及に依つて、各山の交通は非常に便利になつたが、元來旅行の嫌ひな癖のある日本人などは、汽車や電車で旅することを非常に面倒に考へて居る。之れは昔の封建時代、鎖國時代の惡習である。それと同じことで、蓄音機を利用して各種の音樂を廣く自由に味はふといふような考へを持つて居る人は極く稀で、やはり唯自分々々の舊地なる山に立籠つて居て、此の便利なる交通機關を利用しようとしない野蠻な人が多い。ラヂオが實施されるといふ今日の文明の世の中にあきれた人達である。

所がラヂオといふものが出現をして之れが理想的に實施されるといふことになると、之れは大變革であつて、即ち各山を悉く切り崩して谷を埋め、平地にしてしまつたことにある。而かも從來各山の上に孤立して建てられた街を、此の平地の上に集めて一つの大きな都市を作つたことになる。我々は自由に此の都市の中に住むことが出來るのである。即ち我々はラヂオに依

て毎日各種の音樂を平等に與へられる。我々は平等に之に接觸して之を批判し得ることになるのである。

尤も此の平等が實現されるのには、其所に社會組織の大改造が必要である。封建時代の儒の思想で、此の自由な大都市を經營し、之を維持して行くことは出來ない筈である。先づそれには軍國主義の大名を取り除いてしまはなければならぬ。即ち家元の廢止が必要である。尤も家元を尊敬するなといふことゝは違ふ。城廓を取り去り、大名に統帥權を除き去り、以て之を華族に列し、單にその威嚴を保たしめればよい譯である。今日の時代に家元なる暴君を設けなければならぬ必要が何處にあるか。有害無益である許りでなく、ラヂオの實施に對して最も大なる障害となるものは先づ第一に家元制度の撤廢である。昔は家元といふことの組織が藝術の發達に効果があつたことは、恰かも封建時代に大名の存在が社會の組織に大功があつたのと同じことである。「然し今日に於ては家元の制度は有害無益である。謡曲は餘程まだ封建時代の面影を持つて居るから、今日でも可なり堅固な要塞が築造されて居る。之に立て籠つて居る勇士達は皆忠勇無双の士で、各々其の君の爲めに一命をなげうつて働らかうといふ士である。それで此の要塞は難攻不落と考へて居る。然しそれでも新戰術が出現して來た今日に、必ずしも難攻不落ではない。近頃に至つて多少その城廓が破れて來た傾が見える。梅若問題などは一つの時勢の進步であつたのである。將來の理想はやはり家元制度の廢止にあるのである。今の世に之れを唱導すると、所謂危險視するのである。恰度維新前の改革者を幕府が目して居たのと同じことである。その改革者の中で最も急激な過激思想として最も多く幕府から惡まられて居た派といふようなものは、之を能樂界に於て見れば、つまり能樂五流の廢止といふ問題である。此の問題を今の時代に言ひ出せば首でも切られるかも知れない。先づ體刑は免かれない。彼等の考へを申せば、つまり今日の時代に於て能樂の五流が對立して、その各々が同じ二百番內外の曲を對抗せしめて居る必要はない。之れは宛かも昔し各大名が小さな領地を對立せしめて、その各々に於て悉くの必要品を作り出して居たのと同じことである。山國で食鹽を作り出し、海岸で銅鐵を採堀しようとしても駄目だ。五流の夫れ々々の價値は勿論認めることは惜しまない。然しその眞の價値は各々その特有の性質を發揮した少數の曲に限るのである。一曲が凡ての五流に於て平均の價値を有するものではない。一流で『羽衣』の如きが傑出して居れば、他流では『田村』の如きが傑出して居る。或る曲が數種の流派に於て平等に面白味を持つて居るといふものは殆んどな

い。尤も一曲の中に於て、或る部分は一流に面白味があるが、他の部分は他流に於て面白いといふことがある。之れは其の各部を最もよいものに向つて統一し、整理して行けばよい。かゝる協定の行はれることは當然でなければならぬ。既に鎖國が解かれ、交通が頻繁になつた文明の今日に於て、斯かる協定統一の行はれないといふことは不思議である。此の點に於て能樂の五流を一流に纏めることは、日本音樂の將來の爲めに當然なさなければならぬ所の事業である。斯くの如き說を今持ち出せば如何程の攻擊が之に向つて開始されるか判らぬ。何と辨解した所で駄目だ。そんな攻擊に刄向ひ、眞面目に辨解するのは時勢を知らぬ者である。賴山陽でも、吉田松陰でも、殺される時には何と辨解しても駄目だ。今日のような狀態に於て、此の理想を實現しようとすることは困難である。此の問題に手を附ければ何人と雖も手を燒くから、恐らく今日之に手を附けるものはないだらうが、將來必ず實現される時期は來ることは明らかである。必ず斯くならなければ日本音樂は世界的に發達しない。ラジオは必ず之をなし遂げるであらう。

之に比べると琴の社會に於ける家元の廢止は比較的に出來易いことである。第一家元が免狀、即ち許し物傳授の切賣をやつて居ることが如何程琴の發達を害して居るか知れない。今日の時代に免狀の專賣は全廢しなければならぬ。私の考へでは、將來之を犯した所の家元は體刑を以て處罰する位の法律を設けてもらひたい。之れ位にしなければ、琴の音樂の將來は發達しない。天才も現はれて來ない。假りに現はれて來ても、そんな天才は役に立たない。

昔は家元といふものは惡いものはなかつたとは明らかである。然しそれはラヂオの現はれた今日の世の中には最も惡い制度である。之を撲滅せしめるのは頗る困難であるが、最も緊要なことであるから、之に向つて法律の干涉を加へられることを望むのである。家元の組織は舊慣に過ぎないのであつて、警視廳に於ては舊慣として認めて居るが、日本の法律には家元の特權を認めて居ない。

嘗てこんな話があつた。有名な田中正平博士が美音會の演奏に際して淸元の『梅の春』の中の卑穢な一句を上品な文句に訂正して、それを中流社會の家庭の人々の前に演奏せしめた。所が家元から「梅の春は淸元の家の物である。之を家元に相談なく勝手に訂正するのは不都合だ」と抗議を申込まれた。所が田中博士は之に對して次の如く答へられたそうである。「家元の制度は法律に依て認められて居ない。作曲作歌が法律に依つて保護を受けるのは、國によつて違ふが、要するに僅少の年數に限

られて居る。その間はその曲は作者の私有物である。然しその年數を經過すれば、音樂は個人の私有物でなく、國民の公有物である」と。未だに自分に特權が存在して居ると信じて居る無智なる家元は憫むべきものである。

これと同じことで、蓄音機會社が專屬の藝人を置いて、之を監督して居ることもラヂオの發達には防害になるが、此のことは家元制度とは全然別の問題で、これは寧ろ資本主義問題に屬するから、その改革は中々難かしい問題である。

尙ほ序にモウ一つラヂオの大障害となることがある。それは音樂者が餘り法外な報酬を得過ぎることである。その勞力に對して、それ程高い賃銀を得て居るものは他の社會にない。藝術は極めて高尙なものである。然し之れを金錢で評價することの考へは誤まつて居る。「人間は働らいて飯を食ふ」といふ考へから行けば、その報酬は不公平である。音樂者はもう少し金錢上に於て恬淡であつて欲しい。

或る長唄の先生が或るお座敷で『老松』の演奏を賴まれ、一曲三百圓を要求した所が、二百圓しか出せないと言つたので、二百圓なら『老松』は駄目です、『鶴龜』しか出來ませんと答へたさうである。嘗て或る有名な畫家に鷄の畫を賴んだ所が『モウ五圓出して下されば モウ一匹鷄を増します』といふ、客は『五圓は高いから三圓にまけろ』と言つたら、『三圓なら雛が一匹です』と答へたといふのに似て居る。緣日商人のような話である。之れは長唄許りでなく、洋樂の方にも之れがあるから驚く。

尤も此の問題は日本許りでなく、西洋にも聞きしことで、之が爲めのラヂオの障害は各國が等しく受ける所である。此の點に於ても社會組織の大改造が必要である。

要するにラヂオの實施に就ては、音樂社會組織の大改造が必要で、又たラヂオの發達は必ずや此の大改造を現出せしめるに相違ないことを信じて居る。

頁數に多大の超過を來せる爲め折角本號に御寄稿を忝うしたる數篇の論文及び說苑を掲載し得ざるに至りたるを寄稿家諸先生に深く御詫びす。（編者誌す）

中央公論第四十年夏季増刊號創作



大地震

正宗白鳥

松林を後にした空地。五月のある日の午后。

仕事師の磯松。植木屋の長吉が、取拂はれた邸宅の土臺石に腰を掛けて晝休みの煙草を吸つてゐる。

磯松　おら眠くなつたゞ。これから家へ歸(けへ)つて一寝入りしべいか（眠さうな欠伸をする）

長吉　日が長くなつたからな。何もしねえで一日ぢつとしてゐると退屈なもんだな（これも貰ひ欠伸をする）

磯松　この頃夜この前を通ると梟の鳴聲がしてる。地震前にはこの邊に梟なんかゐなかつた筈だが、何處からやつて來たゞか。

長吉　さうよな。おら梟といふ鳥は、毎晩聲を聞くばかりで、何處に巣をくつてるだか、見たことねえだ。大きな家を壞してこの邊が淋しくなつたから、梟が他所から引越して來たのかも知んねえ。

磯松　梟といふ鳥は淋しい所が好きなんだらうか。さう云へば、お前はこの頃は尺八を止めちやつたぢやないか。大友さんの留守番小屋で夜おそく尺八が聞えると、おらの隣家の旦那が感心して話してゐたぜ、なか〳〵うめえつて褒めてゐなすつたが、お前は主婦さんを貰つたから、尺八は止しにしたのか。

長吉　まあさういふ譯さ。（笑つて）おらも自分で米を磨いだり茶碗を洗つたりしねえでも、三度々々おまんまが食べられるから、嬶といふものは調寶なものだと、おら思つてるだ。

磯松　だけんど、おらのやうに三人も四人も續けつざまに餓鬼をひり出されちや溜らねえよ。……この頃のやうに暇ぢやとてもやり切れねえだ。去年の今時分は、あつちからも此方からも、磯公直ぐに來て呉れで、身體が三つあつても足りねえぐれえだつたが、この頃は世の中に磯公の御用はなしよ。

長吉　だつても、お前は地震のあとで、一年もうめえ仕事をし續けて來たからいゝやな。植木屋なんざ損な稼業だつてことに、この頃つく〳〵氣がついてるだ。

磯松　お前は歳は若し、夫婦きりだし、それに、家賃は入らねえし、空地の番人で用もねえのに米代くらゐは給金が貰えるんだから、愚痴はねえ譯だ。

長吉　なにを。駄目だつてことよ。この地所が賣られて見ねえな。明日の日からおら、宿無しだ。

磯松　成程なあ。（あたりを顧みて）この空地はべら棒に廣いだから、賣値がよつぽどになるだらうな。

長吉　三千坪はたしかにあるだんべい。一坪が五十圓が通り相場だつて云ふから、三五の十五萬圓の身代がこのまはりに寝てる譯だ。地震で別莊が潰れたくらゐ何でもありやしねえ。金持にやかなはねえだ。

磯松（顔を顰めて）おら、も一度あんな大地震がやつて來ねえかと待つてるだよ。

長吉　なにを、馬鹿な。あんなでかい奴が二度も三度もやつて來て溜るものか。

磯松　だけんど、地震でも來て、家といふ家がみんなぶつ倒れなきや、おら達にいゝ儲け仕事はありやしねえ。今のやうな世が二年も三年も續いて見ろ。おら達は女房子と一しよに乾干になる外ねえだ。……おら、近いうちにまたでかい地震が來さうに思はれてならない。此間うち入日が眞赤に見えた時、さあもうやつて來るしらせだと、おら外へ出て待つてゐただ。……天道様が約束を違へて、ドシンと一つ打つゝけて來ねえもんなら、おらの力で地震くらゐ起せねえものかと、おら夜中に目を醒まして思案することあるだ。

長吉　（笑つて）お前の腕つ節がいくら強くつても、こいつはちよつと六ケしからうぜ。

磯松　一生懸命當てにしてることが外れちや、世の中は面白くねえな。おらの親方は地震で儲けた金で檜作りの家を拵へたりなんぞしたが、おらは、一年ばかりうまい酒が飲めたくらゐが地震の御利益だつたのだ。今度大地震があつたら、親方にばかりうめえ汁を吸はしやしねえ。もうそんな氣の利かねえことはしねえや。

長吉　當てにならねえ事を當てにするよりや、おら商賣換えを考へるだよ。いくら不景氣だつて、東京へ行つたら、もう實入りのある仕事があるにちげえねえ。

磯松　お前は二人つきりだからいゝ。

そこへ、左官の鐵造が仕事着を着てブラ〳〵入つて來る。

磯松　おらを呼びに來たのか。

鐵造　お前には用はねえだ。

長吉　おらに用があるのか。

鐵造　誰れに用もねえんだが、前を通つて聲を掛けたら、主婦さんもゐねえから、この廣つ場で一休みして行くべいと思つて入つて來たのだ。お前つちは石に腰を掛けて、二人で何を評議してるだ。

二人の側へ來て蹲む。

長吉　地震話さ。

鐵造　今時そんな黴の生へた話をしてる奴があるか。面白くもねえ。（欠伸をする）

磯松　昔の話ぢやねえよ。おらつちの腕で、も一度大地震をぶち起せまいかと相談してるんだよ。

鐵造　（元氣よく）そいつは面白い。事によつたら、おらも智慧を貸してやらう。

長吉　お前も仕事は怠けても、下らねえ話だと直ぐに乘出して來るから可笑いよ。

鐵造　おらこの頃は遊んだ日はねえだ。朔日から村上さんの御別莊へ通ひつ切りだ。

長吉　お前つちはさういふ大仕事があるからいゝ。おらも商賣換えをすべい。

鐵造　なにがいゝものか。聞いて呉れい。昨日から奥の座敷の上塗りをやつてるんだが、三太夫の奴、椅子を持つて來て緣側に控へてやがつて目を離さないんだ。おれ達がこつそり金目になる家の物を持出しやしないかと疑つて張番してるんだつて。おれつちを泥棒だと思つてやあがる。今日は今日で、後室様が御檢分にお出でになつたと云つて、その婆樣が廊下へお出ましになると、おれつちの足跡を、女中が先きへ立つて拭いて廻るんだから忌々しいぢやねえか。

長吉　そりや何處だつて同なじだ。此處の家でも湯殿だけは持つてかないで、地震で半崩れになつたまんまにして、檜の風呂桶まで附いてるんだが、おらつちにそれを使つちやいけねえと、旦那に嚴しく止められるんだ。木つ片はいくらでもあるから。たまにや風呂を沸していいと思つても、旦那に知れるといけねえから我慢してるだ。

磯松　お前だちに使はれちや風呂桶が汚れるといふ譯だた。馬鹿にしてらあ。お前も馬鹿正直だ。かまふことはねえ。ドシ／＼風呂を立てゝ入(はい)るがいゝ。おらも餓鬼を連れてその樽の風呂へ入れて貰ひに來るよ（ふと空を見上げて）……オイ、見ろ。空の色が變だぜ。日が照つてるのに、何だか薄つ暗くなつたちやないか。

鐵造　馬鹿を云へ。今日も日本晴れだ。昨日も一昨日(おとゝひ)も雲のかけらもなかつたゞ。おら天氣見ることうめえだが、まだ當分雨の降る氣遣ひねえだ（空を見上げる）。

磯松　おら雨の降ることを云つてやしねえ。遊んでるおらつちには、雨が降らうと降るまいとどちらでもいゝんだ。おら、雨のこと氣にしてやしねえ。……見ろ、空模様がたゞでねえだ。どんな穏かな日にでも、今時分になると風が川るのに、今日はシーンとして、松の葉も微塵(みじろ)動ぎしねえでぢつとしてる。お前感じねえのか。（訝しげに空を見、あたりを見て）長吉、お前も感じねえのか。

長吉　お前の目が半分眠つてるせいだよ。（笑ひ／＼相手の目を見て）さつき眠い／＼と云つてゐたちやないか。

磯松　おらの目よりもお前の目の方が眠呆(ねぼ)けてるだ（迂散くさい目を相手の顔に落して）貰ひ立ての主婦(おかみ)さんと、あんまり仲がよ過ぎるから、お前の目が眠呆けてるだ（また空を仰いで）あの空の色はたゞ事でねえ。今朝(けさ)までは眞蒼(まつさを)だつた空が午時(ひる)から鼠色になつて來たぞ。そら、よく聞いてゐろ、海の音がパツタリ止んぢやつた。

磯松が首を傾げて耳を留めると、長吉も知らず／＼眞似て耳を傾ける。鐵造は冷笑的に二人を見てゐる。

長吉　なるほどな、今日は海が死んでる。こんなにパツタリ波の音が休んぢまふことは珍らしいな。

磯松　だから云はないこつちやない。第一空の色が違つてらあ。お天道様の色も違つてらあ。今にもグラグラツと來ねえとも限らねえな。（狂的な喜びを現はす）

鐵造　今ドシンと、一昨年のやうなでかい奴がやつて來ちや大變だ。折角上塗りまで濟ましちやつた壁がまた總崩れだからな。

磯松　さうなりやいゝ氣味ぢやねえか。職人を泥棒扱した三太夫や後室様にいゝ見せしめだ。お前もおらと一しよに喜べよ。……今度お天道様が約束を間違へたら、おら承知しねえだ。

鐵造　承知しねえと云つても、天道様を打つ譯にやいくめえ。（輕く云つて）さう云へばおらも、馬鹿に眠くなつちやつた。お前の云ふやうに空氣が變になつたせいかも知んねえ。おら、そこの松の蔭で一眠入りしべい。

鐵造は松の木蔭へ行つて寢ころぶ。

長吉　さあ、おらも家へ入つて一眠入りしべい。（獨言のやうに云つて、磯松に向つて）お前も呆けたこと云つてる暇にや、歸つて寢るがいゝ。午睡にや税金がかゝらねえから、こんな安い樂みはねえ。

磯松　空を見てると、おら目が醒めちやつた。お前つちのやうな鈍な人間にや分らねえんだな。

長吉（嘲けるやうに）地震のことけえ。……地震があつたつて、おらつちの金儲けになりやしねえよ。あの時のやうに、も一度家がぶつ潰れて見ねえ、世の中はめちや〳〵だ。誰れがまたと建直す氣になるものか。一度の地震でさへこの不景氣だ。（欠伸まじりに云ふ）

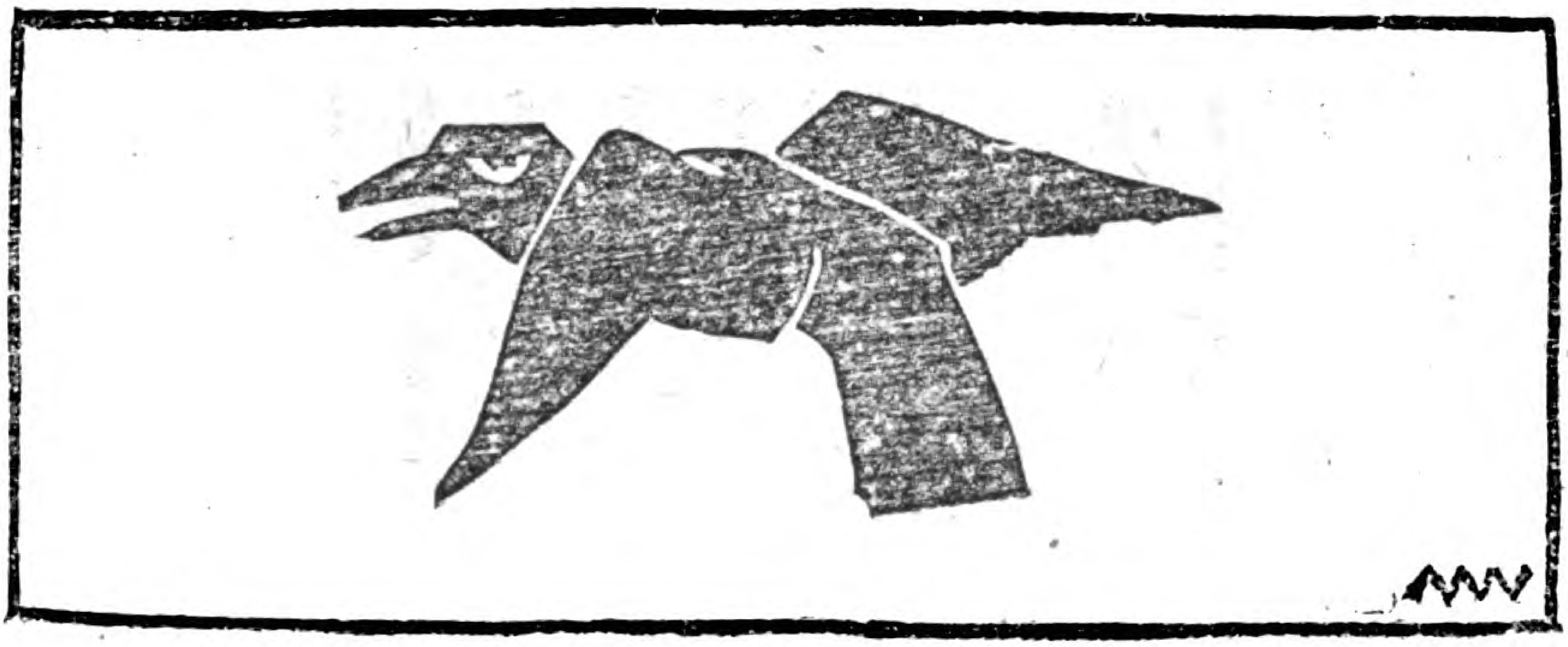
磯松　あの時の十倍ものでかい奴が來て、地べたまで根こそぎ打潰れりや、依怙贔負なしのお互ひ様だ。おら、女房子と一しよに干鰈のやうにべちやんこにされたつて平氣だ。諦めるだよ。大友の大將も村上さんの御後室も、世界中の生物がみんな一ときに揃つてべちやんこになるのなら、おら文句もねえ。お前も、十五萬圓のこの空地と一しよに、ドシンと海の底へ逆落しに落ちりや言分はあるめえ。

長吉　おめえ[illegible]、殺されたけりや勝手に殺されるがいゝ。おら[illegible]たらおしまひだ、これ[illegible]ない[illegible]……

……お前は何時までも空を見てゐたきや此處で見てるがいゝ。おら、家へ入つて一服やらすべい

長吉川て行く。磯松はなほ空を仰いで見詰めてゐる

（幕）



堤防を突破する浪

小川未明

こんどばかりは、いかなることがあつても不平を言はずに、しばらく、辛棒をしてつとめるとKが言つてゐたから、それはいゝことだと私は、言つたのでした。どこへ行つても主任や、社主と衝突をして、長つゞきがしないのを、これまでに幾たびかさうであつたのを知つてゐたから、内心では、多少危ぶみもしたが、彼が、さう自覺したから、この上のいゝことはないと思はれたからです。

人は、どういふ理想を持ち、また、いかなる思想を持つたにしても、其の日の衣食について考へない譯にはいかないものだといふことを察するとさびしく感じられるのでした。

その後、二三月は、Kの顔をも見ませんでした。私は、毎日、彼が、朝早く社へ出勤して、晩方になつて家に歸るので、遊びに出るゆとりが體にも、心にもないのだと思ひ、また、それにちがひなからうと思はれたのでした。誰でも、生活のためには、我を屈しなければならない。アイデアリストであれば、あるだけ悲しいことだ。

日曜日でもない日に、Kが久しぶりでたづねて来ました。顔を見ると、相變らず、眼尻のところに、きざんだもののやうな、皮肉が現はれてゐました。彼が、生活に苦しめば、苦しむ程、この皮肉は深く見えたが、入社したと告げに來た時分には、思ひなしか、いくらか、その影がうすらいでゐたものでした。やはり、自分も、社會のみんなの仲間入りをしたから……とでも、いふやうな氣持ちが彼の心にあつたためとも思はれる。それが、いま見ると、前よりも、說く、反抗的になつてゐます。

「社の方は………」

「やめてしまひました」

Kは、かう言つて、笑ひました

私は、他人の身の上のことながら、いつしよになつて、笑ふことができなかつた。むしろ、かう言つた、Kの顔を見て、何となく嫌厭にちかひものを感じたのでした。

(どうせ、この男に、辛棒はできないと思つてゐた。生なかの階級意識———いつたいそれが何になるのだ。多くの勞働者は、この苦痛の裡に、默つて働いてゐるのに……)と、私は、思つたのです。

「考へると、馬鹿々々しくて、行つてゐられません」

「さうかも知れないが、やめれば、また、苦しまなければならないぢやないか? 頭を下げて、原稿を持つて歩つくのなども、決して、感心したことではない」

私は、彼等が、いつも懐中に、原稿を持つてゐる姿を眼に描いたからでした。

「どの道、苦しまなければならぬのなら、まだその方を取ります。自分の行かうとする道で苦しむのは、仕方がたくて

も、あんなところで、馬鹿に扱はれるのは辛棒できません」
私は、もはや、言ふべきことがなかつたので、默つてゐました。そして、私の排であるが空想に耽つたのでした。
(社會性を持つ、すべての文化機關に對して、權利を主張することが正當であるなら、なぜ何迄も、權利を主張しないのだ。罪はないのだ。同盟しないのだ。そして、自分だけが偉くなりたいなどと考へるのだ?)
私は、文壇といふことを考へると、頭の中が暗くなりました。
「私などは、獨り者ですから、いよ〳〵食へなくなれば、何んでもやります。妻子のあるものは、さうはいかないから、社で見てゐても氣の毒なものです」
彼は、長い間、苦しみつゞけてゐた。そして、やうやく會社に口を見出したのだ。それを、忘れてしまつて、いよいよ食へなくなればなんでもやるといふやうな、妄想を何遍でも操りかへしてゐる。獨り、彼ばかりでない……からいふ者が多いと思ひました。
「何をやるつもりだね」
「そんなことを、今から、考へてゐません」
「考へるも、考へぬもない。何か、この社會に、そんな仕事があるだらうか?」
「あります。自由勞働者にでも、なんにでもなります」
「それは、やはり一種の空想だ」
「いや、空想ではありません。食へずに、街頭で倒れて死んだものを、まだ聞きません。困れば、なんだつて出來ます」

「君が、また自由勞働といふ文字を標榜してゐるから、そんなことを思ふのだよ。たとへば、しきゐた範疇にせよ、他の人は、忍耐をして勤めてゐるぢやないか。他の人のつとまるものを、君がつとまらんといつては、いま君の言つたのに矛盾をしてゐる話だ。さう思つて、勤めてゐればよかつたと、僕は、思ふのだ」と、私は、言ひました。

Kは、口許に、冷笑を浮べた。

「こんな、短いものを書きましたが、見て下さいませんか」

「何枚ばかりのものかね」

(私は、自分で、かう言つた言葉を、曾て、友人から、批評家から、聞いたことがあつた。その時分を考へれば、何人の勞作に對してもうるさがる筈はないのであるが、また、一方から考へてみれば、その時分、友人や、批評家も、讀まされたことを迷惑がつた心持が分るやうな氣がした)

「十枚ばかりのものです」

私は、安心にちかい、氣輕るさを感じて、その作品を受取りました。

それには、こんなやうなことが書いてありました。

——毎日、朝と晩方に、B附近に列をつくるサラリマンの群、あれは何んだ。青白い顏をして、風彩ばかり立派でも生氣がないぢやないか。まるで、人間の機械だ。

(私は、かう露骨に書いたんぢや、駄目だと思ひながら、なほ、讀みつゞけました)

——この人々の中には、妻のあるものもあるだらう。また、子供のあるものもあるだらう。まさにそのとほりだ。

そして、彼等の妻子は、夫の、父の、家に歸るのを待つてゐる。妻には、我が夫は、無上のものだ。また、子供にとつ

て、父親は、絶對なものだ。だから、彼等は、家に歸れば、權威者だ。暴君でもあり得る。しかし、役所や、會社にあつてはどうだ。重役の前に、社長の前に出た彼等はどんなものだ。

――僕は、つく〴〵彼等にも、妻があり、子供があるのだといふことを思つた。僕は、決して、卑屈を、自徒を、また醜さを責めるものではない。責めても仕方がないからだ。それよりか、何が、こんなに、彼等から自由意志を奪つて、機械にしたかを考へるのだ。

――重役の前に、社長の前に出ては、理由のない小言、たとへば、その日、その日の機嫌によつて、感情を恣まにする、それに對してすら、忍從をよぎなくする。そして、家に歸ると、弱い妻や、子供を、彼等は苛めるであらう。人間といふものは、どこまで無恥で、虚僞であり得るかを考へる時に、自分は、ゐたゝまらなくなる。

――B附近に、毎朝、毎晩、列をつくる彼等の群を見たくないばかりに、會社に於て、矛盾した、卑屈な、人間の行爲を知りたくないばかりに、自分は、また明日から街頭をうろつかなければならない浪人となつたのだ。

（成程、單純な、見方だけれど、このうちに眞理が含まれてゐると、私は、思ひました。しかも、烈々たるところに、この男は、正しく生きてゐるといはなければならない）

「いゝ作品ぢやないか……」

「さう、お思ひでせうか」

「滅び行くものゝ姿だよ」

「たしかに、さうです」

「少し、説明的だが、この種の作品は、裝飾でもなければ、美の發見でもない。眞理の摘發であればいゝのだから、形

式に囚はれなくてもいゝと思ふ」

私は、何となく、怖しい、人生の事實に打衝つたやうな氣がして、悲壯に感じました。

Kは、もぢ〳〵して、私の顏色を見るやうにしてゐたが、その際に、遠慮勝なところを示して、

「どこかへ、紹介して、いたゞけないでせうか？」と、言ひました。

私は、困つてしまつた。

「かうした作品が、いまの文壇に受けないといふことも、また、私達の紹介が、役に立たないといふことも、君に、前からよく知つてゐるのでありませんか。階級鬪爭がいよ〳〵露骨になれば、なる程、かうした作品の受けないことは分つてゐる。いつか、かういふやうな作品でなければならぬといふ時代は來るかも知れないが……君は、このことを知りぬいて、會社へはいつたのでなかつたですか？」

私は、その心持には、同感しながらも、しみ〳〵とKの顏を見ました。

「いや、分りました」

彼は、原稿を懷中にいれて、やがて、歸つて行きました。

その後で、私は、しばらく默然として考へたのであります。

文藝といふ分業の一つが、すでに、其等の從業員を救ふことができなくなつたとしたら、すでに、それは、滅び行く、職業の一つではなからうか？私達が、子供の時分には、鼈甲屋や、繩簾屋は、立派な、一つの職業であつたが、今では、そのあたりに見當らない。けれど、全くなくなつてしまつたのでない。文藝にしても同じことで、いつの時代になつたつてあるだらうけれど、その社會と極めて密接な關係にあるものだけが、獨立した、職業の地位を保つであらう

と思はれたのであります。

過渡期の苦しみを受けてゐるものは、Kばかりではなかつた。

色の褪めた、洋服を着て、青年畫家がやつて來ました。

藝術は、人間性の微細な一つにも立脚し得る。人生的であれば、その藝術に存在の意義が見出される。だから、民衆を措いて、他にこれを審査するものゝない筈である。少數の審査員によつて、決して、その價値を定められるべきものでない。また、藝術家は、互に目的を一つにした時に於てのみ集團としての運動の意義が明らかにされるが、さもなければ、すべての場合に於て、アナーキイであるのがほんたうだ。………彼は、常にかうした意見を持つてゐました。

それで、帝展にも、二科會にも、自分の作品を出品したことがありません。世間的に、名聲のない藝術家が、苦るしむのは分りきつてゐます。彼は、いまノートの表紙を描いたり、雜人の燒繪を描いたり、ある時は、繪はがきに着色をしたりして、辛うじて糊口の途を見出してゐるのでした。

「いよ〳〵自分の仕事をしようとする時には、夜でなければ、時間がないのです」

「夜だつたら、色がよく分らないだらう……」

「畫のやうな譯にはいきません。夜見た色と晝見た色と驚く程、感じの異ふことがあります」

「大事な仕事を夜して、晝でなければならぬといふことのない仕事を、晝しなければならぬといふことになるのだね」

私は、太陽の光線を、仕事の上から奪はれてゐる不幸な畫家に向つて言つたのでした。

髮を手で掻き上げながら——その長い髮の毛は汚れてゐた。

「やはり、食ふに追はれるからです。私は、一食にしてゐます……少しでも、この中から殘るものなら、殘して、繪

具を買つて、個展をやりたいと思ふのですが、いまは、それどころでありません」と、彼は、答へました。

私は、彼の傍に、卷いてあつたものを指した。

「何んですか？」

彼は、猿のやうな顔をして笑ひました。

「昨夜、描いたんです」

バットを喰へながら、彼は、痩せた指頭で自から、その繪を開いて示さうとした。

私は、まだ開らかれない繪を見る前に、彼れの痩せた手の細い指を見つめて、この手だ！と思ひました。

――私は、この頃、自分の指を見てゐると動くのが、全く不思議です。指だけが、獨立に生きてゐて、ひとりで勝手に活動してゐるやうに思はれるからです。夜など、自分の手を、机の上に置いて、ぢつと見つめてゐると何となく怖しくなつて來ます。そして、そこにあるナイフを取り上げて、いつ何時、自分の胸の心臟の上へグサリと突き込むかも知れないと思ふと……

彼は、こんなことを言つて、私に、聞かせたことがあります。

――私は、モデルを使ふことができませんから、この頃は、自分の左の手をモデルにして描いてゐますが、一本の指に、山岳、溪谷、奔流を望むやうな、神秘、絶對、無限、を感じます。手全體は、宇宙のやうな感じがします……

私は、彼の言ふことを聞いた時に、デュラアを思つた。

「これを見て下さい」

青年畫家は、かう言つて、笑ひました。

私は、それを手に取つて見ると、水彩で描いた裸體畫です。セザンヌばりといふよりは、漫畫にちかいものでした。それにしても、こゝに描かれた、女の群像は、頗る奇妙なものであつたのであつた。たとへば、足の太く短いのや、馬鹿に細長くて、頭だけ、髮形の近代風なのや、斷髮のものや、肥滿した女や、一つとして釣合がとれてゐないのに、しかも、ある女達は、組打ちをして爭つてゐるかと思ふと、ある女達は、車を引いてゐます――しかも裸體姿で――また、ある女等は、男性を追つて、手をさしのべてゐると、男は、これに、怖れをなして、逃げて行かうとしてゐるのでした。

「いつたい、これは、君、何を描いたんですか？」

青年畫家は、ちよつと頰を紅らめて、煙草の吸口を齒で嚙んでゐました。私は、この男は、變態性慾者であるなといふやうな氣がしたのでした。

「その組打をしてゐるのは、麵麭を爭つてゐるのです」と、彼は、註を加へて言つた。

私には、やゝこの繪が、分るやうな氣がしました。

「飢饉を描いたのですか？」

「いゝえ、ブルジョアの女達を描いたのです……」

畫家は、掩ひ被さる髮の下の二つの眼を、異樣に輝やかして、皮肉に笑つた。

私は、意外に感じました。階級的の憎惡を何うして、女へ持つて行つたか？　やはり、變態的でなければならぬといふやうな氣がしたのでありました。

しかし、この繪を描くまでに至つた、彼の感想や、動機を聞くと、私は、この社會の矛盾した、痛ましい事實を知つ

た。

青年は言葉をつゞけさした

「――ある晩、二人の男の子、多分兄弟と思はれます。飯屋へはいつて來て、一杯十錢の飯を二人が分けて、仲よく食べてゐました。これを見た時に、私は、胸が塞がつてしまひました。また、ある時のことです。勞働者が、店の入口のところに跪いて、ばら錢で、五錢、卓の上にのせて、どうか、これだけ飯をくれいと言つてゐました。私は、飯の一杯や、二杯の金は持つてゐたのです。しかし、これを與へることがいゝことか、惡いことか、分らないやうな氣がして、たゞどぎまぎしてゐました。何も、咽喉には、通らなくなつたので、急いで、そこから飛び出したのでした。

「――それから、後に、私は、劇場の前を通りました。そこにはいつぱい自動車が止つてゐた。また、ブー、ブー、いつて動いてゐて危なくて、歩るけなかつたのです。若い女が、幾人も、それには乘つてゐました。他の人が、どんな風に迷惑してゐるかも知らぬ顔に……。拾錢の飯を、小さな兄弟が分けて食べてゐるといふ事を考へ、また、勞働者が、飯屋の店頭に跪いて訴へた時の樣子を目に思ひ浮べると、この女達は、どうして、どこからそんな贅澤をする金が出るのだ。働いて食べられないものがあるのにと思ひました。これ等は、みなブルジョアです。そして、音樂や、劇を、自分達のものであるやうな顔をする智識階級です。彼等は、寄生蟲の癖に、上品振つたり、何一つ自分のものを持たない癖に、高慢な顔付をしてゐるのです。もし、彼等が、無産者の今日の位置にあつたらどんなでありませう。あの孔雀のやうな女が……一片の麵麭でも得るために爭ふでせう。鞭の下に、働かされ、酷使され、そして、金のありさうな男供の後を、しかし卑屈に追かけるでせう。現在は、ダンスをしたり、また演壇に立つて、公娼廢止などを叫んでゐるやうな女供までが……」

青年の顏は、紅味を帶びてゐました。

「あゝ、分つた。この裸體の女は、ブルジョアなんだね」と、私は、言ひました。

「さうです、さうです。裸體にすれば不具者と同じい格好の女達なんです。裸體にして比較したら、いまの勞働階級の婦人の方がどんなに立派でせう。そして、より道德的で、より人間的であるか知れません………」

「しかし、君も、こんな繪を描いてゐる間は貧乏しなければならない」

「同じことです。僕等の畫が賣れる時代には、いまの裝飾藝術が、顧みられない時なんですから………」

「さう、あきらめてゐれば偉い」

「僕は、さう信じてゐます」

「何といつても、君も、やはり智識階級ぢやないかね」

「いまの境遇は、全くの勞働者です。たゞ、組合すら持ち得ない、憐れな無力な勞働者の一人なんです」

青年畫家は、描いて來た、奇怪な裸體畫を自ら卷いて、歸る仕度をしました。やはり何等かの形にて、復讐を企てなければ、みじめな生存に堪えられないやうに、私には、察せられたのです。

「じや、失禮いたします」

「これから、あつくなるから大事にしたまへ」

青年は、歸つた。その後で、私は、かうした青年の生活が、眞劍であればあるだけ、言ふに言はれない悲壯を感じました。

この頃、來訪するものは、プロレタリアより他にあまりなかつたが、珍らしく、紳士が訪ねて來た。學校時代の同窓

Hでありました。本意の要件は、低利な金を借りて、家を建てたらどうかといふのでした。そして、いつしよに共鳴すべく贊成を求めたのであります。

――家主に、不當な家賃を搾取されることなしにすむし、また、郊外へ行けば空氣もよし、子供等をして、土に親しませることもできる。現在の社會では、家だけ位は、自分のものとすることは、決して、良心にやましいことでない。却つて、不當な搾取から脱れることだ――と、Hは、言ふのでした。

私は、その言葉に對して、何の矛盾もまた、反對の理由をも見出すことはできませんでした。たゞ、即答することが、できなかつたのでした。

「あの時分の友達は、みんな、いつの間にか家を持つたり、學校にゐるものは、教授になり、新聞社にゐるものは、古參になつて、おさまつてゐるね」

自分だけは、いつまでも若い氣で、未完成でゐるが、顧みると、すべては、行くべきところへ行つてしまつたといふやうな、私には、孤獨にちかい寂寥が感じられたのでした。

「君なども、もう、子供のことを考へてやつてもいゝ時分だよ」と、Hは、穏かに笑ひながら言ひました。その笑ひは、なつかしみのあるものでした。獨り、昔から友達の間柄だけに交はされるものでした。

私は、いまゝで、自からの焦燥と階級に對する反感から、その舊友に對してまで、心の中では、時に、敵視したことがあつたのを思ひ出して、それが、全くいはれなく、却つて自分の僻見からであつたやうにも考へられて溫良な友の顏を見るのが苦しかつたのでした。Hは、飽迄も、私を信じてゐました。

「そのうちに、君も遊びに來たまへ、君さへ承知すれば、手續は、こちらでするから……あの時分の友達同志が、近く

に住むのも面白いぢやないか」

其夜、私は、燈火の下で、籐椅子に凭りかゝつて、考へ込んでゐました。友の投げて行つた石が、意外に、自分の思想に、幽暗な波を立て、感傷的にさせたからです。

三十分………一時間………其の後で、私は二たび反抗的になつてゐた。

（多數の人々は、家を持つてゐない。持つことができないからだ。たとへ、少數者が、家を持つたとしても、どうして、不安から脱れることができやう………社會政策の上からいつても、無産階級より中産階級を、しかも個人的に救濟することによつて、どれだけの社會不安が除去されよう………それよりは、何故、積極的に、みんなのためになる學校や病院を造らないのだらう…………）

私は、この社會をより善くすることなしに、自分だけの幸福を、ついに考へることができなかつたのでした。――それは、いつ頃からともなく、自由勞働者に、やつて來られることは、たび／＼です。

私は、ゴルキイの小説を讀んだりして、自由勞働者に對して、特殊のなつかしみを感じてゐました。また、IWWの宣言に、眞の無産階級の革命的氣魄を感じてゐたのでした。

偖て、一人の勞働者がたづねて來ました。その男は、車力をやつてゐたのだが、心臓を患つて、腹中が膨ぶくれになつてゐたのです。その上に耳が、遠く、またいくらかものを言ふのに吃つたのでした。私は、そこにあつた寄附雜誌を與へると、喜んで、それを抱いて歸りました。

其後、この男は、どうしたか姿を見せなかつたのです。かの大地震のあつた翌月の夜、彼は、どこかに、いろ／＼の人々と野宿をしてゐると、鮮人だといはれて、追はれたのでした。彼は、私を思ひ出したと言ひます。その足で、見

傳ひに來ました。そして、近所まで來ると、ここに屯してゐた自警團に取り圍まれて、どこへ行くのだと、詰問された。

彼が正直に答へると、

「あの新聞や雜誌などに、時々、何か書いてゐる男のところへか？　あんな、生意氣のことを書く奴に、碌な奴がない。まさかの場合には、煽動でもするやうな奴だ。そこへ行く、お前も、きつと碌な奴ぢやないだらう……」と、在郷軍人の一人が言ふと、また、傍から一人が、嗄れきつた、勞働者に詰め寄つて、

「お前は、髮を長くしてゐるな。お前は、社會主義者だらう……」

自警團の人々は、何か、こそ〳〵と相談をしはじめて、この男を押へて置かうとしました。その時、まだ若い青年であつたが叫んだ。

「あの人が、新聞や、雜誌に、書くからといつて、直に、その思想を實行しやうといふやうな人ではありません。社會主義的な思想は溫厚な人でも持つてゐる。それを必ずしも惡いとはいへません。この方は、私の見たところ、たしかに勞働者に相違ありません……なんなら警察へつれて行つて、保護を頼んだらいゝでせう。僕が、つれて行きます」

青年は、勞働者を反動的になりきつてゐた彼等の中から救つたのでした。そして、適當の處置を取つたのでした。

私は、この話を、後から、勞働者の口から聞いて、心で深く、青年に謝したのであります。

「知識階級も無自覺だが、庶民階級は、なほさら無自覺だ」と、私は、思つたのでした。

寒い日のこと、破れた帽子を被つた、男がたづねて來ました。

「私は、自由勞働者です。つい二三日前までこの近所の瓦斯管を掘つてゐたものです」と言つた。

掘り返へされた土の上へ霜がかゝつて、穴が深く、陰慘の氣に充ちてゐた光景を私は記憶する。自動車が、泥濘を走

ゐるたびに、シャベルを持つて、穴の中に働く勞働者は、頭から泥を浴びせられたのだ。私は、かうして寒さと苦痛の裡に働く同じ人間について考へざるを得なかつたのでした。

「もう、あの工事は終つたんですか」と、私は、たづねました。

「私は、體を惡くしたので、一日休みました。二日目には、あぶれてしまつたのです……この頃の不景氣は、全く怖しいんです。一度の飯を食はぬものがあります。どんな仕事でも奪ひ合です。それで、毎日、市役所へ押かけて、救済の途を講じてもらふやうに骨を折つてゐるのですが、誰も、餘裕のないものばかりなのです。組合がないから――全くないではないが、かういふ場合の役には、立たないのです。運動をしますにも　すぐ金に困るのですが、いくらか寄附をお願に上つた次第です……」

私は、日本の勞働運動が、まだ勞働者をこんな風に、路傍に捨て置くのかと思つて寒心しました。そして、これは、勞働者自身の無自覺ばかりを責むることができない。より以上に、智識階級の不誠實と眞理に對する不謹愼とを表はすものだと笑つたのでした。

「不景氣なことは、僕等も同様なのです。たゞ志でよければ、寄附しますが……」

「それで結構です。ブルジョアから、澤山もらつたよりは、あなた方のやうな、同情のある方から、いくら少しばかりでも、もらつた方が、私達には、うれしいのです」と、破れた帽子を被つた男が言ひました。

私は、何となく、その一日は自から、感激のうちに浸つてゐるのを覺えたのでした。

――かうして、この社會に、飢えてゐる者は無數である。飢えざる者は、飢えたる者を救ふことに對して、たしかに道徳の上からいつて、義務があると感じました。しかし私は、トルストイアンではない。個人的に、一人、一人をどう

することもできない。それは、物質的にも、また思想的にも、可能でもなければまた主義でもないのである。

私は、自分が衣食してゐる金をば、この社會から決して、搾取してゐるとは考へることができない。もし、私が、その藝術に於て、必ならずも強いて、妥協を求めることがあつたら、また、たゞ金を得るために書くといふやうな、浅ましいところがあつたなら、搾取してゐると言はれても仕方がないであらうけれど、少なくも、私の場合は、さうでないのである。しかし、さうだからとて、私は、この社會に對して、連帶の責任を感ずることなしに、すむことはできない。それが、直接に、私人の利害を目的とするのでなく、大衆運動のためであるから、たとへ、困つてゐても、志だけなりと盡すのが本當だと感じたからでした。

ある朝、私はまた知らない男に襲はれました。

取次に出た女中は、かういふ時には、いつも暗い顔をして奥へはいつて來るのです。留守にした方がいゝか、また留守にして却つて主人から叱られはしないかと……。なぜなら、私は、あまり僞て留守を使はないからです。そして、かうした様子の人間が、たづねて來た時は、大抵また金のことであることを知つてゐたからです……。

人といふものは、その時々によつて、氣持が同じでない。私は、また金をもらひに來たのだなと思ふと、限りない憎惡に燃えたのでした。なぜ、私がいつも彼等から、その對象にされなければならぬかと感じたからです。自分が弱いがためにか……作品の含む人道主義的思想のためにか……それとも、金があるとでも思ふためにか……。

私は、玄關まで出て行つて、その男を見ました。彼は、レーンコートを着て、草鞋をはいてゐました。

「何かご用ですか」

そこに立つてゐる男は、先づ、私の顔を見たといふより、落付いた態度をして、睨んだのでした。

「金を少し借りに來たのです。いや、もらひに來たのです」
「そんな金はない」
「飯を食ふ金だけ、下さい」
「なぜ、君は、働かないのだね」
「紹介所を歩るいても仕事が見付らないのです」
「ないからといつて、僕のところへ來るのは何うした譯だ……」
「ブルジョアには、言ひたくないし、また、言つても、金をくれないからです」
「僕は、一人に與へて、一人に與へないといふことは出來ない。また他人に、自分のものをみんな與へてしまふことは尙さらできない。僕は、トルストイアンではないのだ」
「しかし、私共は、あなた方が、無産者の味方であると信ずるから來たのです」
「僕の力でどうすることもできないことを君達は、よく知つてゐるでせう。僕は、自分の働く金で、やつと生活をしてゐるやうな狀態なんだから……」
「それは、よく分つてゐます。しかし、行くところがないのです」
「働いて食へないのなら、それは、この社會の罪なんだ。まづ、民衆のための機關であり保護である。さういふ役所へ行つた方が至當でありませんか」
男は、しばらく、默つてゐました。そして、顏に冷笑をたゝえてゐました。
「さういふ理屈は、分つてゐますが、私達は同情して下さると思つてやつて來たのです」

私は、こゝに眞理のあることを感じました。そして、もし、私が、その眞理に行つたら、私ばかりでない、一家の生活を破壊してしまはなければならぬと思ひました。

「……同情者だと思つたら、なるたけ、さういふ者を苦しめないでもらひたい」と、私は言ひました。

彼は、帽子を頭から、もぎ取るやうに脱ぐと、それを鷲づかみにつかんで、片足を前にふんばり、ちやうどメイデーの日に、勞働者の勇者が演壇に立つたやうに、眼を怒らして、

「さういふことを言はれるのは、ほんたうのタヴリシチでないからです。やはり、智識階級なんだ。餓死しやうとしてゐる人間があつても、それを飽迄も批評的に見てゐるといふ人間なんだ。そして、書物で得た理論を楯として、無産階級に號令をしようといふのだ。實際の肉彈になり、戰線の眞先に立つて、犠牲となるものは、みな勞働者なんだ。智識階級は、平常は、ブルジョア擁護に役立つ、堤防の役をつとめてゐる……そして、それが、不利益になつた時は、勞働階級の味方であり勞働階級を導いたといふやうな恩人顔をしてゐる……しかし、もう俺達は、その虚僞にはだまされない。智識階級者が、いまゝでその都合のいゝ階級にゐたお蔭から、どれ程、樂をしてゐたか知れないが、もはや、そんな都合のいゝやうにはならないんだ。どつちかにきめてもらはふ。ブルジョアの味方であるか！……俺達の味方であるか。それでなければ、そんな堤防は邪魔になるんだから、突破するばかりだ！」

彼は、言ひ終ると、私の返答を待つやうにきつとこちらを睨んでゐました。

「君の言ふ如く、僕は、知識階級の一人だ。そして、既成階級に生れたゝめに、徳もあつたが、それだけの苦悶がある……しかし、そんなことは、あらためて他人から言はれなくても自覺はしてゐるつもりだ。自分の力で、良心の命ずるところに從つて、できるだけのことをしたいと思つてゐる。そして、大衆の方向へ、眞理の進行を、助力しようとと

そすれ、決して、反對へ行くものでない。もとよりブルジョアの味方をするものでない。たゞ、言つて置くことがある。知識階級は、たとへ無力とはいへ、尚ほ、因習的に、もしくは傳統的に、自覺がある。餓死しても、食を乞はないといふことだ。集團のために、たとへ金をもらつて歩るいても、自分のために、頭を下げて衣食を乞はないといふことだ。魂の死んでしまつた、そして、機械になりきつてしまつた、亡靈のやうな輩は論外だが……少數の一部の自覺した智識階級には　心から革命的精神が燃えてゐるといふことだ。勞働運動が、單に經濟の問題に限られ、組織について云爲するならいさ知らず、眞の無產階級の解放に、その目的があるなら、少なくも、この氣魄が缺けてゐては、燃えない石炭と同じことだ……」

男は、默つて行つてしまひました。私は、かう言つたものゝ、彼が、智識階級に下した批評を否定するに足るだけの論據を見出すことができなかつたのです。

メイデーの日に、私は、Kの姿を自由勞働者の中に見出しました。そして、あの痩せた畫家が、活版印刷工の中に加はつてゐたのを見ました。

蜒々として、勞働者の示威行列は、市街の間を警官と民衆に環視されながら練つて行きました。晴れた空の下に、赤や、白や、黑の組合旗がひら／＼と初夏の風に翻つてゐます。この世界は、たゞ眞實に、正直に、生產に從事しつゝある者によつて斯の如く、黑煙は上り、汽罐はうなり、汽車や、汽船は運轉し、そして、文明が光輝を放ちつゝある。しかるに、彼等を搾取し、生命を脅かすものは何者であるか？ 彼等の勞働歌を叫ぶのを聞いてゐると、いつしか熱い涙が頰を傳つて流れるのを感じたのです。しかし、これには、正直に働いて、生活する者しか加はつては居なかつた。幾千、幾萬の無產者の群ではあつたが、所謂、インテリゲンチヤは加はつては居らなかつた。その資格が認められず、ま

た、加はる權利を有しなかつたからです。

私は、街頭に立つて、これと同時に、空虚な人生觀を說き、性慾を描寫し、カフエーに陶醉し、資本家とブルジョアに阿諛することによつて、榮華な生活を送りつゝある、思想家、藝術家の輩の存在することを思ひました。彼等の相手とする、青白い女の歌は、やがて滅亡せんとする彼等の階級の挽歌であつて、この街頭を掠めて、潮の湧くが如く起りつゝある、勞働者の歌こそ、未來を指示する行進曲だと思つたのであります。

それにしても、この知識階級の一人である私の心は限りなくさびしかつた。

日の光りが、強く若葉の面に反射する日でありました。

私は、ある思想家等によつて企てられた、講演會へ聽きに行つたのでした。聽衆の多くは、眞理に渇し、正義に憧憬してゐる青年とまた若い女達でした。

瀟洒の身なりをした、經濟學者のAが演壇に上りました。新進氣鋭の學者として知られてゐるので、あちら、こちらに拍手が起りました。

「……感傷的な、革命論や、また、感情的な階級鬪爭の理論化では、もはや、何となく物足らなさが感ぜられるばかりでなく、また、どれ程の功果があるか疑はれるのです。むしろ、現在、その權威を振ひつゝある資本主義なるものが、果して、どれ程の陣容を整へてゐるか、また、その巧妙な、しかし破綻を生じつゝあるからくり……そして、それが行き詰つた場合には、いかに轉換さるべきか。經濟を基礎とせる近代文明の眞相を明かにすることが、合理的な、新社會建設の必然的な經路の如く考へられるのであります。そして、この事實の證據立てる科學的論證に對しては、いかなる權力も、また暴力もいかんともすることができないのであります……」

この年若い經濟學者は、まづかう言つてから、徐々に、研究の結果を發表したのであります。この時、滿場の人は、彼の口から出る一句も聞き洩らすまじと耳を欹てゐたのでした。

私は、感激をもつて、そこを出て、電車に乘り、この少壯の經濟學者の姿を眼に描き、彼の言つたことを思ひ出して、家に歸つたのでした。

時も、時、歐洲戰爭の影響と大地震の傷手とが、いまやうやく經濟界を動搖するのであります。不景氣になると、俄かに反動的になつたことは日々の新聞の上でも知られたのでした。勞働者に對する壓迫、思想家に對する脅威は、曾てなかつた程に深刻なものでした。反動は、やがて反動を生じました。そして、社會は、あらゆる方面に於て、極端から極端の現象を呈しつゝあるやうになりました。……しかし、私は、思つた。

……反抗……煽動……追擊……これだけが正義のための運動でない、建設的な、より意義のある仕事がまだ智識階級に殘されてゐるのではないかといふことを考へました。

ある日の朝、子供が、學校へ行き、私は、二階の書齋にはいつて仕事にかゝらうとする時分でした。高等係がやつて來て、すぐに、署へ同行を求めました。

「すこし手間取るかもしれませんから、そのおつもりで……」と、彼は、言ひました。

私は、たとへおそくなつても心配することはないと、妻に、言ひ殘して、いつしよに外へ出ました。

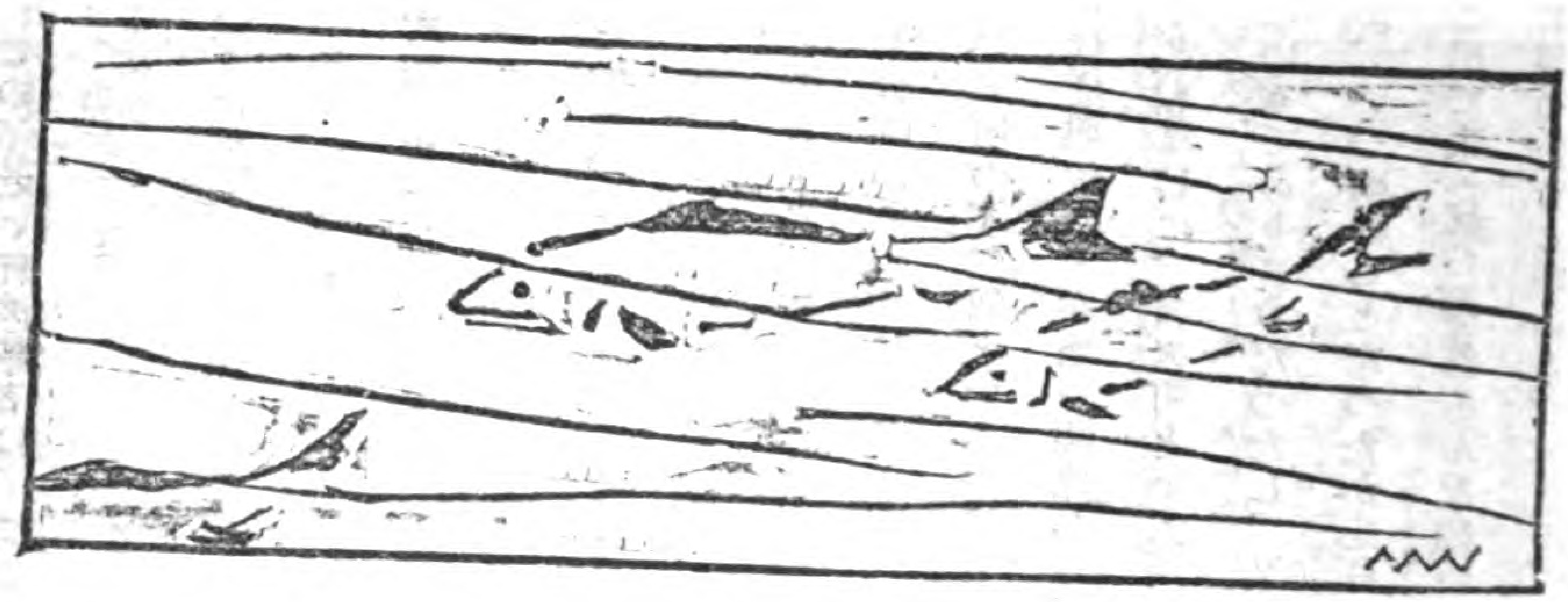
「やあ、とんだことになりました。私共にも眞相は、分りませんが、警視廳からの命令です」

「僕は、最近、家にばかり閉籠つてゐるんですが……」

「そのことは、私共によく分つてゐます。しかし、いろ〱の人が、あなたのところへは出入りしますからな」と、彼は、言つて笑ひました。

私は、夏の輝やかしい空を見て、KやSや、Nや、B……などの顏を眼に描いたのでした。

――一九二五、五作――



人に問はれる

宇野浩二

私は四季を通じて毎朝六時から八時までの間に起きる。これは私のやうな物を書くことを仕事にしてゐる者の仲間では異例である。私の多くの、寢坊な友人たちの中には私の早起を羨むものもある、中には輕蔑するものもある。だが、私からいふと寢坊の友人たちが悉く羨ましい。何故といふのに、私はこの八時より遲く起きた日は一日機嫌が惡くて、自分で自分の氣分を持てあます程である。どうしてさうなのか自分にも分らない。八時以前に目を醒ましても、床を出るまでは矢張り機嫌が惡い。大體、私はどんなに夜更かしをしても大抵八時以前に目を醒ます。そんな時は心が醒めてゐても、上目蓋と下目蓋とが中々放れなくて、兩手でこぢ開けるやうにしてゞも、無理に目を醒まして、床から出ることにしてゐる。その代り、顏を洗つて、朝飯を食つて、又改めて床に就くことが珍しくない。しかし、そんなにしてまで、私が毎朝目を醒まして、多くの人々のやうに朝寢の床を樂む反對に、どうして床の中にゐることが苦痛なのか、それは先でもいつたやうに、私自身にも容易に

この年若い經濟學者は、まづから言つてから、徐々に、研究の結果を發表したのであります。この時、滿場の人々は、彼の口から出る一句も聞き洩らすまじと耳を欹てゐたのでした。

私は、感激をもつて、そこを出て、電車に乘り、この少壯の經濟學者の姿を眼に描き、彼の言つたことを思ひ出して、家に歸つたのでした。

時も、時、歐洲戰爭の影響と大地震の傷手とが、いまやうやく經濟界を動搖するのであります。不景氣になると、俄かに反動的になつたことは日々の新聞の上でも知られたのでした。勞働者に對する壓迫、思想家に對する脅威は、曾てなかつた程に深刻なものでした。反動は、やがて反動を生じました。そして、社會は、あらゆる方面に於て、極端から極端の現象を呈しつゝあるやうになりました。……しかし、私は、思つた。

……反抗……煽動……追擊……これだけが正義のための運動でない、建設的な、より意義のある仕事がまだ智識階級に殘されてゐるのではないかといふことを考へました。

ある日の朝、子供が、學校へ行き、私は、二階の書齋にはいつて仕事にかゝらうとする時分でした。高等係がやつて來て、すぐに、署へ同行を求めました。

「すこし手間取るかもしれませんから、そのおつもりで……」と、彼は、言ひました。

私は、たとへおそくなつても心配することはないと、妻に、言ひ殘して、いつしよに外へ出ました。

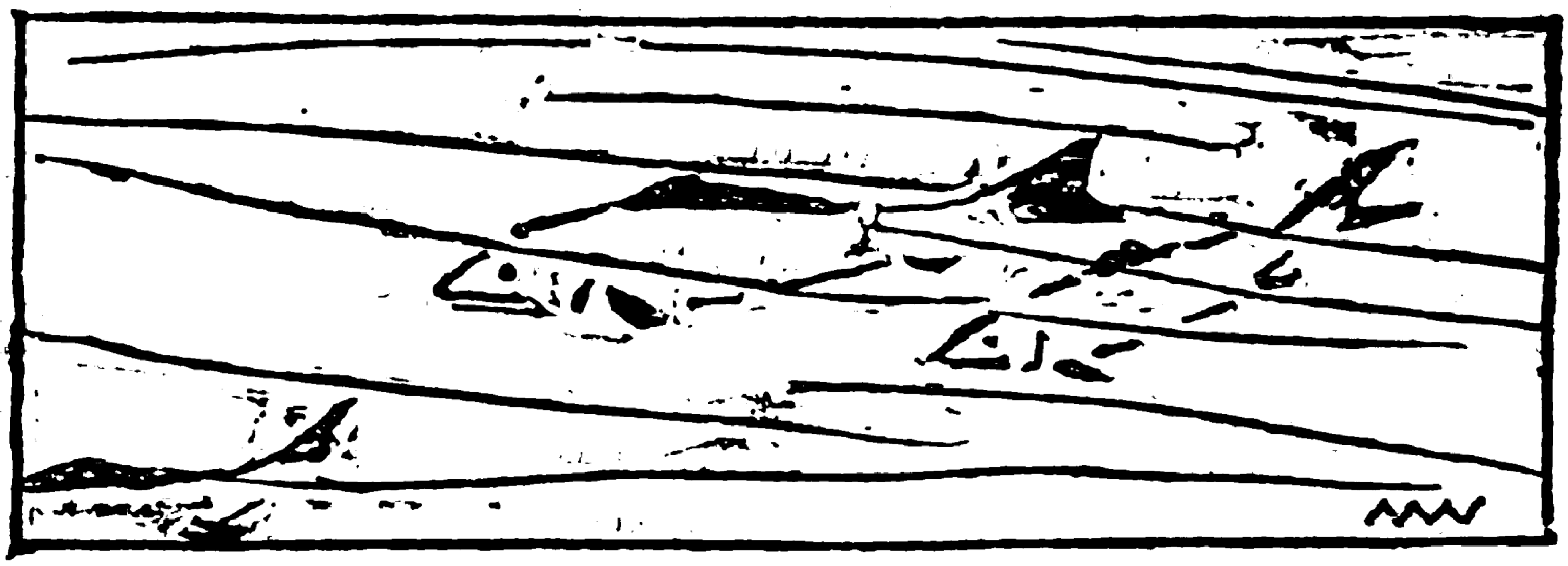
「やあ、とんだことになりました。私共にも眞相は、分りませんが、警視廳からの命令です」

「僕は、最近、家にばかり閉籠つてゐるんですが……」

「そのことは、私共によく分つてゐます。しかし、いろ／＼の人が、あなたのところへは出入りしますからな」と、彼は、言つて笑ひました。

私は、夏の輝やかしい空を見て、KやSや、Nや、B……などの顏を眼に描いたのでした。

——一九二五、五作——



人に問はれる

宇野浩二

私は四季を通じて毎朝六時から八時までの間に起きる。これは私のやうな物を書くことを仕事にしてゐる者の仲間では異例である。私の多くの、寢坊な友人たちの中には私の早起を羨むものもある、中には輕蔑するものもある。だが、私からいふと寢坊の友人たちが悉く羨ましい。何故といふのに、私はこの八時より遲く起きた日は一日機嫌が惡くて、自分で自分の氣分を持てあます程である。どうしてさうなのか自分にも分らない。八時以前に目を醒ましても、床を出るまでは矢張り機嫌が惡い。大體、私はどんなに夜更かしをしても大抵八時以前に目を醒ます。そんな時は心が醒めてゐても、上目蓋と下目蓋とが中々放れなくて、兩手でこぢ開けるやうにしてゞも、無理に目を醒まして、床から出ることにしてゐる。その代り、顏を洗つて、朝飯を食つて、又改めて床に就くことが珍しくない。しかし、そんなにしてまで、私が毎朝目を醒まして、多くの人々のやうに朝寢の床を樂む反對に、どうして床の中にゐることが苦痛なのか、それは先でもいつたやうに、私自身にも容易に

理由が分らない。仕様がないから、私はこの時は惡鬼が憑くのだといふことに考へてゐる。

人に依つては、そして恐らく多くの人は、夜床に就いて眠られなくて困る經驗を持つてゐるだらう。さういふ時、大抵の人は樂しいことの反對の、考へや思ひに苦しまされる。煩悶したり、後悔したり、この世がたよりなく思はれたり、行先が暗く思はれたりする。寢がへりをする。あかりをつける。あかりを消す。又寢がへりをする。即ち彼等は私の所謂惡鬼に憑かれるのである。私にはこの惡鬼が朝見舞ふのである。夜それに見舞はれることを防ぐためにはカルモチンやヂアールが役に立つかも知れないが、私のは朝だから飛び起きる外はないのである。私のこの習慣は二十歳の春から始まつて、そして一日も缺かさずに今だにつゞいてゐるのである。恐らくこれは死ぬまでだらう。

だが、これは餘談であつたかも知れない。兎に角、私はさうして毎朝比較的早く起きて、そこ／＼に顏を洗つて、食事を濟ますと、雨の日でも日曜日でも、祭日でも、病氣の故障の外は屹度外出の用意をする。行先は私の家から歩いて三十分ばかりの所にある××町の不二館といふ下宿屋である。

××町の不二館といふのは普通からいふと少し風變りな下宿屋であつた。私が二十歳の學生時分から、――私の學生時代は學校の所在地の關係から、××町などとはずつと方向の違ふ離れた場所に住んで居たのだが、その頃から誰に聞くともなしに、××町といふ所に不二館といふ大きな下宿屋があるといふ噂は聞いてゐた。だが、貧乏な學生には用のない家でありさうだつたし、又學校に通ふ便宜から言つても惡さうだつたので、長い間噂でだけしか知らなかつたのだが、いつ頃のことだつたか忘れたが、私が誰か知人の家を尋ねて××町の近くを歩いて、變に曲りくねつた、細い横町へ出て來た時、突然そんな細い町に不似合ひな、洋風の、可成り大きな構への旅館を發見して、それが不二館であるのを知つたことがある。

私の見た目は間違ひでなく、不二館は今見ても可成り大きな旅館であるし、町が狹いので、このすぐ前に立つても其の家全體を見渡すことが困難なほどだが、正面から見た構へなどは中々堂々とした建物である。家の近くは東に行くにも、北に行くにも、どんな貧民窟の町にも珍しいほどの狹い町幅の道が通じてゐて、それがやがて南に曲つたり西に折れたりしてゐるが、建物の一の側と、裏側とは崖の上に建つてゐるので、ふと思はぬ遠方の阪道の上などから、この建物の半分、或は上半分が望まれることがあるが、これは見た目に可成り立派で、宏壯だつた。あそこにはどういふ人々が泊つてゐるのだらうか、と私は以前それを眺めて思つたことがある。私がこの不二館のことを思ひ出して、そこに仕事をするための部屋を求めに來たのは、今から三年前の春のことであつた。無論、私はもうその數年前から今のところに、私と、母と、そして妻との家を持つてはゐた。だが、私は別に家庭生活に面白くないことを感じたとか、これといふ不便を感じたとか、さういふ改まつた理由なしに、どこか家庭を離れたところに、仕事をしたり、空想したりするのに、誰にも邪魔されない、誰にも自分の坐つてゐるところとか、寝てゐるところとか、或は仕事してゐるところとかを見られる心配のない部屋を持ちたいとはずつと以前から思つてゐたのだつた。現に、今いふ不二館に來る前二ケ月程の間私は今の私の家のすぐ傍にある公園の、私の家とは反對の側の位置にある、東華館といふ貸間專門のビルデイングの一間を借りてゐたことがある。これは以前、私がまだ今日程度の生活の安定をさへ得ないで、母と二人で小石川の或場末の町に住んでゐた頃、そのビルデイングの一間に、時々私の友人の加山五策を訪問したことがあつたので知つてゐたのである。洋風の、木造の五階建の建物で、昔、私の友人はそこの五階の、一番隅の部屋を借りて住んでゐた。その家は一切客の自炊制度で、部屋だけを貸す仕掛になつてゐたのだが、大抵の部屋は六疊と四疊半とか、八疊と三疊とかいつた風な、二間つゞきで、押入に瓦斯と水道を取り附けた。簡易な夫婦者に適當するやうな構造になつてゐた。唯五階

の、屋根裏に當る部分だけが大抵一間切りで、それも五角形になつてゐたり、三角の一端を切り取つたやうな恰好になつてゐたりする、いびつな、半端な部屋が集まつてゐた。當時、私同様獨身者であつた加山五策は、それ等のいびつな五階の部屋のうちでも、一番いびつな、隅の部屋に陣取つてゐたのである。

それは恐らく日本の疊を標準にしていふと、三疊敷位の大きさで、而もその一疊分の隅には、棚を吊つたやうな恰好の押入がついてゐた。つまり普通によくある上と下との仕切られた押入の、上半分だけに唐紙をつけたやうな具合になつてゐるのだ。だから、部屋の疊數は三枚でも、一枚の、上に押入のある部分では、立つどころか、坐ることさへ出來ないやうな、小さな部屋だつた。それにも拘らず、その部屋の主の加山五策は、私の友達仲間でも一番の大男で、身長は五尺八寸餘りあつた。

「君はこゝでどうして寢るんです？」と私が初めてその部屋を訪問した時、驚いて尋ねると、

「あの、押入の下のところをベッドにしてゐるんです、」と彼は答へた。

「あれぢやあ、僕でも脊がつかへて寢られないぢやありませんか、」と私がいふと、

「身體を蝦魚にするんです、汽車の寢臺のつもりです、」と彼は答へた。つまりその殘りの二疊の分へ、彼は卓子を置いたり、又彼の仕事の道具である繪具箱やカンバスの類を並べたり、一脚切りの、腰掛代りの、更紗の切を掛けた蜜柑箱を置いたり、又隅の方には七輪や土瓶の類を並べたりしてゐた。

「どうして――これぢや人が來ても坐る餘地が全然ありませんね。どうしてこんな所にゐるんです、外に部屋がないんですか…」と私がその蜜柑箱の腰掛に腰掛け、彼は頭を打たないやうに、不斷から屈み加減の背中をぐッと曲げて、押入の下のベッドと稱する邊に腰を下した時、私は聞いて見た。

「いや、外に二つ三つ空いてゐますけど、外のは部屋代が高いものですから、」と彼は答へた。

私はふと足元に古風な革の鞄の口を開けてゐるのが目に入つたので、何気なく中をのぞいて見ると、米が入つてゐるらしいので、驚いて、

「君は鞄に米を入れてゐるんですか？」と聞くと、

「えゝ、外に入れるものがないし、それに買ひに行く時見つともないですからね。それでその鞄で買ひに行くんです。」と彼は答へた。

「どうして君はそんなに貧乏してゐるんです？」と私はそこで妙な質問を發した。「君の家は大變財産家だといふぢやありませんか？」

「冗、冗談でせう、ふゝゝゝ、」と彼はその鷄のやうな感じのする、こわい髭を生やした鼻の下へ片手を當てがつて、笑ふと少し間の抜けて見える表情で、獨得のひどく恥かしさうな、思はせぶりな笑ひ方で笑ひながら、「財産つたつて、とても佧我部君なんかの十分の一も百分の一もないんですよ。それに、その、僕の自由になりませんし……」

私が彼を知つたのは、私が二十歳の頃の大學の夏休みに、私の第二の故郷である大阪の叔父の家に歸省してゐた時のことだつた。その頃大阪の道頓堀で初めて出來た或カフエーで、私は誰に紹介されたともなしに彼と物をいひ合ふやうになつたのである。彼も私も殆ど同年輩であつた。私は大阪の或中學の出身だつたが、彼は同じ町の或私立の甲種商業學校を出たといふ話だつた。だが、又他の者の話では、彼はその商業學校の、實際に門をくゞつてゐたのは二年か三年餘りのことで、後は唯その制服を着て、毎朝辨當を持つて家を出たゞけで、阿部野や住吉の野原を、獵師のやうに歩き廻つてゐたゞけだ、だから、家では彼がどんな風にごまかしたか知らないが、卒業などは決してしてないといふのであ

る。この事は本當かも知れなかつた。といふのは、彼はそのカフエーで私と知るやうになり、追々に私の友人の文學書生や、畫學生と交際するやうになつて、藝術めいた話や、東京の愉快さうな學生生活の話やに浮かされて、それから一二年後に、彼も亦私たちのやうに東京に出て來たことがあるが、さうして彼は東京のあちこちの下宿屋を轉がり歩いてゐる間、始終角帽を被つて、金ボタンのついた制服を着てゐたが、實際、私は彼がどこの學校に入つてゐる事實をも見なかつた。もつとも、どんな私立の大學でも、彼を入れる餘地はなかつただらうし、彼も亦そんな所に入る勉强をするだけの根氣を持たなかつたに違ひない。或時いたづらな友達の一人が、「君のその學校はどこだ？」と聞いたところが、何とかいふ醫學專門學校だと彼は答へたさうだ。「四谷ださうだが、四谷にそんな學校があるか知ら？」とその男が別の時、他の場所で話すと、「おや、俺には澁谷の學校だといつてたよ、」と口を挾んだものがあつて、大笑ひになつたことがあつた。

　だが、私はさういふ彼の人に笑はれるやうないろ／＼の行ひにも拘らず、最初會つた時から彼を好もしい人物に感じた。自分の接する人をそれ／＼本に譬へるとしたなら、私には彼、加山五策は最も愛讀する本の一つであつた。恐らく彼は、私が二十歳の夏初めて道頓堀のカフエーで彼と會つて、それから一ケ月程の間に數人の私の友達と交際するやうになつた時迄は、その後彼が畫を勉强したり、文學を研究したり、東京に下宿生活したりするやうになることを、想像さへもしてゐなかつたどらうと思ふ。彼は何年か前に學校生活を止めたまゝ、彼の家の商賣の後を繼がうといふ考へもなく、といつて學問嫌ひ、といふよりは學問をするに必要な根氣といふものを少しも持つてゐなかつたから、學問で身を立てようといふ考へもなく、唯五尺八寸の身體を持て餘しながら、大阪の町を、堀割の橋を、足にまかして歩いてゐたのに違ひない。

彼の家は豊臣太閤の時代からつゞいてゐるといふ、古い暖簾の評判であつた。私は一度彼の家を見たことがある。大阪の山の手と下町との丁度中間にあるやうな位置で、とある勾配のゆるい坂道の中途に、坂になつた低い部分には石垣を積み上げて、土臺を平均した地盤の上に、五間間口の古風な店附の構えだつた。普通の商家と違つて、そんなに大勢の客が出入する譯ではなかつたから、ちよつと見ると仕舞太家のやうな造りであつたが、その五間間口の軒に、千成瓢箪の商標のついた、大阪商人の自慢であるところの、古い年代物の、紺か灰色か、それとも元は白色であつたのか、分らないやうな色の暖簾が掛つてゐた。もつとも、今私は千成瓢箪の商標といつたが、その模様も、又別の間に染め抜いてある『纏いろ〳〵』『千成屋五兵衛』などといふ文字も、教へられなければ讀めない程に古びてゐた。

その五間間口の左側三間分だけが、何のためにか廣い縁側のやうに出てゐて、それを格子で囲つてあるのだが、その格子が普通のでなく、下半分位は一寸位の目になつてゐて、上半分は各一尺程の間隔が空いてゐる。それで、表を通る人々が自由にその格子の上の部分を透して、店の間に飾つてある纏の類を見ることが出來るのであるが、昔はそこに秀吉の千成瓢箪もあつたゞらうし、眞田幸村の旗印もあつただらうし、多分五月人形の裝飾位の美しさを見せてゐたのであらうが、今はがらんとして、店の中の暗がりの部分ばかりが誇張されて見えて、その中にたま〳〵何番組とかした消防組の纏が二三本突立つてゐるのが、妙に物侘しく眺められるだけであつた。加山五策はだん〳〵物心がつくと共に、この自分の家の商賣を恥ぢ出したといふことであつた。彼の友人の曾我部の話に、五策といふのは彼が自分でこしらへた名前で、本當の名は五作といふのださうである。そして彼の家では代々商賣の後を繼ぐものは五兵衛と名乗ることになつてゐるのだが、彼の父はその五兵衛を名乘つて、彼と三人の弟妹を生んで間もなく若死にしてしまつたので、しつかり者の祖父が改めて五兵衛となつて、その人が今でも彼の家を支配してゐるとの話だつた。祖父は孫の五作の身持が

治まらないので、今だにこの名前も財産をも彼に讓らないのであるが、しかし、早晩彼も五兵衞と名乘らればならないだらう、といつて付我部は笑つた。

私が先にいつた東京館の五階に彼を尋ねた時は、彼もさすがに蛇皐や角帽や金ボタンの服を止めて、風變りな露西亞人の着てゐるやうな洋服を着てゐた。そんな部屋を借りて、彼は何をしてるたのだらうか。それは誰も知らない。そして彼自身も恐らく答へることが出來なかつたゞらう。しかし、そんな事をいふと彼は二十歳の頃、私と初めて道頓堀のカフエーで會つた時分から、毎日何をしてゐるかが分らないのであつた。その翌年あたりから彼は彼の嚴格な祖父の五兵衞をどんな風にいひくるめたのか、多くの學生が遊學するやうにして、東京へやつて來た。そして、多くの學生たちがするやうにして東京で下宿生活を始めた。當時私たちも同じ境遇であつたから、よく彼と往來して誰とか、文學とかに就いて語り合つたり、疲れると一緒に散歩に出たり、カフエーを廻つたりして暮したものである。だが、彼と私達と違つてゐたことは、私たちがそれ〴〵怠けながらにもどこかの學校に籍があつて、三年か四年かの後にはそれ〴〵卒業するなり、中途で退學するなりして、將來の生活の方針を立て又立てようとしたのに比べて、彼はいつも變らず、唯下宿の部屋の中でごろ〳〵してゐるか、町をあてもなく散歩してゐるかの外、何の目的もなささうに見えたことであつた。

彼の人に勝れた特徴は敏感なことであつた。それは彼のやうに、恐らく不恰好な、五尺八寸もの大柄な體格の、何かいびつに見えるやうな手足をした男が、どこにさういふ敏感さを持つてゐるのだらうと思はれる程であつた。彼に獨創的な點を見出すことは難しかつたが、彼ほど暗示に敏感な、模倣の才に長けた男も珍しかつた。誇張していふと、ラフアエルの畫を見せたなら、翌日その畫の贋作を作ることが出來たゞらうし、ドストイエフスキイの小說を讀ましたな

ら、丈の日ドストイエフスキイそつくりの作品を模倣することが出來たらう。だが、それ等がどんな風に優れてゐるかを彼に聞いても、彼は答へることが出來ないだらう。その代り、誰かどそれ等がどんな風に優れてゐるかといふ批評の暗示を少しでも與へたなら、彼は立所に大批評家のやうに批評することが出來ただらう。加山五策はそんな風な人物だつた。

さういふ風な人物であつたから、彼はいつとなく、人が彼を輕蔑してゐるだらうといふ脅迫觀念を抱くやうになつた。私が彼と初めて知り合つた同じ年の夏、私は私の友人である當時美術學校の學生であつた龜井に、私たちが初めて會つた同じカフエーで彼を紹介したことがあつたが、龜井は腹で考へる前に言葉にする男で、加山を見ると、

「ほお、君は面白い恰好の手をしてゐますね」と、半ばに五策が珈琲のコップを掴んでゐる手に注意して、「ほお、全く面白い手だ。ねえ、君、」と私の方を向いて、「よく外國の雜誌などを見ると、向うの有名な藝術家の手の寫眞が出てゐるが、あゝいふ手の感じだね、加山君の手は。なる程、あゝいふ化物のやうな手があるものかと思つたが、——失敬、失敬、化物は失敬、だけど、やつぱり本當にあるんだね。確に君の手は藝術家らしいよ、殊に彫刻などやつたら素的だらうな。」

「いや、なに、いや、ふゝゝゝ。いや、そんな事が……ふゝゝゝ」と加山は恥づかしさと嬉しさとがごつちやになつたやうな身振りで、その手を引込めたり、頭に上げたりして、彼一流の笑ひ方で笑つた。

「さういへば、君の身體は大體日本人ぢやない、日本人離れがしてゐるよ、」と龜井は益々調子づいて、半分は冷かし半分は本當に感嘆したやうに續けた。「君は何寸位あります、八寸五分！　なる程ね、五尺八寸五分ですか。隨分大きいな。僕などは又日本人としても少し小さ過ぎる方だが、でも、八寸五分は大きいな。ふむ、ふむ、」と頻りに感嘆した

やうに叫んだ。もつとも、龜井のこの「ふむ、ふむ、」と無暗に感嘆したやうな合の手は、全く呼吸をしてゐる音と同じやうに聞いていゝ程、無意味に發しられる習慣だつた。

「東京にだつて、君のやうな人は珍しいよ。ね、君、」と龜井は傍にゐる私に加勢を求めるやうにいつて、「まつたく、君はどこかハイカラですね。それも新ハイカラだ。ちよつと見ると、――惡いが、變にぢゝむさくて、汚つたらしいやうだが、いや、よく見るとまつたく新しいハイカラだ。君のその背中の曲り方は自然ですか、わざとですか？　外國人はみなそんな風に輕く傴僂のやうに背中が曲つてゐますね。君のその恰好は外國人の中に入れても目に立つよ。ふむ、ふむ。君はそれに、食べるものから變つてゐますね、肉食はあまり好かないんですか！」

實際、彼は先程から龜井のすゝめるのを退けて、野菜サラダ一皿と、あとは麵麭ばかり、それもバタも何にもつけないで、三度も代りを命じて、その異樣に大きな手の指で、無器用な恰好でむしり〳〵食つてゐるのだつた。そして、その時、龜井に問はれるまゝに、彼が彼自身の家庭に就いて打明けたには、彼の家は商賣が古風なばかりでなく、祖父母も、母も、（先にもいつた通り父は若死にしてゐなかつた、）皆質樸な人たちで、二三年前までは夜も行燈を使つてゐた、それに家中に肉食をするものが一人もゐないので、年が年中野菜を常食にしてゐる、彼など餘程外の食物に馴れたが、それでもうつかり魚類の肉を餘所で食べると、嘔吐することがある、やつと豚の肉だけ此頃少し食ふやうになつた、などといつた。

「ふむ、さういふ家から君のやうなハイカラな男が出たのかね。ふむ、ふむ、」と龜井は例の感心したやうな口調でいつた。

その時分は、しかし、こんなことをいはれても加山は別に氣にしないばかりか、例の「ふゝゝゝ」といふやうな、

恥かしさと嬉しさとのまじつたやうな笑ひ方で暮してゐたのであるが、間もなく、彼は次第にひがみ出して来て、手足のこととか、身體のことゝか、ハイカラとか、野菜食とかいふ言葉を、少しも輕蔑したり、からかつたりする意味でなしに人がいつても、忽ち氣を惡くした。彼は氣を惡くすると、唖者のやうに沈默するか、それが人の家だとすぐに歸り仕度を始めるかした。甚だしい時は、そのまゝ東京から大阪に歸つてしまふことも珍しくなかつた。だから、今いつた私の友人の龜井などは、學校を卒業すると、すぐ郷里の大阪に歸つてそこに落着いてしまつたが、彼だけはさういふ友人たちの學生生活が終つてからも、相變らず大阪の家に歸つてゐるかと思ふと、そんな風に格別の用事もないのに、東京館の五階などに陣取つて、不自由な生活をしてゐる、といふやうなことがあつても、友人仲間では別に珍しいことではないのだつた。

私は後で知つたのであるが、その頃彼の嚴格な祖父がなくなつて、愈々彼が嫌つてゐた千成屋五兵衛を襲名すると共に、相當の財産をも受け繼いだらしいのだつた。だが、祖父がなくなると間もなく、商賣も最早や餘り古風であり過ぎるし、彼や彼の弟では迚も後をやつて行けさうにないと彼の母親が見込んで、たうとう長い間の暖簾を下ろしたとのことであつた。彼の家は商賣を止めても、土地の貸代とか、家賃とかで十分に一家を支へて行くほどのものはある家だつた。だが、私たちが驚いたことには、彼の生活振は、それだけの財産を受け繼いだ後でも、少しも變らなかつた。だから、私が東京館の五階で、彼が革の鞄で米を買ひに行くのを見た頃は、既に彼は何萬かの資産の持主であつたのだ。彼の祖父は彼の身持が治まらないといふ理由で、生きてゐる間彼に家督を渡さなかつたが、その心配は半分は無用の譯だつた。即ち身持は治まらなかつたかも知れないが、加山は生れながらのけちん坊で、決して無駄づかひなどする男ではなかつたからだ。もつとも、無駄といへば、大阪の家に落着いてゐればいゝものを、用もないのにそんな東京などに來

て、苦學生のやうな生活をしてゐることが無駄に違ひなかつたが、彼はさういふ無駄な生活を、最も切り詰めた經費でやつてゐたところが變つてゐた。そして、私の問ひに對して、例の「ふゝゝゝ」と極りの惡さうな笑ひ方をして、「曾我部君なんかの十分の一も百分の一もないんですよ、」といふ位だから。

曾我部といふのは――いや、曾我部のことは若し機會があつたら後ですることにして、その時、私が東台館に加山を尋ねたのは、さうだ、東台館の樣子を見に行つたのだつた。といふのは、私は當時母と二人切りの暮しだつたのだが、一定の收入どころか、殆ど何の收入もなく暮してゐたので、その頃住んでゐた小石川の家は大家から立退きを食はされさうになつてゐたし、御用聞きは悉く背を向けて、唯時外れに彼等が借金の催促に來たに過ぎない、といふやうな苦しい狀態だつたので、一つ志を變へる前に、居を變へようと思ひ立つたのである。それには、敷金の都合もあり、家賃も出來るだけ安い方がよかつたし、といつて郊外などの不便なところでは、年取つた母に水を汲んだり、火を起したりさせなければならないと思つたので、私はふと東台館を思ひついて、加山を尋ねたのだつた。もつとも、その時、私は結局、東台館に移るどころか、それから半月程後、母を市内の或親類の家に預けて、一人になつて轉々とした生活を始めたのであるが、加山ともその時切り一年以上會はなかつた。が、その一年の間に、彼は妻をもらつて、子供まで出來たといふ噂を、私は人傳てに聞いた。

「お母さんの計畫が功を奏して、たうとうあの男も落着いたかな、」と私はその時友人と話し合つた。「落着いてさへゐれば、金は使はな過ぎる程使はない男だし、相當の財産があるんだし、お母さんも細君も幸福だらう。」

だが、これは例に依つて私の話が妙なところへ飛んでしまつたが、そんな話で私は不二館へ行く前に、昔加山のゐたそ

の東台館を思出して、そこに部屋を求めて二ヶ月住んでゐたことがあるのだ。私が借りたのも、その五階の一間であつたが、私は加山の場合のやうに金を惜しんだ爲ではなく、私が尋ねた時は、その部屋一間切りしか空いたのがなかつたからである。私はその頃の、妙に浪曼的な考へを好む氣風から、その部屋を借りるのに、わざと僞名を使つて、家の者にも、友人にも、誰にも知られないようにした。さうだ、全く誰にも知らなかつた、戀人にさへも、――若しその時私に戀人があつたとしたならばだ。しかし又、私はそこで戀人とだけで暮したといふことが出來るかも知れない。何故なら、その一階から五階まで（エレベーターのあるやうな高級な建物ではなかつたから）廊下を下駄ばきのままで上つて行くその部屋に、私の外に生きたものは一人も出入りしなかつたが、その部屋の中に私は昔の片戀の女の寫眞と、私の好きな諸國の山の寫眞と、そして私の愛讀する數冊の本を持ち込んで、そこで私の仕事である書きものをしたり、本を讀んだり、飽きると、壁に貼りつけてある山や女の寫眞を眺めて暮した。夜になると、私は道樂に持つてゐる寫眞の引伸し機械を押入から出して來て、自分の所藏してゐるその女と、それから諸國の山の寫眞を、幻燈のやうに壁に映す遊びなどに耽つた。つまり、今私が戀人とだけで暮したといふのは、さういふ意味である。

あゝ戀人！　先にもいつたやうに、その頃の浪曼的な考へを好んだ私は、どんな戀愛でも結婚したらそれが消滅するといふ意見と同樣に、或はそれよりも極端に、どんな戀愛でもそれが成就すると共に消滅するといふ考へを信じてゐた。だから、その部屋の壁に幾枚か貼りつけてある、私の片戀に終つた女が私の唯一の戀人であつた。その外に、私はその頃一人の情人を持つてゐた。それは或場末の繁華な町の煙草屋の娘だつた。私はその娘が三ヶ月ばかり好きであつた。そして或時たうとうその娘と三日ばかり旅行したことがあつた。すると、その後彼女は身持になつたのである。さうして、彼女が生んだ子が私の子であるか、他の何者の子であるか、それは神の外に知るものはない。だが、私がその

責任者に割り當てられた。私はそれに對して不服をいはなかつた。たゞ、私は彼女が身持になることを知る前から、即ち彼女と三日の旅行の後で、何といふ譯もなく彼女が嫌ひになつた。そのうちに彼女が身持になつた知らせを受取つた譯であるが、以來、私は彼女に會ふ代りに、月々の手當を送ることにしてゐた。手當の金は大した負擔ではなかつたが、氣持の負擔は私を壓迫した。私はその誰も知らない、私の秘密の五階の部屋に入つて、そこの西洋流の扉に中から鍵を掛けると、一切の目に見える負擔はいふ迄もなく、さういふ目に見えない負擔からも、一時救はれるやうな氣がしたものであつた。

ところが、その部屋は、先にもいつた通り、家の者にも内所で借りたものなので、机とか、茶道具とか、蒲團とか、さういふ必要な、手廻りの道具類を集めるのに一通りならぬ苦勞をした末、やつと二ケ月ばかりして大分居心地がよくなつた頃になつて、私はそこから立退を命じられたのであつた。といふのは、その春そのビルデイングの傍の公園に博覽會が出來て、それの見物に來る諸國からの團體觀覽客のために、そこの四階と五階とが、博覽會の事務所に買收されたのである。

元より私はその部屋を失つたところが、寢どこに困る譯ではなかつた。現に寢ることは毎日自分の家でして、午前中は家で暮したり、或は日中ずつと家にゐたり、かと思ふと朝起き拔けに出かけたりして、そこは通つて來るだけの部屋として使つてゐたのではあるが、しかし、考へて見ると、最早やそれは私にとつて寢どこよりも大事な場所になつてゐた。そこで、私は早速別の部屋を見付けようと思ひ立つたのである。それに、二ケ月の間に、ぽつ〳〵と家から持出した道具類や、家の者に内所で買ひ集めた道具類の持つて行きどころにも困つた譯だつた。私の望みでは、以前の東臺館のやうな、一切隣室の人々と交渉のない、獨立した部屋が欲しかつたのであるが、さういふ種類の家で外に適當なものが

見付からなかつたので、その時ふと××町の不二館を思ひついて、今度は前のやうに自分の家に内所で借りることは止めて、公然と仕事をするためにといふ口實で、そこの部屋を借りることにしたのである。

その時、私はもう不二館への道筋なども忘れてゐたので、(事實、先にもいつたやうに書生の頃一度偶然にその前を通りかゝつた事がある切りの記憶だつたから、)前以て電話をかけて、空き間のあるなしを尋ねる傍ら、道順を確めてから出かけた。電車通りから敎へられた麵麭屋の横町に入つて、だら／＼した阪道を一町ばかり來たところで、又別の急な阪道を上つて『××町』と例の仁丹の道標の看板の敎へる一區劃へ入つた時、私はそこに昔歩いた時のまゝの町の記憶を思ひ出した。だが、先にもいつた通り、不二館はそんな大きな建物でありながら、案外遠くの高臺とか、阪道の或部分とかゝら立派に眺められることがあるのに、近くに行くと、まつたく狹い曲りくねつた横町ばかりで、それ等の家々のために遮られて見えないものだから、私はその近くを通りながら、しば／＼道を間違へて飛んでもない方に迷つたりした末に、やつと或袋になつた路次の奧の片側に、その建物を發見した。前に電話が掛けてあつたので、その家の玄關に立つてからは、用事はすぐに運んで、私はその洋館と日本館と二棟に分れてゐる、後者の方の八疊間を私のものに借りることに定めた。洋館も日本館も共に三階建であつたが、私の借りたのは第一階の一室で、部屋の前に四坪ばかりの庭がついてゐた。

私はこの翌日から來ることに約束して、歸りは歩くのが面倒だつたので、不二館から車を呼んでもらつて、それに乘つて例のぐる／＼した横町を幾つか曲り、急な阪道から、緩い阪道に出て、電車通への角を曲らうとする時に、何氣なく「こゝが目印だな、」と思つて俥の上から麵麭屋の店を見て行くと、そこに向う向きに立つてゐる客の一人が、間違ひなく私の舊友の加山五葉の後姿なのだ。外の人を見違へることはあつても、誰が彼を見違へることが出來よう？　この

世に誰も彼に似た後姿を持つてゐるものがあらうとは思へない。八寸五分の背は珍しくないだらうが、彼のやうな背の曲り方をした、彼のやうな身體全體がいびつな感じのする、さうだ、それよりも彼のやうな大きな靴を穿いた男！――けれども、生憎その時私を乘せてゐた俥屋は實に敏捷な男で、私が彼を認めて「止めてくれ！」と聲を掛ける暇さへ與へなかつた程の走り手であつた。そして、私が通り過ぎてからも、引返させようか、どうしようかと考へてゐるうちには、もう一町ばかり走り過ぎてしまつた。私は、だから、その麭麭を買つてゐた男を確めることを思ひ止まつて、彼に就いて、考へた。考へて見ると、彼は今洋行中の筈なのであつた。だから、私が佛蘭西の都にでも來て、とある麵麭屋の店に彼を見出したなら兎に角、東京に彼がゐる筈がないと考へられた。それにしても、彼とあんなにも似た男が二人とこの世にゐるものだらうか？……

しかし、彼はたしかに洋行中の筈であつた。その前の年の秋の初に、彼はひよつこり私の家を尋ねて來て、近いうちに外國に行くつもりだ、もう旅行免狀も下附された、といつて私にそれを見せたことがあつた。東京に來て何年か下宿住居をして、角帽まで被つてゐながら、どこの學校にも入つてゐないやうな彼のことであるから、唯洋行すると聞いたゞけでは私は容易に信用が出來なかつたが、彼の寫眞のついた旅行免狀を見せられたので、私は驚いていつた。

「大奮發ですね、どの位行つてるつもりです？」

「氣が向いたら何年でもゐるつもりですが、まあ、一年位、」と彼は例の「ふゝゝゝゝ」といふ嬉しさと恥づかしさとのまじつた笑ひ聲で答へた。

彼もその時は二人の子持になつてゐた。商賣は彼の代になつて止めた筈だつたから、問題の五兵衛といふ名も無論商賣と共に廢止したのであらう。もつとも彼の母の目金でもらつた彼の細君は、彼とは反對に小柄な人である代り、非常

なしつかり者だといふ噂は聞いてゐた。だが、報酬をもらつたり、子が出來たりしても、彼がけちくさいことをして、朝から晩まで大阪の町を歩き廻つたり、月に一二度は東京に出て來たりする、彼の死んだ祖父の所謂身持の治まらないことは少しも疑らなかつた。無論、東京に來るのにはいつも汽車は三等であつたし、來ると以前の知合ひの下宿屋とか、少し良い時にはいつかの東臺館のやうな家に泊るのが例だつた。いくらけちでも、さすがに相當の資産家の後を繼いだだけに、たとへ三等船客として、外國の木賃宿のやうなところを泊り歩くとしても、洋行をするといふ彼の身分を私は羨ましく思つた。大阪の町をうろつくことが、東海道になり、それが地球になるのは、少し奇拔には違ひないが、彼のやうな人にとつて不思議なことではない。彼はもうその頃は文學も書をかくことも略々斷念して、美術の研究といふことを心掛けてゐた。人に輕蔑されることを極端に恐れる彼の、それが一番の落着きどころらしく思はれた。彼は少年時代からそんなに怠け者の學生であつた癖に、東京の下宿生活時代に學校へ行きもしないで、角帽と金ボタンの洋服を着ることを好んだやうに、結婚後は書齋などを飾つて、洋書などを並べるやうになつた、と私は友人から傳へられたことがある。成る程、餘り洋語も讀めないのに、洋書が好きだとしたら、それに全く虚心のない譯ではなかつたから、美術書など並べるのが適當に違ひない。彼はつまり美術研究に洋行する云々と、しつかり者だが、無智な母や妻を說き伏せたものに違ひなかつた。

そして彼はたうとう洋行したのであつた。私は自分の目で彼が歐洲行の船に乘りこむところを見た譯ではなかつたが、私たちの友人の中に彼を送つたといふものもあるし、その後彼自身から香港やコロンボやからの葉書も貰つたし、最近はロンドンの郊外の何とかいふところが彼にやる手紙の宛先になつてゐた。どういふ譯だか、彼はそこを根據にして、佛蘭西へ行くのも、端西へ旅するのも、そこから出て、そこへ歸つて來るから、手紙はいつでもそこへくれといつ

て來てゐた。つひ二十日ほど前にも私はそのロンドン郊外の宿所に宛てゝ、彼に手紙を書いた位であつた。それにしても、今伸の幌の中から麵麭屋の店先に見た彼に似た後姿は、と私は考へた。彼の外にあんな後姿があらうとは思へないのに、と思つて、考へて見ると、私が彼から最後に受け取つた手紙はなる程二ヶ月以上前のことであるから、その手紙の文句では急に歸つて來るやうには書いてなかつたが、彼のことだから、氣分の向き方で、その翌日にも歸國の途に就いたかも知れない。さうすると今彼が東京の或町角の麵麭屋の店に立つてゐるといふことは、あり得ないことではないのだつた。何にしても、おゝ加山五葉！　彼は變つた男である。

何故私がこんな風に加山五葉のことを話すかといふと、――その翌日私はこの不二館に、今度は前の場合と違つて、家の者の了解を得て、簡單な引越車を持つて越して來たのであるが、その當時は今日のやうに毎日家から通ふことにしないで、下宿の方に主に住んで、三日に一度とか、五日に一度とか、下宿の方から家へ歸つて行くといふ方法にしてゐたのだつた。こゝは東寧館と違つて賄附であつたので、三度の食事は地下室にある食堂に下りて行くやうになつてゐた。私は急に知らない人たちがあちこちの卓子で食事してゐる中に、人見知りする性分で、おづ〳〵しながら三度三度その地下室に下りて行くのが、東寧館のやうに全く人に見られずに暮した經驗と比べて、馴れないうちは隨分臆劫な思ひをした。ところが、來てから三日目に、そこの食堂で、私は又もや加山五葉に、今度は後姿ではなく、間違ひなく加山五葉に出會つたのである。

「おゝ、加山君！　やつぱり君でしたか、いつ歸つて來たんです？」と私は叫んだ。「君らしいですね、相變らず神出鬼沒で……」

「ふゝゝゝ」と彼はその大きな體を曲げて、獨得な笑ひ方で笑ひながら、「十日ばかり前に神戸に着きました、」と答へ

た。

「こちらへは？」

「二三日前……」

「昨日、一昨日、先一昨日、」と私は口に出して勘定して見ながら、「君は先一昨日の四時頃に、あそこの電車通の角の麵麭屋にゐましたね、ゐたでせう？」

「ふゝゝゝ、」と相手は髭の上を手でかばふやうな恰好をしながら、例の一流の笑ひ方で笑つて、「あなた、見たんですか。あれはこゝへ來た日です、」と答へた。

「此方に當分ゐるんですか？　彼地はどうでした？」と私は尋ねた。

「今夜あたり歸らうかと思つてたんですが……あなたは、どうしてこんな所へ？」と彼は聞いた。「あちらの家の方は、お母さんや奥さんは？」

「あの家はあるんです。有難う、みんな達者です、」と私は答へた。「僕、仕事をするのに、矢張りかういふ下宿に部屋を持つてゐる方が都合がいゝと思つて、一昨日から引越して來たんです。」

「でも、あちらの家の方が靜かぢやありませんか？」

「えゝ、靜かは靜かですけど、その、やつぱり何ですよ、まあ、君のやうな……」といつてゐるうちに、私もいひやうがなくて笑ひ出してしまつた。すると、何と思つたか、私の笑ひ出したのと同じ瞬間に、加山も大聲で、例の恥かしさうな恰好のでない笑ひ方で、私と聲を合はして笑ひ出した。

彼はその日は上機嫌だつた。機嫌がよくなると、彼ほど心の底から上機嫌になる男も稀だつた。私は久しぶりでその

日彼と散歩をした。彼は主に洋行中の話をした。そして西洋人や、西洋人の生活がどんなに愉快なものであるかといふやうな話をして、又一二年したら出かけて見たいなどといつた。私は彼の機嫌を損ねることを恐れて、どうしてそんなに突然歸つて來たのかといふやうなことは聞かなかつた。彼はその晩歸るといふ豫定を變へて、私と會つた日から一週間ばかり不二館に泊つてゐた後、「僕、又來ますよ。この家は馴れると居心地のいゝ、面白い家ですな。英吉利の僕のゐた家を思ひ出しますよ。あの家が丁度こんな家でした」といつて、そして歸つて行つた。

加山五葉がいつた通り、全くこの不二館は『面白い家』に違ひなかつた。だからこそ、私はその時から足掛三年越し、――その間に例の大地震などがあつて、一二ケ月の間こゝを留守にして、家族のゐる家の方へ歸りつ切りになつてゐたこともあつたが、そして、今のやうに毎晩夜店商人が引上げるやうに引上げて、毎朝勤人のやうに出かけて來る習慣になつたのは地震後のことであるが、――今だに飽きないで住んでゐる所以である。飽きる――まつたく、こゝを飽きたら、私はこの世の何處に宿を求めやうか？……

前の東寮館では、私は全く私自身を樂んだ代りに、こゝでは私は私の外の色々な人たちを樂むことが出來た。即ち先にいつた例をこゝに當て篏めると、私は色々の愛讀すべき人々を持つた譯である。何故といつて、こゝは牛込や本郷に軒を並べてゐるやうな、學生達の下宿とはすつかり樣が變つてゐた。といつて、何々ホテルとか何々旅館とかいふやうな大掛りな旅館では勿論なかつたが、東寮館のやうに簡易な夫婦者が住むためにも、自炊制度でなかつたから、經濟的にいつて不都合だし、又世間的な體面を重んじる獨身者の勤人なら、こゝで下宿するだけの金で、女中一人位を置いて一戸を構へることが出來るだらうし、それ等の一切の常識の判斷ですれば、この家に適當な種類の客といふものは考へられないのだつた。が、それにも拘らずこの家は大抵滿員だつた。そして一度こゝに下宿した者は容易に動かなかつた

し。どこかへ引越して行つても又戻つて來るものが多かつた。それ程この家には一種の變つた人たちが多かつたし、又さういふ人たちの好みに合つてゐると見えた。現に、私がこゝに下宿し始めた時に、最先に私の注意を引いた一人の下宿人は、地下室の食堂で、いつの時でもきまつて給仕の女中を叱りつけてゐるのを聞くと、

「又コロッケか、こんなコロッケが食へるか、こんなコロッケが幾皿食へると思ふ、三皿と食へるか？」と彼は叫んでゐるのだ。

無論、同じ下宿人であるから、私の膳の上にも、彼のいふコロッケの一皿が載つてゐたが、彼のを見ると、彼はその一皿を平げて、別の皿を食べながら、「こんなコロッケが食へるか？」とくり返し叫んでゐるのだつた。

私は不思議な男があるものだと思つて、最初の時はそれ程氣にも止めなかつたが、二度目に矢張りその男に食堂で會つた時、

「この刺身は何ぢや、鯰か、海豚か、この譯の分らない刺身は？」とこの前と同じ調子に叫んでゐるので驚かされた。『鯰か、海豚か』などと飄輕なことをいつてゐるので、私は思はず笑ひを洩らして彼の方を、恐らく幾分冗談の氣味でいつてゐるのだらうと思つて、見ると、彼は決して冗談ではないらしく、八字髭を生やした立派な男だが、怒りながら叫んでゐると、厚い唇の下からその眞白な齒をむき出してゐるやうに見えて、完全な憤怒の相を現してゐるのに驚かされた。そして、更に驚いたことには、その男の前には、私たちには一皿の刺身が、矢張り二皿添えられてあるのだつた。彼はその二皿を見る見るうちに食べてしまふと、

「チエッ！」と舌鼓を打ちながら、「もう一皿もつて來い！」と女中に命じた。「何の刺身だか聞いて來い。こんなものが四皿と食へるか。せず一皿で澤山だぞ。まづくて食へやしないとコックにいつとけ！！」

けれども、だん〳〵見てゐるのに、この男はそんなに大食家であるとも見えなかつた。その證據に給仕の女中が茶碗に飯を少しでも山盛りにつけると、一々少なくつけ直させて、それでいつの時でも二碗以上は食はなかつた。唯、その時の主菜である、前にいつたやうな、コロッケとか、刺身とかだけは、必ず二皿注文する習慣らしいのである。私が二度目に見た時のやうに、同じものを三皿命じることは例外の場合であるらしく、だからいつでも、「こんなものが三皿と食へるか、こんなまづいものが！」と怒鳴るのが口癖だといふ女中の話だつた。職業は辯護士ださうだ。

考へて見ると、「こんなまづいものが食へるか、」といひながら、同じものを二皿食つてゐる男は、この不二館の客の或氣質を代表すると共に、それよりもさういふ客に對する不二館の魅力を表象して居るものかも知れないのである。

この家の特徴は一口にいふと、自由で、づぼらで、そしてどこか混沌としてゐるところであつた。私の部屋の前の四坪の庭の右手は玄關の方から來る廊下になつてゐて、左手は新館と稱する、新らしく建て增した一棟と、これも廊下を隔てゝ對してゐた。そして正面の突當りがちよつとした圍ひになつて、圍ひの向う側は御用聞の商人などの通る、半間ばかりの家の中の通路を隔てゝ、主婦の居間になつてゐたが、新しい雇人が桂庵から連れて來られると、必ずこの主婦の居間で目見得の挨拶が交された。その部屋と私の部屋との間には、即ち四坪の庭だけの隔たりであつたから、それ等の挨拶の問答が私のところまで手に取るやうに聞えて來るのであるが、いつの時でも私は主婦が彼等を斷つてゐるのを聞いたことがなかつた。「年は幾つ？　十五か。隨分まだ小さいんだね、辛抱が出來たら居りなさい、」又「六十五か、働けるかね、辛抱が出來たら居りなさい、」とこんな風であつた。だから、ちよつと考へると、雇人には住みよささうに見えるが、こんなのは普通の人間には却つて勤めにくいと見えて、無數の女中や、番頭や、下足番や、風呂番などが新しく來ては、間もなく暇をとつて行つた。が、反對に少數の膚の合つたものは隨分長く勤めてゐるやうであつた。

そして、恐らくこの家ではこの個人に對する態度と、客を迎へる態度とが同じに違ひなかつた。

大體、この家は構造からして風變りたところがあつた。例へば表構へは御影石や化粧煉瓦などを使つて、可成り結構に、意匠を凝らしてあるにも拘らず、一度や二度來たものにはそれが殆ど目につかなかつた。といふのは先にもいつたやうに、それが二間足らずの細い路次に面して建つてゐたので、誰もその前に立つて、その凝つた構えを見ることが出來なかつたからだ。しかし、その內部は可成汚なかつた。殊に家風として、西洋人でも　支那人でも、男でも、女でも、辯護士でも　妾でも、若しかすると癩病患者でも、凡そどんな種類の客でも斷らなかつたから、或部屋には南京蟲も橫行するだらうし、或部屋には壁の落書が何代かの住み手を通じてそのまゝになつてゐるやうなのがあるかも知れない。現に私の部屋に入るためには、大きな臺所部屋をぐるりと一と廻りして、中程で先にいつた家の中の通行路に遮られてゐるので、廊下が一と所立ち切られて、若い女などはそれを跨ぐのに困難しなければならぬやうな不便さへある。湯殿なども狭くはないが、見たところ決して淸潔には見えない。ところが、或時風呂場の新參の番頭がいふのには、「こんな贅澤な風呂場を私は見たことがない。舊式だけど釜なども隨分金のかゝつたものらしい。それにこのタゝキなどのしつかりしてゐることは、丸ビルや東京驛ぐらゐ地均らしに金をかけてゐるに違ひない、」といつた。「そんないゝ釜なら、舊式でもどこかいゝところがあるだらう、」とそこで私が聞くと、「ところが、お客樣。沸きは遲いし、ごみが出ても掃除のしようがないし、手に負へません、」と風呂番は答へた。私の部屋だつてさうだ、二階で少し騷ぐ客があると、壁の砂がぼろ〳〵音を立てゝこぼれた。それにも拘らず、いつかの大地震を經驗したのに、私のその砂をこぼす壁には一つの罅さへ入らなかつた。だから、風呂番のいつたことは本當で、あのタゝキの上にゐたら、少し位の地震は感じなかつたかも知れない。——不二館は、さつと建物からしてそんな風に變つてゐた。

私が初めてこの家に下宿人として來た日は、何でも或宮樣の國葬のある日だつた。何故それを覺えてゐるかといふと、私が午前中に家から下宿するのに必要な道具類を一と車運んで來て、午後、前の東雲館に内所で借りてあつた部屋から又一と車運んで來て、それの始末をしてゐると、突然二階か三階かの頭の上から、三味線の音が盛んに起つて來た。「おや！今日は廢朝で、音曲停止の日だのに、亂暴な人があるものだな」と氣がついて驚かされたからである。廢朝どころか、普通の下宿屋なら、土曜日と日曜日の外は、さういふ音曲を弄ぶことさへ禁じられてある筈なのだ。もつとも、恥をいはぬと分らないが、私自身が同じ俗弊な道樂があつて、少しばかり三味線樂をたしなむので、東雲館からの荷物の中にそれを一概忍ばせてゐたのだつた。そして、折角持つては來たが、東雲館のやうな貸間專門の家と違つて、兎に角下宿の看板をかけてゐる家であるから、不斷にそれを樂むことは出來ないだらうと思つてゐた折から、その音を頭の上に聞いたので、私は一層注意した譯だつた。が、その私の心配は無駄だつた。だん／＼分つたことであるが、この家にはさういふ一切の『禁じ』といふものがなかつた。この自由な家では、客は客である。彼等が三味線を彈かうが、ダンスをしようが、若しかすると博奕を打たうが、全く干渉しなかつた。しかし、この日はこの家は別としても、國で「禁じ」であるものを、少しも遠慮のない音で、確に男が撥を當てゝ三味線を彈くらしい氣配なので、私は一層驚かされた譯なのである。後で知つたのであるが、この時の三味線の主が赤川十藏であつた。

赤川はこの家には最早四年越しに住んでゐるといふ、下宿人中での古參者であつた。彼は隠れた、しかしその道の仲間では可成り知られてゐる、篤學な天文學者だとのことである。年齢は四十歳をずつと越してゐたが、嘗て一度も結婚したことがないどころか、女を身邊に近づけたことがないといふことであつた。私は食堂で彼と顏を合はすやうになつてからも一週間ばかり口をきかずに過ぎたが、いつとなく二階の、私の部屋の頭の上に聞える邊で、午前一度、午後一度、そ

れから後一度と、規則正しく三味線の音を響かせる男が、その男だと知つた時分に、或日向うから突然「あなたも三味線をおやりになるやうですね、何をおやりですか？」と極めて平凡な會話をしかけて來た。同じ食堂の中ではあるが、彼と私とでは可成り離れたところに坐つてゐたので、その間に坐つてゐた他の客たちが一勢に私の方を注意したのに、私は弱らされた。それに、相手の男の聲が幾分調子外れで、甲高いのも閉口だつた。

「え、、別にこれといつて……」と私は相手の不しつけと、平凡な問ひとに多少輕蔑を感じながら、わざと冷淡に答へた。

だが、相手の赤川は私の素氣ない調子には少しもかまはないで、自分はやり始めてからかれこれ二年になるが、實に難しい、面倒なものである。あなたはさうは思はないか、といふやうな普通の話をつゞけた。その話の内容は別に何の奇抜なところがないばかりか、寧ろ平凡過ぎる位であるのに、どこかその聲のやうに調子外れなところがあるので、食堂にゐる外の客たちも時々笑ひを洩らすし、會話の相手である私も、答へながら何といふことなく笑ひ顔になるやうな何ものかゞあつた。そして、見ると、話手の彼自身も矢張り外の者と同じ程度の笑ひ顔をしてゐるのであつた。

そのうちに、彼と私との會話に、誰か傍から口を挾むものがあつて、食堂中は次第に話聲で賑らんで行つた。しかし、赤川の甲高い聲だけがやつぱり話の中心になつて、彼が主な喋り手であるやうに見えたが、彼は喋りながら食事を濟ますと、立上つて、――彼は食堂の一番奥の卓子に坐るのが例なので、人々の卓子の間をさつさと通り抜けて行つた。通り抜けながら、彼は自分のし掛つてゐる話をつゞけて、それが彼が地下の食堂を出て、一階への階段に上つて行くまで終らなかつた。それにも拘らず、彼は振り向きもしなければ、皆の者に會釋もしなければ、話の終るまで立止まることもしないで、此方から見てゐると、階段に彼の去つて行く足だけが見えるまで話だけはつゞけてゐるのだ。そして堅

と共に、彼の姿が消えてしまつた。だから、後に殘つてゐる者たちは思はず皆顔を見合はして、暫くしてから、やつと「變つて居ますね、あの人は、」といふ誰かの發音で、どツと笑ひ聲に爆發したものである。

それから、彼がどんなに變つてゐるかといふ噂がいろ／＼出た。何でも彼は非常な潔癖家で、宿の女中を一切自分の部屋に入れなかつたばかりでなく、彼のところへ來る新聞とか、郵便とかは、彼の部屋の前の、階段の手すりのところに、彼が棚のやうに打ちつけてある板があつて、一切それに載せておく習慣になつてゐた。彼はそれを部屋の中から火箸でつまみ入れて、消毒してからでなければ手にとらないといふのだつた。無論、そんな風であつたから、部屋の掃除は彼自身襷がけで毎朝やつてゐた。食堂では、彼は自分に運ばれた膳の上から茶碗をとつて、袂に用意してある半紙で一々磨をかけるやうにこすつてから、外の客たちのやうに女中に給仕させないで、一々自分の卓子から立つて行つて、自分で飯を茶碗に盛つた。

もう一つ彼の著しい癖は、彼が廊下で人と擦れ違ふことを極端に恐れることであつた。暗い廊下の曲り角などで、ばつたり彼と出くはすことは、彼自身よりも却つて他の人たちの恐怖となつた位だつた。何故といふのに、そこで人とすれ違ふことを恐れて、神經的に彼がばた／＼と二三歩後退りするあはてた態度に、此方がその三倍分も驚かされて、同じやうに二三歩後退りしたければならなかつたから。かうなると、どちらが恐れてゐるか分らない位で、私などは私自身の方が却つてひどく神經的になつて、廊下を歩いてゐる時、向うから人の足音がすると。赤川ではないかと心配して、胸がどき／＼し出すことが珍しくなかつた。それ程、彼が廊下で人とすれ違ふことを嫌ひ、且つ恐れる仕草は大仰だつた。彼の機嫌のよい時など、宿の女中が、こんな冗談を彼にいつゐることがある。

「赤川さん、觸りますよ、觸りますよ。」――

だから、下宿中のもので、彼がこの家に來てから十數年以來、たとへこの家の主人でも、女中はいふまでもなく、誰一人三階の一番隅にある彼の部屋に入つたものはない譯だつた。夏など、時々、扉が開いてゐるので、彼の留守の時を見計らつて遠くの方から彼の部屋を覗いて來て、報告する女中がいふには、「あんな奇麗好きで、毎朝襷がけで掃除までしてらつしやる癖に、部屋の中は何だか汚つたらしいのよ、」といふと、「さうよ、」と物知り顔に他の女中が答へて、「あんた人といふものは、却つて自分のことは案外どんなに汚なくしておいても平氣なものなのよ。」

が、私は彼と知つてから三年になるが、その間唯一度彼の部屋に招待される機會を持つた。元來、彼が私に用事があつて、私の部屋の扉を叩く時でも彼は二十分でも三十分でも、用事の話の間だけ、部屋の外に立つて物をいふ切りで、私の方でも遠慮して「お入りなさい、」と言はないし、彼も亦決して入つて來なかつたから、私の方でも彼に用事があつても、彼の部屋の扉の二三歩前から聲をかけて、やがて扉のところへ首を出す彼と、立話で用を濟すようにしてゐるのが常だつた。ところが、或時、彼が新しい三味線を買つたので、是非私に見てくれと申し込んで來た。私はいつもの通り、こちらが廊下に立つて、向うが戸口のところまで出て來て、彼が三味線を出し、私が手に取らずに中腰で眺めるつもりで、三階の彼の部屋の前に行くと、「どうぞお入り下さい、」と彼はいつた。「その日の風の吹き廻し」といふことはあるが、彼に限つて風の吹き廻しどころか、火事が起つても、地震があつても、人を自分の部屋に入れるなどといふことは、全くあり得ないことなので、私は躊躇するといふよりも、氣味の惡さを感じた位だつた。「かまはないんですか、かまはないんですか、」と私は幾度も繰り返して聞いて見た。もし入つたところが、女中などの話に、新聞紙はいふまでもなく、紙幣や貨幣まで一々消毒してゐるといふ位であるから、私が歸つてからの消毒の苦勞を思ひやるだけでも、遠慮しなければならない氣がした。が、私はたうとう彼の部屋に入つた。

部屋に入つた最初に私の目についたのは、六疊の部屋の天井を、斜めに仕切つた三角形の部屋に、幾筋となく針金を渡して、丁度軍艦の帆柱の綱に洗濯物を干したやうに、大小無數の布巾や手拭が干されてある光景だつた。「やあ、隨分布巾がありますね、」と私は思はず叫んだ位だ。その次に目についたのは、西郷隆盛の肖像の額だつた。これはこの哲學者肌の天文學者の部屋に最も不似合な氣がしたので、「變つた額が掛つてゐますね、お好きなんですか、西郷隆盛が？」と聞くと、「えゝ、私はこの男の顔が好きなんです。人物はどういふんだかよく知らないんですが、」と彼は平氣な顔で答へた。なる程、曾て女中がいつたやうに、見渡したところ、部屋の中は今いふ布巾の滿艦飾が語つてゐるやうに　小奇麗に見えることとの反對であつたが、しかしよく目を止めて見たら、何か彼かが清潔なのであらう。現に窓の一方には、餘り奇麗には見えない蒲團が、敷布と一緒に、日光に向つて干されてあるのも見られた。

「あなたは夜眠られますか？」と彼は何かの話の切れ目に聞いた。

私は初にいつたやうな性分なので、「夜でも晝でも、眠らうと思つたら犬のやうにすぐに寢つかれます、」と答へると、

「それやいゝですな。私はこの二十年來といふもの、藥なしに眠りたいと思つて、どんなに苦勞してゐるか知れません。」

「あそこにあるあの鐵の棒は何です？」とその時私は部屋の片隅にあるものに目を止めて聞いて見た。

「はあ、あれですか、」と彼は答へた。「私は一時あゝいふ鐵の棒に趣味を持ちましてね。水滸傳の影響だらうと思ふんですが、あれもわざ〳〵注文してこしらへさしたんです。今でも時々振り廻してゐますよ。夜などあまり眠れないと、三十回から五十回位まで振つて見ることがあります。」

私は又本棚に並べてある、部厚なのと、題名が變つてゐるのとで、ふと目についた本に就いても尋ねて見た。「あの

,,Suicides" といふのは面白さうな本ですね、面白いもんですか?」

「いや、つまりません。統計のやうなものが多くて……。それに、可成古い版の本ですから、新しい自殺の方法など出てゐませんし、唯學者の無趣味な研究書といふに過ぎないものですよ、」と彼は答へた。そんな事を聞いて厭がるかと思ひの外、彼はその ,,Suicides" の話が出た次手に、同じやうな種類の、色んな書物の話をしてくれたが、私は生憎大方忘れてしまつた。だが、本のことなどに就いても、そんなに熱心に喋りながらも、やつぱり觸られることは好まないと見えて、私が見たさうにしてゐるにも拘らず、彼はそれ等の本を一冊も棚から下ろさうとはしなかつた。彼の部屋にゐる間、私が觸つたものといふのは、最初の問題の、彼が新しく買つたのを見てくれといつた三味線だけであつた。が、そんなものは、私が見たいからといつて、特別に上等なものでもあれば兎に角、別にこれといつて感想は起る筈もなかつた。彼も別にそれを聞かうとする譯でもないらしかつた。結局、何の爲に私を彼の神聖な部屋に招待したのであらう?

――そして、私は十分ばかりゐた上で、彼の部屋を去つた。

赤川の部屋のすぐ下に當る二階の部屋に、私の、いはゞ同業關係で、そんな事から近附きになつた水本久一郎といふ友人が、一時住んでゐたことがある。一時――といつたのは、その後彼が他の宿に變つたといふ意味ではなく、同じ家の他の部屋に越したのであるが、その理由はかうだつた。――「どうも私も夜中々寢つかれない性分ですからね、あんなひどい音を上でされると、眠るどころか心臓が打ち出して、目が冴えるばかりですよ、」と水本は彼一流の流暢な辯舌で私に訴へた。「あの人（赤川を指す）は氣狂になるんぢやないですかね。今でもたしかに普通ぢやありませんが、今にかういふ下宿の部屋でなく、鐵の格子の嵌まつた部屋でなければならなくなるんぢやないですかね?」

「ぢやあ、あの鐵の棒を振るんぢやないでせうか。鐵の棒がありましたから、」と私が同情していふと、

「何だか知りませんけど、しかし振る位のことぢやないんですよ。それを牀の上にどすん／＼と突つゝくとか、それから確に角力取のやうにしこを踏むとかするに違ひないんです。それが普通の時なら兎に角、夜の二時三時といふ眞夜中なんですからね、閉口しますよ。」と水本はいつた。もつとも、彼のからいつてこぼす口調には、そのこぼす口調そのものを樂むやうなところがあつた。しかし、その夜中の物音にはよく／＼堪らなかつたと見えて、その部屋には一ケ月餘りゐた切りで、彼は同じ二階の他の部屋に引越したのである。

彼は私と略々同い年の三十四五歳の年輩であつたが、今だに獨身だつた。凡そ世の中の獨身の男で、彼ほど周圍の者や、知人や、その他ありとあらゆる世話好きの人たちから、嫁を取り持たうと勸誘される人は少ないかも知れなかつた。無理もなかつた、何故といつて、彼は或大學を優等で卒業した、好男子だつた、故郷には相當な財産を持つてゐた、父母とか兄弟とかいふ系累が一人もなかつた、性質は溫厚で、規丁面だつた、等、等、凡そ諸々の親や娘たちから選ばれる婿としての、最も優れた條件を悉く具へてゐたからである。だが、それにも拘らず、彼は獨身で、もう三年越しこの宿屋の下宿人の一人だつた。

私がこの家で初めて彼と知り合ひになつた頃、彼はどこにも勤めないで、遊んでゐるやうに見えた。無論、遊んで暮すのに不自由のない程の財産を持つてゐる人なのだ。先に私と同業といつたのは、この人も文學に關係のある仕事をしてゐたといふ意味である。しかし、無論、私などと違つて、どんな風に原稿料で暮さうかといふ心配がなかつたから、彼は氣に入つた時だけさういふ仕事をしてゐたに過ぎなかつた。それに、この水本こそ奇麗好きであつた。彼の部屋は、いつ入つて行つても、規丁面な女が今し方片附けて行つたと思はれる程、きちんと片附いてゐた。それから、注意してゐると、彼は毎日晝前に起きて、飯を食ふと、必ず一時間ほどして外出するのが常だつた。そこで、私は初め彼がどこ

かへ勤めに行つてるだらうと思つて、「どちらへ出かけるんです？」と聞くと、彼はひどくあわてた様子で、「いゝえ、なに別にどこへといふ譯ぢやないんですけれど、ちよつと。ふゝゝ、」と後を笑ひにまぎらしてしまつた。

その後、ずつと親しくなつてからの或日、彼が私にその時のことを笑ひながらいふには、「あなたも中々人が惡いよ。」「どうしてゞす？」「お近附きになつた初の時分、覺えてるでせう、いきなり僕をつかまへて、あなたは毎日何をしてゐるなんて聞くんですもの。或時などは、毎日同じ時間に出かけるが、どこかへ勤めてるのか、なんて聞いたでせう。僕、あの時ほど困つたことはありませんよ。僕は毎日珈琲を飲みに行つてたんですもの、」と彼はいつた。彼にいはせると、毎日朝から晩まで仕事をしてゐるとか、本を讀んでゐるとか、友達と無駄話をしてゐるとかして、少しも退屈を感じない人間といふものは、どうしたつて合點が行かない、「あの人は退屈をしないんですよ、驚きましたね、退屈といふことを知らないさうですよ」、と彼は呆れたやうな顔をしてよくいつた。退屈を知らない人間といふものは、彼にとつては即座に輕蔑すべきものであるらしかつた。——彼が容易に人の口車に乘つて、細君をもらはない理由の一つであらう。

だが、退屈といへば、水本よりも曾我部の方がもつと病氣が膏肓に入つてゐたかも知れなかつた。曾我部といふのは初にいつた私の舊友の加山五策が、嘗て財産の話が出た時、彼に比べると十分の一も百分の一も持つてゐないといふ例を引いた、あの同じ曾我部のことである。この曾我部が、私がこゝへ來てから半年程後の或日、大阪から荷物を持つてこの家へやつて來て、突然私の部屋に訪ねて來た。無論、それは加山から吹聽されてやつて來たものに違ひない。何しに來たのか、と彼に聞くことは、丁度水本に毎日何しに外へ出るのかと聞くのと同じだつたかも知れない。何故といつて、多分彼は加山のいふ通り、加山の家の百倍もの財産家の當主であつた。そして、彼も亦加山のやうに早く父親に別れて、唯加山と違ふ點は彼のやうに頑固な祖父がゐなかつたから、十二歳の時に既に自分の家の主人になつた譯だつ

た。それに、彼には加山のやうに弟も妹もなかつた。そして二十一歳の徴兵検査が済むと、すぐに結婚してしまつた。彼の妻は、嘗て女學校時代に新聞の美人投票で第二位を占めたといはれる程の美人だつた。今では五人の父になつてゐる。もつとも、彼の母親は、加山の祖父と母とを二人分合はした程の賢女で、父の死後女の手で元々大きかつた資産を又五倍にしたといはれてゐる程の人だつた。だから、曾我部は中學校を出て、妻を貰つて、父になつただけで、家の財産を守ることや、増やすことやに何の心配もする必要はなかつた。で、彼も自然文學や美術に趣味を持つやうになつた。同じ加山の趣味は彼に可成り負ふところがあつたに違ひない。もつとも彼は加山よりは學問なども出來た質であつたから、洋書なども飾りとしてだけでなく、讀むことも出來たらしかつた。近松翁などの作を見ると、讀者は早合點して、大阪の資産家の息子は悉く女道樂に浮身を窶すやうに思ふが、それは半面の事實に過ぎない。反對に加山や曾我部などは少年の頃から金といふものゝ有難いといふことばかりいひ聞かされたお蔭で、益々氣が小さくなつていぢけてしまつて、普通ならば當然女道樂に向はねばならぬ時代を、なるべく金のかゝらぬ道樂にとばかり心がけた爲に、人一倍のけちん坊になつてしまつたと見えるのである。無論、それには彼等が生れながらに持つて來た藝術愛好の趣味も全然關係のないことはないが。

私が曾我部を知つたのは、例の私の友人の、畫家の龜井の紹介に依つてゞあつた。加山が或意味で天才的な代りに、性質に變つた癖があるので、附き合ひにくい點があるのに反して、曾我部は少しぐづで、煮え切らなくて、歯痒いやうなところがあつたが、それだけ角がなくて、珈琲などを一緒に飲むのに氣樂だつたので、私は書生時分の夏休に大阪へ行くと、彼とよく散歩した。それで屢々彼の家を訪問したことがあるが、前後に唯一度しか彼の家に通されたことがない。人が尋ねて行つても、玄關に突つ立つた切りで、用事があるといつて斷るとか、すぐに外に出るとかして、滅多に

家の内に通さないといふ習慣は、加山にも共通してゐた。これは大阪育ちの人々の癖からも離れなかつた。ふだんなら、曾我部ほどの立派な家に住んでゐたら、わざ／＼にでも友達を家に招くだらうと思ふのに、彼等は決してさうでなかつた。彼の家は加山の家のやうに近所に小學校があるとか、飴製造の大きな工場があるとかして、騒がしい子供の聲や、煤煙を吐く烟突に惱まされるやうなことはなく、極く閑靜な、中産以上の階級の住んでゐる住宅町にあつた。低い間口一面に細目の格子戸が嵌まつてゐて、それと往來との間の半間程の幅はコンクリートのタヽキになつて、その外側には低い鐵柵が廻らしてあるといつた風な、資産家らしい、古風な住宅だつた。變つてゐるのは正面の右手に入口があるのだが、その入口の更に右手が、通に面して土藏になつてゐることだつた。それはよく見ると、一つ切りでなく、奥へ奥へと、船隊のやうに並んで建てられてあつた。つまりそれ等の藏がこの家の商賣道具で、俗に質屋といふ、質屋に金を貸すのが、曾我部の家の代々の職業だつたのである。そして、私の友達の曾我部太市郎はその家の當主だつたのだ。

いくら家の商賣は一切彼の母がやつてゐるとしたところが、彼も最早や當時三十歳だつたし、彼の家の仕事は一切彼の名前のもとに行はれてゐる位であるから、彼が其家を留守にしてわざ／＼東京へ下宿しに來るといふのは不思議に遊びなかつたので、私は、「今日から當分この家で御世介になります、どうか宜しく、」と私の部屋に挨拶に來た彼に尋ねて見た。

「どうしたんです、今度は加山君の代りに君が來たんですか。お家の方は！」

「えゝ、どうにかかうにか、」と彼は持前のバスで答へて、にや／＼した笑ひを浮かべた。

「遊びに？　當分ゐるんですか？」と私は聞いて見た。

「その、長くゐるのなら、矢張り下宿見たいに蒲團などを持つて來る方が得でせうね？」と彼は聞いた。

「ほお、そんなに長くゐるつもりなんですか、」と私は聞いた。「そんなら、それや下宿の方が得ですよ。」
その日から、彼はあの九月の大地震の日まで、その間月末の前後二三日だけは大阪へ歸つて行くのが例であつたが、ずつと一年近くこゝに下宿してゐたのである。彼はこゝにゐる間、私などが散歩に誘ひに行く時の外は、彼自身自發的に人を尋ねたり、散歩に行つたりするといふことは滅多になかつた。そして、部屋にゐると、絶えず煙草を吹かしてゐた。彼の性質が煮え切らなくて、どうかすると頭が悪いのではないかとさへ思はれるのは、この煙草の中毒のせゐかも知れなかつた。そして、煙草の烟の中で、彼は欠伸ばかりしてゐた。だが、彼は水本のやうに、退屈だといふことを口に出していつたことは一度もなかつた。最早やそんなことを口に出していふことも出來ない程、彼は退屈そのものゝやうに見えた。

　曾我部の部屋は、二棟に分れてゐるこの家の、私や水本や赤川やのゐる棟とは別の建物の方に屬してゐた。私が長い廊下を通つてその別の棟に屬してゐる曾我部の部屋を尋ねると、彼の部屋は西洋間になつてゐたので、彼は例に依つて部屋中を烟で一ぱいにしながら、いつの時でも窓に面した卓子の前の椅子に行儀よく坐つてゐた。毎日會つてゐるので、私たちは最初顔を見合はした時、挨拶の代りににやりと笑ひかけるのが例であつた。そして、ひどくお喋りな時間を送ることもあるし、まるで默り合つて、喧嘩でもしたやうにむつつりと別れることもあつた。彼はいつでも卓子の上に一つの望遠鏡を置いてゐた。それは私たちのよい慰みであつた。それで私たちは遠いところを見たり、近いところを眺めたりして話の種にした。

「かうして見ると、東京といふ町は、なる程、木の多い町ですね。さつと家と木が半分半分の割合だな。おや、あそこの眞四角な西洋館は何だらう、上に鳩のやうな鳥が一面に止まつてゐる……」

「どれ／＼。なる程。何だらうな、あの建物は？——君、鳩ぢやありませんよ、子供の頭だよ。學校ですね。學校の屋上庭園で、落ちないやうに壁で圍ひをしてあるんだよ、その壁の上に遊んでゐる子供たちの頭がのぞいてゐるんだよ。」

「なアんだ、學校ですか。ちよつと失敬、望遠鏡を。今度は一つこの下宿の部屋を見てやらうかな。これや愉快だ、あの水本君の部屋に、机があつて、机の前に茶つぽい色の棒が二本立つてゐるでせう、あれは何だと思ひます？——あの人の部屋は相變らずきちんと片附いてゐるな。——あれは机の前に坐つてゐたのが、そのまゝごろりと仰向けに寢轉がつたらしいんですよ。それで行儀よく二本の膝を立てゝ、身體を仰向けにして寢てしまつたんだな、これや愉快だ。」

だが、もつと愉快だつたのは、この望遠鏡に或日加山五策の姿が映つたことであつた。その日、私は曾我部と望遠鏡の景色をわざと子供のやうに面白がつて、この家の唯一の四階である、塔の部屋に上つて行つた。これは二疊敷位の小さな部屋で、寢臺一つと、椅子と卓子が一つづゝある切りで、その他には何にも置くどころか、人が二人と入る餘地さへない部屋だつた。それにも拘らずそれが矢張り貸間になつてゐて、そこに秋田縣の豪農の三男で、田澤といふ二十五歳の青年が住んでゐた。彼とは私は時々食堂で顏を合して言葉を交すやうになつたのであるが、女のやうな優しい青年で、音無しくて、怒ることがないので、女中たちにも評判がよかつた。が、彼こそ何をしてゐるのか、誰も知る者はなかつた。本を讀むのでもなければ、道樂をする風もなかつた。朝はきちんと早く起きて、夜も十時以前には床に就くらしかつた。友人が來る譯でもなく、友人を尋ねる樣子もなかつた。そんな風にして、最早や何年振りかこの家の下宿人の一人になつてゐるのであるが、更にこの男が私の注意を引いたのは、例の九月の大地震の時、さすがの怠け者たちも、勤めを持つてゐたもの丶外は、例へば水本にしても曾我部にしても、汽車が通じると共に、あの混雜の中を故郷に向つてそこ／＼に逃げて歸つた、そして田澤も無論一旦は逃げて歸つたのであるが、半月ほど經つと彼だけは又けろり

と上京して來て、昔と同じやうにこの塔の部屋で毎日早く起きて早く寢て、誰も尋ねて來ないし、誰をも尋ねない生活をつゞけてゐたことであつた。これはまるで達摩大師のやうな生活に違ひなかつた。又恐らくどんな人でもこのやうな生活を一年も二年もつゞけてゐたなら、達摩大師ほどにはなれなくとも、何か彼か悟りに近いものを習得するに違ひない。それにも拘らず、少しも賢くもならなければ、皮肉にもならず、惡人にもならない代りに、世をすねた人にもならないやうなのが、田澤青年であつた。現に、彼は今でもこの不二館の止宿人の一人として、私と毎日食堂で顏を合はしてゐる。

ところで、私たちはその田澤の部屋へ出かけて、狹いので、椅子を寢臺の上に上げて、後に殘つた僅かの空地に、或者は立つたり、或者は寢臺の端に腰かけたりしながら、無駄話をしたり、或は曾我部の望遠鏡で四方の町を覗いたりしてゐた。幸に、塔の部屋だけに、そんな狹い場所であつたが、窓が四方に附いてゐた。

「あゝ、一寸、一寸！」と先程から一人で南の窓から眼鏡で眺めてゐた曾我部が突然私に向つて呼びかけた。そして、もう一度その眼鏡で見たものゝ正體を確めるようにしてから、それを私に渡して、

「あそこを見て御覽なさい、珍しい男が歩いて來ますよ。」といひながら、彼方に見える阪道が、それと直角に交つてゐる電車通と出會ふ邊を指さして、「あそこに、赤い西洋料理の旗の出た家があるでせう。あの下の邊をこつちに歩いて來る男を、……見えるでせう、分りますか、ね、ね。」

それが加山五策なのであつた。私は眼鏡の中に、いつかこの家の食堂で會つた以來の加山の姿を見出して、彼を懷しく思ひ出した。曾我部は私の手から眼鏡を取返して、再びその方を見ながら、

「なる程、大きな足だな、こゝから見てゐてもあの大きな足が目につく。相變らず何か心配事でもありさうな、鹿爪ら

しい[illegible]てゐるが、[illegible]變な[illegible]だな。いつ來たんだらう。大阪から、こゝへやつて來て[illegible]」と[illegible]はいつた。

私は聲がとゞくものなら呼びかけたいと思つた。又鏡の方から見えるものなら、窓の上から合圖をしたいと思つた。が、道が曲つてゐたり、家の軒が出張つてゐたりする關係から、次に曾我部から眼鏡を借りた時には、もう加山の姿は見えなかつた。それに、もう彼が歩いて來る道は、もし彼が私たちの不二館にやつて來るものとしても、入り組んだ狹い路次の關係から、どの邊に來ても彼の姿を見ることは出來なかつた。が、大阪の彼が、私たちの外には東京でそんなに親しい友人もなかつたから、こゝらの道を通つてゐるからには當然不二館に來るものと想像しても間違ひであるとは思へなかつた。そこで、私は曾我部と共に川澤の部屋に別れて、私の部屋に歸つて來て、今にも加山が來るかと待つてゐた。だが、幾ら待つても彼は現はれなかつた。

「變だな、どこへ行つたんだらう?」と私が待ちくたびれていふと、

「いや、あの男のことだから、こゝへ來るつもりで傍まで來ても、氣が變つて止めることは珍しくありませんよ、」と曾我部はいつた。

「なる程ね。さういふと、いつかこゝの家で會つた切り僕は會はないが、あれからこつち一度も東京へ來ない筈はないでせうね、」と私が聞くと、

「どうして、どうして、」と曾我部は答へた「月に一度といひたいが、二月に三度位の割合で、東京へ來てゐる筈ですよ。だけど、乾度例の神經質で、僕のことで何か機嫌を惡くしてゐることがあるらしいんです。だから東京へ來ても、こゝには僕がゐると思つて、寄らないのかも知れません。」

「どうして彼の機嫌を惡くしたんです？」と私が聞くと、

「彼の足の話をしたんです、」と曾我部がいつた。「僕はもつともその話は猶井君から聞いたんですがね、」と前置して「彼がいふには、東海道の三等急行列車が三河遠江の邊を通る時に、時々その列車の一つの窓に大きな化物のやうな靴が一足、ぴつたりと窓一ぱいに、半分外に突き出て覗いてゐることがある、といふのである。無論、三等の急行がそれ等の國國を通るのは夜中のことであるから、そんなものが見えるといふのさへ不思議であるが、その靴を載せた汽車が通り過ぎる時に、ぼろ〱と靴の裏についた土がこぼれるなどと誠しやかに傳へられた。ところで、土地の百姓たちはそれを見ると喜んで、豐年のしるしだといつたり、その時その時の作物の豐作のしるしだといひ傳へて喜んでゐる、とかういふ話なのである。これは多分、加山五郎がそんなに屢々東京と大阪の間を往ふことと、彼の大きな足をもつて、彼のいびつな身體の恰好を代表さして、誰かゞ作つた傳説に違ひないのだつた。若しかすると、「こんな面白い話があるよ、」と如何にも人から聞いたらしく、それを曾我部に話した猶井自身の作り話であるかも知れない。が、それを聞いた曾我部も餘りよく出來た話なので、つひそれを當の加山に話したところが、加山は笑ふ代りに、忽ち機嫌を惡くしたといふのだつた。

「しかし、まつたくあの男の足は大きいですよ、」と曾我部は言葉をつゞけた。「大きいばかりでなく、どこか恰好が違ふやうな氣がするんです。といつて、指が一本多いとか少ないとかいふやうな片輪の足でもないんですが、何しろ鯨尺で計つて七寸六分あるといふんですからね。あの男のは拇指の隣の、手でいふと人差指に當る指が、拇指より二分程長いんですよ。――もつともそれは親より出世する徴だといふ話がありますが、それにしても加山のは特別なんです。あの足をぢつと見てゐると、可笑しいやうな、情ないやうな、丁度あの男そのものを見てゐるやうな感じがしますね。全く

大きな足ですからな。」

「何文ぐらゐなんです？」

「十二文以上だといひますよ。」と伊我部はいつた。「それで、一時彼もその話で、――あんな人、何ものを気にする性分ですから、纏足のつもりで毎晩寝る時に手拭で足をぐる／＼縛つて寝たといふ話ですが、その為に爪の色が變つたりして、それから一層醜な恰好になつたといふことですよ。足があの男の悲劇の元ですね。」

「ぢやあ、君は？」

「御免、御免、」といつて、二人で聲を合はして笑ひ合つた。

しかし、たうとうその塔から眼鏡で見た切りで、畑山五鐵はその時不二館には現れなかつたが、その時分彼に會つたといふ友人の話で、彼が東京に來てゐたことは確められたから、矢張り私たちが眼鏡で見たのは人違ひでなかつたのである。

こんな風に不二館がどういふ家であるか、だからどういふ人たちがこゝに住んでゐるか、と一々話して行つたら、恐らく私はこの紙を千枚費しても盡すことが出來ないだらう。もつとも、私の初めの計畫はそんなつもりではなかつたのである。私のやうに、家庭を持つてゐながら、何故、物好きらしく下宿などしてゐるのかと人に問はれて、私が答へる言葉がないまゝに、つひ私と同じ下宿に住んでゐる私の友人たちの噂で代辯するやうなことにしたところが、結局、人は自分自身の外の何を話すことが出來るだらう？　して見ると、畑山五鐵も、吉川十鵞も、水木も、伊我部も、田端も恐く私の外の何ものでもないかも知れない。年中町から町を歩いてゐるのも、大阪から東京へ行つたり來たりしてゐるのも、足の大きいのが悲劇の種であることも、潔癖で苦しんでゐるのも、妻子がありながら知らぬ下宿屋の一間に閉ぢこ

もつて煙草の州に埋まつてゐるのも……。

だが、又加山も、赤川も、水木も、それぐ\當の人物ではないのである。加山はいつかの大地震の頃は二度目の洋行に出て留守だつた。水木と曾我部と田澤とは前にいつた通りあの地震と共に鄕里に逃げて歸つた。そして私もその頃は一時家に歸つてゐた。唯、赤川だけは踏み止まつてゐた。そればかりでなく、彼も一旦は人々と共に裏の空地に避難したが、その翌日から彼だけは彼の愛する三階の部屋に歸つて、いつもの通り暮し始めたさうである。そしてその日からたしなみの三味線を始めて、警戒の巡査に注意されたなどといふ話が殘つてゐる。一ケ月程後、私が前のやうに泊り込まないで、家から毎日通ひ始めるやうになつた時、彼と食堂で會つたので、

「あなたはお國へお歸りにならなかつたんですか?」と聞くと、

「僕は旅行が嫌ひだもんですから、」と彼は答へた。「まして、あんな貨物列車に罐詰のやうになつて歸つたところが、別に仕樣がありませんしね。」

「旅行はお嫌ひなんですか?」

「えゝ旅行も、散歩も、あゝいふ種類のものは一切嫌ひです、」と彼の答だつた。

その頃は、先にもいつたやうに、一旦國に歸つた田澤青年も歸つて來てゐた。赤川は最早や五十歳近い年輩で、世間には知られてゐないが、彼自身の專門の學問をしてゐることだし、東京にまつたく關係のない譯ではなかつたから、彼が東京に殘つてゐることには合點が行かないこともないが、私は田澤青年を見出した時には、一層驚かされた。

「あなた、もう歸つて來たんですか?」と私は聞いた。

「えゝ、」と彼は相變らずの女のやうな優しさで答へた。

「まだ東京はこんなにごたごたしてゐるのに、國に入らつしやる方が安全ぢやありませんか？」
「えゝ、ですけども……」
「やつぱり東京の方がいゝですか？」
「國にゐたつて仕様がないもんですから……」と田澤青年は恥かしさうに答へた。
幸ひに不二館は燒けなかつたが、そこから一町も行くと、まだバラックも碌に出來てない燒野原がつゞいてゐる頃だつた。その時私は彼にすゝめられて、こわごわ彼の塔の部屋に上つて見ると、一方の窓を除いて、三方の眺めは恐く燒野原だつた。
「ひどいもんだな、」と私が思はず獨言をいふと、
「曾我部さんの眼鏡がほしいですね、」と田澤はいつた。
ところで、曾我部は歸つたまゝで姿を見せなかつたが、水木は半年程後に歸つて來た。だから、私が前に擧げた名前のうちで、曾我部を除くと、地震の前も地震の後も、不二館の顔觸れは殆ど變らなかつた。こゝに名前を擧げなかつた、他の多くの下宿人たちも大抵その例に洩れない。
そして、私がこゝの下宿人の一人となつてから足掛七年になるのである。地震後は先にもいつた通り、家の方が女ばかりなので、夜だけ宿の方で泊る習慣がついて、毎朝、勤人のやうに家から通ふことにしてゐる。私がいつもここに着いて、火鉢に火を入れさしたり、四坪の小さい庭を眺めて、仕事をする前の茶を飲んだりしてゐる頃には、まだここの多くの止宿人たちは眠つてゐる。起きてゐるのは赤川と田澤ぐらゐのものであらう。彼等と廊下で行きあふと、「お早う」とか、「今日は寒い」とか、「今日は暖かだ」とかいふ程の挨拶を交す位で、此頃では、以前のやうに餘り部屋

から部屋へ往來して無駄話をすることもない。といつて、別に喧嘩をしたとか、交際が氣まづくなつたといふ譯でもないのだ。私は長い間の習慣で、朝部屋に入ると、すぐに押入から蒲團を出して敷いて、枕元に仕事の用意の原稿紙やペンを並べる。仕事の進まない時は無暗に茶を飲んだり、煙草を吹かしたり、障子を開けて縁側に蹲んだりして時を遣つてゐる。煙草を吹かすのは、我部の流儀からうつつたのだらうか。縁側に蹲むのは、水木の退屈が傳染したのだらうか。そして、私の部屋は、山澤とは反對に、三階の一番下に屬してゐるから、一つの窓も持つてゐない。四坪の庭には、どういふ裝飾のつもりだか、築山の殘石のやうなものが半分ほど占めてゐて、桐と、柘榴と、八手の木が總計四五本植はつてゐる。——これだけの言葉でいふと、小ぢんまりとした奇麗な庭らしく聞えるかも知れないが、實際は庭といふことが出來ない程汚くて、私の部屋ばかりでなく、二階や三階から落として來る紙屑や反古が一層むさくるしさを添へてゐる。紙屑どころか、或日籠に詰まつたバナナ、を落とした者があつた。丁度私は部屋の中の緣の上に腰を下ろして、足だけそこの一尺餘りの幅しかない縁側に投げ出してぼんやりとしてゐた時なので、突然どさりとバナナの籠が落ちて來た時には、驚いたので腹が立つた位だつた。もしかすると、バナナの皮を籠に詰めたのを捨てたのかと思つて、部屋の中から覗いて見ると、間違ひなく、どこからか進物に貰つたのを、二三本食つただけの籠らしかつたから、今に女中が命じられて取りに來るだらうと待つてゐた。そして女中が來たら、これから餘り二階や三階から物を捨てないやうにしてもらひたいと抗議を申込んでやらうと思つてゐたところが、十分經つても、三十分經つても何の音沙汰もなかつた。そのうちに、私も自分の仕事にかまけて、バナナの籠のことを忘れてしまつたが、驚いたことには、それが翌日の朝まででそのまゝになつてゐたので、私が女中を呼んでそのことをいつてやると、女中は驚いて、それを拾つて二階の部屋にとゞけて行つた樣子だつた。もつともその時は、私はもう腹を立てたことを忘れてゐたので、抗議を申込ますこととも

忘れてゐたが、二階で次のやうに問答してゐる聲が聞えた。

「××さん、これ、あなたのでせう、昨日から下の庭に落ちてゐたといふぢやありませんか？」と女中の聲がいつた。

「うむ、そこへ置いといてくれ。」と××と呼ばれた男の聲が聞えた。そしてそれ切りであつた。私は忘れた。が、この××といふのは古くからこゝにゐる醫學士とかで、大學病院に勤めてゐるものらしかつた。噂では小の癖に興奮家のひどく亂暴な男で、不斷晝間は滅多に家にゐないらしいが、階段を上るのにも、廊の上を歩くのにも、わざと足に力を入れてどなければ、どんなにしてもあんな大きな響は起らないだらうと思ふやうな音を立てた。赤川のやうに、夜中に鐵の棒を振つたり、しこを踏んだりする譯ではないが、彼の足音には私は初のうち馴れない間は隨分驚かされたものである。しかし、このバナナの話でも分るやうに、隨分淡白な男に違ひなかつた。その爲だらう、女中の評判のいゝ男だつた。

ところで、私はこの取止めのない話を終るのに、丁度適當な時間に會つた。それは好都合にも、偶然加山五郎で始まつたこの話を、同じ加山五郎で終る機會を與へられたからである。丁度東京に地震があつた頃二度目の洋行をしてゐた彼は、それから四五ケ月後に日本に歸つて來た。後で聞くと、彼はそれから間もなく東京に來たさうであるが、その時は私は會はなかつた。その後、私は二度ばかり彼に會つたが、一度は私が大阪に行つた時で、他の一度は東京の銀座を散歩してゐる途で會つた時だつた。が、三度目には、彼は久しぶりで不二館へ私を訪ねて來た。

その頃、この不二館へ妙な外國人の一行が滯在してゐた。それは小人を中心にした波蘭西亞の旅藝人だつたが、その小人といふのが各々三尺位の背の高さで、男三人と女三人ゐた。多分さういふ人種がある譯ではなく、（エスキモー族ではなかつた）さういふ不具者を集めて來たものらしかつたが、日本あたりに見るやうな、身體は小さくても、頭だけは普

通の人間の大きさがあるとか、或は胴體が大きくて、足だけが極端に小さいとかいつた風な、そんな極端な不具者の感じはなくて、何から何までが小さい小人であつた。もつとも、彼等にも年齢があるには違ひないので、それ〴〵二十歳の顔のものも、四十歳の顔のものもあつたから、そんなに身體が小さくて、四十歳の容貌をしてゐるのなどは、何といつても少し氣味が悪かつた。そして、それ等の六人の外に、普通の男女の人間が四五人一緒だつた。

ところが、彼等の滯在してゐる部屋は私の部屋と廊下一つ隔てゝゐただけで、而も例の私の部屋の前の四坪の庭の左手に、硝子障子の嵌まつてゐる廊下は、即ち彼等の部屋に屬する廊下の一部になつてゐた。日本人と違つて、一般に歐羅巴人は饒舌であるから、彼等が部屋にゐる時は、私は彼等の饒舌に腹立たしくなる程悩まされねばならなかつた。初めは何でも博覽會の餘興の舞臺に出るために來たらしいのだが、それが濟んでからも淺草に出るとか、横濱へ出るとかして、一ケ月か二ケ月と思つたのが、半年近くも消つてゐた。

だが、さうして彼等が長くなるうちには、私もだん〳〵彼等の騒がしいことや、異人の旅藝人獨得の、傍若無人な厚かましさにも馴れて來ると共に、次第にそれ等の六人の小人の生活を見てゐることに興味を感じ出した。彼等の生活はガリヷーの旅行記にある小人島の人たちにそつくり似てゐるのが面白かつた。それは彼等の背の高さは私たち普通の人間の半分でしかなかつたから、物を見る大きさが餘程違ふのに違ひない、物を見る大きさばかりでなく、物を扱ふ力に於いてもさうだ。たとへば洗面所などに行つて手を洗ふのにも、彼等は一々小さな台を持つて行つて、その上に上つて水道の栓をねぢるのであるが、大抵の場合その栓をねぢることが彼等の力に餘つた。それでも小人男の方は一度は自分の手でねぢつて見るが、女の方は台と一緒に金槌を用意して行つて、私たちが指でねぢる水道のねぢを、金槌で叩くことに依つて水をこぼしてゐるのである。小人男の方も二度に一度は台から下りて、金槌を取りに驅け出すのが常であつ

た。

或時は又彼等は私の部屋の前の四坪の庭を散歩した。その庭に下りる爲には、彼等は彼等の部屋に面してゐる廊下の方から、庭に向つて飛び下りなければならなかつた。が、そこから普通には庭に下りるやうになつてゐないので、踏石が置いてなかつたから、彼等のうちで一番年若らしい、强さうな男が、握り拳をした兩手を兩方の腰の横にそろへて、キツと口を結びながら飛び下りた。それでも或時などは飛び下りてから二三歩よろめいてゐたことがあつた。それから彼は私の部屋の縁の下から、石油鑵の空箱を持出して、他の者たちの爲に踏台をこしらへてやるのだつた。そんな風だつたから、私は時々私の部屋の障子の外に、思ひがけなくぼそ〳〵と人の話聲が聞えるので、そツと障子の硝子の隙間からのぞいて見ると、二人の男女の小人が、縁側に腰かける代りに背をもたらして、何か話し合つてゐるのを見出すことが珍しくない。可笑しいのは、それ等の小人男たちはそれ〴〵小さなステツキを持つて、前にいつたやうに、四坪とはいひながら、巖石があちこちに置いてある上に、庭の割合に大きな木が植はつてゐるので、全く狹くるしい土地であるにも拘らず、彼等はそれを一とかどの庭園でゞもあるやうに、口笛を吹いたり、ステツキを振つたりして散歩してゐることであつた。この眺めは、時としては可笑しくも見え、時としては悲しくも見えた。或時は彼等は六人ともそろつてその四坪の庭に下りてゐることもあつた。さういふ時は、口々に口笛を吹いたり、歌をうたつたり、大聲に何か愉快さうに話してゐた。が、別の時にはいつどうして下りたのか、女の小人が一人で庭に下りて、柘榴の木の傍にある、一番彼等が坐りよいと見える巖石の一つに腰を下ろして、ひどく物思ひに耽つてゐるやうに、さういふ時はやはり我々がするやうに頰杖を突いて、默つて坐つてゐることもあつた。この女の小人は餘程孤獨好きと見えて、或時踏台のないのに一人で縁から下りようとして、過つて轉げ落ちて泣き出したので、大騷ぎを演じたことがあつた。それから又私の前

の縁側にもたれて、ほそ〴〵と二人切りで話をする小人は、夫婦者と見えて、いつの時でも同じ顔揃れの一對の男女だつた。先にもいつたやうに、彼等は三人づゝの男女だつたから、私たちは初めのうちは三對の夫婦だと思つてゐたのであるが、だん〴〵聞えて見ると、夫婦なのは一對切りで、後は一人の女小人は同じ一行中の普通の男の細君とかで、二人の男と、一人のお婆さん小人とはそれ〴〵獨身者だとの話だつた。よく踏石に一人で腰かけてゐるのは、そのお婆さんらしいのである。

が、私がかういふ庭の小人を樂んで、自分の部屋の障子の硝子戶から隙目して面白がることも長くはつゞかなかつた。馴れると、矢張りうるさくなつた。たとへば廊下に小人用の自轉車が置いてあつて、彼等の或者は退屈すると、突然その自轉車の傍に來て、その前についてある鈴をチリ〴〵と鳴らしたりするのだ。それが私の部屋の左手にある明り取りの窓のすぐ傍にあつて、私が晝寢をする寢床の枕の上に當つてゐたので、私は幾度その鈴の音で目を醒まされたか知れなかつた。多分、そんなに長く滯在してゐる位だから、始終興行がある譯ではなく、終ひにはだん〴〵不景氣になつて、半分は所謂とやに就いてゐる狀態だつたらしいのである。だから、彼等も亦退屈をしだしたに相違ないのだつた。そこで、興行者が考へたものらしく、今迄は大抵ダンスとか、音曲とか、自轉車の曲乘り位の藝で賣つてゐたのを、一層範圍の廣い賣物にするために、露西亞人であるところから、『復活』劇を出して、その中で日本の所謂カチウシヤの唄をうたはせる趣向を思ひついたらしいのだ。それから毎日毎日カチウシャの唄の練習が始まつた。普通の言葉よりも、唄の言葉は節がついてゐるので、彼等にも覺え易かつたらしく、その唄はすぐに覺えてしまつた。すると、興業者は一層乘氣になつて、今度は『金色夜叉』劇をやることにしたらしく、貫一お宮の唄を教へ出したのだ。貫一お宮の唄をも、彼等は間もなく覺えてしまつた。すると、今までうたひ馴れてゐたものよりは珍しくて嬉しいのか、廊下を步

くにも、庭を散歩するにも、カチウシヤと貫一お宮の唄ばかり繰し返してたる 私が困つたのは、實にこれ等小人たちがそれを散歩しながらやることだ。

丁度、私がその小人たちに惱まされてゐる頃、私の友人の加山五郎が大阪から上京して來たのである。

「どうしてるんです、此頃は？」と私は彼を歡迎していつた。「ちつとも東京へは見えないぢやありませんか？」

「いえ、さうでもないんですが、」といつて、彼は例の「ふゝゝ」といふ笑ひ方で後を濁してしまつた。

「さう〳〵、時々見えるといふ噂は聞いてゐたが、やあ、矢張り本當なんですね。どちらに泊つてるんです？」と問くと、

「此の頃は大抵中野の妹の家です、」と彼は答へた「妹が嫁いで、中野に來てるもんですから。」

「ぢやあ、一年に二三度は來るんですか？」と問くと、

「いえ、もつと來ます、」と彼は答へた。その時、私は曾我部がいつか話した、東海道の二等急行列車の中に、大きな品が出るといふ話を思ひ出して、思はずぬすみ笑ひを洩らした。もつとも、これは輕蔑する意味ではなく、彼がもう歲相大きな子の父になり、彼の妹が人の家へ嫁づくやうになつた今になつても、彼の叔父の所謂身持が治まらないことがつづいてゐるのに興味を感じたからである。そし、身持の治まらないのは彼だけでなく、同じ市内に實家ありながら、今だに下宿生活をつゞけて、そんな異人種の小人に惱まされながらも、一向下宿を引上げる氣にならない私自身もさうなのだ。

その時、例の小人のカチユウシヤの唄が私の部屋の外に起つたので、

「何です、あれは？」と加山は驚いた顏をして、障子の方に目をやりながら尋ねた。

の緣側にもたれて、ぼそ〳〵と二人切りで話をする小人は、夫婦者と見えて、いつの時でも同じ顏振れの一對の男女だつた。先にもいつたやうに、彼等は三人づゝの男女だつたから、私たちは初のうちは三對の夫婦だと思つてゐたのであるが、だん〳〵聞えて見ると、夫婦なのは一對切りで、後は一人の女小人は同じ一行中の普通の男の細君とかで、二人の男と、一人のお婆さん小人とはそれ〴〵獨身者だとの話だつた。よく縁石に一人で腰かけてゐるのは、そのお婆さんらしいのである。

が、私がかういふ庭の小人を樂んで、自分の部屋の障子の硝子戸から隙目して而白がることも長くはつゞかなかつた。馴れると、矢張りうるさくなつた。たとへば廊下に小人用の自轉車が置いてあつて、彼等の或者は退屈すると、突然その自轉車の傍に來て、その前についてある鈴をチリ〳〵と鳴らしたりするのだ。それが私の部屋の左手にある明り取りの窓のすぐ傍にあつて、私が晝寢をする寢床の枕の上に當つてゐたので、私は幾度その鈴の音で目を醒まされたか知れなかつた。多分、そんなに長く滯在してゐる位だから、始終興行がある譯ではなく、終ひにはだん〳〵不景氣になつて、半分は所謂とやに就いてゐる狀態だつたらしいのである。だから、彼等も亦退屈をしだしたに相違ないのだつた。そこで、興行者が考へたものらしく、今迄は大抵ダンスとか、音曲とか、自轉車の曲乘り位の藝で賣つてゐたのを、一層節倒の廣い賣物にするために、露西亞人であるところから、『復活』劇を出して、その中で日本の所謂カチウシヤの唄をうたはせる趣向を思ひついたらしいのだ。それから毎日毎日カチウシヤの唄の練習が始まつた。普通の言葉よりも、唄の言葉は節がついてゐるので、彼等にも覺え易かつたらしく、その唄はすぐに覺えてしまつた。すると、興業者は一層乘氣になつて、今度は『金色夜叉』劇をやることにしたらしく、貫一お宮の唄を敎へ出したのだ。貫一お宮の唄をも、彼等は間もなく覺えてしまつた。すると、今までうたひ馴れてゐたものよりは珍しくて嬉しいのか、廊下を步

くにも、庭を散歩するにも、カチウシヤと貫一お宮の唄ばかり唱し立てた。私が困つたのは、殊にこれを六人が合唱を以歩しながらやることだ。

丁度、私がその小人たちに悩まされてゐる頃、私の友人の加山五郎が大阪から上京して來たのである。

「どうしてるんです、此頃は？」と私は彼を歡迎していつた。「ちつとも東京へは見えないぢやありませんか？」

「いえ、さうでもないんですが、」といつて、彼は例の「ふゝゝ」といふ笑ひ方で後を濁してしまつた。

「さう〳〵、時々見えるといふ噂は聞いてゐたが、ぢやあ、矢張り本當なんですね。どちらに泊つてるんです？」と問くと、

「此の頃は大抵中野の妹の家です、」と彼は答へた「妹が嫁いで、中野に來てるもんですから。」

「ぢやあ、一年に二三度は來るんですか？」と問くと、

「いえ、もつと來ます、」と彼は答へた。その時、私は曾我部がいつか話した、東海道の三等急行列車の窓に、大きな靴が出るといふ話を思ひ出して、思はずぬすみ笑ひを洩らした。もつとも、これは軽蔑する意味ではなく、彼がもう餘程大きな子の父になり、彼の妹が人の家へ嫁づくやうになつた今になつても、彼の祖父の所謂身持が治まらないことがつづいてゐるのに興味を感じたからである。そし、身持の治まらないのは彼だけでなく、同じ市内に家がありながら、今だに下宿生活をつゞけて、そんな異人種の小人に悩まされながらも、一向下宿を引上げる氣にならない私自身もさうなのだ。

その時、例の小人のカチユウシヤの唄が私の部屋の外に起つたので、

「何です、あれは？」と加山は驚いた顔をして、障子の方に目をやりながら尋ねた。

「面白いですよ、」と私はいひながら、立つて行つてそつと障子を開けて見せた。即ち私たちの目の前の四坪の庭に、三々五々と小人が散歩してゐる光景が展けた譯である。小人たちはさすがに粹人だけあつて、決して私たちが障子を開けたことにも、私たちに見られることにも驚かなかつた。それはこれまでの經驗で私は知つてゐたから、さうして遠慮なく障子を開いたのであるが、加山は少なからず驚いた樣子だつた。

だが、小人たちは障子の開いた音で、一時私たちの方に注意したが、すぐに自分たちを取り戻して、今まで通りカチユウシヤの唄をつゞけながら、四坪の庭を歩き廻つてゐた。

「どうです、不二館には時々妙な人種が來るでせう、」と私はいつた。が、言つてから私がはツとするのと、加山の顏色が少し變つたのと同時だつた。で、私はあわてゝ、「妙な人種といへば、――知つてるでせう。赤川さん、――天文學者の、――赤川さんが筆頭で、六木君だつて、僕だつて、そして君だつてその中に入るかも知れませんよ、」といつておいて、後をわざと快活に笑つた。

そこで又加山も機嫌を直して、いろ／＼な無駄話に時をうつした。私たちは話の間に、遠慮のない仲だつたのでいつの間にか頭並ひになつてゐた。それは丁度腕角力でもするやうな恰好で、加山は足を庭に向けて右手の椽先の方へ、私は反對に入口の扉の方へ足を出して、丁度部屋のまん中で私たちは額を突き合はすやうな位置になつて、向ひ合つてゐたのである。話は私の第二の故鄕であり、加山の故鄕である大阪とか、大阪育ちの人間とかに就いて、花が咲いた。

「實際、細井君がよくいひましたが、大阪といふところは家庭が惡いんですな、」と加山は珍しく大人びた調子でいつた。

「それもさうです、」と私も相槌を打つた。「それに、妙に僕たちの知つてゐる大阪の人たちは、誰も彼も申し合はしたや

りにも、なりかなりの財産を背負はされてるのがいけないんぢやないですかね。人間といふものは、自分のこしらへたものなら、時によつて五萬でも十萬でもつかつてしまへるが、親から譲られたといふものは、一萬でも中々容易に失くしたくないといふやうな氣がするものでせうからね。」

「さうですよ、まつたくさうですよ」と畑山は同感して叫んだ。「あなたは知つてますか、龜井君がよく大和橋の芋屋の話をしましたね。大和橋に薩摩芋の問屋がありましてね、問屋の外に小賣もしてゐたんです。御存知の通り大阪ぢや毎朝味噌汁の代りにお粥を食べる習慣があるでせう、冬になるとそのお粥の中に芋を入れて、つまり芋粥といふやつを造るんです。その芋粥の芋を買ひに、龜井君は子供の時分よくお母さんの命令でその大和橋の芋屋までやらされたといふ話をしますね。いつかなんか、どこかでアイスクリームを飲んでゐると、龜井君が何の氣輕な調子で、アイスクリームなんか飲んでると罰が當るぞ、そんなものは腹の中に入つたら水ぢやないか、芋を溶かした水だよ、それが二十錢とか三十錢とかいふのは高いよ、同じ二十錢も三十錢も出すなら、ビフテキとかカツレツとかの方がいゝ、腹に角牛肉を使つてあるんだからな、それなら滋養にもなるよ、などといふかと思ふと、あゝあゝ、嫌なしつけをされるもんだな、俺は、……こんなけちな考を持つやうになつたのは、親の罪だね、我々大阪人の母親などといふものは倹約といふことを大事にし過ぎて、お陰で子供は一生いぢけるよ、いぢけなければその反對か、何にしても一生そんなことに拘くこだわるやうになる、大阪者がけちだといはれるのはそんな關係からだといつたことがありますが、さすが龜井君は大したことをいふ人ですね。僕も實はその大和橋へ毎朝芋を買ひにやらされた一人なんですよ。龜井君の家と僕の家とは十五六町離れてゐましたし、僕の家からも、龜井君の家からも、その芋屋まで矢張り十五六町ありましたがね、その途にだつて何軒芋屋があるか知れないんです。ところが、實際、その芋窖の芋が一番安くて、そして品のよかつたことは確

ですがね。それだといつて、僕の家にしても、龜井君の家にしても、平常の安い芋を買はなければならない程窮迫してた譯ではちつともないんですからね。……」

「曾我部君なども矢張りさうでせうか？」と私は珍しい加山の長談議に感嘆しながら、相槌を打つた。

「曾我部はまさか芋買ひにはやらされなかつたでせうが、」といつて、加山はそこで呼吸をつぐ代りのやうに、獨特の「ふゝゝ」といふ笑ひ方をして、「しかし、曾我部だつて同じやうなしつけをされたことは同じですよ。その證據に僕などには彼のすることがよく分りますし、僕などの考へることとやすることと、彼の考へることとやすることと同じですもの。大分前の話ですが、僕はちよつと入ることがあつて、曾我部に金を十圓貸してくれといつたことがあります。さうすると中々返事をしないのですが、どうしてもその金が入るもんですから、幾度も幾度も攻めますと、おやあ、何か本を二三冊代りに預けてくれといふんです。僕はしかし背に腹はかへられなかつたもんですから、本を三冊抵當に預けましたよ。あんまり腹が立つたから、借りるだけは借りましたが、わざとあの時の十圓はそれつ放しにしておきましたから、その代り今だに本も曾我部の本棚にほこりにまみれたまゝになつてゐるでせう。いや、本當ですよ、本當の話ですよ。その時は僕も腹が立ちましたが、考へて見ると、僕たち大阪者にはみんなそんなところがありますね。」

　加山がこんな辻褄の合つた、こんな間の抜けたところのない、眞面目な話をしたことは珍しかつた。多分、最近に總非にでも會つて、彼の言つたことに感心した餘り、その口吻をすつかり覺えて來て、私の前でおさらへをしてゐるのだらうと私は思つた。そしてふと腹這ひになつたまゝの顏を上げた時、氣がついたのは、加山の足元の方の庭で、さつきからうたひながら遊んでゐた小人たちが、一と所にかたまつて、何かこそ〳〵話し合つてゐるのが、加山の身體越しに眺められた。すると、私がその方に注意の目を向けた瞬間、敏感な加山も同時にその方を見ようとして、むく〳〵とそ

の大きな叫聲を起した。と、どうしたのか、先には私たちが傍に行けば叫び出した時でも、一向平氣な顏つきの小人たちが、この時は、何か私たちに惡いことをしてゐるのを見つけられでもしたやうに、六つの小さい顏が忽ち怒りの悲しさうな表情をして、口々に何かいひながら、我勝ちにと石油箱の踏臺の方へ走つて行つて、そこから廊下に上ることに依つて部屋に飛んで歸つた。何のために彼等がその時そんな事をしたのか今だに分らないのである。が、これを見た時、加山の顏色がさツと變つた。これは先程、この家には時々妙な人種が來ますよ、と私がいつた時、彼がしたと同じ表情だつた。

彼は突然坐り直つて、

「僕、失敬します、」といつた。

これは私の彼との長い交際の經驗では、彼が明らかに機嫌を惡くしたしるしに違ひなかつたので、私に續いて、

「どうしたんです、急に？」とはら／＼しながら聞いた。「いゝぢやありませんか。もう少しゝたら、久しぶりで銀座でも一緒に歩かうぢやありませんか？」

が、彼はこの私の機嫌を取る言葉をも耳に入れずに、そこ／＼に歸つて行つた。それ以來私は彼に會はないのであるが、例の口さがない細井の噂としてその後傳はつて來たことには、私がこの時加山をわざと縁側に足を出させるやうにして、庭に遊んでゐる小人たちに彼の有名な大足を見せて、彼等を驚かして樂んだ、さういつて加山は憤慨してゐるといふのである。——

ねえ、たうとう私は自分に就いて話す代りに、矢張り他人の噂に終始してしまつた。どういふ譯で、自分の家を見捨てゝ、わざ／＼下宿住居をしたり、他所に部屋を借りてそこに通勤したりしてゐるのか、と私は屢々人に問はれるが、その答の代りにかういふものを書いてしまつたのである。

（一四、六）



新しい家

上司小劍

一

過去四十餘年を振りかへつて、箕輪敏郎は、自分もずゐぶん長い浮世の道中をして來たと思つてゐる。妻貞子とのなかに娘が一人あつて、もう二十歳になつた。早苗といふ。五月の田植時に生れたから、さう命名したのだ。つく〴〵考へるまでもなく、自分の一生には、さうたいして幸福といふものがなかつた。いやいや、既にこの世へ生れて來たといふことが、不幸の根幹であつたかも知れないけれど、生れて來た以上、どうにも仕樣がない。自分のことは、すべて自分で處置を附けるといふ流儀の自分ではあるが、自分を生んだものは、斷じて自分ではない。自分といふものがこの世へ生れて來るやうに段取りをつけたものも自分ではない。言はゞ誰れかゞ、自分に無斷で自分を生んだのだ。……と、そんな風にまで燒けくそになつて、箕輪は考へることもあるのだが、また汚ない泥海へ汐干狩に行つて蛤を掻き探

すやうに、自分の過去の泥海のやうなむさくるしい生活から、一つ二つづつ小さな幸福を拾ひ上げて數へやうとすることもある。併箕輪の乏しい幸福の中で、先づ第一に擧ぐべきは、妻貞子が一回しかお産をしなかつたことである。何もこゝでマルサス主義を唱道するつもりはないし、他人の妻がいくら子を生まうと、箕輪の知つたことではないが、たゞ箕輪自身にとつて、其の妻の殆んど石女にひとしいのを、生涯の一大幸福としないわけには行かないのである。幸福の乏しい彼れにおいて、この一事はまさしく幸福も幸福、大幸福だと思つてゐる。彼れの眼中には、箕輪修郎と其の妻貞子との複數の生活はあつたけれど、箕輪の家といふものはなかつた。二階一室に階下三室の小さい借家は、たゞ雨露を防ぐだけのもので、所謂箕輪家といふコムヴエンショナルな『家』ではない。南瓜の蔓をたぐるやうな、祖先傳來の『家』の血統は自分限りで斷絶させても惜しくはない。……といふよりは、むしろ斷絶させたいのだ。あまり結構な頭の遺傳もない血筋を貽すことは、後に生れて來るものゝために氣の毒だとも思つてゐる。それで彼れは子といふものを一人も欲しくなかつた。似たもの夫婦と言はうか、將た夫の妻に對する感化力が強いと言はうか、妻の貞子も世間並の女房達ほど、子を欲しがらなかつた。玩其の代りに一人ぐらゐあつてもいゝ、と思ふことはあつても、ぞろ〳〵と里芋の子のやうに、あとからあとから出來るよりは、一人もない方がよいと考へてゐたのであつた。其のうちに姙娠した。

生るゝ子が女だつたらいゝなア、と夫婦でさう熱望してゐた。女の子が一人、……それでたくさんだ。男の子なんぞ欲しくない。男の子の生るゝのを望んだのは、封建時代の武士のことだ。男の子がなければ世襲の職を繼ぐことが出來ぬ。職はとにかく、祿を襲ふことが出來ぬ。これは經濟上の大問題だ。しかし今はちがふ。腰辨の二代目なんか作る必要はない。高い學資をかけて、安い月給を取る。これほどばかばかしいことはない。

箕輪夫婦は、其の頃よく銀座を散歩したが、殆んど毎夜のやうに、カフエエの女に戯れてゐる或る私立大學の醫科生

の群を見た。彼等は多く金持ちの家の息子だと聞いてゐる。其の學帽が一種の見わけやすい形をしてゐるのですぐにそれとわかる。どのカフエエに行つて見ても、一人や二人は必ず其の特異な形の學帽を載せてゐる頭があつた。ある時はそれが三四人連れで、醉歩蹣跚として、カフエエやカヴアレエを飲み廻はつてゐた。人々の往來の劇しい鋪道をば、右に左によろ〳〵と、千鳥足でよろけ歩いてゐる學生の姿の醜さ。

『あれだから、男の子はいやだといふんだよ。』と、箕輪は顔を顰めつゝ、しみ〴〵さう言つた。

『ほんとにさうでございますね、あの人たちに學資を送つてゐる親たちの顔が見たうございますね、うちの悴は東京の××大學へ入つてると言つて、鼻高々と、今夜あたり、息子が一生懸命に勉強してる姿を想像して喜んでゐらつしやるんでございませうね。』と、貞子も珍らしくよくしやべつて、苦笑したのであつた。

『女の子なら、いくら出來がわるくても、まさかあゝはならんよ。女の子をお生みなさい。生むのなら女の子だね。それも一人だよ。二人も三人もあつちやたまらない。』と言つて、其の時箕輪は妻の顔を眞ッ赤に染めさせた。其の頃は彼等夫婦もまだ若かつた。

『でもわたし、たんだかいやですの！世間の人が子を可愛がつてゐらつしやるのを見ると、まるで馬鹿か狂人のやうですもの。』と、當節の女とはだいぶ氣持ちの變つてゐるらしい風で、貞子は夫に合槌を打つやうなことを言つたりした。

『お前だつて、さうなるよ、子供が生れたら。あれをね母性愛と言つて、貴ぶべきものなのださうだ。』

『男の方だつて、ずゐぶん、頬ずりして子供を可愛がつてらツしやる方があつてよ。父性愛といふんでせうか。それが、いゝ子ならいゝけど、きたならしい、不きりやうな子だと、側から見てゐて、氣の毒なやうな氣がしますね。』

『勝手なことを言つてゐる。お前だつて、生んでごらん。きツとさうだから。どうもさう飛び離れたいゝ子[illegible]

うにないからね。』

『だからいやなのよ、わたし。どんないやな子が生れても、自分の子だとなると、眼へ入つても痛くないほど可愛くなるのだと思ふと、何んだか恐ろしいわ。……だツて、犬も猫も鶏も、みんなさうなんですもの。見たことはないけど、ライオンだツて、虎だツてさうなんでせう。いつだツたか、動物園でライオンがお産をしたと言つて、新聞に寫眞が出てましたね、あの恐ろしい、人でも馬でも捕つて喰べる百獸の王が、やツぱり夢中になつて子を可愛がるのかと思ふと、をかしいわ。わたしどうも、子を生んで獸に成り下がるのはいやだわ。』

「まア、いゝや、人も獸も、生きるといふこと、生きたいといふことに變りはないんだ。宗教家のいふやうに、靈魂は人間にばかりあつて、動物には覺魂しかないとかいふのも得手勝手な話だ。動物に成り下がるのか、成り上るのか知らないが、動物……殊に昆蟲のなかには、人間よりもズツト進んだ生活組織をもつてゐるのがあるといふから、まア一つ動物に成り上つたつもりで、子を一人生んでみるんだね、女の子のきれいなのをさ。無理な註文だか知らないが。』

『さう言へば、蟻や蜂は人間や犬猫ほど子を可愛がらないやうですね。』

『そんなことはないよ。僕が子供の時、近所のお宮の境内にある大きな銀杏の樹のうつろになつた中へ大きな熊蜂が巣を作つてね、其の巣をこはしてやらうと思つて、二三人の惡太郎が集つて、銀杏の樹の下で相談してたんだ。そこへ村役場の書記をしてゐる男が通り合はして、藁で火をつけたらいゝと言ふんだ。其の銀杏の樹は、大人が五人ほど手を繋ぎ合はさないと、幹を一まはり卷くことが出來ないほど太いんだ。しかし、そんなに太いのはわづか三間ばかりで、そこから上は二股になつて、丁度人間が脚をひろげて、逆さまに立たやうになつてるんだ。其の股のところに小さな穴があつてね、蜂がそこから入つて巣を作つたんだね。内部の空洞へさ。穴は小さいけどうつろは廣くてね、それだけの樹が

一尺足らずの厚みで、筒になつてるんだ。ところが其の根もとのところに、また小さい穴があつてね、逆さまになつて細工をしてある人間にたとへてみたら、そこがまア口だね。村役場の書記はその口から藁を押し込んで火をつけることを教へてくれたんだね。上にも穴があつて、空氣がよく抜けるから、火は忽ちがう〳〵と音を立てゝ燃え出したんだ。うつろの内部の表面はなんしろ長の年月、雨や風にさらされて、枯木のやうになつてるから、火はそれへ燃え付いて、股の穴から盛んに烟りと焔を噴き出すんだ。村の人たちはお宮の火事だと思つて、ポンプまで擔ぎ出す騒ぎさ。中では早鐘を撞くしね、えらいことになつちまつたんだ。そこへ行くと、大人(おとな)といふものは無責任でね、火をつけることを教へた村役場の書記は、火を消す方法を教へないで、いつの間にか、すうツと、どこかへ逃げちまツたんだ。最後まで責任を知つて踏み留つたのは、當年取つて十歳の僕ばかりさ。其の時見たんだよ、蜂だツてやツぱり、子を愛するといふことをね。熊蜂の大きな奴が巣の中から白い、細長い卵のやうな子をくはへて、赤い焔と烟りの間を、命がけで逃げて行くんだ。」

「あゝツ、其の話でしたの。あまり長いもんだから、銀杏の火事の話かと思つたわ。火事はどうなつたの？」

「火事はすぐ消えたさ。銀杏は火に強いから、それくらゐのことで、なか〳〵枯れやしないし、結局うつろの内部の朽ちた部分へ、防腐法を施したことになつて、樹のためにもいゝといふので、僕等は怪我の功名を、神主から褒められたんだ。さうなると、その村役場の書記がノソ〳〵名乗り出て、あの銀杏の木を燒くことを教へたのは、實は僕です、と手柄顔をするんだ。なんしろ、神木といふことでね、人間なら横綱のやうに股のところへ張つてあつた注連繩(しめなは)まで燒いてしまつたんで、新らしい注連繩を作つて、臨時に、お祭をしたんだよ。」

こんな話をしてゐる時、貞子は姙娠三ケ月で、悪阻が始まりかけてゐたのだ。

二

生れた子は、夫婦の望みどほり女で、夕方から陣痛が始まつて、おぎやアと産聲をあげたのは、翌日の午前十時、さうして十二時頃には、もう早苗といふ名が命けられてゐた。ずゐぶん早い。

箕輪夫婦は、世の所謂子煩惱といふほどでもなかつたけれど、やツぱり子のない方が幸福だツた、と考へるやうなこともなく、先づは普通の愛をもつて早苗を育てゝ來た。蝶よ花よと夢中になつていつくしむほどの古風な氣にもなれなければ、お乳母日傘と贅澤の出來る餘裕はなくて、たゞこの上殖えさへしなければ、これもいゝと思ひながら、人並みの學校教育をも施して來たのであつた。其の間にも貞子は、子を生むなら女がよい、男の子なんぞ詰まらない、と曾つて夫の言つたことを、全くほんたうだ、其の通りだと思はせられる世間の實例をいくつも見て來た。或る家では男の子が十五六にもなると、隱れてタバコを吸つたり、おでん屋で酒を飲んだりするのを、親はいつまでも知らずにゐた。學校へ行くと言つては、ステーションの待合室の暖かいストーブの側で、ぐう〳〵と轉寢してゐるのをも、親たちはやはり知らずにゐる。早苗のまだ生れないうちに、自分たち夫婦が銀座散歩の折りに見た××大學の豫科生のやうなものが、後から後から生れて來てゐるのを知つては、いよ〳〵もつて男の子に對する恐怖と、自分の子が女であるといふことの幸福とを感ぜずにはゐられなかつた。

女の子にはさう惡いのがない。たとへ惡くなつたとて高が知れてゐる。安心なものだと思ひつゝも、若しや、早苗が學校をずる休みして、どこかへ遊びにでも行つてやしないかといふ不安に打たれると、貞子は女中のない家の戸締まりをして、わざ〳〵學校まで見に行つたことがある。それは早苗が女學校の四年の折りであつた。俄にさう思ひ立つ

と、たまらなくなつて、貞子は仕度もそこ〳〵、束髮も結ひなほさないで、あたふたと出て行つた。學校へ行つて、若しや、『筧崎早苗は本日缺席です』とでも言はれたら、どうしやうかといふ心配が先きに立つた。『四年一の組の筧崎早苗をちよつとお呼び下さいませんか』と學校の受付のさら〳〵と砂埃りのかゝつてゐる粗末な机に向つてさう言つた貞子の聲に、妙に慄へてゐた。『あなたは？』と、教師も兼ねてゐるらしい三十前後の鼠色の袴を穿いた婦人の銀縁眼鏡の光りにじろりと見られて、『母でございます』と答へた時、貞子はしみ〴〵、自分ももう女學生の母になつてゐるのかと、今更に考へたのであつた。『暫らくお待ち下さい』と銀縁の眼鏡がまた光る。貞子は自分の女學生時代が、つひ昨日のことのやうに思はれて、どうしても女學生を娘にもつてゐる身體だとは考へたくなかつた。銀縁眼鏡の婦人さへ、自分よりも年上のやうな氣がする。

やがて、『こちらへ』と、組長をしてゐるらしい小づくりのよく出來さうな女學生に導かれて、教室と教室との間の長い廊下をば、殆んど二十年も前に嗅いだ學校くさいにほひに鼻の奥を搔き廻はされる氣もちで、靜かなやうな、騷がしいやうな、當間通る落場の抜け道といふ感じを受けながら、料理實習室の前まで來ると、白いエプロンをかけた早苗の姿が、さながらおさんどんのやうな格好で、ひよつこり、身體を斜めにして立ち現はれた。『何の御用？』と訊くのらいやに他人行儀で、自分の家の内で相對した時のやうに、馴々しくはなかつた。貞子は高が一にも必要のない心配が、やはりただの心配に了つたのを、十分豫期してゐたゞながら、何んだか嬉しさに涙のこぼれるのをおぼえさうであつた。しかし、『何御用？』と重ねて訊かれると、全く用事のないのに當惑しなければならない。貞子の頰は嬉しくあわて出した。

『今日は何時まで？』

そんなことを差しあたり問ふた。『五時間ですから、三時には歸れてよ。當番だから少しおそくなるかも知れませんけ

二

生れた子は、夫婦の望みどほり女で、夕方から陣痛が始まつて、おぎやアと産聲をあげたのは、翌日の午前十時、さうして十二時頃には、もう早苗といふ名が命けられてゐた。ずゐぶん早い。

箕輪夫婦は、世の所謂子煩悩といふほどでもなかつたけれど、やツぱり子のない方が幸福だツた、と考へるやうなこともなく、先づは普通の愛をもつて早苗を育てゝ來た。蝶よ花よと夢中になつていつくしむほどの狂風な氣にもなれなければ、お乳母日傘と贅澤の出來る餘裕はなくて、たゞこの上飢えさへしなければ、これもいゝと思ひながら、人並みの學校教育をも施して來たのであつた。其の間にも貞子は、子を生むなら女がよい、男の子なんぞ詰まらない、と言つて夫の言つたことを、全くほんたうだ、其の通りだと思はせられる世間の實例をいくつも見て來た。或る家では男の子が十五六にもなると、隱れてタバコを吸つたり、おでん屋で酒を飲んだりするのを、親はいつまでも知らずにゐたり、學校へ行くと言つては、ステーションの待合室の暖かいストーブの側で、ぐうぐうと晝寢してゐるのをも、親たちはやはり知らずにゐる。早苗のまだ生れないうちに、自分たち夫婦が銀座散歩の折りに見た××大學の豫科生のやうなものが、後から後から生れて來てゐるのを知つては、いよいよもつて男の子に對する恐怖と、自分の子が女であるといふことの幸福とを感ぜずにはゐられなかつた。

女の子にはさう惡いのがない。たとへ惡くなつたとて高が知れてゐる。安心なものだと思ひつゝも、若しや、早苗が學校をずるけ休みして、どこかへ遊びにでも行つてやしないかといふ不安に打たれると、貞子は女中のない家の戸締まりをして、わざわざ學校まで見に行つたことがある。それは早苗が女學校の四年の折りであつた。假にさう思ひ立つ

と、たまらなくなつて、貞子は化粧もそこ〳〵、束髪も結ひなほさないで、あたふたと出て行つた。學校へ行つて、若しや、『箕輪早苗は本日缺席です』とでも言はれたら、どうしやうかといふ心配が先きに立つた。『四年一の組の箕輪早苗をちよつとお呼び下さいませんか』と學校の受付のさら〳〵と砂埃りのかゝつてゐる粗末な机に向つてさう言つた貞子の聲は、妙に慄へてゐた。『あなたは？』と、教師も兼ねてゐるらしい三十前後の鼠色の袴を穿いた婦人の銀縁眼鏡の光りにじろりと見られて、『母でございます』と答へた時、貞子はしみ〴〵、自分ももう女學生の母になつてゐるのかと、今更に考へたのであつた。『暫らくお待ち下さい』と銀縁の眼鏡がまた光る。貞子は自分の女學生時代が、つい昨日のことのやうに思はれて、どうしても女學生を娘にもつてゐる身體だとは考へたくなかつた。銀縁眼鏡の婦人さへ、自分よりも年上のやうな氣がする。

やがて、『こちらへ』と、組長をしてゐるらしい小づくりのよく出來さうな女學生に導かれて、教室と教室との間の長い廊下をば、殆んど二十年も前に嗅いだ學校くさいにほひに鼻の奥を掻き廻はされる氣もちで、靜かなやうな、騒がしいやうな、當間通る葬場の抜け道といふ感じを受けながら、料理實習室の前まで來ると、白いエプロンをかけた早苗の姿が、さながらおさんどんのやうな格好で、ひよつこり、身體を斜めにして立ち現はれた。『何の御用？』と訊くのらいやに他人行儀で、自分の家の内で相對した時のやうに、馴々しくはなかつた。貞子は萬が一にも必要のない心配が、やはりただの心配に了つたのを、十分豫期してゐたゞながら、何んだか嬉しさに涙のこぼれるのをおぼえさうであつた。しかし、『何御用？』と重ねて訊かれると、全く用事のないのに當惑しなければならない。貞子の頭は嬉しくあわてて出した。

『今日は何時まで？』

そんなことを差しあたり問ふた。『五時間ですから、三時には歸れてよ。當番だから少しおそくなるかも知れませんけ

ど。何か御用？』と、三たび訊かれて、貞子は三たび當惑した。まさかお前の顔が見たくなつたからとも言はれない。

『いま、何をしてるの？』

『お料理の實習よ。コロッケを作つたんです。』

『さう。』とうなづいたもの丶、貞子はコロッケなんか自分の家の臺所で、コロッケのおくびの出るほど教へてあるのにと、いさ丶か不平であつた。自分の女學校時代にはそんなものをわざ〳〵學校で教はりもしなかつたのに、今の女學校は食ひしんぼうになつた、と思つたりした。

『お母さん、早く用事をさう言つて下さい。お鍋が焦げつくぢやありませんか。』と、早苗は自分の身體が焦げつくやうに、いら〳〵して言つた。

『別に用事はないの。』と、貞子は娘の顔を覗き込むやうにした。

『あらッ。』と、早苗は呆れてゐる。通りかゝつた同じ年頃の娘たちが、一人二人、少し立ち止まつては、不思議さうに、この光景を見てゐる。開け放した窓から吹き込む冷たい風が、母子の束髪のおくれ毛を等分に撫でゝ行く。

『ぢや、わたし、もうあッちへ行つてよ。』と、早苗は不平らしい顔をして、靴の踵で廻れ右をしやうとする。

『左様なら。』と、よその娘に對するやうな挨拶をして、貞子もくるりと身體の向きを變へた。母子が背中合せに一間はかり離れて立つた時、『あなたのお姉さんでせう』とか、『嘘！あんな若いお母さんないわ』とかいふ囁に似た低い聲を、冷たい風が、貞子の耳まで運んで來たので、貞子は[illegible]顔を赧くした。スタ〳〵と逃げるやうに、長い廊下を通り拔けて、入口で自分の下駄を探すのに手間取つてゐる時、また先刻の組長らしいのが、急ぎ足に靴の音を立て丶追つて來た。

『箕輪さんのお母さまでゐらつしやいますか。長崎先生がお手間を取らせませんから、ちよつとお目にかゝりたいと仰ッしやいました。』と、丁寧に作法で敎はつたとほりの禮をしながら言つた。貞子は少しいやだつた。學校の敎師になんぞ逢ひたくないと思つた、しかし逃げるわけにも行かない。

『あゝさうでございますか。』と言ひながら、鼻緒の切れかゝつた學校備へ付けの草履を穿いたまゝで、土間に突ッ立つてゐた。それはひどく粗末な冷飯草履で、堅い三和土の冷たさが足の裏へ、足袋をとほして滲み込んで來るのをおぼえた。

『どうぞ、こちらへ。』と、組長らしい女學生は命令するやうに言つた。貞子は氣が進まぬながらも、跟いて行かなければならないと思つた。女學生はもう廊下をまつすぐに歩きかゝつてゐる。

『あのう、長崎先生と仰つしやるのは、男の先生でございますか、女の先生でございますか。』と貞子は、小づくりの女學生のメン銘仙か何かのじみな飛白に、深々と取つた肩あげを見詰めつゝ、何んだか口籠るやうな風で問ふてみた。女學生は振りかへつて、微笑を含んだ締りのよい小さな、固い蕾のやうな唇を少し綻ばせつゝ、『女の先生でございます、音樂の。』と、前よりはズツと美しい聲で答へて、またずん／＼と先きに立つて歩いた。塗り立てらしい兩方の壁へ、靜かな靴音がよく響いた。

導かれて行つたのは、職員室ではなくて、二階の白い壁の一敎室であつた。そこに長崎先生といふのが、大きなピアノを控へて、待ち受けてゐた。小づくりなよく出來さうな女學生は、其のまゝすうつと、消えるやうに見えなくなつてしまつた。

貞子も昔しは曾つて、何か職業をもちたいと思つて、看護婦や保姆までを狙つたこともあつたのだが、今日はもうス

ツカリ家庭婦人になつてしまつて、職業婦人を見ると、異つた國の人のやうな氣がする。何んだか妙に氣づまりで、職業婦人には近ひたくないのだ。

『お呼び立てして、失禮でございました。一度お目にかゝりたいと思つて居りましたところへ、丁度お見えになつたとうかゞつたものでございますから。』と、長崎教諭は、さつぱりと打ち解けた樣子で言ひ〳〵ピアノの蓋を開けたまゝ、ピアノを離れて、脚のぐら〳〵しさうな粗末な椅子を貞子に進めた。この人も小づくりな方で、キリヽと引き締つた細おもてに、賢こさうな眼が光つてゐる。年は二十六七であらうか。

『毎度早苗がお世話になりまして、……』と、貞子は世間並みの挨拶を平凡にやつてのけてから、どういふ用事かと、長崎教諭の言葉をつゝましやかに待ち受けた。

『筏輪さんは。』と、早苗のことをさう呼んで、長崎は『音樂の天分を多量に持つてゐらつしやるんでございますよ。將來音樂家としてお立ちになるやうなお考へもありさうですから、御兩親の御意見を承はりました上、わたくしも其のつもりで、及ばずながら、お力添へをしたいと思ひますの！』と言ひ〳〵またピアノの前へ、細い腰をおろした。

『なんでございますか。まだ一向赤ん坊のやうでございまして。』と、貞子はじろ〳〵、長崎の顏を見たら妙に恐ろしいやうな氣がして來るのである。近所の娘たちで、聲がいゝとか何とか言はれて、一生懸命に音樂學校へ入る準備をしてゐたのが、いつの間にか平凡に人の妻となつて、樂譜をめくつた指先きさへ、家計簿のつけ方へ向けてしまつてゐるのを見ると、貞子は氣の毒でならないのである。初めから家計簿へ行つてしまへば何でもないのだが、なまじひ樂譜なんぞに觸れた手で、家計簿はおろか、糠味噌桶の中まで掻き廻はして、樂譜なんぞ忘れてしまつてゐる痛々しさ。どうせ女というものがそういふ風に出來てゐるものとすれば、なまじツかの天才呼ばはりなんぞ迷惑であると、さう思ふのである。

『ほんとにいゝソプラノでゐらつしやるやうです。』と、長崎は少し氣の拔けた調子で言つた。貞子の迷惑さうにしたのを早くも看て取つたからであらう。そこへ早苗が跫音も立てずにひよろりとやつて來た。長崎が呼んでおいたのであらう。『一つお母さまの前で歌つてごらんなさい。』と言はれて、おくめんもなく、姿勢を正して、しやんと立つた。全身に力の籠つてゐるのが、貞子の眼にもあり〳〵と見える。

『オ・ソレミオがいゝでせう。』と、長崎はピアノに手をかけた。

晴々と、太陽は輝く、
嵐去りし、清き空に。
……………………

成るほどいゝ聲だ。この子はまア、今までこんなことを少しもお家で話さないで、……と、貞子は我が娘に對して、輕い不平を感ずるほどだつた。

ナポリの民謠が、南歐の爛熟した果物のやうな芳烈なにほひを傳へて歌はれた。わからぬながらも、貞子はうつとりとなつて、歌ひ了つた早苗が、一禮して立ち去るのをも知らずにゐた。ピアノが其のまゝ引きつゞいて、別の曲を奏ではじめたので、貞子は好きな音樂の世界に、いつまでもさまよつてゐたのである。

『どうも失禮をいたしました。』

ドブッシイか何かの可なりむづかしいものを彈き了つた長崎は、上品な微笑に引締つた顏の紐を弛めて、さう言つた。

『もう、ほかに御用はございませんか。』と、貞子が問ふても、長崎は『えゝ。』とおほやうに頷くばかりであつた。自分

の娘の獨唱を聽かされるために、遠く二階まで喚びあげられたのを不平にも思はないで、貞子は何んだかかう輕々かな氣持ちになつて、わけのわからぬ嬉れしさに追つかけられるやうに、そは／＼と家へ歸つて來たのであつた。買ひ立ての駒下駄は、たう／＼學校の砂だらけの上り口で紛失してしまつて、跣足同樣の冷飯草履で歩かせられたのも、さほど腹立たしくはなかつた。

娘も夫も歸つて來て、親子三人が其の日の晩餐には、特別の御馳走があつた。

三

箕輪の借家住居の二階の廂に近く伸びてゐる松の枝に蜂が巣を作つたのも、其の頃の夏のことであつた。よく昆蟲の生活を人間の生活と比較して話すことの好きな箕輪は、其の點で可なり妻に知識を與へたつもりだつた。中ぐらゐの大きさの蜂が一匹ぶうんと飛んで來て、二階の廂の垂木の側にとまつた。肱掛窓の障子を開けて突ッ立ちながらそれを見てゐた貞子は、『そんなところへ巣を作つても駄目だよ。』と、蜂に向つてさう言つてゐるところへ、早苗も學校から歸つて來て、母に並んで立ちつゝ、口笛を吹いて、蜂を追はうとすると、蜂が飛んで室の内へ入つて來たので、長い袂を振つて拂ひ退けやうとした。

『ほんとによく働くわね。人間のやうに怠けものは居ないんですよ、蜂の社會にはね。』と、貞子は夫からの聽かぢりを其のまゝ娘に傳へた。

『さうでせうか、でも、始終ぶん／＼飛び歩いて遊んでるぢやありませんか。』と、早苗はけゞんな顏をする。學校で習つた動物學の知識では、とても、特別の趣味をもつてさういふことを研究してゐる父親にはもとより、そ

れの聽きかじりの母親にさへ、滅にないのである。教へかたがわるいのか、おぼえやうが不器用なのか、今の學校の教育法では、いつまで經つても、學問が滑らかな常識にならないで、試驗問題の暗記ものといふゴツ〳〵した角張つた範圍を出ない。……といつもよく言ふ雅樹の不平のとほりである。

「あれは遊んでるのぢやありません。巢を作る材料を探してるんです。人間なら材木屋へ買ひ出しに行くところですよ。」と、貞子はこの大きな娘に童話を聽かせるやうな物の言ひかたをした。

「あらツ、お母さん、あすこへ巢を作りかけてますよ。」と、早苗の若い眼は、長く枝を垂れて、窓の方へ伸びて來てゐる松の樹の、手の屆きさうなところに、一匹の蜂のとまつてゐるのを發見したのであつた。

『あゝア、さうです。あすこへ蜂がお家を建てるんです。もう小さいのが出來かゝつてゐますね。』と、貞子は嬉しさうにした。

『今のうちにたゝき落してやりませうか。』と、早苗は勇ましく、學校で薙刀體操をやる時のやうな身構へで、塵たゝきの棕櫚の枝を持ち出した。

『お止しなさい、早苗さん。』と、貞子は友達に物を言ふやうな言葉づかひをして、『折角あゝやつてお家を建てかけたのを、むざ〳〵毀してやるのは可哀さうじやありませんか。蜂のお家はあのとほり紙で出來てゐます。或る西洋人は日本人の家を見て、障子だの唐紙だの、紙がなか〳〵多いので、紙の家だと言つたさうですが、蜂のお家は人間のお家よりも丈夫な紙で出來てゐます。ちよつと突きあたつたぐらゐで破れはしません。あれは雌蜂が方々の柱なんぞから顎で裂き取つて來た製紙原料のパルプをば、唾液で捏ねて紙にした上、貼り付けては巢を拵へて行くのです。もうあの巢は天蓋から小室まで出來て卵を生んでゐますよ。この巢がだん〳〵大きくなると、働き蜂が生れて來て、仕事の方を引き受け

るので、それからは雌蜂が卵を産むことばかりにかゝります。なんしろ、蜂の女は人間の女とちがつて、最初には家を建てる大工と、子を産む役と、生んだ子を育てる乳母との三つを一手に引き受けるんだから、それは〳〵忙しいんです。ぶん〳〵唸りながら遊んでるんじやありませんよ。この蜂の巣だつて、今に働き蜂が生れて、一人前に仕事が出來るやうになると、これへ二階を附けて、だん〳〵に一階〳〵と增築して行きますよ。』と、貞子は近頃自分の家が建てたくて、借家がいやになつてゐるので、いつの間にか蜂の家のことを研究したと見え、夫からの聽きかじりばかりでなく、いろ〳〵のことをよく知つてゐる。

『あゝア。』と、早苗は小さな欠伸を一つして、自分が學校で習つたことゝは、少しちがつてゐるらしい動物學の講義に退屈してしまひ、この上また蜂の話のつゞくことを恐れた。

四

蜂の巣が大きくなるにつれて、貞子が家を欲しいと思ふ望みは、いよ〳〵强くなつた。こんなところへ、蜂が巣を作つてはいけないと言つて、箕輪が小さい松明で、松の枝とゝもにそれを燒かうとした手に縋つて、貞子は狂氣のやうに、『可哀さうぢやありませんか。折角あゝやつてうまく拵へたものを燒いちや。……家とゝもに燒け死にをする蜂の親子のことを考へてやつて下さい。』と、妙に興奮して、淚をこぼさんばかりであつた。蜂が巣を作つて以來、箕輪の家では何んとなく、童話の世界に住んでゐるやうな心もちを親子三人に與へるのであつた。

『蜂でさへ、あゝやつて、自分の家を作るのに、人間が借家住居をしてゐるのは寂しいことだ。』と、貞子は每日くよくよ考へてゐた。それからといふもの、新聞で貸地や賣家の廣告を、大抵は見のがさないやうになつた。夫にも告げず

に、テク／＼と郊外の文化村などを見に行つたりした。

秋になつて、蜂の家に凋落の風がおとづれ初め、働き蜂の死んで行くのが眼に見えるやうになつた頃、一夜の風に松の枝が折れ、蜂の巣は木の枝とゝもに地上に落ち、泥まみれになつて、名も知れぬ小鳥に啄まれてゐた。嵐のあとの静けさ。晴れた日の光がキラ／＼と、むしりとられたやうに落ち散つた木の葉の露を照らしてゐた。

「あゝ詰まらない、折角の蜂の勞働も終ひに空しくなつてしまつたね。」と、箕輪は痛ましさうな顔をして言つた。

「どうも仕様がありませんわ、天災ですもの。人間だつて、天災には敵ひませんもの。」と、貞子は惜しさうに、落ちた蜂の巣へ近寄つて細い竹片のさきで突ついてみてゐる。

「お母さま、お止しなさいよ。螫しますから。」と、早苗は一そう怖さうに、母の背後から他へ首をしてゐる。しかし、滅びた蜂の巣にはもう棲むものがない。卵だけが少しばかり小さく、白く残つてゐる。

「風に吹き落されなくなツたつて、だん／＼寒くなつて來ると、もう駄目なんだ。勞働蜂はばた／＼と死んでしまふし、残つた少しの蜂は永い冬の間に食物がないので、自分の巣の卵や蛹を食つて、次ぎの春までやツとこさと生きてゐるのさ。みじめなものだよ。人間よりはよく働くし、社會組織も進歩してゐるんだが、自然に惠まれることが薄いんだね。」と、箕輪は好きな研究の結果を少しづゝ、通俗的に發表してゐる。

「あなた、蜂でさへ自分の力でお家を作るんですもの、わたしたちだつて、自分の家を自分で建てたいんですわね。」と、貞子はだいぶ意氣込んだ調子で言つて、「ねえ、早苗さん。」と娘を顧みた。

「また始まつた。女といふものは、よく家を建てたがるもんだ。どこへ行つてみても、細君といふものは、みな家を建て論者だから面白い。女と家……どうも縁が繋がつてゐるんだね。」と、箕輪はいつもの通り、どうやら冗談にしてしまは

るので、それからは雌蜂が卵を産むことばかりにかゝります。なんしろ、蜂の女は人間の女とちがつて、最初には家を建てる大工と、子を産む役と、生んだ子を育てる乳母との三つを一手に引き受けるんだから、それは〱忙しいんです。ぶん〱唸りながら遊んでるんじやありませんよ。この蜂の巣だつて、今に働き蜂が生れて、一人前に仕事が出來るやうになると、これへ二階を附けて、だん〱に一階〱と増築して行きますよ。』と、貞子は近頃自分の家が建てたくて、借家がいやになつてゐるので、いつの間にか蜂の家のことを研究したと見え、夫からの聽きかじりばかりでなく、いろ〱のことをよく知つてゐる。

『あゝア。』と、早苗は小さな欠伸を一つして、自分が學校で習つたことゝは、少しちがつてゐるらしい動物學の講義に退屈してしまひ、この上また蜂の話のつゞくことを恐れた。

四

蜂の巣が大きくなるにつれて、貞子が家を欲しいと思ふ望みは、いよ〱強くなつた。こんなところへ、蜂が巣を作つてはいけないと言つて、箕輪が小さい松明で、松の枝とゝもにそれを燒かうとした手に縋つて、貞子は狂氣のやうに、『可哀さうぢやありませんか。折角あゝやつてうまく拵へたものを燒いちや。……家とゝもに燒け死にをする蜂の親子のことを考へてやつて下さい。』と、妙に興奮して、涙をこぼさんばかりであつた。蜂が巣を作つて以來、箕輪の家では何んとなく、童話の世界に住んでゐるやうな心もちを親子三人に與へるのであつた

『蜂でさへ、ああやつて、自分の家を作るのに、人間が借家住居をしてゐるのは寂しいことだ。』と、貞子は毎日くよくよ考へてゐた。それからといふもの、新聞で貸地や貸家の廣告を、大抵は見のがさないやうになつた。夫にも告げず

に、テク／＼と郊外の文化村などを見に行つたりした。

秋になつて、蜂の家に凋落の風がおとづれ初め、働き蜂の死んで行くのが眼に見えるやうになつた頃、一夜の風に松の枝が折れ、蜂の巣は木の葉とゝもに地上に落ち、泥まみれになつて、名も知れぬ小虫に喰はれてゐた。嵐のあとの靜けさ。晴れた日の光がキラ／＼と、むしりとられたやうに落ち散つた木の葉の露を照らしてゐた。

「あゝ詰まらない、折角の蜂の繁榮も終ひに空しくなつてしまつたね」と、箕輪は惜しさうな顔をして言つた。

「どうも仕様がありませんわ、天災ですもの。人間だつて、天災には敵ひませんもの。」と、貞子は惜しさうに、落ちた蜂の巣へ近寄つて細い竹片のさきで突ついてみてゐる。

「お母さま、お止しなさいよ。螫しますから。」と、早苗は一そう怖さうに、母の背後から仲へ首をしてゐる。しかし、滅びた蜂の巣にはもう棲むものがない。卵だけが少しばかり小さく、白く殘つてゐる。

「風に吹き落されなくなツたつて、だん／＼寒くなつて來ると、もう駄目なんだ。勞働蜂はばた／＼と死んでしまふし、殘つた少しの蜂は永い冬の間に食物がないので、自分の巣の卵や蛹を食つて、次ぎの春までやツとこさと生きてゐるのさ。みじめなものだよ。人間よりはよく働くし、社會組織も進歩してゐるんだが、自然に虐まれることが酷いんだね。」と、箕輪は好きな研究の結果を少しづゝ、通俗的に發表してゐる。

「あなた、蜂でさへ自分の力でお家を作るんですもの、わたしたちだつて、自分の家を自分で建てたいんですね。」と、貞子はだいぶ意氣込んだ調子で言つて、「ねえ、早苗さん。」と娘を顧みた。

「また始まつた。女といふものは、よく家を建てたがるもんだ。どこへ行つてみても、細君といふものは、みな家を建て論者だから面白い。女と家……どうも縁が繋がつてゐるんだね。」と、箕輪はいつもの通り、どうやら冗談にしてしまは

うとする。
『だつて、女は先きくのことを考へますもの。』と、貞子はだいぶ不平のやうである。
『お母さま、女だけが將來のことを考へて、男は現在のことしか考へないんですか。』と、早苗が側から不思議さうにして問ふ。
『將來のこと？そんなむづかしいことは知りませんよ。先きくと將來とはちがひます。』と、貞子は熱心に力を籠めて言ふ。
『さうでございますか。』と、早苗は何んだかわからなさゝう。
『先きくといふのは、僕が死んだ時のことをいふんだらう。』と、箕輪は暗い顏になつた。
『さうぢやないんです。』と貞子は少しあわてる。
『いや、さうだよ。一家の働き人に死なれて、遺族が住む家も自分のものでないといふのは、いかにも心細いだらう。しかし、折角苦心をして、多年の勞力の結果をそればかりに注ぎ込み、漸く新らしい家に住んだと思ふと、一二年のうちにはコロリと死ぬ。……さういふ男を、僕はだいぶ見たね。新らしい家は主人を殺すものだ。』と、箕輪はまた妙に滅入り込んだやうな樣子をして言つた。
『それはさういふ廻はり合はせになるんですよ。』と、貞子もちよツと氣になる風を見せたが、忽ち『ほゝゝゝ。』と、陽氣に笑つてしまふ。
『廻はり合はせ？　さうかも知れないね。正直な男がコツくと貯蓄して、家でも建てるほどの餘裕が出來るやうになる頃は、大抵老境に入る。ほつと安心して、新らしい木の香の中で、新らしい疊の上に足踏み伸ばすと、多年張り詰

めてゐた涙に弾みが來て、ポクリまゐるのかも知れない。これも一種の中流階級の悲哀かね。僕はどうもさういふことになりたくないね。』と、箕輪は涙でもこぼしさうな調子で言ひながら、涙の代りに欠伸を一つした。彼れの生活には、ひどい倦怠が來てゐる。いかにも人生に飽きたといふ形である。

『お母さま、お止しなさいよ、お家なんか建てたつて、詰まらないぢやありませんか。家は借家が一番いゝと、學校の家事の先生がさう仰つしやつてよ。』と、早苗がまた側から小さいおちよぼ口を出した。

『だまつてゐらつしやい。お前の知つたことぢやない。』と、貞子は娘を睨む。

『だつて、お家だけが自分のものでも、地面が他人のものぢや詰まらないとお思ひにならないの？たとへ地面が自分のものだつて、わたしなんぞ、いやですね、家や土地を所有したいとは思ひませんわ。自分の所有物は、自分の心と身體だけでたくさん！』と、早苗はませた物の言ひやうをして、ニコリと笑ひながら母親の顏を見た。

『なまいきなことを言ふものぢやありません。だまつておゐでなさい。』と、貞子はまた娘を睨んだ。

『贊成〳〵、われ〳〵中流階級は、家を建てるなんて、そんなのんきな場合ぢやないんだ。脚下に滅亡の火がついてゐる。人間が蜂や蟻のやうに、生活組織を整頓してゐたら、家のことなんぞ問題ぢやないんだが、われ〳〵の社會が蜂や蟻ほどに進歩するのは、まだ〳〵遠い將來のことで、現在の人間社會は先づ中流階級中産階級といふものを潰しにかゝつてる眞ッ最中だ。其の潰されかゝつてゐるわれ〳〵が、金持ちの私有してゐる土の上を猫の額ほど借りて、小さな家を、一生の根かぎりの力で貯へた金で建てゝみたッて、詰まらないぢやないか。先づ〳〵犬に附いてゐる牛蝨か、猫にたかる蚤みたいなものだ。他人の土の上へ自分の小さな家を建てるのはね。……牛蝨や蚤は犬や猫の血を吸ふからまだいゝが、われ〳〵の牛蝨生活や蚤生活は、あべこべに、犬や猫から生血を吸はれるんだからたまらないよ。』と、箕輪は其

うとする。

『だつて、女は先き〳〵のことを考へますもの。』と、貞子はだいぶ不平のやうである。

『お母さま、女だけが將來のことを考へて、男は現在のことしか考へないんですか。』と、早苗が側から不思議さうにして問ふ。

『將來のことゝそんなむづかしいことは知りませんよ。先き〳〵と將來とはちがひます。』と、貞子は熱心に力を籠めて言ふ。

『さうでございますか。』と、早苗は何んだかわからなさゝう。

『先き〳〵といふのは、僕が死んだ時のことをいふんだらう。』と、箕輪は暗い顏になつた。

『さうぢやないんです。』と貞子は少しあわてる。

『いや、さうだよ。一家の働き人に死なれて、遺族が住む家も自分のものでないといふのは、いかにも心細いだらう。しかし、折角苦心をして、多年の勞力の結果をそればかりに注ぎ込み、漸く新らしい家に住んだと思ふと、一二年のうちにはコロリと死ぬ。……さういふ男を、僕はだいぶ見たね。新らしい家は主人を殺すものだ。』と、箕輪はまた妙に滅入り込んだやうな樣子をして言つた。

『それはさういふ廻はり合はせになるんですよ。』と、貞子もちよツと氣になる風を見せたが、忽ち『ほゝゝゝ。』と、陽氣に笑つてしまふ。

『廻はり合はせ？　さうかも知れないね。正直な男がコツ〳〵と貯蓄して、家でも建てるほどの餘裕が出來るやうになる頃は、大抵老境に入る。ほつと安心して、新らしい木の香の中で、新らしい疊の上に足踏み伸ばすと、多年張り詰

めてゐた氣に弛みが來て、ボクリまゐるのかも知れない。これも一種の中流階級の悲哀かね。僕はどうもさういふことになりたくないね。』と、箕輪は涙でもこぼしさうな調子で言ひながら、涙の代りに欠伸を一つした。彼れの生活には、ひどい倦怠が來てゐる。いかにも人生に飽きたといふ形である。

『お母さま、お止しなさいよ、お家なんか建てたつて、詰まらないぢやありませんか。家は借家が一番いゝと、學校の家事の先生がさう仰つしやつてよ。』と、早苗がまた側から小さいおちよぼ口を出した。

『だまつてゐらつしやい。お前の知つたことぢやない。』と、貞子は娘を睨む。

『だつて、お家だけが自分のものでも、地面が他人のものぢや詰まらないとお思ひにならないの？たとへ地面が自分のものだつて、わたしなんぞ、いやですね、家や土地を所有したいとは思ひませんわ。自分の所有物は、自分の心と身體だけでたくさん！』と、早苗はませた物の言ひやうをして、ニコリと笑ひながら母親の顔を見た。

『なまいきなことを言ふものぢやありません。だまつておゐでなさい。』と、貞子はまた娘を睨んだ。

『贊成〳〵、われ〳〵中流階級は、家を建てるなんて、そんなのんきな場合ぢやないんだ。脚下に滅亡の火がついてゐる。人間が蜂や蟻のやうに、生活組織を整頓してゐたら、家のことなんぞ問題ぢやないんだが、われ〳〵の社會が蜂や蟻ほどに進歩するのは、まだ〳〵遠い將來のことで、現在の人間社會は先づ中流階級中產階級といふものを潰しにかゝつてる眞ツ最中だ。其の潰されかゝつてゐるわれ〳〵が、金持ちの私有してゐる土の上を猫の額ほど借りて、小さな家を、一生の根かぎりの力で貯へた金で建てゝみたツて、詰まらないぢやないか。先づ〳〵犬に附いてゐる牛蝨か、猫にたかる蚤みたいなものだ。他人の土の上へ自分の小さな家を建てるのはね。……牛蝨や蚤は犬や猫の血を吸ふからまだいゝが、われ〳〵の牛蝨生活や蚤生活は、あべこべに、犬や猫から生血を吸はれるんだからたまらないよ。』と、箕輪は其

の家庭の生活からも、だいぶ反抗と昂奮とを現はして、唾液を飛ばしつゝ言つた。

『あなたはいつもそんなことを言つて、ごまかしておしまひになるんですよ。家を建てる話になると、きツと、なんだの、かだのと難癖をつけて……。』と、貞子の夫に對する不平は、箕輪が資本家に對する不平よりも强さうであつた。

『いや、これが僕の本音だ。いくら力んでみたツて、始まらないから、とぼけた顔をしてるんだがね。本氣になつたら、職工か農夫まで行かなけれや嘘だからね。この年になつて、ハンマーや鍬をとるのもおツくうだし、第一體力が駄目だよ、油だらけになつたり、土まみれになるのはいゝとしてもさ。』

『おゝいやだ。…………』

『おゝいやだ。…………』

娘と妻とが、口を揃へて、顔を顰める。

『そこでまア、一生をどうにか、中流階級でごまかして通るんだが、資本家と勞働者との挾み撃を食つてるわれ〳〵は、上を向いても下を見ても、頭があがらないし、口も利けなくなるばかりだよ。上からは小便をかけられ、下からは唾液を吐かれるからね。武士と町人百姓との間に挾まつた昔しの仲間は、名は仲間でも、初めから身を落してかゝつてたから、安心だツたが、今の仲間……中流階級は、なまじひ紳士面をして來たんで、よけい始末がわるいんだ。もう〳〵家を建てるなんて、そんなこと言ひツこなし。』と、箕輪は傍の木から葉をむしつて、それを噛みつゝ、ペツペツと青い唾液を吐き出した。

嵐のあとの荒れた庭を背景にして、それ〴〵異つた心持の親子三人は、いつまでも、活人畫のやうに立ちつくした。

五

それから二三年經つうちに、大地震があつたりして、世間の事情も、箕輪の家の都合もいくらか變つて來た。しかし、箕輪の感じてゐる資本家と勞働者との間に挾撃ちにされる中流階級の苦しみは、だん／＼劇しくなつて來てゐる。資本家はひどく勞働者を憚り出して、御機嫌を取るやうにする。勞働者の方でも先づ／＼無事を希ふものが多くて、平常は資本家に好意の眼を向けてゐる。いづれ戰はなければならないと知りながらも、幾分の遠慮をもつて、これに對してゐる。ところが、中流の勤め人や中産の商人は、資本家から輕侮され、勞働者から憎惡されるのだもの、全く立つ瀨がなくなると、箕輪は昔しから考へてゐることが、いよ／＼犇々と身に迫つて來るのをおぼえるのだ。進んで大資本家になることのむづかしさに比べたら、退いて勞働者になる方がまだやさしい。地震のもたらした恐ろしい影響は、勤めさき又は信用の基礎まで根こそぎやられて、僅かの財産も何もまるで失つてしまつたがために、仕方なく勞働者の群に投じた中流階級の人もあつたけれど、新入りといふものはどこでも侮辱される。殊に筋肉の練れてないものに、力仕事は全く駄目だ。馬鹿にされながら鶴嘴を振り上げて、鐵道線路の枕木の下に砂利を打ち込む勞働を半日やつたばかりで、へト／＼になつて、果ては患ひついた『旦那』さへある。白い手はかうなると、どうしたツて役に立たない。新入りの假か勞働者は、多くの先輩やなかまから『旦那』と綽名されつゝ、馬鹿扱ひにされ、のろま呼ばはりを受けたのが落ちで、そこ／＼に足を洗つてしまつた。足だけは洗つても、上る座敷のないのに『旦那』の身はいよ／＼詰まつて、中には妻子を手にかけて縊り殺した上、晝間自分が屁ツぴり腰で働いた鐵道線路に赴き、涙とゝもに汽車を見がけて飛び込んだものもあつた。

時にはまた年をとつた先輩勞働者の中に、親切な同情者もあつて、新入りの『旦那』をいたはりつゝ、何くれと面倒を見てくれたやうなのもあつたさうだが、さうされると『旦那』の方では一そう辛くて、むしろ馬鹿扱ひ、のろま呼ばはりされてゐる方が、氣樂なので、やはり、たまらなくなつて逃げ出すといふやうなことにもなつたさうだ。とにかく勞働者の仲間は、手の白い連中の突然飛び込む場所ではなかつた。さうなると、中流中產階級の落武者の行くべきところは何處か？

箕輪はこんな事實をいくつもいくつも見たり聞いたりしながら、不安と恐怖との幾月かを過した。幸ひに彼れの一家は主人に鶴嘴を振り上げさせるやうな困厄には陷らなかつたけれど、長年住み馴れた借家が、殆んど住むに堪へないほど、破損した。大地の震動は、危く彼れの家を顚覆させなかつただけで、屋根も壁もめちや〳〵になつた。他に借家をもとめても、恰好なのはもとより、不恰好なのも、折りが折りとて見付からない。そこで貞子が多年の望みの自分の家は、ひよんな機會から造らるゝことになつた。

『やつとわたしも、蝸の仲間入りが出來ます。』なぞと、雨が降ればじやじや漏りの天井を見上げつゝ彼女は喜んだ。しかし、どうも大工も左官も忙しい頃とて、設計だけは、箕輪の親友のY工學士に賴んで早く出來てゐたけれど、なかなか着手するわけに行かなかつた。それに土地の決定が容易でなかつたので、だん〳〵おくれて來て、雨の漏る借家の屋根へ職人がドン〳〵とひどい音をさせて上り、剝がれた壁を左官が塗つて、こつちの修繕は漸く成つても、あつちの家はまだ手が着けられない。其うちに、やつとのことで、Y工學士が或る高臺のいゝ地所を見付けてくれた。郊外でもさう不用心でなく、不便でもないといふところで、背後に或る資本家の大邸宅の森林のやうな庭を負ひ、前面には一帶に村落から市街に移らうとする過渡期の人家の集團が展開されてゐる。ほんとうにいゝ地所で、箕輪も貞子も早苗も一

と目見るなり喜んでしまつた。

ところがこのいゝ地所を貸してくれるに就いては、地主から條件が附いてゐた。地主といふのは、其の貸地の背後に立派な邸宅を構へてゐる大資本家で、Y工學士の出入りさきだ。箕輪の家が建つたら、其屋根は大資本家の庭園から見下ろさるゝ位置になる。條件といふのは設計建築の一切をY工學士に任かせて、箕輪の一族には少しも容喙させないといふことである。其の代りに借地料なんぞは、きはめて廉く、殆んど無代のやうであるし、其の他の條件もすべて寛大で、三十ケ年の地上權さへ附いてゐる。しかし、自分の家を建てるのに自分が容喙出來ないなぞといふ、封建時代の暴君が、臣下に對するやうな條件は、これまで長い間資本家の抑壓には馴れ切つて、屈辱を屈辱とも思はないほど、神經の麻痺してゐる箕輪にとつてさへ、甚だ心外であつた。彼は少しばかり憤慨して、借地を止め、延いては家の新築をも見合はせうかと思つた。しかし、たとへもう自分の家を自分で建てたい、自分の家が欲しいとばかり念じてゐる貞子にとつては、この機會を逸すると、もう一生望みを達することが不可能だと思はれたので、地主の條件を受入れて一切Y工學士に任かせ、決して口出しをしないことにして、とにかく家を建てるやうに夫を說き伏せた。

かくして、Y工學士が設計を變へ、材料を運び込んで、いよ／＼建築に着手したのは、冬の終りの頃で、銅板で葺いた妙な形の屋根が森の中腹に光り出したのは、若葉の燃えるやうに繁り出した時分であつた。

いそ／＼と勇み立つ貞子を先頭に、中くらいの悅びを抱いてゐる早苗を其の次ぎに、一向氣乘りもしなければ、興味もなく、やはり人生の倦怠を倦怠のまゝで通過してしまはうとばかり考へてゐる箕輪が、一ばん後から其の新らしい家へ乘り込んで見ると、和洋折衷の細長い家で、ライト式とかを加味した低い屋根の、二階があつても平家にしか見えない、いやに薄暗い感じのする住居――といふよりは、お堂と申したいやうな家であつた。

『君、家といふものは感じが第一だよ。住ひよいとか、便利とかいふことを犠牲にしてしまはなけれや、いゝ家には入れない。法隆寺の金堂だツて、宇治の鳳凰堂だツて、立派な建築は決して便利本位で出來てゐないからね。』と、藝術家のY工學士は得意然として言つた。

今までは居なかつた女中まで置いて、其の新らしい家へ住んでみると、不便と住ひにくさとが、鉢合せをして、箕輪の一家族の上にやつて來た。第一茶の間と酒屋や八百屋の御用聞きの來る勝手口とは十間からの距離があつた。いよいよこれは法隆寺の金堂に住つたつもりにならなければいけないなアと、箕輪は苦笑した。貞子の不平は日毎に劇しくなつて、あとからあとからと、新らしい家の住居としての缺點を發見してゐた。其の發見には早苗もだいぶ力を添へた。

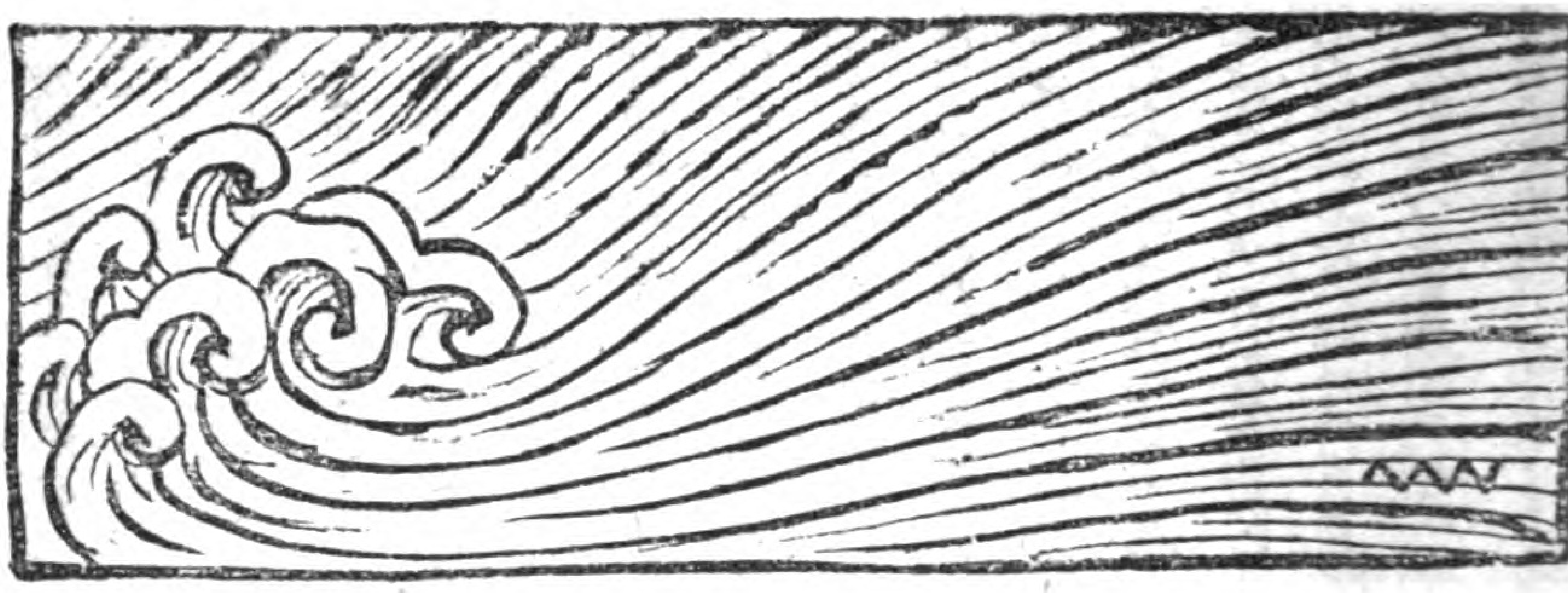
Y工學士は獨り上機嫌で、どうも屋根の銅板に早く緑青が浮かなければ、見た眼の感じがわるいと言つて、醬油を水で薄めた液體をば、屋根に登つて流してゐた。

箕輪の新らしい家は、すべてが背後の資本家の大邸宅のために、盗賊防禦の要塞となり、かねて庭園や茶室からの眺望の美を防げないやうに設計され、建築されたものであつた。

『これが資本家に對する最後の御奉公だ。……』

さう言つて、箕輪は倦怠の生活をつづけてゐた。

——一九二五・五——



珍奇な艶福

宮地嘉六

〇軍港街のことならかなり僕は知つてゐる。何しろ前後十年ぐらゐはあの街でくらしたのだからね……僕にとつては第二の故郷――こんな言葉はあまりつかひたくもないが……何故つて、あまり上品な街ぢやないからね……今だつて植民地風の勞働町だらうからね、僕はあの土地にゐたと云ふことをあまり人に話したくないのだ。

だが僕にとつちやなつかしい土地さ、あの土地で暮してゐる間は僕は隨分あの土地を輕蔑してゐたが、今になつて見るとまんざらでもない。それに子守唄のやうな思ひ出のかずかずがある。さう惡人ばかりが住んでゐた街ではなかつた。いやそれどころぢやない。隨分善良な人間とあの土地で澤山出逢つたものさ――。

面白いことがあつたかと云ふのかね。それやあつたとも。その時分から白首はあの街の名物だつたからねえ……。

それに素人の繁殖と云つたらすさまじいものさ――。未亡人、娘、その他いろい

ろ……今はどうかしらないが、その時分は『雛形饅頭』と云つたものさ——意味が分るまい君には……。素人の方はその饅頭屋の後家婆の繩張りだつたんで、そいつの紹介でなきや駄目だと云ふんでね……肥つちよのその婆はかなり有名だつたのさ——さらけ出して云ふが、僕は婆々の手ひきで未亡人と云ふのにひつかかつてね……。

それから霽丸炎だ……。

一番最初に僕があの土地へやつて行つたのはまだ十三四の頃だつたから清淨無垢さ。

その時分はまだあの街は市になつちやゐなかつた。

劇場だつてありやしなかつた……。

無論活動寫眞館なんてありやしない……。

町だつて今の半分しかなかつたらう——。

尤も芝居はあるにはあつた。その頃の人氣者の壯士芝居と云ふやつなんだ。孰だれの假小舍で一ケ月も二ケ月も打續けてゐたものだがそれで毎日大入滿員と云ふ景氣さ。此の人氣者の壯士役者と云ふやつはなかなか土地の婦人達にはもてたものさ、士官の妻君や相當の商家の若嫁さん達を片つ端からひつかけて大に騷がしたものだが、その爲めに離緣されたと云ふ佐官の妻君などもあつたくらゐだ。どこそこの御用商人の嫁さんが高島五郎の跡を追ひかけて家出をしたとか、良人の遠洋航海中を幸ひに一座の花形の玉川花柳の樂屋に入りひたつて果ては駈け落ちをしたと云ふ士官の妻君の噂話しで一時は持ちきつてゐたものだ。少年の僕等でさへ高島五郎が好きだとか、村瀨清は活潑で好いとか云つてかたを持つたものさ。もみあげを思ひきり長く伸ばして、その頃流行の前さがりと云ふやつに刈つた頭髮や、眉毛のかくれるくらゐ瑤々と長くたらした、その高島五郎と云ふ壯士役者が、花道から出て來ると、高棧敷の婦人客の眼の色は

忽ち變はると云ふくらゐだ：・せりふを云ふ時には、その心持縮れた長髪がゆら／＼と顫へる。そいつがまたなか／＼意氣で、女惚れがすると云ふんだね――――いや今思ひ出すとその頃の壯士役者はかなり低級なものではあつたが・・。なに、その頃の僕かね、未來の造船技師を夢見てゐたやうだ。先づその目的で造船廠の見習工になつたのさ。實地の方で技術を覺えこんでから技手學校へ入ると云ふ目的だね。ところが何しろまだ十四の少年で、職工達の間に交つて見るとろくなことは覺えはしない、それに親のそばから飛び出してあんた土地の空氣にふれると急に野放圖になつて煙草を吸ふことなどをさきに覺え出したんさ……。

工廠へ出ては同じ少年工同志と喧嘩をしては頭に傷を作る。相手の頭にも傷を作る。本部に喚ばれて工廠副官の大目玉を喰ふ。それで工廠内で喧嘩することをやめて、歸りかけに衛門の外で待ち伏せして、そこで取つ組みあひをやつたものだ。全くその時分の僕はかなりの腕白小僧だつた。

或る時はおだてられて、工廠の百噸クレンの頂上でパン一斤の賭で僕は思ひ切つて逆立ちをしたことがあつた。今考へると皮膚がぞつとするくらゐだ。全く少年時代と云ふものは不思議な冒險心が發作するものだ。一つ間違へば十丈もあるクレンのてつぺんから海中へまつ逆さまに落ちることだが、僕は遂にパン一斤を贏ち得て、大に得々たるものだつたが、二度とやる氣にはなれなかつたね。機械體操は小學校時代から得意だつたものさ。逆立や宙返りなどにかなり自信を持つてゐた。今でもやれるかつて、もう駄目だね。年を取つては……。その時分親類の家にゐたが……いや周圍は皆、赤の他人ばかりだ。僕の下宿してゐた家……下宿してゐた家と云ふと大げさだが、まあ下宿してゐたのだ。僕の下宿生活は十四の時から始まつたと云つても好いのだ。僕は豆腐屋にその時分は下宿してゐたのだ。此の豆腐屋――これはまた僕にとつては素的な思ひ出の一つなんだ。一ケ月二圓八十錢と云ふ滅法安い下宿料さ。それで朝も晩も食事には

ろ……今はどうかしらないが、その時分は『雞卵饅頭』と云つたものさ——意味が分るまい君には……。素人の方はその饅頭屋の後家婆の繩張りだつたんで、そいつの紹介でなきや駄目だと云ふんでね……肥つちよのその婆はかなり有名だつたのさ——さらけ出して云ふが、僕は婆々の手ひきで未亡人と云ふのにひつかかつてね……。

それから睾丸炎だ……。

一番最初に僕があの土地へやつて行つたのはまだ十三四の頃だつたから淸淨無垢さ。

その時分はまだあの街は市になつちやゐなかつた。

劇場だつてありやしなかつた……。

無論活動寫眞館なんてありやしない……。

町だつて今の半分しかなかつたらう——。

尤も芝居はあるにはあつた。その頃の人氣者の壯士芝居と云ふやつなんだ。菰だれの假小舍で一ケ月も二ケ月も打續けてゐたものだがそれで毎日大入滿員と云ふ景氣さ。此の人氣者の壯士役者と云ふやつはなか〳〵土地の婦人達にはもてたものさ、士官の妻君や相當の商家の若嫁さん達を片つ端からひつかけて大に騷がしたものだが、その爲めに離緣されたと云ふ佐官の妻君などもあつたくらゐだ。どこそこの御用商人の嫁さんが高島五郎の跡を追ひかけて家出をしたとか、良人の遠洋航海中を幸ひに一座の花形の玉川花柳の樂屋に入りひたつて果ては驅け落ちをしたと云ふ士官の妻君の噂話しで一時は持ちきつてゐたものだ。少年の僕等でさへ高島五郎が好きだとか、村瀨淸は洒落で好いとか云つてか、かたを待つたものさ。もみあげを思ひきり長く伸ばして、その頃流行の前さがりと云ふやつに刈つた頭髮や、眉毛のかくれるくらゐ遙々と長くたらした、その高島五郎と云ふ壯士役者が、花道から出て來ると、高棧敷の婦人客の眼の色は

忽ち變はると云ふくらゐだ‥‥せりふを云ふ時には、その心持縮れた長髪がゆら／＼と顫える。そいつがまたなか／＼意氣で、女惚れがすると云ふんだね‥――いや今思ひ出すとその頃の壯士役者はかなり低級なものではあつたが‥‥。

なに、その頃の僕かね、未來の造船技師を夢見てゐたやうだ。先づその目的で造船廠の見習工になつたのさ。實地の方で技術を覺えこんでから技手學校へ入ると云ふ目的だね。ところが何しろまだ十四の少年で、職工達の間に交つて見るとろくなことは覺えはしない、それに親のそばから飛び出してあんな土地の空氣にふれると急に野放圖になつて煙草を吸ふことなどをさきに覺え出したんさ……。

工廠へ出ては同じ少年工同志と喧嘩をしては頭に傷を作る。相手の頭にも傷を作る。本部に喚ばれて工廠副官の大目玉を喰ふ。それで工廠内で喧嘩することをやめて、歸りかけに衛門の外で待ち伏せして、そこで取つ組みあひをやつたものだ。全くその時分の僕はかなりの腕白小僧だつた。

或る時はおだてられて、工廠の百噸クレンの頂上でパン一斤の賭で僕は思ひ切つて逆立ちをしたことがあつた。今考へると皮膚がぞつとするくらゐだ。全く少年時代と云ふものは不思議な冒険心が發揮するものだ。一つ間違へば十丈もあるクレンのてつぺんから海中へまつ逆さまに落ちることだが、僕は遂にパン一斤を贏ち得て、大に得々たるものだつたが、二度とやる氣にはなれなかつたね。機械體操は小學校時代から得意だつたものさ。逆立や宙返りなどにかなり自信を持つてゐた。今でもやれるかつて、もう駄目だね。年を取つては……。その時分親類の家にゐたが……いや周圍は皆、赤の他人ばかりだ。僕の下宿してゐた家……下宿してゐた家と云ふと大げさだが、まあ下宿してゐたのだ。僕の下宿生活は十四の時から始まつたと云つても好いのだ。僕は豆腐屋にその時分は下宿してゐたのだ。此の豆腐屋――これはまた僕にとつては素的な思ひ出の一つなんだ。一ケ月二圓八十錢と云ふ滅法安い下宿料さ。それで朝も晩も食事には

豆腐だ。僕の大好物の出來たての豆腐をたべさせてくれると云ふわけだ。下宿人は僕の外に非常な大食ひの田舍生れの若者と、僕と同年の、海兵團のボーイをしてゐる少年とだつたが、その外に時々水兵が上陸して來て泊つた。もともと豆腐屋の主人と云ふのが水兵あがりで、六十近い頑丈な大男だつた。海軍から滿期をとつてそれ以來ずつとあの軍港町で豆腐屋をやつてゐると云ふ豆腐屋だ。猫背の大男の主人は朝は三時に起きて豆腐を挽く。ぎつちよん〳〵と、夜中に挽臼を廻す音が僕等下宿人の寢てゐる二階のま下で始まる。だが何の氣苦勞なしに蒲團の中にもぐりこむが最後すぐに寢入つてしまふ少年の僕等は、夜中に挽臼の音で眠をさまされて、それから眠れないなどと云ふことはなかつた。一圓八十錢といふ法外に安い下宿料ではそんな不滿を感じてもゐられないわけだからね。僕等は毎朝四時半に起される。こいつは一番僕には弱つた。一體此の豆腐屋の主人と云ふのは水兵あがりなんで、萬事が海兵規律で行くと云ふ風で下宿人と云へども四時半には起床しなければならぬと云ふのさ。寢坊をすると主人は大へん機嫌が惡い。主人は年の若い下宿人を新兵扱ひさ。そして自分は教官のやうに思つてゐるらしいのだ。

若い時分が一番大切ぢやから……

とよく說教めたいことを云ふのにはこまつたのだが律義な男だつた。彼は非常に勤勉でケチンボで大分金をためこんでゐることを誰でも知つてゐたやうだ。主人は朝の五時迄に出來あがつた豆腐を海兵團の炊事場に手車に積んで納めに行く。何もかも一人でやつてしまふ。尤もかみさんとかしら娘とが手傳ひをする。彼はひどく無口だが氣に喰はぬ時は家中がゆるぐやうな大聲でかみさんや娘を怒鳴る。かしら娘と云ふのは二十五六でまだ一度も緣づいたことのないと云ふ醜婦だ。醜婦と云つてしまふには少々氣の毒だが、まあ醜婦の部だ。親父そつくりの大柄な猫背の女で、むつつりやで、僕はその家にゐる間に一度も彼女の笑つた顏も聲も聞いたことも見たこともなかつた。妙な女だ。てんで誰にも口

をきいたことのないと云ふ不思議な娘だ。それで啞ではないのだから全く變つてゐる……と云つて決して意氣の惡い性質の女ぢや少しもない。朝飯は彼女のお給仕で僕等下宿人は圓い飯臺を取り卷いて油揚げを刻みこんだおみおつけをする。出來たての豆腐をやつこにしてめい〳〵の前に盛り分けた皿を彼女はだまつておくのだ。全く變つた娘と云つて此のくらゐなのはあまりないだらう。彼女はたまに頭を銀杏返しに結ふ。その時だけはいくらか女のやうな、娘のやうな感じがするだけだ。彼女は頭髮を結つてゐると云ふことだけで女に見えた。それほど男に近い感じのする女だ。然し何故か僕は此の娘が好きだつたのだ。と云つて戀をしたと云ふのではないがね……。

ところでかみさんと云ふのは、こいつはなか〳〵さばけ者だつた。頤の少々しやくれた怜悧な顏の四十前後の、ちよつと色つぽい意氣なところのある女だ。親爺とは打つて變つたきさく者で、色白どころではない、少々不精者で首筋のへんには垢がたまつてゐても、頭髮だけは隔日ぐらゐに大髷に結ふと云ふ女だ。風呂にもあまり入らない不精者でゐて、いつも頭髮だけはつや〳〵と、きれいに結つてゐると云ふ女を想像出來るだらう……それで色つぽく見えるから妙だ……。此のかみさんの長女にしては一番の姉娘はあまりに年をとり過ぎてゐると思つたら案のじようさうだ。姉娘は死んだかみさんの娘だと云ふのだ。二番目の娘から下の二人の男の子が此のかみさんに出來た子供だと解ると、例のだんまりやの姉娘が何となく僕には氣の毒で、妙にかう僕でさへ同情してやつたくらゐだ。姉娘の方は朝もおそくまで寢坊をする。そして家族中で誰よりも威張つてゐるのは此の妹娘だ――僕は反感を起さざるを得ないぢやないか……話の中心が狂つた――こんなことを今此所で一々話すのは僕の目的ぢやない――まつてくれ……唯時々上陸してやつて來る若い水兵の一人が、かみさんの色男であつたことゝ、此のかみさんの三人の子供達の顏が皆それ〳〵異つてゐたことを附け加へて置かう……。

さて僕が二度目に○軍港街でくらすことになつたのは兵役を勤めて除隊になつてからだ——もうその時分は○軍港街も以前とはまるで異つてゐた。街の本通りには電車が馳つてゐたし劇場も立派なのが出來てゐて、街は○市になつてゐたのだ——例の豆腐屋だが、もうその家は代が變つてゐて全く知らない人間が矢張り豆腐屋をやつてゐたが、多分あの頑固な以前の主人はぽつくり行つてしまつて、うまくあのかみさんは色男と一緒にくらすことにでもなつたのだらう……と僕はまあ想像するのだ。

兵隊から出て來た僕はまた三年ほどあの街で暮らしてしまつたが、以前と異つて僕はすつかり一人前の男になつてゐたのは無論だ。が兵隊へ行つて歸つてからは頭が少し惡くなつて技手學校の試驗にはまんまと落第する。少々悲觀し始めたところへ妙な事業を思ひついた——と云ふよりも共同でやつて見ないかと云ふ男があつて、僕は少しばかり國の親父をいたぶつて製鹽所を始めようとした——それはかうなんだ……一分ぐらゐの厚みの鐵板を二三枚買ひこんで自分で平釜を造つて、極く經費のかゝらぬやうにして、街から遠く離れた地價の安い濱邊で製鹽所をやらうと云ふのが最初の計畫だつたんだ。鹽田などはなくつても海水を煮沸すれば、僅かの原料で一日に何俵かの鹽がとれると云ふのだから僕は乘り氣になつてしまつたものだ。僕の計算に現れる製産費を差し引いた純利高が正確にあがりさへすれや僕は一二年間のうちに成金になると信じてしまつたのだ。それに、人煙を離れた靜な島陰の海邊で鹽釜を焚いてのんきに日を暮らすことを空想するとたまらなく風流に思へたものだ。が今考へれば馬鹿々々しい話しだ……。

無論それは實現するにや到らなかつたからまあ好かつたわけだが……いやこんな話しは、僕にはいくらでもある。

ところで僕はあの街で除隊後三年ほどくらしたが、その間に偶然經驗した珍妙な艶福について語らう……最初からの僕の話は少々ごた／＼してしまつたが……

それはかうだ――。

僕はその頃、新開町の或る荒物屋の二階を間借りしてゐたが、此の荒物屋の主人の甥と云ふのが僕の隣室にゐた。矢張間借りをして、經理部かどこかへ勤めてゐたやうだ。やつこさんも僕と同樣の兵隊あがりでだん／＼親しくなつて話して見ると僕と同じ砲兵隊にゐたことが分つて、すつかり仲よしと云ふほどではないが、まあ友達になつてしまつたのだ。彼は僕よりは二つほど年上で滿期後一年ほど再役志願をして軍曹まで漕ぎつけてから除隊になつたと云ふのだから、僕にとつては上官のわけだが、こんな頭の男が軍曹までこぎつけたのが僕には不思議に感じられるくらゐだ。で僕は、時々、濱川軍曹殿――とからかつたりしたものだ。彼も僕も砲兵タイプで、體格はひどく似てゐた。男つぶりは少々彼の方が劣つてゐたと云ふことを僕は此所で自惚なしに云ひ得る。彼は黑目の勝つた熱帶地人の感じのする三角型の顔だつた。が軍曹まで叩きあげたほどあつて僕よりはずつと威勢の好い男さ。然し彼も僕も色女一人持たぬ兵隊育ちの獨身者だつたことに變りはないんだ。

ところで或る夜のことだ……。

僕はひとりで近所の風呂屋へ出かけたものだ――いや風呂屋へ出かけたことから話すよりは、風呂からあがつて歸るところから話す方が手取り早い――さて僕が風呂からあがつて湯屋の出口を出やうとする時、丁度近所の煙草屋の出戻娘――年は二十一二――が僕と同じやうに女湯の出口を出ようとしてゐたのだ。その時番臺越しに僕と彼女の視線がぱつたり出合つたと云ふわけさ――。

これがそも／＼僕の珍奇な變調の發端だ。その瞬間僕が直視したことは「ただの目つきぢやなかつた……」と云ふことだつたのだ……。

「あの娘は幾度俺に何かを示したな……」

で僕はその晩は大に自重した。彼女と視線を交はしただけにした。が僕は心中些ならぬ光明を認めたのだ。その夜は直ぐには寝つかれなかつたのは事實だ——。

尤もその煙草屋の出戻り娘はさう大した美人といふんぢやない。が小肥りの、眼のくるりとした色白で、彼女以外にその近所にはあまり目ぼしい娘もゐなかつたから自然日頃から僕の目にとまつてゐたわけでもあつたやうだ。然し萬難を賭して突進しようといふほどにまで思つたことは一度もなかつたやうだ。

が、彼女は俺に思召しがあるな……と思ふとその店に煙草を買ひに行くのがへんに氣がさして妙にぎこちない心理が僕の邪魔をするのだが、と云つてそのまゝにして置くのは僕には惜しいわけだ。

そのうちに一週間は過ぎた……。

然し偶然は再び僕に好機會を恵んだのだ——またしても丁度此の前の時と同様、僕は湯屋の出口を彼女と一緒に出ることになつてしまつた。そして矢張此の前と同様の意味ありげな視線を彼女が僕に一瞬間投げつけたのだからいよ〳〵不思議だ——。

彼女は一足僕よりはさきへ湯屋の出口を出た。僕もその後から出口を出た。すると、湯屋の前の暗い空地のところへ立つてゐる彼女の姿、と云ふよりは彼女の湯あがりのくつきりと白い薄化粧の顔が空地のところから此方を向いて見てゐるのだ——僕はその時急に胸が乾いたやうになつて動悸がどき〳〵打つのだ——何故と云つて生れて始めて出逢ふ事柄を早くも想像したからだ——つまり僕の直感通りに一つの幸福な事柄が自分の前に示されつゝあると云ふその神秘に僕は驚きを覚えたのだ……。

僕はさりげない風で彼女の立つてゐる前を通りかゝつた——その時僕はちよつと彼女を見ただけの度胸[illegible]あつた
のだが、言葉をかけて見ようなどとは思ひはしない、するとどうだらう、彼女の方から笑顏で、おじぎをしたのだから
いよ〱以て不思議だ。

『………………………』

僕はそれに應じてお辭儀をしただけさ。それ以上のことは僕の氣持が硬くなつてゐて許さないのだ。

『あの、私、貴男のお手紙に御返事することをおくれましてすみませんでした。あの、どうぞお惡く思はないで下さいませ……』

全く彼女の言葉は僕には意外だつた。僕はいつ彼女に對して返事を求めるやうな手紙をやつたことがあるのだ……とさつぱり分らない。

『私、お手紙で御返事したいと存じましたけれど、若しかしてお宿の人に知られるやうだとこまりますから、いつそ、折を見てお逢ひしたいと、そればつかり考へてをりましたんですの……。』彼女は云ふのだ。

『はて……』僕はいよ〱腑に落ちないのでまごついてしまつた。が、心を落ちつけた。

『ほんとに、私見たいなものを御親切に思つて下すつて、私はどんなにありがたいか分りませんのですけれど……』

『どうしまして……』僕もとんちんかんなことを答へたのだ。

『あの、およろしかつたら、少しそのへんの原つぱを御一緒に歩きませうか、あなたさへおよろしかつたら、私、今晩は父がゐませんから、少しぐらゐお湯からおくれて歸つてもよろしいんですの……』

『結構です。ではご一緒にその向ふの原つぱのへんまで歩きませう。』僕は委細構はす彼女の云ふまゝになつた。

「あの娘は此度俺に何かを示したな……」

で僕はその晩は大に自重した。彼女と視線を交はしただけにした。が僕は心中尠ならぬ光明を認めたのだ。その夜は直ぐには寝つかれなかつたのは事實だ——。

尤もその煙草屋の出戻り娘はさう大した美人といふんぢやない。が小肥りの、眼のくるりとした色白で、彼女以外にその近所にはあまり目ぼしい娘もゐなかつたから自然日頃から僕の目にとまつてゐたわけでもあつたやうだ。然し萬難を賭して突進しようといふほどにまで思つたことは一度もなかつたやうだ。

が、彼女は俺に思召しがあるな……と思ふとその店に煙草を買ひに行くのがへんに氣がさして妙にぎこちない心理が僕の邪魔をするのだが、と云つてそのまゝにして置くのは僕には惜しいわけだ。

そのうちに一週間は過ぎた……。

然し偶然は再び僕に好機會を惠んだのだ——またしても丁度此の前の時と同樣、僕は湯屋の出口を彼女と一緒に出ることになつてしまつた。そして矢張此の前と同樣の意味ありげな視線を彼女が僕に一瞬間投げつけたのだからいよ〳〵不思議だ——。

彼女は一足僕よりはさきへ湯屋の出口を出た。僕もその後から出口を出た。すると、湯屋の前の暗い空地のところへ立つてゐる彼女の姿、と云ふよりは彼女の湯あがりのくつきりと白い薄化粧の顔が空地のところから此方を向いて見てゐるのだ——僕はその時急に胸が乾いたやうになつて動悸がどき〳〵打つのだ——何故と云つて生れて始めて出逢ふ事柄を早くも想像したからだ——つまり僕の直感通りに一つの幸福な事柄が自分の前に示されつゝあると云ふその神秘に僕は驚きを覺えたのだ……。

僕はさりげない風で彼女の立つてゐる前を通りかゝつた――その時僕はちよつと彼女を見ただけの勇氣は充分あつたのだが、言葉をかけて見ようなどとは思ひはしない、するとどうだらう、彼女の方から笑顔で、おじぎをしたのだからいよ〳〵以て不思議だ。

『……………………………』

僕はそれに應じてお辭儀をしただけさ。それ以上のことは僕の氣持が硬くなつてゐて許さないのだ。

『あの、私、貴男のお手紙に御返事することをおくれましてすみませんでした。あの、どうぞお惡く思はないで下さいませ……』

全く彼女の言葉は僕には意外だつた。僕はいつ彼女に對して返事を求めるやうな手紙をやつたことがあるのだ……とさつぱり分らない。

『私、お手紙で御返事したいと存じましたけれど、若しかしてお宿の人に知られるやうだとこまりますから、いつそ、折を見てお逢ひしたいと、それぱつかり考へてをりましたんですの……。』彼女は云ふのだ。

『はて……』僕はいよ〳〵腑に落ちないのでまごついてしまつた。が、心を落ちつけた。

『ほんとに、私見たいなものを御親切に思つて下すつて、私はどんなにありがたいか分りませんのですけれど……』

『どうしまして……』僕もとんちんかんなことを答へたのだ。

『あの、およろしかつたら、少しそのへんの原つぱを御一緒に歩きませうか、あなたさへおよろしかつたら、私、今晩は父がゐませんから、少しぐらゐお湯からおくれて歸つてもよろしいんですの……』

『結構です。ではご一緒にその向ふの原つぱのへんまで歩きませう。』僕は委細構はず彼女の云ふまゝになつた。

分つた!!僕には此の意外な事柄がすつかりのみこめた。彼女は此度、僕の隣室の軍曹から附文を送られたかどうかしたのに違ひない。そして僕と軍曹とを取り違へてしまつてゐるのだ　と僕は始めて斷定したのだ――『こいつは素的だ……』僕は思はず心に叫んだ『構ふものか』と思つた。此の女は僕と軍曹とを間違へてゐるんぢやない。最初から僕に氣があつたんだ。……そこへ丁度軍曹が附文をしたのに違ひない……それを彼女はてつきり僕からの附文だと信じてゐるいだ……他人の附文で勞せずして女を得るとは妙だ……いやもと〳〵彼女は僕に思召しがあつたのだからこそだ……恐らく彼女はあの軍曹だつたら失望する筈だらう……返事をしやしまい。よろしい……』僕はもうすつかり心を定めたが、それでは何となく他人の戀人を詐取することになるのですまないと云ふ氣持はした。馬鹿を見るのは隣室の軍曹だ……と思ふと何だかおかしくもなるし、氣の毒でもある。が僕は彼女に對して『私は貴女に手紙をあげた覺えはありません……それは多分僕と同じ荒物屋の二階にゐる軍曹が貴女に手紙を送つたのでせう……貴女は僕とその軍曹とを間違へてゐるのです……』さう云つて彼女を驚かせるのもあまり心ないわざだ。で僕は跋を合はた。彼女の云ふまゝに暗い原の青草の中を歩いた――彼女は自分からかう話し出すのだ。

『私だつて貴男のことはその前から始終思つてをりましたんですけれど……私見たやうな者はとてもと思つてあきらめてをりましたわ――それに私の家は兄が戰死しましたもんですから家の相續をする者がなくなつたんですの。そんなことから、緣家が面白くないなら戾つてもよいつて兩親が云ふもんですからかうして家へ戾つてまゐりましたの。父は婿を入れるつもりでゐるやうですが、貴男とお親しくなるにしても、そのことをちよつと申し上げてからでないと――ただめんどうなことはこれだけでございますわ――』

『あゝ、さうですか……分りました……いやなに……それはどうでも……』

『でも私の家のやうなところに婿に來て下さるのはおいやでせう。それはおいやに定つてゐますわ……ほんとにどうしたらよろしいんでせう……』彼女はひとりでそのことに氣をもんでゐるのだ。

『今親類の方からいろ〳〵話しが來てるんでございますの。ですけれど、私、その人をあまり好きでないもんですから……』

僕はどう云つたら好いかこまつた……。

僕だつて煙草屋の婿に行く氣にはなれないのだ――。

『まあ、それは構ひませんわ、唯私の身の上がさう云ふわけでございますから、他に緣づくことは兩親が許しますまいと思ひますの……。父が勝手に婿を定めて入れることになつた時、貴方さへその時に承知して下さればよろしいんですわ……』

軍曹の奴、結婚を申し込んだのだなと僕は分つたのだ――。

『いや、ちよつと待つて下さい。實は僕も貴女にちよつとお斷りして置くことがあるのです。それは貴女に手紙を送つた男は僕ではないと云ふことです。私の隣室にゐる、僕とよく似たもう一人の背の高い男を御存じでせう。あの男が貴女に手紙をやつたに違ひありません……僕はそれを申しおくれてしまつたんです……どうか許して下さい……然し僕も貴女と云ふ人をもと〳〵好きではあつたのです……が僕は貴女に手紙を上げはしませんでした……先刻早く打ちあけねばならぬのでしたが……すみませんでした……』

すると彼女は頰笑んで云ふのだ――。

『まあ、貴男……そんなことおつしやらなくてもよろしいですわ……そんなことをおつしやるもんぢやありません

分つた!!僕には此の意外な事柄がすつかりのみこめた。彼女は恰度、僕の隣室の軍曹から附文を送られたかどうかしたのに違ひない。そして僕と軍曹とを取り違へてしまつてゐるのだ……と僕は始めて斷定したのだ――『こいつは素的だ……』僕は思はず心に叫んだ『構ふものか』と思つた。此の女は僕と軍曹とを間違へてゐるんぢやない。最初から僕に氣があつたんだ。……そこへ丁度軍曹が附文をしたのに違ひない……それを彼女はてつきり僕からの附文だと信じてゐるいだ……他人の附文で勞せずして女を得るとは妙だ……いやもと〳〵彼女は僕に思召しがあつたのだからこそだ……恐らく彼女はあの軍曹だつたら失望する筈だらう……返事をしやしまい。よろしい……』僕はもうすつかり心を定めたが、それでは何となく他人の戀人を詐取することになるのですまないと云ふ氣持はした。馬鹿を見るのは隣室の軍曹だ……と思ふと何だかおかしくもなるし、氣の毒でもある。が僕は彼女に對して『私は貴女に手紙をあげた覺えはありません……それは多分僕と同じ荒物屋の二階にゐる軍曹が貴女に手紙を送つたのでせう……貴女は僕とその軍曹とを間違へてゐるのです……』さう云つて彼女を驚かせるのもあまり心ないわざだ。で僕は跋を合はた。彼女の云ふまゝに暗い原の青草の中を歩いた――彼女は自分からかう話し出すのだ。

『私だつて貴男のことはその前から始終思つてをりましたんですけれど……私見たやうな者はとてもと思つてあきらめてをりましたわ――それに私の家は兄が戰死しましたもんですから家の相續をする者がなくなつたんですの。そんなことから、緣家が面白くないなら戻つてもよいつて兩親が云ふもんですからかうして家へ戻つてまゐりましたの。父は婿を入れるつもりでゐるやうですが、貴男とお親しくなるにしても、そのことをちよつと申し上げてからでないと――ただめんどうなことはそれだけでございますわ――』

『あゝ、さうですか……分りました……いやなに……それはどうでも……』

『でも私の家のやうなところに婿に來て下さるのはおいやでせう。それはおいやに定つてゐますわ……ほんとにどうしたらよろしいんでせう……』彼女はひとりでそのことに氣をもんでゐるのだ。

『今親類の方からいろ〳〵話しが來てるんでございますの。ですけれど、私、その人をあまり好きでないんですから……』

僕はどう云つたら好いかこまつた……。

僕だつて煙草屋の婿に行く氣にはなれないのだ――。

『まあ、それは構ひませんわ、唯私の身の上がさう云ふわけでございますから、他に緣つくことは兩親が許しますまいと思ひますの……。父が勝手に婿を定めて入れることになつた時、貴方さへその時に承知して下さればよろしいんですわ……』

軍曹の奴、結婚を申し込んだのだなと僕は分つたのだ――。

『いや、ちよつと待つて下さい。實は僕も貴女にちよつとお斷りして置くことがあるのです。それは貴女に手紙を送つた男は僕ではないと云ふことです。私の隣室にゐる、僕とよく似たもう一人の背の高い男を御存じでせう。あの男が貴女に手紙をやつたに違ひありません……僕はそれを申しおくれてしまつたんです……どうか許して下さい……然し僕も貴女と云ふ人をもと〳〵好きではあつたのです……が僕は貴女に手紙を上げはしませんでした……先刻早く打ちあけねばならぬのでしたが……すみませんでした……』

すると彼女は頰笑んで云ふのだ――。

『まあ、貴男……そんなことおつしやらなくてもよろしいですわ……そんなことをおつしやるもんぢやありません

わ……』

いやこれには僕もこまつた——。

だが、どこまでも僕は間違だと云ひ張つたのだ。

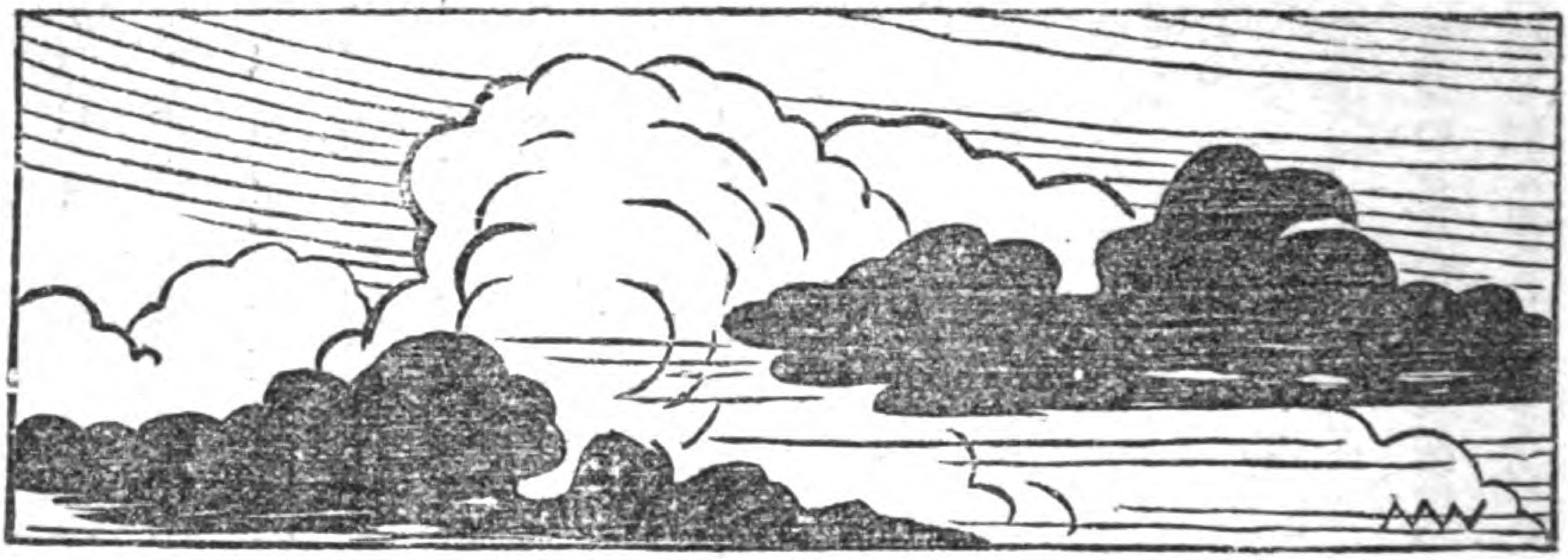
僕にそれだけの良心はあつたのだ。

然し僕の正直は結果に於て何にもならなかつた。と云ふのはたゞその後、彼女から度々誘ひ出しの手紙が來るので、軍曹は僕がすつかり彼女を横取りしたと思ひこんでしまつたのだ。露西亞人流に行けば軍曹は僕に決闘を申し込んだかも知れない。そして僕がピストルでドン……と心臓をやられる方だつたらう……。

軍曹はそれ以來僕に口をきかなくなつてしまつたんだ。

いや若かつた時分は、これでも、そんな珍妙な艶福にも出遭つたと云ふほどの話しだ……。

(大正十四年六月)



泥華

豊島與志雄

しとしとと……じめじめと……毎日のやうに霖雨が降り續く。空も地も、都會の屋根も、室内の家具も、人の心も、凡てが、汗ばんだやうに、濕氣に蔽はれて、ねつとりとしてゐる。が、或る日、或る時――多くは午後遲く、どんよりとした空に、眞黒な雲が寄り集り、渦を卷き、移り動き、混亂して、さーつと大粒の雨を降らし、遠雷の音を響かして……それから、ふいに、何もかも吹き飛んで、からりと空が晴れ、日の光が赤々と射してくる。拭つたやうな蒼空、眩しい光線、輕やかな空氣……何といふ爽快さだ。

――さうだ、何といふ晴々しい爽快さだ！

彼は口の中でさう呟きながら、足駄の齒を軋らして、街路を歩き續ける。うち連つた屋根瓦から、ぽつぽと湯氣が立つてゐる。が、空氣は乾燥しきつたやうに、晴れやかで輕い。街路樹の新芽が、斜陽の直射に堪へかねて、みな首垂れてゐる。

――だが俺の心は……。

全く、彼の心は決して首垂れることがない。どんなに金に窮しても、どんなに日々の仕事が嫌でも、どんなに萬事不如意でも、ふとした心の持ちやうで、ぱつと幻の華が咲き亂れる。そしてその中で、昂然と享樂するのだつた。

――俺の書いた雜文が、ふとした機會に、大家……下らない大家ばかりだが、そのうちの或る優れた人の、眼にとまつて、あの名文の筆者は誰だといふことになつて、そこで俺が見出される……。そして、今の下らない飜譯なんか止してしまつて、一躍文壇の寵兒となつて、多くの愛讀者を得て、……その愛讀者のうちにまた、俺の生活を保證してくれる者が出て來て、俺は何の心配もなしに、ゆつくりと創作の筆を執ることが出來るやうになり、素張らしい傑作を書いて……。ウフツ……。

自動車や自轉車や電車などが、泥を洗はれた街路の上を、威勢よく走つてゐた。

――景氣がよささうだ。俺だつて……今に……電車の中で隣に乘り合した男が、幾萬といふ金のはいつてる鞄を置き忘れて、俺がそれを拾つて屆けると、謝禮として……。いや、それを内緒で着服して、少しづゝ使つてゆくかな。現金だつたら、分りつこない筈だ。それとも……。まあとにかく、不意に大金がはいつてきて、それで世帶を持つて……例へば三原子と……。あいつ、本當に俺に惚れてるのかも知れないぞ。あんなに俺を……。

髮をふり亂したお化のやうな顏が、すぐ眼の前に立止つて、につと笑つたかと思ふまに、ぢつとこちらを覗き込んできた。

「やあ……。」

空想のさなかに、突然落ちこんできた岡田の姿が、赤々とした日の光を受けて、それもやはり幻のやうに見えた。

「何を變な顏をしてるんだい。」

「いや……なに……こんなところで君に逢はうとは思はなかつた。」

「冗談ぢやない。君だつてぶらぶら歩いてるぢやないか。僕だつて……。」

「それがね……」

「何だい。」

「まあいゝや。珈琲でも飲まうか。」

がらんとした四角な室、眞白な卓子、眠さうな女給、珈琲店にとつては逢魔の時とも云へるやうな、午後のひと時、鈴蘭の花がかすかに匂つてゐた。

「どうだい。」

漠然と問ひかけたのが、案外強く反應して、岡田は薄い眉をしかめてみせた。

「やつぱりいけない。三時四時頃まで眠れないんだ。それからとろとろつとするうちには、もう夜が明けきつてしまつて、日の光を見るとまた眠れなくなる。そのくせ一日ぼんやりして……睡眠不足だね、何にも出來やしない。カルモチンだのブロムラールだの、いろんな藥を用ゐてみるが、どうも……。」

「君のは却つて、藥の中毒だね。」

「いやそんなことはない。」

そこで岡田は、神經衰弱とその療法とについて、該博な知識を並べ立て、然し自分のは特別な神經衰弱だと、そんなことを長々と話し初めた。が彼には一向興味がなかつた。鈴蘭の花の褪せた香が、ともするとE重子のことを想ひ起させる。

――醉つた揚句の氣紛れから、此奴を引張つて、あんなところへ探険に出かけたんだが、そこでまあ何と俺は、素敵な寶を見出したことか！

「おい、そんな理屈なんかどうだつていゝさ。それより、どうだい、氣晴しに……。こないだは面白かつたぢやないか。」

初心でもないくせに、それも神經衰弱のせいか、一寸羞恥の色で眼を瞬いて、岡田は眉根を寄せた。

「ちつとも面白かない。」

「だつて君も……。」

「そりやあまさか、逃げるわけにもゆかないから……。然し僕はもう嫌だ。あんなところは。」

「ぢやあ、どんなところが面白いんだい。」

「どんなところつて……。」

「分つてるよ。……まあ何だね、今日のやうに、ぶらぶら往來を歩いてる。すると、腰を据ゑてすー……すーつと走る立派な自働車が通りかゝつて、それが俄に速力をゆるめて、中から白い小さな手が、君の方を手招きする。それでも知らん顔をしてると、岡田さん、岡田さーんつて、甲高なそれでも内緒聲で、呼び寄せられる。そこで、否應なしに自働車の中に引上げられて、そのどこかの美しい令嬢と一緒に、どこかへ出かける……。さういつたのが、君の理想だらう、どうだい。」

「つまらない！」

岡田は一言の下にけなしつけておいて、彼の顔を覗き込んできた。

「君はまだ、そんな馬鹿げた空想を逞うしてるのかい。だから、先刻も往來で、あんなにぽかんとしてたんだね。もう

いゝ加減に止せよ。危險だぜ。神經衰弱のうちに、そんな風な一種があるんだ。君もその一種の神經衰弱ぢやないのかな。」

「へえ！、そんなのがあるのかい。」

「あるとも、妄想性神經衰弱つていふやつさ。よく眠れる方の、たちのいい方なんだが、昂じるとやはり危險だよ。」

「そいつあ愉快だ。よく眠れる神經衰弱なんかいゝね。何もかも忘れちやつて、眠つてさへゐればいゝわけだから。」

「その代り仕事が出來ないさ。」

「なあに仕事なんざあ……。」

然し考へてみると、實際彼はこの頃、何一つまとまつた仕事が出來なかつた。それだけならまだいゝが、始終から何かに囚はれてゐるやうな氣持で落付かなかつた。落付かないと、いつも三重子のことが思ひ出される。

——彼女に逢つて、ゆつくり氣を落付けて、それから勉强だ。

「實は……君に一寸お願ひがあるんだが……。」

「何だ、お願ひなんて。」

「それがね……一寸、月末まで、二十圓ばかり借してくれないか。」

「どうするんだい。またあんなところへ行くんぢやあるまいね。」

「いや。……丸善にね、註文してた書物が來たんだが、馴染が薄いもんだから、金を拂はなけりや渡してくれないんだ。今やつてる翻譯の參考書と外に二三冊で、是非早く見たいんだけれど、月末にならなけりや金がはいらないので、弱つちやつた。月末まで君に立替へといて貰ふと大變助かる。月末になつたら、何をおいても返すことにするから……。

「そんなことなら、どうにかしよう。だが實は僕も懐が淋しくてね……。」

岡田は紙入をさらけ出して見せた。そして自分の小遣に六七圓の小錢を殘して、十五圓だけそつくり彼に渡した。

「有難い。これだけあれば助かる。」

そして彼は、永遠の神經衰弱の友と別れて、表に出た。ぶらぶら歩きながら、懐の中で、岡田から借りた金と自分のとを合して計算してみた。彼女のところに行くのには充分すぎるほどだつた。

――が、もし、今から行つて、外でも歩かうと云はれたら……。いや、まだ當分外出が出來ない身だと云つてゐたから……。それに一寸の散歩くらゐなら……。

考へながら、變に慘めになつてくる氣持を、彼は風に吹かせ日の光に照らしてどうとでもなれといふところへ落付かせていつた。

……………………………

――逢つたら、どんな話をしよう？

だが、話の種なんか何もなかつた。その上美重子は、身體付と眼付と、それから何よりも指先で、美妙な愛撫を示してくれるだけの、無口なおとなしさうな、さういつた女だつた。

軒に硝子の風鈴が一つ下つてゐた。それが風に搖れて、障子にちらちらとおとす影を、彼は……彼女も、默つて見守つてゐることがあつた。

「あなたは、さうね、小說を書く人か、彫刻をやる人か、……そんな商賣の方でせう。あたし、どこかで、あなたの寫

眞を見たやうな氣がするわ。」

「僕もどこかで、お前の寫眞を見たやうな氣がする。」

そして彼は、自分の未來を――有名になつた未來を、默つてる彼女を前にして、空想してみた。

――今日も、あの室に通して貰ひたいが。

或るレストーランで安い定食と共に取つた日本酒の微醉を、さも大袈裟に持てあつかつた樣子をして、他の方へは眼もくれず、ふらふらと歩いていつたが、末吉と書いた圓い軒燈が、新らしい無名のものと代つてゐた。

――おや。

だがつかつかと格子戸の敷居を一步跨いだ。

「三重ちやんはゐるかい。」

そこに、店にゐた女の顏が、横の開扉から半分ばかり覗いた。

「今、ゐませんが……。上つていらつしやいな。」

「どうしたんだい、三重ちやんは。」

「あのう……叔父さんの病氣で、いつてゐますのよ。……上つていらつしやいな。」

「さう。ぢやまた來よう。」

後から呼びかけられるのを、默つて彼は飛び出してやつた。

――叔父さんの病氣？　おかしいな。

山口の生れとかで、神戸に長くゐたことがあつて、東京には半年前に來たばかりなので……東京に身寄りの者がある

かどうか、そこまでは聞かなかつたが……何でも頼りなささうな話だつた。それでも、場所柄に不似合な、しとやかな物腰と美貌とは、多くの男を惹きつけてるに相違なかつた。

「名指しのお客があれば、僕はすぐに歸るよ。」鷹揚にそんなことを云つてる彼を、彼女は無理に引止めて、階下から呼ばれたのに降りていつて、間もなくまた上つてきて、彼の方へ甘へかゝつて、彼が本當に立上るまで一時間ばかり、彼の相手になつたのだつた。そんなことを考へてみると……。

――馬鹿、馬鹿！

二人並んでは歩けないくらゐの狹い通りで、兩側の小さな覗き硝子から、女の眼が至る所に見張かれゐた。

「ちよいと、ちよいと……あなた！」

――三重子がゐなけりや、こんな奴等に……。うふーんだ。

けれども、澄し切つて色男ぶつて、傍目もふらずに歩いてゐた彼の心へ、ぽつり……ぽつりと、それらの視線の汚點が印せられていつた。

――どこかへ住み替へたんぢやないかしら。もしさうだとすれば、彼女は近眼だといつてたから……。

いつのまにか彼は、軒毎に覗き込んで歩いてゐた。

障子の腰硝子に張つた紙の、二三寸の間から見えてる眼なので、それだけでは人柄は分らなかつたが、どれも皆相應に美しく見えた。けれど、暫く默つて立止つてるところへ、ひよいと障子を開けてつき出される顏は、着ぶくれに肥つた肌目の荒い、或は痩せて生氣のないかさかさの、ひどく醜いものばかりだつた。

「ねえ、あなた、ちよいと。」

彼は無言のまゝ幽鬼のやうに、飄然とさ迷ひ歩いた。

——肉を鬻ぐは悲慘である。然し俺のやうに、つまらない雜文を賣つて、精神を鬻ぎ魂を鬻ぐも、同樣に悲慘ではないか。そしてこの悲慘のうちに、美を求めて彷徨するのは、永遠の……。

さすがに、求道者といふ言葉は口の中に出しかねて、彼は憂欝な氣分に陷つて、その狹い小路を、ぐるぐるといつまでも廻り歩いた。

沖の鴎に汐時聞けば、わたしや立つ鳥……わたしや、立つ鳥……

どこかで、醉つ拂つた而も美しい聲が、あたりの空氣にふさはなく響いてゐた。それを、ひやかしの客が——勞働者や學生や會社員や店員などが、三々五々打連れ立つて、騷々しく打消していつた。

そんなのを、薄暗い軒影に佇んでやり過しておいて、隙間を見てつゝつゝと、彼は泳ぎ歩いた。煤けた軒燈の光で、何度も同じ場所を通つてるのが、夢のやうに意識された。

——何といふ無數の眼だ。而も眼だけ見れば、どれもこれも何といふ美しさだ。その中にあつて、彼女の眼は一際美しかつた。それが、それが、どこへ行つたのだ。……その、見えなくなつたのへ、その邊でひよつこり出逢つて……。

また空想の華が咲きかけて、それがぽつと燃えつくすと、彼は急に疲勞を覺えた。そして、彼女がゐた家の、裏合せの家へ、せめてもの心やり……といふほどのこともなく、呼びこまれてしまつた。

二階の四疊半、浮世繪の安つぽい石版刷が一面に張り散らしてある。小屏風が一つ、小さな鏡台、その横に彼はぐつたりと寢そべつた。

——あの時、彼女に名前を敎へておいたら……。

このまゝ足を絶たうか、それとも……と深入りしさうなだけに考へついて、兎も角暫く遠退くために、靜岡へ一ケ月ばかり行つてくゐなど〻、口から出まかせの嘘を云つたのを、彼女は本氣に受けて、何かと話をしてゐるうちに、彼の紙入を引つたくつて、中の名刺を取上げようとした。がそればつかりは、彼も躍氣となつてむりやりに、彼女の手から引つたくつて渡さなかつた。

「名前を知らしていゝ時が來れば、僕の方から知らせるよ、乾度。がまあそれまでは、野暮なことを云ひつこなしに、ねえ……。」

首肯（うなづ）いた彼女の眼付が、思ひなしか淋しげでまた美しかつた。

——あの時から、何かあつたんだな。俺が名前も知らさなかつたのを怨んでゐるかも知れない。俺に居所を通知したがつてゐるかも知れない……。だが、向ふでも俺を想つてゐてくれて、俺の方でもかうして探しあぐんで……それも一寸いゝなあ。

空想のさなかに、足音低く階段を上つてきたのは、少し出目氣味のくるりとした顔付の、十六七の小娘だつた。

「いやに靜かだねえ。」

「えゝ、女がゐないもんですから。」

「女がゐないつて……。」

「だから、あたし、こないだから店に出てるの。」

言葉附きで素人のやうで、遊んでゆけとも勸めないで、身の上話なんかを初めてしまつた。小さい時から家の養女で、近々女が二人ばかり來次第に、姉さんは市川の方へ引越す筈で、後はお父あんと二人きりになる、なんかつて…。

「酒を飲ましてくれないかなあ、麥酒でもいゝから。」

無理だとは思つたが、云ひ出してみると、彼女は素直に立上つた。

「聞いてきますわ。」

麥酒と林檎、それを持つて彼女と共に、色の黒い朴訥さうな老婢が上つてきた。

「やあ、婆やさんか、一杯いこうぢやないか。」

「濟みませんねえ。」

彼女――まさ子は酒はのめなかつたが、婆やは飲める口だつた。そして二人を相手にお酌をしてゐると、姉さんといふ人もやつて來た。

「こんなところ、お初めてなんでせう。」

「どうして……。」

「いえ、たゞお見受けしたところ……それに、お酒なんか召上つて……。」

人馴れた愛相笑ひで、つけつけと見入つてきた。

「へえ、酒を飲んぢやいけないんですか。」

「いけないつてわけはありませんが、これが……やつぱりねえ、長くお酒なんか召上つてゐると、それ、商賣の方がねえ……。それですから、どこでも餘り差上げるのを嫌がるんですのよ。でも家では、この子はまあ家の者同樣ですし、他に誰もゐませんから、でゆつくりなすつて……。」

白粉焼けのした浅黒いきりりとした顔立で、どんなところへ出てもたじろがない、そして人を外らさない眼付……ど

こかで見たやうな顔だと彼は思つた。がどうしても思ひ出せなかつた。世間によくある型のやうでまたさうでもない
そこに妙に親しみが持てた。

婆やは降りていつたが、彼は「姉さん」と快く話し續けた。まさ子は默つて煙草を弄んでゐた。

「この通り、まだねんねで仕樣がありませんのよ。」

「そこがいゝんですよ。」

二人の視線を受けても、彼女はたゞうそうそと微笑んでゐた。

――この麥酒が無くなると同時に俺は歸らうかしら。三重子……。この「姉さん」ならば彼女と代へてもいゝが……。

いや、いや……俺は淋しいんだ。

そして彼は、コップの麥酒を一息に飲み干して、「姉さん」に差した。

「あら、わたしはもう……。」

「まあ、思ひ差しつてこともあるから……。」

とんと餉臺の上に肘をついて、煙草を吹かすと、煙が眞直に天井へ舞ひ上つていつた。

……………………

――俺はなぜも一度あすこへ行かなければならないのか。性慾のためなのか、未練のためなのか。いやそんなものゝためではない。俺の性慾はもう、どういふことにもさほど興味を持てないくらゐに、減退してゐるではないか。それからまた俺は、彼女をたゞ記憶の中にしまひこんで、それを美しい幻で飾るために、彼女がどうして何處へ行つたのか、

そんなことは一切分らずに、このまゝ永久に再會しない方を、望んでゐるではないか。その上、これからまた行つたとて、無駄に終ることは明かだ。一度で性懲りもなく、再びのこのこ出かけていつて、はつきり云ひ渡されたのだ。もう三重ちやんはゐませんと、そしてまた、戻つても來ませんと。どんな奴が云つたのか、その顏は見なかつたが、その聲ははつきり耳に殘つてゐる。それなのに俺はまた、あの邊を未練氣に去りかねて、誰も聲をかけてくれる者がなくなつたほど、皆に姿を見知られるまで、犬のやうにうろつき廻つた。しまひには、まさ子の奴に見付つて、婆やや「姉さん」までが出て來て、危く引張り上げられやうとされかゝつた間際に、ふいに氣持を變へて、顏を赤らめ額に汗をかいて、むりやりに逃げ出してきた。何といふことだ。それが三重子への心中立とでもいふのか。それならば、何でまたこれから出かけていつて、而もあの家へ、彼女がゐたあの室へ、他の女と共に上らうといふのか。其處に彼女の殘り香を、息吹きを、嗅ぎ出すつもりなのか、他の女を相手にして……。それほど俺は彼女に、彼女が居なくなつた後になつて、打ちこんでしまつたのか。いや、俺にとつて彼女はたゞ、通りがかりに一寸心を惹かれた、路傍の花に過ぎないではないか。もし彼女が今もなほあすこにゐたら、俺はもう恐らく、彼女に興味を失つてしまつてるだらう。あんなところの女にしては珍らしい、とたゞそれだけのことなんだ。それを、また出かけてゆく。彼女がゐないことを知つて三度も出かけてゆく。何故だ、何故だ。馬鹿！

それでも彼は、やはり行かずにはゐられなかつた。

――最後にも一度……。

さう考へこむと、理屈はどこかへ吹き飛んでしまつて、俄に悲愴な氣持になつて、眼の前がぱつと輝いてきた。

――さうだ、岡田に何もかも打明けて、相談して、金をも一度借りてゆかう。

どんよりと曇つた空の下に、何もかも佗しかつたが、その佗しいのが、彼の氣持を深いところへ突き落して、變に棄鉢にならしていつた。

「實は　僕は君を欺いてゐたんだ。許してくれ。」

岡田の顏を見ると、彼はすぐにさう切り出した。そして三重子のことを打明けた。

「で、最後にも一度僕は行つてみたい。彼女がゐないことは分つてゐる。分つてはゐるが、も一度行かなくつちや氣が濟まないんだ。もし……そんなことはある筈はないが……もしひよつとして彼女に出逢つたら……その用心に、金を少し借してくれないか。僕の一生の願ひなんだ。」

「へえー、何だか君の話は可笑しいぢやないか。」

岡田は腕を組んで、上目使ひに考へ込んでしまつた。

「ちつとも嘘は云つてやしないよ。」

「だつて君、君達は四五回逢つたきりで、それに、向ふぢや君の名前も知らないんだらう。」

「あゝさうなんだ。それが僕のつまらない氣持から……人生は一種の旅だ、といふ旅情から出たことでね……。行くたんびに名前と處とを知らしてくれとせがまれたが、僕はそれをひし隱しに隱してしまつた。愈々といふところまで氣持が進むまでは、たゞ通りがゝりの遊客として、別るればすぐに、お互に忘れてしまう、さういつたことに、僕は興味といふか趣味といふか……とにかくそれだけの關係に止めておきたかつた。向ふぢやそれを淋しがつてゐた。僕も淋しかつた。然しお互に心を打明けないで終つたんだ。眞心を打明け合ふなんて、あゝいふところの習慣に反することだからね。だから、それだけ、後の惱みも多いんだ。彼女が僕を想つてくれることは確かだ。僕も……實際この頃の氣持では、

彼女なしには生きてゆけないやうな氣がする。堪らなく淋しいんだ。」

「光つて何だか……どうも變だね。また例の空想の産物ぢやないのか。」

「いや、決して……。このまゝぢやとても駄目だ。も一度、最後にも一度行つてきてみるんだ。そして、ゐすこで、他の女と、この氣持をめちやくちやに踏み躪つて……さうすれば、もう僕は立派に辛棒してみせる。何もかも泥の中に叩きつけてしまうんだ。そして生き返るんだ。」

云つてるうちに、彼はいつしか涙ぐんでゐた。同感とも憐れみともつかない色を、まざまざと表はしてきた岡田の様子が、彼の胸に觸れた。

「それほどなら、金は丁度少しばかり手にはいつたのがあるから、立替へてあげやう。だが、用心しなけりやいけないよ。君は實際めちやなんだから……氣持の上でね。」しみじみとした調子で、岡田は眼を伏せて云つてゐた。「ともすると、空想で樓閣を築き上げて、その樓閣が崩壊する時には、自分自身をその下に生埋めにしてしまうやうなことが、よくあるぢやないか。君の様子を見てると、空想に生きてるのか現實に生きてるのか、分らなくなる時があるよ。僕のやうに、現實ばかりに囚はれても神經衰弱になる恐れがあるが、君のやうでもまた危険だよ。……君がそれほど思ひつめてるのなら、間違はあるまいけれど、それだけ價値のある女かどうか、また向ふでも君を本當に想つてるかどうか、その邊をよく考へなくちやいけないよ。かう云つたからつて、僕は君に反對するつもりぢやないが、何しろ、相手は素人の女とは違ふんだから……。」

「それは僕もいろ／＼考へた。けれど、いくら考へても、どうにも仕様がない。もう僕の氣持はどうにもならないんだ。僕は君をあんなところへ連れ出しておいて、自分がこんなことになつてしまつて、面目ないんだけれど……。」

「そんなことはどうだつていゝさ。まあその女に再會しようとすまいと、それは運命に任して、早く今の氣持から脱することだね。」

「あゝ、たゞそれだけだ。」

彼は涙の落ちさうになる眼を瞬いて、感謝の眼附を擧げると、岡田はずつと窓の外を眺めてゐた。曇つてゐるのか晴れてるのか分らないほどの、一色にどんよりとした空が、低く重く垂れてゐた。その影を受けてか、岡田の顔はひどく色艶がなく、薄い長い髪の毛や薄い眉毛が、如何にもしよんぼりとしてゐた。

「君にまで心配をかけて濟まないね。」

「いや。君の話を聞くと、僕はいろんなことを考へさせられて、つまらない昔のことまで思ひ出しちやつてね……。」

「許してくれ。……だが、この頃神經衰弱の方は……。」

「どうもね、この天氣なものだから。」

「さうだ、からりと晴れるといゝ。」

「然し、晴れたら、君の神經衰弱の方がひどくなりさうだね。」

「例の妄想性とかいふ奴かね。」

「うむ……まあ……。」

「さうかしら。」

皮肉でも何でもなしに、二人はそんなことを話し合つて、親しい友情の氣持で見合つた。そして彼は、その神經衰弱の友に對する感謝の念で一杯になつて、同時に何だか形態の知れない心地になつて、默りこんでしまつた。

「今日にでも出かけるのかい。」
「あゝ、さうしやう。」
然し、何だかそれほど氣が進まなくなつてゐた。
——變だな、どうしたのかな。
彼はぼんやり曇り空を仰いだ。そして力なく立上つた。

…………………………

夜になつて、細かな雨が降りだした。九時過ぎからは、本降りらしい調子になつた。
窓の外の手摺りにつかまつて、片手を軒より先に差出して見ると、掌へ小粒の冷いのがしきりにかゝつた。
「困つたな。」
獨語して彼は、暗い空に雨脚を透し見た。
さあーつと息をつくやうに降つては、またしとしとと降り續く、小止みもない雨だつた。それが凡てを濡らしてしまつた。

——どうにでもなれ。
窓に腰をかけて、彼は兩手に頭を抱へた。
何といふことだつたらう。……足早に末吉の家の方へ小路を辿つてくると、そこの一方に、ぽかりと廣い空間が口を開けてゐた。家が一軒壞されて、古い材木が片側に積んであつた。顧みると、末吉の軒燈は新らしい無名のものに、

「そんなことはどうだつていゝさ。まあその女に再會しようとすまいと、それは運命に任して、早く今の氣持から脱することだね。」

「あゝ、たゞそれだけだ。」

彼は涙の落ちさうになる眼を瞬いて、感謝の眼附を擧げると、岡田はぼつと窓の外を眺めてゐた。曇つてゐるのか晴れてるのか分らないほどの、一色にどんよりとした空が、低く重く垂れてゐた。その影を受けてか、岡田の顔はひどく色艶がなく、薄い長い髪の毛や薄い眉毛が、如何にもしよんぼりとしてゐた。

「君にまで心配をかけて濟まないね。」

「いや。君の話を聞くと、僕はいろんなことを考へさせられて、つまらない昔のことまで思ひ出しちやつてね……。」

「許してくれ。……だが、この頃神經衰弱の方は……。」

「どうもね、この天氣なものだから。」

「さうだ、からりと晴れるといゝ。」

「然し、晴れたら、君の神經衰弱の方がひどくなりさうだね。」

「例の妄想性とかいふ奴かね。」

「うむ……まあ……。」

「さうかしら。」

皮肉でも何でもなしに、二人はそんなことを話し合つて、親しい友情の氣持で見合つた。そして彼は、その神經衰弱の友に對する感謝の念で一杯になつて、同時に何だか形態の知れない心地になつて、黙りこんでしまつた。

「今日にでも出かけるのかい。」

「あゝ、さうしやう。」

然し、何だかそれほど氣が進まなくなつてゐた。

——變だな、どうしたのかな。

彼はぼんやり曇り空を仰いだ。そして力なく立上つた。

……………………

夜になつて、細かな雨が降りだした。九時過ぎからは、本降りらしい調子になつた。

窓の外の手摺りにつかまつて、片手を軒より先に差出して見ると、掌へ小粒の冷いのがしきりにかゝつた。

「困つたな。」

獨語して彼は、暗い空に雨脚を透し見た。

さあーつと息をつくやうに降つては、またしとしとと降り續く、小止みもない雨だつた。それが凡てを濡らしてしまつた。

——どうにでもなれ。

窓に腰をかけて、彼は兩手に頭を抱へた。

何といふことだつたらう。……足早に末吉の家の方へ小路を辿つてくると、そこの一方に、ぽかりと廣い空間が口を開けてゐた。家が一軒壞されて、古い材木が片隅に積んであつた。顧みると、末吉の軒燈は新らしい無名のものに、

この前通り灯がついてゐたけれど、家の中はひつそりとして、女の顏はおろか、人の氣配さへもしなかつた。佐藤といふ新らしい表札が、軒に仄白く浮出してゐた。彼はその軒下に立止つて、降るとも知れぬ霧雨を避けながら、ぽかんと開けた空間、その上の眞暗な空、それから眼を伏せて、木片や礎石の散在した地面、片隅の古材木、などを眺めやつた。素見の客達が、すつすつと通り過ぎていつた。家の中はやはりひつそりとして、同じく取壞されるのを待つもの丶やうだつた。

――何といふ不運なことだ。

長い間たつてから、彼は歩きだした。がもうそこいらをうろつく氣にもなれなかつた。まさ子のゐる家へ飛びこんでしまつた。床の中で、ふいに、さあーつといふ雨音が耳について、それからいつまでも離れなかつた。

「困つたな。」

固く屈めた背中に頸筋から、冷々とした空氣が流れこむやうな心地だつた。

着物を換へ化粧を直して、まさ子が階下から上つてきた。

「先刻婆やさんが歸つてきて、お酒の仕度が出來たさうですから、召上つていつて下さいつて……。」

「え、これから……。」

「でも、仕度したんですつて。」

「ぢやあ、飮んでゆくかな、雨止みを待つて。……まあおはいりよ。」

襖の端につかまつて立つてた姿を、變にくねらして、微笑しながら其處に坐つた。」

彼も何だかまぢまぢとした面映い氣持で、顏を外向けて默つてゐた。

そこへ、銚子と一寸した小皿とを持つて、「姉さん」が上つてきたけれど、彼は氣乘りがしなかつた。逆の順序になつた酒が、縺拙だつたばかりでなく、わざと順序を違へて手早く事を運んだ仕打も、酒なんかを求めた自分のやり方も、何もかも呑みこんでるといつた親しげな恰利な眼付も、凡てが調子外れで落付かなかつた。

――何で俺はこんなところへ飛び込んで來たのか。これが、最後にも一度……の場面か。お目出度く出來上つてるぞ。

「とても止みさうにありませんから、ごゆつくりしてゐらつしやいな。」

「いや、さうしてもゐられないし、小降りになつたら……。」

腰を浮かすとも落付けるともなく、餉台の端にかぢりついて、ぐいぐいと杯を重ねた。

――岡田の友情を俺は無にしてしまつた。だが、俺もきたあの時、どうして涙ぐみまでしたんだらう。何が本當で何が嘘か、それともまた、凡て本當か、凡て嘘か……。三重子……それも馬鹿げきつてゐる。

「今日あたりいらして下さろかと、今朝もさう申してゐましたのよ。こないだの、それ、お茶も召上らないで、表で逃げていつておしまひなすつた、それの……この子の怨みだけでも、きつとあなたをお引き寄せするつて……。だから今日は、ごゆつくりね……。」

「そこで、酒をもつと貰ひませうか。」

意地惡く出てやつたが、やつぱり氣持は落付かなかつた。一寸見せた婆やの顏も、初めの時ほど面白くなかつた。

「ほんとに、少し急ぐんですから。」

「さうですか。ではお傘をお持ちなすつて……。いゝえ、どうせひどいんですから、お捨てなすつて構ひませんの。」

俥も少し氣がさすので、傘を貰つてゆくことにしたが、さあつと頭から雨に降られてもみたかつた。

…………………………………………

端の方が二ケ所ばかり裂け破れて、古ぼけた煤けたものではあつたが、それでも蛇目の傘の中は、小さなまとまつた世界だつた。周圍に落ちる雨脚が、燈火にすかすときらきらと、銀糸の緣縫をその世界に施してゐた。兩の手先に袖口を持ちそへて、傘の柄にすがり肩をすくめて、駒下駄を注意深く泥濘の中に運ぶ、その一足毎に、ゆらりゆらりと彼一己の世界が搖いだ。

何もかも遠くなつて、雨に煙つてぼやけてゐた。三重子の姿も、夢の中にみるやうにぼんやりしてゐた。――これでおしまひだ。そしていつか、俺が有名になつて、素晴らしいものを書いて、俺の寫眞が新聞や雜誌に出るやうになると、彼女は……いつぞや云つてたやうに、その寫眞を見て、俺のことを思ひ出して、俺の立派な邸宅に訪ねてくる。そして二人は、昔の淡い思ひ出を、記憶の片隅から探り出しては、ぽつりぽつりと追懷の話に耽る。その時、俺がかうして、彼女を尋ねあぐんでたことを話したら、彼女はどんなに感動するだらうか。或は眉根一つ動かさないで、善良な微笑を浮べるだけだらうか。……俺達はもういろんな經驗を積み、年を重ねて、容易には心を動かさないだらうが、それだけまたお互に、しつかりした親しい繋がりを感ずるだらう。そして互に賴り合つて、俺は彼女を保護してやり、彼女は俺に信賴して、靜かな平和な友情を結ぶだらう。丁度、互に意中を明かさないで而も互にそれと知り合つてる、戀人同士の晩年のやうに。

空想は幻影ほどのはつきりした形を取つて、蛇目の傘の中に、次から次へ展開されていつた。

だが……してみると、俺は彼女に戀してるのかしら？……いやいや、彼女は俺にとつて路傍の花に過ぎないんだ。そ

れならば、これはまた何故の幻か。……自惚れの甘つたるい、何といふ俺自身だ。高が賣笑婦ぢやないか。

泥濘の中に踏み躙られたやうな心地で……それでもともすればまた幻想の華が咲き亂れさうな心地で……彼は身の置き所がないやうに肩をすぼめて、たゞ一本の傘の柄を握りしめて、眼を伏せながら歩いていつた。

迷宮のやうな一廓を出て、少し行くと、深い堀割のふちだつた。夜目にもそれと分る工場の建物が、對岸にずらりと並んで、油ぎつたどろりとした水が、滿潮時の靜けさに、ゆらゆらと灯影を映してゐた。

それが、頭にこびりついて離れなかつた。

電車の中で、體に疲が出てきて、ついうとうとしかけては、またはつと眼を覺した。がやはり、どろりとした堀割の水のやうに、氣持が重々しく淀んでゐた。

立つてゐる者は四五人きりない、わりに空いてる電車だつた、見渡すと、みんな退屈さうな沒表情な顔付に、眼ばかりぎらぎら光らしてゐた。が……向ふ側の先端に、傘の頭に兩手をのせて、しよんぼりと……。

——おや！

ぢいつと眼を据ゑると、それがやはり三重子だつた。

いつもの錦紗の着物ではなく、大柄な銘仙らしいのを着流してはゐたが、髮にぴんと差した羽根形の櫛から、俯向けてる横顔から、一寸見は痩せ形だが、實はずつしりとした重みの固肥りな、健康さうな身體附まで、どう見ても彼女だつた。

——ほゝう……。

あれほど探し廻つてたのに、遠目に見付けてみると、自分でも不思議なほど彼は落付いて、何だかかう氣持の脫け殼

……………………………

端の方が二ケ所ばかり裂け破れて、古ぼけた煤けたものではあつたが、それでも蛇目の傘の中は、小さなまとまつた世界だつた。周圍に落ちる雨脚が、燈火にすかすときらきらと、銀糸の緣縫をその世界に施してゐた。雨の手先に袖口を持ちそへて、傘の柄にすがり肩をすくめて、駒下駄を注意深く泥濘の中に運ぶ、その一足毎に、ゆらりゆらりと彼一己の世界が搖いだ。

何もかも遠くなつて、雨に煙つてぼやけてゐた。三重子の姿も、夢の中にみるやうにぼんやりしてゐた。

――これでおしまひだ。そしていつか、俺が有名になつて、素晴らしいものを書いて、俺の寫眞が新聞や雜誌に出るやうになると、彼女は……いつぞや云つてたやうに、その寫眞を見て、俺のことを思ひ出して、俺の立派な邸宅に訪ねてくる。そして二人は、昔の淡い思ひ出を、記憶の片隅から探り出しては、ぽつりぽつりと追懷の話に耽る。その時、俺がかうして、彼女を尋ねあぐんでたことを話したら、彼女はどんなに感動するだらうか。或は眉根一つ動かさない、で、善良な微笑を浮べるだけだらうか。……俺達はもういろんな經驗を積み、年を重ねて、容易には心を動かさないだらうが、それだけまたお互に、しつかりした親しい繫がりを感ずるだらう。そして互に賴り合つて、俺は彼女を保護してやり、彼女は俺に信賴して、靜かな平和な友情を結ぶだらう。丁度、互に意中を明かさないで而も互にそれと知り合つてゐる、戀人同士の晩年のやうに。

空想は幻覺ほどのはつきりした形を取つて、蛇目の傘の中に、次から次へ展開されていつた。

だが……してみると、俺は彼女に戀してるのかしら？……いやいや、彼女は俺にとつて路傍の花に過ぎないんだ。そ

れならば、これはまた何故の幻か。……自惚れの甘つたるい、何といふ俺自身だ。高が賣笑婦ぢやないか。

泥濘の中に踏み躙られたやうな心地で……それでもともすればまた幻想の華が咲き亂れさうな心地で……彼は身の置き所がないやうに肩をすぼめて、たゞ一本の傘の柄を握りしめて、眼を伏せながら歩いていつた。

迷宮のやうな一廓を出て、少し行くと、深い堀割の岸だつた。夜目にもそれと分る工場の建物が、對岸にずらりと並んで、淀みきつたどろりとした水が、滿潮時の靜けさに、ゆらゆらと灯影を映してゐた。

それが、頭にこびりついて離れなかつた。

電車の中で、髪に癖が出てきて、ついうとうとしかけては、またはつと眼を覺した。がやはり、どろりとした堀割の水のやうに、氣持が重々しく淀んでゐた。

立つてゐる者は四五人きりない、わりに空いてる電車だつた、見渡すと、みんな退屈さうな沒表情な顔付に、眼ばかりぎらぎら光らしてゐた。が……向ふ側の先端に、傘の頭に兩手をのせて、しよんぼりと……。

——おや！

ぢいつと瞳を据ゑると、それがやはり三重子だつた。

いつもの錦紗の着物ではなく、大柄な銘仙らしいのを着流してはゐたが、髪にぴんと差した羽根形の櫛から、俯向けてる横顔から、一寸見は痩せ形だが、實はずつしりとした重みの固肥りな、健康さうな身體附まで、どう見ても彼女だつた。

——はゝう……。

あれほど探し廻つてたのに、遠目に見付けてみると、自分でも不思議なほど彼は落付いて、何だかから氣持の脱け殼

——それが彼女だか自分だか分らないが——といつたやうな風に、たゞ憫然と見守つてゐるきりだつた。

——どうしたのだらう、今頃電車なんかに。そしてまた、あれほど焦慮してゐた他人身が……。

そんな思ひが湧きかけたが、それもすぐに、車體の動搖や響きに、打消されてしまつて、たゞ執拗な眼だけが殘つた。

どうしやうといふ氣もなく、見守つてゐるうちに十分ばかり過ぎた。彼女は斜め向ふむきに、爪先へ眼を落して、ぢつと坐つてゐたが、ふいに、立上つて電車を降りかけた途端、ちらと車内を見渡した。その近眼の視線の、こちらまでは屆きさうもない一瞥だつたが、彼はぎくりとして、同時に腰を上げて、後部から降りていつた。

傘もさゝずに、ぼんやり佇んでる彼の方へ、彼女は眞直に歩いてきたが、はたと立止つた。

「あら!」

丁度ね……と云つて並んで立つたことのある 彼より心持ち低いきりの、そのすらりとした立姿を、彼はぢつと眺めてゐた。

「まあー、暫く……。」

近々と、化粧の匂ひがしたので、彼は始めて我に返つた心地になつた。裏口まで送つて來て、ちよいとゝ呼び止めて、彼の頰邊から拭きとつてくれたことのある、それと同じ白粉の香だつた。

「こんなところに……。」

「なあに、君と同じ電車に乘つてたんだよ。」

氣持ちが靜まつて、彼はにこにこ笑つてゐた。

「さう、あたしちつとも……。」

「僕は先刻から分つてゐたが……。默つて様子を見てゐたのさ。」
「いやね。」
そのやに力を入れて、一寸すねる眞似をして、それから不思議さうに彼の樣子を眺めた。
「一人つきり？」
「え丶。」
ふいに、身體中でしなをして、美しい眼を伏目がちにくるつとさした。
「どこへいらしたの。やつぱり……あしこ？」
「やつぱりねえ。」
「ひどいわ。あれつきりちつとも來て下さらないし、あたし、いろいろお話があつたのに。」
「僕の方もあつたんだが……。」
「あら、濡れて丶よ。」
傘をさしかけてくれたのをきつかけに、彼女の傘の中にはいつて、そこの薄暗い横丁へ切れ込んでいつた。
「あたし、あすこを止しちやつて……お上さんが急に店を他人に讓つたもんだから、この近くへ、暫く預けられてるのよ。だけど、ちつとも自由は利かないし、またどこかへ出なけりやならないし、もうどうなつたつてい丶と思つてるの。いろいろお話しもあるんだけれど……。」
「分つてるよ、みんな。僕は二度も三度もあの家へ君を訪ねていつたんだ。今日もその歸りなんだが……。」
「だつて、靜岡へ行くつて……。」

「嘘さ、みんな嘘さ。……だけどたゞ一つ、本當のことがある。……僕はね、君が好きだつたんだ。全く好きだつたんだ。」

「それもやつぱり……。」

「嘘だといふのかい。」

突然、眞劍な氣持になつてきて、ちつと見つめてやると、彼女はまるで赤ん坊のやうに、一つこくりと首肯いてみせて、息をつめてしまつた。

「分つた？……それぢやあ……。」

僕の紙入から、名刺を一枚取出して、それを差出した。

「かういふ馬鹿な男もあつたつて、そのしるしにね……。」

——何を云つてるんだ、馬鹿。

彼はふと口を噤んで、恐る恐る名刺を手にしてる彼女の前に、俄に身を屈めて、それでも膝頭を汚さないやう、彼女の足駄の爪革の上に、跪かうとしかけたが、よろよろとして、泥濘の中に膝をついてしまつた。

——おう！

泥の中に膝をついて見上げた、その彼女の姿が、偉大な立像となつて、空を蔽ふやうだつた。が瞬間に、彼の方へ折れ屈んできた。

「あら。どうしたの。」

「いゝよ、いゝよ。」

手を振つて制しようとする。その手首を押へられて、助け起されて、彼は呆けたやうに立上つた。

「大變よ。こんなに泥だらけになつて……。あなた、醉つてるのね。」

——さうだ、さうだ、醉つ拂つてるんだ。畜生！

泥まみれの着物の裾が足に絡るのを、むりに踏み開いて、しつかと立つてみせた。

「どうしたの。」

「醉つてるものか。大眞面目なんだ。」

眼をきつと睥み据ゑてみせた。

「僕は君が好きだ。どうしたつて……。だが……さあ！」

片手を差出して、彼女の手を强く握りしめた。

「君に逢つたんで僕は本望だ。餘り嬉しくつて、君の前に跪かうとしたんだが……。もういゝ。これでいゝさ。お歸りよ。」

彼女は途方にくれたやうに、固くなつてつゝ立つてゐた。

——一體俺は何をしてるんだ。嬉しいのか悲しいのか……。

どうしていゝか分らなかつたが、ふいに、ぞーつと寒くなつた。

「さよなら……としよう。」

「何を怒つてるの。だつてあたし……。」

「怒つてなんか……。馬鹿だなあ。」

「いやよ。このまゝ行つちやあ……。ぢやああたしだつて……。」

「だらかさ、馬鹿だなあ……いゝよ、いゝよ。さあも一度お別れだ。」

石のやうにつゝ立つてる彼女の手を、も一度握りしめたが……。

――何をしてるんだ。

それへ、ぱつと傘を擲げかけた。

「さよなら。」

そこの泥濘の中に、身を投げ出して轉げ廻つて、泣き叫んでやりたいやうなのを、ぢつと我慢して、すたすたと歩き出すと、彼女も默つてついて來た。その眞正面に向つて、彼は急に微笑を浮べながら、輕く頭を下げた。

客

徳田秋聲

梅雨晴れとでもいひさうな朝であつた。濕氣の多い空氣が、季節にしては少し寒い程の肌ざはりで……しかし其處らが何となく夏めいてゐた。庭の下草にすい〳〵新芽が暢びて、仰いでみると葉の密茂した梅の梢に、懐かしい感じのする實が三つ四つ目についた。氣候が不順なお蔭で、新緑の季節がいつもより少し長いやうに思はれたが、八方建物に取圍まれた小さい庭に立つてゐると、晏は腹立しいほど町の生活が厭はしかつた。昨日今日やつと暢びだした若葉に、ちよつと觸つたゞけでも、指頭が眞黑になるほど煤煙の滓がこびりついてゐた。

「いつまでこんな處に閉籠められてゐなければならないのだらう。」

彼はいつでも自分の居るところに落着けないやうな心の門……感ずるのであつたが、この季節には殊にそれが劇しかつた。

晏はやがて縁の下から小さいシャベルを取出して、氣になる下草の植替へをしてゐたが、それにも興味が乗らなかつた。大體庭全體が氣に食はないのであつた。最

初から成案なしに人任せにやり出した結果が、弄れば弄るほど悪くなるばかりであつた。ちやうど彼の作品や、彼の生涯のやうに。終ひに彼はみじめを感じた。

ちやうど其の時、臺所の方からまはつて來た、庸一がひよつこり大きな木蓮の木の下へ姿を現した。

晏は「來たな」と思つた。來るといふ通知は三四日前にあつた。庸一の妹婿の若い骨董屋さんが或る大名華族の賣立てにやつてくるのに同伴して、三四日厄介になりたいと云ふ手紙を受取つてから、晏は彼れの來るのを心待ちに待つてゐた。彼は餘所に客となることが好きであると同じ程度で客の來るのが好きであつた。旅に出ても、氣のおけない親類の家なら、いくら居ても飽きなかつたが、田舍から出てくる客で、若し先きが餘り物事を氣にしない人間か、解りの好い捌けた人間かで、且つさほど無作法でもなかつたら、いくら居ても煩く思ふやうな事はなかつた。それが幸に妻のお加奈と調子の合ふやうな人だつたら、都てが晏に取つて一層好都合であつた。若し彼れの經濟事情が許すなら、そして外國の作品などにあるやうに間は家族と交渉なしに、一つか二つの部屋を占領させて、客自身の箇性を虐げたり、又は讀書、思索、起伏の自由を妨害する事のないやうに、相當の設備が出來るとしたら、それこそ客をする事が彼に取つて尤も樂しい人生の樂しみとなるであらう。

庸一は去年も杜鵑の啼く時分に、二三日のつもりで震災後の東京を見舞つたのであつたが、四日が五日になり五日が六日になりして、到頭三週間ばかり裏の家に滯在してゐた。庸一は工藝美術家であつた。晏が下宿時代に、彼も東京へ出て三四年或る名家について修業したので、叔父の晏の家にゐることが、何となし彼を昔し懷かしい氣持にするのであつた。庸一は晏の姉になる母も父も未だ健康で、家事の世話をやいてゐた。子供も三人になつてゐた。近頃お茶や花や謡ひや、仕事と萬更緣のないこともない趣味生活を、いくらか享け樂しむ餘裕ができたほど、彼も年を取つて來た。家

や仕事から離れて、旅にあるときの、彼の氣持は、晏にも想像することが出來た。そして又た外間から見ると、えらい暢氣な怠けものにしか見えない、いつも區切りのつかないやうな生活の慵い惱みも、晏には十分同情できるのであつた。

晏はまた去年の夏一と月ばかり、郷里で、毎日のやうに庸一と何處かで逢つてゐた。親類の家とか料理屋とかで……。しかし晏に取つては、休息時の、つまり遊ぶときの、辯のない好い相手であるほか、高尙な談敵でもなく、飽きのくる邪魔ものでなかつたと同じ程度で、お加奈にも氣に入つてゐた。寧ろお加奈の氣に入つてゐたから、晏も氣持を攪亂されることとなしに、彼を家族の一人に加へておけるのであつた。

「女連は……。」

晏は今庭へはいつて來た彼を見ると、すぐ其の事をきいた。庸一が妹婿と一緒に、評判の寶立を見にくるにつれて、晏にも親しい女を二人つれて行つても可いか何うかを、前以つて問合せて來たのに對して、晏は二人宛二度にしてくれるやうに、返事を出しておいたけれど、それでも女連も出て來るかも知れないと思つてゐた。

「まあ二人だけ出て來ました。義弟は客もつれて來てゐますから、いづれ宿を取りませう。三人くらゐだつたら、どこの隅にでも居られない事もなからうと思つたんですが、事によつたら呼び寄せさして戴くかも知れません。」

晏は女連が來なくて興がないやうで、來なくてよかつたやうにも思つた。

「荷物は。」

「今義弟の宿において來ました。」庸一は晏につゞいて、上へあがりながら、—

「昨夜はどうもひどい込合ひで。侯爵家の寶立てに來る人で一杯でした。」

「さうだらう。己も友達と午後から行くことになつてゐる。」

初から成案なしに人任せにやり出した結果が、弄れば弄るほど悪くなるばかりであつた。ちやうど彼の作品や、彼の生涯のやうに。終ひに彼はみじめを感じた。

ちやうど其の時、臺所の方からまはつて來た、庸一がひよつこり大きな木蓮の木の下へ姿を現した。晏は「來たな」と思つた。來るといふ通知は三四日前にあつた。庸一の妹婿の若い骨董屋さんが或る大名華族の賣立てにやつてくるのに同伴して、三四日厄介になりたいと云ふ手紙を受取つてから、晏は彼れの來るのを心待ちに待つてゐた。彼は餘所に客となることが好きであると同じ程度で客の來るのが好きであつた。旅に出ても、氣のおけない親類の家なら、いくら居ても飽きなかつたが、田舍から出てくる客で、若し先きが餘り物事を氣にしない人間か、解りの好い捌けた人間かで、且つさほど無作法でもなかつたら、いくら居ても煩く思ふやうな事はなかつた。それが幸に妻のお加奈と調子の合ふやうな人だつたら、都てが晏に取つて一層好都合であつた。若し彼れの經濟事情が許すなら、そして外國の作品などにあるやうに間は家族と交渉なしに、一つか二つの部屋を占領させて、客自身の箇性を虐げたり、又は讀書、思索、起伏の自由を妨害する事のないやうに、相當の設備が出來るとしたら、それこそ客をする事が彼に取つて尤も樂しい人生の樂しみとなるであらう。

庸一は去年も杜鵑の啼く時分に、二三日のつもりで震災後の東京を見舞つたのであつたが、四日が五日になり五日が六日になりして、到頭三週間ばかり裏の家に滯在してゐた。庸一は工藝美術家であつた。晏が下宿時代に、彼も東京へ出て三四年或る名家について修業したので、叔父の晏の家にゐることが、何となし彼を昔し懷かしい氣持にするのであつた。庸一は晏の姉になる母も父も未だ健康で、家事の世話をやいてゐた。子供も三人になつてゐた。近頃お茶や花や謠ひや、仕事と萬更縁のないこともない趣味生活を、いくらか享け樂しむ餘裕ができたほど、彼も年を取つて來た。家

や仕事から離れて、旅にあるときの、彼の氣持は、晏にも想像することが出來た。そして又た外間から見ると、えらい暢氣な怠けものにしか見えない、いつも區切りのつかないやうな生活の懶い惱みも、晏には十分同情できるのであつた。

晏はまた去年の夏一と月ばかり、郷里で、毎日のやうに庸一と何處かで逢つてゐた。親類の家とか料理屋とかで……。しかし晏に取つては、休息時の、つまり遊ぶときの、癖のない好い相手であるほか、高尚な談敵でもなく、飽きのくる邪魔ものでなかつたと同じ程度で、お加奈にも氣に入つてゐた。寧ろお加奈の氣に入つてゐたから、晏も氣持を攪亂されることなしに、彼を家族の一人に加へておけるのであつた。

「女連は……。」

晏は今庭へまはつて來た彼を見ると、すぐ其の事をきいた。庸一が妹婿と一緒に、評判の賓立を見にくるにつれて、晏にも親しい女を二人つれて行つても可いか何うかを、前以つて問合せて來たのに對して、晏は二人宛二度にしてくれるやうに、返事を出しておいたけれど、それでも女連も出て來るかも知れないと思つてゐた。

「まあ二人だけ出て來ました。義弟は客もつれて來てゐますから、いづれ宿を取りませう。三人くらゐだつたら、どこの隅にでも居られない事もなからうと思つたんですが、事によつたら呼び寄せさして戴くかも知れません。」

晏は女連が來なくて興がないやうで、來なくてよかつたやうにも思つた。

「荷物は。」

「今義弟の宿において來ました。」庸一は晏につゞいて、上へあがりながら、一

「昨夜はどうもひどい込合ひで。侯爵家の賓立に來る人で一杯でした。」

「さうだらう。己も友達と午後から行くことになつてゐる。」

そこへお加奈も出て來た。

「女連はこないさうだ。」

「さうですか。」

さう言ふお加奈も、來たがつてゐる人を、幾分自分の心持から、來なくしてしまつたことを、心寂しく思つた。實際彼女も二人だつたら何うかして都合しようと思つて、半分はその積りにしてゐた。

やがて挨拶がすんだ。

「何しろ多勢一度にどか〳〵來られても困るしね。折角來るなら方々見せたくも思ふからな」。晏が言つた。

「此方へは出たことのない連中で、男についてゞも來なければ來られないのでして。何に東京の土を踏みさへすれば可いんです。」庸一は呼寄せたさうな口吻であつた。

勿論晏の氣持も同じであつた。さう深い緣故でもない女連だけで來たところで、お加奈とうまく調子が合つて行くか何うかゞ不安心であつた。今迄の經驗では、多分そんな事はなささうであつたが、若しかしてお加奈が神經を尖がらせでもして、好い顏をしてくれなかつたとしたら、それこそ晏の立場は慘めであつた。女連を庸一の蔭におく方が、やつぱり安全だと思はれた。晏には疚ましい事が少しもある譯ではなかつた。たゞ其の家と古くから交際があつたゞであつた。いくらか緣も引いてゐたので、去年なぞ庸一と一緒に、そこで酒を飲んだり、女を呼んだりして、彼等の生活にも觸れたゞけの事であつた。若し堅氣でないことを言へば、お加奈の側の客にも、さうした種類の人が全然ないこともなかつた。しかしお加奈には晏との關係が、何となし明瞭でなかつた。

「二人なら都合できないこともないね。」

「それは何うにでもね。」

「たゞ此のところ莫迦に忙しいんで……。」

「さうですよ。だから斯うしたら宜しいぢやございませんか。庸さんがお歸りになつて、直ぐ寄越すといふことに。宅から迎ひに出てゐますから。宅も行きたがつてゐますから、歸りは送つて行くことにでもして。」

庸一は汽車のなかで見て來た寶立目錄を、そこに置いてゐたので、晏は取りあげて、開けて見てゐた。

「とにかく一寸行つて來ます。餘り込まないうちに一と通り拜見したいと思ひますから。」庸一はさう言つて土産物をおいて出て行つた。

「やつぱり出てこなかつたね。來なくて仕合せだ。」晏は寂しさうに言つた。

「さういふ人は矢張男の方についてゞもこなければ來にくいんでせう。」

「世間見ずだからね。しかし長いあひだの約束だから、一度は呼んでやらなければ……。」

「そんなら呼んだら可いでせう。その方がいゝでせう。」

「さうしても可いね。」

「さうなさい。庸さんも義理が惡いでせうから。」

天候の差響きの敏感な晏は、この頃の陽氣の變調のせゐもあつたらうが、少し忙しすぎたので不眠症にかゝつてゐた。北國の空のやうに、一日のうちに幾度となく曇つたり照つたりするのも厭だつたが、あわたゞしい旋風のやうな風の、襲つてくる癖のついた、今年の新緑季節は一層不快であつた。彼は頭腦を休めに、初夏の故郷を訪れるのも惡くな

いと思つてゐた。古い屋敷町の若葉、新緑の山裾の川魚料理、靜かな温泉町、松原の美しい海岸、晏は夢寐にも忘れる事が出來なかつた。

とにかく少し閑を得たいと思つたが、仕事が捗取らなかつた。彼は莫迦に氣忙しかつた。旅行を空想することだけでも、頭腦が疲れた。庸一が來ても、どこへ連れて行きたいと思ふところもなかつた。

「K――市などから東京へ遊びにくるのは莫迦げてゐますね。この頃の東京ですから。」

晏はさう言つてゐた子供の言葉に同感であつた。自動車がないだけでも田舍は助かると思つた。強ち地震のためばかりではなかつた。年のせゐでもあつた。彼は全く草臥れてゐた。少しでも生活を逃げよう／＼としてゐることが、自分にも善く判るのであつた。

昨夜も三時を聞くまで眠れなかつたので、今朝は頭腦が妙に萎え疲れて、目蓋が痛痒いやうであつた。そして庸一が出て行つてから、少し寢ようとしてゐるところへ、友人のK――氏が出入りの骨董屋の番頭と同伴でやつて來た。

「少し時間が早いやうだが、何うだね。」

「さうね、行きませうか。まあ一寸お上りなさい。」

K――氏は書齋へとほつて、骨董屋を紹介した。骨董屋は叮嚀に「どうぞ宜しくお引立を……」とお辭儀をしたので、彼は擽つたい感じがした。

K――氏は使つてもいゝ仕事の利潤以外の餘裕ある時に、ちよい／＼書畫や骨董を買ひ入れるのを樂しみにしてゐたので、晏も色々なものを見る機會があつた。金のある大人は誰でも大抵女か骨董を翫ぶ。子供に翫具が必要であるとほりに、大人にも翫具が必要なのであるが、書畫や骨董の道樂は、人間の私有慾を尤も極端に露骨に發揮したもので、晏

の郷里などでは、町人は昔から金でもつてゐるのが不安なので、上から睨まれないやうに骨董で貯めておいた習慣が傳はつてゐて、今でも所藏のお道具の多寡によつて、その家柄が輕重されるのである。骨董品に對する愛着ほど、拘はりの多い私有慾は恐らく外にないであらうと思はれるほど、凝り出すと病的になり易いものだが、K――氏の場合などでは、寧ろ趣味性の修養としてやつてゐるので、それを買ひ入れる主義にもほゞ系統が立つてゐる。晏の思ふところでは、書畫や骨董は、百のうち九十まで贋物だと見るのが至當で、一つの本物があれば百の贋物がそれについて蔟れ出てゐることは、いつの時代にも有りがちのことで、それが人間の私有慾の如何に執念ぶかいものであるかを證據立てゝゐる。勿論贋物を買はうと思つて、千金を抛つものはない筈だが、贋物を扱ふことが、寧ろ本當の商賣だと公言したくらゐ徹底した書畫商もあつて、一生贋物ばかり扱つてゐたと言ふから、私有慾さへ充たされゝば、盲目は盲目なりに贋物を弄んで樂しんでゐれば、それで十分結構なのである。商賣人自身がわかつた顏をして、欲めにくる贋物を買つて悦んでゐるところに、金持人種の人の好さがあるのである。實業家で讀書人であるK――氏などにも、處世的にはひどく用心ぶかいところがありながら、骨董屋の乘ずる隙間が全くないとは言へないであらうが、選擇が少し旋毛曲りであるほど時好的でない事だけは確かである。

　晏は一時間ばかり見てくるつもりで袴などはいて家を出た。

「私の郷里の骨董界などでは、もつと好いものが出ると思つてゐたらしいんだが、何んなですか。」

「さいですな。もつと好いものもお有りでせうが、名物は相當にお出しになつてるやうで。」

「金がないからですか。」

「上り高で美術館をお立てになるとかで。」

そんな話をしながら、門をくゞつて行つた。門内は廣々としてゐた。自動車が木蔭に幾台となく並んでゐた。晏たちは後から〳〵入つてくる自動車の揚げる砂塵をよけながら、玄關へ着いて、そこから右の廊下へ出て行くと、長いその廊下に、柳原の古着屋のやうに、絢爛美やかさに時代のいぶしのかゝつた能衣裳が、づらりと懸かつてゐた。それが盡きると又た能衣裳とお面と、裂などの陳列された部屋から部屋につゞいてゐた。その中には金の重量で、ぼつとり持ち重りのする蜀江の錦とか、唐錦とかいふ希代の織物で作つたものもあつた。蓆のやうに手厚い硬い紹織などもあつた。その衣裳と面だけ見ても、昔しの大名の勢威のほどが想像されたが、刻苦してそれを作つた工人達の蒼白い顔も同時に想像された。晏は西陣の機織工場を見たことがあるので、現代では經濟的生活では、高貴な織物の織れる職工が、次第に滅びて行くことを見せつけられてゐた。好い織物は、いかに鍛錬な織工でも、一日かゝりきりで、漸く二寸か三寸よりしか織れないのであつた。羽二重や縮緬などに比べて、上等の織物がいかに安いものであるかも知つてゐた。

いつか園遊會のあつたとき、節がちやうど五月だつたので、廣い部屋一杯に、幾壇となく人形が飾られてあつた、その部屋へ入つて行くと、そこにはづらりと置きならべられた卓のうへに陳列した、瀬戸もの類に集つて、坐つて觀賞してゐる人達がうよ〳〵してゐた。それらは大抵茶盌とか茶入とか、又は香盒、拽溜、茶匙、建水、香煎入といつたお茶の道具であつた。天目や、高麗や、南京や、利休や、光悦や、仁清や、晏が名ばかり耳にして、滅多に作品に接する機會のなかつたやうな名品が、そのなかに見出された。骨董屋が時々説明を加へてくれた。

廊下には又た南蠻の壺や、梵貝(ぼんばい)や、釜や、炭斗や、花生、水差、燭臺のやうなものの陳列があつた。

「この燭臺はこの油受一つで、四五百圓に買へる代物です。」骨董屋は子供の塗つたやうな繪具のかゝつた小さい皿を取りあげて笑つた。

それから又幾間もの部屋を、晏は見てあるいた。そのなかには砂張りの火箸を、ひどく有難りがたかつて、叮嚀に細工を觀賞してゐる人達もあつた。

「この火箸は恐らく三千圓では何うですか。」骨董屋は首を傾げてゐた。

Ｋ――氏は錆びついた手燭など取りあげて見てゐた。利休か誰かが使つたものだといふ、由緒がそれにも附いてゐた。

「電燈がきえたときなんか、ちよつと可いぢやないか。」Ｋ――氏は言つてゐた。

青銅の水差なども、Ｋ――氏の目を惹いた。

「書齋におくのに、このくらゐ大きいものでないとね。」

二階の廣間には、一層珍品があつた。そして其の眞中に青竹で圍ひの柵を結ひめぐらしたのが、幾十かの名物であつた。「この品をお手にお取りになるには一應札元へお斷はり下さい。」そんな紙札が其處についてゐた。

「これが問題の餓鬼腹ですよ。」骨董屋はさう言つて、どす蒼い釉のかゝつた一箇の茶碗を示した。

「まあ例五萬……事によると十萬臺まで行きますかな。」

骨董屋の主人も來てゐて、先刻から二人でＫ――氏を案內してゐたのであつたが、Ｋ――氏は茶器には餘り興味をもたないらしかつた。

一休の一行もの、松花堂の二副對、雪舟、元信、尙信、大雅、竹田、それから多くの寫經、刀劍、繪卷物、そんなものにも目を惹かれなかつたが、定家の小幅だけには、評價が下された。

それから夫へと見てゐるうちに、晏は襤褸屑の展觀を見てゐるやうな氣がした。事實多くの陳列のなかには、長いあひだに溜り／＼して、棄てることもできず、仕舞つておいても困るやうな古反故のやうなものもあるのであつた。北野

の緣起だとか、公卿達の短册とか、源氏の寫本とか、太閤の墨蹟とか言つたやうなものが、若しそれが通りの古本屋の店頭にでも曝されてゐたら、せい〳〵古物ずきの好事家が、いくらかの零砕金で買つて行くくらゐの反故だとしか思へなかつた。勿論晏のやうな盲目にも、名品はやつぱり名品であつた。目にふれたり手にさはつたりするだけでも、たまらない感觸の快さに耽けらずにはゐられない作品も、さらにあつた。それらは悉く優れた藝術家の洗錬された感覺が產みだした逸品であつたが、かくも多くの鋭利々々連の目に曝されて、三千圓とか、一萬圓とか、乃至は五萬十萬と、小汚い札束で、そつちこつち引廻はされることを思ふと、寧ろ藝術の冒瀆を感じるのであつた。藝術品はそれを產み出す藝術家に取つてのみの生命であつた。それを鑑賞しうるものに取つてのみ價格があるのであつた。

晏は株式か何かにたかつて來る人達のやうに、卑しい目を光らしてゐる群衆によつて、弄りまはされてゐるそれらの作品を、むしろ淺猿しく感じた。勿論その中には鑑賞の目の肥えた人達も多かつたが、市そのものゝ空氣が可けないのであつた。

やがて四人で喫茶室へ入つて行つた。そこへ晏の知つてゐる、侯爵家の美術品の掛りの人の顏が見えた。

「ようこそ。」

「これで好いものは大概出た譯ですか。」

「いや〳〵、全然出ないものもあります。半分くらゐ出したものもあります。具足の種類は一つも出ません。刀劍はほんの片鱗ですが、能衣裳やお面は、先づ半分くらゐでせう。茶器はこれでまあ全滅といふ譯でせう。」

「さうですかね。」

「皆さんはお食事は……。」骨董屋はさう言つて、更に辨當を通した。

四人はやがて食堂へ入つて行つた。Kーー氏はそこで、目をつけておいたものゝ入札を約束した。

「どうも欲しいと思ふものはないね。」

「何しろ書畫はあやしいものが多うござんすからな。」

「あの雪舟なんか仕様がないぢやないか。寫經なども管家の眞物はしまつておいて、悪い方を出してあるんぢやないか。」

「中將姫もあやしいもんだ。それよりか庭でも見よう。」

「さうね。」

四人は庭へおりて行つた。しかし庭は近年の急造にかゝるものなので、先祖傳來の美術品を見た目には、まるで比べものにならないほど、荒い感じのものであつた。ごろ／＼した石が旱魃の川原のやうに乾ききつて、痛ましいほど荒れてゐた。勿論地震當時の避難場であつたことなども、風致を損つた重な原因だと思はれた。

「水のない所で庭を造らうとするのが、大體無意味だ。」庸は思つたが、それだけの庭でも、學校へ引渡されることは、悲劇であつた。

要は、有つても無くても、むしろ保存に金がかゝつて、手數のたえない邪魔ものでしかない、それらの多くの骨董屑を、有像無象の商人共の前へ投りだしてしまつた、若い侯爵の現代並みな頭腦の好さに微笑まれたが、彼自身は多少骨董の目が肥えたほかに、藝術職人の悲哀を觀面に感じさせられた。

三日たつて、彼はお加奈と一緒に、庸一と、庸一の從弟の縉作とを銀座へつれ出した。芝居の切符は手に入りさうもなかつたし、女達が若し來るとすれば、二重になる虞れがあつたので、芝居見物は見合すことにした。女達を呼びよせ

る筈の電報が、あれきりぐづ〳〵になつてゐた。

その日はちやうど開札の翌日であつた。晏はもう一度見ておきたいやうな氣がしてゐたが、暇がなかつた。庸一や鑛作に聽くと、それらの骨董品の傳統や、特質や、位置や、評價がよく解るのであつたが、雪舟や蕭白の怪しい事や、晏が涎を垂らした赤繪の香煎入りなどの日本出來であることも、鑛作によつて確かになつた。何の品がどこへ落ちて行くかと云ふことなぞも、略ぼ見當がついてゐるやうであつた。

「東京の骨董屋さんは樂です。お客さまが皆んな一廉見識家ぶつてゐますから、骨がをれんと言ふわけです。京都や國ではさうは行きません。骨董屋がお客を仕込むのだから、責任があります。尤も東京は書畫屋さんばかりでしてね、私も東京にゐた時分、書畫を少し手がけてみましたが、何うも趣味にあはんもんですから、ばか〳〵しくなりましてね。」

鑛作の言ふところによれば、東京の骨董屋は大抵「ど盲目」であつた。

「何か取れさうですか。」晏はきいた。

「どうかして二三點手に入れたいと思つてゐますが、今度は好いお客が二三人はづれてゐますので、何の道お高いもの買へません。註文もありますし、纏まりさうな品もありますけれど、行つて説明しなけあ解りませんものですから。往復に日がつぶれてしまひます。尤も忙しい思ひをして、それをやつてゐる人もありますけれど。」

晏は昨夜もお加奈と庸一と三人で、町へ出て、おそく歸つたのであつたが、何だか張合ひがなかつた。女連が來るか來ないかゞ未定だつたし、呼んでいゝか悪いかも、判斷しかねた。やつぱり庸一たちが歸つてからにした方が好ささうに思はれた。お加奈に適當な理解をもたせるにも、いくらかの時日が必要であつた。それに此の月の芝居は、どこも出しものが悪かつた。女連に見せたいやうなものは一つもなかつた。

「それでもお前のゐるうちに呼ばうか。」

「いや、もう可うござんす。私が歸つて又たよく話をしますから。出てくるか何うかわかりませんよ。」

「でも折角來ようといふのだからね。こつちは少しも差間へんのだから、ゆつくりして可いんだよ。」

「だからそんな大業でなく、氣輕にいらつしやればいゝぢやありませんか。おかまひしません代りに、氣樂にしてゐるやうに。」お加奈も言ふのであつた。

晏はその家のことを、時々お加奈にきかれて、然るべく說明してゐたが、お加奈には何うもはつきりしないらしかつた。

「事によると姉の方が庸一と關係があるのかも知れないよ。」晏は氣安めを言つたりした。

「でも庸一さんの子があるといふのは……。」

「二番目の妹さ。」

「その人が來るんですの。」

「いや、それは餘所へ師匠に出てゐる。その次の妹の、いつか話した宗匠の女が、姉と一緒に來たがつてゐるのさ。」

「それが一番末なの。」

「いや、靑物問屋にひかされてゐるのが、一番末の妹だ。」

「づゐぶん多いんですね。そのお母さんといふのが、貴方がたと何うかした關係なの。」

「づつと以前はね。」

「人をしらないと、聞いたゞけでは判らないものね。」お加奈は懵かしさうに、目をぱち〳〵させたが、その人達に逢

ひたい氣も、十分動いてゐるのであつた。

「それあさうさ。お前の親類だつて、今におき僕にはわからない。」晏は笑つてゐた。

庸一が市に行つてゐる留守に、そんな話が時々出るのであつたが、庸一は庸一で、そつとお加奈の耳に入れてゐることもあるのであつた。

「おばゝが世話になつてゐるんですつて？　庸さんのお話ですけれど、それなら何んなにでもしなくちや。」お加奈は言つてゐた。

昨夜の散歩では、廣小路で落語をきいたのであつて、歸りに何か食べてから、電車通りをぶら／＼歩いてゐると、夜更けの町を、自動車がまだ侯爵家の門へ入つたり出たりしてゐた。更紗の風呂敷につゝんだ荷物を、うんと積んで行くのを見受けた。

「何うだつたかな、銑作君は。」

「さあ、何か一つ二つ手に入ればいゝと思つてゐるんですが。」

家へ歸つてみると、銑作はまだ歸つてゐなかつた。彼は一緒に來た人達が立つてから、宿を引拂つて、昨夜から晏の家へ來てゐた。

「まだ遣つてゐると見えるの。品物をもつてくるのに、夜がふけて、大丈夫だらうか。」

「しかし皆な小さいものばかりですから。」

三人は茶の室で、お茶を飲んでゐた。

一時頃に銑作が漸と歸つて來た。片手ではちよつと持切れないやうな箱の包みをぶら下げて、元氣よく入つて來た。

——＊——

「獲物がありましたね。」晏は微笑みかけた。
「いゝや、ほんのもう……。」鑛作は汗をふきながら座つた。
「しかし見込みははづれませんでした。百萬圓を突破しましたからな。」
「ふゝむ。」
「餓鬼腹が五萬七千圓、これあちよつと安うござんした。」彼はさう言つて、値段づけの目錄を懷ろから取出して、目ぼしいものの價格を一つ〳〵讀みあげた。
　それから晏が覺えてゐる品物について、一々繰つて聞かせた。
「みんな賣れたですか。」
「一つも殘りません。」
「をかしなものだね。——拜見しようぢやないか。」晏がいふと、鑛作は荷物を引寄せて、風呂敷を釋いた。
　初め出したのが、宗中の茶匙一つであつた。それが六百某であつた。それから呉器の茶碗が古い裂の袋を剝かれて、一そこへ取出された。「これが紅葉出といふ奴でして、ちよつとまあ……。」鑛作はさう言つて、薄青く暈かされた釉薬を示した。
　晏たちは交る〳〵手に取つて見た。
「成程ね。いくらです。」
「一千七百八十五圓でしたか。」鑛作はさう言つて、大きな落札を三枚出した。
「これは私の道樂で、家へお土產です。」鑛作はさう言つて、瀨戶の茶入れを一つ、縞と模樣との二つの古代更紗の替

袋と一緒に、そこへ取出して並べた。箱も二重になつてゐた。それは五百幾十圓かのものであつた。

「名物ものは何處へ行くか知ら。

「みんな關西です。東京ではよう買ひません。しかし名物と其次ぎの品物とのあひだが、大分距離がありますんでね、我々にすれば、あの間にもつと好い代物があつてほしいんですけれど。あゝして見たところでは、寧ろ國の村井さんなその方に、筋の好いものがあります。」

晏たちはしばらく其の作品や、袋を弄つてゐた。

その翌日は一日家で話しこんで、銀座へ行つて飯を食つたのが、晩方であつた。

「もう二三日遊んだら何うです。儲かつたんだから。」晏は鐐作にすゝめた。

「いや、實は今朝の一番で歸らうと思つたんですけれど、つひ寝坊をしてしまつて。」鐐作はさう言つて、庸一に一緒に立つことを勸めた。

「去年は弱つてしまひました。庸一がまだ歸らないと言ふんで、おぢいさんが家へ來て大こぼしでした、何しろ三週間ですからね。」

庸一はにや〳〵笑つてゐた。

「しかしちよつと來られないから。」

「來たつて仕様がないからね。金をつかふなら、國で使つた方がいゝ。」

「東京もわるくない。」庸一はやつぱりにや〳〵しながら、猪口に親しんでゐた。

大酒呑みで、そして荒い金づかひであつた鐐作は、この二三年ぴつたり酒を口にしなくなつてゐた。郷里で晏と一緒

に女を呼んだこともあつたが、アルコホルは一滴だも口へ入れなかつた。彼はサイダを飲んでゐた。
「感心ですね。」多勢の酒呑みを兄弟にもつたお加奈は心から感心したやうに言つた。
「それも子供があるからです。かうやつてゐても、子供が氣にかゝつてなりませんのでね。一時は千圓儲かれば千圓つかふといふ風で……又た景氣の好い時分は、金なぞ何でもありませんでした。少し持つてゐたものが、羽がはえて飛んで行くんですから。それを丸る儲けたやうな氣になつて、今日は溫泉だ、明日は芝居だといふもので、女を引率して暴れまはるんです。お蔭で町のお茶屋だけは、どこへ行つても顏の好いものです。今日日(けふび)となると、盆暮のお茶屋の拂ひが、おとましくならんのですさかえ。」
「しかし五百圓のお土産を買つて行けるやうなら可いだらう。」
「まあさうです。いつかは又物になりますさかえ。しかし田舍は駄目です。もう少し修業して、東京で一旗揚げてみたいやうな氣もしてゐますが、年寄りや子供が足手纏ひでしてね。」
そんな話をしてゐるうちに、餘り親しみを感じなかつた、お加奈も、段々鐵作が解つて來たやうに思へた。

翌日は二人で庸一の弟をたづねた。そのあひだに、お加奈は晏の兄の家と、庸一と鐵作の妻への土産ものなどを調へるのに忙しかつた。庸一はどこか飽足りなさうであつたけれど晏もお加奈も餘り引留めないことにした。
「鐵作さんの方が兄いさんのやうですね。二三子さんにはまだ逢はないけれど、好いお亭主をもつて仕合せですね。それに氣象がさつぱりしてゐますよ。その代りあんな人は損だ、お國自慢するから奢られなくなつてしまふ。」
「さうさ、あれは奢らされる方でね。」晏も苦笑してゐた。

「だけど庸一といふ人も、ちよつとも嫌みのない好い人ね。」

夕方になつて、歸るとすぐ二人は立つた。晏は歸つたら直ぐ女連に逢ふやうに、庸一に言ひつけた。

「來るか來ないか、すぐ電報で知らしてくれ。」

晏は念を入れた。

公論大賣捌所

同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　本郷區春木町	盛保堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同　新町通七條南入	大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價　金八拾錢郵稅金貳錢凡厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數／國別	内國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號其他臨時增刊號は各倍冊に付普通號一冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は内國は金拾三圓六拾錢外國は金拾八圓三拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

一郵券代用 は謝絶す　[illegible]　東京二四〇四番　[illegible]　東京三一〇五四番 [illegible]

一代金引替 小包の取扱は一切致しません [illegible]

一集金郵便 [illegible]

一中央公論及婦人公論 代金取纏め御拂込みの場合には各誌別々にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求 は必ず返信料を要す

大正十四年六月十五日印刷納本
大正十四年六月十五日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木昌二

發行所　中央公論社
東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十ノ區
電話長丸ノ内二〇二八番
振替貯金口座東京 [illegible]
牛込五〇八

印刷所
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
株式會社　秀英舍

◉本號定價　金壹圓八拾錢　郵稅　金五錢

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◉本號特價金壹圓八拾錢　郵税金五錢、

東京小石川研精堂印刷